伝説のトレーナーと才色兼備のジムリーダーが行く全国周遊譚

OTZ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――その伝説は栄華に輝いていた。しかし、欺瞞にもまみれていた。

この作品はｐｉｘｉｖ、暁、ポケモン小説スクエアにも転載しております。

※話数に現在ズレが生じていますが改稿が終了次第戻ります。

目次

プロローグ（2009．8―2013．2）
第〇話　黎明 ―― 1
出立編（2013．2）
第一話　月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり ―― 30
第二話　それぞれの別れ、そして出港。 ―― 56
ジョウト編（2013．2―2013．5）
第三話　新天地ジョウト ―― 84
第四話　氷鳥と黒白の衣 ―― 112
第五話　茜の空 ―― 152
第六話　二つの巨壁 ―― 187
第七話　大姦の蠢動 ―― 229
第八話（上）　苦難と心と ―― 269
第八話（下）　赤き心は挫けない 309
第九話　厳冬の果てに ―― 369
第十話　春の嵐 ―― 395
第十一話　広がる波紋 ―― 424
第十二話（上）　列島騒乱 ―― 458
第十二話（中）　古都炎上 ―― 522
第十二話（下）　長い想いは結ばれて 571

ホウエン編（2013．5―2013．10）
第十三話　麒麟児の憂鬱　――― 635
第十四話　リーダーの資格　――― 657
第十五話　自然からの刺客　――― 686
第十六話　フエン騒動（上）― 713
第十七話　フエン騒動（中）― 741
第十八話　フエン騒動（下）― 786
第十九話　父の決断　――― 846
第二十話　本音　――― 886
第二十一話　夏の終わり　――― 928
シンオウ編（2013．10―2013．12）
第二十二話　北国へのいざない 988
第二十三話　カムイ・ヌイナ　― 1041
第二十四話　再会　――― 1053
第二十五話　ああ有情　――― 1084
第二十六話　記憶と記録の狭間にて 1142
第二十七話　時は現在（いま） 1182
第二十八話　千載一遇　――― 1209
第二十九話　天賦戦闘資質論　― 1262
第三十話　時には、昔の話をしよう 1296

第三十一話　北国との別れ ―― 1319
選挙編（２０１３．１２）
第三十二話　策謀 ―― 1357
第三十三話　伯仲 ―― 1383
第三十四話　決選 ―― 1420
カントー編（改訂後）
第三十五話　帰郷 ―― 1470
第三十六話　膨張 ―― 1506
第三十七話　すれ違いの緒 ―― 1538
カントー編（２０１３．１２－２０１４．１）
第三十七話　帰郷 ―― 1576
第三十八話　聖夜とにばみの町 1592
第三十九話　新年、元旦、そして洞窟 1611
第四十話　波止場と墓場 ―― 1628
第四十一話　秘すれば花なり秘せずば花なるべからず ―― 1646
第四十二話　紫衣の鼬 ―― 1675
第四十三話　溺愛と狂気は紙一重 1688
第四十四話　矍鑠の老翁 ―― 1704
第四十五話　赤緑の天王山 ―― 1722
第四十六話　四度目の正直 ―― 1738
第四十七話　出る杭は打たれる、出過

ぎた柱は放置 ―――― 1755
第四十八話　鹿島立ち ―――― 1773
イッシュ編（2014．1―2014．7）
第四十九話　予兆 ―――― 1802
第五十話　梟の目覚め ―――― 1822
第五十一話　邪なる恋情 ―――― 1840
第五十二話　終わりの始まり ―――― 1860
第五十三話　嘱託 ―――― 1884
第五十四話　藝と数寄 ―――― 1904
第五十五話　輝く情熱、くすみだす情愛 ―――― 1940
第五十六話　二つの伏魔殿 ―――― 1962
第五十七話　歴史は動く〈上〉 1993
第五十八話　歴史は動く〈下〉 2022
第五十九話　冷たい予感 ―――― 2049
第六十話　老いと義理 ―――― 2071
第六十一話　超越者 ―――― 2097
第六十二話　東西相克す ―――― 2116
結末編（2014．7―2025．6）
第六十三話　頂きの行方 ―――― 2141
第六十四話　虎鳥の咆哮 ―――― 2157
第六十五話　胡蝶の夢 ―――― 2187
第六十六話　赤い帽子 ―――― 2212

設定・ＩＦルート集・過去編など
【ネタバレ注意】設定集（登場人物編） 2247
【ネタバレ注意】設定集（世界観編） 2343
過去編　玉虫色の一族（前編） 2376
過去編　玉虫色の一族（後編） 2414
番外編　不動の歴史（イッシュ編ＩＦルート） 2468
番外編２―１　落ちる花（イッシュ編ＩＦルートその２） 2495
番外編２―２　歴史の分かれ目 2528
番外編２―３―１　零度の仮面 2579
番外編２―３―２（前）　明かされた秘密 2659

プロローグ（２００９．８ー２０１３．２）

第〇話　黎明

シロガネ山。
ポケモントレーナーの極みに達した者のみ入山が許されるカントーとジョウトを別つ大山。
そこは一般人が安易に足を踏み入れると、死をも覚悟しなくてはならないほど獰猛なポケモンたちがおり、常時百鬼夜行とばかりに蠢き続けている。
そんな山に一人の男が再び登って行く。
赤い帽子をかぶり、大きなリュックを背負い、様々な記憶を想起させながら。

―２００９年　８月１３日　午後３時　シオンタウン―
レッドはガラガラを成仏させた後、ポケモンタワーでのロケット団の悪事を挫いた。
成仏できて良かったと思いながら彼は宛もなく炎天下の中をさまよっている。
「暑い……」
襟を引いたり戻したりして風を作りながら自然と口からそんな言葉が出てくる。烈

日はアスファルトを照り返し、彼の不快指数を更に上げていった。
太陽へ向いてはダメだと思い、彼は視線を下に遣る。帽子が影になるので気休め程度だが少しは楽になる。このままでは日射病で倒れかねないと思い、うつむいたままの姿勢でポケモンセンターへ足を進めた。
十歩ほど歩くと道端にハイパーボールが転がっていることに気づいた。これは比較的高価な品物である。
彼はボールを持って視線を前方に向ける。どうやら日傘を差してるようだ。日傘の下には朱色の袴と白い足袋、草履が見える。
視線に気がついたのか、それともふと思ったのかその人物はレッドの方を向き、ゆっくりと彼の方へ近づいた。
ふと気づくとそこには朱色の袴に黄色い着物を着た容姿端麗な少女が立っていた。
レッドはその清楚で可憐な姿に強い衝撃を受けた。
彼が今まで会った中でこれほどまでに美しい女性は居なかった為である。
帯締めに香り袋があるのか、そこから馥郁(ふくいく)たる白檀(びゃくだん)の香りが鼻腔を刺激し、見る者を更に惚れ込ませる。
彼が呆然としているのをよそに彼女は掌に乗っているハイパーボールを見た。
「まあ……。ボールを拾ってくださったのですね。ありがとうございます」

凛とした、しかしどこか可愛らしさのある声が彼の耳にじんわりと響いた。
彼女は買い物袋にハイパーボールを１００個ほど詰めている。どうやらフレンドリィショップの帰りなのだろう。
「あ、あぁ！　はい。ここに落ちてありましたので……」
レッドは話しかけられて正気に戻り、慌てて説明した。
「あら……そうでしたか」
彼女はそう相槌を打った。にこやかな笑みである。
「あの……随分と買われてますけど……」
「あぁ、これですか？　フフ。そこのショップでハイパーボールが丁度安売りだったのですよ。４０％ＯＦＦで、私は会員ですからさらに１０％割引されて半額で手に入りましたの。ですからついつい買ってしまいましたわ」
彼女は穏やかな口調で話す。
「え!?　本当ですか？　じゃあ俺もすぐ買いに……」
レッドにとっても耳寄りな話だったためショップの方向に向かおうとする。
「それは残念ですわねぇ。もう私がお店を出る頃には売り切れてしまいましたわよ」
「あ……そうすか……」
レッドは肩を落とした。

「あら……。もしかして貴方、レッドさん……ですか？」
　彼女は顔を覗き込んだ後にふとそういった。
「え!?　ど、どうして俺の名前を……」
　どこかで会ったことでもあるのかと思い思考をめぐらせるが全く思い当たらない。
「あらやっぱり！　くす。マチスさんが仰せになったままのお召し物ですわね。赤を基調とした服に、その赤い帽子。まさにその名前に相応しいですわね」
　彼女は快活な口ぶりで言う。
「へ……!?　貴女何者なのですか？」
　マチスとはクチバシティジムリーダーの名前である。まるで知り合いかのように話す彼女に彼は驚きを隠せない。
「これを見ればお分かり頂けるかしら」
　エリカは懐から虹色に輝くバッジを取り出し、レッドの前に見せた。
　間違いない。レインボーバッジである。トレーナースクールに居た頃教科書で見たポケモントレーナーにとっては勲章とも言うべきリーグ公認のジムバッジだ。
「こ、これはレインボーバッジ……ということはまさか！」
「はい、私、タマムシシティのジムリーダーを務めるエリカと申します。以後よしなに」
　彼女は恭しく頭を垂れた。レッドは目の前にいる少女がジムリーダーである事に緊

張すると同時にその名を胸に刻む。何度か華道の師範としての彼女はテレビで見たことはあったが実際に会うとその衝撃は計り知れなかった。

「タマムシのエリカさんが何でここに?」

「お墓参りです。今日はお盆で御座いましょう?」

「そ、そういえば……」

レッドはふと今日の日付を思い出す。思えば、今日は8月の中旬だ。

彼女は続けて話す。

「私がまだ小さかった頃よく一緒に遊んだナゾノクサのクロをこのタワーに埋葬しておりますの。その為、毎年命日とお盆、お彼岸の時には必ず行くようにしてる訳です。それで、行き掛けにこのボールを買ったのですわ」

エリカの話を聞いて、レッドは合点がついたので納得した表情をして

「なるほど、そういう事情だったのですか」

彼女は続いてレッドを評す。

「ええ。レッドさんの戦いぶりはマチスさんがよーく教えて下さいましたわよ。レッドさんが私のジムに来ること、楽しみにいたしておりますわね」

そう言ってレッドに一礼した後エリカは去っていこうとする。

レッドはボールをまだ返していないことに気づいて呼び止めた。

「あ、あの！　ボールまだお返しして……」
　彼女はレッドの方に向き直り、先程までと変わらぬ穏やかな調子で言う。
「それは差し上げますわ。ジムにはこれでも十分足りますから遠慮なさることはありません」
「え、いやそんな頂けませんよ！」
「良いのです。お近づきの印ですわ」
　そう言うと彼女は今度こそ立ち去った。
　レッドは終始エリカを見ていて、残り香が熱気と風にかき消されて香らなくなるまで恍惚としていた。
　あそこまで綺麗な人が自分の相手だという事に、レッドは自らの士気を高める。結局貰ったハイパーボールは勿体なくて使えないままだった。
　こうしてレッドも気合を入れなおしてタマムシシティへと向かうのだった。
　それから少し経ち、ジム戦でレッドは5―0の完全勝利を果たす。
　―9月12日　午後1時　タマムシジム―
　エリカは最後のポケモンであるウツボットを戻したのち、
「予想はしていましたが、ここまでとは……私の完敗です。どうぞレインボーバッジをお受け取りください」

そう言った後、エリカは懐より虹色に輝く花を模したバッジを手渡した。
心なしかバッジからも良い香りがするとレッドは思う。
「ありがとうございます」
バッジの一通りの説明や技マシンを渡した後彼女から一言アドバイスを受ける。
「確かにお強いですが、最初に貰われたポケモンばかり強くなされていませんか？
それだと私の後の４人のジムリーダーに勝つことは難しいかと……。レベルバランスよく育ててくださいね」
彼はその一言にハッと目が覚めた思いがした。この日までフシギソウやカメール等、博士から貰ったポケモンしか鍛えていなかったからだ。
レッドは勝ち続けてばかりいたので、こういう忠告をしてくれる人が居らず欠点を見過ごしていた。その為、エリカの言葉は非常にありがたく、
「有難うございます！」
とレッドは深々と頭を下げて答える。
その反応を見たエリカは、またクスリと微笑んで
「フフ……。この戦いを励みにして、貴方が栄冠に輝くこと……心より期待しておりますわ。頑張ってくださいね！」
エリカのその言葉の後、レッドはもう一度礼を言ってタマムシジムを後にする。

その後レッドはエリカの忠言を守り、道路の草むらのポケモンと戦ってすべての手持ちを同じぐらいのレベルに上げた。
そしてポケモンリーグにまで勝ち上がることができたのだ。

レッドはチャンピオンになった後、エリカに真っ先に報告の名分で会いたい気持ち。それに加えて感謝の意を伝えたい気持ち。そして何よりも強い思いを抱きながらリザードンでタマムシシティへと向かうのである。

小寒のタマムシシティは二十四節気の一つであるその言葉に似合わず、ビル風の手伝いもあってか歯の根が合わないほど、強い北風が吹きつけている。
彼女は恐らくジムにいるだろう。そう思ってレッドはジムへと歩みを進めた。
―２０１０年　１月１４日　午前１１時　タマムシジム―
レッドは挑戦以来となるこのジムを進んでいった。
男子禁制らしいが、レッドがチャンピオンになった事は水に塗料でも溶け込ませるが如くに伝わっており、追い払われるどころか「写真撮らせてー」などとせがまれる始末である。
適当にあしらいながら進んでいった。

ジムに入って十分が経過しレッドはジムの一番奥に到達した。
そして漸くお目当ての人物にあった。ジムリーダーのエリカである。
彼女は相も変わらず埃一つ無く小奇麗で黄色の着物に赤色の下袴を身に着けていた。
風の便りによれば彼女は17歳らしい。そんな歳には思えないほど彼女は清楚でかつ大人びている。
こんな女性が同じクラスにいればホワイトデーにはきっとあげてもいないのに大量のお菓子が溢れかえるだろうななどと思いつつ、挨拶を済ました後、エリカの方から話しかけてくる。
「この度はグリーンさんを下してチャンピオンになられたようで……私としても嬉しい限りですわ。本当におめでとうございます」
と彼女は恭しく頭を垂れる。
「礼を言うのはこちらの方です！　貴女のアドバイスがなければ途中で投げ出していた可能性もあるのですから」
「アドバイス……？」
エリカはなんの事かとやや首を傾げて少々の時間考えていた。
その仕草も実に可愛らしいが、レッドは思い出させようと試みる。
「ほら、あのアレですよ」

レッドはエリカに思い出させようとする文言を案じていたが、その必要は無かったようだ。

彼女は、レッドが指示する前に、すぐに思い出したからだ。

「……もしかして、ポケモンの育て方が偏っていると指摘した事で御座いましょうか？」

まさにその事である。

「はい！　そうです」

レッドは覚えててくれたのかと安堵した表情を見せた。

「あのような物で一助となったのであれば嬉しい限りですわ。用というのはそれですか？」

レッドは息を呑んで覚悟を決めた様子で決然とエリカを見る。

「いいえ、違います。もう一つ用があるんです」

「あら、何でございましょう？」

エリカは興味深そうに尋ねてくる。

「あの……。変な質問をして申し訳ないんですが、エリカさんの好きな男性ってどんな人ですか？」

レッドは勇気を振り絞って尋ねる。

「そうですわね……」

彼女は少し俯いて考える仕草をし、少しの間を置いた後
「学識が高く、聡明でいらっしゃって、かつどのような事にも屈しない強靭さを持った殿方……でしょうか」
カントー第一の才媛らしい回答である。レッドはそんなことを再認識させる答えを聞いて打ち負かされそうになったが、すぐに気を取り戻す。
「そうなんですか……」
「あの、どうしてそのような事を?」
彼女は怪訝というよりも単純な疑問を持ったような表情で彼に尋ねる。
「あの、エリカさん。驚かないで……しかし真剣に聞いてくださいね」
「は……はい」
レッドがにわかに真剣な表情になる。彼女自身からすれば意外に思ったのかはたまたおどけて見せているのか眉をかすかに動かした後身を正して聞く姿勢になる。
「僕は……その、エリカさんと違ってお作法とかそういうのはあまり出来ないし、エリカさんの理想とする男性とはほど遠いかもしれない。それでも、僕はこうしてカントーの頂点に上り詰めることができたんです。そして貴女を想う気持ちには誰にも引けはとりません。初めて会ったときからエリカさんの事が大好きです!」
レッドは顔を紅潮させながらも最後まで言い切った。

暫しの沈黙が流れる。エリカは最初は少しだけ身を動かしたが、すぐに元の悠然とした態度に戻る。

ギャラリーのジムトレーナーたちも目を白黒にしている。

そんな泰然自若とした態度が尚更レッドを惹かれさせた。しかし、レッドは必ずしもエリカの返事を期待していた訳でもなかった。

「……、僕が言いたかったのはそれだけです。シロガネ山に行く前に、これだけはどうしても伝えたかったんです」

重い空気を破ったのはレッドだった。

エリカは敢えて告白の返事はせずに言葉を返す。

「何故、シロガネ山に？」

「チャンピオンになった以上、カントーで僕に勝てる人はいない……。それは要するに成長を止めることになるじゃないですか。でも、ジョウトとカントーの境目にある大山、シロガネ山に行けば更に修行を積むことができて、心身ともに更に磨きをかけることができる。そう思ったからです」

その言葉を聞くと、彼女は大きく息をつき、感心している様子である。

「頂点に立ってもなお、一層高みに立とうとするその御姿……、素晴らしいですわ。模範にしていきたいですわね」

「その前にエリカさんに一言思いを伝えたかったのです。これを伝えなければ未練になってしまうとも思ったし……それじゃ、エリカさん体にだけはお気をつけて……」

そう言ってレッドは全てを断ち切るかのように後ろを振り返って、タマムシジムを去った。

――

レッドが去った直後、副リーダーのナツキがエリカに話しかける。トレーナーたちにとってもリーダー自身の去就に関わりかねない話であるためかなり関心が高い。

「リーダー。どうなさるおつもりですか？　レッドさんかなり真剣な様子でしたけれど……」

「そうですわねぇ……」

彼女は一回頭をゆっくり回した後

「今は特にどうともお答えするつもりはありません」

「そ、そうですか……」

「しかし、あの度胸といい……。レッドさんは中々に面白そうな御仁ではありますわね」

そう言うと彼女は彼の去った方向に視線を遣りクスリと笑ってみせた。

―２０１２年　９月２９日　午後１０時　マサラタウン　オーキド研究所―

昼時は慌ただしい研究所も夜となれば静まり返る。
研究を残している者もこの時間になるとほとんど帰宅し、今残っているのは研究所の長・オーキドのみであった。
オーキドは机に向かい、全国版仕様のポケモン図鑑の設計書を描いていた。
そんな中、研究所のドアが開く。

「……」

オーキドはそんな音など意に介さず万年筆を執り続ける。
コツコツと革靴の音が研究所に響き渡る。
やがて、靴音はオーキドの座る椅子の前で止んだ。
それを察したオーキドは漸く筆を置いて起立して来客に向き合う。

「ホッホ。よく来たの」

オーキドはにこやかな笑みをたたえて言った。

「……」

黒ずくめの来客は脱帽し、近くにあったもう一つの椅子に上着をかける。
オーキドはすぐ隣にある給湯室に入り

「紅茶が良いかの？」
「ミルク多め」
　こうして、黒ずくめの男とオーキドは相対し、他愛もない話を数分ほどした後本題に入る。男は長い逃避行のせいか疲労が顔に出ており、着ている服もところどころ汚れていた。
「ここに来たという事は……、肚は決まってるとみて良いのかの？」
　先ほどまで笑みを浮かべていたオーキドは頬を引き締めて言った。
「どうもこうも無い。このまま放浪を続けても活路は見出せん。そちらの支援提案、受けるつもりだ」
「さすがに賢明よのう……。カントーで暴れ回った虎狼、サカキ殿は……」
「虎狼……。名誉を捨て、我らのような組織に片棒担ぐオーキド殿の方がよっぽどその名に恥じんな」
　サカキがそう毒づくとオーキドは右頬をわずかに緩ませ
「フッ……名誉など所詮は道具に過ぎんよ。見返りの件も忘れてはならぬぞ」
「無条件で来るはずも無い。分かっている。では、ロケット団の栄光を取り戻す為、今はきよ……」
　と言いながら手を差し出すとオーキドは払い除けた。

「サカキ殿。勘違いしてはいかんのぅ。ワシはロケット団の事など毛ほども興味は無い。ただ利害が一致するから手を組む……それだけじゃ」

オーキドは出した手を振り払うかのように、冷淡に接する。

「クッ。あくまで実利か……。単純かつ外連味の無いこった。表とは打って変わる相当の悪ではないか。オーキド殿」

サカキは言葉とは裏腹に同類を見つけたのを歓迎するかのような目でオーキドを見る。

「ホッホ……。まあ良いわ。互いの宿願を叶える為、呉越同舟。今は共闘ぞ」

「今度こそ……本当に信じてもいいのだな?」

サカキはすがるような目でオーキドを見る。

「安心せい。今度は状況が違えば邪魔者もおらん。ましてやロケット団にまだ力が残ってるなどと本気で思うものは気が触れてるとしか思われんよ……」

オーキドは確信を含んだ笑みで言う。

「それでも信じられぬというのなら。これを持っていくがいい」

そう言ってオーキドはアタッシュケースを一つ手渡す。

サカキが中をあらためると中には一億円ほど入っていた。

「どうかね？」

サカキは一度頷くと、その場を立ち去った。

こうして、ポケモン研究会の権威・オーキドと、それと相対する悪の組織ロケット団の首領・サカキ。

白日の下に晒されれば驚天動地の事態となる会盟がここで交わされたのである。

サカキは往時の栄光を取り戻すために組んだが、オーキドの目的を知るものはいない。

―同年　１０月１日　午後３時　ヤマブキシティ　喫茶室―

所変わってここはヤマブキシティ。

月初に行われる定例会が終わり、タマムシジムリーダーのエリカは親友であり、この町のジムリーダーであるナツメと喫茶店で歓談していた。

「ヤマブキも、もみじが色を付け始めましたわね……」

エリカは頬杖をつきながら庭のもみじを見つめる。

「もうそんな季節か……。はぁ、１０月に入ったし衣替えもしなくちゃね」

ナツメがそう言うと、エリカはナツメに顔を向けて

「あら、秋向けのお洋服でしたら、タマムシデパートで良さそうな物が……」

と、二人は他愛もない妙齢の女子らしい会話を続けた。

　３０分するとふとエリカが
「そういえば、レッドさんも衣替えをなさるのでしょうか……」
　と言うと、コーヒーに手を付けていたナツメが吹き出してむせた。
「だ、大丈夫ですか?」
　エリカはコーヒーの飛沫を軽く拭いた後、身を乗り出してナツメの身を案じる。
「ケホッ……。あ、ありがと。って、あんたまだジムに一回来ただけの子の事、気にかけてんの?」
　ナツメは怪訝な表情をエリカ当人に向ける。
「正確には二回ですわ。それに、類を見ない速さでロケット団を壊滅させ、その上リーグのトップに立たれたお方ではないですか。ジムに挑戦しに来ただけの普通のトレーナーと同一視するのはレッドさんに失礼というものです」
「ハァ……そういえば告白されたとか言ってたわね……。それでもおかしいわよ、それだけの事でまるで……」
　そこまで言うとナツメは口ごもる。
「まるで……なんですの?」
　エリカの勧めにナツメは赤面しながら、押し出されるかのように言う。
「こ、恋心抱いているみたいに気にしているだなんておかしいわよ!」

ナツメの突然の金切り声に他の客は一斉に二人の机に注目する。
「ナツメさん。少々お声が……。しかし、なるほど恋心……ですか。確かに似たようなものは抱いているかもしれませんわね」
エリカは顎に手を遣って熟考のポーズをとる。
「っ……！　否定くらいしなさいよ。それにレッドは修行してるんだろうから、防寒用具はさして持って行ってないと」
「そんな！　凍死でもされたらどうするのですか!?　何とか修行場所を特定して、そこまで荷物を……。そうだ、ナツメさん貴女のテレキネシスでどうにか」
エリカは半ば錯乱気味にナツメに対して提案する。
「ちょ……なんであいつなんかの為に超能力を……　って、そうじゃなくて……あんた本当にあいつの事」
ナツメの疑問に対し、エリカは数秒の間を置いたのち
「よくよく考えてみればもしかすると、レッドさんは私の理想とする方なのかもしれませんわね」
「どうして？　あんた、バカは蛇蝎の如く忌み嫌っているのに……。知ってるだろうけどあの子トレーナースクールとは言っても小卒よ？　強いけど、特別学があるようには思えないし」

「私の本当に理想とする男性というのはこれまで一人としてお会いしたことがないのです。しかし、レッドさんにはそういう……可能性のようなものが感じられるのですよ」

彼女は神妙だが、どこか確信をもったかのような口ぶりで話す。

「ふうん……。そう」

ナツメは気丈そうに言葉だけは取り繕うも意気消沈したかのように項垂れる。

そんなナツメを見て、エリカはまずいと思ったのか話題を切り替える。

「そ、そういえばこの前のジョウトカントー間での親睦会でアカネさんとマツバさんがツクシさんに勉強を教えられておりましたわよ。アカネさんに私も引っ張られて化学を少々お教えしましたけど」

「あぁ、そういえばツクシ君もそろそろ追い込みの時期だったわね……。無事に受かるといいけど」

ナツメはエリカの話に合わせようと、適当に当たり障りのないように返す。

「ツクシさんはかなりの努力家ですわ。きっと実を結びますわよ」

エリカは確信に満ちた目でそう言った。

―10月5日　午後3時　エンジュシティ　マツバ邸　居間―

ツクシは自らの虫ポケモンの博士になるという夢を叶える為に、虫研究の総本山であるエンジュ大学を志していた。

マツバは去年同大学を首席で卒業し、アカネも同じ大学に推薦入学が決まっている。その為、マツバが文系科目をアカネが理系を担当する形でツクシに受験対策を施しているのだ。

ツクシは生物に関しては折り紙つきの実力の為他の教科を勉強している。

「マツバさん、これでどうでしょう……」

ツクシはマツバに受験科目であるジョウト史の答案を恐る恐ると見せる。

１０００字の論述問題である。答案には字がびっしりと詰まる。

マツバは手に取り

「どれどれ……。うん、悪くはないけど、山名氏に関する記述が弱いかな。室町幕府において四職の一つを担う程大事な役割を持っていたから問題の『室町幕府と守護のパワーバランスの変遷』を論ずる上では大事な要素だよ」

「ハハハ……大きな視線だけで書いちゃいけないんですね」

そう言うと、障子が開く。アカネがお茶を用意してきたのだ。

「お疲れやでー。マツバ、調子はどうなん?」

アカネが三人分の茶を大机の上に分配する。

「今、ツクシ君が答案書き終えてね……」

全て言い終わる前に、アカネは尋ねる。
「そか。よう頑張ったな！　どれ、見せてみい」
「えっ、でもアカネさんは物理とかの担と」
ツクシの発言をアカネは遮って
「やかまし！　ウチはどの教科でも出来たやろ？」
「うーん確かにそうだったけど……。なんか腑に落ちないんですが」
ツクシの返答に対しマツバは横槍を入れ
「別の視点からの添削も大事だよ。試験官にはいろんな人がいるからね」
「さすがマツバや！　ナイスフォロー！」
ツクシは少々の時間黙した後
「そうですか……。じゃ、渡してください」
そう言う訳で、マツバからアカネの手に答案が渡る。
「おおきにやでー」
アカネは答案を手に取って、興味津々に読みふける。解答の内容というよりもツクシの文字の形や書き方に興味を持ってる様子にもとれた。
１０分ほどが経ち
「あの、アカネさん？」

「へ!?　な、なんや?」

　読む行為に耽溺していたアカネは数回ほど呼ばれて漸く気付く。

「全く、メデゥーサにでもとりつかれたのかと思ったよ。それで、どんな感じ?　アカネちゃんの添削、聞かせてよ」

「あ……ああ。添削な。せやね、字が綺麗で読みやすいと思ったで!　字だけで惚れて……」

　アカネは口からついて出たかのように言った。が、途中で何を思ったか言葉を濁す。

「あ、ありがとうございます……?」

　ツクシはなんとも複雑な心境そうな表情を浮かべながら、礼を言う。

　一方のマツバは目を丸くして

「いや確かに、字は大事だけど……。他には何か無いの?」

「え、他って……」

「内容だよ。僕はさっき山名氏の記述が薄いって言ったけどアカネちゃんはどう思かと思ってさ」

　マツバは諭すような声で提言を勧める。

「あー。せやね、ウチ的には全体的にもうちょい簡潔に書いた方がええと思うんよ。例えば……」

こうして、ツクシの受験勉強は夜更けまで続くのだった。

―２０１３年　１月３１日　午後７時　セキエイ高原　ポケモンリーグ　理事長室―

内国。カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウの四地方リーグの頂点に立つ理事長、ワタル。

彼は次回の定例会前日に当たるこの日、ある人物を呼んで計画の最終調整をしていた。

「ヤナギさん。これを明日の定例会の時に布告しようと考えているのですが……どう思われますか？」

ワタルは目の前のソファに座って居る、白髪の老人に計画書を手渡し、読み終えた後にそう言った。

「なるほど。イッシュと内国。両国の緊密化を図るために……か。よく考えたのう。問題はこの計画に誰を遣わすかじゃが」

ヤナギは左手を顎に遣りながら尋ねる。

「それについてはいい人材が二人ほど居ますよ」

―５分後―

「ふむ。そうか。だがちと若すぎはせぬか？」

「若いからこそです。ポケモントレーナーになろうという人の中で多くを占めるのはモラトリアム期間を狙う10代。この二人と同じ年齢層です。それに中高年だって若いころの自分にそれを投影して人気を博すかもしれません」
「なるほど……。分かった。好きにするがよい」
こうしてワタルの計画に太鼓判が押される。

―2013年　2月1日　同所　第二会議室―
ポケモンリーグには4つの会議室がある。
定例会はいつもこの場所で行われている。
ワタルが上部中央に座り、そこから交互に1番目～8番目のジムリーダーが着席するのが慣例だ。因みにこの番号は出立の地として選ぶ者が最も多いポケモン研究所のある街を始点とした便宜的なものにすぎない。理由は研究所からの場合だと御三家と呼ばれる珍しいポケモンが貰える為である。
定期報告を終えると、理事長のワタルの適当な話でいつも終えるのだが、今回は違う。
「今回は重大な発表がある」
理事長の一言にその場にいる全ジムリーダーがワタルに目を向ける。
「今月、二人のトレーナーを全国に羽ばたかせたいと考えている」

そして、その発言に議場はざわめきだした。
「全国って……もしかしてイッシュも含めて？」
ワタルに二番目に近い席に座るカスミがそう呟く。
「そう。内国に加えてしめて五地方！　そしてそのトレーナーにはその地にいる全力のジムリーダー、四天王、チャンピオンを倒してもらう！　それが成った暁には、現在建設中のイッシュ地方のホドモエという街にあるポケモンワールドトーナメントの場で決戦を行い、ポケモンマスターを決定する！」
ワタルは堰を切るように、計画の全容を話した。
これまで聞いたことも無い壮大な案にジムリーダーたちは目を丸くする。
「それで、そのトレーナーって誰なんです？」
タケシが尋ねた。
ワタルは先程の事でスイッチが入ったのか、機嫌の良い声で答える。
「いい質問だ。ジョウト地方のここに居る全員を討ち破ったトレーナー、ゴールド君。そして、今シロガネ山で修行をしている今や生ける伝説となったトレーナー、レッド君だ」
ここにきてエリカが反応を示す。三年前の告白の返事をするまたとないチャンスである。

「うおおおす！　中々白熱した戦いになりそうだな！」

カツラが熱意を宿した目になる。

「問題は、これをどうやって伝えるかだ。ゴールド君はポケギアで何とかなるにしても、レッド君はそうもいかない。誰か使いを出さないと……」

ワタルは思案投げ首な様子で議場全体に目をやった。

「そんな事リーグの委員にでも任せれば良いことじゃないんですか？　不安だと言うならあたし達がポケモン貸しますし。使いっ走りなんてリーダーの仕事じゃないと思うけど……」

カスミがそう返したがワタルはかぶりを横に振る。

「甘いよ。カスミ君。あの山は如何なる場合でもただのトレーナーが入山してはいけない決まりになっている。それだけ危険な任務なんだ。専門のトレーナーですらない委員の手には余る仕事だ」

「じゃあ、俺が行きます！　岩ポケモンを使えばシロガネ山くらいどうってことないです」

タケシが手をあげ、率先して引き受けた。

「おお、それは頼もしいね。それじゃあ、タケシ君に……」

それで場が決まりかけたその時である。

「ま……。待ってください！」
エリカは席を立ち、普段はまずあげない声量をあげて、異議を唱える。
ざわついていた議場は一気に静まり返った。
彼女は立席するとワタルにしっかりと視線を合わせる。
「あの……。私に任せてはいただけませんか？」
タマムシ第一の令嬢で、汚れ仕事を嫌うエリカがやるとは誰も思わなかったのだろう。ジムリーダーたちは大いに驚いている。
「ちょっとエリカ！　あんた本気なの？　シロガネ山がどれだけ危険か分かった上で言ってるんでしょうね？」
「そうよ！　ここは男手に任せるべき！」
そして、やがてナツメ、カスミといった女性陣が止めにかかった。
「私、レッドさんには個人的な用事がありますから」
「そうか。じゃあエリカ君……。きつい仕事になるけど、任せてもいいかな？」
「理事長！」
ナツメが立ち上がり、ワタルを牽制する。
「ナツメ君。言いたい事は分かるけど、この仕事の危険さが分からない程エリカ君は愚かじゃ無い。その上で彼女は買って出ているんだ。ここは彼女の意志を尊重してあげ

ないと」

　ワタルの諭しにナツメは溜飲を下げ、着席する。

「それじゃあ、頼んだよ。登る為のポケモンはこちらで用意しておく。あと彼には僕が呼んでいたということだけ伝えてくれればいいから」

「は……はい！　ありがとうございます」

　こうしてエリカはシロガネ山への派遣任務を引き受ける。

　ここから、栄光と欺瞞が織り成す伝説は幕を開けるのだ。

―第〇話　黎明　終―

出立編（２０１３．２）

第一話　月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり

―某月　某日　シロガネ山―

シロガネ山に入って2年が経過した頃。

レッドは、手持ちを引き連れてシロガネ山を2日ほど修行がてらで探索していた。

彼は2年も山に引きこもり、そろそろ故郷が恋しくなっていた。しかし、石の上にも三年という諺もある。この山で三年は修行すると決めていた為、気を引き締めようと探索をしていた。

野生のポケモンを適当に倒しながら進んでいくと、どこからともなく窟内を揺るがす咆哮が聞こえた。

「なんだ?」

レッドがまず発言する。

「あまり聞きなれない鳴き声っすねぇ」

リザードンがそう答えた。
「とにかく、先へ進もう」
レッドの指示で、ポケモンたちは聞こえた方向へと向かう。

咆哮の先へ歩を進めると、洞窟を出る。
すると、平原が姿を現し、砂塵があたりを覆いつくしている。
そして、２００ｍほど離れたもう少し高い場所に咆哮の源と思われる生物が姿を現した。
「あ……あれは」
レッドは、砂嵐に浮かぶシルエットから小さい頃読んでいたポケモン図鑑を思い出す。
数あるポケモンの中でも恐ろしい姿をしており、後ろの角が怖さを増幅させる。
名前を失念していたため、即座にポケモン図鑑にかざすがデータ無しと出た。
「何だと!?」
「俺たちとは全く異種の生き物ってか……?」
そういいながらカメックスは砂嵐の中に居る怪獣に目を向ける。
怪獣は、レッドたちに気づき、一歩ずつ前に出てきた。

「レッドが危ない！」
リザードンがすぐに前に出て、炎を口にためる。
「ここはやったもん勝ちだな……。よし、リザードン！　大文字だっ！」
リザードンは大文字を怪獣にぶつける。しかし、ビクともしていない様子である。
怪獣はレッドたちを敵と見なしたのか、速度をあげて襲い掛かろうとする。
「全然効かないなんて……。本当に未知の生物なのかよ」
ポケモンたちの顔が青ざめ、レッドが落胆していると、
「ピカ！」
ピカチュウはレッドに話しかける。
レッドが目を合わせるとピカチュウは腰につけているモンスターボールを指差す。
「ん？　……。なるほど。ようしっ」
レッドは、ポケットからモンスターボールを取り出し投げつける。
モンスターボールは開き、巨体を一瞬にしてボールの中に収めた。
このボールは一般の生物には反応しない、つまりあの怪獣はポケモンである。
しかし、体力が減っていないため、すぐさま出てしまう。
「ポケモンということはタイプがあるはず……。とにかく攻撃を出せば効く技があるはずだ！　ようし、ピカチュウ、雷だ！」

こうしている間にもポケモンは一歩ずつ前に出てくる。
ピカチュウは素早く電気をあつめ、稲妻をお見舞いした。
『グ……グォォォォォ！』
電撃は動きを鈍らせた。しかし、勢いは衰えず肝心の体力にはさほど影響を及ぼしていない様子だ。
「くそっ……！　じゃあ、カメックス！　ハイドロポンプだ！」
「あいよっ！」
カメックスは砲塔に水を装填させ、高水圧の激流をポケモンに衝突させる。
今度のは相当に効いたようだが、それでもやはりこちらへの前進はやめようとしない。
やがて、レッドのすぐ近くにポケモンは姿を現す。
距離が８０ｍほどになると、体を隠していた砂塵は意味を成さなくなり、ようやく体そのものが見えた。
薄緑色の巨体に、青色の菱形の腹が見えた。
「で……でかいな」
その体は２ｍを超さんばかりの巨体であった。近くになればなるほど威迫は増すばかりだ。

「チィっ……。フシギバナ。葉っぱカッターだっ。俺の直感からしてあれは岩タイプ！　あの如何にも山にいそうな姿に加え、この砂嵐の中平然と歩けているということは、それしか考えられねえっ！」

「分かった」

フシギバナは葉を鋭利な刃に変え、青色の腹に向けて放った。

今度のも相当に効いたようだが、退く様子すら見せない。

やがて、ポケモンのほうから攻撃をしかけた。巨大な岩石を味方につけ、大量に降らせる。これは大いに効き、レッド側のすべてのポケモンに大ダメージを与えた。

「なんだこれ……滅茶苦茶だぁ」

一番ダメージを食らったリザードンがそう呟いた。

「ぐっ……。嘘だろ、俺のポケモンの平均は６０レベだというのに……！」

レッドは目を点にさせながら言う。そしてそれと同時にこのままでは埒が明かないと見て一旦撤退しようかなどと考えていると、二体の鋼色をした鳥がレッドの上を通り過ぎた。

そして、その鳥は羽を広げ、相挟んで刃と化した翼でポケモンを切りつけた。

隙が出来たと見たレッドはすぐさまカメックスとラプラスにハイドロポンプを指示し、フシギバナには葉っぱカッターを指令。

八方ふさがりで適わないと見たのか、ポケモンはのしのしと引いていった。
ようやく追い払って、ほっと一息をついていると、上空から声がする。
「おーい、そこの少年！　大丈夫ー？」
レッドが声の主の方向へ顔を向けると、見たことも無いツバメのようなポケモンに乗った女性が自らの顔を覗かせながら彼を見下ろしていた。
とはいえ、砂嵐が晴れ、太陽を背にしているため影になってほとんど見えない。
「貴女が助けてくれたんですか」
レッドは声を少し上げながら言う。
「グライダーしてたら局所的に砂嵐があがっている所を見つけてね。何事かと思って、オオス……ポケモンに乗り換えて来てみたのー！　そしたらまあ君が苦戦してたからね。ちょっと手助けしてあげたの」
「そうですかー。あのー降りないんですかー？」
レッドは話しづらいと感じていたため、降りる事を勧めた。
「そこさー。尖った岩だらけでしょう？　手持ちをバトル以外で傷つけるのは嫌なのー。不便かけて悪いけど、これで我慢して」
「そうですかー」
なんとなく容姿を気にしていただけに、レッドは落胆する。

「あのポケモンはバンギラスっていうのよー。タイプは岩と悪タイプ！　凶暴で、手がつけられなくなると大きな山を崩しちゃうの！　シロガネ山だって例外じゃないわ。にしても、ここには幼体のヨーギラスしか居ないって聞いたんだけど……」

「岩ポケモンは岩石を好みますから、食べ過ぎて進化したとかじゃ」

レッドの問いかけに、女は合点がいったようで

「なるほど。それもあるかもしれないわね。とにかく、バンギラスがこの山に出たというのは由々しきこと。シロガネ山は数百年火山活動が無いみたいだけど、バンギラスが刺激して、噴火が起こらないとは言い切れないわ。下手をすれば、国の存亡に関わる被害が出る可能性も否めないわね」

シロガネ山はカントーとジョウトの中間に位置する。

もしもそんな山が噴火すれば、火山灰が地を覆い、トレーナーたちはバッジ集めどころではなくなる。それよりもレッド自身が山から出れなくなる危険性がある。

「そ……そうですね」

レッドは固唾を呑む。

「今回は追い払っただけ。恐らくバンギラスは再び出没するでしょう。その時には、貴方がバンギラスを制しなさい」

「ど、どうして俺が？」

レッドは倒すことに疑問を持っているわけではなく、どうして女が制すことが出来ると知っているのか気になっていた。

「シロガネ山に来れるのは、選ばれたトレーナーだけと聞くわ。そして頂上に居るということは、修行に来ていると言う事を自ら言ってる様なものよ。今回貴方が手間取ったのはあまり相手を知らなかったからでしょうし、次はきっと大丈夫よ。健闘を祈るわ！　それじゃーね」

そう言うと、女性は身を正し、この場から去ろうとする。

「あの！　最後にひとつだけ聞かせてください！　貴女はどうして、バンギラスを倒さなかったんです？　結構良い勝負していたじゃないですか！」

レッドは気になっていたことをぶつけた。

「私はただの鳥使い。少し相性がいいくらいじゃ、足止めは出来ても、倒すことなんて出来ないわ。それに、貴方だってどうしてバンギラスを追撃しなかったのかしら？」

女の問いかけにレッドは少し考えて答える。

「それは……、たかが岩なだれであんなにダメージ食らったのに、追撃したら瀕死させちゃうかもしれないから」

「修行に来てるのに、ポケモンに限界まで挑ませないなんてどうかしてるわ。優しさも大事だけど、強くなりたいなら、時には非情になる事も肝要よ」

レッドは手を握り締める。
「でも、いいわね。この山に来るまで強くなっても、その優しさを忘れずにいるなんて……」
「え？」
レッドは女が初めて自らを褒めた為、思わず聞き返した。
「いえ。何でもないわ。あぁ、あとこれあげるわ」
彼女は上空から何かを落とす。
レッドは、落下地点を素早く予測し、受け取る。見てみるとゴーグルのようだ。
「それは、ゴーゴーゴーグル。砂嵐でも砂が目に入らない優れものよ。つぎバンギラスと戦うときはそれを使うといいわ。それじゃ、ばいばーい！」
そう言って、彼女は、髪をたなびかせて西の方向へ飛んでいった。
ポケモンへの勉強不足を痛感したレッドはそれから、ラジオで積極的にポケモンの情報を集めた。山を降りない以上、唯一の情報源だ。そして、ポケモンの平均レベルを75前後にまであげてバンギラスと戦い、どうにか勝利を得た。
バンギラスを制してから数週間が経過したある日の事。
山の生活にもすっかり慣れきって情欲や煩悩を忘れ、悠々と仙人のごとく生活してい

た。

この日、レッドはピカチュウの発電でラジオを動かしていた。

そのときのラジオの話題は、ロケット団の再興云々であった。

―２０１３年　２月１０日　午前１１時　シロガネ山　最奥部―

「ジョウトは大変だなぁ……まあもっともここもジョウトだけど」

と、ラジオに向かってシロガネ山で一人ごちている。

「あのう……誰かいるんですか?」

向こうの入り口より声が聞こえる。

レッドはラジオを止めた。

声の主は、奥へと進みレッドの少し前で止まった。

「あの、もしかして噂のレッドさんですか?」

その少年は赤色の帽子等から推測したのかそう尋ねてくる。

「……」

そして少年は風格から悟り、勝負を仕掛けた。

「……、どうやらそのようですね!　行け!バクフーン!!」

「……ピカチュウ」

―――――

この戦いはレッドが2体撃破されるも、勝利をおさめた。
「カメックスとピカチュウを撃破されるとはね。ここまで来るだけの事はある」
「……」
少年は唇を噛んで、さも悔しそうな様子で敗北を自覚しているようだ。
「ただやっぱりパーティが悪い。俺に合わせて第二世代だけにする必要はない。もっと自由にバランスよく組め。また出直して来い」
「……！　有難うございました」
そう言うとその少年は立ち去った。
また山に静寂の時間が戻る。
しかしそれと入れ替わるかのように、またも洞窟に誰かが入る。
今日は来客が多い、しかも女性のようだ。それに良い香りもする。
よく見ると、ベージュの登山服姿ではあるが小柄な顔立ち、紫色のカシューチャ、そしてなによりも彼女自身が放つ清らかな雰囲気でそれが誰かレッドに分からせるには十分だった。
「流石ですわね。伝説のポケモントレーナーという筋書きは嘘じゃないって事ですか……」
その女性はレッドの前で立ち止まる。

「エリカ……さん？」

レッドは久々の思い人の再会に、内心を大いに喜ばせる。

「そうです、タマムシジムリーダーのエリカです」

彼女はわざわざ所属まで言ってきた。相変わらずの律儀ぶりである。

「なんでこんなところにまで……」

レッドは次に湧いた疑問を彼女にぶつける。

「セキエイリーグから連絡があるのでお伝えに来たまでです。何かワタルさんが、企んでるようですわね」

エリカは含みを持たせた口ぶりでそう言った。

「ワタルさんかぁ……懐かしいですね」

レッドは数年ぶりに聞くその名に懐かしみを感じていた。

「しかしワタルさんも酷な事をさせるねぇ、か弱い女性に山を登らせるなんて」

レッドは何の気無しに、単にエリカを労うつもりでそんな事をいった。

しかしエリカの反応はレッドの予想を良くも悪くも裏切るものだった。

「……レッドさん、随分鈍くなられましたわね……」

エリカは帽子を改めて目深にかぶり、静かにレッドをけなす。

「……え？」

レッドは思わず聞き返す。
「本来は、私ではなくタケシさんが使いで来るはずだったのです。それを私が無理して変わって頂いた……、こ、ここまで申し上げても、私の本意、察していただけないのですか？」
最後は流石にエリカも恥ずかしくなったのか頬を赤らめながら言った。
そこで漸くレッドは、三年前エリカに何を言ったのか思い出したのだ。
それと共に忘却の彼方にあった情欲、煩悩が沸騰し、突沸しだした湯の如く湧き出し始める。
「え、エリカさん。貴女もしかして……」
レッドは二の句を継ごうとしたがエリカが先に言う。
「告白のお返事、しておりませんでしたわね。……私も、ずっとお慕い申し上げておりました」
エリカは相変わらず顔を赤らめていたが、最後はきっちりと言い切り、笑みを浮かべている。
その笑みには穢れが無く、清く明るいものである。
「……、エリカさん、僕……僕……！」
エリカを抱きしめようと手を伸ばした。

しかし、

「レッドさあああああん!!」

さっきの少年が懲りずにまた来たようである。

「うう、こんなタイミングで来んなよ!!」

レッドは呆れ半分にそう言った。

「仕方ないですわね……戦っておあげなさい、それが貴方のトレーナーとしての責務ですから」

「はいよ……。んじゃ、一丁やりますかね!」

レッドが気合を入れると同時に、エリカは

「杞憂に終わるでしょうけど、負けないでくださいね」

「当然さ」

エリカは洞窟の入り口まで下がった。

少年はレッドと戦う事しか頭に無かったのでエリカなど眼中に無かったようである。

「……」

レッドはエリカとの抱擁を中断させられたせいで苛立っている。

「ど、どうしました?もしかして怒ってます?」

少年は申し訳なさそうに、レッドに言う。

「……別に」
　レッドは帽子を目深に被り直しながら答えた。
「行きますよ……行けっゴローニャ！」
「……フシギバナ」

――――――

「フシギバナとラプラス、カメックスを撃破したか。さっきより力は上がったんだな」
「クソッ、なんで負けるの……!!」
　少年は悔しさの余り、地団駄を踏んだ。
「レベルさえ追いつけばきっともっといい戦いが出来るさ。また出直してこい」
「……次こそは負けないですよ」
　レッドはふと疑問に思った事を尋ねる。
「……そういえばお前の名を聞いてなかったな」
「はい！　ゴールドっていいます！」
　その少年……ゴールドは元気よく答える。
　そう答えた後、ゴールドのポケギアが鳴った。
「あれ、鳴ってる……。はい、もしもし。あぁカスミさん……うん分かった」
　大した用では無かったようで、数十秒ほどで会話は終わる。

「中々親しいようだな」
「ああ、僕の彼女ですよ、昨日もずっと搾られてたいへんだったんですから……××を」
　レッドは信じられないと思い、自然と表情を一瞬だけ曇らせる。
　××
「いやー、チャンピオンになってから異性同性問わずうるさくなっちゃって……でもレッドさんに勝てないんじゃまだ本当のチャンピオンじゃないですよね」
　レッドは年下に先を越されたことに、心中で激しくショックを受けながらも姿勢は崩さずにこう尋ねる。
「でもリーグはワタルさんに任せたままだろう?」
「ええ、僕はもっと旅がしたいので。ああそうそう!レッドさん、ジョウト行った事あります?あそこは良い所ですよー。特にエンジュシティという街はとても落ち着いてて」
　ゴールドが目を生き生きと輝かせながら言う。
「ジョウトか、そのうち行ってみたいものだ。ゴールドといったな、これからどうする気だ」
「うーん、修行は勿論ですけど他の地方にも行ってみたいかなぁって思ったりしてます」
　そうこう話していると上空からどこからともなくカイリューが飛んで来る。
　カイリューから赤い髪のマントを羽織った青年が下りる。ポケモンリーグチャンピオンにして全国ポケモンリーグ理事長のワタルがやってきたのだ。

二人よりはそれなりに年上であるが、その顔やいでたちにはまだまだ若々しさが残り、かつ威厳もうかがえる。
「レッド君！　あぁゴールド君もか。丁度いい一つ話がある」
レッドは声にこそ出さなかったが、カイリューを心配する。
「ワタルさん！　お久しぶりです」
ゴールドは礼儀正しく、深くお辞儀をした。
「うん、少し前に戦って以来だね」
「あれ、ワタルさんリーグにいたんじゃ……」
レッドは尋ねた。
「少し待ちくたびれたからね。どうせ近所だし早いほうが良いと思って、エリカ君には悪いけど、痺れを切らしちゃったんだ」
ワタルはそうエリカへの後ろめたさを垣間見させる言動をした。
「成るほど。それで用ってなんです？」
レッドが納得するとワタルは話し始めた。
「突然だけど。君たち、ポケモンリーグの公認ジムがいくつあるか知っているかい？」
「えっと……。カントーとジョウトで16じゃないんですか？」
ゴールドが答える。

「違うんだなぁ。君たちは社会科の授業でやってると思うけど、この国にはおおよそ7つの地方がある。そのうち我々が公認を与えている地方は現在のところ、4つだ」
「えっと、つまり32ですかね」
レッドがそう答えた。
「わが国というくくり。つまり僕が統括している範囲でいえば正解。でもそれ以外にも、遠く海を隔てたイッシュ地方という所にも我々と親交があるリーグがあってね。そこにもまた8つのジムがある。すると全部で40のジム。4つのリーグがあるという事だ」
ワタルは遠まわしな物言いで言ったが、二人はすぐさま言外の意を汲み取った。
「もしかして……」
ゴールドが言いかけたそのとき、ワタルは言う。
「そうだ。君たちにはイッシュ、ホウエン、シンオウ、ジョウト、そしてカントーのジムバッジを全て集め、リーグチャンピオンを撃破してもらいたい。そして、その暁には二人は戦ってもらい、勝者にはポケモンマスターとして、リーグ、いやポケモンの歴史に名を刻む栄誉を与えたいと考えているんだ」
最後まで聞いたレッドはワタルに言う。
「かなりハードな条件ですねぇ」

「ポケモンマスターというからにはそれぐらいやって欲しいもんだと思ってね。ちなみにこの条件をシンオウのリーグチャンピオンのシロナさんに言ったら苦笑いしてたよ……」

　ゴールドもまた、苦笑している。

「で、君たち二人にはその優待をする。何、経済的な援助だけど……ほら」

　ワタルは二枚のプラスチック製のカードをそれぞれ一枚づつ二人に手渡した。

　鼻にくる樹脂の匂いがなんとも新品であることを物語る。

「これは？」

「それは全国すべての港で使えるフリーパスさ。僕のポケットマネーで買ったんだ」

　レッドはワタルのそんな気遣いを見て、なんと優しい人なんだと内心感じ入る。

「え、いいんですか本当に!?」

　ゴールドにとっても願っても居なかったことなのだろう。ワタルに上ずってしまっている声で聞き返す。

「ゴールド君は僕と一緒にロケット団の壊滅に協力してくれたし、レッド君は、君が最強であるお陰でリーグの権威は守られている。だからそのお礼がしたくてね」

　レッドは一つ疑問に思った為、尋ねる。

「頂けたことは有難いですが、リーグの援助という訳では無いんですか？」

「さっき言ったシロナさんって人が事務を担っているんだけど、物凄くお金の管理に厳しくてね……。『数枚の為に財布の紐は緩められません』って一蹴されちゃったんだ。だから、泣く泣くポケットマネーで事さ。……それでレッド君、エリカ君とは今？」

「え？」

レッドはまさかワタルがエリカの事を尋ねるとは思っていなかったので、少し瞳孔を収縮させる。

「ここ最近君の話をあんまり聞かなくてさ。エリカ君、この事を定例会で話すとすぐに食らいついたし、少し気になってるんだよね」

ワタルは興味津々な様子で尋ねてきた。少し下世話ではあるなとレッドは思ったが、すぐにゴールドの鼻でも明かしてやるかという心持にもなったので、

「その、正直に言うとさっきまで良いムードになってゴールド君に邪魔されました」

と、レッドはさも不愉快だったとでも言いたげな演技がかった口調で言う。

ゴールドはレッドの方向に首をサッと焦ったように向ける。

「え？」

ゴールドの純粋なその目には、悔悟の念と動転が同時に現れていた。

「あん時邪魔しなければ今頃……ハァ」

レッドはわざとらしく帽子を目深に被り直して、大きく溜息をつきながら後輩をいじ

るような気分でゴールドを見下す。
「す、すみません空気読めなくて！」
ゴールドはレッドに木刀を素振りしたかのような体で平謝りする。
「いや、いいさ別に」
レッドはその姿を見て気を晴らしたので、すぐに許してあげた。一方のワタルは聞いたことを後悔しているようだ。顔に元気がいささか無くなっている。
「もう、レッドさんたら……先ほどからいささか喋り過ぎではありませんか？」
エリカはあまりにも時間が経過してしまい、待ちくたびれてしまったのか洞窟から抜けて姿を見せた。
二人はエリカの普段とは違う、登山服姿の色気に大いに悶えている様子だ。二人とも腹を抱え、赤面している。
「あら、どうして皆さんお腹を抱えて……」
彼女は行動の理由が掴めないのか、当惑気味になりながら言っている。
「い、いや何でもないですよ」
ゴールドが焦り気味に後頭部に手を遣りながら立つと、ワタルも少し遅れて立った。
「なんだ……来ていたんですか」

「殿方だけとのお話には入りづらくて……」
エリカは気だるそうに言う。どうにか落ち着いたワタルはエリカに尋ねる。
「そういえばエリカ君、ジムはどうした?」
「トレーナーの方にお任せしております。因みにバッジは郵送しております上に定期的に連絡はしている故御安心を」
彼女は慣れている調子で切り返す。
「そうか、仕事をちゃんとしてるなら、問題は無い。君に任せて正解だった」
ワタルはどうやら、直属の部下相手にはレッドやゴールドに対するよりも偉そうな口調で接するようである。
「はい、当然ですわ」
レッドはこのような業務的な会話をみて内心格好よさを感じていた。
「こんな事もあろうかと、もう一枚買っといて良かったよ……はい、エリカ君」
「え、私まで……本当によろしいのですか!?」
エリカはまさか自分まで貰えるとは予想だにしていなかったのか、目を丸くして驚いている。
「いやー、将来レッド君の妻になる人だから一緒にいなきゃ可哀想に思ってね」
レッドの中でワタルの株は急上昇しているようだ。彼女はといえば、驚いてはいるも

のの、どこかしら社交辞令な風に見えるのは恐らく気のせいではない。
「つ……妻だなんて……」
　エリカは頬を紅潮させる。声もどこかなまめかしさが交る。彼女が普段それ程見せない姿にゴールドとワタルはうつむいて、顔を紅潮させていた。
「俺が夫か……法律上15だから無理だけどいっか」
「ジムは如何すれば」
　エリカはついでとばかりにワタルに尋ねる。
「え……あぁ、リーグ法上30日以内に一回ぐらい連絡とったりしていれば問題ないから安心しなさい」
「やった！　レッドさんと一緒に居られますわー！」
　エリカは上気した余り、レッドの片腕を掴んですり寄る。
「ちょ、エリカさん！　みんな見てる前であんまりひっつかないで……」
　レッドは勿論、嬉しかったがやはり羞恥心からエリカをやんわりと注意する。
「あ……申し訳ございません」
　エリカはうっかりレッドの腕を掴んでしまった、自らをはしたないと思ったのか顔を赤くして、レッドに向かって頭を少し下げて謝る。
「くそ……」

ゴールドとワタルは心底羨ましがっている様子だ。レッドは自然と優越感を覚えたが、表情にはおくびにも出さない。

「じ……じゃあそういうことだからよろしく頼んだよ！」

ワタルは弱ったカイリューの上に乗り、セキエイ高原へと飛び去っていく。

ゴールドはワカバの人たちに報告するために戻るといって立ち去った。

こうして、エリカとレッドが残される。

「エリカさん……」

「フフ。貴方、私たちはこれより共に旅をするのですよ？　将来私の夫と成る方がそんな他人行儀な喋り方ではいけませんわ」

「あ……じゃ、じゃあ。エリカ！　これから辛い旅になるけどついてきてくれるよな」

レッドは得意になっている様子で、呼び方を変える。

「はい……でなければレッドさん……いえ、貴方の妻として務まりませんわ！」

こうして二人は夫婦としての自覚を持つのである。しかしエリカの方は〝貴方〟と呼ぶことに若干の恥じらいがあるようだ。

そんな初々しさもレッドの心をくすぐる。

「とりあえず、まずは旅の準備だな」

「私も一旦タマムシに戻ってジムの皆さんにしばしの別れを告げて、旅の支度を致しま

す」

　ひとまずやる事を言い終えたので、レッドは次の事をエリカに訊く。

「じゃあ、どこで落ち合う？」

「そうですわね……フリーパスにはクチバと書いてありますので、３日後にクチバ港で会いましょう」

　エリカは至極妥当な提案をする。反対しても仕方のない事なのでレッドは同調した。

「そか、ところでエリカ、飛行ポケモンは？」

「あ、そういえば……貴方に会うことしか考えてなかったものですから……」

「じゃあリザードンを貸すよ」

「え、それでは貴方は……？」

　エリカは不安そうに尋ねた。

「一応、ピジョット二軍で連れてきてるからそれで行くよ」

「成る程、周到ですのね」

　エリカは合点が言った様子で言う。

　こうして、エリカは頂上から、タマムシにへと向かうのだった。

　かくして、四地方を巡る旅に出ることになったレッドとエリカ。

　二人にはいったいどんな試練が待っているのだろうか……。

―第一話　月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり　終―

第二話　それぞれの別れ、そして出港。

レッドはエリカにリザードンを渡した後、寝床に戻り旅の支度をする。

―２月１０日　午後３時　シロガネ山　某所―

「こうしてみるとやっぱ散らかってんな……。そんじゃ片付けるか」

自分でとってきた食料や調理本、ラジオなどが散らばっており、片付けるのに少しばかり時間がかかってしまった。

そして三年間を過ごしたシロガネ山ともいよいよ別れを告げる。

―シロガネ山　入口―

レッドは三年ぶりにシロガネの入り口に立つ。

「出てこいお前達っ!!」

カメックス、フシギバナ、ラプラス、カビゴン、ピカチュウ等などと主に鍛えたポケモンを繰り出した。中々に壮観である。

リザードンを含めた六匹はレッドが無名だった頃より連れてきた、糟糠の妻ならぬ糟糠の戦友である。

「いよいよシロガネ山ともお別れだ。敬意をこめて深々とお辞儀をしよう」

「マジすか、マスター」
　カメックスがまず口を開く。手持ちの中では首領格だがやはりレッドの前では礼儀正しい。
「あれ、リザードンの奴どこ行ったの？」
　フシギバナが続いて尋ねた。
「ああ、あいつならエリカに預けた」
「マスター、エリカってあの俺にとって苦々しい」
　レッドは対エリカ戦の時、最初のターンだけ奇を衒って氷技を使おうとしてカメールを出していたのだ。その記憶がまだカメックスにこびりついていたようである。
「忘れろ」
「はい」
　レッドは一言でカメックスの口を噤ませた。
「ほほう、レッドがとうとう童貞卒業かぁ、俺としても嬉しい限り」
　フシギバナは最初からいたので一番レッドに馴れ馴れしい。手持ちとはいえポケモンにこんな事を言われたので、意地を張ったレッドは声を上げて
「だーっ！　もういいからお辞儀しろよ！　あとおい、カビゴン！　寝てんじゃねえ！」
「ピカピー……」

ピカチュウはレッドに構ってもらえなかったので寂しそうだ。いつもあげている尻尾を地に垂らしている。

「よしよし……。全くマスターってば先輩ほったらかしにして……」

ラプラスは電気が流れていないピカチュウの頭を撫でる。

「チャー！」

励ましてくれたラプラスに謝意を伝えようとピカチュウはラプラスに擦りつく。

が、擦りついた際電気袋がラプラスの腹に当たってしまい、

「うわっ！　先輩ってば、しびれちゃうから！　ね！　やめ……」

電流に耐えながら、ピカチュウに止めるように促す。

「ピカー……」

ピカチュウはラプラスに頭を下げるのだった。カビゴンはぐーすか寝ている。

なんやかんやあってその後、数秒間頭を垂れた。

シロガネ山を離れたレッドはピジョットに乗ってマサラタウンへと向かった。

第二の旅路の報告である。

―同日　午後5時　マサラタウン　レッド宅―

マサラタウンについたレッドは真っ先に自宅のインターホンを押した。

暫くすると少しだけ老けた感じがするレッドの母親が出てくる。

「はーい。あ、レッドじゃない！　お帰りなさい。ワタルさんから電話で話は聞いてるわ。さあ入った入った！」

こうしてレッドは久々に自宅の玄関に上がる。入ると、懐かしい檜の香りや雰囲気が漂う。そんな家の中を見てレッドは帰ってきたことを実感する。

その後、レッドは母親に会ってリビングにへと通される。暖かい緑茶を出されたので飲み、他愛もない話をする。

そのうち、ふと母親はういを含んだ表情になり、

「そうよね、もっと遠い所に旅に出るのよね……」

母は少しだけ寂しそうな目をしている。

「母さんには心配をかけて申し訳ないです」

レッドは申し訳なく思っているので、改まって敬語で話す。

「何一丁前の事言ってるの！　お母さんはもう慣れたから平気よ。それに可愛い子には旅をさせよって言うでしょ。エリカさんと一緒に仲睦まじく言ってらっしゃい！」

レッドは勝手にエリカと旅することまで話された為、心の中で、ワタルの事をチーター野郎めと毒づく。

「いいわねぇ、年頃の男女二人が仲睦まじく冒険だなんて……お母さん羨ましいなあ。お盛んな年頃だろうけど、避妊だけはしっかりしてよ！　途中で産気づいちゃったら、

旅なんか続けられないんだから」
「え、ちょ母さん」
レッドは母親の唐突な、ませている発言に狼狽した。
そんな息子などお構いなく、母は立ち上がって物置に行く。
暫くすると、いつの間に用意していた三年前にはあまり普及していなかった、最新の旅のグッズに加え、お節介にも奥から大量のゴムを持ってくる。
「はい、ランニングシューズとポケギアとスキン3グロス（１４４＊３＝４４２）。これだけじゃ足らないかも知んないけど、ま、あとは自分で何とかしなさいって！」
レッドは息子だけに洒落にならない等色々な思惑が頭の中を駆け巡ったが、流されるがままにコンドームを受け取った。母は強しである。
その後レッドは夕食を済まし、色々済ませた後に寝室にへとあがる。
―午後9時　寝室―
レッドはピカチュウのみを出して、ベッドに寝そべる。
まだ寝るには早いので、レッドは天井を見つめる。
「はあ……、あのエリカさんと旅かあ……」
彼はエリカに初めて会った後に購入した、トレーナー名鑑の中にあるエリカの写真を切り取って胸ポケットに入れていた。

レッドはその写真をポケットからだしてジッと見つめる。
「教養深く、淑やかな女性……か。本当にそんな感じだな」
彼は名鑑の中にあった文句を思い出し、反芻する。
そんな人が俺を選んで、ましてや〝貴方〟などと慕ってくれるわけか。等と思う。旅している時の事を想像すると、自然に胸が躍り、ついにやけてしまう。
しかし、教養深いという事は自らの嫌う勉強が出来るという事だ。果たしてついていけるだろうかという疑念も湧き出す。
そんなこんなで妄想の世界に浸っていると、何かがレッドの頬を叩く。
「うん？」
叩かれた方向に顔を向けると、そこには黄色い腹が見えている。
「ピカー！」
黄色い腹の正体はレッドの予測通り、やはりピカチュウだった。
ピカチュウは野球ボールを持って、体を揺すらせている。
「ああなるほど……遊んでほしいのか。分かった、んじゃキャッチボールな」
「ピカピー！」
ピカチュウはその返答に頬を緩ませ、大いに喜んでいる様子だ。
そんな可愛げのある様子にレッドもまた微笑ましくなる。

その後、ピカチュウと一時間キャッチボールなどをして遊び、眠りにつく。
翌日、恩師のオーキドにも出立を伝える為に研究所へ向かった。
―オーキドポケモン研究所―
研究所に着き、奥に向かうと、オーキドが朗らかに出迎える。
「やぁ、レッド君。お母さんから聞いたぞ、全国を旅するようじゃの」
「はい、まあ」
「どれ、君の持ってる図鑑、評価してみせよう」
そう言われるとレッドはオーキドにポケモン図鑑を手渡した。
「見つけた数　１４９、捕まえた数　１４５！　ホッホ！　ここまでよく頑張ってくれたのう。渡した甲斐があったものよ。さて、レッド君、少し待ってくれい」
そう言うとオーキドは奥の机に向かう。パソコンに移って何やら作業している。
３０分ほどしたのち、オーキドはレッドの所に戻り、目新しい図鑑を手渡す。
「あの、これは？」
レッドはその図鑑について尋ねる。
「うむ。全国を旅するようじゃから、イッシュ地方まで対応している図鑑に変えたのじゃよ。これで、どこのポケモンでも記録できぬ物はないぞ。ホッホ！」
オーキドは得意げに笑って見せた。

「ありがとうございます」
　レッドは礼を言って、頭を下げる。
　よく見るとカメラが前の図鑑よりも大きい気がした為僅かに違和感を覚えたが、せっかく用意してくれたのに水を差す気がしたので、彼は気にしない事にした。
　そうこう話していると幼馴染にして悪友のグリーンが入ってくる。
　どこか懐かしい気分にレッドが浸っていると、先手を取ったとばかりにグリーンが話しかけてくる。
「よう、レッド」
「グリーンか。久々だな」
　レッドの受け答えに、グリーンはわずかに眉をひそませて
「おっと先に言われるとはな。まあいいか」
　と答え、フッとにわかに微笑む。
「なんの用だ」
　レッドは無愛想に尋ねる。
「いやー、親友の門出を祝おうと思ってね。エリカさんと仲睦まじくやり給えよ！」
「何で知ってるんだ」
「いや、昨日ちょっと用事があったもんだからリーグ行ったらさ、あいつに会って聞かさ

れた訳さ」

　グリーンのその答えで、レッドはそういえばグリーンはトキワのジムリーダーやってたなと思い出す。出世したんだという事を思いつつ、ワタルのお喋り癖に辟易する。

　それにしても仮にも自分の上司、しかも理事長をあいつ呼ばわりとは肝が座っているなどとも思った。

「まぁ仲良くしろよな！　あのエリカさんをモノにできたというのは、１８股してる俺でも羨ましい限りだぜ」

　１８股などと憎まれ口を叩いたのでレッドはすぐに

「流石イケメンだなぁ。そろそろ包丁でぶっ刺されればいいのに」

　とこちらも憎まれ口で返す。グリーンは快活に笑い、

「ハハ、まあ頑張れや。もし途中で泣いて帰ってきたら、俺が止めを刺してやるよ」

「その前に俺が刺してやるよ」

　三年越しとはいえ、二人ともライバルとしての意識は消えないようである。

「相変わらずじゃのう二人は。ん？レッド君、ポケギア持ってるのじゃな！よし、わしの番号を登録しよう。いつでも図鑑を評価できるぞ」

「ついでに俺も」

　レッドはポケギアに二人の番号を登録した。

その後、オーキドポケモン研究所を後にする。
あと二日を故郷で過ごし、祝福されたり時にはからかわれながら祝福された。
―2月13日　マサラタウン―
レッドの家の前で主だった人が見送りをしてくれた。
「次はポケモンマスターとしてこの街に帰ってくるよ」
レッドがそう言うと、母親と博士とグリーンは順々に
「無理しないで、困ったらいつでも帰ってらっしゃい」
「己を信じた道を突き進むのじゃ、さすれば道は自ずと見えてくる」
「ま、性もバトルもバランスを考えろよな……」
こうしてレッドはクチバシティへと向かった。

―2月10日　午後5時　タマムシシティ　ポケモンジム―
一方のエリカはジムを早めに閉め、トレーナー全員を集めて引継ぎを行っていた。
「当面、ジムリーダーはナツキさんにお任せしますわ。貴女に勝った場合は私にこのポケギアで伝えて下さい、バッジを郵送しますので。挑戦者の方にはご足労をかけてしまいますがそこの所を…お願い致します」

「了解しました。必ずやエリカさんに引けを取らぬ活躍をさせて頂きます！」
ナツキは眦を決しながら、胸を張ってそう言った。
「ふふ、期待してますわ」
そう言うとエリカはナツキに向かって微笑んだ。
「私は暫く、レッドさ……夫と共に旅に出ますが。ジムの事よろしくお願いします。あと全ての植木には分かってると思いますが必ず水を、私から見て右側二段のカーネーションには毎日。左側二段のローズマリーには2日に一回ぐらい。正面の桜には2日に一回……」
こうしてジム内にある全ての植物の世話について説明した。
「……ふう。こんなものでしょうか。置手紙も用意して行くので詳しくはそちらを御覧になってください」
尚、ここまでの1時間ずっと正座である。
熟練のジムトレーナー達はきちんと耐えているが、新人の中には半分ぐらいで限界を迎えているものが出てきたりしていた。
最後に一人ひとりへメッセージを伝え、ジムの引継ぎは終わる。
―執務室―
エリカはナツキを呼び出して、ジムリーダーとして激励をしていた。

「ナツキさん、貴方は明日から一時的ですがこのタマムシジムのジムリーダーです。カントーで一番格が高いジムという噂もよく聞くので、絶対にその格を落とさないようにして下さい」

エリカの先祖は千利休であり、彼女の家はその分家の分家でありながらも様々な文人墨客を輩出していた。

しかし明治以降はそれだけでは生計が成り立たなくなってきたのでポケモンジムを経営するようになった。

戦前からジムの格式高さは他とは頭一つ抜けており、戦前まで男子禁制どころか挑戦するにも一定の身分や収入が必要だなどという風説も流れたほどである。

空襲でジムは一旦丸焼けになってしまった。しかし終戦からしばらくして復興を果たし、今は亡きエリカの祖母、カルミアはタマムシジムの中興を果たした。そして戦後70年近くたった今でもその格調高さは健在である。

そんな高貴なジムをナツキは一時的とはいえ舵取りを任せられるのだ。

「は、はい」

ナツキは頬をこわばらせながらそう答えた。先ほどの自信はどこにいったのだろうか。

「このジムはひいお祖母様の代から続いてきた、全国でも1、2を争う伝統の誉れ高いジ

ムでもあります。その伝統も、崩さないように」
「はい……」
　ナツキは段々と声調を弱めていく。自信が無くなっていくのは誰の目にも明らかである。しかし、エリカはそんなナツキの心情も汲み取ったのか
「でも、大丈夫ですよ。私が今から六年前に亡くなったお母様からこのジムを受け継いだ時も、貴女と同じような心境でしたから……」
「え？」
　ナツキがキョトンとした表情をすると、エリカはクスリと笑って、
「さっきからずーっと御顔が青いですよ？　やはり不安なのでしょう？　このジムを切り盛りできるか」
　と、ナツキの表情の原因を突き止めて見せる。
「率直に言いますとそうです……」
　ナツキは情けなさそうに率直な様子で言った。
「貴女を指名した理由、お分かりになられますか？」
「え、……分かりません……」
　ナツキは突然の質問に戸惑う。そして、少々考えた後に、そう答える。
「貴女が優秀だからですよ。私と同じタマムシ大学に居られる為か、博識でいらっしゃ

いますし、貴女の植物を愛する心は私と同じものです。それに、皆にも好かれていますし、何より邪心のないその清く明るい心を買ったのです」

「そうだったんですか……。リーダー、私のことをきちんと見てくれていたんですね」

ナツキはエリカからの評価を聞き、目から鱗の様子である。それと同時にこわばった表情が少しずつ弛緩されていく。

エリカは立って、ナツキの肩をしっかりと叩き、真剣な表情で、目を見て言う。

「長として当然のことをしたまでですわ。魚は頭から腐るという俗諺にもあるように、私がしっかりと立たなければ皆ついていきませんし。私の目に狂いは御座いません。しかし、もし不安になればいつでも電話を掛けてください。私は確かに愛する人と旅に出ますが、カントーの一ジムリーダーとしての矜持を忘れたわけでは決してありませんから。貴女ならきっとこのジムを立派に切り盛りできますよ」

最後になると、彼女は爽やかにナツキに笑いかける。

「は、はい！」

「では、このイスと机は……あなたにお譲りしましょう」

エリカはナツキから手を放す。そして、リーダーのみ座ることが許されるリーグ公認の高価な革製のイスと漆塗りの机をナツキに譲る。

「ふふ、よく似合ってますよ。では健闘を心よりお祈りしています」

「エリカさんの期待に、全身全霊で応えてみせます！」
ナツキはリーダーとしての自信を持ったのか勢いよく答える。最後の表情に一片の迷いは見受けられず、目は澄み切っていた。
そんなナツキを見て、安心したようにエリカは微笑んで執務室を後にした。
―2月11日　ヤマブキシティ　ナツメ宅　リビング―
エリカは旅立つ前に親友のナツメに別れを告げに家を訪れた。
彼女たちはリビングで世間話をした後、エリカはレッドと共に旅立つ旨を伝える。
「そう……。気を付けてね」
ナツメ当人は存外あっさりと答えた。
「あら、もう少し強情にならられるかと思いましたが」
「だって、止めたところであんたは行くでしょ。それにレッドに完璧にお熱だし」
ナツメは諦観めいた心境である。
「いえ、まだ私はレッドさんに身も心も捧げる気はありませんわ」
―2月13日　タマムシシティ―
「さて、心の整理もつきましたし、夫の待つクチバへと参りますか……」
この時のエリカは和服ではなく露出度の少ない冒険服姿である。
ボストンバッグと明るい白色のつばの広い帽子に、同じ色のコート風のなりをしてい

る。
「リザードン、クチバ港まで」
「はいよぉ！　マスターの奥方様ぁ！」
リザードンは勢いよく答える。こうしてエリカもクチバへと向かった。
―クチバ港―
「えーっと、夫は一体何処に……」
クチバの初めて見る広大な波止場にエリカは戸惑っていた。
が、そんなエリカでもすぐに分かってしまう事になる。
『エリカ・レッド様。ご夫妻門出の式』
船と同じぐらい高く、馬鹿でかく横断幕が貼ってある。
「な……何ですかあれは……」
エリカが呆然としていると、迷彩服姿の金髪男が姿を現す。
クチバジムリーダーのマチスである。マチスはエリカを見かけると、すぐに近寄って英語雑じりの片言の日本語で話しかける。
「オーッ、ミセスエリカ!!　ユーアーモストビュウティフォアー!!」
マチスはいつもの事であるが、非常に元気の良い様子である。
「マ……マチスさん?」

「ソーです、アイアムマチス。リメンバーしてくれていてミーは嬉しいよＨＡＨＡＨＡ!!」

　マチスは米国風の高笑いをする。一緒に居るツレと思われる人々もつられる様に笑う。

「はあ……」

　そんな彼を困った調子で見ていると、マチスの後ろより赤い髪の男が現れ、エリカに話しかける。

「エリカ君、３日振りだね」

「あの、ワタルさんこれはいったいどういう？　しかもなんだか何人か他に居られるのですか……」

　エリカはワタルに問いただす。

「あれはマチス君のついてきた元部下らしいね……。いやぁ、なんか僕一言も彼にはこのこと言ってないんだけど何故か漏れててね……」

　ワタルはエリカに口が軽いと思われたくないのか、早速嘘をついている。

「ミー壮行会やりたいよ！　ミセスエリカの為に！　って聞かなくてね。ま、僕も来たかったから来たのさ」

　そんな風にワタルが説明すると、レッドがつばに手をやりながら颯爽とばかりに現れ

る。

「全く、マチスさんは相変わらずだよ。まああれぐらい元気なの俺は好きだけどね」

「貴方ぁ！」

レッドを見つけるや否やひと目も憚らず抱きつく。

「ちょ、エリカ、困るよここでそういうの……」

とはいえ、そう言っているレッドの表情は満更でもなさげである。それに少々下卑た微笑を浮かべ、どこか勝ち誇った様子も見受けられる。

「ご、ゴメンなさい、三日ぶりに会ったので理性が飛んでしまいましたの……」

と、エリカは恥じらいからかすぐさまレッドより離れて、乾いた目でレッドを見つめる。

レッドは今の状況に幸せを実感するのだった。

「フゥーーーー!!　ベリーホットだね！　ＨＡＨＡＨＡ!!」

マチスはやはり、大声で話している。

ワタルは迷惑そうな表情をして

「ちょ、マチス君五月蠅いよ静かにしないか……」

ワタルが注意したがマチスは逆上する。

「ナンダヨ!!　ユーがシャットアップシロヨ！　コノチェリーボーイ」

ワタルは1秒ほど間を作った後
「それ以上下らない事言い続けるなら、理事会議にかけるぞ?」
と、少々焦り気味に答えている。
「オゥ……。ソーリーソーリ!　カマをかけたら、まさか自らホースレッグをショウしてくれるとは思わなかったネー!　ＨＡＨＡＨＡ!」
と言いながら彼はまたも高笑いをしている。謝罪の意は微塵にも見えない。それどころか今度はシニカルめいた笑いも交っているようだ。
ワタルは拳を握り締め、憎悪を明らかにせんとばかりの声を発する。
「そう思うなら、勝手に思ってればいいさ!」
と言って彼は我関せずとばかりにマントを翻して、マチスに背を向ける。
「このガイ。ズボシだからムキになってるヨ……」
彼は両手を横に遣って、やりやれやれとばかりに手を振る。
「ま……まだ言うか!」
ワタルはとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、髪の色と合わせた顔色となりマチスを睨み付ける。
が、埒が明かないと思ったのかすぐに二人の方向に顔を向ける。マチスも空気を読んだのか挑発を諦め、ワタルの後ろに控えた。まるでボディーガードである。

「そ、それはともかく、今日は祝いにきたのは勿論の事。それに加えて一つ言い忘れていた事があったから来たんだ」
「言い忘れていた事？」
レッドは復唱して尋ねる。
「うん。カントーに君が一回潰してくれたロケット団が居たように、全国の各地方にも悪の組織が居る。ホウエン地方にはマグマ団とアクア団、シンオウ地方にはギンガ団がそれにあたる。あとこれは未確認情報だけど、イッシュ地方にはプラズマ団という組織が暗躍し始めているらしい。それらには十分、気を付けなよ」
レッドはそれに対し
「はい！　もしも出くわしたら俺の力でぶっ潰してみせますよ！」
と大きく意気込んだ。本意でもあったが、エリカが隣に居るから見栄を張ったというのもある。
「おおう、大きく出たね！　でも、今の君は一人じゃないよ、エリカ君も居るんだし時には力を貸してもらいなさい」
「まあ。そんな、私に夫を支える力など」
エリカは少しばかり自信なさげに言う。相手が最強の肩書を持っているだけに仕方のない事なのだろう。

「何言ってるんだ。君はジムリーダーだろう？　それに君は弱点の多いタイプの割には善戦している方だと思うよ」
「左様でしょうか……」
「ああ左様……そうだよ！　君には居るだけで周りの人を元気させる立派な力がある。それに加え豊富な知識があるじゃないか。あれだけの知力があれば十分……いや十分すぎるくらいレッド君を支えていけるよ」
　ワタルは最初はエリカにつられながらも、ニコニコと笑いながらエリカを励ます。
「ワタルさん。そこまで私の事を見ていらしたのですね」
　エリカは微笑みながらワタルに語りかける。
　一方のワタルは先ほどまでの毅然とした態度がわずかに崩れたのか、顔を紅潮させている。
「ま、まあ伊達にカントーの頭やってるわけじゃないからね！」
　ワタルはエリカに褒められたせいか否か、大いに上機嫌になっている様子だ。
「なるほど……、ならばマチスさんも同様に褒めて見て下さります？」
「えっ？」
　ワタルは目を白黒にさせる。
「私、理事長のどこまでその観察眼が本当の物か、是非見極めてみたいのですわ！」

「う……。そうだね、マ、マチス君？」

　ワタルは面食らいながらも、言ってしまったことは仕方ないとばかりにマチスの方に体を向ける。

「ホワット？」

「マチス君、君はとても勇敢で、その軍才は」

　ワタルが途中まで言ったところで、滑稽に思ったのかマチスは高笑いをする。

「ＨＡＨＡＨＡ！　このガイ、ミセスエリカのいうトーリにしてるよ！　ココロにもナッシングな事をイってファニーだネ！」

「せ、折角褒めてるのにその言いぐさ……。無礼だとは思わないのか！」

　ワタルは遂に声を荒げてマチスを叱りつける。マチスは大いに溜息をつき

「フン。人で態度をチェンジするだなんて、ボスのする事じゃないネ！　ミーの国ではそーいうのトゥーフェイシーズ（八方美人）言いますネー！」

　マチスは散々嫌味ったらしくワタルを挑発している。

「い……言わせておけば」

　だが、ワタルは公衆の面前だからか、はたまたエリカの手前だからか定かでは無いが堪えている。

　エリカはそれを凍てつくような視線で見つめる。

「ワタルさん！」
　レッドは気付かせるかのように、ワタルに声をかける。
「クッ……。ああ、ごめんごめん」
　そう言ってワタルは二人の方向に向き直る。
「君たちはポケモンリーグの誇りだ！　これが達成されれば君たちは必ずや歴史に残る夫婦となる。だけどね、それだけでなく全国各地の風景や情景も楽しみ、味わって、色々な物を吸収し、大いに成長して還ってきてくれ。これがセキエイリーグ……否、全国のポケモンリーグの総意であり、僕の大きな願いだ」
　ワタルはレッドにしっかりと目を合わせ、語りかける。これはエリカというよりもレッドに向けての意味合いが明らかに強いように見えた。
「はい！」
「必ずや御意のままに！」
　レッドに少し遅れてエリカが言った。
「うん……。それじゃ、もうすぐ船の時間だろう。達者でね、レッド君、エリカ君！」
「はい。色々と有難うございました！」
　レッドがまず礼を言い、別れを告げる。
「理事長……」

エリカが途中まで言ったところで
「エリカ君。君と俺は代理を立てたこの時点ではもう上司と部下の関係じゃない。君の律儀な所はよく分かるけれど……その呼び方はよしてくれ」
「は、はい。では、ワタルさん、ナツキさんの事、宜しく頼みますわね。それでは、ごきげんよう」
と言って二人とも船にへと向かっていく。
「ふう……行っちゃったか……」
「ＨＡＨＡＨＡ！　やはりミーの見立て通りだネー！　ミセスエリカが居ないとチェリーは何も……」
マチスの嘲りは頂点に達し、とうとうチェリーなどというあだ名までつけている。どうみても上司に対する態度ではない。
「マチス君、確か君のジム、仕掛けの調子が悪いとか言ってたよね」
ワタルはマントを閉じながら尋ねる。
「Ｈｕｈ？」
「予算の都合つけてあげるよ。どのくらい都合つければいいか見てあげるから、ジムまで案内してくれるかい？」
ワタルは乾いた目をしながらマチスに問いかける。

「Ｏｈ！　これは願ってもない話だネー！　イイヨ！　ついてコイ！」
と言って、マチスはワタルに背を向けジムにへと向かった。

―アクア号―
アクア号に乗船すると二人は大仰なまでに歓迎を受ける。
「おお！お待ちしておりました!!、こちらへどうぞ!!」
「なんだこのレッドカーペット……」
レッドが戸惑っていると、エリカは冷静な声で、
「この絨毯は……イラン産ですわね」
と即答した。
「さ……流石」
「ふふっ、こう見えても私、飛び級で大学卒業したんですよ？　１６歳で」
エリカはさらりととんでもない事を言った。
この世界で大学を出るというのはエリート中のエリートの証だからだ。しかもふつうは２２歳で卒業するのに１６歳という事はとんでもない飛び級をしたという事の証左でもある。
それに比べてレッドはマサラ小卒と、エリカに比べたら月とすっぽんどころか内核と

宇宙空間ぐらいの差がある。レッドは肩を落とした。
「そんなにしょげないでくださいよ、貴方にはポケモンがあるではないですか」
エリカは肩を叩いて励ます。レッドはそんなエリカの健気さにまた惚れるのだった。
「にしても何でお前、ワタルさんにマチスさんを褒めろなんて……」
「あれは、ワタルさんが真に私だけでなく他の方まで見ていらっしゃったか試したのですわ」
「なるほど……それで？」
「理事長のお仕事はきちんと為されているのだなと思いましたわ」
エリカは何かを含んでいるかのような声調で言う。
「そ……、そうか」
そうこうしながら二人は客室に向かうために上に向かう。
―最上階　スイートルーム―
レッドが客室に入ってはじめに抱いた感想は、ヘタな一軒家よりも全然広いというものであった。
「ひ……広くてこんな豪華な部屋本当に宜しいのですか!?」
部屋の内装は、真っ白な壁と床、壁には原寸大のアテナイの学堂が飾られている。天蓋つきのベッド二つに、７０インチのテレビ、ミニバーなんかも備えられている。

「ワシの餞別じゃ！　二人の門出を祝っての！」
　船員と一緒に入っていた、あごひげをたくわえた船長がそう言う。
「有難うございます！　なんとお礼を申し上げれば良いやら……」
「いぇいぇ。貴方方の御噂もかねがねジョウトまで届いておりますぞ！　きっと彼の地でも大きく祝福されることでしょう」
　船長は微笑みながらそう言った。部屋の説明をした後、船長と船員は出ていく。
「まあ！　貴方、オーシャンビューですわ！　すごく美しいですわね」
　エリカは大きな窓ガラスから出る。そして彼女は眼前に広がる一望千頃とばかりに広がる群青の大海原に思わず手を組んでしまう。
　心なしか、クチバシティが光っている気がしたがレッドは気にしないことにする。
「そうだな。もうカントーもあんな遠くなっちまった……」
　レッドはエリカの隣に立ち、バルコニーの柵に腕を組んでつける。彼は離れていく故郷に些かの寂しさを感じ、遠い目で見つめる。
「そうですわね。こうして見るとカントーってあんなに大きいんですよね。定例会の際はいつもリニアを使うので忘れてしまいますわ」
「なんだか感慨深いよな……。さて、アサギには何時に着くんだ？」
　レッドはパンフレットを手に持っているエリカに尋ねた。

「運行表を見た限りですと、明日の朝5時頃ですわね」
エリカは末尾のページにあった表を眺めながらそう答える。
「かかるなおい……」
レッドは少しげんなりとしている。
そんなレッドはお構いなしにエリカはジョウトに思いを馳せる。
「はぁ……ジョウトですか。エンジュシティが本当に楽しみですわ！」
教養深い彼女にとってやはり文化都市のエンジュはお好きなようである。その憧憬のあまり、恍惚とした表情になるのも無理はない。
「あーなんかパンフ見た限りだと好きそうな所だよな」
レッドはパンフレットを見た記憶と、ゴールドの言葉を思い起こしながらそう言った。
「そうなんですよ！　私はこれまでに何回か行きましたけれど、鈴の塔の悠久に佇むあの様は……」
レッドは、エリカのスイッチを入れてしまったことに後悔し、エリカの話を聞き続けるのだった。
そんなこんなで船は進んでいくのである。
第二話　それぞれの別れ、そして出港　終

ジョウト編（２０１３．２−２０１３．５）
第三話　新天地ジョウト

―２月１４日　午前４時　アクア号スイートルーム―

旅を一緒にすることとなったエリカと船内で平穏に過ごしていたレッドだったがそんな所でドアを叩く人が現れる。

そして乗客より祝賀会を開かれ丁度２２時に終了した。

しかし、元来宴会などと言う者があまり好きではない性分のレッドにとって、それは不機嫌にさせる原因にもなった。

中途半端な時間に目覚めてしまったレッドは、今寝ると準備が忙しくなると考えたので、起きるに至った。取りあえず何もつけないでいるのは暇なので、彼はエリカを起こさない程度の音量でテレビをつける。

「マチスジムリーダーが、ジムを理事長に突然破壊されたという訴えを起こし、それに対し理事長は折檻行為であると反発しました。その件について即時理事長を抜いての理事の間で会議が行われ、たった今その処分が決定致しました。中継です」

アナウンサーの一声で、画面はポケモンリーグの記者会見場に切り替わる。

全国ポケモンリーグ副理事長兼シンオウ地区理事長　シロナというテロップの右。そこには、黄色い髪をした、黒服の少しキツそうである顔の女性が写っていた。

「ワタル理事長についてですが、損傷部分はポケモンの光線によるマチスジムリーダーの身体やそれに連なる施設の一部破壊という甚大なものです。しかし、マチスジムリーダーのこれまでの暴言や理事長に対する礼を欠いた行動の数々。これらを鑑みると理事長の行為はリーグ法14条に定められている折檻行為の範疇と認められます。その為、今回の理事長の処分は折檻行為の代償として40%の7か月減俸処分としました」

声こそ毅然そうに取り繕ってはいるが、全体的にどこか眠そうな様子である。

折檻行為とは、リーグ法に定められている目上の者が目下の者に対しある程度の懲罰を認めるというもの。無論、この行為をした後は厳正にポケモンリーグの査察部によって調査され、適当かどうか判定が下る。折檻行為と認められたのは16件中この件含めて7件のみである。

これが認められた場合は、大いに減刑がなされ、形式上の刑罰が下る。減俸の目安は損害額相当とされる。

「ご愁傷様」

レッドはそのシーンをみてぽつりと呟いたのだった。

「うーん……」

テレビの音に気づいたのかエリカがゆっくりと上体を上げる。
彼女は疲れてしまっているのか、洋服のまま眠りについていた。
「起こしちまったか……」
レッドはエリカを起こしたことに、少々申し訳なさを感じつつ言う。
「まだ眠いですけどテレビの音が聞こえたので……て、これシロナさんではありませんか」
エリカが目をこすった後、テレビを見てその人物に気づくと声の調子を上げて言う。
「うん？　知り合いか？」
知り合いを見たかとばかりの声だったので、彼はそう疑問を持つ。
「いえ。面識はありませんけど、単に知っていましたので」
彼女は首を振りつつ返答した。
「ふーん……。見たところ、結構なお偉いさんっぽいけど、どんな人なの？」
「シンオウ地方のチャンピオンですわ。ポストワタルの声も聞こえるほどのやり手らしいですよ。働く女性の鑑みたいな人です」
彼は彼女の答えに対し
、
「チャンピオンということは俺もいつか刃を交える日が来るのか…胸が熱くなる！　そ

れはそうとまだ寝てていいぞ、到着までまだ2時間あるし」
その時、インターホンが鳴り響いた。
「あら、こんな時間にどなたでしょう……。私が出ます」
エリカは応対の為髪型を整えた後、ベットから立ち上がり玄関に向かう。
彼女がドアを開けると十人ぐらいの少女が立っていた。
「どちら様でしょうか?」
尋ねると、少女たちは快活な声を以て返答した。
「私たちはジョウトのキキョウガールスカウトです! あの、レッドさんにの為に皆で作ったバレンタインデーのチョコレートです!」
と言って、少女らは水玉模様の包装紙に加え、赤を基調とした白の縦線も端にあるリボンが掛かった装飾の立方体の箱をエリカに手渡した。
彼女は顎に手を遣って、僅かばかりの間を作った後
「そういえば本日は2月14日ですわね」
エリカは思い出したかのように言った。起きたばかりであまり頭が回っていなかった様子である。
「はい!だからです」
「そう、わざわざありがとうございます」

エリカは笑みを作って、軽くお辞儀をした。
「いえいえ。とんでもないです」
リーダーと思しき先頭に立っている少女は、首を軽く横に振りながら答えた。処世術も身に着け始めているのだろうか。
「到着まであと一時間ばかりですわね。あなたがたも帰った方が宜しいのでは？」
「あ……そういえばそうですね。お気遣いありがとうございます！　エリカさんも頑張ってくださいね！　それでは」
ガールスカウト達は少し慌てた調子で帰っていった。
「バレンタインデー。ですか……」
エリカは少女たちが十二分に離れた後、何かを含んだ調子で呟やく。ドアを閉めレッドのところに向かう。
部屋に戻ると、レッドは早速彼女に尋ねる。
「誰だった？　なんか声の調子から女の子っぽかったけど……」
レッドは少しばかり当を得ない様子である。
「キキョウガールスカウトらしいですよ。バレンタインデーのチョコをレッドさんにですって」
それを聞くと、彼は目を丸くして

「そんな日だったのか！　すっかり忘れてたなぁそんな事」
　驚きもしたが、それ以上にレッド当人にとってはチョコを貰うのは小学校以来の事であったため僥倖の限りの心境である。
　その後、二人は備え付けの丸テーブルの上に箱を置き、向かい合って座った。
「どれ、早速開けてみようか……」
「左様ですわね」
　という訳で、エリカは率先してリボンを解き、包み紙を丁寧に広げてみせた。
　その後、彼女はリボンを触りながら
「ベルベットのリボンとは……。年端もいかない子どもからの贈り物にしては、中々に上質なものを使いますわね」
　と静かに微笑んだ。
「は？」
　レッドにとっては聞き覚えのない単語なので思わず聞き返す。
「織物の一種です。古来より肌触りの良い物として重宝されてきたという歴史を持っておりますわ」
　エリカはリボンをレッドに手渡しながら手短に説明した。
「わ……。確かに触っていると心地良くなりそう」

レッドは滑らかなその触感を楽しんでいる様子である。
「その感触から、滑らかに事が進む事の例えにも使われたりするのですが。ま、余計な話はともかく……」
エリカはレッドに目配せする。
「ん？　ああ、開けなきゃね」
という訳でレッドは箱の上ぶたに手を遣って、開いた。
中には手作りと思しきチョコレートが個包装で１０個程入っている。ふちがいびつであったり、上に書いてある文字が歪んであったりと傍目からも手作りである事を物語っている。
「まあ、何とも子どもらしく、可愛らしい出来ですわね」
エリカはそう言いながら、母親の如き笑みをうかべた。
「そうだな。さて、味はどうかな……」
レッドは一つの包装を手に取って、包みを解いて食す。
そうして舌鼓を打っていると、レッドはチョコには一切手をつけないエリカに気付く。
不思議に思ったレッドは
「あれ、エリカ食べないの？」

と尋ねた。それに対しエリカは少しばつの悪そうに
「私、洋菓子はあまり……」
「なるほど、らしいな」
そう答えながらレッドは更に食べ進める。
エリカは箱の中に入っていた一つの色紙に気づく。
「あら、寄せ書きみたいなものも入ってますよ」
「ほう」
レッドは関心を示し、寄せ書きの一つ一つを黙読した。
そうしていると、度々散見する『ハヤト』の名に気付く。
「ハヤトって誰？」
「キキョウシティのジムリーダーです。ジョウトでは高名な鳥使いで、伝書鳩コンテストであの人のピジョットが一位だった事もあるんですよ！　1番目のジムリーダーで初心者向けのリーダーとも言えますわ。飛行タイプに誇りを持っている心身深い人です」
「ふーん……キキョウはタウンマップで見る限り遠そうな所だから行くのはだいぶ先になりそうだね」
レッドは軽く関心を示しながら答えた。

「そうですね。順当に行こうとすれば最初はやはりアザキシティの、ミカンさんが最初の御相手になるかと」
「ワタルの言っていたあの人か……どんな人なの？」
　レッドは珍しい鋼使いという事に興味を持っていた為、改めて尋ねる。
「全国最年少でジムリーダーになった人です。12歳という私より二歳若い年齢でジムリーダーとなり、最初は岩タイプでしたが今は鋼タイプというタイプに変えていますわね。私ともそれなりに親交がありますよ。御年の割りには礼儀正しく良い子です」
「ほうよく知ってるねぇ」
　彼は先ほどからの彼女の博識ぶりに感心しきっている。
「ジョウトのジムリーダーの方々とは定例会でよく会いますからね。しかも合同研修も良くありますから互いのジムリーダーがよくお互いを知ってると思いますわよ」
「エリカなんかは有名そうだな。その才色兼備なところ、全国のリーダーの目標の一つになってもおかしくなさそう」
「まあ貴方ったら……。褒めても何も出ませんわよ」
　エリカは照れて赤くなった頬を手で押さえながら言った。
「いやー、冗談抜きでそう思う」
　実際、この感想は心の底からのものである。

「何故でしょう、他の方から同じような事を言われても心がそれ程高揚しないのに、どうして貴方に言われると……」

エリカは言葉に詰らせた、というより、言うのを躊躇している様子だ。

「おいおい、その先はどうしたんだ?」

レッドは分かっているにも関わらずいたずら半分にそう言う。

「……、貴方! あっ、そんな事よりも、もうジョウトが見えていますわよ!」

エリカはレッドの言葉を無かった事にしようとしたのか、話を逸らす。

なるほど、見計らったかのように窓の先には紀伊半島の西側が見えている。アサギ港まではもうそこまで距離は無い。

レッドはずっこけたが、同調した。

「あれが俺とエリカの新天地だ! 共に頑張ろう」

「はい、貴方!」

エリカはしっかりと明瞭な声で答えた。

「……」

あまりにも健康的な声だったので、レッドの心には邪心が芽生えだす。

もう、事を起こすには頃合いではないのかと彼は思い始めている。

「貴方? どうされました?」

黙してしまったレッドに違和感を覚えたのか、エリカは心配そうに尋ねる。
レッドは少々黙したのちに、いやまだ早いなと思い直して
「いや、なんでもな……」
と答えようとした時、野太い声が響く。
「レッドさーん！あと３０分ほどでアサギにつきますのでそろそろ御支度を！」
ノックをしたのち、船乗りと思われる人物が大声でそう言う。親切な個別アナウンスである。
「了解です！」
「準備を進めなくては。貴方、まずはベッドを直しましょう」
という訳で、レッドとエリカは出立の支度を進めるのであった。
―午前４時５０分―
準備を済ませると、丁度船内にアナウンスが流れる。
『まもなく、アクア号はアサギシティへ到着致します。お忘れ物がございませんようご注意ください……』
「いよいよジョウトか」
「胸が躍りますわね！　着いたら早速ポケモンジムですか？」
「いや、まずは散策かな……」

等と話しながら残りの１０分をやり過ごす。

―アサギシティ

カントーのクチバシティとは押しも押されぬ、こちらはジョウトの玄関口である。アサギ港は平清盛が原型となる大輪田泊を造ってから発展を続け、今や全国の港の中でも屈指の規模を誇る。

名所にして１５０ｍの高さを誇るアザキの灯台はデンリュウが明かりを灯しており、ジムリーダーのミカンが様子を見に行ったりトレーナー達の鍛錬の場となっている。

―午前５時　アサギ港　波止場―

部屋から出て、船からも降りると、いよいよレッドとエリカはジョウトの地を踏み締めた。

「ここが、ジョウトか」

「結構発展してますわね。改めて降り立ってみると何だかカントーとは違う空気ですわ」

「ま、とにかく先に行ってみよう」

二人は桟橋を過ぎ、ターミナルにへと入る。

―アサギ港　総合ターミナル―

ターミナルに入ると、ゴールドと若い割りに髪の量が些少の白衣の男がいた。

「あ、レッドさんにエリカさん！」
　二人が見えるのを心待ちにしていたのか、ゴールドは嬉しそうな声をあげて二人の下へ近づく。
「あぁ、あれが噂の……」
　ゴールドに連れられるように、ウツギも続いた。
「もしかしてウツギ博士ですか!?」
　エリカはその姿を見つけると、あたかも知り合いであるかのように驚きの声をあげた。
「そうだよ。知ってくれているみたいで嬉しいね」
　ウツギは青年らしく爽やかに笑って見せた。
「おい、エリカ誰だよ？」
「今では常識となっているポケモンの卵を発見して、その理論を完成させたジョウト第一の博士ですよ」
「へぇ」
　レッドはそれとなく納得した表情を浮かべる。
「ハハハ、君たちの地方のオーキド博士にはとても敵わないよ。で、そのオーキド博士から伝言があって来たんだけど……」

「え、ポケモンを取り上げる!?」

全てを聞き終えた後、レッドは目を丸くして答える。

「いや、なんだか変な話しでさ。こういう話は普通リーグ理事長のワタルさんとかから来るはずなんだけど、何故かオーキド博士から来ててね。えーと読むよ」

ウツギはオーキドの書簡を読み上げる。

―レッド君、エリカ女史、ゴールド君。

君たちはポケモンマスターを目指す以上色々な地方のポケモンを使ってもらいたい。その為リーグ理事長のワタル君に話をしてみた所、新たな要件に地方ごとにポケモンを変えている事という条件がつくことになった。

じゃから申し訳ないが今持っている手持ちは至急、全てボックスに預けて頂きたい。尚、マサキ君にも話は通しておるので勝手にボックスからポケモンを取ろうとすればマスター失格となるから気をつけるように……―

「君たち二人は僕の研究所でポケモンを預け、それと引き換えに最初の三匹を渡して、ゴールド君はホウエンに行くとの事だからオダマキ博士から同様の事をしてもらいたい訳なんだ」

ウツギが話したのち、レッドは大いに憤慨しながら

「ふざけないでくださいよ！　ポケモンマスターになるには、大事なポケモンを手放せなんてそんな馬鹿げた話が……」
「そんな……、博士のくれたバクフーンと別れろだなんて、余りにも酷すぎます……」
　激情に駆られたレッドや悲哀な表情をしたゴールドとは対照的に、ウツギは冷静に返した。
「僕だっておかしいと思うさ。でも、君たちはポケモンマスターになるという決断をした以上、これに従うほか……」
「一つ宜しいですか？」
　沈黙を守っていたエリカが口を開く。
「何だい？」
　ウツギはエリカの方を向く。
「博士は今、このような話はリーグからくる……と仰せになられていました。そしてこの手紙はオーキド博士より来られたもの。本当にリーグがこれに介在してると言い切れるのですか？」
　それに対し、ウツギはすぐさま答える。
「君の疑問は尤も。でも残念ながら僕はリーグ関係者でもなんでもないからね。理事長のワタルさんに直接聞く術が無いんだよ」

「ううん……。私とてワタルさんの番号など存じ上げませんわ。真偽を図りかねますわね」

場は膠着状態に陥った。

数分ほどの沈黙ののち、ウツギが話し始める。

「こうしていても仕方がない。取り敢えず今は僕の言うとおりに。昼にでも僕がオーキド博士に掛け合って、リーグに直接聞いてみる。君たちには後々ちゃんと連絡するから」

「オーキド博士の番号なら俺知ってますよ」

レッドはウツギに提言する。

「レッド君じゃダメだ」

「どうしてです?」

レッドは疑問を抱きながら尋ねる。

「多分だけど君の知っている番号は研究所の番号だろ? 博士は恐らく寝ているから今かけても応じないよ。それに手紙には至急って書いてあるから、レッド君とエリカさんの分は博士が起きてくるまでには済ませないと僕が面倒な事になるからね……。だから頼む。虫の良い頼みだという事は十分に分かっているけれど……」

博士は深々と三人の前で頭を下げた。

暫くの時が経ったのち、エリカが
「止むを得ませんわ」
「おい！」
レッドがエリカに威嚇するかのように言った。
「私たちより年上の方が頭を下げるなど余程の事です。ここは従っておくが利口というものです……」
「大人の事情で俺たちのポケモンを渡せっていうのかよ！」
レッドはエリカに猛然と反発する。しかし、エリカは微塵も怖気づく事無く
「とにかく……。今は博士の言うがままにすべきです」
エリカは何かを案じているかのような口調で言う。
それを感じ取ったレッドは
「……、しょうがないな。博士、言うとおりにしましょう」
と博士の提案に承諾する事にした。
「レッドさんが言うのなら……。博士、僕も同じです」
「本当かい！　恩にきるよ！　じゃあ君たち二人は僕と一緒にワカバへ、ゴールド君はシェルフー号でホウエンに行ってきてね」
「はい！　ウツギ博士、今まで本当に有難うございました！」

ゴールドはウツギに深々と頭を下げる。
「うん！　頑張って一旗上げてきてね」
その受け答えは師弟関係を思わせるものがある。
続いてゴールドはレッドに別れを告げる。
「レッドさん、また戦いましょう！」
「フン、精一杯精進するんだね」
レッドは帽子のつばに手を遣りながら、無愛想に返答する。
「ゴールドさんの御武運を心よりお祈りしておりますわ！」
続いてエリカが晴れやかに微笑みながら、ゴールドを激励した。
「エリカさん……！　有難うございます。それじゃあ！」
ゴールドは明らかに嬉しそうに船へと向かっていった。
「ふぅ……、さてと、それじゃ、僕のヨルノズクで研究所まで送るよ」
博士は一息つきながら次の段階へ進もうとした。
「へぇ……、博士でもポケモン使う事ってあるんですね」
レッドは少々意外に思いながら話す。
「うん？普通にあると思うよ。僕はもともとポケモントレーナーで、４つ目まで集めたら研究の方に興味持ってね。でね、このヨルノズクは僕の相棒だよ。トレーナーだった

頃からずっと一緒にいるしね」
　ウツギは嬉しそうにしながら語った。
「てことは、オーキド博士もポケモン使うんでしょうかね」
　レッドは次に純粋な疑問をぶつけた。
「あの人はかつては結構有名なトレーナーで元四天王のキクコさんとも親交深いらしいよ。ま、人それぞれだよポケモン持ってて僕みたいに研究者になる人もいれば、君やエリカさんみたいに強くて素晴らしいトレーナーになることだってある」
「なるほど。様々な経路をたどっている訳ですわねぇ」
　エリカは素直に感心しているようだ。
「さて昔話はこれぐらいにして、まずは外でようか」
　―アサギシティ　アサギ港前―
　外に出るとたまたま早朝の散歩でもしていたのか、ミカンに居合わせる。
　浅葱色のワンピースを着ており、中央の赤いリボンがなんとも特徴的である。
「！　エリカさん！　あと、レッドさんにウツギ博士……？」
　あまり考えられない組み合わせに当惑気味のミカンである。
「ミカンさんじゃない！　ご無沙汰してますわね」
　エリカは友人との再開に笑みをこぼした。

「この人がジムリーダーのミカンって人？」
「そうですよ。私のお友達です」
エリカは普段より少しだけ声調を上げている。感情が高揚しているようだ。
「レッドさん、初めまして。私がこの街のジムリーダーをしています。あの、挑戦……ですか？」
お辞儀をした後、挑戦の有無を尋ねてくる。
「いや、ミカンさん。（かくかくしかじか）こういうことでね。今は挑めないんだ」
ウツギはミカンに簡潔に説明した。
聞いた後、ミカンは肩を落としながら
「そうですか……。せっかくいの一番で挑もうと思ったのに残念です。少々腑に落ちませんけどね」
と元気なさげな声で言う。
「この街にはいずれよるからその時にはお手合わせ願いますね」
「はい！　勿論です」
レッドの受け答えにミカンは少し元気を取り戻したようだ。
「さて、行こうか」
ウツギはあまり時間を取られたくないのか、二人を急かす。

「せっかく久々に会えたのにすぐに別れるなんて…ミカンちゃん、また会いましょう」
エリカはミカンとの別れを惜しみ、二人はウツギのヨルノズクに乗っていった。
―ワカバタウン―
山紫水明で、萌芽を予感させる町である。
風力発電所があったりなかなかにエコな町という側面がある。
ゴールドやコトネ、ウツギの家、そしてウツギ研究所がある。
そして東の海を行くと２８番道路へと出て、カントーへの道しるべがあり、かつては港まであったという。
「戻れ！ズック！」
何とも安易なネーミングだとレッドは思った。
「さてと、ここがワカバタウンだよ。何もないとこだけど空気がおいしいでしょ？」
エリカはカリカリと自前のメモ帳に周囲の木々のスケッチを取って自分の世界に浸る。
レッドが覗き見てみると、なんとも画家的な上手さであった。
覗き見たすぐ後に、レッドは溜息をつきながら
「エリカ、お前は変わらないな……」
「ハハハ、きっとこの子はウバメの森あたりではもっと没頭してるだろうね。あそこは

草木が沢山あるし……」

ウツギがそんな事を言っていると、エリカは我に返って

「はい？　ああごめんなさい！木とか花を見るとどうしても観察したくなる性分な故……」

「いやいや、素晴らしいよ。流石あのタマムシ大の首席だね。リーダーじゃなかったらヘッドハンティングしたいくらい……」

博士はさらりととんでもない事を言った。

「タマムシ大の首席!?」

タマムシ大とは現実世界でいう所の東京大学の立ち位置にあたる。

内国における主に理数系の学問の頂点で、出るも入るも至難の業であり、入っただけでもエリート確実である。

エリカはその生物学部植物科の首席にして最年少卒業者。

「あの……夫が完全に焦点を失ってるんですけど……」

レッドはエリカの輝かし過ぎる功績を聞き、目をくらませている様子だ。

エリカはそれに対し、少々レッドの事を気にかけながらウツギに言っている。

「まあ。君の持っている名誉はそれだけの価値があるって事だね」

ウツギは苦笑いしながら言う。仕方がないと思ったのか、博士はレッドのフォローに

かかる。
「いや。レッド君、君の持つ称号だって凄いさ。何しろカント―の頂点だからね！」
「そうですよ！　私がどんなに本気を出しても貴方には勝てませんから！」
　レッドは完全に負い目を感じてふさぎ込んでしまった。
「それでも。タマムシ大のそれに比べたら……だけど」
「博士！　励ましたいのか貶したいのかハッキリしてください！」
　エリカは鬼気迫る表情でウツギを牽制する。そして、ウツギの言った何気ない一言がレッドの傷を深めた。
　レッドを励ますのには5分ほどかかり、ようやく機嫌を直す。
「そうだよな！俺はカントー最強のトレーナーなんだ！」
　レッドは半ば自己暗示気味にそう思う事にした。
「そ、そうだね！」
「機嫌も直されたようですし、研究所に入りませんこと？」
　エリカは胸を撫で下ろしながらウツギに提案する。
「そうだね。そろそろ日も上がってきたし」
　という訳で二人は研究所の中に入った。
　―ウツギポケモン研究所―

「結構広いんですね」
「まあ、蔵書も沢山あるしね。人によってはウツギ図書館と名を変えるべきだ！　なんて冗談も聞いたりするし」
　ウツギは笑いながら二人を連れて先に進んでいる。
「まあ……。あら、ＴＥＭ（透過型電子顕微鏡）ですわ！　斯様な貴重な物一体どのようにして……」
　エリカは思わず近くにまで駆け寄り、半ば感動しながらＴＥＭを見る。操作している研究員は彼女の咄嗟の行動に少しだけ驚いた様子。
「ああ、あれは僕が独立した時にオーキド博士から餞別だと言われて頂いた物でね。確か２７００万円とか言ってたような……」
　そんなこんなで二人は話し込んでいる。

　一方、レッドは汗牛充棟とばかりに犇めく書物の後ろに何かの端があるのを目敏く見つける。
　レッドは訝しげに思い、ウツギに見つからないよう慎重にその端をとってみる。
　その端の正体は本であった。裏になっていた為、更に表紙を見てみるとなんとも扇情的なサーナイトが描かれている。

博士も男なんだとレッドが内心共鳴を覚えていると、横から白衣を着た助手と思しき男がやってきた。
「レッドさん。それは博士の愛本ですよ。サーナイトというポケモンを」
助手は吹聴屋な性格なのか、それとも博士に恨みでも持っているのかは定かでないが、レッドに話しかけて博士の秘密を暴露しようとした。
が、ウツギは鋭い。異変に気がついたのか、ＴＥＭの元を離れいつの間にかレッドの背後に立ち、
「柏木君？何してるのかなぁ？」
と、言外におぞましい雰囲気を漂わし、薄ら寒くなる程の優しい声で言う。
「！、さーてポッポの進化の際におけるデオキシリボ核酸の情報の変化はーっと……」
柏木は話題を逸らそうとする。
雰囲気からしていつもはこれでなんとかなっているようだ。しかし、運が悪い事に今回はエリカがいて、
「あら、それはＣ塩基の情報が……で、……でと言う風に変化するんですよね」
「何この子怖い。完璧すぎる」
柏木はエリカの簡潔かつ要領を得た説明に戦慄（おのの）いていた。
「知らないの？この子タマムシ大の主席だよ」

ウツギはさらっとざまあみろとばかりに嘲りの感情を満杯にしながら、柏木に告げる。

「すんませんしたーっ!!」

柏木は博士とエリカに対し深々と平謝りした。

「さて、お馬鹿な助手は放っておいて奥行こうか……っておい！　そこの赤帽野郎！　読んでんじゃねぇぞ!!　つーか、汚い手で触んじゃねえ！」

ウツギは激怒した。それも、普段の温厚な表情とは正反対で、ロケット団でも裸足で逃げ出すぐらいの恐ろしい形相である。

「すすすすすす、すみませんでした」

レッドが本棚に戻すと、膨らんだ風船が萎むかのように、ウツギは元の温和な表情に戻る。

「じゃ行こうか、レッド君」

あまりの感情の起伏に、レッドはウツギは二重人格ではないかと密かに疑いをかけるのであった。

研究所の奥にたどり着くと、ウツギは嬉しそうな表情をしながら、

「さーて、このセリフを言うのもゴールド君以来だなー。そこに三個のモンスターボールがあるだろう？　好きなの持っておいで！」

二人はテーブルに向かう。
「マシンの右からワニノコ、ヒノアラシ、チコリータというポケモンだよ！」
「やっぱり多少苦戦すると分かっていても草への執着は捨てられないですわね。チコリータで！」
「俺は名前がレッドだし……、ここは炎でヒノアラシにしよう！」
レッドは単純明快な理由で決めるに至った。
「決まったね。それじゃあポケモンじいさんの所に……って違う違う気を付けて行ってらっしゃい！」
ウツギはついほかの事を言ったがすぐさま修正し、二人の旅の安全を願う。
「……！　あの、ポケモンは預けなくて……」
エリカは思い出したかのように、元気なさげに尋ねる。
「いい」
ウツギは静かにそう言った。
「はい？」
エリカは目を点にして、当惑気味の表情になる。
「責任は全部僕が取る。君たちは僕のあげたポケモンも使って、この地方で活躍するといいさ」

「し……しかし」

レッドは後ろめたさを感じながら言った。

「いいって言ってるんだ。早く行きなよ」

そう冷たく突き放すようにいい、我関せずとなったばかりにウツギは後ろを向く。

「は、はい！　有難うございます……!!」

レッドは大いにウツギへの感謝の意を示しつつ、ウツギの豹変にも疑問を抱きながら研究所を後にした。

そして二人は最初のジムがあるキキョウシティにへとその歩みを進めるのだ。

―第三話　新天地ジョウト　終―

第四話　氷鳥と黒白の衣

―２月１４日　午前１０時　２９番道路―

最初のポケモンを受け取った二人は、いよいよ２９番道路で全国の旅の第一歩を踏み出す。

この日は北風が吹き、真冬らしい気候と言えど、空は青く澄んでいた。

「いよいよ、始まりか！」

レッドが晴れやかに言うと、エリカはレッドの目をしっかりと見つめて

「私はこれからどのような事があろうと貴方と一蓮托生の覚悟で、生死をともに致しますわ！」

と、半ば大げさな事を言ってのけた。これにはレッドも若干たじろいで

「縁起でもないこと言うなよ……でもそれは大事なことだよな。それにしても、さっき気になったんだけどさ……」

「ウツギ博士の事でしょうか？」

「いや。違う、お前だよ。どうしてアサギの時、ウツギ博士をかばうような事したんだ？」

レッドにとって、自分よりも長くポケモンと一緒に居る人がポケモンと離れる事に賛成しなかったことが不思議だったのだ。

「ああ。それについてはですね、一種の賭けのようなものですわ」

「賭け？」

その単語に引っ掛かったのでレッドは注意しながら訊く。

「はい。ポケモンリーグから来るはずの手紙がオーキド博士から来ている……。手紙もあのように尤もらしく言い繕ってはいますが、ポケモンマスターは条件から鑑みれば強さを示す証。要は戦術、戦略が物を言う訳ですから、長年の相棒と別れる理由には成り得ませんわね」

エリカは次々と一連の事象に対する私見を述べる。激情に駆られていたレッドには気付かなかったことなので、彼はまたも感心していた。

「ですから、この一件はオーキド博士の狂言ではないか……という結論に至り、狂言ならば戻ってくる公算が高い為、敢えて乗った訳ですが……思わぬ肩すかしを喰らいましたわね」

「おおなんと大胆な……。にしてもオーキド博士が嘘を？　一体何の為にさ、俺たちのポケモンを用いて何かしようってのか？」

レッドからすればオーキド博士はポケモンをくれた恩師である。

「さあそれは分かりかねますが……。何はともあれ、こうしてポケモンを渡すことなく進める訳ですからウツギ博士には感謝しなければなりませんね」
「そうだな。にしても良い空だ！　思えば神様が味方してくれたのかもな」
　彼は大きく気持ち良さげに伸びをしながら言った。
「天佑と言われますか……。そうですわね。今回はそう思う事に致しましょう」
　エリカは餅でも飲み込むかのように苦々しい顔をしながらも、そう言って納得するに至った様子である。
「ところで、野生のポケモンが出てきたらどうする？」
「どうするとは？　まさか修行のし過ぎで普段の戦い方をお忘れになられたのですか？」
　彼女は警戒しているのか恐る恐るレッドに言う。その様はなんとも愛おしい。
「いや、やり方聞いてるんじゃなくてさ、普通に使ってるやつ出して済ませるか、博士から貰ったポケモンを使うかって話」
「ああ……左様でございましたか。折角頂いたのですし、ここは貴方の言われる通りポケモンを鍛える事に致しません？」
「そうだな。少し時間はかかるけどそっちの方が恩に報いてる気がする……」
　等といいながら歩いていると、早速オタチが飛び出してきた。オタチはしっぽの上に

乗り、警戒態勢になっている。
「か……可愛い。って違う違う……。貴方、早速ですわよ。一回目ですし、貴方にお譲りします」
エリカは少し身を引きながら言う。帽子のつばに手を遣り、目深にかぶり直して彼女はレッドに視線を向ける。彼女はつばが広くリボンがついた白帽子を被っている。
「おう、悪いな。じゃ、早速……、行け！　ヒノアラシ！」
こうして、野生のポケモンと戦いながら二人は道を進んでいく。

―午前11時　ワカバタウン　ウツギポケモン研究所―
所戻って、ウツギはそろそろ良いだろうと思ったのかオーキドの方に連絡する。
取次を経た後、オーキドが出る。
「おお、ウツギ君か。まだポケモンが預けられてないそうじゃが、どういう事かの？」
オーキドはどこか疑った口調で話す。不機嫌な様子であることは声から聞き取れた。
「教授。それはこちらのセリフです。ポケモンリーグの許可、本当にとられたのですか？」
ウツギとオーキドは大学から学生と教授の付き合いであった。
その為、ウツギはオーキドの事を教授と呼び続けているのだ。尚、ウツギは現在エン

ジュ大学で教授も務めている。
「おかしなことを言うのう。手紙にきちと書いたではないか」
　オーキドはすっとぼけた様な口調で言う。
「教授が理事長であるならばともかく、手紙というだけでは信用に欠けます」
「君がいちいちそんな事を気にするでない。渡さぬまま旅立たせたと言うのならすぐさま走って呼び戻さぬか」
　オーキドの老いし声には段々と端々に威圧の気が交り始める。ウツギは数秒ほど黙した後
「明確な理由も無くトレーナーよりポケモンを取り上げる事など、私には到底出来かねます。一体何の目的があってこのような事をするのです?」
「言うたではないか。ポケモンマスターたるもの、様々なポケモンを使いこなしてほしいと願うのは当然の事じゃろう?」
「それは博士のお考えです。そもそも、ポケモンマスターを認定するのはポケモンリーグである以上、我々と友好関係にあるとはいえ蚊帳の外に居る我々が口出しをして良いのですか?」
「じゃから、そのポケモンリーグの許可を得たと……」
「ならば博士、私にホットラインを用いて理事長に問い合わさせて下さい！　それで納

得のいく返答を頂ければ二人を呼び戻し、オダマキ博士にも連絡して元の指示通りにするよう要請します」

オーキドやウツギなどの研究者が所属するポケモン研究会はポケモンリーグとの関係が良い。

その会長であるオーキドは理事長との直通回線であるホットラインを持っているのだ。そしてウツギの鬼気迫った懇願を聞いたオーキドは、数秒ほど黙った後、

「ホッホッホ……。脱兎のウツギなどと嘲弄されるほどいざという時臆病じゃった君が、そこまで言うようになるとはのう……。博士になって大分肝が据わるようになったかの」

「御世辞は結構ですから連絡を……」

「ならぬ。このホットラインは些細な事に使ってはならぬ決まりじゃ。大事な取り決めならばともかく、重役でもない若輩の君にこのような用事にこれを使わせるわけにはいかん」

「リーグで取り決められた事を尋ねるのを些細と申されるのですか?」

ウツギの追及に対し、博士は平然とした声で答える。

「ならば訊こう。ウツギ君は既に決められたことを何度でも決めた者に尋ねるのかね?」

「納得できるまでは聞きますよ」
　その返答にオーキドは陥穽にかかったとばかりに返す。
「鈍いのう。時はそこまで待ってはくれぬ。世界は君の母親でも教師にも非ず！　博士であると自認するのなら、最後は自分の頭で考え行動するものじゃ」
「っ……、話を逸らさないで」
　論点がずらされていることを悟ったウツギは反論を試みるが全て言い終わる前に
「まあウツギ君がそこまで言うのなら、無理にとは言わん。じゃあの」
　と、糸を切るかのようにオーキドは電話を切った。
「教授！　……、切れてるし。ハァ、もう訳が分からん」
　ウツギは脱力したかのように椅子に座り、意味もなく座ったまま一回転した後、研究所の天井を見つめこの後の事を案じるのであった。

――――――

　あれから二人は野生のポケモンと戦いながら道路を進み、野宿と移動を繰り返して17日にヨシノシティに着く。

―2月17日　ヨシノシティ　ポケモンセンター　宿泊所　13号室―

ポケモンセンターの宿泊施設はいわばトレーナーの羽休めの場所である。
二人の入った部屋は、一番奥に二つのベッド。その前には木の机に椅子が二つ、化粧台にテレビ、ユニットバスと必要最低限なものが揃ったところであった。
「あーやっと着いたか」
レッドは着くや否やベッドに倒れこむ。
備え付けの時計は18時を回っている。冬であるせいか窓の外は夜の帳を降ろしており、街の明かりが見えていた。
「貴方。だらしがありませんわよ……とはいっても私も疲れましたわ。何しろここまで歩くことなど無かったものですから」
と言いながら、エリカは向かいのベッドに腰掛ける。
「お嬢様だなあ……。もしかして今まで全部車とかで来た?」
レッドは興味本位で尋ねる。
「いえ、元々ジムに飾るお花を探しに行ったりはしていたので、そこまで普段運動をしていない訳ではありませんわ。しかし、流石に街と街を跨ぐほどには……」
「お花を探しにって……花屋とか行ってたの?」
「勿論それもありますが、時々は道路に出て摘みに行ったこともあります。しかしそのような場合でも全て徒歩という訳では無いので」

「空を飛んだりもしたの？」
「私のみならず、ジムリーダーは移動用に一匹は飛行ポケモンを持っておりますわ。それでもやはり多くの方は専門外なので忘れて行ってしまう方も少なからずおりますが」
「シロガネに来た時のお前みたいにか」
レッドは冗談めいた笑みを作りながら言う。
「あ、あれは千慮の一失というものですわ！　それはともかく……」
故事に疎い彼は急によく分からない返しをされた為、混乱している。それで事態を切り抜けたエリカは
「御夕食、お作りしますわね」
と言って彼女は先ほど仕入れてきた大根や長ネギ等の食材を持って台所に向かう。
ポケモンセンターは諸々の衛生上の観点からか一切食事のサービスが無い代わりに各部屋に食器や調理器具を備え付けているのだ。
料理の分担は野宿の時はレッド、それ以外の時はエリカという風に２９番道路の時に決めている。
「お、おう。頼んだ……。さてと、俺はポケモンの世話でも……」
と言った瞬間、備え付けの電話が鳴り響く。
レッドがすぐに応じると、ポケモンリーグより電話が来ているというので、そこに繋

げた。
　繋げると、聞き覚えのある男の声がする。
「あああもしもし？　レッド君かい？」
「ワタルさん！　どうもどうも、４日ぶり……でしょうか」
　レッドは少しばかり緊張しながら尋ねる。何しろ相手はポケモンリーグのトップである。
「ハハハ。そんなに畏まった声で言わなくてもいいさ。それで、ミカン君からリーグに上申があったんだけど……、ポケモンを取り上げると言われたんだって？」
「はい。そうですけど……」
「安心してくれ。僕はそんな命令追加してないから。オーキド博士から似たような事を言われはしたけど、認めてはいないからね」
「やっぱりですか……良かったあ」
　レッドは確証ある証言を聞けて、胸を撫で下ろしている。
「もしかして、ポケモン渡しちゃいないだろうね？」
　ワタルは少しばかり焦り気味に尋ねている。
「いいえ。ウツギ博士がやっぱりいいとか言われたんで……」
「そうかそうか、それは良かった。ところで今どこに居るの？」

　ワタルは声を軽い調子に変えている。どうやら渡してない事が分かって一安心したようだ。
「今ですか？　ヨシノシティですよ」
「ヨシノか。あそこは春行くと桜が綺麗なんだけどね。それはともかく、次のジムはハヤト君か……。君なら難なく倒せそうだけど、まあ頑張ってよ」
「何か知っている事ありますかね」
「ここだけの話、彼は父親からリーダーの職を譲ってもらったばかりなんだ。まだ確か9か月とかだったかな」
「新人なんですか……。の割にはエリカは知っていましたけど」
　レッドは純粋な疑問をぶつける。
「譲る前からお供として何度か定例会には顔を出していたからね。ところで、彼、相当にエリカ君の事気に入ってるらしいから、あまり仲の良い所みせつけると癇癪起こすかもよ」
「う……肝に銘じます。ところでさっき難なくって言ってましたよね？　ハヤトさんの強さはどんなものなんです」
　ワタルは数秒ほど間を作り、数回咳払いをした後
「と、鳥使いとしては相当だと思うよ。彼の芸は何度か見させてもらったけど本当に鮮

やかだったし」
「あの、ポケモンの強さを聞いてるんですが」
「おっと、もう帰る時間だ！　じゃあねレッド君！　エリカ君にも宜しく。あ、あとポケギアの番号教えとくね。エリカ君にも一応回しておいて」
「は……はい」
　レッドはハヤトの強さに疑問符を抱きながらポケギアの番号を書き取り、通信が切れた後に受話器を置く。
「貴方、どちらからでした？」
　割烹着を着たエリカが鍋に食材を入れながら台所より尋ねる。
「ワタルさんからだよ。どうやらあの手紙は嘘っぱちだったようだ」
「私の見立て通りでしたわね」
「うん。ところでさ……エリカ」
「はい？」
　レッドは半ば意を決しながら尋ねる。
「ハヤトさんって、強いの？」
「私、苦手なタイプの方と戦ったことはあまり無いもので……」
「そ、そうか……」

レッドは顔を曇らせる。
「ただ、ここ最近ハヤトさんのご様子がおかしいとのお話は耳にしますわね。詳しくは存じ上げませんが」
「なんじゃそら……」
その後、レッドはポケモンの世話をし、やっているうちに料理が出来上がる。
―午後7時ごろ―
エリカの作った夕食はモツ鍋におひたし、きんぴらごぼう等々となんとも彼女らしい野菜中心の食卓になった。
食卓にはレッドとエリカの他はポケモンたちが居る。
「お……おお」
しかし、レッドは息を呑んでいる。
なにしろ、料理が尋常でない程に美味しそうなのだ。例えばおひたしはほうれん草の深緑がとても色濃く出ており、上の鰹節とよく合っている。
隣に居るピカチュウ等の手持ち達は早くも涎を垂らしていた。
「鰹節は本来ならば市販の物は使いたく無かったのですが、生憎削り器が無かったもので……。て、貴方、聞いておられますか?」
「お……、お前、どこでこんな腕を……」

「幼少のころに英才教育の一環として少々仕込んだ程度ですわ」
少々仕組んだくらいでこの出来栄えである。レッドは危うく卒倒しそうになった。
「いや……うん。食べよう！　俺は腹が減った！」
「フフ、左様ですわね。いただきましょう」
という訳で、いただきますを言った後、箸をつけた。
もつ鍋のモツを食べて早速にでた感想は
「旨い！」
の一言であった。レッド自身、それなりの料理の腕はあったが、これには到底かなわないと自覚した。
「有難うございます。かつてお母様にこの味でお出ししたら不味いの一点張りだったもので不安でしたけれど……」
「それは愛情で言ってくれたんだと思うぞ……。うわ、それにしても旨い、旨すぎる」
エリカ自身も箸をつけながら、レッドや手持ち達、食卓全ての笑顔に安心したかのようにエリカ自身もほくそ笑んだ。
カビゴンはあっという間に食べてしまいおかわりを再三要求したので彼女が驚いたりとその後も色々ありつつ、夕食を終えた。
片付けを終えた後、レッドは風呂に入り、その後にエリカが入った。

―午後9時30分―

「お、いい球投げるなー。それっ」

暇を持て余していたレッドはヒノアラシとピカチュウの二匹＋一人でキャッチボールをしていた。

とはいっても自宅より持ってきたテニスボールなので割れる心配はない。

「ピカピー！」

「ヒノッ！」

ピカチュウからヒノアラシへと送球をしている。ヒノアラシはしっかりと受け止め、レッドに送る。

ヒノアラシは力が強いのか、ピカチュウよりも少々受け止めるのに力を要する。

とはいっても所詮は第一進化形のポケモンである。窓を割るような馬鹿力は出ないだろうと考えながらレッドは時間を潰していた。

「ふう……」

20回ほど投げたところで、エリカのものと思しき吐息が聞こえたのでレッドは二匹で続けるよう手で合図し、エリカの方に体を向ける。

二匹は頷いて了解の意を示し、パシパシと距離を開けたり縮めたりしながら続けた。

「おう出たかエリ……」

と言いながらエリカの体を見る。

「はい。やはりお風呂と言うのは気持ちの良いものですわね……」

彼女はカラスの濡れ羽色の髪をバスタオルでふきながら答える。エリカは緑に水玉のパジャマ姿であった。

つまり、今までは露出が抑えられていたグラマラスなボディラインが出てきているのだ。

レッドの網膜はその美しき女体を焼き付け、二度と冷める事は無かった。

「……、貴方？　目が点になられておりますが……」

彼女は黙してしまい、かつ異様な反応を見せたレッドを気にかけている様子だ。

当のレッドの心中には思春期特有の飽くなき性欲が一気に湧き出ていた。

頃合いどころではない、熟柿は落ちたとばかりにレッドはエリカに尋ねる。

「エ、エリカさ」

「はい」

「エリカは俺の事……、す、好きなんだよな？」

「な、何を急にお尋ねに……」

エリカは顔を赤くしながら下を向く。その愛おしい動静にレッドの性欲は亢進するばかりだ。

「答えてくれ」
　レッドは立ち上がり、エリカの正面に立ち、緊迫感を多分に漂わせながら尋ねる。
「も……勿論ですわ」
　エリカは勇気を振り絞ったかのように言う。やはりまだ相当、好きという感情を曝け出すことに抵抗がある様子だ。
「だったら……」
　レッドは一歩ほど前進し、彼女の湯気と血潮で火照った顔に近づく。
「あ……」
　エリカはレッドの急な迫りに戸惑っている。
「抵抗しないって事は……いいんだな」
　と言いながら、レッドは唇を近づける。
「やめて……」
　エリカは蚊の消え入るような小さな声で言う。
　レッドは聞こえないのか否か、無視して更に近づける。
「やめてくださいっ!!」
　エリカは聞いたことが無いほど大きな声でレッドの求めを拒絶した。
　それと同時に彼女は数歩ほど後ろに下がる。その上、眼は潤んでいる。

レッドは当然の事、途中から動静を伺っていた二匹も大いに驚いている。
「エ……エリカ？」
「私……。そう簡単に殿方に体を許してはいけない……そう教えられていますから」
「何でだよ……。エリカは俺の事好きなんだろ……。だったら！」
レッドはそう言って進めようとしたが、エリカは頑なであった。
「私のお祖母様は仔細は教えて頂けませんでしたが、成り行きとはいえ体を許してしまい、お母様を生まれた際に大いに揉めたことがあったそうです……。『結婚の際、私と同じ轍を踏まない事。しっかりと見定め、相応と思った男とのみ結ばれなさい』これがお祖母様の遺訓ですわ。ですから、いくら貴方とはいえ、まだ私たちは4日程歩みを共にしたのみ……。お互いの事を知り尽くしてはいないのに、体を許すわけには参りませんわ」
彼はしばらく黙った後
「そうかよ……。分かった」
と言って彼は二匹をモンスターボールに戻し、不貞寝するかのように横になった。
「ごめんなさい……貴方」
彼女も就寝準備をした後、向かいのベッドで電気を消して眠りにつく。
部屋は、闇に包まれる。

―2月16日　午後3時　オーキドポケモン研究所―

時は戻って、昼がた、ワタルはミカンの密告を受けた後、大変な剣幕でオーキドのもとへ向かった。

「どういうおつもりですか！　命令を改ざんした上、レッド君やエリカ君、ゴールド君にポケモンとの絆を引き裂くようなことをして！」

「いやーすまないね、ワタル君。ワシは悪気はなかったのじゃ」

博士は恭しく頭を垂れながら謝意を示す。

「……、博士の顔に免じて今回は厳重注意ですが、今後同じようなマネをしたらどうなるか分かりますよね？　気をつけて下さい」

ワタルはこうして去っていく。

―――

午後7時、研究員が誰もかれも立ち去った後、オーキドはある人物と密会していた。

「全くつまらぬ事で騒ぎ出すのう、理事長とやらも……、のうサカキ殿」

オーキドはテープレコーダーに記録していたワタルの声をサカキに聞かせていたの

だ。

「その通りだな。オーキド殿」

「じゃが。こうなった以上、この手は使えん、次の一手を打たねばならぬの」

「うむ。この間来ていた、変な髪型の研究員に依頼していたアレを使うのか？」

「いつ出来上がるかによるの。じゃが、所詮は搦め手じゃ。本丸は別にあるしのう」

オーキドは老獪な笑いをしながら言う。

「我々は必ずや四年前……いや前年の雪辱を雪いでみせる！　オーキド殿、頼んだぞ」

「分かっておるわい」

こうして、夜中までその人物との会合は続くのであった。

―2月18日　午前7時　ヨシノシティ　ポケモンセンター―

「あなた、朝ですわよ！」

エリカに体を拒まれ、子どもじみた不貞寝の体を取りながら考えているうちに彼は眠りについていた。

朝になるとレッドは滑らかな声で割烹着姿の彼女に起こされた。

「ん……、ああ、おはよう」

レッドは静かに上体を起こす。揺さぶっていたのだろうか、胸のあたりに彼女の手がある。

「おはようございます。朝食の支度が出来ていますから、お顔を洗われましたらテーブルについてくださいね」
彼女はレッドに微笑みをうかべた後、そそくさに彼の元を離れようとする。
昨日のことなどまるで忘れてしまったかのようにそつなく家事をこなしているようだ。焼き魚だろうか、ほどよく焼けた香りが彼の鼻腔をつく。
「なあ、エリカ」
「はい？」
彼女はレッドの方に体を向ける。
レッドは昨日の件について尋ねようとした。しかし、彼女が敢えて気にしない素振りを見せているのだとしたらと思い始め
「顔……洗ってくるわ」
と適当な用事を思いついて彼はわざとらしそうにあくびをして洗面所の方へと向かう。
彼女の方は少しばかり当惑気味になりながら受け流した。
その後、彼らは朝食を済ませ、ヨシノシティを発つ。
―午前9時　30番道路―
この日は少々雲がある晴れで、北風が吹きつけなんとも真冬らしい気候となってい

た。

二人は話をしたり、しなかったりとしながら野生のポケモンとも戦って北へ北へと進んでいく。

「次のポケモンを倒したあたりでヒノアラシが電光石火を覚えるかな……」

草むらを抜けて１０匹ほど倒した彼はそう呟く。

「あら、お早いですこと」

「そっちは？」

二人は最初は交代交代で倒していたが億劫になって来たため、草むらごとで一旦分かれて抜けながら倒していくという方式で進んでいる。

「早々にギガドレインとどくどくを技マシンで覚えさせましたが、レディバやイトマルばかりが出てきて苦戦していますわ……」

「うわ悲惨だな……。傷薬多めに渡しておこうか？」

レッドはリュックより２０個ほど買い込んできた傷薬を見せる。

「お気遣い有難うございます。いつ切れるか分からないものですしね……」

エリカは笑みを浮かべ、軽く頭を下げて受け取る。

「いいっていいって、それじゃ先に……」

内心ちょっとした幸せを感じながら言っていると、短パン小僧が前に出ている。

「トレーナーだな！　俺と勝負しようぜ！」
　少年は勇気凛々な様子で勝負を仕掛けてきた。
「おう！　行け、ヒノアラシ！」
　レッドはすぐさまスイッチを切り替えて戦闘モードに入ってしまう。
　彼女の方はといえば初めて見る道路での対戦なのか少しばかり戸惑いを見せている。

――――

　勝負は１０分も経たないうちに決する。レベル差のあるポケモンだった為仕方の無い事ではある。
「正直俺も大人げ無いとは思うが……。ルールだし悪く思うなよ」
「うう……、次は絶対勝ってやる！」
　少年は光を失わずにリベンジを祈願している。
「次……か。あるといいな。よし行くぞ、エリカ」
　少年はその言葉に目を白黒にする。彼女の方はさしったりな表情をしている。
　先に進もうとすると少年が呼び止める。
「あの！　もしかして二人……いやお二人って」
「お二人？　何で急に改まって……あ」
　レッドは今になって自らのやった失態を悔いる。

「やっぱりそうだったんだ……。レッドさん俺、レッドさんの事すげえって思ってて、あのその……握手してください！」

周りにいたトレーナーたちも気づいて二人の元に駆け寄る。

こうして数十分ほど時間を取られて二人は先に進んだ。

「全く、不注意にも程がありますわね……」

エリカは機嫌を損ねるというよりも呆れている様子だ。

「ごめんよエリカ。にしても伝わるの早いよな……」

「風の便りとは恐ろしいものですからね……。本当に風が吹き抜けるかのように俗耳に入ってしまうのですから」

レッドは聞きなれない単語を耳にしたが、話の流れからそれに類するものだろうと判断し気にしないことにした。

「うん、気を付けるよ。それじゃあ先進もうか」

という訳で二人は道路を更に進んでいった。

二つの道路は存外長く、一週間ほどかかってキキョウシティに到着。

何度か寝起きを共にしているうちにレッドの中から気まずさは消えつつあった。

―キキョウシティ

格式高く、侘びを基調とした建物や文化財が立ち並んでいる。
最たるものは北側の世界最古の木造建築物と名高いマダツボミの塔であり、トレーナーの鍛錬の場となっている。トレーナーズスクールもあり、初心者にも好まれる街である。
一軒家がおおく落ち着いた街の印象を受ける。
―2月25日　午後1時　キキョウシティ　マダツボミの塔―
キキョウ第一の文化遺産であるマダツボミの塔。
エリカ曰く塔の最上階まで上がって長老に会い、技マシンを貰う事がここに寄ったトレーナーの一種の風習という事だ。
という訳で二人はキキョウシティに着いた後、マダツボミの塔に向かい、足を踏み入れた。
「ハァ……、エンジュでの仏閣も素晴らしかったですが、やはり1000年以上もの間、歴史を私たちに伝え続けるマダツボミの塔……。格が違いますわね」
彼女は入る前から塔そのものに恍惚としていたが、入るとその度合いは増し、胸の前に手を組んで畏敬の念をこめたような息を深くついている。
うっとりとしている彼女に心を時めかせ、一方キキョウでこれならエンジュに着いたらどうなってしまうのだろうと懸念を抱きつつ、レッドはあるものに注目する。

「なんであの柱動いてるの?」
　レッドは真ん中の動く柱について質問した。
「あれは巨大なマダツボミが動かしているとこの塔の御方は言っておられますが……」
　とエリカが続けて注釈しようとすると、二人の若い僧侶が横に入ってきた。
「その通り!この何世紀にも渡ってマダツボミ様が柱を動かしておられるのだ!」
「うわっ、なんだなんだ」
　レッドは突如入ってきた横槍に目を瞬かせる。
「それにケチをつける衆生は如何なる者でも押さえつけてくれよう!」
　若い僧侶は演技がかったような声で言って見せる。
「……とまあ熱心な門徒の方々がいらっしゃるので謎のままなのですよ」
　とエリカは繋げた。僧侶に関しては呆れているというよりも流している印象を受ける。
「フハハハハ!熱心な門徒か!」
「バカ!今のは皮肉に決まってんだろが!」
　そんな茶番を見たエリカは何を思ったか
「……、ではお聞きいたしますが、巨大なマダツボミがどうして幾多の地震にも耐え現在まで残り続ける事が出来るのか合理的かつ科学的な根拠をお聞かせ願えないでしょう

か？」

と、彼女はいたずらっぽい雰囲気の声で質問した。

「……、我らがマダツボミ様の法力を疑うとは許さん！行くぞチンネン！この不届きな衆生を成敗してくれよう！」

「……出家する前から思っていたが、お前は漫画の読みすぎではない」

一緒にいた僧侶がそう言って遠回しに制止を求めようとしたが無駄に終わった。

「黙れ！、では、行け！マダツボミ！」

「……、行け！　マダツボミ！」

制止を試みた僧侶も南無三とばかりにポケモンを繰り出す。

「たく難儀な連中だ……、行け！ヒノアラシ！火炎放射！」

その後、マダツボミは呆気なく焼け焦げましたとさ。

このような戦果で塔内を進んでいった。

……

最後は長老と戦い、見事勝利する。

「流石噂にならられておられるだけの事はありますな。フラッシュの技マシンは貴方がたに相応しい……」

長老とだけあって落ち着いている印象の人物である。

「噂って事はもうここまで知れ渡ってるんですね……。有難うございます！」
フラッシュの技マシンを受け取り、各々のバッグにしまう。
「これからキキョウのジムに行かれるのでしょうが……。どうかお気をつけて」
二人はマダツボミの塔を後にし、その足でポケモンジムへ向かった。
―キキョウシティ　ポケモンジム―
ジムに入ると例のおっさんが話しかけてくる。
「オース未来のポケモンマスター達！キキョウジムのハヤトはひこ」
「電気と氷、岩が弱点」
レッドは最早定型句の解説に飽きが来ていた為、先取りして答える。
しかしおっさんは想定内だったのかそれでも引く気配は見せず
「おー、流石。じゃこれは知らんだろう、カモネギに持たせると強くなる道」
少々突っ込んだ問題を出したが、レッドは言い切らせる事無く
「長ネギ」
と答えた。さながら早押しクイズである。
「個体によってはエンジュ産のクジョウネギ以外は好まないらしいですわ。中々拘りが強いですね」
「……」

エリカにネタを取られたのか、おっさんは黙ってしまう。
そんなこんなでやっていると上から青髪の着物を着た青年が舞い降りる。明らかに異色の格好な為、レッドはリーダーだろうと推察する。
「やれやれ、聞く相手を少しは考えようよ……」
少年は嘲笑気味におっさんに語りかける。
「僕がここのジムリーダー。ハヤトだ！」
少年は誇示するかのように言って見せた。待ちきれなかったのか、少々はやっているかのような口調である。
「ハヤトさん、お久しぶりです」
エリカは帽子を取って、軽くお辞儀をする。彼女を見るや否やハヤトはレッドを押しのけてエリカに近づいた。
「エリカさん！　今日もなんてお美しい！　解語の花とはまさに貴女の事！」
「あら、故事を勉強されておられるのですか？」
エリカは言外の意を汲み、爽やかに微笑みながらそう言った。だいたいこういうのは愛想笑いと相場が決まっている。
「はい！　私は貴方をテレビでお見かけした日からエリカさんに気に入られるといいなと思い、日々勉励していました。定例会じゃ中々話せなかったんでこの際と思ったので

……」

ハヤトはここぞとばかりにエリカに自らを誇示する。

おしのけられたレッドは内心穏やかでは無い。

「まあ、そんなに私の事を…ジョウトの殿方は皆アカネさんかと」

言葉だけを見れば感じ入ってるように見えるが、社交辞令な風にありふれた反応で返している。

「あんな売女、僕の眼中にはないですよ！　僕は鳥ポケモンとエリカさんが大好きなんです！」

「あらあら、同僚の方にそんな言葉遣いいけませんよ」

彼女はまるで稚児と戯れているかのような口調で話している。

「あのぉー！ハヤトさん！」

ここに至るまでエリカとしか話していないハヤトにどこか苛立ちを覚えていた為、少々語気を荒げてレッドはハヤトに呼びかける。

「レッド！」

しかし、ハヤトはそれ以上に強い声調で返す。

初対面の人に呼び捨てとはいい度胸だと内心思いつつ、続く言葉に注意を向ける。

「エリカさんを巡って僕と勝負しろ！　カントー最強だかなんだか知らないけどエリカ

さんは僕のなんだ！」
「はあ!?　何を勝手に」
　こんな状況を見てよくそんな事が言えたものだとレッドは思った。
「話を聞くとまだ貴方はエリカさんと手を繋いですらしてないようじゃないですか！　そんな意気地なしと付き合うなんて僕が許しません!!」
　レッドの心にグサグサと突き刺さるものはあったが、同時にどこから情報を仕入れているのか甚だ疑問であった。
「ハヤトさん、あのですね……」
　レッドは感情を抑えながら、ハヤトを宥めることに注力する。
「気安くさんづけで呼ぶな!!　この意気地なしが!!」
　ハヤトの収まる事のない度重なる挑発に、レッドの中で何かが切れる。
「どうした、怖気づいたか」
「そこまで言うならやってやろうじゃないか！　あーいいよ、どっちがエリカの事を思ってるか勝負だ!!」
　レッドはハヤトの挑戦を買って出る。
　ジョウト初のジム戦はかくしてはじまるのだ。
　―キキョウジム　天空―

「ルールは６ｖｓ６のシングルバトル！　僕が勝ったら、僕がデートを申請する権利。レッドが勝ったらバッジを渡す！」
「おい！　釣り合ってないだろその条件！」
　レッドは反発するが、ハヤトは聞く耳持たずに
「うだうだいうなら僕の不戦勝だぞ！行けっ！ピジョット！」
　ピジョットは、無駄のない様子で旋回した後、地に降り立つ。毛並みは手入れされているのか非常に艶やかで、輝いているかのように見える。
「そっちがそうくるなら……、行けっ！ラプラス！」
「相手は飛行……大した事なさそう」
　ラプラスは出てきた後、そう呟いた。
「ハハハ！　相性のみで乗り切るつもりか！　チャンピオンのクセに単純かつ浅薄極まりない。ピジョット！ブレイブバー」
「絶対零度」
　レベルに明らかな差があるのか、ラプラスが先制し
「凍っちゃうけど、我慢してね！」
　ピジョットの周りだけ絶対零度になり、瞬く間に氷塊となる。
　氷塊と化したそれは空しくフィールドに転がる。

「嘘だ！」
　ハヤトは目の前の現実が受け入れられないのか、大声で叫ぶ。
「これが、現実だ」
　ハヤトは氷塊となったピジョットを一瞥した後、戻して
「一撃必殺技はそう何回も当たるかぁ！行けっ！ムクホーク！」
「無駄な事を……あられ」
「遅いっ！インファイトだ!!」
　霰が降り出した直後に
「砕け散りやがれ!!」
　ムクホークのインファイトが直撃する。
　勇猛さがひしひしと伝わるほど、ムクホークは殴り続けたが
「痛いけど、所詮不一致ね」
「!?」
　ムクホークの目とハヤトの目が同じくして収縮する。
「いいぞ!!吹雪だ!!」
　好機とばかりにレッドは指示。ラプラスは至近距離で吹雪を放ち、ムクホークを凍てつかせた。

「チクショー…」

ムクホークは尋常ならざる雪と寒さに耐え兼ね、倒れる。

ただでさえ相性の不利があるのに吹雪必中の状態が続いたらどうなったかは自明である。

ヨルノズク、オオスバメ等4体が立て続けにやられ、ハヤトの完敗になった。

「う…嘘だろ、父さんの育てたポケモン達が…」

ハヤトは膝を折り、大いに落胆する。

「父さんの…？成程、自力で育ててないポケモンはそんなモノって事だ」

レッドは勝者の権利とばかりにはき捨てる。

続いてバトルの間静観を守っていたエリカも攻勢に入る。

「鎧袖一触とはまさにこの事……。しかし、ここまでとなると同じジムリーダーとしてどうなのかとは思いますわ」

愛する人の言葉がよほど心に響いたのか、ハヤトは銃撃でも喰らったかのように身を引かせる。

「ここに来るのは初心者ばかりだから慢心していたんだろう。全く情け無い。それでエリカを寝取ろうなど２０００光年早い」

「あの……光年は距離ですけれど」

エリカは即座に突っ込んだ。
内心空気を読んでほしかったが、レッドは構わず続ける。
「全くジョウトのジムリーダーが相性という基本的な概念も理解していないとはねー、ガッカリだよ」
ハヤトは何も言い返せずひたすら黙っていた。
「それじゃあバトルに疎い初心者には勝てても、少し知りだした初級者以上には勝てないね」
「思う……なよ」
ハヤトはぼつりと呟く。
「何だ下だらない弁解か?」
「ジョウトのジムリーダーが僕みたいな雑魚ばかりとおもうなよおおおお!!」
ハヤトは遂に自分が弱い事を認めたうえに半狂乱に陥った。
「ええ、少なくとも他の方はハヤトさんよりは強いと思いますわよ。順番的な意味だけじゃない……ですけど」
同業者からの辛辣な一言である。
「鳥使いとしては素晴らしくても戦いに弱いんじゃね、もう辞めたら?」
レッドに辞めろとまで言われたハヤトは色々な感情が交差したのか

「く…くそおおおっ!!」
ハヤトはバッジを投げ出して、地上に降りる。
「言うに事欠いて逃げ出すとは……」
彼女は突飛な行動に呆気にとられている様子だ。
「少しいいすぎたかな?まあ、ウイングバッジゲットだぜ!」
「私はまだ頂いておりません……。戦って貰わないと」
「そうだな、まずはハヤトを捜さないと……」
という訳で二人は街に出てハヤトを探す事にした。

―マダツボミの塔―
ハヤトは心を鎮めるために塔に向かい、自らの父親に当たる長老のところに行っていた。
ここに来る時になると高ぶっていた心も少しは落ち着いたようで、父親の前で正座していた。
父親はどうやら観戦していたようで事の次第は知っていた。
「……。本当に申し訳ありません。父さん」
「よい、お前はまだ新米じゃ。ましてやレッドなどとなればお前も惨敗するはワシも予

想していた事よ」
「でも僕は……、あいつに……レッドにバカにされた事が……しかもエリカさんの前で……悔しくて…」
ハヤトは自らの情けなさに涙している。すすり泣きながらぽつぽつと言い分を述べる。
が、それに対し父親の大喝が入る。
「それがお前の弱さじゃ！」
「え……？」
ハヤトは裾で涙を拭いながら、眼を開かせる。
「ハヤト、お前も一端のジムリーダーならば負けた事をウジウジとせずにきちと敗因を振り返れ！、バカにされた事をいつまでも…過去の事に執着するのは凡人のする事じゃ！お前が凡人の域にとどまるのならそれも良い、じゃがのそうであるならばすぐさまジムリーダーの職を辞せ！、トレーナーの身近な規範たるジムリーダーというのは凡人の勤めるものではないのじゃ。凡人が凡人を導く資格があると思うのか？」
この長老はハヤトの父であると共に前キキョウジムリーダーである。
高齢を理由に2年前にハヤトへリーダーの職を譲り、元々副業で営んでいたマダツボミの塔の長老となった。

「…！」

ハヤトはその言葉で頭を思い切り引っ叩かれた感じがした。

そして、それと共に目に生気を再び宿らせる。

丁度いい頃合にレッドとエリカが塔の頂上へ来た。

ここに至るまでにおよそ二時間ほどがかかっている。

「あ、いたいた」

「レッドさん……」

呼称が変わっていたことに少し違和感を覚えたが、レッドは構わず続ける。

一応、敬称を付けてたため、レッドもそれに合わせた。

バッジを貰ってない件を簡潔に話し、戦う事をお願いした。

要請は承諾され、三人はジムに戻る。

―キキョウジム　天空―

「さて、きちんとした自己紹介していなかったので……。僕の名前はハヤト…鳥ポケモンを愛するジムリーダーだ！　エリカさん、貴方の事は慕っていますが…手加減はしませんよ。僕の華麗に羽ばたく鳥ポケモンで……粉砕させて見せますよ！」

憧れているエリカ相手にこの物言いである。

さっきまでの腑抜けた態度だとまずありえ無さそうな態度なため、レッドは何かあっ

たのかと邪推した。
「ええ、存分に貴方の力私にぶつけてください…！」
「…！、行けピジョット！」
「おいでなさい！ウツボット！」

結局、エリカが4体失い、ユキノオーの猛戦の前にハヤトのポケモンは力敵わず敗北した。
心は変われど、そんな簡単に実力差は覆せなかったわけである。
「……、分かりました。潔く地に下ります」
「ハヤトさん……」
エリカもどこかしら変化を感じているのか、先ほどとは少しばかり見る目が違っている。
「何でしょう？」
「僅か数十分見ないうちに随分逞しくなられたようですわね……」
「…、光に打たれたんですよ。マダツボミのね」
こうしてエリカもウイングバッジを受け取る。
二人は買い物を済ませた後、ポケモンセンターに入り、休養した。

―第四話　氷鳥と黒白の衣　終―

第五話　茜の空

キキョウシティを出た二人は３２番道路、つながりの洞窟、３３番道路を２週間かかって進む。ヒワダに着いた頃にはヒノアラシはマグマラシに、チコリータはベイリーフに進化していて、レベルもそれぞれ２６となっていた。

―ヒワダタウン―

紀伊半島の深い森の中に存在する集落。

静かな町で、ヤドンの住処になっていたりして自然豊かな場所である。

カモネギが作るスミ職人の家、ボール職人のガンテツの家があったりと職人達の集う集落でもある。

―３月１１日　１８時　ヒワダタウン―

町を歩きながら話していると、白髪の堅そうな印象の親父さんが話しかけてきた。

「おお、アンタ達もしかしてレッド君とエリカちゃんか?」

親父さんは存外、快活に話しかけてきた。

「はぁ。そちらはどちら様でしょうか」
　レッドは素っ気無く答えたが、エリカの反応は違う。
「もしかしてボール職人のガンテツさんでございましょうか?」
　エリカの言葉に対して、ガンテツと呼ばれた人物は頬を緩ませ
「おー、ワシを知っとるのか！　こんな若いねぇちゃんに名前をおぼえてもらえるなどワシは幸せ者や……」
　ガンテツは満足げに頷く。
「せっかく来たんや。もう遅いし今日は家で泊まっていかんか?」
「そんな！　お邪魔になるのではありませんか?」
　エリカは遠慮がちにそう言った。
「とんでもない！　それに、孫は二人の大ファンでもあってのー。この機会に一度会ってもらえんかなーとも思ったんやが」
「左様ですか……。貴方、どう致しますか?」
　事情を訊きだしたエリカはレッドに尋ねる。
「……。丁度ポケセンにも飽きてきた頃ですし。お言葉に甘えさせて頂きましょう」
　そういうことでレッドとエリカはガンテツの家で宿泊する事になった。
　ガンテツの家は茅葺で屋根は本を伏せたような斜面を特徴とする切妻造という特徴

を持つ古風ながらも典型的な日本家屋だった。
―同日　午後9時　ガンテツ宅―
同居している孫と一緒に夕食を済ませ、二人が茶の間で寛いでいると、ガンテツが話しかけてくる。
「あんたら明日はどうするんや?」
「ジムに挑戦ですかね」
レッドがそう言うとガンテツは即答した。
「ジムか、そりゃ無理やわ」
予想外の返答にレッドは驚きを隠せず、続いて尋ねる。
「どうしてです?」
「ツクシがエンジュ大学受験の為に、半年前から集中したい言うことで高校があるコガネシティの方までいったんや。代役もいないからジムは当分閉鎖中なのじゃ」
それに対して疑問を持ったのかエリカが尋ねる。エンジュ大学はタマムシ大学と並ぶ難関大である。
「しかし、エンジュ大の入試は後期を鑑みたうえでも例年2月下旬には終わるはずですが?　時期を考えれば戻ってきてもおかしくはありませんわ」
「うむ、じゃから入試はもう終わってて合格の通知もこっちまで来とるのじゃ。だが、希

望の学部には受からなかったらしく、来年まで残るそうやな。ここ半年は大好きな虫取り大会にも出ずに頑張っとったのになー……」

「なるほど……」

それでエリカは頷きながら納得する。しかし、レッドは素っ頓狂な声を上げて、

「え、じゃ一年間ジムは封鎖ですか!?」

「そうはなるが一応、挑戦は受けてるみたいやからの。コガネに留まってるらしいから、探してみたらどうや?」

「探したらって……。コガネは相当な大都会と聞いてますよ。一体何日かかる事やら」

コガネシティはジョウトはおろか内国（ジョウト・カントー・ホウエン・シンオウ）でも一二を争う大都会だ。レッドの不安も尤もである。

「それもそうやな。じゃからまずはコガネジムに行ってみるとええ」

「え？　ツクシ……って人はここのジムリーダーじゃ」

「行けば分かるわい。連絡はつけておくで」

レッドが途中まで言った後、遮るようにガンテツはふっと笑いながら言った。レッドはどこか当惑気味な表情である。

二人は２２時ごろ、床についた。

―3月12日　午前6時―

ガンテツに別れを告げた後、二人はゲートを目指す。

「ふう。いよいよコガネか……」

レッドは気が入ったかのような声で言った。

「随分気合が入ってますわね」

「そら、ジムリーダーとの戦いには気合が入るもんさ。にしてもどうしてガンテツさんはコガネジムに行けって……」

レッドは一日経っても疑問が解消できないでいた。

「恐らくですが……、きっとガンテツさんは二人一気に倒せと申し上げてるのではありませんか？」

「え？　確かにこの本にはコガネにもジムがあるって書いてあるけど……」

レッドはキキョウシティで購入したトレーナーの歩き方の記述を思い出しながら言った。

「左様ですわ。コガネシティはアカネさんという快活な女性がジムリーダーを務めております。それに私の記憶ではお二人はお年が近いせいか仲が宜しいようですし……」

「ああ……なるほど」

レッドはエリカの解説で全てを理解した。つまり、次の街では二人のジムリーダーを

倒さなければならないという事である。
その後、ウバメの森、３４番道路を５日かけて進んだ。
―コガネシティ
ジョウト一の大都市。東のタマムシ、西のコガネとよく言われ、コガネはタマムシと肩を並べるほど発展しているものの治安が悪い。
ゲームコーナーや地下通路、コガネデパートやラジオ塔、ミラクル自転車などいろいろな施設が揃い踏みである。

―３月１７日　午前１０時　コガネシティ入口―
コガネシティは遠くからでも分かるほど高層ビルが林立している。
タマムシの整然とした雰囲気ともまた違い、この都市はどこか猥雑な雰囲気を醸し出していた。
「ここがコガネか、噂通り大きな都市だなぁ」
田舎育ちなレッドにとって、このような大都市は毎回圧巻されるものである。
「タマムシには負けますがね……」
エリカはぼつりと呟く。出身地の、ましてやヤマブキと連なる首都の威厳はやはり崩せないようである。

それを聞きつけたのか将に地獄耳とも言うべき、桃色の二つに縛った髪をした一人の少女が駆け寄ってきた。
「あんた今コガネをバカにしたんか！　タマムシなんて……」
少女は近寄って初めて気が付いたのか、口撃を止める。
「あら。お久しぶりです。アカネさん」
エリカは帽子を取って深々とお辞儀をする。ジムに行くまでも無かった。
「ひ、久しぶりやな！」
アカネは同業者に礼を失した行いをしたのを恥じたのか、相手がエリカだからか定かでないが少したじろぎながら言う。
レッドはアカネの豊満な躰を見て、相も変わらず不埒な事を考えていた。
アカネとエリカが他愛もないしていると、程なく紫髪の少年がやってきた。如何にもボーイスカウト風である。
「アカネさーん、急にどうしたの……って、レッドさんにエリカさん!?」
その少年は大いに驚いている様子だ。トレーナーの歩き方の限りだと彼はツクシという人だとレッドは思い出した。
その本のコラムの欄に書かれていた『勘違いされて同性より声を掛けられた事は数知れず。それもあってか彼は虫捕り以外でもあのキャンプボーイ風の格好をしている』と

いう記述も納得な程に彼は典型的な優男である。
「せや、本当にこのコガネにも来たんやね……」
アカネは感心しているような目線を投げかける。
「どうして二人とも一緒に……？」
エリカが尋ねる。
「同じ高校の同じ学年、同じクラスなんです」
ツクシに続いてアカネが言う。
「そ、どーも馬が合ってよく一緒におんねん」
アカネは胸の下で腕を組みながら言っている。
「尤も、アカネさんはとっくの昔に推薦でエンジュ大に決まってて僕は一般で理学・工学部に受かったんですがやっぱりどうしても虫に関して研究したくて蹴っちゃったんです」
ガンテツの話通りである。それを全国の浪人生に言ったらどうなるだろうか、などとレッドは思っていると、アカネが口を出した。
「ツクシは背伸びし過ぎたんよ、そんなわざわざ飛び級せんでゆっくりやればええものを……ホンマ、難儀な子やね」
アカネは親友と距離が開いてしまうのが寂しいのか、少しトーンを下げて言った。

「僕にはあと2回留年するチャンスがあるので頑張りたいです。それにしてもやっぱりアカネさんは凄い人だよ。僕一回も生物以外で勝てなかったもの……」
　ツクシは純粋な尊敬の目線をアカネに投げかけた。
「フッ。ツクシとウチじゃキャリアがちゃうねんキャリア！」
　アカネは威張り調子にそう言った。
「あの……。不躾な事とは重々承知な上でお尋ね致しますが、もしかしてお二人は交際しておられるのですか？」
　エリカが思わず尋ねる。
「いや、僕は単に憧れの先輩として、もう一つは一人の親友としか見てないですね」
　ツクシのきっぱりとした口調とは引き換えにアカネは何故か少し表情を歪ませている。
「あのー、お二人とも俺のこと忘れてません？」
　レッドは疎外感を何とかしようと発言をした。
「あーすまへんすまへん。そいで何？　挑戦？」
「勿論ですわ」
　エリカが答えた。
「挑戦ならここじゃなくてアカネさんのジムにしませんか？」

ツクシが提案する。
「せやね」
こうして四人はコガネジムへと向かった。
―コガネジム―
「いちいちひとりづつやっとるんじゃ時間がもったいあらへん！　ここはエリカとレッド。ウチとツクシのタッグバトルでいくで！」
アカネはハキハキとした口調で概要を説明する。レッドの予測通りではあったが、二人同時に相手するのは初めてな為少々緊張している。
「僕とアカネさんに勝ったら2つバッジを差し上げます。頑張って下さい」
「互いに三体づつで宜しいのですね」
エリカは確認している。
「せや。エリカ！　アンタには勉強じゃ勝てへんけど、この勝負かわいーうちのが有利やで！　レッド！　アンタもやで！　ボコボコのギタギタにしたるで！」
アカネは勝負の直前で興奮しているのか攻撃口調になっていた。その上指を突き刺しながら言い続けている。
「ちょちょアカネさん！それぐらいに」
ツクシが制止を求めたが、敢え無く終わる。

「黙れやツクシィ！　あんたもなんか言うたれ！」
「え！、その……頑張って」
ツクシはか細い声で言う。
それがアカネの癇に障ったのか、捲し立てながら続ける。
「さっきと同じやないか！　ツクシぃ、なんでそんないつも弱気なん？　もっと男らしくビシィ言うたれ！」
「あの、そろそろ始めませんこと？」
収拾がつかないと見たエリカは勝負に持ち込ませた。
「それもそうやな！　行けぇ！　ハピナス！」
「頑張って……、ツボツボ！」
こうしてレッドエリカｖｓツクシアカネの戦いがはじまる。
レッドとエリカが力を合わせて戦う初めての戦闘となった。
「行け、リザードン！」
リザードンはモンスターボールから出ると雄々しく羽ばたく。
そして颯爽と地に舞い降りる。
「おいでなさい、キノガッサ！」
キノガッサは悠々とフィールドに出た。

やる気に満ちている。
「キノガッサ。ハピナスにやどりぎの種です！」
「承った！」
キノガッサは掛け声と共に素早くハピナスに種を植え付けた。他意はない。
「ケッ、見え見えの策やね！　ハピナス、どくどくや！」
ハピナスはキノガッサに猛毒を放った。運悪く毒を喰らい、キノガッサは猛毒状態に陥った。
「リザードン。ツボツボに大文字だ！」
「了解！」
リザードンは大口を開け、間を置かずにツボツボに向かって大きな火の玉を放つ。
ツボツボはその瞬間、咄嗟に殻の中に籠ってやり過ごそうと試みる。
大の字となった火の玉は瞬く間にツボツボを包み込み、さながら火中の栗の如き状態となった。
火は３０秒もすると消え去って行った。ツボツボはその後なんの気もなさそうにニョキニョキと肢体を現した。
「グッ……。堅い。これが噂のツボツボか」
「へぇ……レッドさん、御存知でしたか……。ツボツボの強さ」

ツクシはさっきの気弱な態度とは少し変わって、気の入った声になる。
「……。まあラジオとかで耳には」
「それは光栄です！　でも、ツボツボは単に堅いだけじゃないんですよ。まあ見ててください。ツボツボ！」
ツボツボは頭をヒョイと後ろに向けてツクシに目線を合わせる。
「リザードンからパワーシェアだ！」
その指示が下ると、ツボツボはリザードンに目を向けた……かと思いきや目を閉じてひたすらに何かを念じているかのような姿勢を取る。
レッドは聞きなれない技名に驚きつつも、動静を見守る。
「……？　一体何が変わったんだ」
「それは後のお楽しみですよ」
レッドは嫌な予感を内に抱えつつ、ターンを終える。
「……！　キノガッサ。交代ですわ」
エリカは先ほどからの動静に何かを感じ取ったのかポケモンの交替を指示する。
「おいでなさい！　ワタッコ」
キノガッサを戻したのち、ワタッコを繰り出す。
当然交代した為、指示は出せない。

「猛毒だから戻しよったか……。当然の戦術やな。せやけどその程度じゃウチを破れやせんで！　ハピナス、タマゴ産みや！　ツボツボにあげな」

ハピナスのタマゴによって、ツボツボは体力を回復する。大文字のダメージを8割方回復した。

「チッ……。面倒なこった。リザードン！　エアスラッシュだ」

レッドは大文字が外れる事を嫌って、安全策を取る。

空気の刃はツボツボを的確に射抜いたが、どうやら怯んでいる様子は無い。

「よし……。ツボツボ！　岩なだれだっ！」

天空から岩が次々とリザードンの頭に降り注ぐ。

リザードンは懸命に避けようと試みるが、失敗に終わり岩の餌食となる。

しかし、所詮はツボツボの攻撃である。大したことはないだろうとレッドは高をくくったが、どうもそうではない。

リザードンは思ったよりも余程ダメージを喰らっていた。ＨＰにして7割を失う。

レッドはこの事態に面食らった。

「どうです？　驚いたでしょう？」

ツクシはすっきりとした笑顔を浮かべながら言った。

「ど……どういう事なんだ、いったい！」

「パワーシェアは文字通り、パワーをシェアする技……」
　レッドはその一言で漸く勘付く。いくら小卒なレッドでもその英単語くらいは知っている。
「そう、僕のツボツボはリザードンより力を拝借した！　だからこそ、これだけの力を出せたんです！　凄いでしょ？」
　彼は遂には無邪気な笑みをたたえ、自らの戦果を誇った。アカネもその横で微笑んでいる。
　レッドは自らの無知を恥じたが、それと同時にある方法を思いつく。それと同時にエリカの行動も理解した。
「さぁ、次でレッドさんの切り札、そして僕の天敵も……」
「ツクシ……って言ったっけ」
「はい？」
「残念だったな。まだ、こっちにも手が残っている……！」
　と言ってレッドはエリカに目配せする。
「良かった……。貴方なら理解して頂けると思いましたわ。ワタッコ！　日本晴れです」
　ワタッコは軽快な体を利用して縦横無尽に飛び回り舞を踊る。やがて、フィールドは

明るくなり、晴れの状態となる。
アカネは迅速に動いた。
「日本晴れで有利になるんわ、何もそちらさんだけに限らないんやで！　ハピナス！　ワタッコに火炎放射や！」
ワタッコは不一致の技ではあったが、日本晴れ効果によって一撃で倒れる。
「このくらいの事は想定内です。ワタッコ。良くやりましたわ」
エリカはそう言って、ワタッコを戻す。
「よしっ、仕返しだリザードン！　ツボツボに大文字だ！」
タイプ一致は然ることながら、日本晴れ、そして猛火の特性……。
この大技に倒れないポケモンの方が稀である。如何に堅牢なツボツボといえど、圧倒的な火力の前には為す術はあらず。甲羅から出ることは無かった。
「っ……。　まだまだ！　終わった訳じゃない！　行け、アーマルド！」
ツクシは一瞬だけ下を向いたが、すぐさまツボツボを戻し、アーマルドを繰り出す。
……
リザードンの火炎放射によって相手側最後のポケモンであるハッサムは倒れた。
こうしてレッドは2体、エリカは1体を残し勝利した。
「参りました……！　僕たちの負けです。アカネさんもほら」

ツクシはアカネに目線を遣るが
「うわー！　酷いわー！」
コガネ迷物、アカネのえんえん泣き。
アカネは対戦に負けると泣いてしまう。泣きやむまでバッジを貰う事はできないのだ。そしてその時間はアカネの気分次第。
「はぁ、やれやれ……」
レッドは帽子を目深に被り、エリカも静かにアカネが泣き止むのを待つ。
―10分後―
漸くアカネが泣き止み、すっきりした表情で立ち上がる。
「ふう！　二人はホンマに強いんやね！　ほなレギュラーバッジやで！　これが欲しかったんやろ！」
「やっと機嫌直った……僕からもインセクトバッジをお渡しします」
レッドとエリカは2つのバッジを手に入れる。
「有難うございます！」
エリカは深々と頭を下げる。
「いやいやお二人とも中々の手前で……少なくともキキョウのあれよりは全然……ね」
「もうそれおやめになられませんこと？」

エリカは少しだけ笑みを浮かべながらレッドに自制を促す。
「キキョウって、あの鳥バカがジムリーダーのとこやっけ?」
アカネはわざととぼけた風だ。
「ハヤトさんですよ。名前くらい覚えましょ?」
「言われんでも知っとるわ! うちあの人好きやないし」
「あらそうなのですか……。しかしあの人、変わった感じがしましたよ」
エリカの発言に、同業者二人は少しばかり、社交辞令という側面もあるかもしれないが一応の興味を示す。
「何か…マダツボミの塔で何かあったのでしょう。私たちと戦って何かしらの変化があったようですわ」
「へー、そうなんだ。今度会ったらよく観察してみよう……」
と、ツクシは観察日記と思しき手帳に書き込んでいた。
一方のアカネは全くの無関心だったかのように次に話を進める。
「それはそうと、あんたらこれからどないするん?」
「勿論、エンジュシティに観こ……ジムに挑戦するつもりですわ」
エリカは最早エンジュに心を奪われている。早速本音が出てしまっている。
「そかそか。うちもエンジュ大にオリエンテーション受けにいかなあかんし、一緒にい

かへん？」
「いいですね！　私も久々にアカネさんとお話ししたいですし」
　完全に華の世界になっている一方、レッドが申し訳なさそうに言った。
「もしもし？」
「うん？　なんやねん？」
　アカネは邪魔されて少々不機嫌そうに答える。
「男俺一人になって気まずいんだけど……」
　レッドはもう慣れてきたため、大して臆さずに言った。
「それもそうやろなー……。ツクシ、お前も行くねんな？」
　アカネはツクシに尋ねる。
「いや僕は残って勉強した」
「お前なーそんな勉強ばかりしとると体壊すで？　たまには息抜きも必要やねんで。疲れが顔にでとるよ。ツクシの好きな自然公園まででもええし……な？」
　アカネはツクシの隣に立ち、時折肩を叩きながら説得する。アカネ当人は本当に親友であるツクシを気遣っている様子である。
「はぁ……分かりました。行きますよ」
　ツクシは仕方なく同行する事になる。

コガネシティを出、4時間ほどで35番道路を抜け、ゲートに入る。

―午後2時30分　ゲート―

「あれ、こんな分岐あったっけ……？」

ツクシは見慣れない分岐に疑問を持っている。

「ツクシはホンマ勉強しかせぇへんな。あそこはポケスロンいうて、ポケモンの力試しをするとこやで！　ただ勝負やのうて、言うなればオリンピックみたいな感じやね」

「へー、面白そうですわね！　あまり意に介しては居なかったのですが、こうも間近にあるとそそられるものが……」

エリカは関心を示す。

「ウチも行きたいのはやまやまなんやけど、エンジュにいかなならんしな……」

などと女二人が話している一方、男のほうはと言うと、

「ツクシ君、この先は？」

レッドはツクシに尋ねた。年下だと思っているのか君づけである。

「自然公園ですよ。月木は虫取り大会があるんですけど今日はないそうですね……」

ツクシは一瞬落ち込んだが、すぐに目を輝かせながら続けた。

「でもいい所ですよ！　道は綺麗ですし。それに、虫捕り大会とかは無くても、虫ポケモ

ンもかなりいて僕の大好きな場所です！」
　ツクシはあくまで純粋である。
「ほんと、虫のことになると君は目の色変えるねー」
「当然です！　虫ポケモンは僕の生き甲斐ですからっ」
　そんな受け答えを見ていたアカネはツクシに時折恍惚な目線をかけている。
　エリカはそれを見て何かを確信した様子だ。
　―自然公園―
　都市と都市の間に建てられた緑豊かな公園。
　中央の噴水から草むらがひろがり、上品なピアノの曲の放送はいうべきにあらず。
　コガネジムとエンジュジムの間の息抜きとして通るトレーナーもいる。
　ツクシはウバメの森に次ぐ二大虫取りスポットと位置づけている。
　―3月17日　午後2時　自然公園―
「レッドさん。図鑑埋めがてらでジョウトの虫ポケモン、お見せしましょう。穴場のスポットがあるので、そこをご紹介します」
　ツクシはそう提案した。久々の虫取りでうずうずしている様子だ。
「おお、これは有難い。エリカとアカネさんはどうする?」
「お話したいことがあるので留まりますわ」

「全く……。まあ無理に連れてきたツクシの頼みやし、しゃーないか」
アカネは半ば諦め気味で認めた。
という事で二手に分かれる。
「じゃ、また」
男二人は草むらにへと入っていった。
「本当、良い所ですわ」
目の前には噴水があり、丁寧に管理された草むらや植栽など、全体的に上品な雰囲気でエリカ好みの場所である事は明白だった。
「やろ？　エンジュとコガネの共同設計やねん。エンジュの叡智とコガネの技術が合わさった一つの作品ともいっていいかもしれへんね」
アカネは得意げに言う。
「確か自然公園の制定は4，5年ほど前でしたわね。アカネさんも何かしら関わったのですか？」
「ウチは宣伝部長として数年前頑張ったんやで！」
「まあ。左様にございますか……。さぞかしご苦労があったでしょうに」
「なになに。ウチにかかればそんなもんお茶の子さいさいやっちゅーに！」
アカネは朗らかな調子で話し続ける。この突き抜けた明るさは彼女の特徴と言える。

「因みにマツバも公園全体の構想やら何やらに関わってな。そこから仲良くなったんよ」
「なるほど……。学業にジムリーダー。両方励んでいらっしゃるようで、私としても嬉しい限りです。ところで……」
　エリカは膝をややアカネ側に向け、手もそれに連れさせる。本題を切り出すかのような口調で言い、アカネの反応を待つ。
「ん？　何やね？」
「単刀直入にお伺いいたしますが……。ツクシさんの事、どう思われてます？」
「え!?　そ……そら、友達の……一人やけど？」
　アカネは急な問いかけに驚いたのか、他意があるのか定かでないが先ほどよりは大分声を小さくして答える。
「随分と声が小さくなりましたね」
　エリカはすかさずそこを衝いた。
「友達や言うとるやろ！」
　アカネはそれに対し、取り繕うとしたのか声をあげて返した。
「声を荒げても私の目はごまかせませんわ。伊達に男子禁制のジムを営んでませんから」

しかし、エリカは沈着に返す。

「う……。そ、そんなん知らへん！　友達や、友達！」

アカネは逃げ切ろうとした。が、一度網にかかった虫の抵抗など儚きものである。

「あなたがツクシさんを褒めたり貶してたりしてたジム戦の時までは、そういう風に流してました。しかし、ゲートの時、ツクシさんがはしゃいでいらした時のあなたのお顔。貴女は気付いておられなかったようですが、頬が必要以上に紅潮しておりましたよ？　明らかにお友達を見てる顔ではないです。下世話な言い方ではありますが、男を見ている顔でしたわね」

エリカの緻密な分析にアカネは黙るしかない様子だ。

「正直になられたらどうです？」

しかし、アカネは窮したままで、顔を赤くしたまま口を真一文字に結んだままである。

「寵辱には驚くが如し……。自らをそうやって偽り続けたままでいらしては、自らに正直であれというこの老子の教えも意味を為しませんわ。貴女は自らの心に背を向け、逃避し続ける……、その為に勉強をしてこられたのですか？　その術を学ぶ事に、心血を注がれたのですか？」

エリカは正攻法では無理だと悟ったのか、アカネの心を衝く策に出る。

彼女本人がここまで懸命に築き上げてきた財産に対して、一つの針を刺したのだ。

「な……。そないな事あるか！　下らんこと言うとるといくらエリカいうても堪忍せぇへんぞ！」

「堪忍しなくても宜しいですから……。正直に話されてはいかがですか」

泰然とした彼女を見て出鼻を挫かれた体の彼女はそれから数秒ほどの間を置いて、アカネは一つ溜息をつき

「エリカ……あんたには敵わへんね。せや、ウチはツクシのこと……好いとる。飛び級で来て、最初はただの友達やと思うとったら、いつからかあいつの一挙一動が愛しうなってな……。でもここまで仲良うなってもウチを見るツクシの目はふつーの女の子を見ているのと同じ目。ウチになーんの興味を示さへん。せやから……これは叶う事のない恋なんよ……」

アカネは言い終わると、顔を赤くしたまま、塞ぎ込む。エリカは何も言わずに聞き入れたのだった。

―同じ頃　自然公園　森の中―

ツクシは木によじ登ったりどこから持ってきたのか虫取り網を鮮やかにふりかざしたりと八面六臂の活躍を見せる。そして、モンスターボールを一度も使わずに1時間半ぐらいで八十匹の虫ポケモン捕まえた。

しかし、その後は大抵逃がしている

「ほら！　ヘラクロスですよ！」
　ツクシは木に登って、大きなヘラクロスを急所を押えながら片手で持ち、レッドに見せる。
「うーん、図鑑が埋まる埋まる……」
　こうしてレッド含め、完全に夢中になっている。
　と、そんな事をしていると、草木をかき分けてやって来たウツギが話しかけてくる。
「お、いたいた」
　ウツギは何の気無しに二人に話しかけた。
「ウツギ博士!?」
　まず驚いたのはレッドである。
「は……博士がなぜここに……？」
　ツクシはウツギに気が付くと、スルスルと木から降りてウツギの近くにまで行った。
「いやー、君がエンジュ大の生物学部に落ちたのが不思議でね。少し文句を言いに言ってたんだ」
「…へ？」
　ツクシは突然の事できょとんとしている。
「君が虫ポケモン大好きでエンジュ大のそこを目指してるのは、僕ぐらいの博士なら皆

知ってるさ。君はポケモン研究会の金の卵どころかダイヤモンドエッグだからね。そんな君を落とした理由を知りたかったんだ」

「博士がそんなに僕の事評価してくれてたんですか……」

ツクシは何よりもその事に驚いているようだ。

「何、君の数々の研究成果を知ってれば誰でもそう言うよ。でね、僕は一応エンジュ大の客員教授だし、採点には携われなかったけど開示を請求したんだ。見たところ答案は合計８００点中６３３点で合格ラインには入っていたんだよ」

「そうだったんですか!?」

ツクシは目を丸くして、おどけたような声で言った。

「じゃあどうして落としたのです?」

レッドは横槍を入れる。

「ま、それは後で、驚くべきは生物は前代未聞の１００点満点でこれにはビックリしたね。流石だと思った」

「尚更不可解ですね」

ウツギはレッドの横槍に対し、適当に相槌を打ちながら続ける。

「そうだよねー。だから僕は学長と試験委員長、人事課長全員に掛け合って合格させろと三時間ぐらい直談判したけどね。ダメだった。一度決定したことは覆せないってね。

流石お役所だよ」

「博士……」

ツクシは博士に対し、感謝の念に満ちたまなざしを向けている。

「力不足で申し訳ない。そこでだ」

ウツギはツクシに浅く礼をした後、本題に入る。

「君を僕の研究所の研究員として雇ってあげたいんだけど……どう?」

「え……、ほ、本当ですか!?」

ツクシはウツギの提案に目を点にして応じて見せた。

「男に二言は無い。給料はもちろん出すし、住む所だって用意する。どうだい? 虫ポケモンの博士になりたいと願う君には持ってこいの話だと思うんだけど……」

ツクシは5分ほど考えた後、

「願っても無いお話ですが……。ジム等色々な事を考えるとすぐには……」

「そうか。ま、そんなすぐには決められないよね。いつでもいいから、決心ついたら研究所まで一本電話入れてくれよ。それじゃ……」

こうしてウツギは去っていく。

レッドは図鑑の事について聞こうかとも思ったが、とてもそんな雰囲気ではなかった為今回は諦める。

「……憧れていたエンジュ大がそんな所だったなんて。僕、もうどうしたらいいんですか？　レッドさん!!」

　ツクシは今までやってきた事がなんだったのか分からなくなったのか、レッドに感情をぶつける。

「うーん……、よく考えなさいな」

　レッドからすればあまりにも次元が違う話なので、それ以上の返答はしない……いやできなかった。

「ゴメンなさい。僕、今すぐヒワダに戻ります」

「え」

「僕、自分を見つめ直す機会が来たようです。ヒワダに戻ってガンテツさんと話合ってみます」

「そうか。まぁそれも大事だよ。俺も三年間シロガネに篭らなければ、自分とは何か分からなかっただろうし。行かなかったら少なくとも絆も深まらなかったろうな」

　レッドにはそれ以外にかけられる言葉が思いつかなかった。

「一旦コガネに戻って身辺整理をするので……。エリカさん…そしてアカネさんにも宜しくお願いします」

　ツクシはそう言うと、深々とお辞儀をして、立ち去ろうとする。

「おい！直接言いにいけよ」
レッドはツクシの肩に手を置いて呼び止め、そうしようと促すが
「いや、もともと無理やり連れてこられたんで。さようなら！」
ツクシはそう言うと、レッドの制止を振り切り、否応無しに立ち去る。
「おいツク…なんて逃げ足の早い奴。体まで虫になってんのかよ……」
レッドはそう呟いて、合流を果たす為に公園の中心部に戻っていく。
―自然公園　奥噴水前―
エリカとアカネは先ほどから座っていた場所より動かずに居る。
「あら？あれって……ツクシさん？」
すると、エリカの目には噴水の水越しに出口に向かって走るツクシの姿が映った。
「ッ…」
「何だか分かりませんけど、行ってあげたほうが宜しいのではないですか？ご学友なのでしょう？」
そうエリカが言うと、今まで黙していたアカネは元の元気な声を出した。
「そんなん……、エリカに言われる間でも無いわ！　ツクシィーーー!!」
こうしてアカネはツクシの後を追っていった。
―午後４時　自然公園　入口付近―

「ツクシ！」
アカネは息を切らせながらもなんとかツクシに追いつく。
辺りはもう夕焼けに染まっている。
ツクシは声に気付いてアカネの方を向く。
「？、アカネさん！　どうしたんですか？」
ツクシは汗だらけのアカネを見て、気にかけている。
「そらこっちのセリフや！　どないしたんや？　そんな急いで」
アカネがそう尋ねると、ツクシは珍しくぶっきらぼうに
「……。アカネさんには関係ないよ！」
「何言うてんねん！　ウチら親友やろ!?」
「それでも関係ないものは関係ないよ！」
ツクシは反抗的な態度である。一刻も早く故郷に帰りたがっているのに足止めをされているのだ。
当然といえば当然である。
「いいやある！　ウチはツクシの先輩や！　後輩が先輩に悩み事相談するのは世界のジョーシキ言うもんやで！」
「……。それなら言いますけど、僕ウツギ博士の研究所の研究員に誘われたんです」

ツクシは埒が明かないと見たのか、先ほどの内容を話した。
「すごいやん！　それで？」
「相談する為にヒワダに戻るんです！　これでいい」
ツクシが言い切ろうとしたが、アカネが遮る。
「なら……なら、ウチも行く！」
「意味が分からないです！　どうして先輩が後輩の後をついていくんですか！」
ツクシはもう憔悴しているのか、苛立ち気味である。
「くぅ……しゃーないな。ほな……、分からしたる！」
アカネはツクシの唇に唇を重ねる。しかも身をツクシに委ね、ツクシの肩に手を回し、きつく、きつく抱きしめながら。
「!?」
夕焼けを背景にしたその二人の姿はまさに美しいと言うほかにない。
「ハア……これで分かったやろ？　ウチの気持ち。ウチは……ウチはツクシの事、好きなんや！」
数十秒の接吻の後、アカネは遂に告白した。
「あ……ぅ……。ゴ、ゴメンなさい……僕やっぱり虫以外には……興味がいかないっていうか、その、今はそれ以外に気を割けないないんです。いや、でも信じてください！

決してアカネさんが嫌いだからとかそう言うんじゃなくって」
　ツクシは答えに至るまで多少の迷いはあったものの、アカネにとって芳しくない。例え口付けをされてもその態度を貫いたのは見事とも言える。
「分かっとるって！　別にツクシがウチの気持ち受け取れへんでもええ！、でもなウチ、エリカに言われて目、覚めたわ！　やっぱ自分に正直になって、気持ちを伝える事が大事なんや！」
「……」
「やから、ウチはツクシに気持ちを伝えてスッキリしたんやで！　別に返してくれへんでもウチはそれだけで満足や！　ファーストキスの相手がツクシなら言う事もあらへんぐらい満足なんやで！」
　アカネは立て板に水の如く、ツクシに自らの感情を伝える。
「アカネさん…成長しましたね」
　エリカはアカネとツクシがいる所より２０メートルぐらい後方から見守る。
「せやから、ツクシも自分の気持ちに正直なって自分の進みたい方向決めるんやね！　ウチはツクシがどんな方向に進んでも応援するで！」
　アカネは最後、爽やかにはにかんだ。
「ありがとう……アカネさん！」

こうしてツクシはアカネを背にしてゲートを出た。アカネは掌を広げてにこやかに送り出した。

そして――

「後悔せんなよ……ツクシィ……！　エグッ……」

アカネはツクシが出た直後、地面にしゃがみ大泣きする。

「なんだか、ジム戦の時の涙とは違うな」

レッドはいつの間にかエリカの後ろにいた。

「あら、来ておられたのですか。……確かにそうかもしれないですわね」

エリカはそういうと少し微笑んだ。

―２０分後―

「アカネさーん」

エリカは優しい声でアカネを呼ぶ。

「あ…エリカ」

アカネは涙で腫れた涙袋を手で拭って、立ち上がった。

「そろそろ行きませんか？　もうすぐ日が暮れてしまいますわ」

「あー……せやな！　行こ行こ！」

そう言うとアカネは二人の所に駆け寄る。彼女は最早、ツクシの事など忘れ去ったか

のようにすっきりとした表情である。
「はぁ。良かったアカネさん立ち直ったみた……いいいい！」
「調子に乗った口を利くんやない！」
　アカネはレッドの頬をつねる。
「レッド！　アンタはウチより年下や！　生意気に上から目線で語るんやないで！」
「ふぁい」
　レッドはつねられながら答える。
「よし。ほな行こかエリカ！」
「そうですわね」
　元の木阿弥となったレッドをしり目に春風に誘われるかのように、三人は古都、エンジュシティへと向かうのであった。
　この日の夕焼けは心なしか、いつもより少しばかり茜色が強い。

―第五話　茜の空　終―

第六話　二つの巨壁

―3月20日　午後1時　37番道路―

アカネが恋に破れ、自然公園の宿泊所で一泊した一行はエンジュシティに向かう為、37番道路を歩いていた。

アカネは、キキョウとエンジュの交差点となっている場所を通りかかると思い出したかのように、話し始める。

「昔な。ここらにおかしな木があってな。ゴールドちゅう少年が水をかけたんよ」

「ゴールドってあのセキエイのチャンピオンになられたお方ですか?」

エリカが尋ねた。

「何や知っとるんか。ほんなら話は早いわ。そんで、それはウソッキーちゅうポケモンだったんやで!」

「へー、そんな事ってあるのですね……」

と何とも良い雰囲気の会話をしている一方、その後ろには一人だけ違うオーラを放っている人物がいた。

レッドは不機嫌だった。

アカネからほぼ一方的に荷物持ちをさせられただけで無く、エリカには全く話しかけらない状況だ。

そんな事もあってか、レッドはささやかな反抗の証でわざと遅めに歩いていた。

「なーレッド！　もー少し早く動いてくれてもええんちゃうの？」

それを察したのかアカネは柔らかめな語調でレッドを諭す。

「アカネさん。夫にきつすぎやしません事？」

エリカが微笑を浮かべながらアカネに苦言を呈する。

「えーのえーの、人生の厳しさちゅうもんを若造に教え込むんやって！」

アカネは得意そうに威張る。

レッドは内心、振られたくらいで成長したつもりでいる鬱陶しい奴であると感じている。

「なーレッドー」

アカネは身を揺らしながら急かす。

揺れると、たわわな乳房が上下する。それに着目したレッドは不埒な事を再び考え出したが、振り切り

「だー、少し待てや！」

と少々やけっぱち気味に答えた。

「！」

アカネは素早く駆け寄って、レッドの頬を平手打ちした。

さながらストライクのとんぼ返りといったところか。

「痛い！」

「コガネ弁使ってえーのはコガネ人だけやで！　そのちっこい脳に叩き込んどき！」

アカネは強めの口調でレッドを戒める。

気の強い女性の前には何も反論できない自らの臆病さをレッドは自覚する。

こうして、三人は道路を北上していく。

―その頃　エンジュ大　学長室―

学長室は本来学長が座るべきイスに黒ずくめのスーツを着たサカキが鎮座。そして、そのすぐ横にオーキドが立っていた。

学長は机の前でひざまずいている。

「ウツギが来たようだな」

サカキが学長に尋ねる。

「ハハ！　合格させるようにと！」

「ツクシの件でか……。アカネは一度出した合格を取り消すわけにもいかぬからやむを得んが、ジムリーダーに万一感づかれると非常に厄介だらの。あの豊富な知識が買えん

のは惜しいとこじゃが……無論追い払ったのじゃな？」

　オーキドが学長に尋ねる。学長は何かを恐れてるかのをかき消すかのような大きな声で

「もちろんでございます！」

　と答える。サカキは硬い表情を崩さずに

「良くやった。お前たちにしては良い働きだ」

　と返す。

「ハッ！お褒めに預かり光栄至極に存じます」

　学長の声は褒められたことに対する喜びではなく、怯えているような感情が強い様子だ。

「天下のエンジュ大学も我々の前にこの様か」

「フ。身から出た錆よ。のう学長殿？」

　学長はビクビクと怯えながら床を見ている。

　ここにいる大学の重職にある者は皆、オーキドに大きな弱みを握られているのだ。ある者はオーキドの接待で失言したものを録音もしくはセクハラ紛いの事をした瞬間を録画され、ある者は不倫の現場をおさえられたり、ある者は莫大な借金を抱えている事が発覚していたりと様々であった。中には勇敢にも立ち向かったものもいるがそうい

う者は大事になる前にオーキドやロケット団によって処理された。
　オーキドはそんな者たちの頭を一瞥し話を切り出した。
「さて、ここに呼んだのは他でもない、今日の計画の仔細じゃ」
　オーキドに続いてサカキが言う。
「ここの学生を洗脳し、ポケモンを回収する」
「それに使うのがこの機械、集団催眠機じゃ」
　オーキドはカバンより数台のプロジェクターを机の上に置いた。
「集団催眠機と申しますと？　一見、何の変哲も無い再生機に見受けられますが……」
　学長が恐れ入ったような声で尋ねる。
「うむ、この機械で今日オリエンテーションに来る生徒達に恒例どおりの紹介映像を見せる。じゃが１０００分の一秒だけポケモンを回収するとの文言を表示するのだ。それを３０分の映像の中で二十回ほどやるのだ。不定期にの」
　学長たち一同はこの言葉で感づいた模様である。俗に言うサブリミナル効果を悪用しているものだ。
「そして、映像が終わった後全員の生徒にポケモンを回収せよと同じことを言う。これが催眠の初号と解号になり、モンスターボールをおかせる。それで三時間後に催眠を解く。無論生徒達は気づかないまま帰り、それから二日後に完全に催眠を解かせるの

じゃ」

「つまり、気付いた頃にはもう後の祭り。時間も経っているからよもや我々を疑うこともあるまいよ。ククククク……」

サカキは悪意をこめた笑いを発した。

その後、サカキは身を前に乗り出して眉を引き締めた顔の前に手を組む。

「これが全容だ。いいな？」

そして、ドスの効いた声に戻し確認を促す。

「はっ！」

学長、広報課長はやはり怯えているような声でほぼ同時に答えた。

「期待しておるぞ」

そんなオーキドの励ましも二人の耳には決して快くは聞こえないだろう。表情の裏にはどこか憎悪めいたものが窺える。

「回収に成功したら私はそのポケモンをつかい、下地作りを……」

サカキが言い終わろうとすると、オーキドが遮り

「サカキ殿。すぐに手を出してはならぬ。ロケット団が従前よりやってきた方法では時間がかかりすぎるわい。我らの計画はタイトなのじゃ」

「われわれのやる事には口出しをしないという契約のはずだ。口を挟むことは……」

サカキがそう言って一蹴しようとすると
「口出しをしておるのではない。提言じゃ。これに従うか従わないかは自由にして良い。ワシに任せれば数日でロケット団に従順かつ強力な武器と化させることが出来ると言うておるのじゃ」
「無茶をいうな。調教に慣れた手練どもを集めても一週間は最低かかる。オーキド殿は机上の理には強かろうが実態はさほど知るまいよ。ここは我々に」
「何千体もいるであろうポケモンを調教するのに何年かかると思っておる。往時の頃ならばともかく、いまやサカキ殿含め十名ほどしかいない。よしんば集まったところでそんな手勢でいったい何年かけるつもりかの?」
その追及を受けるとサカキは押し黙る。今の己の非力ぶりをよく理解しているのだろう。サカキは現在極秘に連絡をとり近くに潜伏していた元団員を再び手下にしていたが資金も何もかもオーキド頼りの現状である。
「だがこちらにはワシだけではない、研究員が１００人ほど居る。１日で全ポケモンのデータベースを作らせることくらいは造作も無い。後は少々面倒じゃがワシの手で実行に移す。ワシの試算じゃとどう長く見積もっても6日程で終わるわい」
「フン、そこまで言うならやってみろ。ただ引き渡した後は」
サカキはこれ以上の抵抗は身の破滅を招くと思ったのか、はたまた興味を持ったのか

定かではないが、据わった目で言う。
「分かっておる。どんな事に使おうと口出しはせんよ」
と言って不敵な笑みを浮かべた。
―そして、その後エンジュ大のオリエンテーションが14時から17時まで実施され参加生徒2500人から5315匹を回収した。これに関して二日後に大量にポケモンが居なくなったという事案が発生した。しかし警察は捜査しても手がかりがつかめずじまい。マスコミには混乱を防ぐためという名目で厳重な報道規制が布かれた―
―3月20日　17時20分　エンジュシティ付近―
さて、一行はそんなおぞましい事が起こっているとは露知らず。
その日の夕方に入ると悠然として佇むスズの塔が見えた。
古都、エンジュシティのおでましである。
更に進むとやがて三人の目の前にはエンジュシティの入り口にある門に到着する。
「あら、これは羅城門ですわね。という事はこの先はエンジュシティ……、胸が高鳴りますわ！」
エリカは入り口の門を見つけると、パッと両手を組んで喜びをあらわにする。
「やった……エンジュだ」
レッドは荷物を持たされた上にストレスも響いたのか疲れた声で言う。

「エンジュだ。やない！　もうおわってしもうたやんか！　どうしてくれんの!?」
アカネはレッドをけたたましい口調で責める。
「まあまあ大学によれば二回目もあるようですし……明日でしたか?」
エリカはそう言ってアカネを宥める。
「まあ、せやけどな……はぁ、余計に金が飛ぶやんかぁ」
アカネは意気消沈としている。コガネ人はやはり金の出入りに敏感なのだろうかとレッドは思う。
「まあまあ、とにかく先に行きましょう」
「そやね……」
「あー早く風呂入りたい」
レッドは様々な要因で内心晴れ晴れとしていた。
―エンジュシティ　古の都。歌舞練場やスズの塔があり、
キキョウとは対照的な雅を基調とするジョウト最大の文化都市にして、
ジョウトの頂点であるエンジュ大学や附属中央図書館と学問都市でもある。
焼けた塔の再建が進んでいる。
建築協定で景観の保持の為一軒家、低層店舗しか建てられない。
―17時40分　エンジュシティ　羅城門前―

エンジュシティは、夕方という時間帯もあってか一層風情のある形となっていた。
道は綺麗に掃除されており、塵一つ落ちていない。
「まあ……」
エリカは門をくぐりぬけるや否や、感嘆の声をあげる。
「貴方、見て下さいよ！　このスリバチ山で切り出した石で作り、ヒワダの職人が作った石畳！　ケヤキやカエデの街路樹も整然としていて落ち着きますわねー。あ！　あれは……」
と、彼女は堰を切ったかのように喋り始め、あちこちに足を運ばせている。
普段の貞淑な雰囲気とは打って変わって、好物を得た子どもの如き印象を受ける。
「なあ、レッド」
そんなエリカを見て、呆気に取られた様子のアカネはレッドに尋ねる。
「はい？」
「あの子、こないな風にはしゃぐ子やったっけ？」
「和風な子ですからこういう所に来ると居ても立ってもいられなくなるんでしょう。キキョウの時点でこうなる気は薄々ながらもしてましたけどね……」
と、口では冷めているが普段見ないエリカの様子に少し嬉しくなってる様子だ。
「そか……。はあ、来る場所でこんなにも人って変わるもんなんやね。全く好きこそ物

の上手なれーとは言うけど、あの子はちと病的なとこあるかもしれへんな」
アカネは力なく笑いながらそう言った。彼女もどこか諦めている様子である。
その後、すぐに息を大きくついて続ける。
「それにしてもここに来んの受験以来やなー。相変わらず綺麗なところやね」
アカネは澄んだ顔をしてそう言った。他意はない様子だ。
「エリカにとっては刺激が強すぎるでしょうけどね。ただ、気持ちはわからなくはないです」
「ホー。レッドにも分かるんか。たまげたなあ」
アカネは陽気に笑いかけながら言う。
「なんですかその言い草……俺だって一応義務教育は」
「いやいや。小学校出れたくらいの子でも分かるくらいエンジュって凄いとこなんやなー思うただけやて。気ぃせんといてえな」
彼女はじゃれてるかのような口調で言った。
レッドがくすぶった顔をしていると
「あー、そうそうレッドしっとる?」
アカネは思い出したかのような口調で言った。
「何をです?」

「エンジュというたら、リーダーのマツバやろ？　これは絶対内緒やけど、あいつどうやら……」

　アカネはそう言うと、エリカに気取られないようにする為か指の第二関節を曲げて近づくように伝える。

――――――――――

「え!?　それって……」

「アホ！　デカい声だすな。……、あくまで風の便りやけどな。マツバ以外のうちらジョウトジムリーダーの中ではもうジョーシキなりつつある話やで。気いつけときな。他はええとしてもあいつはうかうかしとると……」

　アカネが次の言葉を言おうとしたらエリカが戻ってきて

「ふう……だいたい近くのところは見ましたわ。あら、お二方どうされたのですか？」

「い。いや何でもあらへんで！　な？」

　アカネはそそくさにアイコンタクトを取る。

「え、あ、うん。ただ世間話してただけだ」

　レッドはアカネの話に合わせた。

「左様ですか。はぁそれにしてもエンジュシティは相変わらず素晴らしい街ですわ。なんとも知的好奇心をくすぐられます」

「そりゃ良かった……。じゃあそろそろポケセン行こう」
という訳で三人はポケモンセンターへと向かう。
その後、三人はエンジュシティのポケモンセンターで一泊した。
―3月21日　午前8時　ポケセン前―
アカネは大学に行く前に、2人に別れを告げる。
「ほな、うちエンジュ大に行くわ。エリカ、色々ありがとな、ウチ楽しかったし、ホンマ感謝しとるんよ！」
「私如きで一助になれたのなら本望です。大学、頑張ってくださいね！」
エリカは屈託の無い笑顔で微笑んだ。
「あぁ、レッド！　次会うたら負けへんから覚悟しとき！　今度こそしばきまわし……あかん、時間あらへん！　ほなまたな！　エリカ！　レッド！」
「また会う日まで、ごきげんよう」
「じゃあ……って、おい！　別れの言葉はそれかよ！　ざけんなー……」
レッドはアカネが飛び込んでこない距離になるのを確認してからそう叫んだ。
こうしてアカネは去っていく。
「ハァ……やれやれ。エリカ！　ジム探すぞ！　まずはジム戦だ！」
レッドはようやくじゃじゃ馬がいなくなった事に、安堵の表情を浮かべながらそう

言った。
「ここのリーダーはマツバさんです。中々に素敵な殿方でしたけれど、少しオカルティックな部分も見受けられますわね」
エリカがマツバに対しいい印象を持っていることに少々身震いを覚えながら、ジムに向かう。
―午前9時　エンジュジム前―
さて、エンジュジムに着いたはいいが、あまり人の気配がしない。
いくら朝方とはいえ、疎らにすぎる人通りに本当にジムなのか疑っていると、マツバ揮毫の物と思われる張り紙があった。
―長く修業の旅に出ます。探さないでください。　マツバ―
「なんじゃこりゃ!!」
レッドは訳がわからなくなり、叫ぶ。
「なんとまあ取ってつけたような……。しかし困りましたわね。これだとバッジが……」
エリカが息をつきながら言うと、後ろから声がした。
「リーダーはウチらどすえ!」
見計らってきたかのように出てきたのは5人の和服を身にまとう煌びやかな格好を

した女性である。

「何なんですか、あんた方は」

レッドは不機嫌なせいもあり、少々ぶっきらぼうに言った。

「何だとはいけずな人どすなぁ。この姿見て見覚えありまへんかー？」

まずはタマオが言った。

「色彩豊かで煌びやかな京友禅に、菜の花簪（はなかんざし）……。舞妓さんですわね」

エリカは端的に言い当てる。

「ピンポーン！　正解どす。さすがエリカはんどすな、きちと教養が備わっとる。京友禅と加賀友禅の違いをハッキリ言い当てられる人はそうそうおらんどす」

サツキは言うと、気持ちよさげに手に袖をやりながらホホホと笑う。

「それに比べてレッドはんは……。うちらの職すら知らへんとはいくらバトルが強うても、いつか恥をかきますえ」

コモモがレッドをあざける。

レッドはそれに対し冷や汗をかきながら意地を張った。

「し、知ってますよまいこぐらい」

「ほならお聞きしますえ。芸者と舞妓の違い。ざっくり言うとなんでしょかー？」

サクラが問題を出した。
答えを知るはずも無いレッドは窮する。
「皆さん出身はどちらですか？」
エリカはさりげなく世間話をし始めた。レッドは人の気も知らず悠長な事しやがって等と思っていた。
「うちら皆、エンジュ生まれのエンジュ育ちどすえー。皆仲のええ姉妹どすー」
タマオが上がり調子の声でそう言う。
「まあそうなんですか！　私、タマムシで芸者」
エリカはわざとらしく素っ頓狂な声を出して続けようとしたが、
「エリカはん！　それ以上は言ってはあきまへん！」
サクラに何かを気づかれたのか、制止される。
そこで彼はエリカの世間話にヒントを得る。そこで直感からなんとか答えにたどりつき、大きな声で言った。
「どこでやっているか！カントーでやっているのが芸者でジョウトがまいこ！」
「どこか浮ついた物言いどすな……。ただ、勘の良さは認めるどす」
サツキは素直に認めた様子である。
「さて、無駄話はそれくらいにして、あんさんがた挑戦どすか？」

タマオが話を戻す。
「そうですけど……。もしかして代行ですか？」
レッドが尋ねた。
「そうどす。エンジュのしきたりでリーダーが居てない時は、資格を持つうちらが代行を務めることになっております」
サクラに続いてサツキが言う。
「うちらの場合はマツバはんが居なくなる前に本人直々に頼まれたんどす。昼と夜は忙しないから朝限定でやっとります。で、バッジが欲しければうちら五人に勝っておくれやす。一人一人戦ってねえさんのタマオに勝ちなはったらこのファントムバッジを差し上げるどす」
コモモが淡々とした調子でそう言う。
「五人全員がジムリーダーという認識で宜しいのですね？」
エリカがサツキに尋ねる。
「事実上はウチがリーダーどすが……。それでも間違いではないどす。あと、途中の挑戦辞退は最初からやり直しになるどすえー」
俗に言うリーグ方式である。
「よし！頑張るぞ！」

「私もです！」

――――

この後、二人は別々に戦い５人全員を倒した。

「二人とも流石でおわすなぁ。惚れ惚れしたさかい、ファントムバッジ、受け取るどす」

タマオが二人分のファントムバッジを手渡す。

「有難うございます！」

エリカがお辞儀をする。

「ここから先は東西に別れとりますー。東に行けばチョウジという街に着き、そこはヤナギというおじいさんがジムリーダーを務めとりますえ」

タマオの隣に居たサクラがそう案内した。

「西に行けばアザキに戻りますー。そこにはミカンというまだ幼い子がジムリーダーをしとります。ほな、あんさんがたお気張りやすー」

タマオ及び舞妓たちの励ましを聞いた後、二人はジムを出た。

―ジムの外―

「ふう……なかなか手強かったですわね」

エリカが息をつきながら言う。

「仮にもブイズだしな……。五体連続はマジできつい。つかよく、ブースター突破でき

たな」

レッドは素直に感心していた。

「ルンパッパが頑張ってくれたのが功を奏しましたわ……。さて、折角エンジュに来たのですし、少し観光でも致しません事？」

エリカはそれとなく、目を輝かせながら提案した。

「お前知識自慢したいだ」

勉学に関しては完全な門外漢であるレッドにとって蘊蓄を語られるのは結構な苦痛な様子である。

「何か仰せになりました？」

レッドは何か言い返そうとしたが、エリカの見せざる圧力で抵抗をあきらめた。

「じゃあどこ行くの？　やけた塔？」

レッドは既知の限りで観光名所を捻り出す。

「左様ですわね。まずはそこに致しましょう。まだ入れれば宜しいのですが……」

という訳で2人は焼けた塔に向かった。

―焼けた塔―

焼けた塔は少し再建が進んでおり、関係者以外の立ち入りは禁止されていた。

「あら、噂は聞いておりましたがダメでしたか……。豪壮華麗であったカネの塔の焼け

た後の趣深き所……、もう一度見てみたかったですわ」
　エリカは肩を落とす。
「歴史でやった記憶あるなぁ……。つかなんで焼けたの？」
　レッドは尋ねる。
「一人の僧侶が、カネの塔に対する美に自らの病状や生い立ちを重ね、憧れと反感で放火したと三島由紀夫氏は言われてますが、実のところは分かっていないそうですわ。なにしろ、そのお坊さんは真相を聞きだす前にお亡くなりになられましたからね」
　エリカの説明にレッドは納得している。
「なるほどね。にしても見事に焼けてんな」
「はぁ……焼けていても中には貫と呼ばれる伝統工法などがあるというのに……。残念な限りです。しかし、これだけではありませんわ！、スズの塔に参りましょう。エンジュのジムバッジを持っているのである程度中には入れるはずです」
　そういう訳で2人はスズの塔へ向かった。
　―スズねの小道―
　入り口を通過し、紅葉……ではなく緑の木の葉が舞う小道に通りかかった。
　今日の風は少し強く、葉が一層舞っていた。
「うーん……、時期が悪かったですわね。秋ならばかなり美しいのですが……」

エリカは大いに残念がった。
「いやー、これはこれで十分綺麗だと思うよ」
「貴方は秋のここに来た事が無いからそのような事がいえるのです」
エリカは語気を強くして言う。
「あー……分かった分かった」
エリカと論争しても勝てるはずがない為、レッドはすぐに引く。
「ところで貴方。スズの塔の本当の名前、ご存知でしょうか?」
エリカはレッドに尋ねた。
「え?銀閣寺だろ?」
レッドは自信満々に答える。
「よく知られている名ですわね。では、もう一つの名前は?」
「は? それはーあれだ……」
レッドが苦心しているとどこからか声がする。
「慈照寺、もしくはスズの塔単体で表すなら、銀閣」
「せ、正解ですー、どなたでしょう?」
エリカは狼狽して、キョロキョロと周りを見る。
その時、小道の脇の木から黄色の髪、紫のマフラー、暗色系の服に身をまとった青年

がやって来た。
　目鼻立ちは整っており、その上どこか余裕をもった据わった目。身長はレッドと同じか少し大きいくらいだ。とにかく容姿端麗という言葉が似合う青年である。
「フフフ……、やはり、エンジュシティはこういう教養のある人にこそ来てもらいたいものだね。おっと、自己紹介が遅れた。僕の名前はマツバ。エンジュシティのジムリーダーだ」
　マツバと名乗ったその男は2人の真ん中付近にまで近づく。
「流石ですわ……、尤も、貴方ほどの人ならば常識でしょうけど」
　エリカは感じ入ったような声で言う。彼女の発言にレッドは引っかかる。
「どういう事？」
「あら、ご存知ではないのですか？　マツバさんはエンジュ大学首席ですわよ？」
　レッドは目がくらんだ。エンジュ大学は内国における主に文系分野の金字塔である。
「ハハ、エリカさんに比べれば大したことは無いよ。さて、それはそうとここにいるって事は、もう舞妓さん達とは戦ったという事だね？」
　マツバは心地良く流れるかのように喋喋と話す。
　見た目の良さに加え、尋常ならざる頭脳。レッドからすればまさに天敵というべき人物である。

「ええ、そういう事です。どうしてマツバさんはわざわざジムをたたまれたのです？」
「僕はこれから、ある所に行くからさ……。組織を止めるためにね」
　マツバの発言にレッドは食いついた。
「それって一体どういう事です？」
　マツバは静かに話し始めた。
「ロケット団がまた性懲りも無く動こうとしている。でも普段だったら僕は見逃すよ……、僕にはあまり影響はないし、何より僕個人には関係ない。でも今回は勝手が違うんだ」
「え？」
　レッドが目を丸くする。
「僕の千里眼で見た限りだと、ロケット団はエンジュ大学を拠点として動こうとしている。しかしあのロケット団がどうしてエンジュ大なんかを拠点にするのか、不思議じゃないか？」
「確かにそうですわね。普通でしたら大きなビルがあるところなどに潜伏しそうなものですしね」
　エリカはマツバの疑問に同調する。
「だから、更に精査した。すると、あのオーキド博士の姿が浮かんだんだ」

「は……はい!?」

エリカはかつての教授の名を聞き、思わず声をあげる。

「信じられないだろう……、だけどこれは事実なんだ。オーキド博士はエンジュ大とタマムシ大の教授……、どうしてタマムシを拠点に選ばなかったかまでは分からなかったけど、ともかくエンジュを舞台に選んだんだ」

マツバは淡々と話す。

「ば……馬鹿げてる！　博士がロケット団と組むなんて……！」

レッドは大いに憤慨する。恩師が悪の組織と手を組むことなどレッドには信じがたいことであったからだ。

「僕だって最初は受け入れ難かったさ。でもね、信じざるを得ないんだよ……、２０日の件を見るとね」

「……、どういう事です?」

エリカは更に尋ねる。

「昨日、エンジュ大学でオリエンテーションがあった。そこで集団催眠機とやらをつかって参加した生徒からおよそ５０００匹を催眠でかっさらったのさ……！」

「証拠は……あるんですか?」

レッドは怒りを殺しながら冷静にマツバに尋ねる。

「証拠……、残念ながら僕の頭の中にしか確たる証拠は無いね。ただ、この事について僕自身が精査した資料ならあるよ」

「そんなの証拠と言えるのですか！　所詮はマツバさんの千里眼。超常現象によって得れた物！　そんなの……２１世紀の世の中で通用するわけない！」

レッドは声を荒げる。

「……、わけないね。ただ、直に僕の言った事が本当だって分かる日が来るさ。どうあれ、僕は、博士から５０００匹以上のさらったポケモン達を取り戻す為にエンジュ大に行く。もしかしたら僕は死んでしまうかもしれない。だからジムを空けたのさ。……まあ舞妓さんにもこの件は言えなかったけど」

マツバはそう締めくくる。

「本当に、行かれてしまうのですか」

少々の間を空けた後、エリカは尋ねた。

「やはり君は冷静だね。そうだよ。例え君達が止めようと……僕は行くさ。でだ、君達に一つ言っておきたい事があるんだ」

「何ですか？」

エリカはまたも尋ねる。

「もし僕に万一の事があれば……、代わりにオーキド博士を止めてくれ。ただ、それだけ

だ。じゃ、僕はこれで」
　そう言ってマツバは立ち去ろうとする。
「待て」
　レッドは敬語を捨ててマツバを呼び止める。
　マツバは黙ってレッドを見る。
「バカじゃないのか！　いくら千里眼とはいっても本当にそれが起こってるかどうかはあんた以外の誰にも分からないし、証明しようも無い！　そんなものに命を懸けるなんて……エンジュ大だかなんだか知らないけど、いくらあんたが頭良くても真性の馬鹿野郎だっ！」
　レッドの大喝にマツバは低く笑いながら答える。
「誰が信じてくれなくてもいいよ。僕が、僕自身で、この目で、貰い受けてからずっと付き合い続けたものが見た物を信じる。それで行動を起こすには十分だよ。馬鹿野郎ならそれでも結構。ただ、それが君自身に跳ね返らないことを祈るばかりだ」
　そう言うと、マツバは次こそ立ち去っていった。
「……、並々ならない覚悟が見えましたわ」
　エリカは静かにそう言う。
「全く本当に馬鹿馬鹿しい……!!　どうして、どうしてオーキド博士が……！」

レッドは地を何度も踏みつけながら怒りをぶつける。
「貴方が仰せのとおり事の真偽は分かりかねますわ。とにかく今は静かに見守りましょう」
彼女はレッドの肩を叩きながら静かに宥める。
「それにしても……」
レッドはエリカに注意を向ける。
「まさかマツバさんがあそこまで勇敢なお方だとは、思いもしませんでしたわ」
レッドは彼女の何気ない一言に大きく心を抉られた。
どんなに異常だと言っても、エリカの心には響かなかったということなのだ。
それと同時にマツバに好印象を持ったということもレッドにとっては無視しがたい出来事である。
「そ……そうだな」
レッドは自らの印象を下げまいと言いたい事を抑え付けてエリカに同調した。
その後、スズの塔の一階部分を見学し、エンジュ観光を終える。

―午後5時　スズの塔　関所前―

2人は次のジムをどちらにしようか迷っていた。

「どちらにしましょう？」
「うーむ、ヤナギってどんな人なの？」
「素敵なおじ様です。氷タイプの使い手という看板に従ってかクールな御仁ですよ。そして、ポケモンバトルはとても強く、一部では四天王並みという御声さえ聞こえます」
　レッドはエリカのその言葉に興味を持つ。
「フム、面白そうだ！チョウジへ行こう！」
「宜しいのですか？」
「そんなに強いというのなら戦うしかない！」
　それと共にレッドの心中には、強敵を打ち負かしてエリカに自らへの好感を上げようという目論見もある。
「貴方らしいですわね。そこに私は……」
　エリカは何か言いたげである。
「え？」
「いいえ、何でもありません。そうしましょう！」
　しかし、この日はもう夕刻となっていた為、ポケモンセンターに宿泊した。
―午後11時　ポケモンセンター　211号室―
　いつも二人が寝るときは大体レッドのほうが先に寝ている。

エリカについて少々懐疑的になりはじめていたレッドは彼女の真情を探りたいという一心で自らが寝ているとき彼女は何をしているのか。

そこから少しでも彼女の感情を読み取れないかということを考えつきレッドは寝たふりをして様子を伺っていた。

レッドは毛布に身をくるませ目を閉じたフリをし、彼女の視線とは正反対の方向で横になっていた。

寝ると告げてから数分。夫が寝たと見たのか彼女は鏡台の明かりをつけた後に部屋の電気を消して鏡台に向かい、椅子に座った。

その後は数十分ほど読書をしていたようで大した事となさそうだとうつらうつらとレッド自身も眠りにつこうとしていた。

しかし、その後彼女は読んでいた何やらむつかしい本を閉じ、Ａ４ほどの分厚い手帳らしきものを取り出しペンを執りはじめる。本を読んでいたときのようなゆったりとした感じとは違い、背を丸めかなり真剣な様子である。

これこそに彼女の真情が書かれているのではないかと彼は勘付き、しばし逡巡（しゅんじゅん）したがそのうちどうにかして彼女にばれないように中身を見れないか思案した。

しばらく考えた後図鑑のカメラを使うことを思いつく。

図鑑のカメラには観察用にズーム機能が搭載されている。幸い手帳らしきものの一

部が彼女の体より横に見えている。彼女は一心不乱に書いている様子でそうそう気づく事は無いだろう。立って離れた場所から見ることはそれほど難しい話ではない。

思い立ったが吉日とばかりにおもむろにゆらりとレッドは立ち上がり、彼女の後ろで図鑑を構える。バネの音がしたが幸い彼女には気づかれていない様子だ。

彼女をフォーカスに捕らえ、ズームボタンを押した……と思いきや。

「うわっ！」

どうしたことというのだろう。彼女の背中。玉のような素肌と下着が透けて見えたのだ。あまりのことにレッドは仰天し、思わず声をあげ、図鑑をベッドに落とす。

彼女もにわかに声がした為、彼を呼びかける声をあげたと共に後ろを振り向く。

レッドはしまったと思ったがすぐに

「い、いやなんでもないよ。なんでも……」

と、冷や汗をかきながら答える。

「どうしてお立ちになられているのですか？」

彼女は純粋な疑問で尋ねている様子だ。よほど彼女も驚いたのだろうペンは持ったままだ。ペンというより近くで見ると万年筆である。

なんと弁解しようか考えているとエリカのほうは開きっぱなしの図鑑が落ちている事に気づいたようで手に掛ける。

レッドはすぐに気づく。彼女は今レッドの前にいる。彼女の背中が見えたということは、あの状態のままカメラをレッドの前に向けるという事はつまり――――

そんな事態はすぐさま阻止せねばならないと思い立ち、ストライクもびっくりの速度で図鑑をひったくるように取り返す。

幸い彼女の方は何も見えていなかったようで当を得ない表情をしている。

「あの……、一体全体何が起こっているのかさっぱりなのですが」

「い、いやーあのさ。ピカチュウって種類によっては頭頂部に一本だけ違う色の毛があると図鑑にあったから俺のもそうなのかなーなんて思ったから出して確かめようと思ったんだよー」

明らかな棒読みの上、今考え付いた全くのでっち上げである。そしてそんな言い訳でタマムシ大学生物学部首席をごまかせるはずがなかった。

「何を仰せになられているのですか？　ピカチュウは、特にトキワの森のような場所で捕まえられるものは交配できると思われる個体はおのずと限られます。あの森に特異種があったという報告は寡聞にして……」

と生物学的見地から数分ほどそのようなことはあり得ないという事を話された。

「ハハハ……そうなんだ」

エリカは非常に可愛らしいとは思ってはいるがこのように、殊に学問に対して理詰め

なところはどうも慣れないなとレッドは思っている。
「そのような事実無根の謬説がポケモン図鑑に載っているとは甚だ遺憾ですわ！　明日ポケモン研究会に抗議のお手紙でも出そうかしら……」
　エリカがあまりにも思いつめた表情だった為、レッドは本当にやりかねないと思い、
「わー！　やめろやめろ！　え、えーと……。これはあれだ。俺が小さい頃読んでいたポケモンの本に書いてあったことで……図鑑っていうのはただの思い違いなんだよ」
　と大慌てで訂正した。このような事が知れ渡り真っ赤な嘘と知れ渡れば数日は表を歩けない程の大恥である。
「小さい頃……ですか。流石にそれならば時効ですわね」
　とエリカは溜飲を下げたため、レッドは胸を撫で下ろす。
　その後レッドはこうなったら自棄だとばかりに彼女に尋ねる。
「で、お前さっき何してたの？　ペン持ってるけど……」
　それを尋ねると彼女は恥ずかしそうに手を後ろにやり
「え!?　そ……それはですね……」
　彼女はにわかに赤くなる。赤くなるようなことをしていたのかとレッドは次の発言に期待を高める。
「に……にっきです！」

彼女は搾り出すような声でそう答えた。
「日記い？　なんでそれでそんな赤くなってんだよ……」
レッドは半ば落胆しながら言う。
「その……とても他人に見せられないようなことばかり書いている故」
「日記ってそういうもんだろ」
「殿方にはご理解頂けなくても仕方ありませんわね……。百聞は一見に如かず。露見したからには潔く、貴方にだけお見せします。いずれこのような日が来ることは承知していましたし」
と言ってレッドはエリカから先ほどの手帳（日記帳）を受け取る。
非常に端正な字で書かれていたが、一目見ただけでパタンと閉めた。
「ええ!?　どうして読んでくださらないのですか?」
「いや……お前……確かに日記だから自由なんだけどさ……。まずこれなんて読むの?」
と言いながら、まず最初に目に付いた「私か」という漢字を指差す。
「これは、『ひそ（か）』と読みますが……」
「そうか、んじゃこれは?」
次に「瀟洒」という単語を指差す。

「『しょうしゃ』ですが」
「こりゃ別の意味で他人に見せられんな……。マツバさんくらいしか読める人居なさそうだわ」
　と後半は小さくつぶやく。
「あの、どうしてそこでマツバさんが」
「いや、気にしないでくれ……。同じ日本語なのにここまで苦戦するとは思わなくてさ……。ところで日記っていつからつけてんの？」
「母上に勧められてからですから……13年ほどでしょうか。家に戻れば全部取っておいてありますわ」
　13年。エリカは現在20歳だから7歳の頃から書き続けてきたということである。
「それって……毎日？」
　レッドは恐る恐る尋ねる。
「用事があってどうしても書けない日も少なからずありましたが、9割ほどの日は書いていると思いますわ」
「そか……凄いな。んじゃ俺もう寝るわ。エリカもほどほどにして切り上げろよ」
　と言ってレッドは床につこうとする。しかし、ふと日記帳をあげられて何も無いはずの机にまだ一冊同じ大きさの手帳らしきものがある事に気づく。

「どうかなさいました?」
「いや、何でも……おやすみ」
と言ってレッドはベッドにつく。時はもう0時近い。
その後もエリカの観察を続け、もうひとつの手帳に注目する。
図鑑を使ってエリカの裸でも見ようかなどという不埒な思考も出たが、それは流石に本人が可哀相な上、実力で奪い取りたいという念も強くある。それにもしエリカに露見したら三行半をつきつけられかねない。
あれから三十分して日記帳は片付け今度はその手帳らしきものに手をかけた。
先ほどよりもさらに根をつめている様子で、1時くらいになって彼女は身の回りのものを片付けようやく床についた。
翌朝出発し4日ほどでチョウジタウンに到着した。
―チョウジタウン　元忍者の里、チョウジ。
ポケモンセンターのみで店は土産物屋しか無い田舎町である。
しかし風光明媚な所故か否か心もおおらかな人が多い。
かつては土産物屋の地下がロケット団のアジトだった。
高齢化が進んでおり三人に二人が高齢者だ。
大学はないが、高校までが有る。

―3月26日　午前6時　チョウジタウン―
チョウジタウンに到着すると、レッドは大きく伸びをする。
「のどかな所ですわね」
「何かラジオ体操している人も居るし健康そうな人が多い印象を受けるね」
「確かに。そうですね」
「さて、ジムに行ってみるか」
―チョウジジム―
貼紙が出されている。
―現在外出中　用のある人はいかりの湖まで　ヤナギ―
「これはまた闊達な字だこと」
「仕方ない、いかりの湖に行ってみるか」
いかりの湖までは鉄道が走っている。
2人は急ぎなので止む無く鉄道を使っていかりの湖へ向かう。
―午前6時40分　いかりの湖―
ヤナギは毎朝いかりの湖で行水をしている。
「うむ、着実に春になっておるな。日を追うごとに水も温かくなっとるの」
着替えながらそんなことをヤナギは言う。

傘寿を迎えたというのに、体はすこぶる丈夫である。
「ヤナギさーん！　今日も精が出ますねぇ！」
少し離れにいた漁師が大声でヤナギに呼びかける。
「何、ただの日課じゃよ」
ヤナギは快活な声で猟師に答えた。
「今日も活きのいい魚が獲れたんですよ！　朝ごはん食べていきますー？」
クーラーボックスを持ち上げながら漁師は言った。
「うむ。では、馳走になろうかの」
ヤナギはその強さと人徳でチョウジ一帯の人々に好かれているのだ。いわば長老の立ち位置である。
そうこうしていると、列車から降りたレッドとエリカがヤナギを見つけた。
「あ、ヤナギさん！」
「？、おーエリカ女史ではないか。という事は」
「俺もいますよ」
「おー、これはこれは良い夫婦が来たもんだ！　一緒に朝ごはん食べて行かないですかー？」
漁師は二人を見て気分を高揚させたのか声を更に張り上げて2人を朝ごはんに誘う。

なんとも太っ腹な漁師である。
「そういえば朝ごはん食べていませんでした。ここはお言葉に甘えましょう」
「そうだな」
「それにしてもここまで来たか……。バッジは何個集まったかの？」
ヤナギが二人に尋ねる。
「4つ。正確には12個です」
レッドはキレのある声で答える。
「フム、これがもし初心者だったら、挑戦は断ったが……、レッド君。君とは一戦交えて見たくてのお。老体ながら首を長くして待っとった」
ヤナギは杖を前にやりながら言う。
「そうですか」
レッドはヤナギの一挙一動に他とは違う威厳を感じ始めている。
「ですってあなた。ヤナギさんから期待されてるようですよ！」
彼女は夫が期待をかけられて嬉しいのか調子のいい声で言っている。
「いや、エリカ女史。女史の実力にも期待しておるぞ」
「え？　私も、ですか？」
エリカは自分のことまで待ち望まれているとは思わなかったのか、意外といわんばか

りの表情になった。
「ここまで一緒に旅路を共にして来たということは、女史の如く既に出来た方に言うには過ぎた事かもしれぬが、人間的にも、そしてジムリーダーとしても成長してきたということじゃろう。君たち夫婦の実力、この年寄りに見させてもらおうかの」
この物言いにレッドは更に自らを引き締める。自らの対峙する相手は予想以上に大きい。
「まー今は積もる話はぬきじゃ、ますはあの漁師の朝餉をごちそうになろう。あいつの作ったテッポウオの刺身は美味いぞ！」
ヤナギは、俄かに表情を明るくした。なるほど、普段は好々爺な性質なのだろう。
レッドは腕でせっついてエリカに朝餉とはどういう意味なのか小声で尋ねた。
エリカが答えようとすると先んじてヤナギが答える。
「朝飯の事じゃ」
「え!?　聞こえてたんですか？」
レッドは有り得ない事態に狼狽していた。
「わたしもかつてはキョウの師匠だったのだ。滅多な口はたたかんほうがよいぞ。カッカッカ！」
レッドはヤナギの常人離れした身体能力に底知れぬ恐怖を一瞬だけ覚える。

漁師の家で朝餉を食し、チョウジタウンへ戻った一行。だが、正直レッドは朝ごはんの味など大して記憶に残っていない。

―午前９時　チョウジタウン　ポケモンジム―

「さて、改めて。このチョウジジムリーダーのヤナギだ。私は君たちよりも何倍も歳月を重ね、ポケモンとも接してきたつもりだ。冬のヤナギ、ヤナギに雪折れなしと恐れられし私の実力。二人は果たして破れるかどうか楽しみだのう。では参ろうか……。行け！　ジュゴン！　ユキノオー！」

ジュゴンとユキノオーは堂々とフィールドに姿を現す。

二人はポケモンのレベルに愕然とする。

「レベル９４と９６……？」

これまで戦ってきたジムリーダーたちの平均は８０レベル前後。

それを軽々と越えているのだ。しかしここまで来て引き下がるにもいかない。

「行け！フシギバナ！」

レッドは相手が水がいる為迂闊に炎を出すのは命取りと判断。

氷相手に草は出さないと踏んでいるだろうという虚を突く目的でフシギバナを繰り出す。

「おいでなさい！　ラフレシア！」

エリカはラフレシアを繰り出す。
ヤナギは目をきりりと引き締め、小さく呟く
「愚かな……。ユキノオー！　吹雪！」
「わるいごは、お仕置きだっぺー!!」
雪の風が吹き始め、フシギバナやメガニウムの肌を撫で始める。
「ラフレシア！　ジュゴンにマジカルリーフ！」
「フシギバナ！　ユキノオーにしびれごな……」
しかし時すでに遅かった。
吹雪が直撃し、両体とも倒れる。このフシギバナには既に対策としてヤチェの実を持たせていたにも関わらずこの有様だ。
「……!!」
レッドは、目の前で起こっていることが信じられず、思わず目を背ける。
「どうした？　……もう終わりかの？」
ヤナギの言葉は先ほどまでの優しい声とは違うものだった。獲物を射止める狩人。いや仕留める忍者の顔、そして声であった……。
―こうして、チョウジタウンについたレッド一行であったがそこのジムリーダーヤナギはレッド・エリカにとって最大の強敵であった。さて、この戦いに軍配が上がるのは

……？

第六話　二つの巨壁　終―

第七話　大姦の蠢動

ヤナギの圧倒的な実力の前に呆然としていると
「……、そんなものだったか」
その言葉がレッドを奮い立たせた。
が、行き過ぎた衝動は同時に見誤る原因にもなる。
「行け！バクフーン！」
エリカもそれに続いてポケモンを出す。
「おいでなさい！　ダーテング！」
ダーテングはボールから出ると手に持つ椛状の扇を構え、臨戦態勢に入る。
「ジュゴン、潜れ！」
ヤナギが指示するとジュゴンはフィールドを池のようにし素早く潜る。
「戻れ、ユキノオー」
ヤナギは炎タイプが出て旗色悪しと見たのか、ユキノオーを引っ込める。
二人は次に何を出すのか警戒する。
「行け！　パルシェン！」

パルシェンは輝く二枚貝を誇示するかのごとく悠然とフィールドに立つ。
レッドはこの時点で、相手は水タイプを多用することにより弱点を埋めようとしていると推測。しかし、エリカの方はといえば
「戻りなさい、ダーテング。おいでなさい、ルンパッパ！」
この状況ならばダーテングに日本晴れをさせてもいい筈である。
レッドはエリカの行動の意味をすぐには推察できなかった。
「バクフーン！　パルシェンに雷パンチだ！」
レッドは疑念を抱いたまま、そうバクフーンに指示する。
彼女はわずかに眉をしかめた。まるで、それは死ににいくようなものであると言いたげなように。
「心の底から痺れてしまいな！」
バクフーンはそう言いながら迅速に電撃をまとった拳をパルシェンに叩き込む。
しかし、ナパーム弾を喰らっても耐え切る鋼鉄とも言うべき貝にそのような攻撃など無謀に等しい。鈍い音が響いたがパルシェンは平然とした顔でいる。
バクフーンへの反動は大きく、手を赤くしながら必死に耐えている様子だ。
「他愛も無い……。パルシェン！　雨乞いだ」
フィールドは雨状態になる。ここでレッドはエリカの行動の意味に気づいた。

しかし、レッドが気づいた頃には時既に遅く

「ジュゴン！」

ヤナギが指示すると、水をまとったジュゴンが砲弾のごとくバクフーンの背後に突撃する。

バクフーンはあまりに咄嗟の事の上に手の痛みが引くのを待っていた事も重なり、まともに技を喰らってしまう。

バクフーンは押し出されるかのようにフィールドの端まで吹っ飛ばされた。

著しく体力を消耗したが、まだ戦える状況ではある。

この状況を見かねたのか、エリカはそっとレッドに耳打ちする。

「貴方、今の状況を見るに炎ポケモンは限りなく不利ですわ。ここは相手の流れに乗りましょう」

エリカの耳打ちにレッドは

「確かに……この状況で日本晴れをしてもすぐに雨に変えられる。だけど、どうすれば……！」

このバトルは２ｖｓ１。ヤナギ側は6体使えるが、レッドとエリカが使えるポケモンは2分の1で3体のみ。そしてレッドは現在一体失っている。

つまり、選択の余地があるのはここだけと言うことだ。

レッドは数分熟考する。ヤナギの方は黙然としつつこちらの出方を伺っている様子。
「エリカ……。俺はバクフーンを信じる」
「そ……そんな無茶です！　今のバクフーンは風前の灯」
「だからこそ、その灯を信じるんだ。とにかく俺の言うとおりに」
レッドの発言に何かを見出したのか、彼女はそれを聞くと
「左様ですか」
とだけ答え、ルンパッパの後ろに戻る。
「ルンパッパ、日本晴れです！」
ルンパッパが踊ると、雨雲は払われ、瞬く間に炎天下となる。
まさかルンパッパにその技を覚えさせているとは思っていなかったのかヤナギの目が少々細まる。
チャンスは一ターンのみ。レッドはまず堅牢な守りを持つパルシェンに照準を定める。
「バクフーン、パルシェンにソーラービームだっ！」
その指示と共にバクフーンは太陽光を収集し、ひとつの束を作ろうとする。
「このままだと堂々巡りだの……。戻れ、ジュゴン」
時勢を読んだのか、ヤナギはジュゴンを戻す。

そして戻した瞬間にパルシェンにソーラービームが貫通。草の大技には如何にパルシェンといえど耐え切れず、一撃で沈黙した。

漸く一体を倒せたことにレッドは安堵する。しかし、それ以上にヤナギがジュゴンを戻したと言うことはこの天候を変える気がないという一種の意思表示。

しかし、今のバクフーンは猛火に加わり日本晴れという得手に帆をあげたかの如く本領を発揮できる状況。逆に相手方にとっては窮地に陥っているといっていい。

レッドはこれを相手が投げたと看做すべきか、それかまた別の策があるとでもいうのかということで期待と不安が交差している心境である。

「よくぞパルシェンを下したな。流石は噂に聞きし伝説のトレーナー……。だが、レッドよ」

呼び捨てで呼びかけられたので、レッドはヤナギに目を合わせる。

「あまり、年寄りを甘く見るでない」

レッドはその一言で目を大きく見開かせる。よもや自らの心を読んでいたとでもいうのか。

「行け、マンムー、トドゼルガ！」

二体はフィールドに姿を現すとこの時を待っていたかのように自信ありげな様子で屹立する。

両体とも相当な貫禄で、見るからに百戦錬磨の豪傑である。
しかし、レベル差があるとはいえ、素早さはこちらの方が上回る。そう確信したレッドは先手必勝とばかりに
「バクフーン！　トドゼルガにソーラービーム」
「マンムー。地震だ」
マンムーはバクフーンに先んじて大きく地を揺るがす。
光を集めている最中に激震が襲い、バクフーンは不意を突かれた格好で耐え切れずに地に臥せた。
「ここは安易にいかない方が良さそうですわね……。ルンパッパ、トドゼルガからギガドレインです！」
エリカは持久戦に持ち込もうと考えたのか、体力回復を優先すべくトドゼルガより体力を吸い取る。
大いに効いた様子だが、ダメージは体力にして三分の一。やはり一筋縄ではいかない。
そしてレッドはあと一体という状況に愕然とする。ここでもし倒れれば、自らの不敗伝説に終止符が打たれてしまう。
そんなレッドを見たヤナギは語りかける。

「どうした、レッド。怯えとるのか……かつてない劣勢に」
ヤナギは再びレッドを呼び捨てにした。その上、氷柱針で突き刺すかのように、冷厳な言葉を放つ。
「……ッ！」
レッドは歯を食いしばり、身を硬直させた。ヤナギの言葉が金縛りに近い感覚が襲ったのだ。
「その顔は敗北というものを知らぬ顔じゃな。ここまで常勝不敗で来たのじゃろう。だがの……」
ヤナギはまだ何か言うことが残っていそうだったが、一考したかのような仕草をした後
「いや、凡百の言を連ねるよりは、自らの身に直截刻み込ますほうが近道かの」
「貴方……」
エリカは、不安になり始めたのか、レッドの一挙一動を細やかに追い始めているように見える。
「行け！　リザードン」
レッドは今の状況を最大限活用しようと、炎ポケモンを出して正攻法で片付けようと

した。しかし
「月並みじゃ……失望したの。幕を下ろせ、マンムー。ストーンエッジだ」
「御意！」
リザードンはモンスターボールから出た瞬間、尖った岩塊の洗礼に遭う。四倍に加え岩の大技である。リザードンは耐え切れずに咆哮をあげる間も無く地に降りる。
レッドは旅をしてから、動もすると一生の間で初の敗北を喫した。
自らに起こった未経験の事態に出来た事といえば、空けたように立ち尽くす事のみであろう。
「エリカ女史。これでは勝ち目は無いの、それが分からぬほど愚かではなかろう」
いくらエリカといえど、残りの草ポケモンで残り5体の氷ポケモンに打ち勝つことはほぼ不可能である。弱点を突いたとしてもユキノオーのように草に抵抗力があるポケモンが出てしまえばそれまで。
彼女自身もそれをよく分かっているのか、黙ってルンパッパを戻す。
「それにしても、君には落胆した……期待したほどの実力ではない。力押しだけのなんの面白みもあったものではない。一言で言えば、無味乾燥だの」
そしてヤナギは憮然とした様子で、抑揚も無く、淡々とした様子で言う。しかし、それが尚更悔悟の念を、そしてレッド自身の情けなさを増幅させた事は自明である。

「……」

レッドはただ黙るだけである。

「この程度で伝説のトレーナーを名乗るなど笑止千万だの。バッジなど全て外し、マサラタウンからやり直せい」

「ヤナギさん！　いくらなんでも言いすぎですわ！」

エリカは夫への痛罵に堪えきれなくなったのか、ヤナギに反発している。

「ワシは主観を述べただけじゃ。それがレッドのトレーナーとしての贔屓目抜きの評価じゃよ」

ヤナギはそう総括する。

「しかし！」

余程我慢ならなかったのかエリカはなおも食い下がる。が、ヤナギは袖についた埃でも取り払うかのように、冷淡に返した。

「エリカ女史。聞き分けが悪うなったのう。前の貴女ならここで食い下がらず素直に引き下がるぐらいの聡明さはあったはずじゃ。もしかして、レッドと出会って少し愚鈍になったのかの？」

ここにきて、エリカにも言及される時がきた。どんな相手にも容赦はしないようである。

これ以上の反論はいたずらに傷を広げるだけだと判断したのかエリカは観念して引き下がる。
「とにもかくにも、まだお主等はわたしに挑戦するには早すぎるのだ。また出直すのだな」
二人は落胆しながらジムの入り口まで戻る。
ジムにいる例のおっさんが慰める為か近づいてきた。
「まあ元気だしてくださいよ。ヤナギさんはああ言ってますけどあなた方も十分凄いですって！」
「……」
しかし、2人はその程度の励ましでは癒え切れなかったようである。
「んな安いお世辞は聞き飽きた」
レッドは重い口を開くと、そうはき捨てた。
「お世辞じゃないですって。ヤナギさんは認めた相手に対しては厳しく接するところがあるんです」
レッドはおっさんの言うことに傾聴しはじめる。
「その上、認めた相手には必ず呼び捨てにします。あと、ヤナギさんマンムー出してまし

たよね」
「まさか」
レッドは感づく。
「はい。あのマンムーはウリムーの頃よりヤナギさんが長い間寝食を共にしてきた特に大事な相棒だそうで。それを出すということはヤナギさんに本気を出させた何よりの証なんですよ」
おっさんのその発言で、レッドの体内には戦慄が走り、自らの身を引き締めさせる。
「全く余計な事をベラベラ喋りおって……」
「あ！　いつの間に」
おっさんは素っ頓狂な声を出し、何事かと2人は声の方向へ体を向けた。
いつの間に、ヤナギが姿を現している。完全に気配を消していたようだ。
「ヤナギさん」
「レッド！今この男の言った事は全て誠じゃ。わたしは、お主の力を認めてはいる」
「……」
「だがの、わたしに勝つにはやはりバッジが必要だ。ここから西に行けばアサギに着く。そこでミカンと戦い、その後で南西に渡りタンバでシジマと戦え。そこまで集めた暁には二度の挑戦を許そう」

「分かりました」
しかし、その二人に勝った所でヤナギに勝てるかどうかはまた別の問題である。
レッドは猶予が与えられたとはいえ、非常に沈痛な心情である。
「決して挫けるでないぞ……さあ、行って来なさい」
ヤナギは2人を送り出した。
レッドとエリカはポケモンセンターで回復した後、修行の為敢えてスリバチ山を経由することにした。

話は少し前に遡る。
―3月20日　午後9時　エンジュシティ　マツバ邸―
集団催眠事件がエンジュ大学で起こったことを千里眼で悟ったマツバは、オーキドの悪行を確信し、自らの命を擲(なげう)ってでもポケモンたちを取り戻す覚悟を固めた。
そしてその夜、生まれてからの知音(ちいん)であるミナキを呼び出して一部始終を話した後、マツバはジムに張り出す紙を書いている。
「さてと、これでいいかな。筆に迷い無く、なかなかの出来だ」
マツバはジム前に張り出す紙を書き終えた。墨書の効果か、どこかしら威厳が醸し出ている。

そしてその傍らには何十枚もの書き損じがあった。
「おい、いいのかそんな君に恋焦がれる婦女子たちを心配させるような事を書いて」
マツバの親友であるミナキは冗談半分でそう言った。
「目を覚まさせる特効薬だよ。あんな身も心もさもしい連中なんか相手にしていない」
マツバはそう切り捨てた。歯牙にも気にかけていない様である。
「相手にするのはタマムシ大首席のお嬢様だけか」
ミナキに調子のいい声で突っ込まれると、マツバはたじろぎながら
「さ……才女には、秀才が釣り合う相手になる」
そう言うとマツバは赤面をミナキに向ける。
「随分な自信だけど、なんだかんだでまともに一回も話したことないんだろう?」
「うるさいな。待てば海路の日和ありと言うだろ」
マツバは毅然と反論するが、ミナキはおちょくった調子で
「お前、エンジュの貴公子だなんだともてるくせに本当に惚れた女には晩生なんだな。その挙句にレッドとかいうのに横取りされて……」
「スイクンに魂を抜かれた君に、僕の気持ちは分かるまいよ。それに、あの二人はどう見ても合わない。遅かれ早かれ破談になるよ」
マツバは即座にそう返した。

「マツバの千里眼でか？」
「まさか。付き合ったと聞いて以来会ってもいないのに……。ただ単に僕の直感だよ。願望とも言うかもしれないけどね」
　マツバはどこか暗い表情をしながら言う。
「そうか。まあ、両人共に私は会った事もないし判断のしようが無いがな。それはそうと本当に行くのか？　死にかねないぞ」
　ミナキは声調を変えてマツバを気に掛ける。
「例えそうだとしても責務を放り出す訳にはいかないよ。エンジュの中で起こったことはリーダーたる僕が対処しないと」
　マツバは眉を引き締めて真剣な様子で言う。
　ミナキは親友の言葉というのもそうだが、その様子を見て決意を疑うような真似をするだけ無駄である事を悟ったようである。
「ハハ！　全く君らしいね……」
　ミナキは笑い飛ばした。マツバは怒るどころか、親友の変わらぬ姿を見て安心しているようだ。
「何か僕の身に起こったら、この手紙を二人に渡してくれ」
　マツバは一枚の手紙と、一つの分厚い封筒を手渡した。

「ああ、飛んで戻ってくるよ。バッジを集めてるなら数回はここに立ち寄るはずだからな。で、お前肝心の写真は？」
「おっと。エリカさんの写真が無くては見つけられないね」
　という訳でマツバはポケギアの中に入っている一枚の写真をミナキに転送する。
　ミナキは自身のポケギアを開き、写真を見る。
「ほほう……。これがエリカさんか」
「うっ……何でニヤついてるんだ」
　マツバはうつむきながら尋ねる。
「いやいやぁ。これがエンジュの貴公子様を一目惚れさせた女かって思っただけさ。というかこれ証明写真じゃなさそうだな。どうやって撮ったの？」
　写真の背景がある事に気づいたのか、ミナキは尋ねる。
「その写真は4年くらい前にやけた塔行っていたときに、鉢合わせしたから撮った物だ。お忍びで来たらしくてね……」
「え、それ絶好のチャンスじゃないか。どうしてそこでいかなかったんだ」
「彼女、あの時お祖母さん亡くしたばかりで、気を紛らわしに観光に来たらしくてね。僕があんまり話しても迷惑かと思って、5分くらい話して別れたんだ。写真は僕自身まだ青かったからねえ、せめて彼女と会った証拠でもと内心舞い上がってて少々強引に撮っ

ちゃったんだ」

エリカに対しては申し訳ないことをしたという気持ちの篭った口調でマツバは話す。

「お前まだ２４だろうが……。にしても、時間掛けて傷心の彼女を慰めていればもっと違う展開になったろうに」

ミナキは残念そうに言う。

「無理に写真撮って、それに加えてつけこむような真似はしたくなかったんだよ」

「全く、だからマツバは……まあいいか。写真はこれだけか？　４年だと顔つきも変わってるんじゃ」

「いや大丈夫だ。最後に年末の合同定例会で見かけた時も、それから少々垢抜けているくらいでそこまで変わってない。それに写真はこれ一枚だけ。それもお前に送った後消したから僕の手元には一枚も残ってないよ」

あれだけ恋焦がれているエリカの写真を消したというマツバの言葉にミナキは仰天する。

「お前……。そうか。それだけ覚悟決めてるのか」

「最後に彼女の顔が脳裏にでも来たら死にたくても死に切れない。それはそうと、しっかりと頼んだぞ」

その後、マツバとミナキは最後の晩餐と言わんばかりに、食事も交えて夜通し談笑し

続けた。

―3月21日　午後3時　エンジュ大学　構内―

この日、エンジュ大学では二回目のオリエンテーションが行われていた。

そしてその日、昨日出席出来なかったアカネが出ている。

アカネはトイレを我慢していた為、映像が始まると同時にこっそりと抜け出して用を済ませ、その帰途にあった。

しかし、その最中アカネは見覚えのある人物を見かける。

自らの同業者にして、親友であるマツバだ。

アカネは不思議に思ったのか、声をあげずに静かに尾行した。

そしてマツバはオーキド博士の研究室に入っていく。怪訝に思ったのかアカネはドアの真横に立ち、そっと聞き耳を立てた。

―研究室―

「ほほう、やはりきおったか。」

オーキドはそういうと椅子から立ち上がり、マツバの方向に振り返る。

「マツバ君」

マツバは、レッドとエリカに会った後、その足で大学へと向かっていたのだ。

「名をお忘れでなかったようで光栄です」

マツバは胸に手を当てて、恭しく一礼する。
「ジョウトの秀才の名を忘れるものか。それに、君はワシの授業を取っていたしのう」
オーキドは憎たらしげにそう言った。
「フ……そうですか。それはそうとオーキド博士！　貴方の持っているその機械、手渡してもらいましょうか」
マツバはオーキドの卓上にある、四角い機体を指差して言った。
「これはタダのプロジェクターじゃ、何も怪しくないがのぅ……」
オーキドはあくまでも知らぬ顔を続ける様子である。全く白々しい。
「私の名を存じておられるのならば、もうひとつのあだ名もお耳に入っていることと思います」
「もちろん存じておる、千里眼のマツバ……じゃの」
「そうです。私には森羅万象すべてを見通す千里眼を持っているのです。ですのであなた……いやあなたがたの企んでいることなど全てお見通しと言う事です」
「じゃからどうしたというのだ」
オーキドは少しずつ不快感を露わにする。声こそ平常どおりだが、苛立ちの雰囲気は十二分に出ている。
「ここまで言わないと分からないとは……天下の博士も堕ちたものですね！　気を最初

に感じてから数ヶ月間、貴方の行動をずっと伺ってました。博士。もう十分でしょう。罪を認めてください。自首なら今のうちです」

ここまで聞くと、オーキドは態度を一変させた。先ほどまでの好々爺な爺さんではなく、老獪な梟雄にへと変貌を遂げたのだ。

「ホッホ。やはり君の前では隠し事は出来ぬの。じゃが、君のような青二才に諭されたところで、改心すると思うかの?」

しかし、マツバはあくまで毅然としていた。そして、これ以上の問答は時間の無駄だと悟る。

「仕方無い……ならば実力行使です。エンジュシティジムリーダーとして……」

マツバが静かにそう言ったところで、ドアが少々乱暴に開かれる。

「待たんかい!」

「ア……アカネちゃん!? どうしてこんな所に」

どうやらマツバはアカネに気づいていなかった様子で、目を点にして彼女を見る。

「訳は後や。話は大体見当がつくで。大方、机の上にある怪しげな機械で、ウチたちを操ってポケモンを掻っ攫おうって魂胆やろ?」

アカネは中に入ってすぐにマツバの指摘している事を素早く推察したようだ。

「じゃとしたらどうする」

オーキドは嗤いながら尋ねる。
「決まっとる！　そんなん許されるわけあらへん。ジムリーダーとして断罪するまでや！」
「アカネちゃん。これは僕の街で起こったことだ。隣町とはいえ、君を巻き込むわけには」
マツバは諭すような口調でアカネをこの場から離れさせようとするが、彼女はすぐさま
「何言うとるんや！　もしそのポケモンを悪用されてばら撒かれ、エンジュが制圧されたら次に狙われるんわコガネやで！　内国一の大都会、そうそう見逃すはずあらへんやろ？」
アカネの返答に、オーキドはまたも嗤いながら
「ホッホッホ。ご名答。噂に聞いたとおりの豪胆さ、そして慧眼（けいがん）じゃのう。普通の女子なら縮みこんで何も出来ないというのに」
「ケッ、敵に褒められても嬉かないわ！」
アカネはオーキドを睨みつけながら言う。
「じゃがのう。少しは言葉に気をつけたほうがよいの。確か君は生物学部じゃったかの。ワシの講義は必修で『携帯獣学』という科目で設置しておる。あまり口が過ぎれば」

「そんな脅しには屈さんで！　この事を学長なりに告げればアンタは一発でクビや。それでウチにはなんの問題も」
「ホッホ……。通じれば良いがの」
　余裕そうなオーキドの様子に、アカネは不安を覚える。
「グッ……まさか」
「なるほど……。僕が思ってた以上にエンジュ大学は腐敗しているみたいだ……。僕の母校が、嘆かわしい限りだよ。でも、恐らく元凶はこのオーキド博士。これを叩けば自ずと元に戻るはずだ」
「せやな！　よし、なら一丁やったるで！」
　アカネが意気軒昂になっていると、マツバはもう一度説得を試みる。
「アカネちゃん。さっきも言ったけどこれはエンジュシティで起こった問題。確かにジョウト全体に影響を及ぼす可能性もあるけど、ここはまず僕一人に対処させてくれ」
「マツバ！　かっこつけるのも大概にせえよ！　そんなんやからエリカに振り向いてもらえな」
　アカネはマツバの態度に業を煮やし、つい口を滑らせ、慌てて両手で口を閉ざす。
「ど、どうしてエリカさんの事が……」
　マツバは秘密が漏れていたことに動揺する。オーキドはにやりと頬を緩ませる。

「わわわ……。今のは聞かんかった事に」
　彼はしばし黙した後
「そうだね。ここで立ち止まっている場合じゃない。という訳でアカネちゃん。僕一人に任せてくれ」
　マツバは気取られないように、何事も無かった風で振舞う。
「そ、それとこれとは話は別やで！　どうせジョウトの問題になるんやったら、同じ地方のジムリーダーが解決するのが筋ってもんやろ？　違うか？」
　アカネは問いかけるかのような口調で言う。
「ハァ……。分かった。そこまでいうなら一緒に闘おう。……まあ、一人より二人だしね」
「さすがマツバや。話せば分かるなぁ。という訳でオーキドはん！　ウチとマツバ、ジムリーダー二人があんたを倒すで！」
　アカネはオーキドに指を突きつけながら言った。
「漸く話がまとまったかの。それにしてもワシに叛旗を翻すとは」
　オーキドはおどけた様子でそう言った。
「貴方はもう、私が教えを請うたときのあなたではない……」
「ほう」

オーキドは興味深げにマツバを窺う。
「私は一人のジムリーダーとして、そしてジョウトを靖んじるために、貴方を討つ！」
マツバは強く言い放ったが、オーキドの反応は冷めたものだった。
「ふぅ……若いもんは血の気が溢れすぎていかんのう……。ワシはの、三種類の嫌いな人間がおる、一つは人の恋人を寝取る者。一つはわしのプリンを勝手に食うもの。そして最後は……」
オーキドは間を空ける。殺気を感じた二人はモンスターボールを構える。
「貴様らのごとく、下らぬ責務に固執するものじゃよ!!　行け！　……！」
二人は見たことも無いポケモンに硬直する。しかし、すぐに気を取り直し
「参れ！　ゲンガー!!」
「いったれ、ミルタンク！」
果敢にポケモンを繰り出した。
―10分後―
「う……嘘だ……」
「な、なんやねん……、どういう事や……」
あまりに簡単に決着が着いてしまったゆえか、アカネは涙すら流さずに困惑している。

「驚くのも無理はあるまい。ここに居るはずのないポケモンじゃからの」
二人は意気消沈のあまり俯いてしまっている。
「それにしても……」
オーキドはアカネの方を見る。そして。コツコツと間合いを詰める。
「これが今のコガネのリーダーかのう……？　全く、奴らも良い仕事をしたものよの」
オーキドは含意のありそうな笑いをする。
「なっ……ど、どいう事やねん」
「やはりリーダーはすげ替えて正解だったのう……。あの男ではもう少し骨が折れたわい。所詮、君はにわかどまりのトレーナーよ」
「な……なんやと!?　おのれのような老いぼれの残雪頭にウチの何がわかるっちゅうねん！　しばき倒したるぞ！」
アカネが激昂のあまり握りこぶしを作ったところで
「フ。恩を仇で返しよって……おい！」
オーキドが手を鳴らすと屈強な男が数人、研究室に入った。
「大人しくさせるんじゃ。殺すでないぞ」
そう指示すると、男たちは、神業ともいうべき速さで二人を拘束。
その後、男二人が頸動脈を締める。数分ほどで二人は気を失った。アカネが特に強く

抵抗したが、所詮は女の力である。男の拘束を振りほどくには遠く及ばなかった。マツバもやはり体つきは凡人並みなので同じ結果に終わる。

「よくやったのう。さて、どうしようかの」

「逃がしてやれ」

オーキドが思案していると、すかさずサカキが入ってきた。

「これはこれはサカキ殿。人足を貸していただきかたじけない。で、逃がせとはどういうことかの」

「この女だ」

サカキはアカネに目を遣る。

「アカネ君がどうしたというのじゃ」

「10分ほど前にオリエンテーションが終わり、ご学友が探している。もし下手にさらうと騒ぎになりかねない」

「集団催眠機は映像が無ければ使えぬしな……。やむを得ん。手早く記憶を消して適当な場所に置かせるとするわい」

オーキドはそう言ってアカネの頭部に装置をはめ込もうとする。

「いや、マツバも逃がしてやれ。この男はレッドとエリカに一時間前に接触している。今の時点で我々の仕業だと感づかれればリーグが動くかもしれんぞ」

サカキはそうオーキドに具申する。
「いや。それはそれで良いのじゃ」
「何だと?」
サカキは耳を疑ったのか聞き返す。
「だが今動かれては困るからのう。中途半端に記憶を消すとするかの」
「何故そんな余計なことを……」
「サカキ殿。言ったであろう? ワシの私心を話すつもりはないとな」
そう言うとオーキドは二人の頭に装置を被せた後、机に戻りパソコンを操作し始めた。
「そうか。そうだな……。それにしても、マツバを誘き寄せるだけの作戦が……、とんだ邪魔が入ったな」
「いやいや。こちらにも良い収穫があったわい。しかしエリカ君よ……ここまで多くの人を惚れさせるとは。全く世が世なら傾国と呼ばれたかも知れぬの」
オーキドは天井を見上げながら力なく嗤う。
―午後5時　同所　3F　女子トイレ　個室―
「……ちゃん……。アカネちゃん!」
アカネは体を揺さぶられてゆっくりと目を開けた。

目の前にはアカネの連れ合いである数人の女子が居た。皆心配そうに彼女を見ている。彼女が発見されたのを知ってか次第に人数は増える。
「あ、あれ……。ここどこやの？」
「あぁ良かったぁ気がついて……。終わっても戻ってこないから皆で捜してたんだよ！」
彼女はやや目を潤ませている。どうやら本当に心配していたのだろう。
「そうなんか……。ごめんなぁ心配かけてしもて……」
アカネはゆっくり立ち上がって全員に向けて頭を下げた。
「で、ウチがこないなところでどうしたっちゅうん？」
「多分これが落ちてきたんやないん？」
別の女子が大きなバックを重そうに持ち上げる。
「あぁそれで気を失うて……。そか。そやったか……」
アカネはどこか引っかかるのか半分納得したような風に頷く。
「どうしたの？」
「いんや。なんでもないんよ」
自分の思い過ごしの可能性もある為かそのまま彼女は友人と一緒にトイレを後にする。

バックは他愛のない物しか入っていなかったためそのまま遺失物として警察に届けられた。そしてそれを受け取りに来るものは誰もいなかった。

――

―3月29日　スリバチ山―

レッドとエリカは修行の為に数日ほどスリバチ山で修行する事にした。

空手大王とも戦い、成果は出つつあった。入山から2日ほどがたち、そろそろ戻ろうと、抜ける道に着くと黒ずくめの集団がいた。

「お前らは……」

レッドははっきりと記憶している。

いまから三年前に嫌というほど倒してきた黒衣の集団。ロケット団である。

エリカは黙しながら動静を見守る。

「うわ、聞いたとおり女連れてやがる！　おい、すぐに引き上げろ！　ここは俺たちが食い止める！」

一人の下っ端と思しき男がそう叫ぶと、後方にいる十数人の下っ端が一斉に上から抜けようとする。ヘリなりを使って脱出するつもりなのだろう。

「修行の成果。こんなにも早く見せる日が来るとはな！　出ろ、リザードン！　バクフーン！　炎で行く手を封鎖しろ！」

「合点承知ぃ！」

リザードンは飛行して、他の団員たちよりも先回りし、飛び乗ったバクフーンは火炎放射を続けて行く手を塞ぐ。

バクフーンが止めると、リザードンが炎を出す。こちらは大文字だ。二匹の息はぴったり合っている。

下っ端たちはなんとかとどめようと雑多なズバッドやコラッタなどのポケモンを出す。

「エリカ。護衛のポケモンを頼む。こっちは下っ端の相手で手一杯になりそうだ」

「承知しました。毒ポケモンに耐え得るのは、この子ですわね。おいでなさい、ロズレイド！　ラフレシア！　あの二匹を掩護（えんご）しなさい！」

二匹は命が下ると、地形を利用して岩を登り、リザードンの居る高さの近いところから相手の攻撃をマジカルリーフやヘドロ爆弾などを駆使して弾く。

その後、レッドは下っ端のポケモンを殲滅し、捕らえたと思われるポケモンを全て解放した。

「ふう。これでどうにかなったか……」

レッドはポケモンを戻し、一仕事終えたとばかりに息をつく。

「チッ……。覚えてやがれ！　俺たちのお目当てのポケモンはここには居なかったし、こんな山、もう用は無いわ！」

　下っ端はそう言って、逃散していく。

「あれ……、どう見てもロケット団だよな」

「あの、黒ずくめの服装。かつてタマムシで闊歩していた人たちと全く同じです。間違いないと思いますわ」

　エリカもその意見に同調した。

「どうやら、マツバさんの言っていた事……。当たっているぽいな。認めたくないけど……。ワタルさんにも言っておくか？」

「いえ、ロケット団はゴールドさんが壊滅させてからまだ半年程しか経っていません。これだけの短期間でここまで勢力を盛り返せた理由。たとえば、何か余程大きな援助を得たと証明できるものがないと、信じていただけないでしょう」

　エリカははっきりとそう返した。

「いや、確かポケモンリーグには監視権とかいうのがあったんじゃ」

　レッドのいう監視権とは、ポケモンリーグはポケモンに関する一切の処理を政府から公的に認められている唯一の民間団体という建前を守る為にリーグの理事長にのみ与えられた権利である。

反ポケモン団体とは、ポケモンを奴隷化したり、国家の安寧を乱す兵器として用いたりしようとする団体で、ロケット団が良い例である。

行使がなされると、理事長や委託された人物はその団体に対し、捜査することが出来、場合によっては必要な処置をとることが認められる。

ワタルがゴールドと共にチョウジのロケット団アジトを潰したりしたのが監視権の一環といえる。

「反ポケモン団体に対する監視権の事ですか？　あれは一度、監視内容を裁判所に提出し、許可を頂かないと行使できない規則になっているのです。それもそれなりに必要性が認められないと許可は降りませんわ。まあしかし、言い換えれば捜査権と執行権ですからね……。国の機関でないものが用いるが故に適用には慎重を期しているようで」

ポケモンリーグは完全な民間団体である。先の監視権などはリーグの設立から現在に至るまでの歴史で勝ち得てきたもので、決して国からの命令で動いている訳ではない。

今日リーグは全国どころか海外（イッシュ地方など）にまでその支配を広げており、ポケモンバトルの人気も冷めることなく続いている。その為、ポケモンを管理、使用する機関としては絶大な影響力を有している。その上、バトルの機関として人々からの人気も高い。しかし、その為に国からは恐れられており、リーグが暴走した場合に国がある

程度コントロール出来るように国有化の提案を何度かしている。裏では憲法に第四の権力機関として盛り込もうなどという話もあったくらいだ。しかしリーグは天下り先になったり、国の御用機関になるのを大いに嫌っているため悉く拒否している。

　国の言うことには従おうとしないが、現在までの所リーグ自体に目だった悪行はない為、国民感情の点からみてそうそう文句はつけられない。国からすればリーグは目の上のたんこぶなのである。

「うわ……お役所だなあ。それじゃあ仕方ないか。何か証拠を掴まないと……。それにこの〝山〟とはおさらばって」

「それ、私も気になりますわ。何を企んでいるのでしょうか」

「むぅ……。まあ。気になるけど今はいい。先に進もう」

　という訳で、レッドとエリカはエンジュシティの方角へと歩みを進めた。

　―3月30日　午前7時　エンジュシティ―

　エンジュシティに着くとエリカの散策に付き合いながら、やけた塔に通りかかる。

　すると、目立たない路地の隙間に人が項垂れながら座っている所を発見。怪訝に思って二人はその場に向かう。

　エリカが顔を覗き込んでみると、それはマツバであった。

レッドが揺すり起こすと、マツバは程なく目を覚ました。
「あれ……。ここは？　それに……、エリカさん？」
自らの名より先にエリカの事を口に出したマツバにレッドは少々癇に障ったがここは水に流し、
「やけた塔のあたりです。マツバさんこそ、どうされたんですか？」
「うーん……今日って何日？」
エリカはポケギアを取り出し、日時を確認し、マツバに言う。
「30日か……。僕の最後の記憶は21日に二人に会ったこと。ここ9日間の記憶が全く無いんだ」
「推察するに、恐らく……オーキド博士に記憶を消されたかと思いますわ」
エリカはこれまでのマツバの発言を総合して、そう結論を導き出す。
「エリカ！　何言ってんだ、博士がそんなことする訳」
レッドはこのよに及んでも、未だに博士の潔白を信じている。
現実を直視しないレッドに業を煮やしたエリカは、遂に柳眉を逆立てる。
「いい加減にしてください！　マツバさんにこのような事をする可能性がある人が、その人以外に誰が居るというのですか!?　恩師を庇いたいというお気持ちは理解できますが、いい加減目を醒ましてくださいまし！」

エリカが怒声を上げるのは二回目である。
それも、叱りつけるという意味では初めてエリカを怒らせたのだ。
レッドはここまで言われて漸く、オーキドに対して疑念を抱く。
「記憶を消されたか……。とすると、直談判には行ったみたいだね」
と、言いながらマツバは立ち上がる。
「左様ですわね。わざわざこのような行動を取るなど自らのやった事をこれ見よがしに認めたようなものです」
「僕がオーキドの所に行ったせいでこうなったとしたら、もう一度行ったとしても記憶を消されるだけ……。別の方策を取ったほうがいいね」
「ポケモンを救うことは諦めたということですか」
レッドは嘲った調子でマツバに言う。
「諦めた？　冗談はよしてくれ。こうなったらリーグに監視権を用いて、エンジュ大学内を捜索してもらえるよう地道に証拠を集めるしかない。……うん？」
マツバはエンジュ大学の方向を向いた途端、うつむく。
「どうされました？」
「どうも起きてからおかしいと思ってたら……千里眼が使えない」
「ええっ？　それってつまり……」

「大学内で具体的に何があったのか、意地でも教えたくないという事か……。にしても僕の目に細工をするとは……許せない」

マツバは自ら勝ち得た物を奪われて、大いに憤慨している様子だ。

「マツバさんのお力まで制御するとは……敵は凄まじいまでの科学力を有していそうですわね」

エリカは大いに警戒している。

「ポイントを絞った記憶消去といい、それも含めてオーキド博士なら不可能じゃない……そういう訳か」

レッドはようやくオーキドが黒幕という点について半信半疑ながらも腑に落とした。とはいえ、内心は決して穏やかではない。

「これから、どうなさるおつもりですか」

「こうして生還出来たし、ジムには復帰するよ。それで、怪我しない程度にどうにか証拠を探ってみる。ミナキ……ああ、僕の古い友人だけど、あいつにはこれまで調べた書類も渡している。あれを元にどうにか根っこを掴んでみせる」

マツバは冷静に語ってはいるが、憤懣(ふんまん)やるかたない様子は十二分に二人へ伝わった。

「そうですか。体を大事にして、どうにか良い成果を得られるようにお祈りいたしますわ！」

普段のエリカならば社交辞令で済ますところ。しかし、レッドの目には私情も大いにはらんでいるように映った。
「うん。頑張るよ！　さて、ここにまた来たと言う事は二人は次、ヤナギさんの所かな？」
レッドは痛いところを突かれて面食らった。
「あの、実は……」
エリカはヤナギに負けたこと、スリバチ山で昨日まで修行していたことを事細かに話す。
「そうなのか……。ヤナギさんは同じジムリーダー僕らなんかとは格が全然違うし、負けてしまうのも無理は無いよ。それにしてもあそこにもロケット団が居たのか……。謎は深まるばかりだ」
「マツバさんは山を狙っていることについてどう思われますか？」
エリカが尋ねる。
「岩、地面ポケモンを使って、盾にするつもりかもしれないね。攻撃するポケモンを囲むようにイワークなりゴローン、ハガネールなり配置すれば鉄壁の防御になる。ジョウトには最大の弱点となる水や草のジムリーダーが居ない。対抗できるとしたらタンバのシジマさんとかアサギのミカンさんくらいだけどあまり大量になると対処しきれない

かもしれないし……」
「カントーにはカスミさんが居られますわ。私は草ですし、上手に挟み込めば突破することは容易かと思われますが」
「そうか。そうだね……とはいっても、そこまで対抗策があっても敵はさらに上手かもしれない……。油断は禁物だ」
マツバはそう結論付けた。
「焼けた塔も少しずつ再建が進んでいるようですわね」
エリカは話題を切り替える。
確かに前来たときよりも、少しだけ高くなってるような気がするとレッドは思う。
「うん。出来る限り伝統工法に沿って再建すると聞いてるよ。とはいっても、焼け落ちたといっても昔の面影が残ってる貴重な遺産だし、あのままで良かったんだけどな……」
「昔ですか……。そういえば、マツバさん。私がここに来たとき、愁眺(しゅうちょう)の最中にあった私を慰めてくださいましたわね」
エリカは微笑みながら、マツバに語りかける。
「お、覚えててくれてたのかい？　ただ単に言葉を交わしただけなのに」
マツバは意外だった上に嬉しいのか、にわかにはにかむ。

「言葉を交わしただけなどとんでもありません。あの当時の私は塞ぎこんでいたせいで、話す気力も無かった物ですから……。マツバさんとお話ししたのが契機になり元気を取り戻せたのです。本当にマツバさんには感謝していますわ。有難うございました」

エリカは本心から謝意を述べている様子である。そして、深々と頭を下げる。

「いやいや。そんなお礼を言われるほどの事じゃ無いって。さ、さてと僕は歌舞練場に行って戻った事を伝えないと……。じゃあね」

「あ、待ってください！」

マツバが立ち去ろうとすると、エリカはまだ用事が残っているのか呼び止める。

呼び止められると、彼は振り返る。

「ポケギアの番号。交換いたしませんか？　私、マツバさんのように学識がある方とは前々から交流を持ちたいと願っておりまして」

マツバは三秒ほど俯いた後、

「いいよ！　望むところだ」

と、笑みを浮かべながら快諾した。

という訳で、エリカはマツバと番号を交換した。

その後、マツバは機嫌良さそうに、歌舞練場の方向に去っていった。

そしてエリカもまた、友達が増えて嬉しそうな様子である。

しかし、途中から取り残されたようになっているレッドは、不機嫌というよりも大いに疑念を抱いている目をしている。
「さてと、貴方。アサギシティに向かいましょ」
「エリカ」
レッドはエリカの発言を遮り、重みのある声で言った。
「な……何ですか？」
エリカは語気からただならぬ気配を察知したのか、畏まった風になる。
「お前、本当に俺のこと好きなのか？」
「は、はい？　何を唐突に」
彼女は突然、分かっているであろう事を伝えられて、当惑する。
「無理しているなら、もうついてこなくていい。俺だって辛いんだ……」
そう言って、レッドは一人ゲートの方向に向かう。
「そんな……。貴方、待ってください！」
しかし、レッドは止まろうとしない。
エリカは、追いかけて、少しだけ躊躇したが、最終的に彼を後ろから抱き止める。
まさか、キスすら拒む彼女が自らこのような行動に出るとは思わず、彼は初めて感じる彼女の温もりを受けながら立ち止まった。

―第七話　大姦（だいかん）の蠢動（しゅんどう）　終―

第八話（上）　苦難と心と

―3月30日　午前8時頃　エンジュシティ　カネの塔敷地内―

エリカは、立ち去ろうとするレッドの背後より躊躇しながらもそっと己が身を委ねた。

彼自身、最初は何が起こったか把握できずにいた。

しかし、委ねられた瞬間より感じる彼女から発せられるかぐわしき香り、そして何より全てを受容するような服を通じての体の温かさから漸く彼は彼女より抱き寄せられた事を感じ取ったのである。

レッドにとってこのような経験は初めてである。幼少のころ、母親に甘えていた覚えはあっても、妙齢の女子の肌をじっくりと感覚として味わった事は彼の記憶にはないからだ。

レッド当人にとっては嬉しさと共に大きすぎる刺激となった。彼は彼女にそれを悟らせまいと

「どういうつもりだ」

と、声だけは毅然そうに取り繕った。

エリカは姿勢を維持したまま、感情のこもった声で話す。
「嫌です。それに、わたくしは無理などしておりませんわ」
「なんでだよ……。お前、マツバさんと話しているときの方が楽しそうだったじゃねえか！」
彼女はその言葉に対し、ハッとしたかのような表情になる。
「マツバさんに対して少々好意的に接しすぎたのは、貴方にとって不快に映ったかもしれません。しかし、私は特にマツバさんに好意や特別な感情など抱いては……」
「分かってる。だけどな仮にも夫である俺の前であんなにイチャついてた……。不安になるんだよ。もし……もしもマツバさんが本気でエリカの事狙いにきたらと思うと……」
レッドはそれが〝もし〟でなくなる可能性があることを知っていた。その為か、いささか声が震えている。その言葉を聞いたエリカはキッとレッドの首あたりを見つめ、少しだけ抱き締めを強くする。
「なにを仰せになるのですか……。私はそんな安い女ではありませんわ！」
「それも分かっている。だけど、いざマツバさんから告白されたら、お前はその場では断りきるかもしれないが……自然と意識して俺と比べるようになるんじゃねえかって」
「決して左様な事は致しませんわ！　貴方は貴方。マツバさんにはマツバさんの良さが

あります。それをいちいち比べるなどというのは無意味ですし、それに……」

彼女はそこまで言うと口籠る。恥じているのだろうか背中のあたりがにわかに暖かくなるのをレッドは感じていた。

「それに……なんだ」

彼女はレッドの問いかけにしばし間を置いた後、返答する。

「私は、そのマツバさんの良さよりも貴方に……その、惹かれたからこうして職を休んでまで貴方の旅路を共にしているのです。どうかそれを分かって……」

「それはお前、俺と旅をはじめた時点ではマツバさんの事大して知らなかったからだろ。わざわざ連絡先交換したのが何よりのあか……」

レッドが話している最中にエリカは口をはさんだ。抱擁はやめて、レッドの目をしっかりと見つめて言う。

「マツバさんは女性に対して晩生（おくて）の傾向がありますから、話す機会がなかったというだけのことですわ。連絡先を交換したのもただ単に学識を共有したいという目的のみです。疚しいことなど微塵も考えておりませんわ」

エリカはそう毅然と返す。

「本当か？」

レッドは半信半疑な心持ちで彼女に尋ねる。エリカは誤解が溶け始めている事に安

堵しはじめたのか先程よりは温和な口調で
「ええ、本当ですわ」
と、微笑みながら返した。
レッドは少々黙した後
「じゃあ一つ聞いてもいいか…　なんでお前急に俺に抱きついたんだ」
レッドにとってはそれが一番腑に落ちない点であった。接吻ですら強く拒んだ彼女が別れを切り出した途端に我が身を委ねるというのは彼自身の本能を擽り、本心を吐露するのをごまかそうとするエリカの算段なのではないかと疑っているのだ。
「それは、その……」
彼女にとってはなかなか答えにくい質問なのだろう。頬は紅潮し、顔の位置は変わらねど目線はレッドではなく塔の石畳に向けられている。
一分ほど経ったであろうか、彼女は口を開いた。
「貴方から離れたくなかったからです」
レッドは月並みな返答だと思うと、無言で身を翻しアサギ側へのゲートの方に向かおうとする。
すると、エリカは意を決したかのように声を上げて言う。
「そうでもしなければ、貴方を引き止められるとは思えなかったんです！」

レッドはその言を聞くとゲートに向かっていた足を止める。そして、エリカの方に顔だけ向き直る。

彼女の目には恥じらいのせいかそこまでしないとレッドを止められない自分への情けなさか、涙が溜まっていた。

「その……貴方は思春期……ですものね。その齢の殿方は異性に対する興味が非常に高いと聞きますし、実際に貴方の行動を見るにそれを表す行為は見られました。ですから、貴方が欲していると思われるですね……その……」

レッドはそこまでエリカの言葉を聞くと手で制した。

「分かった。もういい。お前の気持ちは十二分に伝わった」

と言って、エリカの少し前に立つ。

「あ……貴方？」

「ちょっと意地を張りすぎたな。お前に言い負かされっぱなしの気がしてさ。言われっぱなしなのも悔しいから、ちょっと試してみただけだ」

そんなレッドの言葉に対しエリカは驚いた表情を見せ

「あぁ。左様な事でございましたか……。安心致しましたわ。貴方がそんなつまらない事で責め立てをなさるような人でなくて」

「おう。だが、最後、お前が口ごもった言葉……。忘れるなよ。じゃあ、アサギに行くか」

エリカはほんのりと頬を赤くしながら
「は……はい。貴方！」
と続き、二人はカネの塔、そしてエンジュシティを去った。
―3月30日　午後8時30分頃　38番道路―
二人は道中でキャンプを貼り、野宿をしていた。旅を初めて数ヶ月が経過し、初めはアウトドアの実践経験が乏しく設営等に戸惑っていたエリカも手際よく行えるようになっていた。
二人は手持ちと共に夕食を食べ終わり一通りの世話を終えたあと眠りにつく。
世話といっても野宿の際は一定の区間を決めて放し飼い状態にして手持ち同士との交流を深めているだけである。（たまに野生のポケモンとも仲良くなる）
レッドはピカチュウやラッタ、カメックスなどとサッカーをして遊んでいた。一方でエリカは読みためていた本を読んでいる。基本的にエリカの手持ちは躾が行き届いているのか大人しい為あまり本人が手を煩わせることは無い。勿論エリカの手持ちも放し飼い状態で遊んでいる。
その為基本的に手持ちが構ってきた時以外は手持ちたちを横目にしつつ、読書灯持参のうえで本を読んでいる。この日も例外なくそうだった。
エリカが静かに本を読んでいるとのしのしと足音がする。リザードンだ。

リザードンは先ほどまでピジョット、ゴルバッド（ゲスト）とどっちが早く遠くに飛べるか競争していたが疲れて休憩がてらレッドとエリカのいるシートまで戻ってきた。
「あら、リザードンですか」
エリカは大きな影に気づくと本を持ったまま目線を上げて挨拶した。
「やあやあ姉さん。ちょっと疲れた茶をくれないか」
リザードンはそうエリカにねだる。リザードンとエリカはアクア号に乗る前、タマムシからクチバへ飛ぶまでの間から知り始めそれなりに関係は良好である。
リザードンの方もエリカの使用タイプからすれば天敵であるはずなのに存外柔らかく接してくれるので好意的な印象を持っていた。
そうでなくてもエリカはレッドの手持ちであろうと自分のであろうと分け隔てなく優しく接し、エリカさんと呼ばれる以外にも姐（姉）さんなどと慕われている。
「はい分かりました。少々お待ちを」
そう言って彼女は本を置いて、お茶汲みセットがあるテント内へと移る。
リザードンは暫く遊んでいるフィールドにたそがれた後、なんとなくエリカの置いて行った『菊と刀』と題のつけられた本に興味を示す。
相当読み古しているのかページは手垢で汚れてしまっているが、どことなく小奇麗で大切に保管しているのは見て取れる。気になったのでリザードンは本に触れようとす

る。
「リザードン！　それはダメですっ」
　いつの間に戻ってきていたエリカは煎れたお茶のあるお盆を脇に置いて、即座に本を取り返した。
「な、何をするんだい」
「これは本ですよ。食べ物じゃありません！」
　彼女は目をいからせ強めの口調で注意した。
　リザードンはジェスチャーで違うことを訴える。
「あら……？　私の早とちりだったのかしら……。ごめんなさい。どうもレッドさんの持たれているポケモンって食欲旺盛な方が多くてつい勘違いを」
　エリカは深々と頭を下げる。その後、お茶を出した。
　リザードンはお茶を啜りながら
「カビ坊もいるし分からないでもないが……。あぁおいし」
「ふぅ……。それにしてもどうして本を触ろうとしたのです？」
「いやそりゃどんなことが書いてあるのか気になったからだが……」
　リザードンの返答にエリカは目を丸くする。
「ええ!?　この本はカール・ベネディクトという方が第二次世界大戦後、日本を調査する

為に……（5分後）……という岡目八目という言葉がぴったり似合う内容の本なのですが」

「うーむ……よく分からんが難しい本という事か」

「ええ。それにしてもレッドさんの手持ちからこのような本に興味をもつポケモンが現れるとは……。リザードン。もしかして読書……というか勉強は好きな方でしたか？」

エリカの質問に対し、リザードンは快活に

「研究所にいた頃オーキドの爺さんから少しだけ勉強を教えて貰ってたんだが、その時は楽しかった。ゼニガメは聞いてるふりして爺さんのふざけた似顔絵とか描いて落書きばっかしてたし、フシギダネに至ってはずっと寝てたけどな。「ヒトカゲは偉いのー」と何度か褒めてくれたっけか」

「左様ですか……。これは何か可能性がありそうですわね」

その後、リザードンは何冊かエリカが持参していた本から比較的簡単なものを読み、分からない語句があったらそのたびに彼女に尋ねて教えて貰った。

いつしか彼はエリカの事を『先生』と呼ぶようになり、レッドの手持ちの中では一番懐くポケモンとなっていき。同時に一番賢いポケモンとなった。

―午後10時30分　38番道路―

さて、18時から22時まで手持ちを遊ばせた後、ボールに戻して、例によってレッ

ドが先に寝ている。
　エリカは、レッドが寝静まったのを見計らってその場を少し離れる。適当な岩の上に腰掛けてポケギアで親友のナツメに電話をかけた。二人は定期的に連絡を取り合っている。
「もしもし、ナツメさん？」
「エリカね。今日もお疲れ様。今どこにいるの？」
　他愛もない世間話のあと、エリカは本題を切り出す。
「私は、本当にあの人とやっていけるのでしょうか……」
「あの人って……まあ、レッド以外考えられないわね。どうしたの急に」
　エリカは今日レッドに言われたことを話した。
「それって。もしかしてレッドの方にはバレちゃってるんじゃないの？　あんたの好意が全部偽のものだってこと……」
「全部というと語弊がありますわね。私自身レッドさんに感じいっている部分はあるにはありますし、偽というのも疑義が残ります。少しだけ色をつけてものを申してるだけですわ」
　エリカはあくまでレッドが自らの伴侶にふさわしいか否かを見極めるために旅に同行しているに過ぎない。その為、レッドに対しては見かけほどの好意を抱いているわけ

ではなく全てレッドに気を持たせて飽きられないようにするエリカの撒き餌に過ぎないのだ。

ナツメはそんな彼女の返答にため息をつきながら返す。

「ほんと、口が減らない子ね……。それはともかく、あんたはどう思ってるのよ」

「私の心を試したというのがレッドさんの言い分です。しかし、それにしても別れ話で私の心を図るなどいささか度か過ぎてるとは思いませんか?」

エリカは片方の手で髪をいじりながらレッドの前では言い出せなかった本音を吐露する。

「そうね。それは私も同感だわ」

「あと、気になるのはレッドさんのマツバさんに対する感情です。もし本当に嫉妬の念を抱いておられるのだとすれば、レッドさんには申し訳ないのこですがそれは逆転することが不可能なだけに非常に見苦しいです。もし目に余るほどそれが見られるならお付き合いも考え直す必要があるかもしれませんわね」

「ふーん。それはどういう側面でよ?」

ナツメはなんとなくエリカに尋ねる。

「勉学の面でしょうか。前にナツメさんも言及されておられましたが、レッドさんは学のあるかたではありません。その状態からマツバさんに勝つというのはまず不可能で

すし」
「そ。で、実際エリカはマツバさんの事どう思ってるのよ」
「噂に違わず頭は宜しいですし、お話してとてもインテリジェンスを感じる方です。しかし、やはりどうも趣味が私には理解できかねるので学問の交流以外では好んで関わりたくはないですね……」
　と、エリカは遠くを見つめる視線で言う。
「そう。超能力を持つ立場からすれば彼は非常に興味のある人なんだけど……まあいいわ。で、あんたはこれからどうしたいの？」
「レッドさんに幻滅したというわけではない故、旅はもうしばらく続けるつもりですわ」
「ふーん。あんたの話を聞くに、レッドにはどうも被害妄想が強いケが見られるからせいぜい気を付ける事ね」
　その後、エリカとナツメは他愛もない話をして通話を切った。
「私は……。正しいのでしょうか……お祖母様……」
　エリカは一人呟いた後、しばらく黄昏て、テントに戻る。
　―3月31日　午前9時　38番道路―
　エリカと共に道を歩いていると突如レッドのポケギアが鳴り響いた。
　レッドはエリカに断って離れ、ポケギアをとり、相手を見る。画面にはグリーンと表

示されていた。
「何の用だよ」
「ようレッド。調子はどうだ?」
グリーンは快活な声でレッドに聞く。
グリーンとレッドもナツメとエリカほどではないが連絡を取り合っていた。
「どうにかな。お前の言ったとおりにやったら身持ちの堅いあいつが少しだけ崩れたよ。抱き着いてきてくれた」
グリーンは少々黙した後、元の声で言う。
「ハハ。だろ? 伊達にお前より女見てねーっての。いいか。ああいう堅い女はなぁ、多少手荒な真似をしてでもこっちからいかないと、いつまでたってもモノにすることは出来ない。なんたって自分の貞操や躰を大事に考えるんだ、自分からはそう易々と渡す訳ねえ」
グリーンは立て板に水の調子で話す。
「ああ。そうだな。でも、まだ俺は自発的にあいつの体に触れることを許されたとかそういうわけじゃない。この調子だとエリカとそれなりにスキンシップを取るのですら時間がかかるなぁ」
「やればいいじゃねえか」

その言葉を聞くと、レッドはわが耳を疑った。
「え？　何言ってんだ！　エリカとはまだ手をつないですらいないんだぞ」
「お前は何を聞いてたんだよ！　手荒な真似をしてでも事を進めないと、ああいう女はモノに出来ないって言っただろうが」
「いや……しかしなぁ」
「そうやって言い訳ばっかりしてたら、いくら恋仲とはいえ、何もできないまま終わる可能性もあるんだぞ！　お前はそれでいいのか？」
グリーンは半ば脅しのような口調でレッドに畳み掛ける。
「グッ……」
レッドはそうなることを何よりも危惧していた。
彼自身の心中としては確かにエリカの体を欲していないといえば嘘になる。
だが、彼女が嫌がっているのにも関わらず無理に事を進めていいのかという自制心も少なからず働いている。レッドはまず恋人らしいことを当たり前のように行える信頼、愛情の関係を構築することを第一に望んでいるのだ。
そのため、それ以上の行為をするように勧めるグリーンの提言はあまりにも飛躍しすぎている。だが、このままエリカの体に指一本触れられないまま終えてしまうのもレッドの望む方向ではない。

レッドは本能と理性の狭間で懊悩する。

「レッドよお。お前はもう進むしかねーんだ。果実を得たいなら、お前は一か八かの賭けをするしかない！　いいか、お前が俺の言ったことに従ってエリカさんに抱き着かせようと別れ話を切り出した時点で賽は投げられてんだ。いい加減覚悟を決めたらどうだ？」

グリーンは強い口調でレッドに実行を迫る。レッドは少しばかり沈黙した後、

「考えてみる。だけどさ……まさかお前の言うやるって……」

「フッ。そこは自分で考えろよな。おっと、もう彼女に会う時間だ。じゃあなレッド」

と言って、グリーンは通話を切った。

ポケギアをしまうとレッドは暫くその場に立ち尽くして考え込む。

グリーンの言うとおり、エリカは自分から躰を許すことはまずしないだろう。しかし、彼女が普通の女性よりもかなり強く貞操を意識していることは明らか。そんな女性に実力行使をすることが果たして良策といえるのか。

レッドはとにかくどうするのが良いのか考えつくす。

「貴方？」

レッド自らが思うよりも長く立っていたのだろうか、エリカが背後より呼びかける。

「ん？　どうした」

「どうしたって、それはこちらがお訊きしたいですわ。そんなに思いつめたようなお顔をされて……。もしかして先ほどのお電話で何かあったのですか？」
彼女はレッドの左に回り込んで心配そうな顔を覗かせる。
レッドはそんな彼女を愛おしいと思いつつ、口を開く。
「いや、なんでもない。行こう」
「貴方がそう仰るのであれば、それで宜しいのですが……」
彼女は釈然としなさそうな表情をしつつ、レッドの後を追う。
その後、三日かけて３８番、３９番道路を進んでいく。
―４月３日　午後５時　３９番道路―
アサギシティまで残り１㎞といったところで二人は大きな音を耳にする。
その後、光がおこり、やがておさまっていった。
不思議に思った二人は音がした森の中に入っていく。
「上出来だの。ミカンよ。今日はここまでとしよう」
二人にとって聞き覚えのある声がする。
そして、更に前へと進む。すると、バトルフィールドに出た。
「今日もありがとうございました。ヤナギ先生！」
と、若い女の声がする。

声の主はミカンであった。ミカンは深々とヤナギにお辞儀をする。
どうやらヤナギがミカンにポケモンの師事をしているそうだ。ヤナギはホホと笑いながら
「なに、同業の好で当然のことをしておるまでよ。それはそうと、そろそろアサギに二人が来るころだの」
「はい。ヤナギさんとの仕合や普段の修業で得た成果を存分に発揮させたいと考えています」
ミカンは顔を引き締め、強い意志を宿した眼で言う。
「うむ。しっかりやるのだぞ。相手が相手だから君にとっては大いに苦戦を強いられるやもしれぬがの」
「な、何を言うんです！　悠々と勝ってみせます。先生が勝てるのにあたしが負けたら弟子の名折れではないですか。この守りは如何にせめようと跳ね返しますから！」
ミカンは少したじろぎながらも、しっかりと返答してみせた。
「うむ、その意気よ。君の鍛えに鍛えた相棒で全力でぶつかるとよい。だが、無理はせぬように。鋼も、氷と同じく限度がある故の……」
そういうとヤナギは東の方角に消えて行った。
ミカンはヤナギがいなくなるまで深々と頭を下げ続けた。

頃合いを見計らって、二人はミカンに話しかける。
ミカンは驚いたがすぐに身を正し、
「ああ。お二人ですか……。遂に戻って来たんですね」
「ええ、ミカンさん。ヤナギさんにポケモンの指導を受けていたんですね……」
親交のあるエリカでも知らなかったことのようである。
「はい。ジムリーダーになる前からお世話になっている方です」
「どうしてです？　鋼タイプは氷に強いはずでは」
レッドはミカンに疑問を投げかける。
「いえ。あの、ヤナギさんは往年のポケモントレーナーでもありますから色々なタイプの強いポケモンを持っておられます。あたしが修業する時には主に苦手タイプのギャロップだとかドサイドンなどを使っていただいています」
「なるほど……」
レッドは納得した。
「さて、あたしは灯台であかりちゃんの世話をしなくてはいけないので失礼します。アサギでお二人の挑戦。待ってますから」
そう言ってミカンも立ち去っていった。
バトルフィールドには二人が残される。

「いよいよアサギか……」
「気を引き締めないといけませんね。ヤナギさんには及ばないかもしれませんがいずれも強者であることにはかわりありませんから」
「うん。そうだな。よし、いくか。あの段差を越えればアサギだっ！」
こうして、二人はアサギシティへ向かうのだった。

―4月3日　午後7時　アサギシティ―
夜のアサギは、この前来た朝のアサギとは違う顔を見せた。
灯台が遠くの海を照らし、船乗り達は早くも酔っているのか舟歌を上機嫌に歌いながら二人の前を通り過ぎたり、店の光は煌々とつき、路地を反射させ、街灯が不要なくらいであったりととても賑わっている。
港町のアサギは、2人がつい10日前まで来ていた上品で閑静なエンジュとはまた対照的な特徴がある。
「なんか久々だけど初めて来た感じもする」
レッドはそんなアサギを見て、こう感想を言った。
「あの時は港周辺にしかいませんでしたものね……こうして入口から入り、時間帯も違えば確かに新鮮です。港町アサギここにあり。といったところですわね」

エリカが総括した所で、レッドは本題に戻した。
「そうだな。で、まずはジムだけど……今日は寝よう。もう夜だ」
―午後8時　ポケモンセンター―
こうして二人はポケモンセンターに宿泊した。
それから、エリカが風呂に入った隙を伺いレッドはグリーンに電話をする。
グリーンは面倒くさそうに7回コールの後出た。
「なんだよ」
「いやあのさ……お前の言うとおりエリカをに……しようと思う」
「ほぉう。それで?」
グリーンは興味を持った風である。
「で、どういう風にやればいいと思う?」
「だからそれは自分で考えろっつたろが」
しかし彼は具体的な計画にかかわる気はないようである。
レッドは半ば必死な様子で言う。
「頼む!　俺さ、実はエリカ以外の異性と付き合ったことなくてそういうの全然分かんなくて」
「実はとか言わなくても知っとるわ!」

「茶化すなよ。それで、お前に相談もちかける前にも一回迫ったんだけど大きい声で拒まれちゃって……。お前何人もの女をベッドに連れ込んだんだろ？　教えてくれよ」
「なんだよその言い草……しゃーねーな。起きててダメだったら寝ている最中にいけばいいんじゃねえの？」
　グリーンの一言にレッドは瞳孔を収縮させる。
「それって……寝込みを襲えってことか？」
「だからそれはお前次第だっての」
「どういうことだよ」
「エリカさんに寝込みを襲われたと思われるか愛の証となる行動をしてくれたかと思われるかと言う事さ」
「俺のサジ加減って事か」
「そうそう。俺は三回くらいこの方法で成功してるんだ」
「ちょっと強引なくらいが好かれるということか……？」
　レッドは少しずつ真剣に検討し始めている。
「特にああいう女ならな。まー頑張れ」
「ありがとう。じゃあな」
　そう言ってレッドは通信を切った。

―4月4日　午前2時　同所―

レッドは寝るふりをして床についていた。エリカは読書や日記などをした後、1時ころに二段ベッドの下のほうで静かに寝息をたてる。

眠りについたと判断すると彼は静かに二段ベッドの階段を降り、彼女の寝顔を見る。月明かりに照らされた彼女の顔は儚げでとても美しかった。レッドは堪らずまず彼女の髪に触れた。

石鹸のよい香りが彼の本能を刺激し、手を少しずつ下に移す。頬を撫で首筋をゆっくりと触る。絹のように滑らかな感触に加え暖かい体温は彼を更に興奮させた。

「エリカ……可愛いよ」

そう彼女の瞼を見つつ、小さく呟いていると彼女は壁の方向に寝返りをうつ。

レッドは彼女の体勢を仰向けに直す。

彼は遂にエリカの胸部に注目する。レッドは思わず胸を弄る為に手を置き、少しずつ手を動かす。下着以外の部分が思っていた以上に柔らかく、初めて味わう感触にレッドの息が乱れ始める。

「ん……」

彼女の口から少しだけ色気のある声がする。今までに聞いたことがなく、普段の凛々しい声とは反対の艶っぽい声色であった。

レッドはたまらなくなって、エリカの着ているパジャマのボタンを外し始める。意識的というより本能に支配された状態でレッドは外している。

「はぁ……はぁ……」

彼は興奮のあまり吐息と共に声がわずかながらも漏れ始めている。

ボタンを全て外し、下着の継ぎ目が見える。しかしそこで彼女の目が開いてしまった。

彼女は目を開けると、声をあげる前に頬を真っ赤にした。

「え!?　……、あ、あの……」

レッドは彼女が動いたのを見て、言葉を失う。

「ッ!!」

彼女は上体を起こし、レッドの頬を平手打ちにした。

「な……何を考えているんですか!!」

そして気色(けしき)ばんだ面持ちでレッドを叱り付ける。片手を毛布を掴み、素肌を隠す。

「ご……ごめん!」

「ね、寝込みを襲うだなんて!　どうしてこのような事をなさるのです!?」

「襲うつもりなんかなかったんだ!　単に俺はエリカと愛の証になると思って」

「愛の証?　女性が無防備な時にむ……胸を触ることが貴方の申される愛なのですか

？」

彼女は冷ややかな視線をレッドに送る。

「あのさ……俺たちって仮とはいえ夫婦だろ？」

レッドは冷たい視線に押し切られないようにするために少し語気を強めて言う。

彼女は黙したままレッドを見る。

「だから……夫婦としてのスキンシップをとりたくて」

「ま……まだ旅をしてから二か月と経過していないのに急すぎます」

彼女はレッドから目を床に視線を移していう。

「……、ごめん！　エリカの気持ちを考えずにこんな……勝手なことして」

レッドは起立して深々と頭を下げて陳謝した。

「あの……一つお聞きしても宜しいですか？」

エリカはレッドに視線を戻し、真剣な様子で言う。

「な、何だよ」

「貴方はそれほど……その私の体に……興味がおありなのですか？」

「……ああ」

最早寝こみを襲っているため誤魔化すだけ無駄だと悟ったレッドはそう言った。

そして、そのまま逃げるように寝床に戻る。

彼女は乱れた衣服を正し、体を落ち着かせるとしばらくその姿勢のまま考えこんでいた。

―同日　午前11時　アサギジム―

一晩が過ぎた。

レッドとエリカはいつもよりも遅い時間に起き、言葉少なげで気まずい雰囲気のままミカンのジムへ入る。

ミカンは待ち構えていたかのように上座に佇んでいる。

「思ったよりも遅く来られましたね……。てっきり今日は来ないのかと思いました」

彼女は少々意外な風の表情をして言う。

「えっとその準備をしていたらいつの間にこんな時間になってて」

レッドは咄嗟にそう言った。実のところはレッドも大して寝ておらず寝坊しただけである。こういう時は普段エリカがフォローに入っていたが当の彼女はどこか上の空だ。

「そうなんですか。……、それはともかく。改めて自己紹介します。あたしはこの町のジムリーダーのミカン。使うタイプはシャキーン！　と輝くは、鋼タイプです。ヤナギさんの弟子として貴方たちに負けるわけにはいきません。鋼鉄の守りをそう簡単には抜かせませんよ！　行って、エアームド、ハガネール！」

こうして五つ目のバッジをめぐる戦いが始まった。レッドはラプラス。エリカはルンパッパを繰り出す。レッドはヤナギ戦の教訓からうかつにリザードン（炎ポケモン）を出すのは危険であると考えた。

「エアームド！　まきびし」

エアームドは高速でフィールドに向かい旋回しながら菱を撒く。

「ルンパッパ。雨乞いです」

エリカはラプラスを援護する為かルンパッパに雨乞いを指示。

ルンパッパは舞を踊ってフィールドに雨を降らす。

「よし、ラプラス！　ハガネールにハイドロポンプだっ」

しかし、ハガネールはすんでのところでラプラスの激流をよけた。当たれば一撃でやられたことは目に見えているだけにレッドは思わず小さく舌打ちをした。

「ハガネール！　ステルスロック！」

ハガネールは鋭利な岩石を口から射出してまきびしと丁度間になるように配置する。これでレッドはうかつにリザードンを出せなくなった。（ステルスロックで半分ほどダメージをくらってしまう為）彼は更にハガネールを仕留められなかったことを後悔した。

「エアームド。もう一度！」

エアームドはまたも菱を撒く。両体ともに身動きが全く取れなくなりそうなほどに敷き詰められる。

飛行ポケモンでない限り少なくとも四分の一のダメージはくらう羽目になる状況にレッドは焦りを見せ始める。

「ルンパッパ！　ハガネールにハイドロポンプですっ！」

ルンパッパはハガネールに激流をぶつけた。今度という今度は直撃したが特性が頑丈だったため体力を1残して満身創痍でありながらもたちつづける。

レッドは好機とばかりにエアームドの体力を削ることも考えて波乗りを指示。

波は高く上がり、敵方の2体に命中。ルンパッパも食らったが大したことは無い。ハガネールは轟音を立ててフィールドに伏せた。エアームドは6割ほど残して耐える。

「ハガネール。役目は果たしてくれたよ。ありがとう、ゆっくり休んで……。エアームドもよく頑張ったわ」

ミカンは小さく呟きながらハガネールとエアームドを戻す。

レッドはなんとなくではあるが勝負の行先に一抹の不安を感じていた。自分の手持ちが倒れたというのにミカンが余りにも冷静だからである。そんな彼女をみてレッドは得も言われぬざわめきを胸に覚えた。

「行って、ドータクン！　ジバコイル！」

次に出したポケモンはどっしりと構えた銅鐸のようなポケモンである。レッドもラジオで聞いたことはあったがやはりめずらしい形をしているとマジマジと見ていた。しかし、何よりも危惧すべきはジバコイルである。

「ドータクン。トリックルーム！　ジバコイル。ラプラスに雷を！」

なんということか。ドータクンの先制の爪が発動し、トリックルームによって素早さが逆転。その上、ジバコイルが早まった為即座にラプラスへ雷が下った。

さすがのラプラスもあのコイルの最終進化系という強大な特攻の前には抗えず一撃で倒れた。

「ルンパッパ。ジバコイルにやどりぎの種」

エリカはどうにかミカンにジバコイルをひっこめさせようとするためかやどりぎで暗に交代を迫る。しかしミカンは動こうとしない。

ルンパッパはジバコイルの円盤に種をうえつけた。

レッドは悩む。

雨状態が続いている為炎ポケモンは出せない。だからといって水を出せばジバコイルの前に散るのみ。草やノーマルでは致命傷は与えられない。ピカチュウでは火力不足。そして何より、どれをだしてもまきびしや岩に突き刺さるのだ。

レッドは苦渋の決断を迫られる。ミカンはレッドの動きを待つ。

エリカにヒントを求めようとアイコンタクトを試みるが、彼女は顎に手を当て物思いに耽ってしまっている。気づきそうにない。

「行けっ……！　カビゴン」

数分の熟考の後出した結論がこれである。

トリックルームの状況下ならカビゴンが先手を取れるだろうという目論見。

何よりもカビゴンには一応ばかぢからを覚えさせているため鋼相手には善戦するだろうという事。

しかし――

「いたっ……今日の晩御飯は小龍包が……」

問題は体力がきちんともつかどうかであった。

「カビゴン。はらだいこだ」

レッドは威力を最大限にする為ポンポコと腹太鼓を指示する。カビゴンの体力はまきびし等の4分の1減少と合わせて8分の1ほどしか残っていない。だが、次のターンでねむらせて全快させたあとに一気に叩く。

レッドはその作戦で行こうと考えた。

「ジバコイル！　ルンパッパに雷です」

ルンパッパに雷が下る。

なみのりの巻き添えをくらっていた為存外大きく効いておりルンパッパはひっくり返って地に伏せた。

エリカは無言でルンパッパを戻し

「おいでなさい。ダーテング」

ダーテングを繰り出す。日本晴れを発動させようとしているようだ。体力の4分の1が撒き菱と岩にもっていかれた。

「ドータクン。カビゴンに催眠術」

ドータクンはカビゴンに念波を送る。カビゴンは眠ってしまったが、すぐに持っていたラムの実を食べて状態を回復した。

この瞬間。レッドの計算は完全に崩れる。

つまり、体力の回復なしで木の実を使ってしまったという事だ。この事実にレッドは大きく動揺した。

ミカンはこの瞬間、少しだけ頬を緩めた。まるですべて計算ずくであったことを示さんとばかりに。レッドの中ではどうしてカビゴンに止めをさそうとしなかったのかという疑念が渦巻いていた。

そして一刻も早く火力で大きく勝るジバコイルを潰さんとばかりに

「カビゴン！　ジバコイルにばかぢからだっ！」

カビゴンは指示が下ると普段の穏やかさからは想像もできないほど猛烈な勢いでジバコイルに襲い掛かり最大限の力で木端微塵にした。しかし、ジバコイルは頑丈な為体力を1残してフラフラになりながら粘る。

「ドータクン。カビゴンにジャイロボール！」

ドータクンはその身を高速に回転させてカビゴンの懐に突っ込んだ。さすがに一たまりもなくカビゴンは巨体を地に伏せる。

これでレッドに出せるポケモンは残り一体となった。ヤナギ戦ほどではないものの不利な状況に追い詰められている。

「ダーテング。日本晴れです」

そして、先ほどまで空を覆っていた雨雲が消え去り、天候は晴れとなった。

しかし、トリックルームのターンはまだ2つ残っている。

晴れとなった以上レッドの選択肢は炎ポケモンを出す以外になかった。

「行け。リザードン」

レッドにとってジバコイルがいる中でのリザードンは大きな賭けである。

しかし、彼はリザードンの火力を信じてこれを出すに至ったのだ。

ミカンは目を見開かせてレッドを見た。

「……。ジバコイル！　リザードンに雷」

ジバコイルはリザードンに雷を下そうとした。
しかし、あと３０センチ手前で外し、リザードンは九死に一生を得る。
「ドータクン。重力！」
空間が歪み、ポケモンたちは少し潰されたかのような格好になる。
リザードンは地についてしまった。
「ダーテング。ジバコイルに辻斬りです」
ジバコイルはダーテングの素早い切りつけに対応しきれず、ついに地につく。
ラプラス、ルンパッパに致命傷を負わせたミカンの主力ともいうべきポケモンはその機能を停止させた。
「ジバコイル……有難う。本当によく頑張ったね。ドータクンも、もう休んでいいよ」
そう呟きながらミカンはジバコイルとドータクンを戻す。
「行って、エンペルト！　メタグロス！」
トリックルームの効果が切れるのはこのターン。
つまりリザードンに対してノーダメージで優位に立てるのはこのターンで最後である。
レッドには明らかにこのターンで潰しにかかっていることが見えていた。
「エンペルト！　リザードンにハイドロポンプ！」

エンペルトの放った水流はリザードンに命中。
しかし、晴れ状態であった為にそこまでの致命傷にはならなかった。
これを見てミカンはしばし考えた後
「諸刃の剣ですが……仕方ないですね。メタグロス！　地震！」
レッドはこの為であったかと頭を抱えた。
いくら不一致技とはいえあのメタグロスである。倒れてもおかしくない。
レッドは目を瞑ってしまう。
地は大きく震える。
１０秒ほど経ったであろうか、目をおそるおそる開けてみる。
すると、信じられないことにリザードンは満身創痍でありながらも体力を３０ほど残して立っていたのだ。ミカンの方も予想外とばかりにリザードンを見ている。
「リ……リザードン」
リザードンは呼びかけに対して右目だけレッドの方向にやり、にっと笑ってみせる。
「よし……。リザードン！　仕返しだ、メタグロスに大文字！」
「承知っ」
メタグロスは威力７００に迫る大技をその一身に受けることとなった。
大文字は見事命中し、メタグロスは消し炭に化したかと思う。しかし、炎が明けても

メタグロスは四本足の姿勢を崩そうとはしなかった。
「嘘……だろ」
　レッドは目の前で起こっていることが信じられなかった。リザードンもまた目を白黒にしている。
「残念でしたね。鍛え抜かれた鋼は、このくらいでは熔けないのです」
　ミカンは屈託のない笑顔を見せながらレッドに言う。
　よく見るとメタグロスのクロスしている鋼の交点あたりでモグモグしているのが見えた。どうやら木の実の力だったが、メタグロス自身の堅さも大いに相関していることは分かっていた。
　レッドは拳を握りしめながらミカンの言葉を記憶に刻む。
「ダーテング。エンペルトにソーラービームです！」
　ダーテングの放った光線は確実にエンペルトを射抜き、地震で弱っていたのも相まってその身を遂に地に伏せた。
「なっ」
「先ほどから見事だとは思っておりましたが……。しかし、詰めが甘いですわ。いくらリザードンを弱らせる為とはいえ、自分のポケモンに不利な技で巻き添えを食らわすだなんて」

「だ……だから諸刃の剣と言ったんです」
「左様ですか……エアームドに交代するなりほかに手は打てたと思いますけれど」
そうまで言われると功に焦った自分の浅はかさが見透かされているとでも思ったのかミカンは小さく労いの言葉をかけた後に、エンペルトを戻す。
「行って、ドータクン」
トリックルームの効果が切れ、もう一度有利にもっていこうと考えたのかミカンはドータクンを選択する。
しかしそうは問屋は卸さないとばかりに
「リザードン！　ドータクンに大文字だっ！」
リザードンはドータクンに灼熱の炎を放つ。最大限の威力といえるその技は見事に直撃し、さすがに一撃でやられただろうとレッドは思った。
しかし、炎が晴れてみると一部変色こそおこしていたものの倒れてはいない。どうやらこのドータクンの特性は耐熱のようである。
リザードンは一度ならず二度までも自らの最大火力の大文字で倒れなかった相手をみて目を疑っている
「だから言ったではないですか……。鍛え抜かれた鋼はそうやすやすと熔けたりはしないんです！　メタグロス！　地震」

「ダーテング！　メタグロスに辻斬り！」
　ダーテングが先制し、メタグロスを切りつける。さすがに大文字を食らった後では耐えきれず、メタグロスは四肢を崩して遂に沈黙した。
　あっという間に残り二体にまで二人は追い詰める。しかし――
「メタグロス。お疲れ様。あとでしっかり磨いてあげるからね……。行って、エアームド！」
　ミカンは表情一つ変えずに応戦し続ける。この豪胆さや力強さに段々とレッドはヤナギを彷彿とさせ始めている。
　そして何よりチョウジでの敗北をまた繰り返すのではないかという危惧が彼自身の脳裡に過っていた。
「ドータクン！　リザードンに催眠術」
　メタグロスが倒れた今、トリックルームを行っても無駄だと思ったのかミカンはまずリザードンを黙らせる事を念頭に置いたようだ。
　しかし、催眠術はそう何回も通用するものではなく、リザードンには一向に効かなかった。
「リザードン！　エアームドへ大文字っ！」
　エアームドさえ仕留められれば例えリザードンが倒れてもエリカがどうにか勝って

くれるかもしれない。レッドの中にはそんな楽観的な考えが芽生えつつあった。
しかし、結果はレッドの期待を裏切るかのように、大文字はエアームドより左２０センチの方向にそれてしまう。
ミカンは勝機を掴んだと確信したかのような表情で
「エアームド！　リザードンにブレイブバードっ！」
その声を載せたか否か、エアームドは鋭い弾丸のようにリザードンの懐を狙い、突撃した。
弾丸は確実にリザードンを射抜き、そして姿勢を崩したままリザードンは倒れ、起き上がる事は適わない。
レッドは咄嗟にリザードンの頭と首を持ち上げる。すると、目を合わせてリザードンは呟く。
「済まないな……。力が……足りなかったばかりに」
彼は数秒ほど黙した後
「いいよ。お前は十分に健闘した。寧ろこれは俺の戦略ミス。つまり俺の責任だ。お前や戦ってくれた皆には責任は無い」
そう言って、レッドはリザードンを戻した。三体全滅。
これによってレッドの敗北が確定した。

エリカは夫の仇を取らんとばかりに奮戦したが、ドータクンは倒せてもやはり弱点であるエアームドを突破することは敵わずに敗北した。

二連敗。まだ最初の地方であるというのにあまり宜しくない結果が続いてしまった。

「……」

ミカンは勝ったというのにどこか浮かない顔をしている。

「どうされました？」

エリカが尋ねると、ミカンは途端に

「いえ、その……。なんだかお二人に勝ったという実感が湧かないといいますか」

「どうして？　ミカンさん確かに強かったですよ。ヤナギさんに鍛えてもらっただけあるというか」

レッドはそうミカンを持ち上げる。

「そんな。あたしかなりギリギリでしたよ？　あの大文字が当たっていれば決定打になる技が出せるポケモンがもういないので負けていた可能性はありましたし……」

「確かにそうかもしれませんが結果は結果です。それを言うならあのジバコイルの雷がリザードンに当たっていればそれこそこちらの負けが早まっていた。ですから、おあいこです」

「おあいこですか……。確かにそうかもしれませんね」

そういうとミカンは納得したかのような顔をして話を終わらせた。
「ミカンさん。いつの間にか腕を上げられていて同じジムリーダーとして嬉しい限りですわ」
「いえいえ。エリカさんも草タイプだというのにここまで善戦するとは思いませんでした。きっとレッドさんみたいにフリーだったらそれこそチャンピオンを狙えるんじゃないかって思ったくらいですよ」
「まあ。お上手ですこと」
レッド自身そう思うこともあった。彼女の頭脳は一介のジムリーダーで終わらせていいものなのかと。そして、エリカ自身にもどうしてだか分からないがだいぶ余裕が見えてきたことにレッドは安堵を覚えつつあった。
エリカは社交辞令だとばかりに受け流すが、ミカンは真剣な表情で。
「いえ、これは冗談ではなく……」
「たとえそうであったとしても私はジムリーダーの座から上に行こうとは思いませんわー。チャンピオンや理事長なんて荷が重すぎますもの。私は一つのジムを切り盛りしていくくらいが性に合っていると思いますし」
「そ、そうですか。勿体無いな……。それはともかく、お二人はこれから?」
ミカンが尋ねると、レッドが答える。

「とにかく修行と探検の為まだ冒険していない西の方へ向かおうかなと」
「そうですか……。あの、南西には渦潮で有名な水道があるんですけど、そこを抜けるとタンバシティという街に着いてシジマさんというとても元気なお方がリーダーを務めているジムがあります。ヤナギさんほどではないですがその方にも稽古をつけて頂いておりまして……是非立ち寄られては如何でしょう」
「立ち寄るも何も基からそのつもりですよ。ミカンさん、次に会うときは必ず勝ちますから！」
そう言ってレッドは背をむけてジムを立ち去る。エリカもミカンに別れを告げた後レッドに続く。
こうして、レッドとエリカの旅は更に苦難となっていくのであった。
―第八話（上）　苦難と心と　完―

第八話（下）　赤き心は挫けない

―4月4日　午後4時　40番水道　砂浜―

レッドとエリカはミカン、そしてヤナギへの捲土重来（けんどちょうらい）を狙う為修行に勤しんでいた。

手持ちから控えまで出して互いに戦わせることによって戦闘技術の向上を図っている。レッドやエリカは時々見回って様子を見ていた。

例えば、やる気十分な手持ちが居たら軽く少し格上だったり、苦手なタイプの手持ちと戦わせたり、反対にやる気のないポケモンには気分転換に遊んであげたりした。

一時間が経過し、ポケモンは野放しにしつつレッドとエリカは荷物の置いてあるところまで退避し休憩している

「はぁ……ヤナギさんどころかミカンさんにまで負けるなんて……」

レッド自身未だにそのことが受け止めきれていないようだ。

ミカン当人の前では動じていない振りをしてもやはり動揺は大きかったようである。

「ヤナギさんの強さに関しては前々より聞き及んでおりました故、覚悟していましたが予想以上でしたわね……。ミカンさんに関しては正直、見当もしなかった強さでしたけれど」

「そうだな。にしても先を考えないと……」
　そう言いながらレッドは空を仰ぎ見る。
「私としては、もっと効果的な戦術を執るべきだと思いますわ」
「効果的？」
「はい。力技に頼るばかりではなく、状態異常を引き起こしたり、ステータスを下げる補助技をうまく組み合わせていくべきだと考えますわ。例えば、リザードンでしたら龍の舞を用いて素早さをあげてより機動性をあげたり、カメックスでしたら鉄壁を用いて守りを強固にし攻めに対する構えを万全にしたうえで効率的に攻撃できる波乗り一本に絞るという戦術を執るべきだと思います」
「なるほど……。エリカの言いたいことも分かるけど、俺はどうも大技の魅力が捨てきれなくてな……。それにヤナギさんやその教えに従うミカンさんに勝つにはそれだけじゃ足りない気がするんだ……」
　レッドは体育座りの姿勢のまま、眼前に広がるポケモンたちとその背後にある播磨灘を眺めつつ神妙そうな眼差しでそう言った。
「なるほど小手先の技術だけでは不足と……。そうかもしれませんわね」
「そう。決定的な何かが……。ところでさ、エリカ」
　レッドは目深に帽子をかぶり直し、エリカと目を合わせる。

彼女も改まった様子になって
「はい。どういたしました？」
と尋ねた。
「お前、いつもの調子に戻ってるよな……どうしてだ？」
彼女は一瞬合わせた眼を左下の方向へ逸らしたが、すぐに戻し、しっかりとした声で答える。
「私、昨晩貴方にされた時は本当に別れるべきかどうか深刻に悩んでおりましたの」
レッドは目を丸くするが、自らのしたことを考えれば至極当然の事なので特に何も言わず聴く。
「しかし、貴方はミカンさんと戦っている時どのような局面、窮地に立たされても基本的に慌てたりせず沈着に指示を出されておりました。それに、貴方の切り札であるリザードンが倒れたときも決して責める事をせず優しく労ってさしあげてましたわね」
「そんなの、当たり前の事だろ」
レッドは普段からやっている事を言われたので当然な風に返す。
そう言うと、彼女はわずかに熱の入った言い方で話す。
「当たり前ではないのです。強い方、特に貴方と同じくらいの年代の方は勝ち進んでいくと傲慢になり、ポケモンを労わることを疎かにしてしまいがちな事が決して少なくあ

りません。そのような中、貴方は年下で私も貴方も負けるとは思っていなかったミカンさんに敗北しても、自分の事のみにとらわれずまずポケモンを労わった……。それだけポケモンを大事に出来る方と共に旅出来る事が誇りに思えたからこそ、貴方ともう少し共に歩もうと思い悩みを断ち切れたのですわ」

　彼女は言い終わるとすっきりとした表情で茜色に染まりつつある南の空を見た。

「そうか……じゃあ昨日の事は」

「はい。綺麗に水に流しますわ」

「はぁ……よかった」

　レッドはその言葉を聞いて、自らの胸をなでおろす。

「しかし、だからといって次があるとは思わないでくださいませ。次されたら……そうですわね。訴訟も辞さないかもしれませんわよ。夫婦間であっても猥褻系統の罪が成立する判例はありますからね」

「ううう……そんな怖いことよしてくれよ」

「フフフ……。さて、これからどうなさいます？　私としては今日はアサギまで引き返し明日より水道に繰り出すのが良策に思えます」

　彼女は含み笑いをすると、いつもの柔らかな口調に戻してそう言った。

「ううん……。野宿するにもここらは砂浜でテント立てようにも億劫だし、そうした方

が良いな。ところでアサギにはアサギの灯台があって修行に格好の場所とか聞いたけどどうしてそこに行かなかったんだ?」

レッドはふと思い出して彼女に尋ねる。

「ここは源氏物語の舞台になった須磨海岸と伝わる場所なので一度来てみたかったのです。眺望絶佳と聞いておりましたゆえ期待して来ましたが予想の通り丁度いい浦風に気分を鎮まらせる波の音……。はぁ。感激ですわ」

またいつものパターンである。好きなものに触れたときの彼女の恍惚としている表情はレッドも嫌いではなく寧ろ可愛いらしく思えるものであるが、言っていることが8割がた理解できないのが難点である。

レッドは呆然としながらエリカを見ていると、どこかから吟ずる声が聞こえた。

「恋ひわびて　泣く音にまがふ　浦波は　思ふ方より　風や吹くらむ」

「あれ、聞いたことある声だな……」

レッドはそう言いながら後ろを振り向くとリザードンが立っていた。

「うわっ。脅かすなよ……」

「あぁ済まないマスター」

「あら、リザードン。先ほどの歌は光源氏が須磨で詠んだとされる名歌と評判の物ですね。よくご存じですわ」

「ハハハ！　嫌だな。先生、この前古典文学全集貸してくれたじゃないですか」
リザードンは高らかに笑いながら言う。
「そういえばそうでしたわね。リザードンとしてはどの作品が一番宜しかったですか？」
このやり取りを見てレッドが口を挟んだ。
「せ、先生？　お前らいつの間にそんな仲良く」
「あらスキンシップですわよ。この前私の読んでいた本に興味を示しておりましたから試しに本を読ませてみたらこれがかなり功を奏しましたわ。スポンジのように知識を吸収しますし、向学心もポケモンの中では高い部類に入ります」
「へぇ。元はオーキド博士が持ってたポケモンなだけあるな……。でもポケモンに勉強させてどうするつもりなんだ？」
「あら、ポケモンといえどトレーナーと一緒に居るなら人類の歴史や文学などの教養を身に着ける事も一興だと思いますわよ。知は力なり。きっと何かしらの糧になると思います」
「知は力ね……。まぁ何の役にも立たない事はないだろうけど」
レッドは懐疑的な視線でリザードンとエリカを見ている。
―同日　午後8時　アサギシティ　ポケモンセンター―

アサギシティに戻った二人は夕食を済ませ、レッドが風呂に入った。
エリカは食器の片づけを済ませ、明日への準備を整えるとヘーゲルの本を読んでいた。
そうしていると彼女のポケギアが鳴り響く。どうやらナツメからである為エリカはすぐに出た。
「もしもし」
「あら、元気そうね」
「ナツメさんこそ。それで、どうなされたのですか？」
「どうしたもこうしたも、あんたが心配だから電話したにきまってるでしょ……。どう？　レッドとは上手くいっているの？」
ナツメの質問にエリカは暫し逡巡した後に
「ええ。何とか」
と、取り繕ったかのような返事をする。
「やっぱり……何かあったの？」
「何とかと申し上げたつもりですが」
「あんたと何年付き合ってると思ってんの。声色だけであんたの本音なんか超能力使うまでもなく分かっちゃうの。で、どうしたの？」

「左様ですわね……。実は……」

　エリカはナツメに昨日と今日起こったことを赤裸々に話してみせた。レッドの様子がおかしかったこと。自分を襲おうとしたこと。ミカンに負けたことなど……。

「なるほど……。たった二日の間にいろいろな事が起こったものね。それにしてもレッドが手を握った事もないエリカを襲うだなんて……殺してやろうかしら」

「落ち着いてください！　レッドさんもその……別に私を苦しめようとかそういう意図があったわけではなく」

　エリカはナツメが冷静な声でとんでもないことを口走ったので慌てて止めに入った。

「冗談よ冗談。でもね。それだけのことをされているのよ？　未遂とはいえレイプは心理的殺害といっても過言ではないくらい深刻なものなのに」

「確かにそうです。しかし私が気づいたらやめて頂けましたし、私を本能の赴くままにどうこうしようとかそういう意思はさほどなかったように思えるのです」

　エリカの言葉を聞いてナツメはため息をつきながら返す。

「あんたねぇ……。なんでそこまでされているのに別れようとか思わないの？　エリカの貞操そのものが危ないじゃないの」

「私は最終的にあのお方を伴侶にしてよいかどうか判断する為に一緒に旅をしているのです。私が夫に求めるのは色々な意味での強さをもっているかどうかで、正直それ以外

の事に関しては強さほどには気にしておりませんわ。今日の一件につきましてもレッドさんは思春期ですし、異性がいつも近くにいてしかも一応妻という立場にあるのならば止むを得なかったと思いますし……」

「でもその強さもミカンちゃんに負けて崩れ去ったようなものでしょ？　リザードンという強力な対抗ポケモンを持ちながら勝てなかった訳だし」

「そう言われればそうかもしれませんが、私はあれだけポケモンを大事に思える御仁ならばきっとこの逆境を乗り越えられるのではないかと思ったのですわ。ポケモン勝負に必要なものは知識と経験のみではなく、ポケモンとの信頼関係も非常に重要です」

エリカの意見を聞いてナツメはどうにか納得したのか先ほどよりは落ち着いた口調で

「ふうん……。そういう事ね。それなりの考えがあって今に至っていると。でもあんたさ、レッドのその……色情というか性欲をうまく押さえこめる自信があるの？　思春期の男のソレは私たちの想像が及びつくようなものじゃないと聞いたけれど」

「それに関しては未だ強く拒絶しています。その……これは私自身全く未経験な事な故、怖くて覚悟が出来てないんです」

「未経験って……少し前まで私とあんなことしたりしたじゃない」

ナツメは少々黙した後に勇気を振り絞ったが如くに言う。

「ど、同性と異性では勝手が違うではないですか！　男の人とはナツメさんの仰るように手……いえ体すら一分以上触れた記憶がないのです。ですから……」

エリカは恥じ入った様子でナツメに話す。

「確かにそうだけれど……。とにかくこれから先もずっとレッドと旅するならばそういう性に関しての事？　そのあたりも真剣に考えた方がいいんじゃないかしら」

「レッドさんとは約束しましたし、もう襲ってくるようなことはないと信じております。しかし、仮とはいえ夫婦である以上私のわがままばかり押し通す訳には参りませんものね……。ただどうしても躊躇してしまうので」

言いかけたところでレッドが風呂から出た。

「あ、レッドさんがお風呂から出られました。切りますわね」

そう言ってエリカはナツメとの通信を切った。

―３０分後―

変わって今度はレッドがグリーンに電話を掛けた。

軽く挨拶を交わしたのち、グリーンから本題を喜々とした風に切り出す。

「で、どうだった？　俺の作戦は」

「ああ。思いっきり引っぱたかれたよ……すごく痛かった」

「そうか。俺の目論見違いだったか。大変な目にあったな」

グリーンは言葉こそ同情している風だが、嬉しそうな様子は鈍いレッドでも察知する事が出来た。しかし、今はとりあえず突っ込まないことにした。
「で、どうなった？」
「それでさ、ミカンさんと戦ったんだけど、負けたんだ」
「ほぉ。あのお前がなー」
「お前なんか嬉しそうじゃないか？」
「そんな事ねぇよ。続けろ。なんで負けたんだ」
グリーンは慌てて声色を正し、先に進める事を促す。
「正直エリカはあの時上の空だったし、連携がうまく取れなかったというのもあるけど、とにかく予想以上にミカンさんが強かったんだよ。まぁ一番は俺がそれに対応しきれなかったことなんだが……」
「へぇ、あのチビガキがねぇ……。ヤナギ爺に集中稽古つけてもらったとかこの前の定例会で言ってたがバカに出来ないな」
「そう。お前も気を付けないと8番目の名が泣くことになるかもな……」
「お前に心配される事はねぇよ。カントー第一のトレーナーがそんな簡単に泣く羽目になってたまるかってんだ」
グリーンはそうレッドに毒づく。

「そうかよ。それはともかく、その勝負の最中からエリカの調子が戻り始めてさ」
「え？」
　グリーンの声から余裕が消える。
「負けた後に４０番水道で修行している時に話したんだけど、どうやらエリカは俺が戦っている姿勢を見てそれだけポケモンを大事に出来るならもう少し一緒に居ようと思ってくれたみたいで……。結果的にはどうにか関係が続いたよ。いやお前のおかげでより強固になったといえるかもな」
　レッドは口角をあげつつ言う。
「あ……あぁそうか。良かったな」
　グリーンは言葉こそ祝福している風だが、不機嫌な様子なのは読み取れる。
「とにかく、ありがとう。これからはもっと腰を据えてエリカとの関係を考えてみるよ」
「そうかいそうかい。幸せにな……チッ」
　グリーンは非常に小さく舌打ちをした。
「あれ？　今舌打ちした？」
「あ？　何言ってんだ気のせいだろ」
　その後二言三言交わしてグリーンとの通話を切った。

翌日より４０番水道、４１番水道を超えて三日かけてタンバシティに到着した。

―タンバシティ

本州から離れた場所にある町。

小さな所ではあるが、海の潮風によって育まれた干物はタンバ名物である。

ゆったりとした雰囲気の街で、最近内陸部にサファリゾーンができたらしい。カントージョウトの唯一の体育大学、タンバ大が建てられてるのもここである。

北部の砂浜は練習場。

―４月８日　午後１時　タンバシティ―

町に到着し、ポケモンセンターで手持ちたちを休ませると二人は早速ジムに向かった。

―タンバシティ　ポケモンジム―

しかし、ジムには張り紙が貼られていた。

「また張り紙ですね。なかなかに力強い字体ですわ」

―稽古中。用のある人は北の砂浜まで―

「うわー、結構面倒なとこまで……仕方ない行こう！」

―タンバシティ　北の砂浜―

「エッホエッホ！」

「あと何周？」
「５８周さ」
「この砂浜１００周は辛い！」
　などと空手王達が話していると、
「コルァ！　そこ！　余計な口挟むな！　追加するぞ!!」
　師範代の叱責が飛んできた。
「へーい」
　この空手王達は皆タンバ大の学生である。
　その頃シジマは……
「おう、いいぞ！　シバ！　もっと突いてくれ！」
「シジマ先輩！　俺もう（アッー！）す！」
（ニャニャニャー）の世界に興じていた。
　さて、その一方、レッドとエリカは北部の砂浜に辿り着いていた。
「あの、すみません」
　エリカが師範代に話しかけた。
「貴女はもしや……。エ……エリカさん!?　何故このようなむさ苦しい所に」
　師範代は狼狽しながら言う。

気持ちが逸っているレッドは少々強い言い方で詰め寄る。
「リーダーのシジマさんを探している！　どこにいるか教えて下さい」
「シジマ師範ならそこの洞窟ッス。ただ、今はやめたほうが」
師範代が洞窟の方向を指差すや否や、レッドはその方向に飛んでいった。
「もうおりませんわよ」
「素早い。内のサークルに欲しいな」
―洞穴―
「あのー、すみません！　ジムの挑せ……あ」
「!?」
その瞬間、洞穴は凍った空気になった。
「すみませんでした！　ごゆっくりとお楽しみください!!」
レッドは深々と頭を下げて早々に立ち去ろうとした。が、
「何だレッドか！　久しぶりだな。交じるか？」
と、シバが気さくに笑いながら冗談半分に話しかけてきた。
「いや、勘弁して下さい。童貞卒業もまだなのに……」
「嘘をつくな。あんな別嬪さんがずっと一緒で事を起こさないなど有り得るか！」
シジマは闊達に高笑いしながら言う。

したくてもエリカが拒絶しているのだから出来ないのであるが、そんな個人的な事情まで話す気にはなれなかった。

「ともかく先輩。ジムの挑戦らしいんで俺、タンバ大で事務してます。あとリーグからキョウさん突破の知らせがきたらすぐ帰るんで」

シバは道着を着直しながらそう言った。相変わらず武骨漂う筋骨隆々の肉体である。

「うむ。分かった。さてレッド君！ジムに行こうか……って一緒に居るはずのエリカ女史はどこだ？」

「ここに居ますよー」

エリカはレッドの後ろより、ひょっこりと横から身を出した。レッドよりエリカの方が身長は小さいのである。

「いつの間に背後を取られているとは……」

「ガハハハ！　素早いな！　じゃ行こうか！」

という訳でジムに向かった。

―タンバシティ　ポケモンジム―

ポケモンジムに着くと、シジマは野太いながらも豪放な声で自己紹介を始めた。

「改めて自己紹介しよう！　ワシはタンバシティジムリーダーのシジマだ！　いっとくがワシは強いぞ！　毎日修行に明け暮れて肉体を鍛え、男ともまぐおうておるからな

！」

「それ別にポケモンと関係ないんじゃ……」

レッドがさりげなく突っ込む。エリカもそれに続いたかのように頷く。

すると一分近い沈黙の後

「それもそうだ。……細かいことは気にせず勝負といこう！　行け、チャーレム！　オコリザル！」

レッドはリザードン、エリカはロズレイドを繰り出し、フィールドにポケモンを出しそろえる。

「リザードン！　オコリザルにエアスラッシュ！」

レッドはまずアタッカーとしての能力に優れるオコリザルを潰しにかかった。

リザードンは空気の刃を形成してオコリザルにぶつけようとする。

「オコリザル！　岩なだれじゃ！」

こだわりスカーフを持たせていたのかオコリザルが先制し、上空から突如岩の雨が降り注ぐ。不一致なのでそこまでのダメージにならなかったが軽くはない損害である。

続いて、リザードンのエアスラッシュがオコリザルに命中。レベル差と効果が抜群の中では如何ともしがたく一撃で倒れた。

「まだまだぁ！　チャーレム！　ロズレイドにサイコカッター！」

チャーレムは指示を受けると両手を前に差し出して刃を作り出してロズレイドに放つ。ロズレイドは一刀両断されたかのような格好になり、いわなだれで少なくない損害を被っていたのも祟って地に伏せた。

「これは一筋縄ではいきませんわね……。お出でなさい、モジャンボ！」

モジャンボはのっそりとした巨体を現しながらフィールドに出た。

「こんなのは所詮小手調べだ！　行け、ニョロボン！」

ニョロボンは二本腕を広げ、筋骨隆々の体を誇示するが如く堂々と出る。

「リザードン！　ニョロボンにエアスラッシュ！」

今度は先攻し、ニョロボンに命中する。しかし、ニョロボンは存外固く三分の二ほどの減少にとどまった。

「チャーレム、モジャンボにとびひざげり！」

「モジャンボ！　守るです！」

モジャンボが素早く結界を作りだし、チャーレムのとびひざげりを跳ね返す。

着地に失敗したチャーレムはダメージを食らった。

「チィ……。猪口才な！　ニョロボン！　リザードンに滝登り！」

ニョロボンは命を受けると滝を作りだし、その勢いを利用してリザードンに突撃する。

しかし、寸でのところで回避。滝登りの激流は壁に衝突し、轟音が巻き起こった。直撃していれば確実に致命傷となっていた為、レッドはホッと安堵する。

その後、エリカは二体、レッドも二体失って勝利した。（対抗ポケモンであるリザードンは最後まで生き残った）

「ガーハッハッハッ！　負けたとはいえここまでいい戦いが出来ればワシに悔いはないよ！　そら、ショックバッジだ。持っていくがいい！」

二人にとっては久々の勝利である為、かなり喜ばしいことであった。自然と表情が緩む。

「あ、ありがとうございます！」

彼女のバッジを貰う声も少々上ずっているように聞こえる。レッドもいつもより深々と頭を下げた。

「それほど喜んでもらえたのならあげた甲斐があるというもの」

「そもそも勝ったこと自体が久々ですものね……」

エリカは少々元気のない声で言う。

「このところの不調は聞き及んでおるぞ。最終的に全国を目ざす中これでは気が重いだろうに」

「そうですね……。ところでシジマさん、ミカンさんに稽古をつけていらしたそうですが主にどのような事をしていたんですか？」

レッドがシジマに尋ねる。

「ポケモントレーナーたる者。心身の鍛錬は欠かしてはならぬから、主に砂浜での走り込みや腹筋など筋力トレーニングをさせたぞ！　最初はかなり堪えていたがだんだんと慣れてきて最終的にはフルマラソンくらいなら走破できるほどにはなった」

「なるほど。ポケモンを扱うからには心身も強靭でないとやっていけないと……具体的にはどのように？」

「水分補給も間に挟みつつ走れるポケモンと一緒に毎日２０キロのランニング。１０回１０セットの腹筋背筋腕立て伏せ、スクワットは基本でやったの。時には砂浜だけではなく、シンオウまで行ってスモモ……ああ、ワシの姪じゃがあれと共に吹雪く道で修行したこともあった」

予想以上にかなりハードな内容に面食いながらもエリカが言葉を返した。

「雪原でも修行されたのですか？　下手すると霜焼けになってしまうのでは」

「うむ。一応足のあたりから腹までは特に念入りに装備させたわい。あと、雪道は走りづらいからの。修行の前日に走るコースの雪は予め溶かしたうえに塩を撒いたよ」

「え？　どうして塩なんですか？」

レッドが尋ねる。
「塩には道を凍らせにくくする効果があるからの。それでもシンオウの雪はけた違いだから積もってしまうこともあったが、撒かないよりは遥かに良かったことには違いないぞ。何より道しるべになる」
「へぇ。他には何を？」
「うむ。ヤナギ殿と同じように格闘使いとして戦った事もあったぞ。知っての通り格闘は鋼を砕くからの。最初はワンサイドゲームと言う奴でつまらなかったが、最近はかなりいい試合をするようになったぞ。未だわしに勝てはいないがそのうち超えるのではないかと楽しみにしておるわい！」
「ミカンさんはやはり途轍もない修練を重ねておられたのですね……。私たちも見習うべきですわね。色恋に身を傾けるばかりでなく本業を全うしなければ」
レッドにはそのエリカの言が自らに対する意趣返しのように聞こえ、少々参った風に目深に帽子をかぶった。
「うむ。そうじゃの。ところで二人はこのままいけばシンオウのトバリまで行くのだよな？」
「は、はい」
「恐らくはいく事になると思いますわ」

レッドはトバリという地名が聞きなれないのか自信なさげに答えた。
「ならば一つ頼みごとをしたいんだが良いか？」
シジマは先ほどより人が変わったかのように深刻な声で言う。そこから重々しい話である事は察しがつくので二人もかしこまった風に身を直す。
「先ほども少し言ったが、わしの姪でそこにはスモモというジムリーダーがおる。あいつの父親はかなりの酒豪での。スモモが稼ぎ出してからは特に酷くなって、事あるごとに暴力を奮っている始末。そこで、もしもあんたがたが行っても左様な状況が変わっていなければ、スモモにタンバに来るよう頼んでほしいのだ」
と、シジマはすらすらと家庭の事情を話した。
「どうしてシジマさんは動かないんですか？　それにそんな事ならば知り合いのミカンさんの方が都合がよいような」
「わしにはジムと大学があるからそうそう離れる事はできんし……。ミカンがシンオウまで行ったというのはリーダーになる前の話よ。今は忙しいだろうしそうもいくまい。それにこのような事は友だちよりもある程度距離のある知り合いくらいがちょうど良い。とにかく行けば分かるわい」
「左様ですか。分かりました」
エリカはどこかしら腑に落ちた体である。

レッドは面倒な事だと思いつつ、断るとさらに面倒な事になりそうな予感がしたので黙認した。

「悪いの。面倒な事頼んでしまっての」

「いえいえー、それではもうバッジも揃いましたし、行きますか！」

「うむ！　それじゃあレッド君！　励みなさいよ！　いろんな意味での！　ガハハハ!!」

と、シジマは先ほどまでの陽気に戻ったレッドの肩を叩いた。

「は、はい。それじゃ」

という事で、レッドとエリカはジムを後にした。

―午後9時　タンバシティ　ポケモンセンター―

その後、レッドとエリカは一番奥の砂浜で修行をしたのち、ここに宿泊した。

諸事を済ませた後、二人は今後の事について話し合っている。

「はぁ。シジマさんに勝てて良かった……」

レッドはとにかくそのことに安堵している。もし負けていれば自らの実力が地に落ちているといよいよ自覚せざるを得ず立ち直れないような気がしたからである。

「左様ですわね。自信を失っていかけていたポケモンたちも今回の勝利で些か自信を取り戻したようにみえましたし」

「ところで、そのポケモンについてシジマさんの話を聞いて一つ思い当ったんだけど……」
「雪を塩で融かす……というお話ですか？」
　エリカも同じように気が付いたのか用意した抹茶を啜りながら言う。
「ああ、そうだ。あれをうまく転換してミカンさん、ひいてはヤナギさんに使えないか？」
「左様ですわね。氷に対して塩は凝固点、いわゆる液体が固体に変化する温度を下げる効果があり、氷を水のままにすることにできます。鋼に対しては錆を進行させる原因となります」
　エリカは滔々と塩と氷及び鋼の関係性について説く。
「ということは海水を水ポケモンにとりこめばうまく対抗できるんじゃないか」
「鉄鋼が腐食する最大の濃度は海水と同じくらいの3％と言われておりますわ。丁度近くに海水が多く含まれる灘がありますし1週間ほど水ポケモンを海水を取り込ませて生体に含まれる水を海水にして塩水とすればかなりの効果が見込まれるかもしれませんわね」
「そうだね。だけど果たして海水を浴びせたところで鋼がそうすぐに錆びるかね」
「それに関しては私に腹案があります」

エリカはノートをカバンから出して腹案について説明した。

―４月１０日　４０番水道―

その翌日から４０番水道にて他のポケモンたちは陸で修行し、水ポケモンは海で泳がせて海水に馴れさせている。

レッドとエリカはといえば、適当な島にテントを立てて数日に亘って野宿していた。

『ようし、ここからどこまで潜れるか競おうぜ！』

カメックスがそう提案して、

『いいよ！　ようし先輩には負けないぞ！』

とラプラスが同調し、仲間になっていた他のメノクラゲやマンタインなども一緒になって一斉に潜って行った。

「はぁ。もうちょい暖かかったら俺も混じりたかったんだけどな」

時は４月。ホウエン地方ならまだしも、一般的には海へ入るにはもう少し時が必要な月であった。

レッドとエリカはカメックスたちが見える方向の砂浜にシートを敷いて寛(くつろ)いでいる。

「貴方に風邪をひかれたら一大事ですわ。我慢してくださいね」

「そりゃそうだけどな……。こんな方法で本当に体の水が海水に変わるのか？」

「長い時間をかけて海水に親しませれば体中の組織がすべて交換されます。水ポケモン

はもともと海に生息するものですから拒絶反応もないはずですし、すぐに慣れると思いますわ」

「そうかもしれないけどさ……ほら」

レッドは海を見る。

「ルンパッパはかなり抵抗ありそうだぞ」

エリカの唯一の水ポケモンであるルンパッパは海に入ってこそいるが、かなりぎこちなさそうに泳いでいる。最初はカメックスたちもこれに合わせていたが段々と周りのポケモンたちの勢いに合わせてしまった為放っておいて海に潜ってしまった。

他のポケモンはかなり長く潜るつもりなのかいっこうに姿を見せない。

「ルンパッパだけは元を辿れば川に棲む河童ですからね……。海から生まれた貴方の二匹にくらべれば致し方ないことです。それに大海を見た経験がありませんし脅えているのかも」

エリカがそう言いかけていると、ルンパッパの居たところに水しぶきが出来ている。どうやら溺れてしまったようだ。先述したとおり近くに水ポケモンはいない。

「まあ大変！　助けに行かなくて」

エリカが反射的に立ち上がる。しかしレッドが声をあげて

「待てよ！　お前泳げんのか？」

「か、火事場の馬鹿力です！　逆境にあっては逃げるのではなく立ち向かう事が何よりも大事だとシェイクスピアも……」

「お前がもし溺れて死んでしまったら……、残された人が悲しむだろうが！　ここは俺が行く。こう見えても水泳は得意なんだっ！」

レッドはエリカの制止を無視して、素早く上着を脱いで海へ飛び込んだ。

ルンパッパを救い出すまではそう時間はかからなかった。

「ふぅ……大丈夫か？」

レッドはルンパッパを抱きかかえながら尋ねる。ルンパッパは先ほどまでの恐怖のあまり口が利けないのか、上のギザギザな笠を前に振って肯定の返事とする。

しかし、沖の方まで行っていたため、カメックスの仲間にはならなかったギャラドスがその巨体を現し、威嚇した。

「げっ……まじ」

さすがのレッドもこれには冷や汗をかく。

レッドは小学校の頃に教わった海にポケモンに襲われた時の対策を思い出し、ギャラドスの背に回って安全を図ろうとする。とりあえず図体のおおきなポケモンは背後に回れば当面の攻撃は防げるという算段である。

「貴方！　今陸に行ったポケモンたちを呼び戻しに」

夫が襲われているのを確認したエリカは血相を変えて大きな声でそう呼びかける。
「そんな事はしなくていい！　下手に刺激するとルンパッパにまで被害が及ぶぞ！」
「そ……そうですわね。では１１８に電話を」
「こんな程度大したことない！　とにかくそこでじっとしていてくれ！」
そう言ったレッドは早速ギャラドスの背後に回る。
しかし、ギャラドスは存外素早くうまく回る事はできない。
「チッ……ルンパッパ。潜るぞ！」
ルンパッパはその言葉に目を見開くが、レッドは反応を見ないうちに素早く潜る。
幸い、このあたりの海はさほど透過しておらずギャラドスでもすぐに海中の物を見ることができない。
一分ほどやや深めに潜って浜の方向に全速力で向かうが、さすがに息が続かない。もう限界だと思って海面に顔を出すと、手が引っ張られた。
レッドが握られている手を見ると緑色の手があった。
「お前……」
一瞬レッドはその光景が信じられなかった。なんと、ルンパッパがレッドを牽引（けんいん）して浜に向かっていたのだ。
それから数分もしないうちにレッドは浜辺に着いた。

しかし、ギャラドスはレッド達をみつけるとここぞとばかりに襲い掛かる。
その時、空を劈く稲妻と、怒涛の太い水流がギャラドスに直撃。
当然、すぐに巨体は海に沈んでいった。
「マスター！　無事かぁ！」
「ピカピー！」
ピカチュウが陸から、潜り終わったカメックスが後ろから攻撃したようである。
他のポケモンたちもギャラドスが現れたことに感づいていたのか遅れてぞろぞろと出てきた。
「貴方！」
レッドが少々疲れてぜい息をはきながら立ち上がると、エリカは安堵の表情でレッドに駆け寄った。
「ああ……エリカ。どうにか生きて帰ってこれたぞ」
「あぁ、良かった、良かったです。あの凶悪そうなギャラドスが現れたときはどうなることかと……」
エリカはレッドの無事な声が聞けてほっと胸をなでおろした。
「心配かけてすまなかったな。それにしてもルンパッパ、お前……」
ルンパッパは照れ臭そうにレッドから目を逸らす。

「よく克服できたな。偉い偉い」
と、ルンパッパの頭を撫でる。
少し時間が経つと沖に居たカメックスとラプラスが陸に出てきた。ピカチュウもレッドに近づく。
「おう。ピカチュウ、カメックス、お前らありがとうな。今日は好物のシーフードカレーにするぞ」
レッドはピカチュウとカメックスの頭も撫でてあげた。
「へへへ、照れるぜ」
「チャー」
二匹ともかなり安らいだ表情となっている。
「それにしても、ルンパッパ、お前どうしてあんなにぎこちなさそうに泳いでたのにさっきはあんなにすいすい行けたんだ？」
レッドが尋ねるとルンパッパは口を開いて答える。
「あのポケモン……ラプラスさんが助けてくれたんだよ」
ルンパッパはカメックスの後ろに控えているラプラスを指さす。
「そうそう。あいつ潜ってる最中に急に浮かびやがったから何かと思ったらギャラドスが見えてな。俺は野郎を倒し、ラプラスはルンパッパに海嫌いを克服させるいい機会と

ばかりに浜の方向に飛んでったんだ」
　カメックスはそう二人に説明した。
「それで波乗りの要領で自分の上にルンパッパを載せて俺を引っ張ったって訳か。偉いぞ！　よくやってくれた」
「わっ。マスター」
　レッドはラプラスに思わず抱き着く。
「本当。関心ですわねえ。貴方の躾が行き届いている証です。ラプラス、本当にありがとうございます」
　エリカは深々と頭を下げて謝意を示した。
「いえいえ。同じ水ポケモンとして海を好きになってもらいたいと思っただけですよー」
　と言いながらラプラスは照れた様子で手を首の中ほどにまでやって自ら撫でる。
　その後、ルンパッパは海嫌いをどうにか解消し、一週間が経過して海水を技として使う事が可能になった。
　―4月18日　午前9時　アサギシティ―
　塩水を取得して意気揚々と二人はジムに向かったが、そこには、またも貼紙が張り出されていた。

「また張り紙だよ……」
　―あかりちゃんの様子を見に行っています。用のある人はアサギの灯台の頂上まで
ミカン―
「なんだか可愛い字ですね」
「丁度良い、修行の総仕上げとして今日は一日修行しよう！」
「はい！」
　―アサギの灯台―
　二人は階段を駆け上がってトレーナーと戦った。
　昼間まで修行を続け、夕方、最上階に上がる。
　―午後5時　同所　展望台―
　二人は階段を上りきり、なんとか展望台に到着した。
　心身が鍛錬されているレッドは余裕な様子だったが、エリカは少し疲れているようだ。
「うーん、いい運動だ」
「うう……昇っているだけとはいえ、案外疲れるものですわね」
　2人がそんな事を言っていると、少し離れて、ミカンが2人に背を向けた格好であかりの世話をしていた。

「あかりちゃーん、今日の晩ご飯はオボンの実の丸焼きとヒメリの実を剥いたものですよぉー」

ミカンは楽しそうに世話をしていた。そして晩ご飯の内容を聞くとあかりは

「ぱるぱるぅ！」

と元気に鳴く。

「へぇー、あかりちゃんってデンリュウなんだね」

レッドはほうほうと感心していた。

そのレッドの声に気づいたのか、ミカンは後ろを振り向く。

「み、見てたんですか!?」

ミカンは見られたくないところを見られて頬を赤くさせて、大いに冷や汗をかいている。

「あかりちゃーん、今日の晩ご飯は……」

エリカが悪戯っぽくミカンの声を真似ると

「や、止めてくださいエリカさん……、恥ずかしいです……」

と、ミカンは更に顔を赤くした。

「あら、ごめんあそばせー。ミカンちゃんのこういう微笑ましいところは中々見ないものですからついからかってしまいました」

エリカはすっきりと温かい表情で笑う。そこにバカにしたりする意図は見られない。
「はぁ……もう！　どうして下から呼んでくれなかったんですか！」
ミカンは珍しく怒った様子の声で話す。
「いやだってそうしろなんて聞いてなかったんで……、ごめんなさい」
レッドは少し頭を下げて非礼を詫びる。
「……。まぁ、過ぎたことは仕方ないですね。さて、再び挑戦ですか……いいですよ、あかりちゃんの世話が終わり次第、ジムで待っています」
二人は少々時間を潰したのち、ジムまで戻った。
―午後6時　アサギシティ　ポケモンジム―
「シジマさんから聞きましたよ。お二人ともなぜあたしが勝てたのか不思議なくらい強かったと……」
「そんな事ないです。シジマさんもミカンさんの師匠とだけあって強かったですよ。それにしてもどうして師匠が二人も？」
レッドは疑問をミカンにぶつける。
「主にシジマさんはあたしがリーダーになろうと思った最初の頃に稽古をつけてもらった人です。お父さんがシジマさんの知り合いだったもので。そこからシジマさんがあたしを見込んでくれてヤナギさんに勧めて頂き、ヤナギさんの下で更に修行して漸く今

の地位についた……というところです」
「なるほど。そういうことですか」
レッドが納得した。
「勿論二人とも同じようにあたしをジムリーダーにしてくれた恩人ですし、深く感謝しています。そんなお二方から教えを授かった一人の弟子である以上、負けるわけにはいきません……！　鍛え抜かれた鋼は何度でもはねかえすのです！　行って、エアームド、ハガネール」
レッドはバクフーン、エリカはダーテングを繰り出し、フィールドの用意が整う。
岩タイプの技を覚えている可能性が高い為レッドは敢えて損害が少なくなるようにバクフーンを繰り出した。
「バクフーン！　エアームドに大文字だっ！」
エアームドに大文字が直撃する。
気合のタスキをもたせて居たため何とか1のこして耐えきった。
「ダーテング！　日本晴れです！」
ダーテングが葉の扇を盛んに動かして晴れ状態にする。
「エアームド！　ダーテングにブレイブバード！」
ミカンはエアームドの体力に余裕がない為、前回のような撒き菱攻めではなく一撃離

脱戦術に転換したようである。
　ダーテングはフィールドを晴れ状態にしただけで一撃の下に地に伏せ、エアームドもダーテングを突破したと同時に倒れる。
「ハガネール！　砂嵐！」
　そして天候を変えて有利な状況そのものを終わらせた。
「お出でなさい、ルンパッパ！」
　ルンパッパは自信ありげな様子でフィールドに出る。
「行って、ドータクン！」
　ドータクンは相変わらず表情が読めない顔をみせながらどっしりとフィールドに鎮座する。
「戻れ、バクフーン。行け、カメックス！」
「ルンパッパ、波乗りですっ！」
　ドータクンは体力が3割、ハガネールは効果抜群の為8割削れて満身創痍である。
「ドータクン、トリックルームです！」
　ミカンは前回散々二人を苦しめたトリックルームを発動した。
　しかしこれに対して二人は餌に獲物がかかったとばかりに表情には出さないが、気分を高揚させる。

「戻って、ハガネール。行って、ジバコイル！」
これまた二人の主力を葬ってきたポケモンの一つ、ジバコイルのお出ましだ。
「カメックス！　ジバコイルにハイドロポンプだ！」
カメックスは砲筒から大量の塩水を噴射し、大量に被せる。
ジバコイルはこれによって体力の七割ほどを失う。
ミカンにハイドロポンプの飛沫がかかり、ミカンは試しに嘗めてみせた。
「しょっぱい……。これってまさか！」
ミカンは今回の水の正体に気づく。
鋼のみならず鉄鋼全ての弱点、海水である。
ジバコイルのように典型的な機械にとって大きな弱点であることは自明であった。
「水ポケモンに海水をとりこませるだなんて……。でも、そう簡単に錆は進行しないはず。だから早めに決着をつけてしまえば」
と、ミカンは小さな声で戦略を構築し直す。
「ジバコイル！　カメックスに雷！　ドータクン、よくやったわ。戻って、行って、メタグロス！」
空中には暗雲がたちこめ、雷が下る。しかし、あと数センチのところで外れてしまった。

「ルンパッパ、メタグロスにハイドロポンプです！」
しかし、ルンパッパのハイドロポンプは視界が悪く外してしまう。
「ジバコイル！　もう一度、カメックスに雷です！　メタグロス！　ルンパッパにしねんのずつき！」
メタグロスは砂塵の中からルンパッパを見つけ出して突撃し、痛恨の一撃を加える。
体力は6割程失った。
カメックスにも雷が命中し、体力が九割ほど削れる。
「カメックス！　波乗り！」
カメックスはルンパッパの体力を二割ほど更に減らしたが、その代わりにジバコイルを倒し、メタグロスの体力を三分の二に減らした。
「ルンパッパ！　雨乞いです！」
ルンパッパは天候をかえて不利な状況を打開する。
そしてこの雨の成分は海水なので、ミカンのポケモンの体力が16分の一ほど減少する。（砂嵐と同程度）
「ジバコイル、よく頑張ったね。戻って。行って、エンペルト！」
ミカンは前回は出さなかったエンペルトを繰り出す。
まさに皇帝の威容で、威張った格好でフィールドに出る。

「メタグロス！　カメックスにしねんのずつき！」

しかし、カメックスは砂嵐が晴れて視界が良くなったせいか、猛烈な勢いで迫る頭突きを回避した。

メタグロスは持ち場に戻ると少々苦しそうに体を動かしている。

「メタグロス？　大丈夫？」

と言いながらミカンはメタグロスに駆け寄って様子を見る。そしてよく見てみるとミカンは顔色を失った。

接合部や足に赤錆が生じているのだ。

「う、嘘……。どうして」

その後、次ターンでメタグロスはトリックルームの効果が続いているにも関わらず先制が出来なかった。そして、カメックスによって倒され、原因が分からないまま狼狽し続け、レッドは完勝、エリカは一体を失うのみに留まり勝利した。

「参りました。二週間ほど見ないうちに見違えるほど強くなられていてびっくりしました。その努力に冠し、このスチールバッチを差し上げます」

漸く二人は六つ目のバッジ、スチールバッジを手に入れた。エリカは深々と頭を下げ、レッドはつられるように礼をした。

「それにしても、どうやって一瞬で錆を作り上げたのです？」

「トリックルームですよ」
　エリカの一言にミカンは当惑気味である。
「え？　どうしてトリックルームが」
「トリックルームは素早さが遅い分、それを補うようにそのポケモンの時間の進行を速めて相対的に相手方の速度を下げる技であると心得ています。錆は運動量が多ければその分進行が早まりますし、それに普段より早く経過する時間が加われば海水を被った後、数ターン動いただけで錆を発生させるには十分な条件が整います」
　その発言を聞いてミカンは目から鱗が落ちた様子である。
「そんな……ということはあたしは自ら有利になる状況をあたえてしまったということですか？」
「トリックルームは素早さの遅いポケモンが多い鋼使いにとっては強力な追い風となる技でしょうけど、あまり過信する事は禁物と言う話というだけです。それに海水がなくしてこの戦術は成り立ちませんしね」
「そういう事ですか……。トリックルームだけに頼らないで持ち味を生かした柔軟な戦術をとれという事ですね。分かりました。頑張ってみます」
「ミカンさん、ヤナギさんはあれから何か言っていましたか？」
　レッドは待ち構える大敵、ヤナギの動静が気になって近くにいるミカンに尋ねた。

「再戦されることを心待ちにしています。出来るだけ早く行かれた方が良いかもしれませんね。あの……上手く言えませんが、頑張ってくださいね。応援してますから」

こうして、レッドとエリカはジムを後にする。

―午後9時30分　ポケモンセンター―

もう夜更けになっていた為、二人はポケモンセンターに入って諸事を済ませた後、いよいよ目前に迫ったヤナギ戦に向けて話し合う。

二人は椅子に座り丸机に付き合わせた。

「はぁ。どうにかミカンさんに勝てたな」

レッドは一安心した風に言う。

「左様ですわね……。しかしあの戦術は先ほどミカンさんにも言った通り、海水があってこそ成り立つもの。ここからチョウジまでも修行の一環で歩いて行く以上、体内の水も海水から淡水、つまり普通に戻ってしまいますわ」

「そうだな……。ヤナギさんに勝つ為にも他の方法を探らないとダメか……どうしよう」

レッドはそのことを指摘され頭を抱えた。

「氷の弱点は塩のみならず貴方が最初の時に使われた炎があげられます。リザードンやバクフーンを手掛かりにしてみてはいかがでしょう」

「いかがでしょう……ってそれだけ？」
「本来、この旅は貴方一人に向けて為されたものです。　私ばかりに頼られても貴方の為になりませんわ。ミカンさんの時は正直、友人に負けたことが悔しくて全面的に協力いたしましたが今回は貴方一人でお考えになってください。私は妻としてそれに従うだけです」
　エリカは出来るだけ柔和な声色で、しかし冷厳な内容の事を言う。
「そ、そんな殺生な……」
　レッドがそう言うと、エリカは
「さてと、私はそろそろ歯を磨きたいので失礼します」
　と立ち去って行った。
「ちぃ……なんだいなんだい。勝手な事言いやがって……」
　と小さく愚痴を言ったが、そのうちなにくそとなんとか一人で方策を編み出そうという結論に至る。
　―4月20日　午後3時　39番道路　森―
　その後、レッドはどうにか打開策を見つけようと普段使っているポケモンだけを連れ、他のポケモンの世話はエリカに任せて遠くの場所で修行した。
「リザードン！　大文字だ！」

レッドはバクフーンではなく、レベルが高く草創期からの仲であるリザードンを中心に面倒を見ていた。

「はいよっ！」

リザードンは大きな大の字を作って、小さなポケモンをいじめているスピアーやカイロスなどを焼き尽くす。

威力は絶大で、ほんの数秒でいじめていた３０匹のポケモンを瀕死においやる。

いじめられていたコラッタ数匹は小さくお辞儀をして草むらに戻っていく。

「よし、休憩だ。３０分くらい遊んでていいぞ」

昼食を食べてから三時間ほど手持ち同士をし合わせてみたり、先ほどのようなことをしたりしてポケモンたちの動向を見ていたが一向に良い戦略が見つからずレッドは悶々としていた。

「くそっ……」

と言いながら彼は青々とした草原に足を組みつつ寝っ転がる。

声を出し過ぎて少々疲れたのか、数日まともに寝ていなかったせいか、瞼が重くなりやがて寝てしまった。

２０分ほどすると、いけないとばかりに起き上がって上体を起こす。すると、リザードンが文庫本を持ってポケモンを集め、何かをやっていた。

寝る直前まであれだけ騒がしかったポケモンたちが静かにしていた為、レッドは気になり、そっと近づく。

『えー、じゃあ次の問題、はねるを覚えるポケモンは？　但しコイキング以外で』

ポケモンたちはじっと考えて、数秒後に

『メノクラゲ！』

『ビードル！』

『キャタピー！』

等といろいろな返答が返ってくる。

『うーん。正解が出ないなー』

リザードンがにやにやしながら腕を組む。

その後少し遅れて

『……、ハネッコ』

『はい、フシギバナ正解！　他にはタッツー、デリバード、マンタインなどが』

「おいリザードン、お前なにしてんだよ」

レッドは流れを止めるのは良くないと思いながらもポケモンの言葉で会話しているためなにを言っているのか分からず、どうにも要領を得ないので思い切って尋ねた。

「ああ、マスター。これは先生から借りたクイズ本でクイズしてるんだ。本当は文学とか歴史とかそういうの出したいんだが、みんな答えられないからつまらなくてな。だから今は身近なポケモンについて問題を出しているんだ」

「へぇ。エリカやっぱそういう本も持ってんだな……」

レッドはこれを見て何かに使えそうだと思ったが、戦術には結びつかせられなかった。

その後、修行を再開して午後5時半頃にエリカのもとに戻る。

―4月17日　午後3時　エンジュシティ―

二人はエンジュシティに到着。

またスズの塔に行こうとエリカがせがんだ為それに合わせて、関所の前までたどり着くとマツバに会った。

どうやらスズの塔で行った儀式の帰りがけのようだ。話したいことがあると言うので、喫茶店に入る。

―喫茶店―

「はぁ。ここはいつ来ても落ち着くな」

席について適当に注文を済ませた後、マツバは息をついてそう言った。

「この店はタマムシにも系列店がありますし、よく分かりますわ。タマムシではウィン

ナーコーヒーが特に一押しでしたが、エンジュでは如何です？」
「そうだね……。ここは古都なだけに和風な雰囲気を演出したいのかお店としては南東の茶畑でとれた抹茶から極上の物を選別したフシミ玉露だけど僕としてはほうじ茶が味わい深くておススメかな」
「へぇ。次頼む機会がありましたら頼んでみますね」
「エリカさんは？　僕あまりタマムシまで行く機会がないから是非聞きたいんだけど」
　マツバは興味津々な様子で尋ねる。
「そうですわね、私としては……」
　エリカに悪いと思いながらも本題に行きそうがしなかったためレッドが遮る。
「あの、マツバさん、僕らに話したいことって？」
「おっと。そうだったね。この間からオーキド博士が何を狙っているのか気になっていてジョウトの伝承を調べていたんだけど、その最中でシロガネ山のバンギラスの話がでてきたんだ」
「有史以来のシロガネ山の噴火がバンギラスに起因する……という伝説ですか？」
　エリカがすぐに感づいて答える。マツバは予想通りと言わんばかりの表情で
「そう。そうなんだ。バンギラスが暴れることでマグマに刺激を与え、噴火の一要因となる説。それで、去年ロケット団が強制進化の電波を放った事が頭に思い浮かんでね。

もし、その電波がシロガネ山まで何らかの原因で届いていて、ヨーギラスを進化させてバンギラスになったとしたらそれはかなり強力なポケモンとなっているはず」

「山を崩す原因となる為幼生のヨーギラスが10年前に総捕獲したものの、10体程度残っているとの話もありますし、不思議な話でもないですね……まさか」

「そう。もしかしたらそれで進化したバンギラスがオーキド博士の狙いなのかもしれない……と思っただけの話だ。実のところは分からないが、オーキド博士を同じく疑う者として情報を共有しておきたいと思ってね……」

レッドとエリカはそれを聞いて大いに用心する。

その後、エリカはトイレに立ってレッドはマツバと二人きりになる。

「あの……マツバさん」

「ん？　何だい？」

マツバは最後の一口を啜った後にレッドを見る。

「マツバさん……エリカの事が好きだって聞いたんですけど……ほんとですか？」

レッドは単刀直入に気になる事をマツバにぶつけた。

マツバは数秒ほど間をおいて答える。

「一体、だれからそのことを？」

先ほどまでの明るい口調とは打って変わって、気の入った真剣な声で尋ねる。

レッドはその様子に少々気圧されたが舐められてたまるかと
「風の便りです」
とアカネの名は告げずに言う。
「はぁ……。ま、大体予想はつくけどね。本当だよ。僕はエリカさんの事が好きだ」
「随分素直ですね」
レッドからしてマツバは表裏ある人物に見えた為、あっさりと本音を言うとは思わず、驚いた。
「恋人である君に、エリカさんの事に関して嘘をつくのは失礼に思えたからね」
レッドはそれを聞いて虫の好かない奴だとばかりに苦虫を潰したかのような表情になる。
「そんな顔しないでくれよ。大丈夫。彼氏が居る人を寝取る趣味はないから」
「そうですか……、マツバさんはどうしてエリカの事を？」
「君と同じようなものさ」
「やっぱり……美しくて、頭がよいから」
レッドが言うと、マツバは静かに頷く。
「マツバさん……俺と、勝負しませんか？」
レッドにとってマツバは言うまでもなく天敵である。

マツバにはルックスでも頭でも相手にならないほど勝てる要素が無く、それを見ればエリカに好かれる要素など皆無である。

だが、エリカは前にポケモンと真摯に向き合って、勝とうと努力する姿を好きだと言ってくれた。それが自分にとっての誇りであると。

ならば、先日エリカの力に頼らず自らの力で修行した成果を自分ひとりで戦う事で見せ、ポケモンに懸けてはマツバよりも決定的に上である事を示したかったのだ。

「いいよ。僕も一回、伝説のトレーナーとやらと戦ってみたかったんだ。受けて立つ」

マツバはキッとした眼差しでレッドの眼を見る。

「ならば、決まりですね」

その後、エリカがトイレから戻って事情を説明し、ジムへと向かう。

エリカもマツバと戦いたそうだったが、レッドからすれば信念をかけた戦いなのでどうにか説得した。

―午後4時30分　ポケモンジム―

「貴方、頑張ってくださいね！」

エリカはレッドに声援をかける。レッドは向き直って手を振る。

「では、そろそろ始めようかレッド君」

「マツバさん。俺は絶対に、貴方に勝ちます！」

レッドは悪役に相対したかのような素振りでマツバに言う。
「フフ。威勢がいいね。それだけ気合十分なら相手にとって不足なし！　参れ！　ムウマージ！」
「行け！　カメックス！」
その後、レッドは序盤こそ優勢であったが、徐々にマツバの用いる状態異常やそれに乗じた闇討ち攻撃に翻弄され、4体ほど倒された。しかしリザードン一体が踏ん張り、マツバのポケモンも残り二体となる。
今フィールドに居るのはリザードンとヨノワールであった。天気は晴れ状態。
「リザードン！　熱風だ！」
リザードンが先制して、熱風を吹かせヨノワールに当てる。
しかし、ヨノワールは体力を四分の一ほど残して耐える。
「ヨノワール！　影うち！」
リザードンは初めて体力を十分の一ほど削られる。
「リザードン！　エアスラッシュ！」
ヨノワールに空気の刃が当たり、倒れる。
「へえ。僕に大層息巻くだけの事はあるね。じゃあ、最後のポケモンだ！　これが僕の切り札、参れ、ゲンガー！」

フィールドにはゲンガーが揚々と立つ。
「ゲンガー！　怪しい光だ！」
ゲンガーはリザードンに光を複数ちらつかせ、混乱させる。
リザードンは最初自分に攻撃してしまい、体力を二割ほど減らす。
どうやら先ほどの影うちは１０万ボルトの攻撃回数を調整するためのものだったようである。
「ゲンガー、１０万ボルト！」
ゲンガーは光を生み出し、電撃をリザードンに食らわせる。
体力が更に三割減り、日本晴れ状態が解消された。
そしてまた、リザードンは自分に攻撃してしまう。
「うぐっ……！」
もうレッドの持っているマツバに対抗しうるポケモンはフシギバナしかいない。全てを集中的に鍛えていたリザードンにかけているのだ。
「レッド君、君の実力はこんなものか？　ゲンガー！　もう一度十万ボルト！　これで止めだ！」
しかし、今度の十万ボルトは奇跡的に外れる。とはいえ、状況には変化が無い。
「リザードン！　大文字だっ！」

ここまでくると、もう大技で一撃の下に倒すしかないと思い至り、大文字を繰り出す。
今度はしっかりと攻撃したが、ゲンガーはすばしっこく避ける。
レッドはここで考え付く。
すばしっこく避けるなら、それを止めればいいのではないか。と
「ゲンガー！　もう一度１０万ボルト！　今度こそ息の根を！」
ゲンガーは電撃を作り出す。
レッドはそこからこの前やっていたリザードンのクイズを思いつき
「リザードン！　あれだ！　ゲンガーに問題を出してみろ！」
「え!?　そんな、急に言われても……」
このターンで混乱が解けたリザードンはレッドの唐突な提案に驚く。
「いいから！　難しいだろうが時間が無い！　早く！」
レッドはゲンガーの手中を見ながら、血走った目で言う。
リザードンはレッドの意を察したのか
「わ、分かりやした！　ゴホン、問題！　エンジュの如意が嶽などで行われる山に文字を作る五山の送り火を別名なんと」
「バカにすんじゃねえ！　大文字の送り火にきま……」
ゲンガーは止まって、大声で答える。

レッドの目論見通りだった。クイズをするときポケモンはじっくり考えるか、即答するかとにかくその行動をやめてしまう。その一瞬の隙を突くのだ。

「正解ィィイ！」

といいながら、リザードンは大きく息を吸った後、弾頭大の火の玉を吐きだし、ゲンガーどころかマツバの顔まで濃く橙色に照らす。

その直後、火の玉は四散し今までに見たこともない巨大な『大』の文字を形成し、やがてゲンガーを包み込んだ。

「ガァァァァッ……！」

特防の低いゲンガーである。その上猛火で上乗せされた大技の直撃には一たまりもなく沈黙した。その時レッドはエリカの言っていた知は力なりと言う格言を反芻させ、意味を噛み締めた。

こうして二体を残し、レッドは勝利する。

マツバはゲンガーを戻すと、うつむいたと思うと静かに笑って

「ハッハ！　楽しかったよ！　まさかポケモンにクイズを出してその間隙を突いて大技を当てるだなんてね。世の中には凄い発想をする人がいるものだよ。そうでなくても、流石は伝説のトレーナーと異名を取るだけある実に戦い甲斐のある一戦だった。ファントムバッジは君にこそ相応しい、受け取ってくれ」

マツバはレッドに舞妓はん含め二枚目のファントムバッジを手渡す。
「貴方、おめでとうございます。これでヤナギさんにも対抗できる技が完成しましたわね！」
彼女はレッドの勝利を祝うと共にヤナギ戦への大きな武器が出来たことにまるで自分の事のように喜んでいる。
「ああ、そうだな。これでヤナギさんとも対等に戦える筈だ」
レッドはそういって確信を掴んだように目を輝かせる。
「うん。前にこの町に来た時より二人とも顔つきがかわっている。前はまるで末法の世の如く沈んだ様子だったが、今は毘沙門天をも圧する気迫を持ち合わせているように思えるよ。その調子ならきっと何者も君たちを止めることはできないだろう。オーキドの一件は僕に任せて、頑張ってね」
自分の恋敵をここまで褒めることが出来るマツバを見て、レッドは自分自身がとても小さく思えた。今回戦って、レッドにとってマツバはエリカを狙う天敵などではなく、自分が頭はともかく、精神的に越えるべき大きな壁であると肝に銘じた。
自分はマツバに勝ってなどいない。闘いに勝って、戦いに負けたと。
「はい」
とマツバに二人は答えた。

その後、二言三言話して二人はエンジュジムを後にする。

―4月21日　午後9時　チョウジタウン　ポケモンセンター―

三日かけて二人は修行の総仕上げとばかりにスリバチ山を進み、いよいよジョウト地方最大の壁、ヤナギの下へ捲土重来を果たす機会が巡ってきた。

二人は諸事を済ませ、ヤナギ戦へ向けての話し合いを終えた後、レッドが風呂に入る。

その間、エリカはナツメに電話をする。

また少しの間世間話をした後、本題に入る。

「で、あれからどうなったの?」

「何とかシジマさんとミカンさんにバッジを頂いて、チョウジに戻ってきました」

「そんなことくらい知ってるわよ。凄いけれどどうやって勝ったの?」

エリカは塩雪戦法と、エリカが種を蒔いたがレッド自身で技にまで昇華させた大文字の話をする。

「へぇ。二人なりに頑張って着実に勝ちを進めたのね」

「はい。左様ですわ。レッドさんが自らの力で技を作り出された時は本当に嬉しかったですわ。やはり私の眼に狂いは無かったと」

彼女の言葉にウソ偽りはないようである。

「そうね。伝説のトレーナーという看板伊達に背負っている訳じゃないという事ね」

レッドに対しては懐疑的な感情を抱くナツメが珍しく褒めて見せた。
「その通りです！　レッドさんには本当感心させられますわー」
彼女はまるで自分の事のように舞い上がっている。
ナツメは暫し黙した後に
「ねぇ。今のあんたの様子聞いてて思うんだけど」
「なんでございましょう？」
彼女は余韻の残った高めの声で答える。
「なんというか、最後に電話した時と、今の時とであんたのレッドに対する感情に変化が出てきたと思うんだけど……」
「変化？　それは一体どのような？」
「うーん……あまりはっきりと言えないんだけど、なんだかフワフワした感じのような変化ね。地に足がついてないというか」
エリカはその一言に瞳孔を収縮させて反応する。
しかし、そう簡単には認めたくないのか、彼女は少しばかり強い声で
「き、気のせいですわ！　それはナツメさんの思い過ごしでは？」
と返して見せる。
「そう？　まぁそれはそれでいいんだけど……」

その後も十分ほど会話して通信を切る。
「そんな……まさかこの私が……建前ではなく本当にレッドさんの事を……？」
彼女は数分ほど突っ伏して考えた後、気にもんでも仕方ないと考えたのか本を読む。
しかし、あまり内容が頭に入らなかったのか数ページ読んですぐにやめてしまった。
それから二人はいつもの通りに諸事を済ませ、眠りにつく。
―４月２２日　午前９時　チョウジタウン　ジム前―
「よし……！　いよいよか」
「はい。いよいよですわね」
ジムに張り紙の類のものはなく、トレーナーたちも中にいる。
いつ挑戦しても良い様子である。
「じゃあ、行くぞ」
「あ、あの！」
エリカがレッドを呼び止める。
「ん。どうした」
「その、昨日漸く、届いたものなのですが……」
エリカはバッグから一枚のＣＤＲＯＭを取り出す。
水色に彩られている。レッドはそれに見覚えがあった。

「もしかして……それって、技マシン？」
「はい。中身はしおみずです。シジマさんの話でシンオウ地方にその技が多く使われているという話を思い出しまして……。屋敷の者に手配させたものが漸く届いたのです」
　彼女は勝負の時は切り替えようと、いつも通りの喋々とした様子で喋る。
「なんでそのことを今まで黙ってたんだよ」
　レッドはエリカに少々きつい口調で問い詰める。当然といえよう。これがあると知っていればわざわざ一人で修行する事など無かったのだから。
「貴方自身の力でこの状況を切り開けるかどうか知りたかったのです。ポケモンマスターを目指すものとしてそのくらいは出来て当たり前ではないかと思いまして……」
「そうか……。そういう事か。確かにこれがあると頼っちまうからな……」
　レッドは少々腑に落ちない様子ではあるが、これ以上の追及は止めた。
「この技マシンは一時的に体中を海水と同じ濃度にして、それをぶつける技です。つまり、先日ミカンさんにした海水でのハイドロポンプに近い事が可能になります」
「でも威力は？」
「そこもご安心ください。相手の体力が弱っている時ならば、威力が二倍になります。これはちゃんとしたポケモンの技であるが故につけられた追加効果でしょうね」
「そうか。分かった、じゃあ早速覚えさせるか」

二人はジムの横手に回ってポケモンたちにこの技を覚えさせた。
そして、いよいよジムに入る。
―午前10時　ポケモンジム―
「ようやく来たか……レッドにエリカ女史！」
ヤナギは床几に座りながら杖を中央につき、風格のある体でそう言った。
いつにもまして圧倒されそうな気迫を持つ老人である。
「どれ、バッジのケースを見せてもらおうか」
レッドとエリカは静かにケースを渡した。
「うむ、きちと6つ揃っとるな！　では始めるかの。言っておくが、如何な経路をたどっていようと容赦はせぬぞ。そちらも全力で来るがいい」
ケースを一瞥すると、ケースを返すと共に、ヤナギは重い腰をゆらりと上げる。
その様は、さながら怪物が立ち上がるようである。
二人の目には、必ずや勝つという闘志が燃え盛っていたことは説明するまでも無いであろう。
こうして、一か月来の捲土重来をかけた大勝負が幕を開けるのだ。
―第八話（下）　赤き心は挫けない　終―

第九話　厳冬の果てに

―４月２２日　午前９時１５分　チョウジタウン　ポケモンジム―

外は穏やかな風が吹き、陽春の麗らかな陽気がやってきているというのにジムの中は真冬の原野の如く殺伐たる雰囲気に満ちていた。

初手の陣容はヤナギがジュゴンとマニューラを、レッドは機を見計らうためにカビゴンを、エリカはルンパッパを繰り出していた。

「マニューラ、カビゴンにけたぐりだ」

マニューラは敏捷な動きでカビゴンに接近し、足を強く蹴り上げる。

最大威力で蹴り上げられたカビゴンは一回宙を舞って、そのまま落ちた。この身軽そうな躯体からは想像もできないほどの膂力である。

相当に鍛えあげていることが見て取れた。とはいえ、所詮は不一致なのでそこまでの致命傷にはならず三分の二ほどの消耗にとどめた。

「ジュゴン。潜れ」

ヤナギはルンパッパへの警戒か、ダイビングへの準備としてジュゴンを水中に潜ませる。

「ルンパッパ。光を集めるのです」
　エリカはそれを読んでいたかのように、顔色一つ変えずに冷静な様子で指示した。
「カビゴン！　カウンターだ。仕返しをしてやれ！」
　レッドはここぞとばかりにヤナギ対策の一環で修行の最中に覚えさせていたカウンターを指示。カビゴンは覚醒し華奢なマニューラを相手取って殴ったり蹴ったりの大暴れをしてみせた。これがポケモンバトルでなければただのイジメのように見える。
　防御が薄氷の如く脆弱なマニューラにとってこれは致命傷である。いや、それ以前にカウンターは直前に相手から受けていたダメージを二倍にして返す技なのでけたぐりで半分以上削れているカビゴンの攻撃はまさに一撃必殺となる。
　が、そこはやはりヤナギである。
「クソッ……」
　レッドはふらふらながらも一応はなんとか立っているマニューラを目にして歯ぎしりする。
　気合の襷を身に着けており、体力を1残して瀕死は免れた。ミカン戦で似たようなことは何度も経験しているというのにこの悔しさにレッドはやはり慣れない様子である。
　ヤナギはすべて見透かしていたのかその冷厳な表情は微塵も変わることはない。
　レッドはこのままだとどうあれ次のターンでカビゴンは倒されてしまうと考え、帽子

を目深に被りポケモンの交替を思案する。仮にここを耐えたとしても、カビゴンにとってけたぐりという大きなリーサルウェポンを持っているマニューラが残っている限りは安心することはできない。ならばここはカビゴンは温存すべきだろうという思考に至る。

が、まだ一体も倒せていない状況下で奥の手を見せるというのはヤナギの思い通りになっているようでどうも面白くないとも彼は思う。この夫婦の切り札は塩雪戦法とリザードンの問大文字だ。因みに塩雪戦法を出す合図はカメックスを出したときにと口裏を合わせている。

つまりレッドに選択権のある三匹のうち、二匹は既に固定されている。レッドは面白くないと思いつつもカビゴンを温存するならばやはり切り札のうちどちらかを出すしかないという事にいきつく。

この間の思考で二分かかっている。そして、ではどちらを出すかに関してレッドの頭中では甲論乙駁の議論が繰り広げられた。

「貴方。どうされたのです?」

レッドの動きが止まってから五分。長考を気にかけてかエリカが話しかけた。レッドは小さな声で自らの思案を明かす。

「なるほど……左様でございましたか」

彼女はそういうと数秒考えたのちに
「貴方。ここで手の内を明かすことはありませんわ。まだまだこの戦いは始まったばかりです」
彼女はレッドの思案をきっぱりと否定した。
「いやだってこの状況だぞ……？　どうあがいてもこのままだとカビゴンは犬死にだ」
「それこそがヤナギさんの策かもしれません。交替を迫って手持ちに余裕があるうちに奥の手を披露させ対策を練るという……。まだ相手の手持ちが削れていない現時点でそれに乗るのは愚考というものです」
「それはそうかもしれないが、じゃあどうしろって言うんだ」
「貴方、確かカビゴンにはまもるを覚えさせていましたわよね？」
「え……まあ」
レッドはとにかくカビゴンに時間を稼がせることを念頭に置いているため修行中に持久系の技を覚えさせ直していた。因みにほかの技はねむるといびき。
そしてレッドはエリカの言を反芻して漸くエリカの思考に察しをつかせる。
「そういうことか」
「はい。貴方ならばすぐにお分かりいただけると思いましたわ。さて、お年寄りを長く待たせるものではありませんわ。勝負に戻りましょう」

そうして、二人は配置に戻る。
ヤナギはレッドの動きが止まってから床几に座り直し、杖をついて二人の動向を黙しながら見守っていた。
やがて二人が戻るとゆらりと立ち上がり
「長かったの。では再開しよう。マニューラ、カビゴンにけたぐり」
と言って、マニューラはカビゴンの足元に向かう。しかし、その動きは先ほどよりは少々鈍かった。
レッドは確かにそれを感じ取っていたが特に気に留めずカビゴンに指示する。
「カビゴン、まもるだ！」
カビゴンは即座に結界を作り、豪速で近づくマニューラより１ｍほど前にいかなる攻撃をも跳ね返す鉄壁を作った。
が、弁慶の泣き所というのはどのようなものにも存在するのだ。
ヤナギはあざ笑うかのように、わずかに口元を緩ませ
「小賢しいのぅ。……マニューラ、フェイント」
と指示した。
マニューラは自慢の鉤爪を壁にやってまもるの結界を破壊し、そのついでにカビゴンの腹を強く掻く。

幸いにもフェイントはノーマル技の為、カビゴンには大したダメージにならずどうにか耐えた。

レッドはこの事態に目を白黒させる。まさかフェイントという技をここで見るとは思ってもみなかったからだ。

「う……嘘」

と、思わず呟いてしまった。

「甘いのう。レッド。きっとこれはエリカ女史からの差し金であろう。仮に君ひとりならば温存しようとポケモンを交替しただろうに……」

「グッ……」

またもヤナギに心を読まれていたようだ。ヤナギの冷徹な老眼は何物をも見通すのかとレッドは足を竦ませる。また、あの時の金縛りに似た感覚がよみがえりつつあった。

「まぁ良いわ。フェイントを耐えきったというのはちと考えてはおらなんだが……。これでしまいにしてくれる。ジュゴン！」

ジュゴンは水中から銃弾の如く姿を現し、そのままカビゴンのどてっ腹に突撃を試みる。

まもるという結界が破られた今、無防備なカビゴンを守るものはなにもなかった。

「ルンパッパ！　ソーラービームです！」

長い間貯めこんでいた奕奕と輝く光線がジュゴンを太く貫いた。

あと2秒指示が遅れていれば間違いなく、その場にはカビゴンが倒れていたが、現実にはジュゴンの横たわった姿がカビゴンの薄い目に映っていた。

ヤナギは静かにジュゴンを戻し、

「ほう。ちと読み違えたな……。それはカビゴンの邪魔となるマニューラに向けられるとばかり思っていたがの……。やはり読み切れぬ御仁よ。エリカ女史。女史の祖母君のカルミ……いや、カルミア殿とよく似ておるわ」

と彼女に言う。レッドにはなぜヤナギがわざわざ言い直したのかが理解できなかった。

「この方と共に過ごした捲土重来への日々を、そう易々と無にされてなるものですか……。お祖母様の名を出して私の心をかき乱す算段なのでしょうがその手は食いませんわ」

「敵わぬのう……。だが次はそうはいくまい、行け、ユキメノコ」

それから二人はユキメノコやマニューラを撃破した一方、双方の手の内を見せずにどうにか粘り強く耐えてきた。

エリカはルンパッパを一時戻してキノガッサを繰り出したが、カビゴンがマニューラを下したしばらく後にユキメノコの吹雪を食らって倒れ、カビゴンもその時にねむるで回復した分を大幅に削られてしまった。

三度の作戦会議や数々の長考を経て勝負開始から三時間以上が経過し、ヤナギは残り三体。レッドとエリカは残り五体と数の上ではレッド側が有利に思われるがヤナギの真打がまだ姿を見せていない以上まったく予断を許さない状況である。

本当の正念場に勝負は差し掛かっていた。

―同日　午後０時３０分　同所―

この頃、ヤナギ側は漸くユキメノコがルンパッパのギガドレインで吸い取られきられて倒れ、ヤナギ側には他にユキノオーがいた。ルンパッパは前述の技ややどりぎのおかげでほぼ無傷。だがカビゴンの残り体力はわずか五分の一である。（このねむるは二回目で、現時点では起きている。ちなみに食べ残しをもたせている）

一方でヤナギのユキノオーは二ターンほど前にでてきたばかりで無傷同然の上に根を張っている為常に回復できる状態である。

天候はヤナギのワンサイドゲームを防ぐためにルンパッパによってにほんばれ状態にはしてある。残り二ターン。

「この私のポケモンをここまで倒すとは、この一か月間遊んできたわけではないようだ

の」

レッドは内心穏やかではない。

確かに前回に比べてやや有利な戦況ではあるが、それはまだヤナギが前回の切り札になった例の二匹を出していないからだ。いや、そうでなくてもユキメノコやマニューラに関しては前の実力では倒すことはできなかった事は明白であるし、現況でもかなり精神を削った末の勝利である。

ここでまた前回のように切り札を出されたときに逆転されるのではないかという大きな不安が頭をもたげていた。

エリカの方も心境はほぼ同じのようで、序盤の時よりも考える時間が増えていたし作戦を話した時も何度かそのことを懸念していた。

が、それを敵に気取られてはしまいであるとレッドは思い、なかば無駄と思いつつも言葉だけでも毅然に取り繕う。

「当然ですよ。ここでつまずいてたら全国なんてどだい無理ですからね！」

「フ、それもそうだの。では、参るとしよう。行け、トドゼルガ」

トドゼルガが大きな牙を誇らしげに見せながら悠然とその場に姿を現す。前にも見たとおりかなりの貫録である。

前回では素早さの差で負けてしまったが修行に修行を重ねて能力を上昇させた今、そ

の心配をする必要はないが、今出ている中にはカビゴンがいる。カビゴンの素早さは種族値でいえばトドゼルガを大いに下回っているのだ。

「カビゴン！　ねむ」

レッドが言い終わる前に、ヤナギが技を指示する。

「トドゼルガ、絶対零度だ」

命中率はトドゼルガとは2レベルほど差があるため32。レッドは当たらないように切に願ったが……。

数秒後、カビゴンは氷塊と化していた。マニューラを葬り、ユキノオーやユキメノコの度重なる猛攻にも耐え抜いた彼は遂に切り札の一撃必殺技の前に散った。

「な……なんてことだ」

一撃必殺技があたるとこんなにも悔しさがこみあげるものなのかと、レッドは数か月前に自らがハヤトにした事を少しだけ後悔した。

「私はあまりこういう技は好かんのだがの……。そろそろ君たちの切り札を見てみたくなってな。こうするしかなかったのだ」

ヤナギは仄かながら言葉に謝意を含めつつそう言った。

「強硬手段という訳ですか……。こうなったら致し方ありませんね」

レッドはエリカを見る。

「もう十分に時は稼げました。今こそが好機です」
エリカは小さな声でレッドに言う。
「よし、行け、カメックス！」
カメックスは漸く出番が来たかと言いたげな風で意気揚々とフィールドに立った。
「ユキノオー、カメックスにウッドハンマーだ！」
ユキノオーは即座に自身の胴体を渾身の力でカメックスに頭から叩きつけた。
その音は非常に鈍く、鉄の如き堅さが彼を襲った。カメックスは咄嗟の判断で甲羅に籠っていたとはいえフィールドを広くめくり上げ、その周囲にヒビを作ってしまうほどのダメージを受ける。
しかし、相当に鍛えていたことが功を奏し、ＨＰは三割ほど残る。
一方のユキノオーは反動で三割ほどダメージを受けていた。
エリカは好機とばかりにいきいきと
「ルンパッパ！　ユキノオーに塩水です！」
と指示した。
ルンパッパは口から高濃度の塩水を噴出し、ユキノオーにぶつける。
目論み通り、氷タイプのユキノオーには大いに効き、大量に雪を溶かしてユキノオーは瀕死になり倒れた。

「やった……」

レッドは思わずそうつぶやいた。

作戦通りになったから当然と言えば当然である。

しかし、ヤナギは静かに笑ってこう呟く。

「小賢しいのうご両人……。この程度の策で雪柳が折れると思うたか」

「な……何ですって？」

二人は目を白黒にして答える。

「まあ、今に分かるわ。行け、マンムー」

マンムーは前回同様堂々たる姿でこの場に姿を現した。

「レッド、エリカ女史……。本当の冬の厳しさというのをとくと味わうが良い！　マンムー、トドゼルガ！　ブリザードだ！」

指示が下ると数秒の沈黙の後、二匹は厖大（ぼうだい）な量の風雪を放出し、フィールドはあっという間にブリザード状態になった。

ブリザード。本来は極地に見られる地吹雪であるが、

攻撃又は特攻種族値が８０以上ある氷ポケモンが同時に吹雪を使うと発生させることが出来る……というのは理論上の話で、その他にも懐き度のみならずそれ以上の相当な信頼関係を構築せねばならず、これを習得できたのも、そして、この技自体を発見し

たのもヤナギ自身である。
そして、その効果も労力の対価に見合ったもので、数ターンブリザードは吹き荒れて、その間相手の命中率が4段階下がり、毎ターン氷ポケモン以外は四分の一ずつ体力が減っていく。吹雪は必中になり、氷技の威力は二倍となる。そして何よりも恐ろしいのは……
「つっ……。こんな程度で負けてたまるか！　カメックス！　ありったけの塩水をマンムーにくれてやれ！」
「あいよマスター！」
レッドはブリザードを前にして恐怖に震えていたが、態度だけは毅然に繕ってどうにかごまかそうとした。
ポケモンの前で主人が強張っていては勝てる勝負も勝てなくなる。
カメックスが砲筒からだした塩水はブリザードの中へと飛び込んでいったが、カメックスには全く手ごたえが無い様子だった。
「つっ……どういうことだ！」
レッドには何が起こっているのか全く理解出来なかった。
すると、黙していたエリカが口を開く。
「もしかするとブリザード空間の中で凍ってしまったのでは……？」

「そ、そんな！　だってお前塩水はなかなか凍らないって」
「私は凍りにくいとは述べましたが、凝固点が存在しないと申し上げたのではありません。たしかに塩水は普通の水に比べれば凝固点が低いかもしれませんが、それはあくまで普通の水と比べての話です……つまり」
　そこまでエリカが言うと、ヤナギが氷の向こうから大きな声で口をはさむ。
「女史の推察の通りだ！　ブリザード空間内の気温は零下４０度！　如何に塩水といえど凍りつく酷寒よ！　ついでに教えて進ぜよう。水に限らず氷以外のすべての有体物はこの空間の中で氷塊と化す！　このブリザードのある限り多くの技はここまで届かぬ!!」
　二人はそれを聞いて大いなる絶望を覚えた顔となる。
　つまり、このブリザードという状態は氷壁とも言うべき結界が生じていると言って過言ではないのだ。
「私がこの技を編み出して以来、これがおさまった後に手持ちを残していた者はおらん。さて、ポケモンマスターを目指すご両人よ。これを越えてみるがいい」
　言葉そのものは静か、だが、今まで聞いたことが無いほど強い意志が宿ったかのような声でヤナギは言った。
　そして、これを言い終わるとヤナギはまたも沈黙に戻る。

「なんということだ……これがヤナギさんの力なのか……」
「老いてなお世界で一二を争う強さと言われるのも納得ですわ……。どういたしますか？」
エリカも万策尽きている様子で話す。
レッドは２０秒ほど黙した後にしっかりとした口調で言う。
「俺は諦めないぞ」
「諦めないって……。この四面楚歌というべき身動き取れない状態でどうするというのです？」
エリカは珍しく後ろ向きである。一カ月近くもの間一生懸命頑張って形にした策をいとも簡単に破られて投げ槍になりかかっているのだろう。
「確かに八方ふさがりといった状況だが……。ここで諦めたら今日まで積み上げてきたことが全て無駄になる。何よりここで諦めてたら全国なんて、とても無理な話。それに……」
レッドは口を結ぶ。
「それに……なんですの？」
「一生懸命修行についてきてくれたポケモン達と……ヤナギさんどころかミカンさんに負けたときも俺を見捨てず側で支え続けてくれたエリカとを……裏切るような真似は

したかないんだよ。だからこそ俺はここで勝たなきゃならないんだ！」
その言葉を聞いた途端彼女は瞳孔を収縮させ、すぐに顔をレッドから背けた。
「ん？　どうした」
「い、いえ……。さ、左様ですわね。ここで諦めてしまったら全てがご破算になってしまいます。どうにかしてこの状況を打破しないことには先に進めませんわね」
レッドからは見えてないがエリカは顔を真っ赤にして冷や汗をかきながらそう答えていた。
どうにかこうにか冷静そうに取り繕っているのは流石と言うべきか。
「そうだな……エリカ。お前のギガドレインとかも使えなさそうか？」
「無理でしょうね……あの技は対象が特定できないと意味がないですから」
レッドとエリカの眼前にはそれぞれの手持ちとごうごうと吹き荒れる暴風雪しかない。
マンムーもトドゼルガも影すら見えない有様である。
「うむむ……完全に万事休すだな。基本的に自己強化系の技しか使えないという事か」
そうこうしているうちにトドゼルガとマンムーのダブル吹雪が襲い掛かり、ルンパッパはどうにか体力をごく僅かだけ残し、カメックスは倒れた。
残り三対二。有利だったのがあっという間に互角にまでもつれこまれた。

しかもこのまま進めば二ターンもあれば全滅するのが目に見えている。
レッドの残りのポケモンはリザードンのみ。前回と同じ状況。リザードンが倒れれば敗北は確定的である。
最後の切り札としてレッドはリザードンを繰り出した。
「試しに一度やってみるか……。リザードン！　マンムーに問大文字だ！」
「了解！　問題、瀬戸内海に浮かぶ……」
しかし、問題を言い終わる前に
「甘いっ！　トドゼルガ！　リザードンにハイドロポンプだ！」
その瞬間、左側のブリザードが切り開かれ、その部分から大量の水流がリザードンに直撃した。
一瞬できたと思った空間はすぐにとざされる。
どうやら敵方が攻撃するときだけブリザードに隙が出来るようだがあまりにも迅速な為これを突くことは難しいだろう。
その前にポケモンがどこにいるか推定はできても特定ができるわけではない。
直撃を食らう寸前にリザードンは一か八かとばかりに大文字をブリザードに放った。
1mほどは勢いよく進んでいったがすぐに推進力を失い、風と雪にかきけされてしまった。

「くそっ、ダメか……」

「甘いのうレッド君。ポケモンに油断させてその隙に技をかけるというのは常套手段のうちに入るが……。この程度の小細工で厳しき冬を凌げるとでも思うたか。君たちより長くたたかってきた中で同じような手段を使ってきたトレーナーは何度となく見たものよ！」

なんということだろう。二人が懸命に生み出した策はいずれもヤナギの想定内だったというのだ。

ヤナギの恐ろしさをまたも体感するとともにいよいよ追い詰められている事をレッドは深く自覚する。

「つっ……。なんてこった」

先ほどのハイドロポンプでリザードンは三分の二の体力を失う大ダメージを受けた。

「マンムー！　ルンパッパに雪なだれだ！」

ルンパッパに天空から雪の大群が襲い掛かる。無論一たまりもなく倒れた。

いよいよ二対二にまでヤナギは追い詰める。

ルンパッパを戻すとエリカはモンスターボールを１０個ほど左手に載せて思案していた。いずれも彼女が手塩にかけて育てた精鋭たちである。

とはいえ、やはり圧倒的に不利なタイプで戦っているため相当選定には苦労している

様子だ。

「エリカ、迷ってるみたいだな」

「ええ……。このような状況、生まれて初めて直面しましたから……。まさかブリザードの現象が技として成立するだなんて思いもしませんでしたわ」

「そうだよな……それにしてもこれってこんなに雪とか風が強く降るのか。寒いところは大変だろうな……」

と、つぶやいているとレッドはあることに気付く。

そう、ブリザードを構成するのは視界を真っ白にするほど厖大な量の雪と万物を凍りつかせる冷風である。

「エリカ……確かお前の手持ちにダーテングがいたよな」

「はい」

「ダーテングは確か手に持っている葉っぱに強風を起こす作用があったとかラジオで聞いた覚えがあるけど」

「ええ、ですからこのポケモンは追い風を覚えますし、私のダーテングも覚えてますわ」

レッドは数秒ほど黙したのち

「そうか……よし、これなら行けるぞ。エリカ、ダーテングを出してくれ。俺のリザードンは大文字のパワーポイントが切れた保険として熱風を最近覚えさせていたんだ。つ

まり」

　ここまで言うとエリカは合点がいったようで

「なるほど、そういうことですか。分かりましたわ。おいでなさい、ダーテング！」

　ダーテングは下駄を悠然と闊歩させながら出てきた。

「リザードン！　熱風だ！」

　リザードンは指示が下るとブリザードの空間に向かって、灼熱の熱風を放出する。

　熱風は程なくしてブリザードに到達し、風を取り込んで雪から雨へと変え、やがて何も降らなくした。

　しかし、その範囲は空間の半分にも届かなかった。

「この程度の技でブリザードが消えるとでも思ったのか。残念だの。そろそろ幕を引くとしよう。マンムー……」

　ヤナギの指示が下るよりわずかに早くエリカが

「ダーテング！　追い風です。上に煽り、熱風を吹き上げなさい」

　ダーテングは芭蕉扇にみたてた木の葉を大きく振り続けた。

　推進力を得た熱風は上昇気流を形成し、雲を作り、やがて雪をも溶かす大雨を降らせた。

　暴風雪から暴風雨へと形をかえ、熱風の温度が伝わったことによってあっという間に

蒸発。追い風から１０分ほどでブリザードは消え失せた。
そして、熱風はそのままマンムーとトドゼルガを灼きにかかり、マンムーは８割削れ、トドゼルガは６割程削れた。
ヤナギは最大の奥の手を崩されて意気消沈かと思いきや、高笑いをしてみせ
「カーカッカッカッ！　ブリザードを破りおうたか！　面白い、ポケモンバトルはこうでなくてはならぬわ。押しつ押されつの応酬こそが醍醐味よ！　だがの、この程度で折れるほど私は老いぼれてはおらん、マンムー。ダーテングに雪なだれだ」
ダーテングに雪玉の山が崩れかかり、倍加した威力の前に一たまりもなく倒れる。
これでエリカの手持ちが全滅し、残るはレッドのリザードンのみとなった。
「エリカ……。よく頑張ってくれた。いくら礼を言っても足りないくらい感謝してる」
「いえ。妻として当然のことをしたまでですわ。それよりも、今は目の前の事に注力してください」
「惚気ている暇はないぞレッドよ。トドゼルガ！　とどめを刺せ、リザードンにハイドロポンプだ！」
トドゼルガは大量の水をリザードンに衝突させようと試みる。
しかし、リザードンは寸でのところで回避した。

「リザードン！　トドゼルガに大文字だ！」
　レッドはもはやヤナギに問大文字は通用しないと判断し、一致の水技を覚えているトドゼルガに照準を定める。
　トドゼルガは大文字の炎に焼き尽くされ、猛火が発動していることが功を奏し遂に倒れた。
「最後か……。よくぞここまでやったものだ」
「そりゃあどうも」
「だが、どちらのポケモンも満身創痍だの。ここで決着をつけようではないか」
　ヤナギからの提案にレッドはすぐに
「そうですね……。行きますか！　リザードン！　熱風だ」
「マンムー！　リザードンにストーンエッジ！」
　2匹は同時に攻撃した。
　マンムーの鋭利な岩石とリザードンの熱風が衝突し、数分もの間拮抗する。
　その瞬間、ジムの空間は静かな熱気に満ちた。
　やがて、拮抗は崩れる。あろうことか岩石がマグマ状に溶解し、下に落ちていったのだ。
　そのまま熱風はマンムーに襲い掛かり、断末魔をあげながらマンムーは倒れた。

「やった……」

マンムーが倒れた瞬間、レッドには大きな喜びが駆け巡った。

言葉よりも、苦労が報われたことに対する感情が強い。

「うむ、見事な戦いぶりであった。捲土重来を見事に果たしたの。君たち夫婦のその比翼連理ぶりならば、どのような困難も乗り越えていけるであろう。よし、このバッジを持っていくが良い」

ヤナギは二枚のバッジを二人に手渡した。

「ありがとうございます！」

レッドとエリカはほぼ同時に深々と頭を下げる。

漸く勝ち得たバッジなので、二人は感無量な様子である。

「二人はまだまだ若く春秋に富んでいる。これからの旅においてもより経験を積み、次代を担う立派なポケモントレーナーとなるのだぞ」

その後、二人はジムを後にした。

―同日　午後3時30分　チョウジタウン―

二人はジムを出て、ポケモンを回復させるためにポケモンセンターへ向かっていた。

「漸く勝てたな……。ジョウトもあと一つか」

「ええ。早いものですわね。それにしても一ヶ月の修行が報われてとても心が晴れ晴れ

としていますわ」
「ああ。渾身で考えた技を二つとも看破された時はどうなることかと思ったけどな」
「はい……。あの時ばかりはここまでかと流石に諦めかけましたわ」
やはり彼女も相当に追い詰められていた様子であった。
「でもやっぱり諦めないで必死にやればどうにかなるものなんだな」
レッドはそう確信を持った体で力強く言う。
彼女はその後急に黙ってしまった。不審に思ったレッドは尋ねる。
するとエリカは数秒おいて答えた。
「あの……貴方に謝らなければならないことがあるんです」
「なんだ？」
そこからまた彼女は数秒おいて言う。相当に勇気を振り絞ってるようだ。
「実を言いますと、貴方にはずっと隠していた事があるんです。これまでは貴方が……その私の伴侶に相応しいかどうかを見る為に少しだけ色をつけて貴方と話していたり、貴方に非協力的な態度で接していました」
「え!?」
レッドは全く気付いていなかった様子だ。一番好きな人と旅に出ていた訳であり、あまりそういったことに気が回らなかったようだ。確かにエリカの心情が読めなくて困

惑したことが多々あったがこのような真意があったとは思えなかった。
「私が本当に男性に求めることは教養や頭の良さといったことよりも何者にも屈しない強靭な精神と強さをもっている事です。貴方と一緒に旅をしてから2カ月余り、レッドさんにはそれがしっかりと備わっていることがよく分かりました」
「一つ聞いていいか」
レッドがエリカに尋ねる。
「何ですの?」
「どうしてそれを今言おうと思ったんだ」
「あの……私としましてはこれからは肝胆相照らす包み隠さない夫婦として旅を進めていきたいのです。ですから、ここでしっかりとけじめをつけておこうと思ったのですわ」
「そうか……そういう事か。つまり俺はエリカに夫として認められたということか」
「はい。貴方を試すような真似をして大変申し訳なく思います。これからは本当の夫婦として生きていきたいと切に思ったからこそこうして本音を申し上げたのです」
レッドは内心、試された事に怒りを覚えないでもなかったが、それ以上にエリカから本音を話してくれたことがとても嬉しかった。だからエリカを責める事は考えなかった。

「そうか。じゃあこれからも宜しくな、エリカ」
レッドは手を差し出す。
彼女は少しだけ躊躇したが、レッドの手を握った。
彼女の手は暖かい。
「あ、握ってくれた」
「何を仰せになるのです。私たちは夫婦でありませんか。手くらい握れなくてどうするというのです。これより先の行為はまだ……ご遠慮いただきたいですけれど」
「そ、そうか」
レッドは内心とても晴れやかになったが、同時に少しだけがっかりしていた。
「フフ。これからも宜しくお願いいたしますわね。貴方」
彼女の笑顔と同じような陽春の日差しがやさしく夫婦を照らしていた。
―第九話　厳冬の果てに　終―

第十話　春の嵐

―４月２８日　午後１時　セキエイ高原　ポケモンリーグ　理事長室―

ポケモンリーグの最上階に位置する一室。理事長室。

ここには全国のポケモンリーグの頂点に君臨する理事長、即ちチャンピオンが鎮座し執務を行う部屋である。

今ここには理事長であるワタルの他に副理事長のシロナがいた。

「理事長、火急の用とのことで参上致しましたが本日は何の御用ですか？」

シロナは突然の召集に当惑気味である。

ワタルは重々しい様子で口を開く。

「うん……。まずはこれを読んでほしい」

ワタルはシロナに１００ページ以上に渡る意見書と題された分厚い書類を手渡す。

「これ程分量がある書類でしたらメールなり郵送なりで事前に渡してほしかったのですが」

「いや、これは外部に絶対漏れてはいけない情報が詰まってるんだ。まぁ読めばわかるよ」

「確かに所外秘とは判が押してありますが……。愚痴を言っても始まりませんし、読ませていただきます」

シロナは一旦副理事長室に戻ってワタルから手渡された書類を精読した。

一時間後、彼女は鬼気迫った表情でワタルの下に戻る。

「これ……本当の事なのですか？　とても信じ難いのですが」

「ああ、僕も初めてこれを読んだときは仰天したよ……。これが事実だとしたら間違いなく天地がひっくり返ったような事態になるだろうね。で、君はどう思う？」

意見書の内容はマツバが書き著したオーキド及びロケット団による悪行の疑惑の数々とそれに関しての監視権を行使したエンジュ大学の精査を要求するものであった。

「私としては断固として監視権を行使すべきだと思います。よく調べられていますし、状況証拠に立脚したものとはいえそれなりに説得力のある論ができていると考えます。疑うに足る証拠は揃っておりためらう余地は無いかと存じ上げます」

シロナは確信を以て自身の意見を述べた。

「やはり君はそう考えるか……」

「理事長の考えは違うのですか？」

「うん……。確かに君の言うとおりロケット団の悪行は明らかだし、調べる余地は多くあると思う。でもね、相手が相手だ。もし調べて何もなかった場合研究会との関係が険

悪になってしまう」

オーキドはリーグと良好な関係を結んでいるポケモン研究会の会長である。

研究会とリーグはポケモンの生態や分布、その他ポケモンの研究に関してのデータを買っており、それは全トレーナーのポケモンの捕獲や育成論形成に大いに役立っている。

これらが関係悪化によって停止すればリーグの運営に大きな支障が生じる可能性があり、ワタルとしては是非とも避けたいところであった。

ヤナギとオーキドの仲は諸事情から非常に険悪だった為、ヤナギが理事長だった時代は一切関係が結ばれなかった。しかし、21世紀に入り先代理事長のダイゴの時代になって漸く上記のような関係が結ばれそれ以来リーグと大学が提携してトレーナーにポケモンの捕獲に対して情報を与えたり、ジムリーダー以上に関してはより強いポケモンを育てるのに研究会の解明した情報が大きな役割を担っていた。

その為、ワタルとしては極力その関係を壊したくなかったのだ。

「何を言うのですか！　ポケモンに関する是非は我々リーグが正さずにどこが正すと言うのです。確かに研究会との関係は重要でありますが、本分に取って代わるほどの事ではないと思います」

「今や研究会の情報はトレーナー一人一人にまで影響しているんだ。もしも僕が調査し

てなにも出てこなかった場合はリーグへの信用や権威は地に堕ちるという事を分かっているんだろうね」

「その場合は正々堂々とこの意見書の内容を公開し、職務に則って行った事を世に示せばいい話です。これは現代の董狐の筆です。マツバさんだって余程の確信と覚悟が無ければわざわざ理事長に請願するとは思えません」

「な、何をとんでもないことを！　意見書の内容を世に晒せばそれこそ笑いものになる。確固たる証拠さえあればこそこれも意味するが、そうでなければオーキド博士を状況証拠だけで弾劾したものにすぎないんだ。オーキド博士の評判からして世間はこれで納得しないことは目に見えてる」

「我々は職務を実行するだけで何の非もないのですよ？　何をそんなに恐れる必要があるのですか？　先人が勝ち取ったこの権利を使うべき時に使わないで如何すると言うのですか！」

　シロナのその発言を受け、ワタルは大きく頷き

「そうか……。そうだな……。よし、じゃあ……」

　監視権行使に向けて議論がまとまりかけたその時、リーグ委員が泡を吹きながら血相を変えて理事長室に入ってきた。

「り、理事長！　一大事でございます！」

「こら！　ちゃんとノックしてから」
　シロナは振り返って委員を見咎めた。
「あぁこれはこれは副理事長失礼を……。いえ、あのとんでもないことが起こりまして……」
「落ち着いてゆっくり話すんだ。一体何が起こったんだい」
　ワタルは委員に優しい口調でそう尋ねた。
　そしてリーグ委員はおもむろに口を開いた――

――

―４月２３日　午後１時　４４番道路―
　時は少しだけ戻って４月２３日。
　レッドとエリカはヤナギを破り最後のバッジを手にする為に出くわすトレーナーと戦いながらフスベシティへと向かっていた。
「はぁ。いい天気だな」
「ええ、お昼寝したくなるほどの陽気ですわね」
　昨日と同じく季節は春真っ盛り。葉がやや混ざりながらも桜が咲き誇り、心地よい春風が吹いていた。
「本当だな……。はーぁそれにしてもヤナギさんに勝ってからどうもヤマを越えたとい

うか身が入らないというか……」
「何を仰せになるのです。お気持ちは分からなくもありませんけれどね、勝って兜の緒を締めよという諺にもあるように勝ったからこそ身を引き締めなければなりませんわ」
エリカはやんわりと和やかな口調でレッドを諫めた。
「うん。わかっちゃいるんだけどな……」
そのような様子で二人は道路を進んでいく。
―午後11時　44番道路―
氷の抜け道を目のの抜け道―
前にして二人はテントを設営した。
日が沈むと途端に肌寒くなり、雲も多くなる。
レッドが寝静まった後、エリカのポケギアが鳴り響く。彼に遠慮したエリカは一枚上着を重ね着し、テントを出て岩の上に腰掛け、電話を取った。
ポケギアの通知欄にはアカネと記載されている。
「もしもし？　アカネさんですか？」
「せやで。久しぶりやねー。かれこれ一月ぶりくらいやったっけ？」
アカネは相変わらずの快活な様子で話している。
少しばかり近況や世間話をするとアカネは押し黙ってしまった。

「あの。アカネさん?」
「な、なんやの?」
「私に電話をしたのは何か用事があるからではないのですか?」
アカネがこうしてエリカに電話してきたのは初めてではないもののかなり珍しいことである。
彼女はそれを不審に思ったのかそれについて尋ねた。
「あぁ……うん、せやで」
しかし彼女はなかなか切り出せないでいる。
そこでエリカは追い討ちをかけるように畳み掛ける。
「もしかして、ツクシさんのことではないですか?」
「え……ええ!? ど、ど、どうして分かったんよ!?」
アカネは酷く狼狽した様子で応える。
「いつも歯切れのいい貴女がそうもったいぶるのは恋愛の事と決まってますわ」
エリカは朗らかな声でそう言った。
「ハァ……全くあんたには敵わへんなぁ……」
アカネは観念したかのような様子である。
「まだツクシさんの事を好いておられるのですか?」

「え……ま、まあなぁ。諦めよう思うて仕事に打ち込んだりしたさかい。せやけどあそこまでウチのハートを射止めた男はおらへんし……諦めるに諦めきれへん……」

　アカネは切々とした様子で言う。

「左様ですか……。しかしツクシさんは3月末にリーグを辞して今月よりウツギ博士の研究所の研究員としてワカバタウンにまで行かれたのでしょう？　風の便りで聞きましたわ。接点がなくなった今、こうなった以上もう諦めるより他に道はないのでは……」

「そないな事くらいわかっとるわ！　頭ではわかっとるんやけど、中々思い切りがつかんねん。せやから……毎夜毎夜ツクシの事を偲んで慰めてるくらいや」

「な……慰めているってもしかして」

　エリカはほんのりと頬を上気させながら尋ねる。

「なんや、分からんかったか？　全くし、しゃーないな、オ」

「いえいえ結構です！　そ、そうですかそこまでツクシさんのことを思っていらしたとは……」

「ウチも時折自分が怖なるわ……。ここまで人を好いたんは初めてやし、もう金輪際ないと思うし……。出来るならモノにしたいねんやっぱし」

　アカネは迫真めいた様子で言う。

「それで私にそれを言ってどうするというのです?」

エリカは最も疑問に思っていたであろうことをアカネに訊く。

「あんな……さっきも言うたけどチャンスが潰れとるし、この恋がどうにかなる可能性は限りなく0に近いんわウチもようわかっとる。ツクシはもう遠くに行ってしもたし、そもそもツクシの気持ちがウチにむいとらん。どこまでいってもウチの独り相撲やわ。せやけど、この気持ちを一人で抱え込むんわえろう辛うてな……。こんな事言えるのエリカしかおらへんし、少し愚痴に付き合うてもらいかったんねん」

「なるほど……」

「すまへんな。夜遅いのにこんなんつき合わせてしもうて……。少しはすっきりしたし、もう寝るわ。ほな……お休みぃ」

こうしてアカネとの通話は切れた。

その後彼女は氷の抜け道を目前に据えながら黄昏れ、うとうとしてきたため戻ろうとする。

するとレッドがテントより姿を現した。

「おお、エリカか……」

「あら貴方、どうされたのです?」

「いや冷えてるせいかトイレに行きたくてな……。お前こそどうしたんだ」

「はい、ポケギアに着信があったものですから、テントを出てお話してただけです」
「ん……そうか」
そう言ってレッドは公設の手洗いへと向かった。
エリカはレッドの後姿をどこか乾いた目で見つめていた。
―4月24日　午前9時　氷の抜け道―
氷の抜け道は氷柱や氷壁で構成されるフスベとチョウジを結ぶ洞窟である。
中は非常に寒く、外は春でも中は冬のごとき寒さとなっていた。
「寒い！」
レッドは氷の抜け道に入ると開口一番にそう叫んだ。
「あの時のシロガネ山を思い出しますわね……」
レッドとエリカは奥へと進んでいった。
奥に進むと、少し髪の状態が宜しくないおっさんが、カメラ抱えて話しかけてきた。
「意外なところでコンニチワ！わし、カメラおやじのゲンゾーです！フォトジェニックな君達い！記念写真撮っていかなーい？」
何とも快活で馴れ馴れしい口調である。
しかし、エリカはさして悪い気がしなかったのか、レッドにせがむ。
「こういう所で撮るのもまた乙なものですわね。貴方！撮りましょ」

その可愛さに心動かされているレッドの内心などお構い無しに、エリカはサッと位置について、レッドもやれやれといった心持ちで位置につく。

こうして、10分ほどでレッドとエリカは手持ちのポケモンと一緒に写真を撮った。

エリカは、ゲンゾーから貰った写真をまじまじと眺めていた。

レッドとエリカの後や横には、それぞれの手持ちが持ち主の近くについている。

こうして見ると中々に壮観である。どうでもいい情報だが、ピカチュウはレッドの右肩に乗っており、顔を強張らしていた。

「まぁ、綺麗に撮れてますわね！」

「プロのフォトグラファーだしな。つかあの人シロガネ山にも居て凄く驚いた覚え」

レッドの発言を彼女は遮って

「貴方のお顔、とても可愛いですわ！」

エリカは興奮しているのか、止まらない様子だ。いつになくでもないが、饒舌(じょうぜつ)だ。

しかも、レッドは帽子を被っているにも関わらず、エリカは顔をハッキリと判別できるらしい。恐ろしい。

「これは一生の家宝に……キャッ！」

エリカは氷床の上でうっかり転んでしまう。

「全く、写真ばっかり見てるからさ。ほら、捕まって」

レッドはエリカに手を差し出す。
エリカはやはり慣れていないのか少々躊躇したが、やがてゆっくりとレッドの手を掴む。
「貴方……ありがとうございます」
「いいんだよ。夫婦、だろ？」
こうしてレッドはエリカを助け起こした。
二人の本当の夫婦としての自覚は少しずつ芽生えていくのだった。

―２０１３年　１月某日　シロガネ山　最奥部―
それはレッドがエリカと旅を始める少し前の事。
レッドはおよそ一年前にパーティをボロボロにされたバンギラスに復讐を果たすために最奥部へ足を進めていた。平均レベルは６０から７５へと大幅に上昇し、レッドは満を持してバンギラスを倒す腹積もりである。
一か月前からバンギラスが再び最奥部に出現し、度々シロガネ山全体を揺さぶるほどの大暴れをしていた。
最奥部へ足を踏み入れると、真冬だというのに雪ではなく強い砂嵐が吹き荒れていた。

「たく、相変わらず立ちすくみたくなる雰囲気だな……」

レッドはシロガネ山の最奥部側の出口に立ち、パーティの先頭に立ってそう呟いた。

「ドシドシと足音が聞こえるな」

カメックスがレッドに言う。

確かにバンギラスのものと思われる重々しい足音が聞こえてくる。

「よし。まずはバンギラスを引きつけよう。カメックス！」

「あいよ！」

カメックスは前に出て砲筒から奥に向かって大量の水を放出した。

これは大きな音を生じる上に砂塵の中の水はとても目立つ為有効な手段である。

案の定バンギラスは気付いたようで、ズシズジという足音が前よりも明らかに大きく、レッドたちのいる方向に歩いていることが分かった。

「ラプラス！　雨乞いだ！」

ラプラスは雨乞いを行って天候を変えた。

レッドが最初にカントーに出ていた頃はまだ天候を変化させる技を覚えさせていなかった。しかし、ラジオで情報収集しているうちに天候技を知って修行によって習得させたのだ。

これによって天候がかわり、砂嵐が晴れ、雨が降り出した。

砂嵐の時よりは視界が良くなったのでバンギラスの所在がはっきりと分かった。相変わらずの恐ろしい形相と雄姿であり、ポケモンたちは戦慄している。

「カビゴン、前に出てくれないか」

レッドは一番バンギラスを見て平然としていたカビゴンにそう指示した。

カビゴンはのそのそと最前列に出た。

やがてバンギラスは猛然と突撃を敢行する。どうやらギガインパクトと呼ばれる技のようだ。それはカビゴンに直撃し、三分の二を失わせる大ダメージを被った。

「カビゴン！　ばかぢからだっ！」

カビゴンは仕返しとばかりにバンギラスに突っ込み、猛然とバンギラスを叩きつける。その最中にバンギラスを袈裟がけに大きく引っ掻いて見せ、シンボルともいえる青菱に傷を残した。

バンギラスはその行為が逆鱗に触れたのかカビゴンを突き飛ばした後、周りの鋭利な岩石を迅速に集め、数十個持ち上げて、パーティーに思い切り投げつける。

「う、うわあああああああ！」

この技にレッドのパーティは甚大な被害を被る。

レッドは気息奄々となったパーティを見て思わずそう叫んでしまった――

―同年　4月25日　午前3時　氷の抜け道―

レッドは半身を飛び起こした。
「はぁ……はぁ……なんだただの夢か……」
あの後、レッドは三時間かかってどうにかバンギラスを制し二度と山を荒らさないことを誓わせた。
しかしその代償はあまりにも大きく、レッドのパーティが精神的に立ち直るまでには数週間の時が必要だった。
レッドにとって二度に亘るバンギラスとの戦いは大きなトラウマであり極力思い出したくない出来事なのだ。
まだ心臓が激しく鼓動を奏でており、冷や汗をかいている。
「くそ……。嫌な事思い出しちまったな……」
そう呟きながらレッドは再び寝袋に入る。
しかしなかなか寝付けず結局翌朝まで置き続けた。

その後何日かかけてフスベへと進んでいった。
―フスベシティ　ドラゴン使いたちの集まる町。龍の穴はミニリュウやハクリューの分布地として高名で、乱獲を防ぐ為に現在はジムリーダーのイブキがここを守っている。ポケモンの技に関するところでも有名で、覚えさせるも忘れさせるもフスベに行け

というのが最近のトレンドでもない。
―4月28日　午後1時―
フスベシティは山間部にあり、周りには高い山が聳え立っている。
44番道路の時とは違い、この日は飛騨山脈からの寒い北風が吹いていた。
「ここがフスベシティか」
「いよいよジョウト最後のジム戦ですね！　お互い気合を入れましょう！」
「おうよ！　気張っていこう」
レッドはまだ緩みが締まってはいなかったが、一応ジム戦の前なので気合を入れた。
―同日　午後2時　フスベシティ　ポケモンジム―
マグマを越えてイブキの所まで辿り着くと、彼女は穏やかな様子で出迎える。
「初めまして。よく来たわね、お二人さん」
イブキは露出度の高い服を着ており、ワタルと同じくドラゴン使いのトレードマークといえるマントを羽織っていた。
レッドは目のやり場に困っていたが、挨拶もそこそこに彼女は自己紹介を始める。
「私の名前はイブキ。この格好を見て察しはついていると思うけど、ドラゴン使いとしてこの街に生まれ、ジムリーダーを務めているわ。ドラゴンの特徴はそのパワーね！　ここまでのジムに出てきたようなポケモンとは一線を画する猛烈なパワーを持ったポ

ケモン……それがドラゴンよ」

レッドは一度ワタルと戦っている為少し高をくくってこう言う

「いやドラゴン使いとはワタルさんと一度戦ってるんで……」

ワタルの名を口に出すと、イブキが顔を歪ませ

「ワタルなんかと比べないで。確かに私はリーダー、彼はチャンピオンで立場は少しばかりあいつの方が上かもしれない。でもね、フスベで修行していた頃は、実力は拮抗していたのよ？　二代前のリーダーだったお師匠が四天王になった時にその座を巡って戦ったときも私は決してあいつに引けをとってはいなかったわ！　ワタルとはまた違う私の戦いを見てなさい」

イブキはワタルに対して強い対抗心を抱いている様子である。

レッドは、そんなイブキの態度に身の程知らずなどと感じるのであった。

「行きなさい、ギャラドス！　チルタリス！」

――

レッドは二体、エリカも二体を失った。

「そんな……この私が負けるだなんて」

レッドの所感は、強い事には強かったが、ヤナギには遥かに及ばなかったというものである。

しかし、イブキはレッドの想像以上に強情な人物であった。
「フ……フン！　これは何かの間違いよ。負けた私がいうのもなんだけど、貴方たち二人そののろけぶりじゃ全国制覇なんて無理に決まってるわ」
レッドは、そんな悪あがきに対して、何それ嫉妬!?　嫉妬ですかイブキさん!?　などと、口には出さなかったが、心の叫びをしていた。
「か……勝手に決め付けないで」
エリカの発言を遮るようにイブキは言う。
「そうだわ！　このジムの裏に、龍の穴っていう場所があるの。中央に祠があるからそこに行ってごらんなさい。もしもそこで、あなたたち夫婦の覚悟が本物だと認められたなら、私も貴方たちがジムバッジを渡すに相応しい人たちと認めてあげるわ！」
レッドは、勝手な事するなと思ったが、バッジを獲得するには致し方無いと、イブキの言う事に従うのであった。
こうして二人は龍の穴へと向かった。
―龍の穴―
龍の穴。ミニリュウが生息する珍しい場所として、フスベにドラゴン使い達が集う第一の理由となる場所である。非常に貴重な場所な為、一般人の立ち入りは厳禁されており、入る為にはドラゴン使いになるか、守護者であるイブキに勝つしかない。

さて、龍の穴に辿り着き、池を目の前にしてエリカは感傷に浸っている。
「ここがあの龍の穴ですか。なんだか、おどろおどろしい場所ですけど……、なかなかに風情がある場所ですわね」
「ま、とにかくほこらまで行こう」
という訳で二人は波乗りをして、祠の真後ろにたどり着き、桟橋がそこにあったので、いったんそこで降りることに。
「あれがほこらかな?」
「朱色の高欄に、茶褐色の擬宝珠(ぎぼし)……、それに加えて瓦葺(かわらぶ)きの社殿…、確かに祠ですわね」
レッドはお前は何を言っているんだという表情をしていたが、最後の祠という単語で、なんとか理解できたようである。
「あー…ほこらね、ほこら……。にしてもどこから行けばいいんだ。ここからだとドアらしきものもないし……」
そんなことをレッドが言っていると、エリカは、社殿の軒下に赤毛の少年が居ることに気が付いた。
「あの赤毛の人に聞いてみましょう。卒爾ながらお尋ね申し上げますが……」
エリカは古めかしき言葉で、その少年に話しかけた。
少年は意味が分からなかったのか、少しだけ戸惑っていた。しかし、彼はすぐに威儀

を正して、なんとも攻撃的な声調で返事をする。
「何だ？……ってまさかお前ら！」
お前とかジムリーダーに対して言う事かよ、とレッドは心中で思っている。
しかしエリカはそんな事も気しなかったように、声の高さを少し上げ、おどけたように言ってみせた。
「あら、シルバーさんでしたか」
「知り合いなのか？」
レッドは不思議に思い、尋ねた。
「ええ、私のジムに挑戦されましたわ。とてもお強い方でしたけどポケモンの扱いがぞんざいで……」
とエリカはレッドに言ったが、シルバーはなんの気無しに
「当たり前だろ、ポケモンは戦う道具だ」
エリカはその言葉に鋭敏に反応し、冷淡に
「まるでロケット団のような言い草ですわね」
と返す。
ロケット団という言葉に反応したのか、急に口調を強め、
「その組織は口に出すな……！　胸糞悪い。おいレッド！　俺はシルバーという最強の

ポケモントレーナーを目指している男だ！　……俺と戦えっ！」
「態度が気に食わないが……まあいい、売られた喧嘩は買おう」
「伝説のトレーナーだかなんだか知らないが、新婚気取りでチャラチャラしたトレーナーなんかに負けるもんか！レッド！俺は必ずお前を倒す」
「その威勢……いつまで続くかな……。ま、気迫があるのは良い事だ。行け！　バクフーン！」

「2体撃破……全く高が知れる。ゴールドというトレーナーだって半分は倒したぞ」
シルバーはその名を聞くと目を明らかにいからせて
「あいつの名前を出すな！」
と強がった様子で返す。
「負けといて指図される謂れはないね。何だ？　知り合いなのか？」
「私の情報ですとゴールドさんを一方的にライバル視していられるそうですわね」
エリカはこっそりとレッドに伝えた。
「ふーん、なるほど。一方的にライバル視ねぇ……」
レッドは、蔑視の目線をシルバーに向ける。
「……」

「通りでゴールドから名前を聞かない訳だ。つまりどういう事か分かるか？　君はゴールドから歯牙にも気にかけられてないってことだ」

　レッドはそう強く言い放った。が、エリカの一言は更に辛辣なものである。

「ポケモンを物のごとく扱っているシルバーさんにはいつまで経っても、レッドさんやゴールドさんには勝てないでしょうね……」

「負けた貴方に何が分かる？」

　シルバーは悪あがきのつもりで、エリカに突っかかる。

「あら、あの時の私が本気だったとでも？」

「どういうことだ？」

　レッドは静かに言う。

「エリカは伊達に一緒についたきたわけじゃない」

　レッドはエリカの承諾を貰ってから彼女からバッジケースを受け取り、シルバーの真正面で開いて見せ

「この通りバッジもしっかり貰ってるからな。お前が挑んできた時と実力は雲泥の差だと思うぞ」

「……!!」

　シルバーは目を細めた。明らかに動揺している。

「それでなくても私達ジムリーダーには8つのバッジを集めに来た手加減用と、再戦もしくは一地方以上跨いでこられている時の本気用と2つのパーティがあるのです。私達は夫のいたおかげで全員本気用のパーティでしたけどね」
「それを一緒に突破してきたんだ。手加減パーティに勝ったぐらいで粋がってるんじゃ……まだまだだね」
レッドはそうシルバーを窘めた。
「!!」
シルバーは居心地は悪くなったのか、一目散に逃げていく。
「心の弱い子です事」
「そんな事より長老の所に行かないと……」
―龍の穴　祠―
祠に着くと、二人は長老に歓迎され、それと共に察したようである。
「よくぞ参られた。何イブキに言われたのじゃろう。困ったもんじゃ全く……」
長老はそう言うと、深くため息をついている。
「あれ前にもこんな事あったんですか?」
レッドは長老に尋ねた。
「左様。この前はゴールドという少年が来ての……」

長老は手短に、ゴールドが来た時の話をした。
「なるほど。大変そうですわね……」
エリカは、息をついた後、長老を労る。
「なぁに、ワシとしてもイブキを破った人間は興味がないわけではないからの。さて、お主等には愚問かもしれぬがわしの尋ねる3つの質問に二人は答えてもらおうかの」

――

「ウム、素晴らしい！二人とも合格じゃ！」
「有難うございます！」
すると、イブキがちょうどドアを開けてやってきた。
「結果はどうだったかしら？　え!?　合格？　そんな……わ、私もまだ認めてもらってな」
「こりゃイブキ！この者たちも技、心。共に見事なものじゃ！観念してさっさとライジングバッジを渡さぬか！　さもなくばこの事をワタルに」
長老からワタルという単語が出た瞬間、イブキはすぐに畏まって
「わ……分かりましたわ。ほら、これがライジングバッジよ。さっさと受け取りなさい！」
イブキは二枚ライジングバッジを渡す。

「ありがとうございます！」
二人は深々と頭を下げた。
「はぁ……とても信じられないわ。まさかあんたたちまで長老に認められるだなんて……」
とイブキ言いかけたところでまた一人、小間使いがドアを少し開けて入ってきた。
「あの。イブキさん……あ、お二人も。リーグ委員の方が緊急で伝えたいことがあるとのことで入口で待たれています」
「え？」
そういう訳で三人は急いで龍の穴の入り口まで戻る。
―午後4時　フスベシティ　龍の穴入口―
三人が姿を現すと、委員は人払いを願った後、挨拶もそこそこに本題を切り出す。
「一大事が起こりました。エンジュシティがロケット団に占拠され、ポケモンリーグに対して宣戦布告を行いました！　理事長は限定総動員令を出し、ジョウト中のジムリーダーに関してはすぐさまジムに戻ってリーグからの指示を待つように、カントーのジムリーダーに関しては即座にリーグへ馳せ参じるようとの事です！」
「ええっ!?　な、何よそれ」
イブキは前代未聞の事態に大きく動揺している様子だ。

「あの……カントーのジムリーダーはリーグへ赴くようとの事ですが私もですか？」
　エリカは委員に対しそう疑問をぶつけた。
「いえ、お二人に関してはジョウト地方に居ますから他のジョウトのリーダーと同じく指示を待つようにとの命が下っております」
「さ、左様ですか……。それにしてもとんでもない事態になりましたわね……」
「と、とにかくまずはポケモンセンターに行くわよ！　これから忙しくなるだろうし、しっかりポケモンを休ませないと……」
　三人は困惑の中、とりあえずポケモンセンターへ向かった。

―午後3時　ポケモンリーグ―

　総動員令発動の少し前、エンジュシティ占拠の第一報がリーグに飛び込んできたときの話である。
「落ち着いてゆっくり話すんだ。一体何が起こったんだい」
　理事長のワタルは急報を持ってきた委員に対してそう優しく言った。
　息を落ち着かせて委員は言う。
「ロケット団がエンジュシティを占領し、我々に対して宣戦布告を表明しました」
「な、なんだって!?」

ワタルとシロナはその知らせに大きく目を見開いた。
先手を打たれた格好である。
「ちょ、ちょっと待って。どうしてエンジュが占拠されるまで何の報告もなかったの？」
シロナが委員に尋ねる。
「恐らくですがロケット団はエンジュシティに繋がるゲートを速やかに封鎖し、情報を厳しく統制したのではないのでしょうか……」
「それにしたって全く報告が無いなんておかしいと思うけれど……」
「待って、君の意見が正しかったとしてどうしてエンジュが占領されたって分かったのかい？」
今度はワタルが尋ねる。
「はい。それはエンジュ市庁舎よりロケット団の幹部と名乗る人物からリーグ本部へ入電があったからです。本部のパソコンに送られた画像にもマツバジムリーダーが捕縛されているものが送られました。これがそれです」
委員は懐から一枚の写真をワタルに渡す。
「な……なんということだ……。と、とにかく今のところはカントーとジョウト限定で総動員令を発令する！　ジョウトのジムリーダーはジムへの待機、カントーのジムリーダー及び四天王はすぐさまリーグに来るように伝えてくれ！」

「はい！　了解しました！　あと、これを伝えてきた幹部と名乗る人物から理事長に繋ぐよう要求しているのですがどういたします？」
　委員がワタルに尋ねる。
「すぐにそうしてくれ」
「分かりました。では！」
　そう言って委員は理事長室を出て行った。
「理事長、私はどうすれば良いですか？」
　シロナがワタルに尋ねる。
「すぐにシンオウリーグに戻ってホウエン及びシンオウ地方のジムリーダーや四天王にもすぐに総動員令に応じられる準備を整えるよう要請しておくよう根回しを頼むよ」
「承知いたしました。すぐさまリーグに戻ります！」
　シロナがそう言って踵を返すと、机上の電話機が鳴り響いた。
　ワタルはすぐさま受話器をとる。
「理事長のワタルだ。話は聞かせてもらった。君たち、なんてとんでもないことをするんだ！」
　ワタルは電話の相手に対してあらん限りの怒りをぶつける。
「貴方と善悪の論争をする暇はありません。私はロケット団幹部のランスという者で

す。我らの主サカキ様直々の命を受けて理事長の貴方との交渉役を務めることとなりました」
「そうか」
「写真はもう見て頂きましたか？」
ランスは丁寧な様子で話す。
「ああ、見たよ」
「我々は抵抗してきたエンジュシティジムリーダーのマツバを人質にとっています。我々の要求は大きく言って二つあり」
ワタルは大きく唾を呑んだ。
「一つ目は我々の活動を黙認する事。二つ目はポケモンリーグの速やかな全面的解散です」

―第十話　春の嵐　終―

第十一話　広がる波紋

―4月27日　午後6時　エンジュシティ　マツバ邸　書斎―

マツバはミナキを呼び出して談笑していた。

「いやー。それにしても良かった生きてて」

ミナキは何よりもそれを喜んでいた。

「生きてたというか生かされたというか……。記憶は消されたみたいだけどどうにか生還できたよ」

マツバは自嘲気味に笑いながら答える。

「記憶を消されたっていうのはとんだ痛手だな……。でも別の考え方をすればそれだけあちらも触れて欲しくないことがあるっていう証だ」

「僕もそう思う。だから一週間くらい前までリーグにどうにか動いてもらおうとエンジュ大学や博士の周辺に探りを入れたんだ」

マツバは表情を引き締めて真剣な様子で話す。

「それで何か成果はあったのか？」

「例のオリエンテーションの被害者に聞きこんで、どうやらあの事件は本当に起こった

らしいという事。そしてそれにエンジュ大学、そしてオーキド博士が関与している疑いが濃厚という事がわかった。それと、そのポケモン達がロケット団によって酷使されているらしい事もね」

「うわぁ……想像以上にえぐいことしてるんだな……」

ミナキはその話を聞いて大いに引いている様子である。

「うん……。これが事実だとしたらポケモンの研究や大学そのものに対する信用が失墜するだろうね……。それで、さっき言ったことを証拠と共にこの意見書としてリーグにこの前提出したんだ」

と言いながらマツバは意見書の冊子を机上に出した。

「分厚いな……これ何ページあるんだよ」

ミナキは手に取ってパラパラめくりながらうんざりしたような口調で言う。

「１２０ページくらいだったっけな……。意見そのものは十ページくらいにまとめてあとはほとんど証拠の資料とかそういうのだよ」

「そうか……。で、リーグは動いてくれそうなのかい？」

「ワタル理事長から直接さっき電話があって、影響が大きすぎるので明日副理事長と協議したうえで最終的な判断を下すという事だ」

「なんじゃそら……まあ相手は一応ポケモン研究の権威と内国のツートップの一角を占

める大学だし仕方ないのか」
「正直取り合ってくれただけでも儲けものだと思っているよ。世間では良い博士として名が通っている人だし……話の分かる理事長で助かった」
　マツバは安堵している表情でそう話す。
「そうだな……。そういえばさ、例の二人はどうなっているんだ？」
　ミナキは話題を切り替えた。
「例の二人ってレッド君とエリカさんの事？」
「そうそう。何か進展あった？」
「ああ、どうやらあらぬ所から僕がエリカさんに恋していることがレッド君にばれてね……決闘を申し込まれたよ」
　マツバは１０日ほど前の出来事を思い返し、先ほどよりは表情を崩しながら話す。
「おい言っておくが私じゃないぞ」
「出所の見当は大体ついてるからそれはわかってるって。その前に君はまだ二人に直接会ったことすらないだろう？」
「まぁな」
「話を戻そう。それで……」
　マツバはレッドと戦った時のことをミナキへ簡潔に話した。

問大文字の事やレッドのエリカに対する思慕の強さなども交えつつ五分ほどで大体の事は言う。

「へぇ、それほど強くなっていたのか……」

「うん。先月の終わりくらいに会ったときとは別人なくらいにね。なんとなくエリカさんがレッド君に惚れる理由も分かった気がしたよ。でも、なんというかな……負けた分際で何を言うかと思うかもしれないが、どうも主体性がそれほど感じられなかったんだよ」

ミナキは目をやや細めて尋ねる。

「主体性？」

「一見レッド君自身がグイグイ引っ張っているように見えるが、その実、流されやすい一面もあるように見えたのさ。まぁエリカさんは存外強かだからそのせいもあるんだろうけど……」

「へぇ……」

ミナキは納得いっているのかどうかは窺い知れないがとりあえず相槌をうっている。

「願わくばそのわずかな心の弱さが夫婦の行く先に影を落とさないことを祈るばかりだけど……」

そういいながらマツバは用意していた煎茶を啜る。

「そうだな……、ところでマツバ、今日私を呼びつけたのはこの意見書についてか？」
　マツバはミナキの質問に対し、湯呑みを机において話す。
「うん。これは前渡したやつのいわば改訂版だ。僕の身に何か起こったらこの書類をあの二人に渡してくれ……。今回はどういうわけか命が助かったが、明日……いや、今日にも命を落とすかもしれない。リーグも勿論頼りにしているが、それが万一叶わなければあの二人がきっとやり遂げてくれるはずだ。レッド君やエリカさんなら組織の都合でなく自身の良心に基づいて動くと信じている」
　その後、ミナキとマツバは夜遅くまで歓談しあっていた。
　翌朝、ミナキは早々にエンジュを発ってスイクン探しの旅に戻る。
　―４月３０日　午前１０時　エンジュ市街―
　悠久の古都は今や阿鼻叫喚の有様と化していた。
　突如、エンジュ大学構内より数万余とされるポケモンたちが放たれ、市民たちを襲い始めたのだ。
　後ろからはロケット団とみられる黒づくめの団員達が指揮を取り、ポケモンたちはそれに隷従していた。警官隊や機動隊も即座に出動したが敵はこの程度の装備では全く歯が立たないほど強く、敗れ去ってしまった。
　当然、このことはジムにすぐさま伝えられ、マツバを筆頭に舞妓とジムトレーナーた

ちが事態の打開にあたる。
ポケモン関係の事案で最後に頼られるのはジムリーダー、引いてはリーグなのだ。
―午前10時30分　エンジュジム　入口付近―
エンジュジムにはジムリーダーのマツバのほかに舞妓の代表として長女のタマオと何人かのジムトレーナーが居た。
ほかの舞妓やトレーナーたちは市民の保護と周囲の防衛にあたっている。
リーグに救援を求めようとしたが基地局やゲートは即座に占領され、情報の送受信を強制的に停止させられた為、エンジュ及び付近の通信網は壊滅した。
スズの塔やカネの塔の存在も危ぶまれたが僧侶たちの奮戦とそこまで敵方も執着しなかったことが功を奏し、北部に居た人々は大体寺内に避難している。
「本来なら元凶であるエンジュ大学を叩きたいところだが……圧倒的に此方が不利な以上、市民の避難を第一に考える」
マツバはそう自身の方針を述べる。
「寺院方と連携する事はどうにか出来ないでしょうか……？」
ジムトレーナーの一人が提案する。
「そうしたいのは山々だけどね……。もうすでにここと両寺の間は敵によって分断されている。それに寺院方も防衛に懸りきりでとても手助けはできないと先ほど書状が来

た」

　それを受けて舞妓方が口を開く。

「そやけどマツバはん。そうとしても今、三つつのゲート全てが封鎖されてはるさかい、どこか一つに限らんと数が数なだけなんも出来のうなるんは必至どすえ」

「タマオさんのいう通り、ここはどこかに絞らないといけない。僕としてはキキョウやコガネに避難できる南側のゲート、羅城門を出口として確保したいと思っているんだけど……どうかな」

　マツバはトレーナーや舞妓たちに尋ねる。

「いい案ですが敵もそれを察知していて、南側の警戒を特に強くしています。被害がいたずらに大きくなるのでは……」

　ジムトレーナーがそう提言した。

「そんなのは覚悟の上だ。どこのゲートもそれなりの警戒がしかれているだろうし、こうなればより効果の大きい場所に活路を見出すしかない。外部からの援護が期待できない以上非常に苦しい戦いになるだろうがエンジュ……引いてはジョウト、全国の為ここは耐えるしかない」

「そうおすな……。こうしとるあいさにも敵は迫っておるしはよう作戦を立ててどうにかせんと」

という訳で、エンジュ市民の避難を優先的に行うこととした。
ジムの前に防衛線を作り、その枠内に避難民を集めマツバを先頭に羅城門までの道を切り開くことにした。
―その頃　エンジュ大学　学長室―
「いよいよだのう」
事の首謀者、オーキドが目下にいる逃げ惑う市民たちを見ながらそう呟く。
「敵は通信網を破壊され孤立無援。如何にジムリーダーや舞妓たちといえど、この大軍の前にはやがて屈するしかないな」
ロケット団はオーキドの協力もありつつ総計で１０万を超える改造ポケモンたちを手中におさめ、その一部を実験台の如くエンジュ市街に解き放った。
集団催眠事件で得たポケモンたちも含めて改造ポケモンたちは様々な違法行為に酷使され、サカキはその悪銭を大いにため込んでいた。
そしてその金で団員の再結集及び新規勧誘を行い今やロケット団は往時の頃以上の規模を誇っていた。
「エンジュの市民たちも捕えているようだが一体どうするつもりかの」
「見込みがありそうなのは新規に加えるつもりだが、それ以外は人質だな。女は上玉は俺の蒐集に加え後は団員の慰み者だ。東男に京女……。団員どももさぞかし喜ぶだろ

う」

　サカキはそう私信を述べる。

「フム……まあ好きにするが良い。ワシがこの町で欲するのはマツバ君のみだからの」

　オーキドがそう返すと

「貴様！　約束が違うではないか！」

　開戦の一報を聞いた学長が青い顔をしてすっ飛んできた。

「はて、約束とは……？」

「貴方とロケット団の研究に文句を言わず従っていればエンジュの市民たちには手を出さない！　そういう約束だったはずですぞ！」

　学長は大いに憤慨している様子である。しかしオーキドの反応は冷淡かつ冷酷なものだった。

　オーキドはそれに対し鼻で笑い、

「我々の研究に手を貸す……。背後にロケット団もいるというのに、その言外の意を汲み取らず承諾したのは他ならぬ貴殿ですぞ。それすら汲み取れぬとは……それでもジョウトの多士済々（たしせいせい）が集う学び舎を治める人間かのう？」

「しかし」

「つまらぬ者の戯言など聞きとうないわ。おい連れて行け」

「ハッ！」

学長は闇の彼方へと連れ去られる。

「全く……どうして人間というのは……ここまで凡夫が多いのかのう……」

オーキドはそう呟き、ため息をつく。

碁盤の目は迅速な勢いで黒く染められつつあった。

―午後2時15分　エンジュシティ　羅城門付近―

マツバや舞妓、ジムトレーナーたちの奮戦によりどうにか羅城門までたどりつき、エンジュジムにまでたどりついた避難民約六十万人を3時間かけて無事に避難させることが出来た。

しかし時には折しもゴールデンウィークの真っ最中で観光客が多くいるせいもあり、ここまで救出に成功してもエンジュにいるとされる三分の一程度しか脱出に成功していない。

ゲート封鎖前や寺院に逃げ切れたのを含めても6割に届かない。

その為、とりあえず門から出られた人々を見送ったのち、残っている市民たちを救うために舞妓とジム方が二手に分かれて救出にむかった。

しかし戦力が分断されたことによりただでさえ劣勢だったのが更に分が悪くなってしまう。

救いに行った舞妓たちは一度か二度は戻ってしめて３０００人ほどを新たにエンジュ市外へ送り出したがやがて全員帰ってこなくなってしまった。

いよいよ。敗北の二文字が現実として襲いかかってきた。

マツバは指示を出しつつ羅城門から退こうとは全くしない。

「リーダー。これ以上の救出は不可能です。今なら敵もそこまで迫っておりませんし、ご学友のおられるコガネシティにでもお逃げください！」

最早残り数人となったジムトレーナーの一人がそうマツバに進言する。

避難用として広くとっていた防衛線も崩壊し、ロケット団のポケモンはマツバやジムトレーナーたちのポケモンの反撃を受けながらも確実にマツバたちのもとにまで迫っていた。

古の都はいよいよロケット団の手に堕ちてしまったのだ。

「気持ちはありがたいが僕にはエンジュのジムリーダーとして市民を最後まで救う義務がある。まだ多くの人が逃げれていないのに僕一人がおめおめと逃れる訳にはいかないんだ」

「そんな……もし敵方に捕まれば何をされるのか分からないんですよ!?」

「フ……。敵はもともと僕一人、もっといえばこの天より授かりし眼を欲しているよ。仮にもジムリーダーの僕が敵陣に簡単に降るわけにもいかないから今までこうして

戦ってきたが、僕一人さえ捕らわれれば敵も本気でほかの街を取りにはいかない」
「どうしてそんなことがわかるんです？」
「そうでなければわざわざこの街を反乱の拠点には選ばないさ。長らくどうしてこの街をこの拠点を選んだのか合点がいかなったけど……。そう考えれば全て納得でき」
言いかけたところで一人の水色の髪をした白い制服を着た青年が颯爽と前に出てきた。
「ご明察です。流石は私と同学なだけありますね」
マツバは当初面食らったがやがて感づいて
「貴方はまさか……。ねずみ講まがいのことを構内でやって八千万を詐取した後行方をくらまし、エンジュ大学を除籍にされたと噂のアポロ……？」
「よく御存じで。さて、我らの主より貴方を捕えるようとの命が下りました。ご同行願いましょうか……。そこの門より逃げるというならどこまでも我々は追いかけますよ」
アポロの背後には万を優に超えるポケモンの大軍が虎視眈眈とマツバを凝視している。
マツバは残った最後の一体で抵抗を試みんとモンスターボールを手にするが
「おっと。この状況を見てもまだお分かりになりませんか？　最早貴方方の敗北です。

それでも手向かうというならこちらも容赦しませんが、宜しいのですね？」
「くっ……ここまでか……」
刀折れ、矢尽きる。マツバ及びトレーナーは投降し、ロケット団の軍門に降った。
こうしてエンジュシティは4時間余りでロケット団の手に堕ちたのだ。

―午後4時頃　フスベシティ　ポケモンセンター―
イブキは戦闘準備の為ジムに戻り、二人は指示が出るまで休息の為ポケモンセンターに留まった。
広間のテレビは臨時ニュースという題目でエンジュシティ占拠の件について延々と報じている。
『……繰り返します。きょう午後二時三十分頃、エンジュシティがロケット団によって占領されました。付近の住民の方々は速やかに近くの街に避難してください。これを受けてポケモンリーグは限定総動員令を発動し、事態の対処にあたる姿勢を示しました。日本政府は緊急対策本部の設置を緊急の閣議で決定し、エンジュ市民の食糧確保や衣料品の支給など諸事の支援政策の立案及び執行を行うとの事です。近隣のコガネシティ、キキョウシティ、チョウジタウン、アサギシティは避難民の受け入れを表明しました。具体的には体育館やホールを開放し、避難場所として提供。生活支援を行う指針

を示しました。尚、自衛隊の介入等について日本政府は当面ポケモンリーグに任せ、動静を見守る所信を表明しました。尚、これに係るロケット団の声明はこの通りです』

―本日、ロケット団は先年の雪辱をすすぎ、サカキ様を迎えこの通り復活を果たした！　我々が望むことは前年我々に耐え難き侮辱を行ったポケモンリーグの速やかな全面的解散である！　これが実現されなければ我々に従わぬ物として近隣の市街への侵攻及び人質の命を亡き者にすると思え。―

『尚、警察庁の発表によりますと人質としてエンジュシティジムリーダーのマツバ氏、ジムリーダー予備役の舞妓のタマオ氏を筆頭とする5名。他に逃げ遅れたエンジュシティの市民が10万人ほどと推測されるとのことです。しかし詳細は情報が不足しているため不明とされており、これより更にリーグと連携しつつ調査を進め明らかにしていくと発表がありました』

ポケモンセンターの中はエンジュシティに居る親類や友人などに連絡を取る人やこれからについて打ち合わせに来た人などでごった返していた。

「とんだ一大事になったな……」

着いた頃の平穏とは打って変わった人々を見てレッドはそう言った。

「ええ……それにしても一日足らずで一つの街を占領するなんて前代未聞ですわ……。手際の良さといい相当かつ慎重な準備があったのは明白ですね」

「マツバさんの言ってたことがまさか現実になるとはな……。これから一体どうなる」
　レッドが言いかけた所でエリカとレッドのポケギアが鳴り響く。
「はいもしも……」
「これは緊急用の一斉連絡の為、一方的にこちらが話す。何か質問や意見があれば別途リーグにまで連絡するように」
　ワタルがそう初めに言う。
　二人とも少しだけ恥じる。
「これより、エンジュシティの周りを取り囲む布陣を発表する。まずエンジュに繋がる三つの道路に陣を敷くことにする。まず第一軍として……」
　ワタルの決定した事は以下の通りである。
　第一軍（東方部隊。本拠　チョウジタウン）→ワタル（総司令官）、ヤナギ、レッド、エリカ、イブキ、ナツメ、タケシ
　第二軍（南方部隊。本拠　コガネシティ）→マチス（司令官）、アカネ、ツクシ、ガンテツ（ヒワダジムリーダー）、アンズ、キョウ、ハヤト、グリーン
　第三軍（西方部隊。本拠　アサギシティ）→シジマ（司令官）、ミカン、カツラ、カスミ、シバ、イツキ、カリン
「これはあくまで戦闘状態に陥った時の備えとして考えたものであり、こちらとしても

もう暫くは人質の解放に向けて交渉を続ける。勝手な行動は厳に慎むようお願いしたい。では、総員可及的速やかに本拠まで赴くように！　以上」

これでワタルからの連絡は切れた。

「いよいよだな……」

「ええ。経験したこともない事態ですが……とにかく国の存亡がかかっています。心していきましょう」

こうして、二人はチョウジタウンに急行した。

―午後5時30分　チョウジタウン　ポケモンセンター　会議室―

およそ一時間後、チョウジタウンには第一軍に配置された人々が円卓で一堂に会していた。

ついて早々、二人は作戦会議の為に会議室へ呼び出される。

ワタル以外の全員が会議室に入ると、時計の長針が6を指した頃にワタルが入ってきた。

「既に委員やニュースなどで見聞きしていると思うが、ロケット団が我々に宣戦布告を行った。現段階では人質解放に向けて交渉を重ねている段階だが、交戦状態に陥った場合の事を考え今のうちに作戦を建てておこうと思う」

これに対し、イブキが提言する。

「ねえ。ロケット団はリーグの解散を要求しているんでしょう？　身代金とかそういうのならともかくこういうのって交渉したところでどうにかなるものじゃない気がするんだけど……」
「こちらとしても別の条件を提示したり、解散より緩和したものにするよう要請しているんだ。まぁ全くと言っていいくらい相手にされてないけど……」
　ワタルは表情を曇らせて言う。
「じゃあ、どうして」
「時間稼ぎ……だろう」
　ヤナギが静かに言った。
「え、ええ……正直な所、その通りです」
「敵もそれに応じているという事はすぐに交戦に応じられない事情があるということ……例えばマツバ君たちの奮戦で予想外の損失があったりの」
　ヤナギはそういうと手元にあった煎茶を啜る。
「え、そうでしたらすぐにでも攻めこむべきでは……」
　イブキがそう返すと
「それはまずい……。敵はたった4時間くらいでジムリーダ数人分の軍勢を打ち破っている。相当な数を揃えていると踏むべきだろう。迂闊に入りこめばこちらが大打撃を

被るかもしれない」
「しかし、もしヤナギさんの言うとおりならば今こそが最大のチャンスでは……」
「イブキ女史。これはあくまで仮の話。敵も一つの都市を占領するくらいだ、十重二十重の策をめぐらしているに違いない。ここはワタル殿のいうように慎重を期して然るべきだの」
そうヤナギが諭すとイブキはようやく沈黙した。
少し間を置いて、ワタルが続ける
「話を戻して……。とにかく、これから作戦を話す」
と言いながら、ワタルは円卓に広域の地図を広げた。
チョウジタウンから４２番道路までを範囲とし、北側にはいかりの湖を収めている。
「敵はおそらく東側ゲートより一斉に打って出てスリバチ山を経由しつつ二つの池を渡ってチョウジへ向かうつもりだろう」
ワタルは大きく赤い矢印を二つ描く。
「我々第一軍はスリバチ山に本陣を設営し、ここで総指揮を執る」
ワタルはスリバチ山の頂に青の凸字を描いた。
「スリバチ山ならば見晴らしも良く、戦地の概況がよく分かるであろうな」
ヤナギがそう評す。

「はい。しかし、ここはあくまで僕一人が指揮を取る場所として確保するつもりで、対抗する部隊はここ」

ワタルはチョウジ側の出入り口に青の二つ目の凸字を描く。

「で、敵が突入する前に各自、足の速いポケモンを予めここに置いてほしい」

ワタルはエンジュよりの原に黒い×字を描く。

「それで、適当に戦ったら、少しずつさりげなく退いていくんだ。それで、スリバチ山前のここまで引き寄せたらヤナギさんとレッド君とエリカ君がここで引き留める。注意して欲しいのは、ここで全力を出すのではなく、6，7割くらいの力に抑える事」

ワタルはスリバチ山の入り口あたりに二つ目の×字を描く。

「で、ここからが肝腎だから心して聞いてほしい。この中州で戦っている間に敵はどんどん前に寄ってくると予想される。敵の大半が池、もしくは池の周辺に来たと判断したら先ほどのように一斉にポケギアを鳴らすからそれがき次第、必ず飛行ポケモンでチョウジタウン近くまで引き上げる。控えも念のため」

ワタルは青い矢印で×印と凸字を陸側に大きく引き下げた。

「全員が引き上げたのを確認し次第、予め用意した運河の堰を切って意図的に氾濫させる」

ワタルはいかりの湖から強く青い矢印をスリバチ山の池まで引っ張る。

「それで、氾濫して敵方が慌てだした頃に、ありったけのポケモンを出して急襲する！」

引っ込めた凸字を黄色の矢印をエンジュ側まで引っ張り出した。

「慌てだした敵は算を乱して撤退する……と。こういう次第だ」

ワタルはやや息を切らして言う。

「悪くない作戦ですわね。環境にはあまり宜しくないですが、数の差が明らかにある以上このくらいの事をしなければ覆すのは難しいでしょうし……」

エリカがそう意見する。

「うん」

ワタルが心なしか少し嬉しそうにうなずく。

「しかし、運河の件ですが……いかりの湖からスリバチ山まではかなりの距離がありますわ。予断を許さない状況下であまり時間はかけられないのでは？」

「うっ……そこなんだ。この作戦の痛いところは……。この地図によればいかりの湖からスリバチ山まではだいたい２０㎞。結構な大仕事だし、時間もかかるし……うーむ」

ワタルは腕を組んで考え込んでしまった。

そこでタケシが手を挙げる。

「あの！　俺にその仕事任せて貰えないでしょうか。岩ポケモンならば疎水工事も楽々ですし、大いに期間を縮めることが出来ると思いますが」

「ふむ……だいたいどのくらいで出来そう？」
　ワタルは関心を持ったように尋ねる。
「俺のポケモンを総動員すれば三日ほどで出来ると踏んでます」
「おお！　これは頼もしいね。三日くらいならどうにか時間稼げると思うし……。頼んだよ」
「はい。任せてください」
「しかし……運河の問題はこれで良いとしても、もう一つ問題があると思うわ」
　イブキが問題を提起した。
「うん？」
「堰を切った時、とんでもない量の水が池にまで流れ込むんでしょ？　下手をすればスリバチ山もそのせいで一部が崩れちゃったりするんじゃない？」
「そこは私が何とかしよう。スリバチ山ごとまもるの結界で防護し、影響を受けないようにする」
　ヤナギがそう提案する。
「うん……イブキの言うとおり、スリバチ山もこの影響で一部、もしかすれば全体が削れる可能性がある。だからヤナギさんの支援は勿論。出来る限り外側に運河を作らないといけない。タケシ君もその辺りに留意するように」

この後も作戦会議は続き、１９時過ぎに漸く終了した。
―１９時３０分頃　同所　２０９号室―
二人は休息の為自室に戻る。
「ハァ……何もしてないけど疲れたな……」
「ああいう場は息が詰まりますものね……分かりますわ」
エリカはレッドに頷きながら同調する。
「お腹も空いたな……。エリカ、今日の晩御飯は？」
「あ……まだお買い物も済ませておりませんでしたわ……。本当今日はあわただし……」
そうこう言っているとエリカのポケギアが鳴り響く。
「はい、もしもしエリカですが……」
彼女はすぐさま出た。
「エリカ？　ウチウチ。アカネやで」
「ああ……アカネさんですか。何の御用ですか？」
エリカが尋ねるとアカネは高揚した調子の声で喋り始める。
「あんな、めっさ嬉しいことがあったんやで！　聞いてくれな！」
煩わしくなるくらい喜びの感情が伝わってくるような声で彼女はエリカに言う。

「ええ……何があったのですか？」
　エリカは少々気圧されながら尋ねる。
「へへ、さっきワタルはんから戦争の布陣の話があったやろ？」
「ええ。御座いましたわね。アカネさんは確か第二軍でしたか？」
　エリカは記憶をたどって思い出したかのように話す。
「そうそう。あーそういや司令官が確かマチスとかいう外人のおっさんでな、着いて作戦会議でもやるんかと思うたら早速コガネデパートのビアガーデンでバーベキュー始めよってな……もーしんどうてたまらんかったわ」
「そういう賑やかなの好きなお方ですしね……。外国生まれの方はどうも気質の違いに苦労致しますわよね」
「気質どうこうどこやないわ！　もう戦争なんか知らんぷりな態度でずーっとどんちゃん騒ぎ。ウチは寧ろこういうの好きな方やけどどうにもついていけんで早引けしたんよ……」
　アカネは先ほどまでの高揚とは打って変わってうんざりしたような口調で話す。
「アカネさんのように陽気な方でも参ってしまうほどですか……それはほかの方々も難儀するでしょうね」
「同じ国ならまだな、話も通じるからまだ盛り上がるんやけども、あの場合は片言でぐい

ぐい絡んでくるからかなわんわ……。もう皆呆れてポケセンにUターンよ。今はクチバからついてきた取り巻きとしか盛りあがっておらへん。あーあ、あんなけったいなもんの下で戦うとか荷が重いわ。ワタルはんもなんであのオッサンを軍人だかなんだか知らんけど司令官に選んだんか納得でけへんわ」

アカネは大きくため息をついている。

「お気を落とさずに……。それで、アカネさんの嬉しかったこととはなんですの?」

エリカは本題に戻す。

「あぁすまへんな話が脱線してもたわ。そんで、ウチの嬉しかった事言うのは、ツクシがウチらと同じ所にいたんよ!」

アカネはジェットコースターのごとく気分を高めて話した。

「あら、そういえばそうでしたわね。このような事態になった以上少しでも多く人手が必要でしょうし不思議ではないですわ」

「なんやリアクション薄いなー。まぁええわ」

「それにしても良かったではないですか。これで接触する機会が生まれますわね」

エリカは少しだけ嬉しそうに言う。

「ん……ま、せやけどな。もうあれっきりや思うたんが棚から牡丹餅やで! ワタルはんも粋なことしてくれはるわ」

「別にワタルさんはそういうつもりで布陣したわけではないと思いますが……。それで、何かツクシさんにはアクションを起こされたのですか？」

エリカがアカネに尋ねる。しかし、彼女は言葉を詰まらせてしまう。

「まだ何もされていないのですか？　あれほど残念がっていらっしゃいましたのに」

「い、いや挨拶くらいはしたで。ただ……一回告ってしかも時間も空いたさかいどうにも先に進むのが気恥ずかしうてな……」

アカネは珍しく後ろ向きな事を言った。

「アカネさんらしくありませんね……。コガネで初めて貴女の恋情に気付いたころも思いましたが意外に恋愛には晩生ですわね」

「や、やかまし！　そういうエリカかてレッドに体触らせたこともないやろ？　お互い様やん！」

「どうしてそんな事わかるんですか……」

「お、当たった。ウチの勘はよう当たるわー」

アカネは少々得意げに話す。

「もう……からかうおつもりなら切りますわよ！」

エリカは照れ隠しとばかりに少しだけ語気を強めた。

「わわ。そないな事で怒らんといてよ」

「ハァ……。何にしても、私そろそろお夕食を作らないといけないので切りますわね」
「ん、ほんならしゃーないな……。また進展あったら電話するで」
「あの……。アカネさんは私以外にもお友達は多くいらっしゃるでしょう？　どうして私にばかり……。あ、いえ別に迷惑とかそういう意味で言ってるわけではないですよ？」
　エリカは最大限気を遣っている口調で話す。純粋に疑問なだけなようだ。
「どうしてもこうしてもあらへんよ。ウチがツクシの事好きなん知ってるんわエリカとレッドしかおらん。下手に広められでもしたらウチ一応芸能人やし困るしな。それに……」
「それに？」
「エリカと話してると落ち着くんよ。コガネ……というかウチの周りにはエリカみたいに普段落ち着いてる人はあまりおらんしね。そういうせっかちなとこ含めてコガネの良さやとウチは思うとるけど。そないな事でなんちゅーか新鮮なんよねアンタみたいな女の子って」
「へぇ……そうなのですか」
　エリカは少々意外だったのか大きく息をついている。
「せやねん。もしやけどこれがレッドだけしか知らんかったら胸の内にしまうんの辛

なって誰かに話したかもしれんのよ」
「マツバさんですか？」
「いやいや異性にこんなん話せる勇気はあらへんって。それにあいつはここ最近忙しそうにしてたから会う機会もなかなかあらんかったしなー。そんで挙句の果てにあないな事なって……」
　アカネの声調が段々と暗くなっていく。
「左様ですね……。私としてもマツバさんの身は案じてますわ。どうにかワタルさんが救い出してくれれば宜しいのですが」
「そか……。マツバもそれ聞いたらさぞかし喜ぶと思うで」
「あら、そんなにですか？」
　エリカからすればひと月ほど前にエンジュシティで漸くポケギアの番号を交換したというだけの間柄である。そんな彼女からすればアカネの表現が少々過剰に思えたのも無理はない。
　不意に突っ込まれたアカネは一瞬だけ言いよどんだ。
「あ、いや、そのな……。男なら誰だって女からどんな形であれ自分を思ってくれればそりゃーもう飛び切り喜ぶものなんやって！　エリカやウチみたいな器量よしならそらもうひとしおよ！」

「何をそんなに慌てていらっしゃるのか分かりかねますが……。ま、まぁ確かにそうかもしれませんわね」

エリカは最後に少しだけ頬を緩ませる。彼女はふと腕時計を見てだいぶ時間が経ったことに気づく。短針は8のところをさしていた。

「あら、もうこんな時間……。アカネさん申し訳ないのですが本当にそろそろ……」

「ああ、すまへんね。ほなさいなら」

こうしてアカネとの通話は漸く切れた。

「本当、コガネの方はお話が大好きですわね……。申し訳ありません貴方、これからお夕食買い出しに行ってまいりますわ」

彼女はレッドに陳謝しながらそう言った。

レッドは途中から手持ちの整理や世話をしている。

「まったくアカネさんにも困ったもんだな……。分かった俺はエリカの分まで世話するから行ってき……」

レッドが言いかけたところで二人のポケギアがまたも同時に鳴り響く。

さすがに二回目なので二人とも取った後何も返さなかった。

「これは緊急用の一斉連絡の為、一方的にこちらが話す。何か質問や意見があれば別途総司令官のワタルにまで連絡するように」

どうやら第一軍内の緊急連絡なのかリーグからワタルに読み替えられている。

「たった今、ロケット団側より交渉決裂が宣告された。これにより、いつ侵攻が開始されてもおかしくない状況になった為、大変疲れているとは思うが大至急４３番道路まで移動していただきたい。先ほど話した作戦の詳細を今一度確認する為集合が完了し次第、もう一度作戦会議を行う」

その後、集合場所や時間などの諸連絡を行って通信は切れた。因みに先ほどの作戦会議で業務用のワタルへの連絡先は伝えられている。盗聴を防ぐためにプリペイド方式のポケギアを新たに購入したようである。

レッドは夕食の時間が先延ばしにされた事を不快に思ったがやむを得ず堪えた。

―午後８時３０分　４３番道路　大テント内―

ジムリーダーたちは着の身着のままでポケモンセンターを出て４３番道路へ向かった。

さすがに暗い中本陣予定地のスリバチ山まで行かせるのは酷に思ったのか道路に入って数分もしないところにワタルがあらかじめテントを立てており、ここが緊急設営の会議室となった。

タケシは最初の作戦会議終了後すぐにいかりの湖まで飛んで行って、運河の工事を開始している。

ワタルはこうなったのは自らの力不足が原因であると陳謝したのち、切り替えて作戦について再確認を行う。

先ほどワタルが大いに書き込んだマップを机の上に広げた。

「カイリューが空中から偵察したところによると、まだエンジュのどのゲートにも敵は集中していないという。だから恐らく攻撃の開始は早ければ翌日の夜明け、遅くとも朝までには行われると考えられる。先遣隊のナツメ君は今夜のうちにエンジュ側の原で野営していてくれ。一人で心細いかもしれないが、足の速くて強力なポケモンを多く有しているのはこの中では君しかいないんだ」

「分かりました」

それ以外にもナツメは自前の超能力の恩恵で索敵にも現役の忍者であるキョウやアンズと比肩すると目されるほど非常に優れているため、戦況の詳細を逐次伝える役目を担っている。但し何分敵が多すぎるので万一の事を考えワタルはこの段階での潜入調査は断念した。もしまたジムリーダーが囚われればリーグの責任問題だけではなく戦局に甚大な影響を及ぼすのだ。

「スリバチ山入口付近に置かれた人々は翌日早朝にそこまで移動するように。攻撃や戦地での采配などはヤナギさんにすべてを任せる。レッド君とエリカ君はヤナギさんの命に従うように」

「うむ。任しておけ」
　ヤナギの一言は自信と余裕に溢れていた。ヤナギ配下に置かれた二人にとってどんなにそれが心強かったかは語る間でもないだろう。
「後の控えはイブキだけど……。最後まで基本的には動かずに、但しもしも戦況が危うくなれば救援を頼むかもしれないからその時は宜しく」
「分かったわ」
「いいね？　勝手に動かないでよ？　いくらドラゴンが強いといっても限界がある。どんなに動きたくてもひたすら指示が来るまで待つんだ」
　ワタルはイブキの性格を幼いころから知っているだけあり、念入りに釘を刺す。
「うるさいわね！　分かってると言ってるでしょ」
　イブキは少々苛立っている様子の声で答える。
「ほらそういうところ……。全く君は師匠の下に居たころから全然変わってないんだから……。こんなことならフスベに待機させておけば」
「ワタルもそういう心配性な所全然変わってないわね……。だから大丈夫だって。理事長様の指示が来るまでしっかり待ってますわよー」
　イブキはあてつけがましい声でそう返答する。
「心配させてるのは誰のせいだよ全く……」

「あの、一つ疑問に思ったのですが」
エリカがワタルに尋ねた。
「ん？　何だい」
「作戦の要となる運河の件ですが作戦に間に合う見込みはあるのですか？」
彼女がそれを尋ねるとワタルは渋い顔をする。
「分からないとしか言いようがないね……。タケシ君には既にこの件は伝えてあって当人は不眠不休で掘削を続けると意気込んでたけど……。三日を一日……いや半日で達成するだなんて果たして出来るのか……。でも僕は土木の事はあまり詳しくないし、彼を出来る限り信じるよ」
「でしたら私が手伝おうかしら？」
イブキが提言したが
「気持ちはありがたいが駄目だ。運河の工事は大変な労力を伴うしただでさえ少ない戦力をこれ以上割くことはまかりならない。諸君もどうかそのあたりを分かってくれ」
戦いの最中に傷薬など回復道具を使う余裕は無い。ワタルは苦しそうな心情が十二分に伝わる声でそう言った。
この戦いは断崖絶壁の綱渡りの如く危うい状況なのは明白である。
「分かりました。出来る限り踏ん張って見せます」

レッドがそう返答した。

「うん。頼んだよ。先ほども言った通り本当に危うくなれば僕やイブキが援護に回る。だけれどこれはあくまで最終手段。出来うる限りヤナギさんたちは敵の攻撃を凌ぎ、運河完成まで耐え忍んでくれ……！」

ワタルは手をついて机に伏す。

万一この軍が破られればワタルやイブキの故郷であるフスベが危うくなることを彼は危惧していることも大いにかかわっている。

「何度も言うとおり、これは非常に苦しい戦いだ。だけれども、ここまで築き上げてきたリーグの威信や誇りを守る為に絶対にこの戦いには勝たなければならない。理事長として、このような状況になってしまった事は大いに申し訳ないが、どうか総員の全力を以てこの急場を凌いでほしい」

ワタルは引き締まった表情でこう言い残し、会議を締めくくる。

この後全員は持ち場に赴き、ヤナギやチョウジ市民の好意で配給された夕食を食して床についた。

―5月1日　午前5時　42番道路　エンジュ側河原―

ナツメは気配を察すると、飛び起きてテントをたたんだ。

「来たわね……」

ナツメは静かにそう呟き、ありったけのポケモンたちを前に出した。
フーディン、エーフィー、バリヤード……重複も合わせれば３０体程が大挙してやってくる敵勢を待ち構えていた。
春霞があたりにあるなか敵を察知できたのは超能力の賜物である。
そして彼女はポケギアを取出し、ワタルに連絡する。
「こちらナツメ。敵が動き出しました。敵勢はおそらく……３万５０００体。詳細は……」
数分ほどで内訳を全て話し、彼女はその場にいるポケモン全てにリフレクターとひかりの壁を指示して全面をカバーしたのち、一斉にサイコキネシスを指令する。
ここからリーグ、否、全国の命運がかかった戦闘が開始された――
―第十一話　広がる波紋　終―

第十二話（上）　列島騒乱

―5月1日　午前3時　エンジュシティ　市役所　会議室―

ロケット団はサカキの命でエンジュ市役所を作戦本部として使用することを策定。市役所はほぼ中心部にあり、オーキドやサカキの鎮座する大学にそう遠くないことやいろいろと睨みを利かせやすい事がその理由である。大学はポケモンの供給拠点として使うことに。

作戦本部には幹部クラスが詰めており、本部長及び実質の総司令官はアポロに任命された。

何を隠そう通信局を真っ先に占領して通信網を絶つことや、ゲートを封鎖して逃げ場をなくすことなど相手の援護をまず来させないよう画策し、本来なら圧倒的に強い実力を持つジムリーダーの軍勢を最終的に包囲殲滅できたのはアポロの建策があってこそである。

元々の役職が最高幹部であったことは勿論だが上述の功績もあってサカキより作戦本部長に任命されたとき誰も異を唱える者はいなかった。（但し名目上は当然サカキである）また、サカキの狂信的な信奉者でもあり裏切ることはまず有り得ないだろうとい

うのも理由の一つ。

会議室にはアポロの他に各方面の司令官を務めるランス、アテナ、ラムダの三人が約二時間後より開始予定の一斉侵攻に向けて最終調整を行っていた。

「東方攻略軍の司令官はラムダ、南方攻略軍の司令官はランスとアテナ、西方攻略軍の司令官は私が務めます。それぞれの配置する軍勢は各三万五千体。リーグの軍勢のおよそ３０倍～５０倍程度確保していますが敵はかなりの強者。ゆめゆめ気を抜かずに事へ当たるようにしてください」

アポロはエンジュとその周辺の地形図に三つの駒を置いてそう言った。

東方攻略軍は竜の穴を占拠してドラゴンポケモンの増員。

西方攻略軍はアサギシティを抜けて水道に出て比較的足りていない水ポケモンの増員。

南方攻略軍はジョウト最大の経済都市であるコガネシティを占領して経済資源の確保、増強がとりあえずの目標である。

いずれもリーグを撃破した後に２８番道路、２７番道路及び４０番水道で起こると予想される自衛隊（在日米軍）との決戦にむけての作戦である。アポロ自身の構想としてはジョウト地方及び内国のリーグの軍勢を占領、撃破し、カントー地方に打って出て首都であるヤマブキシティに侵攻、占領した暁にサカキを頂点とする王国を打ち立てる所

まで画策していた。

アポロはボスであるサカキが四年前の復讐の為本気で日本そのものを獲ろうとしていると信じて疑わなかったのだ。

当のサカキは最終的に何を考えているかは特に何も言及してはいなかったが。

「なーに。大丈夫よ。あいつらの威力は予想を遥かに超える一つ一つの兵器といえるレベルだぜ。一匹百殺も夢じゃないぜヒッヒッ」

幹部の一人であるラムダが下卑た笑いを浮かべながらそう答えた。

「あのポケモンたちの力は確かに甚大……。ただしそういう問題ではないのですよ。相手は全国のトレーナーから選ばれたエリート中のエリートの集団。エンジュの頃は確かに勝てたかもしれませんがあの時の損害だって決して無視できるものではないのですよ？」

エンジュシティ占領時のマツバ率いるエンジュ側の抵抗は非常に強く、あの時出動した3万体のうちおよそ6千体が戦闘不能になったと伝わっている。五分の一が瀕死状態になったのだ。

「確かにそうですね……。すぐに回復できたから良かったものの、リーグの力を侮ればとんでもない大怪我を蒙る可能性がありますね」

ランスが冷静にそう述べた。

「はい。冷静な貴方ならば十二分に理解しているとは思いますが、ランスとアテナが率いる南方攻略軍の敵将は中東の雷帝と恐れられた元アメリカ合衆国の陸軍士官、マチスです。この戦争においては正直に言って理事長や伝説の夫婦とやらがいる第一軍よりも、実戦経験豊富な将校がいる第二軍のほうがよほど危惧すべき存在なのです。心してかかってください」

リーグの軍勢の構成情報はロケット団の斥候によって既に全て明らかになっていた。

しかしそれ以上はキョウやその手下たちによって完全に防諜がなされており、各軍の作戦などは一切窺い知ることがかなわなかった。

「ハッ！」

ランスはしっかりとした声でそう返答する。

「アテナもいいですね。有利な軍勢を使って積極的な行動に出るのもいいですが、熱くなりすぎず時には冷静に動いてください」

「ふふ、大丈夫よ。雷帝だかなんだか知らないけどそんなのは数の論理でボコボコにしてあげちゃうから」

アテナは余裕たっぷりの笑顔でそう答える。

アポロは数秒黙した後

「まぁこのくらい正反対なほうがバランスとれていいかもしれない……。今回の一戦に

はサカキ様の威光がかかっています。敗北は絶対に許されませんよ。事を起こした以上、我々は栄光に向かってただ進むしかないのです。では、以上」

アポロはそう言い残して会議室を去る。

ほかの幹部たちもそれに続いて消えていった。

―同日　午前5時３０分　４２番道路　エンジュ方河原―

ナツメはポケモンたちにテレパシーを送りながら黙して指示を下していく。最初の一斉サイコキネシスによって敵勢が多くふっとばされて大混乱に陥ったが２０分ほどで立て直し、今は互角の戦いが続いていた。

ワタルよりそろそろ河原がたへ退くようにとの命が下り、ナツメは手でも合図しながら少しずつ退いて行った。

―エンジュ方ゲート付近―

この事は東方攻略軍司令官のラムダにも伝えられた。

「おーし、敵は俺らにおじけついてどんどん退いて行くな！　この調子でどんどんチョウジまで押していくように前線の隊長たちに伝えろ！　船替わりになる水上ポケモンの用意も忘れないように！」

司令官の伝えた情報は各軍集団の隊長に伝わり、前線で戦うポケモンたちを指揮する下っ端まで下っていく仕組みになっている。

「し、しかしあまりにも不自然ではないでしょうか……。なんだか私には罠のように思えてならないのですが……」

ゲート付近を守る隊長の一人がそう疑問を呈す。

「うるせー！　俺が突っ込めといったら突っ込むんだ！　俺たちには後がねえ前進あるのみ……」

その瞬間、ズズンと一つの衝撃があたりに響いた。

その衝撃は数分ものあいだ続く。地震かと最初は思われたがあまりにも不規則なため次第に人の手によるものだと分かった。

「な……なんですか……これ」

「き、気にするんじゃねえ！　いいな、分かったな、突っ込むんだ！　前へ前へ前へっ！」

ラムダの指示通り、前線はナツメの誘導に従うかの如く前へ前へと詰めていく。

この謎の衝撃は一時間にわたって続き、隊長や下っ端たちの不安の種となった。

―午前６時１３分　エンジュよりの池縁―

十分に惹きつけたと判断したナツメはすぐにポケモンたちを戻す。

「あとは頼んだわよ……」

とだけ小さく呟きナツメはテレポーテーションを用いてチョウジ寄りの河原まで瞬間移動した。この時点でナツメの手持ちは壊滅状態で、３０体のうち２８体が瀕死する

という大損害を被っていた為、空き時間を用いてポケモンセンターで回復を行う。
　下っ端や前線を指揮する隊長たちはどうにも解せなかったがとにかく前へ行くようとの厳命が下っているため、水や飛行ポケモンを用いて池渡りを敢行する。
　が、池を渡って暫くすると、突如暴風雪の餌食になった。言うまでもなくヤナギの策である。
　零下４０度の氷雪の前に前進命令が撤回されるまでの間になんとか突破しようと試んだ敵方の４割がこの餌食になり瀕死した。
　―午前６時５０分　スリバチ山入口付近―
　ヤナギはブリザードを出しているマンムーとトドゼルガの背後に立ち、これからの作戦について話していた。
　敵方だとあれほど恐ろしかったあの技が味方が使うととても頼もしく思えたレッドであった。
「このブリザードはもってあと８分ほどで消え去る。終わったら敵が来るのを待って私とレッドは前線に出て氷結したフィールドの上で戦う。エリカ女史はアロマテラピーで状態異常を治すなりで後方支援を頼む」
「わかりましたわ」
「あの、ヤナギさん」

レッドが一つ疑問に思ったことを尋ねる

「何かね」

「氷結したといってもかつては池だった場所の上で戦うんですよね？　万一割れたりしたら一大事じゃ……」

「ブリザードを舐めたらいかんぞレッドよ。この技で池のかなり深い場所……この程度の時間ならばおそらく5メートル下まで氷の層ができておるからめったなことでは壊れはせぬ。安心するが良い」

因みに酸欠で死なないように昨日までの間にヤナギは網や水ポケモンなどを使って出来る限りこの池にいるポケモンたちを救いだし、隣の池やいかりの湖に放流している。

「な……なるほど」

ヤナギの技の凄さに驚嘆するほかレッドにはなかった。

「ククッ……彼奴らめ、リーグに楯突いた事を大いに後悔させてしんぜよう」

ヤナギの余裕と残忍さが混ざった微かな笑みにレッドは僅かであれど恐怖を覚えた。

「貴方……きっと無事に生きて帰ってきてくださいね」

エリカはレッドの身を案じている。

ポケモンが主体とはいえ戦争である。ヤナギやレッドが生きて帰ってこれる保証は

どこにもないのだ。
「俺がこんなのにやられる魂かよ。大丈夫。きっと生きて帰ってくるさ」
「左様ですわね。貴方ならばきっと……いいえ、必ず生還できると信じております」
それを傍から見ていたヤナギは厳めしい面をしていた。二人を妬んでいるわけでも、羨んでいるわけでもない別の思いがある表情で二人を見ている。
「うん」
「それとですね……もしもこの戦争が終わって二人とも無事にいられたら……その……」
彼女は途端に赤くなる。
「え？」
「そろそろ開けるぞ。惚気は後にせい！　モンスターボールを用意するのだ！」
ヤナギは咄嗟にそういって見せる。
レッドは少しだけ機嫌を損ねたが、すぐに切り替えてモンスターボールを用意する。
―午前６時５８分―
ヤナギの予想は的中し、この時間にブリザードは晴れる。
それとほぼ同時に三人はボールからポケモンを出し、敵が見えてくるのを待つ。
遠くから関の声が聞こえる。

そこまで敵は迫っているようだ。まだ粉雪か何かが残っているのか視界はやや霞んでいる。

数分もしないうちに先陣の黒い影が見えた。

ヤナギは合図とばかりに頷く。

「よし……行くぞっ!!　大いに暴れろ!!」

伝説のトレーナーと雪柳斎。全国広しといえどもこれ以上ないタッグが突撃を開始した。

―午前8時30分　エンジュ側河原―

「ええい!　援軍はまだか!　いくらなんでも遅すぎんぞ!」

ラムダは窮地に立たされた。

二人が突撃を開始して約一時間半。ただでさえブリザードとナツメによって大損害を被ったうえに最強の二人の猛攻である。

ポケモンや団員たちも敢闘はしたが、だれの目からみても劣勢なのは明らかだった。あれから前線は池の真ん中で止まったまま1㎜たりとも動いておらずいたずらにポケモンの命を散らすのみだった。

ラムダは非常に苛立っていたが、それは敗北への恐怖の裏返しでもある。

しかしそれ以上の事態がロケット団には迫っていた。

「南方戦線は第二軍によって壊滅同然の状態に陥りエンジュへの侵入を許し、羅城門周辺がリーグの手に落ちた為それの防衛に精一杯との事です……」

　団員は苦渋の表情でそうラムダに伝えた。

「チッ……。本部長の方は？」

　ラムダはアポロに遣いへ行かせたほかの団員に尋ねる。

「西方戦線は作戦が成功して挟撃中。じきに第三軍の面々を捕え、３８番、３９番道路及びアサギシティが手中に入るのは時間の問題とのことです」

「ケッ、ただの成り上がりの坊ちゃんじゃねえってことだな。それで、援軍は？」

「全力を注ぎたいためそちらに割く余裕はない。苦しいだろうがせいぜい頑張るように。と……」

「おいおいおい冗談じゃねえよ！　ここが突破されたらエンジュが落ちるってことが分からねえ奴じゃないだろ！　くそ……」

　ラムダは数分ほど床几に座って考えたのち

「止むを得ん……こうなったらサカキ様経由で伝えて貰うほかねえな。お仕置きが怖いが背に腹は代えられない。サカキ様のいうことなら聞かざるを得ないだろう。すぐにエンジュ大学に行け！　早くしろ！」

「は、はい！」

下っ端の団員はエンジュ大学へ走らされた。

―午前9時50分　エンジュ大学　学長室―

学長室ではサカキとオーキドが供に緊迫する戦況を余所に将棋を打ちながら今後のことを話していた。因みにそれなりに報告は入っている。

「エンジュはこれからどうするつもりかの?」

「人質は前言った通り奴隷か団員か慰み者。ロケット団のものということを印象付けるため屋根をすべて黒く塗ろうかなどと考えている」

「もうこの町ではそのくらいしかやることは残っておらんの……。北部の寺院方は食料がつき次第併合するとして、後は色々と……の！　ホイ、王手じゃ」

雪隠づめでサカキの負けである。

「ぐっ……。待っ」

その瞬間、ドアがノックされる。

「誰だ」

「東方攻略軍司令官のラムダ様の使いのものです!」

「入れ」

サカキの一言で団員は中に入る。

「現在東方戦線は戦況が芳しくあらず、このままだと壊滅も免れない為アポロ本部長に

援軍を要請しましたが拒否された為サカキ様にその、口添えをしてほしいとのことです」
「あんの馬鹿たれが……情けなく泣きつきやがって。あとで折檻してやる」
サカキは怒りを露わにする。
「そ、それでどう致しますか？」
サカキは少々黙した後
「ここまで攻め込まれては敵わん。分かった、今一筆書いてやるから待ってろ」
サカキは奥にある学長の机に向かった。
「そこまで戦況が悪いのならば、エンジュ大学内に未だ格納されている予備のポケモンも出さねばならぬの」
「おいおいそんな事をすれば後が困るぞ」
サカキが止めに入る。
「なぁにまだまだ余裕はあるわい。それにワシの仕事は増えるが、近くの道路からまた用意すればよい話……」
オーキドは表情を変えずに平然とそう言ってのける。
「オーキド殿がそう言うなら別に止めないがな……。ほら、これ持ってさっさと行け」
サカキは少しばかり苛立ちながら遣いに書状を渡す。

「はっ！」

そう言って遣いはドアを閉め、３８番道路へ向かう。

―午前１０時２０分　３８番道路　ゲート前―

劣勢の二戦線とは打って変わってこちらは穏やかな雰囲気だった。

アポロ主導の土竜作戦（エンジュから３９番道路まで穴を掘ってモンスターボールを大量に送り込み、予めその密かに用意した別働隊が後ろから攻撃する作戦。シジマは当初猛烈な勢いで進撃していた為これが功を奏した）によってモーモー牧場付近に追い詰められたシジマ率いる第三軍は孤立、包囲状態に陥って壊滅も時間の問題なのだ。その為アポロは悠長に爪を研ぎながら椅子に座っていた。

「アポロ様！」

「何度来ても無駄です。今、私に軍を割く余裕はないのですよ」

アポロは片手の綺麗に研がれた爪を見、もう片方の手で振り向きもせず追い払う仕草をした。

アポロの言っていることは半分事実である。二戦線に比べて優勢なのは明らかだが、相手は猛将のシジマである。多少でも手を抜けば中央突破されて逃げられる可能性がある為包囲に全軍を使っているし、アポロ自身この日中にアサギまで侵攻したがっており、猛者が集うアサギの灯台のトレーナーなどそれなりの抵抗が予想されるためその戦

力も温存したかったのだ。
「いえ、サカキ様の命令です。すぐに援軍を送ってください」
「え、サカキ様？」
その単語に彼は振り向く。
そして遣いの持っていた封書を見て
「こ……これは確かにサカキ様揮毫の書状……！　ハハーッ!!」
アポロは地に這いつくばって深く土下座して控える。
遣いはその姿に彼へ気づかれないように笑いをこらえる。疑問に思わないのはこれがいつものアポロだからである。
数秒ほどその態勢になったかと思うと、恐れ入ったような動きで両手で書状を受け取り恭しく礼をし、丁寧に漸く封を開ける。
「サカキ様の御下命では致し方ありませんね……。分かりました。半分ほどをそれぞれの戦線に送ると伝えてください。ランスには私から遣いを出します」
「はっ。了解しました」
遣いはそういうとすぐさま４２番道路へと戻っていった。
―午後１時　３９番道路　モーモー牧場近く―
一時、西側ゲートの三キロ前ほどまで前進していた第三軍は反攻によって３８番道路

と３９番道路の境界付近に追い詰められ、アポロの軍勢に包囲されていた。

しかし、包囲されてから五時間、壁や木など障壁になるものが何もない中、『待てば海路の日和あり』の一言でその後瞑想し、沈黙を守った司令官のシジマの言葉を信じ、懸命に闘い続けた。まさに奇跡といえよう。

そして、午後1時、海路の日和は来た。

「シジマさん！　敵の包囲が薄くなったわ！」

第三軍に所属していたカスミがシジマに上機嫌な様子で言った。

気分を盛り上げるため甲冑姿で出陣していたシジマはこれを即座に脱ぎ捨て

「いよおおおおおおおおおおおおおおおおし！　これより脱出を開始する！　ワシとカツラ殿に続くのじゃ!!　これ以上の西進は全滅を招く故、すぐさまアサギに帰還する！　余計なことを考え遅れをとれば死ぬぞ！　かの島津義弘公の如く一心不乱に南へ向かうのだ!!」

その言葉と共にシジマは褌一丁で先陣をとった。カツラも負けじとばかりに進撃を続け、それにあてられたかのように第三軍の面々は獅子奮迅の勢いで脱出を開始。見事わずか３０分で敵の包囲を潜り抜け一人も欠けることなくアサギに生還した。

シジマの放った「島津義弘」の一言でこれは後に史実になぞらえて「シジマの退き口」と伝わる伝説となった。

これによって西方攻略軍は大きな損害を被り、アポロはアサギ侵攻を断念。３８番、３９番道路を占領してこれを留めた。

一見勝利に見えるが目算が外れたアポロ自身からすれば敗北も同然であった。

さて、ここでここまで放置されていた第二軍を見てみよう。

―午前４時　３６番道路―

司令官のマチスは翌朝早々に叩き起こして、全員を３６番道路まで向かわせた。

前日のビアガーデンの件もあって不信感が軍の成員に漂っている。

マチスは作戦会議を開き、ハヤトを呼びつけて話す。

「ヘイ、ミスターハヤト。この段ボールをユーの持つ飛行ポケモンたちにくくりつけるネ」

マチスはハヤトの前に３０箱を優に超えると思われる段ボールを取り巻き（ジムトレーナー）に台車で持ってこさせてハヤトの前に出した

ハヤトはなんとなく箱の一つを持って見せる。

「う……重っ！　何入ってんですかコレ」

「ビリリダマのアソートメント（詰め合わせ）だヨ！」

マチスは満面の笑みでそう答えた。

「ビ……ビリリダマァ!?　ちょっと！　感電したらどうしてくれるんですか！」

飛行ポケモンに電気が弱いのは周知の事実である。ハヤトの激怒は当然のことだった。

「ＯＫＯＫ。そういうと思って段ボールにはちゃんとゴムが貼ってあるヨ」

と、言いながらマチスは箱の中をチラッと見せた。確かにしっかりゴム張りにしてある。

納得したハヤトは少々不機嫌そうに尋ねる。

「それで、これをどうするって言うんですか」

「カンタンに言えばエネミーにこれをばら撒くネ！」

「それが？」

「ニブいネ！　大爆発でドドドドドーン！　ネ！」

マチスは大はしゃぎな様子で騒ぐ。ついでに取り巻きも騒いだ。

朝からなんと元気なことだろうか。

「ハァ!?　巻き添えにされたらどう責任とってくれるんですか！」

「スグには爆発しないからダイジョブネ。セーフティーヨ」

「スグにって……？」

「１０セカンド（秒）ネ」

マチスは顔の前に両手を二つ開いてハヤトに見せた

「うーんそのくらいならばら撒く高度によってなら……」
　ハヤトが承諾しかけたところでマチスが首を振る。
「ノーノー！　タダばら撒くじゃダメネ！」
「え？　じゃあどうしろと……」
「Ｄｉｖｅ　ｂｏｍｂｉｎｇ！　ジャパニーズで言うトコの急降下爆撃ネ！」
　その言葉からなんとなく嫌な予感がしたハヤトは恐る恐る尋ねる。
「それってつまり……？」
「エネミーのスレスレの所まで近づいて、段ボールを真っ逆さまにするのネ！」
　それを聞いてハヤトは顔を真っ青にする。
「ちょ……危険すぎます！　申し訳ないですが」
　とハヤトが辞退しようとしたところでキョウとアンズがどこからかやってきた。
「マチス殿。探索がすべて終了致しましたぞ」
　両者とも片膝をつき、キョウが言った。
「オー流石はジャパニーズニンジャネ！　で、どんな感じナノ？」
「敵は羅城門を出て、３７番道路を現在通行しております。あと数時間もしないうちにここまでたどり着くかと。事態は急を要します」
　とキョウは簡潔に報告した。

「という訳ネ！　さっさとくくりつけるなり鷲掴みにさせるナリで落としてコイヨ！」
「い……嫌です！　僕の大事に育ててきた鳥ポケモンたちをそんな危険に晒すわけには」
　ハヤトが言い終わる前にキョウが苦言を呈する。
「ハヤト殿。マチス殿は貴殿の鳥使いとしての腕を見込んで頼んでおるのでござる」
「キョウさんまで何を言ってるんですか！　僕は嫌です！」
「いいや。適当で物を言うているのではない。この中の何人かも飛行ポケモンは持っているが、敵に肉薄するほど接近して爆弾を落とし、無傷のまま通り過ぎるなどという芸当ができる余地があるのはお主の他におらんでござる」
「そ……そうかもしれないですけど、やっぱり僕は……」
　ハヤトは少しだけ表情を緩めたがやはり固辞する。
「ハヤト、あんたビビッてんの？」
　アンズがハヤトを挑発する。
「なっ……」
「この前デパートであーんなに俺の父さんは凄いんだぞ！　とか威張り腐ってたくせにいざとなれば爆弾ひとつ落とすにもビビっちゃうんだー！　それって自信がないからでしょ？　爆発から逃げきれずに怪我しちゃうとか思ってるからでしょ？　あんた

の父上ってやっぱりあたいの父上に比べて大したことないのねー！」
　アンズは高笑いしながらハヤトを真正面から貶める。
「ふ、ふざけるなぁぁ！　よ、よしそんなに言うならやってやろうじゃないか！　マチスさん！　僕、やります！」
「ＯＫＯＫ。じゃあ、パパッと頼むネ！」
　ハヤトは台車を受け取って
「おい、後でほえ面かくなよ！」
「ふん、誰がよ！」
　最後までいがみあったままハヤトは憤然と議場を後にした。
　マチスとキョウは示し合わせたかのようにニッコリと笑う。どうやら全て計算ずくだったようだ。
　キョウとアンズは一番最後列の椅子に座る。
「さて、そろそろメインテーマを話すネ！　今回のストラテジーはビリビリのライティングウォー、電撃戦ヨ！　ハヤトの爆撃で敵が弱ったスキに一斉に襲いかかるのネ！　先鋒はミスターグリーン！　ユーに任せるネ！　この中ならユーが一番強いからネ！」
「へーへー分かりましたよ」
　グリーンは頭をかきながら答える。

「ハヤトの空爆が終わったら、グリーンが動くからそれをサインに一斉に皆動き出すネ！　ライティングウォーの要は詰まる所その速度ヨ！　スピードとアタックがフュージョンした時にこのストラテジーはシンカを見せるネ！　ＯＫ!?」

全員つられたかのようにＯＫと答えた。

これで作戦会議は終わり、全員自然公園とキキョウの分かれ道周辺で待機していた。

―午前５時３０分　３７番道路上空―

ハヤトは敵に見えないくらいの場所で乗っているピジョットを止め、待機させる。

今日は曇天で、敵からこの集団は雲に隠れて視認しにくくなっている。

「はぁ……見るのも嫌になるくらいの人……いやポケモンだかりだな……」

ハヤトの目下には整然と整列している黒と色々な色が混ざった集団が行軍していた。

鳥ポケモンもいるにはいたが、ここから攻撃されるとは思っていないのか無警戒である。

ハヤトの周囲には百匹の精鋭たちがおり、どれもハヤトが手塩にかけて育てた鳥ポケモンたちである。見るものを魅了させる毛並といでたちだ。十匹ずつ群れを作り、十の群に分けている。

上空に滞空して数分。ハヤトの視界が大きく開けた。雲の間にさしかかったのだ。

「よし……！　第一群！　行けっ！　キキョウの鳥使いの恐ろしさをたんと味あわせて

やれ！」

ハヤトは機を逃さず急降下を指令。ロケット団の軍勢は突如現れた鳥ポケモンの集団にどうすることも敵わず、投下を許した。

バラバラに投下すると鳥ポケモンたちはV字を描くかのごとく素早く飛び上がった。10秒どころかたった7秒で元いた高度まで戻る。

そしてそれから三秒後最初の大爆発が起こった。

この振動は非常に大きく、振動は隣の道路まで、音はチョウジやアサギまで届いたという。

そして、爆発が起こったのちの地表は惨憺たる有様だった。爆心地近くにいたポケモンは跡形もなくいなくなり、少し遠くにいたポケモンや人も大怪我を負っている。

普通の大爆発でもこうはならないのでおそらくマチスが何か細工したと考えられる。原爆ほどでないにしてもダンボール一箱で大型爆弾一個分相当の威力があったと見える。

―午前6時―

第二軍は突撃指令を待ちながら大爆発の音を聞いていた。

「ヒェェェェ。怖い……怖すぎるわ」

アカネは大いに怯えていた。

いくら改造ポケモンが相手とはいえポケモンはポケモンである。ここまでしていいものなのかという疑問が第二軍の中に漂っていた。

「マチスはん、いくらなんでもこれはちとやりすぎでないのや?」

現ヒワダタウンジムリーダーのガンテツがマチスに苦言を呈する。

「ジジィ、何甘っちょろい事言ってんだヨ! これは戦争! 戦争ナノ! 戦場でやりすぎなどと言っても後ろから撃たれるンダヨ! ビクトリーが全てナノ!」

マチスはそうガンテツをしかりつける。

「しかしいくら戦争戦争いうても限度言うものがあるでっしゃろ? あまり惨い事しすぎれば勝っても禍根が残るで。これじゃあロケット団と何も」

「ウルサインダヨ! チキンピープルはシャラップネ!」

マチスはガンテツを殴りつけようとする。

「や、やめてください!」

ツクシが間に入って止めにかかる。

少しばかり遅かったのか、ツクシの右頬に筋骨隆々に鍛え上げられた拳が直撃する。

「いだっ……!」

ツクシの華奢な体が堪え切れる筈もなくそのまま倒れてしまった。

あたりは騒然となった。

ツクシが殴られる場面を見たアカネが思わず駆け寄る。ツクシはすぐに立ち上がり、口から血が出ているのも構わずにガンテツをかばう。
「何だよチェリーボーイ！　ユーもこのジジィの味方するノカイ？」
マチスは怒髪天を衝く勢いでツクシを凝視する。
ツクシは少々怯えながらも、目だけはしっかりマチスにあわせる。
「そうですよ。僕の街はロケット団にあらされて、やどんの尻尾を持っていかれた……。そんなだから僕自身ロケット団は許せない。でも、だからといってあんなとんでもない威力の爆弾を使ってポケモンを焼き尽くすなんて……これじゃあどっちが悪者かわからないじゃないですか！」
「ユーは何にも分かってない！　善いか悪いかナンテノハ今考えることじゃないネ！　戦争は勝つか負けるかのどっちかヨ！　綺麗ゴト言うのはカンタンかもしれないケド、それで戦争に勝てるとは限らないネ！」
「僕たちはポケモンにひどいことをするロケット団と戦っているのに……」
「ええいウルサイウルサイ！　またぶん殴られたいノカ！」
マチスは再び拳を振り上げる。
即座にアカネが前に立つ。
「何ダヨお前ハ！　そこをドケ！」

マチスは声を張り上げて一喝する。
「殴るなら、ウチを殴りな」
「Ｗｈａｔ?」
「何じゃないねん！　コイツの高校の先輩として、ツクシに酷い目遭わす奴はウチが絶対許さへんで！」
「軍の士気を乱さんとするヤカラはこれで黙らせるしかないんだヨ！　戦うムードの足りてない奴が居たら勝てる戦争も勝てなくなるネ！」
「ケッ。鉄拳制裁で全部片付くとおもっとんのか！　殴って解決すんのはボクシングだけやで！　これやから軍人は脳みそまで筋肉言われるんやで！」
「こ……コノアマ……！」
そうこうしているうちに北の方角から六十匹の飛行ポケモンが帰ってきた。
ハヤトの空爆作戦が終了したのだ。
「チッ……。帰ってきたネ……！　さっさと配置にステイシロヨ！」
マチスはそう言い残して自らの配置に戻る。
険悪な雰囲気のまま、第二軍は突撃を開始した。
―午前１１時―
作戦通り、グリーンの突撃で攻撃は開始された。

爆弾もといビリリダマの大爆発の効果は覿面で最先端に出てきたウィンディの姿を見るや否や敵軍は畏怖し、抵抗はしてきたが焦土と化した少数の軍勢で勝てる筈もなく、容易く羅城門周辺まで到達。エンジュシティが第二軍の手で解放されるのは最早時間の問題に思われた。

しかし、南方攻略司令官のランスはあきらめていなかった。エンジュ待機のポケモンたちを急いで結集して南側からやってくる第二軍を三方位から攻撃。

これによって必然的にリーグ方ポケモンは三方位同時に相手せざるを得なくなり、入口付近で軍勢の勢いは停止した。

そしてランスは第二の作戦を急場で建て、実行に移さんとする。

―午後0時　エンジュ市役所　1F―

南方攻略軍は電撃戦によって陣を羅城門から遠く離れたここに移動させるしかなかった。南方攻略どころかエンジュ防衛軍にまで成り下がった事にランスは深い屈辱を覚えている。

「ランス様！　アテナ様！　エンジュ大学より追加の援軍が到着いたしました！　アポロ様からの援軍も直に到着する見込みです」

「漸く……挽回の準備が整ったわね」

「大学からの援軍は如何程？」

ランスが下っ端に尋ねる。
「はっ。およそ1万体です」
「よし、これだけいればいい……！　すぐさまアポロ本部長の掘った穴を分岐させ、37番道路に繋げなさい！　第二戦線を開くのです！」
ランスはアポロの掘ったエンジュから38番道路までの穴を途中で37番道路にまで分岐。そしてそこからポケモンを出して第二戦線の戦端を開いて敵の混乱を狙ったのだ。
ランスは取りあえず勝つことは考えず、エンジュからポケモンリーグの軍勢を遠ざけることを念頭に置いた。
アンズやキョウの作り上げた防諜網は地下深くにおいては全く役に立たず、敵の侵入を許してしまう。
―午後1時20分頃　37番道路―
先の一件でマチスに対して嫌悪の情を抱いているアカネは一応命令には従ったが、高速に移動する事を命令したマチスの指示に従わずゆっくりとした速度でポケモン達を引き連れていた。
アカネはツクシをも抱き込んで同様の事を行わせ、半ば孤立状態となっていた。グリーンやマチスたちは遥か前方に居る。ガンテツは一応従うもやはり良い気分では無

かった為どこか緩慢に戦っている。
　戦況そのものは良い為二人は特に何も言われなかった。
　しかし、抱き込んだとはいえ、アカネは以前のようにツクシと気軽に話せずにいた。
　沈黙に耐えられなくなったのかツクシがアカネに話しかける。ツクシもアカネも手持ち達の先頭に立って歩いていた。
「あの……」
「ん？　な、何？」
　突然話しかけられて驚いたのか彼女は上ずった声で答える。
「さっきは有難うございました」
「フン。せ、先輩として当然の事しただけや。お礼なんてええよ」
　アカネは以前に比べどこかつっ慳貪な態度で返す。
「アカネさんなんというか前に比べて尖ってません？」
「そないな事……あらへんよ」
　アカネの心中では話しかけられて嬉しいという心と自分でチャンスを窺ってたのにそれを乱されてイライラしている心が葛藤している。
「それにしても大分間隔が空いてしまいましたが、手助けしなくて本当に大丈夫なのでしょうかね……？」

ツクシが少々申し訳なさそうな様子で尋ねる。
「ええのええの。今先陣にいるんわ元チャンピオンと司令官などなど錚々たるメンツやで。ウチらみたいなにわかトレーナとは格が違う連中が戦っとるんやわざわざ行かんでも十分やて」
「仮にもジムリーダーなのにそんな事言って大丈夫なんですか？」
「ウチかてそれなりにトレーナーとしての矜持みたいなんわ持っとるけどね……」
そんなこんな話しているうちに隣の森から黒ずくめの集団が突如として出てきた。
「な、なんやねんあんたら！」
その集団をみたアカネが怒鳴りつける。
「え!?　どうしてこんなところにジムリーダーがいるのよ……」
ロケット団の一人の女団員が目を丸くして驚いている。
「どうしてもこうしてもあるかい！　寝ぼけとんのか、あんたらのせいでウチらは大事な仕事キャンセルしてここまできとるのわから……」
言い終わる前に男の団員が顎に手を遣って不思議がっている。
「おかしいな……。ランス様はここに居るはずがないと踏んでいたのに」
「て、おいコラシカトすんな！」
「グズグズしてないで、さっさと倒せ！　早いところ片付けて北上するぞ！」

隊長と思われる団員がそう号令した。
「は……はは っ！」
１０人ほどの団員はありったけのモンスターボールを出し、ポケモンを出す。
包囲の司令を出し、３０００体を数えると思われるポケモンたちが二人及び手持ちを取り囲んでいく。
「ケッ……これぞ四面楚歌というやっちゃね。ツクシ」
アカネは追加のモンスターボールを手にしながら言う。
「ええ……そうですね」
ツクシは息を呑みながら答える。どうやらあまりのことに震えているようだ。
「ビビるやないで！　元やろうとここに来ている以上腐ってもポケモンリーグの一員やぞ。恥ずかしくない戦いしようやないの」
アカネは口端をややあげてニヤリと笑って見せる。
「ええ……全くですね」
そう言われて覚悟を決めたのか、ツクシも追加のモンスターボールを持つ。
「それとな……。ツクシ、アンタにはこの戦争が終わった後……言いたいことがあるねん」
「は……な、何ですか」

「アホか！　知りたきゃまずはここで捕まらんようにせい！」

そうこうしているうちに包囲が終わったのか、ロケット団側から攻撃の司令が下った。

「そうですね……。アカネさん、貴女の方こそ気を付けてくださいよ」

「ケッ、ツクシに言われんでもわかっとるわ！　いくで！」

こうして、ツクシアカネと南方攻略軍別働隊の間で戦闘が始まった。

―午後2時　羅城門周辺―

一方、先鋒で戦っていた本隊は、ロケット団側からの援軍によって優勢は失われ互角の戦いを強いられていた。

「司令官。一大事にござる。現在南方に居るツクシ殿とアカネ女史の部隊がロケット団の別働隊に急襲されております。形勢は今のところ優勢でございますが、敵方の増援も著しくこのままでは敗北は必至かと思われます。ここは放棄して二人の救出を……」

キョウの報告と提言に対し、マチスは顔を赤くして一蹴する。

「何を言うネ！　今ここをテイクアウェイしたらそれこそ敵の思うツボヨ！　挟み撃ちにされたら共倒れになのは目に見えてるヨ！　ソレニ、今しかエンジュを解放する機はないネ！」

「では、グリーンに殿軍を頼みましょう。あの者はかつてレッドと雌雄を分ける戦いを

行い現在はカントー一の実力を持つトレーナーでござる。彼にかからば相当に時間が稼げましょう」

キョウの提案に対し、マチスは苦虫を潰したかのような表情になる。

頭ではキョウの言うとおりにした方が得策だが心の中ではやはり二人が気に入っていない様子である。

「司令官。ここでもし二人が囚われれば例えここを突破し、エンジュが解放されたとしても貴方には一生部下を見殺しにして功に走ったという汚名が着せられることになりますぞ。諍いに情を乱し、情勢にあった立ち回りが出来ぬのでは司令官の名が泣くことになるでござる」

自らの築き上げた輝かしい軍歴に傷がついてしまう事を大いに恐れているのかマチスは漸く重い腰を上げ、

「グッ……。分かった。分かったネ。グリーンを残してここは撤収スルヨ……」

「ご英断でござる。然らば御免」

キョウはマチスのもとを去って行った。

この後、第二軍は南下してツクシとアカネを救出。二人の被害は決して軽いものではなかったがなんとか身だけは無事に済んだ。

そして死線を共にくぐりぬけたからか二人の仲は以前同様にまで回復した。

しかし、救出したのはいいものの、グリーンが押さえているとはいえ挟み撃ちになることはほぼ確実。第二軍もまた窮地に追い詰められていた。

―午後3時　スリバチ山　山頂―

ここには総司令官のワタルが陣取っている。

午後2時頃まではスリバチ山出入り口付近に配置した三人の活躍と踏ん張りで優勢だったが、14時を過ぎてから敵方の援軍が到着し、第二軍と同様に互角の戦いを強いられている。

しかも第二軍とは異なり、こちらはおよそ8時間に亘って同じ場所で戦い続けている。トレーナーもポケモンたちもいくら強いとはいえ限界を迎えつつあるだろうということはワタル自身重々承知している。

「まだか……」

ワタルは北側を振り返る。

彼の作戦の要である運河の掘削作業が未だ完成していないのだ。

タケシの奮励によって現段階では8割方が完成し、あと総計3㎞ほどの掘削で運河が開通するといったところである。

しかしそれでも3分ほど前の報告ではあと一時間程度はかかるとの事だった。

正直なところ、ワタルからすればあと一時間もつかどうかはあまり期待できない様子

である。援軍が到着した一時間前と比べて敵の減る速度は鈍化しているからだ。

「くっ……」

ワタルはずっとポケギアの蓋を開けたり閉めたりを繰り返している。

イブキに救援を頼もうかどうかを非常に迷っている様子だ。しかし、この作戦は出来うる限りの反撃を最後にしなければ意味がない。

イブキや自分自身が今出張ってしまうと最後の大詰めの効果が薄まり、失敗に終わる可能性が出てきてしまう。

ワタルは胃や頭を痛めながら山頂の床几の上に座っていた。

山頂に吹く風はワタルを冷やしていく。

―午後３時１０分　４２番道路　エンジュ側河原―

ラムダのもとには朗報が続々と飛び込んでいた。

増援投入後、それまで耐えに耐えていたヤナギやレッドのポケモンが次々と倒れ、戦況は俄かに良い状況へ向かっていたのだ。

これは増援のポケモンが強かったと言うよりは、増援の投入によってポケモンの中で絶望が支配され、耐えきれなくなったことが要因としてあげられるだろう。

司令官のラムダは笑いが止まらなかった。

「カイリキーが倒れました！　これでレッドの持つポケモンは残り8体です！」

「ブーバーンが倒れました！　これでヤナギの持つポケモンは残り14体です！」

ポケモンの持っている数は団員が出ているポケモンの数を計測し判断したものである。

まさかここで全力を出さないはずがないだろうという事で出ているポケモン＝相手の全力という計算なのだ。

「フハハハハ！　よしよし！　これでこのまま押していけば夜にはやつらは壊滅、そのままチョウジになだれ込めるぞ！」

ラムダはご満悦な様子でそう話した。

「はっ。此方も被害は相当でありますが、確実に敵は戦力を削がれています。しかしそれにしてもワタルやイブキの姿が見えないのが気がかりですが……」

近くにいた隊長がそう懸念する。

「なーに大方どこかで震えてるのだろう！　それかここはもう諦めてフスベに籠ってるかだ！　なんにしてもこの三人が敗れちまえば最早敗北も同然だからな！　このままチョウジまで攻め込み、占領しちまえばサカキ様も援軍の件は許してくれるはずだ！」

「ええ、それは間違いないでしょう。それよりラムダ様、もし第一軍のメンツが捕えられたら……」

隊長が途端に下卑た笑いをした表情になった。

「ん……おおそうか！　あの上玉が手に入るのかぁ……。サカキ様は捕えた先の女は自由にしていいって言ってたもんなぁ」

　ラムダも同じようにニヤける。

「俺、テレビやトレーナー名鑑でエリカやナツメの姿見て何回（ピー）したか分かんないっすもん！　そんな憧れが今夜……ウヒヒ」

「おいおい何言ってんだ一番槍は俺だぞ」

　ラムダがそう隊長を咎める。

「それはそっすよ！　でも俺たちだっておこぼれに預かることくらい……」

「おうそれは考えてやるよ。あの女きっとおぼこだろうな……今まで俺たちを蔑んだ分ヒィヒィ痛めつけてやるぜヒッヒッヒッ」

　他の隊長がラムダを持ち上げる。

「おぉ流石はラムダ様！　どんどんやっちゃってくださいよ！　いやーほんとラムダさんの手下で良かったすわー！」

「ほんとほんと、これがもしランス様やアポロ様だったらぜってー許してくれねーもん。あの人たち潔癖だからな……」

「ランス様はまぁそうだけど、アポロ様はサカキ様にお目通ししてから……とか言いやがるもん。ほんと参るぜ……」

隊長たちは口ぐちに他の幹部の悪口を口にする。
「まあ確かにそういう所はあるかもな。さてそれにしても今夜が楽しみだぜフフフ……」
ラムダや隊長たちは皮算用をしながら妄想にふけるのだった。
―同じ頃　スリバチ山出入り口付近―
当初は優勢だった中央部隊だったが、段々と倒れるポケモンが目立ってきた。
エリカが常にアロマテラピーでケアしているがそれでどうにかなるのは状態異常だけで、体力は一切回復しない為回復道具を使えない状況にあってはジリ貧の状況であった。
「ドサイドン！　いわなだれだ！」
ドサイドンはヤナギの指示に従い、大量の岩を降らす。
この技によって３０匹ほどが一掃された。
「ギャラドス！　アクアテール！」
ギャラドスは巨大な尾を用いて敵を薙ぎ払う。
この技で４０匹ほどが押し出された。
レッドはこのようにヤナギのポケモンたちの強さを目の当たりにし、少し前にヤナギに勝った時の事を思い出していた。

そして彼に過った疑問はあの時の強さは限定的なものではないのかという事である。
確かにこの前の勝利は勝利である。しかしそれはジムリーダーとしてのヤナギに勝ったことに過ぎず、ポケモントレーナーとしてのヤナギに勝ったとは言えないのではないか。
そして、ポケモントレーナーとしてのヤナギに勝てなければ自分は本当に強くなったとは言えないのではないかという事である。
「レッド！　何をぼうっとしておる！　お前も早く倒さぬか！」
ヤナギは突っ立っているレッドを見てしかりつける。
冷静なヤナギがここまで苛立っているという事はそれだけ戦況が緊迫している証である。
レッドとヤナギ合わせて１００体ほどいたポケモンは今や２２体まで減少し、そのペースも早まっている。
本格的に崩壊の兆しが差し始めているのだ。
改造ポケモンの力はそれだけ強大ということでもある。
「は、はい！　レアコイル！　ピカチュウ！　あの方角に雷だっ！」
二体が力を合わせ、稲妻を下す。２０匹ほどがまとめて倒れた。
―午後３時５０分―

午後2時30分に西方攻略軍が戦闘行為を終了し、現在になって東方攻略軍の加勢に続々と殺到した。

「距離を狭めよ！　間合いを詰めて一気に畳み掛けよ！」

隊長たちが同様の掛け声をし合い、レッドとヤナギのポケモン達とロケット団のポケモン達の間合いが詰められ崩されていく。

これはいよいよ二人の抵抗が弱くなり、押し掛けをしても潰せると踏んだからこその戦略である。

「うむぅ……！　これはいかんのう。敵がいよいよ本気で崩しに参ったか……」

目の前にいる手持ちたちが次々と押されて倒れていく様を見てヤナギは呟く。

「このままじゃ本当に総崩れですよ。ヤナギさんこうなったら残りのポケモンを全て出すしか」

「世迷言を申すな。ここで全力を出せば後に差し障る。如何に劣勢であろうとも命令に背いてはならん！」

「そりゃそうかもしれませんが、この状況になってもイブキさんやワタルさんが助けにこないということは……」

レッドはヤナギにアイコンタクトを取る。

「ふむ……」

ヤナギはスリバチ山を見上げる。
「なるほど……左様なことか。分かった、そういう事ならば協力致そう。行け、ユキノオー、メタグロス！」
レッドも出来うる限りのポケモンを出し、最後の応戦をする。
エリカにも事情を話し、支援を止めてソーラービームやギガドレインなどの遠隔系の技に限って戦闘に参加させる。
そして、総反攻開始から１０分。
―午後４時　スリバチ山　山頂―
カイリューが赤旗を左右に大きく振るう。
これを見たワタルは愁眉を開き、すぐさま三人へ連絡を回す。
いつもの前置きの後、ワタルは興奮を抑えながら話す。
「諸君！　本当に……本当にご苦労であった！　運河が開通したためすぐさまポケモンを戻し、その場をひくように！　たったいま堰を外したためあまり時間に余裕はない！　すぐに撤退してくれ！」
因みにこの時点でロケット団のポケモンは汗牛充棟なばかりに犇めいていた。
―同時刻　スリバチ山　出入り口付近―
ワタルより報告が下ると

「やった！　やったぞ！　よし！　皆戻るのだ！　撤収するぞ」

ヤナギの号令により、三人のポケモンはすぐさまモンスターボールに収められレッドとエリカはリザードンに、ヤナギはヨルノズクに乗ってすぐさま出入り口を発った。

敵軍は勿論その行動に反応しないはずがなく、追撃せんとばかりに一気に押し出していった。

これが東方攻略軍の致命傷になった。

―午後4時7分―

いかりの湖から流れた怒涛の水が鉄砲水となってスリバチ山の池になだれこんだ。長時間、重いポケモン達を載せていた氷はこれを契機に崩壊し、ポケモン達を池の底へと誘う。

5分も経たないうちに池は氾濫し、東方攻略軍は団員ごと為すすべもなく池に溺れるほかなかった。ここに水ポケモンの不足が大きな仇となって返ってきたのだ。飛行ポケモンもいるにはいるが突然の事にパニックに陥ってほとんど使い物にならなかった。

42番道路の西方は阿鼻叫喚の有様となった。

程よいころあいになったところでワタルは堰を閉めるようにタケシへ要請し、全員に総攻撃の司令を出した。

それは堰を開けてから20分ほどのことであった。

―午後４時３０分―

総攻撃はワタルとイブキが先陣を務め、残ったポケモン達の討伐に全力をつくした。

二人ともカイリューに乗って指揮を取り、猛烈な勢いで逃げ惑うポケモンや団員たちを倒していった。

「押せ！　押すんだ！　ロケット団に二度とこの地を踏ませるなっ！」

ワタルは高らかに何度もそう檄を飛ばし、前へ前へ、敵の本陣にむかって進んでいく。

他の面々も飛行ポケモンや水ポケモンにのって討伐に当たったが、先陣の二人には追い付かなかった。

―午後４時４０分　エンジュ側ゲート前―

最早一時間ほど前とは打って変わった戦場にロケット団側はてんてこまいであった。

氾濫発覚後ラムダは本陣を後ろに移していたが頑として戦闘継続を主張し続けている。

「ラムダ様。もういけませんや……。撤退命令をお出し下さい、これ以上戦う事は不可能です」

隊長の一人が顔面蒼白になりつつそう進言した。

「ふ、ふ、ふ、ふざけるな！　さ、散々援護をもらっておいて挙句負けましただなんてサカキ様の前で言えるわけねえだろうが！　お、俺は絶対にここを退かねえぞ！」

ラムダは言葉だけは威勢がいいが、その実大いに震えていた。
戦いに負けると言う事よりも後を非常に恐れているようだ。
「大変だー！　カイリューが、カイリューが来るぞおお!!」
その言葉を聞き、ラムダが立ち上がる。
見ると、遥か遠くではあるが肉眼ではっきり分かる程度にカイリューを先頭にガブリアスやボーマンダなど最強クラスのドラゴンポケモンが騎虎の勢いで本陣に迫っていた。
言うまでもなくワタルとイブキのポケモンである。
「ハハハハハ……ハ」
ラムダは膝を折って地に伏した。流石の強情もここで尽きたようだ。
緊張の糸が切れたのか、ズボンの股が一気に濡れていき、アンモニア臭があたりに漂う。
「う、うわああラムダ様が！　ラムダ様が！」
司令官のこれ以上ない失態に本陣は右往左往の大騒ぎになった。
「鎮まりなさい！」
数分ほどすると、すべてを刺すような鋭い声が陣中に響き渡った。
どうやら本部長にして西方戦線司令官のアポロが到着したようだ。

「全く、ゲートの向こうが騒がしいと思ったらこれは何事ですか！　サカキ様の僕たるもの、常に堂々としてなければならないといつも言っているでしょうが！」
　アポロはそう団員たちを叱りつける、すると、団員たちは申し訳ありませんでしたと大声で謝りつつ片膝ついて地に伏せた。
「あの……アポロ様、ラムダ様はどういたしましょう……？」
　団員の一人が失神したラムダの両肩を抱えながら尋ねる。
「この者は我が団の恥さらしです。大学地下の折檻室にでも放り込んでおきなさい」
　アポロは冷たい声でそう言い放った。
「は、ははっ」
　団員はそういうとエンジュ側のゲートに消えていく。
　しかし幹部の制裁は後に回すとしても現況に代わりはない。
「それにしてもこれは困りましたね……。あとは私がなんとかしましょう。皆さんは余ったポケモンを戻して下がっていなさい」
「し……しかし！」
「私の命が聞けないと……？」
　アポロは団員を冷たい視線で見下ろす。
　何者をも貫く冷眼は団員を震えさせ、

「わ……分かりました」
と有無を言わさず下がらせた。
―午後5時　エンジュ側ゲート付近―
あたりが茜色に染まりつつあった時、ワタルは遂にここまでたどりついた。
伏魔殿のあるエンジュシティを目の前にして、ワタルは一人正座してじっと動かない人物を目にする。
ワタルは直感で只者ではないことを見抜き、カイリューから降りてその人物に話しかけた。
「君、こんなところで何をしているんだ」
話しかけると、青年はふっと笑って
「貴方が理事長のワタルさんですね……。初めまして、ロケット団最高幹部兼西方攻略軍司令官のアポロです。どうぞ宜しく」
アポロは礼儀正しく礼をした後に、手を差し出すが、ワタルによってそれは大きく弾かれる。
「おやおや……これは手厳しい」
「当然だろう。君たちのせいで……一体どれだけの人やポケモンが苦しんでいるのか分かっているのか！」

ワタルは眦を決して真っ赤になって叱りつけるが、アポロは表情一つ変えずに答える。

「何を言うんですか……そんな道徳論をふっかけたところで心が動くほど、我々はピュアではないのですよ。理事長さん」

アポロはさっぱりとした笑顔でそう返す。

「はぁ……忌々しい……。それで、最高幹部が一体何の用なんだ。交渉役は確かランスという男だったはずだけど？」

「ランスは今、羅城門周辺で未だ貴方がたの手下と戦っている所でしょう……。まぁ、そうでなくても貴方たちの強さを目の当たりにして、そろそろ私が直々に出なければまずいと思っていたところです」

ランスの発言にワタルを眉をしかめて

「何だと？」

と尋ねる。

「ハッキリ申し上げて私たちはリーグの強さを少々甘く見ていましたよ。私の戦った第三軍もそうですが皆さん一人一人が優秀で結束力がある。我々の用いている改造ポケモンも相当な強さを持っていますが、それでも相当に苦戦致しました。そこで私は思ったんです。ここはリーグと腹を割って話せなければならないと。サカキ様が出るのが

一番良いのでしょうが、あの方は大将として奥に座っているのが性に合うお方です。その為サカキ様に次いで不肖ナンバー2を務める私めが……」

「長い。結局お前は何が言いたいんだ」

ワタルは苛々しながら尋ねる。

「せっかちなお方だ。では、単刀直入に申しあげましょう。我々と取引を致しませんか？」

「そんなものする余地は無い。我々はこのままエンジュに突入し、君含めロケット団を一網打尽にする。ただそれだけだ」

ワタルは冷淡にそう返した。

「それが無理だということは貴方自身一番よく分かっているはずですよ？　理事長さん」

ワタルは図星とばかりに面食らった表情をする。

第一軍どころか全軍あわせてポケモンが元気なのはワタルとイブキ、そして早期に回復したナツメの三名である。

他は疲労困憊でありとても出撃できるような状況ではないのだ。

そしてなにより敵があとどれだけの数をもっているのか分からない。

「私の背後……いえ、ロケット団にはあと3万体ほどの余力があります。貴方の仲間は

果たして残りにいる三万体に耐えうるだけの戦力を有しているのですか？」
「クッ……」
　ワタルはそういわれると黙りこくるしかなかった。いくら理事長直々のポケモンとはいえ、レッドやヤナギたちがあれだけ苦戦したポケモンたちを三万体倒せる保証はどこにもないのだ。
「話を戻しましょう。現在我々が求めるのはリーグ解散ではなく、暫しの休戦です」
「な……休戦だと!?　そんなみすみす力を貯める事を認めるような真似見逃せるとでも……」
　ワタルはまた声を荒げるが、アポロはあくまで平静を求める。
「そういう訳ではありません。我々が休戦を求めるのは今回の戦いで傷ついたエンジュの街を修復したいと願うからです。エンジュは長年我が国の都であった歴史ある都市です。それを直したいと願うのは悪の組織といえど当然ではないでしょうか？」
　意見書よりアポロはエンジュの出身であるという情報を握っていたワタルはその言葉が嘘のようには思えなかった。
　見え見えの嘘かもしれないが。正直な話、リーグ方のポケモンが回復し、準備が整うまでの時間が欲しかったのは事実である。しかし、やはりただそれを呑みこむことを良しとしなかったのかワタルはこう切り出す。

「分かった……。呑もう……呑むが一つ条件がある」
「何でしょうか」
「人質を解放して欲しいんだ」
ワタルの条件に対し、アポロは数秒ほど考えた後
「分かりました。私の一存では決められないですが……。全員とはいいませんが、一部を解放するように進言いたしましょう。詳細については追って連絡します」
その後、ワタルとアポロは毎日夕刻にこのゲート前に集まって会談する事。４８時間の休戦が確約され、ようやく一日目の戦争が終結した。
第一軍は逆転勝利、第二軍は辛勝。第三軍は敗北という結果に終わり、３８番３９番道路がロケット団の支配下にはいった。
―５月２日　午後５時　チョウジタウン　ポケモンセンター　２０９号室―
あれから一日が経過した。
各軍のジムリーダーや四天王たちはポケモンセンターや宿やホテルなどに詰めながらも普段通りの一日を過ごした。
昨日の緊迫が嘘のように、平和な一日だった。
しかし、テレビのニュースは連日緊迫する情勢をひっきりなしに伝えている。
『本日開催された通常国会では、昨日の深夜より議論されている自衛隊の治安出動の承

認について話し合われました。与党側は治安出動を支持し、可及的速やかな解決を求める一方、野党側は治安出動に対し大変否定的な見方をし、ポケモンリーグに委ねるべきであるとの主張が多勢を占めております。ここで各党の立場の詳細について……』

昨日、ポケモンリーグが西部戦線で敗退したことにより、当初見送るとされていた自衛隊の出動について議論が俎上に上がったのである。

このままではエンジュのみならずアサギも危ないという事で、タンバシティが新たに避難民の受け入れを表明。アサギの海上には出動命令が出たためと称して海上自衛隊の護衛艦が曳航している有様である。噂ではエンジュ大学に照準をあわせているという。

治安出動は出動命令後国会の承認がなければならないがそれを巡って国会では連日連夜侃々諤々の議論が繰り返されている。ポケモンリーグに任せるべきという野党側と原則に戻って自衛隊に任せるべきという与党側が対立しているのだ。裏では与党側は五輪開催地に関わる選挙が9月に迫っているため速やかにこの反乱を鎮めないと心証が悪いと言う思惑もあるという。

とはいえ、平和を重んずる憲法を奉じているこの国においてはやはり武器を交えた軍事力を用いての制圧には及び腰であり、国民の中ではリーグの常日頃からの信頼もあってか出動反対が多勢を占めている。

「はぁ……こういうニュースは本当居心地が悪くなるな……」

レッドはそう呟きながらニュースを消す。

「私たちはそれだけ大きな責務を背負っているということですからね……。日々身が引き締まる思いですわ」

と言いながら、エリカは丸机の上に二人分の煎茶を置く。

「ああ……全くだ。それにしても早くこの戦争が終わってまた平和に旅したいよ……昨日みたいな死を覚悟した戦いは真平だ」

「ええ、全くですわ。この空のようなどんよりと鉛色ではなく、山笑う自然を早く味わいたいものですわね」

この日も空は曇っていた。

というより今日は昨日の爆弾によって巻き上げられた砂塵が上空に巻き上げられ、日光を遮ってしまっているのも一因である。

そうこうしているとまたエリカのポケギアが鳴り響く、またアカネのようだ。

エリカは小さく謝った後レッドに背を向けて通話する。

電話ととった彼女は簡単なあいさつを済ませる。

「ツクシさんと何か進展があったのですか？」

彼女はアカネにそう尋ねた。

「せやで！　昨日ウチらが第二軍としてロケット団と戦ってなー」
　アカネは長々と昨日の戦いについて多少の誇張も交えながら話した。
　これによってツクシとアカネの距離は以前同様までに縮まって関係が進展したことをアピールする。
「へぇ……それは良かったですわね。ある意味ではマチスさんが時の氏神のような役割を果たしたと言えるかもしれませんわね」
「嫌な氏神やけどな。まぁせやから昨日の事は水に流してやる事にしたんやで。いやーホンマ良かったわ。まさかここまで関係が直るとは思わんかったしな。せやけど……」
　アカネが急に口ごもる。
「どうされたのですか？」
「さっき、『この戦争が終わったら伝えたいことが……』って話したやろ？」
「ええ……。それはつまり、アカネさんがツクシさんに好意を持っているってことですわよね？　しかし、ツクシさんは既にそのことを知っているはずでは……？」
　エリカの疑問に対し、アカネは
「そこやねん問題は。ただ好き言うだけじゃもー意味がないねん。ここはウチがどんだけ本気なんか見せたらんといかんのね」
　アカネは困っている様子の声で言う。

「左様ですわね。何か一工夫欲しいところですね」
「ショージキあれ勢いというか流されて言うた部分が多くてな……何も考えてないねん。どうすりゃええと思う?」
「そうですわね……」
本当の事を言えば、エリカ自身もレッドに対し類似の事を言っているのである。
そしてエリカもアカネと同様具体的に何をするか決めている訳ではない。二人とも同じフィールドに立っているということである。
しかし、エリカは年齢的にいえばアカネより先輩である。意地でもその事を告白する気にはなれない様子である。
彼女は数分ほど考えた後、切り出す。
「例えば普段しないことをされては如何でしょうか?」
「ほー。そりゃええね。新鮮味を感じられて、うん。ええかもしれんな。で、例えば?」
アカネはメモを取っているのか向こうからカサカサと音が聞こえる。
「手料理を振る舞うと言うのは如何でしょう?」
「手料理かぁ……そういや作ってやったことないな」
「丁度いいではないですか! 料理のご経験はどのくらいですか?」
「まぁウチも女の子やからね。それなりに自炊したりしとるし、テレビで料理番組出る

こともちょいちょいあるしで人並み……いやそれ以上にあるかもしれんね」
　アカネは少々自信ありげに鼻を鳴らす。
「まぁ、それは素晴らしいですわね。因みに得意料理はなんですの？」
「和洋中だいたい作れるけど、せやね……一番の自信はやっぱお好み焼きかねぇ」
　エリカは少しだけ聞いたことを後悔したような表情になる。
「そ、その他には？」
「他？　他はまぁ茶碗蒸しとか唐揚げ……あとは肉じゃが、鮭の西京焼き、パエリア……こんなとこかね」
　それを聞いてエリカはホッとした表情になって尋ねる。
「分かりましたわ。宜しければ私なりのレシピをお教えしますけど……」
「あ、そういやエリカも料理得意やったっけ。頼むわ！」
「はい。お作りになる料理が決まりましたらまた連絡してください。お母様、お祖母様直伝のレシピをＦＡＸでお送りしますわ」
「おお。本格的そうやね！　じゃあじっくり考えとくわ。で、他にはどんな感じにすればいいかね？」
「左様ですわね……」
　アカネが乗ってきたため気をよくしたエリカは次の提案を考える。

「具体的にはどのような感じにしたいのです？」
「せやから、ツクシのハートをガシっとつかめる感じにしたいねん」
「でしたら……、食事の後、お茶でも飲みながらお互いリラックスして……その後思い切ったように切り出すというのは？」
　アカネはその提案に対し
「なるほどな……。確かにその方がツクシもしっかりと考えてくれるかもしれん……でもな、正直あんな事しても受け入れて貰えんかったのに似たような事で受け入れてくれるんかな……」
　と自信なさげに答える。
「大丈夫ですわ。今は死線をくぐりぬけた仲ですもの。きっとツクシさんだって無下には……」
「うーん……」
　アカネはやはり恋愛には晩生な様子である。
「アカネさんほどの愛嬌ならばきっと今こそ通じると思いますわよ。最後は愛嬌ですわ。アカネさんには他の女性よりも抜きんでたそれがあると思っていますけれど……」
　アカネはそう言われると一分程黙した後
「エリカにそうまで言われたら自信湧いてきたわ！　ありがとな。頑張ってみるわ」

「はい。アカネさんは私の大事なお友達ですもの。心より応援しますわ」
「へへ……。うん。ホンマありがとな」
その後アカネは自宅のＦＡＸの番号を言って通話を切る。
そしてエリカ自身も昨日自らが言った事を如何に実行するかじっくりと考えていた。
―５月２日　午後７時　ポケモンセンター　会議室―
ワタルが再び第一軍の中で召集をかけた。
「本日。わが軍に所属するナツメ君と第二軍配属のキョウさんの共同でエンジュの内情を調べてきてもらった。詳細はこの紙のとおりだ」
列席する各人の前には５ページほどにまとめられたエンジュシティの現況が書かれていた。
今日になって内偵に向かわせた理由は初期に比べて軍勢が大幅に減り、捕まるリスクが減少したと踏んだからである。とワタルは別途説明し、調査報告の要旨を述べる。
「現在エンジュシティには１０万５４３３名の人質が捕まっており、１万４３２２名の解放が昨日決定し、明日引き渡される予定。そして、ロケット団員の数は２万３４００名。指揮下にあるポケモンは格納中のものを含め５万７６５５匹とのことだ。尚エンジュシティ内の損害だが、建物自体を壊したと言う積極的な行動が見られなかったせいか屋根の一部がめくれただとか。排水管が歪んだだとかそのくらいの軽微な被害が多

少あるだけだそうだ。後は各自でよく読んでおくように」

ワタルはこれを言い終わると、水を少しだけ飲んで続ける。

「それで、これを受けての今後の方針だが、人質が全員解放されるまでは一切動かないつもりだ。敵軍は予想よりも多く、この状態で侵攻を行えば被害は甚大であり、人質にまで被害が及ぶ可能性が高い。その為、苦渋の決断ではあるが人質の解放が行われるまで我々は一切動かない」

この発言を聞き、エリカが反駁する。

「お待ちください。一切動かないと仰せになられましたが、今国会で自衛隊介入についての話し合いが行われているという話は聞き及んでいますわよね？　今は世論の同調などで介入しない意見が多勢を占めているようですがあまり長期的にこれを行えば変わる可能性があるのでは……」

「こちらとしても自衛隊の介入は意地でも行わせないつもりだ。共同作戦を提案されても突っぱねるつもりでいる。ポケモンに関する一切かっさいは我々に任せるというのが国の指針であり、リーグ法にも明記されている。それを根底から否定するような真似はポケモンリーグとしても私自身としても絶対に許さない。でも確かにエリカ君の言うとおり、あまりに長引けばそうもいかなくなるだろう。だけれど、私としてはこれは短期決戦で終わらせたいと」

ワタルが言い終わる前にエリカが尋ねる。
「では、その具体的なプランはできているのですか？　出来ているのならば今この場で私たちの前で発表してください」
「勿論できている。では、話そう」
まず、ロケット団との休戦協定をひたすら一日ずつ引き延ばす代わりに1万～2万人ずつの解放を要求する。
5日間で人質の全解放を実現し、今から6日後にエンジュの外におびき寄せて前日のような戦いを行う。
敵が消耗しきったところでエンジュに突入し、少ない損害でロケット団を屈服させるという計画だった。
「なるほど……しかし敵があくまでエンジュでの籠城を行った場合はどうするのです？」
「いや、ここはマツバ君に協力してもらうつもりだ。マツバ君の持つゴーストタイプは幻術に優れており、敵をおびき寄せる程度の術は心得ているだろう。それを利用して我々は一気に叩くんだ」
「もしマツバさんが解放されない場合は……？」
「それはないさ。敵は一日も多く時間を欲しがっている。何故ならこの国を征服する為

に一匹でも多くの戦力を手にしたいだろうからね……」

その後、諸連絡事項を話して会議は終わった。

ワタルの作戦は非常に上手く行った。

5月4日までにすべての人質の解放が決定され、5日には全員が実際に解放された。

但し、マツバの引き渡しだけは頑として認めず5日の夕方の壇上会議までこの件は持ち越される。

ちなみに5月2日以降の会談は全て机上で行われている。

―5月5日　午後5時　42番道路　エンジュシティ側ゲート―

「理事長さん。それだけは認められません。マツバの解放だけは絶対に承服するなとサカキ様より命が下っているのです」

アポロは申し訳なさそうな様子で答える。

「我々からすればマツバ君はかけがえのない大事な人材なんだ！　どうにか説得してくれないだろうか？」

「それは無理というものです。マツバは我々が侵攻した時、防衛の旗頭に立って我々に楯突いた人物です。この者をあなた方の要求に従って解放したとあっては団員たちに示しがつかないのです。分かって頂けないでしょうかね」

「じ……じゃあ分かった、一日とはいわない、一週間休戦協定を結ぼう！　これならどうだい？」

　ワタルはギリギリのところまで譲歩して頼み込む。

「理事長さん……。もうそれはいいんですよ。時間はもう十分に稼がしてもらいましたから」

　アポロは残忍な笑顔を浮かべながらそう言った。

「グッ……まさか……」

「悪いことをするにも知恵というものが必要でしてね……。理事長さん。貴方如き成り上がりの低学歴の考えることなんて私からすれば全てお見通しなんですよ」

「き……貴様ァ！」

　ワタルは怒りのあまりカイリューの入ったモンスターボールを出そうとした。

「おっと。我々は二度もそれを食らいはしませんよ。私に指一本でも危害を加えれば背後にいる２０万をこえる獰猛な改造ポケモンたちが黙っていませんよ……？　それでもいいんですか？」

「クッ……！」

　ワタルは地団駄を踏みながらモンスターボールを収める。

「まぁしかしこれではあまりにも可哀想なので一つだけ救いの道をさしのべてあげま

しょう。これに乗るならばマツバさんの解放を承諾いたします」

ワタルはアポロの顔をキッと見る。

「当初の通り、ポケモンリーグの全面的な解散。ただ一つですよ。但し我々もだらだらやるのはもう御免です。これには期限を設けさせていただきます。そうですね……明日中というのは如何でしょう?」

「ふ……ふざけるのも大概にしろ!! 誰がそんな条件を」

「呑まないと言うのであれば……交渉は決裂。マツバは我々の手で処刑します。宜しいですね?」

とだけ言うとアポロは涼しい顔をして引き上げていった。

ワタルは自分以外だれもいなくなった机を何度となく叩き続け、机に伏す。

この壇上会議は全国のマスメディアが映しているためこの模様は瞬く間に世界中に流れていく。

それからおよそ31時間、リーグで、街中で、国会で様々な議論が巻き起こった。

政府はワタルに対し、早期の解決が行わなければ強行採決を行ってでも治安出動を行うと脅しをかけ、避難民のエンジュ市民からは嘆願書が届き、それには「早く家に帰りたい」という思いが人々の思いに強く去来していた。

マツバの救出もどうにか行おうと尽力したがナツメの超能力は敵によって妨害されているため使えないずキョウやアンズの忍術をもってしても厳重な警備故に救出は不可能だった。

そして、運命の5月7日。ワタルは最後まで解散を口にせずタイムリミットを迎えたのだった。

―5月7日　午後2時　チョウジタウン　ポケモンセンター―

ポケモンセンターの広間テレビの前には多くの人がごったがえしていた。

テレビでは治安出動に向けての承認を行うか否か、ヤマブキシティにある国会議事堂の衆議院本会議場で投票が行われていた。

そして、投票が行われ、開票。そして衆議院議長の口から結果が公表される。

「賛成　２３１票。反対　２４９票。よって不承認と致します」

これを受けて様々な感想があがったが、どちらかといえば安堵の声の方が大きかった。

出動命令が出ていたとはいえ、武力行使をしていない段階で不承認決議が出たため、リーグに全面的に依拠するということになったからである。

しかし、これによってリーグの責任がより重くなったことは言うまでもない。

―同日　午後4時　チョウジタウン　ポケモンセンター　２０１号室―

ワタルは匿名でサイトつきのメールが来ていた為、すぐさまパソコンを立ち上げてそのサイトを開けた。

すると、なんとマツバがギロチンの下に伏せれているではないか。

「ポケモンリーグは我々の再三再四の要求に関わらず、リーグの解散を行わず我々に反抗し続けた！　これに対しサカキ様は大変にお怒りである！　その為我々はこれよりこのリーグの先兵の処断を執り行う！　良いか！　我々はもう容赦しない、つぎにこれで首を刎ねられるのはポケモンリーグに所属する諸君！　そしてワタル！　お前自身だ！」

この宣告の後、ギロチンの刃が落とされ――どうなったかは書くまでもないだろう。

ワタルはこれを見て怒りよりも先に絶望が襲い、放心状態となった。

この動画の再生は1億回を越え、様々な論議の的となったが、「ロケット団許さじ！即刻討伐すべし！」という論調は概ね一致していた。

そして、午後6時、ワタルは二回目の出動命令を布告。

エンジュシティが応仁以来の戦禍にまきこまれる事はもはや避けられなくなってしまったのだった――

―第十二話（上）　列島騒乱　終―

第十二話（中）　古都炎上

―5月7日　午後4時―

ジョウト、否、世界中が怒りに打ち震えた。

ロケット団がエンジュシティジムリーダーであるマツバを殺害し、あまつさえ動画サイトに一部始終を流したのだ。

これは瞬く間に各所で大きく取り上げられ、多くの人の耳朶に触れることとなった。

マツバのエンジュ攻防戦時の雄姿はエンジュから避難してきた人々によって既に多くが知るところとなっており、そんな英雄を無残に殺すとは何事であるかと避難民を中心にロケット団に対して凄まじいバッシングが浴びせられた。

これは戦争に携わっているリーグやそのバックに控えている政府にも飛び火し、『攻撃を行わないリーグは生温い！　警察も機動隊も役に立たないならすぐさま自衛隊を以て殲滅すべきだ！』という意見が沸々と出始め、エンジュ近隣の街やヤマブキシティは暴動寸前の有様となっていた。たった二時間前は治安出動不承認にホッとしていた筈なのにである。

理事長のワタルはできる限り犠牲の少ない解決を念頭において考えていたが、こう

なっては止む無しと動画公開から二時間後の午後六時に総員出動を司令。

文化財の集まるエンジュが火の海になることを恐れた有識者も数多くいたが、怒髪天を衝いていた民衆にそれを考慮させるのは最早不可能である。

応仁の乱ならぬ〝平成〟の乱は今やそこまで迫っていた。

―同日　午後6時30分　42番道路　エンジュ方ゲート付近―

総司令官のワタルの下へ憤然としながら向かう一人の女性がいた。

エリカである。歴史や文化を愛する彼女にとって古都であるエンジュシティが火の海になりかねないというのは居ても立っても居られない一大事なのだ。

彼女はワタルのいる大テントのもとへつくと、机を叩いて怒りを爆発させた。

「ワタルさん！　これは一体どういうことなのですか！」

ワタルはエリカの怒気に少々気圧され、数秒おいて答える。

「エリカ君。君の怒りは尤もだよ。僕だってジョウトの人間だし、エンジュシティが如何に大事な都市なのかは君ほどでないにしてもよくわかっているつもりだ」

「でしたら、どうしてこのような命を出されるのですか！　確かに、ロケット団がマツバさんを処刑という名目で殺めたことは言語道断の悪行ですわ。それにエンジュで助けられた方やエンジュに住まわれている方などが憤慨し、ロケット団の壊滅を強く願うことも重々承知ですし、私とて同じ気持ちです。しかし、それとこの国随一の至宝が集い、

古都たるエンジュを灰燼に帰すとでは話が別ですわ！」

まるでエリカはエンジュが火の海になることが確定事項のように述べているがそれは当然のことである。

ロケット団の持っている改造ポケモンの中には炎ポケモンもおおくおり、反撃で炎技を使用してそれが燃え移れば一大事である。一回目の攻撃の際エンジュに突入したとき無事だったのは、市中奥深くまで入れなかったからこその奇跡なのだ。

また仮にロケット団が炎技を使わなかったとしても、証拠を残さないため、もしくはヤケクソになってエンジュ市街に火をつけることも十分に考えられる。当初の構想にあった誘き出し作戦では最終的にエンジュに入っているがあれはあくまで敵が消耗しきった後で行う見当で想定されているため、損害はごく軽微ですむと思われていた。

彼女自身もそのくらいならばやむを得ないと目を瞑ったのだろうが、今回は敵の多くがエンジュに籠城したままでの総攻撃である。エンジュの街がただで済むはずがない。

「エリカ君……どうか分かってくれよ。我がリーグの面目を保つ為にはもうこれしか方法がないんだ。世間は昼までと打って変わってロケット団の徹底的な壊滅を願っているのだから」

「我々はいつからそのような機関になったのですか！　世間はどうであれ、リーグはリーグで超然を貫くのが本義というものでしょう！　民衆のご機嫌取りに伺うのがポ

ケモンリーグとでも仰せになるのですか？」

　ワタルは立ち上がって、エリカに背を向ける。

「エリカ君。それは綺麗事というものさ。僕らの機関は寄付など１００％民間からの助けで成り立っている。勿論、君含めジムリーダーの副収入の一部も内訳には入っているが、申し訳ないがそれだけではとてもやってはいけない」

「お金が不足というのであれば当家がいくらでも都合してさしあげ……」

　彼女が自らの財力を持ち出したところでワタルは遮る。

「それは嬉しいが、それだけの問題じゃないんだ。僕らの存在意義はトレーナーたちが自身の向上のためにポケモンを育て、その証たるリーグバッジを取っていき、将来へと活かす為にある。まぁ勿論他にもあるけれどこれが大きな柱といっていい」

「何がおっしゃりたいのですか？」

「そのトレーナーたちが君や僕たちに挑んできてくれるのは、僕らを〝強い〟存在。もしくは〝超えるべき壁〟と認識してくれるからこそ。それなのにここで何も動かずに、最悪、自衛隊が動いてごらんよ？　子どもたちはなんて思う？」

　エリカはその言葉にハッとさせられたような表情になる。

「答えはいろいろあるだろうけど少なくとも僕らを挑むべき強い相手とは思ってくれなくなるだろう。それを言い出したらこの前の三軍の敗北なんて最悪な事だけどあれは

マスコミが上手くシジマさんの脱出劇を脚色してくれたからあまり責められずに済んでるけどね……」

「確かに……そうですわね」

「それ以外にも僕が昨日交渉に失敗したりで失態を重ねているけど、あれはまだロケット団が悪い組織だという前提があるからこそそれを戦っている僕らに分というか、正義という形で誹りをどうにか逃れているんだ。しかしこれがリーグではなく政府の手に渡ったらそうはいかない」

今日の昼、治安出動が不承認になったとはいえまたいつ同様の決議がおこるのか分からない。そして次決議が行われれば承認が下って自衛隊が介入する蓋然性は非常に高いと言わざるを得ない。

今回ワタルがエンジュを攻撃する意思を表明したことによって治安出動及びそれに関する決議はひとまず先送りにされたが、あと少し彼の行動が遅れていれば採決が再び行われていた可能性すらある。

彼女自身そのことはよく理解していた。少し黙した後にこう尋ねる。

「ワタルさん。今回のエンジュ攻めによって文化財すべてが焼損するという事態になったらどうなさるおつもりですか？　失われた歴史は二度と戻ってはこないのですよ？」

「そうなって責任が追及されたら僕のクビ一つで済ませるさ。君たちに火の粉が降りか

かるような立ち居振る舞いはしないよ」

ワタルは自らのクビに手をあててみせる。

「それで済むとはとても思えないのですが……」

「心配無用。大義はこっちにあるんだ。この地にいるロケット団さえ叩き潰せれば問題はあるまいよ。ま、次の理事長選挙じゃ敗戦確実だろうけどね」

ワタルは力なさげに高笑いしてみせる。

「そこまでのお覚悟があるのでしたらもう何も申し上げることはありませんわ。それでは、失礼いたしました」

彼女は深々と頭をさげてこの場を後にした。

作戦の概要は第二軍合同ということになっているため翌日に回されている。

ワタルはエリカが立ち去った後、緊張の糸が切れたのか否かどっかりと椅子に座る。

「ハァ……。怖かった……。それでも怒っている彼女も可愛かったなぁ……」

などと呟きながらワタルは机に伏して仮眠をとった。彼は昨日から一切寝ていない。

―レッドとエリカのテント―

「お帰り。どこ行ってんだ」

彼女はつくや否やすぐさまワタルの元まで飛んで行っていた。

レッドは手持ちの世話をしている。

「ええ、あまりにも浅慮な判断だと思いましたから直談判を……」
「お前あんとき滅茶苦茶ショックうけてたもんな……」
エンジュ攻撃に伴う動員の電話がかかってきた際、彼女は強く衝撃を受けてその場にへたりこんだほどである。
４２番道路について漸く活力を取り戻し、怒りとなって飛び込んでいった次第だ。
「ワタルさんもそれなりにお考えがあっての行動という事は分かりましたが、それでもやはり心情としてはやりきれませんわ……」
彼女自身エンジュへの攻撃の正当性は理解こそしているのだろうが、やはり胸中で燻る物があるのだろう。不興顔である。
「難しいことはよくわからないけど……。とにかくこうなった以上、俺らがやれることはできる限り民家や建物が壊れたり、傷ついたりしないように出来るだけのフォローをすることじゃないか？」
「そうですわね……。一度下った命に逆らうことは出来なくとも、最悪の結果を招かないよう尽力することは出来ますしね」
エリカはそういって少しだけ立ち直った。
しかし、何にしても戦乱のさなか、自分の身も危ないというのに一体どこまで気を配れるのか、そこが不安なレッドであった。

その後、二人は明日のために早めに床へつく。

―午後9時―

仮眠をとっているワタルのもとへ一本の電話が入った。

眠い目をこすりながらワタルはポケギアを取り出す。

電話の向こうにいるのはリーグ委員である。

「あの……。ヤマブキの官房長官公邸よりお電話が入っております」

委員は緊張のあまりか震えた声で言う。

「え!?　一体どういうことだろう……。分かった。とにかく回して」

これまで政府からの勧告はすべて文書であり、政府高官、それも総理大臣に次ぐ地位をもつといって過言ではない官房長官から電話がかかるなど前代未聞のことである。

ワタルは襟を正して相手が話すのを待った。

「もしもし……貴方が、ポケモンリーグの理事長ですか?」

相手は存外丁寧な様子でワタルと話した。

エリートらしく細く、しかししっかりとした調子の声である。

話の内容はやはり翌日よりはじまるエンジュ総攻撃に関してのことであった。

「我々政府としてもこの事態は可及的速やかに処理し、エンジュシティそのものの復興へつなげていきたいのです」

「それは勿論の事です。ですから出来る限り短期間でロケット団を制圧し、エンジュを解放したいと考えております」
「それは結構なことですが……。我々にはあまり時間がないのです。反乱に時間をかけすぎれば、国民のみならず国際的な非難を浴びるのは必定です。そしてそれは我々だけでなくあなた方リーグも同様でしょう」
「えぇ……」
「それで先ほど総理や大臣ともお話をしたのですがね……。明日中にエンジュを解放できなければ、9日に決議に基づいて自衛隊の強制介入を行うこととしました」
「そ……そんな乱暴な！　エンジュシティは大事な国宝がたくさんあるのですよ!?　ジムリーダーのエリカも先ほどその件で直談判に来たくらいで……」
「エリカ……さんですか。同学年だった私の孫からも聞きましたよ。大変な別嬪で、怜悧なお方であったとね……。なるほどそんな彼女ならばそのくらいのことは仰せになるでしょうねぇ」
「話をそらさないでください！　と、とにかく明日中に陥落するというのは不可能とはいいませんけれどね、それにはエンジュ市街に甚大な被害が……」
「理事長さん。国民はエンジュの街並みがどうこうよりもロケット団の一日でも早い一掃を願っています。確かにエンジュに残る国宝や文化財は何物にも代えがたい価値を

もっています。しかし、それに気をとられて市民の帰還を先延ばしにするのは如何なものでしょう?」
「もしエンジュが焼失すればその帰る場所もなくなってしまうんですよ?」
「そうなった場合のフォローは我々が行います。とにかく、文化財や景観の保護よりも、可及的速やかなロケット団の殲滅を願いますよ。さもなくば我々もリーグに対して何らかの処置をとらねばなりません」
「処置……?」
「私が伝えることは以上です。では、おやすみなさい。リーグの皆さんの健闘を祈ります」
そして官房長官の電話は切れた。
ワタルは強く膝を掴みながら、目をいからせていた。
―5月8日　午前7時　同所　大テント―
ワタルは大テントの中においておそらく最後となるであろう作戦を話した。
「我々第一軍は西側から突入し、ロケット団の軍勢を突破しながらエンジュ市街を囲むように市街から見て東側と北側を取り囲む。第二軍は西側と南側を包囲するという風に先ほど合意した」
ワタルはエンジュシティ全体の地図を二色のペンで用いながら一番外側にある道を

ぐるりと囲む。
「包囲が完了したら、相当な抵抗が予想されるが、少しずつ少しずつ前へ前へ詰めていく。第二軍はエンジュ大学を、我々第一軍はロケット団の司令塔となっている市役所を目標にジリジリと」
　ワタルは二本の矢印を用いて各軍の目標まで矢印を書き込む。
「あの、第三軍のほうはどうなっているんですか？」
　タケシが尋ねた。
「第三軍はおそらく西方攻略部隊との戦いであまりこちらに来る余裕はないだろう。もし余裕があればエンジュまで来るように伝えてはいるが、あまり期待しないほうがいい」
「了解しました」
「大学と市役所、それぞれに敵の首領格がいるだろうから見つけ次第捕縛し、すぐさま道路で待機している警察まで引き渡すように。そしてそこまで完了したらその旨を布告して団員に降伏を促す。それでも抵抗するようなら容赦は必要ない。戦闘行為が終息したら解放宣言を出し、エンジュのポケモンセンターにおいて総動員令を解く。……とまあ口で説明すれば簡単に思えるかもしれないが実際はかなりの犠牲を覚悟しなければならない戦いになるだろう。敵も必死なのだということも忘れずに、総員の健闘を祈

る。尚、エンジュシティは大変に文化的価値の高い街のため家屋や建物に被害を及ぼさぬよう慎重に事を進めるように」

ワタルはそういって作戦会議を終了した。

街並みに対する配慮に言及したためエリカは少しだけ安堵する。

―午前7時30分　同所―

第二軍から準備が完了した報告が入り、ワタルは整列を命じ、突撃の準備を整える。

レッドとワタルが先鋒に立ち、他は先鋒の支援や全体の後方支援に回った。

「よし、行くぞっ！　エンジュに一片たりともロケット団の痕跡を残すなっ！」

ワタルの号令で市街への突入が開始された。

それとほぼ同時に第二軍も突撃し、ロケット団はあっという間に二正面作戦を強いられた。

―午前7時40分　エンジュシティ　エンジュ大学　学長室―

突撃を開始してから10分。

ワタルの予想通り作戦は難航。少しずつ削れてはいるが互角という表現以上の仕方は不可能である。

「ホッホッホッ……始めおったか」

「今頃リーグの連中は不思議がってるだろうな……。この前よりも明らかに強いことに

な」

　第一次、第二次攻勢の時に用いたポケモンは進化系と非進化系の割合が1：2であった。しかし、今回の防衛に用いているポケモンは進化系と非進化系の割合が3：1の割合に増えていた。特に進化系の割合の中でも第一進化系よりも第二進化系のほうが多く割合を占めていた。

「うむ……。ワシらのねらいに気づかぬとは理事長とやらも大したことはないのう……さて、ワシはそろそろ行くとしようかの」

「何処へ行くんだ」

「なに、ちと野暮用での」

　と言ってオーキドは去っていく。

「全く相も変わらず読めない御仁だ……。さて」

　サカキは自身のポケギアを用いて電話をかける。

「私だ……。うむ、手はず通りにな」

　―午前10時　スズの塔　関所前―

　少しずつとはいえ、包囲網は完成しつつあった。

　スズの塔の関所周辺を攻略したとき、陣頭指揮を揮うワタルに一人話しかける者がいた。

「誰だ！　この忙しいときに……」

ワタルは少々苛立った口調で言いながら振り返る。

「おおこれは威勢の宜しい……」

「ハ……あの、御坊様方は……？」

ワタルは目をしばたたかせながら袈裟を着た僧侶たちを見る。

後ろには百人ばかりが続いて揃っている。どうやらスズの塔に仕える僧侶のようだ。

「拙僧も微力ながら加勢いたしますぞ。これでも最初の戦の時は一歩たりとも寺内には立ち入らせませなんだ」

「い、いえいいですよ！　気持ちは痛み入るほどありがたいですがこれは我々の為すべき仕事です」

ワタルは丁重に断ったが、住職とみえる髭をたくわえたその僧侶はしゃがれながらも威厳のある声で答える。

「我々とて道理に悖る悪党がこの街において跋扈するのをこれ以上見ておられぬのです。今日まで臥薪嘗胆の心持でこうして機会を伺っておりましたが、こうしてあなた方リーグが来ていただいた以上我々もエンジュに住まうものとして黙ってみているのは如何なものかと思いましてな」

「しかし……」

「これはマツバ殿が一番苦境に立たされているときに助けてあげられなんだ時のせめてもの罪滅ぼしなのです！　理事長殿。どうか、加勢をお許しくださいませぬか」

住職に続いて僧侶たちは丸い頭を深々と下げて頼み込んだ。

根負けしたワタルはふうと溜息をついて

「わかりました。エンジュの解放を心より願うものとして共に戦いましょう。但し、あまり無茶はしないでくださいよ」

こうしてエンジュの僧侶たちも戦線に参加することとなった。僧侶たちは主に回復や後方支援を担当し、彼らの参戦によって持久力が大幅に増え戦況は時を経るごとにリーグ有利に傾いていった。

後に塔に避難していたエンジュ市民たちもモンスターボールを持って義勇軍として支援を願い出たがこれはワタルは丁重に断る。

―午後2時　同所―

ワタルはあれからスズの塔関所前を本陣として指揮をとっていた。

漸く完全な包囲が完了し、これより本格的な追い込みを開始しようとしていたとき第三軍司令官のシジマがやってきた。

「理事長殿！　加勢にやってまいりましたぞ！」

シジマは采配を持ち、甲冑姿でワタルに話しかけた。

「わっ！　シジマさんなんですかその格好……」

　ワタルはその姿を見て目を丸くして言う。

「ワハハハハ！　戦と聞いたらやはり気分を盛り上げねばやってられぬわ！　理事長殿もどうだ。もう一領あるぞ？」

　シジマは闊達に笑いながら勧める。

「いや結構です。私にはドラゴン使いの鎧といえるこの服装をもってますから……。それはそうと、よく加勢に来ることができましたね」

　ワタルからしたらシジマは年上であることは勿論。自身のジムリーダー時代を知っている数少ない先輩のため敬語で接している。キョウやヤナギ、カツラなども同様である。

「おう。なんだか一時間前から急に敵が撤退し始めてな！　罠かとも思ったんだがどうもそんな気配はないし進んでいったらこの様よ」

「そ……そうですか。なんとも面妖な話ですね……」

「うむ……。まぁともかくワシらは遊撃隊として第一軍と第二軍のフォローに周ろうかと考えているがどうだ？」

「そうですね。我々も第二軍も特に急を要する救援の話は来てないですし……。とにかく助かります！　これならば今日中にもエンジュは解放できるでしょう」

「ハハハ！　任せておけ、先日の窮地に比べればこの程度赤子の手を捻るものよ！」
シジマは高笑いをし、金具の音を立てながらワタルのもとを去って行った。
こうして、エンジュ解放戦はリーグ側の圧勝のまま終わると思われていた。

――――――

追い込みの開始から1時間。
エンジュ市街への突入は遅々として進まない。
少しずつ進んでこそいるが、敵側も相当なやり手であり、碁盤の目を利用した小規模包囲や家屋からの奇襲などゲリラ戦術を駆使して思ったように上手くいかないのだ。
そして、午後3時。事件は起こった。
―午後3時　エンジュシティ　某所―
「エンジュが……エンジュが燃えているぞ!!」
あろうことか中心部に火が放たれたのだ。
恐れていた事態が遂に起こってしまった。これに焦った各ジムリーダーや四天王たちは本格的な強襲を開始、家屋の破壊も目立つようになっていった。
しかし、この時点ではまだそこまで被害は大きくない。
―午後3時30分―
強襲を開始してからいよいよ戦いは乱戦の体を為していた。

互いのポケモンたちは丁々発止の戦いをつづけ、倒したり倒れたりを永遠と思えるほどにやり続けた。

最初の戦い以上に惨憺たる有様になりつつあったのだ。

そんな最中、レッドとエリカは戦っていた。本来は先鋒と後方支援なので別々のはずであるがこのような有様になってしまったため最早最初に決めた配置など関係がなくなってしまった。

ここはワタルが指揮すべきところではあったが、ワタル自身も早期の終結を願っていたため関所前で指揮をとるのではなく自らも戦いに参加。一応最低限の包囲戦術は守るようとの厳命は下しているが最早自身のことで手いっぱいの為放置気味であった。

「ロズレイト！　ルンパッパ！　ワタッコ！　ソーラービームです！」

三本の眩い光線が目前にいる岩ポケモンたちに襲い掛かる。

もちろんこの一撃で２０体ほど倒れたが、イワークがエリカのいる方向に倒れ掛かってきた。

このイワークはロケット団もといオーキドによる改造の成果か、本来の二倍以上にあたる２０ｍの長さの体をもっていた。

断末魔をあげながら倒れこんでくるイワーク。普段の彼女ならすぐに避けられたであろうが、朝からずっと立ちっぱなしの上に声を出し続けて疲れているせいか少々動き

が鈍かった。
「エリカっ！」
隣にいたレッドが気付いたころにはもう遅く、影は彼女を包んでいる。
彼女は咄嗟に横へ避けたが、間に合わず左足がイワークの巨石の餌食となった。
倒れた瞬間は砂埃が舞い彼女の姿が見えなくなる。
レッドはすぐさまエリカのもとに駆け寄った。
「おい！　しっかりしろ！」
彼は彼女の両脇を抱えながらどうにか引きずり出そうとする。
ポケモンたちはレッドの指示がなくても自分なりに動いていた。
「貴方……私は大丈夫です……。指揮に戻ってください」
彼女は痛みを押し殺してレッドに言う。
「大丈夫なわけあるかっ！　お前を放っていけるかよ！　ふんぬぁぁぁぁ！」
レッドは自身の膂力を発揮してどうにか彼女を引っ張り出せた。
足袋をみると真っ赤である。どうやら膝より前に出ている足の部分が潰れてしまったようだ。
「こ……こりゃ酷え！　すぐに病院へ行かないと……」
エンジュのすぐ外には傷病人の看護の為野戦病院というべき簡易の医療施設が設け

られている。ポケモンセンターと厚労省が主体となり近隣の医者をかき集めて用意した急場の病院である。

　また、戦闘には参与しない前提で衛生科配属の自衛隊員が巡回しており怪我人がいないか常に巡回している。

「貴方。医務の方が……じきにここへ来られるはずです。ですから……私のことは」

「レッド君！　君は何をしているんだ！」

　近くで戦っていたワタルがレッドを物凄い剣幕で見咎めた。

「何って、エリカを外の野戦病院まで連れていこうかと……」

「何を言っているんだ！　ここには直に衛生兵がやってくる！　君は君自身のやるべきことをしなければダメじゃないか！」

「それはそうですけど、エリカがこうして倒れているのをほっとけというんですか！」

　ワタルはエリカを一瞥して、一度目をそらし、強く瞑ったのち絞り出したような声で返す。

「そうだよ！　いいかいレッド君！　これは戦争なんだ！　ポケモンを指揮する君がいなくなってはやがて統制を失っていかに精強な君の手持ちも……」

「じゃあワタルさんに指揮を頼みますっ！　かわりにどうかお願いしますね！」

　そういってレッドは出しているポケモンのモンスターボールを渡し、脱兎の勢いでそ

の場を走り去る。
「あ！　おいっ！　はぁ……。仕方のない子だなぁ……」
ワタルは観念した風にレッドとエリカの手持ちたちの指揮を引き継ぐ。
―午後３時４０分　エンジュシティ　南方―
第三軍配属のミカンはあまり先頭にでたがらないため後方でポケモンたちの指揮をとっていた。
エリカ同様、疲れが顔に出始めたその頃、遠目にエリカをおぶって走り抜けていくレッドを見た。
「あれ……レッドさん？」
ミカンは思わず、レッドを見ていた。
―同じころ―
レッドはエリカをおぶって野戦病院へと走っていた。
「貴方……」
レッドにおぶられている彼女は申し訳なさそうな声で話す。
「なんだよエリカ。病院ならもうすぐだぞ」
「指揮を放棄してまで、私を病院に連れてくださるのは本当にありがたいですが……本当に宜しいのですか？」

「いい、いいんだ。お前の事が気にかかったままだと戦いに集中できないしな。それに……」

「それに？」

レッドは少しずつ目深に帽子を被って、

「ほ、他でもないお前の体……俺以外におぶってもらいたくないんだよ」

彼女はそれに何も答えなかった。代わりに彼は自身の首筋が少しだけ暖まったように感じる。

すると、その刹那。二人の前に白衣を着た一人の老人が立ち塞がった。

「ホッホッホ……仲睦まじいのう……。レッド君」

聞き覚えのある声、レッドは立ち止まってまじまじと顔を見る。

「オーキド博士……！」

レッドは戦地にいる博士を見て漸く心の底からすべての首謀はオーキドだったんだと深く自覚した。

「うん。久しぶりじゃのう。少しばかり大きくなったかの？」

そのように話しかけてくるさまは、最初に草むらに入った時に注意された時。最初にポケモンをもらった頃、優しく声をかけてくれた一人の優しかった博士と何も変わりはないようにレッドは錯覚に陥りそうになる。

しかし、すぐに切り替えて、歯を食いしばったのちにいう。
「博士。そこをどいてください」
「つれないことを言うのう。せっかく久しぶりに会ったんじゃ、ゆっくりと話そうではないか」
レッドはいつもの調子でにこやかに接する恩師が不気味でならなかった。
しばし沈黙が続き、オーキドが口を開く。
「やはり、これではいかぬか……の」
オーキドは俯きながら言う。
「失礼します」
レッドは帽子を深く被って、オーキドの横を通り過ぎようとした。
「うらやましいのう」
オーキドは恨みったらしさが十分に伝わる声で言う。
レッドはこのままでは先に進めないと察し、立ち止まる。
「博士だって、昔奥さんがいたらしいじゃないですか」
「誰から聞いたのじゃ」
オーキドは先ほどまでとはまるで違う重々しい声で言う。
「母さんからです」

「フン……井戸端会議とやらもバカに出来ぬものよの」
「認めるのですか」
「認めるもなにも……それが原因じゃからの」
レッドはそれを聞いて思わず振り返った。
「どういうことですか」
「ワシも若い頃色々あっての……。妻とは死別したのじゃよ。いや、正確には死んだも同然の状態なのじゃが……」
「もっとかいつまんでお願いできますか」
「察しが悪いのう……そこのエリカ女史じゃよ」
レッドはそれを聞いて少々仰け反る。
「はい？」
「初めてエリカ女史をタマムシ大学の入学式で見かけたときはそれはもうビックリしたわい。本気で妻が若返ったのではないかとおもったからのう。それと共に年甲斐もなく好きになってしまったのじゃよ。当人をの」
「な……何を仰っているのか……」
レッドは信じられないことを次々と告げられて数歩ほど引き、当惑を通り越して愕然としている。エリカ当人はどうかといえば一応は冷静に聞いているようだ。心中がど

うであったかはここで書くまでもないだろう。
「レッド君よ。そんなワシがどうして君の恋路を応援するような真似をとったかわかるかね？」
「いえ、分かりませんね」
「エリカ君には何度となくお茶に誘ったり食事に誘ったり色々としたのじゃがの……のらりくらりと躱してばかりで結局卒業まで一度も二人っきりでワシに付き合うてくれたことはなかったのじゃ」
　それに対し、エリカは猛然と反論した。
「あ、当たり前ですわ！　教授と学生の間で必要以上の関係をもつなど考えられませんもの！」
　エリカがそんな正論を述べると、オーキドは面をしかめて
「じゃからこそ！　こうしてリーグ全体が動き出すような騒動を起こし、このような状況に陥るように全て計算づくで綿密に計画をたてたのじゃ！」
　そう言い切った瞬間、オーキドと二人の間に一本の大木が叩きつけられる。大木が衝突した衝撃で風が巻き起こり、博士の白衣が大きくはためき、砂塵が巻き起こる。
　そして砂塵が晴れ大木が引き上げられると、白髪の残る頭を風になびかせながら、一人の老人が現れ、オーキドにこう言い放った。

「言いたいことはそれだけかの、オーキドよ」
「ヤナギか。久々じゃの」
　オーキドは見た事もないほど鋭い眼光でヤナギを見る。同様の眼差しでヤナギもオーキドを見ていた。
「挨拶などよいわ。教えを授けるのが使命の教職にありながら教え子に恋心を抱き、あまつさえこのような大それた事を起こしてまで手に入れようなどと……貴様、死ぬ覚悟は出来ておろうな?」
「フン。ヤナギには分からぬだろうよ。一度、たとえ最後まで馴染めなかったとしても、長年の意中の人と、伴侶として一つ屋根の下で、暮らせたときの喜びなど……の」
　オーキドはそうヤナギの戒めを吐き捨てて見せる。
「狂っているとしか言いようがないの……。全く天下の研究会会長がこれでは堕ちたものよ。かつて私と共にポケモントレーナーを目指していた頃のあの輝きはどこに消え失せたのだ」
　ヤナギは憐憫と侮蔑の情が籠った眼差しをむけつつ言う。
「昔の話はよさぬか」
「そういうな。直に聞けなくなるであろう。エリカ女史を初めて見てから……心のどこかでいつかはこうなると思うておった。オーキドよ、半世紀余りの蟠りを今ここで清算

しようではない」
　ヤナギは途中まで言いかけた所で、幹部の一人であるランスが邪魔に入る。
「ヤナギさん。こんなところで油を売っている暇があるなら、こいつらを倒したら如何です？」
　ランスは冷ややかに微笑みながら背後の数十匹のモンスターを指さす。
「くそっ……。直に戻る！」
　ヤナギはそう言って戦地へ戻って行った。
「邪魔が入ったの……。ともかく、ワシはエリカ君をなんとしても手に入れたかったからロケット団に手を貸し、こうして戦いを引き起こしたのじゃよ」
　レッドは暫く黙した後
「ふざけるな」
「ん？」
「そんな……そんなくだらない理由で一体どれだけの人が嘆き悲しんでいるのか貴方には分かるのですか！　マツバさんもこんな博士の欲望に付き合わされて……」
「そのような事。ワシの知ったことではない。エリカ女史が通常の手段で手に入るような人でないこと位、レッド君も重々に承知しておろう」
　確かにエリカはただでさえジムリーダーの上に財産も家格も市井からかなりかけ離

れている雲上の人間である。

レッド自身、こうして戦場の最前線に出ることを頼まれるほど強くなれなければ彼女とは下手すればまともに口を利くことすらかなわなかったであろうことは十二分に理解している。

しかしだからといってオーキドのした行為は褒められたものではない。

「そのくらい……分かってます。分かってますけどだからこそ博士の取った行動は許せないんです」

「ほう」

「俺のようなバトルだけで、ほかは何もない人でも彼女は……エリカは受け入れてくれたんです。そして彼女は非道を何よりも忌み嫌っている清廉な性格なんです！　博士、エリカは貴方のような人間を何者よりも嫌います。大学で教授と学生の間柄だったらそのくらい……」

オーキドは途中でレッドの言葉を鼻で笑って返す。

「ほんの数か月一緒に居ただけでエリカ君のことを分かったつもりでいるのかね？　笑止千万じゃのう」

「俺の何倍以上もの期間接していたのにこんな手段しか取れない貴方ほどじゃないですよ」

レッドは物怖じせずに堂々と返して見せる。
「君のような青二才にどう嘲られようと知ったことか。ともかく、ワシはエリカ君を伴侶として欲しているからこそこのような戦いをおこしたのじゃ。エリカ君、君がワシと夫婦になるのならば道などいくらでも外れてみせるわい」
レッドは背後でかすかに震えを感じ取っていた。さすがのエリカもこの狂人を前にしては平常ではいられないようだ。
「そんな事、俺がいる限り絶対にさせるものか！」
レッドは決然とした様子で言い切る。
「ほう……本当かね？」
「俺がエリカの前で嘘をつくと思っているんですか？」
「フ……このようなことをされてもかの」
その瞬間、レッドは額に冷たい金属を感じる。
この世界ではいわゆる兵器や武器というものがそれほど浸透していないため、レッドは何があてられているか理解するまで時間がかかった。
「これはのお……拳銃といって一瞬で人を打ち抜くポケモンなどよりもよっぽど手軽なある世界ではよく用いられとる武器よ……」
「っ……！」

レッドは何度か映画で見たことがあるものの見慣れているものではないため少しだけ物怖じする。

だが、エリカの手前ここで引き下がるわけにはいかないと奮起したレッドは

「博士……貴方、そこまでするのですか!!」

「言ったじゃろう。エリカ君がワシと夫婦となる為なら如何なこともするとな……」

と言いながらオーキドは跡がつきかねないほどぐりぐりと強く銃口を押し付ける。

「撃てるものなら撃ってみろよ……!!」

ここにきてレッドは覚悟を決めて言い放つ。

「冷や汗ビッショリだのう……レッド君。ここで撃つのも容易いがそれでは簡単すぎて面白うない。手に入れるまでの過程は少しでも難しいほうが、事後のワシの征服感も上がるというもの……。ここはひとつ取引といこうじゃないか」

「は?」

「今ここでエリカ君をワシに引き渡すならば、ここは発砲しないでおいてやろう。レッド君はロケット団を潰すなり逃げるなり好きにするが良い。じゃが、そのままならばエリカ君を背負ったまま撃つ」

「ま……待ってくれ。それじゃあエリカまで危害が……」

丁度現在はレッドの首の後ろにエリカの口がある。もしこのまま撃って貫通でもす

れば ほぼ間違いなくエリカも即死、良くても脳に障害が残ることは確実である。
「そうじゃのう……これは４５口径のマグナムじゃ。危害どころかエリカ君ごと死ぬのは確実じゃの」
　オーキドは平然とそれを言ってのけたのち、にやりと笑い
「じゃが、それもまた一興よ。動かない屍になったエリカ君と褥を共にするもまた良い。エンバーミング（防腐処理）を施しつつ蝋人形と化したエリカ君と夫婦生活を送るのも悪くはないの」
　それを聞いてレッドは得も言われぬ恐怖を覚えた。エリカの方は何か返そうとはしていたみたいだがあまりのことに声帯が麻痺してしまったのか声が出ない様子である。
「さあ、どうするのかねレッド君。３０秒だけ時をくれてやろう」
　オーキドはその言葉と同時に安全装置を外し、グリップを強く握りしめる。あとはトリガーを引くのみだ。
　レッドは全神経を集中させてどうするかを考える。
　たった３０秒。３０秒で自らの命運が決まってしまう。
　オーキドの目は本気そのもので、時間が経てば容赦なく発砲するだろう。
　戦場は相変わらずとても騒がしく、街に広がる炎で春なのに夏同様の熱気となっていたが、この周辺だけは氷河の如く冷厳な雰囲気であった。

２５秒ほど経ったところでレッドが口を開く。
「分かった……エリカを……渡す。俺はまだ死にたくない」
オーキドはそれを聞いて恐らく今まで彼が見た中で一番の笑顔をレッドに見せる。
一方、エリカの目からは光が失われる。
「よう決心したの。さて、渡してもらおうか」
「待ってください。その前にこの物騒なものを下げていただけないですか」
「それは出来ん。約束が完全に履行されるまでは油断できぬからの」
オーキドはやはり海千山千である。一筋縄ではいかない。
「片手ではエリカを抱きかかえられないでしょう。彼女は今足を怪我しているのですよ？　まさかあれほどまで求めていたエリカを一旦でもこの地べたに置けとでも？」
「う……うぅむ。分かった」
そう言ってオーキドは渋々拳銃を下げる。
レッドはうつむきながら数秒黙したのち
「では……」
と言いながらエリカの手をほどこうとする。
しかし、彼女は一向にはがれようとしない。
「エリカ、分かってくれ。これしかないんだ」

レッドは足りない頭をフル回転させて自分の腹案を如何にオーキドに悟られないようにエリカへ伝えるか考え、目を合わせつつ口に出す。
彼女はその言葉をきちんと受け取れたのかそれとも完全に諦めたのか、すっと力を抜きレッドは落ちないように向き直ってエリカをお姫様だっこの要領で抱きかかえる。
エリカの表情はどうにも読めない無表情になっていた。
「さあ」
オーキドは両手を差し出す。
レッドはオーキドの方向を向いて彼女を引き渡す為に手を伸ばす。
エリカはオーキドの手に渡った。その瞬間石畳とオーキドの靴が見える。
レッドはすかさずその隙を狙って思い切りオーキドの靴を踏みつけた。
「うっ!!」
オーキドはたまらずエリカと拳銃を落としてしまった。
「レ……レッド貴様はか……」
レッドはすぐにそれらを奪取し、オーキドの頭を狙って三回発砲。まったくの初めてな為二発は外したが、最後の一発は見事に命中。オーキドはそのまま倒れる。
「クッ……愚かなマネをしおって……ワシが倒れても……エンジュと……全国……リーグの崩壊はとめられ……ぬわ……ホッホッ……ホッ……」

いまだにうわ言じみたことを話す博士が惨めに思ったのか、レッドはとどめの一発を心臓に放つ。

やがて、オーキドは息を引き取った。

四発の銃声を聞きつけ、ワタルがカイリューに乗って前線からとんでやってきた。

「レ……レッド君。これは……」

降りてワタルは呆然とした表情でオーキドの遺体を見る。

「俺がやりました。警察に連れて行くなりなんなりしてください」

「いや……いいよ。よくやってくれた。そのあたりは職務行為扱いでなんとか僕がとりなす。それより、エリカ君をはやく連れて行きなさい」

「この死体……どうするんです?」

「すぐにでも片づけたいところだけど……。そんな暇はない。衛生兵がつれていくだろう」

そう言ってワタルはそそくさと再びカイリューに乗って前線に戻った。

「ふう……。どうにか片づけたか」

「あなたぁ……」

エリカは珍しく気弱そうな声で言う。

オーキドから奪取したとき、エリカはレッドに抱きかかえられたような状態になって

いる。
「わたくし、最初は本当に見捨てられたのかと思いましたのよ?」
エリカはレッドの目をみつめながら言う。
「バカ言うな！　誰があんな外道に大事なエリカを渡せるかよ！」
「ええ。貴方にこれしかないんだって言われた時、もしやと思って貴方に従いましたらオーキドを見事に抹殺してくれましたもの。私、あなたと一緒になれて良かったと……心から……あら?」
エリカは緊張の糸が切れたせいか、ポロポロと紅涙が溢れる。
「ずっとこらえてきたんだもんな……よしよし。絶対にお前を放さないからな」
レッドは自らの胸にエリカをより近づけそっと肩を抱く。
「はい……貴方」
先ほどまでとはまるでちがう暖かな雰囲気が二人の周りを包んでいた。
―午後4時10分　少し離れた場所―
指揮するのも忘れて一部始終を目撃していたミカンは顔が紅潮していた。
オーキドが拳銃を出していた頃は止めに行く勇気がでなかったのだ。
「いいな……エリカさん……」
ぽつりとでたその一言でミカンはレッドに恋心を抱いていることを自覚した。

何を隠そうミカンがジムリーダーになろうと決意した原因はレッドにあるのだ。そこからずっとある種の憧れこそ持っていたがそれはあくまで遠くの存在だからこその憧れであり、近いところで恋人たるエリカを懸命に守るレッドを見て恋情が憧憬を上回ったのである。

これ以後、ミカンはまともな指示が下せなくなり、鋼ポケモンたちは暴走しはじめる。ヤナギから冷徹な精神を学んだミカンであったが15歳の少女にそれを徹底させるのは不可能だったのだ。

―午後4時30分　37番道路　野戦病院―

エリカを野戦病院に送り届けた後、エンジュシティの方角からレッドにとって聞き覚えのある咆哮が聞こえる。

異様な胸騒ぎを覚えたレッドはすぐさま羅城門をくぐりぬける。すると、目の前にはとんでもない風景が広がっていた。

―午後4時35分　エンジュシティ―

くぐりぬけると、そこは大砂嵐が起こっていた。

10m先は何も見えないほどの砂嵐である。そうこうしているうちにワタルが再びカイリューに乗ってやってきた。

「やーレッド君！　大変なことが起きているんだよ！」

「それはこの状況をみればなんとなくは……」
　砂嵐はごうごうと音を立てている。
「原因は分かっているんですか？」
「さっきの咆哮は君も聞こえただろう？　僕も知っているポケモンの鳴き声だったからおそらくポケモンの技……それもこのような強力なレベルということを考えたら恐らくロケット団のうみだした改造ポケモンとやらの仕業だよ。全くなんとむごいことを……」
　ワタルは相当に憤慨しているのか時々地を蹴っている。
「あの他の人たちは？」
「この調子じゃ敵も味方もまともに戦えない。とりあえず近くのゲートまで逃げ込むように指示したよ」
「そうですか……」
　レッドは少し黙したのちに思い切ってワタルに尋ねる。
「ところでさっき知ってるポケモンと言っていましたが……何のポケモンか教えてくれますか？」
「レッド君もシロガネ山にいたなら一度か二度くらいは聞いたことあるんじゃないかな……。バンギラスだよ。僕のもつドラゴンポケモンと互角に戦えるほどの力を持つと

ても強いポケモンさ」

　レッドはその言葉に強く反応する。やはりあの胸騒ぎや氷の抜け道で見た夢は正しかったのだ。

「ワタルさん。俺、行きます！」

「は……はぁ!?　何を言っているんだ！　やめときなよこれはただの砂嵐じゃない！　安易に近づいたら大変なことになるよ！」

　ワタルは必死にレッドを止める。

「恐らくですが……今あの場にいるバンギラスは俺の……いや俺たちにとって決着をつけなくてはいけない相手なんです」

「ど……どういう事だい？」

　レッドは簡潔にシロガネ山で起こった二度にわたるバンギラスとの戦いについて話す。

「なるほど……。わかったそういうことなら行ってくるといい。あと、これを渡そう」

　ワタルはレッドに防塵マスクを手渡す。

「ありがとうございます。これ……マスクですか？」

「一応工事現場だとか地下用の防塵マスクだ。僕も一応いろいろなところに行く機会があるからね。常にこういう道具はもっているんだ……。気休め程度にはなる。でも目

を護る道具がないけど大丈夫なのかい？」
　ワタルはレッドを心配する。
　レッドもそれについて突っ込まれると少々不安になったが、リュックの奥底に眠っているゴーグルの存在を思い出した。
　レッドはゴーゴーゴーゴーグルを見つけ出し、装着する。
「ほほぅ……よく持ってたねぇ」
「初めてバンギラスと戦ったとき、親切な人がいて……、何も知らなかった俺にいろいろと教えてくれた後にこれを置いて行ってくれたんです」
「それじゃあその人に感謝しなくちゃね……おや、ちょっと待って」
　ワタルは後ろに周りこんで留める部分に描かれている紋章を見る。
「これ、デボン製か……。たぶんその人、ホウエン地方の人だろうね。あそこは砂漠地帯があるっていうし」
「へぇ。そうですか……またいつか会った時にお礼がしたいです。さてと、俺はそろそろ」
　レッドは防護マスクを装着した。
「うん。気を付けておいで。恐らく、今このポケモンを倒せるのは君しかいない。健闘を祈る」

ワタルの激励を受けて、回復させた後にレッドは砂漠となりつつある地帯に足を踏み入れる。

―午後5時頃　エンジュシティ　市街―

レッドはとにかく見えないなら音に頼ってバンギラスの位置を割り出そうとした。

心なしか、バンギラスの方から自分の方へ寄ってきている気がするためレッドはその方向へ歩みを進める。

バンギラスが動くたびに家屋のつぶれる音が聞こえてくる。

「くっ……」

砂地は平地よりも歩くのに体力を消耗する。朝から歩きづめのレッドにとって如何に強靭な体を持つ彼といえども一人砂漠の中歩くのは相当に堪えた。

レッドは修行していた頃を思い出し、これも修練だと割り切りながらバンギラスのもとへ近づいていく。

―午後5時30分頃―

探し始めてから一時間弱。レッドはようやく影を視認。

恐らくシルエットから見てバンギラスは後姿である。先制攻撃だとばかりにレッドはカメックスとフシギバナを繰り出す。

「マスター。あれって……」

カメックスが影を指さしながら言うと、
「そうだ」
と深く頷く。
「ケッ。あのデカブツまた出やがったのか……。性懲りもない奴」
レッドの最古参にあたるフシギバナがそう毒づく。
「恐らくこれがジョウトで戦う最後の敵になる……。でもだからといって気を抜かずにな」
二匹は言われなくてもわかるとばかりにレッドの方へ頷く。
レッドはその表情を見て安心しつつ、指示を出す。
「よしっ！　カメックス！　ハイドロポンプ！　フシギバナ！　リーフストーム！」
二匹はこの二つの大技を遠くにいる影に向かって全力で放つ。
「行けっ！　カビゴン！」
レッドはこれだけでは倒せないことを承知しているためさらにカビゴンを繰り出す。
先ほどの技は命中したようで、影はどんどん大きくなり、やがて姿が見えた。
通常のバンギラスより三倍以上の大きさを持つ巨体が姿を現した。
「んぁ……あれは……」
カビゴンは青菱にある傷を見て何者か思い出したようだ。

「そうだ。あれはお前が前、傷をつけたバンギラスだ」
そして、この傷でいよいよバンギラスがレッドたちを二度にわたって苦しめたのと同じものと分かった。
手持ちたちは気を引き締める。
レッドは一度手持ちをすべてだす。
「うろたえるな。博士が何をしたんだか知らないけど……。ポケモンはポケモン。ポケモンならば俺たちに不可能はない！　現に一度敗れたミカンさんやヤナギさんだって俺たちは打ち破れたんだ！　絶対に倒して、このくだらない戦争を終わらせるんだっ!!」
レッドの檄によって手持ちたちの士気は大いに上がった。

――――

一時間後。
バンギラスはカイリキーやレアコイル、カメックスといったレッドの主力やサブたちを倒して力尽きる。
バンギラスが倒れると、砂嵐は止み、空がおがめた。
最早日は沈みつつあったが、はるか遠くから鬨の声が聞こえてくる。砂嵐があけるのを待って出撃するのを待機していたのだろう。

エンジュの町はどうなったかといえば、バンギラスが大いに暴れたことで致命的な損害を受けた。ただでさえ火事などでもろくなった家にバンギラスの大暴れである。まともな形を保っている家屋の方が圧倒的に少なかった。

かろうじて形を保っている建物も砂嵐によって通信網が破壊されたり屋上や、下手をすれば屋内が砂まみれになったりとおよそ無事とはいえない損害を受けている。

エリカや有識者たちの言うとおり、エンジュは応仁の乱と同様の大損害を受けたのだ。

―午後7時　太平洋上空―

一方ロケット団は改造ポケモンと主な団員たちをつれて砂嵐の混乱に乗じてヘリコプターで逃げ去っていた。

サカキは備え付けのテレビで報道を見ていた。

テレビにはエンジュ解放に狂喜乱舞するエンジュ市民たちの模様が映し出されていた。

サカキはそれを見て鼻で笑って見せる。

「全く愚かな者たちよ……我々がこの程度で消え失せると思っているのか」

「とはいえサカキ様。ジョウトの主要都市ににらみをきかせられる立地、内国で一二を争う研究設備のある大学、内国にとっての戦略的重要性。これだけ揃っていたエンジュ

を手放して良かったのですか?」

アポロがそう不満げな顔で尋ねる。自らの腹案が根底から潰されたのでさすがに少しは何か言いたくなったのだろう。

「なぁに新天地などいくらでも我々にはある。それに内国……日本などという国を手中にできたところでいつかは破綻するのみ。我々が本腰を入れるべき場所はやはり更に強い国でなければな」

サカキは低く笑いながら言って見せる。

「ということは……」

「この国でやったことはすべてデモンストレーションだ。アポロよ、お前の言ってくれたその王国への案。新天地で存分にやるが良い」

「は……ははっ!」

アポロは瞳を輝かせて深く頭を下げた。

「サカキ様」

ランスがサカキを呼ぶ。

「どうした」

「この死体は……どうしましょうか」

ランスが持っていたのはどさくさに紛れて持ってきたオーキドの亡骸である。

「あぁその〝くろーん〟とかいうやつの骸か……。海に放り投げておけ。ここは公海だ。そうそう見つかることもあるまいに魚どもの餌にしてやれ」
「はっ」
そういうとランスは下っ端に命じてオーキドの骸を海へ放り投げた。
「サカキ様……俺、やっぱりあのオーキドとかいう胡散臭いジジイのいう事なんか聞いてられねーっすよ。ほかにどうにかならねぇんすか」
「ラムダ。それが言いたければもっと活躍してから言う事ね」
アテナがラムダをそう窘めた。
ちなみに折檻の形跡が残っておりあちこちに腫れ跡がある。
「あぁ!?　てめぇだってランスの尻馬に乗って辛うじて勝てただけだろうが！　偉そうな口叩くんじゃねえぞ！」
「何ですって！　あんたまた熱い鉄棒で顔焼かれたいの!?」
「黙れ。ニュースに集中できないだろうが」
サカキの一声に二人は押し黙る。
こうして、一機のヘリは太平洋を通り過ぎていく。
―午後9時　エンジュシティ　ポケモンセンター　会議室―
このような戦乱のさなかでもポケモンセンターだけはかろうじて残っていた。

ジョーイなどが全ていなくなっており営業はされなくなっていたが、エンジュが解放されると即日営業を再開した。

そして、ワタルをはじめとする戦争に参加した総員がここで総括を行う。

「今回の戦争は死者、死亡したポケモンが１０００００をこえるという痛々しいものになったが、各方面軍の活躍で被害が他の街に及ばずにすんだ。本当に感謝する」

ワタルは深々と礼をする。その表情は固くも少し安心しているように見えた。

「首領のサカキはジョウトからヘリを使って、幹部連中共々逃走した。以上の事を明日の記者会見で述べるが異議のあるものは挙手を」

少しだけ議場を静寂が支配する。

「では、以上を持って緊急命令を解くものとする。各々、各仕事場に戻って頂いて結構です。本当にご苦労であった」

こうして、一週間以上にわたる戦いが、本当に終わりを告げた。

しかしたった一週間とはいえ、戦後最大の反乱となったエンジュ騒乱は後世の歴史の教科書に必ず載るほどの大事件となったのだった。

しかし、ポケモンリーグからすればここからが本当の戦いであった。

あれから。

まず政府はエンジュ解放のしらせが来るとすぐさま治安出動の議決を取りやめ、緊急対策本部を解散。「エンジュシティに係る戦災からの復興に関する法律」（戦災復興法）を制定し、エンジュシティの復興のみに特化した大臣を置くことを表明。

主な内容も避難民の生活支援からエンジュシティの再建や被災者たちの経済的・心理的ケアに切り替えられた。

先述したとおりエンジュシティの損害は〝応仁以来〟と評されるほどの惨憺たる有様であった為、中にはエンジュではなく親戚、親類の家に移ることにした者も少なくはなかった。

しかし、やはりエンジュに戻りたい。エンジュで生活したいという人々が多数を占め、寺院や仮設住宅などに住みながら毎日エンジュまで行き建物の建築や都市計画などに携わり一日も早く往時の姿に戻す為に人々は尽力した。

ポケモンリーグはどうだったか。やはりいくら早期解決にむけて尽力していたとはいえ、終了後当初は檀上会談の失敗やエンジュ総攻撃の件などでワタルはマスコミより手厳しく指弾されることとなった。

しかし、これに対してノーと言ったのがエンジュの市民たちであった。ポケモンリーグが如何に自らの街を守る為、救うために尽力してくれたかをある人は動画にし、あるひとは漫画に、ある人は文書にして訴えかけた。

これによって反乱終了から数か月も経つとワタルに対する風当たりはおさまった。これが再燃するのは12月の選挙となるが、それはまた別の話である。

オーキドの件はどうなったか。オーキドは総攻撃の前日にタマムシ大学へ忍び自身の研究室に置手紙をして去っていた。

そこには『一身上の都合により、ポケモン研究会会長及びタマムシ大学教授の職を辞することとした』とだけ書かれており研究会はたちまち大波乱となった。

しかし、まさかオーキドがエンジュ騒乱に加担していると疑う者は一人としておらず、新会長はシンオウのナナカマド博士に決まりどうにか片付いた。リーグ側はオーキドの関与を警察やマスコミに対して声高に主張したが、肝心の証拠が戦災、もしくは故意に破棄されたり持ち去られていたため一つもなかった。ここで例の死体でもあれば決定的な証拠に成りえたのだろうが、死体は先述の通り海の藻屑となった。

こうなったらと副理事長のシロナはワタルに対し例の意見書の公開を求めたが、やはり状況証拠に留まっているため確信を得ることはできないとして断念。

エンジュ騒乱は結局ロケット団のみの犯行と断定され、取り残された数百名ほどの団員を逮捕して警察は捜査を打ち切り。ちなみにその中にはマツバを殺害した実行犯もおり、この時逮捕された者の中では一番重い死刑の判決が下された。オーキド博士の行方は誰も知る者がいなかった。

そしてサカキと四名の幹部は内乱の首謀及び重大な関与をしているということで国際指名手配されることとなった。他の団員たちもポケモン愛護法違反や器物損壊罪、逮捕監禁罪、破壊活動防止法違反などで次々と同様の手続きが行われた。

こうして、戦禍は過ぎ去り、いつもの日常がもどってきたのだ。

―第十二話（中）　王国の終焉　終―

第十二話（下）　長い想いは結ばれて

―5月9日　午後2時　エンジュ大学附属病院　658号室―

エリカは右足の粉砕骨折と診断され、一週間程度の絶対安静及び入院を告知された。

（この世界は医療が発達しているため入院期間は短め）

敵の本拠として用いられていたエンジュ大学はそっくりそのまま無事に残っており、砂かぶりになっているだけで掃除すればすぐに利用できる状態だった。

付属病院は昨日のうちに掃除を行って本日より営業を再開。野戦病院の患者たちは希望がない限りそのままこの病院に移送された。

エリカも特に反論しなかった為、この病院で入院していた。

そんなさなかレッドは総動員令解除直後からずっとエリカのそばに付き添っていた。

彼女はこの病院に移されてすぐさま足の骨をもとの配列に直す手術が行われ、その麻酔がかかったままであった。

レッドは昨日から寝ていないためうとうとしつつあった時にワタルが見舞いにやって来る。レッドは丸椅子に座っていた。

「レッド君！　エリカ君の容体はどうだい？」

ワタルはかなり心配そうな様子で尋ねてきた。
「ええ。なんでも足が完全につぶれてしまったようで……。ただ皮膚やら骨なんかは足袋のおかげでどうにか残っていたため、一週間程度でどうにか退院できるとのことです」
「そうか……良かったよ。最初エリカ君を見たときは本当何事かと……」
ワタルは自分の事のようにホッと胸を撫で下ろした。
「その割にはきつく言ってませんでした？」
「戦争の真っただ中に司令官たる僕が狼狽してちゃあ仕事にならないでしょ」
ワタルは軽く笑いながら言う。
「まあ確かにそうですけど……」
「あの時ああは言ったけど心の中じゃ本当に心配してたんだよ。いやいやそれにしてもほんと足だけで済んでよかったよ……」
「あれイワークが倒れ掛かってきたものですからね……。あと数秒遅れてたらと思うと身の毛もよだちますよ」
レッドはそう昨日の事を振り返る。
「へぇイワークがねぇ……。それなら本当尚更だよ。あぁ、これお見舞いのアレンジメント。机の上にでも置いといてよ。エリカ君にはやっぱりこれが一番似合うと思うか

らさ」

　ワタルは包みを開けて、白い器の上に色とりどりのピンク系統の花が飾られているフラワーアレンジメントをレッドに手渡す。

「へぇ……綺麗なもんですね。これいくらしたんですか？」

「確か８０００円くらいだったかな」

「結構するもんなんですね」

「そうでしょ？　僕なりに一生懸命選んだんだ。本当は手術の後に来るなんて非常識なんだけどこれから色々と忙しくなるから今日くらいしかこれる機会ないと思ってね……その非礼を詫びる意味でも少々値が張ったのを買ったんだ」

「なるほど……。そうですか……ワタルさんこれから色々と大変ですものね」

「うん。記者会見やら戦争に関しての政府への証人喚問やらで忙しいのなんのって……。まったくリーグのトップも楽じゃないよ」

　ワタルは肩を落としながら話す。

「そういうのってシロナさんとかに任せた方がいいんじゃ……」

「そうはいかないって。これはただの事務じゃなくて昨日までの一件の事なんだから直接は関わってない彼女に説明責任を押し付けるわけにはいかない。それにこういう重大な事はトップがいかなくちゃね」

　このくらい責任感に溢れている人じゃないと理事長の職は務まらないんだろうなと思ったレッドであった。
　ワタルは数秒黙したのち
「この話はいいだろう。それでエリカ君は一週間程度入院するんだっけ？」
「ええ、先ほど話したお医者さんの話によれば」
「そうか……その分旅は出来ないけど平気かい？」
「いいんですよ。パートナーがいなくちゃはじまりませんし。ただ腕が鈍るのは御免なんで近くのスリバチ山とかでも修行しようかなとか思ってます」
「ふぅん……ほんとグリーン君と戦っていたころとは大違いだね。あのころはまさに孤高を貫くって感じのスタンスだったのに」
　ワタルは思い出しながら言う。
「まあポケモンたちとだけ旅するのも悪くはないんですけどね……。今はやっぱり隣にだれかしらいないとどこか寂しいです」
「はは……ごちそうさま。もうすっかり夫婦しているね。僕もいい歳だしそろそろそういう人見つけないとな……」
　その後ワタルとはもう数分ほど話して帰って行った。
　それから一時間後、エリカが目を覚ました。

「お、目が覚めたか……」
「あら貴方……今、何時ですか？」
「１５時半くらいかな」
「だいたい四時間くらい眠っていたのですね……。あら、そこのお花は？」
エリカは机上にあるフラワーアレンジメントに気付く。
「ああ、ワタルさんがお見舞いにだって。今日くらいしか来れそうな機会がないらしくて……」
「左様ですか」
「ねえ、一つ気になってたんだけど……」
レッドは思い出したかのように尋ねる。
「はい。何です？」
「お前ってこれ何の花か分かるの？」
「まぁ……失礼ですわね。私を誰だと思っているのですか」
エリカは冗談めかした風でレッドをたしなめる。
「いや分かっちゃいるけど単に興味として」
「フフ。わかってますわよ。こちらの花は楊貴妃にエルセンブルク。いずれもチューリップの種類ですわ。あとはラナンキュラスにスイートピー、ルピナスなども使われて

ますわね。ピンク系統でまとめられた可愛らしいアレンジメントだと思いますわ」
　エリカはすらすらとすべての花を答えてみせた。分かり切っていたこととはいえやはり華道の師範である。
「流石だな」
「いえいえ大したことありませんわ。このくらいはお花をやっていれば当然の知識ですもの」
　彼女はレッドに褒められて嬉しいのかにこやかに答える。
「いやぁ凄いって。俺みたいなバカからしたらお前のそういうところ本当尊敬するもん」
「もう……あまり褒められても何もお出しできませんわよ？」
　彼女は顔をほんのり赤くして言う。
　レッドはそんな彼女を見てやはり情欲が湧いてくる。もうこれだけ色々と同じことを経験し苦楽を乗り越えたんだからそろそろという気持ちもある。
「エ、エリカ！」
「はい？」
　彼女は急に改まった様子のレッドを見て当惑しているような表情を見せる。
「好きだよ」

「な、何を急に仰せになられるのですか……」
彼女の顔はほんのりから段々と赤みをましていく。
「だからさ……もうそろそろ」
レッドはエリカの口元に近づく。
「ま……待ってください！」
「いやもう俺……待てな」
「とにかく、私の話を聞いてください」
そうまで言われてレッドはようやく丸椅子に戻る。
「その……もう少し、もう少しだけ待っていただけないですか」
「え？」
「私、殿方とこのような事をするのが初めてですから……。心の準備が出来ていないのです」
「う……うん」
「ですから……然るべき時が来ましたら……その……えっと……」
彼女は相当に緊張しているのか冷や汗が見える。このような彼女を見るのもまたレッドにとっては幸せであった。
「わ……私のほうから……その……お誘い申し上げますわ」

「え!?」
　レッドはあまりの事に彼女が何を言っているのか理解するまでに時間がかかった。
「その……〝する〟ことについてです」
「するって?」
「もう……私だって女性なのですよ?　察してくださいまし」
　そこまで言うと彼女は布団をかぶって寝てしまった。
　レッド当人にとってエリカとは大分、前と比べれば関係は良くなっているとは思っていたが正直な話想像以上である。
　レッドはみるみると上機嫌になっていった。
　その後、レッドは30分ほど病室に居たのち、修行のためスリバチ山へと向かった。
―5月11日　午後2時　同所―
　この日はナツメが見舞いにやってきた。
「あら、思っていたより元気そうね」
　ナツメが来た時の第一声はこれであった。
「まぁ、やられているのは足ですからね……。そこ以外はなんともありませんわ」
「それもそうね。それにしても……」
　ナツメは背後を見る。ものすごい量の花束やお見舞いの数々である。宛名人は各界

の著名人からジムリーダー、トレーナーまで色々である。彼女の人脈や人望の厚さがうかがえる。

「ホント、あんたって大したものよね……」

「仮にもジムリーダーですから。このくらいは当然ですわ」

「当然って……官房長官からわざわざ見舞いの品が来るなんて聞いたことないわよ。これがタマムシ大学を最年少主席で卒業したＯＧの力というものなのかしら」

「まぁ……そこはそうかもしれませんわね。尤も私はあまり政治家は好きじゃありませんから何とも思いませんでしたけれど」

曲がったことを嫌う彼女にとってとかく色々と噂になりやすい政治家や官僚といった人々はあまり好きになれないようだ。

「あんたらしいわね……それはそうとレッドはどうしたのよ？」

「レッドさんは腕が鈍らないようということでスリバチ山まで行って修行されていますわ。毎日夜には見舞いに来てくださいます」

「ふうん。偉いところあるのね。それで、どうなの？」

ナツメは丸椅子に座り、足を組んで尋ねる。

「どうとは？」

「レッドとのことに決まってるでしょ」

そういわれるとエリカは少し間をおいて
「フフフ。上々です。あの方のためならば何だっていたしますわ」
「そ……そう。はぁ……」
ナツメは大きくため息をつく。
「どうされました？」
「ということはもうとっくの昔にエリカはレッドとしちゃったわけね……」
それを尋ねられると彼女は顔を赤くして黙る。
「あら、まだなの？」
彼女は小さくうなずく。
「そう……」
「しかし……。私、もう決めましたわ。レッドさんに……純潔を捧げます」
彼女は目を閉じ決然とした様子で言う。
「ということは……する気はあるのね」
ナツメは心なしかがっかりとしている。
「はい」
「どうして急にそんな心変わりをしたのよ？　あんたつい先月までまだその……スキンシップすら及び腰だったじゃないの」

「そうですわね……」

彼女は10秒ほどで考えをまとめ目を開く。

「ナツメさんには旅立つ前日にお教えしましたわよね……。私がレッドさんと行動を共にするのは伝説にして最強と目されているトレーナーであるレッドさんが如何な人物であるかを見極め、私の伴侶としてふさわしいかどうかを見る為だと」

「ええ」

「私も最初はそのつもりでしたし、途中まで……正確にはヤナギさんに勝つあたりまではその考えは持ったままでしたわ。恋情ではなくあくまで試すために一緒にいたと」

「うん」

「しかし……数々の試練を乗り越えてヤナギさんに勝った時のレッドさんを見て。この方とならば共に歩めると思いました……しかしそれと同時にナツメさんのいうようなふわっとした……その、恋情が湧いてきてしまったのです」

「えっ!?」

「それ以来、レッドさんを見るたびにその……演技ではなく本当にドキドキと胸が高鳴って……。それでもやはりレッドさんの求めに応じて貞操を捧げるのは抵抗がありました。そして、レッドさんがジョウトのジムを制覇して、エンジュ騒乱が起こって……、最後の日、エンジュに突入したのを覚えていらっしゃいますか?」

「勿論よ。あいにく私はあんたとは離れた場所に配置されたけれど……」
「それで、それも大詰めのときに私、オーキドにこの身を狙われたのです」
　それからエリカはその時の事を簡潔に話した。
「レッドさんが私のために頭を使ってどうにか状況を打開しようと策を編み出し、見事それを成し遂げた……。これを見て私は、この方にならば……と思いましたわ。自らの命を懸けて恋人を助けるだなんて実際にできる方はそうそういるものではありませんし……。何よりも私の為にそこまでしてくれたのがたまらなく嬉しかったのです」
　ナツメはそこまで聞くと、ふうと息をつき
「そういう事なのね……。少しだけレッドの事見直したわ」
「ええ、そういう事で私は近いうちにレッドさんへ……」
「そのこと、レッドは知ってるの？」
「はい、この間迫られた時に……胸中はお話しいたしました」
「そう……はあーぁ。私とは完全に終わったわけね」
　エリカはそれに少しだけ目を見開いたが、すぐに元の調子に戻り
「ええ……私、そういうだらしのないことは出来ない性分ですし」
「エリカが旅に出る前からご無沙汰になってたし……。いつかはこうなるってわかってはいたけど……」

ナツメは床にうつむいている。
「しかし、恋仲ではなくともナツメさんは一番のお友達ですわ。そこは絶対に変わりませんから」
「そうね。……、うん」
そういわれてナツメは少しだけ元気を取り戻した。
「これからあと三つの地方を回るのよね……。大変だと思うけれど、レッドと二人三脚でがんばんなさいよ」
「ええ。あの方といっしょならば如何な困難があろうと乗り越えられると思いますわ。ナツメさんもこういういい人をみつかるといいですわね」
「うっ……何よその余裕。いいのよ。私は一人のほうが性に合ってるんだから」
その後、二人のガールズトークは面会時間ぎりぎりまで続いた。
ちなみにナツメのお見舞いは紫色系統の花がそろうフラワーアレンジメントだった。
―5月12日　午後1時―
この日はミカンとアカネが見舞いにやってきた。
「久しぶりやねエリカ！　足の具合はどないな感じよ？」
アカネはいつもの通り闊達な様子でエリカを心配する。
「大分骨もくっついてきたようですし、この調子ならば16日ごろには退院できそうと

の事ですわ」
「はぁ……良かったです。エリカさんが入院したって聞いたときは本当どうしたことかと……」
　ミカンがホッと胸を撫で下ろす。
「せやね。何にしてもあんな大戦争やもん。もしかすれば一生もんの傷おうたかもしれんかったし足だけで済んでホンマ良かったなぁ」
　アカネは丸椅子に座って、エリカの肩をたたきながら喜んだ。
「全くですわね……。そういえば、確かシジマさんが全治三か月の全身骨折でしたっけ……？」
　エリカはミカンの方を向いて話す。
「はい。なんでも先頭で改造ポケモンのリングマとスパーリングを行って大怪我をしたらしくて……、一応勝ったみたいですけれど」
「ホンマ相変わらず無茶するおっちゃんやなぁ……」
「シジマさんはそういう人ですからね……。しかし、そういうなんというか熱くてある種無茶苦茶な所があるからこそ、シジマさんには人が集まるんだろうなぁとも思いました」
「あー。そういやミカンはあのおっちゃんの指導を受けてリーダーになったんやっけ。

まあな。ウチもああいう豪放なところ好きやで。それにしても……」

アカネはチラッと机上を見る。

机の上には多数のフラワーアレンジメントや花束などがあった。あまりにも大量なため、机の他に大きな台にも並べられていた。

「ここは植物園かいな……。いくら草タイプのジムリーダーやからってちと極端やない？」

「あら。私は嬉しいですよ。人によって色々なお花を持ってきて頂いてますから見ててとても安らぎを覚えますし」

「ま……本人がええならええか……」

「あの……実は……」

ミカンは包みからピンクや白、黄色など色とりどりの花が押し並べられたアレンジメントを出した。

「お前もかい！」

「まぁ、綺麗ですわね。これ……もしかしてミカンさんがお作りになられたのですか？」

「は、はい！　昔エリカさんから少し教わったのを基に作ってみました」

「へぇ……素人でも案外上手く作れるもんなんやな」

アカネは感心しながらアレンジメントを見る。

「ありがとうございます。あの……エリカさん。どうしてあたしが作ったってわかったんですか？」
「え？　そ、それはですね……」
　エリカは口籠る。
「ん？　これ、もしかして……」
　アカネは中央に添えられているローズピンクに彩られた花を見た。
「これバラやないの！　ミカンー。これはあかんって……」
「え？　どうしてですか？　菊の花がよくないというのは知っていましたけど」
「あんな、バラもバラでトゲがあるから縁起が悪いっちゅーこってお見舞いに使っちゃあかん花なの！」
「え、そ、そうだったんですか!?　す、すみません、あたし。知らなくて……」
　ミカンは大いに狼狽しながら立ってエリカに平謝りする。
「フフ。いいのですよ。気持ちさえ篭っていれば私は十分嬉しいですから。ただ他の方のお見舞いをなさるときは気を付けてくださいね。まぁこれは赤ではなくピンクですから見とがめる程のことはないと思いますが……」
「うう……」
　ミカンの方は恥をかいたせいか顔が真っ赤である。

「ああそうなん……。ミカンもそんな固うならんでもええって……。ほら座んな。そうそう見舞いといえばウチからも……。ほい」

アカネは袋から大形の箱を紙箱を取り出す。表面には『コガネ名物お好み焼き風せんべい』と書かれている。

「あら、お菓子ですか」

「そうそう。入院中って小腹空くやろし、それ満たすのにピッタリやと思うんやけど」

「そうですわね。ありがたく頂戴いたしますわ」

アカネは横の机にせんべいの箱を置く。

「あれ、そういやレッドはどうしたん？　あいつのベタ惚れっぷりやとてっきりつきっきりてついてるもんやとばかり思ってたんやけど」

「ああ、レッドさんは今スリバチ山で修行されております。日中はそこで修行して夜来てくださるのですわ」

「修行を怠らないんですね……流石です」

ミカンは感心していると共にどこかそわそわしている。

「へぇそうなん……。まったく薄情なやっちゃね、恋人がベッドで苦しんでるっちゅーのに自分は修行やなんて……」

二人の感想は正反対であった。

「いや、あたりまえじゃないですか！　ポケモントレーナーたるもの常に修行は欠かせないですよ！」
　ミカンが珍しく猛然と反論する。
「いや、まぁそらそうやけどな……。日中ずっとなんてちと薄情やないの？　もう少し一緒に居てあげたほうが喜ぶんちゃう？」
「レッドさんは努力家なんです！　だからずっと修行にあけくれ……」
「あー分かった分かった。そんなムキにならんでもええやん。落ち着きぃな」
「はぁ……はぁ」
　ミカンはなれない声を出してまくしたてたせいかぜい息が出ている。
「ミカンさんの言うとおりですわ。レッドさんは人一倍努力して栄冠を勝ち取られた方です。一日、一分でも一秒でも長くポケモンと鍛錬を重ねたいのでしょう」
「はぁ……分かった。ウチが悪かったわごめんな」
　アカネは深々とエリカに陳謝する。
　しばしの沈黙が流れたのち
「そ、そんでなツクシとの事なんやけど」
「あら、アカネさん宜しいのですか？　ミカンさんはご存じでない筈では」
「えーのえーの。この子こう見えてタイプと同じように口堅い方やもん。な？」

アカネはミカンに目くばせする。
「え……はい。まあ。あの……アカネさん、ツクシさんと何かあったのですか？」
ミカンは興味津々な体でアカネに尋ねる。
「へへん。実を言うとなー、あの戦争が終わった次の日にな。みんな帰るときに、ツクシにウチの家で晩御飯ふるまったんよ」
「へぇ……」
「そんでな……ごはん食べて、色々と話した後にな。ツクシに風呂入ること勧めたんよ」
「あれ……それってもしかしてお泊りですか？」
ミカンは漸く気付き始める。
「せやで」
「ツクシさんならあまり心配はないでしょうけど……よく泊められましたね」
「ニブチンやなー。その〝心配〟しとる事をさせる為にツクシを泊めたんやって」
ミカンは少々間を置いて
「え？　それって……つまり」
「そ。ウチ、ツクシの事……好きやねん」
アカネは得意げに微笑みながら言った。
ミカンは大いに驚く。

「えっえええええ!?」
「そんな驚くことかいな……。何、もしかしてツクシの事好いとったとか?」
　アカネはニヤけながら尋ねる。
「い、いえそういう事じゃないですけど……。てっきりあたしはマツバさんとお付き合いしてるんじゃないかとばっかり思ってて」
「そんな風に思ってたんかい……。あんな、あいつはあくまで友達、というか親友やて。流石にオカルト趣味のやつと交際する気は持ち合わせておらん」
「そ……そうですか。意外……」
　ミカンは余程驚きを隠せないのか、ずっと目を見開いたままだ。
「それにマツバはマツバで……おっと。え、そんなに意外やった?」
「いや、会合のときなんてずっとツクシさんの事いじってましたし、マスコット的な存在にしか思ってないんじゃないかとばかり……」
「ちゃうねん。今からして思えばあれは照れ隠しやね。ほら心理学でいうとこの反動形成っちゅーやつで好きな子こそいじってしまうとかそういう」
「なるほど……そういう事なんですね。それで、お風呂に誘って、それからどうしたんですか?」
　ミカンはさらに興味ありげに尋ねる。

「うん。それでな、まぁ端的に言えばツクシと……その一緒にお風呂入ったんよ」
「えぇ!?　それはまた大胆ですね……」
ミカンは顔を赤くしながら言う。エリカも同様である。
「まぁね。そこで好きやって言ってその後は……まぁ変な言い方すればこの体で迫ったんよ」
アカネは胸をたたきながら言う。
「そ……それでツクシさんはなんて言ったんですか?」
「翌朝になってやけど……ＯＫしてくれたで。もー嬉しいのなんのって」
アカネは有頂天な様子で話した。
「ふむ……。ツクシさんもやっぱり男の子なんですね……」
エリカは意外な表情をしながら言う。
「女みたいな体しとるけどまぁその……うん、しっかりしとったよ。エリカのおかげやで。最後は愛嬌ってホンマやな」
エリカはそれを聞いて目を丸くする。
「え!?」
「えって、この前の電話で言ってくれたやないの。最後は愛嬌ですわ……って。これってつまりそういうことやろ?」

「い、いえ。私は特にそのつもりで申し上げたわけではありませんわ。その……アカネさんの笑顔というか男性を虜にする仕草というか……そういう意味合いで言ったまでその……性的魅力な観点から述べたわけではありませんわ」

エリカは慌てて訂正し、それを聞いたアカネは顔を真っ赤にした。

「えっ!?　つ、つまりそれってウチの勘違いなん!?　うわ、恥っずいなぁー……」

アカネは意気消沈してしまった。

「で、でもそれでツクシさんがアカネさんを好きになってくれたのなら結果オーライじゃないですか。元気出しましょうよ！」

ミカンが真っ先にアカネを励ます。

「ま、まぁせやけどな」

「そうですよ。ツクシさんは清廉で誠実なお方です。きっとアカネさんを大事にしてくれますわ」

「どっちかといえばウチが大事にする側のような気がせんでもないけどな……ま、ええか」

その後も三人の会話は続いた。

―５月１３日　午前１０時　スリバチ山　某所―

レッドは一人修行に勤しんでいた。

これからホウエン、シンオウ、そしてイッシュの三地方が待ち構えており、いずれも強者ぞろいであると聞いていたレッドはより力を入れて特訓をしていた。

「ピカチュウ！　雷だ！」

「ピッカ！」

ピカチュウはズバッド１０匹ほどに向かって雷を下す。

ズバッドは言うまでもなく散って行った。

「はぁ……」

しかし、やはり物足りない。

シロガネ山で最強クラスの野生のポケモンと戦っていたレッドにとってスリバチ山のポケモンはあまりにも弱すぎるのだ。

とはいえエリカが入院している手前あまり遠くまで行くわけにもいかず、ここでずっと修行をしていた。空手大王とも何度か戦ったがそれでもレッドからすれば大したことはなかった。

そんな中、背後から一人の少女の声がした。

「あの……」

レッドは背後を見た。見るとそこには浅葱色のブラウスと胸に大きなオレンジのリボン、重ね着に白のタンガリーシャツ。下にはまた浅葱色のミドル丈スカートを穿いた

少女がいた。
「あれ……もしかしてミカンさん？」
「はい。お久しぶりです」
　ミカンは礼儀正しく一度お辞儀をする。
「どうしてここに……あ、もしかして修行ですか？」
「え……えっと。はいそうです！　あたしよく灯台の他にもここで修行しているんですよ。鋼タイプの弱点になる地面タイプのポケモンがよくいますし」
　ミカンは少々焦り気味に言った。
「へー」
「あの……もし、もし良かったらでいいんですけれど」
「はい」
「これから毎日、ここで一緒に修行してくれませんか？」
　ミカンは思い切った様子で言う。
「えぇ!?　毎日って俺エリカが退院するまでしかここにいませんよ？」
「そ、それでもいいんです！　レッドさんのように強い人と短い間でも一緒に修行できたらあたし自身もっと強くなれると思いますし……」
　ミカンの言葉に他意はなく、純粋に言っているようだ。

「そ……そうですか。別に俺としては構いませんけど……。じゃあ俺の方から一つ条件言ってもいいですか？」
「は、はい？」
ミカンは身構える。
「毎日一回、俺と手合せしてくれませんか？　ここってトレーナーもポケモンもそんなに強くなくて退屈してたんですよ」
「ほ……本当ですか？　大歓迎ですよ！」
「良かったぁ。ミカンさんくらいの腕だったらこっちも油断できないし本当にありがたいです」
「もう。買い被りですよぅ」
ミカンは本当にうれしそうな様子である。
「じゃあ、よろしくお願いしますね、ミカンさん」
「は、はい。こちらこそ」
その後、エリカが退院するまでの三日間、レッドとミカンは数時間程度ではあったが共に修行をした。
レッドはミカンに最後に挑んだ時よりも格段に強くなっており、ミカンには一回も負けはしなかったものの半分以下まで減らされたことがほとんどであった。

ミカン自身ともそれなりに仲良くなり、互いに少々敬語が崩れる程度まで進展した。

―5月16日　エンジュシティ　エンジュ大学前―

エリカは退院し、走るのはまだ禁止されているが日常生活に支障が無い程度の歩行が許された。

「うーん！　久々の外の空気はおいしいですわね！」

エリカは退院そうそう伸びをしながら言う。

「お前本当に大丈夫なのか？　お医者さんもあまり無理な運動はするなって」

「この通り歩ければどうと言うこともありませんわ。いつまでも病床に居ては体が鈍りますし、私のことで旅をあまり遅らせるわけにもいきませんしね」

「そ……そうか。まぁそんなに元気なら大丈夫か……」

「あら、貴方エンジュも少しずつ再建が始まっているようですわ。きっと先の戦乱で都が焼き払われたときもこの方たちのご先祖様などがこうして建て直していったのでしょうね」

エンジュの街は少しずつ焼け野原から復活しつつあった。臨時で代理ジムリーダーを務めている舞妓たちの指導のもと再建が進められているのだ。

「ああ……そうだな。こうして人々が希望を持って働いてる姿は見てて悪い気はしない」

そうこう話していると、前から一人の人物がやってきた。
「やあやあエリカさん。退院おめでとう！」
奇抜な格好をした青年に二人は面くらい、エリカが尋ねる。
「あの……率爾なからお尋ねしますが、どちら様ですか？」
「あぁそうか。二人とは初めて会うんだったな。私はミナキ。マツバの古くからの友人だ。宜しく」
ミナキは深くお辞儀しながら丁寧に言う。
「あぁ……マツバさんのお話から何度か御名は伺ってますわ」
「で、そのお友達が俺たちに何のようですか」
レッドはミナキに尋ねる。
「うん。実はマツバからの最後の頼みがあってな……。これを渡そうと」
ミナキはレッドに一つの分厚い封筒を手渡す。
「これは……」
「それはマツバが先月まで徹底的に調べたロケット団及びオーキドの関与を示した書類だ」
二人はミナキのその言葉に驚く。
「本当ですか？　ポケモンリーグはこれについて関知しているのでしょうか」

「マツバはこれを意見書と題してリーグに提出し、監視権を行使するよう依頼した。リーグも前向きに検討はしていたみたいだが恐らく先手を取られたんだろうな……」

ミナキは残念そうに話す。

「そんな……これを世に晒せばオーキドが関与している証拠となり得るではないですか！　どうしてリーグはそれをしないのです」

「マツバもあの大学に千里眼を使えない以上決定的な証拠は掴めなかったみたいでね……。ロケット団の復活だけならこれでも十分なんだがオーキドの関与とまでいくとこれだけでは不十分。公開しても叩かれるのがオチだと思ったんだろう」

「そんな……そんなの間違っていますわ」

彼女は納得できない様子の表情である。

「それで、俺たちにこれを渡してどうしろと言うんです」

「マツバはこれでもしリーグが動かなければ君たち二人にロケット団及びオーキドを止めてくれと言っていた。君たちならば組織の都合でなく自身の良心に基づいて動くだろうから……って」

二人はそれを聞いて引き締まった表情になる。

「つまりマツバさんは御遺志として、私たちに託された……と」

「そういうことだ。これは恐らく君たちがロケット団と事を構える上で何かしらの手助

けになると思ってマツバ自身が託したんだよ」
「なるほど……」
「私自身、君たちがどれ程の強さなのか今一把握仕切れていないが……あいつは冗談は言っても殊に勝負事については嘘はつかない。願わくば、マツバの最期の頼みが報われることを祈ってやまないよ。頼む」
　ミナキは深く頭を下げる。
「やり遂げてみせますよ。俺自身、ロケット団が逃げてままじゃ収まりがつかないしな」
「えぇ勿論ですわ。ミナキさん。今日はありがとうございました」
　エリカも頭を下げた。ミナキは頭を上げる。
「いやいや。これなら天国のあいつも喜んでるだろうよ。それじゃあさらばだ」
　ミナキはそう言うと西の方向に去っていった。
「そうなのですよね……マツバさんはお亡くなりになったのですよね……。せっかく良いお友だちになれるかと思った矢先に悲しい限りですわ」
　因みにマツバの葬儀はエリカの入院中、スズの塔にて行われた。入院中の人を除いた全てのリーグ関係者が参列し、レッドも通夜に焼香だけしに行った。
　他にもエンジュの市民やエンジュ大学学長やエンジュ市長をはじめとする著名人た

ちも参列。総計一万人以上の人々が一人の英雄の死を悼んだ。
「そうだな。マツバさんが早く成仏できるように早くロケット団もつぶさないとな」
「ええ。全くその通りですわ。ところで貴方、これからどう致します？　まだ次の地方も決まっていませんしとりあえずアサギへ行きますか？」
「いや、その前にチョウジに行きたい」
「あら、どうしてですか？」
彼女が尋ねた。
「うん。ちょっとヤナギさんに用があってさ……」
そういうわけで二人はチョウジタウンへ赴く。
ジムは留守にしており、いかりの湖へとむかった。
―同日　午後３時３０分　いかりの湖―
湖に行くと釣りをしているヤナギが目に入った。
レッドはすぐに声をかける
「おお。レッドか。どうしたのだ」
「あの……一つお願いがあって」
「ほう」
ヤナギは釣竿をクーラーボックスに立てかけてレッドの方へ体を向ける。

「ヤナギさん。俺たちと、真剣勝負をしてください！」
　レッドにとってフリータイプのヤナギに勝ってこそ、本当に強くなれた証なんだと信じてやまなかったのだ。
「うん？」
　ヤナギは怪訝な表情になった。
「俺、あの戦争の時ヤナギさんの本当の力を見てこれを打ち破ってこそ真に強くなったと言えるんじゃないかって思ったんです。ですから、どうか」
　レッドは深々と頭を下げて頼み込む。
「なるほどのう……」
　ヤナギは体を湖の方向へ戻し、折りたたみ椅子に座り直す。
　エリカも頭を下げる。
「私からもお願いしますわ。全国でも随一の強さを持つと噂されるヤナギさんの全力と戦ってみたいと思うのは最強を目指す者として当然ではないでしょうか」
　周囲に一分ばかり沈黙が漂う。
　しかし、次に出たヤナギの一言は冷徹な物だった。
「認めぬ。帰りなさい」
　そう言うとヤナギは釣竿を持つ。

「そんな。どうしてですか！」
　レッドが尋ねる。
「まだまだ私と戦うには力量が足りぬからだ」
「そ、そんなことないです。僕らはこの地方のジムを制覇し、ヤナギさん、貴方にも勝ったではないですか！　どうしてこれでも足りないと言うのです！」
　レッドはあくまでも食い下がる。
「その認識が甘いと言っておる。私はイッシュにこそ行かなかったが若い頃はこの体一つで国中を旅したのだ。まだジムバッジという概念そのものがない時代だがの。今よりも余程力のあるリーダーたちと戦い勝ち抜いて来たのだ。たかが十六のバッジで全力の私に挑むなど法螺も大概にせよ」
「グッ……」
「し、しかしそれで育ててきたヤナギさんのポケモンたちを私たちは破れたのですよ？」
「単一タイプの縛りの中で勝てたくらいで何を言うておるのだ。確かに氷タイプは私のもつ手持ちの中で有数の力を持つ精鋭ばかりよ。だがの。フリータイプにそれは遥かに及ばぬ。わざわざ特定タイプの為に策を弄しなくてよくなるからの」
　そうまで言われてしまうと彼女は反論できなかった。
　これまで戦ってきた中でレッドのエリカどちらの方がより活躍できたのかといえば

言うまでもなくフリータイプのレッドだからだ。
「ご両人よ。どうしても全力の私に挑みたければ全国すべてのバッジを揃える事だ」
「えっ？」
「４０枚のバッジを揃え、ＰＷＴにて見事ゴールドを下し、ポケモンマスターの称号を授与された暁には私もその勝負を受けよう。それまでは受けぬ」
「そうすれば、戦ってくれるんですね？」
レッドは念押しをする。
「男に二言は無い。それだけの力があれば戦う意欲があるものよ。前人未到の国を跨いだジムの制覇。しかと成し遂げてきなさい」
その後ヤナギは釣りに傾注する。

――

それから二人はヤナギのもとを離れ、いかりの湖で所在なく歩いていた。
「ポケモンマスター……か。大分先の話だな」
「目標が出来て良い限りですわ。全国を制覇した後に控える最後の敵はヤナギさんということですか」
「そういうことになるな……。はーぁ、頑張らないとな」
レッドが気合を入れ直すと、彼のポケギアが鳴り響く。

相手はウツギである。
「はい、もしもし……」
「やーやー久しぶりだね、レッド君！　色々あって遅くなったけどジョウト地方制覇、まずはおめでとう！」
ウツギは開口一番にレッドを褒めた。
「ありがとうございます」
「それでね、君たちにプレゼントしたいものがあるから是非とも研究所まで来てほしいんだ。いいよね？」
こうして、二人は研究所へと向かう。
―午後4時　ワカバタウン　ウツギポケモン研究所―
二人は研究所に到着すると、ウツギのデスクまで案内されて、大いに歓迎を受けた。
「うん。二人ともよく来てくれた！　ジョウト地方制覇、本当におめでとう！」
ウツギは心から嬉しそうな様子で話す。
「僕からもお祝いします」
ウツギの隣にいたツクシも同様に祝った。
「あ、あれ!?　もしかしてツクシ君？　白衣姿だから誰かと思ったよ……研究所に来たんだね」

レッドは思わずそう驚く。

ツクシは白衣に身をまとい、実験の最中だったのか防護メガネをかけていた。

「あら本当。よく似合っておいでですわ」

「へへ……ありがとうございます」

ツクシは軽く一礼する。

「それはそうと、本当によくやってくれるねぇ。ホウエンに行ったゴールド君さえまだ5つというのに……。これも二人の力というものかな」

ウツギは快活な様子で話す。

「そんな事ないです。やるべきことを淡々とやったまでの事」

「右に同じですわ」

二人は決然とした様子で言った。

「本当、二人の絆の深さには妬いちゃうね！　それで、二人はこれからホウエン、シンオウどっちに行くつもりなのかな？」

「あれイッシュの選択肢は……」

レッドは思わず尋ねた。

「イッシュ地方は国を跨ぐ上にあちらとは渡航制限もある。そう簡単には行けないんだよ……」

「あぁそうなんですか。俺としてはホウエンに行こうと思っています」
「へぇ……これからホウエンは暑くて大変だと思うけどいいのかい？」
　ウツギは心配そうに言う。これから季節は夏に向かい、ホウエン地方は南西に位置する場所である。暑さも尚更なのだ。
「いいんです。俺、ホウエンで一つやりたいことがあるんで」
「やりたいこと？」
　レッドはリュックからゴーゴーゴーグルを取り出す。
「このゴーグル、前の戦争でバンギラスと戦った時に凄く役に立ったんです」
「なるほど。だからあの場に居たリーグの軍勢の中で君だけがあれを倒せたという事か……」
「はい。ですから、これを与えてくれた人に礼を言いたいんです。これがホウエンで作られたものということはワタルさんが教えてくれましたし、あとは探すだけです」
「そういう事か……。見つかるといいね。分かった。ミシロタウンのオダマキ博士にはしっかりと君が来ることを伝えておくよ」
　ウツギは話しているうちにずれてきたメガネを直しながら言う。
「いよいよホウエン地方ですか。あまり知り合いのリーダーも居ませんし、耳学問で知ったこと以外は本当に未知の土地ですわね」

「新しい発見があっていいじゃないか。ところでどうしてオダマキ博士に?」

レッドが尋ねる。

「16枚以上バッジを取得したトレーナーは新たな地方に来た暁にその地方に居る博士から御三家のいずれかを貰えることになっているのさ。そうでなくてもオダマキ博士自身も伝説の夫婦に会いたいと楽しみにしているんだよ」

ウツギはそう語る。

「もうそんな遠方にまで私たちの名前が……」

エリカの表情が少し強張る。

「イッシュ地方のアララギ博士にも君達二人の名前は届いてるみたいだからね。ヘタすれば全国で君たち二人の名前を知らない博士やジムリーダーとかはいないと思うよ」

「うっかりな事は出来ませんわね……」

彼女が続いてそうぽつりと言った。

レッドがウツギに尋ねる。

「そうですか。それじゃホウエンに着いたら?」

「カイナシティという街で船がつくから、そこから降りればオダマキ博士に会えると思うよ。ま、そういうことだから行ってらっしゃい!」

「はい!」

「あ、あとそうだ。はいこれ、餞別品のマスターボール」
そう言うとウツギは、二人に一つずつマスターボールを手渡す。
レッドは遠慮がちにこう返した。
「え？いいんですか？」
「いやー、研究用で捕獲する際に特別に仕入れることがあるんだけど、有りすぎても困るしって事で、トレーナーじゃない僕とかが持つよりレッド君やエリカさんが持っていたほうがいいと思うんだ。だからあげるよ」
「有難うございます」
二人は深々とお辞儀をする。
「あと、何か質問でもあるかい？」
ウツギが尋ねたのでレッドは以前から気になっていたことを尋ねる。
「あの、博士。どうして一番最初にこの町に来たとき、オーキド博士の命に逆らってまでポケモンをわたさなくていいなんて言ったんですか？」
ウツギはそれに対し少し間を置いて答える。
「君たちのポケモンに対する姿勢を見ててね……その、トレーナーをやってた頃のこと思い出したんだ」
「そうだったんですか……」

「僕だって急に長年付き合ってた相棒と別れろなんていわれたらゴールド君みたいに悲しがったろうし、レッド君のように激情にも駆られていたと思う。そう考えると、どうも心が揺らいでね……」

ウツギは沈痛な表情で当時を振り返る。

「それ以外にも、エリカさんのようにポケモンリーグが、ましてやオーキド博士がこんなことを言うのかと疑問を持った。それでワカバに行くまで色々と考えて、結果、今一度オーキド博士から確たる根拠を聞き出してから……と思ったんだ。君たちの持つポケモンは大事な財産でもあるしね。結局なんだか見当のつかない返事をされて立ち消えになったけど……」

「なるほどそういうことだったんですか……」

「あれ以来オーキド博士は研究会にも顔を出さなくなって、挙げ句の果てにこの前は辞表を出すしで訳が分からなかったよ。本当、何処行ったんだか」

レッドは事の真相を話そうか迷ったが、確たる証拠もないのにオーキドを悪者にしたところで今は何の意味も無いと思い、その場は収める。

その後、二人はもう少しだけ世間話をして研究所を去った。

そして二人はいよいよホウエン地方へと向かう為にアサギシティへと飛んで行った。

―午後6時　アサギシティ―

二人は明日からの準備の為に港のあるアサギシティで休養する事にした。
「はぁアサギか。もうすっかり暗くなったな」
もう日は沈みかけており、空は大半が暗くなっている。
「もうここも四度目ですか。もう暫く来ることはないと思うとなんとも名残惜しいですわね」
エリカは少しだけセンチメンタルになっていた。
「そうだな。ジョウトの旅路もここから始まったんだよな……。そう思うとなんとなく思い出深い街かもしれない」
「ええ……」
「さてと、じゃあポケセンに……」
そうこう話していると、ミカンが親しげに話しかけてきた。
「あ、レッドさんにエリカさん！」
「お、ミカンさん」
「こんばんわ！　ここに来たという事はもしかして明日ジョウトを発つんですか？」
ミカンの質問に対し、レッドは頷いて
「うん。ホウエン地方に行こうと考えてるよ」
と答えた。

「ミカンさんはあかりちゃんのお世話ですか？　精が出ますわね」
　エリカが尋ねた。
「はい。一度体調崩してからどうも気がかりで……。今のところはどうにか元気ですけど」
「そうですか。健康には十分注意してくださいませね」
「それは、勿論です。それにしても……そうですか、ついこの前来られたと思ったらもう旅立ちですもんね……。時の流れは早いものです」
　ミカンはしみじみとした雰囲気で言う。
「ミカンさんはホウエン地方について何か知っている事はありますか？」
「そうですね……ここと違うことと言ったら海が多いことでしょうか。ジムは3つぐらい島にあるようですよ」
「そうですか」
「海が多いか……」
「あとはこの時期からは海に関する行事も盛んになって、ミナモシティというところでは隣のトクサネシティまでの遠泳なんかかが結構なブームになってたりするんです！」
「へーえ、よく知ってるね」
　レッドは素直に関心しているが、エリカが突っ込みを入れる。

「知らないんですか？　ミカンさんは世界を股にかけたバックパッカーですよ？」
「へ？」
　レッドは当惑したが、そんなレッドもお構いなしに、ミカンは続ける。
「この前はホウエン行き尽くしたんですよねー。ジムリーダーの方達ともそれなりに親交も深められましたし」
「そんな一面あったんだ……意外だ」
　レッドは目を白黒にしている。
「今度はどこへ行くご予定ですか？」
　エリカがそうミカンに尋ねる。
「うーん、シンオウなんかが興味ありますね。あ、そうそう、私の見るホウエンはあくまで一旅人からの視点ですから。レッドさんやエリカさんみたいにトレーナーからの視点で見ると結構違ったりするかもですね」
「へぇ、なるほど……、それにしても、感心するね。同い年でここまで旅するなんて」
「そんな大した事じゃないですよー。あくまで趣味ですし」
　ミカンは照れながら言う。
「あの、明日はお見送りしますよ！」
「本当？　嬉しいなぁ。ミカンさんに見送られたら心置きなくジョウトを後に出来る

よ」

レッドは嬉しそうに言う。

「もう。レッドさんたら……」

ミカンは少しだけ頬を赤くして言った。

「私としても嬉しい限りですわ。是非ともお願いしますね」

かくして、二人はミカンと別れた。

―午後6時40分　アサギシティ　ポケモンセンター　フロント―

いつもの通りチェックインを済ませると、ジョーイが荷物が届いていると話す。

「あら……恐らく私宛ですわ。貴方、先にお部屋へどうぞ」

「ん……そうか」

そう言ってレッドは階段を上がり部屋へと向かう。

―午後8時30分　同所　309号室―

この日の夕食はステーキにボンゴレ、鯖の竜田揚げにニラの胡麻和えといったラインナップだった。

「おお。今日は豪勢だな」

倹約を旨とする彼女の食卓にステーキが上がる事などレッドがこれまで旅してきた中で初めての事であった。

「ええ。今宵はジョウトに居る最後の晩ですもの。それに、私も久しぶりに台所に立ったものですからついつい奮発してしまいましたわ」
「そっか……確かにそうだよな。よーしもりもり食うか！」
　ポケモンたちも共に食卓につき、豪華な食事に盛り上がりこの旅で一番賑やかな晩餐となった。
　―午後９時２０分―
「ふー。食った食った……」
　食器もあらかた空になり、満腹となったところでエリカが尋ねる。
「あの……貴方？」
「なんだい？」
「今晩のお風呂ですけれど……私が先に入っても宜しいですか？」
　彼女は思い切った様子で言う。
「え、いや別にかまわないけど……どうしたんだよ」
　一番風呂は毎回レッドに譲っている彼女にしては珍しい提案であった為レッドは不思議に思っていた。
「身を清め……いえいえ、あの、たまには私が先に入ってお風呂を綺麗に掃除した状態で入ってもらおうかと」

エリカは咄嗟に思いついた風の事を言った。
「いや、別に俺はそういうのいいけど」
「貴方、今宵はジョウト最後の夜ですよ。身をより清めて明日を迎えませんか!?」
彼女は半ば必死な様子で問いかける。
「わ……分かったよ。先に入って」
そういう訳でエリカが先に入浴する。
―午後10時30分　風呂場―
エリカは40分ほど入浴した後に出て、思いつめた様子でレッドに入るよう勧めた。
レッドはピカチュウと共に風呂に入る。
感電防止のため電気袋のある頬から上はつからせないようにしている。
「はぁ……なんか今日のエリカ様子おかしいな……」
「ピカピー」
ピカチュウも同様に心配しているようだ。
「もともとなにを考えてるか読みにくい奴だったけど、今日は一段と酷いぞ……ほんとどういうことなんだろうな、ピカチュウ」
「チャー」
と、言いながらピカチュウは風呂から出ようとした。余程風呂が熱かったのだろう。

「コラコラ、ちゃんと百まで数え……」
レッドはピカチュウの肩を捉えて風呂に入らせようとする。
しかし、力が強すぎたせいか顔までつからせてしまう。お湯はあっという間に電気を通し、レッドは電気の直撃をうけた。
「ぎゃあああああ!!」
レッドはあまりのことに気を失ってしまった。

シロガネ山。
ポケモントレーナーの極みに達した者のみ入山が許されるカントーとジョウトを別つ大山。
そこは一般人が安易に足を踏み入れると、死をも覚悟しなくてはならないほど獰猛なポケモンたちがおり、常時百鬼夜行とばかりに蠢き続けている。
そんな山に一人の男が再び登って行く。
赤い帽子をかぶり、大きなリュックを背負い、様々な記憶を想起させながら。

―２００９年　８月１３日　午後３時　シオンタウン―
レッドはガラガラを成仏させた後、ポケモンタワーでのロケット団の悪事を挫いた。

成仏できて良かったと思いながら彼は宛もなく炎天下の中をさまよっている。

「暑い……」

襟を引いたり戻したりして風を作りながら自然と口からそんな言葉が出てくる。烈日はアスファルトを照り返し、彼の不快指数を更に上げていった。

太陽の方向へ向いてはダメだと思い、彼は視線を下に遣る。帽子が影になるので気休めではあるが少しは楽になる。このままでは日射病で倒れかねないと思い、うつむいたままの姿勢でポケモンセンターの方向へ足を進めた。

十歩ほど歩くと道端にハイパーボールが転がっていることに気づいた。これは比較的高価な品物である。

彼はボールを持って視線を前方に向ける。どうやら日傘を差してるようだ。日傘の下には朱色の袴と白い足袋、草履が見える。

視線に気がついたのか、それともふと思ったのかその人物はレッドの方を向き、ゆっくりと彼の方へ近づいた。

ふと気づくとそこには朱色の袴に黄色い着物を着た容姿端麗な少女が立っていた。

レッドはその清楚で可憐な姿に強い衝撃を受けた。

彼が今まで会った中でこれほどまでに美しい女性は居なかった為である。

帯締めに香り袋があるのか、そこから馥郁(ふくいく)たる白檀(びゃくだん)の香りが鼻腔を刺激し、見る者を

更に惚れ込ませる。
彼が呆然としているのをよそに彼女は掌に乗っているハイパーボールを見た。
「まあ……。ボールを拾ってくださったのですね。ありがとうございます」
凛とした、しかしどこか可愛らしさのある声が彼の耳にじんわりと響いた。
彼女は買い物袋にハイパーボールを１００個ほど詰めている。どうやらフレンドリィショップの帰りなのだろう。
「あ、あぁ！　はい。ここに落ちてありましたので……」
レッドは話しかけられて正気に戻り、慌てて説明した。
「あら……そうでしたか」
彼女はそう相槌を打った。にこやかな笑みである。
「あの……随分と買われてますけど……」
「あぁ、これですか？　フフ。そこのショップでハイパーボールが丁度安売りだったのですよ。４０％ＯＦＦで、私は会員ですからさらに１０％割引されて半額で手に入りましたの。ですからついつい買ってしまいましたわ」
彼女は穏やかな口調で話す。
「え!?　本当ですか？　じゃあ俺もすぐ買いに……」
レッドにとっても耳寄りな話だったためショップの方向に向かおうとする。

「それは残念ですわねぇ。もう私がお店を出る頃には売り切れてしまいましたわよ」
「あ……そうすか……」
レッドは肩を落とした。
「あら……。もしかして貴方、レッドさん……ですか？」
彼女は顔を覗き込んだ後にふとそういった。
「え!?　ど、どうして俺の名前を……」
どこかで会ったことでもあるのかと思い思考をめぐらせるが全く思い当たらない。
「あらやっぱり！　ウフフ。マチスさんが仰せになったままのお召し物ですわね。赤を基調とした服に、その赤い帽子。まさにその名前に相応しいですわね」
彼女は快活な口ぶりで言う。
「へ……!?　貴女何者なのですか？」
マチスとはクチバシティジムリーダーの名前である。まるで知り合いかのように話す彼女に彼は驚きを隠せない。
「これを見ればお分かり頂けるかしら」
エリカは懐から虹色に輝くバッジを取り出し、レッドの前に見せた。
間違いない。レインボーバッジである。トレーナースクールに居た頃教科書で見たポケモントレーナーにとっては勲章とも言うべきリーグ公認のジムバッジだ。

「こ、これはレインボーバッジ……ということはまさか！」
「はい、私、タマムシシティのジムリーダーを務めるエリカと申します。以後よしなに」
彼女は恭しく頭を垂れた。レッドは目の前にいる少女がジムリーダーである事に緊張すると同時にその名を胸に刻む。何度か華道の師範としての彼女はテレビで見たことはあったが実際に会うとその衝撃は計り知れなかった。

レッドはエリカと初めて出会った当時の夢を見ていた。
そうだ。あの時エリカと出会って、一生懸命修行してエリカに勝ったんだ。
今からして思えばその当時から彼女には驚かされっぱなしで……そして誰よりも好きだった。
そんな事を回想していると、レッドはだんだんと意識が戻ってきた。
―２０１３年　５月１６日　午後１１時　アサギシティ　ポケモンセンター　３０９号室―
目を覚ますと、まず大きな影が目に入った。
眩しくてすぐには判別はできなかったが、少しずつはっきりとしてくる。
「あら、お目覚めになられましたか……」
「え……エリカ!?」

そして、完全に目が覚めるとすぐ側に彼女の顔がある事に気づく。
レッドはそれに対し大きく驚く。
そして、思えば後頭部や首筋に温もりを感じる。
ここで漸くレッドはエリカに膝枕にされていることへ気が付いた。
因みに服は着せられている。恐らく彼女がやってくれたのだろう。
「全くもう……大変だったのですよ？　ピカチュウが慌てて知らせてくれたから良かったものの、あと少し遅れていたら溺死されていてもおかしくなかったのですから……」
レッドはそれを聞いて、気を失う前の事を思い出した。
「あぁそっか……ピカチュウが知らせてくれたのか……よかった……」
「ええ……」
それから数秒ほど沈黙が流れる。
「なあ、エリカ……」
「はい」
「今気づいたんだけどさ……、もしかして、それって……和服？」
それだけではない。レッドはあの時印象に残っていた白檀の香りも感じていた。
帯に近いところにいるせいか猶更匂いは強くなる。
「はい。貴方が喜ばれるのではないかと思って……。お好きですものね。私のこの姿」

エリカはレッドの顔に近づきながら言う。
「そ……そうだけど……どうして」
「お忘れに……なられたのですか。私から……お誘いすると」
そう言うと、彼女は目を閉じて膝枕の姿勢のままレッドの唇にキスをする。
レッドはそれに頭中が蕩けるような感覚を覚えた。彼女の唇はとても柔らかく、とても良い花の香りが鼻腔にまで伝わった。
一分程経っただろうか。彼女は唇を離し、レッドの顔を眼を少し潤ませながら見る。彼女の頬は紅潮しており、表情は影も手伝って少し切なげだった。
「ふぅ……レッドさんの唇、とてもおいしかったですわ……」
「エリカ……」
つい昨日までは考えられなかったことが次々と起こりレッドは半ば放心状態となっていた。
「も、もう！　この程度の事で上の空になってどうするのですか……これからもっと……す、凄いことをしようというのに」
彼女は精一杯虚勢を張っているが、その実声や体は微かに震えていた。
エリカが勇気を出したかのように襟に手をかけようとしたところでレッドが話しかける。

「なあ。エリカ……お前、震えてないか？」
「そ、そのような事、ありませんわ！　震えていると言うなら、これは武者震いというものです！」
「そ……そうか」
　このように年長者の意地としてか、女としてのプライドか。とにかく強く出ようとする彼女の姿はレッドにとってとても愛おしく見える。
　そして、このように焦っている彼女の姿を見るとエリカも緊張しているのかという安心のせいかレッドは逆に落ち着いてきた。
「なあ……ちょっと立ってみないか？」
「は……はい」
　レッドとエリカは互いに立つ。
　エリカの姿は夢で見たのと（日傘以外は）全く同じの着物姿であり、漂う香りまで一緒であった。
「やっぱり……同じだな」
「え？」
「ほら、一番最初にシオンタウンで会った時と」
　レッドの一言にエリカはクスリと笑って

「わざと……ですわ」
「え、そうなの？」
「ええ……。一番最初に私を見たときの貴方の表情を思い出しましたら、この姿が一番貴方にとってその……情がそそるのではないかと……思いまして」
彼女は赤くなりながら話す。恥じらいのせいかレッドに目が合っていない。
レッドの中の血が滾りはじめる。
確かにそのとおりである。あの、憧れであった彼女が今、自らの物となる為にあの時と同じ姿で立っているのだ。愛おしく思わない筈が無い。
「エ……エリカ！」
レッドはエリカを思い切り抱きしめた。
今度は抵抗しない。
本当にエリカは自分を受け入れてくれたのだと思うとレッド自身にとってそれはたまらなく嬉しかった。
抱きしめていると、熱と共に激しい鼓動がレッドにわずかながら伝わる。分かっていた事だが、彼女もかなり緊張しているのだ。
「貴方……」
そうしていると、エリカの方もレッドの背中に手を添え、抱き返す。

永遠とも思えるこの時間。二人は互いの体温を十分に感じ取った。

数分して、レッドの方がエリカを離す。

「そ……それじゃあ、脱がすよ」

「いえ……私が……」

考えてみれば自分に和服の脱がせ方など分かる筈もない。レッドは即座に悔いた。

彼女はすかさず袴の紐を解き、袴を脱ぐ。よほど恥ずかしいのか、袴を脱いだ後はゆっくりと長着（上着）の襟に手をかける。

そして肩、腕へと片方ずつゆっくりと衣を外していく。

やがて彼女は素肌の上に白襦袢一枚の姿になった。

今までレッドが見た事ないほど体のラインがしっかりと現れており、清楚な着物の下に隠された肉感的な裸体がすぐそこにあった。

彼女は襦袢の襟を強く持ったまま動かない。やはりまだ躊躇しているのだろう。彼女の顔は今にも火が出そうなほどに赤くなっており、過呼吸気味なほどに呼吸を繰り返している。

「なあ、エリカ」

「も、申し訳ありません。その……殿方に……ら、裸体を晒すなど初めての事で……」

「そうじゃなくてさ……。もう一回抱きしめてもいい？」

レッド自身何枚かの服の上で感じる彼女の体ではなく、裸体同然の彼女の体をこの身にうけてみたかったのだ。

エリカは数秒だけ黙した後

「は……はい。どうぞ」

と答える。レッドは有無を言わさずすぐにもう一度抱きしめた。

その直後、レッドはすぐにある事に気づく。

「お前……もしかして、下何も穿いてないの？」

彼女はレッドに顔をそむけつつ、小さく一度頷く。

「いえ、普段はさらしですとか、胸布団などをつけるのですが、今日は……その……すると心に決めてましたから……」

彼女はか細い声で言う。

「そ……そうか」

レッドはそれを聞いてさらに興奮を増進させる。

すると、エリカが思い切ったように小さな声で言う。

「あの……貴方……あたっています……」

「え……うわわわわ！　ごめん！」

生理現象の為仕方ないこととはいえレッドは反射ですぐさまエリカから離れる。

そんなレッドを見て、彼女はほくそ笑んで
「良いのです……。レッドさんも……男の子……ですものね。それに今日は貴方に……純潔を捧げるのですから。この程度のことで言う事もありませんでしたね」
「エリカ……」
これまでの行動や言動からなんとなく想像はついていたがエリカは処女だった。
「貴方……来て。私を……女にしてくださいまし」
エリカは潤んだ目でレッドを誘い込む。
レッドはこの一言で理性の糸が切れ、エリカに襲い掛かる。
それからのことは書くまでもない。

しかし、二人の行為はいよいよ本番に入る前に邪魔が入って中断することとなった。
邪魔が入った事で我に返って、どっと疲れがきたこともあり、そのまま二人は同じベッドで幸せに満ちた表情でジョウト最後の夜を終えた。

―5月17日　午後1時　アサギ港　出港ゲート前―
二人はいよいよジョウト最後の日を迎え、アサギ港に向かった。
港内に入ると、ミカンが待っており、二人はミカンの送別を受けている。

「もう行ってしまうんですね……」
　ミカンは、儚げにそう言う。
「またいつか会えますよ。それまで良い子にしてるのよ。ミカンちゃん」
　エリカは、愚図る子どもを留守番させて、お使いに行く母親を演じているかのように、いたずらっぽくミカンに言う。
「もう……子ども扱いしないでください！　あたし一応15歳なんですよ?」
「15歳にしては少し身体の発育が遅れていますわね……」
　エリカはミカンの体を見ながら言う。胸が俎板なのはともかくとして、典型的な幼児体型であり、身長も低めである。
「ほ……ほっといてください！　あたしはこれからエリカさんみたいな大人の女の体型になるんです！」
　ミカンは意地を張ってそう言う。
「ふふ……左様ですわね。この旅が終わるころにはさぞかしアカネさんやイブキさんも嫉妬するくらいのグラマラスな体型になっているのでしょう」
「そ……そうです！　ミス・ジョウトに選ばれるくらいの美しい女性になってみせますよ」
　ミカンは冷や汗をかきながら言った。

「へぇ……そうですか。期待していますわね」
　レッドはそんな会話を穏やかな気持ちで見ていた。
「はぁ……。絶対心の中じゃそう思ってないよ……。まあいっか。ところでお二人はトイレは大丈夫ですか？」
「うーん……そうですわね。船内は混むかもしれませんし、一応今の内に行っておきますわ」
　そう言ってエリカは女子トイレへと向かった。
　この場はミカンとレッドの二人きりになる。
「いよいよホウエンかぁ……」
　レッドは眼前に見える電光案内版を見ながら言う。
　午後2時　カイナシティ行き。あと一時間で長く、いろいろな事があったジョウトともお別れなのだ。
「レッドさんにとってこの地方で一番印象に残った事はなんですか？」
　ミカンはそれとなく尋ねる。
「うーん……一番は中々決められないですけど……色々な人に会って知れた事かな」
「い……色々な人って？」
　ミカンはレッドに近づき興味津々な様子で尋ねる。

「何と言ってもヤナギさんが一番印象深かったかな……。初めて完膚なきまで叩きのめされたし……。とんでもなく強かった」
「そ……そうですか。そうですよね……」
　ミカンはさすがに師匠に勝てるわけがないとばかりの様子である。
「でも、その一方でエリカと一緒に一生懸命どうにか頑張って勝とうともがいて、道を模索して……それでやっと勝てたときは本当に嬉しかった」
「そうですか……」
「ああ、勿論、ミカンさんにも感謝しています」
「え!?　あたしにですか?」
「そうさ。正直ヤナギさんに負けたのは実力差というよりも仕方がなかったんだという思いが強かったんだけど……ミカンさんに負けて、ようやく俺は一からやり直さないといけないって自覚できたんだ」
「なるほど……」
「それを分からせてくれて今は本当に感謝している。ありがとう」
　レッドはミカンに深々と頭を下げる。
　ミカンは少々黙した後に
「あの……ちょっと来てください」

「え……ちょっとぉ!?」

ミカンは存外強い力で港の建物の外に出て、人気の少ない裏のところまでレッドを連れる。

「はぁ……ミカンさん。どうしたんだよ急に」

「あの……レッドさんに一つ聞いてほしいことがあるんです」

ミカンは赤くなりながら手を組んで言う。

「え、何?」

「あたし……小学校と中学校の初めの頃まで体が小さいとかでいじめられて……遂には引き篭もっちゃうダメな子だったんです」

「へぇ……」

レッドは意外な様子で聞き続ける。

「でも、引き篭もっている時にテレビでレッドさんについて特集組んでいたんですよ」

ロケット団を壊滅した上に凄まじい速さでリーグを制覇したレッドというトレーナーはマスコミの注目するところとなり、度々特集がくまれていたのだ。レッドからしてもそれは知っている事だったので聞き流す。

「それで、同い年で一生懸命頑張ってるレッドさんをみて、これじゃあいけないなって思って……そこからトレーナーたちの憧れであるジムリーダーになろうと心に決めた

んです」
「そうだったんですか……」
「それからレッドさんにはずっと……憧れの気持ちで見続けていたんです。一度あたしに負けた時もあれはまぐれだと思ってて本当に勝てたとは思わなかったくらいですから。でも……この前の戦争でエリカさんを命張って守っている姿を見て……あたし……」
　ミカンはそれ以来黙してしまった。
「そ……そんな。ダメだよ。俺にはエリカがいるんだから」
「分かっています。でも、この気持ちどうしても抑えられなくて……。あれ以来仕事もまともに手がつかないんです」
「そ……そこまで俺の事を……」
　レッドからしたらそのことは予想外のことである。
「ですから……叶わない想いならばせめて思い出に……」
　ミカンはレッドにそっと抱き着いて、踵を上げ、すかさずキスをした。
　エリカと比べれば素朴な味わいだったが、そこがまたそそるものがある。
「ミカンさん……」
「えへへ……ファーストキス……あげちゃいました。ありがとう。これで……区切りが

できました」

そういうとミカンはレッドに背を向ける。

「ごめんなさい……俺、エリカを裏切れないから……ミカンさんの気持ちには応えられなくて」

「いいんです……。これで全て……おしまい。エリカさんには、宜しく伝えておいてください。あと、全国制覇への旅……頑張ってくださいね」

最後は涙声になりながらミカンはその場を走り去って行った。

ミカンが去った場所には三つほど丸く湿った跡が残っている。そして、物陰には一つの影があった。

―午後1時45分　同所　埠頭―

二人は乗船時刻が来たため、船に向かっていた。

「さてと、いよいよか……気張っていこう」

「ええ……左様ですわね」

エリカは少し元気がなさそうだった。

「ん？　どうした？」

「何でもありませんわ。行きましょう」

それと同時に少し不機嫌な様子である。要領を得ないまま二人はカイナシティ行き

の船に乗ったのだ。
こうして、ジョウトを離れ、夫婦の活躍は南国の島へと舞台を移すのである――
―第十二話（下）　長い想いは結ばれて　終―

ホウエン編（２０１３．５―２０１３．１０）

第十三話　麒麟児の憂鬱

―２００８年　１２月１７日　午前１１時　セキエイ高原　ポケモンリーグ　第一会議室―

「ワタル君。貴方の政策ではますますリーグは衰退していく一方ですよ！　金は天下の回り物と申しますように、お金は使わなければ死んでいくのです！」

「し、しかしこのままの財政状況では近いうちにリーグは破綻します！　ここは財布の紐をきっちりと締めて……」

理事長選挙。それは五年に一度のリーグにとって最大のイベントであり、儀式でもある。

二人はジムリーダーや四天王、マスコミなどが見守る中討論をかわしている。当時の理事長は一介のポケモントレーナーから短期間で理事長に上り詰めたダイゴ。それに対抗するのは中卒というさえない学歴でありながらもドラゴン使いとしての力だけで理事長候補として大いに期待されてる若き新星、ワタルであった。

「その証拠はどこにあるのです。実際に私が理事長に就いて以来、ジムのある街の経済

効果は著しく、リーダーへ対する信頼感調査も過去最高なのですよ?」

ダイゴはフリップを見せながら言う。

「話をそらさないでください！　どんなに外の成果があがろうとこのような持ち出しのままではいずれ財源が枯渇……」

このような議論を続けているうちに議場のドアが開かれた。

「待ってください！　ワタルさんが仰せになっている事は事実です！」

ドアを開けたのはシンオウリーグのチャンピオン、シロナであった。

「何を言っているんだ君！　急に議場に入ってきておいてなんて事を」

ダイゴの発言が終わるまでもなく、シロナは二人の場所まで割って入り追及をはじめた。

「貴方が理事長に就いてからの五年間。リーグの財務諸表を全てチェックさせて頂きました」

シロナはワタルとダイゴに分厚い書類を手渡した。

「シロナさん。もしかしてこれが……」

「そう。この理事長の金遣いの荒さを示す重大な証拠です！　ここ数十年のリーグの財務諸表と比してもこの純資産の減りようは明らかに常軌を逸しており、もう五年このままの状態が続けば破綻することは火を見るより明らかです。貴方のお父上の会社、デボ

ンの資金で注入している部分もあるとはいえ、ほとんど貴方、リーグのお金でバラ撒いてるじゃないですか！」

シロナの追及にダイゴはそれまでの余裕に陰りが出始める。

「そんなことはない！　これまでの投資の結果が出てくるのはこれからの話だ！　もう五年続投すれば二倍三倍になって返って……」

「理事長。ポケモンリーグは投資ファンドでも証券会社でもないんです。貴方の勝手な使い込みでもしリーグの資産が全てなくなったらどうなると思っているのですか!?こんな無計画でかつ無責任なお金の使い方をする人間に新たな五年を任せてもいいのでしょうか?」

「話にならない！　議長。これは明らかな進行妨害です！　退場命令を！」

「議長、これは以前より何度もご忠告申し上げた事なのにも関わらず、是正の兆候が見られなかったためにリーグの為を思ってやむを得ず行ったことです。規則に反していることは重々に承知しておりますが、どうかお聞き届けの程を」

シロナは片膝ついて議長に屈した。

議長はシロナの提言を認め、すぐに下がることを条件に不問に処す。

シロナは去り際に肩を叩く。

「後宜しく。貴方ならあの理事長に勝てるはずよ」

「はい。ありがとうございます」

ワタルはシロナにお辞儀をした後、ダイゴに向き直って一転して反撃する。

「先程彼女が言ったとおり、このままの放漫経営ではリーグはいずれ潰れてしまいます！　このような体制を改め、使途を精査した上で健全なリーグ経営をしていかねばならない！　私はこう考える次第です」

「ポケモンリーグはこれからも発展していかなければならないのだよワタル君！　堅実、健全大いに結構！　しかしそのような守りばかりでは到底これからの新たな時代を生き抜いてはいけない！　リーグは時代から取り残されてしまう」

ダイゴの意見を遮りワタルは寸鉄の一言を放つ。

「貴方がやっている事はリーグを発展させてなぞいない。リーグを財布にしているだけだ！」

そしてワタルは独自に調べ上げたリーグ関係各所の意見を取り上げた。

そこには更なる資金増援を求める意見がぎっしりと詰まっておりワタルが言ったとおりの事が現実に起こった事を指し示した。

これでダイゴは致命傷を受けた。財政窮乏に加えて放漫経営の露呈。その後のポケモンバトルにも惜敗してダイゴは選挙に敗北。理事長の座を追われることになった。

――――

―２０１３年　５月１７日　午後２時３０分　シェルフ―号　廊下―

波瀾万丈であったジョウトの旅を終え、二人は新天地、ホウエン地方を目指していた。この船でアサギシティから７００ｋｍほど離れたカイナシティまで向かう。

エリカは何故か不機嫌であったため居づらくなった彼は甲板に出ようと廊下を歩いていた。

すると偶然二人の男が話をしていた。一人は新聞を持っている。

「全くジョウトでは参ったよ。あの戦争だか紛争のせいでエンジュ観光どころかエンジュにすら行けなかったし、他の街では支援者や避難民の寝床確保だかでろくに宿も取れやしねえし。せっかく長めの有休取れてジョウトまで足を運んだのにこれじゃ疲れに行ったようなもんだ」

エンジュでの騒乱はリーグやレッドの奮戦でどうにか収まったがその残火は未だ燻っている。

数十万人規模もの難民たちを発生させたこの騒乱は主に住居の問題で近隣の街は頭を抱えていた。とりあえずの一時しのぎで体育館や市民ホール、宿泊施設などを避難所として用い、仮設住宅に順次入っていく事になってはいるが、その移行の段階で旅行客や出張族のサラリーマンなどを中心に不満がたまっていた。

騒乱が鎮圧されてからはエンジュへ戻り再建事業の手伝いや普段の生活に戻る人も

出てきてはいたが当地はより深刻な住居不足に変わりはないため半年程はこのような状況は解消されないと見られている。

「本当だよなぁ。しかもさっきニュースで見たらあれもっと被害は少なく済んだかもしれないんだって？　たくもっとしっかり働いてくれよなー。これじゃあ何のためのリーグか分かりゃあしねえよ」

そんなことをいいながら男は新聞を丸めてゴミ箱に投げ入れ、レッドの横を通り過ぎる。

新聞の一面には『爪痕未だ深し　帰れない古都の住人たち』と題された特集記事がある。彼は憂鬱な気持ちになりながら甲板に出る。

―甲板―

船首の先には青い海が広がっている。アサギからは離れ、播磨灘をかきわけながら航行している。

天候は穏やかであり丁度よい温度の潮風が肌を撫でている。目の前には日光浴用に並べられたデッキチェアが何脚かあった。

レッドは海を眺めるために船首へと歩く。

「おや君……もしかしてレッド君か？」

すると途中でデッキチェアで寛いでいた男が半身を起こし、サングラスをずり下げて

レッドに話しかける。
　男は銀色の髪に目鼻立ちの整った気品のある顔立ちをしており、赤いアスコットタイに波状の模様をしたスーツを召した格好をしている。
「へ……すみませんがどちら様ですか?」
　レッドは面識がないため申し訳なさそうに尋ねる。
　ダイゴはサングラスを胸ポケットに差すとデッキチェアからおもむろに立ち上がり、レッドの前まで移動する。
「おや、君ほどのトレーナーが僕のことを知らないとはね……。僕はダイゴ。ワタル君の前の理事長だ。宜しく」
「前の理事長って事は……もしかしてリーグチャンピオンですか!?」
　レッドは思わず驚きながら言う。言われてみればまだ小さい頃にテレビで見たような気もすると彼は思った。
「シーッ。余り大きな声で言わないでくれよ。まぁ、少し前まではそうだったけどね……。リーグに篭もるよりも趣味で石を集めてる方が性に合ってると思って別の人にチャンピオンの座は明け渡したんだ。今はただのホウエンリーグの理事だよ」
　ダイゴは先程より小さい声で話す。
「あぁ……そうなんですか」

「レッド君は……。そうか、これからホウエンかい？」
「はい」
「エリカさんはどうしたんだい」
「あーあいつなんかこの船に乗ったときから不機嫌で……。まぁ時間が経てばなんとかなるでしょう」
　そうこうしているうちに彼女の気配がした為、レッドは後ろを振り返る。
「あら。ダイゴさんですか。お久しぶりです」
　案の定背後には彼女がいた。エリカはレッドを一瞥した後にダイゴへ声をかけた。
「やあ。直接会うのは数年ぶりかな。君のところの花にはよく世話になってるよ」
「花？」
「エリカさん……というか今から五代前のおじいさんが作った会社のお花さ。支社本社の受付に限らず応接間やトイレなどいろいろな所に置かせてもらっているんだ。とても綺麗で心を和ませるのに役立ってるよ」
「へぇ……って事はえっ!?　エリカって社長なの？」
　レッドは思わず驚きながら尋ねる。
「いいえ。私は株式を持っているだけですわ。お祖母様の代から実体の経営権は社員の方にお任せしています。年に一回の株主総会すらも代理の弁護士の方に出ていただい

てますし、ほとんど私は関与していません」
「そんな適当な……」
「まぁそれだけ安定的な経営が出来てるって事だよ。明治の創設以来業績は堅調で不況でもビクともしない。全く常に景気や物価なんかに戦々恐々としなきゃならないうちからすれば羨ましい話だよハハハ」
　ダイゴは快活な様子で笑う。
「いえいえ……。それよりもダイゴさん。どうしてここに？」
　ダイゴは少し間を置いて答える。
「先月の戦争の報告を聞くためにリーグに行ってきたんだ」
「あぁ……そうでしたか」
　レッド、エリカ共に少し表情が暗くなる。
「まぁ聞けば聞くほど本当に大変な騒ぎだったって分かるよ……。正直君たちの働きのおかげで出動せずに済んでホッとしたさ」
「あそこまで命の危険を感じることはもう二度とないと思います……。リーグ側に死人がでなかったていうのが本当不思議なくらいで」
　レッドはそう当時を述懐する。ダイゴは何も言わずにゆっくりとかぶりを縦に振った。

「他の理事の方々はどのような様子でしたか？」
　エリカが話のついでとばかりに尋ねる。
「そうだね……。シロナさんがかなり怒ってたねぇ。『理事長、貴方がいながらこの有様は一体なんなんですか！』ってすっごい剣幕だった」
「そんな……。ワタルさんもかなり頑張っていたのに」
　ダイゴは息をついた後続ける。
「いくら他の街に被害が及ばなかったとはいえ、その代償があまりにも大きすぎるのさ……。街の大半があんなことになって今でもその影響は決して小さいとは言えない。まぁ尤もワタル君以外が理事長だったとしてエンジュの街を救えたかどうかは分からないけどね。二人はどう思う？」
「お、俺は……。やっぱりあれが一番マシな選択肢だったんじゃないかと思います……。あれだけの組織を相手にするからにはどうしても被害が大きくなってしまうんじゃないかって……」
　レッドはそう私見を述べた。
「そう……。まぁ一理あるね。エリカさんは？」
「私は理事長の行ったことは歴史に残る汚点であったと思っています。が、同時に誰が理事長であったとしてもああなることは予め決まっていたのではないかと思うのです」

「へぇ……というと？」
　ダイゴは身を少し前に出して尋ねる。
「そもそもこの反乱からして理由が釈然としません。確かにロケット団からすれば我々ポケモンリーグは面白くない存在でしょうけれど、直接壊滅させたのはリーグではなくレッドさんやゴールドさんであってリーグを無きものにしようと思われるほどの恨みがあるとも思えません。そしてその為にエンジュの街ごと占領するというのはいささか度が過ぎているように思えてなりません。思うに、これらの事情を勘案するとこれらは全てあるシナリオに則って行われたものに過ぎないのではないかと……」
「ふむ」
「ですから理事長の行動も、マツバさんの殺害も予め決まっていたことであり誰が理事長であろうと結果は変わらなかったように思えるのですわ」
　エリカは終始平坦な口調で述べ、そう締めくくった。
「で、そのシナリオというのは……？」
「さぁ……私には分かりかねますわ。ただ、そうとでも考えなければ理にかなわないのですわ」
「そ、そうかい。冷静に見てみると確かにそうだね。何かしらの作為を感じないでもないよ。もしそれが本当ならば彼らの狙いは何なのか慎重に探らないといけないね……」

ダイゴは近くにあった丸机を指で小さく鳴らしながら言った。
「ええ。その通りですわね……。ところで、今年は理事長選挙の年ですけれど、ダイゴさんは再び立候補されるのですか？」
エリカは話のついでとばかりに話題を変える。
「ハハ……。理事長選挙か。早いな。もうそんなに経つか」
ダイゴはそう言うと海の方向に視線を向け、やや黄昏ている。
「理事長選挙？」
レッドは聞き覚えのない単語に思わず言葉を漏らした。
「五年に一度。我々ジムリーダーや四天王などがセキエイのポケモンリーグに集まりリーグを統括する長たる理事長を決める選挙ですわ」
「あぁ……。テレビでそんな事やってたような……」
ダイゴは二人に向き直る。
「僕はいまから五年近く前、今の理事長であるワタル君と戦いあと少しの所で負けたんだ。エリカさんもその場に……」
「ええ。居ましたわ」
「居たよね。覚えてるよ」
「あら、どうしてです？」

「取引先の御令嬢を忘れるはずがないだろう？　それに、君の普段着ている服ってやっぱり目立つからねぇ」

ダイゴは笑みを交えながら話す。

「あら左様な事でしたか……。フフフ」

エリカは如何にも社交辞令な風の笑みをこぼした。

「エリカってそんな前からリーダーやってたのか」

「まぁ尤も当時は御祖母にあたるカルミア女史の監督を受けていたから、選挙のときも付き添っていたけどね」

「ダ、ダイゴさん。夫の前でそんな……」

彼女は見習い時代の事を話されるのを恥じているのか少し顔を紅潮させている。

「初めての選挙だったからか妙に緊張してねぇ。議論の内容を一生懸命メモに取ってたよ」

「あ、あれはお祖母様からの課題ですわ！　いまリーグがどのような問題に直面しているのか知る事も役員たるリーダーの大事な役目ですと」

「ハハ……。まぁこうね。色々と初々しかったのさ。ワタル君も似たような感じだった……なのに……」

ダイゴの表情がにわかに曇った。

エリカは何かを察したのか、話題を戻す。
「それで、ダイゴさんは返り咲くべく立候補はされるのですか？」
「いや。そんなつもりはないよ。理事長って今思い返してみれば地位は高いけど相当ストレスになる仕事だからね……。それにワタル君は僕よりもよくやってくれてると思うし、今の地位で十分だよ」
ダイゴは自嘲気味に笑いながら言う。
「左様ですか。それでは、今回の選挙は誰が立候補しそうですか？」
「そうだね……。うちの地方のミクリはまず経営に興味ないだろうから立候補しないと思うし……。やっぱりシロナさんだろうねぇ。今回のことでワタル君に見切りをつけていてもおかしくはない」
「シロナさんですか……」
エリカは興味深げな表情をする。
「君なら知ってると思うけど彼女はリーグのみならずポケモンバトル全体の環境改革を夢見る急進派の先鋒を務めている。もし彼女が選挙に出るとなれば大波乱になるだろうね」
「えぇ存じていますわ。リーグの一元化や、ポケモンセンターとフレンドリィショップの統合、国際リーグ構想……。リーグ創設以来の大改革を目指しているそうですわね」

「副理事長の今でさえも委員の人員整理や会計監査の強化などでやりたい放題やってるというのに……」

ダイゴはシロナに対して批判的のようである。

「ダイゴさんはシロナさんの事お嫌いなのですか？」

「うーん……好ましくはないかな。あんな急進的な改革したらトレーナーたちが困……」

「もしかして五年前のあのこと……。恨めしく思っているのですか？」

エリカはダイゴの発言を遮って強めの声色でダイゴに問いかけた。

「フ……。そんな前のこと今更どうこう言うほど僕もねちっこくないさ。僕があの選挙で落ちたことはリーグの下した判断だしね。ただやっぱりね……」

「やっぱり？」

レッドがその先を促す。

「このまま黙って引き下がるほど僕はお人好しじゃないよ」

その目には明白な挑戦の意志が宿っていた。

――

その後も二言三言会話して、ダイゴとは別れた。

暫く海を眺めた後に、二人は自室へと戻る。

―午後3時30分―

今回の船室は目立たないように、スタンダードなクラスを指定した。シャワーとトイレ完備で二人分のシングルベッドがあり、奥にはテレビと簡単なソファと折りたたみの机がある。四角の船窓からは海が見える。

着いてしばらくして、レッドはベッドに寝転び気になっていたことを尋ねる。

「なあ、五年前のあの事って何?」

彼女は机の上で本を読んでいた。彼女は視線をレッドには向けず本に投じたまま返す。

「あぁ……。ダイゴさんのことですか?」

「そうそう」

「選挙の際、立候補者は互いに討論をするのですわ。それで、五年前のときはダイゴさんが優勢に議論を進めていたのですが突如としてシロナさんが現れ、ダイゴさんの無駄遣いの酷さを糾弾したのです」

レッドは目を瞬いて驚く。

「へぇ……大胆なことするな」

「私も。こんな事をなさる方がいるとは思いませんでしたわ」

エリカは視線をやや上げてそう当時を思い出していた。

「それを契機にダイゴさんの旗色が悪くなり、対立候補のワタルさんが優勢になりました。その後のバトルにもそれが響いたのかダイゴさんが惜敗し、選挙に敗れたのですわ」

「しかしさエリカ」

「はい？」

「ダイゴさんは自分に落ち度があったから選挙に負けたんだろ？　どうしてそれで今まで恨みを持つのか……」

エリカは本に栞をはさみ、ゆっくりと閉じた。

「西国の麒麟児……」

「え？」

レッドは聞き慣れない言葉に思わず聞き返す。

「ダイゴさんはかつてそう呼ばれていました。モラトリアム期間から才覚を現し、若くしてリーグチャンピオン、そして理事長になったいわばリーグドリームの魁のような人でしたわ。未来のポケモン世界を切り拓いていく人材たりうるだろうと……そう将来を嘱望されていた方だったのです」

「え……その割には俺はさっき会うまで分からなかったけど……」

「そうでしょうね……。貴方の世代の頃はもうそんな事は言われなくなりましたわね」

「ひょっとして、理事長の座を降ろされたから？」
　レッドが半身を起こして尋ねる。
「ええ。理事長の座を降ろされ、ミクリさんにリーグチャンピオンの座を奪われダイゴさんの名声は失墜しましたわ。噂ではダイゴさんのお父様に大層叱責されて一時は後継から下ろす降ろさないの騒ぎがあったなどとされるほどで……。あと御曹司であるが故に親の七光りなどと後ろ指をさされる始末で……」
「そうなのか……」
「その為、転落の原因となったシロナさんの事を恨んでいてもおかしくはないと思ったのです」
「本人は恨みは無いみたいだけど」
「その一方でこのままでは済まさないお気持ちもあるようですわ。何にしても気になるところですわね」
　エリカは思案深そうな表情をしている。
「エリカさ……」
　レッドは何となしなふうに尋ねる。
「はい？」
「お前いつの間に機嫌直ってるよな。どうしたの？」

エリカはそれを聞いて途端に表情を険しくした。
「貴方……私が厠に行っている間、どこで何をされていたのですか？」
「え」
レッドは唐突な追及につい目を逸らす。
「答えてください」
エリカはまっすぐにレッドの目を直視して尋ねる。
「その……ミカンさんが急に港の裏まで連れ込んで……」
エリカは変わらず鋭い目つきでレッドを注視している。レッドはまるで取調室で訊問を受けているような気分になっていた。
ここで嘘をつくことは賢明とは言えないと思ったレッドはすらすらとありのままを話す。
「俺のこと……好きって言って……」
レッドは言葉に詰まるが、エリカは無言の圧力で先を促す。
「その……思い出と……断ち切るためにキスしてきた」
「ふぅ……」
レッドが言い終わるとエリカは深くため息をついた。
「ご、ごめんなさい！　俺……。本当に唐突でどうしたらいいか分かんなくて……つい

ミカンさんのペースに」
　レッドはベッドの上のまま正座し、エリカに直視して切々と謝った。
「貴方」
「はい」
「クスッ……。そんなに改まって謝られなくても良いのですわ」
　エリカはそれまでの険しい表情を崩して、にこやかな笑顔になっていた。
「え？」
「私……一部始終見てましたもの。ミカンさんが貴方を連れ去るところからずっと」
「そ……そっか。なぁんだ脅かすなよ」
　レッドは足を崩して安座になり、ホッと一息をついた。
「でも、どうして？」
「貴方の愛を試したかったのですわ。しかし大丈夫ですわね。何か二心があるようならばここまですらすらと本当のことを話しませんもの。ダイゴさんと話している時も怪しい動きはありませんでしたしね」
　エリカは椅子を立ち、自分のベッドに座る。
「あぁ……なるほど……」
「私達は届を出していないだけの正真正銘の夫婦ですわ。隠し事なんてしていれば承知

しませんわよ」
「うん……そうだよな。気をつけるよ」
彼女は今一度レッドの目を見る。
「貴方、かまえて浮気などしてはいけませんよ。もしミカンさんに情が移ることがあったら私……」
「それは大丈夫さ」
レッドはエリカの発言を途中で遮る。そして、エリカの正面にたつや否や右手を伸ばして服からでもはっきり分かる程度の彼女の豊かな胸を掴んだ。
「ミカンさんには……これがないからな」
「キャッ……もう、貴方ったら……」
エリカは言葉ではやや抵抗があったが、そのまま受け入れた。
が、しばらくして肝心な所で船員の邪魔が入り本番をし損ねる。
―5月18日　正午　出口―
『本日はシェルフー号をご利用いただきまして誠にありがとうございました。当船はまもなくカイナ港に到着します。お忘れ物のございませんよう……』
出港から22時間。長い船旅を終え二人はカイナシティにたどり着こうとしていた。
出口の前には降りようとする人で賑わっており、いよいよホウエンについたのだと言

うことを実感させる。
「いよいよ……ですわね」
「ああ。頑張ろうぜ」
エリカとレッドはそう言うと堅く手を握りあった。
やがて錨が降ろされ、出口の扉が開く。ここを抜けた先はいよいよ二人にとって未知の新地方、ホウエンである。
南国の大地で新たな物語が始まろうとしていた。
―第十三話　麒麟児の憂鬱　終―

第十四話　リーダーの資格

―5月18日　正午　カイナシティ　港―

船はカイナシティの港に錨を下ろした。

そしてこの日、伝説の夫婦がこの地に降り立つ。

降りたとほぼ同時に一人の男が駆け寄ってきた。

「もしかしてレッド君と……エリカさんかい？」

「え……はい。そうですけど」

レッドは当惑気味に答える。

男は白衣にショルダーバッグをかけ、やや小太りななりをしている。

「あら。オダマキ博士ですか」

「え？」

「ウツギ博士が仰せになっていたではないですか。カイナの港で待っていると……」

レッドは少し間をあけて

「そういえば……思い出した」

レッドはここ数日の出来事でウツギの言っていたことを一時失念していた様子で

あった。
「良かったー。どうやら間違いじゃないみたいだね。じゃあ改めて。私はオダマキ。ミシロで研究所を開いているんだ。ウツギ博士から話は聞いてると思うけど、君たちがホウエンに来た記念にうちの研究所から旅立った人間に与えるポケモン……いわゆる御三家のポケモンを渡そうと思ってね」
「ええ。聞き及んでおりますわ」
エリカは澄ました表情で返す。
「うん。それじゃあ話は早い。行こうか」
そう言ってオダマキは港の出口へ向かい出て行った。
出口の横にある壁には『ようこそ　国と人とポケモンを結ぶ玄関　カイナシティへ』と装飾されて書かれた看板がある。
これを見てレッドはいよいよホウエンに着いたのだということを自覚し、決意を新たにした。
「貴方、どうされました」
「いや、なんでもない。行くよ」
そう言って彼は彼女に少し遅れて続いた。
―カイナシティ　ホウエンの港町。ポケモンコンテスト会場などの娯楽施設の一方

港町であるが故にカイナ市場の経済的な施設もある。しかし、かつては日本海軍の工廠だったという歴史的背景もあり造船所や海の科学博物館等海関連の施設が一番の特徴である。ここまで色々と揃っているがポケモンジムは無い。

―カイナシティ　港出入り口―

港から出ると、黒地にAの字をあしらった意匠をしたバンダナを頭につけた男たちが散り散りになって去っていくのが見えた。

「なんなんだあのガキ！　バケモンみたいな強さだな」

「知るか！　とりあえずアジトまで逃げるぞ！」

というふうな事を言っているように聞こえる。

「止めたほうがいいでしょうか」

レッドはモンスターボールを持って構える姿勢をした。

「いや。待つんだ！　今行くのは危険だ。何をするかわからないぞ」

オダマキはそう言って制する。

そう言うや否や待機していた別の男に合流したかと思うとバンダナをつけた男たちはその男の持っていたポケモンに乗って飛び去ってしまった。

「い、一体何なのですかあの集団は」

「さあ私にも何がなんだか……おや。あれは」
　下っ端と思しき男から大きく遅れて白い帽子をかぶった少年が息を切らせてやってきた。
「ま、……間に合わなかった……」
　少年の速力と持久力では大人の彼らには追いつかなかったようである。飛び去る男たちを見ながら少年は膝を押さえて息を荒くしていた。
「ユウキくんかい!?」
　博士が心配そうに駆け寄るとユウキは顔を見上げる。
「あ、あれ博士！　どうしてこんな所に……」
「それはこっちのセリフだよ！　ユウキくんこそどうしたというんだい?」
　ユウキは先に自らの方を説明した方がいいと察したのか息を整えた後に話し始める。
　どうやら船の科学館でアクア団と名乗る組織が館長を脅し、船のパーツを奪おうとしたところに割って入った所団員たちは蹴散らしたもののパーツはすんでのところで奪われてしまったという。
　それで追いかけてるところを偶然オダマキが目撃したということだ。
「そうかそれは災難だったね……」
「あの、こちらの方は……?」

エリカが間に入ってすまなそうな様子で尋ねる。
「ん？　ああ、この子はね、うちの町から旅をしているユウキって子だよ。数年前にジョウトから引っ越してきたんだ」
「へぇあのジョウトからか……」
レッドは関心ありげに聞いている。
すると、ユウキがこちらに気付いたようだ。
「あ……あれ!?　お二方はもしかして……」
「おおユウキ君さすが目ざといねぇ。そう。あの生ける伝説の夫婦、レッド君とエリカさんだよ」
「で、伝説なんてそんな大げさな……」
レッドは謙遜ぶっているが内心は満更でもなさそうだ。
「わぁ……！　ホウエンに来てくれたんですね！　すごく嬉しいです！」
ユウキは目の色を変えて舞い上がっているように見える。
「ハハ……。ところでさっきの組織また厄介そうだな……。俺らでよければ手伝うけど」
レッドはユウキに提案するが彼は頭を横に振った。
「いえ！　お二人の手をわずらわせるまでもありません。僕一人のちからで何とかして

みせます」
　ユウキは自信たっぷりな様子で胸を叩いた。
「まあ。頼もしいですわね……」
　エリカは心の底から感じ入ってるようだ。
「へへ……。そういえばオダマキ博士、どうしてここに？」
「これから二人には特典として、君にもあげた最初の三匹のポケモンをあげにミシロまで一緒に行くんだよ。……と、ユウキくんはここに来たってことはバッジは……」
「はい！　カナズミとムロで二枚持っています！　これから北のキンセツシティに行って次のバッジを取りに行こうかと……。あとアクア団とかいうのも気になるし」
　ユウキは二枚のバッジをケースから誇らしそうに博士に見せている。
「へぇ……旅立って二ヶ月もしないのに二つだなんて凄いじゃないか！　その調子で頑張るんだよ。あと図鑑も宜しくね」
　ユウキは返事代わりとばかりに深く頷いた。続いてレッドが言う。
「うん……なかなかに見込みあるな。いつかもっと強くなった時にでも勝負しようぜ。ユウキ」
「そうですわね……。その際は私もお手合わせ致しますわ」
「は、はい！　その時は是非お願いします。おっと……そろそろポケモンを休ませに行

かないと。それじゃあ博士、レッドさん、エリカさん！　また！」
　そう言ってユウキはさっきの疲れはどこへやらとばかりに駆け出していった。
「元気な子ですわね」
　エリカが微笑ましいような表情で言うと、博士は黙ってうつむいた。
「あれ、博士どうしたんですか？」
　レッドが尋ねる。
「あ、いやね……。ユウキ君ああ気丈に振る舞ってはいるけど、実はリーダーを務めているお父さんの事で少々気がかりな事があるみたいで」
「へぇ」
「私も彼とは同じ大学の同期だったから色々と親しくしているんだけど。彼、元気がないんだよ」
「そうなのですか……心配ですわね」
「うん……。あとこれは別に悪いことじゃないんだけど、前はもっと仕事人間で家にはそんなに帰っていなかったのが最近……いやここ数週間くらいはよく見かけるんだよ。どうも気がかりでね……」
　オダマキはやや顔に影をのぞかせる。本当に心配しているようだ。
「差し支えなければその方の御名をお聞かせ願えませんか？」

「センリさんだよ。エリカさんなら多分会ったことあるんじゃないかな。あの人ベテランだし……」

エリカはすぐ誰か分かったようで

「あぁ……数年ほど前にコガネでジムリーダーをされていた方ですわね」

「え!?　てことはあのじゃじ……アカネさんの先代？」

エリカは頷いて続ける。

「ええ。その通りですわ。コガネは商工議会をはじめとする街の意見が強いせいか他の街に比べリーダーが代わりやすいのですけれど、それにしてもセンリさんの異動は突然で驚いた記憶がございますわ……。リーダーになったばかりの頃ご指導をいただいたり何かと気にかけてくださいましたわ。そんな方が今そういうことになっているだなんて……」

彼女はショックを隠せない様子だ。かつて同じリーグに所属していた人間の変化を知って心の中に刺さるものがあったのだろう。

「あぁこんな話をしてごめんね。それじゃあ、行こうか」

こうして博士のオオスバメに続く形で二人はミシロタウンへと向かった。

―ミシロタウン　森に囲まれた緑豊かな所。

ポケモンと人々がのんびりと過ごす町である。

ユウキ、オダマキの家があり、ホウエン第一のポケモン博士、オダマキの研究所もここにある。

―午後2時　ミシロタウン　研究所前―

研究所の前で三人は降り、そのまま中に入っていった。

モンスターボールの入ったカバンを持ってきて、それを二人の前で開けた。

説明の後二人はそれぞれキモリとミズゴロウを選んだ。

「博士。ありがとうございました」

二人はそう言うと深々と頭を下げる。

「いやいや。当然のことをしたまで。ホウエン地方は緑豊かでとても散策しがいのあるところだよ！　君たち二人も是非堪能して欲しいな。バトルもいいけれどそういうところも忘れずにね。それじゃあいってらっしゃい」

そう言ってオダマキは二人を送り出した。

―101番道路―

「いよいよか……」

101番道路に入るとレッドはふとそう呟いた。

ここからがホウエン地方の旅の始まりである。

「ここからは私たちにとってまさに未知の地方ですわ。不安もありますけれど、やはりとても心躍るものがありますわね」
二人は歩きながらそんなことを話していた。
上空にはスバメが滑空し、植え込みではケムッソが葉っぱの上を進んでいる。
いずれもこれまでの地方では全く見かけなかったポケモンである。二人は新緑の風に胸を膨らませつつ歩みを進めていくのだった。

――

二人はコトキタウンと１０２番道路を通り過ぎ、トウカシティへ到着した。
―トウカシティ　ここもまた森に囲まれた街だが、コトキやミシロに比べれば幾分か発展している。ユウキの父・センリはここにジムを構えている。
―５月２６日　午前９時　トウカシティ―
トウカシティに到着するとコトキで購入したトレーナーの歩き方の本を取り出した。
「確かここだよな……センリさんのジム」
レッドは本を開きながら地図を頼りにジムを探している。
「えぇ。左様ですわね。もう少し北をいって……あぁ。そこですわ」
エリカが視線を遣った先にはポケモンジムがあった。
「あれ誰かいるみたいだ」

少し歩みを進めるとジムの前に人がいたのが見えた。
どうやら二人で何か話している。
「もしかしてあの人が？」
レッドはジムリーダーの写真とそこの人物を照合した。
「ええ。センリさんですわ。数年前と変わらず剛健な感じが致しますわね……。しかしどこか緊迫した雰囲気がしますわ」
―同時刻　ジム前―
「だからよぉ！　俺はアンタのとこのジムで働きたいんだよ！　イチからトレーナーとして自分を鍛え直したいと……」
２０代後半くらいの恰幅のいい青年がそうセンリに熱い思いを語っている。
「サキヒサ君……。気持ちはよく分かるが、うちのジムは定員がいっぱいなんだ。何度も来てもらって悪いが君を雇うつもりはない。他をあたってくれないか？」
センリは内心うんざりしているが、平静を装った表情でそう返した。
「ホウエンの公認ジムを色々あたったけど、どこも俺を雇ってくれないんだよ！　ほらこの通りジムバッジだって揃ってるのにさ！　あんただって俺と戦っただろ!?」
サキヒサはバランスバッジを見せつける。
「そうだな……」

「その時に俺の強さは分かっているだろうになんでさ！　なんで俺を……」
「どのジムも今は色々と大変なんだ。きっと君も時期が来れば必要とされる日が来る……。それをひたすら待つんだ」
　この様子でセンリはひたすらサキヒサと名乗るトレーナーを宥めた。１０分ほどして
「はぁ……俺は諦めないからな！」
　そう言ってセンリに背中を向け、地ならししながら帰っていった。
　やれやれとばかりにため息をついたセンリにレッドとエリカが近づく。
「あのセンリさん……？」
　まずエリカが話しかける。
　するとセンリはエリカと目線を合わせた。
「おぉ……エリカか！　随分と久しぶりだな」
　先程までの張り詰めた表情とは変わって和やかな表情で接した。旧知の人間と再会してホッとしている様子だ。
「えぇ。ご無沙汰しておりますわ。それにしてもそのお召し物は……」
　センリは喪服を着ていた。
「あぁ。先日、フエンタウンのジムリーダーが若くして亡くなってね……。今日は告別

式だ」
「まぁ！　そんな時にお呼び止めして申し訳ありま」
「いやいいんだ。時間に余裕はあるから」
　センリは謝りかけたエリカをそう言って制した。
「あの……挑戦の件なんですけど」
「貴方！　このような時になんという」
「あぁいやいやそうじゃなくて……。フエンのリーダーが死んだっていうことは挑戦がしばらくできなくなるんじゃないかって」
　エリカは自らの早とちりに顔をやや紅潮させている。
「あぁそうか……君たちはそういう旅だったね……。いや。それは問題ないと思うよ」
「え？」
「フエンのリーダーはもう娘のアスナという子にきまっているんだ。一応来週にはリーグの試験を受けることになるが私が一回手合わせした限りだと問題なく通過するだろうと踏んでいる」
　レッドはそれを聞いて興味ありげに
「へぇ……かなり強いトレーナーなんですね？」
　と尋ねる。

「うむ。あの方もあの子になら安心して任せられると言わしめたトレーナーだ。ただね……」
「ただ？」
「確かにあの子は強いんだが……。それはリーダーレベルとしての話だ。それより上となると……」
センリの顔が途端に渋くなった。
エリカはすぐに何かを察したのか
「もしかして……先程のトレーナーの方ですか？」
と尋ねる。
センリは少し間を空け
「ここではなんだから中に入ろうか」
とジムの鍵を開け入っていく。二人もそれに続いた。
―トウカジム―
センリは応接間に行き、ジムトレーナーにお茶を出させた後続ける。
「それで先程のトレーナーが何か……？」
エリカが尋ねる。
センリは煎茶をすすって言う。

「君たち、彼のバッジの数を見たか？」
「い、いえ……」
レッドもつられたように首を横に振る。
「１２枚だ」
１２枚。即ちそれは全力を出したジムリーダーを少なくとも四人は倒した計算になる。
「へぇ……それはそれは相当な実力ですわね」
「彼はな……。ああやってジムに来ては雇って貰うためかジムリーダーと戦い、勝負をするんだ」
「ふーん」
とレッドが相槌を打ったところでエリカが眉をひそめて言う。
「それは悪手ですわね……」
「え、どうしてさ？」
レッドは当惑してそう答えた。
「ジムトレーナーはあくまでリーダーの補助としてジム運営の人足として雇われるものなんだ。まぁ勿論リーダーが病気やスランプだとかの都合で実力を発揮できない時フォローのためにある程度は強くなければならないが……」

「１２枚なら十分すぎるほどじゃないですか」
　レッドはすぐさまそう返すが、センリは首を横に振って答える。
「そこだ」
「え？」
「わかりませんか？　ジムトレーナーはリーダーと同等以上に強くあってはならないのです」
「どうしてだよ？　トレーナーというのは強さを追求していくものじゃないのか？」
　レッドは言わんとしている所が分かっていない様子である。
「それは勿論そうだ。レッド君。君の言うことは間違っては居ない。だが……。リーダーと同じかそれ以上に強い部下のトレーナーの存在というのは……運営の上ではどうしても……厄介なんだ」
　センリは絞り出すように言う。
「そ……そんな」
　レッドは現実を目の前にして目がくらむ思いがした。
「これは止むを得ないことなのです。あまりにも強い、それも新規のジムトレーナーの存在というのはトレーナー間の派閥争いや統制に支障をきたしかねないのです。最悪の場合はそのトレーナーを御輿に担いでリーダーの位を簒奪しようとしたり……分裂

することもありうるのですわ」
「分裂だって？　そんな事あんのかよ？」
　レッドは目を瞬かせながら尋ねる。
「私のジムも……。原因は違えどひいひいお祖母様の時代にジムの方針の違いを巡って数年に亘る分裂騒動を引き起こしたのです。当時のジムの書物を見ると如何にそれが大変なことであったか思い知らされますわ」
「へぇ……よくそれで潰れなかったな」
「当時はまだジムを統括する今のポケモンリーグのような存在がありませんでしたから……。大正の頃のお話ですし」
「大正って」
　センリが横切るように答える。
「今から大体百年くらい前の話ということ。リーグはまだその頃影も形もない」
「あぁそうですね……」
　レッドは歴史の授業をまともに聞いていなかったことを後悔した。
「仮にそんな騒動を今起こしたらまず間違いなく理事会議で処分対象になる。まぁ軽くて停職……重くて公認剥奪になりかねない」
「ジムの統制はリーダーにとって最も大事な職務の一つですからね……止むを得ないと

いえばそれまでですけれど」
「へぇ……」
　レッドは自分なりにどうにか腑に落とした。
「そういうわけで……」
　センリはもう一度茶を啜った。
「もしあのサキヒサ君と彼女が戦い、それで敗れたりしたら自信を失ってしまうんじゃないかと……少し心配でな。彼女はどこか不安抱えている節があるから」
「なるほど……」
　エリカは納得したようだ。
「その……サキヒサってトレーナーですけど」
「ん？」
　センリの右眉が少しだけ動く。
「やっぱり、強いんですか？」
「あぁ強いよ……。彼はこの街の出身でモラトリアム含めて足掛け１２年もの間ホウエンを旅して８個バッジを集め、更に５年かかってジョウトに渡り４つバッジを手にした……。いわゆるベテラントレーナーというやつだ。全力のリーダーを四人も倒してるだけあって相当に手強い」

センリは苦い表情をしながら言う。
「センリさんほどの方が言うならば、相当のものなのでしょうね」
「因みに誰を倒したんですか？　そのジョウトのジムで」
レッドが興味津々に尋ねる。
「バッジから類推するに……タンバ、アサギ、フスベ、エンジュといった所か。君たちも知ってのとおり相当の強者だろう？」
レッドは想像以上のメンバーに戦慄した。いずれもそれなりに苦戦した相手、ミカンに至っては一度負けている相手である。
「席さえあればリーダーでも全くおかしくない力量だ……。席さえあれば」
センリは含みのある言い方で言う。
「あの人……ホウエンでの着任を望んでいるようだし、そりゃなかなか難しいんじゃ」
「そういうことだ。私はどうにか勝ったがそれでも2体しか残らないギリギリの状況だった……。しかし、さっきも言ったがジムトレーナーはあくまで運営や補助に携わる者であって強さがメインではない……それも彼はいい加減分かっているはずなのにどうしてそこまで」
センリの発言の最中に彼のポケナビが鳴り響いた。
「失礼。はいもしもし……え？　ああ……そうか。わかった」

と言ってすぐに電話を切った。
「すまない。家内こっちに来ているようでね……。そろそろ」
「え……ああ！　こっちもつい長居してしまってすみません」
レッドとエリカは頭を下げる。
こうして三人はジムの外に出た。
―ジム前―
「やぁ。悪かっ」
センリが言い終わる前に妻と思われる女性は口を開いた。
「もう貴方ったら遅いじゃないの！　駅の前で待ってろって言うから居たのになかなかこないし……どうしたの？」
「あぁいや……古い同僚に会ってね。つい話し込んでたんだ」
そう言うと女性は後ろを覗き込んだ。
「あら……。これはこれは噂の……。はじめまして」
「こちらこそ初めまして。タマムシシティジムリーダーのエリカと申しますわ。お見知りおきを」
エリカに続いてレッドも名乗った。
「いーえー……。あらもうこんな時間！　貴方急がないと式始まっちゃうわ！」

「そうだな。よし行こう。それじゃあエリカ、レッド君。また来たときにでも挑戦を受けよう。楽しみにしているぞ」

レッドとエリカはそれに対して返礼した後、センリ夫妻はそそくさと告別式場への鉄道駅に向かった。

「ふぅ……。なんというか色々と衝撃だったな。なぁエリカ」

エリカは考え込んでいたのかやや遅れて

「え……ああ！　左様ですわね」

「どうした？　考え事？」

「いえ……行きましょうか」

こうして二人もこの場を去っていった。

――

この日はポケモンセンターでポケモンを休ませた後、フレンドリィショップで買い出しをし西の道路へと出た。

―同日　午後7時　１０４番道路―

この日は道路の中盤ほどまで歩き、野宿することにした。

夕食を済まし、丸太の上に腰掛けたまま珍しくあまり喋らない彼女を見てレッドは話しかけた。

「なぁ。今日はどうしたんだ？」
　エリカは少し間をあけて答える。
「センリさんの様子が気がかりなのです……」
「え？　お前まさか……」
　レッドはマツバの時のような勘違いを起こそうとしたが
「あぁいえ！　そういう意味ではありませんわ。貴方も見ましたでしょ？　センリさんは所帯もちですわ」
　エリカはすぐに察して手を横に振って否定した。
「ん……ああそうか……。まあそうだよな。それで？」
「普段はもっとしっかりした印象の御仁なのですけれど……今日のセンリさんはなんというかどこか陰があるというか。抜けているというか……。数年前のあの人とはどうも違う気がするのですわ」
「へぇそうか……。今日葬儀の時間に遅れそうみたいだったけど」
　レッドが言っている最中に否定する。
「とんでもありませんわ。普段はもっと時間にはきっちりしたお方です。定例会の際はいつも３０分前には着いて準備しているような方でしたし……。あそこまでルーズな方ではありませんでした」

「なるほど……それは気になるよな……もしかしてこの前オダマキ博士が言ってたこと？」

エリカは頷いて

「ええ。最近何かセンリさんにとってショックな事でもあったとか……。それも何週間もひきずるような」

「うん」

「とにもかくにも次にお会いした際聞いてみる必要がありそうですわね……。あのままだと本業に差し障りがでるかもしれませんわ。ご恩返しも含め何かできれば良いのですが……」

エリカは心の底からセンリの事を心配している様子だ。

「恩返しねぇ……そこまでの事してもらってたのか？」

レッドはリーダーの内情に疎いためかそんなことを言った。

「勿論ですわ。センリさんはベテランのリーダーで、元は学校の教師をやられていたくらいですから新人リーダーの教育役をしているのです。ジムを運営する上での書類手続きやリーグとの折衝など……。お祖母様からは主にジム内部のことを教わりましたがセンリさんからはそういうジム外での仕事について懇切丁寧に教えて頂いたのです」

「なるほどね……」

「あの方から教わったことはリーダーとしての礎の一部ですわ。その恩には出来る限り報いたかったのですがその前に異動になってしまい……。心残りとなっていたわけです」

レッドは深くかぶりを前に振って

「そういう訳か……。いや変な勘違いしかけてごめんな。そういうことなら報いなければね」

と納得した。

「ええ。それにしてもセンリさんをあれほど悩ませている種とは一体なんなのでしょうかね……」

さしものエリカもその原因までは突き止められなかったようだ。

その後、夜更けに至るまで二人はポケモンの世話などをしながら起き、テントに戻って就寝した。

そして１０４番道路からトウカの森を抜け、途中立ち寄ったフラワーショップでエリカがジムに飾る花を買い込んだ後最初のジムがある街、カナズミシティへと入っていった。

―カナズミシティ　デボンコーポレーションをはじめとする商業ビルが立並ぶオフィス街。トレーナーズスクールやポケモンジム等もあり、バトルの初心者向けの街と

もいえる。カナズミ大学はホウエン最難関の大学だが、最近はエンジュ大学やタマムシ大学への学生の流出に悩んでいるようだ。

―6月3日　午前10時　カナズミシティ―

季節は梅雨を迎え、ここカナズミシティでも蒸し暑い気候がはじまっていた。

「はぁ……じめじめしてきたなぁ本当」

「もう6月ですか……。今月は衣替えですし冬や春向けの服はお家に送り返さねばなりませんわね」

「そうだな。ポケセン行ったらすぐジムに行こう」

こうして二人は服の整理を行い、ポケモンを回復させてカナズミジムへと向かった。

―午後2時　カナズミジム―

二人はジムトレーナーを倒し、そのまま奥に進んだ。

すると、リーダーと思われる少女がそこに立っている。どことなく高貴な雰囲気がある。

「ようこそ。カナズミシティポケモンジムへ。私はジムリーダーのツツジと言います」

彼女は大方平然とした様子だがやや緊張しているのか硬い印象も受ける。

二人も名乗った後、彼女が続ける。

「トレーナーズスクールの教師として、貴方たちのようにお強い人と戦えるのは光栄で

あると同時にどこか恐縮ですわ……。しかし、ここは真剣勝負の場……。ジムリーダーとして全力で挑ませていただきますっ！　行きなさい、ダイノーズ！　ゴローニャ！」

――

その後、レッドは緒戦でミスを犯し一体を、エリカはダメージを喰らいながらも相性の良さを最大限に活用し三体を温存したまま勝利した。

「お二人ともさすがですわね……。多くの事を学ばせていただきました。それではリーグ公認のバッジ、ストーンバッジをお受け取りくださいませ」

「ありがとうございます！」

エリカにつづいてレッドが深く礼をした後受け取った。

これがホウエン地方で初めてのバッジである。

ツツジは少し間を空けた後世間話とばかりに言う。

「そういえばフエンジムの新リーダーの話は聞きましたか？」

「えぇ。センリさんから少々……」

エリカが答える。

「あれそういえばもう決まったんですか？」

レッドが尋ねる。

「はい。先日サイユウリーグ主催で試験が行われ、私も試験官として立ち会いましたわ。

彼女は炎タイプで私とはちょうど弱点のタイプになるわけですけれどそれでもタイプや特性を駆使して善戦していました。リーダーとしては全く申し分ない実力で一発合格です」

「ということは後は素行調査をくぐり抜ければ」

「晴れてジムリーダーになります。まぁあれで落ちる人は普通にしていればまずないのでほぼ本決まりですね」

ツツジは淡々とした様子で話す。

「あのすみません。素行調査……というのは？」

「査察部というリーグの監察……まぁいわばお目付け役の方々が数週間かけて行う行う人格面や経歴などの調査です。リーグに入れて本当に問題ないかどうかを詳しく調べるのですわ」

エリカがすかさず解説する。

「え……それにしては……」

レッドはすぐにそんな調査から漏れるリーダーを何人か思い浮かべたが口には出さなかった。

「素行調査はあくまで前科がないかだとか経済的、家庭的に何か大きな問題を抱えてないかだとか低いハードルで行われるのです。まぁリーダーというのはトレーナーとし

ての強さが第一ですから……」
　エリカは話した後、ツツジに目配せする。
「そういう訳なので普通にしていれば落ちない……という理屈付けなんです。これでも今の副理事長になってからは大分厳しくなったと言われますけどね……」
　ツツジはそう言うとため息をつく。
「へぇ……まぁとにかく俺たちがフエンに着く頃にはもうリーダーになってるって事ですよね？」
「ええ。それは間違いないと思いますわ。きっと貴方にとっても手応えある相手だと思いますから、頑張ってくださいませね」
　それからしばらくしてツツジとは別れ、ジムを後にした。
　―カナズミシティ　路地―
「次はムロか……。マップ見た感じだとまた戻らなきゃいけないのが面倒だな」
「まぁそうおっしゃらずに……。二度目行けばまた違う発見があるかもしれませんわよ？」
　エリカはにこやかに笑いながら言う。
「お前はやたら森でスケッチしたりしてるもんな……。まあいいか。とにかく行こう！」

こうして二人は2つめのジムのある街、ムロへと向かうのだった――

―第十四話　リーダーの資格　終―

第十五話　自然からの刺客

―5月27日　某時刻　某所―

この時、黒ずくめの軍団がある場所に集っていた。

会議室のような場所で白い服を着た男が淡々と計画を話している。

「以上が作戦の全容です。ホウエン各地に潜入させている団員に事の次第を伝えすぐさま準備に取り掛かるよう司令をお願いします」

話している男はロケット団最高幹部のアポロである。

「それにしてもよくオーキドが承知しましたね……。あれだけレッドを生きて残酷な目に遭わせることにご執心だったというのに」

と言ったのは脇に座っている幹部の一人、ランスだ。

「エリカ拉致を計画の主目的の一つにすることでどうにか呑んでくれましたよ……」

「ほんとあの爺さん懲りないわねぇ……。そらあの子はちょっとばかし可愛いかもしれないけど、あたくしにはとんと理解できないわ」

と、ランスの反対側に居たアテナが毒づいた。

「ま。いいじゃねえか。あの女がこっち側に捕らえれれば少しは敗戦の苦味も和らぐっ

てもんだ」

「ラムダ。言葉には気をつけなさい。あれは敗戦などではありません。あれも壮大なサカキ様の戦略の一つなのですよ」

アポロは一点の曇もない目でラムダを見咎めている。ラムダは指摘されて小さくなっている。

「とにかく、レッド殺害は我々の計画において必ず成功させねばなりません。いくらあの男を抱き込んだとはいえ、この夫婦がいては水泡に帰す可能性があります。総員、心してかかるように。解散」

そう言うと団員たちはぞろぞろと散っていった。

―6月4日　午後2時　トウカの森―

カナズミジムを破った二人はポケモンセンターで一泊した後、トウカの森へと戻っていた。

トウカの森を抜けた先の砂浜からムロタウンへ抜ける行程である。

昼食を食べた後二人はさらに南の方向へ歩いていた。

「はぁ……。なんか月かわってから露骨に蒸し暑くなった気がするぜ……」

レッドは手で風を仰ぎながらぼやいた。

「ホウエンは昨日梅雨入りしたそうですわ。あそこに咲いている花菖蒲のようにこの季

節だからこそ見れるお花も多くあるのですが、やはりじめじめしているのは身にこたえますわね……」

エリカも時折顔や首筋などをハンカチで拭いている。花に指した指も汗ばんでいるのに気付いたのかすぐさま拭いていた。

そうこうしていると大樹が中心にある地帯に入る。

この時はレッドが先に歩き、数歩遅れてエリカがいた。

梢のふれあいや風にたゆたう木の葉の音に紛れて何かが軋む音がした。

「貴方！　走って！」

エリカは突如大声を出す。レッドは反射的に１０ｍほど走った。

すると次の瞬間先程までレッドがいた場所に大木が倒れ込んだ。衝突の瞬間轟音が辺りに響き、近くに居たポケモンたちが驚いてあちこちに逃げ出した。

「うおっ！　危ねえ……」

大木は見事に地面にめりこんでいる。当たっていれば如何にタフな体を持つレッドとはいえとてもただではすまなかったであろうことは想像できる。

エリカは注意した時に立ち止まり、餌食になることは免れた。彼女は倒れた木の切り株を経由してレッドの元へ行った。

「あら？」

彼女は一旦着いたと思うとすぐに振り返り切り株に戻った。
「どうした」
レッドはエリカについていく。
「やはり……どうも違和感がありますわ。自然に倒れたにしては腐食の仕方がどうも不自然で……」
彼女はかがんで木の断面を注視している。
「そうなのか？」
「農薬か……そうでなければ急にポケモンを大量に木の中に入れて食べさせたか……」
「はぁ？　何のためにそんなことするのさ」
「間引きならば一本だけということはないでしょうし……。私には分かりませんわね」
彼女は断面から目を離した後首を傾げた。
「意味分かんね……。まあいいや。行こう」
レッドが先に進むとエリカはもう一度切り株に視線を遣り少し遅れて続いた。
その後、トキワの森を抜け水道を通ってムロタウンへたどりつき、ポケモンジムへ向かった。
―ムロタウン。
海に囲まれた小さな町。

しかし町には常に流行語があるというなんとも地域密着性の高いところでもある。
釣りの界隈ではホウエン地方の中でも欠かす事の出来ない程の名所が多くある。
そしてジムリーダーのトウキはサーファーで波に熱い思いがある人物で
ビッグウェーブに乗る為にわざわざジムの無かったムロにジムを構えたという都市伝説がある。
―6月8日　午前10時　ムロタウン　ポケモンジム―
トレーナーを倒して奥に進むとリーダーと思しきガッチリした体格の青年がいた。
二人が名乗った後、自己紹介をはじめる。
「やあ！　よく来たね。僕はこの島のジムリーダーのトウキ！　君たちのような伝説の夫婦と戦うのはとても心が躍るよ。暗い洞窟と荒波の中で鍛錬した僕の手持ちが君たちにどこまで通用するか。楽しみだね！　行けっヘラクロス！　ハリテヤマ！」
――
レッドは1体、エリカは2体を失ったもののトウキを下した。
「うん。流石の強さだったね！　ようし、このバッジを持っていきな！」
トウキは爽やかな笑顔を浮かべながら、ナックルバッジを手渡した。
「ありがとうございます」
受け取った後、エリカとレッドは礼をする。

「トウキさん。この町に何か名所はございますか?」
エリカが世間話の要領で話しかける。
「この北に、石の洞窟という場所があって僕はそこで鍛えてるんだ。立派な壁画もあるし是非行ってみるといいよ」
その後も二言三言話してムロジムを立ち去った。
ポケモンセンターで回復した後、石の洞窟へ向かう。
―午後2時　石の洞窟―
散策と修行がてらで歩いていると、見覚えのある人物に鉢合わせした。
ダイゴである。どうやら石集めをしている最中だったようだ。採集用のつるはしやピックが側においてある。
「おや。君たちここに来たのか」
彼は額の汗を拭きながら話す。
「はい。修行のついでに……」
レッドが答える。
「ふん……。じゃあ僕と勝負してみないかい?」
「いいですね。リーグチャンピオンクラスともなればこっちも気合入りますよ!」
レッドは気分を高揚させて言う。

「ハハハ。僕も伝説の夫婦が相手ならば不足はないよ。それじゃあ行こうか！　行け、エアームド！　ネンドール！」

レッドはカメックスを、エリカはモジャンボを繰り出した。

「エアームド、モジャンボにドリルくちばし！」

エアームドが先制し、くちばしを回転させてモジャンボに痛撃を与える。

しかし存外堅く、体力は三分の一程度の減少でとどめる。

「カメックス。ネンドールにハイドロポンプだ！」

ハイドロポンプは運良く直撃したが削りきるには至らず、わずかに体力が残った。

「よし！　ネンドール！　ひかりのかべだ！」

ネンドールは前面に見えない壁を張った。エアームドの弱点である特防の脆さをカバーする魂胆だろう。

エリカはすぐに狙いを察知していたのか、少しだけ表情を歪ませた後

「モジャンボ！　剣の舞です！」

彼女はネンドールを封じ込めるよりも相性が不利な中でどうにか戦闘に寄与することを優先するためか積み技を使用したようだ。

「エアームド、吹き飛ばせ！」

モジャンボは即座にエアームドに吹き飛ばされ、積み技を解消された。

「そうそう一筋縄ではいきませんわね……。おいでなさい！　ダーテング！」
「カメックス。ネンドールにラスターカノンだ」
とにかくネンドールを生かしておくのはまずいとばかりにレッドはとりあえずラスターカノンを放った。流石にハイドロポンプで大分削れていたため倒れた。
ダイゴはすぐに戻した後
「そうこなくっちゃね。行け、プテラ！」
「ダーテング。日本晴れです」
フィールドは日照りになった。
「エアームド！　ダーテングに凍える風！」
ダイゴは素早さで勝るダーテングに枷をつける目的からか凍える風で素早さを下げた。ダメージそのものは大事なかったが順番で優位を取られたままには違いない。

――

レッド、エリカそれぞれ二体を失い、相当に削られたがどうにか辛勝した。
「うん！　流石だね。久しぶりに本気で勝負出来たから楽しかったよ」
「いえいえ。ダイゴさんもやっぱりチャンピオンをやってただけありますよ……。リーダーとは格が違うっていうか。色々と勉強させられる戦いでした」
ダイゴ、レッドはそれぞれ互いを賞賛した。

「ところで君たち、フエンジムについての話は聞いているかい？」
　ダイゴはついでとばかりに話す。
「えぇ。ツツジさんやセンリさんからお話は伺っておりますわ」
「うん。今はリーグの素行調査の最中だが……まぁじきにアスナさんへ辞令が下るだろう。それはいいんだけど……」
　ダイゴはふと遠い目をする。何かを案じているようだ。
「何か気がかりなことでも？」
「うん。ちょっとね……。あのジムはエリカさんのところと同じく世襲形式のジムであそこの場合は代々長兄が継ぐことになっているんだ」
「へぇ……あれでも」
　レッドが気づく。
「そうアスナさんは女性。しかも兄妹の妹の方なんだ」
「あら。どうしてそのような事が」
　彼女が顎に手を遣っている。
「アスナさんがあまりにも強かったからなんだよ。先代のリーダーは非常に実力を重視する方でね。兄の方も決して弱いわけじゃなかったんだろうけど、才覚は彼女の方が遥かに上だったらしい。だからアスナさんにリーダーを継がせた……」

「そりゃあ仕方ないけど……兄の方は納得いかないのでは？」
「そうなんだ。だから三年くらい前だったかな。その時に兄妹が父親の前で戦ったが兄が完敗した……。それでリーダーの職はアスナさんに継承するという形で落ち着いたんだ」
「ならばそれで決着はついているではありませんか」
エリカがそう返す。
「そう。だから僕も大丈夫だろうとは思っているんだけど……何だかね。いやーな予感がするんだよね……」
ダイゴは顔に影をのぞかせている。
「ダイゴさん。それは杞憂ではありませんか？　たとえそのお兄様が不服であったとしても実力差が明らかで先代のお墨付きがあるとなってはどうすることもできませんわ」
「うん……まぁ僕のただの思い過ごしならそれに越したことはないんだが……」
その後ダイゴとは数分ほど話して別れた。

――

それから彼らは水道を渡り、カイナシティを経由、１１０番道路に出た。
―７月１０日　午後１時　１１０番道路―
時期は盛夏を迎え、この日は３４度と猛暑に迫っている。

猛き烈日は地面を灼き、行く者の体力を確実に奪っていく。そしてそれは二人にも例外ではなかった。

「暑い……。梅雨が明けたと思ったらこれか」

ホウエン地方は一昨日梅雨が明け、その日以来快晴が続いている。

「まるで釜の中に閉じ込められているような暑さですわ……。こまめに休憩をとらないとすぐに熱中症になりますわよ」

その言葉の通り、木陰や日陰を見つけては小休止をとっている。そうでもしなければ本当に倒れてしまいそうな暑さであった。

「分かっちゃいるんだがな……。これじゃあいつまで経っても次の街につかないぞ」

「夕刻になれば少しは和らぎますわ。今は辛抱しましょう」

野生のポケモンたちもあまりの暑さに寝ているか息を潜めていた。

―午後4時―

進み続けているとにわかに曇り始めた。

「これは……」

「夕立の気配がしますわ！　すぐに雨をしのげる場所を探しませんと」

幸いにも視界の果てにサイクリングロードとの交差点を見つけた。

「よし、走るぞ！」

レッドにつづいてエリカもその場所に急行したが、あともう少しのところで間に合わず傘も役に立たない程の大雨の洗礼を受けた。

―サイクリングロード下―

先刻までの炎天下はどこへやら、篠突く雨が地面を叩いていた。

ゴウゴウザーザーとやかましいくらいの雨音の中に二人はいる。

「はぁ……最悪だ」

レッド、エリカともに服がずぶ濡れである。

「典型的な驟雨……にわか雨ですわ。数十分もすれば止むと思いますけれど……」

と言いながら彼女は自らの上着を見た。この日の彼女の服装は上はつばの広い白帽子に若葉色のブラウス。下は白のチュールロングスカートであった。

「替えの服は持っているのか？」

「そ……それは持っていますけれど……」

彼女は途端に頬を赤らめている。

「あ……そうか」

と言いながらレッドは背を向け、上着を脱いだ。すると彼女の方も安心してバックから替えの服を出した。

「たく……もうそういう関係でもないだろ」

レッドがそうぼやくと彼女は即座に
「そ、それとこれとは別ですわ。まだ貴方に……素肌を見せるのは気恥ずかしいものなのです」
「そういうもんかね……。するのは良くて着替えの時はだめなんておかしくないか？」
レッドは替えの服を出して、袖を通しながら言った。
「そこが女性の性というものですわよ。貴方」
「うーん。そうかね……」
レッドはどうにも納得のいってない表情である。
―7月11日　午前2時―
彼女の言うとおり20分ほどで雨が止んだ。
夕刻になってからも進み続け、日が完全に暮れた19時半頃に二人は野宿する。
それから夕飯と世話を済ませた後二人はテントの中で床についた。
寝静まっているとその間にも雨が振り始めた。折しも雷もまじり始め、雷鳴があたりに響きはじめた。
エリカとレッドは雷鳴に気づいて起きた。
「たくうるせえな……」
レッドは上体を起こし、寝癖をかきながら呟く。

「今は大気が不安定な時期でもありますから……それにしても雷が近いような気がしますわ」

エリカはテントのファスナーを開け、雷を見る。

雷が光り、雷鳴が聞こえるまでの時間を測った。

「2秒……！　貴方！　ここは危険です。すぐに逃げましょう！」

「なんでだよ。下手に外に出たらそれこそ雷の餌食に……」

「ポールを伝って電撃がくる可能性があります！　とにかく荷物をもって出ますわ！」

二人は数分ほどで支度を整え、テントは撤収させずに外に出る。

昨日の夕立よりはまだ少ない雨量だったため傘でどうにか前のように濡れるのは防げた。

ちょうど近くに高木があったため、少し距離をあけてそこに立つ。すると凄まじい雷鳴と共に先程までいたレッドのテントに雷が直撃。瞬く間に火がついた。

「うわ……危なかったな」

テントは雨など知らぬとばかりに燃え続ける。もし中に居れば命が危なかっただろう。

「ふう……。それにしても随分と早く当たりましたわね……」

「おいおいまさか誰かの仕業とか言わないだろうな」

「まさか。天候を左右させることなど神でなければ無理なお話です。しかしどうもこの前の倒木といい……不気味な事態が続いてますわ」

その後、一時間ほどで雷は収まったが雷鳴が耳に残りどうにもその日は寝付けなかった。

―キンセツシティ　ホウエン地方の中央にある街。

テッセンが電気タイプな為か自身が学長を務めるキンセツ電機大学がある。

その他にもゲームコーナーやサイクルショップなどなかなかに発展している町である。

来年度の完成を目処に大規模な再開発計画を進めている。

―7月14日　午前10時　キンセツシティ―

キンセツシティに入るとそこかしこに白い鋼板の囲いがあり、重機や工具の音がけたたましく響いている。

「うわぁこれまた大工事だな……」

「歩き方にもありましたが今キンセツは全国で初めて全部をビルに改造する計画を推進しているようで……。来秋の完成を目指して日々工事が行われているようですわ」

彼女は時折耳を塞ぎながら話す。

「そりゃあ結構な話だけど……こんだけうるさくちゃあ住んでる人が大変だな」

「街の為にもなることなんでしょうけど……あら？」

エリカは交差点近くの囲いで工事責任者と思われる人物と話している老人に気づいた。

レッドはその老人とジムリーダーの写真を照らし合わせている。

「あの人がテッセンって人かな？」

「ええ。どうやらそのようですわね」

老人の方が気づき、責任者と別れてこちらに笑いながら近づいてきた。

「わっはははー　ようきたのうご両人！　わしはこの街のジムリーダーのテッセンじゃ！　宜しくのう」

テッセンはすかさずレッドと握手した。

「いえいえこちらこそ。それにしても本当に大掛かりな工事ですね……」

「うむ。近年ホウエンは首都（カントー地方）への人口流出が深刻でのう。ここで一発挽回するのじゃ！　ホウエンはおろか全国でも類を見ないこの都市計画は全国から注目を浴び、移住の希望者も続々と出てきておる。ホウエンの再生はここキンセツから始まるのじゃ！」

テッセンは目を輝かせながら言う。キンセツの改造都市計画は新聞やテレビなどで昨年以来大々的に報じられ、ここ数十年における一極集中を解消させる大目玉として注

目されている。
「地震の際には都市ごと浮かせるエアー断震。緊急時には完全内装化によって豪雨や噴火からも住民を守れる……。まさに近未来都市と言うべき風貌ですがこれだけの騒音ですと色々と問題を抱えているのでは……」
「そこよ……。度重なる訴訟でこれでも本来の7割程度まで計画を縮小しているのじゃ。だがのう。それでもワシはめげぬぞ。是が非でもキンセツに往時の賑わいを取り戻してみせるわい。ホウエン一の大都会と呼ばれたあの頃からこの街に住んでおるのじゃぞ」
　戦前までキンセツは古くからの城下町であることや鎮台が置かれた場所などという背景からホウエン最大の街として名声を誇っていた。しかし、戦後になって以降はカナズミやカントー地方への流出が目立ち、現代においてはカナズミの後塵を拝してしまっている。
「テッセンさんはかなりお年を召していらっしゃるようですが……その頃のここを見ているとなれば」
「今年で83じゃ。もう先は長うない……。だからこそ、これがワシの人生最後の大仕事じゃ。キンセツの再興を見ずしては死ねぬぞぉ！　ワッハハハハ!!」
　テッセンは高らかに笑い飛ばしたがどこか寂しそうな気配も感じ取れる。

「おっと……。こんな話をしてすまなかったの。ではジムに行こうか。ワシの後についてくると良い」

―午前10時30分　キンセツジム―

二人はテッセンの後に続きキンセツジムの奥に居た。

「ようしでは早速戦うとするかの！　火花と電光走るワシの技を前にして仰け反るでないぞ！　行け、ライボルト、デンリュウ！」

――

エリカは一匹、レッドも一匹失い、そこそこ体力を失って勝利した。

「ワッハハハ！　うむ。期待通りの実力じゃ！　これを持っていけい！」

テッセンはダイナモバッジを二人に手渡した。

「ありがとうございます」

二人は恭しく頭を下げてバッジを受け取った。

「それだけの力があればきっとホウエンも大過なく行けるじゃろうて。これだけ頼もしい夫婦がいるならばリーグも安泰じゃのう！」

テッセンは満面の笑みで二人を送り出した。

―正午　ジム前―

「次のジムはどこだったかな……」

レッドは歩き方を取り出してジムの場所を探す。
「この地方の順番通りにいくのであれば次はフエンタウンですわね……。ダイゴさんもああ仰せになっていましたが大丈夫なのでしょうか」
エリカは懸念するダイゴに否定的な返事をしたもののやはり内心では穏やかではないようだ。
「ま、着いてみなきゃ実際どうなってるかなんて分からないし。行ってみるしかないだろう」
レッドはそう返すとポケモンを休ませるためにポケモンセンターへ向かった。そしてテントをまた買い直してキンセツを発った。

――

二人はフエンタウンへ向かう前に修行と散策がてらでハジツケタウンやカナシダトンネルに立ち寄った。その後112番道路からえんとつ山に登り、そこから下山してフエンタウンへ向かうことにした。
―8月15日　午後3時　デコボコ山道―
上記の行程を全て歩きで行ったのと草花を摘んだり、ポケモンを育てながら進んだ為月はかわりお盆に入っていた。
その上、活火山のえんとつ山の近くであるため非常に蒸し暑かった。幸いにもこの日

は曇っていた為日差しがないだけ暑さは和らいでいる。
　すると、片方が切り立った崖の道にさしかかった。
「こりゃあまた急な崖だな……」
　反対側は森林となっている。
「急激な侵食で出来たものですわね……。とにかく慎重にいきましょう」
　―崖の上―
「いいか。ここが最後のチャンスだ！　何が何でも仕留めるぞ」
　木陰に身を潜めている黒づくめの少し位の高い団員が下っ端にけしかけた。
「はっ！」
　すると、団員たちは次々とゴローンやゴローニャを繰り出す。
　―崖下―
「たく暑いなぁ本当……」
　崖上の出来事など露知らずレッドはぼやく。
「日差しがある時も困りますけど曇の時は曇で湿度が下がりませんから……。この季節はなんとも苦労しますわ」
　そんなことを話しているとにわかに崖から大量の岩石が転げ落ちてきた。
「貴方！」

「うわなんだこれ……。まずい！」
前後左右逃げ場がなく、崖の近くにいたレッドが助からないことは明白だった。
しかしその時、天佑とばかりに上空からエアームドが二匹鋼の翼で思い切り石を切りつける。すると岩は見事に砕け散り、レッドとエリカは上手く難を逃れた。
「あのポケモン……もしかして」
レッドはすぐに背後の空を見た。
―崖上―
「なんだあのアマ！　邪魔しくさってからにこらしめてやる！」
一人の団員がモンスターボールを持って打って出ようとした時
「待ちなさい！　よく見るのですあの人は……」
現場責任者であるランスが止めにかかる。
―崖下―
「危ないところだったわね。怪我はない？」
岩が止まるとエアームドを戻してからゆっくりと下降し、乗っていたポケモンから降りた。
彼女は降りると装着していたゴーグルを取る。
「は、はい。無事です！　ありがとうございます。なんとお礼を申せば宜しいやら……」

彼女は何度か頭を下げながら感謝の言葉を述べた。
「そう……よかったわ」
「貴方何をしているのです！　ほら頭をお下げに……」
突っ立ったまま何もしないレッドを見てエリカは注意したが
「貴女……もしかして」
「何かしら？」
レッドは改めて声を聞いて確信した様子だ。
「やっぱりそうだ！　ほら数年くらい前にシロガネ山で助けてくれた」
彼女は少し考えた後に思い出した。
「ああ……。あの子貴方だったのね……レッドさん。シロガネ山に居たから強そうなのは分かっていたけど、まさかここまでとは思わなかったわ。ああ、申し遅れました。私はナギ。ヒワマキシティでリーダーをしているの。以後宜しく」
彼女はそう言って頭を下げた。二人も返礼で頭を下げる。
「俺、あの時貴女がくれたゴーゴーゴーグルで前の戦争の時すごく助かったんです！　それだけどうしても礼を言いたくて……本当にありがとうございました！」
「らしいわね。意外な物が役に立ったものだわ……。こっちとしてもお役に立てたのなら何より」

　ナギは少し笑みを浮かべて返す。
「こちらとしてもリーグの一員として、レッドさんの妻としてお礼申し上げますわ。それにしてもあの落石は何なのでしょう……。先日までこの辺りは台風が直撃して地盤が緩んでいるとは聞いていましたが、それにしても……」
「不自然ね。見て分かるように崖の上は深い森よ。あんな落石があったとしても木に押しとどめられるか、木ごと落ちてこないと理にかなわない」
　とナギは淡々とした調子で否定した。
「ここ最近どうもこんなことが起こっているのです。トウカの森では不自然な倒木にあい、１１０番道路では都合のよすぎる落雷……そしてこの落石」
「それは災難ね……。お祓いでもしてもらえば？」
「ええ。お祓いで済むような天災ならば宜しいのですが……」
　そう言うと彼女は遠い目をする。
「何、もしかして人災だと思ってるの？」
「あるいは……」
「おいエリカよせよ。んなことある訳ないだろ」
　レッドは即座にそう否定した。
「何か心当たりでも？」

「い、いいえ……。ありませんわ。そうですわね。近く、お祓いでもしてもらいましょうか……」

無論、彼女も、レッドも心当たりはあった。あったが必死にその可能性を否定しているのだ。

「その方がいいわよ……。そういえば二人はいくつバッジを持ってるの？」

ナギは空気を読んだのか話題を転換した。

「3つです」

「そう。確か二人はここに来て三ヶ月よね。……、フフ。期待しているわ。ヒワマキに来たら宜しくね」

そう言うと別れの挨拶をしてナギは北東の方角に飛び去っていった。

「ふう……良かった」

レッドはホウエンに来た目的の一つを達成したからかほっと一息ついている。

「あのお方……手強そうですわね」

彼女が去っていく姿を見ながらふとそうつぶやいている。

「え？」

「それとなく、そんな雰囲気がしただけですわ。さて貴方いきま……あ」

エリカは前面を見て先程までの事を思い出した。

嫌になるほどの岩石が並び、道が塞がってしまっているのだ。
「はぁ……骨が折れるなこりゃ」
その後、レッドはカイリキーなどを用いて前後の岩を砕き進んでいった。
―崖上―
「あれは……ジムリーダーでしたか」
「だから言ったでしょう……。他のリーダーまで事の次第が知れれば大事になり、この国での内偵に支障が出ます。さて……過ぎ去ったことはやむを得ません。戻りましょう」
ランスはそう言うと踵を返し、他の下っ端を連れて撤収する。
―8月16日　某時刻　某所―
「何ですって？　失敗した？」
この日の会議はアテナのこの一言で始まった。
「全く悪運の強い連中です。事ここに至ったならばもはや自然に事故に見せかけて殺すのは不可能ですね……。前段階すら失敗してるのでは言うに及ばず」
アポロは肩を落としながら言う。
「で、どうすんだよ。やっぱりやめんのか？」
「口を慎みなさいラムダ。暗殺はやめざるを得ませんが……そもそもそれは手段にすぎ

ません。サカキ様の崇高なるお考えを遂行しないなど有り得ません。こうなればまたあの男に頭を下げるしかありませんね」

アポロは顔を渋らせている。ラムダはやはり小さくなっていた。

「しかしよう。本当にそれであの夫婦倒せるのかよ？　俺らの渾身のバンギラスだってぶっ倒したんだぜ？」

「あれとは格が違うのですよ。とにかく、手を打っておきますか……」

そう言うとアポロは苦い顔をしながら会議室を去った。

二人はデコボコ山道を下りきり、１１２番道路を通ってフエンタウンに到着した。

―フエンタウン　えんとつ山のお膝元の街、フエンタウン。温泉宿が立ち並ぶが異色はポケモンセンターが無料で温泉や砂風呂を開放していることである。

火山が近いということもあってか、フエン地質地理大学もここにある。ここは火山研究の総本山の異名を持つ。

―８月１８日　午前７時　フエンタウン　入口付近―

「温泉街って聞いたけどそれにしちゃなんだかいやに静かな街だな……」

レッドは街の民家を一瞥して言った。

「ええ……。なんだかひと波乱ありそうな予感がしますわ」

街は極めて張りつめたような雰囲気が漂い、今までの街とは異質なものである。
とりあえず二人はポケモンを休ませるためポケモンセンターに向かった。
―第十五話　自然からの刺客　終―

第十六話　フエン騒動（上）

―8月18日　午前11時　フエンタウン　ポケモンセンター　男湯―

レッドはとりあえずポケモンセンターに直結している男湯に入り、旅の汗を流していた。

「ふぅ……。いい湯だなピカチュウ」

「ピカ！」

季節は夏とはいえ、温泉となれば話は別である。体の芯から浄化されるような湯に浸かり、彼はここに来た時の緊迫感すら薄れつつあった。

ピカチュウをついでに入れて時間帯のせいか周りに人もいなかったので泳いでいる。

顔に湯を浴びせていると隣に人が入ってきた。

「ふー。おや。あんたここじゃあんま見ない顔だね！　トレーナーかい？」

聞き覚えのある声だと思ってその声がした方向を見た。

それはトウカシティでセンリに門前払いされた男である。

「あれ……貴方もしやトウカジムで……」

「ありゃ。あれ見てたんかい！　いやー恥ずかしいなぁ。何度頼んでもダメだからこの

街まではるばる来たって訳よ」
「はぁ……」
口から先に生まれたのだろうかとばかりに彼は喋り続ける。とりあえずレッドは調子を合わせていた。
「そしたらよぉ。本当人生どうなるか分からんもんよ！　もうすぐ俺の夢が叶うかもしれねぇんだ！」
「ジムリーダーになる夢……ですか？」
レッドはセンリの言った事を思い起こして言う。
「おやなんでそんなことまで……」
男はちゃんと顔を見てなかったのか改めてレッドの顔を凝視する。
すると男は仰天した風に
「おやレッド……かい？　伝説のトレーナーで全国を周っているっていう」
「え……ええ。そうです」
「おやおや。早くもここまで来たっていうのか！　たまげたねえ。そうか……お連れのエリカさんってのがあのリーダーとツーカーだからそこまで知ってるんだな」
ツーカーというのがレッドには分からなかったが、意味はなんとなく理解した。
「ま。いいや。あんた、ここに来たって事は目的は挑戦だろう？」

「そりゃあ……まあ」
「悪いねぇ。薄々分かっちゃいるだろうけど、今この町は色々とあってな。今、〝一応〟リーダーとなっているアスナは今挑戦を受けているどころじゃねえ」
「い、一応ってなんです？」
レッドは思わず聞き返す。
サキヒサはにやりと笑みを浮かべて言う。
「ついこないだの話だ。あんたなら知ってるだろうが、アスナとその兄、ダイモンは数年前に父親を前にして戦いアスナが圧勝した。だがな、一週間ほど前再度戦って……どうなったと思う？」
「話の流れからして……もしかして、勝った？」
レッドは恐る恐る言う。
「いや、やっぱり兄貴が負けたんだ」
「はい？」
「だがな。前のような完敗じゃないんだ。２体も倒されてんだよ」
「え!?」
「その兄貴ってのは一度敗れてから懸命に修行してそこまで腕をあげた……三年前は全く手も足も出なかったというのになぁ」

サキヒサは自信に満ちた顔で言う。
―女湯―
女湯ではエリカと同じ時にフエンのリーダーであるアスナが入っていた。
アスナは元気がなかったので最新版の歩き方で顔を知っていたエリカが話しかけ、男湯のレッドとちょうど逆の立ち位置ではあるが話が進んでいた。
「しかしおかしな話ではないですか？　そのお兄様というのは修行している素振りなんてなかったのでしょう？」
「あたしのみた限りではそうだったんだけど……。隠れて一生懸命修行してたんだよ。兄さんは確かに前に比べて腕をあげてた」
アスナはうつむき加減に言っている。
「左様ですか……。しかしもう貴女がリーダーである事はもうリーグの決定事項でしょう？　先代のお墨付きもあることですし、今更多少強くなったところで……」
「そうもいかないんだ……」
「はい？」
「もう貴女なら聞いてると思うけどさ。あたしはリーダーの伝統……つまり長男が代々継いでいくというのを破ってリーダーになってるの」
エリカは頷く。

アスナは途端に声を小さくする。
「うちみたいな田舎だとさ……。色々とうるさい人がいてね……。そういうのを抑えられたのは兄さんよりも圧倒的に強いという事とお父がいてくれたからなんだ」
「つまり。兄に全く才覚がないとはいえないのだから原則に戻ってリーダーを長男に継がせるのが筋……という方がいらっしゃるということですわね？」
アスナはかぶりを縦に振った。
「全くジムリーダーをなんと心得ているのやら……。リーダーは地元の結束などを示すという側面があるとはいえ本分にとってかわるほどのことではありませんわ」
「その通りだよ。エリカさんの言うとおりなんだけど……。ここにいる爺ちゃん婆ちゃんは小さい頃からお世話になった人ばかりでさぁ。言い辛いんだよね……」
アスナは町の仲良くしている人と対立しなければならない事に憂鬱になってるからか下を向いてしまっている。
「どういう方が貴女に苦言を呈しているのですか？」
「おもに古くからフエンから住んでる人かな……。うちの町会長とか、温泉協会の会長とか、消防団や自治会の長老さんたちとか……」
「なるほど……だからリーダーの変化に苦言を呈すると。かなり問題は厄介そうですわね」

エリカは合点のいった様子である。
「もうね……。嫌なんだよ。血を分けた兄妹だっていうのにこんなことでいがみ合うなんてさぁ……」
「心中はお察ししますが……ここでめげてはいけませんわ。リーグの権威を守るため……そして貴女自身のためにも」
「あたしの……ため？」
アスナはエリカに目を合わせる。
「ええ。貴女がリーダーになることはお父様のご遺志なのでしょう？」
「そうよ。遺言書にもきちんと書いてあるし……亡くなる直前もあたしに継いで欲しいと言ってた」
「ならば貴女のこれからの為にも……ここで諦めてはならないと存じますわ。私もお話を聞いたからには同じジムリーダーとして出来る限りの事を致します。ですから……」
彼女は右手をアスナに遣る。
「わかった……。あたしももう少し頑張ってみる。迷惑かけるかもしれないけど……宜しくねエリカさん」
アスナとエリカは固い握手を交わした。
―男湯―

一方サキヒサとレッドは湯から出てサウナに入っていた。ピカチュウもついでに入っているがバテそうだ。
「それで……」
レッドがサキヒサに尋ねる。
「ん？」
「そのお兄さんがリーダーになるかもしれないって事がどうしてサキヒサさんに関係あるんです？」
サキヒサは汗をタオルで拭きながら答える。
「鈍いねぇあんたも。もしこのままダイモンがリーダーになればそこまで鍛えた俺は副リーダーだ。実際に言質も取ってる。そうなりゃ俺も色々とリーグに行く機会が増えてコネができるだろ？」
「まぁ……そうかもしれませんね」
レッドはとりあえず調子を合わせた。
「そうすりゃあいつかはリーダーになる話も転がり込んでくるかもしれねぇじゃないか」
「えぇ……そんな運任せな」
「少なくとも今までみたいに道場破りするよりかはマシだろう。急がば廻れよ」

サキヒサは笑みを浮かべている。どうやら本当にどうにかなると思っている様子だ。
「これで田舎にいる母ちゃんも漸く楽にできる……今まで心配ばっかかけてきた。ちと遠いが、まあ仕送りくらいはきちんとしてやれる。俺ぁそれだけで本当に嬉しいんだ」
「お母さんですか……。最近は電話すらしてないな……」
レッドはふとマサラにいる母を思い出した。
「そりゃあいかんね。よく言うじゃないか。親孝行したいときには親はなし……ってな。やっておいて悪い事はないぞ」
「ははは……」
その後数十分にわたって我慢比べしたがレッドが根負けして出て行った。ピカチュウは五分で限界だったようで水風呂に走っていった。
―午後0時半　ポケモンセンター　休憩所―
それから一緒に温泉から出て同じようにして暖簾から出ていく。
「よし。じゃあなレッド。リーダーが代わった暁には手合わせ宜しくな」
「はい。こちらこそ」
そう言うとサキヒサは肩を叩いて去っていった。
「ふう……。あれ?」
すぐ近くにあった休憩所の座敷を見ると二人の女性が浴衣を着て横たわっていた。

横でキレイハナがうちわを扇いでいる。
そのうち一人の女性が起き上がって顔のタオルをとった。どうやらエリカのようである。
レッドは靴を脱いで座敷にあがり、エリカに近づく。
「あら……貴方。出ていらしたのですか」
「どうしたんだよエリカ。まさかのぼせたのか？」
彼女は少し顔を赤くして頷く。
「偶然居合わせたリーダーのアスナさんと話していたらすっかり……。お恥ずかしい話です」
「もしかして隣にいる人？」
アスナも気づいたのか起き上がる。
「あれ。もしかしてレッド君？」
アスナがレッドに話しかける。
「ええ左様ですわ」
「初めまして。あたしはアスナ！　ここ、フエンのリーダーをしているんだけど……ちょっと今ゴタゴタしててね。モラトリアム（最初の８枚を取るトレーナーを指す）の人はともかく、まだ貴方たちと戦える状態じゃないんだ。ごめんなさい」

アスナはレッドに頭を下げた。
「こちらこそ……。参ったな。それじゃあどうしようかエリカ。他の街にでも」
「いいえ。私はここに留まりますわ。同じリーダーとしてこれは放っておけませんもの」
彼女は決然とした表情で言う。どうやら本気だ。
「はぁ？　正気かよお前。こんな事部外者の俺たちがどうこうできる問題じゃないだろ」
「部外者とはなんですか！　貴方も私もリーグの一員ということをお忘れですか？　このままダイモンさんがリーダーになるような事になればリーグの権威は地に堕ちますわ！　如何に長年の慣習といえど、それによってリーグの金科玉条を曲げるかの如き所業は断じて見過ごすわけには参りません」
相変わらずエリカの反論にレッドは圧倒された。レッドはため息をついて
「あーもう分かった分かった。確かにこのままじゃ下手すると一周しても終わらなさそうだしな……」
と渋々エリカの提案に乗ることにした。
「ありがと……それじゃ、ここではなんだしジムにでも来てよ。詳しいいきさつ話すから」

と言いながら立ち上がると腹の虫が鳴いた。
アスナは照れた様子で
「そういえば朝から何も食べてないんだった……。お昼済ませようか」
「そうですわね……」
三人は着替えと昼食を済ませた後、ジムへ向かった。
―午後2時　ポケモンジム　裏口―
「あ！　リーダー。お帰りなさい。町長さんがおいでですよ」
「ああ……ありがと。会ってくるからお二人をそうね……事務室にでもお通しして」
ジムトレーナーと同じくアスナは憂鬱な様子で言う。
「そんな偉い人がわざわざ？」
レッドが尋ねる。
「あーちょっとね……。それじゃあ悪いけど、ちょっと待ってて！」
そう言うとアスナはいそいそと客の待つ場所に向かった。
「やむを得ませんね……。それでは少し待ちましょうか」
「は、はい！　どうぞ」
ジムトレーナーは二人の事を知っているのか、少し緊張した様子で事務室へ案内した。

―午後2時10分　応接室―

「なあ。アスナちゃん。私らは何もここから出てけと言っとるんじゃぁないんだ。兄さんの顔を立ててやれと言ってるだけなんだよ」

町長は穏やかな様子でアスナに言う。アスナはフォーマルな服装に更に着替えていた。

「ごもっともな意見ですが……。しかし私としては父の遺志に反するような事をしたくはないんです」

「そりゃ結構な話だ。あんたのお父さんには私も随分世話になったし、言いたいことは十分に分かる。しかしねぇ。やはりそれでは納得しない人がこの町にはたーくさんいるんだ」

アスナは相槌を打つ。

「私もジムリーダーがそういうものではないことは分かっているつもりだがの。それと同時にポケモンジムは地域の協力といわば両輪となってできるものだろう？　このままだとアスナちゃんにとっても穏やかじゃあないと思うんだがね……」

「それは……脅しですか？」

アスナは眼光を鋭くする。

「ハハハまさか……。ただ私はジムと町は強い紐帯で結び付けられていると言っとるだ

けだ。アスナちゃんよ。どうしても副リーダーじゃ嫌かい？」

町長はそう言うと煎茶を啜った。

「いくらじっちゃ……町長の頼みでもそれだけは致し兼ねます。副リーダーとリーダーでは全く立場が違うと幾度も申し上げたはずです」

ジムリーダーはれっきとしたポケモンリーグから任命された役職であるが、副リーダーは所詮ジム内で決めた立ち位置にすぎないのである。副リーダーを敢えて置いてないジムや待遇が同じジムも多くある。

町長はため息をつくと、煎茶を飲み干した。

「分かった……。アスナちゃんの言い分はそのまま各所に伝える。悪いこと言わないからよくよく考えたほうが良いぞ……」

町長はそのまま応接室を後にする。

見送った後、片付けの為に再び応接室に戻る。

「あ、リーダーいいですよ。片付けはあたしがやりますから」

トレーナーが一足先に片付けをしていた。

「あぁごめんね……」

「全くお偉方もしつこいですよねぇ……。リーダーがこんなにダメだって言ってんのに聞きやしないんだから」

トレーナーは台拭きをしながら愚痴をこぼす。
「仕方ないよ。実際にしきたりを破ってるのはあたしのほうだからね」
アスナは腕を組みながら力なく笑顔を作った。
「でも先代はそれでも良いと仰せになったじゃないですか」
「そうね。だからこそ……」
「リーダー。お二方をお連れしました」
アスナの言葉の間に入るかのように別のトレーナーがレッドとエリカを案内した。
台拭きをしていたトレーナーはそそくさに済ませて
「どうぞ」
と勧めた。
「ん。ありがと。それじゃあ入って」
「失礼します」
―応接室―
「それではまず事のあらましを話していただけますか？」
席についてすぐエリカがそう口を開く。
「分かった。まずね……」
アスナは少しずつ事の次第を話し始めた。

事はアスナ及びその兄ダイモンの父。即ち先代リーダーの死から端を発する。

数年前の決闘や遺言の通り、アスナがジムを、ダイモンがもう一つの家業にあたる温泉宿を継ぐ事になった。それで万事丸く収まるはずだったが、一週間前に突如ダイモンから再度の決闘が申し込まれ、ジム内で行われた。

結果、前回同様ダイモンの大敗に終わったが、数年前とは違いアスナ側も2匹ポケモンを失っている。決闘の結果は瞬く間に街中に広まり、伝統に則った手続きに戻すべきだという主張が町の有力者を中心に噴出。

更に厄介な事に後ろ盾である流れ者のトレーナー、サキヒサの指導の下温泉宿の離れに第二ジムを構えジムは実質分裂。トレーナーの比率としては8：2とアスナにつくものの方が圧倒的に多いが、第二ジムはサキヒサによるポケモンの力と有力者たちの様々な支援によって無視できない力をもっていた。

町による圧力も日に日に強まりつつあり、近日中にダイモンをリーダーにする推薦状を提出するなどという動きもある。勿論リーグの審査があるためこれだけでアスナが首になるというわけではない。しかしリーダーになって数ヶ月でこのような事態が起こる事そのものが認定したリーグからすれば大失態である。

「とまあ……こんな感じ」

アスナは出されたコーヒーを飲み干してしめくくった。

「なるほど……事は存外急を要しますわね。もし町長側でリーグに推薦状が提出されればそれだけでアスナさんは理事会議……懲戒の対象になりかねませんわ」
「まぁそりゃそうよね……。そんな事になったらあたしに太鼓判を押してくれたセンリさんやツツジさん……何よりもお父に申し訳ないもん」
　アスナとしてもそれだけはなんとしてでも避けたい様子だ。
「じゃあまずはそれを思いとどまらせないといけないわけだな」
「そういうことですわ。温泉でも言いましたがやはり私としてはダイモンさんが突如再戦したいと言ったこと……あとは特に修行している様子も見受けられなかった方が急に全力のリーダーのポケモンを倒せるほどの力を得たこと……ここが気にかかりますわ」
　エリカがそう言うと
「あんなのインチキですよ！」
　飲み物を持ってきたトレーナーが立ち聞きしていたのか怒り心頭な様子で荒々しく襖をあけた。
「ちょっと！　急に話にはいってこな」
「だってリーダー！　うちのトレーナー皆そう言ってますよ！　あの試合はどう考えてもお兄さんの方がズルしてます！　こんなふざけた試合でリーダーが……アスナさん

が辞めさせられるなんてあたしは到底納得できませんよ！」

トレーナーは詰め寄るような格好でアスナに迫る。

「トモミ……。その気持ちはすごく嬉しいんだ。嬉しいんだけど……」

「けどじゃないですよ！　あ……そうだエリカさん！　レッドさん！　ちょっと待ってください」

トモミは慌ただしく出て行った。

「ふぅ……びっくりしたなぁ。心臓止まるかと」

「ごめんなさい。あの子ちょっと熱くなるとすぐこう向こう見ずで……」

アスナは二人に頭を下げる。

「顔をお上げください。これだけ貴女を思ってくれるトレーナーをお持ちで同じリーダーとして羨ましい限りですわ」

とエリカは微笑んで返す。

そうしているとトモミが帰ってきた。走ってきたのかやや息が切れている。右手に一枚のブルーレイディスクを持っていた。

「こ、これ見てください。お二人にもあたしの言ってることがわかると思います！　それでは失礼しました」

そう言うと流石に疲れたのか机にディスクを置くと最初とは対照的に襖を閉め静か

に立ち去った。
　ディスクカバーのラベルには8月8日の悲劇と書かれている。恐らく彼女がつけたのだろう。
「見てみますか」
　エリカはそう言うと進んで隅にあるレコーダーに電源をつけ、ディスクを入れた。
「アスナさん。これを」
　エリカはリモコンを見つけ、アスナに手渡す。流石に全メーカーのテレビの操作法を把握しているわけではないようだ。
　アスナはテレビの電源をつけ、入力を合わせた。すると、当時の勝負の模様がみえてきた。

―8月8日　午後1時　同所―

　場は非常にざわついている。ジムトレーナーが総出で動静を見守っている。
　まず出てきたのはサキヒサだった。
「あな……お前か。久しぶりだな。だがいい加減諦めろ。私は父同様お前を雇うつもりは……」
　サキヒサはここでも道場破りまがいの事をしていたのか呆れ気味の表情である。

「おっと！　今日戦うのは俺じゃねえ！　この方だ！」
そう言うとサキヒサの背後から一人の痩躯で文弱な印象の青年が出てきた。
「え……。に、兄さん!?　どうしてよ？」
アスナは困惑している様子だ。
「……」
ダイモンは黙ったままである。
「ダイ……お前の兄さんはなぁ！　前にあんたの父さんと戦った時ボコボコにやられて長く傷心だったんだよ！　だが、この間からこの俺、サキヒサが稽古をつけてやり、みるみる上達して今やあんたと戦えるほどになったんだ！」
「そうか……。お前が稽古をつけたのか」
アスナはサキヒサを一瞥する。
「そうよ！」
意気揚々なサキヒサをよそにアスナは兄に再度話しかける。
「兄さん……本気で戦うつもり？　まさかお父の言葉忘れたの？」
アスナはフィールドの左側でダイモンと対峙している。
「アスナさんよぉ！　兄さんの気持ちを少しは分かってくれや！　どうしても兄としてこのまま負けっぱなしじゃあ格好つかねえんだとよ！」

大声で話しているのはサキヒサである。
「黙れ！　私は兄に聞いている！　お前じゃない！」
アスナは声色を変えてサキヒサを威嚇する。
「そうだ……。先生の言うとおりだよ。アスナ」
兄のダイモンは眼鏡をあげて重い口を漸く開いた。
アスナはダイモンの目をじっと見つめている。
「確かに親父は……。俺にあの宿を、お前にジムを与えそれで全て終わりだと言った……。だけどな。逆だろう！　本当なら！」
「そう思うんなら……。どうしてお父が亡くなる前にそう言わなかったの！　今になっていうだなんて……」
「くっ……。間に合わなかっただけだ。何しろ相手は本職のリーダーだ。忙しい経営の合間見つけて育てるには時間かかるからな……。お前みたいに日がな一日鍛えるわけにもいかなかったんだ」
「だからって」
アスナは怒りを抑えきれなさそうな様子だ。
「どうせあの頑固な親父に言ったって、お前にゃ無理だの一言でおしまいさ……。それにお前も聞いてるだろう」

「何を」
「未だお前がリーダーであることを歯がゆく思ってるご老体たちの存在だよ」
アスナは目を見開く。
「そういう人たちの溜飲を下げるためにも……俺たちはもう一度、ここで戦わなきゃならないんだ。なあアスナ。これは掟を……伝統を破った俺たち兄妹の宿命なんだよ……！」
ダイモンは毅然とした様子で話す。
「よっ！　流石はマツノキ（アスナの名字）家の当主だ！　アスナさん！　ここまで言われたからにはまさか受けないってわけにはいかないよなぁ!?」
サキヒサは恫喝半分なほどに声を張り上げる。
「ふっ……。宿命……か。分かった。分かったよ。いくよ兄さん！　行け！　バクーダ！　ヘルガー！」

――

先述の通り、アスナは勝ちはしたが予想外にも二体を失った。
「ふざけないで！　こんなのインチキよ！」
「そうだ！　どう考えてもこんなのおかしいだろ！　ふざけんじゃねえよ！」
勝負が終わるとジムトレーナーからは次々とこのような非難がダイモンの元に殺到

した。
「うるせえ！　黙らねえか！」
しかし、サキヒサが大喝を放つと、一斉に静まった。
「ハハハ……。相変わらず強いな。アスナは……だけど。俺も腕をあげただろ？」
ダイモンは負けたにも関わらず爽やかな笑みを浮かべているが、少しだけ冷や汗もかいている。
「嘘……どうして……」
アスナはほぼ素人同然の相手に二体も手持ちを喪失する失態を演じてしまい、兄を糾弾するどころではなかった。
「ハーハッハ！　天下のリーグ公認のリーダー様もこれでは型無しだな！　アスナさんよお！　あんたはここにいる兄さんを相手に一体たりとも倒されるべきじゃなかった！　それは分かるだろ？」
「くっ……」
「それがこの体たらく！　これではわざわざ伝統を破ってまでリーダーになった事の是非が問われるんじゃねえか？　え？」
サキヒサはアスナを煽り続けている。
「帰れ……」

「ん？」
「帰れ！　お前みたいな奴！　トレーナーの風上にも置けない！　帰れぇ！」
トモミの一言をはじめとして、次々と帰れコールがジム中にこだまする。
「ハッハッハー。ええ帰りますとも。ダイ。参りましょうか」
「ん……あ。ああ」
ダイモンは後ろ髪を引かれるような様子でありながらも、サキヒサにつづいて帰っていった。
――
映像はここで終了した。
―8月18日　午後4時　フエンタウン　ポケモンジム―
「これは……あまりにも酷すぎますわ」
エリカ、レッド共に怒りに打ち震えていた。
「うん……」
アスナはやはり嫌な記憶なのか少し元気をなくしている。
「これじゃあトレーナーの人皆カンカンになるわけだな……。あんなのどう見てもただの素人じゃないか！」
ダイモンはボールの投げ方に始まって、技の選定、タイプの相性、体力の把握……ど

れをとっても初心者のそれであった。どう見ても修行をして出直してきたとは思えなかった。
「普通に考えればアスナさんの敵にすらならない相手だとお見受けしますが……。それにしてもどうして2体も失うような事態に」
「うっ……」
アスナにとってはやはりそれは痛いところである。
「そんなの決まってんだろ！　そのダイモンってトレーナーがずるを」
「証拠は？」
「は？」
エリカの返しにレッドは当惑する。
「証拠はどこにあるのです？」
「そんなのお前、あの動きみてれば」
「確かに初心者ですが……ポケモンは確かに指示を聞いていました。育てるのに夢中でバトルの事はあまり気を配ってなかった。バトルの事はリーダーになるということが本当に視野に入ってから本格的に勉強するつもりだ……。無茶な言い訳ですが、こう言われればおしまいですわよ」
「ううう……そうか」

レッドは歯がゆい思いをしている。
「一見した限りでは残念ながらダイモンさんが明らかに不正を働いているとみられる箇所は見受けられませんわ。これではバトルに疎い方が勘違いを起こすのも無理はありません……。が」
「が？」
アスナは思わず先を促す。
「もし、万一ダイモンさんが不正をしているとするならば……そこのサキヒサさんがかなり怪しいですわね」
「うん……二人は絶対師弟って以外に何かあると思うんだけど……」
「証拠がない」
レッドがそう締める。
「困りましたわね……」
三人は黙り込んでしまった。
気がつくと日が傾き始めている。
「もう夕方か……そういえば二人は今日泊まる場所決めてるの？」
アスナが尋ねる。
「いいえ。まだです」

「そっか。この近くにはいくつか良くしてもらってる宿があるんだけど……」
　とアスナが言った所でレッドが遮る。
「いえ。アスナさんの家の宿に泊まらせてください」
「え!?」
　アスナは唐突な提案に豆鉄砲をくらった様子である。
「貴方……？　正気ですか？　敵地に乗り込むようなものですよ？」
「俺さ……許せないんだよ。こういうの。だから少しでも相手の様子を知りたくて……」
　レッドはどうやら先程の映像でやる気をだした様子だ。
「レッド君……」
　アスナは感じ入ってるのか目を少し潤ませている。しばし間を空けて
「分かった、そのつもりならそう手配する。向こうもお客だから無茶はしないと思うけど……まぁ用心はしておいてね」
「ありがとうございます。ところで、このディスクお借りしても宜しいでしょうか？」
　エリカが尋ねた。
「いいよ。それうちのトレーナーが怒って方方にばらまくためとかなんとか言って焼き増ししたやつの一枚だし……。なんならあげるよそれ」

エリカは礼を言い、頭を下げた。
「そういえば思ったんですけど、なんでアスナさんあの時サキヒサさんに対してあんなに厳しくあたってたんです？　今と全然違うじゃないですか」
「あ……ああ！　あれね。うちのお父がそんな感じだったから真似して舐められないようにって挑戦者に対してはそういう風にしていただけ。ほらただでさえこんな状況だしさ」
あれはアスナなりの工夫だったようだ。
その後も数分ほどアスナと話して、連絡先と旅館の場所を聞き出した後にジムを出た。
―午後4時半　路地―
日は西に傾きつつあったが、蒸し暑さは相変わらずであった。
「はぁ……なんか流れであんな事言っちゃったけどこれ結構な問題だよな……」
レッドは少しだけ後悔している口ぶりで言う。
「そうですわね……。しかし全てはここから始まっているのですわ。ここに解決する鍵があると思うのですが……」
エリカは貰ったディスクのケースを意味も無く表裏に返している。
「そうだな。俺はどうにもあの勝負には納得できないし……何かからくりがあると思う

んだよなぁ」
「とにかく今一度精査してみましょうか……」
―午後5時　旅館『松ノ木』玄関前―
アスナの宿は歩いて1kmほどのところにあった。彼女から貰ったメモによればここが目的地である。
「なかなか滋味豊かな所ですわね」
旅館は瓦葺き四階建ての伝統的な日本建築の建物だった。築30年ほどと推定される。
しかし、いくらお盆明けの時期とはいえ客の入りは芳しくなさそうである。一階の窓ガラスから見た限りだと客と思しき人は数人しか見受けられない。
「よし、入るか……」
レッドとエリカは意を決して伏魔殿の扉をくぐっていった。
―第十六話　フエン騒動（上）　終―

第十七話　フエン騒動（中）

―8月18日　午後8時　旅館『松ノ木』　5階　支配人室―

ダイモンとサキヒサは机を挟んで今後の事を話していた。

「首尾は上々。残すは推薦状の件だが」

サキヒサが自らの盃に酒をつぐ。

「ああ……。半分以上はこちらの言うことに賛同しているが……未だに立場を明確にしない人が多くてね。何よりもあの町長がうんと言わないからなぁ」

「あの爺さんか……。最後の砦だな」

フエン最大の名士であり、有力者の中でも最大の発言力を持つのがその町長である。先代のリーダーには大恩があり出来る限りその遺志を尊重する考えのため表向きには中立だが心情はややアスナ寄りだ。

「他の人達の顔色を伺ってか判然としない発言が続いてはいるけど……やはり決定打が何か必要になるね……」

「決定打か……。やはりこれしかないか」

サキヒサはモンスターボールを手に持つ。

ダイモンは不服そうにかぶりを振る。
「どうした？　ダイ」
サキヒサはダイモンの顔を覗き込む。
「ここまで来といてなんだが……やはり気がとがめるな」
ダイモンは机に視線を落とす。
「何を今更……。もう既に賽は投げられているんだ。今更どうこうできる話じゃないくらい賢いお前さんなら分かっているだろう？」
サキヒサは鋭い眼光で彼を睨む。ただでさえ恵体で、やや強面の彼である。正反対のダイモンは見るだけで縮こまってしまう。
「分かっている。分かってはいるがなぁ先生」
「だったらもう何も言うな。俺の力が必要なんだろう？　ポケモンは俺に任せ、あんたはあんたでやるべき事をこなせばそれでいいんだ」
そういうとサキヒサは二杯目の酒を旨そうにあおった。ダイモンは信頼してはいるがどこか落ち着かない表情である。
―同じ頃　同旅館　檜の間―
レッドとエリカは二回目の温泉から上がった後、出された夕食を済ませると翌日以降に向けた話をしている。

先程からアスナより貰い受けたブルーレイを備え付けのテレビにセットして流していた。
「それにしても本当人いなかったな……。俺以外数人くらいしか入ってなかったぞ」
「女湯も同様でしたわ。この街の不穏な空気を察してかいそいそと町を出てしまってるのでしょうかね……」
エリカは備え付けの茶櫃から煎茶を淹れながら言う。
「早く収めないとやっぱりまずそうだな」
「それは勿論ですわね。ここも元はもっと賑わっている場所のようですし……。事を落着させなければ旅館や温泉を営んでいる方が不憫ですわ……。はい、貴方」
エリカが先程淹れた煎茶を差し出した。
「ありがとう……。にしてもどこから取りかかればいいやらな」
レッドはテレビに目を向ける。
「先程も申しましたがやはりこの勝負が鍵を握っていると思うのです」
「うん」
「それで見ていて気づいたのが……」
エリカが早送りしてある時点で動画を止めた。
「ここです」

エリカがダイモンの着ていたチョッキの内側を指差す。
「これは……」
この時、コータスの熱風によって彼の服の内側がめくれて見えていたのだ。
「貴方も見覚えがあるでしょう？　ジムバッジです」
ジムバッジの付け方はケースに入れたり、巾着袋に入れたり様々だが中にはチョッキやコートなどの内側につける人もいる。どうやらダイモンはそのパターンのようだ。
「あまり鮮明ではないので見にくいですが……これを見た限りだと3つしか佩用していませんわね」
「え、ごめんエリカなんだってはいよう？」
レッドは聞き慣れない言葉なので聞き返した。すると彼女は少し間を空けて軽く頭を下げ
「着用。していませんわね」
と即座に言い直した。少しだけ彼に配慮しなかったことを恥じているようだ。
「ああ……。そうだね。よく見ると左と下にあっておかしくなさそうなのにない……。で、これがどうかしたの」
「貴方。ジムバッジの効果お忘れになったのですか？　他人から譲り受けたポケモンはジムバッジの枚数によって言うことを聞くかどうか見定めるのです」

「え……ああ。そうだな」

御三家を除き全部自力で集めていたレッドにとってはあまり縁がない効果だった為か忘れていたようだ。

「て……おい！　ちょっと待てよ。エリカまさか……」

「ええ。そのまさかですわ。ダイモンさんはサキヒサさんからポケモンを借用して戦っていると踏んでいますわ」

エリカは確信をもった表情で言う。

「貴方。ダイモンさんのポケモンはどのようなパーティでしたか？」

「えっと……ドサイドン、サメハダー、マッスグマ、グラエナ、バクーダ、マグカルゴだっけ？」

レッドは思い出しながら言う。

「ええ。その通りです。一生懸命隠そうと進化系のポケモンを多く揃えていますが明らかに強さが段違いでしたでしょう？」

「確かに……ドサイドンとサメハダーが倒れたらあとはもう……」

レッドの言うとおり、その二体が倒れた後は最早総崩れであった。コータスとバシャーモの圧倒的な火力を前にしてただひたすらに散っていくのみである。

「明らかに怪しいでしょう？　恐らくはその二体のみサキヒサさんから借りて自分のも

のかのように使ったのですわ」
「で……でもさっきエリカ言っただろ？　あのジムバッジの数じゃ言うこと聞かないんじゃ」
　エリカは首を縦に振る。
「確かに普通はその通りです。ですからどうにも歯がゆいのですわ……」
　彼女は考え込んでしまった。
　少し間を空けてレッドが提案する。
「なぁ俺思うんだけど」
「何でしょう」
「やっぱりこれってポケモンの問題だと思うんだ……。だって本来従わないはずなのに指示を聞いて技を出しているんだろ？」
　レッドは確認する。エリカは黙って頷く。
「だからそっちのポケモンに何か事情があるんだよ多分」
「なるほど……貴方の言うとおりならば接触してみれば分かるかもしれませんわね」
　彼女は少し口角をあげている。どうやら、鍵を掴んだようだ。
「接触？　そんなのどうやって」
「宜しいですか？　例えばですね……」

その後エリカとの会話は夜更けにまで及んだ。

―8月19日　午前7時　旅館裏口―

サキヒサは裏口より出て日課の訓練をしようとしていた。

「あの……サキヒサさん！」

呼び止めたのはレッドだった。サキヒサは意外そうな表情で彼の方を向く。

「おお！　レッドか。おはよう。今日はいい天気だな」

この日も朝から強く日差しがさしていた。

「え。ああ……そうですね。今日も暑くなりそうで……へへ」

レッドは照れ隠しな様子で笑っている。

「それで、何の用だ？」

「あの。俺とポケモン勝負しませんか？」

「うん？」

サキヒサは瞳孔を収縮させている。

彼は少し間を空けて

「ハハハ。悪いなレッドよ。前も言ったがダイモンがリーダーになったら相手してやると」

「いえ。今やりたいんです」

「ほう。どうして？」
　サキヒサは興味深そうに尋ねる。
「俺。今まで貴方みたいにずっと地位に就かず色々な所を旅してポケモンと向き合って育ててきた人とは戦ったことないんです。バッジの数もすごいし、一回戦ってみたいなぁと」
「そうか……」
　サキヒサは暫し横を見た後
「分かった。そこまで言うなら付き合おう。ついてこい」
　そう言うとサキヒサはオオスバメを繰り出して１１２番道路の方角へ飛び去る。
　レッドもそれに続いた。
　―午前７時３０分　１１２番道路　某所―
　サキヒサは森の中にちょうど空いている草地に降り立った。
「へぇ……こんな場所があるんですねぇ」
「うむ。このあたりは数年前くらい前に修行に来ててな。それで見つけたんだ」
　レッドはキョロキョロと周りを見る。すると草木の奥に不自然な穴を見つけた。
「気になるか？　あれは俺の作った秘密基地だ。ダイモンに会う前の時は穴場を見つけてはそういう場所を見つけて修行の拠点にしてたんだ」

「へぇ……」
「ま、それはともかく俺と戦うんだろう？」
サキヒサはモンスターボールを構えていた。
「は、はい！　勿論です」
レッドもやや遅れてモンスターボールを出した。
「よし。では伝説のトレーナーの実力拝見といきますか。行け！　ライボルト」
「行け！　フシギバナ！」
こうして伝説のトレーナーと流れ者の実力者との戦いが始まった。
「ライボルト。オーバーヒートだ！」
ライボルトは指示を受けるとあらん限りの豪炎をフシギバナにぶつけた。
フシギバナは不一致とはいえ、大文字をも凌ぐ大技の前に四分の三ものダメージを食らった。そして、当然のように白いハーブを嗅いで特攻を元に戻す。
「フシギバナ。パワーウィップ！」
レッドは地震も覚えさせていたが、敢えてパワーウィップを選択した。
新緑の効果もあわさって相当なダメージとなったが、やはり特攻が高いフシギバナでは本来の力が出しきれず半分以上残してしまう。
「ライボルト！　１０万ボルト！」

流石にオーバーヒートで大ダメージを食らっていたため、この攻撃でフシギバナは沈黙する。
「まずは一匹……だな」
サキヒサはそう呟いた。少し自信ありげだ。
レッドはすまないと思いながらフシギバナを戻す。

――

戦いは中盤にさしかかり、レッドは3匹、サキヒサは2匹喪失とややサキヒサが有利な状況で推移していた。
サキヒサは現在二匹目のロズレイトをピカチュウのボルテッカーで倒され、レッドはそのままだしている。
「レッド」
サキヒサは二匹目のポケモン、ロズレイトを戻しながら言う。
「はい？」
やや冷や汗をかいていたレッドは拭いながら言う。
「お前、まさか手加減してはいないだろうな？」
「まさか！　これが全力です」
レッドは強い声色で否定する。

「そうか。ならいいが……こいつでいくか。行け！　ブラッキー！」
レッドは暫し考えた後
「ピカチュウ！　10万ボルトだ！」
ピカチュウは強力な電撃をブラッキーに浴びせる。
しかし、特防の高いブラッキーには存外大したダメージにならず3分の1程度しか削れなかった。
「ブラッキー。影分身」
その後四ターンに渡って同じ技の応酬を続けた。ピカチュウは三ターン目以降外しつづける。
「よし……この辺でいいか。ブラッキー！　バトンタッチ！」
ブラッキーは指示を聞くとすぐさま戻っていき
「行け！　ドサイドン！」
回避率を四段階引き上げたドサイドンがその場に姿を現した。
レッドは目深に帽子をかぶり直し、しばし考えた後
「ピカチュウ！　アイアンテールだ！」
ピカチュウは素早く前にでて鋼と化した尻尾を叩きつけようとする。
が、やはり回避率のせいでよけられてしまう。

「ドサイドン！　地震！」
ドサイドンは命が下るとこの世の終わりかと思うほどに激しく地面を揺らす。
ピカチュウは当然耐えきれずに倒れた。
これを見てレッドは目を見開き
「参りました！」
と降参を申し出た。
サキヒサは下げられたレッドの頭を見て暫し硬直した後
「は？」
と一言口にした。
「降参です。サキヒサさん。貴方にはとても勝てません。さすがジムリーダーのトレーナーをやってるだけあります」
「いや……本当か？　俺の……勝ちなのか？」
サキヒサは漸く状況を理解した様子だ。
「はい。貴方の勝ちです。まだまだ俺も修行がたりないと思いました」
レッドは頭を上げて言う。
「そ、そうか……。なぁ、本当にあれが」
「はい。俺の全力です」

「そうか……そうか！　ハハハハハハ！」
　サキヒサは高らかに笑う。どうやら漸く勝利を確信したようだ。
「あの……それでなんですが」
「何だ？」
　サキヒサは嬉しそうな様子で言う。
「サキヒサさんの修行に……俺達のポケモンも混ぜてくれないかと思って……」
「おお！　いいぞ。今日は合同訓練だ！」
　サキヒサは笑いながらレッドの背中を叩き、森の中へ進んでいった――
　―午前１０時　フエン町役場　３階　会議室―
　エリカはアスナと連れたって、町長を呼び寄せて相談をしていた。エリカは正装とばかりに和服を召している。
「本件はリーグの権威にも関わる重大な問題です。私はアスナさんと同じくリーグに籍を置くものとして安易なリーダーの変更は断じて容認しかねますわ」
　エリカは毅然とした表情で町長に言う。
「貴方は確か首都の……タマムシシティのジムリーダーでしたのう」
「ええ。左様ですが……」
「都会の人には分からんだろうが、この町には色々としがらみやらしきたりがあっての

う。そのもとに我々は暮らしておる。フエンのリーダーもその中の一つ。明治二十五年の創設から先代までの三代にわたり、代々リーダーは長兄が継ぐというしきたりになっておりますのじゃ。そういうことでこの町は決まっておるのでの」

　町長はやはり穏やかな様子で、しかし確実に伝えている。

「私はアスナちゃんのご尊父……まぁつまり先代から大きな恩がある。それにあの人とも深く付き合ってきたつもりじゃ。決して軽い考えでアスナちゃんを後継に選んだわけではないことは分かっとるし、出来る限りはそれを尊重したい」

「ならば……」

　エリカが続けようとしたところで遮る。

「じゃが。私は町長だ。もう３０年はここの町政を司ってきた……。この町は非常に穏やかで犯罪などめったに起きん実に良い町だ。それはやはりここの町民や、力のあるものがしかと連携し、紐帯を保ってきたからこその賜物なのじゃ。分かるか？　この事で町の連携を崩したくはないのだよ」

　町長のまなざしからしてそれが本心であることは自明だった。しかし、エリカは猛然と反論する。

「詭弁ですわ。確かにそれで町の安寧は守られているのでしょう。されど、リーグまでそれに縛っては困りますわ。もしそんな事がこれからまかりとおるようになればジム

リーダーはトレーナーとしての実力ではなく、町や権力者の都合のみで選ばれることになりますわ！　そんな事になればリーグの権威は最早無きに等しきものとなるでしょう」

「勿論。そちらにはそちらの都合があるのだろう。だが、こちらにも相応の事情があるのだと理解してもらいたい」

　議論は平行線をたどったままである。ここでエリカがあることを提案した。

「このままでは埒が明きません。こうなればもう一度この町の有力者たちが環視の下でもう一度勝負を行うべきだと存じます」

　アスナも同様に頷いている。

「君たちもそう言うか……」

「君たちも……？　どういうことです？」

　アスナが尋ねる。

「いや。ダイモン君たちもな。同じことを言ってきおったのだ。私らが見ている前でもう一度アスナちゃんと戦いたいとのう」

　エリカはその事にしめたとばかりに喜んでみせ

「宜しいですわ。そういうことならばそうしましょう……。戦う日まで推薦状の提出は行わないということで良いのですね？」

エリカは念押しとばかりに尋ねる。
「もう一度集会をせねば確定したことは言えんが。……まぁそういう事になるかの。追って日時は知らせる」
そう言うと町長は会議室を後にした。
「エリカさん……本当に、もう一回勝負すれば上手くいくの？」
アスナは不安そうな視線をエリカに向ける。
「大丈夫です。きっと……レッドさんが証拠を持ってきてくださいますわ」
エリカは確信を持った表情で言う。
「証拠って……。エリカさんも、兄さんが不正をしてあたしと戦った。そう思っているの？」
「ポケモントレーナーならば誰でもそう思いますわよ」
「まさか……。兄さんに限って」
「アスナさん。トレーナーの力というものはそう一朝一夕で身につくものではないということはご存知でしょう？」
「そ、そりゃあそうだけど」
「ダイモンさんは申し訳ありませんがあの勝負の模様を見た限りでは付け焼き刃程度のことしかやられていないと思います。にも関わらずその何十倍、何百倍も修行されたで

あろう貴方の手持ちを打ち破っている……。これにはどう考えても何かがあると思わざるを得ませんわ」

彼女は淡々とした調子で話す。

「で、でもエリカさんだって証拠がないと言ったじゃない！　ポケモンが指示を聞いていると言うことはあのポケモンは紛れもなく兄さんが育てたものという証拠に……」

「それこそが盲点ですよ」

「え？」

「とにかく、レッドさんが必ずやその証拠を見つけ出してくださいます。トレーナーの……リーグ公認のジムリーダーとしての大義にかけてそれを証明してみせますわ」

エリカは強い意思を持った眼差しをアスナに向ける。

「エリカさん……どうしてそこまで」

「私のジムも大正の頃にこのような分裂騒動があったのです……。騒動は数年にも及び、抗争の間で何人か亡くなった事も相まって当時のリーダーであった私の高祖母は大変な苦労に見舞われたと当時の記録からは伺えます。しかし、多くのトレーナーが貴女についている今ならば。そこまでの事態に発展する前に事を収められると思うのです」

「そうだったんだ……」

「それに、同じジムリーダーとして実力あるものが所属する町の勝手な都合でリーダー

の座に就けないというのは看過し難き事です。もしこのままダイモンさんがリーダーになれば貴女のジムトレーナーの方が猛反発してそれこそ血を見なければならない事態にもなりかねません……そうなれば」

エリカはそう言うと言葉を詰まらせる。

「最悪の事態になるんだろうね……」

「そうなる前に、有力者の見守る前で今一度勝負を行い、どちらが正当なのか。黒白をつけることが肝要だと思いますわ」

アスナは息をついた後

「分かった。そこまで考えているならあたしはもう一度兄さんと戦うよ。このままリーダーの座を奪われたんじゃお父に申し訳が立たないしね」

「私は必ず貴女を守ります。信じてください。来週にはきっとこの町は賑わいを取りもせますわ」

エリカとアスナは再度、固い握手を交わす。今度は本当に互いを信頼したようだ。

―午前８時４０分　１１２番道路　森の草地―

あれからサキヒサとレッドは合同に訓練を行うこととして、互いのポケモンと親睦を深めるという題目のもとに全てのポケモンが場に出ていた。回復は既に済ませている。

レッドとサキヒサはとりあえずはポケモンに任せて、秘密基地へ入った。

とりあえず互いのポケモンたちは円を作って話し合っている。
『マスター。どう考えてもあの戦いはわざと手を抜いているよなぁ……』
そう言ったのはカメックスだった。彼は二体目のポケモンとして出され、敢えて最高火力のハイドロポンプではなく特に有利な相手でもないのに不一致技の冷凍ビームなどを使わせるなど明らかに変であった。全力を出せなくて不興顔のようだ。
『うむ……。確かに相手は強かったが、降参するほどじゃないよな。あのヤナギとかいうのにも降参しなかったのに……』
フシギバナも同調する。
『ピカチュウ。お前何か聞いてないのか』
カメックスはピカチュウに尋ねる。ピカチュウは温泉から出た後も長くレッドと一緒に外に居たのだ。
『僕……サウナに疲れて寝ちゃっていつの間にかボールに戻されちゃったから』
『チッ。なんだ頼りにならんなあ……』
カメックスは苛立ちを見せている。
『ごめん』
『まあまあカメ……。そんなカッカせんでもいいだろ』
リザードンは仲裁にかかったが

『お前は出されなかったからそんなこと言えるんだよ！』

カメックスが目をいからせて反駁した。あの戦いで出されたのはフシギバナ、カメックス、カビゴン、ピカチュウである。

『いいか！　マスターはなぁ！　例えそこらの短パン小僧が相手でも全力で戦う信条なんだよ！　それなのに……それなのによぉ……！』

カメックスは心底納得言ってない様子である。拳を何度も地面に叩きつけて大いに悔しがってる。

『まあまあ落ち着いて……。きっとレッドにも何か考えあってやってると思うよ』

ピカチュウはカメックスの甲羅を撫でながら宥める。

『考え……？　なんだそれは』

カメックスは目に涙を浮かべていた。

『それは分かんないけど……。レッドがあんな事するってことはやっぱり何かあったんだよ！　ね、リザードン』

ピカチュウはカメックスがいたたまれなくなったのかとりあえず隣に居たリザードンに同意を求める。

『ん……。あれだけ負けず嫌いのあいつが降参したっていうからには余程の事情があったんだろう。俺が聞いてこようか？』

『そうだな……俺たちじゃさっき負けたばかりで話しづらいかもしれんし……頼んだ』

フシギバナがそう託した。

やがてポケモンたちは散開し、思い思いの事をしていた。同じタイミングで向こうのポケモンたちも散り始め同じことをしている。

―同じ頃　同所　秘密基地―

サキヒサの秘密基地は念が入っていて地面がむき出しになってる以外は本当に家かと見紛うほどに整っていた。

「へぇ……すごいですねぇ。シロガネ山で篭っていた時もここまではなかなか……」

レッドは心の底から感嘆の言葉を送った。事実レッドはシロガネ山の洞窟を転々としていた為に最低限の用意しかしていなかった。

「いやぁ実家が元家具屋でな……。ガキの頃からタンスとか引き出しとか作るのよく手伝わされたもんだからこんなの朝飯前よ！」

サキヒサは得意気に言う。

「ま、座んな。コーラ飲むか？」

サキヒサは冷蔵庫からコーラを取り出す。電気はどうやらレアコイルで賄っているようでコンセントと磁石がつながっている。

「ああ……それじゃお願いします」

レッドは木でできたテーブルにつく。レッドはコーラを、サキヒサはコーヒーを用意してそれぞれの前に置いた。
「それにしても本当にお強いですね……。あのドサイドンとか相当育てたでしょう？」
レッドはまず先程の勝負を振り返った。
「ん……。ああ、まぁな。あれは俺が一番最初に捕まえたポケモンでな……」
サキヒサはコーヒーを一口啜る。
「まだ小学校に入るかどうかの頃だったか……。そん時に母ちゃんに連れられて行ったミナモ近くのサファリで捕まえたのさ」
「サファリって事は……まだサイホーンですね？」
レッドはセキチクにかつてあったサファリゾーンを思い出しながら言う。
「そうよ。なんだ知ってんのか？」
「いえ……カントーにもセキチクにサファリがあったので……」
それを聞くとサキヒサは嬉しそうに
「ほう。じゃあ行ったことあるんだな？」
「はい勿論！　ガルーラとかストライクとか色々と……」
「へぇ。結構いいの捕まえたな。あそこ苦労するよなぁ。ポケモン使えねえから」
サキヒサは思い出しながら言う。

「まぁ楽じゃないですねぇ。餌と泥を上手く使わないと逃げられちゃうし……」

レッドも当時を思い出しながらまた嬉しそうに話す。

「そうそう。珍しいの見つけたと思ったらちょっと餌あげただけですーぐすたこらさっさってな。全く現金だよなぁ」

二人はしばらくサファリ談義に花を咲かせていた。

ひとしきり話した後、

「まぁとにかくな……。そこで捕まえたサイホーンが俺の初めての相棒だったわけよ」

「しかしサイホーンは中々躾けるのが難しいでしょう」

「おうよ。最初はなかなか懐かなくて何度突進されて死にかけたことか……。ほら、この腕」

サキヒサは右肘の近くから二の腕にかけての太い傷跡を見せた。

「これは?」

「捕まえてから数日くらいした時にサイホーンの角がたまたま掠って……確か骨まで見えたんだよ。まーあん時は大騒ぎだったね」

「ひぇー!　よく腕が無事に済みましたね……」

「たまたま母ちゃんが近くに居てすぐ病院連れてってくれたからな……。それでも暫くは動かなかった」

サキヒサは懐かしそうに当時の事を話す。
「あの時は父ちゃんも母ちゃんもカンカンになって『もうポケモントレーナーになるなんてやめなさい！』って言われたもんだよ。でも俺はな……あの人に憧れてたんだ」
「あの人？」
「なんだ知らないのか？　ダイゴさんだよ。ツワブキ・ダイゴ」
「え!?」
レッドは意外な人物の名前に目を丸くした。
「後に若くして理事長になった男だが……俺がガキの頃はモラトリアム期間で初めて殿堂入りまでこぎつけたあのダイゴって人はすごく輝いて見えたんだ。俺もあんな風になりてぇってな。同じクラスの奴はみーんな同じこと考えてた」
「へぇ……」
１９９１年。当時１２歳だったダイゴはモラトリアム期間内で初めて手加減状態といえども（リーグ法の規定でチャンピオンや四天王が全力を出すのはバッジを１０枚以上取得した人間のみ）チャンピオンに打ち勝ち、そのことは日本中から賞賛されるほどの快挙であった。
世間の幼稚園児から中学生に至るまでダイゴを真似て鋼や岩タイプのポケモンを手に入れたり、髪型を真似るものも出てくるなど一種の社会現象とも呼べるほどのブーム

を引き起こした。まだ一割程と比較的少なかったモラトリアム利用者が爆発的に増えたのもこの年度からである。また、10代のジムリーダーが増えたのもこれに後押しされたとの見方もあるほどで後世への影響も大きかった。

サキヒサがサイホーンを手に入れたのはその真っ只中のことである。

「だから頑固にもそこから続けて、サイホーンを手懐け、そこから俺のトレーナーとしての物語がはじまったわけよ」

「なるほどー。そんな話があったわけですね……」

「トレーナーになってからも色々あったが……。とにかく俺はこの12枚のバッジを手に入れ、漸く念願のジムリーダーへの夢が近づこうとしているんだ……」

「……」

レッドはコーラを飲みながらサキヒサの言動を注視する。

「トレーナーになることを反対していた母ちゃんも今では応援してくれてる……。今が本当に踏ん張り時なんだ」

「あれ……そういえばお父さんはどうされたんですか?」

サキヒサはコーヒーを飲み干し、カップを置く。

「死んだよ」

「え!?」

「自殺さ。バブルが弾け、大口からの注文がストップして首が回らなくなってうちは潰れた……。その後の苦境に耐えられなくなって死んだのさ……」

　１９９１年から始まったバブル崩壊は不動産や金融業をはじめとして様々な所に深刻な影響を及ぼし、サキヒサの家も例外ではなかった。崩壊後は国産家具の需要が激減し、サキヒサと同様に倒産を余儀なくされた同業者は少なくない。

　サキヒサの父が自殺したのは崩壊から四年後、サキヒサが１０歳の時であった。

「全く。あと２０年も生きていれば……俺が楽にさせてやったのによぉ」

　サキヒサは悔しそうにおかわりのコーヒーを飲んでいる。

「あの……辛いことを思い出させてすみません……」

「いや。いいよ。その分母ちゃんを幸せにすればいい話だからな。苦節十八年。必ずこの宿願は叶えてみせる」

　サキヒサは強い決意を宿した目で言う。

「……」

　レッドは良心の呵責に苛まれつつあった。

　そうしていると、リザードンが入り口までやってきていた。

「おや。レッドの手持ちだろう？」

「あ。そうですね。じゃあちょっと」

と言ってレッドは中座した。

―草地―

「どうした?」

レッドは外に出て少し距離をあけた後に尋ねた。

「レッド。正直なところを話してくれないか?」

「は? 何のことだよ」

唐突な話でレッドは当惑している。

「カメの奴。全力を出させてくれなかったことにひどく怒ってたぞ。俺ならあの程度もっと潰せたって息巻いてる」

「ああ……そうか」

レッドは帽子を目深に被り直す。

「お前たちには本当に申し訳ないと思ってるよ」

レッドは切実な表情で言う。本当に心の底からの言葉だった。

「何か、理由があるんだろう? 先生に何か言われたのか?」

先生とはエリカの事を指す。レッドは回りを見渡す。サキヒサのポケモンやレッドのポケモンが混在している。

「悪いな。ここじゃ言えないんだ」

「レッド！」
「時期が来たら必ず話す。あいつらにはすまなかったと俺が言ってたとだけ伝えてくれ」
　リザードンは少し間を空けて
「分かった……」
　と言いながらカメックスたちのいる方向に飛び去った。
　―秘密基地内―
「済んだか？」
　サキヒサがレッドに尋ねる。彼は三杯目のコーヒーをカップに淹れていた。
「サキヒサさん。そんなに飲んだら胃に穴があきますよ……」
　と言いながら席につく。レッドのコーラはあと半分ほど残っていた。
「なに。大丈夫よ。俺は鉄の胃袋だからな」
　そんなことを言いながらごくごくと口に含んだ。
「なあ。レッド」
　呼ばれたレッドはサキヒサに改めて向き直る。
「本当の所を話してくれないか？」
「はい？」

レッドはデジャヴにも似た感覚を覚える。
「どう考えてもおかしいんだ。レッド。俺が各地で聞いた限りじゃお前はどんなに絶望的な状況下でも決して降参はせず、果敢に挑み続けるってな……」
「……」
レッドは口を真一文字に結んでいる。
「もう一度聞くぞ。あれが本当にお前の実力なんだな?」
レッドは葛藤にかられたが、少し視線をサキヒサから逸した後、しっかりと目を合わせる。
「はい。紛れもなく俺の全力です」
「そうか……」
そう言うと、コーヒーをまた口につける。喉に流し込んですぐカップを口から放しながら言う。
「〃ここじゃ言えないってなんだ?〃」
レッドはその言葉に激しく動揺した。
「え?」
「とぼけるな。こいつはちゃんと聞いてたぞ」
と言いながらレッドの背後から出てきたのはウソッキーだった。

「え……それもしかして……ウソッキーですか？」
「ああ。自然公園に行く途中で道塞いでたからな……。捕まえてきたんだ」
サキヒサが顎で指示すると
『悪いな。ここじゃ言えないんだ』『時期が来たら必ず話す』
とレッドの声に出来る限り似せて話した。これはものまねという技から用いたのだろう。
レッドは予想だにしない事態に直面し、面食らっていた。サキヒサは礼を言ってウソッキーを草地に返す。
「……」
レッドはとりあえず黙った。
「どういう事なんだレッド？　答えろ」
サキヒサは立ち上がってレッドに詰め寄る。近づいた口からはコーヒーの香りがする。
かなり凄みをきかせており、レッドは逃げ出したい気持ちにも駆られていた。
「それは……言えません」
永遠ともいえるほどの時間の沈黙を破ったのはレッドだった。
「んん？」

「あいつは……俺を信じているから……俺もあいつを裏切れない……いや、裏切ってはダメなんです」

レッドはサキヒサの気迫に気圧されないとばかりに毅然とした態度で言う。

「その口ぶりからすると……お前の相棒からの差し金かい？」

「さあ。ご自由にどうぞ」

レッドは同様の調子で答える。

「ふっ……そうかよ」

サキヒサはどっかりと椅子に座りなおす。とりあえずは諦めたようだ。

「変に脅すような事言って悪かった。どうだ？　コーラいるか？」

「いただきましょう」

例えサキヒサがどうあろうとレッドは投げ出すわけには行かない。彼は内心怯えながらも態度だけは気丈に振る舞っていた。

―草地―

『マスターは時期が来たら話す……そう言ったんだな？』

カメックスはリザードンに尋ねる。

『ああ。そうだ。何も考えなしにあんな事をしたわけではないという事だ。不十分かもしれんがこれで納得してやってくれないか？』

『そっか……。レッドがそう言ったんならきっとそうなんだよ。ここはこれで収めようよ。皆』

ピカチュウはそう言ってフシギバナやカメックスを宥める。カビゴンはやはり寝ていて気にかけてもいない様子だ。

『わかった……。その時期とやらがきたらまた問えばいい話だ。なぁカメックスよ？』

カメックスはフシギバナの意見にやや遅いながらも首を縦に振った。

『ふう……。これで一見落ちゃ』

とピカチュウが額の汗を拭こうとした時、ボールが足元に転がってきた。

ピカチュウが掴んで転がってきた方向に身体を向ける。すると、ボールの主が駆け寄ってきた。

どうやらサキヒサのブラッキーのようである。

『……』

ブラッキーは駆け寄ってきたと思うとピカチュウを黙って見つめている。

ピカチュウは不思議に思いながら

『返すよ』

と背中にボールを載せてあげた。

『……混ざる？』

『え？』

ピカチュウが当惑していると、ブラッキーが前足で転がった方向を指し示す。

どうやら向こうではプラスルやマイナン、ライボルト、エーフィなどがこちらを気にしながら見ていたようだ。

『クロちゃん？　まだ？』

エーフィがこちらを見ながら話す。ブラッキーは急かすような眼差しをピカチュウに送る。

ピカチュウはニッコリと笑って

『いいよ！　遊ぼ！』

とボールを抱えながら同じ輪にはいっていった。

―午前11時　同所　木陰―

ピカチュウはすっかり打ち解けてそのポケモンたちとボール遊びをしたり、缶けりしたりして遊んでいた。

さすがに二時間以上ぶっ通しでやり続けたので疲れて一旦川近くにある木陰で休んでいる。ピカチュウは最初に関わったブラッキーやエーフィと一緒だ。

『ふう。疲れたぁ』

『ピカちゃん本当に早いのねぇ。私、一回もつかまえられなかったわ』

エーフィがそうピカチュウを褒める。ピカチュウは照れくさそうな表情で
『へへへ……。エーフィだって凄かったよ！　途中ちょっかいかけてきたスバメの集団サイコキネシスで蹴散らしてくれたじゃん！』
とエーフィを褒め返す。
『やーねぇもう！　バトルだったら私よりクロちゃんの方が上手なのよ！　私みたいな火力系は上にフーディン先輩がいるし……。クロちゃんはマスターのパーティーの中ではかなりの鉄壁なの！』
ブラッキーは寝ているが、聞こえてるのか否か足で頭を掻いている。
『もうまた寝たふりしちゃって。褒められるといつもこうなの。まぁそこもクロちゃんのいい所なんだけどね』
エーフィは笑いながら話す。その表情はとても幸せそうだ。
『へー。確かに僕の渾身の十万ボルト二回も耐えてるもんねぇ。確かに鉄壁かもしれないね！』
ピカチュウもやはりその点は認めているようだ。
『……。お前もっと強い技覚えてただろ』
ブラッキーはボソッと呟いた。
『へ？』

『ほらやっぱ寝たふり！』
『う……うるさいな！　今目が醒めたんだ！』
　ブラッキーはエーフィに吐き捨てた後、寝ながらピカチュウに視線を戻す。
『で、話戻して……あれはお前の本当の全力じゃないだろ？　ん？』
『そんな！　僕はあれでも本気で１０万ボルト出してたよ！』
　ピカチュウは電気袋から僅かに電光を発しながら言う。
『ごまかすな！　さっきロズが泣きながら愚痴ってたんだぞ。ボクの美しい花はあの化物みたいな突進でかきけされたー！　って』
　言うまでもなくボルテッカーのことである。
『あーあれ……』
　ピカチュウは耳をしおらせる。
『まぁ……ポケモンバトルはマスターの命令に従わなきゃならない。だから別に出さなかったこと自体を責める気はないが……。ちょっと気にかかったからな。すまん』
　ブラッキーは立ち上がって頭を下げた。
『ああいいよ別にそんな……』
『全く変なところで突っかかるんだから……。ま、悪タイプだからしょうがないかもしれないわねん』

エーフィは何もかも知っているようだ。
『ふん……。俺はもう一眠りだ。皆が休憩終わったら起こしてくれ』
そう言うとブラッキーはまたも眠りの態勢に入った。
『はいはいおやすみなさいね』
エーフィはポンポンと頭を撫でた。やはり嬉しそうだ。
『ほんとに仲いいんだね……』
『まあマスターが9個目のバッジ手に入れる為にパーティー強化しだした頃、同じ日に進化した仲だからねー』
『へぇ……。ってそれどれくらい?』
ピカチュウは納得しかけたが聞き返す。
『そうねぇ……かれこれもう7年にはなるかしら』
『7年!?』
ピカチュウは予想外の数字に驚いている。7年といえばレッドがピカチュウと出会ってから今までの年数よりも更に長いのだ。
『あら。こんな程度で驚いちゃダメよ。最古参のドサイドン先輩なんて22年連れ添っているんだから。もう真の相棒って言った感じね。マスターも一番大切にしてる』
『チャー……』

ピカチュウはあまりの数字に目を回しそうなばかりである。
『私とクロちゃんなんてこの７０匹はいるマスターのパーティーの中じゃ新参者の方よ。それでもマスターのベストメンバーの中に入ったんだからクロちゃんはほんとすごいのよ！　私も少し前まではそうだったんだけど最近は耐久と火力の均衡を考えるようになって、私はどちらにも入れないから二軍落ちで……。それで今はクロちゃんのお世話係ってわけなの』
『なるほど～。エーフィはそれでもいいの？』
ピカチュウはエーフィになんとなしに尋ねる。
『最初はまぁ落ち込んだけど……。でもいいの！　マスターは皆のことよく気遣ってくれるし、ちゃんと一匹一匹を大切な仲間として見てくれるもの！　皆、マスターの事は心の底から尊敬し、慕っているわ。それに』
エーフィはすやすやと寝息を立てるブラッキーの背中を撫でている。
『クロちゃんはかわいいし、昔からよく知ってる仲だから飽きないもの。今はとっても幸せよ』
そう語るエーフィの顔は実に満ち足りていた。ピカチュウも晴れ晴れとした顔でエーフィを見ている。
―同日　午後９時　旅館『松ノ木』檜の間―

レッドは一時のいざこざはあったもののサキヒサとは概ね仲直りし、ポケモンたちも大分親睦を深めたようだ。

午後2時頃にジムの用事があるからとサキヒサは引き上げたが、レッドは日没まで訓練した後フエンに戻った。

そして、夕食と風呂を済ませ二人はこの日の成果を互いに言い合っていた。彼女はレッドよりも早く帰っていた為既に軽装に着替えてしまっていた。

「貴方。サキヒサさんのポケモンたちの情報はつかめましたか？」

「ん……まあ。一応はな。ほら」

と言いながら一枚のブルーレイディスクを机の上に置いた。

「ありがとうございます。貴方には心苦しい事と思いましたが……」

「そりゃあ……ね。ポケモンたちの会話を盗み聞きするなんてな」

エリカは昨日、寝てる隙を狙ってピカチュウの耳の裏に小さなマイクを設置し、それを遠隔でレッドのポケギアに送る事を提案した。

そこからピカチュウの会話内容を聞き出し、その一部でサキヒサのポケモンたちと接触するはずなので情報を取ろうという算段である。彼は聞いてすぐ、閉店が迫っていた町で唯一の家電量販店に行ってマイクを買った。

そしてマイクの取り付けに成功し、つい先程録音したデータをブルーレイに焼いたの

だった。
「それでは……。リザードンを出していただけますか？」
「え？　どうしてだよ？」
　エリカはため息をつき
「貴方……いくら私でもポケモンの言葉までは分かりませんわ」
　ポケモンの言葉は共通であるということまでは分かっているが、言語があまりにも独特な為、現在に至るまで最高進化系などのポケモンを通じてしか翻訳はできない。レッドはそれですぐに察し
「あ、悪いな……。でもどうしてだよ？　あいつをここに出すとスペースとるぞ？　お前のポケモンでもいいんじゃないか？」
「貴方のポケモンの言葉を解釈するなら出来る限り近しいポケモンの方が良いでしょう。それに……貴方のリザードンでしたらこの事も冷静に受け止めてくれると思うのです」
　ジョウトで特別に親睦を深めて以来、エリカはリザードンの事をよく信頼しているようだ。
「そうか……。そうだな。あいつなら俺のポケモンたちも説得してくれると思うし……分かったよ」

そう言うとレッドはリザードンの入ったモンスターボールを取り出し、この場に出す。

やがて、エリカが事の次第を説明すると

「そんなことをしていたのか……」

とリザードンは悲しそうな目をしてしまった。

「ピカチュウには申し訳ないことをしたと思っていますわ。しかし、これは私達トレーナーにとって必ず解決しなければならない問題なのです。どうか、そこを分かってくださいまし……」

エリカは深々と頭を下げる。

「リザードン。この問題を解決するにはお前たちポケモンの協力が必要なんだ。事前に言わなかったのは本当にすまないと思ってる。だけど、賢いお前の事だ。分かってくれるよな？」

レッドも同様にリザードンを説得させにかかる。リザードンは数分ほど目を閉じた後

「分かった……。先生も、レッドも。考えに考えてやったことなんだろう。そういう事なら俺は受け入れるぞ」

と言いながら頷いた。

エリカはホッと胸をなでおろし
「ありがとうございます。それでは。お願いしますわね」
その後、ブルーレイを再生してポケモンの言葉を逐一リザードンが解釈し、翻訳した。翻訳の内容は録音及びエリカが筆記をして書き取っていた。
翻訳は夜更けまでかかり、終わった頃には日が昇ろうとしていた。
―8月20日　午前4時　同所―
「やっと終わったか……」
レッドは録音とレコーダー操作係として起き続け、最後の翻訳が終わった瞬間停止ボタンを押した。レッドは録音に使っていたポケギアをしまうとおおきくあくびをしながら伸びをした。
「ここまで夜更かししたのは久々ですわ……。リザードン。お疲れ様でした」
エリカの筆記は30ページ近くにも及び、最後の方に至ってはさしものエリカもやや字体を崩してしまっていた。リザードンもずっと喋り続けたせいもあってかふらふらであった。
「ああ……バトルでも修行でもないのにこんな疲れたの初めてだ……」
「ありがとうなリザードン。ゆっくり休んでくれ」
リザードンが軽く返礼で頭を下げると、レッドはモンスターボールに戻した。因みに

この事は然るべきときが来るまで他のポケモンには話すなと口止めをしている。
「聞いた限りじゃ……サキヒサさんが自分のポケモンから凄く慕われてるってぐらいしか分かんなかったな」
　エリカはノートの記述を見直しながら
「そうですわね……しかし案外それが大きな鍵かもしれませんわよ」
「なんだよそれ……」
「まぁ私もまだ整理しきれてないので詳しくは言えませんけれど……」
　しかし、彼女には前よりも確かそうな笑みがうかがえた。
　その後、二人はぐっすりと昼まで寝た。
　―8月20日　午後7時　同所―
　二人はこの日もエリカは有力者への根回しに、レッドはサキヒサの内偵に向かった。
　そして夜になって旅館に帰り、温泉に浸かり、夕食の時間になると部屋に来客があった。
　それは支配人のダイモンと、トレーナーのサキヒサだった。
「食事前に申し訳ないが取り急ぎということでね……」
　ダイモンは眼鏡を直しながら言う。
「一体何の御用ですか？」

エリカが尋ねる。
「もうそちらも聞いていると思うが、私とアスナが再度戦う。今度は有力者縦覧のもとの公式な決闘だ。これでどちらがリーダーを名乗るか確定する」
「前置きはいいですから、早く！」
レッドが先を急がせる。
「全くせっかちな奴だなぁ……。日取りが決まったんだよ！　決闘の日は明後日２２日。木曜日の朝１０時！　場所は中央広場だ！」
「そういう事だからアスナについてる君たちにも伝えたくてね……。こうして来たんだ。食事前にすまなかったね。それじゃ」
そう言うとダイモンはそそくさと出て行った。
「遅れるなよ」
とだけ言ってサキヒサも続いて出ていく。
「いよいよ明後日……ですか」
この日はレッドは目新しい情報をつかめなかった為やや焦りを見せている。
「明後日か……思ったより早かったな」
「相手の策でしょう。恐らくこちらに余裕を与えないために出来る限り早くセッティングした……そんなところですわね」

「そうだな……」
　レッドはやや元気がなさそうだ。
「貴方。どうされました？」
　エリカが心配そうに尋ねる。
「いや、別に……」
「まさか。サキヒサさんに情が移った……などではないでしょうね？」
　レッドはそれを聞き、図星とばかりに背をのけぞらせた。
「正直に仰ってください」
　彼女は鋭い眼光で彼の目を見ている。
「うう……」
　レッドは答えに窮するばかりであった。
―第十七話　フエン騒動（中）　終―

第十八話　フエン騒動（下）

―8月20日　午後7時10分　旅館『松ノ木』檜の間―

「何を唸っておいでなのです……。私達の間では隠し事はなさらない。そう約束したはずでございましょう?」

エリカは柔和な口調で話す。が、足はしっかりと正座を組んでいる。真剣な様子だ。

「分かった……。正直なところを話すよ」

レッドは観念して、エリカに向き直す。

「そんなにさ……責めるような事かって思うんだよな」

「はい?」

エリカは怪訝な表情を浮かべる。

「いやあの……。勿論エリカの言ってることが事実ならそれはそれで良くないことだっていうのは分かるし……。ちゃんとしたケジメをつけなきゃダメだと思うよ。でも……」

「でも?」

「サキヒサさんは……不景気で父親を失い、女手一つで育ててくれた母に恩返しするた

めに……ここまでやってきたんだって」

彼女は表情を変えずに聞く。

「そういう事情を知っちゃうとさ……。あまり強く責める気にはなれないっていうか……」

「それで？」

「え？」

「貴方はどうしたいのですか？」

彼女は冷徹な眼差しで彼を見る。

「どうしたいって……」

「私もそのくらいの事は昨日今日の調べで分かっていますわ。しかし、例えどんな事情があれ、サキヒサさんやダイモンさんがなさろうとしていることはリーグの大義を大きく損なうものという事にかわりはないのですよ」

彼女は滔々と諭すようにレッドに語りかける。

「いや別に俺は……エリカがやろうとしていることを間違ってるとかそういう事を言いたいんじゃないんだ。たださ……ふと気になったんだよ」

彼女は先程よりは表情を緩めた。

「もしこのまま……証拠が見つかって、サキヒサさんの罪を立証できたとして……その

後はどうなるのかなって」
「恐らくはバトル規則の重大な違反ということでリーグから処分が下されるでしょう」
　彼女はすぐさま答えた。
「それって……どのくらい？」
「そうですわね……。何しろ前例の無いことですから。しかし、不正な手段でリーダーの位を簒奪しようとしたことに手を貸したこと……。一つの町の治安や秩序の基盤を危うくしたこと……。これらを総合すると会員資格の剥奪でもおかしくはないと思います」
　会員資格剥奪。これはレッドをはじめとして役職の位にない普通のトレーナーにとっては最悪の処分である。これが下されるとポケモンバトルで対価を得ることを初めとしてポケモントレーナーに与えられた特権を全て喪失することになる。
「それってつまり……サキヒサさんはトレーナーを辞めなければならないってことか？」
「早い話がそういう事になりますわね」
「それじゃあポケモンたちはどうなるんだよ。サキヒサさんの大事な相棒たちだぞ!?」
　レッドはヒートアップしている。
「養える資金があればそのままペットとして飼うことになりますが……それがかなわな

いならば野生に返すなり育て屋などに寄付するなり。いずれにしろバラバラになるのを余儀なくされますわね……」
「そんな事って……」
「嫌ならば最初からこのような事をしなければ良かっただけの話です」
エリカはきっぱりと切り捨てる。
「で、でもそれじゃあいつリーダーの願いが叶うか……」
「貴方」
「ん？」
エリカはレッドに顔を向けさせると、思い切りはたいた。
「いつっ……。何すんだよ！」
「貴方……。目を覚ましてくださいまし。サキヒサさんが罰を受けてどのような道をたどろうと私たちには関係のない話です。私はあくまでリーグの一員としてかかる事態に粛々と対処するのみです。気の毒なようですが、ただそれだけのお話なんですよ」
彼女は悲しそうな顔を浮かべている。彼女自身本当は辛いのだろう。
「エリカ……俺さ。分かんなくなってきたよ」
「はい？」
「皆お前とか、ワタルさんとかそういう輝かしい地位を目指して一生懸命頑張ってき

たっていうのにさ……。報われるのはほんの一部だけでちょっとあぶれただけでサキヒサさんとか……そういう風にして夢を追い続けておっさんやおばさんになっていくなんて……。トレーナーってそんな……そんなつまらないものだったかな？」

　レッドは切実に語り続ける。

「一将功成りて万骨枯る」

「へ？」

「晩唐の故事です。一人の将が功を立てる裏には、一万の名も無き兵の死体が転がっている……。そんな意味の言葉ですわ」

　レッドは少し間を空けて

「それがどうしたって？」

「トレーナーに限らず……勝負の世界はそんなものだと思いますわ。だからこそ多くの人が追い求め、優勝劣敗が決まっていくのです」

「ふっ……」

　レッドは力なく笑う。

「どうしました？」

「お前は大人だよな……。そうやってちゃんと分別をつけられてる……。でもさ……俺ぁそうきっぱり決められないよ」

その後、冷めた夕食を食べた後レッドはふて寝半分に床につき、エリカは日課の日記をつけた後にやや遅れて寝た。

―８月２１日　午前１０時　１１２番道路　草地―

決戦が明日に迫ったこの日、もはや日課となりつつあるサキヒサの訓練に同行した。

そしてレッドはある決意を抱いてサキヒサと腹を割って話そうとしている。

―同時刻　秘密基地―

最初の二時間ほどメインの総当り稽古（それぞれの手持ちが１ｖｓ１でバラバラに戦う）を済ませた後、レッドとサキヒサは秘密基地で休んでいた。

「あの」

「なんだ」

サキヒサは翌日に控えた決戦を前にしてやや気が立ってる様子だ。

「サキヒサさん……俺に、いや俺たちに何か隠してることはありませんか？」

「はぁ？　なんだ藪から棒に……」

サキヒサは呆れた表情だ。

「いえ……あの」

「俺がなんか企んでるっていうのか？」

「別にそういう訳じゃ……」

「まぁよ……」

サキヒサは洞窟の外に視線を向け、遠い目をしている。

「レッドの言いたいことも分かるぜ。これまでさしたる修行もしなかった奴が、全力のリーダーに勝てるわけない！　って事だろう？」

「……」

レッドは黙したままだ。

「だけどなぁ。あいつは一生懸命修行したんだよ。言葉でしか言えんがな……。僅かな時間を使ってな。俺が見始めた頃はろくにボール一つ投げられずにポケモンが出てこれないこともしばしばだった。だが、今ではそれなりに様になってるだろ？」

確かに初心者並とは言っても型はできていた。因みにモンスターボールは誤作動防止の為にボールを投げる角度や速さ、力の加減などが厳重に決められているため、トレーナーは最初にそれの使い方を習うのだ。

「あいつは……。アスナにとても強いコンプレックスを持ってる。父親はダイモンよりもアスナをトレーナーとして可愛がり、ダイモンの方はトレーナーとしての才は皆無だと見切ってマツノキ家の後継者としてのみの方向に鍛えることにした」

レッドは黙って聞いている。

「だがダイモンはどうしてもそれに納得できなかった。一応の形式として行われた数年

前の時は今以上に忙しかったから修行に時間が取れずあんなことになっちまったが、今は本当に少しずつ……トレーナーとして、マツノキ家の本当の後継者になろうと歩んでいるんだ」

　レッドは時折頷いて相槌をとっている。

「なぁレッドよ」

「はい」

「俺はさ……。あいつの夢を叶えてやりたいんだ。確かに今はちょっとばかしアスナに比べて弱いかもしれないけどよ。流れ者の俺が何言ってんだとか思うかもしれねえけど、決して伝統に恥じないトレーナーになると思うんだわ」

「すみませんけど俺にはそうは……」

「たった一枚のディスクで何が分かるんだ！」

　サキヒサは気色ばんだ表情でレッドを叱りつける。

「どいつもこいつもたった一回戦うのを見ただけで決めつけやがってよぉ！　そんなにダイモンがリーダーになるのが嫌なのか!?　そんなにあの女がいいっていうのかよ!?」

「……」

　レッドは息を呑んでサキヒサの動静を見守る。

「すまんな……。急に怒鳴ったりして……。だがこれは本当に俺の胸の内だ。確かに俺

が将来リーダーになるためっていうスケベ心がないとは言わねえけどさ。それまでの間あいつの成長を見守りたいっていうのもまた本心なんだ」
「気持ちは分かりますけど……」
「そっちが何を考えてるんだか知らないが……。頼むわ。これは俺とダイにとってここ一番の時なんだ。俺たちみたいなトレーナー界の日陰者にとってこんな機会ってそうそうねえんだよ。そっとしておいてくれないか……？」
サキヒサは切実な表情でレッドに頼み込んでいる。
レッドは少し間を空けた後
「失礼します」
とだけ言って秘密基地を去っていった。心中は複雑である。
―同日　午後3時　旅館『松ノ木』　5階　支配人室―
サキヒサは修行を早めに切り上げて支配人室へ向かった。
「なんだって！　先生……それは本当か……？」
ダイモンはサキヒサの報告を聞いて顔を真っ青にした。
「まあ……。確たる証拠がないからなんとも言えんが……。レッドはともかく妻のエリカは相当頭が切れると聞く。何か掴んでいてもおかしくないぞ」
「ううむ。これは早く行動に出なければならないな……」

ダイモンは落ち着かない様子で室内を歩き回る。
「よし、行くぞ！」
サキヒサは思い切った様子で天井を見る。
「行くって……どこに？」
「決まってんだろ！　お偉いさんのとこだよ！」
―同日　午後4時　フエン町役場　町長室―
「どうしたんだね君たち……。そんな慌てた様子で」
町長は急にやって来た二人を見て目を瞬かせている。
「町長。早急に推薦状を出してください」
サキヒサは鋭い目つきで町長に迫る。
「なんじゃと？　推薦状は明日の勝負次第といったはずだ」
「それがそうもいきません。アスナ側が我々の事に勘付いたやもしれません」
「何かやましいことでもしたのかね？　私は知らぬぞ」
町長は疑惑の眼差しを向ける。
「ちょっとお耳を……」
町長はサキヒサに耳を貸す。時間を経るごとに表情を変えていった。
話し終わると耳から離れる。

「君たち……そんなことをしていたのか!!」
　町長は怒りの表情を露わにする。
「申し訳ありませんねぇ。私のようなよそ者がこれらの人にお近づきになるには相応のこれがいりまして……」
　サキヒサは指と指をこれ見よがしにすり合わせる。
「アスナやレッドはともかく、エリカは相当な策士です。明日の決闘でその事を町民の皆さんの前でぶちまけるやもしれませんよ？」
「し、しかしのう」
「貴方はこの町の〝紐帯〟と……ご自身の町長としての地位を守りたいのでしょう？この事がばれたら貴方は次の選挙で負けることに……」
「わ、私は知らん！　知らぬと申すに」
「貴方がそう言っても町の人はそう思ってはくれませんよ……。この町は近年外からの転入が増えてるようですね？」
　サキヒサは笑みを浮かべながら言う。フエンは温泉地としての需要が近年退職した中高年に魅入られ、移住する人が増えているという。
　町長は苦渋の表情を浮かべ、暫くした後に
「わ、分かった……。今から寄合の召集を」

町長が備え付きの電話に手をのばす。
「賢明なご判断です……。あ、しかし」
「まだあるのかね!?」
町長は苛立った様子だ。
「私が先程言ったことはくれぐれもご内密に……。壁に耳あり障子に目あり……人の口に戸は立てられぬと言うでしょう?」
「ぐっ……。分かった」
その後、町長室を去った。
―同日　午後5時　旅館『松ノ木』　5階　支配人室―
「ふう……」
サキヒサはどっかりとソファに座る。
「先生……。あの時町長になんと?」
「側近や有力者に金を渡したって事を事細かに言ったのさ」
「え!?　まさか……そんな事」
ダイモンは目を丸くする。
「バーカ。そんな金あったらそもそもここに来るかよ」
「え?」

「全部デタラメだ。デタラメ。あの爺さんに推薦状を出させるための方便だ」
サキヒサはクックックッと含み笑いをしている。
「それにしても推薦状を出させるとは驚いたよ……。だけど有効な策かもしれないね」
ダイモンも少し笑う。
「気づいたか？」
「僕も馬鹿じゃないからね。時間稼ぎだろう？」
サキヒサは嬉しそうに頷く。
「うむ。とりあえず今日推薦状を出させれば、明日の早朝までにアスナはどんな事情があれとりあえずは理事会議から諮問がかかって決戦どころじゃあなくなる。とりあえず数日は時間が稼げるはずだ。その間に対策を考えるんだ」
「それにしてもよくあんな事堂々と言えたね……。あとそこまでリーグの制度知ってるなんて」
「舐めるな。俺の人生がかかってんだぞ。是が非でもこれを成功させるんだ」
サキヒサは強い決意のこもった声で言う。
「にしても……こんなにすんなりいくならもっと早くやっておきゃよかったな」
「そうだね……。町長はもっと頑固な人だと思ってたし……」
「地位が脅かされるとなるってならまぁあんなもんかもしれんな……。ま。いいさ。こ

れで向こうは慌てふためくだろうよ」

サキヒサは不敵な笑みをうかべている。ダイモンは妹への罪悪感かやや暗い顔だ。

―同日　午前10時10分　112番道路　草地―

少し時は戻ってレッドがサキヒサと話していた頃。

ポケモンたちは修行の疲れを癒やすために休憩していた。

ピカチュウたちも例外ではなく、ブラッキーやエーフィと共に居る。ブラッキーは例によって草に伏していた。

『ほんとピカちゃん強いのね～。うちのトップパーティの子たちと互角以上に戦うなんて惚れ惚れしちゃうわ』

エーフィはピカチュウの頬を撫でていた。

『へへへ。一応パーティの中じゃ一番レベル高いんだ！』

『まぁ！　じゃあ一番可愛がられているのね』

『レッドと一緒になったのはフシギバナが一番早いんだけど……。よくボールから出してくれるからね！　どうしてだかこうなっちゃった』

ピカチュウは嬉しそうに話す。

『可愛くてしょうがないのね～。確かにかわいいもん！』

『ちっちゃいから出すの楽なだけだろ……』

ブラッキーは小さく憎まれ口を叩く。
『ち、違うもん！　レッドは僕が一番可愛いと思って』
『はいはい喧嘩しないの～。あ、そうそう。マスターの育てている木の実がちょうど成ってたからとってきたんだけど食べる？』
エーフィは背後から様々な木の実を前に出す。
『食べる食べる！』
と、ピカチュウはモモンの実をとった。味は上々なようでご満悦だ。エーフィも同じ実を食べる。
『う～ん。マスターの作る木の実はいつもおいしいわねぇ！　最高よ！』
『……』
『クロちゃんは？』
ブラッキーは少し間を空けて
『別に……腹減ってないし』
『もう！　そんな事言ってこのまえ熱中症で倒れちゃったんでしょ！　食べれる時に食べないとダメよ！』
エーフィは珍しく声を荒げてブラッキーを叱る。
『あーもう心配しすぎなんだよお前はさぁ。多少タフなくらいじゃないと耐久型は務ま

らねえんだよ』

ブラッキーはそう吐き捨てる。

『バカバカバカ！　クロちゃんがこの前倒れてどれだけ心配したと思ってるのよ！　お医者さんだって一時は』

『お前さぁ。分かんないの？』

ブラッキーは立ち上がってエーフィを睨む。

『何がよ』

『明日は決戦だろ？』

『だから？』

ピカチュウは険悪なムードを感じて

『あーもう喧嘩はダメってエーフィが言っといて何してるの！　落ち着いてよー！』

と、仲裁に入る。

『ピカちゃんは黙ってて！』『お前は黙ってろ！』

ピカチュウは気圧されて小さくなってしまった。騒ぎを聞きつけた周りのポケモンたちが囲みはじめた。

『明日はマスターの……サキヒサさんにとって運命の一日なんだよ！　だからこそ俺は……』

『だからそれがどうしたっていうのよ！　尚更精をつけないとだめでしょ!?』
『違う！　だからこそ俺は自らを律しなきゃならないんだ！　ドサイドン先輩に次ぐ壁として……。俺は耐えなきゃならないんだよ。そうそうたらふく飯なんか食ってられっかよ』
　ブラッキーは悪態をついている。
『何言ってるの！　壁だからこそ、攻撃に耐える為により栄養をつけなきゃダメでしょう!』
『栄養ばかりじゃダメなんだよ！　耐久型だからこそ他よりもより空腹に耐えないとダメだ！　空腹に耐えられないで敵の攻撃をしのげると思うか!?』
『それで……それで死んじゃったらなんにもならないじゃないの！　この前倒れた時も脱水状態が……』
『うるさい！　俺は……俺はサキヒサさんの為ならどんな事でもやってのける！　あの事を……』
　ブラッキーが言いかけたその時背後から地響きの如き声があたりに響く。
『静かにせんか!』
　ピカチュウは後ろを向く。声の主は少しずつ近づき、やがて姿を見せる。
　どうやらドサイドンのようだ。通り道に居たポケモンたちは素早く道を開けた。

『何があった』

ドサイドンは最古参らしく腹に響く声で言う。

エーフィとブラッキー双方が言い分を述べた後

『この粗忽者め！』

とブラッキーにアームハンマーをくらわせた。流石に耐久型らしく一発では瀕死にならなかった。

『いいか。お前は確かに強固な壁だ。だがな、壁も使えなくなっては何の意味も無いことくらい分からぬのか！』

『すみませんでした……』

流石のブラッキーも最古参にして主将ともいえる大物の前では形無しのようだ。

『お前たちも、明日にむけて精をつけるのだぞ。この馬鹿みたいにやせ我慢をしたらそれが一番あいつを悲しませるということをゆめゆめ忘れるな』

そう言ってドサイドンはドシドシと定位置の岩場に帰っていった。

『や……やっぱりすごい迫力だね』

ピカチュウはあっけに取られていた。傷一つ与えられず鎧袖一触に倒されたトラウマもあるのだろう。

『なんたって一番の古株だもんね～。やっぱり凄い方だわ。さーてクロちゃん』

『分かった分かった。食べるよ。流石に大先輩に言われちゃあな』
と言いながら残った１０個ほどの木の実をがばっと抱え、全て食べた。
『あー……』
ピカチュウは物欲しそうに見つめている。食べたい木の実が他にあったようだ。
『ほらやっぱりお腹空いてたんじゃないの！　全くもう……』
エーフィは言葉とは裏腹にやはり嬉しそうだ。
そして、ピカチュウが少ししょげた顔したのに気づく。
『あ……ごめんねピカちゃん……』
『い、いやいいよいいよ。仲直りできたならね』
ピカチュウは嬉しそうな顔をしつつもやはりどこか物足りなさそうだ。
―同日　午後１０時　旅館『松ノ木』檜の間―
レッドとエリカは１５時から夕食を食べながら２日分の翻訳を終え、一息ついていた。
そして終わってノートを読んでいるとエリカの顔が途端に明るくなる。
「これ……これですわ！　やっと尻尾をつかみましたわ！」
彼女は舞い上がっている。
「はぁ？　どうしたんだよ急に」

「ふふん。証拠……とまでは言えませんけれど、有力な手がかりを見つけたのです！これで明日は万全ですわ」

「そ……そうか。まぁ何だか知らんが良かったな」

レッドは朝から複雑な心境な為ついそう投げやり気味になってしまった。

「もう！　少しはどんな手がかりを掴んだのか？　とかお聞きになってくれても良いのですよ？」

彼女は余裕たっぷりな様子で言う。

「あーそうじゃあどんな手がかりをつかんだん」

「明日のお楽しみですわ」

「なんだよそれ！」

そんなやり取りをしていると突如ドアが叩かれた。

「もう。人がせっかく良い気分になってるのに……」

とエリカは渋々部屋の入口に向かった。

すると、ジムトレーナーのトモミが血相を変えて飛び込んできた。

「た、大変です！　たった今寄合で推薦状作成が決議され……。ここのリーグ支部に提出するとのことです！」

「な……なんですって!?」

青天の霹靂とばかりにエリカは表情を真っ青にした。
午後6時から始まった緊急の寄合は協議の結果賛成多数で推薦状作成が決定し、本日付で提出することになったのだ。
このニュースは電撃のように街中に広まり、夜のフエンを震撼させた。
「アスナさんはどうされているのです？」
エリカは続いて尋ねた。
「いつリーグからお達しがくるか分からないのでジムに待機しています。もうあたしいても立ってもいられなくて……」
「分かりましたわ……。ありがとうございます」
そう言うとトモミはドアを閉め、立ち去っていった。
「どうしたんだ？　なんか推薦状がどうのって……」
エリカは座敷に戻り、レッドに事の次第を報告する。
「え!?　そんな馬鹿な。だって町長は……」
「貴方……。もしかしてサキヒサさんにこの計画を密告したのでは」
エリカは疑惑の視線を向ける。
「そ……そんな事するわけないだろ！」
「では、密告とまでいかなくても仄めかすような事は……」

「そんな事……」

と言いながらレッドは自らの言動を省みる。

「ごめん。言ったかもしんない」

「あぁもう……なんて事をするのですか！　前に言いましたでしょう？　事の経緯がどうであろうと、リーダーが代わって間もない時期の推薦状提出そのものが理事会議の対象になりかねないと！」

エリカは柳眉を逆立てる。

「ごめん……本当にごめんなさい！」

レッドは土下座して謝った。

「はあ……まあしかし過ぎたことを責めても致し方ありませんわ。かくなる上は嘆願書を作成して早朝に支部へ行き、寛大な処分を願わなければ……」

と言いながらエリカは机に向かって便箋とボールペンを出し、書状をしたためはじめた。

「ごめん……本当に」

レッドは謝り続けたがエリカは早くも集中していた為、何も返事は返ってこなかった。

―同日　午後9時　サイユウリーグ　フエン支部　総務課―

この頃、フエン支部では推薦状提出を受け、総務課長及び支部長の決裁を経てリーグ本部へ送信する手続きをとっていた。

ただの推薦状ならば翌日扱いとなるが、今回は理事会議の案件になるため一刻も早く証拠の推薦状と一緒に召集願いをサイユウの地方本部を通り越してカントー・セキエイ高原に存する全国本部へ提出せねばならないので退勤後にも関わらず両者は引っ張り出された。

「課長、印鑑を」

総務課長は課員の差し出した召集願いの書面を見て面倒くさそうに印鑑を出す。

「これは本当なのかね？　明日の決闘次第で決めるという事に成ってたはずだが？」

課長は疑り深く尋ねる。

「私もそう伺っておりましたが……。下記の通り推薦状の要件を満たすだけの署名捺印がありますので」

「むぅ……そうか。分かった」

と朱肉をつけ、押印しようとした。

「その件。少し待ってくれないかな？」

一人の男が突如としてストップをかけた。

その男を見ると共に課内に居た委員は総立ちし、頭を下げる。

―8月22日　午前5時　旅館『松ノ木』玄関前―

レッドとエリカは早起きをしてリーグ支部へ向かおうとした。

すると玄関前で一人の男が待ち構えていた。

「やあ！　おはよう。久しぶりだね」

男は爽やかに二人を出迎える。

「え……ダイゴさん!?　どうしてここに」

「言ったろう？　いやーな予感がするって。君たちがこの街についたっていうのに一向にバッジを取ったとも聞かないから不思議に思って昨日来てみたら案の定ね……」

ダイゴは懐から一枚の書状を取り出す。

「もしかしてそれは……」

レッドが気づく。

「推薦状と理事会議の召集願の写しだ。セキエイリーグに行ったら僕にはどうすることも出来ないからその直前で差し止めた」

「間一髪ですわね」

「それにしてもダイゴさん。どうしてここまで……」

レッドは疑問に思った。

「嫌だなぁ。僕だってポケモンリーグの理事だよ？　町の勝手な都合でリーダーをころ

ころ変えられたらたまったものじゃないよ」
　ダイゴもエリカと志は同じだったようだ。
「君たちのことだ。もう既に相手側の尻尾はつかんでいるんだろう？　堂々と引導を叩きつけてあげなよ。観客として楽しみに見ているからね」
　そう言ってダイゴは立ち去る。
「ダイゴさん！」
　エリカは呼び止める。
「ありがとうございました！」
　エリカは最大限頭を下げる。レッドもつられて頭を下げる。ダイゴは振り返って笑いながら手を振った後、嬉しそうに立ち去った。
　決闘の時刻は朝１０時。とりあえずもう一眠りするために一旦二人は旅館に戻った。
　―午前８時　同所　５階　支配人室―
「な……保留!?」
　ダイモンは町長からの電話を受け取って思わず叫んだ。サキヒサも思わず立ち上がった。
「うむ。今しがたリーグ支部より連絡があった。従来通り、本日の決闘次第で推薦状を再度提出するように。とな。こうなればもう私らには何もできん。今日の決闘はこれ

までの通り行う」
「分かりました……」
　そう言うとダイモンは受話器を置いた。
「どういうことだ保留って……」
「言ったとおり……。リーグ側が判断を保留した。つまり、アスナは理事会議の対象にすら今はなってないということだ……」
「くっ……。誰の差し金だ畜生……！」
　サキヒサは地団駄を踏む。
「どうしようか」
「こうなれば是非もなし……。決闘に出てアスナと少なくとも前回以上の成果を見せつければ済むこと」
「しかし先生言ったじゃないか！　向こうが何か掴んでるかもしれないと！」
　サキヒサは数分程黙した後
「向こうが何のネタを掴んでるか分からん以上……出来る限りこちらも正々堂々戦うしかない」
「そ……そんな……」
「そんな顔するな！　頭を使え！　頭を！」

サキヒサとダイモンの会話は３０分頃まで続いた。
―午前１０時　中央広場―
中央広場にはフエン中の人たちが一堂に会していた。
周りには露店も多数出ており祭りにも似た盛況である。周囲の道路は交通規制が敷かれ、警官隊も多数出動するなど警備も厳重だ。
広場の入口には高いフェンスが設けられ、その中に関係者の人々が入る。寄合の投票権を持つ有力者たちやジムトレーナー。そして、レッドとエリカ、アスナ。それに相対するダイモンとサキヒサ。
フィールドの真ん中にはリーグより派遣された公式の審判がいる。
「ルールは6対6のシングルバトル。どちらかが全てのポケモンを失った時点で勝敗を決定する。持ち物は原則通り、使用ポケモンに関しては……」
審判の説明を終えた後、アスナ及びダイモンはモンスターボールを用意する。
「行け、ヘルガー！」
アスナは迷いなくポケモンを出したが、ダイモンは躊躇している。
「兄さん……？」
アスナは様子を伺う。
「どうしましたか？」

審判も続いて尋ねる。
「いや。なんでも。失礼。行け！　シザリガー！」
――
その後三ターンにわたってダイモンのポケモンは倒れ続ける。
あまりにもワンサイドゲームなので周りからヤジが出始める。
「……」
三匹目の倒れたバクーダをダイモンは黙って戻した。
アスナは黙ってダイモンの様子を見ている。
そして、先程より少し年季の入ったボールを震えながら持つ。
「どうかしましたか？」
審判が尋ねる。
「いえ……。行け！　ブラッキー！」
これを見た瞬間アスナはうつむき加減に話し始める。
「兄さん……それ本当に兄さんのポケモン？」
これを聞いたダイモンは表情を変えずに
「何を言ってるんだ。紛れもなく俺のポケモンだ」
と返す。

「本当に？」
「嘘をつくはずないじゃないか」
　ダイモンが答えるとアスナは悲しそうに
「そう……。分かった」
　とだけ答える。
「なんだ？　どういう事だ？」
「ダイモンさん。貴方、今嘘をつきましたね？」
　エリカが突如、主賓席から立ち上がり、コツコツとダイモンに詰め寄る。
「なんだ君！　無礼なこと言うな！」
　ダイモンは精一杯の反抗で声を荒げる。ブラッキーはそんなことはどこ吹く風とばかりに平静な表情だ。
「往生際が悪いですわね……」
「もし。あのこれはどういう……？」
　状況を読み込めない審判がエリカに尋ねる。
「ダイモンさんは、そこのサキヒサさんよりポケモンを借用し、自らのもののように偽装して今リーダーの位を簒奪せんとしているということですわ！」
　エリカはサキヒサを文字通り指弾する。

これにはサキヒサも業腹な様子でエリカに立ち向かう。
「エリカさん……。そこまで言うからにはもちろん証拠があるのでしょうね!?」
しかし公の場所だからか口調はまだ丁寧な様子だ。
「サキヒサさん。貴方はあくまでも関与を否定なさるのですね?」
「当然だろう! 俺はあくまでダイモンのトレーナーであって、直接俺のポケモンを貸したなど根も葉もない事を」
「貴方はそれをここで見ているフエン町民３５０００人余の前で誓えるのですか!?」
彼女は一歩も引かずに堂々と言う。
サキヒサは少し間を置いて
「誓う。俺は……次のフエンジム副リーダーだからな!」
ダイモンも同様に頷く。
彼女は勝利を確信した。この言質を取ることが彼女の目的だったからだ。
「承知致しました。では証拠をご覧に入れましょう」
エリカはＩＣレコーダーをアンプに繋げ、編集した録音を公開する。
「これがどうかしたのか?」
サキヒサは未だ余裕を崩していない。
しかし、録音を聞いた瞬間、周りの観客の手持ちたちなどがざわつきはじめる。

「これは貴方のブラッキーからとった証言です。翻訳するとこうなります『うるさい！　俺は……俺はサキヒサさんの為ならどんな事でもやってのける！　あの事を……』」

　このことにはブラッキーも驚いてこちらを見た。

「お前……どこからそれを」

「些か憚られる事とは存じていますが……私達のポケモンに少しだけマイクの仕掛けをしたのです」

「ふざけるな！　こんな……こんな事認められない！　無効だ！　無効！」

　サキヒサは狂ったように叫び続ける。

「ええ。確かに一般の道理には悖る方法かもしれません……。しかし、このような小癪な手段でリーダーの位を侵そうとしたあなた方には……存外相応しい方法だと思いますわよ」

　彼女はサキヒサの目をしっかりと見据えて言う。

「俺は……あいつに騙されていたのか……」

「いえ。ピカチュウを責めないでやってくださいまし。この事はピカチュウ自身にも知らせては居ないことです。さて、貴方には一つお尋ねしたいことがあります。あの事……とはどういうことですか？　何を言おうとしたのです？」

　エリカはブラッキーに尋ねる。

「ふん……。決まってるだろ。この戦いそのものと勝ってマスターをお祝いすることさ」
「マスターとは誰の事です」
「それはもちろんダイモンさ」
「いいえ！　貴方ははっきりとこうおっしゃいました。サキヒサさん……と！　これは紛れも無く貴方がサキヒサさんのポケモンである事の証左です！」
　彼女はブラッキーを追及し続ける。
「ふん。翻訳なんて解釈の仕方がいくらでもあるだろう。そっちの聞き間違いなんじゃないか？」
「ならばここに居るポケモンたちに先程の録音でどう聞こえたか尋ねて周りましょうか？」
　そういうとブラッキーは沈黙した。
「今一度お尋ねします。あの事……の後何を言おうとしたのですか？」
「……」
　ブラッキーは数分ほど黙した後
「黙秘権だ。答える義務はない。以上」
　とあくまでも白を切り通すつもりだ。

「そうですか。貴方がそのつもりならばこれ以上は尋ねません。皆さん！　先程このお二方は宣誓しましたね？　不正など一切していない！　今出しているのはダイモンさんのポケモンであると！　しかし、現実では誰が親かも明確ではないポケモンを用い、ポケモン自身も答えを濁す！　このような方をリーダーとして、トレーナーとして認めるべきでしょうか!?」

彼女は精一杯の声で観衆に問いかける。答えは二人へのブーイングの嵐であった。これこそが彼女の欲していたものである。大衆を味方につけ、二人をリーダーにすることを認めないという町論を形成させることだ。証拠の弱さを疑惑で埋めることが目的だったわけである。

「私からは以上です。差し出がましい事をし、申し訳ありませんでした」

と言って、彼女は主賓席に戻る。流石になれない声量で喋りすぎたせいか水を飲み干した。

「兄さん……。残念だよ。こんな事をするなんて……」

「アスナ……。どうしても俺じゃダメなのか？　どうしても……お前がリーダーをやりたいのか？」

ダイモンは力無き声で彼女に問う。

「あたしは……。確かにしきたりを破ってるし。兄さんとか、そこに居るじっちゃんや

ばあちゃんからしたら面白くないかもしれない。それでも……それでもお父はあたしの力を認めてリーダーになるため鍛えて、漸く形になった時満足そうにあの世に逝った」

「……」

ダイモンは黙って聞いている。

「兄さんは残されたあたしのたった一人の兄弟だし……。大事に思ってるよ。でも……。やっぱりあたしと兄さんはお父の遺してくれたものをお父の言うとおりにこれからも守っていかなきゃダメだと思う。この前の兄さんの言葉を借りるなら……それこそ〝宿命〟なんじゃないのかなって」

ダイモンはうなだれている。

「でも。決してそれは悪いことじゃないと思う。お父はあたしと兄さんの事をちゃんと見た上でそれぞれにその宿命を課してくれたんだよ。兄さんがバトルに向いてないみたいに、あたしは経営の事なんて全く分からないしね。もしこれが反対になったら……きっと家にとってよくない……いや絶対よくない。これは乗り越えられないことじゃないんだよ。あたしたちだからこそ出来るお父から与えられた最後の課題なんだよ」

「そうか……」

ダイモンは頷いている。

「だからさ……一緒に頑張ろうよ。お父自慢の兄妹なんだから」
　語り終わったアスナの顔は晴れ晴れとしていた。
　ダイモンは間を空けた後
「町長」
「なんだね」
　主賓席に居た町長が答える。
「推薦状……取り下げてください。やっぱりアスナがリーダーの方が良いみたいだ」
　町長は嬉しそうにうなずき
「よく、決意したのう。分かった」
　と言いながら町長は散り散りに突き返された推薦状と召集願いを破り捨てた。
「ダイ！　お前、本気なのか!?」
　サキヒサがダイモンに肩を揺さぶらせながら詰め寄る。
「先生……。俺達は負けたんだよ。潔く認めよう」
　ダイモンがサキヒサに語りかける。
「ふ……ふざけるな！　俺がどれだけこの勝負に賭けてきたか、お前にはわからないのか!?」
「先生には悪いと思ってる……。思ってるけど、ダメなものはダメな」

ダイモンが言いかけたところでサキヒサは
「もういい！　俺は俺なりのやり方で夢を叶えてやる！」
と言ってブラッキーを戻した後、旅館の方角に飛び去った。
「貴方！」
「うん。行こう」
レッドとエリカもそれに続いた。
決闘はお開きになり、アスナ勝利ということで幕を閉じた。
―午後1時　旅館『松ノ木』　1階　廊下―
レッドとエリカは支配人室へ向かうためエレベーターに向かったが廊下でサキヒサが待ち受けていた。
「やっぱり来たな。こっちだ」
と言ってサキヒサは旅館の離れへ向かった。
―午後1時10分　同所　離れ　第二ジム―
第二ジムと名付けられた場所はプレハブ造りでいかにも仮といった作りであった。
しかし、最低限の設備は整っている。
「サキヒサさん。最早貴方に勝ち目はありませんよ。諦めたらいかがですか？」
エリカが説得にかかるが

「黙れ！　お前たちさえ居なければ……これは上手くいったんだ！　もういい。お前らを倒し、アスナを倒し……俺が真のフエンリーダーになってやるんだ！」
　サキヒサは自暴自棄になっている。戦う気は満々のようだ。
「止むを得ないな……。戦うしかないって事だな」
「レッド。教えてくれ……やっぱり前のは手抜きだったんだな？」
　レッドは帽子を目深に被り直し
「はい。サキヒサさんに近づく為に……。わざと手を抜いてました」
　彼女も同様に頷く。最早隠す理由が無いため正直に話した。
「ふっ……。そうか。ならば今回は本当に伝説の夫婦と戦えるということだな。これで散るなら……トレーナーとしてこれ以上の名誉はねえ！　行け、サメハダー！　ロズレイト！」
　レッドはリザードンを、エリカはダーテングを繰り出した。
「サメハダー！　リザードンにハイドロポンプ！」
　サメハダーの猛き水流はリザードンに直撃。四分の三のダメージをくらった。
「ダーテング！　日本晴れです」
　ダーテングは天に葉っぱをあげて舞い、フィールドを晴れ状態にした。
「リザードン！　ロズレイトに問大文字だ！」

「ではロズレイトさんに問題です。１８８０年から１８８４年にかけて世界で一番高かった建物は……」

ロズレイトは立ち止まって考える。

「ふっ……そんなの愚問だね。あの大きい建物だろう。そんなの」

「ブッブー！　時間切れです！　正解はケルン大聖堂でしたあああああああ！」

などと言いながら大文字を食らわせる。完全に虚を突かれたロズレイトは最大限の威力をその身を以て体感することとなった。

当然、耐えきれずに倒れることとなった。

サキヒサはロズレイトを戻す。

「ふっ。いいね！　これこそ最強に相応しい実力だ！　だがまだまだ行くぞ！　行け、フーディン！」

――

その後、一進一退の攻防を続けたがブラッキーの最大限まで影分身した後のバトンタッチをサキヒサはやろうとしていた。ブラッキーは既に戻っている。

交代を続けている為、これがサキヒサが選べる最後のポケモンだ。

「……」

サキヒサは二つのモンスターボールを取り出す。

レッドとエリカは注意深く動静を伺う。
「ふっ……。悪いな……アポロさんよ」
と小さく呟く。二人には聞こえなかった。
するとサキヒサはもう一個のボールを叩きつけ、もう一つのボールを選択した。
「行け！　ドサイドン！」
この最後に選択したドサイドンが登場してから状況は一変した。
ドサイドンは三ターンかけてロックカットで素早さを最大限にし、当たらない上に素早く、火力は化物という有様になっていた。
これにより次々にレッドとエリカのポケモンは倒され気がつけば残り二体になっていた。
しかし二人の方も対策を講じなかった訳ではなく、なんとか善戦し、同じ状況に持ち込ませた。
「ほう。俺の奥の手をここまで凌ぐとは大したものだな」
サキヒサは現在、ドサイドンとブラッキーを、エリカはキノガッサでレッドはピカチュウを出していた。
「こっちもそうそう負けるわけにはいかないんでね……」
「ええ。その通りですわ。ここで負けては名折れというもの……。キノガッサ！　ブ

ラッキーにスカイアッパー！」
「ブラッキー！　しっぺ返し！」
ブラッキーとキノガッサは同じタイミングで技を出し、両方倒れた。
これでエリカは全滅。サキヒサも残り一体となった。
ピカチュウもドサイドンも流石にこれまでの戦いで疲労困憊であった。
「お互いにもう疲れているみたいだな」
「そのようですね」
サキヒサは少しばかり視線をそらした後
「よし。これを最後のターンにしよう。全力の技を出そう」
「分かった……。相棒同士。最後の戦いだ！　ピカチュウ！　アイアンテール！」
「ドサイドン！　地震だ」
ドサイドンの地震で大地が揺れる中、ピカチュウはめげずに走り続ける。
そして
「ピッカァー！」
と跳躍するや否や渾身のアイアンテールをドサイドンの頭に見舞う。
ドサイドンはバランスを崩して轟音をあげながら身を倒した。
「ドサイドン！」

サキヒサは駆け寄った。
「ふっ……。済まなかったな。夢を……叶えてやれずに……」
ドサイドンは絶え絶えの息でサキヒサに謝る。
「いや、いいんだ。ゆっくり休んでくれ」
と、彼をボールに戻した。
ピカチュウも同様に気息奄々の様子だったがなんとか立っていた。
「やった……やったぜ！　ピカチュウ」
レッドは喜びながらピカチュウを抱き上げた。ピカチュウも仇を倒して幸せそうな表情だ。
「くっ……。これで……終わりか。何もかも」
サキヒサは絶望に打ちひしがれている。完全に希望を絶たれてしまったのだから無理もない。
「サキヒサさん……」
エリカはサキヒサを哀れんだ表情で視線を投げかける。
「ふっ……。だが、トレーナーとしての最後に……伝説の夫婦と一戦交えられただけ俺は幸せ者かな」
「恐縮です……」

レッド、エリカともに軽く頭を下げた。
「さて、支部に行くとするか。楽しかったよ、それじゃ、さようなら」
「待ってください」
エリカが呼び止める。
「何だ?」
「一つだけわからなかったことがあるんです」
サキヒサは頭を掻いた後
「まぁこの際だ。なんでも答えよう」
「どうして……語弊がありますけど貴方のようにコネもなにもないただのトレーナーが……このような事情を聞きつけたのならまだしも、リーダーの親戚なぞに近づくことができたのですか?」
彼女にとってそれが最大の疑問であった。ダイモンは旅館のいわゆる旦那（支配人）であり、そうそう一般人が接触するなど不可能であるのが当然だからだ。
「それはだな……」
サキヒサが説明しようとした瞬間、頭から倒れた。
「サキヒサさん!?」
レッド、エリカ双方が彼に駆け寄る。

「うぐぐっ……」
　サキヒサは声にもならない嗚咽をあげている。脂汗でびっしょりだ。
「ど、どうした事だこれは!?」
　彼女は彼の頭を起こす。
「これは……吹き矢ですか?」
　首の後ろには金属の円錐状の物体が刺さっていた。頸動脈に深く刺さっている。床は血で溢れていた。
「くっ……。どうやら俺もこれまでのようだな」
「サキヒサさん！　気を強くもってください。今救急車を」
　エリカがポケギアを取り出す。
「いや。俺はもうもたん。それよりも。俺の遺言だと思って……これから言うことを聞いてくれないか?」
　サキヒサは苦しみに喘ぎながら言う。
「貴方。止血と録音しながら聞いてください。私は救急車を呼びます!」
「わ……分かった!」
　レッドはリュックに入っていた大きめのガーゼを取り出し、吹き矢を引き抜いて当てようとした。

「いいかレッド……。俺の……秘密基地の……冷蔵庫の隣……。そこの金庫に俺の稼いだ……全財産が入ってるんだ……」

レッドはガーゼをテーピングし、患部をしっかり押さえ続けた。エリカの救急車を呼ぶ声もまた聞こえる。

「お前……たちなら……信頼……できるから……。その金を……。トウカシティの……スカイメゾンに住んでる……俺の母ちゃんに……渡してくれ……。詳しいことは金のある……箱の……紙に入ってる……」

「わ、分かりました……」

「俺のジャケットのポケットにある……財布に……金庫の鍵と……暗証番号の紙がある……。ふっ……。本当は……もっと……もっと……稼いでから……渡したかったんだ……が……な……仕方……あるめえ……よ」

段々とサキヒサの顔から生気が抜けていく。レッドは替えのガーゼをあてたが、それでもとめどなく血が溢れる。

「レッド……俺の分も……が……んば……ってくれ……よ」

そう言うとサキヒサは何も言わなくなった。

「サキヒサさん……？　サキヒサさん！」

レッドは体を揺さぶるが反応はない。心臓は弱く動いてるが時間の問題なのは明白

だった。

――

やがて救急車が到着し、サキヒサは病院に搬送されたが間もなく死亡が確認された。

二人は当然警察の捜査を受けたが、流石に状況から二人が犯人でないのは明確なので簡単な聴取で終わり、その日のうちに帰された。

警察に録音を聞かせ金を渡す使命があることを話し、承諾を受けた。

―午後9時　112番道路　草地　秘密基地―

二人は解放されるとすぐさま秘密基地へ向かった。

「へぇ……ここがサキヒサさんの秘密基地……ですか」

最早主のいなくなった秘密基地はいつも以上にひっそりしているように見える。レアコイルは主人の死を知らずに電気を供給し続けていた。

レッドは天井の灯りをつける。

「たしかこっちだって言ってたんだけど……」

「あれではないですか？」

エリカが冷蔵庫の後ろにある白い金属の箱を指差す。レッドはそこに歩いた。

「うん。これみたいだな……どれどれ」

レッドは託された紙と鍵を使って金庫を開けようと試みる。因みに紙は暗号形式に

なっていたがエリカがすぐに解いてしまった。
「……。なんか悪いことしてるみたいだな」
「傍から見ればただの金庫破りですからね……。あら、開いたみたいですよ」
レッドはドアを開ける。中には一つのアタッシュケースと一枚の手紙が入っている。
手紙の内容はもう自分は死んでいるだろうという書き出しと、礼を言う文言。そして母親の住所が書いてあった。
「それにしてもいくら入ってんだろう……」
レッドは好奇心に負けて、紙を頼りに解錠。ケースを検める。
中には想像に反して札束が数個とバラのお札をゴムでまとめているだけだった。
「これは……」
「およそ……３００万円といったところでしょうか」
「てっきりケース一杯に入ってると思ったんだがなぁ」
レッドはやや拍子抜けしている様子だ。
「まぁ……。ずっと流れ者の不安定な収入状態ではエサ代なども差し引いてこれが限界だったということでしょう」
と言いながらエリカはバックから銀行の封筒を取り出す。いつの間にか銀行に行っていたようだ。

　すると彼女はいくつか札束を追加で置く。ついでにバラバラになっていたお札もまとめる。すると５２０万ほどになっていた。
「このくらいならば不自然には思われないでしょう」
「え……どうして？」
「いいですか。これは私たちリーグの責任でもあるのです。リーグがベテラントレーナーへの保障や施策を十分にしてこなかったが為に起こった悲劇ともいえるのですわ。これは一員としてせめてもの償いのつもりです」
「償いでポンと２００万円……」
「何か？」
　彼女は当然とでも言いそうな雰囲気である。レッドは忘れかけていたが彼女はリーグでも有数の大金持ちであったことを改めて自覚するのであった。
　レッドは笑って流した後
「それにしてもさぁ……」
「はい？」
「サキヒサさんのポケモン……これからどうなんのかなぁ」
　レッドはそのことが本当に心配なようだ。
「あぁ……そうですわね」

エリカも同様に表情を暗くする。
「あんなに仲良さそうにしてるのに……。皆バラバラになっちまうのかなぁ」
レッドはため息をつく。
「まぁしかし……ポケモンは主人を選べませんから……。これもまた運命かもしれません」
「そうだ。エリカ。お前養って」
「貴方。ポケモンの世話というのは簡単なものではないのですよ？　そんなことをいうのなら貴方が」
「う、うーん。いくら仲良くなったと言ってもなぁ」
いくら仲良くなったとは言っても、育て主が違うポケモンが一緒になるのである。そこで色々な問題が起こるということは想像に難くない。
その後、アタッシュケースを閉めて、旅館に持ち帰った。しかしお金だけは念のためエリカが肌身離さず持っている。
―8月23日　午前9時　フエンタウン　ポケモンジム―
決戦から一夜。
改めてジムリーダーとして認められたアスナは翌日よりジムを完全に再開した。
いつも通りジムトレーナーを倒して、アスナのもとに着いた。

「やーおはよう！　本当にありがとうね！　あたしがここに居られるのは二人のおかげだよ！」

アスナはすっかり元気を取り戻したようだ。

「お元気になられたようで何よりです。フエンも人が戻ったようでなによりですわ」

フエンタウン自体も騒動の収束を知り、少しずつ賑わいを取り戻していた。

「うん！　兄さんとも仲直り出来たし、ほんと感謝してもしきれないくらいだよ！　雨降って地固まる……ってやつかな」

エリカは嬉しそうに頷いている。

「さてと。それはそれとして……。改めて自己紹介するね。あたしはフエンタウンジムリーダーのアスナ！　炎タイプの使い手で、お父から受け継いだこの熱き魂。二人に見せつけるから覚悟してね！　行け、ヘルガー！　バクーダ！」

彼女は改めて自信たっぷりに言えて幸せな様子だった。

レッドはカメックスを、エリカはルンパッパを繰り出す。

「ヘルガー！　ルンパッパを挑発！」

ヘルガーは様々な言葉を言ってルンパッパを怒らせた。ルンパッパは挑発に乗ってしまった。

「ふっ……。一筋縄ではいきませんわね」

ルンパッパに雨乞いをさせるつもりだったのか少し悔しそうだ。
「カメックス！　バクーダにハイドロポンプだ！」
カメックスはバクーダにハイドロポンプを食らわせる。4倍の上に一致の大技では耐えきれるはずがなく、バクーダは倒れた。
「ルンパッパ！　ヘルガーに波乗りです！」
エリカは安定を重視し、波乗りを指示。ヘルガーは押し流されたが、三分の二程度を失って耐える。
「なかなかやるね！　流石！　でもこっちも負けてられないんだから！　行って、ブーバーン！」
ブーバーンは大きく息を吐きながら堂々と登場した。
「ヘルガー！　ルンパッパに悪の波動！」
ヘルガーは禍々しい波動を放つ。一致技とはいえ等倍なので三分の一程度失う。
「カメックス！　ヘルガーにハイドロポンプ！」
レッドは相性の良さを活かしてひたすら火力で押していく方針である。しかし、すんでのところで外れた。
「ルンパッパ！　もう一度！」
ルンパッパはもう一度波乗りをくらわせる。ヘルガーは耐えきれずに倒れるがブー

バーンはイトケの実を食べて威力を半減。四分の一程度におさめた。
「ブーバーン！　カメックスにかみなりパンチ！」
ブーバーンは渾身の電撃をまとった拳をカメックスに食らわせる。カメックスは大きく後ずさったが、所詮は不一致なので五分の二程度の減少にとどめた。
――
レッドはカメックスを残したまま完勝。エリカは善戦したが相性の悪さは如何ともし難く全滅した。
「うん。やっぱり強かったねぇ！　お父が戦うの楽しみにしていただけあるよ。はい、ヒートバッジ！　お待ちどう様」
レッドとエリカは漸く4つ目のバッジを手にした。
二人はありがとうございますと礼をした。
「本当に……長かったな」
「ええ。日数にすればほんの五日くらいですけど一月くらい居たような感覚ですわね……」
彼女は感慨に浸っている。
「あぁそういえばアスナさんって挑戦者には厳しく接するとか……」
レッドは思い出したかのように言う。

「あーあれね。あれずっとやってると結構疲れんのよ……。肩に力入っちゃうしね。兄さんと頑張るって決めたばかりだし、自分に合ったスタイルでいこうと思ってこれからは自然体で行こうって決めたの」

「結構な事ですわね。それで、お兄様はあれからどうされたのです？」

エリカはアスナに尋ねる。

「即日でもうリーグから処分下ったみたいで……。これからはトレーナーとしては戦えなくなったって」

「そうですか……。やむを得ませんわね」

「でも。これまで捕まえたポケモンは手放さないみたいで、自分の部屋で飼ってるよ。結構可愛がってるね。まぁ元々ポケモンは好きな方だから……」

レッドは結果オーライに終わった事に安堵している。

「それにしても宿はこれから大丈夫なんですか？」

エリカが尋ねる。

「いやそれがさぁ。意外と大盛況なのよねぇ。兄さんが潔く身を引いたのと、あの公開決闘が逆に宣伝になったみたいで今日のぶんの予約は満室みたいだよ。離れで死人が出たっていうのも怖いもの見たさでむしろ……って感じに」

「あら左様ですか……。まぁ丸くおさまって宜しい限りですわ」

エリカはにこやかな表情で言う。本当に安心しているようだ。
その後も何分か話してジムを後にした。ついでにお礼としてフエンせんべいを十箱分貰う。
―午後11時　フエンタウン　ジム前―
ジムを出ると一人の男が待っていた。ダイゴである。
彼は二人をみつけるといつもどおり爽やかな笑顔を向けた。
「やあ！　君たち昨日は本当に良かったよ。よくぞ正してくれた。同じポケモンリーグの人間として誇らしい限りだよ！」
ダイゴは開口一番に褒め続ける。二人はこそばゆい思いがした。
「いえいえ。ダイゴさんがあそこで差し止めてくれなければどうなってたことか」
もしあそこで推薦状が提出されていれば少なくともこの問題は長期化かつ泥沼化したことは目に見えているのだ。
「ハハ。理事として当然の仕事をしただけさ。あぁそうだ。サキヒサくんのポケモンの事だけど……」
二人はにわかに真剣な表情になる。
「あれ。サキヒサくんのお母さんが自ら申し出て、全部引き取ることになったから」
「ええ!?　大丈夫なんですか？　たしかトレーナーの経験がないし……あと何よりも先

立つものが」

レッドが心配しているがダイゴはにやりと笑い

「大丈夫。元はと言えば僕が一番強くてすごかったのが一因といえなくもない。だから、せめてもの償いでね。家も新しく用意して、飼育に必要な資金や指導員も十分に支援するつもりだよ」

レッドはここで元々サキヒサがトレーナーを志した原因を思い出す。

「そ……そうですか。え、でも大丈夫なんですか?」

「おや。舐めてもらっちゃ困るねぇ。エリカさんよりも僕はお金持ってるんだよ?」

「え!?」

仰天してエリカを見る。

「は、はい。その通りですわ。ダイゴさんは……確か私の総資産の十倍程度を将来引き継ぐ予定と伺っております。現在でも生前贈与で相当数貰ってるでしょうし」

「そういう事。だから心配いらないよ。まぁもちろんお金だけの問題じゃないとはいえね……」

ダイゴは横を向いている。それなりに責任は感じているようだ。

「あと君たちこの事は聞いてるかい?」

ダイゴは思い出したかのように言う。

「何でしょうか？」
「サキヒサ君を運び出した後、あのプレハブを捜索したんだけど……一個のモンスターボールが彼がいたであろう場所に転がってたんだ」
「ああ……」
　二人は思い出す。恐らくはサキヒサがあの時投げ捨てたボールだろう。
「安全のために外でそのポケモンを捜査員の人が出したんだけど……なんと信じられないことにデオキシスが出てきたんだ！」
「デ……デオキシスってあの幻のポケモンの……？」
　レッドも噂でしか聞いたことのない非常に珍しいポケモンである。
「そう。それで彼はチラッとこちらを見たと思うと天空に消えていったんだ……。なんとも不思議な話じゃないかい？」
「ほう……。中々面妖な話ですわね。サキヒサさんがそのポケモンを手に入れてたと言うことですわね？」
　エリカが尋ねる。
「でも、デオキシスは伝承によれば宇宙にいるポケモンだ。そうそう彼のような普通のトレーナーの手が出る領域じゃないとおもうんだけどな……」
「不思議な話しですねぇ」

レッドはそう感想を言った。
「ま、そんな話があったことを伝えたかったのさ」
その後も二言三言話してダイゴとは別れた。
「それにしても良かったなぁ。万事丸く収まって」
レッドは肩の荷が降りてホッとしているようだ。
「そう……ですわね」
「どうした？」
「い。いえ！　参りましょうか」
レッドとエリカはとりあえずポケモンセンターへ向かった。
―8月25日　某時某分　某所―
「そうですか……全て失敗に終わりましたか」
アポロはランスの報告を聞いて落胆した様子で席についた。
「あの例のポケモンについては謎ということでケリがついたようです。我々の関与が疑われなかった事が不幸中の幸いですね……」
ランスはそう述べた。
「私がどんな思いをしてあのポケモンをあの男から手にしたか……。投げ捨てたと言うことは使うことすらしなかったと言うことですね？」

アポロがランスに尋ねる。
「はい。そういうことです」
「全く何を考えてんだあの男はよぉ!?　サカキ様がやれといってるのになんでやらねえんだおかしいだろ！」
ラムダがそう毒づく。
「ふん……。まあ良いでしょう。私の指示に従えない時点であの計画が成功したとしても後々の障害になったのは事実でしょうから……。寧ろ良かったかもしれませんね」
「そうね……。サキヒサのあの様子じゃダイモンを裏切るよう言っても反抗しかねないだろうし」
アテナが爪を研ぎながら答える。
「しかしアポロ様……。バッジ12枚で我々になびく貴重な人材を殺してしまって本当によかったのですか？」
ランスがアポロに尋ねる。
「如何に強かろうと命令に服従しないのではタダのゴミと同じです。まぁ貴重とはいえ似たような人材はまだまだ居るでしょう。ベテラントレーナーは未だリーグが持て余している棄民ですからね……」
アポロは含み笑いをする。

「はーぁ。サキヒサがダイモンを裏切り、フエンのリーダーにしてこちらのリーグ内通者にするっての……。いいアイデアだと思ったんだが失敗じゃなぁ」

ラムダがそう呟くと

「お黙りなさいラムダ。これは失敗ではありません。中止ですよ。言葉には気をつけなさい」

やはりラムダは注意されて小さくなってしまった。

「こうなればまた別の手を考えるほかありませんね」

アポロはホワイトボードを見ながら呟いた。それを失敗というんじゃと幹部たちが思ったのは想像に難くない。

―8月23日　午後6時　トウカシティ　ポケモンセンター―

二人は空を飛ぶでトウカシティに行く。そして、サキヒサの母親にお悔やみと託された資金を渡した後、転居予定の家を見てポケモンセンターに行った。サキヒサの遺体は明らかに殺人であるため司法解剖に回されている。

「立派な家だったよなぁ……」

「ええ。流石はデボンの力と言うべきか……」

転居予定の家は外観から見た様子だと平屋ではあるが、3000平米もの広い敷地に、500㎡の家。ポケモンのためのプールやランニングコースなどいたれりつくせり

のまさに豪邸と言うべき場所だった。元はダイゴの父、即ち今の会長の別荘だったが数年前から使われなくなったのを改装しているようだ。現在は工事中。
「お母さんも本当に嬉しそうだったよね」
「ええ。まさに棚からぼたもちと言っては不謹慎やもしれませんけど……。そのような感じですからね。それもあるのでしょうが、今まで一人ぼっちだったのがポケモンとはいえ新しい家族のような存在がたくさんこれから一緒に過ごせるのでしょうし……。お母様としてはこの上ない幸せでしょう」
「サキヒサさんも一緒だったらもっと嬉しかったんだろうけどな……」
　レッドはふと呟いた。
「まぁ……それはそうでしょうけどね」
　彼女は自分で淹れた紅茶を飲んでいる。
「さてと、次はトウカジムか」
「ええ。センリさんですわね。勝負もですが……一体何を悩まれているのでしょうか」
「あー！　そうだったな」
　レッドは今の今まで忘れていたようだ。
「貴方……」
「いやぁ。ハハハ。そっか。そうだよなぁ……。あんな深刻そうな顔してなぁ」

「ええ。何かお手伝い出来ることがあればいいのですけどね」

二人は新たなる課題に直面しようとしていた。

―第十八話　フエン騒動（下）　終―

第十九話　父の決断

―8月25日　某時某分　某所―

サカキはアポロから直々の報告を受けていた。その内容はフエン計画の失敗である。

彼は表情一つ変えずに聞き入り、終わると「そうか」とだけ答えて下がらせた。

この時、ある人物と食事をしていた。

「全く、不甲斐ないのう……。あれだけリーグを籠絡してみせるなどと啖呵を切っておったのに」

オーキドである。彼は傘寿を迎えたとは思えないほど健啖な様子でステーキを頬張っていた。

サカキは黙って日本酒を飲んでいる。こちらは舟盛りの刺し身だ。盃を置いた後に

「やむをえまいよ。あの女が出てきたんじゃぁな……」

とさも仕方ないと言った様子で返した。

「それにしてもオーキド殿」

サカキはオーキドを見る。

「なんじゃ？」

オーキドは食べる手を休める。
「よく食べるが……貴殿はもう８０であろう。体にはもっと気を遣ったほうがよいのではないか？」
「何を言うか。まだ傘寿じゃよ。魚などよりも肉のほうが精がつく故、健康的じゃよホッホ」
などといいながらまた一切れ口に入れた。
「そうか……。まあその様子ならば大丈夫そうだ」
と言って、サカキはマグロの赤身を醤油につけ、口に入れる。
「それで……」
オーキドは一転、顔を引き締めてサカキに尋ねる。
「今日は何用かの？」
「ん……ああ」
サカキは口端の醤油を拭き取る。
「また何か、頼み事かの？」
「いや、そうではない。たまには食事でもと思ってな。このステーキも普段の労をねぎらっての私のせめてもの謝礼のつもりだ」
「ほう」

「我が団がここまで返り咲けたのはオーキド殿のおかげだ」
　サカキはそう言うとまた一口酒を飲む。
「思えば去年の来月の頃だな」
「うむ」
「始めは何かの罠かと思ったのだがな……」
「無理もあるまいな」
　オーキドは食べる手を休めた。
「一度は露と消えたとは言え、当時の私にはそれしか縋る道がなかった……。思えば、オーキド殿はその頃から本気で私を支援するつもりだったのか？」
「さぁ……どうかの。それにしてもあの男はなかなかだったのう」
　オーキドは四年前のことに思いを馳せた。

――

―２００９年　１０月４日　午後６時　コガネシティ　某ホテル　パーティー会場―

　この日、ここでは研究会とリーグ合同主催の懇親会が行われていた。
　ここには当時のポケモン研究会会長のオーキドは勿論、会員の研究者や大学教授、リーグ側からは副理事長のシロナや理事（四天王）が数名、そして当時のコガネシティ

ジムリーダーのセンリが出席している。その他にもコガネ市議会議員や、府議会議員、商工議会重役などコガネの重鎮も顔を合わせ、秘書などを含めれば総勢７０名ほどがその場に居た。

双方の挨拶もそこそこに終わると、会食に入り、いろいろな人が談笑していた。

「博士、ご無沙汰しておりますわ」

シロナはオーキドに社交辞令とばかりに挨拶する。

「おお、シロナ女史ではないか！　久々じゃのう」

「ええ。七年前の全国地球史学フォーラムでお会いして以来ですね」

シロナは大学時代に地球史全体について考察するために幅広い学者が集ったフォーラムに学生代表として出席していた。

「あの時、君はあのまま学者になると思ったのだがのう。まさかこうして会うことになるとは」

オーキドは心底驚いているようだ。

「なりゆきといいますか……。自分でも正直驚いているくらいです。しかし、私にはこちらの方が性に合っているようです」

「うむ。そうか。リーグと研究会。畑は違えど、ポケモンへの探求を行うという面では志を同じくするもの。これからも益々関係を良くしていこうと思うておる。互いに邁

進していこうではないか」
　オーキドは闊達に笑いながらそう言った。
「ええ。勿論ですわ。これからも宜しくお願いしますわね。博士」
　シロナとオーキドはそれからも数分ほど会話していた。
　その頃、別のテーブルでセンリは研究員や府議などと会話していた。
　他愛の無い会話を続け、十分ほどした後に自分の席に戻る。
「ふう……」
「大丈夫ですかリーダー?」
　センリは後学の為にいいだろうと何人かトレーナーを連れてきていた。
「やはりこういう場所は肩がこる……。務めと分かっていてもなぁ」
　センリは首を回した。
「お疲れ様です……。それにしてもなんですかさっきの議員の言い草は……。まるでリーダーがこの街にとって不要な存在だとでも」
　センリは実直で誠実な人柄であるが、やや派手さや柔軟さに欠けるためコガネ人との気質とはなかなか折り合いがつかず水面下で有力者とのにらみ合いが続いていた。
　元々の任命が前任者の死亡によるリーグからの暫時的な辞令だったため尚更だった。
「リーダーはいつまでこんな仕打ちに耐えるつもりなんですか?」

「最近、やたらと色々テレビに出ている子がいるだろう?」

センリは出された白ワインを一口飲んだ。

「アカネちゃんですか?」

アカネは2005年のスカウトの後、翌年の2006年にはデビュー曲でミリオンヒットを飛ばし、2007年のあるドラマでは主演の子役として近年稀に見る好演を見せそれ以来コガネのマスコットキャラクター、イメージキャラクターとして定着しつつある。

「最近、ここのお偉方の一部はあの子をリーダーにしたいと動いているみたいでね……」

「そんな。あの子確かに器用そうだけどトレーナーとしての経験あるなんて聞いたことないですよ?」

「そうなんだよ……。私も出れるものなら早く後任に就かせアサギに戻りたいんだがな」

センリは腕を組みながら遠い目をする。元々センリは地元のアサギでリーダーをしていたが先述の辞令でかれこれ三年に亘りコガネで任についている。(アサギでは別に資格を持っている人間がリーダーを務め、ミカンの先代にあたる)

後任が決まらないのは伝統的に街の意見が強い故になかなか意見が合うような後任がでてこないためであった。

「リーダーはもうお手合わせはしているのですか？」
「彼女は多忙で中々時間取れないみたいでね……。その点も含めてどうもリーダーに就けるには不安が残るんだよ。まぁそもそも本人がリーダーに就く意思があるのかどうかすらわからないしな」
　センリは再び白ワインを飲んだ。
「そうですか……。そんな調子じゃまだまだ時間がかかりそうですね」
「うむ。気苦労が堪えんよ……」
　と言いながらセンリはため息をついた。
　そうしているとセンリのポケギアが鳴り響いた。
「おっと。ちょっと外すよ」
　と言って彼は会場の外に出た。
　―午後7時　廊下―
　センリは用事を済ませた後、ついでにトイレも行って会場に戻ろうとしていた。
　すると観葉植物の物陰から聞き捨てならない内容を耳にした。
　ボスのサカキ殿。の単語である。ロケット団ボスのサカキなどというのは決して穏やかな話ではない。ましてやここ数ヶ月はロケット団の活動の活発化がセンリの耳にも入っている。

センリはこっそりと動静を伺う為その物陰に近づいた。
「うむ……手はずは整っておる。いや、決してこれは冗談で言っておるのではない。腹の底から思っての事じゃよ。うん」
耳を澄ますと声も聞き覚えのある人物の声ということに気づく。
彼は死角となりそうな場所から顔を確かめる。すると我が目を疑う事態に遭遇した。話しているのはあのオーキド博士だった。サングラスや帽子でごまかしてはいるが、何回も様々な会合で顔を合わせているので間違えるはずがない。
どうして天下の研究者であるオーキドがロケット団に接触を試みようとしているのか。彼には全く理解できなかった。
「おっと。そろそろ戻らねばならぬのでの。またかけてくれい」
そう言ってオーキドは通話を切った。
センリは様子を探ってみようと様子をうかがっていた場所から出て、自然な風にオーキドに話しかける。
「あぁこれはこれは博士。ご無沙汰しております」
「おぉ君はセンリ君じゃったかのう。相変わらずご活躍のようじゃの」
簡単な世間話をした後、センリはそれとなく聞いてみることにした。
「博士、最近は色々とポケモンの世界も物騒で困りますね……。聞きましたか？　その、

タマムシのアジトの話」

　９月２４日。レッドがエリカ戦のついでに潰したタマムシのアジトでは警察の捜査が入り、ロケット団の凄惨なポケモン虐待などの実態が白日の下にさらされた。これまで表では名前を変えて良い企業の面をしていたものがこのような実態があったことを知れると世間は大きな騒ぎとなった。

　ロケット団員は次々と逮捕されたが肝腎のサカキやその他幹部など７割ほどがまだどこかに隠れているとされていた。

「うむ。全く不届きな話じゃのう。ポケモンと人間はあくまで互恵の関係でなければならん。それを真っ向から否定するような組織の存在はあってはならぬのう」

　オーキドは涼しい顔でそう言ってのけた。

「いや。全く博士の仰せの通りです。私もリーグの一員として微力ながらこのような反ポケモン団体撲滅に力を注ぐ所存です」

「うむ。頑張ってくれたまえよ。研究会も出来る限り力を貸せるよう手を尽くすでの」

　オーキドはシワを浮かべて笑いながらサカキの肩を叩いた。

「ありがたい限りです。ところで、ロケット団は今どこに潜伏しているのでしょうねぇ」

「さあ。ワシにも見当がつかぬの。エリカ女史から話は聞いていないのかね？」

　オーキドは据わった目をしたまま返す。

「彼女も事件発覚まであずかり知らなかった事のようで……。まあ本格的な着任から時間が経ってませんしね。それに今は……」
「おぉ……そうだったの。まだそんな状況ではなかったか」
先月末にエリカは祖母であり、当人にとっては母親以上に敬愛していた肉親にあたるカルミアを亡くした。彼女にとってそのショックは計り知れず、最初の一週間はジムを閉めていた程だ。
「ええ。まぁそれはともかく、ロケット団の今後がどうにも気にかかりますね……。隣の地方の事とは言え憂慮してしまいます」
「ホッホッホ」
オーキドは得意の高笑いをする。
「なぁに。センリ君よ。直に分かる日がくるじゃろうて。この件の事はとりあえずはカントーのリーグを信じて自分のことをやりなされ」
「ハハハ……それはまぁ。そうですね」
オーキドとはその後も二言三言話して別れた。
―午後8時16分　同所　エントランス―
パーティーはその後いくつかの座興などを挟み、8時頃に終了した。
サカキは数人のトレーナーと共に外に出ようとしていた。

「はぁ～。本当疲れた……。でも色々勉強になったな」
「うんうん。少しだけ視野が広がったような気がしますねぇ。あ、先輩これからどこか飲みにいきます？」
「おー。いいねぇそれ！　リーダーもどうですか？」
取りまとめ役にあたるトレーナーがセンリを誘った。他のトレーナーたちも同調して二次会の流れができつつある。
「いや。すまないが今日はいい」
「ええどうしてですか？」
「ちょっとした用事があるんでね……。君たちだけでやっててくれ」
センリはすまなそうな表情でトレーナーに言う。
「そうですか。それじゃあ仕方ありませんね……」
「明日もあるんだから、程々にな。それじゃ」
そう言ってセンリはスタスタと外に出た。
―午後9時　居酒屋―
センリはその後、オーキドとの会話で不審を感じたのか目立たないよう変装して尾行をしていた。
研究者たちはどうやら仲間内で二次会をしているようでその中にはオーキドもいた。

そして彼はやがてトイレに立った。無論センリもついていき、個室に入る。
「やぁ。折り返しが遅れて悪かったの。ワシじゃよ。オーキドだ」
センリはおそらくさっきの電話の続きだろうと考え、耳をそばだてる。
「うむ……。その通りじゃ。それでいい……うむ……」
オーキドはしばらく相槌を打ち続けた。
「疑り深い御仁じゃのう。ワシは何度も言うとおり協力すると言っとるのじゃ。そこまで言うのなら近いうちにサカキ殿と会っても良いのじゃぞ?」
センリはこの言葉に目を丸くした。
聞き間違いでも嘘でもない。オーキドはロケット団に協力するつもりである。
「それに、もうアレは見たのじゃろ? あの名義は間違いなくワシのものじゃ。若い頃よく使ったものよ」
わざわざ偽名を施してまで接触を試みている。センリの心中は疑問でつきなかっただろう。
「うむ。分かった……そういう事で良い。では、またの」
そう言ってオーキドは電話を切り、そのまま手を洗ってトイレから出て行った。
センリは今回の電話を以て確信を深めた。
にわかには信じがたいが、ポケモン研究会の最大の権威である博士が真逆であろう組

織に寝返ろうとしている。と。

――

あれからセンリはオーキドの身辺やロケット団について徹底的に調べた。迷惑はかけられないと一人で慎重に慎重を期して執念深くオーキドを洗った。

そして――

―11月7日　午後5時　コガネシティ　コガネ大学前―

センリは直談判の為にこの日、コガネ大において講演会を開いていたオーキドを待ち伏せた。

講演会終了からしばらくしたこの時間にオーキドは大学の関係者用出口から出てくる。右手には年季の入った茶色のカバンを持っている。

「どうもこんにちは博士」

センリは帽子をとって軽く頭を下げた。

「センリ君か。こちらこそ」

オーキドは返礼をする。

「博士、今日は折り入ってお話があるのですがお時間は宜しいですか?」

「すまぬのうセンリ君や。これからワシは用があるのじゃ。また今度での」

そう言ってオーキドは笑みを浮かべながらセンリの横を通ろうとした。

「ある組織に、その書類を渡すつもりですね？」
センリは鋭い口調で言う。
オーキドは先程までの笑みを消し、一転険しい表情になった。
「ほう……。どういう事かの？」
オーキドはセンリの前に戻った。
「ここでは憚られる話です。場所を変えましょう」
―午後5時30分　コガネシティポケモンジム　応接間―
センリは予めこの時間帯には誰も残らないようトレーナーには言っており、一対一で話すことにしていた。
応接間のテーブルにセンリとオーキドは向かい合って座る。
「単刀直入に伺います。博士、ロケット団と接触するつもりですね？」
「ホッホ。何の話かのう？」
「とぼけないで頂きたい。調べはすべてついております」
オーキドは表情一つ変えずに話し続ける。
「そこまで言うのであれば何か証でもあるのかのう？」
「失礼ながらここ一ヶ月博士の動きを探らせていただきました」
そう言いながらセンリは机上に写真を並べる。センリは自分でも調べつつ、興信所の

知己を通じてオーキドを探っていた。
　写真にはロケット団の幹部と対面している場所や、シルフカンパニー内の廊下を闊歩している所などがおさめられている。
「博士。十分でしょう。このような事はおやめください」
「……」
　オーキドは写真を凝視しながら黙している。
「貴方がこれまで築き上げてきた名誉すべてが水泡に帰すことになりますよ?」
「……」
「博士。聞いて」
　センリが言いかけたところでオーキドは突然笑い声をあげた。
「ホッホッホッホ……」
「笑い事ではございませんぞ」
「いつから目をつけておった?」
「一月ほど前からです」
「ほう。そんな短期間でここまで掴むとは流石はリーダーだのう。たまげたわい」
　オーキドは相も変わらず笑い続ける。
「博士。真剣に聞いてください。このままだと私はリーグに訴えでなければならないの

ですぞ」
「それが？」
「リーグと研究会のよしみですから、ここで思いとどまるというのであれば内々で済ませることもできます。しかし、もしこのままロケット団と通じ続けるの言うのであれば」
　センリはモンスターボールを手にする。
「リーグの一員として貴方を討たねばなりません」
「討つとな？」
「貴方を強制的に拘束し、速やかに然るべき場所にお連れせねばならないのです。そうとなれば、内々に済ますというわけにはまいりませ」
　オーキドは先程よりも大きく笑った。
「拘束？　訴える？　そのような事でワシが怯むとでも思っておるのか？」
「何ですと？」
「全てはこのために粛々と演じ続けたこと……。今更こんな地位などなくなったところでやめはせんわい」
「それでは博士はあくまでも引き下がらないということですか？」
　オーキドは静かに頷く。そしてこうも付け加えた。

「まあ……じゃがこれでは貴様もここまでやった甲斐がなかろう。一つ取引をせんか？」
「ふざけないで頂きたい。取引などする余地は……」
「まあ聞きなさい。ワシと勝負をせぬか？」
「はい？」
　センリは目を見開かせた。
「なぁに勝負と言ってもそちらの得手とするポケモン勝負じゃ。もしワシが負ければ大人しくこの件については手を引こう」
「……」
「但し、もしワシが勝てばそちらが手を引いてもらう。ただそれだけのこと」
「戯言を申さないでいただきたい。そのような事は受け入れられるはずがないでございましょう」
　センリは即座にそう否定した。
「元々そのつもりで来たのじゃろう？　リーダーがわざわざここまで来るということはそれを用いてワシを捕まえるつもりじゃったのだろう」
　オーキドはすべてを見透かしているかのような口ぶりで言う。
　センリはしばらく黙した後

「わかりました。そこまでご所望であるのならば受け入れましょう」
モンスターボールを構えた。
「ホッ。最初から素直にそうしておればよかったものを。まぁ良い。いざ参ろう」
センリとオーキドは場所を変えてフィールドで勝負する。
センリは予想外にも手強いオーキドにやや苦戦するも3体を残し勝利した。
―午後7時　同所　フィールド―
センリはケッキングを戻した後に言う。
「以前は高名なトレーナーだったとは聞いてましたが未だここまでの強さを持っているとは意外でした……。しかし、約束は約束です。手を引いていただきましょうか」
オーキドは倒れたポケモンを戻した後うつむいたままである。
「クッ……。このワシが……まさか……リーグの尖兵ごときに負けるなどっ……」
失意のあまり唇が震えている。余程悔しかったようだ。
「博士。勿論これで済むなどと思ってはいないでしょうね？」
「何？」
「言ったでしょう。貴方を拘束し、事の次第をすべて公にしてもらうと」
センリはコツコツと靴音を建てながらオーキドに近づく。
オーキドはすぐに向き直った。

「ホッ……。何を血迷った事を言っておるのじゃ」
「貴方に言われたくありませんよ」
「よく聞け。ワシは手を引くとは言ったが拘束に応じるとは言っておらん」
　センリはオーキドの目前に立ち、首を横に振る。
「そんな屁理屈は通りませんよ。拘束と手を引くことはワンセットです。さあ、私と来てもらいましょうか」
　センリはオーキドの腕を掴むが、すぐに振りほどいた。
「博士。往生際が悪いですよ」
「やむを得ぬの。最後の手段じゃ」
　オーキドはカバンからラップトップを取り出し、センリにある映像をうつしだそうとした。
「今更何をしようと言うのです」
「まあ見ておれ」
　映し出されたのはセンリの住んでいるアサギのマンションであった。向かいから撮っているのか上から彼の住む家のベランダが見えている。
　ちょうど今は妻が植栽に水をやり、息子のユウキがベランダでくつろいでいるのがうかがえる。

これを見たセンリは顔色を変えた。
「博士……これはいったいどういうつもりですか?」
「流石に察しがいいのう。もしこのままワシを連れて行こうと言うのならば……二度と君の愛する身内には会えなくなるじゃろう」
「何ですと……」
「君がワシに目をつけている事は薄々勘付いておったからのう。逆手に利用させてもらっただけの事よ」
センリは暫くうつむいた後、決然とした表情で返す。
「リーグの一員の家族として、妻も息子も相応の覚悟をしているはずです。そんな程度の脅しでは屈しませんよ」
「ほう。そうか。分かった。君があくまでそういうつもりなら仕方がないの」
オーキドはコートのポケットを一度叩いた。
すると男たちは5人ほどの体制でセンリの家の周りを固めるべく移動している。
センリは脂汗をかいている。
「センリ君よ。これが最後のチャンスじゃ。このまま家に帰るが良い」
オーキドはポケギアを取り出し、通話モードにする。
センリは黙したままだ。

オーキドは相手に断った後、電話を下げてセンリに最終警告とばかりに言う。
「ここでワシが相手に対し、かかれと言えば、君の大切な人は二度と帰ってこれぬ。それどころかこの世のものでないほどの辱めを受けることとなるぞ？」
「……」
数分ほどの沈黙の後、オーキドは深くため息をつく。
「分かった。かわいそうだのう君の家族も。一人の下らぬプライドのせいでこの後の人生は悲惨なものになるのじゃからな」
一笑に付した後、彼はポケギアを耳に当てる。
「やめろ！」
センリは思わずポケギアを持つ彼の手首を掴んだ。
「ん？」
「要求は飲む。だから、やめてくれ」
オーキドは計画通りとばかりにニヤリと表情をほころばせた。反面、センリは苦虫を噛み潰したような表情である。慚愧に堪えない心持ちなのだろう。
「作戦は中止じゃ。戻るが良い」
そう言うと男たちは散っていった。
「懸命な判断じゃ。センリ君。家族を守る立派な大黒柱じゃのうホッホッホッ！」

オーキドはこれまでにないほど高笑いをする。

「くっ……」

センリは憎悪の念からかオーキドから目をそらし続けている。

「安心せい。約束は守る。この件については手を引く」

オーキドはセンリの肩を叩く。

「だが、もし君がこれから先、ワシを告発するような動きを見せれば……君は家族に二度と会えぬ。それだけは努々忘れるでないぞ」

その後、オーキドとセンリは約定を交わし、オーキドはジムから出て行った。

――

その後、オーキドによる差し金でコガネシティはリーグに対し推薦状を提出。推薦されたアカネもリーダーとなることを受諾した為、リーグの審査を経てジムリーダーとなった。

一方センリは元々の任地のアサギではなくまた空きが出たトウカシティに辞令が下る。これもまた地域の圧力にみせかけた間接的なオーキドの嫌がらせである。あまりにも突然なリーグの措置にリーグ内部では困惑の声が見られたがそれもやはり時間が経つと薄れていった。

センリ自身もオーキドの事は時間が経つと少しずつ忘れていったが……。

―２０１３年　８月２４日　午前１０時　トウカシティ　ポケモンジム―

朝起きるとすぐに開くのを待ってポケモンジムに入った。

いつもの通り快調な様子で破っていったが。どうにもトレーナーたちに元気がない。

不思議に思ったエリカが次がリーダーだと言うので聞いてみることにした。

「あの……なんだか皆さん元気がないようですがどうされたのですか？」

「え……あぁ。リーダーがね……」

「リーダーってセンリさんですよね？」

レッドが尋ねる。

「そう。こうしてジムはちゃんと開いてはいるんだけどどうも暗いというか……。元々地味な人とはいってもここ最近は見てて心配になるくらい」

トレーナーは暗い表情で話す。

「やはり……お悩みごとがあるのですね？」

「そうなんだろうけど……。私達が何聞いてもごまかすばかりでねぇ。こっちも気を使うよ本当……」

その言葉にはやや愚痴めいたものも伺える。どうやらセンリに気を遣ってあまり明るくとはいかないようだ。

―同所　リーダーの部屋―

センリは存外穏やかな様子で迎い入れた。

「よく来たな。少し待ちくたびれていたぞ」

しかし、その顔にはクマが見え、血色は良くなくやや憔悴めいたものがうかがえる。

これではトレーナーたちが心配に思うのも無理はないだろう。

「あの……センリさん。どうかされたのですか?」

エリカが尋ねる。

「あぁ。最近少し寝不足でな。歳のせいだろう。気にすることはないよ」

とセンリはやや表情を崩して返す。

「本当にお歳のせいだけですか……?　トレーナーの方も気にかけておられましたわよ」

「そうだ。全くエリカはそういうのは相変わらずだな……ハハ」

センリは笑ってみせるがやはりどこか力がない。

「あの……」

黙していたレッドがセンリに話しかける。

「ん?　どうした」

「エリカはセンリさんのことずっと気にかけていて……。何か悩みがあるんじゃないか

と思っているんです」
「ふぅ……」
　センリはため息をつく。
　そして暫く考えた後
「どうしても、聞きたいのか？」
　と尋ねる。
「はい。何か私に出来ることはないかと……」
「そうか」
　とセンリは下をむく。
「どうしても聞きたいならば、勝負の後にしろ」
　と、センリは切り捨て、モンスターボールを構える。そこからは何者も構うなと言わんばかりの気迫が伺える。
「余程触れられたくないみたいだし、やめておいた方が」
　レッドはエリカに耳打ちする。
「た、たしかにそのようですけれど……。どうしても聞かない訳にはいかないような気がしまして」
「どうした？」

モンスターボールを出そうとすら見せない二人を見てセンリは促した。
「いえ。わかりました。では、いきますよ！」
二人は耳打ちをやめ、モンスターボールを取り出した。
センリはエテボースとムクホーク。エリカはモジャンボを、レッドはカメックスを繰り出した。
「エテボース。モジャンボにほのおのパンチ」
エテボースはモジャンボに炎を纏った拳で突き飛ばす。
不一致技で有るためダメージは三割ほどと大した痛手にはならなかった。
「ムクホーク。モジャンボにブレイブバード！」
モジャンボに一閃の弾丸と化したムクホークが襲いかかる。避けきれずまともに食らってしまい体力の九割五分を失うという致命的なダメージを受けた。
一方これは反動ダメージ技の為、ムクホークも相応の痛手を負った。
「カメックス。吹雪！」
レッドは大技でかたをつけようと試みる。フィールドに凍てつかせる吹雪が吹き荒れた。
ムクホークはまともに食らってしまい、反動の効果も相まってか一撃で倒れる。
エテボースはすんでの所で上手く避けた。

「モジャンボ、根を張りなさい」
エリカは持久戦を選択。モジャンボはツルを這わせてその場に鎮座した。
センリはムクホークを戻した後、新たなモンスターボールを繰り出した。
「行け、ハピナス！」
「エテボース。もう一度！」
エテボースはもう一度炎を纏った拳を繰り出す。モジャンボはまともにくらい、倒れた。
「これであいこだな……。ハピナス！　瞑想」
ハピナスは目を閉じて神妙そうな表情をした。
「カメックス！　地震だ！」
とりあえずレッドは効率的にダメージを与えようと地震を選択。
ハピナスは五分の一程くらい、エテボースは三割ほど削れた。
――
レッドは二体、エリカも二体を失ったが、どうにか勝利した。
「うむ。ここまで待った甲斐がある良い勝負だった。その功に対し、このバランスバッジを授けよう」
「ありがとうございます！」

ホウエン地方5つ目のバッジを二人はいつもの通り恭しく受け取った。
「これでバッジは5枚か……。順番からいくと次はヒワマキだな」
センリは二人がバッジをケースに収めている姿を見ながら言う。
「そうですね。やはりナギさんって強いんですか?」
レッドが尋ねる。
「ああ……ホウエンのリーダーの中ではトクサネの双子、フウ君とランちゃんと並び称されるほどの強さだ。私とは10回程戦ったが4回勝って6回負けている。見事に回を重ねるごとに腕を上げてるよ」
「へぇ。センリさんでもそれ程苦戦なさるのですか……」
「なんといってもあの雪柳斎殿の孫娘だから……。おそらくヤナギ翁が亡くなれば彼女がその足跡を踏む事になるだろう」
その名前を聞いて二人は目を丸くした。
「えっそうなんですか!?」
「そうだ。まあ孫といっても事故で幼いころに両親を亡くして以来育ててもらったようだから彼女にとっては第二の父親かもしれないがな」
「なるほど……」
「彼女は本当に強い。心してかからないとヤナギ翁の二の舞いになりかねないぞ。気を

つけてな」
　センリはエリカに目線を合わせつつ、レッドの肩を叩いた。
　レッドはここまでヤナギに一回負けたことが筒抜けになっていることにやや気恥ずかしさを感じていた。
「あの、センリさん！」
　エリカがこのままでは帰されてしまうのを危惧してか、思い切ったような様子で言う。
　センリがエリカの方を向く。
「話して頂けませんか……。そこまで何を思い詰めていらっしゃるのか」
「全くまたその話か……」
　センリは辟易したとばかりに首を横に振る。
「どうしても話したければ勝負の後にと仰せになったのはセンリさんの方ですわよ？」
「はぁ……」
　センリは一つため息をついた後、二人にゆっくり背を向ける。
「何を聞いても後悔しないか？」
「はい。センリさんから何を聞かされようと受け入れる心はできておりますわ」
　センリは後ろを向いたまま顔のみレッドに目配せをする。

「君もか？」
「は、はい。大丈夫です」
レッドはエリカに釣られたようにそう返事した。
センリは目線を部屋の外に遣る。縦格子の後ろには景色がうかがえる。
「分かった。そこまで言うのであれば話そう。君たちにも関わりがないとはいえない話だからな」
そう言うと、センリは決意をした表情で二人の方になおった。
誰も近づけるなとトレーナーに釘を刺した後、改めて神妙な様子で話し始める。
「今から四年前……私は……ロケット団を。いや、オーキドを見逃してしまったんだ」
二人はその名前を聞いて愕然とした。あの騒動にオーキドが関わっているなどというのはあの時エンジュに居た面々のみ知っている事である。
「それってどういうことですか？」
その後、センリは滔々と話し始めた。
オーキドとの関わりからトウカへの異動まで彼の知る限りにおいて詳らかに説明した。
「私一人の意地の為に……エンジュ騒乱は引き起こされたようなものだ」
センリは重い表情で語る。

「なるほど……。センリさんが思い悩まれているのはその為だったのですね」
　エリカは思いの外冷静に返した。
「そんな。センリさんに責任はありませんよ！　エンジュの騒乱はあくまで博士自身がやったことですよ？　それに、博士があんな行動に出るとはエスパーでもなければ見抜けませんよ」
　レッドは真っ先にそうフォローした。
「もしあの時博士を告発していれば、あの惨劇は回避できたかもしれないだろ」
「し、しかしその時は……」
「その場合は家内とユウキを見殺しにする羽目になる」
「どちらにしろ私にとっては辛い結果に終わる。あの時点で考えてもロケット団への内通者を私情で黙っていたには変わらないんだからな。停職は免れん」
「センリさん」
　エリカが再び口を開く。センリは彼女の方に視線を変えた。
「貴方のしたことは今となってはエンジュの人々を恐怖に陥れるものであったということ。これは疑うべくもありません」
「おいエリカ！」
「センリさんは私と同じくリーグの一員です。ジムリーダーであるならば、このような

行動をとるべきでなかったことは自明ですわ。センリさん。貴方は私に対しリーダーは常に己を捨て、公に生きよと仰せになられたはずです。それなのに……それなのにどうして！」

彼女は訴えかけるかのようにセンリを責める。

「やめろよ。センリさんだってそんな事くらいわかってるはずだろう。落ち着けよ」

レッドはそうエリカを宥める。

「そうだな……。私は教育者としてやってはならないことをした。己こそが君に常々言って聞かせたことをするべきであった」

センリはそういった後、エリカに頭を下げる。

「しかし、エリカよ。それを考えもしたがそれでも……どうしても出来なかった」

「どういうことですか」

「憧れだったリーダーとなる夢を叶える為に5年間握っていた教鞭を捨て、ここにたどり着くまでの険しく、苦しい時間を共に過ごし、心と体の支えとなってくれた妻を……。新米のリーダーだった頃、色々あって荒んだ心を健やかな成長で優しくほぐしてくれたユウキとを失うことはどうしても我慢ならなかった」

「わ……私にもかつて家族がおりました故、お気持ちは分かっているつもりです。しかし」

「いいや。分かっていない！　夫として、子を持つ親として……。血反吐を出してでも守ってきた人を失うという事がどれだけ辛いことなのか。耐え難いものなのか。それが君にわかるというのか!?」

　センリのずしりと重い質量を伴った反論にエリカは黙するしかなかった。

「すまなかったね。急に取り乱して。……。これはリーダーとしてあるまじき事。どう言い繕うとも……私のしたことはいずれ罰を受けなければならない事だ」

　センリは横を向く。

「センリさん……」

「こうして君たちが来た事は最早天命なのかもしれないな……。最早ロケット団はこの国におらず怯えることもなくなったというのに今までリーグに打ち明ける踏ん切りがつかなかったんだ」

「ということはもしや……今からリーグに洗いざらいお話をするという事ですか?」

　エリカが尋ねる。

「そうだ。もはや私には……エンジュで苦難を強いられた百万にも及ぶ人々の恨みつらみをこのまま一人で黙って背負うのは忍びないことだ」

「賢明な判断だと思います。センリさんにもやむにやまれぬ事情があったことは私も承知しております故、出来る限り軽い処分になるよう尽力致しますわ」

エリカはセンリの眼を一点に見つめて言う。
「いや。君にそんな迷惑は……」
「いえいえ。やらせてくださいまし。お願いします」
エリカは頭を下げた。
「しかしこれは私の問題だから」
センリはエリカの協力を拒んだが、レッドが間に入る。
「センリさん。エリカは過去に貴方から教わったことについて深く恩を覚えていて、どうしてもその恩を返したいと考えているんです」
「それは当然のことをしたまでだ。恩と思われる筋合いは……」
「しかしそれでも彼女は何かしらの形で報いたいと考えているんですよ」
レッドにつづいてエリカが話す。
「このような事情があったことを私は当時同僚でありながら気が付かなかった事にも責めがありますわ。どうかせめてものお返しのつもりでやらせてはいただけないでしょうか……」
エリカはまた一段と頭を下げた。
センリはしばし間を空けた後
「わかった。そこまで言うのであれば頼んだ」

と返した。

――

その後、センリはその足でリーグ支部に赴き、三日後にリーグ理事長のワタル及びサイユウリーグ理事長のミクリと面会して事の次第を全て話した。

事はすぐさま理事会議にかけられ、理事の間でも意見が分かれた為三日間連続で会議が開催された。

―８月２９日　午後４時　１１８番道路―

レッドとエリカは理事会議に対し、嘆願書を提出した後トウカシティを発った。

そして、１１８番道路を通っている最中にエリカのポケギアに電話がかかる。相手はワタルだった。

挨拶もそこそこに彼は本題に入った。

「処分は停職一年と決まった。もうじきマスコミにも公表されるだろう」

「まあそんなわざわざ……ありがとうございます」

彼女は丁寧な様子で返す。

「あれだけの嘆願書を書いてくれたんだ。君には真っ先に伝えなきゃと思ってね……」

「それはどうも……。しかし些か処分が重すぎではありませんか？　センリさんは脅されていたんですよ？」

停職はリーグ法に定められた処分の中ではちょうど真ん中に位置する重さの刑である。リーダーとしての職務は一切行えず、自宅へ謹慎していなければならない。しかし、それより上の剥奪処分とは違い、代理を立てる事でジムは続けられる為期間終了後に業務を再開することは可能である。

「脅されていたとはいえ、これだけ長期間リーグへの通告義務を怠り、しかも最終的にはロケット団の復活を招いてしまった事があまりにも大きすぎるんだ。中には永久剥奪が妥当だって唱える人もいたくらいだしおさえるのが大変だったよ……」

ワタルは心労が伺える声で話す。

「し、しかしロケット団によって先の騒乱を招く事など誰も予測できないではありませんか」

「もっと早く言っていれば手を打てた可能性があった。いずれにしても罪の重さは変わらない」

「そ、そうですか……」

「しかし、当人の反省や君の言うように脅されてやった事。後は君を始めとする五千を超える嘆願書。これらを鑑みてリーダーとしての再出発のチャンスは与えようとこういう処分になったわけだ」

「わかりました。ワタルさん。ありがとうございました」

その後も数分くらい話してワタルとは電話を切った。
「処分が決まったらしいな」
レッドが語りかける。
「ええ……。一年の停職処分だそうです。私の力が及ばないばかりに申し訳ない限りです」
「電話から聞く限りじゃお前のおかげで刑が軽くなったそうじゃないか。十分だと思うぞ」
「そうでしょうか……」
再びエリカのポケギアが鳴る。次はセンリだった。
また挨拶もそこそこに本題に入る。
「処分の話はもう聞いたか？」
「はい……。厳しい罰になりましたわね」
「いや。当然の罰だ。謹んで受けるつもりだよ」
センリの口調は実に神妙な様子である。
「私の力が至らないばかりに申し訳ありません」
「君がトウカで署名に駆け回っていたことは知っている。嘆願書のうち１０００は君が集めたものだってね。私の為にこれだけ動いてくれたことは本当にありがたく思って

いるよ」

センリは処分が下るまでミシロにて自主的に謹慎していた。

「そうですか……。センリさんがそう仰せならば良かったですわ」

「一年は長いが……。この間に自分のしてきたことや償いに何が出来るか考えるつもりだ。今まで忙しかった分じっくりと腰を据えて向き合う」

「そうですわね……。良い試みだと思います。御家族ともよくお話すると良いと思いますわ」

それからもいくつか話し、センリとの通話を切った。

「センリさんなんて言ってた?」

「自分のしたことを悔い改め、きっちりと謹慎の罰を受けると。そして私にありがとうと言ってくださりましたわ」

エリカは肩の荷が下りたかのようにスッキリとした表情で答える。

「そうか……センリさんに気持ちが伝わってよかったな」

「はい。これで十分に恩を返していれば良いのですが……」

「十分だと思うぞ……。さて、じゃあ行くか。ヒワマキまではまだ遠いぞ」

「ええ。参りましょう!」

こうしてエリカとレッドは気持ちを切り替えて、118番道路を進んでいった。

因みにマスコミの公表ではセンリはあくまでロケット団の犯行を知りながら黙秘していたという形で報じられた。オーキドとの関与については証拠がないとして例のごとく一切話されなかった。

――

―8月25日　某時某分　某所―

「今にして思えば良き思い出よ……」

オーキドはそう言って過去の話を締めくくった。

「しかしオーキド殿よ」

「ん？」

「別にそんなセンリとの約定など無視して我々と同道してもよかったのではないか？脅しは効いているのだから」

サカキはやや不興顔で言う。やはり4年前に救援に来なかったことが心の何処かでは恨めしいのだろう。

「馬鹿を言うな。ワシはの。約束を破るということは大嫌いなのじゃよ」

オーキドは快活に笑いながら言う。

「そうか……。それにしてもオーキド殿もしくじったな。いくらリーダーとはいえ負けてしまうなど」

「あの当時はトレーナーとして活躍していた過去を過信していたからのう。じゃがおかげでリーグの力を改めて認識することが出来た……」

オーキドは最後の一口のステーキを頬張った。そして口と手を拭いた後に一つのモンスターボールを取る。

「このポケモンたちを捕まえようなどと思ったのも……。あの男のおかげでもあるのじゃ。ポケモンを改造するなどということも当時のワシでは僅かばかりに残った良心で躊躇しておった」

「なるほど……いわばセンリが背中を押したようなものだったのだな」

「左様。今の我らがあるのもある意味ではセンリのおかげと言って過言ではないくらいじゃよホッホ」

オーキドは軽く笑ってみせる。

「そうか。では礼に引き込んでみるか？」

サカキは冗談半分に言う。

「いや。もう必要ないわい」

そう言ってオーキドは赤ワインを最後の一口まで飲み干した。

―第十九話　父の決断　終―

第二十話　本音

―9月4日　午後4時　119番道路―

9月に入り、暑さも少しずつ落ち着きを見せ始めた頃。119番道路では折からの長雨が降っておりレッドとエリカはそれに直面していた。

「雨が鬱陶しいなぁ……」

「あら、そこに建物がありますわ。暫し雨宿りさせていただきましょう」

―天気研究所―

天気研究所の入り口は庇が設けられており、人が二人入る分には十分な広さがあった。

「ふう……やっと落ち着けますわね」

「結構長かったな。いつ止むかなぁこれ」

雨は止むどころか勢いを増すばかりである。

「あら、なんだか中が騒がしいですわね？」

彼女が背後を振り返り、レッドもそれに続こうとしたその時。

アクア団の団員が蜘蛛の子を散らすように退散していく。

その中にやや派手なパーマをかけた女幹部が二人を見た。
「あれ……あんた達……」
「あ！　伝説の夫婦ですよ！　くそっ。こんな所まで来やかってからに……」
従者と思われる下っ端が二人を睨む。
「へぇ……。思ったより可愛い子たちだこと」
「何ですか貴女は！」
レッドが突き放すように言う。
「あたくしはイズミ。アクア団の幹部よ。色々言いたいことはあるけど今はそれどころじゃないからじゃーね！」
そう言って脱兎のごとく逃げていった。
「なんだあれ……」
「全く懲りない人たちだ……」
そう言いながら出てきたのは白い帽子を被った少年であった。
「あ、君は……」
レッドは思い出しかけたが先にエリカが言う。
「ユウキさん！　お久しぶりですわ」
「レッドさんとエリカさん。こちらこそ……」

三人共軽く礼を交わした。
「あの、今のは……」
「ああ。あのアクア団って組織がこの研究所の資料とポワルンという天気を操れるポケモンを奪い取ろうとしていまして……。丁度それに出くわしたから倒したまでです」
「天気を……？　どうしてですか？」
「アクア団という組織は水ポケモンに住みよい世の中を作るために海を広げ、その為に活動している組織です」
「だから天候を操作できるポケモンは御誂え向きという訳ですね」
エリカはそう言って納得した。
「そういうことです。おくりび山にも目をつけているみたいだし……どうにも気にかかります。あとアクア団の対抗組織にあたるマグマ団も動き出してますし」
「この地方もきな臭くなって参りましたわね……」
彼女は髪を手で梳いている。
「あの、センリさんはあれからどうしていらっしゃいますか？」
彼女が続けて心配そうに尋ねる。
「処分が出た後すぐにミシロへ帰り、両親と久しぶりにゆっくり話し合いました。父さんは終始穏やかな様子でしたよ。今は一日中写経や読書などをして過ごしているみた

いです」
「左様ですか……。何か私に出来ることがありましたらいつでも仰せになってくださいとお父上に宜しくお伝えください」
「わかりました」
それから二言三言話してユウキとは別れた。
「良かったな。センリさん気力を失ってなさそうで」
「ええ。もしこの件で気を病まれでもしたら……と気がかりでしたが、これで本当に私も区切りをつけられます」
彼女はそう言って満足した様子で顔をほころばせた。
―9月5日　午後4時　119番道路―
翌日、ヒワマキシティを目前に控えた頃、久々にある人に出会った。
「あ！　レッドさんにエリカさん！　お久しぶりです」
「ゴールドさん！　こちらこそまぁ……」
エリカは恭しく頭を下げる。ゴールドも自転車から降りて二人に向かって礼をした。
「へへへ……」
ゴールドは脂下がった表情である。緩みきっており、最後に会った時より様子が変わっていた。

「ゴールド……。お前どうしたんだよ。随分楽しそうじゃねえか」
「いやー。最近彼女がベッタリで……。もうほんと毎日が楽しくて仕方ないですよ」
傍目から見るのも恥ずかしいくらいの惚気ぶりである。
「ゴールドさんがお付き合いしている人は確か……」
「カスミさんだよ」
レッドが耳打ちした。
「あぁ……」
エリカは全てを察した表情だ。
「この前もカントーに呼び戻されて三日間ずーっと……へっへっへ」
「幸せそうだな本当……」
「あの……。確か数ヶ月前にウツギ博士から伺った限りですとホウエンでは五枚でしたよね？　ナギさんには」
「あーあの人ね……」
ゴールドは途端にそっぽを向いた。
「本当洒落にならないくらい強くて……。さっきも行ってきたんすけどもうこれで七連敗ですよ。流石はあのヤナギさんの孫だなぁと」
「な……七連敗!?　お前よくそんなこと」

「そんで呆れられてもっとマシな戦いできるようになるまで来るな！　って叱られちゃいましたよへへへー」

　ゴールドははばかる様子もなく締まりのない表情で喋り続けた。

「この前気分転換でミナモまで行った時、トレーナーファンクラブで言われてたことなんですけど、ナギさんって各地方に一人いる五大難関の一人らしいっすよ」

「五大……難関」

「今はまだトレーナー内の不文律みたいなものですから、厳密に誰かは決まってないんすけど、ジョウトはヤナギさん、カントーはグリーンさん。ここホウエンのナギさん。シンオウのトウガン、そしてイッシュの……シャガ。この五人がそれにあたるというのが定説になりつつありますねぇ。特にジョウトとイッシュの難関は二強……」

「おい」

　レッドが意気揚々に話しているゴールドを遮る。

「お前、かなりたるんだなぁ？　彼女にうつつ抜かしてヘラヘラしてんじゃねーぞ！」

「いやいやいや。レッドさんだって似たようなもんでしょー。しかもいっつも一緒にいるし……。羨ましいなぁもう」

「何だと？」

　レッドは目を怒らせる。

「ゴールドさん。貴方と同類にしないでいただけますか？」
「へ？」
　彼女は明らかに怒気を含んだ声色でゴールドに言う。
「私達二人は紆余曲折ありながらもリーダーを下し、順調に本分を達成しているのです。それに引き換え貴方はなんですか。カスミさんに溺れて腑抜けになられたのですか？」
「ふ……腑抜け？」
「本分を忘れて色に溺れ、負けたことをヘラヘラと笑いながら語り草にするのを腑抜けでなければ何だと申されるのですか？」
「え……えっとその……」
　ゴールドは小さくなってしまった。
「貴方のような牙を抜かれたトレーナーなどレッドさんの相手ではありませんわね」
　彼女は汚いものでも見るかのような目つきでゴールドを見る。
「そ、そんな……」
「ゴールド。お前、もう少し自覚を持てよ。俺と全世界の注目の中で戦うんだぞ？　しっかりしろよ！　それでも俺のライバルか？」
「貴方。このような方をライバルと言っては格を疑われるというものですわ。行きますわよ」

そう言ってエリカはスタスタとゴールドを突き放すかのように先に進んだ。レッドもゴールドを一瞥してそれに続いた。

ゴールドはあまりのことに自転車のハンドルを握ったまま立ち尽くすのみだった。

「ちょっと見ないうちにあんなに落ちてるとは思わなかったな……」

「貴方。これは他山の石として肝に銘じなければなりませんわよ。くれぐれもああはならないでくださいませね」

「ん……そうだな。まぁ俺にはエリカがいるから……」

レッドはそれ以上のことを言わなかった。

「フフフ……。しかし、あれだけ立派なお方だったゴールドさんをあそこにまでするだなんてカスミさんは相当のさ……いえ。なんでもありませんわ」

彼女はまるで自分が完全に勝利したかのような得意な表情で歩いていった。

翌日、二人はヒワマキシティへ入った。

ヒワマキシティ　ホウエン屈指の豪雨地帯。その為洪水を防ぐ為に植樹をする事が伝統になっており、全国第一の林業が盛んな地域でもある。

それに倣ってかツリーハウスが多く建てられ人々は森の中でのんびり暮らしている。

2つある航空大学のうち一つはここにあり、一度途絶えたものをナギが再建した。

―9月6日　午後1時　ヒワマキシティ　ポケモンセンター入り口―

ヒワマキシティに到着し、ポケモンセンターで回復を済ませると外に居たナギが直々に出迎えた。

「ナギさん！　お久しぶりです」

姿を見るとエリカは再会を喜ぶようににこやかな表情で受けた。

「こちらこそお久しぶり。かれこれ一ヶ月近くぶりになるかしらね」

「その節はどうも命を助けていただきありがとうございます」

レッドはナギに改めて礼を言う。

「いいのよ。当然のことをしたまで」

「それにしてもなんと言いますか凄い町ですね……。家がツリーハウスになってるとは」

「このツリーハウスの街は見栄えの良さは勿論のこと、豊かな森林を活用し、水害と風害から町を守るために先人たちが生み出した賜物よ」

ナギは自信を持った眼差しで話す。

「素晴らしいですわね。自然との共生は私達にとっては切実な課題ですがこれも一つの答えかもしれませんわ」

「フフ。そう言って貰えると嬉しいわ。さて、ジムまで案内しましょうか。ついてきて」

―午後1時10分　ヒワマキシティ　ポケモンジム―

二人はそのままジムの奥へと案内された。

「さて、改めて。私はナギ。ここヒワマキジムのリーダーであり、鳥使いよ。扱うポケモンは飛行タイプ。優雅に空を舞い、それでいて確実に敵の急所を衝く……そんな繊細で鋭敏な私の戦闘からどこまで逃れられるか楽しみだわ。ま、昨日のゴールド君みたいなものは勘弁してくださいませねっ。行って、ムクホーク！　チルタリス！」

レッドはピカチュウを、エリカはダーテングを繰り出す。

「ピカチュウ！　ムクホークに雷だ！」

ピカチュウは雷雲を形成して、相手めがけて稲妻を下す。ムクホークは察知したかのように素早く避けてみせる。

「は、早い」

「私も舐められたものね。この程度の雷では当たらないわ！　ムクホーク！　そのまま捨て身タックル！」

ムクホークは疾風の如くピカチュウの懐目掛けて突撃する。ピカチュウはもろにその一撃を食らって宙に高く浮かび、強く体を打ちつけ続ける。体力にして4割ほどを失った。

「チルタリス！　龍の舞！」

チルタリスは舞を踊る。
「ダーテング。ムクホークにしっぺ返しです」
ダーテングは倍加した攻撃を食らわせる。ムクホークは先程の反動を加えて合計で半分ほど体力を減らした。
「ピカチュウ。もう一回だ！　次はフィールド全体に！」
ピカチュウは再び電力を最大限放出させる。フィールドには次々と稲妻が下る。
「ムクホーク！　避けて」
ムクホークは雷撃の洗礼を次々と躱していく。
ピカチュウまでもう少しといったところで、ナギが指示を下す。
「そこからブレイブバードっ！　貫きなさい！」
ムクホークは背後に回って高度を上げ、力を稼ぐ。ジムの天井まで上昇し、稲妻を出すのに集中しているピカチュウに照準をあわせる。
「ピカチュウ！　後ろを見ろ！」
ピカチュウは振り返り、咄嗟に稲妻を下す。
不意を突かれたのか、進むのに集中していたのかムクホークは直撃を食らった。
前ターンの減少も相まって耐えきれるはずがなくそのままフィールドに伏せる。
「くっ……。戻って。ムクホーク」

ナギは少し惜しそうな表情をした後、ムクホークを戻した。
「チルタリス。もう一度」
チルタリスは再び舞う。
「ダーテング。チルタリスに岩なだれ」
チルタリスは岩雪崩の攻撃を受けた。体力が三分の1減った。
「行って、エアームド！」
エアームドが十分に手入れされた翼を誇示するかのように姿を現す。
「ピカチュウ！　エアームドに雷」
エアームドは先程のように飛び回って避けようと試みるが、鋼というタイプのせいか10発目で当たってしまった。体力にして8割ほどが削れる。
「チルタリス、ゴッドバード」
チルタリスはゴッドバードの準備か、羽を整える。
「ダーテング。チルタリスにしっぺ返しです」
チルタリスは倍加した攻撃を食らう。また三分の一減少して残すところ三割ほどとなった。
「チルタリス！　ピカチュウにゴッドバード！」
チルタリスはピカチュウの急所目掛けて怒涛の勢いで貫通する。攻撃を二段階積み、

その上飛行タイプ最強の大技の前に防御に劣るピカチュウが抗えるはずもなく一撃で倒れた。
「つ、強いな……。相性悪くても一回で倒れるなんて……」
「相性は周到な準備と時の運さえあれば乗り越えられるものよ。エアームド。ダーテングにブレイブバード！」
エアームドは即座にダーテングを突き飛ばす。体力を9割ほど削る。

――

エリカは3体を失い全滅。レッドも2体を失い、最後のリザードンも95%体力を失う満身創痍にしたもののどうにか勝利した。
「フッ……。見事なものね。伝説の夫婦たるものこうでなくては示しがつかないわ。このフェザーバッジ。あなた達二人に授けるわ。受け取ってちょうだい」
「ありがとうございます！」
こうして二人は6枚目のバッジを受取り、深々と頭を下げた。
「いやしかし流石はヤナギさんの孫ですわね……。血を分けているだけあって時々ヤナギさんと戦っている時を思い出しましたわ」
「そう……嬉しいわ。私にとってお祖父様は誇りだもの。でも……」
「でも？」

レッドが尋ねる。
「お祖父様は誇りであると同時に……大きな壁よ。雪柳斎の孫娘として……もっともっと強くならないといけないの」
「ナギさん……」
「私は貴方たちをギリギリまで追い詰めたけれど……。お祖父様は一度負かしているのよね。その点一つとっても私はまだ及ばないのよ」
「大きすぎる祖先の存在というのも……時には重圧ですわね」
彼女は思案深そうな表情をして言う。
「そうね……。さて、重い話はこのくらいにして。今日の夜、航空大創立記念のパーティーがあるんだけど……二人も来ない？」
ナギは変わって穏和な表情で誘った。
「あら……私達でも宜しいのですか？」
「いいのいいの。誰でも参加できるパーティだしね。それに、同じリーダーのよしみとして、強いトレーナーとは親睦を深めたいの。遠慮せずに来て」
―同日　午後７時３０分　ホテル　宴会場―
航空大創立６０周年のパーティーは航空大の身内は勿論の事、ヒワマキの市長から材木屋の店主まで幅広い人々が集まり、街全体で祝う雰囲気だった。

学長の式辞、続いて市長の挨拶、教授及びリーダーであるナギの挨拶の後、参加者同士での談笑となった。
「しっかしすごい人数だなぁ……」
「２００人程はいるでしょうか。しかし航空大とはいえ大学の創立記念のために市長まで来るとは……」
「いやだ貴方達知らないの？」
同じテーブルに居た女性二人グループの一人が話しかけてきた。見たところ４０代前後のおばさんである。一人はパーマでもう一人はメガネをかけている。
「はい？」
「ここの大学はねぇ。ヒワマキで二番目の産業になった航空業の柱なのよ！　昔あった大学をナギちゃんが中心になって建て直して、鳥使いを立派な職業人に育てる内国でたったひとつの大学としてこの街にとっては大事な大事な稼ぎ頭なわけ！」
「そうそう。しかもジムもここに誘致したわけだからもう市長もナギちゃんに頭上がらないのね！　学長に推薦された時は流石に辞退したけどこの街の最大の名士みたいなもんよ本当」
隣に座っていた同じくらいの年齢の女性が話している。
「へぇ……。私とそう変わらないのに大したお方なのですわね」

そうこうしているとナギが二人のテーブルにやってきた。
「ふう。お二人共ごめんなさいね。色々とお客の応対してたら遅くなって……」
「いえいえ全然気にしておりませんわ。ナギさんはお忙しい方ですもの」
「どう？　楽しめてる？」
ナギが相槌をうち、着席して尋ねる。
「ええ。皆さん和気あいあいとしていて心地よいですわ。ね、貴方？」
「ん……あぁそうだな」
レッドはやや気乗りしていない。
「あら。もしかしてこういう席苦手？」
「え……いやそんなことはないですよ。ハハハ」
図星な事を言われたレッドはそう言い繕った。
「そう。ならいいけど……悪いことしちゃったかしら？」
ナギはレッドの心中を察してかやや言葉に申し訳なさがある。
「いや本当に……」
「ナギさんの方はどうですの？」
エリカが尋ねた。
「私？　さっきまで挨拶回りで息をつく暇もなかったわ……。まぁ一通りすることは終

わったからこれからやらせてもらうわ」
「そんな私たちで宜しいのですか？　もっと近しい人との方が」
「同じ街の人となんかいつでも飲めるもの。私は貴方たちと飲み交わしたいのよ」
　ナギは表情を緩ませて言う。
「そういうことですか」
「あら？　エリカさんは飲まない方なのかしら？」
　ナギはエリカのグラスを見て言う。中身はリンゴジュースである。
「いえ。飲めないことはないですが夫はまだ未成年ですから……」
「あぁそうだったわね……でもいいじゃない。飲みましょうよ」
　ナギは軽快な様子で酒を勧める。
「ナギちゃん本当にお酒好きだものね～」
　向かいの席に座っていたメガネのおばさんがそう言う。
「うーん……」
　エリカは返答に困っている様子だ。
「いいじゃないか。飲みなよ。潰れたら俺が運ぶから」
　内心では酔ったエリカを見たいというのもあった。
「ほら、レッドさんもこう言ってるんだし」

「そうですわね……。わかりました。お付き合いしましょう」
そう言うとナギはにわかに表情を明るくする。
「よし！　それじゃちょっと待ってて」
そう言ってナギは会場に備え付けられている冷蔵庫から一本の酒瓶と2つの猪口を持って戻ってくる。
「私としてはやっぱりまずはこの地酒を飲んでほしいんだけど」
そう言いながらテーブルに『日州の雫』と名がつけられた酒瓶を出した。
「地酒ということはここの地域で造られたものということですか？」
「勿論！　うちの町には五種類あるんだけど私は特にこれを勧めるわ。口当たりがよくてすっきりした後味が実に良いのよ」
ナギは喜々とした様子で栓を空けながら話す。
「まぁそれはなんとも……。私はそういう味が好みなのです。是非とも一献いただきたいですわ」
「そうこなくっちゃ。ささ、どうぞ」
ナギはエリカの方に猪口を遣り、カバンの入れ物から徳利を出して酒を入れてから猪口に移した。
「ありがとうございます……あら。これはもしかして都城焼ですか？」

エリカは徳利と猪口を見て言った。
「そうそう！　よく分かったわね」
「いえいえやはりこの火山灰特有の茶色の斑点はこの辺りにおける焼き物の特徴ですので……」
「ふーん。博学とは聞いていたけどここまで来ると末恐ろしいわね……」
「ハハハ……」
レッドがから笑いをした。
「ま、とにかく飲んでみてよ」
「はい」
そう言ってエリカはお猪口の酒をゆっくり飲んだ。
「どう？」
「この鼻に抜ける芳醇な香りが実に心地良いですわね……。味もナギさんの仰せの通り実に爽やかなものです。しかし少々辛いですわね」
エリカはやや甘党寄りのようだ。
「出来る限り米と水しか使わないようにしているからそこは仕方ないわね……。このあたりの人は甘いお酒は好まないから」
「いえ。しかし私は好きですよ。何本かジムのお祝い事用に買おうかしら……」

「まぁ。嬉しいこと言ってくれるわね。それじゃ、私もいいかしら」
「あぁ勿論ですわ！　どうぞ」
と言いながら次はエリカがナギの猪口についだ。
「ありがと……。うん、やっぱり美味しいわね」
ナギは一口ですぐに飲んでしまった。
「ところで、航空大には滑走路があるみたいですけどよくこんな森の中で作れましたね……」
レッドが感心した様子で言う。航空大の事については式辞やパーティ前に外見を見た為それとなく把握していた。
「森の中だからこそ買収や税金が安く済んだり森がある程度防音の役割を果たしてくれるから騒音についてあまり考えずに済むとか色々と利点があるのよ。それに、実習には出来る限りあったほうがいいもの。力入れるわよ」
「なるほど……」
「あと、ここは全国で唯一、イッシュ地方との直通ルートを結んでいる空港としての役割もあるのよ」
ナギは二杯目の酒をつぐ。
「へぇ……あれ。てことは」

「そう。貴方達がイッシュに行く時はここから行くことになるわ」
「そうなのですか……。ナギさんはイッシュに行ったことがあるのですよね？」
「それはそうよ」
　ナギは答えると酒をまた飲み干す。
「イッシュ地方はどんな所です？」
「そうねぇ……。やっぱりあの国だからここことは色々スケールが違うわよ。道は広いし、建物の外観もここことは勝手が違うわ。あと、人々はエネルギッシュでとても外向的ね」
「なんとも興味深いところですわねぇ……待ち遠しいことですわ」
　レッドはジュースを飲みながらまだ見ぬイッシュの情景を思い描いていた。
「イッシュへ向かう時はナギさんが操縦なさるのですか？」
　エリカが尋ねる。
「その時は私だけでなく渡航先のフキヨセシティジムリーダーのフウロが私と同じく操縦士の資格を持ってるから同行する事になると思うわ」
「ジムリーダーって事は俺たちと戦うことになるって事ですか……。どんな人なんです？」
　レッドが興味津々に尋ねる。

「彼女とは個人的にも仲良くして貰ってるんだけど、なんというか天真爛漫をそのまま体現したような感じの子よ。太陽みたいに明るくて、でもどこか抜けてるところがあって……。まぁ総評するといい子なのは間違いないわ。パイロットとしてはまだまだひよっこだけどね」

「へぇ……。トレーナーとしての実力はどうなんです？」

「まぁ中の中といった所ね。良くも悪くもリーダーとしては平均的な力を持ってると思うわ」

ナギはそう簡潔にまとめる。

「そうそう。この前二人でヒウンシティで記念撮影したのがあるんだけど、見る？」

二人は同調し、頷いた。

ナギは手帳を取り出すがくしゃみの為に口を覆った。

すると、机にひらひらと一枚の写真が振ってくる。

「これは……」

写真にはどこかの観光名所で撮られたツーショット。

左にいるのは服装や髪型などが代わり雰囲気こそ様変わりしているが恐らくナギだろう。しかし隣にいるのは女ではなくしっかりした身なりをした男性だった。

「こ、これは気にしないで」

と言いながらナギはそそくさと写真を手帳に戻した。
「あーそれ。弁護士の彼でしょ？　へぇ。コトブキの時計台まで行ったの？　やるわねぇ」
パーマのおばさんがそう冷やかす。
「ち、違うから。これはあの、仕事で」
ナギはあからさまにしどろもどろになっている。
「あの、ナギさん。そのおばさんたち誰なんですか？」
レッドはずっと疑問に思っていたことを尋ねる。
「やーねぇ！　あたしたちはヒワマキジムの事務員よ！　創設時からずっといるの」
「そうなんですか？」
エリカがやや疑いを含んだ口調で言う。
「そう。この二人、こう見えて優秀な経理ウーマンなのよ。一人は小さい頃からお世話になった人。もうひとりはお祖父様のツテなんだけどね。ふたりとも元国税局の人だからそういう所に顔が利くし、ジムの煩雑な会計を整然とまとめてくれるしで私はそこまで手が回らないから本当助かってるのよ」
「こう見えてって何よう！　こっちは一生懸命やってるのに」
メガネのおばさんはやや酔いが回っているのか、言葉に悪意は見られない。

「へ、へぇそういうお金のこと専門にやる人置いてるんだなジムって」
「ナギさんやジョウトで言うならアカネさんのようにリーダーが副業を沢山抱えている方はこういうふうに経理だけトレーナーではなく専門の事務員を雇うことが多く見られますわね。その場合リーダーは最後の報告だけ目を通すという風に……」
「貴女のところはどうしてるのよ」
「私のジムはそういうルールが伝統的に決まっていて、そのおかげで経理分野の仕事が調整されているのですわ。だからなんとかジム内のトレーナーだけで回せています」
「なるほど。確かにうちも二人に甘え過ぎてて会計のルールが緩慢になってるところあるかもしれないわ……。参考にしてみようかしら」
　ナギはやや満足げな表情をしている。
「かもしれないじゃなくて本当に緩慢よ！　せめて領収書はまとめて一緒に出すとか申請の時は綺麗な文字で書く位の事は徹底させて欲しいわね！」
「そうそう。あれ読み間違えたら大変なんだから。いちいち呼び出して確認するこっちの身にもなって欲しいわ」
　おばさんは先程までの酔った様子ではなく深刻な様子で怒っていた。
「は……はい。わかりました」
　おばさんの気迫にさしものナギも押されてしまったのだろう。敬語になってしまっ

た。
「えっと、それで本来の写真は」
　レッドが本題に戻す。
「え……ああごめん！　これよこれ」
　と言いながらナギは手帳から本来の写真を見せる。今度は背景は海で後ろの橋を左にしたツーショットである。ナギはフウロと思しき女性の肩を抱き、フウロは嬉しさが写真から十二分にうかがえるほどの笑みを浮かべている。
「これは左にたっているのがフウロって人ですか？」
「そういうこと。まあこれは開通後半年くらいに撮った写真で彼女はまだパイロットやジムリーダーになったばかりの頃だから今じゃ少しは雰囲気変わってるけどね」
「へぇ……」
　レッドは無意識か意識的か、フウロの姿を心に刻んだ。
「何見入ってるのよ。まさか惚れた？」
　ナギが冗談半分に尋ねる。
「い、いやそんな訳ないでしょう！」
「ナギさん……お戯れが過ぎますわよ」
「アハハ。ジョークよジョーク。こんな所まで連れ添っているのだもん。まさか浮気な

んか考えもしないわよね」

そう言ってナギは静かに笑いながら三杯目の酒をつぎ、飲んだ。

――

一本開けた後に会はお開きとなり、レッドとエリカはナギと事務員のおばさん2名と共にホテル内のバーで飲み会の続きをしていた。

机上には今三本目の地酒が置かれている。

「ナ……ナギさん。ちょっと飲みすぎじゃないですか?」

レッドが完全に酔った状態になっても飲み続けてるナギにそれとなく止めるよう促す。

「なぁにいってんの! まぁだまだこれからよ」

そう言いながら面倒になってきたのか徳利からそのまま飲んでいる。

「もうナギちゃんこうなっちゃうと止まんないわよ~。あと三升は飲むわね」

「三升!? ……ってどれくらい?」

「約5．4リットルですわよん。貴方ぁ」

そう言いながらエリカはレッドの胸に身を預けた。

「へぇ……。ってお前も結構酔い回ってるな……そんなに飲んでないだろ」

「へへへ……私はナギさんみたいにそんなガブガブ飲める性質じゃないのでお銚子一本

半も飲めばもう結構酔っちゃうんですよぉ」
　彼女の顔も朱を注いだかのように赤く、服を通した限りだと体は火照っているようだ。
「そ、そうか。でもそんな酔うまで飲まなくたって」
「大人同士のお付き合いにはお酒はかかせないのですよぉ。貴方も大人になれば分かりますわ」
　普段の彼女に比べればかなり気の抜けた調子の声である。
「そういうもんかね……」
「あとぉ……日本酒ってお酒の中ではアルコールの度数高いんれすよぉ。おいしいんですよ。おいしいんれすけど……。なんというかよっぽふぉ強くないと沢山飲めないのが残念、残念無念なんれす……」
　彼女はかなり酔いが回ってるようだ。しかもそんな中でも無理して説明しようとしているので言葉の発音の不明瞭さが目立ちつつ有る。
「あーもうわかったわかった。無理して喋るな」
「貴方？」
　エリカは熱を持った視線をレッドに注ぐ。
「な、何だよ」

「今のわらし……きらいれすか？」
「え？」
　レッドは唐突な質問に目をしばたたかせる。
「ねぇ。どうなんれすか！」
「そ、そうだなぁ……」
　普段の凛とした彼女からは想像もできない程くだけた雰囲気のエリカである。レッドは暫し考えた後
「い、いいと思うぞ」
　と返すが、エリカは首を横に振り
「そんな答え方じゃ嫌れす。好きかぁ嫌いかで言ってくれないと嫌れす!!」
「ばっ……お前何言ってんだよそんなことナギさんとかが見てる前で」
「いいから言ってくらさい！」
　レッドは頭を掻いた後
「す……好きだよ！　当たり前だろ！」
「へへへ……」
　そう言うと彼女の方から近づいてレッドの肩を抱き寄せながら唇を重ねた。
「えっ……ちょ何してるのよ!?」

流石にナギも当惑している様子だ。
「んっ……」
「あらぁ。お盛んだこと」
パーマのおばさんの感嘆をよそにやがて舌も絡めてディープキスの体になった。1分ほどした後
「ふぅ……」
と彼女はレッドの唇から離れ、つばを布巾で拭う。
「お、お前皆が見てる前で」
「へへ……好きって言ってくれたご褒美れすよ貴方ぁ……」
そう言うとそのままソファに倒れ込んでしまった。寝息がするのでどうやら体力が尽きたらしい。
「はぁ……。どうもすみませんエリカがお騒がせして」
レッドがナギとおばさんたちに謝った。
「いいのよぉ別に」
「そうそうあたしも青春時代思い出しちゃったわよ！　羨ましいわ～」
メガネのおばさん、パーマのおばさんは口々にそう笑いながら流した。
「たっく公衆の面前でいちゃついてもぉ！」

そう言いながらナギはまた酒を飲んでいる。遂に三合ほどの枡に入れて飲んでいた。
「あらナギちゃんやきもち？　彼と上手くいってないの？」
「るさいっ！　男っていうのはどうしてこう女に甘いのよ……レッド然りアイツ然り……」
「ナギちゃんは理想が高すぎるのよ。お祖父さんみたいな人なんてそう滅多にいるもんじゃないんだからいい加減現実見ないとあたしみたいに売れ残りになっちゃうわよアハハハハ！」
パーマのおばさんはナギの肩を陽気に叩きながら言う。
「大きなお世話よ……。結婚は一生の問題なのよ。それを考えたら妥協なんかしてられないっつうの！」
そう言いながらナギは三合の枡酒を飲み干した。
「そんな事言ってるから長続きしないんじゃないの。あんたはもっと寛容にならないとどんないい男でも逃げてっちゃうわよ。ねぇレッドちゃん？」
メガネのおばさんからはちゃんづけで呼ばれるようだ。
「え……。あ、アハハハそうかもしれないですね」
「ケッ。どいつもこいつもナヨナヨしくさって……。ママみたいな奥さんじゃなきゃ嫌だってか？　女をなんだと思ってるのよ！」

「あ、い、いやそんな怒らないでくださいよ！」
「いーい？　レッド。あんたこれからもしあの子と結婚する気ならよく覚えておきなさい。今日見た限りじゃあんた、たしかにポケモンは強いけど、あの子に引っ張られっぱなしよ！　男ならもっとしゃんとなさい！」
「は、はい」
　ナギの鬼気迫る説教にレッドはただただ小さくなって頷くしかなかった。
「しゃんとしろって言ったでしょ。もっとしっかり返事なさい！」
「はい！」
「ふん……。疲れたわ。もう一杯飲も」
　そう言ってナギは酒瓶に手を出す。
「ナギちゃん。それくらいにしときなさい。あんた酔っ払うといつもそう人に説教垂れるんだからそこがやめどきよ」
「な……私はまだ酔ってないわよ！」
「酔っぱらいは皆そういうの。ほら明日もあるんだからそろそろお開きにしましょ」
　メガネのおばさんがそう言いながら立ち上がる。机にあげていたバッグも持った。
「くっ……。そうね。わかったわ」
「よしよし。そう聞き分けがいいところがナギちゃんのいいところよ」

そう言ってパーマのおばさんはナギの頭を撫でる。
「子どもじゃないんだからやめてって言ってるでしょそれ」
「なぁに言ってるのよ。小さい頃は喜んでたじゃない」
パーマのおばさんは快活に笑った。
「いつの話してるの！　帰るわよ」
「はいはい。よっこらしょ」
そう言ってナギと続いてパーマのおばさんがバッグを持って立つ。
「いくら?」
「はい」
ナギの尋ねにパーマのおばさんが伝票を見せた。ナギはバッグから長財布を出す。
「あ！　俺も出しますよ」
レッドも財布を出そうとしたが、ナギは首を振る。
「子どもがそんな気遣いしなくていいのよ。いいからエリカさんを連れ帰りなさい」
エリカはまだソファで寝息をたてていた。
「でも」
「今回私は最初から親睦のため奢るつもりでいたの。だから気にせず出てちょうだい」
「そ……そうですか。それじゃごちそうさまです」

そう言ってレッドはリュックとエリカを背負って店から出ていった。
その後は会計を済ませた後、二人はポケモンセンターに帰った。
―9月5日　午前8時　ポケモンセンター―
朝食を食べた後、エリカは椅子に座っていた。
「いたた……」
一日空けた朝、エリカは頭をつらそうに触っている。
「二日酔いか……。ほら頭痛薬」
レッドは昨日閉店寸前の薬局で購入した頭痛薬と水を机上に出す。
「ありがとうございます……」
彼女はレッドに礼をした後、薬を飲んだ。
「ふぅ……」
「全く、お前酔うと全然人格変わるのな」
「え!?」
彼女は寝耳に水の様子だった。
「えって……お前覚えてないの?」
「す、すみません。パーティでお酒を飲んだことまでは覚えているんですけどバーに行った後のことはあまり……」

「ほう……」
レッドはわずかににやけた。
「あ、あの私何か粗相をいたしましたか？」
彼女はやや動揺した様子で尋ねる。
「粗相っつうかな……まあいいやよく聞け」
レッドは昨夜の出来事を全て話した。すると彼女は昨夜と同じように顔を赤らめた。
勿論、昨日と事情は違うであろうが。
「わ、私そんな事を……。酒席のこととはいえとんだことをしましたわ」
彼女は唇を噛み締めている。
「ほんとにな。まさか人前でディープキスするなんて思わなかったぜ」
レッドは笑いながら言う。
「や、やめてください。恥ずかしくて消えてしまいたいくらいですわ……」
彼女は机に伏してしまった。
「ハハハ……まあでもさ」
エリカはレッドを見上げる。
「楽しかったよ。お前の別の一面を知れてもっとよくエリカの事知れた気がする」
「貴方……」

「たまにはいいんじゃないのか。あれくらい弾けても」
それはレッドの心の底からの希望だった。
暫し間を開けてエリカが話し出す。
「私、実は初めてだったのです」
「ん？」
「ああやってお酒を飲むのが……です」
「ジムの人たちとはやったことなかったのか？」
「ええ。私は今年が２０ですし、する前に旅立ってしまったので……」
なるほどとレッドは心の中で腑に落とした。
「私、酔ってた時のことは覚えてないのですけれど……夢を見たのです」
「夢？」
「草原の上でゆらゆらと心地よく横たわってた夢ですわ」
「夢の中でも寝てるのかお前は……」
レッドは半ば呆れていた。
「そ、そこは気にしないでくださりませ。恐らく……あの時レッドさんに揺られて帰っていたのでしょうね。とても心が洗われるようで……気力が満ち足りていきそうな感覚でしたもの」

「そうか……」
「私はジムリーダーであり、貴方の妻です。ですからあまりそういうことはしないでおきたいのですが……。貴方におぶられるのならばたまには……いいかな。なんて」
彼女はそう言うと照れながら笑ってみせた。
レッドはそれにまた心が満ち足りる感覚を覚えるのだった。

――

二日酔いが収まった翌日に二人はヒワマキシティを出立。１２０番道路を通り過ぎ、１２１番道路に通りがかった。
するとまたユウキに出会った。
―９月１０日　１２１番道路―
ユウキに会うと世間話もそこそこに深刻そうな表情であることを伝えた。
「前会った時、おくりびやまの話をしましたよね？」
「ああ。そうだな」
レッドが答えた。
「あそこにマグマ団とアクア団が来ていて……勿論下っ端や幹部はやっつけたんですけどすんでの所で超古代ポケモンのカイオーガを目覚めさせるあいいろのたまとグラードンを目覚めさせるべにいろのたまをボスにもっていかれたんです……」

「何やってんだよ！　そんなことさせたら思う壺じゃないか」
「貴方。仕方のないことですわ。ユウキさんを責めるのはやめましょう」
　エリカがフォローする。
「いえ……。そこは僕の落ち度ですから。それで山を守っているおじいさんおばあさんに取り戻してくれと頼まれたんですが……。去り際に小さな声で話していたのでちょっと申し訳ないと思いながら聞いてしまったんです」
「ほう」
「あのたまは偽物かもしれない……っていうんですよ」
　エリカは目を丸くする。
「偽物？　しかし断定できないとはなんとも歯切れが悪いですわね」
「はい。そのお二人の話も判然としないので……まあまさかとは思いますけどね」
　それからも二言三言話してユウキと別れた。
　翌日、二人はミナモシティに入った。
　―ミナモシティ　ホウエン第二の玄関。そしてホウエン随一の高級住宅地でもある。ミナモデパートやマスターランクコンテスト会場といろいろな建物が目白押しである。トレーナーファンクラブもあり、ここ最近はレッドエリカの話題で持ちきりである。

―9月11日　午前10時　ミナモシティ―

入るや否や二人は大量のクラッカーの雨を受け、大歓迎を受けた。

「ようこそおいでくださいました！　伝説の夫婦と名高し古今無双のお二方！　レッドさんとエリカさん！」

代表と思しき男が前に出てそう述べた。

「は、はぁ。ありがとうございます」

トレーナーファンたちの一大拠点でもあるこの街はまさにこの二人の来訪で大騒ぎになっていたのだ。

「ヒワマキからの長い旅路。お疲れ様でした。旅の疲れを癒やすためまずはポケモンセンターに寄ってポケモンを治療した後、是非我がファンクラブにおいでください」

そう言って男は招待状を手渡す。

ポケモンセンターに立ち寄った後、悪い気はしなかったのでとりあえずトレーナーファンクラブの建物に入った。

―同日　午後3時　ミナモシティ　トレーナーファンクラブ―

入るや否やまたも彼らは大歓待を受けた。

ファンたちからの賛辞の言葉や贈り物などを受け取り、更に宴を催されて豪華な食事や出し物など至れりつくせりである。

そんな中、ファンたちは他のトレーナーの話をしはじめた。
「いやー。本当お二方に来てくれて嬉しい限りですよ！　貴方達なら何日でもここに居てくれて構いませんよ！」
ファンの２０代くらいの男がそう言った。
「いやぁ……。ご迷惑では」
「いやいやとんでもないです！　私達は本当ファンとして二人が来られることを心待ちにしてたんですよ」
同じくファンのこちらは女子高生くらいの年頃の子が言った。
「そうそう……それに引き換え将来の対戦相手になるだろうゴールドさんだっけ？　あの人は……」
３０代くらいのサラリーマン風の男が暗い顔をしながら言う。
「あああの人ね……」
２０代くらいの男はその名を聞くと意気消沈していた。
「ゴールドさんがどうかしました？」
エリカが尋ねる。
「話せば長くなるんですけど、確か先月だったかな？　ゴールドさんが来たんですよ。そりゃ勿論ね。貴方達の対戦相手ですし、彼自身も相当な凄腕トレーナーですから私達

も歓迎しましたよ？　しかし……」

　３０代のファンが話すところによると彼はどうもナギに負けて傷心の自分を慰めてもらう目的でここに来ていた節があったようだ。その上、ポケモンの話はそこそこに彼女のカスミの自慢やのろけ話ばかりを聞かされゴールドを歓迎していた彼らも段々興が冷めていき、あまりもてなさなくなった。

　そして９月８日に八回目の敗北を喫してここに戻ってきた時遂に一部のトレーナーが来ないように仄めかす行動を行い、それ以来（といっても三日だが）彼は姿を見せなくなった。

「情けない奴だな本当」

「貴方。いっその事ポケモンリーグに相談する方が良いと思いますわ。ここまで酷い体たらくですとリーグの体面というものが……」

「いや、俺から持ちかけても仕方がないだろう。対戦する候補はあいつしかいないし代わりのトレーナーはまずいないだろう」

　レッドもそれなりに現状を認識している。

「そこなんですわよねやはり……」

　エリカはそう言うとため息をつく。

「正直言って俺たちも今のゴールドさんとレッドさんが戦っても勝敗は分かりきってる

と思ってますよ」
「あたしもー。あんな甘えん坊じゃ見ててつまらなそうだわ」
「せっかくのＰＷＴですし我々としては期待はしたいんですよ。期待は……しかし」
　ファンたちは口々に思いを語ったが大半はトレーナーの本分を忘れて色に耽けるゴールドへの非難だった。
「わかりましたわ。私からリーグのワタルさんにご提言申し上げますわ。まぁしかしワタル理事長はお人好しですからね。あまり期待はできませんが……」
「あれでも俺のライバルだ。油断はできない。だけど、俺も次ゴールドにあったらきつく言っておくよ。あんな腑抜けた調子でＰＷＴで戦えって言われても困るしな」
　ファンたちは伝説の夫婦から自分たちの意見を認めてもらえたと感激して更に祝宴を続けた。
　―同日　午後１１時　同市　ポケモンセンター　２１８号室―
　宴は午後１０時頃お開きになり、二人は遅くポケモンセンターに到着した。
「ゴールドさんも困ったものですが……アクア団マグマ団の動き、そしてべにいろ・あいいろのたまの真贋問題も気になる所ですわね」
「うむ……。バッジ６枚でホウエンも終わりが見えてきたけど……まだ波乱はありそうだな」

それから３０分ほどこれからの事を相談しあい、床につく。ゴールドのワタルへの報告は翌日に回される。

―第二十話　本音　終―

第二十一話　夏の終わり

―9月12日　午前8時　ポケモンセンター　218号室―

朝食を済ませた後エリカはワタルに電話をかけた。

挨拶もそこそこに本題に入る。

「しかしエリカ君から僕に電話なんて珍しいこともあるもんだ。どうしたの」

「他でもありません。ゴールドさんの事ですわ」

「あぁ……」

ワタルはあからさまに気分の重い声をだす。

「やはりお耳に入っているようですわね」

「まぁそれは……ね」

「どうなさるおつもりですか？」

「勿論ゴールド君には自覚を促すけど……結局は彼自身の問題だから」

ワタルの返答はどうも心もとない様子の声であった。

「主催者がそれではいけませんわ。もっと毅然とした態度で臨んでいただきませんと」

「エリカ君の言うとおりだ。今夜にでも連絡してみるよ」

「もしゴールドさんがこのままの素行を続けたらどうなさるつもりですか？」
「どうするって……ねぇ」
ワタルは考え込んでしまった。
「私としては最悪の場合ＰＷＴで戦うことそのものを検討し直す事も触れておいたほうが宜しいかと……」
「え!?」
ワタルはこの提案に耳を疑った様子だ。
「ちょっとまって……君は本気でそうしたほうがいいと」
ワタルはやや焦りを含んだ様子で話す。
「勿論。本気ではありませんわ」
「だよね……」
「ただ。この際ゴールドさんには冷水を被せるべきだと思うのです」
「冷水ねぇ」
「私はゴールドさんこそレッドさんの対戦相手として相応しい実力を兼ね備えていると思いますわ。しかし、今のゴールドさんでは戦った所でどうなるかは火を見るより明らかです」
「うん」

「ですから、今一度ここで奮起して前のような覇気があり意欲に満ち溢れたゴールドさんに戻って頂きたいのです。その為ならば……多少の脅しもやむを得ないと思いますわよ」

　彼女は心の奥底からそう思っているようだ。

「君らしくもないやや強引なやり口だが……。それでも彼が変えようとしなかったらどうするんだ」

「その時は私と、ゴールドさんを相手に選んだワタルさんの見込み違いであり、この計画も無駄だった。それだけの話ですわ」

「い、いやしかしだね君」

「ワタルさん。ここは理事長として決断の時ですわ。なあなあで進めれば決して良い結果にはならないと思います。思い切った行動をとるべきです」

　ワタルは暫し間を空けた後

「分かった。君の言うとおりにしよう。ゴールド君がどの程度ＰＷＴを真剣に考えているか……。見極めるとしよう」

　それから数分間話した後ワタルは電話を切った。

「お前も中々大胆な事言うな……。もしこれでゴールドが本当に変わらなかったら計画自体なくなりかねないんだぞ？」

机の椅子に座りエリカの話を聞いていたレッドがそう言った。
「フフ……」
ポケギアをしまったエリカはレッドのすぐ傍に椅子を近づける。
「そうなったらタマムシに戻って貴方と一緒に暮らすとしますわ」
彼女は甘えた声でレッドの胸に身を預けた。
「ハハハ……。それにしてもお前ゴールドの事見捨ててたわけじゃなかったんだな」
レッドは話題を切り替えた。
「当然ですわ。貴方に全力でぶつかって来るトレーナーですもの。それに、あれだけの早さで私含めカントーのリーダーを全員倒した人間を見捨てては敗れた私の立場がありませんしね……」
エリカにはエリカなりの考えがあったようだ。

――

それから二人は3日かけてトクサネシティに渡った。
―トクサネシティ　宇宙に最も近いと噂される街。本島から切り離された小さな島であるが、ここは宇宙センターやトクサネ天文台など天文学の粋が集まった街である。尚、ダイゴの家もここにある。
―9月15日　午前9時　トクサネシティ　浜辺―

浜辺に到着すると、古風な髪型にチャイナ服を着た二人が現れた。
「え？　何今の」
「その場に出現しましたわよね？」
二人は目の前まで歩いてやってきた。
「やあ！」
「驚いた？」
二人は口々に話し始めた。
「あら？　もしかしてこのお二人……この街のジムリーダーのフウさんとランさんでは？」

エリカはトレーナーの歩き方をカバンから取り出してレッドに見せた。
「お、本当だ」
「その通り！」
「僕達が全国ただひとつの双子ジムリーダーフウと！」
「ランだよ！　宜しくね！」
二人はほぼ同時に二人に会釈した。
「さてと立ち話もなんだし」

「ジムへ案内するよ！」
そう言うと二人はすぐさまテレポートを使ってレッドとエリカを瞬間的にジムへ移した。
―トクサネシティ　ポケモンジム―
「あ、あれ!?」
レッドはいつの間にか変わった風景に驚いている。
「フフフ。こんなびっくりした顔してる～」
「どう？　これが僕たちエスパーの力だよ！」
「大したものですわね」
エリカはどこか微笑ましそうな表情である。
「あれれなんだかリアクション薄くない？」
「当たり前だよフウ。エリカさんはナツメさんとお友達なんだから～」
「あら。ご存知なのですか？」
彼女は少し嬉しそうな表情をする。
「勿論！　同じエスパーとしてナツメさんとはたまにですけどお話ししますから」
「まぁ同じエスパーでもナツメさんに比べれば僕たちは全然なんですけどねー」
「いやそんな事ないと思うけど……」

レッドは超能力を実感したせいかやや恐れた風に言う。
「私達エスパーは９０％以上生まれた時点で力が決まっているんですけど、ナツメさんはその生まれ持った力が尋常じゃないの！」
「あの人なら本当その気になれば世界を好きに動かせるんじゃないかってくらいとんでもない力を持っているんだ。僕ら姉弟はホウエンの中では一番力あると思ってるけどナツメさんにはとてもとても……」
二人にとってナツメは雲上の人のようだ。
「でもそれは！」
「エスパーとしての力量の話！」
「エスパー使いとしての力は決して引けを取らないと思ってるの！」
二人はにわかに表情を引き締めて言う。
「僕ら姉弟の以心伝心から成るコンビネーション！」
「お二人には破れるかな？」

――――

レッドは二体、エリカも二体を失って辛くも勝利した。
「ぼ、僕らの」
「コンビネーションがっ……！」

「でも負けたからには仕方ないよね！」
「負けを認め、このマインドバッジ。お二人夫婦にあげるよ！」
レッドはフウから、エリカはランからそれぞれマインドバッジを受け取った。
「ありがとうございます」
7枚目のバッジを二人はまた恭しく受け取った。
「僕ら姉弟のコンビネーションよりも」
「伝説の夫婦と呼ばれる二人とポケモンとの絆の方が上だったみたい」
「いえいえ。ナギさんと並び称されるのも納得の強さでしたわ、まだまだお若いのですし精進なさいませ」
エリカはそう二人を励ました。
「へへへそう言われると」
「嬉しいなぁ。これからも頑張れる糧になるよ！」
「次戦う時はもっともっと強くなって」
「更に強いコンビネーションで二人と戦うよ！」
フウとランはにっこりと微笑んでそう誓いあった。
それから二言三言話して、ジムを出た。
―午後3時　トクサネ宇宙センター　一階―

ポケモンセンターでポケモンを回復した後、時間が余ったのでとりあえず二人は散策にでることにした。
エリカが言うにはトクサネはこの国の天文学や宇宙学のトップを走る街だということなのでとりあえずその象徴であるトクサネ宇宙センターへ入った。
「へえここでロケットを打ち上げるのかあ」
レッドは目の前に見える発射台とロケットを見て心を躍らせながら言った。
「このロケットは天王星や海王星の衛星に探査機を飛ばし、岩石や塵を収集して星の特徴を詳しく調べひいては宇宙の起源や原理を解明することを任務としていますわ」
「なんとも壮大な話だな……」
「私はこちら方面についてはそこまで了見があるわけではないのですがこれからの世界において宇宙探査は人類の未来を広げる大事な鍵になるのは自明ですわ。ここでお仕事している方々には頑張っていただきたいですわね」
エリカがそう所員への激励を言うと、背後から聞き覚えのある声がした。
「やあふたりとも。こんにちは」
振り向くとそこにはダイゴが居た。
「あ、ダイゴさん！　どうも」
「フエンタウン以来ですわね。その節はどうも」

エリカは軽く頭を下げる。
「いいよ。当然の事をしたまで……。それはともかく、もうバッジ取ったそうだね。あとひとつかい？」
「はい。お耳の早いことで」
「ご活躍のようで嬉しいねぇ。そんな二人にちょっとしたご褒美があるんだ。僕の家が近くにあるんだけどこない？」
特に悪い話でもないと判断した二人はそのまま家に行くことにした。
―午後2時30分　ダイゴの家―
ダイゴの家はデボンコーポレーションの御曹司と言う割には小じんまりとした質素な家であった。
二人はリビングに通され、椅子に座った。
「お茶でも入れようか。何がいい？」
「俺は……お茶で」
「お茶？　いいんだよそんな別に遠慮しなくて」
ダイゴはレッドを気遣ってか笑みを浮かべながら言った。
「え、じゃあサイダーで」
「サイダーね。エリカさんは？」

「私はそうですね……」
　彼女は奥の台所にコーヒーサーバーがあるのを一瞥した後
「カプチーノでお願いします」
　と返した。
「おや。目敏いねぇ。分かった。ちょっと待ってて」
　ダイゴは奥にある台所に行った。
「意外だな。お手伝いさんとか居ないもんなんだな」
「恐らく一人暮らしだからでしょう。お家が小さめなのも自分一人で掃除などを済ませられるようご自身で手配したのでしょうね」
「なるほどな……」
　確かにいつ来客がきてもいいようにする為かリビングは綺麗に片付いている。
「ダイゴさんは信頼できる人間以外にお金持ちと悟られるのを嫌いますから……。まぁダイゴさんに限らず本当のお金持ちはそういうものですわよ」
「へぇ。じゃあエリカもそうなの？」
「私もお祖母様から出来る限りそうする事が自らの身を守ると教えられてますから」
　そうこう話しているうちにダイゴはカプチーノとサイダーをそれぞれに置いた。
　返礼の後、ダイゴも椅子に座った。

「あら……これは良い香りですわね。モカ・シダモですか？」
「おぉ通だねぇ。そうだよ。モカ・シダモのＧ１。やっぱりこういうエレガントな風味が好きそうだなぁと思ってね」
　彼女はコーヒーを一口飲んだ。
「旅に出てからはなかなかこう落ち着いて良いコーヒーを飲む機会はありませんからありがたい限りですわ。旅をしながらですと豆や茶葉などを良い状態に保管し続けるのは難しいですし」
「そう。喜んでくれたようで何よりだよ」
　レッドはやや気後れした風に三ツ矢サイダーを飲んでいた。
「あの、それでダイゴさん。俺たちに渡したいものって」
「ああ。ごめんごめん。これだよ」
　ダイゴはカバンから机の上に一枚のＣＤＲＯＭを出した。
「これはわざマシンですわね。それも秘伝技の」
「そう。これはひでんマシン。中身にはダイビングが入っているんだ」
「ダイビングってあの潜る技ですよね？」
　レッドが尋ねる。ヤナギ戦で見た記憶が有るためどんな技かは知っていた。
「そう。この技を使って水中に潜ることができるんだ。因みにルネシティに行くにはダ

イビングしないと行けないからね」
「あぁ左様ですか……。この街に潜水用の服や道具はありますか？」
　エリカはダイゴに尋ねる。
「もちろんだよ。ダイバーたちの天国のような街でもあるからねここは。フレンドリィショップには勿論あるし商店街には用品の専門店もある。まぁ好きな所で買えばいいと思うよ」
「ありがとうございます」
　エリカは頭を下げて礼を言った。
「さて……ところで早いもので選挙まであと三ヶ月だけどエリカさんはどうするんだい？」
「選挙ですか……。１２月に私達がどうしているかにもよりますわね。大事な選挙ですし出来る限りリーダーとして出席したいですけれど」
　エリカはそう言うともう一口コーヒーを口につけた。
「選挙ってどこでやるのさ」
　レッドがエリカに尋ねる。
「第一回選挙からセキエイ高原のリーグ本部でやるしきたりですわ。恐らく今回もそうなると思います」

「セキエイか……。シンオウからだと大分遠くなっちゃうな」
「あらあと三ヶ月でホウエンを去れるのですか？」
エリカはやや意地悪そうに尋ねる。
「おいおいやめてくれよ……」
「フフ……。まぁ冗談はともかく、もし出席できない場合はナツキさんにお任せすると思いますわ」
「別に俺は数日くらいお前がいなくても大丈夫だぞ」
「わ、私が平気ではないんです！　それに私の為に何日も旅を止める訳にもまいりませんでしょう」
彼女はやや顔を赤くして言った。
「ハハハ……。まあわかったよ。あの。あまり大きい声じゃ言えないことなんだけど」
ダイゴは温和な表情からにわかに眉をひそめ、引き締まった顔になった。
「は、はいなんでしょう」
「恐らく今回ワタル君の対抗馬になるであろうシロナさんの事なんだが……よくない噂があるんだ」
「シロナさんにですか？」
エリカはやや目を丸くしている。

「彼女がリーグ上層部には珍しく政財界への太いパイプがあることは聞いたことあるだろう」
「ええ。まあ」
　シロナはリーグ上層部ではきっての高学歴であり、そこで得たコネを用いて政治家や官僚に太いつながりがあるとされていた。
「彼女のコネのおかげでここ数年における政府からのリーグの直接的介入をすんでのところで免れているのは確かだ。彼女が副理事長になって以来政府からの圧力は目に見えて緩まった。まあ強いていうならこの前の戦争における〝脅し〟がそうだがまぁなんとか防げている」
「まさかそのつながりとやらに不審な点があるとでも仰せなのですか？」
　エリカが鋭い口調でそう言った。
「そうだ。これといった証拠はまだあがってないが僕は一応デボンの後継者だからね。そういう話がちらほら聞こえてくるんだ。リーグ支部の改修工事に与党の支持基盤団体の息がかかった企業が受注できるよう手を回したとか、リーグ職員の新規採用に懇意の政治家の知己が有利になるよう細工をしたとかそんな話をね……」
　そう言うとダイゴは組んだ足を組み替えた。
「それで。ダイゴさんはどうしようと言うのですか」

「さぁ。どうしようかね」
　ダイゴは不敵な笑みを浮かべる。
「まさかそれにシロナさんが関わっているとでもお思いなのですか？」
「それは詳しく見てみなければわからないことだがこれだけは言えるよ。〝彼ら〟の支持を得ることは並大抵のことではできない。とね」
――
　それから１０分ほど話して二人はダイゴの家を出た。
―トクサネシティ　市街―
「なんとも歯切れの悪い話だったな。シロナさんの事」
　レッドは開口一番にそう言った。
「ダイゴさんのこのままでは済まさない……という言葉。やはりこれにかかってくるのでしょう。だとするならばシロナさんはどうするのか。気になる所です。何にしても次の選挙は類を見ないほどの波乱の展開になりそうなのは間違いないでしょうね」
　彼女は複雑そうな表情でそう語った。
――
　それから二人はダイバー用品を購入してトクサネをたち、５日かけてルネシティへ到着した。

―ルネシティ　周りが山、そして海に囲まれた環状の街。街の中心の湖は透明度が高く顔の表面が見えるぐらい澄んだ水である。晴れているときはとても美麗な風景になるが、熱が篭りやすく夏は地獄らしい。

―9月20日　午前10時　ルネシティ　市街―

二人はポケモンセンターでウェットスーツから着替え、ポケモンを回復させた。

「いよいよ最後のバッジだな」

「ええ。過ぎればあっという間の事ですわね。確か8番目はアダンさんという水タイプのリーダーの方と歩き方には書かれていましたわね」

「やっとお前にとって有利なタイプがきたな……。良かったな」

レッドは笑いながらエリカを見た。

「ええ。アスナさん以来私にとっては不遇続きでしたから……。得意なタイプの時くらいはリードできるよう心がけたいですわね」

「大丈夫だろ。お前ツツジさんの時はかなり頼もしかったぞ」

「えへへ……そうでしたか？」

かれこれ話しながら二人はポケモンジムへたどり着き、入っていった。

―午前10時20分　同所　ポケモンジム―

二人は久々にトレーナーと戦い、その末にアダンの所へたどり着いた。
「オー。遂にここまでやって来ましたか……ミスターレッド&ミセスエリカ」
アダンは洒落た水色のコートやクラバットなどを身に着け、軽い香水をつけているのか良い香りもした。中近世の貴族を彷彿とさせる出で立ちである。
「君たちは既に聞いているとは思いますがね。私は今のサイユウリーグチャンピオン、ミクリにポケモンを教え、一時は彼に任せてリーダーから引いたのを、ミスターダイゴに代わって彼がチャンピオンになった事で私がここに戻ってきたのです」
「へぇ……そうでしたか。ミクリさんというのがチャンピオンというのは聞いてましたけど……」
レッドは新鮮な風に驚きながら言った。
「おやそうでしたか……。しかし、ユーたちのようにレジェンダリーなカップルと戦えるのならば戻った甲斐があったというもの……。さて、そろそろ勝負をはじめましょうか！　さあ、とくとご覧あれ。私とポケモンの織りなす水のイリュージョンを！」

――

エリカは一体も失わずに完勝した一方、レッドは予想外の展開が続き二体を失った。
「たははは！　コングラッチュレーション！　ユーガイズウィナー！　私の完敗ですな。思った通り、実に楽しいゲームでしたよ。実にエレガントで、インテリジェンスな

戦いぶりでございました。この素晴らしき戦いを称し、君たちにはこのバッジを授けましょう！」

「ありがとうございます！」

二人はホウエン最後のバッジ。レインバッジを受け取った。

「君たちのように素晴らしいカップルならばこの先のサイユウリーグも決して乗り越えられぬことは無いでしょう。この地方での戦いや思い出をハートに刻み、ファイナルのファイトに向かうのです！」

二人はアダンと別れ、ルネジムを後にした。

―同日　午後2時　ルネシティ　市街―

「なんとも豪華なお方でしたね……」

「ああ。多分あの姿格好は忘れないよ。さて！　遂にバッジ全部揃ったな」

「ええ。後はサイユウリーグを残すのみですわ！　参りましょう！」

二人はポケモンセンターへ向かい、ポケモンを回復させた。

―午後2時４０分　めざめのほこら前―

ポケモンを回復させ、ルネシティをたとうとした二人であったが、めざめのほこらで騒ぎが起きているというので二人はそこへ向かった。

祠に行くと大勢の人だかりができていた。

「ここを通せって言ってんだよ！　聞こえないのかい？」
　例のバンダナをつけた男や女たちがめざめのほこらの前で立ちふさがる男に向かって通すよう脅しまがいの口調で強弁し続けていた。
「何度言われようとここは私と私の許可を受けた者以外は入れない事になっています。お引き取り願おうか」
　男はアダンに影響を受けたかのような華美な服装をしており、白い帽子をかぶっている。おそらくあれがホウエン地方チャンピオンのミクリであろうことは推察できた。
「聞き分けのない子ね！　それ以上続けるならこっちも容赦しなくってよ」
　幹部のイズミがモンスターボールを構えた。
「まさかとは思いますがあなた方のような人に私が負けるとでも？　ここの前ジムリーダーということを知らないわけではないでしょう」
　ミクリは自信満々な様子でアクア団を見る。
「まぁ待て待てイズミ。手荒な事はよそう」
　奥からボスと思しき男が出てきた。
「し、しかしリーダー。このまま放っておくわけには」
「今、マツブサとも話がついたところだ。おい」
　そう言うとマツブサと共にマグマ団と思しき団員がぞろぞろとやってきた。

マツブサはアクア団のリーダーとは対照的に理知的な雰囲気を漂わせている。
「私も海底洞窟に行ってべにいろのたまを使ってグラードンを起こそうとしたが居なかったのだ。あそこでないとするならばここにいるとしか思えん」
「というわけだ。通してもらおうか」
「そんな馬鹿げた話を誰が信じるものか。あそこに居なければ今頃ホウエン地方中が大騒ぎになっているはず」
ミクリは頑として信じていない。
「うるせえ！　ごちゃごちゃ言ってねえで通さないか！　さもねえとこのアクア団とマグマ団が力づくでも通させてもらうぞ」
マツブサは頷く。どうやら共同戦線を組んだようだ。
「例え何人が来ようとも構わない。倒すだけの話だ」
ミクリもモンスターボールを構えた。
すると群衆を押しのけて一人の少年がその場に現れた。どうやらユウキのようである。
「そ、その話は本当です！　ミクリさん！」
「君は……ダイゴの言ってた子か。本当とはどういうことだ」
ミクリは当惑した顔でユウキを見る。

「僕は海底洞窟でカイオーガを目覚めさせようとしたアクア団を止めようとしたんですが……。確かにあの人……アオギリがあいいろのたまを見せてもカイオーガは全く姿を見せませんでした」

「何!?　ということはカイオーガはもう目覚めているということなのか……?　しかしそれにしては何も起きてないのが説明がつかな」

「ほれみろ!　そこの坊主の言うとおりだっただろ!　分かったらさっさとどきやがれ!」

アオギリは勢いをつけて通ろうとする。しかし、ユウキがその前に立ち塞がった。

「なんだ坊主!　どかねえか」

「貴方たちはここを通ってカイオーガやグラードンがいたとしたら自らの意のままに動かしてその企みを果たすつもりなんだろうけど。そんなことは僕が許さない!　えっと……と、通りたいなら僕とミクリさんを倒してからにしろ!」

ユウキは毅然とした態度で言い切ったが、冷や汗をのぞかせている。

「ふっ……大したトレーナーだ。そういうことだ。どうしても行くなら相手になる他ない。さぁ、来なさい!」

こうしてミクリとユウキが二人がかりでマグマ団とアクア団を完膚なしにまで叩きのめした。

「ちっ……。負けたからには仕方ねえ。引き上げるとするか」
「このままで済むとは思わないことだ。我々マグマ団は必ず陸を増やす宿願を叶えてみせる」
　そういって二人の号令でアクア団とマグマ団は引き上げようとしたが、ルネの周辺の陸地や湖上には警察がひかえていた。
「な、なんだこれは！　一体どうしたことだ……」
「くっ……。どうやら嵌められたようだな……」
「マツブサ、アオギリ。あなた方のホウエンの各地で犯した所業は断じて許されるものではなく、正式な法による裁きをうけなければならない！　年貢の納め時だ」
　ミクリはそう言って二人及び二つの組織に引導を渡す。
　程なくして暫しの抵抗があったものの３０分もすればボスや幹部問わずほとんどが逮捕され、アクア団及びマグマ団は壊滅した。
　―午後４時３０分　同所―
　この時間になると野次馬も大体はいなくなりミクリやユウキも一段落ついた。
「ありがとう。正直なところを言うと私一人ではやや手に余ると思っていたところなんだ。一匹一匹は大したことはないが何しろ量が多いからね」
　ミクリはそうユウキに礼を言った。

「いえいえ。それほどでも……。それにしてもアクア団やマグマ団の狙いは本当なんでしょうか……。この祠にあの超古代ポケモンが……」

二人が話している間にレッドとエリカがその場に行った。

「やあ。ユウキ。大活躍だったな」

「あ！　レッドさん。エリカさんも……見ていたんですか？」

ユウキはやや恥ずかしそうな顔をしている。

「ええ。一部始終しっかりと見せていただきましたわ。本当にお強いですね。カントーで旅をしていた頃のレッドさんを思い出しましたわ」

「いやーそんな」

ユウキは照れた表情で人差し指で顔を掻いた。

そうしているとミクリと思しき男が話しかけてきた。

「君たちがあの伝説の夫婦ですね。噂は聞いている。ここにいるということはもうバッジは取ったということだね？」

「はい！　この通り」

レッドとエリカはバッジケースを取り出してミクリに見せる。

「ほう。私の師匠を一回で破るとは……。どうやら実力は嘘ではないようですね。ポケモンリーグで戦うのを楽しみにしているよ」

「えっ。ポケモンリーグって……」

ユウキが当惑した表情でミクリを見る。一般トレーナー、特にモラトリアム期間中の少年少女トレーナーには基本的に誰が四天王で誰がチャンピオンかは知らされていないのだ。というのも四天王やチャンピオンはジムリーダーと違い基本的にはリーグに詰めており休日を除いてあまり表にでないものであり、9割以上のトレーナーにとっては戦うことすらかなわない雲上の人間という性質もあるからである。

トレーナー情報誌にも暗黙の了解として四天王やチャンピオンの存在はともかく個々人の情報については載せないことになっている。表に出る時もあくまで理事や理事長としての肩書でしか出ないことになっている。とはいえ極秘情報というほどのことでもない為そこまで厳しい統制が布かれているわけではない。

「おっと。これは失言だったか。私はサイユウリーグ理事長。即ちこの地方のチャンピオンのミクリだ。宜しく」

「こ、こちらこそ！」

ユウキは深々と頭を下げた。

「君の噂もかねがね聞いてるよ。旅に出てから5ヶ月たたないのにもう7つ集めたとか……。久々にここホウエンでも素晴らしいトレーナーと戦えそうだ。ここのジムにはもう行ったのかい？」

「いえ。ついてすぐここに来たので……」
「そう……。最後のジムになるが、気を抜かずに」
「はいっ！」
ユウキは目を輝かさんばかりの様子で言った。
「ところで……。ミクリさん。念のため祠の中を見たほうがいいのではないですか？」
エリカがミクリに言う。
「そうだな……。アクア団やマグマ団の言う事を信じている訳ではないが。念のため確認はしておこう。君たちもついてきてくれないか」
―めざめのほこら　最奥部―
四人は階段を降り最奥部にたどりつく。
やはりそこにはカイオーガもグラードンもいない。
「いないな……」
「なんだ。やはりアクア団とマグマ団がでまかせを言ってただけ……」
ミクリがそう安心仕掛けた時、ユウキが例の事を言い始めた。
「あの……おくりびやまでべにいろのたまとあいいろのたまを守っている二人曰く、あの珠は偽物かもしれないというんですよ」
「な、何!?　偽物だって？」

「詳しく聞いてみるとその二日前くらいに偽物なんじゃないかと勘付いてどうしようか考えているうちにアクア団とマグマ団が来て……という経緯で」
「その二人が言うからには相当精巧な偽物だったということか……。いやしかし、海底洞窟で君は見たんだろう？　カイオーガが眠っている所を。本来あそこには眠っているカイオーガがいるはずなんだ」
　ミクリが尋ねる。
「いえ……僕が見た時はそれすらありませんでした。あのアオギリって男がどこかに隠れているとかそう考えてあの珠をかざしたんですが反応がなく。去った後自分も注意深く見てみたんですがやっぱりそれっぽいポケモンはいませんでした」
「何……？　カイオーガすらいなかったというのかい？」
　ミクリの顔が見るからに青ざめていく。
「はい」
「ということはまさか……」
「誰かによって盗まれた……と考えるべきかもしれませんわね」
　エリカがそう顎に手を遣りながら言った。
「ぬ、盗まれた!?」
　レッドはエリカに注目した。

「し、しかし冷静に考えてみたまえエリカさん。相手はあの超古代ポケモンのカイオーガだ。そんな人智を越えたポケモンにそう易々と立ち向かえる人間などいると思うか？」

「そ……そうですわよね。いるわけがありませんもの」

彼女は微笑んで否定してみせたがその目は笑っていなかった。

「ね。貴方」

エリカは振り返ってレッドに同意を求めた。その目にはどこかそうだと言ってくれと言わんばかりの切迫した感情が孕んでいるかのようにも見えた。

「あ、ああ。そうだな」

レッドも思い当たる節があったためやや空回り気味の返答になった。

「そうだろう？　それに盗まれたとしてどうして偽物をでっち上げる必要があるんだ」

「そうですね……」

「うん。その通りです」

ユウキやレッドは納得したがエリカは暫し間を置いて答える。

「それこそが狙いだとするなら……。あり得るのではないでしょうか」

「え？」

「今、そうしてお三方を納得させ……偽物をでっち上げるハズがないという論を形成さ

せ……その帰結として盗むことなどありえないという風に誘導するのが狙いだとするなら。わざわざ偽物をでっちあげてまで盗みをする理由としては十分ではないのでしょうか」

エリカは先程までのやや急迫めいた視線からは変わって冷静な様子でそう言った。

「お、おいおい待てよエリカ！　お前はどっちなんだよ！」

「私はただ偽物をでっちあげる必要はないという論調に釘を刺しただけですわ。この件の追及はやめないでくださいましね。ミクリさん」

その言葉はどこか別の自分にとって納得できる結論を求めている風にも見えた。

ミクリは事実究明を約束して地上に戻り、そのまま三人と別れ、ユウキともすぐジムに挑戦するということで別れた。

この日はルネに泊まり、翌日に出立して１２６、１２７、１２８番水道を通過し、チャンピオンロードをくぐりぬけていよいよ最後の難関サイユウリーグに到着した。

――――

―１０月３日　午前８時　サイユウシティ　ポケモンリーグ―

「いよいよだな……」

「ええ。ここを突破すればホウエン地方での使命は全て果たせますわ」

二人はポケモンセンターでポケモンを回復させ、薬も十分に買い込んだ後。目の前に

見える四天王への入り口を見て言った。
レッドは入り口を見据えて深呼吸した後
「よし、行くか！」
「はい！　貴方」
とバッジチェックを済ませ、簡単なルール説明を受けていざ四天王の階段へと入っていった。
―カゲツの間ー
カゲツは二人を見るや否や冷やかし半分の言葉を放った。
「フゥー、これまたいー夫婦が来たねぇ！」
レッドは尋ねた。
「貴方が最初の四天王ですか」
「おうよ！　俺は一番目のカゲツってんだ！　宜しくな！」
男は意気揚々に挨拶した。
「こちらこそ」
二人が返礼した後、カゲツが続ける。
「ポケモンリーグに来るトレーナーはままいるが本気で相手できるのは久しぶりだぜ。なんせ8枚取った記念にここ来るトレーナーばっかりでなぁ。それもお前らみたいに

名のある伝説の夫婦が相手ならば遠慮なくいけるってもんだ！」
「なるほど。四天王が手加減せずに戦っていいのはバッジ１０枚以上のトレーナーですものね……。それは確かに気が滅入ることでしょう」
　エリカはそうカゲツを気遣った。
「おう。だから俺のテンションは最高潮よ！　それじゃあそろそろいくぜ。俺の使うタイプは悪！　その狡猾で無慈悲な攻撃は如何なる隙も見逃しはしない！　ポケモンリーグでしかできない戦い、三人で楽しもうじゃねえか！　行け！　マニューラ！　アブソル！」
　――
　レッドは2体を失い、エリカは全滅してカゲツに勝利した。
「こりゃ大したもんだ……」
　カゲツは本気状態の四天王を撃破した二人を見て感心していた。
「強い……。これが本気の四天王……」
　一方レッドも全力の四天王の実力を目の前にして思わずそう呟いた。
「ま、そう怯みなさんな。俺は四天王の最初の壁にならにゃいけないから途中の四天王よりも強く見せなきゃならんのさ」
「……」

「まぁーそんな顔するなって！　俺はお前らと戦っててすげえ楽しかったし、あんたら二人ならきっとチャンピオンにだって勝てる！　さあ、次の部屋に行きな！」

カゲツは意気消沈気味の二人を励ました。

レッドは少しだけやる気を取り戻す。

こうして二人は回復させた後階段を上がり、二人目の四天王の扉を開けた。

―フヨウの間ー

「ヤッホー！」

入るとそこには祭りの催しでも彷彿とさせる格好をした少女がいた。

「さっきとはまた違う雰囲気の子だな……。それになんか子ども……？」

レッドの第一印象はそれだった。

「あの格好で寒くはないのでしょうかね……？」

エリカはレッドに小さく耳打ちした。

「やだなー、こう見えても一応あたしは14だよ！　ま、それはそうとあのツルピカのおにーちゃんを破ったってことは二人はもっと強いんだね！」

「そうなりますわね」

「やっぱりー！　どーしよ本気の四天王に勝った人なんて初めて？　だからドキドキしちゃう！　あ、自己紹介するね！　あたしの名前はフヨウ。ゴーストタイプの使い手だ

よ！　ゴーストは実体のない不思議なポケモン。あたしはおくりびやまで修行しているうちにこの不思議な子たちと心を通わせられるようになったの！」

フヨウは明るい様子で喋り続ける。

「ゴーストか……。中々手強いな。キクコさんやマツバさんと戦った時でも結構苦戦したし……」

「おくりびやまですか。なるほど霊の本山で修行し四天王になった実力者ですわね。これは侮れませんわ」

「そうでしょー。あたしとこの子たちの絆はとーってもかたいの！　二人の力であたしたちのポケモンに通用するかどうか！　ここで試してみなよ！　行って、ムウマージ！　フワライド！」

――

こうしてエリカは一匹、レッドは二匹失い勝利した。

「わぁ、やっぱり強いね！　でも正々堂々戦えて本当に楽しかったよ！　次も頑張って！」

こうして二人は次の部屋へ向かった。

―プリムの間―

「あら……。全力の四天王を前にしてここまで来れるとは。伝説の夫婦というのは誇張ではないようですね」

3人目の四天王は先の二人とは打って変わり、大人の貴婦人としての雰囲気を漂わせる女性だった。

「綺麗な人だな……」

「貴方」

エリカはレッドを牽制する。レッドはすぐ帽子を直し、襟も正した。

「私の名前はブリム。氷タイプの使い手です。貴方達が戦ったヤナギさんには少し劣るかもしれないけど……。南国のホウエンという私の祖国とは正反対で、氷タイプには厳しい環境下で鍛え上げた私のポケモンたちは決して貴方たちに引けを取るものではないと自負しています。さて、そろそろ始めましょうか。行きなさい！トドゼルガ！オニゴーリ！」

――

エリカは全滅。レッドは一匹を失い勝利した。

「やはり、噂通り……いやそれ以上の実力ですね。さあ次は四天王最後の戦いです。そこで四天王の本当の恐ろしさというものを知るのです」

―ブリムの次の階段―

ポケモンを回復させ、二人は次の部屋へ向かおうとしていた。
「次が最後の四天王か……誰だろうな」
「直接面識はありませんけどお母様から聞いたことがありますわ。確か半世紀以上にわたりフスベシティでジムリーダーを務め、ワタルさんやイブキさんを育て上げた人だとか……」
「へぇぇ……。それかなり凄い人じゃないか。強そうだな」
そう話しているうちに二人は次の四天王の部屋に入っていった。
―ゲンジの間―
「よく来たな挑戦者たちよ！　わしがサイユウリーグ最後の四天王のゲンジじゃ！」
男は見るからに歴戦の勇士といった風貌をしており、老いたといえども衰えを見せない気迫はヤナギを彷彿とさせた。
「あの……今エリカから聞いたんですけど、ワタルさんやイブキさんの師匠だとかで」
「おお。そうじゃ！　あの鼻垂れ小僧を理事長にまで育て上げたのはワシじゃ！　７０年近くも昔にフスベのリーダーになってから数々のドラゴン使いを育ててきたが、あの二人は特にワシの誇りじゃよ！　ガハハハ！」
ゲンジは本当に嬉しそうに語る。心の底から二人を思っているようである。
「へぇ……え!?　７０年!?」

「貴方。ゲンジさんは内国の四天王やジムリーダーの中では最高齢の確か……87歳でしたわね。リーダーだった頃は酔うとよく大和に乗艦していた頃のお話をされていたと母から伺っておりますわ」

「大和……ってあの戦艦大和？」

レッドにとってはあまりにも遠い時代の話であり当惑している。

「そうじゃ！　ワシは青春の頃に大和に乗っておったのじゃ！　戦に負けはしたがそれだけはワシにとっては誇りでのう。上官に怒られたりしごかれたりで嫌なことは多かったが仲間と飲み交わしたりして楽しいこともあったものじゃ。そんなある日にワシは演習の最中に失敗して海に落ちた事があっての。ポケモンに助けられた事が……」

ゲンジが夢中になって話している最中、エリカが耳打ちする。

「貴方。そろそろ止めませんと……。お母様はこの話になると1時間は止まらないと仰せになっていましたわ」

「え。なんでだよ……お前が言わせたんだろ？」

「そ、それはそうですけど」

二人がひそひそ話しているとゲンジが睨んできた。

「おい！　聞いておるのか！」

「あぁすみません。あの、そろそろ勝負の方を……」

レッドが申し訳なさそうにゲンジに言う。
「ん……。おぉそうじゃったの！　すまなかった。もう分かっているとは思うがワシの使うタイプはドラゴンタイプじゃ。全てのポケモンの中でも随一の強さを持つポケモンじゃ。そんなポケモンと相対する時、トレーナーとして何が必要か。どうすれば良いのか。伝説の夫婦と呼ばれるお前たちがどこまでそれを理解しているのか、試させてもらう！」

――

レッドは一体、エリカも二体失いどうにか勝利した。
「うむ。十分にわかってるようじゃの。ポケモントレーナーに必要なのは正しい心！　それをなくしては強くはなれん。さあ、先に進むが良い。チャンピオンが待っておるぞ！」
二人はポケモンを回復させ、いよいよチャンピオンとの決戦に臨む。
―ミクリの間―
二人がたどり着いた先に居たのはミクリだった。
「ようこそ。チャンピオンの間へ。チャンピオンになってからと言うもの、いろいろな人間と戦ってきたが、君たちのように全力をだしたジムリーダーを16人も破り、そしてわがホウエン地方の誇る精鋭の四天王もあっさりと倒しここまで来るというのは初

めてだよ」
「いえいえ……」
レッドとエリカはそう謙遜する。
「恐らく、君たちはここがホウエン地方における最後の戦いになるのだろう。ここで何を学び、何を見てきたのか、そして、どちらがここでよりエレガントに舞えるのか！　サイユウリーグのチャンピオンである私に見せていただこうか！」
――
レッドは2体、エリカも得意なタイプであるにもかかわらずチャンピオンが相手ともなると実力差がでてしまうのか2体を失った。
「ホウエン地方で頂点に立つ私をも打ち負かすとは……。憎らしいほどエレガンス！　そしてとってもグロリアス！　流石は伝説の夫婦だ！　君たちならばきっとどこの地方でも通用するだろう！」
「ありがとうございます！」
「君たちは私を破り、ホウエンでも比類なきものたちの一人となった。その偉業をこのホウエンリーグの殿堂に刻み込もう。さあ、ついてくるといい」
こうしてレッドとエリカは殿堂入りの儀式を終え、ポケモンリーグを出た。
―午後3時　ポケモンリーグ　入口前―

「終わったな……」
　レッドは五ヶ月近くにも及ぶホウエンの旅を終え、感慨深げにそう言った。
「ええ。過ぎれば早いものですわね……。来た時は蒸し暑くなりつつあったというのに、今では風に秋の気配を感じますわ」
　エリカの言う通り、季節は１０月を迎えて冬の準備に入っていた。
「次はシンオウ地方か。この国で一番北にある場所だよな」
「ええ。丁度この時期から本格的に寒くなってきますし、冬物も用意しなければなりませんわね」
「そうだな……。そういえばシンオウの船はどっちの街いきゃいいんだろうな？」
　エリカは暫し考えた後
「カイナでもミナモでもどちらでも良いとは思いますが、リザードンの負担を考えればミナモの方が近いですし良いと思いますわ」
「そうだな……。よし、じゃあミナモに行くか」
　そういうわけで二人はサイユウからミナモシティへリザードンに乗って移った。
　―午後５時３０分　ミナモデパート　一階―
　二人はミナモシティに着いた後、ミナモデパートでシンオウで必要になると思われる服以外のゴーグルやカイロなどの防寒具を買い込み、一階の休憩スペースで休んでい

た。

「ふう。まあこれだけあればなんとかなるだろ」

レッドは満足げな表情で街を歩いていた。

「なんとかなるでしょうけど結構買いましたわよね……。いくらシンオウとはいってもやりすぎのような気がしますが」

レッドは紙袋6つほどを満杯にして持っていた。

「ハハハ……。まあ買ったものは向こうのポケモンセンターに送るしそこから必要な分だけ持ってけばいいだろ」

ポケモンセンターはトレーナーの補助として全国各地のポケモンセンターに重くてかさばる荷物を配送・保管するサービスを請け負っている。

「左様ですわね。まあありすぎて困るものでもありませんし……」

そうこう話しているとある人物が二人の前に現れた。

「あ！　レッドさんにエリカさん！　お久しぶりです」

ゴールドはしっかりと会釈した。

二人は返礼の後、ゴールドを見た。

「あら……ゴールドさん前と随分変わりましたわね。何かあったのですか？」

先月会った時と比べ顔はしっかりと締まっており、精悍な雰囲気もうかがわせる。前

のような軟弱な印象は消え去っていた。
「え……あぁまあ。聞いてくれますか……いえ。寧ろレッドさんにこそ聞いていただきたいです」
「お……おう」
「実はこの間ワタルさんから電話があって……。そこからいろいろ」
ゴールドは滔々と話し始めた。

――

―9月13日　午後11時　ハナダシティ　カスミ宅―
ゴールドはナギと初めて戦った5月以来毎月ハナダシティに帰ってはカスミと宜しくやっていた。
この月もまたカスミと数時間に亘って茵を共にし、行為を終えてベットに二人横たわっている。
「はぁ……」
「どうしたのゴールド？　元気ないわね」
カスミは心配そうにゴールドに体を向ける。
「実はさぁ……ワタルさんにここ最近たるんでるぞってズバッと言われちゃってさぁ。最悪の場合はＰＷＴの件そのものをなしにするぞって」

「まあひっどーい！　あのヘタレ理事長がそこまで言うって事はエリカになにか言われたのね！　本人はバレてないと思ってるけどあの子にベタ惚れなの丸わかりなのにねー」

　カスミはあからさまに不満を露わにした。

「エ、エリカさんが？」

「そーそー。きっと何か思い切ったこと言わないと駄目とかなんとか言ったに決まってんのよ！　そんな事言ってゴールドがどんなに傷つくか分かっているのかしら？」

「ううん……。そうかもしれないけど……エリカさんも別に間違ったこと言ってるわけじゃ」

　ゴールドはそうエリカをかばう発言をしたがカスミはすぐに返した。

「あんな遊びもロクに知らない温室育ちのお嬢様の言うことなんてね。筋が通ってたとしても聞く必要なんかないわよ。人には小難しい理屈だけじゃ片付かないことが一杯あるのにエリカはそれを分かってないんだから！　ほんっとムカつく」

　カスミは心の中ではエリカの事を快く思ってないようだ。

「そ、そうかなぁ」

「そうよ！　いい？　あたしはね。ゴールドはゴールドのペースで自分の目標に向かってほしいの！　誰にとやかく言われる筋合いなんてないわ！　あの子の言うことなん

て気にすることないから！　それともゴールドはあたしよりエリカの方がいいっていうの？」
「い、いやそうじゃないよ。僕にとってカスミは一番の彼女だから」
「へへ嬉しー！　ゴールドっ」
カスミはそのままゴールドに抱きつき、もう一度体を交じらわすのだった。
―９月１４日　午前７時３０分　同所―
ゴールドが朝起きるとカスミは朝食を作っていた。
「あ、ゴールドおはよー！」
「ん、あぁ……おはよ」
ゴールドは眠い目をこすりながら起き上がった。
「朝ごはん作ってるから、その間に顔でも洗ってくれば？」
「分かった……そうする」
ゴールドがベッドから降りるとポケギアが鳴り響いた。
「はい……もしもし」
「ああゴールド？　お母さんだけど」
「お、お母さん!?　どうしたのこんな朝早く」
「ちょっとあんたに用があってねぇ。なんでも今こっち来てるんだって？」

「え？　なんで知ってるの？」

　ゴールドは不調を悟られるのを避ける為かカントーに戻っていることを母親には知らせていない。

「ん。まあ虫のしらせってやつね。なにか相談したいこととか悩みとか。そんなんあるからわざわざこっち来たんでしょ？　お母さんだったらなんでも聞いてあげるからいつでも帰っておいでって」

「お母さん……。実はさ……上手く行ってないんだ。ホウエン地方でのバッジ獲得」

　ゴールドは少しずつ母親に今日までの経緯を話した。

「そらぁあんたがしっかりせんのが悪いんじゃないの！　カスミさんやら他のトレーナーやらに甘えて自分を律しようとしないからいつまで経っても勝てないんじゃないの？」

　ゴールドの母親は厳しい口調で叱った。ちなみにカスミと付き合っていることは既に承知済みである。

「いや、それはそうかもしれないけど……」

「歯切れの悪い言い方すんじゃないの！　いい？　ちゃんと今自分は何をすべきか考えて行動しないと本当にワタルさんから見放されちゃうわよ？　それでもいいの？」

「そ、それは困る」

「そうでしょ？　だったらもっとシャンとしなさい！　こんな事お母さんしかビシッといえないんだからね？」

それから１０分ほど母親からの説教は続いたがゴールドは曖昧な返事を繰り返すばかりだったので呆れた母親はそのまま電話を切ってしまった。

―同日　午後２時　ワカバタウン　ウツギポケモン研究所前―

ウツギはこの時日課の植栽への水撒きをしていた。

そこに偶然ゴールドの母親が買い出しの最中に通りがかった。

「あぁ、ゴールド君のお母さん。こんにちは」

「ああどうもこんにちは……」

母親はいつもに比べ声量が小さかった。

「おや？　元気がありませんね。どうしました？」

「それが聞いてくださいようちの子ったらだらしがないんです！　なんでもバッジ集めが進まないとかでね。その原因が……」

母親はゴールドの不甲斐なさをウツギに愚痴としてこぼした。ウツギとはゴールドにポケモンを託されてからの付き合いでありお互いの事をよく話し合っている。

「へぇ……ゴールド君がそんな事になってるとはねぇ。まぁとにかくお母さん。様子を見ましょうよ。彼は一人前のトレーナーになったとはいってもまだまだ子どもな訳で

すしそういう時期もありますって」

「そういう風に甘やかしていたら駄目なんですよあの子は！　ある程度の緊張感がないとどんどんたるんで行っちゃうんですから……はぁもう本当どうしましょ……」

母親は相当に考え込んでしまっている様子である。母親である為自分の子どもの事はよくわかっているのだろう。

そんな話を傍らで聞いている男がいた。

―午後7時30分　ワカバタウン　ツクシ宅―

ツクシはリーグを辞めて研究員になって以来、リーダー時代の貯金を使ってワカバで中古の家を買っていた。ウツギが用意してくれるとは言ったが当人は集合住宅は困ると断ったのである。何故ならばアカネが同棲することになっていた為、冷やかされたり妙な噂をたてられるのを懸念したからだ。

それからというもの、アカネは仕事もある為毎日とはいかないが月に数回以上は必ずツクシの家で晩ごはんを作り一緒に食べることにしていた。

「もう。食器洗いくらい僕にやらせてくれてもいいじゃないか。そんなにお腹大きいんだしもっと安静にしてないと……」

流石に同棲して数ヶ月も経過すればツクシもいい加減アカネに敬語を使わなくても平気になりつつあった。しかしこれは家の中だけであり、外に出ると恥ずかしさからか

以前の口調に戻ってしまうが。
「ええのええの気い使わんで。たまにしか一緒に居られんのやからこれくらい好きにやらせてぇな」
　彼女は皿を拭きながら言う。アカネはコガネにマンションを借りているがツクシと同棲するようになってからというものあまり帰らなくなってしまった。
「そうは言ったって……ほら仕事も全然減らしてないみたいだし、そろそろ大事を取ったら？　生活は僕がなんとかするしさ」
「なーに一丁前に心配しとん。ツクシが心配せんでも銭ならうなるほどあるっての。ウチがなんぼ稼いどるか知らんわけやないやろ？」
　アカネはニコニコ笑いながらそう言って見せる。アカネはリーダー以外にも芸能活動やドラマや映画など女優としての活動で途方もない額を稼ぎ出していた。
「ま……確かにそうだけどね」
「やろ？　まー確かにツクシの言う通りやし。来月くらいから仕事少しずつセーブしよかなぁって事務所やマネージャーとも連絡とっとるし心配せんでええて」
「そう……まあ自分で分かっているならいいけどさ」
　アカネの要領の良さは類稀なるものだとツクシはここ数ヶ月特に痛感させられている。

「ツクシは今日の仕事どうだったん？」
「うん。今日はフィールドワークで久々に近所の２９番道路の野生のポケモンについていろいろ生態調査してたんだ。今日は結構珍しい型の虫ポケモンみつけられたし大収穫だったよ。明日からこれと最近調べた付近のデータを下に東ジョウトのポケモンの生息域における動態の傾向について報告書をまとめるんだ」
「へぇ……。研究者も大変やねぇ。そないなこまい仕事をせなあかんもんな。ま、ぼちぼち頑張ってな」
　アカネは皿と食器をまとめて片付けながら言う。
「うん。あーそれでさ。ちょっと気になること聞いちゃったんだけど……」
「何？」
「あの……ゴールド君がホウエン地方であんまり上手くいってないんだってさ」
「ゴールドが？　なんでなんで？」
　アカネは残った皿を拭きながらツクシに興味津々に近づく。
「いやそれがなんでも……」
　ツクシはウツギと母親の会話から聞けた限りの事を話した。話を聞いていたアカネは時を経るごとに青筋をたてていく。
「あのアカンタレ！　そないな弱気な事でこれからどないするっちゅうねん！」

「いやそんな怒らなくても……」
「アホ！　怒らんでどうする！　あれがそのままジョウトの代表として出て負けでもしたらジョウトの恥！　それは即ちコガネの恥やで！」
「ま、まぁとにかく落ち着いてよ。赤ちゃんに悪いよ？」
ツクシに諭された彼女は皿を置いて深呼吸する。
「ハァ……。せやな。落ち着かなな……。それにしてもこのままほかしとく訳にもいかんしなぁ……せや！　ウチにいい考えがある！」
―9月16日　午後1時10分　ワカバタウン　ゴールド宅　ダイニング―
ゴールドは昨日母親から一昨日きつく言ったことを直接謝りたいという事で久々にワカバタウンの自宅に戻っていた。彼は久々に母親の手料理を食べ大層満足げな様子である。
「お母さん。美味しかったよ！　本当にありがと」
ゴールドは心の底からそう母親に礼を言った。
「そう？　フフフ。ありがとうねゴールド」
母親は食器を片付けた机を拭きながら言う。
「ゴールド。一昨日は本当にごめんね……。お母さんついあの時は熱くなっちゃって……」

「いいんだよ全然別に……。僕は気にしてないから」
母親は拭く手を止めた。そして、ゴールドの目と合わせる。
「でも。これだけは聞いて。私は本当にゴールドの将来を心配して言ってるの。このままズルズル行ったら決していい結果にはならないとお母さん思うの」
「……」
ゴールドはやはり痛い所を突かれているのか反射で目を逸らしてしまう。
「ゴールド！」
「は、はいっ」
母親はゴールドの両肩を掴む。
「お母さんの目を見て！　約束してちょうだい。カスミさんと別れろとは言わないわ。弱音を吐かないでとも言わない。でも。そうやって自分のするべきことから逃げ続けて他の人を心配させるのだけはやめなさい」
母親は真に迫った声色でゴールドの心に問いかけるように言った。
「お母さん……」
ゴールドは複雑な表情をしている。
「これはお母さんだけが思っていることじゃないわ。ウツギ博士も、ワタルさんも、貴方にそのジムバッジをくれた人。あなたに期待している人皆がそう思っているのよ！

だから……。そういう人の期待を裏切るような事はしないでちょうだい！　これからは自分を律して、一生懸命自分のポケモンと修行に打ち込む。そう約束して！」

「……」

　ゴールドは目を合わせもせず深刻そうな表情で唇を噛んでいた。内心ではこれにうんと言えない自分の不甲斐なさに悔しさを感じているようにも見える。

「お母さん……」

「ゴールド！　お前大概にせえよ！」

　そうしていると階段とダイニングを分ける壁からアカネが憤然とした様子で出てきた。

「ア……アカネさん!?」

　ゴールドは突然のアカネの登場に目を瞬かせる。

「久しぶりやなぁ。ゴールド。あの時はコテンパンにやられたんやったが……思えばワレにジムバッジやったんは間違いやったかもしれへんな！」

「な……何だって」

「何だってやあるかい！　自分の母親にこんなん言わせて恥ずいと思わんのか？」

「そ、そりゃあ思いますよ」

　ゴールドは即答する。

「ほー。思うんか。せやったらなんでうんと言いひんねん？」
「そ……それは。あの心の準備が」
「アホか！　何が心の準備や。結局おどれは自分の彼女と宜しくやり続けたい。なんもせんとただ褒められたい思っとるだけやろ？　ちゃうんか？」
　ゴールドはアカネの言葉が正に真を突いていたため黙るしか無かった。
「フン。黙ったちゅうことはどうやら図星のようやな。ウチなぁ……おどれみたいに人生舐め腐ってる輩見るとどつき回したなるねん！　どんなにバトルが強かろうとなぁ。磨かなければどんどん腐ってくだけやで」
「フッ……」
「おい、何わろてんねん！」
「アカネさん……言っちゃ悪いですけど貴女のトレーナーとしての評判は下の下ですよ？　所詮は忙しい副業の合間を縫って有り合わせでしか戦えないつまらないトレーナーだってミナモのトレーナーファンクラブでは散々の言われようでした」
「な……何やと！　ウチはこれでもリーダーとして一生懸命やってんねんぞ！　あったまきた！　ゴールド表に出い！　ウソかホントか確かめさせたる！　ホウエンの田舎もんにウチの評価決められたらたまったもんやあらへん！」
　という訳で二人は表に出た。

―午後1時４０分　ワカバタウン　広場―

アカネとゴールドが勝負をするということで町の人が集まってきた。その中には母親は勿論ウツギ博士やツクシなどポケモン研究所の所員もいた。

「ギャラリーがこんなもんじゃ寂しいな……。ま、しゃーないわ！　ゴールド！　６対６の真剣勝負や！　その舐め腐った心に思い切り喝を……」

「アカネちゃーん」

アカネがポーズを決めてゴールドと勝負しようとするとマネージャーと思しきスーツを着た女性が駆け寄ってきた。

「え……？　もうそんな時間なん？　ええ……あと1時間！　いや３０分……。ええって？　スマン！　堪忍なホンマ」

そう言うとマネージャーは離れていった。

「オホン！　そういう訳や！　あんま時間あらへんし、1対1のタイマンで勝負やで！　それでええな？　ウチが勝ったらミナモでアカネ様は世界で比類なき最高のトレーナーでございましたって言うんやぞ！　ええな!?」

「な……なんですかそれ」

「なんですかもこうですかもない！　いくで！　行けぇ！　ハピナス！」

ゴールドは帽子をかぶり直して一息ついた後

「行け、ヘラクロス！」
と、ヘラクロスを出した。
「ヘラクロス！　かわらわりだ！」
ゴールドはハピナス相手ならばかわらわりで十分だろうと考えかわらわりを指示。
飛び上がったヘラクロスはハピナスの脳天に手痛い一撃を味わわせた。
「へっ……どうだ」
しかし、ハピナスは倒れない。深刻なダメージをくらいはしたがなんとか立っていた。
「うちのハピちゃんを甘くみたらしょっぱいでぇ！　ハピナス！　火炎放射や！」
ハピナスは至近距離からそのままヘラクロスに火炎放射を食らわせる。ヘラクロスの黒く鍛え抜かれた体が紅蓮の炎に包まれる。
「ふっ……。火炎放射か……。僕の計算だったら一撃では倒れないはず！　次こそ……！」
やがてハピナスは吹き終わり、炎もフィールドから消えた。
「あ……あれ!?」
炎が消えるとヘラクロスはひっくり返っていた。
「嘘だろ……」

ゴールドはその場にへたりつく。
「へっ……甘いねんゴールド。ウチのハピナスよーぅ見てみい」
そう言われてゴールドはハピナスの体を見る。よく見ると、ハピナスの頭のロールの最後部にメガネらしきものがかかっていた。
「あ……ああ！　これは……」
「その面見た限りじゃ知っとるみたいやね。せや。これはこだわりメガネ。一つしか技が出せなくなる代わりに特殊技の威力が1．4倍されるごっつぇえ道具やで」
アカネは勝ち誇った表情で言う。
「き……汚いぞ！　こんな所でもかけるというだなんて……」
「アホちゃう？　目にかけてないだけで掛けとるやないの。ヒッヒッ」
アカネは笑ってみせる。
「まぁこれに懲りて自分の力に自惚れんことやね。ほな、ウチこれから仕事行かなアカンからゴールド。さいなら～」
ハピナスを戻した後、アカネは上機嫌な様子でその場を立ち去っていった。
「そんな……まさか僕が……こんなに弱くなっていただなんて」
ゴールドの心中はアカネの小狡いやり方よりもそれを見抜けなかった自分の勘や実力の衰えへの恥で一杯だった。

―10月4日　午後6時　ミナモデパート　一階　休憩スペース―

「それから僕は心機一転してホウエンに戻って……死に物狂いで修行して三日前にやっとナギさんを倒し、ここまで来たんです」

ゴールドはそう言うとナギを破った証であるフェザーバッジを見せた。

「あら……そうだったのですか」

エリカはかなりホッとした表情でゴールドを見ている。どうやら見込み違いではなかったようだ。

「なるほどな……頑張ったなお前」

「ありがとうございます！　僕、今回のことで目が覚めました。もっともっと修行して、強くなって……レッドさんに必ず勝ってみせます！」

ゴールドの目は決意そのものだった。

「フフフ……。そう言ってもらえたならば私もワタルさんに進言した甲斐がありましたわ。ゴールドさん。これからも精進してくださりませね」

エリカはにっこりとした心からの笑顔でゴールドを激励した。

「はい！　と……そういえば今更ですけどレッドさんその荷物はなんですか？」

ゴールドは傍らに置いてある紙袋を指差す。

「ん？　ああ、明日シンオウに発つからな。その準備でカイロとかゴーグルとか防寒具

をいろいろ仕込んだんだ」
「シンオウ地方は北の大地と言われるだけあって寒いですからね……。備えは万全にしておかねばなりませんわ」
「シンオウって事はもうリーグまで行ったってことですよね!?」
ゴールドは目を丸くしている。
「そうだ」
「あわわ……こりゃあ僕も急がないとなぁ、まだトクサネとルネがありますし……」
「ま。そこは遅れた分仕方ないわな。早く追いついてこいよ！」
「勿論！　次はシンオウのどこかでお会いしましょう！　それじゃ！」
そう行ってゴールドは立ち去っていった。
その傍ら、物陰で赤毛の少年が一人つぶやいた。
「ゴールド……。やっと本気だすつもりになったな。次に戦う時は……必ず俺が勝つ！」
そう言うと赤毛の少年はどこぞへと消えた。
―同日　午後8時　ミナモシティ　ポケモンセンター―
その後、レッドはシンオウ地方のミオシティのポケモンセンターに荷物を送り、二人はホウエン最後の夜を過ごしている。

エリカはレッドが風呂に入っている間、アカネに感謝の電話をしていた。
「アカネさん。本当にありがとうございました。これでどうにかＰＷＴへつなげられそうですわ！」
「ええてええて。あれでゴールドが本気だしてくれたんなら万々歳やわホンマ」
「しかしアカネさんも随分と今回は思い切りましたわね……。ゴールドさんのお母様まで抱き込んであんなことをするだなんて」
彼女は感心した様子の声で言う。
「ま。まぁな。あれ本当はもっと早くでよかなー思っとったんやけどゴールドの母ちゃんによっぽどの事がない限りはと、止められてなー。我慢しとったんやけどどうもああいう煮え切らん奴は好かんくてな」
アカネはやや照れながら当時を振り返っている。
「あれくらいの事をしなければゴールドさんは変わらなかったと思いますわよ。本当いい仕事をしてくださいました」
「アイツのために撮影の仕事一つドタキャンして、二つ日程ずらしてもろたんやけどそれに見合うだけの事はしたと思うとるよ。ウチもやっぱりコガネの人間であると同時にジョウトの人間やからな。その代表たるゴールドには期待しとる分しっかりしてもらわんとな」

「まぁそんな事まで……。あれからなにか支障などありませんでしたか？」
「ええのよ別に。他にぎょうさんあるし埋め合わせはいくらでもするがな」
アカネは軽く笑い飛ばしながら言った。
「アカネさん。これからもどうかゴールドさんの事見守ってくださいましね」
「これからもは嫌やなー。ウチにはツクシがおるもん」
アカネはまた冗談めかした風に言う。
それからレッドが上がるまで二人の会話は続いた。
―10月5日　午前9時　ミナモシティ　港―
『午前10時出港予定のミオ行きのオーベル号に乗船を希望されるお客様はお早めに乗船手続きをお済ませください……』
その船こそが二人がシンオウ地方へ向かう船である。
レッドとエリカは待合室でホウエン地方最後の時を過ごしていた。
「長いようであっという間だったなホウエン地方」
「ええ。そうですわね。いろいろな事がありましたが……いまとなっては良い糧になっていると思いますわ」
「ああ……そうだな」
レッドはホウエン地方のバッジケースを開く。8枚のバッジを眺めながら少しだけ

その時の事に思いを馳せた。
「次はシンオウ地方か……。今までよりも過酷な場所になるだろうけど、頑張らなきゃな」
「ええ。貴方。私はどこまでもついていきますわ！」
『オーベル号は只今から乗船可能になりました。乗船される方は乗船口よりお進みください。乗船手続きの締切は……』
「よし。行くか！」
こうして二人は待合室を離れ、乗船するのであった。
季節は夏から秋へと移り変わり、過ぎる風は冷気を少しずつ強めていく。
真夏のホウエンを終え、二人は北の大地シンオウ地方への舵をきるのであった。
―第二十一話　夏の終わり　終―

シンオウ編（２０１３．１０―２０１３．１２）
第二十二話　北国へのいざない

―１０月５日　午前１１時　オーベル号　甲板―

乗船して部屋で暫し寛いだ後、退屈なのでとりあえず二人は甲板に出てみることにした。

「おお……どんどん岸から離れていくな」

至極当然のことだがやはりそう呟きたく成る気持ちに駆られてしまう。

「これからは全く正反対の島へいくのですね……。なんとも不思議な気分ですわ」

エリカはそう切実な表情をしながら言う。

「やっぱシンオウは寒いんだろうな。シロガネ山も寒かったけどそれ以上だろう。覚悟はしてるけどやっぱり気が進まない……」

「その寒さも修行のうちですわよ。気を引き締めていきませんと」

「そうだな。頑張らないと……」

そうこう話していると後ろから声がした。

「グハハハハハ！　そうだ。シンオウの冬は厳しいぞご両人！　気張っていかねばな」

二人が振り向くと、紫色の髪をした壮年の男が立っていた。筋骨隆々で鋭い眼光をしており、人生の荒波をくぐりぬけてきた老練な雰囲気も漂わせている。
「あの……貴方は」
「あら？　もしかして……トウガンさんですか？」
「なんだ知っているのか？」
レッドはエリカに尋ねる。
「ええ。地質学の博士号の学位を持ちながらジムリーダーもつとめあげるミオ大学教授のトウガンさんですわ。以前学術誌でそのお姿を拝見したことがありまして」
「おお。伝説の夫婦のエリカ女史に名前を覚えてもらえてるとは光栄だ！　さて、自己紹介をしよう。私はトウガン！　彼女の言う通り到着先のミオシティでリーダーをやっている。一応教授だが……最近は本業の方が忙しくなってな。ここ数年は休職している」
「あらそうでしたか……」
エリカはやや申し訳なさそうな様子だ。
「本業ってなんですか？」
「グハハ。これよ」
トウガンはどこに持っていたのか大型のスコップを誇らしげに見せる。

「シャベル……ですか？」
「まぁそうとも言うがな。これはスコップ。我々の業界では剣スコップと呼んでいるものだ」
「え。シャベルじゃないんですか？　俺はそう教えられたのですが……。なあエリカ」
　レッドはエリカに同意を求める。
「どちらでも良いのですわ。スコップはオランダ語。シャベルは英語からきているものですし同じ意味の言葉を違う言語で発音しているだけの事ですわね」
　レッドは納得した表情でうなずく。
「うむ。流石はよく心得ているなエリカ女史よ。それはそうと私は化石をはじめとする石を発掘するのが生業でな。今回ホウエンに来たのもその関連なのだ」
「へぇ。そうでしたか」
「というのもな。シンオウでテンガン山に化石を調査する機会があって調べてみたのだが、なんと、どう考えても周辺と年代が合わない岩石が発見されたのだよ」
「えっ？」
　エリカが関心を示してやや前かがみになる。
「私はひと目見ただけで直感でおかしいと思ったから石を大学に持ち帰って調べてみたら……まさにそうだった。他の同じくらいの大きさの岩石は古くてもせいぜい数世紀

程前にその場所に来たものだったのだが、その場所にあったものはなんと千年も昔のものだったのだ。不思議な話じゃないかね?」

「左様ですわね。明らかにその石だけ浮いてますわ」

「それでジムはトレーナーに任せ、この前はジョウトのシロガネ山、今回はホウエン地方のえんとつ山に行って似たような石がないか調べていたんだが……。この二つの山では更に不可解な事が分かったのだ。シロガネ山及びえんとつ山を隈なく調べた結果。岩石の組成がその山でよく見られる岩と比べて異なり、かつテンガン山のそれと酷似するものがあったのだ。帰って照合してみないと確定した事は言えんが恐らくは最初に調べた岩と同じものと考えられるだろう」

トウガンは早めの口調でそう話した。

「それってつまり……どういうことです?」

「つまり同時多発的に全国各地の全く異なる場所でテンガン山の岩石が出現したという事になりますわね」

「そんな事ってあり得るん……ですか?」

「まあ普通に考えれば有り得ない事だろうな。岩石というものは火山活動や地中活動などを通じて何万年、何億年もかけて生成され、何十年何百年もかけてゆっくりと移動するものだ。その場にポンと出てくるということは断じて有り得ないと言える……ただ

一つを除いてはな」

トウガンの眼がにわかに光ったように見えた。

「ただ一つ？」

「〝ポケモンの力〟だ。聞けば我が地方の神として伝わる伝説のポケモン。ディアルガは時空を操る力を持つという。それと同じく、空間を操る力をもつと伝わるパルキア。この二体のポケモンならば……あるいはな」

「そ。そうなんですか」

レッドは話が面白くなってきたとばかりに目を輝かせる。

「そんな……。ディアルガとパルキアはあくまで伝承の域を出ないポケモンで、有史以来誰も姿を確かめた事がないのですよ？　自然科学に携わる専門家がそういう不確かな事を口にするものではないと思いますわね」

「グハハハハ。勿論私も本気でそう思っているわけじゃあない。だがそうとでも考えないと辻褄が合わない事が自然科学の証拠の一つに起きていると示唆されているのは事実なのだ」

「それもそうですが……」

「おっと話が難しくなってしまったな！　そういう訳だから私は着いたらすぐに岩石の検証にかからねばならん。すまんが、挑戦は後に回してくれ」

トウガンは申し訳無さそうな口調で言う。
「わ、分かりました」
レッドは気圧されるように返答する。
「まあその代り……といってはなんだがクロガネシティという街で息子のヒョウタが同じくジムリーダーになっている。私に言わせればまだまだ半人前だが、まあ小手調べくらいにはなるだろう！　相手してやってくれい」
それから数分くらい話してトウガンは船室に帰っていった。
「シンオウ地方もいろいろと立て込みそうだな……」
「ええ。謎めいたお話もありますしね。気合を入れていきましょう」
それからおよそ丸一日かかって船は北上し、シンオウ地方へ近づいていった。
―10月6日　午前11時　同船　106号室―
『長らくの船旅お疲れ様でした。本船はまもなくミオ港に到着いたします。お忘れ物のございませんようくれぐれもご注意の上、下船のご支度を……』
アナウンスが流れる。外を見るとシンオウの大地が二人の目の前にあった。
「いよいよですわね」
「ああ。試される大地とも聞くここシンオウ地方……。どれ程のものか確かめようじゃねえか。行くぞ」

「はい。貴方！」

そう言って二人は船室を出て出口へと向かった。

―ミオシティ　シンオウの玄関口。穏やかな街で宿泊施設が多い。かつては鉄鉱として用いられていた鋼鉄島が北方にあり、よく使われていたという経緯もあってか食堂も多い。ミオ図書館もあり、学問をする場所にも適している。ミオ大学はシンオウ二番手の大学。海洋・鉱業学部といった実学が目玉である。

―午前11時30分　ミオシティ　港出入り口前―

外に出てみるとつい昨日までいたホウエン地方とは真逆の冷たい風が二人に吹いてきた。

「予想はしていたが……やっぱり肌寒いな」

「予報によれば今日は強い寒気が流れこんでいて最高気温は11度のようですわ。ホウエン地方に比べると倍近く違いますわね……。北の大地と言われるだけの事はありますわ」

そう言いながらエリカは若葉色のストールを首に巻く。すると前から白い帽子を被り、赤色のコートにマフラーをした12歳くらいの女の子が駆け寄ってきた。寒冷地のシンオウ地方らしい服装である。

「あの。レッドさんにエリカさんですか?」

「え。ええ。そうですけど……何か御用ですか？」
エリカが膝をかがめて接する。
「はじめまして！　私、ナナカマド博士の遣いで来たヒカリっていいます！」
ヒカリと名乗ったその少女は礼儀正しくお辞儀をして二人を迎えた。
「ナナカマド博士というとポケモン博士ですか？」
「はい。お二人が着いたらマサゴにある研究所までお連れするようにと承っています」
ヒカリは言いなれていないのかやたどたどしい口調である。
「ああそうか。新地方恒例の御三家もらう儀式か……」
「貴方は今回何を選ぶのですか？」
「どうせお前は草タイプ選ぶんだろ。まあ。行ってから決めるよ……。ってそうだその前にミオのポケモンセンターに荷物預けてるんだ。取りに行かないと」
「そうでしたか……。私もポケモン回復させたいですし一緒に行ってもいいですか？」
二人は快諾し、そのままポケモンセンターに向かうことにした。二人はヒカリに案内されながら港からポケモンセンターへ歩く。
「ヒカリさんはやはりトレーナーなのですか？」
エリカがヒカリに尋ねる。
「はい。いわゆるモラトリアム期間中のトレーナーです！」

「左様ですか。バッジ集めは順調に進んでいますか？　トレーナーの方は相当ご苦労なさっていると聞き及びますけれど」
「そうですねぇ。まあ可もなく不可もなくってところですかねぇ。一応今は五枚集めてここも取れれば六枚です」
　バッジ五枚はモラトリアム期間の限界とされている枚数である。
「あら。それは相当に努力なさいましたわね。リーグの統計によればモラトリアム期間内にそれだけ集められるのは上位１０％ほどですから」
「へへへ。エリカさんに褒められるとすごく嬉しいです！　私、とにかく良い高校に入ってお父さんお母さんの喜ぶ顔が見たいんです。だから少しでも有利になるようあと５ヶ月で六枚目も取りたいなぁなんて……」
　ヒカリはいきいきとした表情で語る。バッジを三枚以上取得した者には中学を飛び越えて高校受験の資格が与えられる。バッジの枚数が多ければ多いほど高校入試の上で有利なのはモラトリアムを受けるもののなかでは常識だった。
「それは結構な事ですけれどお勉強の方はきちんと進んでいるのですか？　いくら優遇措置があるとは言え難関校は無試験では入れてくれませんわよ？」
「ハハハ……。そこ言われちゃうと弱いんですよね。いや、あのもちろんやってますよ？　やってますけど、ポケモンのお世話とか遊んでいるほうが楽しくてついつい……」

ヒカリの声は少しずつ小さくなっていく。エリカはふうとため息をついた。
「私のジムにもよくそういう勉強よりもポケモンの方に気が行ってしまっている子はいますわ。それではいけませんわヒカリさん。学校は勉強をするところなのですから」
「わかってはいるんですけどね……。そうだ、あのエリカさん」
「何でしょう?」
「初対面で厚かましいかもしれないんですけど……どうしてもわからない問題があって。教えていただけませんか? 参考書とか読んでもあまりピンとこなくて」
「勿論。私で良ければお教えしますわ」
エリカは自信たっぷりな様子でいう。どんな問題が来ようとタマムシ大首席の敵ではないのだろう。
「本当ですか!? 良かったー。昨日問題集解いててずっと引っかかってたんです。ポケモンセンターに着いたらお願いしますね」
ヒカリは喜々とした表情で歩いている。
「それにしてもお二人はすごいですよねぇ。私なんて2年半かかってやっと5枚集めたのにお二人は8ヶ月でもう16枚集めたんですよね? しかも手加減じゃなくて全力を出したジムリーダーを前にして……」
ヒカリは尊敬の眼差しで二人をみている。レッドは平静を装っているが心の中では

女の子に褒めてもらえてかなり有頂天な様子だ。
「いえいえそんな……。レッドさんの強さあってこそですわ」
「ま。まぁそれ相応に頑張ったから」
「凄いなぁ……。私からしたら本当雲の上みたいな人ですよ。どうやったらそんなに強くなれるんですか？」
少し間が空く。エリカは空気を察してか答えない様子だ。
「貴方」
エリカが肘で優しく小突いた。
「え？　俺？」
彼女は黙って首を縦に振った。
「そ……そうだな。とにかくポケモンと心を通じ合わせる事かな。やればやっただけあいつらは返してくれるから」
「へ。へぇー……。分かりました。頑張ってみます。私の可愛いポケモンたちだもの。もっともっと色々な事知らなきゃ強くなれませんもんね」
「うん。まぁそれだけの力があるんだ。ヒカリちゃんならきっとやれるよ」
レッドは生意気にもちゃん付けでヒカリを呼ぶ。
「は、はい！　よぉしレッドさんの言う通りに修行して絶対マインバッジ取ってみせま

す！　受験の本格的な準備を考えるとあまり時間はないけど……必ず」
ヒカリは拳を握りしめ、力強い様子でそう決意を表明した。
そうこう話しているうちに二人はポケモンセンターに到着した。
―正午　ポケモンセンター―
三人はポケモンセンターに着くとヒカリはポケモンを回復させ、レッドとエリカは荷物を回収し必要な分だけ取り出して次の地点となるであろうコトブキシティへ荷物を送る作業をした。
ミナモに引き続いてレッドが荷物の作業を引き受けたため、エリカはレッドが机で伝票を書いている横でヒカリに勉強を教えている。
「つまり、問題の示す三角形の面積にするためにはこの点Pはどこの座標にいなければならないかという風に考えれば良いのです」
エリカはヒカリの出した二次関数の問題を分かりやすく図説した後こう締めくくる。
「なるほどそう考えるんですねぇ。私はどうも問題文の通りに捉えてしまって頭がこんがらがってしまうんです……」
「ヒカリさんは発想がやや硬いのですわ。全体を読み込んで何を問うているのかを正確に捉えましょう」
ヒカリがうなずいているとその背後から少年の声がした。

「おっ！　ヒカリじゃねえか！」
「ジュン君！　久しぶり！　元気してた？」
ヒカリは笑みを浮かべながら立ち上がってジュンに向き直る。
「あの……この方は？」
レッドも伝票を書く手を止めて少年を見る。
ヒカリが紹介しようと手を遣ったところでジュンが更に声を張り上げる。
「あぁーーっ！　伝説の夫婦のレッドにエリカだ！　なんだってんだよヒカリ！　お前この二人とどういう関係なんだよ!?　俺に黙ってこんな親しげにしやがって罰金百万円な！」
ジュンが急き立てるかのようにヒカリに問いただす。
「ちょちょ落ち着いてよジュン君！　あたしは博士から御三家のポケモンを渡すために二人を研究所にお連れしなさいって言われたから」
「何ぃ！　あの爺さんふざけやがってこの俺を差し置いてそんなおいしい役目を……」
ジュンは心底悔しそうな表情でいう。
「賑やかな方ですわね……。それでヒカリさん。このお方は」
「ああごめんなさい！　この子はジュンと言って同じ街で同じ時期にトレーナーになった幼馴染なんです。ほら、ジュン君も……」

ヒカリはジュンを小突く。すすめられたジュンはレッドとエリカに視線を合わせる。
「は、初めまして！　ポケモントレーナーのジュン。いつかは親父や二人みたいにすっごいトレーナーになることを夢見ているトレーナーですっ！」
ジュンは緊張しているのか冷や汗をかいている。
「なーに改まっちゃって……」
ヒカリはいつになく顔を紅潮させているジュンを見てクスクス笑っていた。
「んだようるさいな！　お前それはそうとここのジム行ったのか？」
「ま……まだだけど」
「へっ。なんだよあれだけ前会った時は息巻いといてそんな調子か？」
「なっ……。それを言うジュン君の方はどーなの？」
「へへへ……見て驚くな！」
そう言いながらジュンはバッグからバッジケースを取り出し、ヒカリにまざまざと見せつける。
「も……もしかしてこれって」
「マインバッジだ！　どうだいいだろ？　トウガンと戦って貰ったんだぜ！」
ヒカリがバッジケースを見たまま硬直しているとエリカが横から入る。
「あら？　おかしいですわね。確かトウガンさんは今日までホウエンに行って発掘調査

をしていてミオにはいないという話でしたが……」
　エリカはトウガンの話を思い出しながら言う。
「えっ。ジュン君！　どういうこと？」
「え……。いやいやいや。俺ちゃんとトウガンさんと戦って貰ったぜ!?　ほらこのバッジ見てくれよ」
　ジュンは焦りながらバッジを見せる。
「モラトリアム期間の場合はジムリーダー代理のトレーナーに勝ってもバッジは貰えますからね……。私のジムもそうしていますし」
「なーんだ。本当のリーダーと戦って貰ったんじゃなきゃ大した事ないじゃない。あまり適当なこと言わないでよ？」
　ヒカリは怪しい笑みを浮かべながらそうジュンをなじった。
「ほ、本当だって俺トウガンさんと戦って」
　あくまで引かないジュンを見たエリカは前に進んだ。
「すみませんがバッジを検めさせていただいても宜しいですか？」
「は、はい」
　エリカは会釈をした後、ハンカチを通してケースからバッジを取り裏面を見る。
「あら……すみませんジュンさん。これは本当にトウガンさんから戴いたバッジです

わ。裏に刻印がありますでしょ？　このポケモンリーグの紋章のモンスターボールが描かれていれば正真正銘、ジムリーダーと戦って獲得した証なのです。これは内国のリーグで統一して決まっているルールなので間違いありませんわ」

「え……本当ですかそれ？」

「勿論。証拠をお見せしますわ」

そう言ってエリカは懐から自らのバッジを取り出した。

「これは……レインボーバッジ！　すげーよ。カントーのバッジなんて俺初めて見た！」

ジュンは大いに興奮している。ヒカリは丁重な様子でバッジを取り、裏を見た。

「ほんとだ……小さいけどモンスターボール描いてありますね」

「このバッジは本来全力のリーダーに勝った証として交付されるものなのですが時代の経過と共に本当のリーダーと戦った証として通用するようになりましたわ」

「しかし、それじゃあ紋章の無いバッジは何のために」

「紋章のある無しは現状では本当のリーダーと戦ったかどうかの違いしかありませんわ。代理リーダーは確かにジムリーダーの資格は持っていませんがジム内で一番実力のある人間が選ばれますし、モラトリアムのトレーナー相手ならば十分対応できる実力は備わっています。だから現行のリーグ法ではそれが認められ、私もこうして旅に出て

いられるのですわ」
「そうなんですね……。ご、ごめんねジュン君。」
　ヒカリはついさっきまでの余裕はどこへやらとばかりにしおらしく謝った。
「分かりゃーいいんだよ」
「でもそれならいつ取ったの？　エリカさんの話では随分と長いこと居なかったみたいだけど」
「もう三ヶ月も前になるな。調査の合間とかなんとか言ってたからラッキーなときに飛び込めたみたいだぜ」
　ジュンは鼻をこすりながら自慢げにいう。
「へぇ……。って、じゃあジュン君はどうしてここにいるの？　まさかわざわざ自慢する為にあたしを待ってたとか言わないよね？」
「んなわけねーだろ！　修行だ修行！　ここの北に鋼鉄島っていう昔使われていた鉱山が今ではいい修行スポットになってんだ！　それでそろそろ次行こうと思ってミオに戻ったんだよ！」
「もうそんなムキにならなくてもいいじゃない……。次って順番から言えばキッサキだよね？　あそこの道路もうすぐ雪の季節だけどそんな格好で大丈夫なの？」
　ヒカリは一応半袖姿のジュンのことを心配しているようだ。

「よゆー余裕！　強い男、ましてやシンオウの男は寒さなんかに負けはしないんだ！　レッドさんを見ろ！　あの人は極寒のシロガネ山でもあの半袖姿で修行に勤しんでいたんだぞ！」

　レッドは体をやや反応させる。とりあえず机の上に広げていたカイロや湯たんぽなどを下に隠した。まさかあのときも内側にカイロを大量に貼っていたりリザードンに随時温めてもらっていたなどとは口が裂けても言えない。

「ふーん……。でもさっきまで防寒具整理してたけど」

「それはお前エリカさんの分に決まってんだろ！　やっぱ強い男は女性にも優しいんだよヒカリ。なんでそこが分かんないかなぁ」

「はあ……。なんでもいいけどカイロくらい用意したほうがいいと思うよ。ないならあたしの分あげよっか？　さっき買いすぎちゃってちょっとかさばってるんだ」

「いらねえよ！　子どもは風の子なのにそんなバカみたいに買ってどーすんだよ」

「だって寒いものは寒いし……。あたし一回パパやママとスキーしにあそこ行ったことあるけど本当に洒落にならないよ？　どんなに着込んでも数時間外に出るだけで体が深々冷え込むし……。しかもちょっと放っておいた水もたちまち凍っちゃうんだよ？　凍傷起こして病院に担ぎこまれた人も見たし……」

　ヒカリの体験を聞いたジュンは一瞬顔をこわばらせる。

「へ……そ、そんなのどうってことないさ！　どうってことねえけど……。まあどうしてもくれるって言うなら貰ってやるよ！　カイロ！」
「全くもう素直になれば良いのに……。まぁいっか」
　そう言ってヒカリは幾つかカイロを渡す。
「サンキュ。そろそろ俺回復しに行くわ。じゃあな。せいぜい俺の恥にならない程度に頑張れよな！」
「こっちのセリフだわ。キッサキへの道路で半袖男が凍死なんて恥ずかしいニュースだけは見せないでね！」
　そう憎まれ口を叩きあって二人は別れた。
「仲がよろしいのですね」
「あれでも大事な幼馴染ですから。悔しいけどトレーナーとしてのセンスはジュンの方が上だし……。ああは言ったけど本当はちょこっとだけ尊敬してるんですよ。言うと絶対調子に乗るから当人を前にしては言いませんけどね」
　ヒカリは笑みを浮かべながら言う。本心から言っているようだ。
　それからも10分ほどエリカはヒカリに勉強を教えた。
　やがてレッドの仕事が終わったためポケモンセンターを出ると丁度いい時間だったので一緒に昼食を済ませた後再び市街に出た。

―午後1時　ミオシティ　市街―

「さてと……それじゃあそろそろマサゴの研究所に行きますよ！　私のポケモンが先導しますから後をついてきてくださいね。それでは……行け、ムクバード！」

ヒカリはムクバードを繰り出す。世話に夢中だと言っていただけあって綺麗に羽や毛並みが整っている。

「へぇ……これがムクバードかぁ。俺は進化系のムクホークしか見たことないからなんか新鮮だ。毛並みも整ってるし」

「へへ。そうですか？　この子は博士から貰ったポッチャマに次いで二番目に手に入れたんですけど、やっぱり私が初めて自力で手に入れたポケモンだから可愛くって」

彼女はムクバードの頭を撫でながら嬉しそうに言う。ムクバードの方も懐いているのかヒカリに甘えている。

「やっぱりそういうポケモンって思い出深いもんな……。よし、それじゃあ俺も。行け、リザードン！」

リザードンは雄々しい姿でその場に現れた。

「わー……凄い。これがリザードンですか？　本当に強そうですね」

ヒカリは感動した様子でリザードンを見ている。

「なんと言ってもレッドさんにとっては第一線で活躍する大事なポケモンですものね」

「まぁな。こいつとも結構な付き合いだし……。大事な足でもあるよ。それじゃ、行こうか」

「は、はい！　それじゃ、行きます！　お願い、ムクバード」

ヒカリは暫し呆然としたの後気を取り戻してムクバードに乗った。

こうしてヒカリの先導に従ってマサゴタウンまで移動する。

―マサゴタウン　南側に進めば水道が広がり、北に進めば遥かなる大地が広がる町。田舎町ではあるがかつては宿場町としての機能を果たし、明治時代に中心地のコトブキにより近く良港の条件が揃っていたミオシティが整備されるまではカントーのクチバ、ジョウトのアサギと並び称される程栄えていた。現在はナナカマドポケモン研究所がある。

―午後2時30分　マサゴタウン　ナナカマドポケモン研究所―

到着するとそのまま三人は研究所に入った。

「博士！　お二人をお連れしましたよ！」

ヒカリが呼びかけると如何にも威厳のある白ひげを生やした老人がゆっくりと歩きながら三人の側へ来た。どうやらこの人物がナナカマド博士のようである。

「……。随分と遅かったな。どこで道草を食っていたのだ？」

「へへへ。ちょっと色々ありまして」

「全く……。まあ良い。私がこの研究所の所長、ナナカマドだ。ポケモンの進化について研究しておる」

ナナカマドの自己紹介の後二人もそれに続いた。

「うむう。君たちがあの伝説の夫婦とやらか……。なるほど、大した面構えをしておる。ここに至るまで色々なことを体験したのだろう。私も若い頃は色々な事に挑んだものだ。君たちのような若者が居ることは実に喜ばしい事だのう。さて、ポケモンを渡そう」

そう言ってナナカマドはカバンを二人の前に掲げ、カバンを開いて見せた。

「左から草ポケモンのナエトル、水ポケモンのポッチャマ、炎ポケモンのヒコザルだ。好きなポケモンを選ぶが良い」

エリカはナエトルを、レッドはヒコザルを選んだ。

「ありがとうございます」

二人は頭を深く下げて礼を言った。

「うむ。シンオウ地方でも益々の活躍。期待しておるぞ」

そう話していると横の休憩室に設置してあるテレビからＣＭが流れているのがうかがえた。

「誰だテレビをつけっぱなしにしおって……。休憩は終わっているのだぞ！」

ナナカマドは先程までの落ち着いた声とは変わって一転怒りを含んだ声で研究員を叱りつけた。
「す、すみません博士今消しますので」
研究員は血相を変えて休憩室へ駆け込んだ。
『確かな品質と、豊かなエネルギーで世界に平和を　銀河エネルギー工業です』
そう言い終わるのとほぼ同時にテレビの電源は落とされた。
「最近いつもあのＣＭ流れてますよねぇ。もうフレーズ覚えちゃった」
ヒカリはうんざりしたような口調で言う。
「うむう。業績が好調なようだからな。儲かってる事をいいたくてたまらぬのだろう」
博士も同様に辟易としている様子だ。
「へぇ……ホウエンやジョウトではそんな企業のＣＭ全く見ませんでしたけどこちらでは有名なんですね」
「うむ。いわゆる地場産業というものだ。ここ１０年くらいでできた企業だが株をやっとる私の友人によればあれの親会社にあたる銀河物産はシンオウでは一番儲けているグループらしい」
――
―同日　午後2時　コトブキシティ　銀河物産本社ビル　社長室―

「今朝経理部門より上がってきた報告によりますと今年度上半期は銀河電機の新製品、電子レンジ　マゼランシリーズがかなりの好調であったのに加え銀河不動産が新たに売り出した分譲マンションの売約率が全て９０％を超えるなど各子会社で今期もすこぶる好調な業績を見せております」

銀河物産専務の男がにこやかな様子でそう社長のアカギに報告した。

「いやー。これもすべて社長のこの豪腕の賜物！　シンオウ地方の誇りでございます！」

専務の隣に居た経理部長がそう社長を持ち上げた。

「いやいや。これもすべて君たちの働きのおかげだ！　これからも頑張ってくれたまえよ！」

社長のアカギは機嫌良さそうに笑顔を浮かべながら立ち上がり、部長と専務の肩を叩いた。社長室はその日笑顔で溢れていたという。

―午後7時　トバリシティ　銀河エネルギー工業本社　最上階―

「事はすべて上手くいっている……。我々の新しい世界を生み出すための資金作りはこれをもってほぼ完了したと言っていい」

アカギは昼の様子とは打って変わった悪人面でボスの椅子に座っていた。前にはジュピターやマーズ、サターンといった幹部がいた。

「それは素晴らしいことですねボス。いよいよ我々も本格的に動けるというわけですか」
　サターンが喜々とした様子で言う。
「長い間ここの課長なんかやってたけど本当につまらなかったわ。やっとこんな退屈な日々からおさらばできるのね」
　ジュピターが静かに笑う。
「それでボス。あたし達に紹介したい人って？」
　マーズがアカギに尋ねる。
「うむ。入れ」
　そう言うと一人の３０代くらいの男がゆっくりと入ってきた。白い着物に数珠を首にかけており、錫杖も手にしている。
「だーれ？　このオッサン」
　マーズが軽口を叩いたが男はすぐマーズを睨んだ。
「やめろマーズ。この男はな。我々の計画に必要不可欠な男だ」
「この格好……まさかシャーマンですか!?　そんなのどうすると」
　サターンがアカギに問いただす。
「テンガン山に伝わるカムイ・ヌイナの話を知ってるか？」

アカギが尋ねる。
「聞いたことはありますが……あれはあくまで伝承でしょう？」
「カムイ・ヌイナは伝承などではない。歴史的な事実なのだよ」
その言葉に一同は目を丸くするのみだった。

――

―午後2時４０分　ナナカマドポケモン研究所―
「へえ……そんな凄い企業なんですね」
レッドはそうナナカマドに言った。
「聞いた話だがコマーシャルの多さや時折のニュースの限りではおそらく嘘ではないだろう。私にはどうでも良いことだがな……」
「ふうん……。あ、それじゃ博士私そろそろ行きますね」
ヒカリに続いてレッドやエリカも出ることにした。
「うむ。気をつけて行ってきなさい」
「ありがとうございます。それではナナカマド博士。ごきげんよう」
エリカを含めた三人はそのまま研究所から出た。
―マサゴタウン　研究所入口―
「なんだか気難しそうな人だったな……。同じおじいさん博士でもオーキド博士とは結

構違う感じだな」

　レッドはそう感想を述べた。

「まぁ私も最初会ったときはそんな印象でしたけど……でもそんな厳しいだけの人じゃないんです。最初にポケモンくれた時は本当に優しい言葉をかけてくれたし、あとこの前一旦家に帰ったついでにナナカマド博士にお裾分けしなさいって羊羹を持たされたんです。その時博士は用事でいなかったので助手の人に渡した時『おおこれは北国堂の羊羹ですね！　博士この羊羹大好きなので喜びますよぉ』なーんて言われて」

　ヒカリは思い出し笑いを浮かべながら言う。

「へぇ……ナナカマド博士が甘い物好きだったとは初耳ですわ」

「あれエリカ。博士のことしってたのか？」

「大学時代に何度か講演会を拝聴した程度ですが……。私は携帯獣、すなわちポケモンを専攻していたわけではないのでお話まではしたことありませんけどね」

「そうか。まあトウガンさんの事知っていたくらいだしな」

　とレッドはそれとなく流した。

「さて、私はそろそろミオに戻ります！　ジュン君が行った鋼鉄島でポケモンを鍛えて、マインバッジをゲットしたいので」

「左様ですわね。ポケモンも良いですがお勉強の方も疎かにしてはなりませんよ」

「大丈夫です！　とにかく11月くらいまで頑張ってみて駄目だったら大人しくフタバに帰って勉強に専念しようとは考えているので」
「そうですか……。先程数学を見た限りではやや不安を覚えるのですけど」
「エリカは心配しすぎだよ。少なくともヒカリちゃんは俺の百倍くらいは頭良さそうだし大丈夫大丈夫」
　レッドは楽観的なことを言ってみせたがエリカは呆れた表情で返す。
「貴方は受験勉強をしたことがないからそのような事が言えるのですわ……。そうですわね。ここまで案内してくれた事もありますし番号を交換しませんこと？」
「ほ、ほんとですか？　ありがとうございます！　エリカさんに教えてもらえるなら百人力ですよ！」
　というわけでヒカリとエリカは番号を交換した。
「ヒカリさんが腕につけているそれは……ポケッチですか？」
「そうです！　よくご存知ですね。シンオウ地方ではポケギアとかポケナビよりもこのポケッチが断然使われています。高機能な腕時計みたいなもので電話も出来ますし、音声入力から計算や天気を調べられたりですっごく便利なんですよ」
　ヒカリはポケッチを二人に自慢げに見せた。
「それは便利ですわね。私の使っているポケギアも大分古くなっていますしこれを契機

に交換しましょうかね……」
「そうだな。俺もそうするかな。しかしそれだけ便利なのになんでこの地方でしかないんだ？」
　レッドがヒカリに尋ねる。
「これってコトブキにある小さな家族経営の会社が作ったんですよ。だからコストのかかる全国展開よりも地元重視で生産しているんです！　そういう話も来てはいるみたいですが全く興味ないみたいで……」
「随分と詳しいですわね」
「実はバッジが増えるごとに機能を増やしてくれるみたいで取る度に出入りしてるんですよ。だからお二人がいけばそれはもう凄いことに……。おっと。それじゃあそろそろ本当に行きますね！　それではレッドさん。エリカさん！　さようなら！」
　そう言ってヒカリはムクバードに乗って西の空に消えていった。
「ふう……俺達も行くか」
「ええ。まずはコトブキシティへ！　この地方でも宜しくお願いしますわね貴方」
「おう！」
　レッドとエリカはマサゴタウンから北の方向に歩み始めた。
　かくして、シンオウ地方の冒険は幕を開けるのである。

—第二十二話　北国へのいざない　終—

第二十三話　カムイ・ヌイナ

２０２番道路を2日かけて進んだ二人はコトブキシティに到着した。
―コトブキシティ　コトブキテレビ局やポケッチカンパニーなどが立ち並ぶビジネス街。世界中の人々とポケモン交換を楽しめるＧＴＳもここにある。シンオウ地方の政治的な中心にあたるが、残念な事にシンオウ人の評価はオシャレなヨスガシティやショッピング街のドバリの後塵を拝している現状だ。ポケモンジムはない。
―１０月８日　午後1時　コトブキシティ―
二人はコトブキシティに到着すると荷物の整理やポケモンの回復などをした後市街を散策することにした。
立ち寄ったフレンドリィショップでトレーナーの歩き方を購入した後、北側に行くとひときわ大きいビルが目に入った。近くに行ってみると銀河物産と刻印された立派な玄関がある。
―午後2時　銀河物産本社ビル　玄関前歩道―
「うーんしかしすげえビルだな……」
レッドは見上げるも最大限まで腰を曲げても見きれなかった。

「貴方。みっともありませんわよ」
「ああごめん……」
レッドは言われるとすぐに背を戻した。
「確かに立派ですが……やはり、シンオウですわね。私の会社に比べればまだまだですわ」
エリカは得意になってみせる。
「私のってお前が経営してるわけじゃないだろ……」
「フフフ。まぁそう言われればそうですけれど。シンオウ一の大企業といえど我が家の稼業程でないということですわ」
「お前もしかして不安だったのか？」
レッドはエリカの自慢に少し水を差すことにした。
「ま、まさか！　私はただ貴方に社会勉強としてこのくらいの企業はカントーにはざらにありますわとお教えしたかっただけですわよ」
エリカはやや顔を赤くして返した。どうやら図星のようだ。
そんなこんなで話しているとビルの敷地内に入り込んであからさまに怪しげにうろつき回っている一人の男が目につく。
「貴方。あの人……」

「ああ……」
　レッドは早くから気づいていたが敢えて口に出しては居なかった。
「何をされているのでしょうか……。気になりますわね」
「うーん……俺が聞いてみようか？」
「あら。左様ですか」
　そう言ってレッドは男に近づき、話しかけた。
「あの……」
「ナヌー!!　何故私が国際警察の人間だとわかってしまったのだ？」
「はい？」
　よくよく見てみると男は中年くらいの年齢と思われる風貌をしていた。
「ム！　君はもしかして……あの伝説のトレーナーのレッド君!?　ということは後ろにいるのはエリカ女史か！　なるほどなるほど。ならばその眼力にも納得だ。私を只者ではないと見抜いて話しかけたのだろう！」
「いや、単に怪しいなと思って話しかけただけなんですけど」
　レッドは率直に答える。
「怪しくなどない！　私はこうして捜査をしているのだ」
「捜査……ですか？」

エリカはいつの間にかレッドの隣に居た。
「うわ。お前いつの間に」
「そうだ。この銀河物産は君たちも聞いているとおりシンオウでは第一の企業……だがその裏ではとんでもない事を企んでいると我々国際警察はみているのだ！　このビルのどこかにそのアジトが……」
そう男が得意げに話していると部下の刑事と思しき人物が駆け寄ってきた。
「ハンサムさん！」
「おお。アポロンか！　どうだ？　アジトはここに」
「いやそれが……どうもここじゃないらしいんです。例の二人がなんか嗅ぎつけたらしくて」
刑事は苦々しい顔をしてハンサムに言う。
「何ぃ!?　あの嫌らしいメガネの刑事がか！　またちょっかいかけているんだな！　ようし、今度という今度はガツンと言わなければな。だがだからといってここにいても仕方ないな……分かった。すぐに行く」
そう言うともうひとりの刑事は去っていった。
「というわけだ。君たちもなにか怪しいと思うことがあったら何かの縁だこの番号に電話してくれ。私への直通電話だ」

そう言ってハンサムは二人に電話番号を記したメモを手渡す。
「は……はぁ」
「それと、もし今度私に出会っても、それは仕事をしているから話しかけないように。いや、それじゃ寂し。じゃなくて、怪しい奴を見かけたりなにかあれば私に話しかけてくれ」
そう言ってハンサムも去っていく。
「国際警察ですか……ご苦労なことですわね」
エリカはやや呆れた風にハンサムの背中を見る。
「そうだな……それにしても。とんでもないことを企んでるって言ってたな。ここが」
「ええ……。どうやらこの地方も平穏無事に済むというわけには参らないようですわね」
その後、ポケッチカンパニーでポケッチを購入してデータを移行させた後、２０３番道路及びクロガネゲートを越えてクロガネシティに到着した。
―クロガネシティ　炭鉱で栄えている町。周りは山で囲まれているがこの街の住民は皆朗らかに暮らし、働き手の格闘ポケモンと共に仲良く暮らしている。化石を復元するクロガネ炭鉱博物館がありヒョウタはここで育った。因みにヒョウタはトウガンからの暖簾分けでクロガネ炭鉱の最高責任者となった。

―10月11日　午前10時　クロガネシティ―

洞窟を抜けてポケモンセンターを出ると直々にヒョウタと思しき人から出迎えを受けた。

「やあ！　ようこそクロガネシティへ！　僕はここのリーダーを務めるヒョウタ。伝説の夫婦がいよいよ来るって言うから待ちきれずに来ちゃったよ」

ヒョウタと名乗ったその青年は爽やかな様子でそう言った。

「あら、それはそれは……」

エリカはそのまま自己紹介をして、レッドもそれに続いた。

「よし、それじゃあジムまで案内するよ。ついてきて！」

そう言ってヒョウタは先導して二人をジムまで連れて行く。

「確か……トウガンさんのご子息でしたわね？」

「うん。そうそう……父さんにはもう会っているみたいだね。話は聞いているよ」

「ヒョウタさんもやはりその出で立ちから察するに鉱石などを生業としているのですか？」

「そう！　僕も地下の洞窟などを探検するのが大好きでね。そうそう。ここシンオウ地方には地下に巨大な地下通路があって……」

ヒョウタが地下通路について語っているうちに三人はクロガネジムに入った。

―午前10時15分　同所　ポケモンジム―

ジムに入り、二人は奥に通された。

「僕の使うポケモンは岩タイプ。シンオウ地方の一番目のリーダーとして、ここでの戦い方というものを見せてあげるよ。行け、ゴローニャ！　ダイノーズ！」

――

レッドは1匹失うが、エリカは1匹も失わずに勝利した。

「負けちゃったか……。だったら仕方ないね。このリーグ公認のコールバッジ、受け取ってよ」

そう言ってヒョウタは二人にコールバッジを手渡す。二人は深く頭を下げて受けた。

「最近は勝ってばかりだったからちょっと油断してたけど……。これじゃ駄目だな。これからちゃんと鍛え直してみるよ」

それからも二言三言話してヒョウタとは別れた。

ヒョウタから手土産がわりに化石を貰ったので復元してもらう為にその足で炭鉱博物館に赴く。そこで当地にきていたウツギやツクシなどの研究員と軽く会話をかわした後復元した二つの化石ポケモンを受け取ってポケモンを回復させた後に二人はクロ

ガネシティを出た。
二人は２０４番道路、ソノオタウン、２０５番道路を越え、ハクタイの森へと入り森の洋館近くに差し掛かった。

―１０月２０日　午前１０時　ハクタイの森　森の洋館　門前―
ハクタイの森も終盤に近づいたその頃、目の前に洋館が見えてきた。
「あら……もしやあれがハクタイの洋館ではありませんか？　トレーナーの歩き方に書いてありましたわよね？」
エリカがレッドに尋ねる。レッドはリュックから歩き方を出す。
「あぁそれっぽいな。明るい茶色の屋根だし……。しかし本当に出るのか？」
レッドは半信半疑だ。
「出るのならば是非お目にかかりたいものですわね。何分本物の幽霊というものにはお目にかかったことがないものですから」
エリカは堂々とした様子で言う。
「あれ……お前もしかして怖くないの？」
「あら？　何を恐れる必要があるのですか？　寧ろ興味深いではないですか。この世界の霊的・超能力的な力はまだ解明しきれていませんし、お目にかかれば検体として持ち

帰りたいくらいですわね」
　エリカは興味津々な様子で言う。どうやら本気だ。
「そっか……。お前はそういう人だったな……」
　レッドは内心やや気を落としながら前に進む。すると、門前と思しき所で右往左往している少女を見かけた。
　目に留まったのかエリカの方から声を掛ける。
「あの……」
「わ！　びっくりした……。あたしになにか……」
　そう言いながら少女は二人の方へ顔を向ける。
「あれ……もしかしてその姿。レッド君にエリカさん!?」
　少女は二人を見て目を丸くしている。ここで会うとは想定していなかった様子だ。
「もう筒抜けですのね……」
「勿論！　私だけでなくジムリーダーならば誰でもお二人の姿格好はわかっていますから！」
　彼女はスッキリとした微笑みで返す。
「ジムリーダー……。って事はまさか」
「ご明察！　あたしはこの先にあるハクタイシティのジムリーダーのナタネっていうん

だ！　1月にリーダーになったばかりだけど宜しくね」

　ナタネはそう言うと礼儀正しくお辞儀をした。

「ということはかれこれ九ヶ月ですか……。お仕事にはもう慣れましたか？」

　エリカは世間話とばかりに振る。

「一通りの作業はこなせるようにはなったよ。あとは力をつけていつかはシンオウ最強のジムリーダーになって……そして10年後20年後にはあのヤナギさんをも破る凄腕のトレーナーになってみせるの！」

　ナタネは自信たっぷりな様子で言う。レッドは内心嘲笑ったが表情には出さないように勤めた。

「私と同じ草タイプの使い手と伺っておりますわ。それだけの意気込みにかなうものかどうか試してみたいものですわね」

　エリカは敢えて夜郎自大な野望を聞かなかったことにしてうっすらと笑みを見せた。それには同じ草使いとしての闘争心があるかのようにも見えた。

「随分と自信があることで。流石は伝説の夫婦の奥方様って感じね。よおし、それじゃあ早速」

　ナタネがモンスターボールを構えると、突如一斉に鳥ポケモンたちのものと思われる羽の音があたりに響いた。

「きゃあっ！」
　ナタネはとっさにみをかがめる。
「あの……。そういえばナタネさんはどうしてここにいるんです？」
　レッドが尋ねる。
「えっ……あぁそうね。この洋館にお化けポケモンがいるかどうか調査して、いるようならどうにか追い払って欲しいってハクタイの人たちに言われてさ。ここでこう外から調査してたってわけ」
　ナタネは身振り手振り交えながらそう話した。
　レッドは納得するが、エリカは少々間を空けて言う。
「それでジムリーダーがわざわざ出張るのですか？　リーダーの領分ではないように思えるのですが……」
「ま、まぁね。エリカさんの言う通りではあるんだけどさ。ほらあたしってまだ新人だからこういうところでハクタイの人から評価稼いどかないとね」
　ナタネはそうは言うがどこか乗り気じゃないような雰囲気も垣間見える。
「なるほど……。リーダーは地域の中枢の一翼を担いますからね」
　エリカはそう言って自らを納得させた様子だ。
「そうそう……。やっぱりリーダーってその地域で一番強いトレーナーがなるものだし

ね。こういうポケモンの力を発揮できる仕事は進んで引き受けなきゃって」

ナタネは髪を所在なさげにいじりながら言う。その言葉は彼女自身に言い聞かせているようにも窺えた。エリカはその様子を見て何かを察した様子だ。

「でも外から見ただけじゃ何も分からないんじ」

「貴方！」

エリカはレッドの無神経な発言を牽制した。

「そ、そうだよねーやっぱり。中に入らないといけないよねうん」

ナタネは二人から目を逸らしながら言う。脂汗も掻いているようだ。

「あ、あの！　私達もお供させていただけませんか？」

エリカは咄嗟にそう提案した。

「え。いやいいよいいよ！　これはあたしの仕事だから」

「まぁそう言わずに……。私達もこの洋館を散策してみようと考えていたのですわ」

レッドはそんなこと言ってないと言おうとしたがエリカが無言の圧力を放った。レッドは堪忍してエリカの言うことに従う。

「そ、そう！　分かった。そこまで言うなら仕方ないよね。一緒に行こっか！」

ナタネはそう言うと心なしかどこか嬉しそうに洋館へ向かった。

「お前なぁ……」

「あら？　良いではありませんか。こういう所は何か良いものが眠っているかもしれませんわよ」
そう言うとエリカはレッドに微笑みかけてナタネに続いた。
レッドはため息をついてやれやれと言った様子で洋館へ向かった。
―森の洋館―
中に入るとそこはいかにも何かでてきそうな気味の悪い雰囲気に満ちていた。
「たしかにこれはなにかありそうな予感がしますわね……」
「うう……」
入ってすぐ彼女は身を震わせたが、大きくかぶりを横に振った。
「さ、さてと！　あたしは左側回るから、二人はそっち行ってくれる？」
「わ……分かりました」
「あの。私もそちらに行きたいのですが……」
ナタネは一瞬だけ救いがきたかのような表情を窺わせたがすぐに元に戻った。
「い、いやいやいいって！　二人で仲睦まじく回っててよ」
「あら左様でございましたか。せっかく同じ草タイプのジムを運営するもの同士、色々と情報を共有できる良い機会だと思いましたのに……」
エリカはやや芝居がかった様子で残念がる。

「そ……そうなの？」
「ええ。ラフレシアやキレイハナの花弁を如何にして美しく維持するかや、ジムの植栽に与えている肥料をどうしているかなど色々と……」
「そっ……そうだったんだ」
ナタネは暫く考えた後、笑みを浮かべて返す。
「そういうことなら是非あたしも色々とエリカさんと話したいことがあったんだ！レッド君。悪いけどちょっとエリカさん借りていくね！」
「は、はい……」
レッドはナタネに気圧されるようにして承諾の返事をした。
こうして、ナタネとエリカは左側から探索していく。
レッドは独りになった。
広い洋館である。一人ではとても片側を回りきれないだろうと思った彼はモンスターボールを手にとった。
「行け、ピカチュウ」
ピカチュウは普段どおり出てきたが鬱蒼とした雰囲気の洋館にやや不穏な雰囲気を感じ取ったようだ。
レッドは事のあらましを話した後ピカチュウに指示をだした。

「で、俺は一階の方を回るから、お前には二階に行って欲しい」
ピカチュウは小さくうなずく。
「よし。頼んだぞ。なにもないとは思うが何かあったらすぐ知らせてくれ。そんじゃな」
そう言ってレッドはピカチュウの頭を撫でてやった後スタスタと右側を歩いていった。
ピカチュウは息をついて階段を駆け上がる。
―約３０分後　洋館二階　テレビの部屋―
『全くレッドときたらこんな役回りやらせるなんて……』
ピカチュウはブツブツと言いながら部屋のドアを飛び上がって開けた。
手が滑って着地した時に背中を打った。
『いたた……あ、テレビだ』
ピカチュウはまず目についたそれに近づく。
『電源は……ついてないみたい』
右端に目を遣る。コンセントは繋がっているようだ。
『これ押せばつくかな……えいっ』
ピカチュウは主電源を押す。しかし反応がない。

『あれー。おかしいな……』

ところどころ電球の明かりはついていた為ブレーカーが落ちているということはない。何度かポチポチと起動を試みたがうんともすんとも言わない。

『壊れてるのか……。あーあ。なんだちょうどあのアニメの時間だったのになぁ』

ピカチュウは残念そうにすごすごと後にしようとした。

その時、突如テレビの電源が入り、見ようと思っていたアニメの音声がピカチュウの耳に入った。

『なーんだ壊れてなかったんだ……。よしせっかくだから見よっと。どうせ最後の部屋だしこれくらいサボってもレッドは許してくれるよね！』

と、上機嫌そうにテレビに近付く。すると突如音量が最大限になった。

『ギャー!!　やっぱ壊れてんのコレ？　こらっ、ちゃんと動け！』

ピカチュウは音量を下げた後、テレビを何度か叩く。

すると、ぬうっとテレビから一体のポケモンが出てきた。

「やあ」

そのポケモンは片方の触媒を高らかに掲げ、ピカチュウに挨拶した。

『出、出……』

「ピカピーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

ピカチュウの鳴き声は屋敷内に高らかに響いた。
三人は何事だとばかりにその部屋に駆けつける。
「ど、どうしたんだピカチュウ！」
真っ先についたのはレッドだった。
ピカチュウは腰を抜かしたまま目の前にいるポケモンを震えた指で差しながら何かを訴えている。
「やあ。君がこのピカチュウの飼い主？　無礼にも僕を叩いたからちょっと驚かそうと思って」
「こいつ……よくもピカチュウを脅かしたな！　見てろよ！」
レッドはモンスターボールを構えたが、すぐにエリカが止めに入った。
「お待ちなさい！　何があったのですか？」
後ろにはナタネも居る。
「このポケモンがピカチュウを驚かしてあんな風にしたんだよ！」
「まあそれはそれは……」
そう言いながらエリカはポケモンを見る。
「あら……このポケモンは確か、ロトムでしたわね。電化製品に取り憑いていたずらをするのが好きな」

「僕のこと知っているんだ。そう。僕はロトム！　機械に入って人やポケモンが驚いているのを見るのが好きなんだ！」

ロトムは純粋な様子でそう言った。

「取り憑くって……まさかこのポケモン」

「ええ。このポケモンは電気とゴース……」

そのフレーズが聞こえた瞬間ナタネの顔が青ざめた。

「出、出、出たあああああああああ!!　怖いよおおお！　レッドさん助けてえ！」

ナタネは反射的にレッドに抱きつく。

「ナ、ナタネさん落ち着いて！　ね？」

レッドは引き剥がそうとしたが、エリカ以外の女の子に抱きつかれることなどそうそうない為この状況を楽しんでいるようにもみえた。

「もう……。これではあれほど気を回したのも無駄な事でしたわね」

エリカはため息をつく。

「ねえ」

ロトムがエリカに尋ねる。エリカはロトムに向き直る。

「なんで君は全く驚かないの？」

ロトムはやや不思議そうな様子で尋ねる。

「私はどちらかといえばそういうものには好奇心を抱く性質に生まれ育ちましたから」
「そうなんだ……へぇ」
　ロトムは少しばかり嬉しそうな様子だ。
「どうしてロトムはここにいるのですか？　電化製品ならばもっと人のいるところでも宜しいのでは？」
「さあ……自分でも分かんない。なにせ、物心がついた頃からここにいるから」
「左様ですか……」
「ねえ」
　ロトムがエリカに向き直る。
「何でしょうか」
「僕を捕まえてみる気はない？」
「宜しいのですか？」
　エリカは嬉しそうな様子で尋ねる。
「うん。そろそろここにも飽きてきたし……君だったら僕も退屈しなさそうだから」
「まあ……。私もゴーストタイプのポケモンについてはかねてより些か興味を抱いておりますわ。ロトムが宜しければ是非」
「ふふ……宜しくね！」

こうしてロトムがエリカの手持ちになった。

―午後1時　森の洋館前―

「さてと。エリカさんがロトムを捕まえて原因も正されたことだし。あたしはハクタイに戻るよ！」

「まぁよく10分間も抱きついといて現金な……」

レッドは軽く笑いながら言う。

「あ、あれはちょっとびっくりしちゃっただけだから！　怖かったとかじゃないからね！　これは大きな差だよー」

ナタネは強がった様子で答える。

「ハハハ……」

「ふう……。それではナタネさん。ハクタイでまたお会いしましょうね」

「ええ。その際は是非あたしのジムの植栽も見てね！　ふたりとも本当にありがとう。それじゃ、またね！」

そう言ってナタネは飛び去るかのように駆けていった。

「はあ……なんだか結構無理をしてそうな子だな。アスナさんとはまた違う雰囲気だ」

「彼女は恐らく世襲ではなく推薦でのリーダーなのでしょう。だからこそ少しでもおおく信頼を勝ち得て地位を盤石なものにしようとわざわざ不得手な仕事まで引き受けて

色々と尽力しておられるのでしょうね……」
彼女はどこか感じ入ったかのような表情で遠くにあるナタネの背中を見た。
それからすぐに二人はハクタイの森を出て２０５番道路を通過した。
――ハクタイシティ　歴史と人間の融合した街。
都市化も見られるが自然と上手い具合に調和できている。伝統を大事にし、シンオウの伝説ポケモンであるディアルガとパルキアの像があり祀られている。地下おじさんの家や漢方薬を売っていたりとそれなりに便利な街である。
―１０月２１日　午前９時　ハクタイシティ　ポケモンジム―
二人はついてポケモンセンターに行った後、ジムへ向かった。
ジムトレーナーを倒した後、ナタネと相対する。
「ハクタイの森ではありがとう！　本当に助かった。でも！　それと勝負ではまた別の話。モラトリアムから苦労して苦労して……やっとここまでたどり着けた。ハクタイ第一のトレーナーの実力あなた達に見せてあげる！」
――
レッドは２体、エリカは１体失って勝利した。
「くっ……。やっぱり強いね。やっぱり二地方も全力のリーダーを破ってきた人は違うや。はい、フォレストバッジ、受け取って」

二人はシンオウ地方二枚目のバッジ、フォレストバッジを受け取った。恭しく礼をしながら丁重にとる。

「でも。いつまでもこうはいかないから。いつの日かあなた達夫婦を超える力をつけてみせるから！　覚悟しといてよね」

「ええ。その日を楽しみにするとしますわ」

エリカは微笑ましい表情でそう返す。

「っと。それはそうとエリカさん。あの樹木にあげる肥料についてなんだけど……」

それから10分ほど草タイプのジムを経営するもの同士、情報交換のついでにポケッチの番号も交換してジムを去る。

―午後1時　同市　某ビル前―

回復させて街を散策していると北側にある一棟のビルの前で怪しげに動いている人物を見かけた。それはハンサムであった。

ハンサムは二人に気がつくとゆっくり近づいてきた。

「やあ。コトブキでは失礼したね」

レッドとエリカは返礼した。

「あのビル見えるだろう？　我々はあのビルにやつらの悪事が隠れていると見ている。だが如何せんなぁ……警備が厳重で私一人ではどうにもならなそうなのだ」

「へぇ……そうなのですか」
「肝心のアポロンや応援の刑事はなかなか来ないし……全くあのいやらしいメガネの警部とむさいラフな格好の刑事を本庁に言って帰ってもらったはいいが肝腎な時にいないのだから困ったものだ……」
　ハンサムはわざとらしくため息をつく。
「あの……」
「何!?　代わりに行ってくれる!?　いやーそれはありがたいね！　さすがは伝説の夫婦だ。私は君たちが突入した後に色々と中に入って調べて見るから」
「え、あの俺達何も言ってないんですが……」
　レッドは当惑しながら言う。
「いいかい。奴らは各地でポケモンを強奪して自らの支配下に置き、悪事に利用しているのだ。彼らはギンガ団と名乗り、方方で活動しているのだが恐らく私は銀河グループと関係があるものと見ている。まだ決定的な証拠こそあがっていないが必ずそれをここでみつけだす。君たちはその手伝いをしてほしいのだよ」
「なるほど……そういうことでしたか。ならば助力は惜しみませんわ」
　エリカはそうハンサムに答えた。
「そうだな……。ここで会ったのも何かの縁だ。協力しますよ」

そういうわけで二人はハクタイビルへ入ることを承諾し、中に入った。

―ハクタイビル　最上階―

国際警察と話している所を団員に見られていた二人はすぐさま侵入者としてギンガ団員から攻撃を受けた。

しかし、二人にとって団員程度のポケモンを蹴散らすことなど訳もなく、あっという間に幹部のジュピターまで破ることに成功した。

「ふっ……。さすがシンオウまで名を聞かせるだけの事はあるじゃない。でもね。もう遅いわ。ハクタイの調査も終わったし、あの材料の確保もマーズがやってくれた」

「あの材料って……なんのことです?」

エリカはジュピターに尋ねるがかぶりを横にふる。

「今はまだ教えるわけにはいかないわ……。そのかわり、これだけは教えておいてあげる。あたしたちのボスはね……シンオウの伝承を調べて、そこで得た知識と力で以てシンオウ地方、ひいては全世界を支配するの……。如何に伝説の夫婦やポケモンリーグであろうとこれを止めることはできないわ!」

ジュピターは心の底から確信した表情で二人を睨む。

「そこまでだ!　国際警察である!　観念しろギンガ団!」

レッドとエリカの背後よりハンサムや付き従った警官や刑事たちがジュピターやそ

の取り巻きを逮捕しようと走り出した。
「ここで大人しく捕まると思って？　おめでたい人たちだこと……。お前たち！」
ジュピターと団員たちは咄嗟にガスマスクを装着し、団員たちにスカンプーを出させ、一斉に悪臭を放たせた。
二人は勿論のこと逮捕しようとした者たちは悪臭にあてられて顔を背けてしまい隙を作ってしまい、ジュピターを取り逃がしてしまった。
―ハクタイビル前―
「いやー。君たちのおかげで多くの資料と団員たちを捕まえることができたよ。ありがとう」
ハンサムは二人に頭を下げた。
「いえ……。しかしあの幹部と思しき女は取り逃がしてしまってよかったのですか？」
「そこを突かれると痛いんだが……。まあとにかく今はギンガ団と銀河グループのつながりさえ証明できればいいんだ。これさえ出来れば世論が味方について我々ももっと動きやすくなるからな」
ハンサムは自信満々に言ってみせる。
「それにはこの資料と団員の自白があれば足りる。必ず追い詰めてみせるぞ」
と、彼はこの後に控える取り調べに向けてか大いに息を吸い込み、そしてむせた。

しかし、団員たちの自供は得られず、それどころか黙秘を貫いた。証拠となるべき資料も雑多なものばかりでつながりを立証するには不十分であった。結局この突入で得られたものはギンガ団単体の悪事の証拠取得にすぎなかったのである。

―午後4時30分　同市　ポケモン像前―

二人はハンサムと別れて、ハクタイの名所の一つであるポケモン像に来ていた。高台の上には二体のポケモンと思しき銅像が別々に建てられている。

「へぇ……これがシンオウの伝説のポケモンか」

レッドは像をまじまじと見つめている。

「プレートらしきものがあそこにあったようですが……剥がされてしまっているようですわね」

エリカはやや残念そうに言う。

すると、背後より女の声がした。

「そのポケモンはシンオウ地方において大事な神様なのよ」

二人は声がした方向に振り返る。

「あら……貴女はもしかしてシロナさんですか?」

「まぁ。名前を覚えててくれて光栄だわ。そう、あたしはシロナ。シンオウ地区の理事長で……全国ポケモンリーグの副理事長よ」

シロナは腰まである長い金髪に黒を基調とした服を召していた。
「ということは……シンオウ地方のチャ」
レッドがチャンピオンと言いかけたところでシロナは牽制した。
「レッドさん。あたしがその地位にあることをそう濫りに言ってはいけないのよ。これはモラトリアムのトレーナーたちの夢を壊さない為にあるのだから」
シロナの有無を言わさぬ気迫に満ちた物言いはレッドを黙らせるには十分だった。
「しかしホウエンのミクリさんなどはもう自分で言っちゃってましたけど……」
「他の人はともかく、あたしはそういうのはきっちりしないと気がすまないの。ごめんなさいね」
「さ、左様でございますか……」
「さて。それはそうと、大した戦いぶりね。さっきからずっと見ていたけどここまで勝ち抜けたのも十分に頷けるわ」
シロナは先程までの張り詰めた表情から一転して温和な様子で言った。
「ずっと見ていたんならあの女幹部捕まえておいてくださいよ……」
シロナはそう苦言を呈したレッドを睨む。彼は縮こまり言ったことを後悔した。するとシロナはふうと息をつく。
「追いかけはしたんだけど走るのは苦手でね……。あ、そうそう二人共ねぇ、その程度の

服じゃシンオウの冬は乗り切れないわよ」

シロナは露骨に話題を転換した。しかし二人もやや肌寒いと感じつつあったので耳を傾ける。

「やはりもっと厚手の生地でなければ駄目でしょうか？」

「そうね。最低限裏地にしっかりとしたウールとかポリエステルが使われてないととてもじゃないけど凍え死んじゃうわよ。ついこの間までホウエンにいた二人には分からないかもしれないけどね」

シロナは言葉はやや厳しいものが伺えたがその一方で二人を思っているようにもとれた。二人とも生粋のシンオウ人である彼女の意見を心に留めた。

「まぁそれはそれとしてね、この銅像はシンオウ地方で長く受け継がれてきたある神話を基に作られたものなの」

「ええ。文献で読んだことがありますわ。ディアルガとパルキアのお話ですわね」

「そう。この二つの像はその二体のポケモンを祀ったものなのよ。時間を創造したディアルガ、空間を創造したパルキア……そしてここにはいないけどこの世とは全く違う異空間の主といわれるギラティナ。この三体が神話の主役を担っているの」

「へぇ……」

レッドは興味深げに頷いている。

「エリカさん。カムイ・ヌイナの伝承はご存知かしら？」
「え……。す、すみません不勉強で……」
　エリカは珍しく知らないことを聞かれて陳謝した。エリカでも知らないことがあるのかとレッドはやや意外そうな眼差しを向ける。
「まぁ無理もないわね……。シンオウの人間でも知らない人が多いもの」
「後学のためにご教示願えますか？」
　エリカはやや食い気味に尋ねた。知らないことについては特に好奇心を示すのだろう。
「今から千年以上も前の話よ。シンオウ地方の北東にあるカンナギタウンという場所には古来からの本州の戦に負けて逃れた人たちが強い復讐の念を持って祈祷者……それこそ覡（かんなぎ）と呼ばれる人たちが集落を作っていたの」
「シンオウは近代に至るまで本州の政権の手が深く及びませんでしたからね。妥当な選択ですわ」
「そう。だからこそ彼らにとっては最高のねぐらとも言える場所だったのね。……。彼らはいつの日か本州に下って恨みを晴らそうと臥薪嘗胆の日々を送っていたわ。その恨みを晴らす手段というのが、この祀られているディアルガとパルキアってポケモンなの」

シロナは像に目を遣る。
「なるほど……」
「彼らは当地の伝承からその二体の神と言われるポケモンがいることを知り、なんとか現世に降臨させて恨みを晴らしてもらおうとテンガン山に登り、祈祷を以て呼び寄せようとしたの。結果、それは成功して、彼らはこれでなんとかなると大いに喜んだそうだわ……。でもそこまでだった」
「もしかして」
「そうよ。彼らは呼ぶことは成功しても制御する術を知らなかった。ディアルガとパルキアは急に呼び出されたことに怒ったのかまあそこは定かじゃないけど、その祈祷者を集落ごとどこかの世界に吹き飛ばしてしまったの」
二人はその言葉に目を丸くする。
「ふ、吹き飛ばしたのですか？」
「うん。この二体のポケモンの力から見るに全世界の全時代のどこかに……ね。急に集落が消えたことに驚いた原住民たちはそれ以来神の祟りだと畏れてつい最近までそのポケモンが住むとされるテンガン山をより深く崇拝し滅多なことでは入山すらしなかった……というお話よ」
「なるほど……。なかなか興味深いお話ではありますわね」

エリカは深く何度か頷きながら言う。
シロナが話し終わるとその背後より男の声がした。
「あ！　お嬢！　シロナお嬢じゃないですか！」
男はシロナの姿を見るとすぐさま駆け寄ってきた。中年ぐらいの男で作業服にリュックを背負っている。
「あら……トシアキさんじゃない！　どうしてここに？」
「いやぁちょっと遺跡を守るポケモンの漢方薬を補充しなきゃならなかったんで……。いやーやっぱお嬢だ。あの長い髪ですぐわかっちまいましたよ。ご無沙汰してますなぁ。かれこれ2，3年ぶりですか？」
「そうねぇ。最後に会ったのはそれくらいよね。元気そうで何よりよ」
シロナは表情を緩めて言う。どうやら心の底から再会を喜んでいるようだ。
「あの、シロナさんこの方は……？」
エリカが尋ねる。
「ごめんごめん。この人はね。トシアキさんって言って私の故郷にあたるカンナギの遺跡博物館の学芸員をしている方なのよ。卒論を書いてた頃色々と遺跡について教えてくれて論文を書く時本当に助けられたわ。それ以来色々とお付き合いさせてもらっているの」

「いやぁ……そんなそんなお嬢の賜物ですよ。ところでこのお二方は？」
トシアキが尋ねる。
「あら？　知らない？　今全国を周って旅をしているレッドさんにエリカさんよ」
「へぇ……そりゃあ大したもんですなぁ。あっしはどうもトレーナーについては疎くていけねえや」
トシアキは照れ隠しに笑いながら言う。
「いいのよ。そんな気にしなくて。貴方はあたしと同じく遺跡一筋だものね」
シロナは笑みを浮かべながら言う。
「あの……先程からトシアキさんシロナさんのことお嬢お嬢って言ってますけど」
レッドが尋ねた。
「お嬢はこっちじゃ知らぬものはいない大名士のご令孫なんでさぁ。なんせカンナギをシンオウ第一の遺跡の名所にしたのはこのお家のおかげみたいなものでして」
「も、もうそういう話はよしてよ。恥ずかしいから……」
シロナは顔を赤くしてトシアキを止める。
「ハハハ。ところでお嬢はなんでまたここに？」
「ちょっと調べたいことがあってね。ほら、前にチラッと話さなかった？　カムイヌイナは伝承なんかじゃないって」

「あ、あー！　あの話ですかい。なんだまだご執心なんで？」
　トシアキは一瞬だけ表情を暗くした。
「えぇ!?　あのお話はあくまで伝承という風にシロナさんは……」
　エリカが大いに驚いた様子でシロナに言う。
「通説では。って話よ。あたしはこの事は決してただのおとぎ話じゃないと思っているのよ。当時の日記や風土記などを見る限りではこれは現実に起ったものと史学の見地では考えるべきものなのよ」
　シロナは確信を持った表情で話す。どうやら本気でそう思っているようだ。
「お嬢。いくらなんでもそんな事はありえねえでしょう。だいたい人や集落が一瞬にして消えてしまうなんてそんな夢みてえな話」
　トシアキは笑いながら否定する。
「いえ……。そうとも限らないかもしれませんわよ」
　エリカが顎に手をやりながら言う。
「あら、エリカさんもそう思ってくれるかしら？」
「シンオウに来る時トウガンさんと船を同じくしたのですが……」
　エリカは簡潔にトウガンが乗船していた理由と調査していることを話した。
「へぇ……トウガンさんがそれを見つけているとはね……。最近は選挙で忙しくてなか

なか集中できなかったけど時間があれば聞いてみようかしら。ありがとうエリカさん」

シロナはエリカに礼をして感謝の意を示した。トシアキの表情はやや険しくなっていた。

それからも二言三言話してシロナやトシアキと別れたが、選挙については聞きそびれてしまった。

―午後9時　同市　ポケモンセンター―

二人はそのままポケモンセンターに行き、宿泊することにした。

夕食を食べてポケモンの世話をし、レッドが先に風呂に入っているとエリカのポケッチが鳴り響いた。

「はいもしもし……。あら。ナツキさんですか?」

「はい。あのう。シジマさんからジムにお電話があってリーダーに取り次いで欲しいと……」

「左様ですか。分かりました。つなげてください」

暫く待っていると久々にシジマの声がした。

「やあやあエリカ女史!　久しぶりだのう!　順調なようでなによりよハッハッ!」

シジマはいつもどおりの元気な様子である。

「シジマさんも壮健なようで何よりですわ。ところで私に何の御用でしょうか?」

「うむ。もうそろそろスモモのジムも近いところだと思うての。覚えておるか？　わしが二人に頼んだこと」
　エリカは暫し間をおいて。
「忘れるはずがありませんわ」
　と答えた。
　会話は一瞬にして緊張した雰囲気に包まれた。
―第二十三話　カムイ・ヌイナ　終―

第二十四話　再会

　ポケッチからのシジマの声はエリカに深刻さを伝えるには十分なほど緊迫さを物語っていた。
「うむ。覚えているのならば良い。頼むぞ」
　エリカは承諾の返事を返した後、続ける。
「それにしても……現役ジムリーダーの父親がそんな事をしているとはどうも私には信じられないですわ」
　スモモの父親。即ちシジマの弟が風の便りによると娘のスモモを虐待しているという噂があり、レッドとエリカはその真偽を確かめるようシジマから依頼されていた。
「ワシもにわかには信じられん。やつはクマオと言ってな。クマと呼んでいたがとてもそんな事をするような男ではない。ワシがまだやんちゃだった頃はよく弟をいじめていた連中を懲らしめていたんだがその時も体を張って止めたのだぞ」
「そうですか……」
「しかしどうにもアレのカミさんが突然離婚して男と逃げてからはよくない噂ばかりでな……。こうも色々なところからスモモが酷い目に遭っているという話を聞かされる

とワシも放ってはおけぬでな。こうしてお前さん方に頼んだわけだ」
「引き受けた以上できる限りの事は致します……。しかし、シジマさんは本当に行かれなくても宜しいのですか？」
　エリカは念押しの意味合いも含めた様子で尋ねる。
「ワシも色々とやることがあるからのう……そうそうタンバを空ける訳にはいかんのだ」
　シジマはジムリーダーと同時に自身の建てたタンバ体育大学の学長兼教授であり多忙の身である。
「しかしこれはシジマさんの姪御さんに起っているお話なのですよ？」
「同時に弟の話でもある。兄弟とはいえ別の家庭の事にそうおいそれと口を挟むような真似はわしやしたくない」
　あくまでも弟を信じつつ姪の事も斟酌した上でのシジマの方策であることがエリカにもひしひしと伝わるのであった。
　その後も5分ほど会話してシジマとの通話は切れた。
　―10月22日　午前10時　206番道路―
　二人は翌朝そのままハクタイを出て一路、次のバッジを獲得するためヨスガシティへと向かっていた。

「そういやエリカさ。夕べ誰かと電話してなかったか？」
「あら？　聞こえていらしたのですか？」
　彼女は意外とでも言いたげな目をしている。
「着替えしてる最中に聞こえたから」
「左様でございましたか。実はシジマさんからお電話があったのですわ」
「シジマさんから……？　何かあったっけ」
　レッドは完全に記憶が抜け落ちているようだ。
「もう。おとぼけになられては困りますわ。姪のトバリジムリーダーのスモモさんがその……実の父親から虐待を受けているかもしれないというお話で、私たちに状況を見てきて欲しいとお願いされたではないですか」
「ああ……あったなそういえばそんなこと」
　レッドは帽子の縁に手をやる。しかしレッド当人からすれば雑事の一つに過ぎないとでも言いたげな心情である。
　彼女はしばし間をおいて言う。
「もう。少しは真剣に聞いてくださいまし。これは重大事なんですよ？　範となるべき肉親がジムリーダーに寄生し、その上虐待を加えているなど事実であればとんでもない話なのですよ？」

「あーそうだな……。うん。確か次の次がスモモさんだし身を入れていくか」
レッドは内心仕方がないとでもいう雰囲気でエリカの話を聞くのであった。
それから6日をかけて２０７番道路やテンガン山、そして２０８番道路を過ぎてヨスガシティに到着した。
―ヨスガシティ　シンオウ第一の文化都市。その代表例がポケモンコンテスト会場で連日連夜、様々なポケモンたちが優雅なパフォーマンスを繰り広げて人々を魅了している。ジムリーダーのメリッサはその中でも大目玉で毎回注目されている。その関連施設も充実しており、ポフィン作りもできたりする。
―１０月２８日　午後1時　ヨスガシティ　ポケモンジム―
二人はポケモンセンターで回復したその足ですぐさまジムへ入った。
ジムリーダーのメリッサというのはかなり特徴的な髪をした婦人である。
「オーホッホッホ！　お待ちしておりました！　伝説の夫婦がここへ来ると聞いていたのでクビをながーくして待てました！」
彼女は外国人であるからかやや日本語に違和感があるようだ。
「あの……メリッサさんは確か海外から来られた方ですわよね？　もし日本語に慣れていないのであれば母国語を話されても私は構いませんが……」
「おい何いってんだ俺は困るんだよ」

レッドはエリカに耳打ちする。エリカは随時訳すと約束したのでそのまま引き下がった。

「オー！　貴女イングリッシュ分かりますか？　それはスバラシイですね！　本当に良いのデスカ？」

メリッサは久々に母国語を理解してくれる人に会えたとばかりに嬉しそうに言う。

「はい」

彼女は自信たっぷりに頷いてみせる。メリッサはこれまで抑圧されたものを吐き出すかのようにペラペラと英語を話し始めた……。

―5分後―

メリッサの発言は収まる様子も見せようとせず続く。

「お、おいエリカお前訳すって言っただろ？」

レッドは耳慣れぬ言葉に冷や汗を書きながら急かすような物言いで尋ねる。

彼女はあれからメリッサの言葉をじっと聞き入っている。

レッドの催促からしばらく間を空けて

「すみません……さっぱり解らないです」

とエリカはお手上げな様子でレッドに向き直った。

「え？」

「ここまで訛りのきつい英語を話される方に会ったことがなくて……。単語すら聞き取るのに苦労するのです。しかし私から言った手前どうしたものか……」

エリカは眉根を寄せて困惑した様子で言う。

「言ってる場合か！　たくしょうがないな……」

レッドは身振り手振りでメリッサに発言を止めることを頼んだ。

しばらくしてエリカは事情を話す。

「オー……。それはスミマセンでした。私はラテンアメリカのカントリーもカントリーなところで育ったものデスカラ……。治そうとガンバってはいるんですけどネ……」

メリッサはすまなそうに頭を下げた。

「い、いえいえ。私も貴女の事情を知らず得意気に引き受けてしまい申し訳ありません」

エリカも同じく頭を下げた。

「さて、では改めて自己紹介しましょ。アタシはメリッサ。この国に来てポケモンをはじめとしていろいろな事をいーっぱいべんきょーしました。そしたらコンテストのコーディーネータだけでなくジムリーダーに。伝説の夫婦といってもアタシは一歩も引きまセーン！　貴方達に勝ってみせます！　それがジムリーダー！」

――

レッドは1体。エリカは2体を失い勝利した。

「流石につよーいですネー！　これはバッジを渡さなければいけません！　では、どうぞ」

二人は三枚目のバッジとなるレリックバッジを恭しく受け取った。

「貴方達は噂の通りとーっても強いデース。ですが、シンオウにはまだまだ強いジムリーダーがたくさんいること、忘れないで、コツコツと階段をノボっていくように強くなるといいよ」

二人はその後も何分か話してジムを後にした。

―ジムの外―

「これで3つ目ですわね。やっとシンオウの空気にも慣れてきたという感触がしますわね」

彼女は涼やかな表情をしながら言う。

「そうだな。ポケモンたちもどうにか順応してきたようだ。ところでお前帰りがけにコンテストの事メリッサさんに聞いてたけど……」

「べ、別に行きませんわよ。ただそれとなしに聞いてみただけですわ」

「そうか気になるのか……。やっぱりエリカは女の子だしな」

レッドは笑みを浮かべながら言う。

「し、しかし私達はバトルの為にここに来ているのですし……」

「別に俺は多少寄り道で行っても構わないんだぞ」
エリカは少しだけ思考を巡らせたかのような間をあけた後
「お気持ちだけ戴きますわ。私の事で時間を割いていただくわけには参りませんもの」
と、きっぱりとした調子の声色で答える。
レッドはエリカの強い意思を感じさせる言葉にそうかとだけ答えてその後は続けなかった。
その後、偶然出会ったボックス管理者のミズキからイーブイを貰ってヨスガを発った。
２０９番道路を通過し、二人はズイタウンに入った。
―ズイタウン　シンオウ地方の育て屋があり、ポケモントレーナー達の拠り所となっている。東側にはアルフの遺跡と似た性質を持つズイの遺跡がありズイタウンの名所の一つである。ポケモン新聞社もここにあり捕獲のプロを募集中。
―１０月３１日　午前１０時　ズイタウン　育て屋付近―
ズイタウンに到着し、用意を整えると二人は育て屋に通りがかった。
すると、戸口で主人と思しき老爺と話している少女がいるのを見かける。
「あれ……もしかしてミカンさんじゃないか？」
彼女は二人から少し離れた場所で長袖のワンピースを着て、大きめのリュックサック

を背負いながら話している。
エリカは一瞬だけ表情を曇らせたかのように見えたがすぐに戻った。
「ええ、そうですわね」
二人ともどうしようかその場にとどまっていると二人に気づいて育て屋との話を切り上げたミカンの方からエリカに呼びかけた。
「エリカさん！　これはどうもお久しぶりです」
ミカンは気を使ってか敢えてレッドではなくエリカに話しかけた風である。
エリカはやや出遅れて
「こちらこそお久しぶりですわ。ミカンさん」
まるでジョウトを旅立った時の一件などなかったことのように彼女は和やかな表情で応じた。
「こちらにはどのような」
エリカは先を促す尋ね方をする。
「休みがとれたのでシンオウへ行こうかなと。まだ観光でここにきたことはなかったので」
「そういえばシジマさんと修行されていた際に来たことはあるのでしたわね」
二人の会話に不穏な様子は見受けられないがそれが逆にどこか不気味さをレッドは

感じるのであった。
「え？　どうしてそんなこと……。そこまでお話ししましたっけ？」
　ミカンにとっては意外な事だった様子でやや声色が変わっている。
「シジマさんからお伺いしたものですから」
「ああ……。相変わらず口の軽い人ですね」
　ミカンは納得した様子でため息をつく。諦めているのか非難の色はうかがえない。
「相当に辛い訓練を課されたと聞いてますわ。よくぞ耐え抜かれましたわね」
　彼女の表情や声に変化はなく他意はみられない。素直に敬意を示しているようだ。
「あの時のあたしにはもう後がありませんでしたから……それにスモモさんも一緒でしたし」
「そのようでしたわね。スモモさんと一緒に鍛錬されたのですよね？」
「ええ。はい。まああたしとは目的は違いますけど同じ所で修行してましたね」
　エリカは相槌を打ってしばし間をおいて尋ねる。
「どのような方でしたか？」
「そうですねぇ」とミカンは空に目を遣って記憶をたどり、懐かしげな様子で話す。
「歳下のあたしに色々と気遣ってくれてシジマさんが居ないときにバトルの相手になってくれたり、色々と悩みとか聞いてくれたりして優しい人でしたよ。あたしにとっては

シンオウのお姉さんのようなそんな存在です」

ミカンは顔をほころばせながら言う。辛い修行の中での心温まる存在であったことはどうやら事実のようだ。

レッドはこの会話を聞いていてミカンから更にスモモのことを聞き出そうと考えた。

「ミカンさんあの……」

レッドが口を開くと二人から妙な緊張感が発せられた。

「スモモさんはどういう事を話していたんですか？」

ミカンはレッドからの質問に一瞬だけ戸惑いのような仕草をしたがすぐに襟を正す。

「え……。ああ。スモモさんとの会話は本当に他愛のないものばかりでしたけど……」

「それでも構いません」

「そ、そうですか。ポケモンの特性の話とか今日のごはんはなんだろうなぁみたいな話とか……あ、あとお父さんの話をしてましたね」

スモモの父という単語に二人は少しだけ身を乗り出して反応する。

「あの……なにか？」

「い、いえいえ！　なんでもありませんわ。続けてくださいませ」

エリカは手を前に遣って先を勧める。シジマからこの件については他言無用と言われているのだ。

ミカンは腑に落ちない表情を続けながらも仕切り直す。
「スモモさんいつもポケットの中にお守りをしのばせていてもうそれが本当にボロボロなんですよ。神社とか読めないくらいに。なんでそれを大事に持っているのか聞いたら……」
――
―２０１０年２月６日　午後８時　２１７番道路　ログハウス　リビング―
ジムリーダーになるため一念発起したミカンはこの当時親のコネを頼ってシジマのもとで修行し、その一環として一流の格闘家になるために研鑽を積んでいたスモモと共に一ヶ月間雪中訓練を行っていた。（スモモ、ミカンともに学校は休学中）
修行はスモモはともかくこの前までジョウトにいたミカンにとっては非常に過酷であり、２歳年上で親身に相談に乗ってくれるスモモだけが彼女の心の依代であった。
この日も厳しい訓練を終えて夕食をとった。普段ならば１９時から２２時まで夜間訓練の予定だったが想定以上の暴風雪が吹き荒れているため中止になった。
そのため二人は束の間の休息をとっている。
スモモはリビングのソファに座りながら裁縫道具を出して布地を縫っていた。
「何を縫ってるんですか？」
ミカンも同じくスモモの左にあるソファでココアを飲みながらくつろいでいる。

「これ？　これはですね。お父さんがくれたお守りです」
　スモモは布地に目をやったまま答える。
「お守り……ですか？」
　しかしそれは言われなければただのボロにしか見えないほど年季が入っているように見え、ミカンは首をかしげている。
「アハハ……。まあ見えないですよね」
「いえ！　そんなことは」
　ミカンは慌てて取り繕おうとしたがスモモはかぶりを横にふる。
「いいんです。分かっているから」
　ミカンは黙ってもう一口ココアを飲んで尋ねる。
「どうしてそんなに大事に？」
「うちのお父さん不器用な性格で……。こういう事あまりする人じゃないんです。でも、あたしが初めて格闘家としてここ一番の試合を控えていた時に黙ってこれをくれたわけです」
「へぇ」
「私がそういう道に進むことお母さんは応援してくれたけどお父さんは伯父さんを見てるせいかあまり乗り気じゃなくて。でもこれをくれた時中の手紙に自分の心に正直に

生きなさいとだけ書き記してあって」
「それってつまり……」
スモモは嬉しそうに首を縦に振る。
「私のことを認めてくれたんだ……って本当に嬉しかった。それ以来私にとってはかげがえのない大事な物なので肌身離さずにこうして持っているんですよ」
スモモは貰った当時の事をこう言って締めくくった。
繕いかけのお守りを包む手は暖かみに満ちているようにミカンの目には映っただろう。

――

―2013年　10月31日　午前10時22分　ズイタウン　育て屋前―
「そうだったんですね……」
ミカンの回想をきいたエリカは切なげな表情でそう返した。
「優しい人だったんだな。スモモさんのお父さんってのは」
レッドは含意のある言い方で返す。
「あの……。本当に何もないんですか？　やけに慎重に聞いてましたけど？」
ミカンは疑念を匂わせる声で言う。
「いえ。あの」

エリカはしばし逡巡する。適当な言い訳を考えているのだろうとレッドは思った。
「スモモさんはやや特殊な事情の生い立ちなようなので親御さんはどういう方なのだろうなとふと気になっただけですわ」
「そ、そうですか……。確かにあたしにああ嬉しそうに話していた直後にあんなことになってしまいましたしね」
あんなことというのは恐らくシジマも言っていたスモモの両親の離婚である。
ミカンはそういった後意味深げな沈黙をする。
「本当にそれだけですわ。他意はありません」
「わかりました。そういうことならば……」
ミカンは笑みを浮かべて答える。恐らく二人を安心させるための笑みだ。
「そういえば、ミカンさんはどうしてこちらに？」
エリカは話題を切り替える。
「ああ……。ここはシンオウ第一の育て屋さんがあって、あたしも何匹かジム用にポケモン預けようかなと色々相談してたんですよ」
「あら。そういえば私も聞いたことがありますわ自然に恵まれた大地でポケモンをのびのびと育ててより強く、たくましくしますというウリ文句だったような」
育て屋はジムリーダーでもジムトレーナー用ポケモンへの訓練や緊急時の予備ポケ

モンの強化などの目的で育て屋を利用する。全てのジムリーダーはモラトリアムのトレーナーの為に最低でも手加減なしの状態を含めて五段階の強さにわけてポケモンのパーティをいくつかのパターンにわけて用意しなければならないため欠かせない存在なのである。

「話を聞いた限りではポケモンに過度のストレスを与えずしかししっかりと自然の環境の中で育てていくみたいなので悪くはないかなと」

「しかしジョウトからシンオウに定期的にいくのはかなりの骨が折れるのではないですか？」

「いいんです。あたしはポケモンのためならば手間を惜しみませんから」

ミカンは笑みを保ちつつしかし毅然とした口調で言う。彼女なりのリーダーとしての矜持があるようだ。

「それにわざわざ行かなくても毎日メールで様子や成果などを事細かに報告してくれますし。エリカさんが思うほどには手はかからないと思うんです」

「そうですか。それほど便利ならば宜しいですわね」

そうこう話していると育て屋の前に北の方向から大型トラックがとまった。

トラックから数人の作業員と思しき人が育て屋の主人に話しかけ、中にはいっていく。

「なんでしょうかあれは……」
「さあ……。あたしも初めてみます」
　10分ほどすると作業員たちは次々とゲージをトラックの中に入れていく。中からは様々なポケモンの鳴き声が聞こえてくる。
　ミカンは気になったのか、近くで作業を見守っている育て屋の主人に話しかける。
「あの、すみませんこれは何をしているのでしょう?」
「ああ。これはのう。引取期限が過ぎても一向に主人が還ってこないポケモンや主人が受け取りを拒否したポケモンたちを公のポケモン保安区に連れて行ってもらうのじゃよ」
　ポケモン保安区は各地方にある様々な事情を抱えたポケモンを公で引き取りとりあえずの時間を過ごさせる場所である。
「ええ? こちらではずっと預からないのですか?」
　ミカンは驚いた様子で言う。
　保安区はポケモンたちにとって住みよい場所であるがずっとそこにいれるわけではない。法の定めによれば一年以上里親がみつかったり、元の主人やその関係者が引き取るなどの〝その後〟が決まらなかったポケモンについては一般の動物と同じく保健所へ移送される。

そこで更に引き取るものがいないか広報しそれでも決まらなかったものは

――殺処分される。

「わしらも本意ではない。できることならばこのようなことはしたくない。だが育て屋の仕事はあくまで育てること。主のいないポケモンの世話をすることではないのじゃ。これは仕方のないことなのじゃ……」

主人は堪えるような表情でミカンに話す。

「辛いお仕事ですわね……。心中お察し致します」

「ありがとう。だがのう。ここ数年はそこまで至るポケモンは劇的に減っているのじゃ」

主人の表情は少しだけ明るくなる。

「それは良かったじゃないですか。しかし……」

「どうして？」とでも言いたげな表情をミカンは浮かべている。

「最近は黄道社というあの銀河グループをはじめとした合資会社が保安区にいる身寄りのないポケモンたちを積極的に受け入れてくれてのう。なんでもそこからポケモンたちにあった会社や家庭などに渡しているそうなのじゃ。全部という訳ではないがの」

〝銀河グループ〟という単語にレッドとエリカは眉をしかめた。

ハンサム曰く反ポケモン組織のギンガ団と深い関わりがあるというグループだ。
「はぁ～！　素晴らしい会社じゃないですかそれ！　ねえエリカさん。レッドさん！」
もちろんそんな事を知るよしもないミカンは目を輝かせて感動してしまっている。
二人はつられ笑いをして答える。
心の底から嬉しそうに話し合う二人を前にしてレッドとエリカは何も言う気にはなれなかった。
―同日　午後7時30分　同町　ポケモンセンター　17号室―
二人はあれからミカンと別れ、しばらく散策した後ポケモンセンターで一泊することにした。
そして夕食を食べ、エリカは食器の後片付けをしている。
レッドはポケモンの世話をする傍ら、ピカチュウやキレイハナ越しにエリカの背を見ながら話しかける。
「スモモさんの事なんだけど」
彼女は振り向かず頷いて答える。
「お父さん、思っていたよりはいい人だったみたいだな」
「そうですね」
「そんな人が本当に自分の子どもに暴力をふるうなんて……あり得るのかなぁ」

レッドは半信半疑な様子で言う。
「人というものは些細なきっかけでも変わることがあります。ましてや離婚などという一大事を経験すれば言うまでもないでしょう」
エリカは洗った皿を乾布巾で拭きながら答えた。
「そうか……」
彼女は家事の手を緩めて暫し黙考した後、寂しげな口調で付け加える。
「私ならば……想像したくもありませんもの」
彼女は拭いた皿を棚に戻す。
「そうか……そうだよな」
レッドは視線をピカチュウたちに戻してそれに対しややドライな口調で返す。
「ところで貴方……」
彼女は家事を終えてレッドに向かって歩く。
「ミカンさんについてのことなのですけど」
彼女はピカチュウとキレイハナを挟んで正座する。
二匹ともそれぞれの主人を見て動静を見守る。
「え、あ、うん」
レッドも思わず片膝立ちの姿勢からから正座になる。

「ミカンさんに……どうして話しかけられたのですか?」
「え?」
レッドはもっと深刻な話題だと思っていたのか拍子抜けした様子で言う。
「なんだそんなこと……」
「なんだではありませんわ。私はもしやミカンさんにお心を……」
レッドは笑い飛ばしてやろうかとも思ったが、エリカは殊の外深刻に受け取っていたようで今にも泣きそうな表情である。
「そんな事あるわけないだろ。あの時はただ単に話の詳しいところを聞きたかったから……」
「本当に、それだけですか?」
彼女の瞳は更に潤いを増している。
「本当だって。前も言ったけどミカンさんに俺はそういう感情は……」
レッドはアサギ港でキスされたことをふと思い出した。彼女の唇の感触、質感、素朴なリップの香りなどなどを想起する。
すると彼は二の句を継げなくなっていた。
「もう! どうしてそこで黙ってしまうのですか!」
エリカは語気を荒げてレッドに返答を迫る。

レッドはとにかくこの場をおさめようとピカチュウとキレイハナに避けるよう指示する。
「貴方、話をそらそうとしても」
「エリカ！」
レッドは二匹が背後に行ったところですかさずエリカにディープキスをする。
ミカンの事を忘れ去る為か、エリカの感触を更に刻む為か。レッドには分からなかった。
「っ……はぁ……。こ、こんなことで私は」
エリカは十秒ほど唇を奪われた後、肩を離して顔を上気させながら言う。
レッドはすかさず更に続けた。
エリカも二回目は抵抗をせずそのままレッドに身を預けた。
―午後8時　同所―
ベッドに移っていざ本番をしようとしたが、エリカのポケッチに電話が入り中断を余儀なくされた。
「はぁ……またか」
レッドはまたも悶々とした様子である。かれこれエリカと情をかわそうと幾度となく試み、直前まではいくが必ず何がしかの邪魔が入るのだ。

「すみません貴方……。ヒカリさんからのお電話だったものですから」
「いやいいよ。別に気にしてないから」
そう言いつつもレッドの内心では沸々としたものがある。
「あのさ……続き」
レッドは彼女の素肌から一枚隔てているシーツを取る。エリカは相手に見えるのでもないのに通話をはじめた瞬間にシーツを体にかぶせていた。
エリカは数秒間を空けて答える。
「ご、ごめんなさい。一回切り替わってしまうとどうしても……」
彼女はシーツを剥ごうとはしない。彼女曰く邪魔が入って中断されると気分が切り替わってしまい再開することができないようなのだ。
「そう……そうなんだよ……な。わかった」
レッドも自らの童貞、彼女の処女を無理に奪うような形は望んでいなかった。
その為エリカと性的な関係を持ってから随分と時間が経つというのに未だに肝腎の行為ができないでいた。
「じゃあ。俺は……風呂でも入ってくるわ」
「は、はい！　どうぞ。お湯はもう用意できてますから」
ピカチュウが風呂にはいるという主人の言葉を聞いてトコトコと歩いてきた。

「ピカ！」
「悪いな。今日は一人で入らしてくれ」
ピカチュウは残念そうに下を向く。
―浴室―
レッドはシャワーを浴びながらこれまでの自身の性活について考えている。
「俺たち……恋人、なんだよな」
シャワーはそれに答えるでもなく無情に体を濡らせ続けた。
――
それから二人は２１０番道路、２１５番道路を後にしてトバリシティに到着した。
―トバリシティ　シンオウ第一の商業都市。ゲームコーナーやトバリデパートがある。その他にもギンガ団ビルや倉庫などもあり、治安は良いとは言えない。遙か昔、隕石が落ちた場所としても知られ、現在も跡が残っている。
―１１月５日　午後１１時　トバリシティ　西側入口付近―
「やっとついたな」
「ええ。長い道のりでしたわね……」
大雨の為到着が予定より大幅に遅れ、目の前はまさに夜の帳がおりていた。街灯と点々とした建物の光がある以外には手近な光はない。

「さてそんじゃ行くか。はやく休もう……」
と歩き始めると突如水色のおかっぱ頭をした男が二人前にでてきた。
「おーっと！　ここから先は通さないぞ！」
「は？」
レッドは不快感をあらわにした声で言う。
「通してほしければ持っているポケモンを我々の崇高なる計画の為に差し出してもらおうか！　さもなくば痛い目を見てもらうぞ！」
もうひとりの団員がモンスターボールを構えながら言う。
「ギンガ団ですね……。ハクタイでも見ましたわね」
「ったくこっちは疲れてんのに……。面倒くさい奴らだな！」
レッドもモンスターボールを構え、臨戦態勢になる。
しかし、奥から一人の上官と思しき団員から静止をかける。
「おい！　何してんだ！」
「えっ。何っていつもの仕事を」
「指示書を見てなかったのか！　この二人は危険人物だから触れるなってかいてあるだろ！」
上官が下っ端の頭を殴りながら指示書を見せつける。

「げっ。本当だ！　どどどうしましょう?」
暗がりの中でも下っ端が動揺しているのが二人には手に取るようにわかった。
「どうしましょうも何もあるか！　逃げるぞ！」
そう言うと三人の団員は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。
レッドとエリカは疲労しており追いかける気力も失せていた。
「なんだったんだ一体……」
「さあ……。しかしどうやら顔を覚えられているようですわね」
二人はそのままポケモンセンターへ向かい、ポケモンを回復させて眠った。
―11月6日　午前10時　トバリシティ　ポケモンジム―
翌日、レッドとエリカは朝食を食べてポケモンジムへ入りリーダーのスモモのところにたどりつく。
スモモは華奢な体格の少女ではあるが、格闘家らしくノースリーブの上着に白い道着を下に穿いた活動的な服装をしている。
「初めまして。よろしくおねがいします」
スモモは深々と流れるような美しい所作でお辞儀をする。
二人もつられて返礼した。
「お二人の噂はこちらでもよく耳にします。ここに至るまで多くのジムリーダーや四天

王、チャンピオンを倒した凄い方なんですよね」

彼女は視線を合わせて讃えるような様子の声色で話す。

「い、いえいえスモモさんこそ格闘の世界では大層なご活躍なそうで素晴らしいですわ」

スモモは２０１２年の五輪で３つの銀メダルを手にし、その他にも数々の大会で優秀な成績をおさめる、次代のアスリートの中では屈指の実力を持つとされている。その功績が讃えられてトバリ市民からの推薦を受け、２０１２年の秋にリーダーに着任した。

「いえいえ。伯父さんの影響なだけですから……。それにポケモンとは関係のないことですし」

彼女はモンスターボールを構える。

「リーダーになってからまだ一年の新参者で、どうしてリーダーになれたのか、強さとはどういうものか私なりに考え続け、まだ結論は出ていません。しかし、ジムリーダーとして出せる限りの力をあなた達にぶつけますから、どこからでもかかってきてください！」

スモモはチャーレムとカイリキー。レッドはリザードンを、エリカはルンパッパを繰り出す。

「リザードン！　カイリキーにエアスラッシュ！」

リザードンはカイリキーに何者をも切り裂く空気の刃を繰り出す。

カイリキーは座してそれを受け、体力を8割失う。
「カイリキー！　いわなだれ！」
ルンパッパはなんとかよけるも、リザードンが三発目に直撃を受け、そのまま洗礼を受ける。
体力をカイリキーと同じく7割うしなった。
「チャーレム！　ビルドアップ」
チャーレムはウォーミングアップをして戦いに備えた。
「ルンパッパ。カイリキーに熱湯です！」
ルンパッパは蒸気を出しながら熱湯をカイリキーに叩きつける。
カイリキーは止めを刺され、後ろに倒れた。
「流石ですね……。やはりこちらも本気を出さなければ！　行って、ルカリオ！」
繰り出されたルカリオはじっと二体を見据えている。
「ルカリオ！　剣の舞！」
ルカリオは雄々しく舞い、闘いに備える。
「リザードン。ルカリオに問大文字！」
「問題です。儒教の経書のうち、四書は論語、中庸、孟子。あと一つは？」
ルカリオは黙って考え込んでしまった。

「ブッブー！　時間切れです！　正解は大学でしたあああ！」

そう言いながらリザードンは渾身の大文字をルカリオに繰り出す。

ルカリオは致命的なまでの大ダメージを食らうが、体力を3％程残してなんとか立っている。

「じゃ、弱点のタイプなのにまだなお立っているだと……!?」

レッドは我が目を疑っている。

「ルカリオは私の小さい頃にリオルから育てた大事なポケモンです。ちょっとやそっとの攻撃では抜けませんよ！」

スモモは笑みを浮かべて言う。レッドの猛攻に耐えた事が殊の外嬉しかったことがうかがえる。

「チャーレム！　リザードンに思念の頭突き！」

チャーレムがリザードンの土手っ腹に突撃し、弾丸のごとく頭突きした。ビルドアップで攻撃が加算されたせいもあってかそのまま起き上がらなかった。

――

レッドは2体、エリカは1体を失い勝利した。

「まいりました……。私の負けです。しかし、多くのことを学ばせて貰いました。ですので、このコボルバッジ受け取ってください！」

「ありがとうございます」
　二人はいつもの通り恭しく受け取る。シンオウ四枚目のバッジである。
「これから先、私よりももっと強い人と闘うことにもなるでしょうけど……。お二人ならきっとやれると思います。頑張ってください」
「スモモさんにそう言われると実に光栄ですわ。ところで……」
　エリカが本題を切り出そうとスモモに目線を合わせる。レッドの心中にも緊張が走った。
　するとにわかにジムの背後が騒がしくなった。
「ちょっとちょっと！　駄目ですって！　今リーダーたたかっている最中なんですから」
「うるせえ！　お前には関係ねえんだよ！」
　一人の中年男性が羽交い締めにしているジムトレーナーを一蹴する。
　他のトレーナーも止めようとするが酒の力のせいかリミッターが外れており、全く意に介そうとしない。
「うぉ～い！　スモモォ～！」
　中年の男は定まらぬ歩きでスモモの名を叫びながらここに近寄ってくる。
「お……お父さん」

スモモの表情が一気に強張った。
レッドとエリカは、これを見て噂は事実だったということを嫌でも悟るのであった―

―第二十四話　再会　終―

第二十五話　ああ有情

スモモの父、クマオは憤然とした様子でスモモとレッド、エリカの三人がいるところまでやってきた。
酒でつぶれたかのようなヤケた声で彼は叫ぶ。
「スモモぉ～。さっきスロやったらすっちまってさぁ。あともう少しで出そうなんだよ。な？」
そう言いながら彼は手を差し出す。
「さ……さっきあげたばか」
「んだとぉ!?　親に逆らうのかテメーはよぉ！」
クマオはスモモめがけて拳を向かわせた。スモモは避けようともせずに拳を迎えようと身構える。
しかし、直前でレッドが手を止めた。
「あ？　何すんだてめ」
「それはこっちのセリフだ。実の娘に手を上げるなんてどういう嗜好してんだ！」
レッドは父の手を骨の音が聞こえそうな程に強く捻り上げる。

「いでででで！　てめぇ……よくもやりやがったな！」
父はあいている拳でレッドの腹を狙う。しかし酔っぱらいの殴る軌道などレッドからすれば止まってるも同然に見え、難なくよけてみせついでに捻っている拳を思い切り父の背後に伸ばしてみせる。
「っつ……！　わかった。わかったからもうやめてくれ！」
父は力量差をようやく理解したのか子どもの喚くかのような声で制止を求めた。
「誰がやめるかよこの暴力親父が！」
レッドは父の尻を蹴り上げようと右足に力をこめる。
「や……やめてください！」
「止めないでください。スモモさん。俺はこういうクズがゆるせ……」
「あたしのお父さんに暴力をふるわないでって言ってるんです!!」
スモモは何物をも断ち切らんばかりの声量でレッドを制す。自分が殴られそうだったというのにまるでレッドが彼女を殴ろうとしたかのような剣幕である。
レッドは気圧されて思わず父から手を放した。
父は解放されると、先程の弱気はどこへやら床に唾を吐きかけた。
「スモモさん。落ち着いてください。夫の手荒な対応は私からも謝罪しますからどうか……」

エリカが頭を下げながら仲裁に入る。
「あっ……。いえ。すみません私も取り乱してしまって……」
スモモもエリカに軽く頭を下げた。
「おいおい俺のこと忘れてんじゃねーよ！　金……」
言いかけたところでレッドとエリカが無言の圧力を加える。
「チッ……。わーったよ。後でな！　待ってるぜ」
スモモは伏し目がちに頷く。父は地ならししながら三人の前から去っていく。
きまずい沈黙がしばらくあたりを漂った。
「ご、ごめんなさい。うちのお父さんが」
沈黙を破ったのはスモモだった。
「い、いえいえいいんですよ。気にしていませんから……」
「あの……。それでエリカさん先程何か言いかけていましたよね？」
「え……あぁそれは……」
エリカの明瞭としない返答からつまりそういうことだと、スモモはすぐに察した。
「そうですか……」
また気まずい沈黙があたりを漂う。
「いつから、ああいうことに？」

今度沈黙を破ったのはエリカだった。
「つ。つい最近ですよ！　ちょっと虫の居所が悪い時に私にあたるんです。ほんっと困ったお父さんで」
スモモは取り繕ったかのような笑みを返す。
「本当ですか？」
エリカはスモモの目を鋭く見つめる。
「は……はい。本当ですよ？」
スモモは間を空けて返答する。表情こそ崩さないが彼女の瞳の奥からは並々ならぬ底暗さがうかがえた。
「そうですか……」
エリカはなめるようにスモモの体を見る。なんとか虐待の証拠となるような傷痕がないか探っているのだろう。
しかし父というのは狡猾なのか。それともそれほどの力を与えていないのか定かでないがそのような痕跡は認められなかった。
「あの……どうかしましたか？」
「なんでもありませんわ」
「そろそろ行こうか」

レッドはこれ以上居てもスモモは口を割らないだろうと考え、一旦ジムを出ることを提案した。
「左様ですわね。それではスモモさん。ごきげんよう」
「は、はい！」
二人はスモモに背を向け、出口に向かう。
スモモは暫し逡巡した間を空けて尋ねる。
「伯父さんからですか？」
「えっ!?」
二人は振り返り、スモモの唐突な、しかし核心に迫った発言に戸惑う。
「そうなんですね……。わかりました。お話ししますから奥に来てもらえますか？」
スモモは意を決した表情で二人に言った。
レッドとエリカはそれに応じ、奥に通される。
―午前11時30分　同所　廊下―
スモモの先導で事務所スペースの扉を開くと、ジムトレーナーが困った表情でスモモに駆け寄ってきた。
「あの……リーダー。お父さんがまだ」
「渡さなかったんですか？」

「いえ勿論いくらかお渡ししたんですけど」
そうこう話していると奥からまた酒でヤケた声が響く。
「おー！　やっときたかおせえんだよ！」
父は先程と変わらぬ様子でスモモに詰め寄った。
「いい加減帰ってよ……。お金は十分に渡したでしょう？」
「あぁ!?　てめえスロ舐めてんのか!?　出ねえんだよあんなもんじゃよう！　またヤキ入れないとわからねえのか！」
父は再びスモモに拳をふるう。スモモはまたも抵抗する素振りを見せずただ身構えた。
「おい！」
レッドはすばやく先回りして先程とまた同じ要領で父の腕を掴もうとする。
「ヒッ！　ごごごめんなさいごめんなさい！」
父はレッドの姿を見るとすばやく退散していった。レッドの制止がよほど身にこたえたのだろう。
「はぁ……。わかりました。事務所の緊急用金庫からだしてあげて」
先程の渡したという金は通常の会計から出た金である。
「スモモさん。いくらなんでもそこまでやるこたぁ」

少し離れた場所に居たやや中年と思しきジムトレーナーが呆れた様子で言う。
「いいの。いいんです……」
スモモは拳を握り、自らに言い聞かすように答えた。
―応接間―
応接間に入るとかすかにタバコの匂いがした。
換気扇がフル稼働で回っており、脇によけられている灰皿から見るに相当な量のタバコが吸われていたことがうかがえる。
事態は思った以上に深刻であると二人はこのわずか数十分で自覚せざるを得なかった。
三人は席につき、スモモから口を開いた。
「今日はお見苦しいところばかりみせてすみませんでした」
スモモは二人に頭を下げる。
「いえ……。それよりも本当に大したことはないのですか?」
エリカは穏やかな表情を保ちつつやや尖った声色で尋ねる。
「改めて聞きますけど、お二人は本当にシジマ伯父さんから頼まれたのですか?」
スモモは質問には答えず二人の目を見据えて言う。
見透かされているので隠しても仕方がないと判断し、二人はうなずいた。

「分かりました。……。私は確かに嘘をついていました。しかし、本当にそこまでの事じゃないんですよ」
「そこまでとは？」
「伯父さんの力を借りるまでもないということです。これは私の家庭のことですから」
スモモは決然とした声色で言うが、瞳は相変わらず底暗いままである。
「はっきり申し上げますと、私は然るべき人や機関に相談したほうが良いと思うのです。シジマさんだと気が進まないと言うのであれば児童相談所を利用されては」
「……」
スモモはうつむく。公の機関にもまた相談する気はないようだ。
「何か事情でもおありなのですか？」
エリカは前のめりになってスモモを見つめる。心の底からスモモを気にかけているようだ。
「そういうわけでは……。とにかく私達のことはほっといてと伝えておいてください」
「ジムリーダーがそんな不健全な親子関係を持っている事自体看過できることではありませんよ？」
「査察部にでも通告する気ですか？」
スモモはあくまで冷静な声色で言う。

「いえ。そんなこと……」
「全ては私一人の問題なんです。他の人にどうこうしてもらうつもりはありません」
スモモはあくまで介入を拒否する姿勢を崩さない。
その後も十分ほど会話をしたが押し問答が続いたため一旦帰ることにした。
―午後1時半　トバリシティ　市街―
二人はジムを出て昼食を済ませ料理店近くの大通りに居た。
「スモモさん全く詳しいところ話そうとしなかったな……」
「あの怯えようを見る限りでは相当に深刻な心的外傷を抱えていると思われます。そう簡単には本人の口から話していただけないでしょうね」
「じゃあどうすんのさ。これをそのままシジマさんに言うのか？」
エリカは首を横にふる。
「まだまだ報告するには情報が少なすぎます。ジムトレーナーなどスモモさんに近い人から聞き出しましょう」
「そうだな。地道に聞いていこう」
―午後1時45分　トバリシティ　運動場―
トバリジムの道路を挟んで反対側には広めの運動場が整備されている。おそらくはトレーナーの鍛錬のために作られたものだが、市民にも開放されているようでこの時間

は２０人ほどが利用していた。
「それで？　まず誰に聞くのさ」
「幸いここからジムは見やすいところにあります。ジムから出てきたそれらしい服装を着た人にあたってみましょう」
　彼女の言うそれらしいとは恐らくトバリジムの中に多くいたスポーツウェアやジャージを着用していた人たちのことだろう。
「わかった。じゃあとりあえず待つか……」
　二人は入口付近のベンチに座り、それとなく様子をうかがった。
　数分ほどするとちょうどエリカの言うとおりの人物がジムから出てきたのでエリカが話しかけた。
　近くまで行ってみるとそれは先程スモモにそこまでしることはないと苦言を呈していた中年トレーナーだった。
　挨拶もそこそこに本題に入る。
「あのようなことは以前から行われていたのですか？」
「ジムまで殴り込むようになったのは数ヶ月くらい前からの話だな。前々から暴力を奮っているとかいう噂はあったが……」
　そこまで言うと男は黙ってしまった。言うもはばかられる程の感情があるのだろう。

「そうですか……。やはりきっかけはご両親の離婚ですか？」
「そうだ。クマ公の愛妻ぶりといったらトバリの街ではもう有名も有名だったからな……。それが急に男を作って逃げちまったつうんだからもうあのときの沈みっぷりったら半端なものじゃあなかったな」
「ではやはりそれ以来……」
「いや、最初からというわけではなかったみたいで、暴力までふるうようになったのはスモモちゃんが稼ぎ出してからだから去年のはじめくらいからだ」
「へぇ……随分と詳しいんですね」
　レッドが男の目をみながら言う。
「まぁクマ公とはシンオウに来てからの仲だからな。スモモちゃんのことも小さい頃からよーく知ってる。サクラ姐さ……ああこれはカミさんな。クマとサクラ姐さんとスモモちゃんの三人で仲睦まじく公園やらあそこのデパートで過ごしていたのを何度となく見かけたから本当に今は見てられないくらいに辛いんだ……」
　男は切実な表情で語る。
「そうでしょうね……。あまりにも今は痛々しすぎますわ」
「赤の他人のあんたらでさえそう思うんだ。あのジムにいる昔からスモモちゃんの事知ってるトレーナー……いやトバリ市民なら皆同じような気持ちだよ」

それからもいくつか色々と話をうかがいトレーナーと別れた。

―午後4時半　ポケモンセンター　334号室―

とりあえずシジマに報告するため二人は早めにポケモンセンターで宿をとった。

「しっかし本当スモモさんはかわいそうだな……」

「私も貴方も平穏な家庭で育ちましたからどうにも想像が及ばない話ですが……。しかし本当になんとかしなければスモモさんの心がもちませんわ」

「そうだなぁ。どう見てもかなり深刻そうな様子だったし……」

そうこう話した後、エリカはポケッチからシジマに電話をかけた。

シジマはすぐに出て単刀直入にエリカは今日のことを話した。

「そうか……。噂は本当だったのだな」

シジマは通話口越しからでもはっきりわかるほど落胆した声をして言う。

「ええ、スモモさんが虐待されているというのは事実です。ジムトレーナーの方のお話によれば何度か児童相談所の所員が通報を受けて駆けつけたことはあるようなのですが私たちに対してとおなじように……」

「そうか……。わかった。事が明らかになったからには今夜にもタンバを出てスモモのところへ行こう！」

シジマは鼻息を荒くしたような様子で言う。

「まあ……そんな。大丈夫なのですか？」
「どうにかなるわい。ワシは……ワシはクマを信じておった！　あの優しいクマが、そんなおぞましい事をするはずがないと。だが奴はワシの期待を裏切ったのだ！　これは懲らしめねばなるまいて」
「シジマさん落ち着いてくださ」
「これが落ち着いていられるものか！　手塩にかけてワシはスモモに目をかけたつもりじゃ。それが、よりにもよって実の父のクマにやられているのだぞ！」
　シジマの激昂は収まる気配を見せない。今にも殴りかかってきそうな気迫をもエリカに感じさせた。
　エリカはシジマの大声のせいでやや受話器から耳を離して静かに言った。
「とにかく冷静になってください。ここで処置を誤ればスモモさんをより傷つける結果になりかねませんわよ？」
　そう言うとシジマは深呼吸しているのかやや間を空けた。
「いや……すまんかった！　ありがとうなエリカ女史よ。よくぞ伝えてくれた。いずれ改めて礼を言おう」
　それからもいくつか言葉を交わしてシジマからの電話は切れた。
「全くシジマさんは相変わらずだなぁ。怒った声がここまではっきり聞こえてきたぞ」

レッドはうんざりした表情で言う。
エリカは引っかかることがあったのか一瞬だけ顔を曇らせたがすぐに元の柔和な表情に戻って言う。
「え……ええ。そうですわね。ともかくシジマさんは明日この街に来るそうです」
「そうか。じゃあ俺たちの仕事はこれで終わりってことだな？」
「そうですわね……。いくらなんでもこれ以上は私達のすべき領分を超えてますわ」
そうは言いつつも後ろ髪を引かれるような思いがあるのか浮かない顔である。
「気になるのか？」
やや間を空けて彼女は答える。
「はい。シジマさんはとても冷静といえる精神状態ではありませんし……。スモモさんもまた心を固く閉ざしています。このような状況で話し合いが進展するとは思えませんわ」
「そうはいってもしょうがないだろう。俺たちにはどうしようもない」
エリカはその日一日表情が明るくなることはなかった。
―午後１０時　スモモ宅　三階　スモモの部屋―
スモモの家は今月改築したばかりであった。
スモモ自身はもう少し資金が貯まってからにしようと考えていたが、見栄を張りたい

父親の強引なまでの発言で大きく改築されたのである。
　もともとは中の上といったところの一般住宅だったが、クマオが色々とオプションをつけたことで豪邸といわぬまでも三階建てプール付き９ＬＤＫのかなり大きな家となった。しかしいくらジムリーダーが高所得とはいってもスモモはまだジムリーダーになって一年しか経っていなかった為貯金をほぼ使い果たしての改築であった。
　スモモはジムでの仕事を終えてから自宅でルカリオとトレーニングを行った。それから今日のことを一番の相棒のポケモンであるルカリオと小さい丸机をはさんで座りながら話し合っていた。
「今日もお疲れ様。ルカリオ」
「……」
　ルカリオは黙って頷いている。
　彼はもともと寡黙な性格であった。十数年来一緒にいるスモモですらも彼の声を聞いたことは数えるほどしか無い。
　しかしそれでも彼女にとってはかけがえのない大事な存在であり、この毎日の対話が特に今の彼女にとっては大きな心の支えとなっていた。
「今日はレッドさんとエリカさんに色々と心配かけちゃったね……」
　ルカリオはまたも頷く。眼差しはやや申し訳なさそうだ。

「でも伯父さんも余計なお世話だよねぇ。ほんっと気にしないでって言ってるのに」
「……」
ルカリオは黙ったまま床の一点を見つめている。
「伯父さんなんかに……あたしたちの事なんかわかるはずないもの」
スモモはまたも暗い表情でうつむく。
「でもね……ルカリオ。あたし……二人に言われて思い出してみたの。あの日のこと」
「……」
ルカリオは正視してスモモを見た。
彼女は心の奥底にしまいこんでいたあの日のことをぽつりぽつりと話し始めた。
――
―2010年　3月5日　午後4時　トバリシティ　トバリ駅前―
スモモは一ヶ月に亘る雪中訓練を終えてシジマはミカンをジョウトまで送ると言うので彼女自身は一人で帰ってきた。
昼食を食べた後、約二時間半特急に揺られて彼女は駅前にいた。
日が傾いてきたなか、スモモは迎えを捜していたがすぐに頭を止める。
「お父さん……」
父は会社帰りなのかスーツにコートを羽織った姿でそこにいた。父は黙ってスモモ

に手を上げて応じる。
　彼女やや足早に父のもとに行く。
「あ、ありがとう……。でもどうしてお父さんが？　お母さんが来るって言ってたのに」
「仕事が早く終わったからな……。久々に三人一緒に帰ろうと」
「そっかあ！　へへ……ありがとう、お父さん。でも……」
　しかしあたりを見回しても母親の姿はない。
「全くしょうのない奴だな……。電話してみるか」
　父は携帯電話から妻の携帯にかける。しかし、数十コールかけても返答はなかった。
「変だな……。出ないぞ」
「もしかしたらもう急いでこっちに向かってるのかも。とりあえず帰ってみようよ」
　スモモの提案に応じて父は先に歩いていった。彼女は静かに後についていく。
　―市街―
　二人が家へ進めば進むほどに、街は夕陽の色に少しずつ染まっていく。
　心なしかやや駅を出たときよりも影が長く見えた。二人は道に残る残雪に気をつけながら進んでいった。
「お父さん。今日の修行ね。総仕上げだって伯父さんの一番弟子さんと闘ったんだけど、ギリギリのところでなんとか勝てて、すっごく伯父さんに褒められたんだ！」

スモモは嬉しそうに父に言う。
「ほう。凄いじゃないか」
「うん。これで次の大会もバッチリだよ！　コーチが先に調整の為に帰っちゃったから見せられなかったのが唯一残念だったけど……。あ、あとそうだ、ミカンちゃんの話きいてる？」
「ああ。母さんから少しな。リーダー志望の子だろう？」
スモモは頷いて続ける。
「あの子もシジマ伯父さんと同じ感じに直々で戦っていたんだけどもう互角くらいに戦えてて……。ワシから教えることはなにもないって、ヤナギさんっていう更に凄い人に推薦してもらえることになったんだ！」
「へぇそれも凄いな……。その子はもうリーダーになれるって事か？」
父がスモモに目を合わせて言う。
「ヤナギさん次第だけど……あの子ならきっとなれると思う。たった一ヶ月しか一緒に居なかったけれどジムリーダーになれるだけの資質と実力は十分備わったと思うもの」
「お前リーダーでも無いくせによくそんなことわかるなぁ」
父はスモモを笑いながらからかってみせる。
「もう！　あたしだってポケモンたちと一緒に闘いながら鍛錬してるんだよ？　それく

らい分かりますー」
　スモモはいたずらっぽく頬を膨らませて答える。
「ハッ、ハッ、ハ。そうだな。……。お前が言うんだ。きっとなれる」
　父は空を斜め上に眺めながら言う。そしてタバコを胸ポケットから取り出し、火をつけた。
　咥えてゆっくりと吸った後、またゆっくりと吐き出す。紫煙と共に白い吐息が見えた。
「冷えるな今日は……。そうだ。今日はお前の好物のすき焼きにでもするか」
「え、ほんと？」
「本当だとも。今日はお父さんが奮発して特上の肉を食いきれないくらい買ってやるぞ」
　父はタバコを片手に持ちながら、もう片方の手でスモモの頭を撫でている。
「やった！　じゃあ、早くお肉屋さんにいこ！　美味しいところ知ってるんだ」
　父は娘の手に引かれるように、自宅近くの商店街へ向かうのだった。
　―午後６時２０分　スモモ自宅　門前付近―
「全く……。まさか１０キロも買わされるなんてな。本当に食いきれるのか？」
　父は財布がすっからかんになるほど大量の肉を買わされた。それに加えて卵やたれ、

野菜類などを買い込み相当な量の荷物を二人で抱えている。
「またまた～。あたしの大食いを知らないわけじゃないでしょ？」
「まあな……。あーあいくらお祝いとはいえ滅多なこと口にするもんじゃないな」
父は自嘲している様子で話す。しかし言葉とは裏腹に後悔している様子はない。
「もう！　お父さんってば」
「すまんすまん。ん？　電気ついてるな」
父は一階の窓を見る。なるほど電気はついていた。植え込みに大半が隠れており中はうかがえない。
「ほんとだ。つけっぱなしにしていったのかな？」
「またしょうのないこった……」
「そういえばお母さんとも会わなかったよね結局」
「そうだなぁ。いくらなんでも電話が来てるはず……」
そんな事をいいながら父は門を開け、玄関の鍵も開けた。
「ただいまー！」
スモモが先に入り、父が後に続く。
「うっ……なにこの臭い」
スモモはむせ返るほどの異様な匂いを鼻腔に覚え、袋を置いて思わず鼻を覆った。

「なんだなんだどうしたん……う」
父も同様に鼻を覆うが、嗅いだ覚えがあるのかそれまでの表情を一気に強張らせる。
「スモモ……。ここで待ってなさい」
「え？　で、でも」
「いいから待ってなさい!!」
父も袋を置き、スモモを押しのけて靴も脱いで玄関入って2つ目の部屋の扉を開けた。
―居間―
父は猛然とした勢いで扉を開ける。
すると、信じられないことに愛しの妻は他の男と情事の最中であった。
「お……お父さん!?」
サクラは裸の男の上で狼狽した表情で夫を見た。
父は目の前の信じがたい状況に暫し言葉を失ったが、やがて言葉を紡いだ。
「お……お前。これは一体どういうことだ」
「ち、違うの貴方。これは……」
「俺じゃない男の上で腰を振っておいて何が違うっていうんだ!!」
父は、サクラに飛びかかろうとする。

しかし、ベットまであと一歩といったところでスモモが現場を見てしまった。
「お……お母さん？　な……何をしてるの？」
スモモは呆然とした様子で言う。
「え？　ス……スモモ君……？」
サクラの下にいた男がようやく口を開いた。
「その声もしかして……ヨシオコーチですか？」
スモモは恐る恐る声をだす。
「そ……そんな」
コーチの情けない調子の声をきき、スモモはようやく確信して膝を折った。
下にいる男は紛れもなく、自分を直接格闘家としてここまでの実力に育ててくれたシジマの高弟でもあるコーチ、ヨシオであると。
「嘘でしょ……夢だといってよ……ねえ！　お母さん!!」
スモモは家中に響くような裂帛の声をあげることしかできなかった。
――
――２０１３年　１１月６日　午後１１時　スモモ宅　自室――
「あたしの信じていたものがあんなに裏切られて……汚されて……何もかもが悪夢であってほしかった」

あの夜からすぐに両親は離婚。クマオ側はあの時は頭に血が上っていたものの冷静になりもともと妻を愛していたので許すつもりであった。しかし、サクラの方は新しい関係を築きたいと一方的に離婚を要求。スモモの親権を譲り、慰謝料を相場の倍以上払うということでようやくクマオは離婚を了承した。

しかしクマオに空いた穴は決して金などで埋められるものではなかった。あの日以来嗜む程度であった酒や煙草の量が少しずつ増えていっただけでなく粗暴性が増して遂に解雇された。路頭に迷うかどうかの瀬戸際に立たされるものの丁度その頃からスモモが本格的にファイトマネーを稼ぎ始めて生活が成り立つようになってしまった。それ以後のことはもう書くまでもないだろう。

スモモの方はあの一件で激怒し、ヨシオコーチを罷免。伯父のつてで新たなコーチを据えたが、母は去り、変わり果てていく父を見るのはそろそろスモモ自身の中でも限界を迎えつつあった。

「ルカリオ……。あたし、どうすればいいのかな」

スモモは縋るように目線を合わせ、ルカリオに尋ねた。

「もう何もかもが嫌になっちゃった……。お父さんは相変わらず自堕落でフラッフラしてるしさぁ、伯父さんは自分の弟がかわいいからって関係ないあの二人にまで卑怯にも押し付けて自分はずっと大したことしないし……何よりもあたし自身が……」

ルカリオはピクリと反応して、スモモに更に目線をあわせる。
「あたし……自身が情けなくなるよ。あたしがあんなに無理を言ってこの道に進んだのに……そのせいでこんなことになって。あたしが、あたしさえ格闘をやるって言わなきゃ……ううっ……」
スモモはポロポロとルカリオの胸の中で泣き出してしまった。
「……」
ルカリオは震える主人の背中をただただ優しく撫で続けてやることしかできなかった。しかしその眼には決意にも似たものが窺えた。
―11月7日　午前1時　同市　ポケモンセンター　334号室―
ピカチュウはこの時レッドの横で寝ていた。しかしゆっくりと眠そうに起きて、エリカの近くにたった。
エリカはこの時、日課の日記をつけていたが気配に気づいて書く手を止めた。
「あら？　ピカチュウ。なにか御用ですか？」
「ピカ……」
ピカチュウは眠たい足取りで出口のドアに向かっていく。
「ちょっと。どこに行くのです？」
ピカチュウはドアの前にとまりエリカに向き直って、それを指さした。

「なるほど……。外に用事があるというのですね」
ピカチュウはうなずく。
「しかしもう夜も大分更けてきましたし……私も眠いです。明日にしませんか？」
エリカは言った後わざとらしくあくびしてみせる。
ピカチュウは引かずに首を横に振った。
「分かりました。手短にお願いしますね」
エリカはため息をつきながら言う。こうしてエリカはピカチュウの導きに従うことにした。
―午前1時10分　ポケモンセンター　出入り口付近―
ポケモンセンターを出るとすぐ近くにルカリオがいた。
「あら……もしかしてルカリオ？」
エリカはルカリオを見て思索を巡らせる。
しばらく間を空けて再び口を開く。
「スモモさんのルカリオですね」
ルカリオは黙って頷く。
「そうでしょうね……。私になんの御用ですか？」
エリカが尋ねると、ルカリオは流麗な動作でエリカにひざまずいた。

「えっ……どうしたのです？」
しかし言葉とは逆に彼女は強い決意をも伺わせるルカリオの体を見て、なんとなく察しはついていた。
「頼む……マスターを……スモモを……助けて」
ルカリオは話すことに慣れてないのかたどたどしい言葉をやっとの思いで紡いだ。
「どうして私に？」
「俺は……人間……何、考えてるか……わかる……貴女なら……信頼できる……と」
「ルカリオは波導を通じて思考や位置などを読み取れると聞いてはいましたが、本当なのですね」
ルカリオはひざまずいたまま頷く。
「私もこのままでは後味が悪いと思っていたところなので願ってもないお話ではありますが」
「明日……シジマが……来るのだろう？」
波導で読み取っているのか蒼いオーラがルカリオをまとっている。
「は、はい」
エリカはやや気圧された様子で答える。
「その時に……タイミングを伺って……入ってきてくれ」

「しかし私は部外者ですよ？　そう簡単には……」
「大丈夫……俺に任せろ」
「えっ？」
エリカが聞き返したそのときにはルカリオはその場におらず、エリカの目の前には力尽きて寝息をたてるピカチュウだけが残された。
彼女はしばらく立ち尽くしたが、やがてピカチュウを抱えて自室に戻った。
―同日　午前9時　同市　ポケモンセンター前―
二人は朝食を済ませ、次のバッジのある街ノモセシティを目指すべく移動を開始しようとしていた。
「さて、行くか」
レッドはトバリシティの南側出口へと歩みだそうとした。
「貴方。先程いいましたわよね？　スモモさんのルカリオが助けを求めていると」
「言ったけどそんなの当てになるかよ。俺らにはどうしようもないと言っただろ？」
「それはそうですけれど……あら？」
エリカはレッドの後ろにある建物とポケモンセンターの隙間に何かが落ちてるのを認めた。
「これ……なんでしょうか」

エリカはハンカチで包みながら拾い上げる。
「なんだこのボロっちいの」
「恐らくお守りではないでしょうか。かなり使い古されてはいますけど」
彼女は表と裏を返しながら言う。なにか手がかりはないかと中をあけてみる。
すると『自分の心に正直に生きなさい』とだけ書かれた紙だけが入っていた。
「これは……スモモさんのお守りではありませんか？」
「そうなのか？」
「はい。ミカンさんのお話ではこのようなお守りだったと伺っていましたから。しかし……どうしてこんな所に」
彼女は暫し考えて
「なるほど。そういう事でしたのね」
と自ら納得した。
「おい、エリカ。どういうことだよ説明」
「貴方。行きますわよ」
「え？」
そういうと彼女は帽子を目深に被り直してレッドの返答も聞かずに颯爽と進んだ。
―トバリジム前―

トバリジム周辺はそれとなく騒がしかった。
「おや。どうしたんだ?」
昨日、スモモについて話してくれた中年のトレーナーが話しかけてきた。
「先程、ポケモンセンターの前でこれを拾いまして……」
エリカはハンカチの包みを広げて男に見せた。
「おお！　これは……。ちょっと待っててくだせえ」
そうことわって、男はジムの中に入っていく。
五分ほどしてスモモと共にでてきた。
「リーダー。これでしょう?」
「ああ……！　ありがとうございます！　今朝からなくなってて困っていたんです！」
スモモは心から喜んでいるようだ。目に昨日うかがえた底暗さはうかがえなかった。
「これ、どこに落ちていたんです?」
トレーナーが自然な様子でエリカに尋ねる。
「ポケモンセンターの横の路地におちていました」
「え?　どうしてそんな所に……」
「さあ。私にもわかりかねますけど」
彼女は真実に勘付いていながらも表情を微塵も変えずに何も知らない風に受け流す。

「そうですか……。いやでも、本当に見つかってよかった……」
スモモは受け取ったお守りを胸に強く抱きとめながら言う。心の底から安堵しているのがはっきりうかがえた。
「本当にありがとうございます。それじゃ」
スモモはトレーナーにアイコンタクトをとる。帰ろうという合図だろう。
「はい。それでは」
とエリカがためらいがちに言ったところで場がにわかに水を打ったように静かになった。
二人が後ろを向くとそこには帽子を被り、茶色のトレンチコートを身にまとった恰幅のいい男が居た。
「スモモ……」
男は脱帽して充血した目でスモモに語りかけた。
その表情は申し訳無さと怒りが入り混じった複雑なものが伺える。
「お。伯父さん……？」
「クマオはどこだ」
シジマは普段からは考えられないほどの鈍重な声でスモモに尋ねる。
「え、えっと今日は新装開店とかで……」

スモモの代わりに近くにいた若年のジムトレーナーが答える。
「すぐに連れ戻せ」
声そのものは静かなものだったが、言外の迫力は何者をも従わせるのに十分だった。
言われたジムトレーナーは頷いてすぐに走り出した。
「伯父さん。き、急にどうしたんですか？」
スモモは笑顔を取り繕って何事もないようにみせる。状況からしてどういう目的なのかは明白だというのにどこか憐れみさえ周囲の人間に抱かせた。
「スモモよ。話は全て聞いた。今、決着をつけよう」
シジマは決然とした声色でスモモに言う。
「伯父さんには関係のないことだと言ったはずですよ」
「いいから。ここで話をしても仕方がない。ジムで話をつけよう」
そう言ってシジマは話を進めていく。ふと、二人の方を見た。
「エリカ女史も加わるかね？」
シジマは先程よりは軽い調子の声で尋ねる。
「えっ。しかし私は……」
エリカは一応遠慮をした。
シジマは素早くエリカに近寄り、肩を叩きながら小さく耳打ちする。

「全て聞いている。この話では君のような冷静な第三者が必要だ。頼む」
誰から聞いたのかエリカにはすぐに察しがついた。彼女は小さく頷いて応じた。
「夫も同席して宜しいでしょうか?」
「クマオが暴挙に出ないとも限らん。抑え役はいるだろう」
シジマは即答した。昨日あれだけ怒髪天を衝くかの如き怒りだったシジマが冷静に言葉を紡いでいる。エリカの表情が少しだけ安堵したように見えた。
「なんだかハブられた感じだな……俺」
レッドは小さくそうつぶやいた。
やがて、クマオがシジマの前に引き戻され、ジムの応接室において親族会議をすることになった。
―午前10時　トバリジム　応接室―
応接室は革製で高級感のあるクリーム色のソファが二つにその間に重厚な質感の大きな木製机があった。その上に暖色のチェック柄の布がかけられ、上に花瓶と五人分の飲み物がおかれていた。
レッドとエリカが奥側に相対して座り、少し空けてシジマ。そしてその反対側にスモモと弾劾される張本人のクマオがいた。
クマオは借りてきた猫のように神妙な様子で座っている。しかし朝も酒を飲んだの

かアルコールの臭いがした。
　形式的な話もそこそこに本題に入る。
「で、どうなんだクマオよ。スモモとはうまくやっているのか？」
　シジマは自らの口から誠実に真実を言わせるべく敢えてそう尋ねた。
　レッドとエリカは注意深く動静を見守る。
「な、なぁにいってんのさ兄さん。そうに決まってるじゃないか、なあ！」
　クマオはスモモの肩をだき、彼女に目線を合わせる。
「そうですよ伯父さん。あ、あたしたちは親子円満ですよ？」
　しかしそう答えるスモモの声は微かに震えていた。
　暫し間を空けて
「そうか」
　とシジマは残念そうな声を出した。
「ところでだ。ワシの耳にはお前がスモモに虐待をしているという噂がいくつも耳に入っているんだが、それはどうなんだ？」
　シジマは冷静に言葉を発しているように見受けられた。怒りの感情を強い理性でギリギリのところで押さえつけてるようだ。
「兄さん。そんなの根も葉もない噂にきまっているじゃないか。きっとジムリーダーと

いう事を妬んだただの虚言さ」
　クマオは冷や汗をかきながら答える。
「ほう……。ワシの大学のトバリに行ったＯＢもわざわざ報告しに来たんだがなあ」
　シジマは厳しい視線をクマオに注いだ。傍から見るだけでも蛇に睨まれた蛙の如く縮み上がりそうな凄みである。
「実の弟よりそのＯＢってのを信じる気なのか？」
「そうは言わないが……。スモモよ」
　シジマはクマオに聞いても無駄だと悟ったのか、スモモに尋ねる。
「本当に不満はないのか？」
　スモモは押し黙ってしまう。
「聞いているのか」
「……してよ」
　スモモは小さな声で呟く。
「おい！」
「いい加減にしてよっていったの！」
「な……何じゃと？」
　スモモの予想だにしなかった言葉にシジマは瞠目している。

　レッドとエリカもスモモの動静を見た。
「三年間もずっとろくな手を打たずに他人任せにしておいて今更こっちの事に口出ししないでよ！　さっきから聞いていれば誰かから聞いたって……なんでそこまで知っておいてもっと早くに来てくれなかったの!?　伯父さん全国に知り合いいるんでしょう？　偉いんだよね。もっと……もっと早くにあたしたちのこと知ってたはずだよね？」
　スモモは感情を爆発させてシジマを問い詰める。
「それは本当に済まなかった。じゃから今こうして」
「今更そんな事されたって……！　もうどうにもならないところまで来ちゃっているんだよ……。伯父さんがお父さんに遠慮して放っておいてる間にね」
「待ってください」
　エリカが間に入り、双方を制止する。
「スモモさん。貴方の言うことは尤もですわ。確かに離婚をされてからの数年に亘り部外者の情報に頼って直接的な行動を起こさなかったことは唯一この家庭に直接介入できる立場の人間としては不適切だったかもしれません」
　彼女は伏し目がちにそう言った後、厳しい視線でスモモを見る。
「しかし、それはシジマさんだけの責任ではありませんわ。スモモさん、貴女自身がシジマさんに助けを求めず、大したことはないとご自分で言い続けてしまったことにも責が

あると思いますが」

彼女は極めて冷静な様子で意見を述べる。

「確かに……エリカさんの言う通り。でも……それは〝まともな環境で過ごしてきた〟人の意見でしか無いんです」

スモモは冷ややかな、しかしどこか確固たる信条を感じさせる目をしていた。

「なんですって」

「信じてきたものを壊された経験のない人には……あたしの気持ちなんて分からないって事ですよ」

即ち彼女は母の不倫で崩壊した家庭でこれまでの人生で信じてきたものの多くに裏切られ、もはや自分自身でなんとかするしかないという感情に支配されたということである。

「確かにスモモさんに比べれば私など甘えた環境で育ったかもしれません……。しかし、それでも想像することくらいは」

「わかったようなこといわないでください！　とにかくここまで時間も状況も変わった以上、あたし自身に……あたし自身の問題なんです。何度も言ったとおりあたしには構わないでください」

「スモモ……」

シジマの目には悔悟の念が多分に映っていた。
「とにかく……」
ここで、しばらく黙っていた弾劾された張本人が口を開く。
「スモモはお前たちの力なんていらないって言ってるんだ。おとなしく帰れってんだ」
ここまでの状況になっても力を借りようとしないスモモに安堵したのか、クマオは従前の気を取り戻しつつあった。
「貴様……」
シジマの目に静かな怒りの炎がうかがえた。
「クマオ……さんと言いましたか？　貴方ほど見下げ果てた人はそうそういませんわね。下衆というのも憚られますわ」
エリカはクマオを軽蔑しきった表情で見ている。
「お、おいエリカ」
レッドはエリカを抑えようと言葉をかける。
「あぁ!?　てめーに何がわかるってんだよ。さっきから聞いてりゃ偉そうなことペラペラうちのスモモに講釈たれやがってよお？」
「くっ……」
エリカは怒りを相当に堪えているようだ。

「ま。いいやいいや帰れやお前ら。スモモがこのままでいいって言ってんだからさっさと出てけやこのボンクラどもが!!」

クマオは最大限気が大きくなってしまっている。シジマの介入も効果なしとあれば最早誰も自らのわがまま放題の生活を止めるものは居ないのである。

しかし、その言葉がシジマの最後の理性を破壊した。

「クマオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そう言うやいなや、シジマは机を踏み越えてクマオに掴みかかる。

「な、なんだよ兄さん。気でも……」

「シジマさん！　それはいけません！」

エリカの制止むなしく、クマオは次の言葉を発する間もなく、シジマの鉄拳が三発、四発と降りかかった。最後の一発でクマオは応接室の壁まで吹き飛ばされ、本棚に当たる。衝撃で何冊かバサバサと落ちていく。

顔からは大量に出血し、歯も七本程折れた。それにくわえ、肋骨も何本か折れたように見える。流石は衰えたとはいえかつては格闘界の第一線で闘っていた実力者というべきか。

「は……が……」

クマオはうわ言を吐きながら潰れている

「伯父さん！　なんてことするの！　あたしのお父さん……お父さんに!!」
　スモモはこんな父でも昔日の記憶のせいか健気に庇っている。
「はーっ……。スモモ。わしゃ決めたぞ」
「え？」
「クマオをお前から引き離す。お前をそこまで追い込んだのは間違いなく、こいつのせいじゃ」
「そんな……。あたしの……大事なおとう」
「スモモよ。お前の言う通りこいつはもう前には戻れんかもしれん。だからこそお前一人で時間をかけて考えてみてほしいのだ」
　シジマは父の血も拭わず、その手で彼女の肩を叩きながら言った。
「考えるって……いまさら何をしろっていうの」
「それはワシの決めることではない……。お前自身で見つけ出すことだ。ワシはきっかけを与えてやることしかできんからな」
「そういうところが自分勝手だっていうのに」
「そうかもしれんな」
　シジマは力なく笑った。
「今は辛いかもしれんが……時が経てばきっと分かるはずだ」

そう言ってシジマは脱いでいたコートを羽織り失神状態のクマオを肩に担ぐ。
「シジマさん。クマオさんはこれからどうなさるおつもりですか」
「とりあえず病院に連れて行く。自分のケツくらい自分で拭けるから心配するでないぞ」
そう言ってシジマはドアを開ける。
「エリカ女史……レッド君。こんなことに巻き込んですまなかったの。じゃが……ありがとう」
シジマはそう言いながら部屋を後にする。ドア越しに血まみれの二人を見たジムトレーナーたちの騒ぐ声がした。後は彼らがどうにかするだろう。
後には茫然自失としているスモモと、レッドとエリカが残された。
「スモモさん……」
「伯父さん……。本当に勝手だよ。昔からマイペースで人を振り回してばかりで……」
「しかし、そういうシジマさんだからこそ貴方から引き離すという決断ができたんですよ」
「それが余計なお世話だったのに……。これはあたし自身の問題だから……あたしが、あたしだけで何とかしなければいけなかったのに」
スモモは他人に頼ってしまったことを強く悔い、自らを責めているようだ。

「スモモさん。貴女は一人でなんでもかんでも抱えすぎですよ。貴方にはジムトレーナーやシジマさん、そして……大事なパートナーがいるのですから」

エリカ敢えてポケモンではなくパートナーという風に形容した。ルカリオの事を暗示しているのだろう。

「パートナー……ですか」

「貴女には貴女を理解してくれる存在が沢山いらっしゃるのです。どうかそれをお忘れのないように」

スモモはそう言われると押し黙ってしまった。

「そろそろ行きましょうか。貴方」

「あ、ああ」

レッドはエリカに遅れて応接室を去っていった。スモモは一人じっと座って考え込んでいる。

―午後０時１０分　ジムの外―

二人はあれからジムトレーナーたちに何があったのか回答を次々と求められ、律儀に答えているうちに昼になっていた。

「ふう。やっと切り抜けられましたわね」

「ああ……。だけどよ。いいのかよスモモさん。あのままで」

レッドは少しばかりスモモの事が気がかりのようである。
「シジマさんも仰せになっていたでしょう。あとはスモモさん自身で考えて解決すべきことです」
「そうか……。にしてもシジマさんも流石にあそこまで殴るなんてなあ……。ちょっとやり過ぎじゃないか？」
「私も暴力は好きではありませんけど……。あの時はやむを得なかったと思いますわ」
暴力を好まない彼女でさえもやむを得ないとする程、クマオは腐りきっていたということである。
「まあ……。あれだけ悪態ついてたらそうかもな。おや？」
二人が路地を歩いていると天からにわかにちらちらと白いものが降りてきた。
「あら……。どうやら初雪のようですわね。天気予報でも言ってましたし」
「ああそうか……。もうそんな時期なんだな。今年も寒くなりそうだがシンオウは格別だろうな……」
レッドはうんざりとした表情で言う。
「シロナさんももっと着込んだほうがいいと仰せになってましたし、デパートにでも行きましょうか」
レッドも了承し、二人はトバリデパートへと向かった。

―午後2時30分　トバリデパート　3階―

二人はデパートの最上階で昼食を食べ、そのまま降りて冬の服を買い込んだ。長靴もホウエンで買ったものでは長時間の雪道には不足であると判明し、買い直した。

ついでにホウエンで買ったカイロもだんだん在庫が心もとなくなってきた為追加で買った。

一段落ついたので二人は3階の売り場を彷徨い歩いていた。

エリカは毎日やっている服の修繕に必要な糸や針などを買い直していたが、途中で毛糸の専門売場に通りかかった。

「あら……これはなかなかいい毛糸ですわね」

彼女は商品棚に並んでいる色とりどりの毛糸を眺めていた。

「なんだ。何か編むのか？」

「フフフ……。どうしましょうかね」

彼女はレッドが他の売り場に行ったのを見計らって何色かの毛糸を買い込むのであった。

二人は買い物を終わらせると、この日もトバリに留まりポケモンセンターで一泊する。

――

二人は3日ほどかけて214番道路と213番道路を超え、ノモセシティへ到着した。

―ノモセシティ　大湿原のある街。自然の多いシンオウ地方の中でも特に賞賛の高いノモセ湿原を擁し、そこはサファリゾーンとなっておりポケモントレーナー達の新しい相棒を見つける街にもなっている。ジムリーダーのマキシは湿原のイメージからか水タイプを選んだが紛らわしいと一部では囁かれる。

―11月10日　午前8時　ノモセシティ　ポケモンセンター―

二人は朝ノモセシティの入り口を通った。

ノモセも初雪が降ったのかやや雪が路地に残っている。しかしこの日は晴れており直に溶けると思われる積雪量であった。

「ふう。やっと着きましたわね」

「ああ。途中で吹雪にあったのは参ったけど……。どうにかなったな」

流石シンオウ地方と言うべきか二人は道中吹雪に見舞われ1日行程を遅らせていた。

「まだ11月だというのにこれですもの……。やはりシンオウは一筋縄ではいきませんわね」

そうこう言いながら二人はポケモンセンターに入りポケモンを回復させた。

―午前9時　ノモセジム―

ノモセジムに入り、二人は程なくしてリーダーのマキシの場所にたどりついた。

マキシは歩き方の触れ込み通りのプロレスラーの風貌をした男で、顔にマスクをつけていた。

「うおーし！　よぉーくきたぁー！　俺様こそがマキシマム仮面！　そしてここノモセシティのジムリーダーだ！　二人の全国のジムを制覇しようとするその意気やよーし！　だがぁ、俺様の厳しい水の中で鍛えに鍛え上げたポケモンたちは、そう簡単にはバッジを取らせないから覚悟して取りにかかってこぉい！」

――

レッドは二匹、エリカは一匹も失わずに勝利した。

「おお……！　終わってしまったか。流石はこの全力の俺様にかかってくるだけの事はぁある！　戦っていてすごぉく楽しかったし勉強になった！　この功績をたたえ、このバッジを与えよう！」

二人は五枚目となるフェンバッジを手に入れた。

「ありがとうございます！」

「うむ！　ふたりともこれで半分以上バッジをとったんだな！　シンオウも折り返しだがまぁだまぁだ気を抜いたらだめだぞ！　どんな時もフェアプレーの精神を忘れず

正々堂々と戦えい！」

そう言ってシジマは二人を送り出した。

―午前11時　ノモセシティ　市街―

二人はポケモンを回復させ、時間も余ったので街を散策していた。

やがて建物や人通りもそれほどないのどかな広場にでる。

「なんというか賑やかな人だったな。マキシさん」

「ええ。そうですわね……。しかしああいう人はどうも私とは合いそうにもありませんわね……」

エリカはそうこぼしながら下を見る。

「まあまあ！　そうあいつの事を言わんでくれ！　確かにちょっとばかりうるさいところがあるが気持ちのいいやつなんだ」

背後からマキシに負けず劣らずの声量がした。

振り向くとそこにはとがった髪型に、緑色の長外套を羽織った男がいた。

「え？　誰ですかあなた」

レッドは全く面識のない人物だったのでそう答えた。

「誰でも良いんだ。ところで君、レッド君だろう？　君とは一度戦ってみたくてずっと待っていたんだ。頼めないかな？」

「誰かも名乗れない人と闘う気はありませんよ」
　レッドはきっぱりとそう答えた。
「ハッハッハ！　厳しいねぇ。私の名前はクロツグ。しがないポケモントレーナーだ」
「そうですか」
　と言いながらレッドは内心しがないトレーナーならばさっさと決着つけてしまおうと楽観的でいた。
「エリカ、お前どうする？」
「え、その私は……」
　急に振られてエリカはややたじろくがすぐにクロツグが遮る。
「レッド君。私が戦いたいのは君だよ。エリカ女史はこの際いいんだ」
「え？」
　レッドは当惑した表情でクロツグをみた。
「今度のＰＷＴで戦うのは恐らく君一人なのだろう？　我が国を代表するポケモントレーナーの一人のちからがどれほどのものかみてみたいんだ」
「なんだか随分と上から目線だけど……。まあいいか。分かりました。そういうことなら」
「貴方。お気をつけください。貴方と知って勝負を挑んでくるということは余程の手練

かもしれませんわ」

エリカはレッドに耳打ちする。

「なあに。気にすることはない。すぐ終わるさ」

レッドはそう言いながらボールを構える。クロツグも同じく構えた。エリカは注意深く見守っている。

「私から出そう。行け、ドサイドン！」

ドサイドンは悠々とした姿でフィールドに姿を現す。

この時、レッドは直感で彼は只者ではないと読み取った。ドサイドンを持っている時点でエリートトレーナーどころかベテラントレーナーである可能性が高い。

それだけでなく、彼のドサイドンはサキヒサのそれをも凌駕するような風格と貫禄を持っているように彼は感じた。

「行け、フシギバナ！」

――

レッドの悪い予感は的中した。

善戦はしたものの、戦局はレッド不利に展開し続けレッド残り1体に対し、クロツグはまだあと2体だせる余裕があった。

レッドは強さを感じつつも舐めてかかったことを後悔した。

現在フィールドにはレッドの最後のポケモンであるリザードンと、クロツグのミロカロスがいた。

当然相性が不利なので勝敗はほぼ明らかである。

「リザードン。ソーラービームだ！」

レッドはソーラービームに全てを賭ける計算で指示を下す。

「あれ……？」

レッドは一瞬だけソーラービームがすぐ出ないことに戸惑った。しかし、よくよく考えたら当たり前のことなのですぐに平静を取り戻す。

「ミロカロス。ハイドロポンプだ」

ミロカロスは怒濤の水流をリザードンめがけて発射する。

「……！」

リザードンは光を集中させながら水流の洗礼を受けるまいと決死の覚悟で回避し続けた。

彼は出来うる限りの事をして避け、ついに水が尽きたのか水流がやんだ。

リザードンが安心して集中しだしたところで

「甘い」

と言っている風にクロツグの唇が動いたかのようにレッドには見えた。

そして、その瞬間ミロカロスは機を得たりとばかりに、最大限の水流をリザードンにぶつけた。

避ける間もなく、彼は水流をもろに受けることとなった。

「嘘だろ……おい」

レッドは目の前で起っていることが信じがたかった。

しかし、リザードンはこれで倒れなかった。これにはクロツグも予想していなかったのか微かに目を見開かせたように伺える。

リザードンの尾は最小限なまでに火の勢いを弱くしており、ほぼ気力と、なによりもレッドへの忠誠で立っているようなものだった。

「よ、よし！　よくやった！　反撃のソーラービームだ！」

しかし、レッドがそう指示した瞬間、ミロカロスは赤い光に包まれ居なくなってしまった。

「あ……あれ？」

レッドが何事かとおもってクロツグを見る。すると彼はモンスターボールを手で上に投げたり下で受けながらそこにいた。どうやらミロカロスを戻したようだ。

「やめだやめ。レッド君」

「え……そんな」

「君のリザードンはもう体力の限界を通り越して戦っている。このままソーラービームを出せば命にかかわるところだったんだぞ」
　レッドはリザードンを見る。彼の炎は見たことがないほどに小さくなっていた。
「そ、そんなのあんたの負け惜しみだろ！　あのソーラービームを喰らえばミロカロスは」
「倒れたとでも？」
「そ……そうだ！」
「ふざけるな！　どういうダメージ計算をすればそんな都合のいい戦況が想像できるんだ!?」
　クロツグはレッドを思い切り叱りつけた。その声はどこまでも響くように見えた。
「とにかく、今回は引き分けだ。また君の調子の良いときにでも戦うよ」
　クロツグは先程までの厳しい表情からすぐに元の陽気な表情で言う。しかしその表情はどこか悲しげにも見えた。
「冗談じゃない！　あのソーラービームで俺は……倒せたんだ。それで、これはあんたが負けたらやばいと思って勝手にポケモンを引っ込めたんだろ！　じゃあ俺の勝ちだ！」
　レッドはあくまでも強情を崩さない。

クロツグは呆れきった表情をして返す。
「わかった。そこまでいうなら君の勝ちでいいよ。すごいなぁ。レッド君は。とても敵わないや。それじゃあな!」
最後は無感情な声で吐き捨て、おちゃらけた動作でクロツグは足早に二人と別れた。
「たく。なんだったんだあいつ」
「貴方……。いくらなんでもあれはトレーナーとして意地が悪いですわよ」
さすがのエリカもこの醜態には口を出さざるを得なかった。
「ふ、ふん。自分の負けも素直に認められないあっちが悪いのさ」
そう言ってレッドは憤然とした足取りでまたポケモンセンターの方向へむける。
「それにしても……レッドさん相手にあそこまで優勢に戦いを進めるなんて何者なのでしょう?」
「さあな。俺が知るかよ」
こうしてレッドは苦々しい戦いを終えてポケモンセンターに戻り今日はそのままノモセに留まった。
―11月15日　午前8時　210番道路―
レッドはなんだかんだクロツグとの戦いを重く受け止めた。そのため次は五大難関と噂されるジムリーダー、トウガン戦に備えて霧が深く困難な道とされるカンナギタウ

ンを目指して進んでいた。ノモセからズイまで最低限の休養しかとらずに鍛えながら進み、１４日早朝に到着したズイで流石に体力の限界を感じたのでしっかりと休みこの日を迎えた。

　体力を全快させた二人は２１０番道路を歩いていた。すると偶然シロナにあった。

「あら。また会ったわね」

「シロナさん！　ご無沙汰しておりますわ」

　エリカに続いてレッドも礼をした。

　シロナも返礼をして続ける。

「うん。ちゃんとあたしの忠告を守ってきちんと服を買ったわね。関心関心」

　シロナは満足げに二人の服装を見た。レッドは赤い無地の長袖だが裏地はウールであり、下はコーデュロイを穿いていた。エリカは更に防寒を整えており、ダッフルコートを上に着て耳あてと毛皮の帽子をしている。

「シンオウ地方で凍死したら洒落になりませんからね……」

「そうね。あまりにも勿体ないもの……。それにしてもどうしたの？　あなた達はもうこのあたりのジム制覇したんじゃなかったかしら？」

　流石にポケモンリーグの副理事長は耳が早いようだ。

「ええ。ちょっとカンナギまで鍛えに行こうと思って」

レッドは未だ沸々としたものがあるのか不機嫌気味にそう返した。
「レッドさん随分不機嫌ね。どうしたの？」
エリカはノモセで遭遇した事の次第を話した。
「なるほどね……。まあトレーナーやっていればそんな事もあるわよ。負けそうになったのならそれを糧にして次勝てばいいだけのことじゃない！　へそ曲げずにシャンとしなさいって」
シロナは元気づけるためか軽くレッドの背中を叩く。
「は、はい」
「それにしてもレッドさんをそこまで追い詰めるだなんて大したトレーナーね。なんというお名前の人？」
「クロツグ……と名乗っていましたわ」
シロナはそれを聞いてくすりと笑ってみせた。
「な、何がおかしいんですか」
レッドは思わずそう返す。
「ごめんごめん。だったら無理もないわね……。バトルフロンティアって聞いたことないかしら？」
「名前だけは……。確かシンオウ地方の離島にあるバトル施設でしたわね？」

エリカの返答にシロナはうなずいて返す。バトルフロンティアは地理的条件からかシンオウローカルの色が強く、それ以外の地方の人間にはジムリーダーやベテラントレーナーのようなよほど造詣が深い人でないと存在すら知らない施設であった。レッドも名前だけは知っていたのでエリカに続く。

「そのクロツグって人はね。その中の中心的施設ともいえるバトルタワーのタイクーン。つまり長を務めている人なのよ」

「え!?」

レッドは我が耳を疑った。タワータイクーンといえばリーグチャンピオンとも優勢に渡り合えるほどの実力者であることもおぼろげながら知っていたのだ。

「あの人は流石に全力のヤナギさんには歯が立たなかったらしいけれど、少なくともあたしより強い人よ。四天王になってからずっと勝とうと追い続けてるけど勝てたのはチャンピオンの座をあたしに譲ると言ったときに戦ったあの一戦……。しかもあれですら手加減だったらしいから一度もないわ」

仮にもリーグチャンピオンがあっさり自分よりも上と認めるほどのとんでもない実力者だったようだ。

「そうだったんですか……。とてもそうは見えなかったから」

「もしかしてあの人自分の立場名乗らなかったでしょ?」

「ええ。そうでしたけど」
「やっぱりね……。あたしね。大学入ってからトレーナーの道を歩もうと決めて、学生生活の傍らでバッジを集めてたの」
「へぇ」
レッドはなんとなくシロナの話を聞く。
「四年かけてやっとこさバッジ8つ揃えて、院へ行こうかどうか迷ってた時期に急にクロツグさんから勝負を挑まれたのよ。貴方の時と同じように身分を隠してね」
「へぇ。それでどうなったんです?」
「言ったでしょ。負けたわよ。でも、君には才能がある。四天王にならないか? って誘われて、その時初めてうちの地方のリーグチャンピオンだったて明かされたものだから心臓止まりそうになったわよ」
シロナは軽く笑いながら当時を述懐する。
「それはまた衝撃的なお話ですわね……」
「それであたしはリーグに入れるなんて滅多に機会があるものじゃないと思って一週間くらいでOKだしたの。院へいっても研究者として生計たてられるかどうかは分からないしね……」
いやあんたなら上手くいくだろうとレッドは思ったが突っ込まないことにした。

「おっと。ごめんね。こんな話しちゃって」
「いえ。貴重なお話をどうも……」
　レッドは相手が本当に化物だったことが分かって内心少し安心していた。これならば自分が負けそうになっても仕方がないか。と。
「それで。二人はカンナギへ行くのよね？」
「はい」
「それじゃあちょっと悪いんだけど、行くついでにこの手紙をその街にいる祖母に渡してくれないかしら？　あなた達にも関わりある話かもしれないから」
　そう言ってシロナはバックから一枚の封筒を二人に差し出す。
「私は構いませんわ」
「俺も構わないですが……一体どういう中身なんです？」
「あそこにある遺跡の中身についてちょっと……ね。後は向こう行ってからのお楽しみよ」
　そう言うとシロナはより近くにいたレッドに封筒を渡す。そして、「頼むわよ」と念押ししてシンオウリーグと思われる方向にそそくさとポケモンに乗って飛んでいった。
　来月に控えている選挙の準備で忙しいのだろうかとレッドは柄にもなく思う。
「流石に中身を見たら」

「貴方。それだけはいけませんわ」

エリカに注意されたレッドはリュックに手紙をしまった。

こうして二人は改めて、遺跡の町、そしてカムイ・ヌイナの伝承の地であるカンナギタウンへと向かうのだった。

―第二十五話　ああ有情　終―

第二十六話　記憶と記録の狭間にて

―カンナギタウン

シンオウ地方のほぼ中央に位置するテンガン山麓の小さな町。

大規模な〝神隠し（カムイ・ヌイナ）〟伝説があるだけでなく古来よりシンオウ地方の信仰や祈祷の中心地としてその地位を固めていた。

現在は最早数少ないカンナギ及びシンオウの先住民たちの文化を現代に伝える遺跡や遺構を数多く残す町として著名であり、観光と考古の町として栄えている。

―11月17日　午前10時　カンナギタウン　市街―

二人は2日かけて210番道路北側の霧深い渓谷をこえてカンナギタウンに到着した。

ポケモンセンターに立ち寄った後。手紙を届けるべくシロナから教わった住所をもとに市街を渡り歩いていた。

テンガン山に近いせいか残雪も他の街に比べて多く二人は足場を気にしながら進んでいる。

「街の中心部にある立派なお屋敷……と仰せでしたわよね」

ポケモンセンターのジョーイから行き方と特徴を教わっていた。
「そうらしいな。まあ取り敢えずそこに向かおう」
しかしタウンという割には町は賑やかであり、土産物屋や旅館が軒を連ねている。トレーナーの歩き方でも触れられていた通りここはシンオウ有数の観光地のようだ。
そうこう歩いていると遺跡入り口に差し掛かったが、その付近で聞き覚えのある声がした。
「か……勘弁してくだせえ。ここから先あんた方みたいな輩を入れるわけにはいかないんです」
二人は声のした方向に目を向ける。
するとそこには最早見慣れたコスチュームと髪型をしたギンガ団員二名に絡まれている一人の中年男性がいた。
「うるさい！　通せと言ったら通せ！　我々にはこの遺跡にあるものが必要なのだ！」
「ですから、そういう目的の方には」
「わからないやつだな！　痛い目に遭いたいのか！」
そう言って一人のギンガ団員がモンスターボールを取り出し、構えた。
遺跡の前で門番をしていたゴローン二体も臨戦態勢に入っている。
「おい！　何やってんだ！」

レッドが三人のいる場所に割って入る。
ギンガ団員は二人を見るや否や
「チッ……！　引くぞ」
「仕方ねえな。覚えてろよ」
と寄せた波が引いていくかのように整然とひいていった。
二人には関わるなという指令が今度は末端まで行き渡っていたようだ。
「あ、ありがとうございます！　なんとお礼を申し上げれば良いか」
「いいんですよ……えーっと」
レッドは顔は覚えていたが名前を失念してしまっていた。
「トシアキさん……。ですよ貴方」
軽やかな所作でエリカがレッドの一歩ほど後ろに並ぶ。エリカは覚えていたようだ。
「そーですそーです。あっしなんかの名前を頭に留めてくださるとはなんともありがたいですなぁ」
トシアキは快活に笑みを浮かべながらへこへこと頭を下げている。
「それにしても一体どうしたのですか？」
「あの奇天烈な格好をした連中が遺跡に入れろ入れろと強引に押し入ろうとしましてなぁ。困ったものですわほんとに」

「そうですか……それは災難なお話でしたわね」
エリカは同情しているかのような視線をトシアキに送った。
「そうだ。お礼といっちゃなんですが遺跡の中をご案内しましょうか」
「いえ。私達はまずこなさなければいけない用事が……」
エリカが丁重に断ろうとしたが、レッドが割って発言した。
「是非お願いします」
「貴方？　ここに来た目的をお忘れですか？」
エリカがレッドをやや強めの声色で咎める。
「シロナさんは遺跡の中について調べたいと言って俺らにも関わりあるかもしれないと言ってたろ？　先に遺跡を見ておけば何か分かるかもしれない」
エリカはやや間を空けて
「それも……そうかもしれませんわね」
承服し、トシアキの方に体をむけた。
「よし。そうとくれば話は早いですな。あっしについてきてくだせえ」
そういってトシアキは遺跡の中へ入っていき、二人は後に続いた。
―遺跡内―
トシアキは壁画や出土品を二人に見せてレッドにも分かる程度に噛み砕いた説明を

しながら遺跡をゆっくり案内していた。
「そういえばお二人はどうしてカンナギまで？」
「シロナさんから遺いを頼まれまして」
「あぁお嬢から……」
トシアキは一瞬だけ声のトーンを下げたがすぐに元の調子に戻して続ける。
「どちらに向かわれる予定で？」
「手紙を託されたのでシロナさんの御祖母様の所に届けるつもりですわ」
「ほう。なるほど……。あの家なら遺跡の出入り口からまっすぐ北にいけばすぐに見えてきますぜ」
「まあ。本当ですか？　教えていただきありがとうございます」
エリカは恭しくトシアキに頭を下げて礼を言った。
「いやなんのなんの。カンナギはそれなりに大きな町ですからな。道も入り組んでますしきちんとお教えしないと分からねえだろうなと思いましてね」
「そうですわね……」
そう言っているとガードマンと思しきゴーリキーが二体ほど二人の目の前に現れた。
ゴーリキーはこちらに警戒している目線を投げている。
「あー。あっしらはただの観光客とガイドだから、ほら」

トシアキは博物館の職員証をゴーリキーに見せる。するとすまなそうな表情をして大人しく引き下がっていった。

「ここは随分とガードポケモンが多いですわね……。エンジュやキキョウの文化財でもここまではいませんわよ？」

「そこはまた随分と面倒な経緯がありましてな……。まあそこらはお嬢のご実家ででも聞いてくだせえな」

トシアキは多くを語ろうとはしなかった。

―午後1時　シロナ実家　玄関付近―

三人は一時間かけて遺跡を探索した後、トシアキと別れて昼食を済ませシロナの実家に向かった。

噂通りの大邸宅であり、恐らくカンナギの中では最大の規模を有する邸宅といえるだろう。カンナギ一の大名士というのも頷ける話である。

「ひやぁ。思った以上にでかい家だな……。ここまでくると城だなもう」

「フフフ……。もう。この程度で驚かれたら私の家を見たときにどうするのですか？」

エリカはあくまでも優位性を主張したいようだ。

「そういや行ったことなかったな……」

彼女と付き合い始めてからタマムシに居たことがないためまだレッドはエリカの屋

敷すら見た覚えがなかった。
「今度タマムシに一緒に帰れる機会があればご案内しますわ」
「楽しみにしとくよ。そんじゃ」
レッドはやや緊張した面持ちで邸宅のインターホンを鳴らした。
用事を話すと召使いの先導で邸宅に入り、応接間へ通される。
―応接間―
「これはこれは遠いところをわざわざありがとうございます」
シロナの祖母は年齢相応の老顔であったが、高い気品を感じる出で立ちをしていた。
二人の前には召使いが持ってきたお茶菓子がおかれている。
「これが先だって申し上げましたご令孫よりお預かりした書簡です。お収めください」
エリカは丁重に手紙を祖母に渡した。カチコチに緊張しているレッドとは対照的にやはりエリカは慣れているのか所作や言葉に一切の淀みがない。
「まぁこれはどうも」
と言いながら祖母は手紙を受け取り、すぐに中身を読んだ。
「分かりました。遺跡の出土品や記録については求めた通り、孫に渡しましょう。それで遺跡の話を聞きたいそうですが……」
「はい。あのカムイヌイナの伝承を今に伝えし遺跡の仔細をお聞きしたいと思いまし

て」

「ほう……あの伝承をご存知で？」

祖母は感心した表情でエリカをみる。シロナも言っていた通りあまりカムイヌイナの伝承について知名度は高くはないようだ。

「あの遺跡はカムイヌイナの後に形成された集落の遺構をそのまま残しておりましての。今ではああして大っぴらに町にだせますけれど、昔はそれはもう大変なことで……」

祖母は伏し目がちに少しずつ昔のことを語り始めた。

――

シロナの家はもともとはさる大藩の家老であったが維新の直後に主だった家臣を引き連れてこのカンナギの集落にたどりついた。

自らの集落を守るため彼らは地元の原住民たちと協力して自警団を作り、猛獣や野生ポケモンの襲来から守るためにシロナの高祖父にあたるクニヨシがポケモンジムを創設した。シンオウではコトブキに次ぐはやさで創設されたこのジムはクニヨシのカリスマと辣腕により大きな連帯感をうみだし、シンオウで有数の大規模なジムに成長していく。

しかしその一方で政府の同化政策によりシンオウ古来の文化は抑圧されていった。

カンナギに土着していた祈祷師たちの文化もその一部とみなされた。クニヨシはまだ融和的であったもののその子、クニツグの代になると（カンナギジムは世襲制）政府の圧力に屈して焚書や祈祷を行ったものの逮捕など徹底的な弾圧に踏み切るようになった。こうして表向きはカンナギからそうしたものはなくなったもののクニツグの子のクニサダは父の姿勢には強く反発していた為に裏で文化の保存に全力を注いだ。そして終戦を迎えて政府の圧力がなくなったためクニサダは父に対しリーダーの譲位、祈祷師たちへの謝罪や文化復興に手を貸すよう要請したが父は聞き入れなかったため遂に彼はポケモンを用いて蜂起し、一年近くに渡る戦争を繰り広げた。結果、クニサダが勝利し、父のクニツグは失意のあまり自害して事はおさまる。しかし闘争は町全体を巻き込んだ惨憺たるもので、死者４３名重軽傷者２７８名という終戦直後各地で起きていたジムのあらゆる紛争の中でも最悪の被害を出した。

　町民たちにとってこの紛争は非常に痛ましい記憶であり、勝利し新たにリーダーとなったクニサダにとっても大きな十字架となって背負わねばならぬものであった。

　それから４０年ほど後、リーグが設立されカンナギも公認ジムの一つとして認められたはいいものの大きな問題が彼の前に立ちふさがった。

　―１９８７年　３月２２日　午前１１時　カンナギタウン　集会所―

「ここ数年、カンナギを訪れる観光客は目に見えて多くなりました。しかし、一方で遺跡

の盗掘被害が増加しており非常に参っています……」

カンナギの史跡博物館長はため息をつきながらリーダーのクニサダを含めた有力者の集う席上で言った。

１９８０年のトレーナーモラトリアムの明文化によるカンナギへの来訪者の増加、それに加えて当時世間をわかせていたバブル景気のおかげで骨董品への注目度が急激にあがりその影響でカンナギ遺跡への来訪者も大きく増えていた。

しかし、カンナギ遺跡の出土品や壁画、宝具の価値の高さを目につけた盗掘被害も相次いでおり遺跡を管理する博物館や行政でも対応はしたがいたちごっこで手につけられない。古物商へも買い取らないよう要請は出しているものの大半は裏で捌かれているためそれで引っかかるのは余程間の抜けた者に過ぎなかった。

「というわけなんですよクニサダさん。もうこうなったらおたくらの力を借りる他ないと思いましてね……」

有力者の一人である町議がクニサダに語りかける。

「つまりうちのジムから人を出せと？」

「そういうことです」

クニサダは間を開けて答える。

「気持ちはわかりますけどね……。そういったことはまず警察に相談されるべきでは」

「しましたよぉそら勿論。しかし駐在所の人員だけではどうにも出来ない上に道警本部に応援を頼もうにもあっちはあっちで余裕がないらしくて……」

館長は憔悴した顔で言う。手を尽くした上での策だということは見て取れた。

「こちらも助けたいのはやまやまなんですけれどもうちもそちらに割けるほどの人員はちょっと……」

「夜間に三人ほど貸していただければ十分なんですよ。三人体制で二人ずつ交代で遺跡をまわってもらうような形で……」

「しかし……」

「そっちも余裕がないことは分かっているがこれも町の価値を守る為だ。なんとか合力願えないかの」

町議は穏やかな口調と共に言外に大きな圧力を漂わせながら言う。クニサダは抗しきれずに渋々承諾した。

―午後9時　遺跡前―

遺跡博物館の営業時間が終わった頃、クニサダは2人の選りすぐりのジムトレーナーを連れてきた。

「来ていただけましたか！」

ご丁寧にも館長直々に三人を出迎えた。

「おや……。私は三人ほどと言ったはずですが」
「私も警備につく。一人でも多くのトレーナーに休養は取ってほしいですからな」
「左様でございましたか……。出来る限り負担は軽くするよう尽力しますので暫しの間ご辛抱くださいませ」
館長は深々と頭を下げて詰め所に誘導した。
―詰所―
「悪いね。こんな夜遅くに出張らせてしまって……」
「ほんとっすよ。こちとらトレーナーを捌くだけで手一杯だってのにこんなことに駆り出されるなんてさぁ」
ジムトレーナーでは随一の実力をもつ男、ウノスケが言葉とは裏腹に笑みを浮かべながら言う。ジムバッジを7つ所持しているエリートトレーナーであり、軽口を叩くものの仕事はしっかりとこなすためクニサダは一番の信頼を置いている。
「全く……。寧ろこのような大役に任せてもらえるのは名誉な事でしょう？　もっと素直によろこんだらどうなんです？」
もうひとりはジム内の実力は三番手（バッジの数は5つ）なものの相手を捕縛したり威嚇するのに優れたポケモンや技を多く持つ女性トレーナー、レイコである。ウノスケとは折り合いが悪いが警備任務故に緊張感を保たせる為、統制に優れた彼女をもうひと

りに選んだのだ。
「へーへー。すみませんでしたっと」
「何ですかその誠意の欠片もない謝罪は……」
「レイコちゃんはさー。カタイんだよカタイ！　こういう時こそ肩の力抜いとかないと持たないよぉ？」
　ウノスケは子どもの相手でもしてるかのように快活に笑いながら接する。
　彼女の怒りは収まる気配がなくまた何か言いたそうだったが、クニサダが間に入る。
「まあまあ。レイコ。取り敢えず落ち着いて……。お前の気持ちも分かるがウノスケの言う通りだ。取り敢えずはリラックスだリラックス」
「そ……そうですね」
　レイコは何度か深呼吸した後、備え付けの椅子に深く座り直した。
「よし……。まあとにかくだ。警備といっても他の入り口は閉まっているし、遺跡の周囲には常に警報装置が張ってあるから侵入者がいればすぐこちらに伝わるようになっている。だから我々のすることは装置をかいくぐって侵入しているものがいないかのチェック。そして侵入者への対処だ」
「しかしさリーダー。対処と言っても何すりゃいいのさ。まさか殺すわけにはいかないわけでしょう？」

「こ……殺っ……」

レイコは具体的な単語にやや怖がっているようだ。

「まあそれは今から俺が実践する。とにかくついておいで」

「実践……っておいもういんのかよ!?」

クニサダは返答をせずにさっさと鍵を持って遺跡へと向かう。二人はやや遅れてリーダーについていく。

―遺跡内　回廊―

クニサダの向かった先には一人で懸命に土を掘っている男がいた。

咄嗟に懐中電灯を男に向ける。

「何をしている!」

クニサダは怒声を男に浴びせる。

「ちっ……!」

男はスコップとリュックを持って一目散に立ち去ろうとする。

クニサダはクロバットを繰り出し、前方を塞ぐ。

「これは……」

クロバットはそこらのトレーナーは持っていないポケモンである。そこから何かを察したのか男の顔が青ざめていく。

「察しのとおりだ。こちらも腹に据えかねてな……。我々カンナギジムが薄汚い盗掘者をとらえることにした！　神妙にしろ！」

男は抵抗を諦めようとせずズバットを三体繰り出す。しかし、所詮ポケモントレーナーのもとで育てられていないポケモンなど赤子の手をひねるようなものである。

クロバットがニ、三度羽を羽ばたかせただけでズバットたちは沈黙した。

「ちいっ……！」

男はポケモンを放置して逃げ去ろうとするもクロバットから逃げられるはずもなくすぐに捕まった。

「とまあこういう感じだ。見つけたら警告し、従わなければポケモンを用いて制圧する」

二人はしっかりとクニサダを見据えて明瞭な返事と共にうなずく。

「とりあえず俺はこいつを駐在に届けたら戻る。朝まで一人休憩で二人が常に遺跡内を回っていればいい。ただ当たり前だが遺跡は絶対に傷つけずやむを得ない場合を除き犯人も傷つけないこと。いいな？」

「当然っすよ。いくら盗人でもジンケンってものはありますからねぇ」

「……」

レイコはウノスケを見て黙っている。

「おいおいどうしたんだい？」

「いや……存外まともな考えをしていらっしゃったので感心していたんです」
「なんだいそりゃ傷つくなぁ～もぉ」
ウノスケはレイコの言葉を笑って受け流した。
「ハハ……。まあとにかく頼んだぞ。俺は詰所にいるから休みたければいつでも来い」
そう言ってクニサダは犯人を連れて駐在所へ向かった。
―午前6時　詰所―
予定の時刻を迎えたので三人が帰り支度をしていると館長が喜色満面な顔を浮かべてやってきた。
「いやぁ～！　本当にありがとうございます！　今日は12人も盗人どもを捕らえてくださったようで！」
「なぁに。このくらいうちのものには軽いですよハッハッハ」
クニサダは笑いながら誇るもウノスケやレイコも含めその顔には疲労がでていた。
「これならばやつらも恐れをなしてすぐに尻尾を巻いてこの町からでていきますよ！　ですからほんの、ほんの暫くでいいですから……！」
館長は切実な表情で継続を訴えている。
「わかりました。わかりましたから……」
館長とはそれからもいくつか言葉を交わした後三人は詰所を出た。

―市街―

「疲れただろう?」

まだほんのり暗い朝の路を歩きながらクニサダは二人に話しかけた。

「い、いえそんなこと」

「いや~疲れましたよほんと!　リーダー。毎日マジでやるつもりなんすかこんな事ぉ?」

二人の答えは対照的であったが、疲れ具合も相反していた。尚捕まえた12人のうち6人はウノスケで2人がレイコだった。

「仕方があるまい。前に話しただろう。俺のジムはこの街にいくら返してもたりない贖罪があるのだ」

「確かにそれは言ってましたけども……」

「先輩」

レイコはウノスケに目配せする。それ以上言うなという意思表示が見て取れた。

「分かったよ……。リーダーが一番苦労してるのだもんな」

そういってウノスケは黙って歩き続ける。普段の快活な様子はすっかり鳴りを潜めていた。

――

それから一ヶ月、二ヶ月とカンナギジムのトレーナーたちは盗掘者の捕縛に精を出し時が経つごとに盗掘被害は減っていった。

やがて春が過ぎ、夏と秋が過ぎていくと年の暮れになった。

１２月に入ると盗掘被害はぱたりと止み、これはまさにカンナギジムのおかげだと館から警察に諮り感謝状が受け渡されることになった。１２月２６日にクニサダは道警本部のあるコトブキに赴き本部長直々に受け取り大きな称賛を受けた。

そしてその翌日のことであった――

―１２月２７日　午後９時　カンナギタウン　遺跡前詰所―

「いやぁほんとクニサダさんには頭が上がりませんよ。うちとしてはもう感謝感激雨あられといった次第でして……」

館長は感謝状授与の栄誉を称えるべくもう何度目になるかも分からないがクニサダに賛辞を述べた。

「いいえ当然のことをしているだけですから……。しかしもうそろそろ良いでしょう？」

クニサダはそれとなく警備の終了を申し出た。当然のことながらただでさえ多忙なジムの業務に夜の警備巡回、捕縛といった仕事はトレーナーたちに多大な負担を与えていた。いくら１０人体制とはいっても一人あたり週に一回は夜回りに出ねばならない

為トレーナーたちの不満や蓄積された疲労は凄まじいものになりつつあるのだ。
「ええ。盗人どもは完全に我々に恐れをなしたようですし段階的に警備の数を減らし、最終的にはそちらの力を借りずに夜間警備の業務を行いたいと思っていますです。ハイ」
―同時刻　遺跡内　回廊―
この時巡回に出ていたのはウノスケとレイコの二人。
ジム内でも特に指折りの力を持つ二人の捕縛成績は特に高く、クニサダは前にもまして信頼していた。
レイコは慣れた様子で回廊を巡回していた。
彼女は人の気配を覚え、咄嗟に懐中電灯を向ける。
「！　……何……これ……」
そう言うや否や、彼女の視界は鈍い音と共に闇に沈んだ。
―詰所―
「そもそも当初はごく短いお約束だったはずです。どうか前向きにご検討くださいませ」
「盗人が警備を減らしても大人しくしているかどうかを見極めねばなりませぬしな……」

そうこう話していると詰所の扉が荒々しく開かれた。
「リーダー！」
「どうしたウノスケ。そんな血相を変えてお前らしくもない」
「第七回廊でレイコちゃんがやられた！　大怪我だ！　とにかく来てくれ！」
―回廊―
館長は取り急いで救急車を呼び、ウノスケとクニサダはレイコが襲撃を受けた場所へ向かった。
彼女は応急処置を受けてウノスケのポケモンにより看護を受けている。
「これは酷い……」
彼女はいたるところに殴打や鈍器による傷を作っており周りにあるガーゼなどの量で出血も甚だしかったことが伺える。このままでは命に危険があることは明白だった。
「意識は？」
ウノスケは首を横に振り続ける。
「見たときにはもう息も絶え絶えで……」
「犯人は見てないのか？　これだけのでたらめなまでの傷だ。一人二人の仕業ではあるまい」
「全く……。俺は離れた場所にいたせいかもしれませんが音などは聞こえなかったす

ね。ただ……」
「ただ？」
　ウノスケは奥に目をやる。
「奥側には多数の盗掘された跡が見えるんすよね。考えたくはないことだけど……」
「復讐……だとでも？」
「今月入ってからずっと大人しかったのも油断を誘うのと準備に時間をかけるため……。なんとまあ小狡いことに頭が回るもんすねぇリーダー」
　ウノスケはお手上げとでも言った様子で首を大きく横に降った。
「言ってる場合か！　とにかく手当をしなければ」
　クニサダが救護のポケモンを増やすためモンスターボールを取り出そうとすると背後から人の気配がした。館長が救急隊員を引き連れて来たようだ。
「こ……これは酷い」
　館長はレイコを視界に入れたかどうかもわからぬうちに掘り返された現場を見に行った。
「このあたりはじきにまた採掘をしようと思っていたのに……」
　館長はへなへなと座り込んでしまった。
　クニサダは直感してこれはもう引き上げを要請できるものではないと諦観せざるを

得なくなった。

―12月28日　午後1時　カンナギタウン　ポケモンジム　大会議室―

事件はすぐさま街中に伝わり大きな騒ぎとなった。クニサダはすぐさまトレーナー全員を集めて今後について会議を行った。

「レイコは全身打撲で全治三ヶ月の大怪我だそうだ」

クニサダの口から深刻な容態を告げられるとトレーナーたちの顔色は青ざめていた。

「それでリーダー……。遺跡の方は」

トレーナーの一人が静かに口を開いた。

「今日と明日までは警察が現場検証で遺跡を封鎖する。それまで警備はこなくてもいいそうだ」

「それまでって……まだやる気なんですか!?」

「リーダー。私達昨日言いましたよね……。もうそろそろこういうのはやめてほしいって」

トレーナーたちによる遺跡警備の負担は重く昨日は遂に10人のうち3人の女性トレーナーに直談判を受けていた。クニサダはこれを受け入れ、レイコとウノスケが間に入ってどうにかおさめたもののそれをひっくり返されそうとあってはトレーナーたちも我慢の限界を迎えつつあった。

「昨日は勿論そのことについて話した。年明けから少しずつ警備を緩め今年度中にはうちから人を出さなくても回せるようにするという了解も得られそうだった……だがその矢先にあの事件が起こったとあっては」
「レイコちゃんはかわいそうだけど……だけどだからって私達もなんでそんな危険な目に遭わなきゃいけないんですか？」
「そうですよあたしたちまで同じ目……いやもっとひどい目に遭わされるかもしれないっていうのに」
　直談判を行った彼女ら三人の怯えは尤もであった。彼女らも任を与えられた当初は使命感に燃えて摘発を行ったものだったが冬になってからは不満が多くなっていた。
「まあまあお嬢ちゃんたち。あまりリーダーを困らせるなって」
「ウノスケさんからもなにか言ってくださいよ！　このままじゃ皆やられてしまいますよ!?」
「だからどうした」
「は？」
　ウノスケの言葉は彼女の予想に反するものだった。
「仲間がひとりやられてるっていうのに怖気づいて尻尾巻いて逃げるのがうちのジムだとおもわれていいってのか？」

「そんな事言うつもりは……」
「いいか。ポケモンジムはトレーナーたちの目標の場なんだぞ。それなのにそんな怖気づいていて示しがつくと思っているのか？」
「あたしたちだって……」
「ん？」
「そんなこと思われたくない！　でも……それでもやっぱり」
「いい加減にしろ……。そうやってぐじぐじやってても」
ウノスケの首に青筋が見え始めたその時、颯爽と若きスーツを着た青年が議場に入ってきた。
「おやおやお困りのようですね」
「誰ですか貴方は」
男は仕立てのいい黒いスーツを羽織り、にこやかな表情でいる。
「失礼致しました。私は人材派遣会社を営んでおりますサカキと申します。以後お見知り置きを」
男は自然な所作で名刺をクニサダに差し出す。名刺にはブラックキャストと書かれていた。
「これはどうも……。それで、私にどういう御用向きで？」

クニサダは男の無礼を責めるよりも先にどういう話を持ってきたのか聞く気になった。この男にはそういう雰囲気のようなものが感じ取れるようだ。
「この程、ジムトレーナーの方々が大変なご不幸に見舞われたそうで」
「ええ……まあ」
「そこで私どもより用心棒を何人か巡回の度につけさせまして、もし今回のようなことがあれば進んで盾となりトレーナーの皆様の安全を確保したいと考えているのですがいかがでございましょう?」
「ほ……本当ですか?」
先程までリーダーに食い下がっていたトレーナーが藁にもすがる思いでサカキをみている。
「ええ、ガードの質は私が保障いたします」
「……」
クニサダは黙り込んだまま考えている。
「リーダー。少しいいっすか」
ウノスケがクニサダに耳打ちをする。
「随分と話がうまくないですか?」
「そうだな……」

「あの子らの気持ちも分からなくはないんすけどね……あの男はなにか他に考えてることがありげだし一旦そのブラックキャストとやらを調べてから返答したほうが」

一方、サカキは二人の様子をつぶさに観察している。

「実は既に皆様をお護りする予定の者を連れてきているのです。ご覧に入れたいと思うのですが……」

サカキはクニサダに伺いを立てるような視線を送った。

トレーナーたちは無言の圧力を送っている。

「分かった……見るだけならば」

「リーダー！」

「ウノスケ。分かってくれ……。今はとにかく話を聞くだけ聞こう」

それからサカキの連れてきた用心棒は如何にも屈強であり直談判にきたトレーナー以外にも心を傾かせるには十分であった。

猶予がないことも手伝ってクニサダはその場でサカキの提案を受け入れることになる。館長からもその日のうちに追認を受けた。

―12月30日　午後11時25分　遺跡前詰所―

この日は警察による封鎖が解かれトレーナーたちによる巡回が再開された。

用心棒の成果を確かめるためクニサダは詰所に居る。

「今日は何もなければいいですけどね……」
　当番の一人のトレーナーがそう呟く。
「まぁ昨日の今日だ。そう連続では襲っては来ないだろう」
　クニサダはそう言いつつも内心では成果を見極めたいというのがあった。ウノスケが今日までに調べたところによるとブラックキャストは後ろ暗いところがありいわゆるヤクザなのではないかという噂が立っているという。
　それに不安を覚えながら今日を迎えたのである。
　コーヒーを飲み終えると巡回に出ていたトレーナーが帰ってきた。
「いや～ほんとありがとうございました！」
「いやいやこちらこそお安いご用。あの程度なら何人でも蹴散らしてやんよ」
　用心棒とトレーナーは思った以上に打ち解けている。
「おう……お帰り」
　クニサダはやや当惑している。
「ただいま戻りました！　いやーリーダー。すごかったですよ本当に。目の前に急に10人くらいの盗賊が現れたんですけどすぐに近寄ってきたやつなぎ倒して時間稼いでくれたんです！　おかげでこちらはなんとかなりましたよ」
　トレーナーは快活に笑いながら戦果を誇る。

「そうか……それはよかった」

クニサダは大過なくボディーガードが機能していることを知り安堵した。

それ以後も何度か盗賊による襲撃はあったものの彼らは十全にはたらき一ヶ月後には完全に盗賊は消え去った。

クニサダは暴力団まがいの組織であることは薄々感じつつも仕事はしっかりとこなす為黙認する状況が続く。当初の約定どおり翌年3月末までに毎日の巡回業務は廃止されボディーガードの必要性は薄くなったものの（26日の盗掘事件の影響で館長は完全な警備体制解除はもう少し待ってほしいと依頼した）ジムトレーナーからの評判がよかったこともあって雑用や力仕事で何度かサカキのブラックキャストの手を借りていたのだ。

そして数年が経過した。

―1993年　1月12日　午前7時　カンナギタウン　ポケモンジム―

サカキと関係をもって四年。

あれから盗掘そのものがバブルの崩壊によって骨董品の需要が落ちたために年を追うごとになくなり92年の大晦日をもって完全に警備体制は解かれることになった。

「ようやく落ち着いてきたって感じだな……」

クニサダは営業開始の準備を終えてどっかりと腰をおろした。あと一時間で今日の

ジムは開かれる。
「そっすね……。あの長い遺跡警備も終わってブラックキャストとの関係も清算できたしでやっと本当の日常に戻れた感がありますねぇ」
ウノスケは一貫してブラックキャストとの関係を断ち切ることを主張しておりこの点については衝突することの多かったレイコも同意見だった。
彼らを歓迎するジムトレーナーが大半だった一方で明確に懐疑的だったのはこの二人だけである。
リーダーであるクニサダはこの四年の間にトレーナー全員を集めて何度か会議を行い多数派だった関係継続のトレーナーたちを粘り強く説得して漸く警備体制完全解除のタイミングで関係を清算することに合意。サカキもこれについては快諾した。
「しかし気になることが一つ有るんです」
ウノスケと共にブラックキャストとの交渉を行っていたレイコが口を開く。
「ああ……。ずっとシンオウにいたサカキさんが今日からどっかいっちまうって話だろ？　なんでも旅行とか言ってたな」
クニサダは思い出したかのように返す。
「旅行じゃなくて高飛びだったりしてな！」
ウノスケは冗談半分に笑い飛ばす。

「先輩！　そういう事をいうのはやめてください洒落にならないんですから」
「ハハ……。まあサカキさんもたまには羽休めしたいこともあるんだろうよ。この四年ずっと働き詰めだったみたいだ……ん？」
　クニサダは玄関先が騒がしいことに気づく。
　気になって動き出す前にジムトレーナーが青い顔してすっ飛んできた。
「リーダー！　た、大変、大変なんです」
「なんだどうしたというんだ。ちゃんと説明し……」
　クニサダが焦点をトレーナーの後ろにあわせる。するとトレンチコートを着た男数名と制服姿の男たちがずらりと並んでいた。
「クニサダさん……ですね？」
　中年風ながらもしっかりとした体躯をした男はクニサダの目線を見据えていった。
「は、はい……そうですが」
「あなたに暴力団対策法違反の容疑で逮捕状が出ています。署まで来ていただきましょうか？」
　男は警察手帳をみせた後、クニサダにはっきりと見えるように逮捕状を呈示した。
「我々も査察部としてお話ししたいことがあります。面会の際しっかりと聞かせてもらいますよ」

続いて白黒のモンスターボールバッジを襟につけたポケモンリーグ査察部の職員がクニサダに言う。

恐らく警察と査察部の合同でこのジムを捜査する腹積もりだと彼は悟った。

――

―同日　午前１０時　カントー地方某所　ロケット団本部―

「若！　例のジムに強制捜査が入り、クニサダは逮捕されたそうです！」

団員の一人がサカキに悠々とした表情で報告した。

「ほう。存外早かったな。いつも愚鈍なサツにしては仕事が早いことだ」

サカキは机の上でタバコを吸いながら嘲ったような笑みをつくる。

「しかし愚かな連中ですなぁ……。我々の勢力拡大のコマに使われてるとも知らずあんなに喜んで手を貸すんですから」

サカキのすぐそばに侍っている当時はまだ付き人であったラムダが下卑た笑いを浮かべながら言う。

シンオウ地方では暴力団同士の衝突が絶えず起こっていたがそこにサカキは人材派遣の体を装ってトレーナーの警備という後ろ盾を得ながら他勢力を駆逐（盗掘品の転売はシノギとして有用だったためこれら暴力団も深く絡んでいた）。シンオウ地方のほぼ全域をロケット団の勢力下にいれたのだった。

これは派遣当時まだ存命だったサカキの母親が最後のボスへの試験として課した課題であった。

「ククク……。まあそう言うな。ああいうのがいなければ俺たちは食いっぱぐれちまう。大事にしなければな」

そういうとサカキは吸い終わったタバコを灰皿に押し付ける。

「さて、母様のところに報告に行くか、これだけうまくいったんだ。きっと喜んでくれるぞ」

そう笑みを浮かべた彼の表情にはどこか青年らしい爽やかさがあった。

「はっ！　私もお供しますぞ！　若……いえ、ボス！」

「こら。まだ決まったわけじゃないぞ」

そう言いながら部屋の出口に向かう彼は満更でもない様子だ。上着を持ったラムダもまた心の底から嬉しそうであった。

――

―２０１３年　１１月１７日　午後2時１５分　カンナギタウン　邸宅―

「それからうちの爺様は事情が考慮され軽いながらも刑を受けました。しかしリーグは事態を重く見たのか公認を廃止するだけでなく街ぐるみで同罪であると見做して今後１００年は公認を与えないという通達を出しましたの」

シロナの祖母はそう言うとお茶を啜った。
「へぇ……しかしリーグも随分とむごいことをしますね……。公認剥奪に加えてそこまでやるとは」
レッドは当人の妻の面前だからか同情めいた事を言った。
「いえ。私はリーグの処分は適正だと思いますわ。奥様の前でいうのは憚られますがやはり清廉潔白を旨とするリーグである以上ロケット団などという反社会勢力とのつながりはこのくらいの刑を以て断罪して然るべきだと思います」
エリカは無残にもそう断言する。
「エリカさんの言われる通りだと思います。カンナギの町内の方々はお優しいですから大したことはありませんでしたが……」
祖母は言葉を濁らせる。
「が？」
「私の孫娘……すなわちシロナとその父である私の次男にあたる家族が大変な目に遭ったのです」
祖母の話したところによるとクニサダとこの祖母のあいだには二人子どもがおり、一人はジムの後継者として育てられもう一人はコトブキ大へ進学して研究職に就いた（長男は遺跡の盗掘から事件発生までのあいだは武者修行と称して旅にでていた為不在

だった)。

しかし、先の事件で警察の捜査は後継者である長男にまで及び全国的に大きく報道された。マスコミの報道姿勢は暴対法成立直後だったためか利益供与者とみなされたジム側へのバッシングがひどく次男の家族は徹底的に私刑の憂き目にあった。次男当人は依願退職に追い込まれ、シロナも当時通っていた中学校で凄絶ないじめを受けたという。

その後数ヶ月もすると事件の全容が解明されマスコミもジムを擁護する風潮に変わりつつあったが時既に遅く一家は失意のままカンナギへ戻った。

「そうだったんですか……」

「しかし。そこで終わらなかったわけですわよね?」

エリカが尋ねると祖母の目にやや光が戻ったようにみえた。

「ええ、そうです。爺様はそこで腐らずにリーグのしがらみがなくなったことを逆に利用してポケモンたちを大量に警備に動員したり町おこしに活用しました。おかげで我が家はどうにかこの街で面目を保つことができたわけで、シロナもどうにか大学までやることができたんです」

「なるほどその結果が遺跡にいる大量のガードポケモンってわけ……」

レッドは小声で納得した。

「爺様は諦めず懸命にこの街に尽くしてまいりました。確かに常識と照らせば正しいと言えないことも致しましたがそれだけはどうか……どうかわかってください」

そう語る祖母の口ぶりは切実そのものであった。

―午後3時　カンナギ市街―

祖母との話はそれからも10分ほど続いて終わった。

二人は市街に出て荷物をおくためポケモンセンターに向かっている。

「なんともすごい話だったな……」

「ええ、まさかロケット団がここにまで絡んでくると思いませんでしたわ」

「あの事件がもしかすると今のシロナさんをつくったのかもしれませんわね……」

そうこう話していると向かいから見覚えのある少年がやってきた。

「エリカさん！　レッドさん！　お久しぶりです」

ゴールドは凛々しい表情で二人に会釈した。

「ゴールドさん！　ミナモでお会いして以来ですわね」

レッドはエリカの言葉の後につられるように軽く会釈に応じた。

「おう」

「いやー。やはりシンオウの冬は早いですねぇ。もう自転車なんか使えませんよハハハ」

「そうだな……。全く困ったもんだな」
　レッドは適当に合わせている。
「でも、こういうトラブルがあってこそ旅は楽しいんですよね。いつもよりゆっくり進めたのでポケモンたちとより深く交流ができたと思います」
「そうか……それならよかった」
「ところで、ゴールドさん。ここに来られたということはバッジは今最低でも三枚はとられたのですか？」
「はい！　丁度エリカさんが言ったとおり三枚です」
　レッドは口元に笑みをつくる。
「うっ……その顔は」
「悪いなゴールド。俺たちはもう六枚目にいこうとしてるんだ。ここにいるのはとある人に用を頼まれてな」
「そうなんですね……。やっぱりお二人にはまだまだ勝てませんね。開いた穴はなかなか埋められません」
　ゴールドは悔しがっているのか唇をかんでいる。
「しかし一時期に比べれば本当に頑張っておいでだと思いますわ。その調子で精進を続けてくださいましね」

「ありがとうございます。その言葉が本当に救いです」
「ま、そうだなエリカの言う通りだ。がんばれよ」
それからもゴールドとは数分ほど意見交換などをしてわかれた。
―午後9時　ポケモンセンター　222号室―
この日はその後夕食を摂ってポケモンたちの世話をしていた。
そしてこの時エリカはヒカリからの電話を受けている。レッドは入浴している。
「ありがとうございます。なるほどそうやって考えればいいわけですね」
ヒカリからの電話は高校入試の理科の問題についてだった。エリカにとってはなんのことはなく噛み砕いて解説を終わらせた。
「はい、その水上置換についての考え方は気体の収集を理解する上で大事な要素ですから今話したことはよく覚えておいてくださいね」
「分かりました。ところでもう一つ聞きたいことがあるんですけど……」
「何でしょうか?」
「その……。レッドさんってどうしてあれほど強いのかなって」
ヒカリからの質問は唐突であったが至極当然のものであった。トレーナー歴は彼女とそうは違わないはずなのにも関わらず自らはバッジを5つ6つ集めるのがやっとだというのにレッドはその何倍ものバッジを集めているのだから当然であろう。しかも

手加減状態でなく本気のリーダーたちと戦ってもなお衰えることなく破り続けているわけだから。

「レッドさんは……普通のトレーナーでは遭遇しえないことを幾度となく経験されてきたのです」

「それって……例えばどういうことですか？」

「そうですね……レッドさんからはこれまで色々とお話を伺いしましたがシロガネ山でバンギラスと戦った話でもいたしましょうか」

エリカはジョウトに居た頃レッドから聞かされたバンギラスとの因縁とエンジュの戦争で最終的な決着をつけるまでのことを手短に話した。

「なるほど……そんなことがあったわけですね」

「ええ。エンジュシティでの先の戦乱を終えた後のレッドさんは実に晴れ晴れとしており、雄々しい殿方でございました。全く」

彼女はとらえようによっては別の思念を抱かせるような言い方をした。

「エリカさん？」

「あ、いえいえ。なんでもありません。とにかくレッドさんは普通のトレーナーでは経験しないようなことを多く経験し、壁にぶつかってもめげずにポケモンたちと壁を乗り越えてきたのです。ヒカリさん。今お話したことが少しでも貴女の役に立っていれば

良いのですが」
「はい。とても参考になりました。私もレッドさんのように高い壁にめげずにがんばってあたしのかわいい子たちと考えて、実践して乗り越えていきたいと思いました」
「そうですか……それならば」
　すると突如レッドの声がした。
「あがったぞー」
「あ、夫が戻ってまいりました。それではヒカリさんごきげんよう」
　ヒカリの返答を待った後彼女はポケッチの通話をきった。
「ヒカリちゃんから？」
「ええ。入試問題の解説と、レッドさんのお話を少々」
「俺のこと？」
「はい。どうしてそれほど強いのかお尋ねになられたので一例としてバンギラスと戦われたお話を」
「あー……。あの話か。今となっちゃ随分と懐かしいな」
　レッドは静かに笑いながらベッドに腰を下ろした。
「ええ。そうですわね。エンジュの戦乱もかれこれ半年前のことになりましたわね」
「たった半年なのにな……もう何年も前のことのようだ」

レッドはそう言うと大きくあくびをした。
「すまん……。エリカもう寝るわ。おやすみ」
「おやすみなさいませ」
レッドはそれからしばらくすると眠りについた。
―11月18日　午前1時　同所―
彼女は日記を書き終えると化粧台の上で最近日課にしている編み物をしていた。
ふと編み針の手を止めて自らの顔を見つめる。
「私は……正しい道を進んでいるのでしょうか……」
そう誰かに語りかけるかのようにふと呟くと頭を何度か振り、断ち切るかのように編むスピードをあげていく。
冷たさを増した北風が寂しく窓を揺らしていた。
―第二十六話　記憶と記録の狭間にて　終―

第二十七話　時は現在（いま）

―11月18日　午後3時10分　ミオシティ　市街―

一ヶ月ぶりにやってきたミオシティは比較的温暖なせいか雪はほぼ溶けており、路地に少しだけ寄せてある程度であった。

二人はつい朝までいたカンナギとの差を実感しつつポケモンセンターで回復を済ませる。

「いよいよトウガンさんか」

「シンオウもいよいよ大詰めですわね！　トウガンさんは相当に手強いようですし気を引き締めなくては」

「そうだな……。うん。がんばろう」

そうこう話しているとシロナとトウガンが跳ね橋の近くで話しているのをみかけた。

見かけるとわりあいはやくシロナが二人に話しかける。

「やっほー！　お久しぶり……というほどでもないかな？　こんにちわレッドさん、エリカさん」

「こちらこそ」

「おお！　そういえばもうバッジを5つ集めたのだったな。ということは次は私の番か」

　トウガンはにこやかに笑いながら言う。

「はい。ようやくシンオウで一番強いジムリーダーとも噂されるトウガンさんと戦えると思うととても気が奮い立ちます！　どうか宜しくお願いします」

「なあにこちらもやっと二人と戦えると思えば久々に本腰を入れて構えられるというものだ！　宜しく頼むぞ、レッドくん」

　トウガンに握手を求められ、そのままレッドは返した。

「そういえばシロナさんはどうしてこちらに？」

「この間、エリカさんがあたしにトウガンさんが全国各地の山の岩石年代を調べているって言ってたでしょ？　その結果が出たらしいから見せて頂こうかとミオに来たんだけどそしたらばったり会ってね」

　エリカは納得したようにうなずいた。

「えっ……ああ。そういえばそうでしたよね」

「あたしは別にどっちが先でも構わないけど……。どうする？」

「お二人が先に会われていたんですし、そちらの用事を先にしてください」

　レッドは残念な思いを胸におさめつつ、二人にいった。

「そ。悪いわね。じゃあ、ついでだから二人も聞いていってよ」
四人はトウガンの導きでミオ大学のトウガンの研究室に赴いた。
―午後３時３０分　ミオ大学　トウガン教授研究室―
トウガン自身が大学を休んでいるせいか研究室には誰もおらず長い間不在にしていたせいもあるのか埃も目立っていた。
しかし道中では何人か学生に声をかけられておりやはりそれなりの知名度はあるようだった。
「すまんな。散らかっていて。まあ適当なところに座ってくれ」
指示に従い三人はトウガンと向かい合う形で席につく。
トウガンは研究に使ったパソコンや顕微鏡などの機材の山から調査結果をまとめたと思われるフォルダを二人のまえにおいた。
「難しい話をしても仕方がないのでハッキリ言うと……。やはりというか信じられないというか全てが一致した。えんとつ山、シロガネ山、その他いくつかの山々も調べた結果このテンガン山で採取された岩石と同一かつ同時期に生成されたと思われるものが発見された」
「そうでしたか……!!」
シロナは実に嬉しそうな表情である。

「ということは……カムイ・ヌイナの伝承が歴史的事実であるということですか?」
「状況証拠ではあるがな。ただシロナ女史のもつ史料やら出土品と照らし合わせて矛盾がなければ学者の立場としては否定するのは難しくなるな」
「もう一回家に戻って精査はしてみるけどこれで本当にあの伝承は事実であったと裏付けられたようなものね。これはまさに歴史的な大発見よ。何しろ今までお話の中にしかいないとされたポケモンが現実世界に影響を及ぼしていたと学術的な証拠を以て証明されるわけなのだから」
「まあそういうことになるが……シロナ女史。この事は伏せておいたほうがいいと思うのだが」
トウガンは難色を示している。
「あら? どうしてです?」
「確か電話では349人の人間が吹き飛ばされ、史料で疑わしいものを総計すると211人が現代に至るまでに確認されている……と言っていたな」
「はい」
「もしそれら全員がそうだったとすれば現在から未来にかけては138人がこれから出現していくことになるわけだ……。もしそんなことが公になれば彼らの未来は見世物同様になるのが目に見えてる」

「確かにそういうことになるリスクはあります。しかしこれを伏せれば彼らは現代と自らのいた時代とのギャップに苦しみ続けることになるんですよ？　カムイヌイナで記憶をなくすかどうかはまちまちなようですが無くしていればその原因がわからず誰にも理解されないまま死んでいくことにもなりかねないんです」

「しかしそれでも公となって半永久的に好奇の目に晒されるよりかは幾ばくかは良いと思うが。それに加えて現代に生きる我々の心構えも……」

シロナとトウガンの論争は３０分ほど続き平行線のまま終わった。

トウガンは研究所の片付けと大学の所用をすませてから行くと言い、三人は大学をでた。

―午後４時４０分　ミオシティ　市街―

「ふう……」

シロナはトウガンとの論争を終えて一息ついている。

「シロナさん。結局どうされるのですか？」

エリカが尋ねる。

「トウガンさんの言うことは尤もだけれどね……。あたしも学者の端くれよ？　究明したことを黙って見過ごすわけにはいかないの」

「左様ですわね……。私はあいにくどちらも専攻外ですから口をはさみませんでしたが

個人としてはシロナさんに賛成したいです。後のことばかり考えていては何もできなくなることもありますしまずは社会に提言することが学問を志すものとしては大事に思います」

「そう。嬉しいこと言ってくれるわね。ところで」

シロナが言葉の調子を変える。やや重めの声色である。

「選挙の話は聞いてるかしら？」

「はい。ダイゴさんからそれなりには……」

「ああ……前理事長ね。何か変なこと言ってなかった？」

エリカはしばし口に出そうか逡巡した様子が見受けられたが、間をおいてダイゴの家で聞いた話をそのまま伝えた。

「フフ……。さすがはデボンの御曹司ね。情報だけはしっかり握ってるわ」

「もしかして事実なのですか？」

シロナはやや間をおいて言う。

「リーグの為よ。前理事長の言う通り〝彼ら〟の支持を得るのは並大抵のことではとても覚束ないのよ。政府の介入を回避するには力技だけでは足りないのよ。使える手段は使わないと」

「そんな……シロナさんは決して黒いことはなさらないと思っていましたのに」

「失望させてごめんなさい。でもね。これはまだ私に力が足りないからこうせざるを得ないだけなの。理事長となった暁には全ての関係を清算し、不偏不党で清廉潔白なリーグを創ってみせるわ。それだけは……どうか信じてちょうだい」

やや距離をおいて歩いていたレッドがあくびをする。

「あら。貴方……すみません少々お話が難しすぎましたわね」

「いやいいんだけどさ……。お、ジムが見えてきた」

レッドの言う通り、前方にはポケモンジムが姿を現していた。

「本当ね。観戦していきたいところだけどリーグに戻って選挙の準備しなきゃいけないしあたしはそろそろ失礼するわ。じゃ、お二人さん。がんばってね」

シロナは二人の挨拶をきいた後、トゲキッスにのって東の方向に飛び去っていった。

あたりはすっかり暗くなり日は沈みつつあった。

―午後５時３０分　ミオシティ　ポケモンジム―

ジムについてから１０分ほどでトウガンが戻り、リーダーの部屋へむかった。

「グハハハハハ！　大学では無様なところをみせてしまったな。だが勝負となれば話は別！　こうてつ島で鍛えに鍛えた私のポケモンたちを貫けるものなら、貫いてみるといい！　行け、トリデプス！　ジバコイル！」

エリカはワタッコを、レッドはリザードンを繰り出した。

「ワタッコ。日本晴れ」
　ワタッコは元気よく舞い、フィールドを晴れにした。
「よし、リザードン！　トリデプスにだいも」
「トリデプス。砂嵐だ」
　晴れになったフィールドは一転、砂が舞う景色となった。
　どうやらせんせいのツメが発動したようだ。
「チッ……！　構うな！　ジバコイルに問大文字だ！」
「物理学において、現在説明されている4つの力を一つにまとめて宇宙に存在した一つの力を説明しようと試みる理論をなんという？」
　砂嵐の向こうから返答はない。
「はい時間切れ！　正解は大統一理論でした!!」
　と言いながらリザードンは力一杯の炎の塊を吐き出す。大の字となって広がったが、ジバコイルは存外大きなダメージが入らず、半分が残った。
「な……なんでこんなに硬いんだ」
「甘く見てもらっては困るな。木の実で炎技が半減できることくらい予想がつかなくてはなぁ！　ジバコイル！　リザードンにチャージビーム！」
　リザードンに見事命中したが、威力不足のためリザードンは体力を多く残して立っ

ている。
「ワタッコ。ジバコイルにやどりぎのタネ」
　ワタッコはジバコイルに種を植え付ける。天候を変えてもイタチごっこになるのが目に見えてるので持久戦にもちこむようだ。
「リザードン！　もう一度ジバコイルに大文……」
「貴方。リザードンは一旦戻したほうが」
　エリカの忠告が入る。
「ジバコイルはリザードンにとって厄介な敵だ。出来ることならはやく片付けてしまいたい」
　といってレッドは即座に提言を退けた。
「リザードン！　大文字だ！」
　リザードンは二度巨大な炎の塊をジバコイルに向けて放つ。
「ジバコイル。１０万ボルト」
　塊がフィールドの半分をいったところでジバコイルは磁石に電力を集中しはじめる。
　炎の塊はジバコイルが体を傾けることでそれていった。そしてカウンターとばかりに１０万ボルトの電流がリザードンに浴びせられる。
　チャージビームに加えて特攻が一段階上がった１０万ボルトに耐えきれるはずがな

く倒れた。
「チッ……。行け、ピカチュウ！」
レッドは次善の策としてピカチュウを繰り出す。
「トリデプス。ワタッコにどくどくを」
ワタッコの持久戦術を無効化するためトウガンはどくどくをまいた。
「ピカチュウ。ジバコイルにボルテッカーだ!!」
電撃を纏ったピカチュウの全力の突撃はジバコイルの体力を削るには十分だった。残りの体力は2割ほどである。
「ワタッコ。トリデプスからギガドレイン！」
エリカは猛毒の減少分を補うためギガドレインで吸い取っている。トリデプスの体力は三割ほど減少した。
「トリデプス。ワタッコに火炎放射」
エリカは完全に不意をつかれたような表情となった。不一致の上火力不足の為大したダメージにはならなかったが心理的なダメージにはなった。
「ジバコイル！　ワタッコにラスターカノンだ」
ジバコイルは光を一点集中させてワタッコにぶつける。火炎放射の減少もあって受けきれずに沈黙する。

「おいでなさい、キノガッサ」
「ピカチュウ。トリデプスにかみなりだ！」
ピカチュウは雷を撃ったが、顔面の盾で受け流されてしまった。
「ジバコイル。キノガッサにラスターカノン！」
キノガッサはラスターカノンの直撃を食らう。特攻が一段階上がっている効果は大きく相性が等倍といえども体力はわずか1割しか残らなかった。
「トリデプス！　いわなだれだ！」
キノガッサは持ち前の俊敏さで避けたが、ピカチュウはあと一歩のところで洗礼をくらう。タイプ一致といえども等倍で火力が足りないため一回では倒れなかった。
「……」
レッドはしばし黙考した後に指示を下す。
「ピカチュウ。もう一回だ！　もう……」
ピカチュウは電撃を出そうとするが、キノガッサが肩をつついた。
何やらヒソヒソと耳打ちをしている。ピカチュウはうなずく。
「キノガッサ。トリデプスにインファイト！」
トリデプスに痛烈な拳が次から次へと降りかかる。
四倍弱点といえど顔面の盾をもってよく耐えた。

「トリデプス！　背後を……」
トウガンが指示した時にはもう遅かった。
ピカチュウは見事に彼の背後にしがみついている。
彼がピカチュウと目を合わせた瞬間、機を得たとばかりに大きな稲妻が下った。
トリデプスは完全に不意を突かれた形になり、倒れた。
「グハハハ。やるではないか。こうでなくてはな！　行け、ドータクン！」

――

レッドは2体、エリカは全滅したがどうにか辛勝した。
「うむ。久々に全力で戦えた。マインバッジだ。受け取ると良い」
「ありがとうございます」
二人はバッジを受け取った。これでいよいよシンオウものこり2つである。
それから二言三言話して二人はジムを後にした。
「……」
トウガンは考え込んでいる。
「リーダー？　どうしました？」
トウガンの様子を不思議に思ったのかジムトレーナーが話しかける。
「負けといて言うのもなんだが……思ったほどじゃあなかったな」

そうとだけ言うとトウガンはようやくその場から去っていった。

―午後9時　ミオシティ　ポケモンセンター―

ジム戦を終えると二人はポケモンセンターで回復を行い、今日はこの街で一泊することにした。

夕食を終えて一息ついているとエリカのポケギアに電話がかかってきた。どうやらヒカリのようだ。

世間話の後にヒカリが続ける。

「それで、ナナカマド博士にレッドさんがバンギラスと戦ったことを伝えるとかなり興味深げに聞いてきまして……」

「そうですか。博士がなにか？」

「なんでもその件について詳しく本人から話を聞きたいから都合のいい日に研究所まで来てほしいんだそうです」

「ほう……。わかりました夫には宜しくつたえておきますわ。それにしても一体……」

エリカ当人も不思議なようである。

「さあ……。博士はあまりペラペラと喋らない人だから分からないです」

「そうですか。まあ博士のことですし信頼におけますわ。できるだけ早い内にお伺いしますね」

それからも十分程勉強を教えたりしてヒカリとの通話はきれた。
やがてレッドが風呂から出てきた為彼女は要件を伝えた。
「博士が？　俺はいいけど……。一体そんな話がどうしたんだろう」
「博士のことですから恐らくポケモンの研究にでも活用するのでしょう。明日にでも伺いたいところですわね」
こうしてヒカリともう一度通話を行い明日マサゴへ向かうことになった。
―11月19日　午前9時　マサゴタウン　ナナカマドポケモン研究所前―
研究所にたどりつくともうひとり意外な人物に会った。
「あれ。レッドさんにエリカさん。お二人も呼ばれていたんですか？」
ゴールドであった。思いもしなかったため二人とも当惑している表情だ。
「そうだ。ゴールドはなんでよばれたんだ？」
「僕は単に研究者として聞きたいことがあるから良ければ来て欲しいって感じでしたけど」
「左様ですか……。どちらにしてもナナカマド博士の研究に関することらしいですわね。興味深いです」
三人は話しながら研究所に入る。
研究所にはヒカリもいた。話を聞くとどうやら図鑑の様子をみてもらっていたよう

だ。
「うむ。忙しいところ呼び出してすまなかった」
　ナナカマドは世間話もそこそこに神妙な面持ちで言った。
「いえ。それよりも俺たちに用事って一体なんでしょう？」
　レッドがナナカマドに尋ねる。
「うむ……とにかく二人にはそれぞれこれまで。特に全国を旅する前についてどういうポケモンと戦ってきたかを教えてほしいのだ」
「え？」
「記憶の限りで構わない。印象に残っている戦いについて特に詳しく聞きたい」
　ナナカマドの眼光は二人の目を確実に射抜いているかの如く鋭い。まさに研究者の眼である。
「構いませんけど……一体どうしてです？」
　ゴールドが言った後、ナナカマドはゆっくりと居並ぶ三人を見回す。
「すまないが……今は言えん。まだ確証の持てる段階ではないのでな」
　ナナカマドは申し訳無さそうな顔をして言う。
「そうですか……」
「だが、私の研究に深く関わる事なのは間違いないのだ。どうか聞かせてもらえないだ

ろうか」
ナナカマドは二人の距離を詰めて言う。どこか威圧感と共に切実さがある。
ゴールドはやや間を空けて答える。
「わかりました」
「俺も出来る限りの事は」
二人はやや思うところがあるのか気後れしたように答えた。
「うむ！　では早速話を三人だけで聞きたい。エリカ女史。申し訳ないがレッド君を借りるぞ」
「分かりましたわ。私はヒカリさんとお話ししますから。どうかお気にさらず」
ナナカマドはそれを聞いて軽く礼をした。
その後、レッドとゴールドはナナカマドに連れられて所長室に通された。
―所長室―
二人はナナカマドと相対してソファに座った。
目の前には既にだされていたお茶と長くなることを予想しているのかサンドイッチや菓子などの軽食が用意されていた。
「さて……。先程はああして濁したが二人には本当のことを話すとしよう」
座ってからそこそこにナナカマドは本題に切り込む。

レッドとゴールドは固唾を飲む。
「場合によってだが……もし私の今研究していることが事実として世間に知れれば恐らくポケモンの……いやトレーナーの常識が一気に覆されることになる」
「え!?」
ふたりとも目を見開く。
「まあ……そうして驚くのも無理はない。というのも……」
ナナカマドが続けようとすると強い振動と轟音が響いた。
幸いにもすぐ収まったが机の上にはお茶が少しこぼれている。
「な……なんだいまの」
レッドが困惑しているとドア越しに研究員が騒ぎ立てている。
「博士!!　一大事です！　シンジ湖で大爆発がおこったようです！　観測員から緊急の知らせがありました」
それを聞くとナナカマドの顔色が真っ青になった。
「なんだと!?」
ナナカマドは大急ぎで所長室から出ていく。レッドとゴールドも後に続いた。
―休憩室―
休憩室に設置されているテレビではシンオウにある3つの湖の同時爆発について報

じていた。
「なんということだ……。シンオウの象徴たるあの三湖を爆破するなど」
ナナカマドは打ちひしがれている。
「なんでも爆破したのはギンガ団という組織でユクシー・アグノム・エムリットを捕まえるためにあの湖に爆弾をしかけたとのことで……いやはや」
研究員の一人がナナカマドに詳細を伝えている。
「うむう……。前々からきな臭いとは思っていたがとんでもないことをしてくれる。こうしてはおれん。四人共。すまないが湖の様子をみにいってはくれないか？」
ナナカマドは休憩室に集まっていたレッドをはじめとする四人に依頼する。
「分かりました。僕はとりあえずリッシ湖のあたりに行ってみます。ちょうどこの前行ったばかりなので」
「それじゃ私はエイチ湖に行ってきます。さっきジュンから電話かかってきてどうなってるか見てくるとか行ってたけど一人じゃ心配だし……」
ゴールド、ヒカリがそれぞれ自分の行く先を告げる。ナナカマドは頷いて了承した。
「うむ！　それではレッド君とエリカ女史には私についてきてシンジ湖に来てもらおう。それで良いかね？」
「分かりましたわ。及ばずながら協力させて頂きましょう。宜しいですわね貴方？」

エリカがレッドに尋ねる。
「うん。そうしよう」
レッドはやや間をあけて返答した。
「よし。ならば急ごう。一刻も早く奴らの行動を止めねばなるまい！　ふたりとも気をつけて行くのだぞ！」
こうして四人はそれぞれの場所へ向かっていった。
―午前１０時１５分　２０１番道路―
レッドとエリカはナナカマドの先導に従ってシンジ湖へ向かっている。
その道中レッドのポケッチが鳴り響いた。
相手をみるとシロナと書かれていた。出てみると案の定用件は先程の爆発についてである。
「リーグとしてもこれは放ってはおけないからとりあえずうちの地方のリーグだけでも動員をかけて事態の収拾にあたりたいんだけど」
シロナはすぐに動員をかける構えだった。恐らく口ぶりからしてその制圧作戦にレッドとエリカにも加わって欲しいとでもいうのだろう。
しかしレッドは反論する。
「あの……とりあえず俺たちに任せてくれませんか？　俺とエリカとゴールドが爆発の

時研究所に居合わせていてこれからそれぞれの湖に様子を見に行こうって話になったんです」

「あら。そう……」

シロナは十秒ほど間をあけて答える。

「分かったわ。こっちとしてもエンジュ騒乱から大して時間も経ってないのにまた動員かけるとなったら体面がよくないしね……。何よりもそれだけの面子が揃っているなら安心して任せられるというものよ」

「ありがとうございます」

「万一解決までに時間がかかった時のことも考えて内々には準備しておくように通達は出すけどとりあえずはそっちに任せるわ。がんばってね。ギンガ団の好きにさせてはいけないわ」

その後シロナからの通話はきれた。

「貴方。どちらからですか?」

「シロナさんからだよ。リーグ全体でこの事件を解決したいとかそんな話だったけど……俺は断っておいた」

「え……?　何故です?　リーグも入るとなればより速やかに事が収まると思いますわよ?」

エリカは甚だ疑問のようである。
「あー……それはだな。リーグが攻撃の準備整えてギンガ団潰すまでの間にこの件はカタがつくと思うからさ。俺に加えてゴールドもいる。それに……お前もいるしな。エリカ」
「まあ……。嬉しいこといってくださいますこと」
エリカは心底嬉しそうな表情をする。
「全くこんなところでのろけおって……」
ナナカマドは先導しながらぶつぶつとこぼしていた。
「ハハハ……」
しかしレッドがそういった本当の理由は別にあった、ナナカマドが恐らくリーグに介入されては困るのではないかという直感がはたらいたのだ。リーグに委ねるのではなくまずレッドやゴールドたちに頼んだところからしてそんな予感がしたのかもしれない。
そんな事がありつつ三人は１０１番道路を進んでいった。
―午前１０時４０分　シンジ湖―
到着すると水は見事に干上がっておりもはや湖と呼べる状態ではなくなっていた。
「なんてこった……。これは酷すぎる」

湖の惨状をみたレッドの第一声はこれである。
「とにかく湖の状況を見なければならん。何をしているのか探ってきておくれ。私は周囲や湖のポケモンの被害を調査するとしよう」
といってナナカマドは先に湖のあった縁にそって歩いていってしまった。
「ようし。とりあえず湖を降りてみるか。いけるか？」
かつて湖底だった場所まではかなりの急斜面である。
「どれだけ一緒に旅をしていると思っているのですか。この程度どうということはありませんわ」
エリカは軽く微笑んで見せる。
「よし。じゃあいくか」
レッドとエリカは干上がった湖を探索する。ギンガ団員が全部で５０人ほどいたが全て二人にとっては取るに足らぬ力しかなかった。
「けっ。お前らに負けたところで痛くも痒くもないもんね！　ボスがきっと恨みを晴らして俺らにとって住みやすい世界をつくってくれるさ！」
最後と思われる下っ端がそう吐き捨てていった。二人は既にかつての岸辺にもどってきていた。
「ふう……。どうやら全員倒したみたいだけどなんの収穫もなかったな。エムリット？

とかいうポケモンも既に連れ去られていたみたいだし」
「そうですわね……。徒労もいいところですわ……ってあら？」
彼女が目に遣った先では草むらで何かがガサガサと蠢いていた。その先は湖の出入り口である。
しばらくするとそこから人がでてきた。しかもそれは意外な人物であった。
「トシアキ……さん？」
彼女が名前をいうと当人は振り返って大層驚いていた。
トシアキの服は泥かなにかと思われる汚れにまみれている。
「おや！　いやーこんなところで奇遇ですなぁ」
トシアキはいつもどおりの軽妙な様子で接してきた。
「どうしてこんなところに？」
「有給をとりやしてね。ちょいとシンジ湖で自然と戯れようかと思ってたらこの大爆発に巻き込まれたんでさぁ。あっしはポケモン持ってないもんで今まであのキテレツなかっこした連中の目をかいくぐってどうにかこうにかここまでたどりついたって寸法なんで」
「そうですか……。それはなんとも災難ですわね」
エリカはトシアキに同情している。

「お二人こそどうなすったんです?」
「俺たちはその大爆発を受けてギンガ団をやっつけに来たんですが……どうにも遅かったみたいです。エムリットは逃げているし幹部はとっくに引き上げたとか言うし」
「なるほど……そっちはそっちで災難だったわけですな。お気の毒に……」
それからいくつか話してトシアキと別れた。
「まさかこんなとこで会うとは思わなかったな」
エリカはレッドの言葉から少し間をおいて言う。
「おかしいですわね」
「え?」
「トシアキさんの服の汚れみました?」
「見たけどあれがどうかしたか?」
レッドは一点の疑問も持っていない様子である。
「このあたりの土は比較的乾いています。なのに彼には明らかに湿ったような色の土が服についていましたわ。これがどういうことか分かります?」
「え……まさか湖のなかに?」
レッドはハッと気づいた表情をして言う。
「そうです。私達の入ったあの場所はかなりぬかるんでいましたわね。おそらくそこで

何らかの作業をしたときの土が服に付着したのだと思います。大きなリュックも背負ってましたしね」

「じゃあつまり嘘をついてたってことか……？」

トシアキは湖の観光で来ていて巻き込まれたと言っていたがもしそれだけならば逃げるためにわざわざギンガ団が多くいる囲れた湖のなかに入る必要はないからである。

「そうです。しかし理由がわかりませんし証もありませんから無闇な追及はしなかったのですが……どうにも引っかかりますわね」

それからしばらくしてナナカマドも戻ってきた。彼の方にも犠牲になったポケモンの多さ以外にはさしたることがわからなかったようだ。

「そうですか……。弱りましたわね。これではこの先の手が……」

そうエリカがつぶやくとエリカのポケギアが鳴り響いた。相手はヒカリのようだ。

どうやらジュンの活躍でトバリのアジトにあの三匹は閉じ込められているとの情報が手に入ったようである。そういうわけで二人はトバリに向かうことをナナカマドに伝えた。

「そうか……あいつがやったか……。うむ！　分かった。行きなさい。あの二人のことはお前さん方とゴールド君に託す。無茶をしないよう見守ってやってほしい」

「お任せください。博士のご期待には十分に応えられるよう努力します」

レッドがそういった後、二人はトバリシティへ飛んでいった。

―午後2時　トバリシティ　ギンガ団アジト前―

アジトの前にはレッドとエリカの他にゴールド、ヒカリ、ジュンの五人が揃っていた。

「このビルって……」

「確か銀河グループのビルだよな？　あそこにも銀河エネルギー工業ってかいてあるし……」

ヒカリとジュンは訝しげに見ている。

「でも確かにその下っ端はこのビルだって言ったんだろ？」

レッドがジュンに尋ねる。

「は、はい」

「ということはやはりハンサムさんの仰せになられていた銀河グループがギンガ団と繋がっているというのは事実のようですね」

「そうなんですか……」

ヒカリ、ジュン共に沈んでいる。地方を代表するといって過言ではない大企業がそんな大それた悪事の当事者ということがショックなのだろう。

「二人ともそんな顔しちゃだめだよ！　そういう企業があるからこそ自分たちがそれを正すってことも大事なことだと思うよ。僕たちならそれができるんだ！」

ゴールドが二人を励ます。
「そう……そうですよね！　ジュン君！　あたしたちならシンオウ中の人々を救えるんだよ！」
「そうだな……！　よしいっちょやってやるか！　おーい！　お前らなんか俺が全員やっつけてやる！　かかってきなああ!!」
そう言いながらジュンはトバリビルへと突っ込んでいく。
「ちょっと！　ジュンくん！」
「いや宜しいのですヒカリさん。時間の猶予はあまりありませんしここは正面突破あるのみですわ」
「そうだな。よし。後に続くか！」
レッドがジュンの後に続き、三人も後ろに続く。
こうして五人のトレーナーはギンガ団の野望を阻止すべく本格的に動き出したのだ。
―第二十七話　時は現在（いま）　終―

第二十八話　千載一遇

―11月19日　午後2時　トバリシティ　ギンガ団アジト―

アジトに突入すると予期していたのか多数の下っ端が取り巻いていた。

当然レッド、エリカ、ゴールドにとっては敵でもなんでもなくポケモンを打ち破っていったがジュンとヒカリは浮かない表情をしていた。

「お二人共どうされました?」

「俺らこれまでの何度かギンガ団とは戦ってるんだけど……。どうにも強さが違うと思って」

ジュンが答える。

「そう……そうなんです。三人にとってはなんのことはないのかもしれませんけど……あたしとかジュンのようなトレーナーにとっては肌身に感じてわかるんです。ここのポケモンは普通じゃないです」

「湖を爆発させるような組織だ……もしかしたら何かしら手を加えてるのかも」

ゴールドがやや低い声色で言う。許せない心情で満たされているのだろう。

「そうですわね……。ありえない話ではないでしょうね」

そうこう言いつつ5人は進んでいった。
―午後3時　アジト　広間―
アジトをすすんでいくと広間の二階にでた。
目下には多数の団員がおり演壇にはボスと思われる人物が弁舌をふるっている。
「あーっ！　あの人」
見た瞬間ヒカリが思わず声を出した。
「ご存知の方ですか？」
エリカが尋ねる。
「アカギ社長だ！　俺も何度かテレビで見たことあるぞ」
どうやらシンオウ地方の中では相当に顔が売れている人物のようだ。
「フッフッフ……驚いただろう。彼はまさにシンオウ地方の経済を牛耳ってるといって過言ではない実業界の大物。銀河グループのトップであるアカギ社長だ」
二階で演説をみていた群衆から一人他のギンガ団員と同じ服装をした男がでてきた。
一番近くに居たジュンとヒカリはモンスターボールを構える。
「待て待て！　私だ。国際警察のハンサムだ！　潜入捜査してたの！」
ハンサムはカツラをとって身の証をたてた。どうやら本物のようである。
「あ……ごめんなさい」

二人はモンスターボールを戻す。

ハンサムは姿勢を正して再び話し始めた。

「ああみえて彼はまだ27歳という。これだけの数の人間を心酔させるカリスマ性といい我々国際警察としても強い脅威を覚えざるを得ない」

「左様ですか……。それで、ハンサムさんは一体何をお調べに」

「当然、奴らの目的だ。調べたところではカムイヌイナとかいう伝説をもとに祈祷師を使って我が地方の伝説ポケモンであるディアルガとパルキアを下界に降臨させたがっているようだが……」

「そ……そんな途方も無いことを……」

レッドがそう思わず漏らす。

「うむ。この国際警察のメンバーである私にもどうやってやる気なのか見当もつかない……。現段階ではただの夢想家だとしか思えん」

「そうでしょうね……」

「だが。それを探るのも私の仕事だ。君たちも……まあそれだけのメンツがいるなら難なくいけるだろうがくれぐれも無理はするなよ。私は私でもっといろいろなところを探るとしよう」

そういってハンサムは去っていった。それと同時にアカギの演説も終わって団員た

ちはバラバラに去っていく。話の限りではどうやら明日一部の団員と共にテンガン山において二匹を召喚する腹積もりのようだ。
「チィッ……。俺たちも急がないとやばそうだな」
「ええ。捜査は専門に任せて進みましょう」
レッドとゴールドがそう話すと5人は更にアジトの奥へと進んでいった。
―午後4時　アジト最奥部―
複雑なアジトを進んでいくと最奥部と思われる場所にたどりついた。
大きなガラス管の中にはユクシーとアグノムとエムリットと思われるポケモンが閉じ込められている。操作盤の前には一人の男がおり、服装の違いからして幹部であろうことは察せられた。
「ここまで来たか……思ったより早かったな」
そういうと彼は5人の方に振り返った。
「お前は……」
「私はサターン。ギンガ団の幹部だ。ここに閉じ込めてるポケモンを救いにきたのだろうがそうはさせない。新しい世界を創造するというボスの望みをお前達のような子どもに邪魔されてなるものか」
ジュンとヒカリがモンスターボールを構える。

「待て。ここは俺が倒す」
レッドが遮る。
「いいえ！　レッドさんにこれ以上迷惑はかけられません。ここは俺が……」
「ジュン君。あたしに任せてよ！　これでも前よりはうーんと強くなったんだから」
ヒカリは胸をそらしながら言う。どうやら本心から言ってるようだ。
「どうせ俺にはかないっこねーよ！　いいから俺にやらせてくれ。ギンガ団は俺が絶対にゆるさ」
「まぁ待てって。いいか？　あの水槽には恐らく俺たちのさがしていた三匹が入ってる。あまり長引かせてギンガ団に時間を与えると何をするか分からないんだぞ。できるだけ早くここでのすることは済ませたい」
そうレッドがいうと二人は渋々ながらも後ろに控えた。
「ふっ……。小賢しいことを。蹴散らしてくれる」
サターンもモンスターボールを取り出し、ドクロッグを繰り出した。
――
しかし幹部クラスとはいってもレッドの敵というほどでもなく１０分ほどで決着はついた。
「くっ……伝説のトレーナー相手では歯が立たないというのか……。分かった。この三

匹のポケモンはお前たちの好きにするといい。この装置のボタンを押せばカプセルのロックは解除される」

サターンが道を譲ると真っ先にレッドはボタンを押し、ユクシー・アグノム・エムリットを解放した。それと同時に三匹はどこかへと消えていった。

ヒカリとジュンはホッと胸をなでおろしている。

「しかし、随分とあっさり解放しましたわね」

エリカがぽつりと呟く。

「ふっ……。もう用は済んでいるからな。あの三匹からはもう赤い鎖を生成している。それで恐らくディアルガとパルキアを繋ぎ止めるつもりなのだろう……。お前たちなら既に知っているだろうが先の伝承で事を成せなかったのは降誕させる術は知っていても制御する術を知らなかったからだ」

「まさか……」

レッドが言うとサターンは怪しい笑みを作る。

「我々はもうその術を手に入れているのだ……。だからお前たちが今更どう足掻こうとボスは止められない」

「ふ、ふざけるな！　僕たちが今からでもテンガン山にいって止めてみせる！」

ゴールドが怒気を含んだ声でサターンに言い放つ。

「やれるものならやってみるといい。まぁもっとも。ボスが具体的に何をしようとしているのかは私もしらないがな」

そういうとサターンは操作室を後にした。

「くそっ……！　僕らも早くテンガン山へ向かいましょう。事は一刻を争いますよ！」

「左様ですわね。参りましょう」

後の三人も同調して操作室を後にする。

―午後5時　トバリシティ　アジト前―

アジトから出るとゴールドとジュンが勢い盛んにモンスターボールを取り出す。恐らくテンガン山まで行くつもりなのだろう。

「待て」

レッドが止めにかかる。

「なんでだよ！　俺たちは急がなきゃならないっていうのに」

ジュンは切羽詰まっているのか敬語にするのも忘れてレッドに食って掛かった。

「今から雪山に登るのは危険だ。明日の朝からにしよう」

辺りは既に陽の光が失われ、夜の帳が完全に降りようとしている。

眼下に広がる街の光がいやに眩しく見えた。

「で、でも急がないと彼らが何をするかわからないんですよ？」

ヒカリがジュンに同調して申し訳無さそうに言う。
「そうですよ。この二人の言う通りです。二人の雪山登りのサポートなら僕がしますから二人の気持ちも汲んであげましょうよ」
ゴールドもレッドにそう反駁した。
「やれやれ……。あのシロガネ山に仮にでも一回きたお前なら分かってくれると思ったんだがな」
レッドは帽子を目深に被り直して改めて言い直す。
「いいか？　ただでさえ雪道は滑りやすく歩きにくいんだ。それに加えて足場が悪くまともな道も少ない雪山を歩くだけでも素人には難しいというのに、その手がかりすらない夜間に登るなんて言っちゃわるいが正気の沙汰じゃねえよ」
シロガネ山と三年間闘い続けてきた男のいうことである。流石にゴールドもこれには勢いを削ぐがそれでも言い続ける。
「しかしギンガ団はそんな中でも山頂で事を起こそうとしている訳ですよ？　雪山が危険なことくらい僕にだって分かります。しかしそんなことで先延ばしにしては手遅れになりますよ？　条件の悪さは心持ちでカバーしなくては……」
「気合やら覚悟というのはな。十分な技術と経験のある人間が初めて口にすることが許されるんだ。お前たちにはどっちも足りないからせめてコンディションがもう少しマ

シな時に登れって言ってんだよ！」

　レッドの紛れもない正論にゴールドは黙する他なかった。

「それでも登りたきゃ好きに行けばいい。だが俺はそんな無謀な連中と共倒れになるのはゴメンだからな」

「そ、そんな言い方することないでしょう！　レッドさん。あなたはこの二人が一体どういう気持ちで悪条件なのを分かった上で登ると言っているのか分かっているんですか？」

「何度も言わせるな。そんな気持ちだけで登山ができるなら誰も苦労しないんだよ。ピクニックじゃねーんだぞ！」

　ゴールドとレッドの言い争いが険悪になっていくのを見て取ったエリカは仲裁に入った。

「お二人とも落ち着いてくださいまし。ここで言い争いをしても詮無きことですわ」

「しかしだなエリカ……」

「貴方。確かに理論では貴方に分がありますし、私自身仰せの通りだとは思います……しかし驕りが過ぎますわ。雪山登攀のように危険な状況下ではそれこそ大敵というのをお忘れではなくて？」

「うっ……」

「ゴールドさんはたしかに些か感情に揺り動かされて足元の状況を十分に把握できていない面があります。しかし、それもこれも悪の組織を誅伐せしめたいというポケモントレーナーにあって然るべき正義心の発露からきているものというのを貴方はお忘れではないですか？」

　エリカはレッドの言い分に欠けているものを的確に突いていく。

「わ、忘れてなんか……」

「いいえ。忘れていなければ勝手に登れなどとそれこそ危険な選択肢を仰せになるはずがありません。もしそのままお三方がテンガン山に登って事故でも起これば貴方は見殺しに等しい行いをしたことになるんですよ？」

「……」

　レッドはそう言われると黙る他ない。やはり論争ではエリカに勝てるはずもなかった。

「とはいえ。夫が仰せになったことには十分な理があります。どうでしょうゴールドさん、ジュンさん、ヒカリさん。ここははやる気持ちを抑えて夫の言う通り……いえゴールドさんの言うことも理解できますし今日のところは山に一番近い２１１番道路にてキャンプをした後、夜明けすぐに出立するということでどうでしょう？」

　エリカが折衷案を穏やかな声色で持ちかける。

「わかりました。ヒカリさんとジュンくんはそれでもいいかい？」
ゴールドが後方にいる二人に尋ねた。
「はい。分かりました」
ヒカリは素直にそう応じたがジュンは苦虫を噛み潰したような表情で黙ったままである。
「ジュンくん！」
ヒカリはジュンの背中を叩く。
「っ……。分かった。分かりました。そうしますよ」
ジュンも了承したが明らかに不興顔であった。
こうして五人は今日の登山を諦め、２１１番道路へ歩み始めた。
また、行く寸前にハンサムよりギンガ団は準備に時間がかかっており山が悪天候なのも手伝って本日中に事を起こすのは不可能であることを告げられたため五人は少しだけ安心して行くことができた。
―午後９時　２１１番道路　テンガン山洞窟入口付近―
五人は２１１番道路まで飛んでいき、先程のとおりここで休息をとることにした。
元気づけるためにエリカが手料理を振る舞い晩餐は決戦前とはいえ和やかな雰囲気に包まれた。

やがて食事を終えるとそれぞれ暖を取るためのキャンプファイヤーの近くで雑談をしている。
「美味しかったねー！　エリカさんの作ったカレー」
「ああ。うちのカレーでもあれには負けるぜ！　凄かったなほんと」
ヒカリとジュンは丸太の上に座って夕食の感想を話していた。
「エリカさんって、料理が上手なだけじゃなくて勉強もすっごくできるしあたしたちみたいな普通のトレーナー相手でも優しいし……。憧れちゃうなぁ。あたしもああいう人になりたい！」
「ヒカリじゃ元の性格から作り変えないとダメだろ。無駄なことはやめといたほうがいいぜ」
ジュンはエリカに淹れてもらった緑茶を飲みながらそう軽口を叩く。
「もう。そういうジュン君だってギンガ団相手にかなりギリギリだったじゃない？　あれじゃあレッドさんレベルになんていつ届くことやらね～」
「はぁ!?　お前俺を見くびるなよ。お前がたらたらやってるうちにこっちはもうキッサキのバッジとったもんね！　このバッジケース見てみろよ！」
ジュンはジャンパーの内ポケットからバッジケースを取り出してヒカリにみせつける。バッジ7つといえばモラトリアム期間内では上位1％未満の人間しか存在しない

と言われてるため無理もない。

ヒカリは小声で「すごい」と言ってしまったがそれをかき消すような声で反発する。

「あ、あたしは受験勉強で忙しいから育てる暇なかっただけだもん！　でもそんな中でもトウガンさんと戦ってマインバッジとったんだよ！　これでも第一志望校は受かったも同然だもんねー！」

ヒカリは冷や汗をかきながらも基本姿勢は崩さなかった。バッジ６枚は難関校であっても相当な優遇措置がとれる見込みがある。

「お前さっきエリカさんに基礎的なところがおろそかだって叱られてたじゃねーか！　じゃあさっき教えられてたえーっと……。あ、そうだ２２６事件が起きた年いってみろよ！」

「え!?　えっと……。あ、１９３２年！」

ヒカリは自信満々に答えた。が、それは５１５事件が起こった年号である。

近くの炊事場で洗い物をしていたエリカは聞いた瞬間にため息をついた。

「ブッブー！　残念でした３６年です！　これじゃあいくらバッジ６枚でも難しいんじゃねーの!?」

ジュンはゲラゲラと笑いながらヒカリに得意になってみせた。

「あ、あたしは暗記が苦手なだけだもん。国語と英語ならエリカさんにだって褒められ

たもん！」
「へーじゃあ……」
二人が言い争いをしているところにレッドが入ってきた。
「おう。仲がいいな」
「レ……レッドさん」
ヒカリはレッドの姿を見て声色をいつもの調子に戻す。
「懐かしいな。マサラでグリーン……ああ俺の古い友だちだけどな。あいつとくだらないことでいがみ合ってた時のこと思い出したよ」
「グリーンって……もしかしてあの五大難関の一人とか言われてるトキワシティのジムリーダー？」
ジュンは流石にトレーナーの情報については詳しいのかすぐに食いついた。
「なんだ。知ってたのか。それにしても五大難関っつーのは思ったより広まっているんだな……。俺はしばらく界隈に触れてなかったからゴールドに聞くまでは知らなかったが」
「へぇ……。やっぱりレッドさんってすごいんですねぇ」
ヒカリは憧れの視線を向けているがジュンのそれは先程の件があったからかやや冷たさを帯びつつあった。

「お前らアジトで妙なこと言ってたな。ポケモンの強さが違うって」
「え、ええ」
「俺もな。あの後サターンと戦って少しではあるが違和感を覚えた。確かに専業のトレーナーでないにしてはあまりにも強い……。なんというか能力的な強さではなく、根源的というか……元からもっているモノというかそういう資質の違いのレベルでの話だ」
「そう！　そうなんです。同じ技、同じポケモンなのに前に似たようなトレーナーと戦ったそれとは全く威力が違うなって」
ヒカリは共有できて嬉しいとばかりに同調する。
「だがエンジュでロケット団の改造ポケモンと戦ったそれともどこか違う気がする……。どうにもモヤモヤするんだよな」
レッドとヒカリはそれからもいくつか話してレッドはその場を後にした。
ジュンはあれから終始黙っていた。
「レッドさんって凄いよね！　あたしたちみたいな素人の見方を忘れてないっていうの？　そういうのを感じ取れちゃうってやっぱり伝説のトレーナーって感じだよねー」
「……」
ジュンはいつになく暗い表情をして押し黙っていた。

「もう。どうしたのジュン君？　珍しく大人しくなっちゃって」
「なあ。ヒカリ」
「なに？」
「レッドさんって……俺が思っていたような人じゃないのか？」
ジュンは疑問形ではあるが切実な様子で言う。その顔はまさに理想と現実の落差に戸惑っているような、そんな顔であった。
ヒカリは何か言って気を紛らわせてあげようか思案している表情をしたが、そんな様子ではないと察して何も言えずただ背中に手をそえることしかできなかった。
―11月20日　午前11時　テンガン山―
翌日、5人は夜明け前の5時に軽い朝食をとった後にキャンプをたたみ、登山を開始した。
道中ハンサムよりギンガ団が通ったとされる洞穴を教えてもらいそこから事が行われるであろう山頂を目指している。
テンガン山は思ったとおり険しく洞窟をぬけて山肌に出る頃には日は高く登って昼の時間帯になっていた。
「ハア……ハア……」
山を登っている面々の疲労は見て取れる。途中出くわすギンガ団の下っ端を倒しな

がらなので尚更である。
それに加えて昨日よりはやや収まっているらしいとはいえ11月とは思えぬほどの吹雪が5人を襲っていた。
「つっ……!」
雪が埋もれる音がした。
四人が振り返るとヒカリが膝をついていた。
「おい。大丈夫か?」
ヒカリのすぐ前を歩いていたジュンが手を差し伸べる。
「だ……大丈夫。あたしは……平気だから」
しかし体は震えており顔色はやや血色を失いつつあった。
「ちょっと寒いだけだから気にしないで」
そう言いながらヒカリは自力で立ち上がる。
「雪道は足取られやすいから慎重にね」
ジュンの前を歩いていたゴールドが立ち止まって優しく言い掛けた。
「はい。ありがとう……ございます」
そこから少し間をあけてレッドとエリカが歩いている。
「ヒカリさんかなりお辛そうですわね……。何か温かい飲み物でも差し入れましょうか

？」

「何いってるんだ。ハンサムさんからもらった地図見た限りじゃここはまだ半分も来てないんだぞ。貴重な熱源をまだ使うわけにはいかないだろ」

小さい声でそう言ってにべもなくエリカの提案を断った。

「そ……それもそうですわね。分かりました」

エリカは何かを言おうとしたが飲み込んだようである。

この世の全てが白銀になると錯覚しそうなほどの吹雪の中、五人は静かに進んでいった。

―午後1時―

遠くでは何やら禍々しい声が聞こえてくる。

どうやら詠唱がはじまったようだ。頂上は近いことを黙示していた。

しかし小休止を取った時にヒカリの持っているユキカブリに偵察させたところ山頂に通じる洞窟まではまだ７００ｍほど歩かねばならず予断を許さない状況には変わりなかった。

「痛っ！」

また雪が埋もれる音がした。今度は少しつまずいただけでなく派手に全身転んだようである。

先程より積雪が多くここまでくると膝小僧のあたりまで雪が積もっていた。
幸いまだこの時期は新雪であるため雪は軽く、起き上がるのにたいした力は要らない。
「つっ……」
ジュンやゴールドは最早声をかけてあげるだけの余裕がなく、心配そうに見ることしかできなかった。
「あ……あたしは大丈夫ですから構わないで先に行って……ください！」
ヒカリは絞るような大きな声でレッドにも聞こえるように言った。
レッドはそれを聞いて立ち止まった。
「貴方？　どうされ……」
エリカの言葉も無視してレッドは三人のいるところまで降りていく。
「レ……レッドさん？」
ヒカリは目前に立ったレッドを見ている。
「いいかげんにしろ。遊びに来てんじゃないんだぞ、俺たちは」
励ましの言葉をかけてくれるとでも少しは期待してたのだろうか、ヒカリの表情はとても悲しげなものになった。
「レ……レッドさん！　なんてことを言うんです。ヒカリさんだって頑張って」

ゴールドが間に入ってヒカリをフォローしようと試みたが、レッドはこの雪山の如く冷徹な姿勢を崩さなかった。
「頑張ってるやつが何回も転んだりするのか？　頑張ってるやつが先頭から遅れて全体の進行を妨害するのか？」
「ヒカリさんやジュンくんが雪山の登山に慣れていない事は僕たちだって十分に理解してたことでしょうが！　そこは経験と年齢の分僕らがカバーしていかなくてどうするんですか？」
「カバーにも限度ってもんがあるんだよ。この程度の雪で精神が弱くなって全体に迷惑かけるようなやつの面倒を見るほど俺はお人好しじゃないんだ」
こう言い争っている間にも遠くから詠唱の声が続いている。
「聞こえるか？　この声。俺たちがもっと早く行けていればそこまで行く前に止められたかもしれないんだ。その責任は誰にあるんだ。言ってみろよ」
「だ……誰って」
ゴールドは言葉を濁してしまった。
「言えないだろ。所詮お前は聞こえの良いことだけ言って現実を見ようとしない。そういうのが一番タチが悪い」
そう言うとヒカリの前に再び立った。

「ヒカリ。お前には気概がたりない。気概が足りているならば技術や経験の足りない分心意気を見せようと前へ前へ俺たちを引っ張るくらいの芸当はできるはずだろう？」

ヒカリは何も言い返せずにただ自分の倒れていた雪の跡をみている。

「とどのつまり、お前には覚悟が足りないんだよ。この身を捧げてでも役に立とうという覚悟が。覚悟のできてねぇやつはすぐさま降りろ」

ヒカリにそう言い放つとどこからともなく憤然と雪を踏む音がした。

音の主はレッドのすぐ側に立つと思い切り胸ぐらをつかんだ。

「見損ないましたよ……！　レッドさん！」

そう言うと思い切りレッドを雪面に叩きつけた。あまりにも不意のことだったため受け身をとれずまともに地面の衝撃をくらった。

「いてて……ジュン！　お前いきなりなにしやがる！」

「今まで俺が会ってきた上級のトレーナーは確かに厳しい事を言うこともあった……でも、それはどこかにそいつを思うが為の思いやりがあった！　でもレッド！　お前にはそういうの微塵もないじゃないか！」

「は？　何を言ってるんだ。俺はだな」

「確かに俺らは三人に比べて旅の経験は浅いし、ポケモンバトルだって未熟だよ。でも……それでも俺達の生まれ故郷を守りたいからここまでやって来たんだ！　お前そこ

らのことぜんっぜんわかってないだろ！」
「いや……俺は俺なりにその事情は分かってるつもりだ」
「分かっていたらなんで……なんでヒカリにそんな冷たく出来るんだよ！　なんでここまで一緒に登ってきた仲間に対して降りろなんて言えるんだよぉ!!」
　ジュンの叫びは切実なものである。しかしその声はテンガン山の峡谷に虚しく消えていった。
「どうやら……お前にも覚悟が足りてねえみたいだな……。じゃあ」
　レッドが胸ぐらを掴みかえそうとしたところで若葉色の手袋がその手を止めた。
「おやめなさい。見苦しいですわ」
　そう言って強めの力でレッドを突き放す。レッドは雪道の為バランスを崩したがすぐに立て直した。
「皆さん。色々思うところがあるのは分かります。……しかし最早そのような内輪もめをしている場合ではありませんわ。ここでバラバラになっては倒せるものも倒せなくなってしまいます」
　こうしているあいだにも詠唱は続いている。
　ギンガ団の最終的な目論見は未だ継続中なのである。
「そうです。エリカさんの言う通りですよ。ヒカリさん、ジュン君もあと少しだから頑

張ろう。これ、さっきチョコとかしたやつだけど糖分補給になるし元気づけてよ」
　ゴールドはリュックサックからチョコレートを溶かした飲み物を取り出し、二人に手渡した。
「え、いや俺は大丈夫ですよ。この通り体だけは」
「いや君もかなり疲れてるよ。かなり気を張ってるけど僕にはバレバレだよ」
　ゴールドはにこやかに笑いながらもう一度手渡す。
　ジュンは今度は礼を言いながらやや恥じ入ったように飲んだ。
「ふう……ジュンくんさ……。あまりカッコづけないでよ」
　ヒカリは一口飲むとやや元気を取り戻したのかまたジュンに軽口を叩いた。
「なんだお前。俺がどれだけお前をかばったと思ってんだよ。分かったらこれからはもう少しちゃきちゃき歩けよな！」
「うん……」
　ヒカリは存外素直にうなずいたのでジュンは意外なふうな表情をしている。
「え。なんだお前随分素直じゃないか」
「へへ……。頑張ろっかジュンくん。あと……ありがと」
　最後の言葉は小さめにいうと、ヒカリは飲み物の入ったカップを持ちながら足早に前を通り過ぎていった。

「な……なんだヒカリやればできるじゃないか」
レッドはややばつの悪そうに言う。
「ええ。おかげさまで」
ヒカリは先程までの尊敬の念がまじったそれとはいささか異なる声色でそう言う。
こうして五人は仕切り直して最後の山道を登っていった。
―午後1時４０分　やりのはしら―
様々な苦難を乗り越え、五人はいよいよ山頂に到達した。
最後の洞窟を切り抜けると雪は降り止んでおり、かわって荘厳な雰囲気の場所が姿を現した。
しかし荘厳であると同時に異様な雰囲気にも包まれている。最奥部では巨大な方陣が描かれており数百人の団員や祈祷師と思われる人々が術式や詠唱を行っていた。
どうやらディアルガとパルキアはまだ召喚されていないようだ。
階段をのぼると二人の女が行く道を塞いだ。恐らく服装からしてギンガ団の幹部だろう。
「よく来たわね。まあぞろぞろとご苦労さま」
「あー！　ソノオの発電所で悪さをしていた幹部ね！　やっぱり懲りてないんだ！」
ヒカリはどうやら面識があるようである。

「当然よ！　あれくらいのことで引き下がっていたらギンガ団の名折れってものだわ」
「まあ良いじゃないのマーズ。詠唱はもう最終段階……。今更何をしようとボスは止められはしないわよ」
　ハクタイシティでレッドとエリカに相対したもうひとりの幹部、ジュピターは一笑に付しながら言ってみせた。
「そうね。あたしたちにはボスから直々に頂いたこのポケモンたちがいるんだもの。全く怖くなんてないわ」
　二人の幹部は得意な表情で言う。
「ほう……大した自信だ面白い。じゃあいくかゴールド。どのくらいの実力かみてみようじゃないか」
「そうですね。それじゃあ」
　二人はモンスターボールを出そうとしたが背後から声がかかる。
「待ってください！　ここは俺たちが戦います！」
「あたしたちがこの幹部を倒しますから皆さんは奥に行って悪事を止めてきてください！」
　ヒカリとジュンが自信たっぷりに言ってみせる。
「ま、待ってよ！　彼らのポケモンは普通の強さじゃないって言ってただろう？　君等

だけで大丈夫なのか?」
　ゴールドは止めにかかって再考を促したがレッドは違った。
「分かった。行くぞゴールド」
「レッドさん！　いいんですか?」
「自分の力量も測れないほど二人も素人じゃあるまい。とにかく俺たちは根本をとめに行くのが先決だ。グズグズしてたら手遅れになるぞ!」
　そう言うとレッドは一番うしろに居たエリカにアイコンタクトをとって奥へ進んでいった。
「ああもう！　行っちゃった……」
　ゴールドがレッドの背後を見ているとエリカが近づいて言う。
「ゴールドさん。夫に続いてください」
「しかし……」
「お二人の事でしたら私に任せてください。今彼らを止められるのは夫と、ゴールドさんしかいないのですから」
　そう言うとゴールドに背を向け二人の背後へ向かっていった。
　ゴールドはやや不安を拭いきれなかったが、仕方がないとばかりにレッドに続いていった。

「あれ？　エリカさんは行かれないのですか？」
　ヒカリがただ一人になったエリカに言う。
「お気になさらず。私は手出しは致しませんから、どうぞ存分におやりになって」
　彼女はにっこりと微笑んで言う。
「分かりました……！」
　ヒカリは幹部二人に向き直る。
「ヒカリ。お前本当にいけるのか？」
「自分ばっかりが強いと思ったら大間違いだからねジュンくん。まあ見てて、この三年間の成果、たーっぷりみせてあげる。行って、ムクホーク！」
　レッドとエリカがシンオウに来たばかりの頃はムクバードだったがどうやら進化したようである。
　ジュンは思った以上に頼もしいと思ったのか先程の不安そうな顔から余裕をのぞかせた笑みになった。
「へぇ、こりゃあ楽しみだ。それじゃいっちょやるか！　行け、フローゼル！」
　こうしてジュンとヒカリの戦いがはじまった。
　エリカは背後で見守りながら二人の為にキズぐすりとお茶を用意しはじめていた。
　―やりのはしら　奥―

やりのはしらは存外長く下っ端たちも２０人ほど護衛についていたがレッドとゴールドにとっては造作もなく打ち破っていった。

方陣のすぐ前にたどりつくとアジトで弁舌をふるっていた銀河グループの社長であり、ギンガ団のボスであるアカギの後ろ姿が見えた。

「来たか」

アカギには物々しい威厳のようなものがあり、二人は身構えている。

「まあ待ちなさい。見るといい。この美しい方陣を。古の神職たちは千年前に同じことをしてみせたのだ。実に素晴らしいことだとは思わないか？」

方陣は見事な図形で描かれている。光を帯びており見るものを惚れ込ませる不思議な魅力がある。

「私は千年の昔、恨みを晴らせずに悲惨な末路をたどっていったカムイ・ヌイナの者たちが哀れでならないのだ。私は時と空間を支配するディアルガとパルキア。そして異次元空間を支配するギラティナ。この三体を用いてそのような世界を、そこまでの恨みを募らせるようなくだらぬ世界を壊し、新たなる宇宙を創建する。今はその手始めをしているのだ」

「ふざけるな！　そんなことやられたらたまらない！」

「そう喚くこともない。君たちなど概念をも支配する伝説ポケモンの前には塵に同じ。

苦しむ間もなく一片の痕跡も残さずに消えていくだけだ。何の心配もいらないだろう？」

「悪いが俺たちはそんな世界でも消えたくはないんでね。あんたのやろうとしていることは何が何でも邪魔させてもらう」

レッドがアカギに強い口調で言った。

「あくまでも私の邪魔をするつもりというわけか。良いだろう。そこまでいうのであれば相手になる他あるまい。私の為だけに作ったこの自然淘汰の厳しい競争を勝ち抜いた優秀なポケモンたちで君たちのそのくだらぬ心や精神を打ち砕いてあげよう」

アカギが振り返り、モンスターボールを構える。レッドとゴールドも同じように戦闘態勢に入った。

「おーい!!」

背後からジュンの声がする。

振り返るとヒカリとエリカも続いている。

「ゴールドさん！　レッドさん！　私達やりましたよ！　あの幹部二人を倒しちゃいました！」

ヒカリはゴールドに視線を合わせて嬉しそうに言う。

「何!?　本当か?」

レッドがエリカに尋ねる。
「ええ。それなりに苦戦はしたようですがそれでも勝ちは勝ちです。お二人共よく敢闘されたと思いますわ。モラトリアムのトレーナー止まりにしておくには勿体ない実力かもしれませんわね」
エリカもまた嬉しそうに二人を褒めていた。
「そうか……よくやったな」
レッドは帽子を目深に被って言った。
「あの幹部は相当に自信あって僕とレッドさん相手でも負けないような確信があったみたいなのに……。それは本当にすごいよ！　よく頑張ったね」
ゴールドはまるで自分のことのように二人を褒めている。
「ふっ……。当然だろう。下っ端どころか幹部連中に渡しているポケモンは不完全な連中にも釣り合うように所詮競争に負けた雑魚でしかない。モラトリアムのひよっこでもなんとかなるだろう」
後ろで見ていたアカギはうっすらと笑みを浮かべていう。
「な……なんだと!?」
ジュンはゴールドとレッドを押しのけ、鼻息を鳴らしてアカギに相対する。
「せっかくここまで来たんだ。ついでに教えてあげよう。ロケット団と同じく我々も

使うポケモンには手を入れてる……。だがロケット団とは少々勝手が違っていてな。私はかねてよりトレーナーとポケモンにはそれぞれ資質のようなものがあるのではないかと思って独自に研究を進めた。結果、トレーナーについてはサンプル不足で大したことは分からなかったもののポケモンについては確たる証をつかめた」

アカギは優秀な資質をもったポケモンの子にはその資質が受け継がれるというのを突き止めた。優秀な資質を持った個体を交配させてその資質を高めていくことがポケモンの総体的な強化になると考えたのだ。

そこで彼はシンオウ中の育て屋から彼の関連会社を通じて大量のポケモンを手に入れ資質を徹底的に調査し、優秀なものだけをギンガ団のものとして受け入れた。育て屋や保護区などから渡されたポケモンのうち9割は劣等種として黄道社に委託したが当然全てが行き先が決まるわけではなくその場合は手続きの効率化の為に適正な手続きを踏まずに殺処分していたという。毎年2，3割程度このような末路を迎えたポケモンがいたそうだ。

「そんな酷い……！　酷すぎる！」

ヒカリは悲痛な声でアカギを非難したがどこ吹く風でアカギは続ける。

「だが淘汰というのはなかなか思い通りに上手く行かないものでな……。どれもこれもロケット団の改造ポケモンにはとても及ばぬ力しか持てなかった。とてもではないが

かの組織のように国やリーグを相手に大喧嘩を仕掛けられるような戦力は揃えられなかった」

「それでこの伝説に目をつけて実行に移した……というわけですか」

エリカが冷徹な眼差しを向けつつアカギに言う。

「そのとおりだ。だがそれでも特異種というのはいるものでね。私の手持ちだけは改造ポケモンとも渡り合えるほどの力をもっているのではないかと思うほどの資質をもっている。それでレッドとゴールドという世界で今大きな注目を集めているトレーナーを下せば私の力は……」

「待てよ」

ジュンが口を開いた。

「その二人の前に俺たちが相手だ。調子こいたこと言ってんじゃね―よ」

「そう！　6つのバッジと7つのバッジを揃えたエリートトレーナーであるあたしたちをまず相手にしないとね！」

二人は自信ありげにアカギに相対する。

「おい。大丈夫なのか？　さっきの戦いだってそれなりに傷を負ったんだろ？」

レッドがエリカに尋ねる。

「一応私が回復はさせましたが……。向こうがどの程度の手練れなのか分からないこと

にはどうとも言えませんわ」
「レッドさん。ここは二人に任せて僕らは方陣に行きましょう。詠唱を止めるのは難しいかもしれませんがなにか手がかりがあるかもしれません」
ゴールドとエリカは先程の幹部戦の結果を受けてか先程よりかはどこか楽観的なところが見受けられる。
「面白い……。ひよっこ相手でも準備体操くらいにはなるだろう。よろしい。ではまずは君たちからだ！　行け、マニューラ！　クロバット！」
戦いが始まったのをよそにゴールドは一言声援を浴びせた後、レッドに従って方陣へと向かった。
エリカは前と同じように回復役として後方で待機している。
―10分後―
「嘘……なんで……」
ジュンとヒカリは全くなすすべなく一方的に倒された。どうやらアカギのホラ吹きではなかったようだ。
「ぐっ……なんだってんだよ!!　こんな……こんなでたらめな強さのポケモンがいるだなんて」
ジュンは地面を蹴って自らの無力さを責めている。

「他愛もない。所詮君たちはひよっこでしかない。本当の強さを持ったトレーナーには一も二もなく鎧袖一触で倒される他ないのだ」

アカギは冷厳に言い放つ。

後方で待機していたエリカはお茶の用意をやめて身構えていた。

「どうやらゆっくりとお茶の時間を楽しむ……わけにはいかないようですね」

エリカは伏している二人の前に立つ。

「エリカさん……」

ヒカリはエリカをすがるような目でみている。荒涼とした風景に泰然自若と屹立する彼女は実に頼もしく見えただろう。

「ヒカリさん……。ジュンさん。安心なさい。伝説のトレーナーの妻であり、カントー地方、タマムシシティジムリーダーである私の面目にかけて負けは致しませんから。かわいい後輩のかたきもとれずに敗れては名折れですもの」

エリカは二人に柔和な笑みをむけている。その笑みの裏には確固たる決意があった。

「エリカ女史だったな……。ジムリーダー……しかも伝説の夫婦の片割れならば相手に不足はない。その過剰なまでの自信を絶望に変えるとしよう」

アカギとエリカの戦いがはじまった。

―5分後　方陣―

方陣の周囲にはいりレッドとゴールドは色々とさぐっていた。
レッドは手がかりが見つからず難儀していると、どこかで見覚えのあるような顔が視界の端にみえたような気がした。
「トシアキさん……？　いやまさかね……」
レッドがそう独り言をいうと背後より声がした。
「レッドさん！　大変です！」
そう言ってきたのはヒカリだった。
「ヒカリ……ちゃん。どうしたんだ」
「私たち……情けないことにアカギに全く歯が立たなくて……。それでエリカさんがかたきをとるといってアカギと今戦っているんです！」
「何だと!?」
仮にもジムバッジを相当数集めているトレーナーを一方的に倒すような実力では如何にエリカがジムリーダーとはいえど勝つかどうかは不透明である。
「私とジュン君はこのまま伏してるわけにもいかないから証拠も十分あるし、邪魔な下っ端はここの周囲にはいなくなったから洞窟をおりてハンサムさんと警察を呼んで来ます！　時間はかかるかもしれませんけど……どうかそれまでの間にギンガ団を止めてください！」

ヒカリは深々と頭を下げた。
レッドは礼を言うのも忘れてすぐにアカギのいる場所に走っていった。
ヒカリはレッドの背中を見届けて洞窟へ入っていったであろうジュンを追う。
―4分後　やりのはしら　奥―
「エリカ!!」
「貴方……！」
どうやら戦いは五分五分で推移しているようだ。ゴールドは既についておりエリカを後方支援していた。
「エリカ。悪かったな。こんな繋ぎをさせちまって」
「い……いえいえ。妻として当然のことをしたまでです」
「そうか。ありがとな。よし、ゴールド！　後方支援はいい。アカギは俺ら二人で倒すんだ！」
ゴールドはその言葉を聞いてうなずいた。
「小賢しい。今更そんなことをして何になるというのだ。まあいい、相手に……」
「アカギ様」
アカギが言っている途中で祈祷師の長と思われる人物がアカギに話しかけた。白い頭巾を被っていて顔はうかがえない。

「なんだ」
「詠唱の第一段階が終了しました。間もなく、ディアルガとパルキアが降臨すると思われます」
「そうか……！　うまくいったか。やはりお前を抱えて正解だったな。礼を言うぞ、トシアキ」
　レッドとエリカは最後に告げられた名前に二人は驚きを隠せなかった。
「ト……トシアキさん？　どうしてこのようなところに」
　エリカがそう言うと、トシアキは暫し黙った後、三人の方に向き直って頭巾を取った。
「申し遅れましたな。あっし……いやそれがしの真名は平将門の臣、藤屋常陸介明武が嫡男、藤屋小太郎歳明。以後お見知りおきを」
「な……なんですって……」
　エリカはあまりのことに呆気にとられている。
「そういうことだ。トシアキはな。カムイ・ヌイナで飛ばされた三百人あまりの祈祷師やその家族の一人。それも祈祷の責任者の一人という重要な地位にいた男だ。千年後のシンオウに飛ばされ困っていた所を私が面倒みてやったのだ。祈祷の総指揮や法具を集めるという役目と引き換えにな」
「それがしは……主を藤原秀郷の追討で失い、父もそれに追うかのように討ち死にした。

執拗に迫りくる朝廷の追手をかいくぐってやっとシンオウについたらあまりの寒さに生き残った親類や家族も耐えきれず十二にして一人ぼっちになった！　それもこれもお前たち内地の人間がここまで追い詰めたせいだ！」

　トシアキは三人に向かってやり場のない怒りをぶつけている。

「一人ぼっちになったトシアキをくだんのカンナギの集落に引き取られてな。そこで恨みつらみを全て祈祷の力にかえて相当な地位にまで上り詰めたんだそうだ。それでやっと内地の人間に逆襲ができると思ったら例の事件ってわけだ」

「そ、そのような話。信じられませ」

　言い切ろうとしたところで天空よりまばゆい光がした。

「おお……この光はまさに千年前のあの時と同じ……同じ神の光だ!!」

　トシアキは感極まった表情で方陣をみている。

　しばらくすると地についたのか鈍く地面が響いた。

　二匹のポケモンの咆哮の後、その体を衆目に晒した。どうやら本当に、ディアルガとパルキアが現世に姿を現したようだ。

「エリカ女史よ……これを見ても信じられぬとでも言う気か？」

「そ……そんな……」

　彼女は立ち尽くす他なかった。

「さて、それがしは鎖を用いて第二段階の詠唱を行います。御免！」
そう言ってトシアキは素早く持ち場へと戻った。
「ま、待て！　そうはさせ」
「待つのはお前だ。レッド。これはな。トシアキにとってはまさに千載一遇なのだよ。千年越しの内地の人間へ対する復讐。このために奴は何年ものあいだカンナギの学芸員に身をやつし、法具や祈祷の情報を集めたのだ。その気持ちがたかが十数年の時しか生きていないお前にわかるとでもいうのか？」
「だがどうせ……あんたはポケモンのくだりからして自分自身のためにしか新たなる宇宙とやらに住まわせる気はないんだろう？　その口でよくそんなことが言えたもんだな」
レッドはアカギをなじる。
「ふっ……。よく分かっているではないか。そのとおり。奴も所詮は不完全なものにすぎない。だが、あれでも何年も宿願達成のために協力してきた同胞だ。一時の夢くらい見させてやるくらいの情けはある。たとえそれがすぐ奪われるものだとしてもな」
第二段階の詠唱がはじまった。ディアルガとパルキアはアジトでみた鎖ともう一つの別の鎖をもって完全に動きと力を封じられ、もがいている。
耳を聾する咆哮が響き、二匹は逃れようと様々な向きにのたうち回っている。その苦

しみは想像するに難くはない。
「な……何だこれは!!」
「カムイヌイナが起きた大きな原因は服従する術を知らなかったこと……。そこで我々は2つの鎖を作った。一つは動きを封じる物理的な鎖。もう一つは力を封じる精神的な鎖。前者は私や銀河グループの科学力をもって作れたが後者だけはあの二匹のバランサーであるユクシー・エムリット・アグノムの三匹に頼る他なかった」
「だ……だからあの爆発を」
「そうだ。そしてその2つであの二匹をおさえている間に長年祈祷師の間で研究され伝承されてきた服従詠唱を一定時間行えば完全に服従する」
「そんなこと……！　誰がさせるもんか！」
轟音に突っ伏していたゴールドがなんとか起き上がって止めようとする。
「どうでも邪魔をしたいらしいな。せめて私を倒してからそのような事を言ったらどうだ」
アカギが二人の前に立ちふさがる。
「望むところ……。いくぞゴールド！」
「はい。レッドさん！」
――

アカギのポケモンは確かに相当強く二人でもそれなりに骨が折れたがレッドは2体、ゴールドも2体失って辛勝した。

「ぐっ……！　だれがこんなことを認めるか!!　ようやく、ようやくここまでたどり着いたのだ！　こんなところで水泡に帰してなるものか！」

アカギは負けを認めず当たり散らしている。

戦いに時間がかかりすぎたせいか。ディアルガとパルキアは先程までと比べかなり落ち着いている。抵抗はするもかなり弱々しい。

服従詠唱も最終段階に入りつつあったようだ。

「どうだ！　よくみろ。勝負の結果など知ったことではない！　ディアルガとパルキアが私に従えばお前たちなど塵にしてくれる！　さあ。おいで、私のところへ！　その偉大なる力を私のために！」

レッドとゴールドが呆れながらも緊迫している様子でうかがっていると突如上空に閃光がした。

「ぐわっ!!　なんだ、なんだこの光は！　聞いてないぞ！」

アカギだけでなくその場に居た全員が地に伏せざるをえないほどの光だった。

数十秒ほどすると光は消え、全員が立ち上がる。

するとどうしたことだろうか。ディアルガとパルキアは最初から居なかったかのよ

うに消滅していた。
「そ……そんな馬鹿な!!」
アカギが第一声をあげた。
それと同時にアカギのはるか後方にいたジュピターとマーズが変事を見て下っ端を引き連れて駆けつけた。
「何？　何なの今の光……」
ジュピターがそう言った後、マーズが素っ頓狂な声をあげた。
「あーっ！　さっきまでいたはずのあの二匹がいないじゃないの！」
後方に居ても咆哮は聞こえたのだろう。二匹がいたことはしれていたようだ。
「ボス。大丈夫ですか？」
ジュピターが茫然自失となっているアカギの隣に座った。
「そんな……ありえない……あの……時と……空間を支配する神が……消えるなんて……馬鹿な……」
アカギはあまりのことに我を失い、うわ言ばかりを喋っている。
「ボスー!!　ちょっとオッサン！　どーいうことよこれ！　説明しなさいよ！」
マーズが眼下にいるトシアキにかなりの剣幕で責め立てる。
「そ、それがしにも一体どういうことなのか一体全体」

トシアキにも完全に予定外のことで狼狽している。
「認めたくないけど……。どうやら計画はすべて御破算のようね。お前たち！　撤収するわよ飛行ポケモンを用意なさい！」
ジュピターがアカギのかわりとばかりに指揮をとる。下っ端たちはやや動揺しながらも撤退の準備を慌ただしくはじめている。
「おい！　ふざけるなよ。ボスは俺らに負けたんだ大人しく従え！」
「坊や。そんなのはこっちの知ったことじゃないのよ。覚えてなさい。次は必ず……」
ジュピターが言いかけたところで洞窟から多数の警官隊が突入した。
ジュンとヒカリの通報が間に合ったようである。
「我々は国際警察だ！　ギンガ団！　君たちは完全に包囲されている！　無駄な抵抗はやめなさい！」
ハンサムがメガホンで投降を呼びかけている。空には多数の警察ヘリが飛んでおり逃亡はほぼ不可能であった。
「くっ……ここまでのようね」
ジュピターは膝を折って観念した顔で天を仰いだ。
マーズは認めずに当たり散らしていたがやがて確保される。
――

こうして、五人の活躍によりギンガ団はアカギをはじめ幹部も全員逮捕され、壊滅。それだけでなく銀河グループは創設者や管理職がギンガ団に深く関わっていたため致命傷を負うことになった。

シンオウ第一の大企業が引き起こした前代未聞の不祥事ということで株式をはじめとした証券取引は大波乱がおこり、後世からはギャラクシー・ショックなどと言われることになるほどの株安や円高などが起こるがそれはまた別の話。

またトシアキの逮捕によってカムイヌイナについても全容が解明され、いち早くそれに感づいていたシロナは脚光を浴びることになった。

事件を終えてとりあえず五人は警察からの簡単な事情聴取の後、疲れ果てた体を癒やすためにカンナギタウンのそこそこな旅館に一泊した。宿泊費はエリカが自ら全額だした。

―午後11時　カンナギタウン　旅館　松の間―

部屋は2つ取り、1つはレッドとエリカ。もう1つはゴールド、ジュン、ヒカリがいる。

松の間にはレッドとエリカが泊まる。

「ふう。なんだかんだ一件落着だな」

レッドは仲居の用意した布団に寝っ転がって言った。

「左様ですわね。なんとかリーグが動き出す前に片がついてホッとしました」
シロナにはあの後レッドから連絡を入れ、お褒めの言葉と共に通達の解除をしたと言われた。
「そうだなー。ま、大事になる前にすんでよかったよかった」
「別の意味でこれから大事になりそうではありますけどね……」
エリカはつけていたテレビのニュースをみながらぽつりと言う。
はやくも事の次第が銀河グループ本社に伝わり翌日夜に副社長が会見をするなどと大々的に報じられている。やはりシンオウ内ではかなり大きな存在感をもった企業であることをエリカは今更ながら痛感していた。
「ん？　なんか言ったか？」
「いえ。こちらのことです」
「そうか……」
レッドは出していたピカチュウとあっち向いてホイをして遊んでいた。
「貴方？」
「何だ？」
「ヒカリさんとジュンさんの事どう思います？」
エリカは何の気もなく尋ねている。

「そうだな……。ま、着実に修行していけば結構なトレーナーになんじゃねえかね。ただヒカリちゃんの方はやや打たれ弱いところあるからそこはなんとかしないとダメだと思うがな」
「そうですか……クスッ」
「なんだ？　おかしいか？」
「いえ……やはりお昼にヒカリさんやジュンさんに対して冷たく当たっていたのは本当はお二人のこと心配されてのことなんだと思いましてね」
「えっ？」
　レッドは上体を起こす。ピカチュウはせっかく勝ったのに指の向きを見てもらえずややしょんぼりしてる。
「あのお二人の事をそのくらいには気に留めているからこそこれ以上の登山は危ないかもしれないと思って敢えて厳しめに仰せになったのでしょう？　気を立たせて帰るならそれもいいと思って」
「え……あ……」
　レッドは返答に窮していた。
「あら？　もしや違うのですか？」
「いや……うん」

レッドは暫し考えた後
「そうだよ」
と返した。
「左様ですか。良かったです。貴方がジュンさんが言うような思いやりの欠けたトレーナーではないことがわかって……。如何にポケモンが強くてもトレーナーとの関わりを忘れてはいけませんもの」
エリカは安堵した笑みをレッドに向ける。
レッドは少しだけ心が痛んだ。
「しかし貴方。やはり言い方というものがあると思いますわ。あのような仰せではそのうち誰も貴方のことを心から信じてはくれなくなりますわ。これからはもう少し気をつけてくださいましね」
彼女は優しい口調でレッドに語りかけるように言った。
「お……おう。そうだな。これからは気をつけるよ」
そう言うとピカチュウが再度あっち向いてホイをやろうとばかりに背中に乗っかってせがんできた。レッドは応じてあげてもう一回寝転んだ。
エリカはその情景を淹れたお茶を飲みながら微笑ましく見ていた。
―11月21日　午後2時　マサゴタウン　ポケモンセンター前―

ジュンはまだまだ修行が足りないと思ったということでもう一度雪道で訓練してくるといってカンナギで別れてテンガン山の北方へ戻った。
その他の四人はナナカマドにまた呼ばれているとのことでマサゴに向かった。
「じゃあ私はこれで。みなさん本当に色々とありがとうございました！」
ヒカリはすっきりとした笑顔で深々と頭を下げた。
「いえいえ。ヒカリさんは本当に大変だったでしょうによく最後までめげずについてこられましたわね。それだけの忍耐と根気があれば第一志望のコトブキ高校にもきっと合格しますわ。頑張ってくださいましね」
「はい。エリカさんのいろいろなアドバイス本当に助かってますもん！　もうお二人の行く方向に足向けて寝られない……なんて」
ヒカリは軽く笑ってみせた。
「ヒカリさん本当にもうトレーナーやめちゃうのかい？　なかなかいいセンスしてると思うんだけどな」
ゴールドが残念そうな声で言う。
「私は最初からいい進路を歩むためにトレーナーモラトリアムを使おうと思っただけですから。それに私ポケモンを戦わせることよりも一緒に遊んだりおしゃれしたりするのが好きって気付いちゃいましたし」

「そっか……。うん。でもヒカリさんはそっちの方がいいかもね。それでこれからどうするの？」

ゴールドが更に尋ねる。

「もうとにかく勉強の絶対量がたりないってエリカさんに気付かされましたし、今夜から2月までひたすら勉強勉強……。あ～あユーウツ」

ヒカリは肩を落とす。ゴールドはハハハと苦笑いしていた。

「ヒカリさん？」

エリカはややいたずらっぽい声でヒカリに言う。

「ひぇ！　分かりました分かりました。ちゃんと身を入れて勉強しますから！　学校は勉強するところですもんね……ってあ！　もうこんな時間だ。それじゃあみなさんさよう……」

ヒカリがそう言おうとしたところで彼女の眼にそれまで黙っていて居心地悪そうにしていたレッドがいた。

彼女はうつむいて、もじもじと足をくねらせている。

「ヒカリさん？　どうされましたか」

エリカに心配そうに声をかけられる。

「あの。すみませんエリカさん。レッドさんを……少しお借りしてもいいですか？」

「はい？」
「どうしてもその……言っておきたいことが……いえ。そんな大したことじゃないんです。はい」
　彼女は慌てた素振りを見せながら言う。
「夫に一体何の用事ですか？」
　やや不穏に思ったのかエリカが尋ねる。
「……」
　彼女は押し黙ったまま、顔を赤らめている。
「どういうことかお話しできないのであれば同意いたしかねますよ？」
　そう言われると彼女は何かを決意した表情で顔を上げる。そして素早い動きでレッドのもとに駆け寄った。
「あの。少し来てください」
「えっ!?　ちょっとヒカリちゃ……」
　レッドはやや強引にヒカリに手首をとられた。
　彼はジョウトから旅立とうとしたときも同じようなことがあったと思い出す。
　―ポケモンセンター裏―
　彼女は3分ほど走ってこの場所にレッドを連れ込んだ。

「ご、ごめんなさい急に……。でも、その……レッドさんに……どうしても伝えたいことがあって」

ヒカリは走ったために息があがっており上気している。

13歳の少女といえどこうなるとやや可愛げを覚えてしまうレッドであった。

「そ……そんな。だ、ダメだよ俺にはエリカが」

ミカンの件を完全に重ねていたレッドは思わず先回りした返答をした。

ヒカリは構わず、レッドの肩に手を乗せそっと耳元でささやく。

「この冷血漢」

そうとだけ抑揚もなく冷たく言い放った。

するとヒカリはすぐにレッドから離れ、彼女はスッキリした表情でレッドの前を軽やかに去っていった。

レッドは予想を裏切る一言に呆然としながら二人のいるところへゆっくり戻っていく。

―研究所前―

研究所の前には心配そうな表情でゴールドとエリカが待っていた。

ヒカリは真っ先にエリカの元へ歩く。

「すみません。急にあんなことしてしまって」

「いえ……それより夫は？」
「直に戻ってくると思いますよ。それじゃ、皆さんお世話になりました！　さようなら！」
そう言ってヒカリはそそくさとムクホークに乗ってフタバタウンの方向へ飛んでいく。その華奢な背中は先月研究所に案内してくれた時よりも少しだけたくましく見えた気がした。
「行ってしまいましたね……」
「ええ。なんだか少しさびしいものがありますわね」
ゴールドとエリカはやや気落ちしていた。
「そ、そんじゃあ研究所いくか」
とぼとぼと戻ってきたレッドは自らの身に感じていた居心地の悪さを覆い隠すかのように研究所へ進む。
―午後2時30分　同町　ナナカマドポケモン研究所　所長室―
研究所に着くとナナカマドが待ち構えていた。
エリカは案の定二人とは別にさせられた為、彼女は研究所を見学させてもらっている。
所長室の二人の目の前には同じように軽食と飲み物。そしていかめしい面をした老

人、ナナカマド博士が座っていた。
「済まなかったな。昨日の今日で呼び出してしまって」
ナナカマドはまずその件で軽く謝った。
「いえいえ。とんでもない」
「私のもとにはまだ断片的な情報しか入ってきてないのだが……。なんでもアカギはポケモンとトレーナーについて先天的……生まれつきの資質があるのではないかと言っていたそうだな？」
「え……ええ」
レッドが答えるとナナカマドはまた難しい顔をして黙ってしまった。
言葉を選んでいるようにも見受けられた。
「そうか」
とだけいうとナナカマドは自分の前に置いていた温かいほうじ茶を一口飲んだ。
「仮に……」
やや間を空けて言ったナナカマドの言葉に二人は耳を傾ける。
「それが紛れもない事実だったとしたら……。君たちはどうするかね？」
―第二十八話　千載一遇　終―

第二十九話　天賦戦闘資質論

―1978年　7月17日　午後1時　タマムシ大学　オーキド教授研究室―

オーキドは人生最大のピンチを迎えていた。

この年のゴールデンウィークに妻のカルミアが事故により植物状態になったことで責任を厳しく追及されたのだ。

マスコミのせいで自宅にも帰れず研究室にこもりきりの日々が続いていた。

オーキドに近しい研究者はほとんど離れてしまったがただ一人だけ態度を変えなかったものがいる。

「オーキド君。最近ろくに食事も摂れていないそうではないか。どうだ？　たまには一緒に馴染みの料理屋にでもいかないかね？」

この国のポケモン研究を切り開いた大家であるニシノモリ博士の兄弟子、ナナカマドである。オーキドより五歳年上の彼は学生時代からなにかとオーキドを気にかけており彼自身にとっても数少ない心を開ける人物であった。

「ナナカマドさん。気持ちは本当にありがたいんですがどうにも食欲がわかなくて……」

「そうか……全くマスコミも勝手なものだな」
ナナカマドはおもむろにタバコに火を付ける。
「どうだお前も」
「いえ。今日はいいです……」
「全く……。あれからというものすっかり人が変わったようだな」
ナナカマドはゆっくりと吸い、吐き出した。
「それでは君の身体がとてももつまい。どうだ。家に帰りにくいというならうちにこないか？」
ナナカマドは心の底から心配そうな声色で言った。
「え……よろしいのですか？」
「うちも部屋が余っていて困っていたところだ。私は構わないが……1つ頼み事をしたいんだ」
――
―2013年　11月21日　午後2時33分　マサゴタウン　ナナカマドポケモン研究所　所長室―
ナナカマドからの唐突な、しかし重大な意味を含んだ言葉で二人は瞠目する他なかった。

「ほ……本当なんですか？　それ」
　ゴールドがようやく長い間をあけてさも驚いてる風に言う。
「他人の話はよく聞くものだ。私は仮にとつけたはずだぞ」
「仮に……そうだとするならとんでもないことじゃないですか。俺たちトレーナーは一体何のためにやってきたんだってことに」
「リーグはずっとポケモンバトルは努力すればみんな伸びると謳っているじゃないですか。そんなこと……あるわけが」
　ポケモンリーグが毎年新人トレーナーに配っているハウツー本や広報のポスターにはっている謳い文句にはトレーナーはみな平等だとか努力は必ず実るといった美辞麗句で飾られている。
　しかしナナカマドのいわんとしていることはその概念に真っ向から反するものであった。
「君たちは本当に覚えがないのかね。周りのトレーナーと比べて自分の力があまりにも強いと思ったことが……一度でもないと言えるのか？」
　ナナカマドは鈍重な声で二人に尋ねる。
　そう言われると二人は黙するほかなかった。ナナカマドに尋ねられる間もないことなのはジムバッジの数が見事に証明してくれている。

「まあ良い。本題に入るとしよう。君たち二人のいわゆる一回目……すなわち最初の８枚のバッジをとるまでのポケモンバトル、特に野生のポケモンとの戦いについて話を聞かせてもらおう。なに、記憶の限りでゆっくりと思い出してくれればそれで良い」

ナナカマドは先程よりかは表情の力を緩めて話す。

それから何時間かゴールド、続いてレッドから聴取がされた。ゴールドの場合特に聞かれたのは赤いギャラドスと闘った時からワタルと共にチョウジのロケット団のアジトを潰すまでの経緯。レッドが聞かれたのは主にバンギラスと闘ったことについてだった。

―午後８時３０分―

聴取が終ると二人ととりあえず主力にしているポケモンの様子やＤＮＡ採取が行われた。

気がつくとあたりはすっかりと日が暮れていた。

「ウム。これで終わりだ。ご苦労。もう帰って良い」

「そうですか……。こちらこそ色々とご馳走になりありがとうございました」

ゴールドは深く頭を下げた。

ナナカマドは夕食までわざわざ自腹で出前をとるほどの厚遇をしていた。余程に二人について気にかかることがあるようだ。

「明日の昼までにはだいたいの結果が出る……。スマンがもう一度だけその時に研究所に来てもらいたい」

ナナカマドは再度二人の眼をじっくりと射抜くかの如き視線で視ながら言う。

二人も目的が気になるのでそのまま承諾した。

―午後9時　マサゴタウン　ポケモンセンター　207号室―

エリカと合流した3人はとりあえずここで泊まろうということになり、ゴールドとは別の部屋で夜を明かすことにした。

「やはりポケモンの研究というのは奥が深いですわね……。研究員の方から勉強になるお話を沢山していただきましたわ」

エリカは見学の後ナナカマドの助手たちと談笑したり食事をしていたようだ。

「そうかそりゃ良かった。俺は一日中質問攻めにされてくたくただよ……。あーはやく寝たいなぁ」

「左様でしたか……。助手の方々も昨秋より博士が一人で夜遅くまで研究所に残ることが多くなって心配だとかこぼしていらっしゃいましたね。お歳もお歳ですし身体に障りがなければ良いのですが……」

ナナカマドは今年で85歳。見た目は年の割には元気そうに見えるがやはり相当な老年である。

「俺らに聞いたこととなんか関わり合ったりするのかな」
「さあ……私にはわかりかねますわね。さてとお風呂を用意しておきますわね」
エリカは風呂場へ向かう。
その後、レッドとエリカはそれぞれ入浴してポケモンの世話をしながらくつろいでいた。
―午後10時30分―
「貴方。そういえば」
レッドがピカチュウやラプラスの世話をしていると思い出したかのようにエリカが尋ねてきた。
彼は彼女に顔をむける。
「今朝、ヒカリさんになんと言われたのですか?」
「え……」
レッドは当惑する。しばし返す言葉に迷ったがしっかりとエリカの眼を視て答えた。
「この冷血漢……ってただそれだけ」
「まあ……」
彼女は目を見開く。心優しいヒカリがそんなことを言うとは信じられないとでも言いたげな表情である。

「左様でございましたか……。全くヒカリさんときましたら、どこでそのような言葉を覚えたのでしょう」
「いやそこじゃないだろ」
レッドは冷静に突っ込んだがエリカは特に気を留める様子もなく続ける。
「確かにもっと本を読むようにお勧めした記憶はありますけど……効きすぎましたかね」
どうやらエリカは話を戻す気がないようである。
「はあ……。そうかい。疲れたし寝るわおやすみ」
そう言ってレッドはベッドに寝っ転がった。
「おやすみなさいませ」
彼女の言葉が聞こえたか聞こえなかったかくらいの早いタイミングで彼は寝付き、寝息を立て始めた。相当に疲れたのだろう。
「……」
彼女はレッドが寝たのを見計らうとラプラスとピカチュウをモンスターボールに戻し、バッグから編みかけの毛糸をとりだし、机においた。8割方完成しているがここ最近は進みが遅い。
彼女は続いてノートを出してボールペンでさらさらと熟語をつづった。

愛情、尊敬、思慕、情愛、不変、謙遜などといった言葉が書かれている。その下には花と編み物の図案が描かれており、おそらく刺繍する花にまつわる花言葉を考えていた。

彼女はしばらくノートを見ていると尊敬の文字にあたりをつけたのかその言葉に該当する花を次々と書き出していく。またしばらくその文字を眺めたかと思うと

「これ……この花こそ良いですわね」

彼女は嬉しそうに納得したかと思うと電子辞書を取り出し、その花の写真を元に本格的な図案を描き始めた。

30分すると図案を描き終えて彼女は最終工程へととりかかるのであった。

――

―1980年　1月16日　午後5時　マサゴタウン　ナナカマド別荘―

ナナカマドはオーキドを匿うかわりに自らの長年取り組んでいる研究の手伝いをすることを要請した。

オーキドは休職した後、ポケモンの遺伝子情報やトレーナーのデータ収集と分析を主務としてナナカマドの研究補助の総指揮をとった。オーキドが特に領分とする分野だった為ナナカマドも最初の一年程度は心から助かっていた。

しかし時間の経過と共にオーキドは精神に異常をきたすようになり奇行が目立つよ

うになっていった。
「先生。ここ最近のオーキド先生の様子どう考えてもおかしいですよ」
同じくナナカマドの研究を手伝っていた若い研究員が憔悴した顔で言う。
「前も言っただろう。あいつは深刻な事情があるんだ多少のことは大目に見てやれ」
「私だってあの事件というか事故については知ってますよ？　しかしですね……」
元来気の長い方だったオーキドは冬に入ってから怒りっぽくなり、また突然独り言を言い続けるなどうつ病に見られるような症状が目に見えてでていた。
その上、サンプルにしていたポケモンに殴る蹴るの暴行を加えたり、部下の研究員へのあたりがつよくなっていたりと他のものたちの我慢も限界を迎えつつあった。
「わかった。今夜私から話をしておこう」
苦情を言ってきた研究員の様子やまた自身も何度かそれを目にしているため話をつける決意を彼は固めた。
―午後１０時　同所　オーキド寝室―
ナナカマドはこの日の夜に残務を終えたオーキドの寝室を訪ねた。
「オーキド君。はっきり言おう。あまり評判がよくないぞ」
ナナカマドは挨拶もそこそこに前置きをせず単刀直入に言った。
「そうでしょうな」

オーキドは存外落ち着いてる様子で返す。
「君の事情は最大限分かってこちらも匿い続けたつもりだが……。こっちにも我慢の限度というものがある。改めないのであればそれなりの処置をしなければならない」
「処置ですと？」
「そうだ。私のこの研究も君のおかげで大分進み、学会発表への道筋もつけられた。だが言い方を変えればそれは……」
ナナカマドは言いよどんで下を見る。
「用済み……だと？」
ナナカマドはやや肩を震わせたと思うとそのまま返答をしない。
「そうか……貴方まで私を……」
「いや。決してそういうことでは」
ナナカマドは慌てて言い繕おうとするもオーキドが先に言う。
「分かりました。明日にでも出ていきますよ。大分ほとぼりも冷めましたからね」
オーキドは不気味なほどあっさりと退去することを口にした。
その翌朝、オーキドは礼も言わずに雪深い別荘を後にした。

――

―11月22日　午後1時　ナナカマドポケモン研究所　所長室―

翌日、三人は昼までそれぞれ時間をつぶしやがてナナカマドから呼び出しがかかったので研究所へ向かった。エリカはまたも研究員と話すようだ。
「それで博士。結果が出たんですか？」
ゴールドがナナカマドに尋ねる。
あいも変わらず気難しそうな顔をしているが、今日はよりその度合いを増しているようにみえる。
「うむ……」
ナナカマドはそういったきり黙してしまった。
「博士……」
「もしかして研究していたことに関係が」
レッドがそういうとナナカマドは二人を見据える。
「やはり。二人には話しておくべきだな」
レッドとゴールドは前かがみになってナナカマドの次の言葉に注目した。
「私はこれまで長年ポケモントレーナーにまつわる問題を追い続けていた。ジムリーダーや四天王……チャンピオンにまで上り詰められるものとそうでないものの差……それがどこにあるのか」
ナナカマドが神妙な面持ちで話し始めたことは全てが常識から外れたものであった。

「とどのつまり、ポケモンバトルは数多のプロスポーツなどと同じく才能が多くをしめるものなのではないかということ……。私はこれを天賦戦闘資質論。略して天戦論と名付けた」

「そ……そんな」

レッド、ゴールド共に驚嘆を隠せなかった。

「勿論トレーナーの努力を否定するわけではない……。他の才能とおなじくこれもトレーナーの不断の努力がなければ開花させることも維持することもかなわない」

ナナカマドは息をついて続ける。

「しかし、その結実の度合いは人によって大きく異なる。〝資質〟がなければどれほど懸命に育てようと訓練しようと無駄に終わってしまうのだ」

「と、とんでもないことですよそれ。じゃあいままでポケモンリーグがいってきたことって」

「嘘……とまではいわないが限りなく欺瞞に近い。私は今回君たち二人の話とポケモンのデータを得て今度こそ確信した。私のこれまで追究してきたことは誤りなどではないとな」

ナナカマドは二人の前に様々な分析結果が書かれた紙を出した。

「私が三十年前に調査した時のジムリーダーやチャンピオンたちのＤＮＡに共通して現

れている形質とことごとく君たちは同種のものをもっている。それだけではない。おそらく君たちのもっているそれは相当に強力な形質でポケモンのレベルアップに必要な経験値を他のトレーナーに比べて大幅に減らすことができる」

「ということは……」

「君たちは比較的の範囲ではあるが他のトレーナーよりも早くポケモンを強くできたということだ」

ゴールドとレッドはしばらく言葉を失った。

2分ほどしてレッドが言う。

「ど、どうしてそんなことが」

「去年。ロケット団が行った強制進化電波が絡んでいる。君たちはその電波を強く受けたポケモンと闘っている。あの電波はポケモンに一時的に大量の経験値を与えて強制的に進化させている。そしてそれを倒した時にその遺伝子情報がポケモンとトレーナー自身に与えられ、書き換えられたのだ。ゴールド君は赤いギャラドスを、レッド君はシロガネ山のバンギラスを倒した時にそれが行われたと見るべきだろう」

ナナカマドは滔々と自説を話す。

「じゃあ僕がカントーの全力のジムリーダーに相対したとき勝てたのも」

「何度も言うが君の努力を否定しては居ない。そもそもこれは十二分な素質がなければ

分からぬもの。その上でいうのであれば、決して先に言ったことの影響は無視できるものではないだろう」

「そうですか……」

ゴールドは下を見ている。

「博士」

レッドがナナカマドに尋ねる。

「なんだ」

「どうしてそんな大事なことをいままで黙っていたんです？　これは今までの常識を根底から覆す大変な事ですよ？」

ナナカマドはしばらく間を空けて答えた。

「今から丁度三十年前。私はこのことを公表しようと試みはした……。だができなかったのだ」

ナナカマドはそのままの重い口調でその事を話し始める。

――

――１９８３年　１０月１７日　午後８時２０分　タマムシ大学　ナナカマド研究室

「ナナカマドさん……本気でこれを世間に公表するつもりですか？」

白髪交じりの中年の研究者が悩ましげな表情でナナカマドに言っていた。

「本気だ。オーキド君。ポケモンバトルは才能の世界だということを今のうちに知らしめねばしなくても良い寄り道をする若者が多く出てしまう。やるのならばまだモラトリアムができて日が浅い今しかない」

ナナカマドは３０年以上かけてジムリーダーやチャンピオンなどになれるもの、なれないものの差について生物学、遺伝学的な見地から様々な観点を用いて徹底的に研究した。

そして遂に多数の学術的証拠をもってそれが立証できる段階までこぎつけていたのだ。

「オーキド君。君には感謝している。ここ最近ポケモン図鑑の開発やらで名声を高めて研究界の中枢に躍り出ようとしてるところ水を差すかもしれないがね。これだけは黙っているわけにはいかない」

オーキドは８０年にナナカマドと決別した翌年には大学に戻り、８３年４月にはポケモン図鑑の初版を発表。

これまで明快で検索性の高い図鑑がなかった時代においてこの電子図鑑はモラトリアムでポケモンへの道に歩みだそうとしているトレーナーたちへの受けが大変良くオーキドの地位を確固たるものにした。

ナナカマドの決意は堅い。しかし、オーキドはそれをあざ笑うかのようにそれを押し止めるだけの武器を引っさげてナナカマドに会っていた。

「ナナカマドさん。悪いがそれでは私が困るのだ。全力で邪魔させてもらう」

「どういうつもりかね？」

ナナカマドは目を瞬かせてオーキドに相対する。

「既に各方面に手を打ってある。貴方が意地でもそれを発表するというのであればこちらにも手段があるということだ」

オーキドはここ数年で政財界において形成したコネクションを最大限に利用することをあくまでも辞さないつもりである。

「それは脅しのつもりか？　申し訳ないが多少のことでやめる気はない。最初から反発は覚悟の上で進めておる」

「分かってませんね。貴方がそんな研究に没頭してる間、私はより有意義なことに時を費やしたということですよ」

オーキドは一枚の紙をナナカマドにわたす。

ナナカマドは紙に書かれていた内容を見て愕然とした。

「貴様……。これだけの人間とよくも」

紙にはサインつきでオーキドへの協力は惜しまない旨を示した念書のようなものが

書かれている。
　中には名だたる政治家や高級官僚の他にこの国の大学の学長や学部長クラスの面々の名前があった。
「私がその気になれば貴方を永久に学会から追放するくらい訳ないことということですよ。貴方は昔からそうだ。研究バカで利口になることについては無頓着……。そんなことだからこんなつまらないことで足をすくわれるんですよ」
「真相から目を背けるような学会など、籍を置かぬほうがマシだ。きっと私の為そうとしていることを知れば心ある研究者ならば必ず……」
　ナナカマドはあくまで反抗の姿勢を崩さない。
「研究者？　馬鹿言っちゃいけませんよ。所詮この世の中は金だ。モラトリアムがおいしいものでなくなるというのがわかれば利に聡い彼らは何が何でも潰そうとしますよ。言ってること分かりますよね？」
　トレーナーモラトリアムによる経済効果は既に政財界の中では常識な事柄であり、施行前は３０００億円程度だったポケモン関連市場がモラトリアム施行から3年経過した現在では既に一兆円を超えている。これからもますます伸びていく産業なのは明白なので〝彼ら〟はその利潤を虎視眈々と狙っているのだ。
「分かってないのは君の方だ。まあいい。金と権力の亡者と化した君とはいくら話して

も詮無きこと。出ていきたまえ。私は忙しいのだ」

ナナカマドは静かな怒りをみせながらオーキドを研究室から追い出した。

「後悔しますよ……センパイ」

オーキドは静かに笑いながらナナカマドの研究室を去っていった。

翌日からオーキドの揺さぶりがはじまった。

オーキドは周囲の研究員の買収や脅迫からはじめ、ナナカマドにも教授の地位はおろか教職から完全に追放することまでほのめかせた。

彼は最後の最後まで反抗し続けたものの研究職以外に食い扶持がない上にこれまで築き上げたものを失うのを耐えられなかった彼は屈服し、発表を断念する。

その後ナナカマドは進化の研究に表向き題材をかえるが元々の研究は秘密裏で続けていた。

――

―２０１３年　１１月２２日　午後１時２０分　マサゴタウン　ポケモン研究所―

「そんな……オーキド博士が……そんなこと」

ゴールドは例の騒乱のときエンジュに居なかったためオーキドの所業については何も知らない。

「信じられないろうがな……。すべて事実だ」

「そうですか……」
「博士」
　レッドがナナカマドに尋ねる。
　博士は黙ってレッドに顔を向ける。
「それをどうして俺たちに……」
「君たち二人は近く世界の舞台に立って戦うことになるのであったな」
　ナナカマドは再び言葉に力をこめている。
「はい」
「これだけモラトリアムが浸透した今になって天戦論を世に披瀝したところで詮無きこと。しかし、君たち二人にはその力が努力だけでなく授かりものであるというのを自覚し、その上で世間から八百長だインチキだと言われないような素晴らしい勝負をしてもらいたいからだ！」
　ナナカマドの言葉は力強く、真に迫っている。
「勿論二人にとっては受け入れがたい事かもしれないが……。これからその舞台に立つまでの間に自分なりに模索してもらいたい。君らならばそれが出来るはずだ」
　ナナカマドの話はそれから数分続いた。
　それからくれぐれも口外しないことを釘に刺された後、所長室から出されて二人は出

口へ向かっていた。

―研究所内―

「レッドさん。どう思われますか？　博士の話」

ゴールドはレッドの顔をのぞきながら言う。

「そうだな……。俺には難しいことはわからんが……身に覚えはあるし本当だろう」

「そうですか……」

ゴールドは前に向き直す。

「お前、これからどうする？」

「僕はあの話をきいてショックだったけど……。いずれにしても僕のすることは変わりませんよ。ポケモンと向き合って力と高めていくだけです」

ゴールドは眼に力をこめて言う。決意をこめているのが見て取れる。

レッドは間を空けて

「そうだな。お前ならそうだろう」

とだけ答えた。しかしレッドの内心にはそういう前向きなものとは違ったものが増大しつつあった。

そうこう話していると出入り口につく。

ほぼ同時に休憩室からでてきたエリカたちと合流する。

「貴方。お疲れさまでした」
　エリカはレッドに少し頭を下げる。
「おう」
「博士からは一体どういうお話でしたか？」
　二人はエリカからの問いには沈黙するしかなかった。
　二十秒ほどして彼女がなにか言おうとしたところでレッドが返す。
「そうだな……」
　レッドは一言そう置いた後
「とても……とてもいい話だったよ」
　―午後2時　研究所前―
「これでお二人とも本当にお別れですね。短い間でしたが有意義な時間がすごせました」
　ゴールドはエアームドを出した横で言う。
「いえいえこちらこそ」
「そういえばレッドさん」
「なんだ」
　レッドがゴールドに身体を向ける。

「クロツグってトレーナー知ってます？」
　レッドにとっては思い出したくもない大敵である。
　彼はしばし間をおいて
「ああ……。まあな。少し前にノモセで急にバトル仕掛けられたよ」
「そうですか！　やっぱりレッドさんも同じような感じで会ったんですねぇ。いやーほんとデタラメみたいな強さで参りましたよ」
「そうか。お前でもそんなに苦戦したか」
　レッドは少々嬉しそうである。
「はい。最初はいけるかと思ったんですけどやっぱタワータイクーンは違いますよ。でも僕の戦術の欠点とか育成法の改善とか色々アドバイスしてくれてほんと助かりました！」
「え……？」
「パーティの相談とかポケモンの調子について悩んでることとか丁寧に答えてくれましたしほんと凄いですよねクロツグさんって！」
　ゴールドは悪気のない純粋な笑顔で言う。
「そ……そうかそいつはよかったな」
　レッドは自分にはしてもらってない事の数々をきいて内心唖然としていた。

「あれ……？　もしかしてレッドさんはそんなことなかったですか？」
「ま、まぁな。どうもなんか忙しそうだったし」
「そうですか……それは残念でしたね。それではそろそろノモセにいってきます！　一日もはやくレッドさんにおいつけるようがんばりますね！」
　そういってゴールドはエアームドにのって西の方向へ飛び去っていく。
「さて、やっと二人に戻れたな」
「え、ええ。ほんの数日ですのに随分懐かしく感じますわね」
　エリカはやや取り繕った風のしぐさをしたがレッドには気づかれなかった。
「次はキッサキか……。テンガン山であれだけつもってたのを考えるとあそこまでの道中も結構な雪なんだろうな」
「左様ですわね。気をつけませんとね」
　二人は北へ向かい、カンナギタウンへ降り立った。
　―午後４時３０分　カンナギタウン　市街―
　あれからの数日でまた雪が降ったのか沿道にいる人々は除雪作業をしていた。歩道車道問わず除雪機が雪をかいていくエンジン音が耳に響いている。
「たく……ほんとに１１月かよ」
「私も雪国というのはあまり経験がありませんから驚くことばかりですわね……。さぞ

かし難儀なことでしょう」

エリカは哀れみの視線を向けている。

「全くだな……さて今日も疲れたポケセンに……」

とレッドがいったところで声がする。

「おーい！」

声の主はシロナだった。向かいの道路にいた為小走りで近づいてきた。

「シロナさん！　どうもこんばんわ」

エリカが挨拶するとシロナも返礼した。

「お二人共今回はご苦労さんだったわね。あたしたちが動く前にカタをつけてくれてほんと助かってるのよ。シンオウ中のリーダーを代表してお礼を言うわね」

「いえいえ……」

「それを言いにわざわざ……？」

レッドがシロナに尋ねる。電話でも十分に礼は聞いたためそれで良いと思っていたからだ。

「ああそれだけじゃなくて、おばあちゃんに遺跡の史料とか色々貸してくれたお礼を言おうと思ってね。それでさっきまで家にいたんだけど……」

シロナがエリカに視線を集中する。エリカも自然と身が引き締まった。

「エリカさん……ちょっとお時間いいかしら？」
「はい？　別に構いませんけれど……私になにか？」
「えっとね……。あそこの遺跡について貴女と知見を共有したいことがあってね。ちょっと遅いけど遺跡をまわりながらお話したいなーなんて」
　シロナはややぎこちない様子でエリカに言う。
「まあ！　それは宜しいですわね。私もお尋ねしたいことがありますし是非……あ、しかし夫が」
「大丈夫。できるだけ早く済ますから。レッドさん。少しエリカさんを借りるわね」
　シロナのその言葉は言外にレッドがいては不都合とでも言いたげなものがあった。
「ま、俺もそんな話聞いても眠くなりそうだしな……。いいよ。ポケセンで待ってるからいってきなよ」
　そういうわけでエリカとシロナは遺跡の方向へ向かっていく。レッドは市街で一人になっていた。
　シロナの様子からしてしばらく時間がかかりそうなのでぶらぶらと散策していると意外な人物に会った。
　―市街　公園前―
「あれ……レッドさん？」

「ミカンさん！　お久しぶりです」
　少し離れた町立公園の前を通りがかるとミカンと鉢合わせした。
「いやーまさかこんなところで会うなんて……。あ、旅行？」
「そ、そうなんです。昨日まであの霧深い道路を通ってて……なかなかこたえましたけど景色が……本当に綺麗で」
「あーあのあたりの滝とか良かったなあ。懐かしいな」
　レッドがいうとミカンは隣に誰も居ないことに気づいたようだ。
「本当ですね……。あの、そういえばエリカさんは？」
「あぁちょっとヤボ用で離れてて……。遺跡の方に」
「なるほど……」
　二人は道中の話に花を咲かせ、公園の中のベンチで話し込んでいた。
　するとふとレッドが今日の話を持ち出した。
「ミカンさん……」
「どうしました？　そんなに改まって」
　ミカンは打ち解けたのかやや砕けた様子で言う。
「もし……もし俺のこのポケモントレーナーとしての力が天からの授かりもの……だったとしたらどうします？」

「だったらもなにも……レッドさんのその実力はまさに神がかってますよ！」
「違う。そういうことじゃなくて……そういう努力じゃなくて才能が大半をしめた感じの……いっちゃえばズルに近い感じのものだとしたらってこと」
　ミカンは少し考えた後に
「だ、だとしても……さ、才能は努力しなければ開花しませんから！　それに全国のあたしを含めた全力のジムリーダーをここまで破ってきたレッドさんの……その力にケチなんてつけられませんよ」
　ミカンは決然とした表情で言う。本心から言ってるのは見て取れる。
「ありがとう。……ありがとうミカンさん。詳しくはいえないけど……ちょっとふとそうだとしたらなんて思っちゃったけど、そうだとしても恥じることはないんだよな。うん」
　レッドはさらにその違ったものの感情を膨らませた。
「あ……あたしは……信じていますから。レッドさんのことを、全て」
　ミカンはベンチの座面に手を置いてしっかりとレッドのことを見据える。
「ミカン……さん」
　レッドは思わずミカンの頭に手を伸ばし、撫でた。
「ありがとう……」

それは本心からでた言葉であった。
レッドはそれ以上のことをしなかったがミカンはずっと顔を赤らめていた。
それから暫くしてミカンとは別れ、ポケモンセンターへ戻る。
―午後8時　ポケモンセンター　待合室―
エリカが戻ってきたのはレッドが戻って30分ほどした頃だった。
「おう。遅かったな」
「申し訳ありません。思ったより話が盛り上がってしまいまして……」
エリカは心底から陳謝しているようだ。
「全く、いったい何の話をしてたんだ?」
「ふふ……」
エリカはしばらくおいた後
「とても……とても良い話ですわ」
とだけ返した。意趣返しのつもりなのだろう。
二人はそのままチェックインし、入浴と夕食を済ませた後、翌日の用意をして就寝した。
―11月23日　午後1時　テンガン山　キッサキ側出入り口前―
二人は朝食を済ませるとテンガン山に向かい、キッサキ側の出入り口を目指した。

存外早く到着していよいよ２１６番道路へ出ようとした時エリカが呼び止める。
「なんだ？　どうしたんだ？」
「え……えっとですね……」
エリカは３０秒ほどもじもじした後
「貴方。目をつぶっていただけますか？」
「え、別にいいけど」
レッドは要求に従い眼をとじる。
しばらくすると温かい感触が彼の首周りにふわりとついた。結んでいるのか彼女の手の感触を感じた後彼女が声をかける。
「お……お前これ」
レッドの眼には燃えるように赤い上等な毛糸でつくられたきめ細やかなマフラーが映っていた。
「わ……私からの贈り物です。２１６番道路、２１７番道路はこの時期から非常に厳しい気候になると聞き及んでいましたから……」
「あ、ありがとう！　すごい嬉しいよ。もしかして手作りかこれ？」
しばらく間を置いた後エリカはゆっくりとうなずく。
「すごいなぁ……。流石エリカだよ。ここまで丁寧なマフラー生まれて初めてかもしれ

ない」
「それだけ気に入っていただけると本望ですわ。作った甲斐があるというものです」
エリカは柔和な笑顔をしている。実に苦労が報われたといった表情だ。
「あれ……なんだこれは？」
レッドはマフラーの裏側の端にあしらわれていた黄色い花の刺繍に気づく。
「それはラッパスイセンというお花の刺繍です。赤に黄色ですし丁度良いと思いまして……」
「へぇ……。エリカの事だしなにか意味あるんだろこれ？」
レッドはやや意地悪な笑みをしながら尋ねる。
「ラ、ラッパスイセンの花言葉は……〝尊敬〟です。私は貴方を無上の人と心得てますから」
そうとだけ言うと照れるのを隠すためかさっさと先に行ってしまった。
「あ、おい待てよエリカ！」
そういうわけでレッドは赤いマフラーを巻いて２１６番道路へと進んでいくのだった。
―同日　午後７時　２１６番道路　ロッジ―
幸いにもこの日は吹雪はなかったものの雪が深く四苦八苦しながらどうにかこの

ロッジにまでたどりついた。冷え切った身体には薪ストーブから出る暖気は実に身に沁みただろう。

　チェックインをすませ、荷物をもって部屋に向かおうとすると、エリカはロビー前の待合スペースにいる二人の男女に気づく。

「そういうわけでナギちゃんは今月も元気にしてましたよ。ご安心ください」

「うむ。すまんのう。毎度毎度こう難儀をかけさせてしまって……」

　ヤナギともうひとりはヒワマキジムの事務員をしているというメガネをかけたおばさんであった。

「じーさんは相変わらず心配性なんだから困ったもんよ。いい加減もう立派な大人なんですからそろそろ気にかけずに自分のことをしたらどーです？」

「私も分かってはいるのだがな……。しかしのうやはり手塩にかけて育てた孫娘だ。そうはなかなか……」

　二人がそう話しているあいだにエリカが話しかける。

「あの申し訳ありません……ヤナギさんと、たしかヒワマキジムの事務員の方でしたわよね？」

　エリカがそういうと二人はいささかの驚きの後に再会を歓迎する顔になった。

「おお！　……。これはまた恥ずかしいところを見られたかの」

「あら～！　エリカさん。まさかこんなところで会うなんてねぇ」
「どうしてた……」
　レッドがヤナギに尋ねる。
「ここは私が持っているスキー場のロッジでな……。この雪ならば例年よりはやく滑り始めることができそうだから様子を見に来たのだ」
　ヤナギはコーヒーに口をつけながら言う。
「それでこの人ったらナギちゃんが心配だからとあたしにこうして定期的に報告させるわけ。ほんといつまでも子どもだと思ってるんだから」
　おばさんの声色は言葉とは裏腹に嫌な気はしてないことをうかがわせた。
「さて、それじゃあおばさんはヒワマキに戻るとしますかね。じゃあねぇ～」
　そういっておばさんはロッジから出ていく。
「相変わらずだな……あの人」
　レッドは出ていったドアに目を遣りながら言う。
「だ、大丈夫なのですか？　こんな夜遅くに出てしまって」
「あれでも昔は私のジムのトレーナーだった。心配はいらんよ」
　ヤナギは心底から彼女のことを信頼しているようだ。
「そ……そうなんですか」

「さて。ここまで来たということは次はキッサキのジムかの」
　ヤナギは先程までの好々爺然とした様子からいつもどおりの威厳の満ちた顔に戻った。
「はい」
「そうか……。いよいよこの旅も終わりが見えてきたな」
「そういえば……そうですね」
　ヤナギの言う通り残り二枚のバッジを取ればあとはイッシュ地方のみである。
　彼はしばらく間をおいて二人の眼を見据える。
「話したいことが有る。後で私の部屋に来てくれ」
　それから夕食を済ませた後、二人はヤナギの寝室へ向かった。
　―午後９時３０分　同所　１０１号室―
「よく来てくれた」
　ヤナギの部屋は他の部屋より一回り広いくらいで内装は大差なかった。
　彼は出迎えると着座したまま相対するように座ることをすすめ、二人も着座した。
「それで、お話というのは？」
「少し……年寄りの昔話に付き合ってもらおうかと思っての」
　ヤナギは自らの前に置かれた煎茶を一口する。

「昔話……ですか？」

「今から遡ること６０年前……。私とカツラ……そしてオーキドが一堂に会し、エリカ女史の祖母とトレーナーとして闘った時の話だ」

オーキドの名前が出たことで二人は顔を引き締め、ヤナギの話を聞く体勢に入った。

―第二十九話　天賦戦闘資質論　終―

第三十話　時には、昔の話をしよう

―１９５４年　３月２４日　午前８時　タマムシシティ　噴水前―

春。

それは新たな芽吹きを象徴する季節。

この日も二人のトレーナーが旅立とうとしていた。

「ヤナギ！　こっちだ」

オーキド。

前日に行われた学位授与式を以てタマムシ大学生物学部携帯獣課程を首席という優秀な成績で修了。

その成果を讃えられて授与式で卒業生総代を務めただけでなくポケモンが記念に渡される。

オーキドはポケモンについての生態調査をするという名目でとりあえず３年の間大学を離れてフィールドワークなどを行うということにしていた。ポケモンリーグが成立する前は義務教育や最終学歴を修了した後に２年から３年にかけてこうして旅することが一種の流行になっていた。

当時のオーキドはその才気と快活さで相当な人気があり、忙しい課程の合間を塗っては遊びまくるというまさに充実という二文字が似合う学生生活を送っていた。

「ごめんごめん気づかなくて……。しかし本当にいいのかい？　僕なんかと合わせてジムを破ってくなんて……オーキド君はトレーナーじゃなくて研究員志望じゃ」

ヤナギ。

オーキドと同じくタマムシ大学の理学部物理課程を修了。オーキドほどではないものの優秀な成績を修めたため総長直々に賞を授与され、ポケモンも渡された。しかし前年までこの国をわかせていた好況は秋頃になると後退しヤナギは希望に沿う就職先を見つけられなかった。そこで彼は前々から仲間内で遊び程度にやっていたポケモンバトルの才能を伸ばすことを決意し正月よりトレーナーとして進むこととした。

「いいんだよ。ただポケモンを観察したり解剖したりするだけじゃ退屈だからな」

そう言いながらオーキドはコートの胸ポケットからタバコをおもむろに取り出し、火をつけた。

「そっか……。確かに君はそういう人だものね」

ヤナギはタバコをうまそうに吸うオーキドを見ながら言う。

「ふう……。ところでお前ポケモン何もらったんだよ？」

「僕？　そういえばなんだったかなぁ。昨日は色々ドタバタしてたからみてなかった」

「お前もかよ……。よしじゃあ互いに見せ合おうぜ」
　というわけでヤナギとオーキドはそれぞれモンスターボールを構える。オーキドもオーキドで代々携帯獣を研究してきた学者だったためボールの使い方程度は心得ていた。
　一斉にモンスターボールからポケモンを出すと赤い光がそれぞれの瞳を照らす。
　するとそれぞれのポケモンの姿が現れた。
「俺は……レアコイルか！　総代には特別に進化系のポケモンが渡されるって噂は本当だったんだな。やっぱすごいなぁこの光沢といい、ネジの隙のなさといい、相当にいい個体だぞこれは」
　オーキドは心の底から嬉しそうにレアコイルを眺めている。
　レアコイルの方はじっと静かにオーキドをみている。まるでこれから主人となる人間の品定めをしているかのようにみえる。
「へぇ……」
「お、そういえばヤナギのほうはどうなんだ？」
　ヤナギが黙って下を指し示す。
　するとそこには愛らしい縞模様をしたポケモンがすやすやと眠っていた。
「確か……ウリムーだったかな。僕はチョウジ出身だからたまに氷の抜け道で遊んだり

したけどよく見かけたなぁ」

ヤナギはウリムーを抱え上げながら懐かしげな声で言う。ウリムーはまだ眠っていた。

「ふっ……だが俺のレアコイルに比べれば全然だな。やっぱこれが最優秀と優秀の差ってやつかな」

そういうとオーキドは軽い調子で笑ってみせる。

「いやいや。わからないよ。僕の勘ではきっと進化すれば主力になれるだけのモノを持ってるさ」

この時代はまだ体系的な戦術研究や育成論の形成がされておらずポケモンバトルにおける各種族の強さが固まっていなかった。

「ふーん……。ま、理学部の柳王と言われたお前がいうならそうかもな」

オーキドはそう笑いながら言う。

ヤナギのポケモンバトルの強さは既にタマムシ大の中では有名であり、全国随一の秀才や天才が揃うかの大学であっても彼に勝てるものは片手に余るほどしかいなかったという。元々これで生計を立てるつもりはなく趣味でやっていた為頂点には立てなかったがそれでも相当な風格と実力があった。

「ハハハ……。さて、どうするのこれから」

オーキドが二本目のタバコを吸い終わって口から離した瞬間噴水のむこうから大声がした。
「うおおおおおおおおおおおい!!」
「おお……お前は」
「カツラ君!?」
カツラ。
オーキドやヤナギと同じ高校に通い、深い仲を築いていた。
学年きっての秀才であったオーキドと常に成績を競っており、時にはオーキドを超える事もあるほどの頭脳をもっていた。
しかし、高校3年の秋に父親が事故で他界し家業の手伝いの為に大学進学を断念。しかし二年後には家業が落ち着いてきたため母親の勧めもあって改めて進学を決意。最初からオーキドとはテーマが違うものの研究者志望だった為一般受験ではなく地方をまわってポケモンを解析しその成果を論文にまとめて教授に提出。それで大学への推薦をもらおうという腹づもりなようだ。
「やーやー!　久しぶりだ……ってあぢいいいいいい!」
なんとオーキドの吸いかけのタバコの火がカツラの手に押し付けられてしまった。
「あ!　すまんすまん。まさかこんな早く来るとはおもわなかったから……」

オーキドはすぐにタバコを離し、灰皿に投げ入れた。
「カツラ君大丈夫!?　お水かけようか!?」
「な、なあに平気よ！　これしきの事耐えられなければ赤門はくぐれぬわ！　ハーッハッハッハ!!」
カツラは本当に大した事なさそうに振る舞う。
幸い、触れていた時間が短かったためそれほどの火傷にはなっていなかった。
「全く相変わらずだなお前は……。にしてもどうしたんだ？　タマムシになにか用でもあるのか？」
「前に手紙に書いただろう！　俺はジムと地方をめぐる旅をしているんだ！　ここにもその為に来たにきまってるだろ！」
カツラは持ち前の大きな声でオーキドに言う。
「じゃあ俺たちもそうするか！」
「えっ……？　ジムにいくのかい？」
「当然！　俺だってヤナギほどじゃないがバトルは嗜んでたからな。腕試しにいくんだ！」
オーキドはかなり自信がありそうな表情で言う。
「僕は別に構わないけど……。確かジムって結構ここから歩くよね？　オーキド君その

靴今月おろしたばかりとか言ってなかった？」
　この時代は未舗装道路が多数を占めている。それだけでなく都会は通行量も多いため少し出歩けばあっという間に靴は土の色で汚れてしまう。
「なあに。靴なんて汚れていくものだよ。気にするもんじゃないって」
　オーキドは何でもない風に闊達に笑ってみせた。
「よしじゃあ決まりだな！　ジムへ行くぞ！」
　というわけで三人はタマムシジムへ向かった。
　―同日　午前８時４０分　タマムシジム前―
　ジムは中心からやや離れた場所にあり、その周りはとても綺麗に掃除されていた。
「ここがジムか……」
「戦争の前は植物園だかジムだかわからないくらい植栽に溢れていたと聞いたが……すっかり変わってしまったようだな」
　オーキドがそう呟くと
「へえオーキド君よく知ってるね」
「うちのじーさんはなんってもここの初代リーダーとは個人的な付き合いが深かったらしくてな。二代目の改革で男子禁制になってからも我が家とはそれなりの付き合いがあったそうだ」

「ふーん……あれ？　男子禁制って」
「おいまさか俺らは入れないってんじゃないだろうな!?」
カツラがオーキドをまくしたてようとする。
「おいおいまさか。挑戦者は別だろう。ま、とにかく入ろうぜ」
オーキドを先頭にして三人はジムにはいっていった。
―タマムシジム―
内部は外にも増して非常に綺麗に清掃がなされていたがこのジムの特徴である植栽の量は少なく、全体的にこじんまりとしていた。
「ふう。なんだジムって言うからもう少し手応えあるトレーナーかと思ったんだがな」
カツラはそう言いながらジムトレーナーたちをどうというほどもなく倒していった。
「カツラ君は炎属性のポケモンを多く持ってるからね……そら楽だろうね」
この時代はポケモンの種類をタイプではなく属性と呼ぶことが多く、タイプという呼称が定着するのはもう少し後の時代であった。
「などといいながらヤナギもそこまで苦戦してないじゃないか」
オーキドがそう笑いながら言う。
「いやいや……やっぱり実戦となればそれなりに苦労するよ。仲間内で遊び半分でやる

のとはわけが違うね」

そんなことを話していると奥より高貴な声色の笑い声が聞こえてきた。

「お三方……いずれにしても相当な使い手のようですわね」

彼女は身なりのきちんとした人々が集うこのジムの中でも一層際立っていた。

ひと目みただけで彼女がここのジムの長であることは感じ取れる。

「貴女は……」

「申し遅れましたわ。私はこのジムの長を務めるカルミアにございます。どうぞよしなに」

彼女は上等な和服を身にまとっていた。

清楚という言葉をそのまま体現したかのような佇まいは解語の花と言うべき美しさがあり、見るものをしばし沈黙させるだけの力があった。

「……」

三人は確かに黙っていた。男にしか興味のないはずのカツラですらも元来の騒がしさを忘れたかのごとく黙ってしまうほどである。

「あら？　どうかなさいましたか？」

「い、いえ……」

いつもは少しでもタイプな女性がいれば真っ先に聞いてるほうが恥ずかしくなるよ

うな褒め言葉を使うオーキドがこの通り言葉少なにこたえていた。それほどに彼女の美しさというのは形容しがたいのだろう。

「左様にございますか……。それでは。どなたから挑まれますか？」

そういうわけで3人はそれぞれカルミアと戦った。

流石にジムリーダーというだけあってそれなりに苦戦はしたもののやはり弱点の多い草タイプが相手なのでどうにか勝利できた。

「流石はジムをいくつも破ってきたトレーナーとタマムシ大を優秀な成績で出られた方たちといったところでしょうか……。ではここのジムを突破した証として、記念品をお渡ししましょう」

リーグ設立前はジムを破った証に何かしら渡すという慣習はあったもののそれはバッジとは限らなかった。ニビジムでは石が渡されたり、セキチクジムでは手裏剣が渡されたりそれぞれの特色があったという。

そういうわけでカルミアは三人の手にそれぞれ四角い桐の箱を渡した。

「これは……？」

「カルミアの種です。花を咲かせるまでに一年と花にしては長めの飼育期間がかかりますが、一度咲けば金平糖を思わせるような美しい花を咲かせますわ。しかし葉には毒があるのでお気をつけくださいまし」

「へぇ……でもなんでこれを僕らに」
　ヤナギはカルミアに尋ねるも途中でオーキドが遮る。
「ヤナギ……。お前にはカルミアさんの繊細な気遣いがわからないのか？」
「え？」
「カルミアの花言葉は大志を抱け。すなわち俺らに対して教訓を」
　カルミアはオーキドの言葉を聞いてクスクスと笑っている。カツラが呆れたように横から言う。
「いや単なる習わしだ!!　ここは代々リーダーの名前にまつわる種を渡しているって聞いたこと有るぞ」
「え、そうなの？」
「フフ……。ええ。左様ですわ。このジムは私の会社の宣伝も兼ねまして種をお配りしていますわ」
　カルミアは先祖代々の種苗会社を経営しているという面ももっていた。
「オーキドさん。よくご存知でしたわね。カルミアの花言葉……ところでもう一つあるのですが……」
「え？」
「フフ……。いいえ。お時間があれば調べてみてくださいまし」

その後、カルミアとはすぐに別れた。

―午前11時　タマムシシティ　市街―

「しっかしジムリーダーといっても思ったほどじゃなかったな。案外楽勝なんじゃねーの」

タマムシの市街に出てしばらくするとオーキドがそう軽口を叩く。

「甘いな！　オーキド」

「あ？」

「彼女の出したポケモンたちはあくまで手加減状態でしかない。お前たちも俺も所詮は全力とは大きく程遠く調整されたものでしかないのだ」

カツラは珍しく声を抑えて冷静な様子で言葉を紡いだ。彼自身力量を自覚しているのだろう。

「そ……そうなんだ。あんなものじゃないってことなんだね」

「そうだ。でなければ他のジムからの殴り込みや上級トレーナー同士の紛争などで物騒な昨今でとても制御などできん！　タマムシは他に比べて安定的とはいえあのジム一つで持たせているのは相当に凄いことなのだぞ」

１９５４年。終戦直後に全国各地でおこっていたジムリーダーの継承戦争はさすがに下火になったとはいえお世辞にも治安が安定しているとはいえなかった。他の街で

はジムがいくつも乱立している事情もあってひっきりなしにトレーナー同士での抗争が続いている。そんな状況であった。

　タマムシシティはそんな中カツラの言う通り比較的安定していた。これは警察が他の街に比べて強く統制している事情もあるが明治の初めからずっと鎮座し続けているタマムシジムの威光があったこともまた否定できない事実であった。例えば隣市であり首都の中心部にあたるヤマブキシティではジムが大規模なものだけで７つあり警察の統制も追いつかず毎日のように死人がでている有様である。

「そうか……。じゃあその全力のリーダーとはどうすれば戦えるんだ？」

　オーキドがカツラに尋ねる。

「俺もまだ十分に情報を得ていないがだいたい１０個も記念品もらってれば全力で戦ってくれるとの話だ！　手加減のレベルがそれでかわるのは言わずもがなだがな！」

「１０個かぁ……。カツラくんは今何個だっけ？」

「ここで５個目だ！　あれでもまだ俺の見立てでは全力の半分未満ってところだな！」

　カツラはおよそ一年かかって五個である。ヤナギは道のりの遠さを悟って何もこたえずに唇をかみしめた。

「さて……と」

　そうこうしていると噴水の前にたどりついた。

「ここでお別れだね」
ヤナギがオーキドとカツラを目の前にして言う。
「次にこの街に戻ってくる時はどうなってるかな」
「さあな。ま、少なくとも瓦礫だらけの頃よりはマシだろうよ」
オーキドは乾いた笑いをしながら言う。
「ハハ……。ところでカツラ君はどこいくの？」
「一旦グレン島に戻る」
「え？　ここからじゃ随分遠いんじゃ……」
「バッジを取る度に母ちゃんに見せに行ってんだ！　悪いかよ」
カツラは目を伏せながら言う。
「相変わらず親孝行なこった。そんじゃ」
「また会おう！」
そういって3人はそれぞれ別の方向へたびだっていった。
全ての物語がはじまりを告げるかの如く、足音は噴水から遠ざかっていった。

――

―2013年　11月23日　216番道路　ロッジ　101号室―
ヤナギは話おわると静かに息をつき、茶をすすった。

「そういう事があったのですね……」
　エリカはヤナギからの話を前かがみになりながら傾聴していた。
「うむ。それでずっと渡したいものがあっての……」
　そういいながら彼は机の横にあったカバンより手のひら大の透明なケースを彼女の前に出した。
「まあ……これはもしや」
「うむ。カルミアの種子だ。貰ってからというもの私はどうにも育てるのに自信がなくて放っておいたがエリカ女史ならば立派に育てられるであろう。持っていきなさい」
「よ、宜しいのですか？　ヤナギさんにとっては大事な思い出の品では」
　ヤナギは背後の窓をみる。外では吹雪がふいている。
「良いのだ。その種も……自らを美しく咲かせることのできる者の方がよかろう」
　そう言っているヤナギの目にはどこか寂しさをのぞかせていた。
「わかりました。ありがとうございます」
　彼女はにこやかに笑みをうかべてそのケースをとりバッグへ丁寧に入れた。
「嬉しそうだな」
「ええ。お祖母様はあまり形見の品を遺さないお方でしたから……。こうして手に入れられるのは実に喜ばしい限りですわ」

ヤナギは二人のやり取りを静かに見た後
「そうか……。悪かったの。年寄りの昔話に付き合わせてしまって」
「いえいえ。貴重なお話がきけて何よりですわ。本当にありがとうございました」
「うむ……。ならば良いの。励みなさい」
その後、ヤナギと二人は別れた。
―11月25日　午後3時　217番道路―
二人はその翌日より深い雪道を進んでいく。24日は晴天だったもののこの日は寒波が襲い、進むのにも非常に難儀していた。
「あら？　貴方、あちらを見てください」
吹き荒れる雪の中、彼女は一点を指差した。
「え？　あ……あれは」
前から見覚えのある男がこちらに向かっていた。
二人がとまっているとその姿は大きくなり、はっきりと見えるようになった。
そしてやがて当人から話しかけられる。
「エリカさん……。それに……レッド」
「ジュンさん！　お久しぶりですわね」
ジュンはエリカの挨拶にかるく応じる。

「こんなところで修行か？　ご苦労なことだな」
　レッドはジュンに対しやや偉そうな声色で言った。
「当たり前だろ……。俺は絶対……お前に勝ってやる」
　そう言ったジュンの目は据わっており、冗談を言っている風には見えなかった。
「お前が、俺をか？」
　ジュンは一度うなずく。
「今じゃちょっとできないかもしれないけど……必ず修行しまくってその俺様だけが強いんだって考えへしおってやる!!」
　ジュンはゴーグル越しからでもはっきりわかるような闘志と声できっぱりと言ってみせた。
「フッ……。まあ。せいぜいがんばるといいよ」
　レッドは意にも介さないという風にジュンの前を通り過ぎる。
　やや遅れてエリカは別れの挨拶をして後に続いた。
「貴方。ジュンさんは本気で貴方に挑むつもりですわよ？　あれほど簡単にあしらって宜しいのでしょうか……？」
「大丈夫だ。本気でそのつもりならあの程度で引き下がるわけがないだろう。それよりもはやくこの道を抜けないとな」

二人は２１７番道路の雪道を進んでいく。
そしてそれから二日して遂にキッサキにたどりついた。
―キッサキシティ　寒さと雪に閉ざされた街にして北の最果て。毎日のように雪が降り、降らない時期は5～9月のみ。とはいえシンオウ北部の町の中では指折りの人口を誇る。人は寒さと共存しながら生きておりむしろ雪を楽しんでいるようにも見える。街の奥にはレジギガスを祀るキッサキ神殿がある。
―11月27日　午後3時11分　キッサキシティ　入口付近―
「や……やっとついたか」
「長い道のりでしたわね……」
総計4日の雪道を踏破して遂に二人は7つ目のジムのある街キッサキシティに到着した。
「まぁとりあえずポケモンセンターに行こうか……」
―午後3時20分　キッサキシティ　ポケモンセンター―
中に入り、ポケモンの回復を済ませると休憩用のソファに見覚えのある人物がいた。
「あら。スモモさん！　お久しぶりです」
エリカはスモモに挨拶をした。
「エリカさん！　お久しぶりです」

スモモの向かい側にいるお下げの三つ編みの髪型をした少女が二人の方を見て、目を丸くした。
「エリカさん……!?　ということはもしかして」
「はい。このお二方はあの伝説の夫婦、レッドさんにエリカさんですよ」
少女は感嘆の息をついて言う。
「初めまして！　この町のジムリーダーのスズナっていいます。カントーの人には辛い雪道を頑張って越えて来たのだろうけど……。スズナはそれでも手加減しないであなた達と闘うからね！　よろしく」
スズナは眩しくなるような元気がにじみ出る声と所作で二人に相対した。
「よろしく……」
「スモモさんとはどういう……？」
エリカがスズナにうながす。
「この季節になるとよく近くの道路で修行しているから時間の有るときに手伝ってるの」
「そうなんです。スズナさんはこおりタイプですけど相当に実力のあるトレーナーですから色々と学ばせて頂いているんですよ」
二人の声色からしてかなり仲が良いことは見て取れる。

「さて。二人がここに来てるってことはスズナもしっかり備えとかないとね！　またねスモモちゃん！」

そういってスズナはいそいそとポケモンセンターを後にした。

「なかなか明るい御仁ですわね」

「はい！　面倒見の良い方で、話も合いますしいい友だちづきあいをさせてもらってます」

スモモの表情は明るい。父のクマオに関する一件もそれなりに心の整理がついたのだろうかとレッドはふと思っていた。

「それは宜しいですわね。あの……ところで」

エリカも気になっていたのか話を切り出す、スモモはやや顔を引き締めている。

「スモモさんのお父様についてその後は如何なる次第になりましたか？」

「父は……もう」

そう語るスモモの表情から全ての事柄は察せられた。

「そうですか……お察しいたします」

「お酒と心のダメージがかなり深刻でもはやかつてのお父さんに戻るのは難しいって……伯父さんが」

しかし暗かった表情はすぐに明るくなっていく。

「でも、今の私には頼れる友人と、ルカリオというパートナーがいますから……。何も怖くありません」
そう語るスモモの表情は実に希望に満ちていたが、どこか違うものも窺われた。
―午後3時30分　キッサキシティ　市街―
スモモとはそれから数分ほど喋って別れた。
「良かったな。スモモさん立ち直れたみたいで」
「……」
彼女は考えごとをしているのか斜め前をむいている。
「どうした？」
「え……ええ。確かに立ち直れたようですが……。依存の相手が変わっただけではないかともかすかにですが思ってしまうのですわ」
「え？」
「実父から虐待をうけていた際のスモモさんはある種の父親への依存状態に陥っており、今はその二つに依拠しているのはないかと……」
そう語るエリカの表情はやや影があった。
「エリカの考えすぎだよ。スモモさんなら大丈夫だってば」
「そう……そうですわね。さて。それよりも私達のやるべきことに向かいましょうか」

二人はジムへの歩みを更に早めた。

―午後４時４０分　キッサキシティ　ポケモンジム―

ジムトレーナーを適宜倒して二人はスズナの前にでた。

「来たね！　スズナは氷タイプを使うけどだからって闘うスタイルまで冷たくはいかないよ！　情熱を秘めつつ氷の恐ろしさというものをスズナがたっぷりみせてあげるんだから！　行って、ユキノオー！　ユキメノコ！」

――

エリカは2体失い、レッドはリザードンのまま押し切り一体も失わずに勝利した。

「すごいんだ！　わかってはいたけれど……。やっぱり伝説は本物なんだね。それを認めた証として、このバッジ受け取って！」

「ありがとうございます！」

レッドとエリカはグレイシャバッジを恭しく受け取った。

「スズナさん。スモモさんのこと……よろしくお願いいたしますわね」

エリカは心底スモモのことが心配なようである。

「スモモちゃん？　任しといてよ！　ちょっと思い込みすぎるところあるけれど……。スズナよりずっとしっかりしてるし大丈夫」

深く聞いてこないところをみるとスズナはスモモより事情を聞いているようだ。

「同じジムリーダーなのに二人が行くまでスモモちゃんがそんなに思いつめていたこと知らなかったのこれでも本当に恥ずかしいと思っているの……。だから、その分スズナがやれることはやるよ！」

スズナも自信たっぷりに言っている。どうやら心配はなさそうであった。

―午後6時　キッサキシティ　市街―

「これでバッジは七つか」

「いよいよこの地方も大詰めですわね……。より気を引き締めていかなければなりませんわ」

エリカはレッドに向き直りながら言う。

「ここが終われば次はイッシュ地方か……」

「そう考えますとこの旅もいよいよ終わりに近づいていますわね……。そろそろその後の事も考えなければなりませんわね」

エリカはニコニコと微笑みながら今後の展望を楽しそうに思い描いているようだ。

「そうだな……」

霜月の寒風は北の大地を確実により厳しき冬へといざなっていくのであった。

―第三十話　時には、昔の話をしよう　終―

第三十一話　北国との別れ

キッサキシティで７つ目のバッジを手に入れたレッドとエリカはノモセへと飛びそこからナギサシティへと向かった。

―ナギサシティ　海に面したシンオウ地方最東部の街。近年電力需要１００％ソーラー発電を実現した全国初の街である。その影響からか新進気鋭の気運に溢れ、ここに住む人々は活気に満ち溢れている。そして、ポケモンリーグに一番近い街なので手強いトレーナーも多くいる。

―１１月３０日　午前１１時　ナギサシティ―

「着いたな……ここが最後の街か」

山を切り開いたと思われるこの街は透明な回廊が多く存在している。それだけでなく高台には巨大な太陽発電の装置と思しき建物があったりと近未来の雰囲気をもうかがわせていた。

「噂には聞いておりましたがなかなか科学の息吹を感じさせる街ですわね。太陽発電のせいか気候のせいかわかりませんけれど他の街よりも大分暖かい気が致します」

実際にこの街に雪はなく、気候も一ヶ月遅れていると錯覚しそうなほどに暖かい風が

二人の頬を撫でていった。
「ほんとだな……。明日から12月とは思えないや」
「そういえばそうでしたわね。貴方。どうにか今年中にはこの国の公認バッジは全て揃えられそうですわね」
彼女は微笑みながら言う。順調に進められていることを喜ばしく思っているようだ。
「そうだな。ゴールドの奴もはやいところ追いついてほしいが……」
そうこう話しながら二人はポケモンセンターへ向かっていた。
それを少し開けて一人の少女が静かについてきている。
「……」
彼女はそれを羨ましげに視ながら浅葱色をしたワンピースの膝近くを掴んでいた。

―午前11時45分　ナギサシティ　ポケモンジム―
ポケモンジムに入った後順当に倒していくとジムリーダーのデンジのところへたどりついた。
「……。やあ。君たちが挑戦者か」
デンジは椅子からゆっくりと立ち上がり、二人に相対した。
「俺は電気タイプの使い手。ポケモンリーグへ行く為の腕試しに来たトレーナーを何度

となくしびれさせてきた。さて、お二人はどうかな……？　行け、ジバコイル、サンダース」

――

レッドとエリカそれぞれ一体を失ったが勝利した。

「大したもんだ。これが最後のバッジだ。受け取ってくれ」

デンジは、二人にビーコンバッジを手渡した。

「ありがとうございます」

二人は遂に最後のバッジを受け取った。

「いよいよポケモンリーグか。今は色々と立て込んでいるみたいだから挑むなら早く行ったほうがいいぞ。気張っていけよ」

デンジとはその後数分話してわかれた。

―午後3時25分　ナギサシティ　北部海岸―

ポケモンセンターに行き、昼食をすますと二人はそのままポケモンリーグへ向かおうとしていた。

「やっとだな……」

「ええ」

砂浜に立つ二人の目の前には海原が広がっていた。

冬を迎えつつ有るこの海はどこか鉛の如き重さを感じさせるような表情をみせている。
「街にいるときは暖かかったというのにここは些か寒うございますわね」
「まあ。このあたりはあまり人もいないし、さっきより雲も多くなってきたしな……」
そんなことを話しながら波打ち際にたどり着くとレッドはラプラスの入ったモンスターボールを取り出す。
「よし。じゃあ行くか」
そう言ってボールを構えようとすると背後よりかすかに砂を踏みしめる音がした。
先に気づいたのはエリカだった。
「あら……ミカンさん」
「しばらくですね。エリカさん」
ミカンは前にあった時とは全く違うどこか思いつめているような雰囲気で二人のところに近づく。
「本日はどうしてここに?」
「もうすぐ選挙ですし……。近くの街に滞在していたほうがいいかなと思いましたから」
「左様でございますか」

選挙までにはまだ二週間以上の時間が有り、準備をするには早すぎる。
しかしエリカはそれについては触れずに話を続けた。
「それに、この街はアサギに似ているんですよね……。灯台がありますし、目の前には広い海があります。シンオウも目新しいところが色々とあって楽しかったのですが、この街にくるととても落ち着きます」
ミカンはゆっくりと岸辺を歩きながらゆっくりと話した。
「そうですわね。私もこの街についてはなかなか進取の気風に溢れていて良いと思いますわ」
はたからみればごく普通に会話しているようにみえるが、注意深く聞いてみれば明らかに友人同士の会話という雰囲気ではない。
例えるならばモンスターボールを構えたまま機をうかがっているような腹のさぐりあいをしている空気が張り詰められていた。
それからいくつか言葉が交わされていたがやがてエリカの方が口火を切った。
「それで……。本当はどういうおつもりでここにこられたのですか」
「えっ？」
「失礼しました。私にただそのような世間話をしにこられたとはどうも思えないものでしたから……」

「いえ……」
　ミカンはしばらく砂地を見たあと、エリカに視線をしっかりとあわせて続けた。
「エリカさんの言われたとおりです。私は……あの戦争以来レッドさんのことがどうしても……頭から離れなくて」
「やはりそうでしたか」
「はい？」
　ミカンは驚きを隠せないようだ。
「ずっと見ていましたから。私達がジョウトから旅立つ日、レッドさんに何をしていたか」
「そ……そうでしたか」
　ミカンは知られていると思っていなかったせいか少しだけ狼狽したがすぐに襟を正した。
「私はレッドさんのことをどうしても諦めきれないんです」
「ほう」
　エリカは冷めた視線でミカンを見る。
「アサギで私の話を聞いていたなら覚えておいでですよね。私がレッドさんのことを好きになった経緯」

エリカは返答せずに黙ってうなずく。
「私にとってレッドさんはジムリーダーになるきっかけを与えてくれた大事な恩人です。そして憧れの人でそれ以上になるということは考えもしませんでした……。しかしあの戦争以来私はどうしてもレッドさんに対する想いが止められないのです……」
「ですから。それは承知しています。それで？」
エリカはあくまで冷静に言葉を紡いでいる。
「エリカさんにとってあたしのこの想いというのは許せないものであることは分かっています。エリカさんとは短い付き合いですけれどそういうことを嫌っていることも知っています。しかしそれでもどうしても……レッドさんが好きだという心は変わりようがないんです」
「ミカンさん。前置きは宜しいですから」
エリカは途中で言葉をとめて先をうながした。
「では言います。エリカさん。一日だけ……一日だけでいいんです。レッドさんと二人きりにさせては頂けないでしょうか……？」
「はい？」
エリカはあまりのことに目を瞬かせていた。
言った内容を何度か反芻したかと思うと大きく息をついて続ける。

「ミカンさん。ご自分で何を仰せになっているかわかっているのですか？」
「この気持ちに……本当の区切りをつけたいのです」
　ミカンは切実な様子で訴えている。傍から見ても余裕がないのがうかがえる。
「アサギで貴女はあれでおしまいだとされていませんでしたか？」
「何度も何度も自分にそう言い聞かせて……割り切ろうと思いました。しかしどうしても出来なかったんです……」
　ミカンは斜め下を向きながら言う。後ろめたさは彼女なりに強く感じているのだろうか。
「ミカンさん……」
　レッドは唖然とした表情でミカンを見ている。
「レッドさん。貴方はどうお考えですか？」
　エリカがレッドに尋ねる。
「俺は……」
「私のことをご寵愛くださっているのですよね？　ならば答えは決まって……」
　エリカはレッドに秋波を送りながら言うが途中で遮られた。
「エリカさんは黙っていてください！　レッドさん。私の最後のわがまま聞いてはくれませんか？」

ミカンはレッドの手を取って訴えかける。その心に疑いを差し挟む余地はなかった。
「ごめん……」
レッドは手を払い、ただミカンに頭を下げた。
「そんな……」
ミカンは悲しげな目をしながらその身を二歩ほど後退させた。
「勘違いさせてたのかもしれないけど……俺はミカンさんの事を良き対戦相手だとは思っても一回も女性として見たことはないんだよ……」
レッドはそう言い放った。
ミカンは失意の表情でワンピースを強く握りしめている。
「当然でしょう。いくらミカンさんの頼みとはいえこれだけは受け入れることはできません。そのくらいの分別はつけられないのですか?」
エリカは責める声色でミカンに言う。
「私はただ……心の整理をつけたかっただけなんです。レッドさんとその……恋人同士になることなんて出来ないということはわかります……。でも、それでも何かしらの区切りが欲しいんです」
「一度区切りをつけ損なったものをもう一度私たちに頼ってまでつけようとしたところで出来るとは思えません」

エリカは決然とした口調で提案をはねのけていく。
「私はではどうすれば」
「ご自分のことはご自分でお決めあそばせ」
「そうですか……」
そのエリカの言葉でミカンは吹っ切れたようにモンスターボールを取り出した。
「どうなさるおつもりですか」
エリカはあいも変わらずの冷たい視線を送る。
「聞き入れてもらえないなら私にも相応の考えがあるということですよ」
ミカンは下に向けていた視線を上にやり、エリカを射抜くかの如き強い視線を注いだ。
「考え……？」
エリカもそれを感じ取ったのかそれまで変えなかった表情から眉をかすかに動かした。
「行って、エアームド」
モンスターボールからでたエアームドは主人のただならぬ気配を察知したのかやや警戒しているかのような素振りをみせている。
二人は何をするつもりなのかどうにも読めず動静を見守る。

「エアームド。私を……」
ミカンは次の言葉を出すのに相当迷いがあるようだ。
冬も目前だというのに冷や汗が少々確認できる。
エリカが問いかけようとした素振りをみせたところでようやく彼女は言葉をつなげた。
「鋼の翼で切り刻んでちょうだい！」
「え!?」
それをきいた二人はただただ呆然とするしかなかった。
指示されたエアームドの方も当惑して目をぐるぐるとさせている。
「ミ、ミカンさん早まらないで」
「このまま引き下がったのでは私も悔しいんです。だったら……だったらせめて覚悟のほどをお二人に！」
空気は張り詰めている。
「正気とは思えませんが……どうやら本気のようですわね」
レッドは息を呑んで動静を見守っている。なにか言葉を発したところでミカンが思いとどまるとは思えなかったのもあるだろう。
しかし、ミカンはあれから動かず言葉を発しない。

目は見開き、瞳孔は収縮したままで過呼吸気味なほどに胸を上下させている。顔は上気しきっていて今にも火が出そうなほどだ。

「ミカンさん……？」

数分ほどしたであろうか、エリカが尋ねたところでミカンは膝を折って冷気をすった砂浜に膝を埋める。

「ごめん……戻って」

そう言ってミカンはエアームドをモンスターボールに戻した。

「どうされたのですか？」

エリカは心配そうな様子で駆け寄る。

「いざそういうことを言ってみると……途端に……足がすくんでしまって」

ミカンは砂を握りしめる。

「ミカンさん……。申し訳ありませんでした」

エリカはスカートが汚れるのも構わず同じく膝を詰めてミカンに頭を下げた。

「貴女がそれほど思いつめているとは露ほども知らずに……あのようなことを言ってしまい思慮が足りていませんでした」

エリカは心の底から謝しているかのように言葉を紡ぎ続ける。

「エリカさん……。いえ。私の方こそそちらの気も知らずに好き勝手なことばかりいっ

てしまいました。ですからどうか頭をあげてください」

エリカとミカンはそれから数分ほど話して様々なことに整理とつけて仲の修復に成功。ミカンは砂浜から去っていった。

「ふう。どうなることかと思ったけど……よかったな」

レッドがそんなことを言っている前で、先程までの感情はどこへやらとばかりにスカートについた砂塵を無機質な風にエリカは払っていた。

「全く……貴方もとんだ唐変木ですわね」

「え？」

「あれだけの大見得を切っておきながら半端に思いとどまって挙げ句砂地に伏せるなど……所詮はまだまだお子様ですわね。その程度の思いで人の夫に横恋慕しようなど思い上がりも甚だしいですわ」

「エ……エリカ？」

「私は違います。貴方の為ならばたとえこの身を切り刻むことはおろかどんな苦境や苦痛も厭いませんから……」

エリカは病的なまでに熱い視線をレッドに送る。その言葉に一片の嘘もないことは容易に受け取れたがその反面レッドは背筋に薄ら寒さを確かに感じていた。

―12月13日　午前9時　ポケモンリーグ―

２２３番水道とチャンピオンロードをこえてレッドとエリカは遂にシンオウリーグ本部へたどりついた。

ついた頃にはリーグ周辺の雪も深くなり、北風も冬の猛威をまざまざと見せつけている。そして巷では今年の漢字が前日に発表され『乱』の字がエンジュシティのスズのとうにおいて大きく墨書された。

年の瀬が迫り世間が慌ただしくなる中二人も大きな区切りをむかえようとしていた。

「ようやくたどり着きましたわね」

「そうだな……長かった」

シンオウリーグは西洋の城郭を模したような外観で威容を放っていた。これからこの関門へ挑むものに今一度気を引き締めさせるには十分すぎるほどである。

あたりは不気味なほど静謐を保っており、耳を澄まさずとも全ての自然の動きがわかるかのようであった。

「よし……入るぞ」

「ええ」

二人が入ろうとしたその時、背後に気配を感じた。

振り返るとそこには見覚えのある特徴的なハネた髪をしている少年が居た。

「ジュン……さん……？」

ジュンである。しかしその姿はもはやテンガン山で共にギンガ団を倒した時とはまるで様子が違っていた。

顔は引き締まり、目はギラギラと一点を見据えている。

わずか一ヶ月のあいだに彼は相当な成長を遂げたことが手にとるように悟られた。

「レッド……俺と、勝負しろ」

「えっ……」

その言葉は真に迫っている。ただ眼前にいる敵を倒すという一心がありありと伝わるようである。

「あれから一ヶ月……。俺はポケモンたちと修行を重ねてやっとここまでたどりついた」

「ここに来られているということは……もしや」

ジュンはバッジケースを取り出し、二人の前にみせた。

８枚のバッジが全て埋まっている。

「ほう……」

「まあ……。素晴らしいですわね。三年でここまで上り詰められたトレーナーは片手で余るほどしかおりませんわ。よく精進されましたね」

モラトリアム期間内でバッジ八枚をすべて集められるのは毎年４０万人程度が新た

に参入していくモラトリアムトレーナーのなかで多くても年に5人ほど、0人の年すらざらにある栄誉である。同年代のトレーナーの中では間違いなく一桁台の実力を持つ強者の証であった。

「俺はそんな言葉が聞きたくてここまで来たんじゃねえ！　レッドと本気で戦う為だ！」

「はぁ……」

レッドは間をおいて帽子のつばに手をやって答える。

「エリカ。頼んだ」

「はい？」

エリカは突然の指名に困惑している。

「四天王戦を前にしているっていうのにこんなところで大事な手持ちの精神を乱すようなことはしたくない」

「しかし、私ではジュンさんが納得されないのでは……？」

エリカはジュンに目配せする。

「そうだ！　俺はあくまでお前を倒す為にここまで来たんだぞ！　そんな勝手な言いわけが通るとでも思ってるのか！」

ジュンは目をいからせて激情をぶつける。

「俺を倒すためにきたんだろう？　じゃあ相棒であるエリカくらい余裕で倒せるくらいの力はあるってことだよな？」
「も、勿論だ！」
「じゃあそれを証明して見せるんだな」
　レッドはあくまでもジュンを突き放すように言ってみせた。
「そんな……」
　ジュンは歯がゆい思いを噛み締めているのか声に勢いがなくなった。
「貴方。ジュンさんは貴方と戦う為にここまで努力を重ねて来られたのですよ？　やはりそれではあまりにも……」
「ジムリーダー8人破ったくらいで得意になるような奴に俺の大事なポケモン戦わせて余計な事させたくないんだよ。わかるだろうお前なら」
「それはそれで一つの考えだとは思いますわ。しかし、やはりトレーナーとしてはですね」
「俺と一緒に戦い、力をつけてきたエリカでも手こずる相手なら考えてやらなくもない。ただそれだけのことだ」
　エリカはそれを聞くとふうと軽いため息をつきながら言う。
「そういう事ならば致し方ありませんわね……。ジュンさん。お手合わせ願えますか

？」

　ジュンも渋々モンスターボールを出す。これ以上話しても堂々巡りだと覚悟を決めたのだろう。

　エリカもモンスターボールを差し出すが構える前に手をさげた。

「何かあったか？」

「ただ戦うのも芸がありませんわ。ジュンさん。貴方さえ宜しければ私に勝った暁には」

　エリカはモンスターボールを戻してカバンに入っている小物入れからバッジを取り出す。

「このレインボーバッジを差し上げたいと思うのですがいかがでしょうか？」

「そりゃあ結構なことだけど……いいのか？」

　レッドがエリカに訝しげに尋ねる。レッドからすればただの小手調べの戦いにそこまで形式ばったものを持ち込むのが不思議であった。

「良いのです。どういう形であれ相手が全力で挑むとあればこちらも相応の礼を尽くすのが私の務めですから」

　エリカはバッジを小物入れに戻しながら言う。

「そうか……。まあお前らしいな」

エリカはその言葉を聞いて表情を柔らかくした。
「ジュンさんはそれで宜しいですか？」
「勿論！　これで九枚目のバッジが手に入るならやる気がでるってもんだ！」
ジュンは少しはやる気が出たのか気合溜めをしているかのようなポーズをとっている。
「ならば早速はじめましょう……といきたいところですが少々お待ち下さいね」
そういってエリカはリーグに入っていく。
１０分ほど気まずい時間が流れたが、やがて彼女は戻ってきた。
「おお……」
「やはりリーダーとして戦うのですから服装も整えませんとね」
エリカは和装に着替えていた。レッドにとっても久々にみる着物姿の彼女でありとてもそそるものがある。
「お前……いつの間に和服なんてもってきてたんだよ」
「ポケモンセンターに預けているだけですわ。いつ何時このようなことがあるか分かりませんしね」
彼女はにっこりと笑ってみせた。いつ何時も自覚は捨てないようだ。
「さて……おまたせしましたわね。ジュンさん。始めましょうか」

エリカはすっかり乗り気な様子でモンスターボールを構えた。
「お。おう！　それじゃ、行かせてもらうぜ！」
気後れしたかのような返事をしてジュンもまた構える。
こうしてジュンとエリカの戦いが始まった。
「行け、フローゼル！」
「おいでなさい、ロズレイド！」
二体共に泰然と相手を見ている。
「フローゼル！　こおりのキバだっ！」
フローゼルは氷結させた牙を容赦なくロズレイドに向ける。
「ロズレイド。日本晴れ」
フィールドには強い日差しが照りつける。そうしているうちにフローゼルの牙が襲いかかったが体を上手にずらした為大したダメージにならず、５％程度を削るのにとどまった。
「マジカルリーフ！」
「も、もう一度こおりのキバ！」
しかし、今度は牙が届くよりも早くマジカルリーフがフローゼルに直撃。レベル差や相性の影響で一撃でフローゼルは沈黙した。

「くっ……！　戻れ、フローゼル！」

ジュンは動揺しながらもまだ希望を捨てていない様子で次のポケモンの選定にかかる。

「ジュン。まだやる気なのか？」

レッドはジュンに語りかける。

「う……うるせえ！　俺はこんなもんじゃへこたれねえから！　行け、ゴウカザル！」

ゴウカザルは意気揚々とした様子でロズレイドに向かった。

しかし言葉とは裏腹に御三家の最終形態であるゴウカザルを出すということは明らかに動揺しているという証である。

「ジュンさん」

ジュンはエリカに目を向ける。

「どうせポケモンの素の力に頼っているだけだろうとでもお思いなのでしょう？」

「そ……そんなことは」

「宜しいですわ。先手は全て貴方にお譲りします。ジュンさんのお考えが正しいものなのかどうか。それではっきり致しますから」

「そんなもの必要ない！　ハンデなしにあんたに勝たなきゃ意味ねえんだよ！」

ジュンは目をいからせて言う。

「そのような強がりはこれにて優勢にたってから仰せになられたほうが宜しいですわね。さあ。お先にどうぞ」

「ちっ……。ゴウカザル！　フレアドライブだ！　一回で決めてやれ！」

ゴウカザルは炎を最大限にまといながら日本晴れの助勢も借りて、ロズレイドに突進する。

辺りはあっという間に真紅に染まり、普通のポケモンならばまず一撃で消し炭同様にされてしまいそうな勢いである。

しかし、ロズレイドはひらりと優雅に避けてみせた。

「!?」

ゴウカザル自身も何故か避けられたことが自覚できていないのかに左右をみている。

「……」

エリカは黙したまま動静を見守っている。技を出さないということは続けていいということと、ジュンは読んだようだ。

「ゴウカザル。もう一度だ！」

ゴウカザルは今一度全力でロズレイドに向かう。今度はさほどの距離がなく至近距離での応酬が繰り返されている。

ゴウカザルはなんとかロズレイドの肢体をつかもうと拳や足を素早く繰り出すが全

てを彼は計算しているかのごとく絶妙なタイミングで回避し続けていた。
本来圧倒的に有利な組み合わせであるにも関わらずこれだけの力の差が露呈しジュンは呆然とする他なかった。
「そ……そんな……」
エリカはただ静かに、しかし氷のような視線で状況の推移をみていた。
「ロズレイド。マジカルリーフ」
頃合いとみたエリカは静かに指示を下した。
ゴウカザルの渾身の拳をまたよけたかと思ったら、炎の隙をねらって足を蹴り上げ、怯んだところを最大限の黒い刃の如き葉を放った。一つ一つがゴウカザルに大きなダメージを与え、沈黙させるには十分だった。
「嘘……だろ」
柔よく攻撃をかわされつづけ、攻勢に転じた瞬間鎧袖一触に明らかに有利なポケモンにのされてしまう。
単に力の差の一言で片付けられないような圧倒的な敗北をジュンは味わい、膝を屈するほかなかった。
「どうだジュン。まだやるか?」
既に見えている勝負に飽きが見え始めた為レッドはリーグの外壁によりかかりなが

らジュンに語りかける。
　今度ばかりは精神的な打撃が大きく返答までに時間を要したが、ジュンは闘志を失っていなかった。
「まだまだ……こんなものじゃ」
　ジュンはそれでも相手方を見据えて3つ目のモンスターボールを構える。
　戦闘が始まったばかりの頃に比べればやや冷静さを持ち始めたからかその表情には隠しきれない先への不安が窺えた。

――

　勝負はその後も一方的な展開が続いた。
　六匹目にはヘラクロスを出し、エリカには本来比較的有利なタイプであることは明らかだったが生憎ロズレイドには一致虫技は等倍である。
　レッドはあいも変わらず交代ごとに煽り続けたがエリカはあれから一切ジュンには褒めることも責めることもせず淡々と戦い続けた。
　ヘラクロスはメガホーンを繰り出そうと何度も全力の突進を繰り返すがロズレイドは華麗に避け続け、全く意に介していない様子である。
　ヘラクロスが肩で息をするほど疲労しているのを見計らってロズレイドとエリカはアイコンタクトをとった。攻勢に出る証であった。

かれこれずっと同じようなパターンでジュンのもつ精鋭たちは為す術もなく倒されていったのである。

ジュンにとっては万の言葉よりもこの冷厳たる事実が重くのしかかった。

「へ……ヘラクロス！　気をつけろ！　来るぞ！」

流石にジュンも読んでいたのか攻勢に備えるよう指示を出す。

「ロズレイド。ヘドロばくだん」

ロズレイドはブーケの先からおびただしき量の毒の塊を射出し、動きの鈍ったヘラクロスに直撃させる。

当然、毒技は等倍。しかも向こうにとっては一致技の為これまでの例から考えればひとたまりもなく倒されるだろうと思われた。

やがて視界を遮った毒は消え。ヘラクロスの姿が見える。

「！」

しかし意外なことにヘラクロスはすんでのところで耐えていた。それどころか敵方に一矢報いようと翅を羽ばたかせようとしていた。

だが、ジュンは気づいていた。

彼は明らかに毒を食らっている。二本足でどうにか立っているものの屹立してるとは到底言い難く正常ではなかった。

ジュンはその姿をみて歯を食いしばり、弱いながらも言葉を発する。
そして、ヘラクロスがロズレイドにできた僅かな隙をついて玉砕にひとしき突撃を敢行しようとした時、その言葉ははっきりとフィールドに響き渡った。
「やめろ!!」
ジュンはヘラクロスの目の前に飛び出て行く手を遮った。
「もういい……もういいんだ。お前は十分やってくれた」
「おい、ジュン。お前なんのつもりだよ」
レッドはジュンに歩み寄って問いかけた。
ジュンはヘラクロスをモンスターボールに戻して言う。
「俺の負けを……認める。まだまだ力が足りないってわからせてくれたからこれ以上はいい」
言葉や表層的な所作からは冷静そうにみえたが内なる感情には悔しさがあることが窺えるような口ぶりで彼は言った。
「はぁ!?　何を言ってるんだ。ここまでやったら最後の一匹まで闘ってこそトレーナーだろう?」
「これ以上闘ったら……俺はトレーナーとして失格なんだよ!　ポケモンを深刻な命の危険に陥らせるまで戦うのはトレーナーではなく殺人と同じだって……ダディから言

われてんだよ」

　レッドはまだ何かを言おうとしたがエリカが手で制して彼女が言う。

「立派なお教えですわね……。ダディと仰せになられましたが御名をお聞かせ願いますか」

　ジュンはしばし間をあけて、二人を見据えて答える。

「クロツグ。……。バトルタワーのタワータイクーンだ」

　その名前を聞いてレッドとエリカは驚きを隠せなかった。

「そ……そうかあの人の」

　レッドは先程までの強勢はどこにいったのか帽子を目深に被り直して言った。

「ダディを知ってるのか？」

「まあ……ちょっとな」

　ジュンはそれ以上は触れずに話を続ける。

「レッドの言う通り俺はジムバッジを揃えて調子に乗ってた……。もしかしたら勝てるかもしれねえって思った」

「そ、そうだぞ！　お前には全くを以て努力が足りない！　よくあんな程度の力に俺に挑もうと思ったな」

「……」

「お前の才能や努力は所詮普通のものじゃ足りないんだよ。意味がない。分かったら……さっさといけ」
そう言ってレッドは踵を返して、ポケモンリーグの方向へ歩いてく。
ジュンは何も言い返さずに拳を握ってこらえるだけだった。
「ジュンさん……」
エリカはジュンに歩み寄る。
「貴方は確かに私には及びませんでした……。しかしあの時止めた判断は……決して間違っては居なかったと思いますわ」
そうとだけ声をかけて、ジュンの返答を待たずにレッドの後に続いていった。
―午前11時25分　同所―
勝負がついて既に30分は経過したというのにジュンは未だに立ち尽くしていた。
路面には雪などふっていないのに何点か溶けている場所がある。
ジュンはずっと泣いていたようだ。
そうしていると一人彼と似たような髪型をした緑のロングコートをした男が歩み寄った。
「久しぶりだな！　ジュン」
「ダ……ダディ!?　一体どうして」

ジュンは何年ぶりかに見かけた父の姿を見て驚きを隠せなかった。
「見ていたぞ。残念だったな九枚目のバッジ貰いそこねて」
「うっ……」
「だが、全力のジムリーダーを前にしてよくここまで一歩も引かずに戦いきった。それでこそ俺の息子だ」
クロツグはジュンの肩を叩いて健闘をたたえる。
「でも。俺結局……なにも出来なかっ」
「相手は仮にもポケモンリーグの主柱を担うジムリーダーだ。8枚を揃えたばかりのお前では手も足もでないのは当然。だから私はそれでも怖気づかずに闘ったその度胸こそ嬉しいんだよ」
「ダディ……」
「それにな。あのレッドという男……。はっきりいってお前がそこまで熱くなるほどの男じゃないぞ」
クロツグは一転して冷たさを帯びた視線をして言う。
「え?」
「確かに実力はある。チャンピオンやジムリーダーであっても敵わないと頷かせるだけのな。だが、あいつはそれに甘えきってトレーナー自身として己を磨くことをすっかり

忘れてしまっている」
　クロツグは強い声色でそう言い切った。
「ダディもしかしてレッドと闘ったことあるの？」
「ああ。一度な」
「そ、そうだったんだ」
　レッドヘクロツグについて尋ねた時の反応からして勝敗は自ずと察したようだ。
「それに比べて対戦相手となるゴールドはなかなか良い男だったぞ。実力に加えて自分の律し方を心得ている。少々の甘さというか未熟さはなきにしもあらずだが将来的な可能性はレッドの比ではない」
「ゴールドさんか……。今思い出してみると確かにあの人の方がトレーナーとして出来ていた気がする」
　ジュンはテンガン山に登った時のことを思い返しながら言う。
「ジュン。目標とするトレーナーは選んだほうがいい。あとはエリカ女史もなかなか良い。使用するタイプの都合からかレッドには及ばないように見えるが、実を言えば彼が彼女に支えられているのかもしれないな……」
「え？」
「彼女がこの旅を終える頃にはとんでもなく化けたトレーナーになるかもしれない

……。まあ、リーグの事だから私がいうことでもないがポケモンマスター計画自体どこか誤っている気がしてならないな……」

そうクロツグが独り言を言っていると横からにわかに女性の声がした。

「私も左様に思いますわ。クロツグさん」

その女性は長い金髪を風になびかせ、優雅な風に二人の前に進み出た。

――

この日はチャンピオンロードを超えて疲労している為二人は一日休息をとることにした

―同日　午後9時37分　ポケモンリーグ併設ポケモンセンター　205号室―

ゆっくりと夕食を終え、レッドが風呂に入っている最中、エリカはポケッチを取り出しある人物に連絡した。

「もしもし、ナツメさん?」

「こんばんわエリカ。今日も寒いわね……」

数分ほど他愛もない話をした後話はレッドのことにうつった。

「それでレッドとはどうなの?　順調?」

「勿論ですわ。一緒に時間を共にしていてあれほど心安くいられる方はおりませんもの」

エリカはそう言ったがナツメは微細な感情を受け取ったようだ。
「あんたねえ。私に嘘つけると思ってるの？」
「はい？　何のことでしょう？」
「自分では気づいてないのかもしれないけど……もしかしてレッドに対して何か別に思うところがあるんじゃないの？」
エリカはため息をついた後に続ける。
「やはりナツメさんに……嘘はつけないようですわね」
―12月14日　午前9時　同所　四天王の間　入り口前―
「よし、今度こそいくとするか」
「ええ。いよいよ総仕上げですからね」
そう言って二人はバッジチェックを受けて、四天王の部屋に入っていった。
―リョウの間―
「ハーイ！　ようこそポケモンリーグへ！　僕は四天王のリョウです！　よろしく」
開口一番に緑髪をしたノースリーブの男は爽やかな笑顔を見せながら、二人と握手した。
「僕が使うのは虫！　虫ポケモンはとても綺麗だし、かっこいいでしょう？」
リョウの言葉に二人はとりあえず頷いた。

「虫ポケモン使いということは……ツクシさんのことはご存知なのでしょうか？」
「勿論！　彼とは一応地方を超えた虫マニア同志だからね。ただ彼とは若干の見解の相違があってねぇ。会うのはいいけど結構言い合いになることも多いんだ」
「え、あのツクシ君が……？」
　レッドは意外そうな表情をして言う。あの争うことを根本から避けそうな彼が考えにくいことではある。
「彼ああ見えて結構頑固だからね……。虫の事、特に翅の色味とか脚や腹の部分の綺麗さや相違とかその辺の個体ごとのこだわりについては性格変わるからほんとに」
　リョウの表情からみるにどうやら本当のことのようだ。
「ま、普段はいい子だから基本的には楽しく情報交換させてもらってるよ。さて、本題に入ろうか。四天王になってからまだ数年だけど、君たちほどの実力者と戦うのは初めてだよ。けれど、僕もポケモンリーグの強者のはしくれ……。全力で僕の虫パーティーで相手させてもらいます！」
――
　レッドは二体、エリカも二体失って勝利した。
「負けてしまったか……。これだけ力と時間をかけたパーティーで負けるということはまだまだ甘いって証だね。勉強になった。さて、次に進んでよ。あと三人、僕よりも強

い人が待っていますから」
　二人は更に先に進んだ。
　―キクノの間―
「おや、これはまた可愛らしい夫婦だこと」
　鷹揚に笑ってみせたその老婆はレッドにとって見覚えがあった。
「あ……あれ？　もしかして貴女は」
「キクコさんですか!?　もう既に四天王は引退されたとお聞きしたのですが……」
　エリカは自分のリーグの情報しか耳に入ってないのか寝耳に水のようだ。
「おほほ！　嫌だねぇそれは姉さんよ。私は妹のキクノ。こんなお婆さんだけど宜しくね」
「妹……ってことはもしかして使用するタイプもゴーストだったり？」
「いいえ。私が使うのはゴーストとは無関係……というよりも打ち消されることの多いタイプといったほうがいいかしら、地面タイプのポケモンね」
　レッドはキクコ戦においては何かの苦手を感じていたからか、身構えている。
「おほほ。さて、伝説の夫婦とやらの実力、如何ほどのものかこのお婆さんが試してあげましょう」
――

レッドは2体と最後のカメックスの体力を半分以上失ったものの、エリカはやはり得意なタイプだからか一体の損失に抑えて勝利した。

「やはり大したものね……。この間姉さんが今後のトレーナーについて案じていたけれどこれなら自信をもって後を任せなさいと言えるものだわ。さて、先に進みなさい。貴方たちならどこまでもいけますよ」

―オーバの間―

次に居たのは赤いアフロヘアをした男だった。

「おーし！　よくここまで来たな。レッドとエリカ！」

「ああはいどうも」

男の熱気におされるかのように二人は挨拶した。

「ナギサのデンジから聞いたぜ。いい試合ができたってな！　それがこの三番目の四天王である俺にも火をつけられるものか！　楽しみにやらせてもらうぜ。おっと！　俺の名前はオーバ！　使用するのは燃え盛る炎タイプだ！」

――

レッドはカメックスで奮戦しつづけ損失なし。エリカはさすがに分が悪く二体を失い、最後の一匹は満身創痍であった。

「燃え尽きたぜ……。次、行きなよ……」
二人はどっかりと座り込んだオーバを尻目に先に進んだ。
―ゴヨウの間―
理知的な風貌をしたメガネをかけた男は、二人がくるのを見計らうと本を読むのをやめてゆっくりと立ち上がり、相対した。
「全力の四天王を相手によくここまで来ましたね……。私はゴヨウ。エスパータイプの使い手です。どうぞお見知りおきを」
男は淀みない動作で頭を下げ、二人もそれに応じた。
「エスパータイプということはナツメさんとかフウランさんとかと同じく超能力を使えたりするんですか?」
レッドは尋ねるが、男は軽く笑ってみせる。
「残念ながら私はそこまでエスパーとしての才には恵まれなかったのでね……。ただ、幸運にも使い手としての力は人並み以上にあったからここにいるわけです」
「そうなんですか……」
「エスパーにも色々といるのですよ。私は強いて言うなら超能力に必要な理論や数式を考えたりそれを基にどう向上に務めていくかを考える理論畑の人間のようです……。さて、私のことはいいでしょう。シンオウリーグの最後の四天王として、貴方がたの鼎

の軽重を問わせてもらいましょうか」

――

こうしてレッドは二体、エリカも二体失い勝利した。

「さて、これで貴方達は四天王全員を撃破し、他の地方同様にここにもチャンピオンが居る訳ですが……生憎今朝がたはやく、理事長選挙の準備でカントーまで行ってしまわれたのですよ」

ゴヨウは静かにそう言う。

「え、え!?」

レッドは突然の事に狼狽した。

「選挙の結果がどうあれ、少なくともあと一週間はかえって来られません。御二人がセキエイ高原まで行かれるのでしたら時間の取れる時に相手をしてくれるかもしれませんが……いかが致します?」

「……」

「どうします? 貴方?」

「ここに居ても仕方ないしな、よし!カントーに戻ろう!」

レッドは即座にそう決断した。

「左様ですか……ではそのようにチャンピオンのシロナさんに連絡しておきます」

「お願い致します」
「よし、じゃあ行くか！　エリカ！」
「ええ。参りましょうか……。カントーなんて本当に久しぶりですわね」
こうして二人はリーグを後にした。
シンオウリーグの入り口まで戻って二人はシンオウ地方を後にする。
二人は北国に別れを告げ、カントーのセキエイリーグへ、そして大波瀾の選挙戦を目することに成るのであった。
―第三十一話　北国との別れ　終―

選挙編（２０１３．１２）

第三十二話　策謀

―１２月１４日　午後４時　セキエイ高原　ポケモンリーグ―

あれから二人はリザードンにのって取り急ぎ選挙の場であるセキエイ高原のポケモンリーグ本部へ向かった。

選挙を翌日に控え普段はのどかな高原もどことなく騒がしい。

本部の前では選挙の模様を伝えるべくマスコミが押しかけており、リーグへ出入りする人物やたまたま通りがかったジムリーダーを追いかけたりと情報を求めて殺気立っているのがうかがえる。特に今回はエンジュ騒乱というリーグの真価が問われる大事件が人々の記憶に強く焼き付いているためか大きく人々の関心を買っているようだ。

リーグは正面入口以外への立ち入りを厳しく制限しており、敷地にもリーグ所属の警備員がガーディーを連れ歩きながら厳戒態勢で構えている。

エリカは二度目の選挙でこの辺りの事情を知っていたため正面入口ではなくリーグ関係者のみが知る裏口に降り立った。

―裏口―

さすがにここまではマスコミの手は入っておらず二人は静かに降り立った。
ここまで強行軍で無理をさせたリザードンをねぎらった後、レッドはモンスターボールに戻した。
「ふう……久々だな。ここも」
前に来たときとは風景を異にしながらも雰囲気からして、ここはセキエイ高原であることをレッドは感じ取っていた。
「いつ来ても身が引き締まりますわね……。総本山の気位を来る度に再確認させられます」
「そうだな……」
そうしているとふと、裏口前にある林道から一人の青年が静かに歩いてくるのを視認し、注視するとそれはワタルであった。
久々の再会を喜び合うのもそこそこに選挙の話となった。
「もう準備は整っておられるのですか？」
エリカが尋ねる。
「一応はね。僕は僕なりのやり方で、リーグを運営していくというのをしっかり伝えられるようにしたよ。シロナ君のやろうとしていることは一見正しいのかもしれないけど、やっぱり急激な変革をすべき時ではないと思ってるんだ」

ワタルは典型的な保守派であり、誠実な人柄と機敏な指揮力などで中高年層の人々から好かれている。

「左様でございますか」

「戦争が終わり、リーグとしてもいろいろとしなければならないことは山積みなのはわかる。けれどもだからこそ、慎重に動かないとトレーナーたちが混乱してしまう。そこのところを、彼女にはわかってもらいたいものなんだけれどね……」

ワタルは眉間にシワを寄せて困り顔である。かなりの難物であることがうかがえる。

「まぁ今こんなことを話しても仕方がないか。エリカ君は今回の選挙は参加するのかい？」

「私達はシロナさんとお手合わせ願いたくてここに来ただけですから」

そうか、といってワタルは少し間をあけて続ける。

「今回は定例会ではない。五年に一度の大きなイベントだ。出来れば君自身に投票してもらいたいんだけどね」

「それは困りましたわね。ナツキさんは既にこちらに来られてますでしょう？」

「そうだね。一時間前にはもうこっちに入ってる」

「左様ですか……」

彼女は口を閉ざして、ワタルの足元に目を向けた。その冷めた視線からして、ワタル

の望む答えはしないことは明白だった。
「考えておきますわ。それで、シロナさんはどちらにいるかご存知ですか？」
「彼女なら、こっちに戻ってからほぼ副理事長室に篭もりきりだよ」
それだけ聞くと、彼女は軽く頭を下げた後に、踵を返し、裏口へ入っていった。
「あ……。ワタルさん。それじゃ」
そういってレッドも続いていく。
「やれやれ……相変わらず思い通りにならない人だ」
ワタルはそういいながら、深くため息をついた。
寒風が吹きすさぶ中、彼の姿はより一層わびしく見える。
―午後４時２０分　セキエイリーグ　２階　廊下―
二人は裏口から入り、階段をあがってすぐにある受付で関係者であることを示し、中に入っていった。
「なあ。俺も入って本当に大丈夫だったのか？」
「あのゲートは客人であることを証明できれば十分ですから」
「そうか……。それにしても」
レッドは周りを小さい子どものように見渡す。
華美に装飾された壁や柱に、顔がやや反射してみえるほどに磨かれた床。そして、1

００人は余裕をもってはいれそうなほどに広い空間。
裏口とは思えないほどここは広々と、そして手間も資金もつぎこまれてることがうかがえる場所だった。
「分不相応でしょう」
エリカは舐めるように見回してるレッドに、見向きもせずに答える。
「え、いやその」
「前の理事長のダイゴさんが本部を大きく改築した際に、この廊下も変えられたのです。このようなことに使うくらいならば、もっとトレーナーの為にお金をかけてほしいところですわね」
彼女の冷めきった言葉はこの空間をより寂しくした。
「ははは……」
レッドは軽く笑うことしかできなかった。トレーナーの為も何も彼は賞金を常に多く稼いでいるため資金に困ったことはないからである。
「で、これからどこいくのさ」
「そうですわね……。色々とお会いしたい方はいますけど、まず上へ参りましょうか」
「なにかあるのか」
「来客用の個室がありますから、とりあえずはそちらに」

そういって歩きだすと、柱から男の声がした。
「お。レッドじゃないか！　久しぶり」
男はにこやかに笑いながら、二人のいる場所へ近づく。
「これはどうも。お久しぶりです」
レッドはやや遠慮がちに、少し頭を下げた。
「エンジュの一件以来だな。いやー相変わらず元気そうでよかった」
タケシは相変わらずの、人当たりのよい様子で、レッドに接している。
「あれそういえば隣にいるのは」
タケシはおもむろに隣にいる洋装の女性に目をやった。
「あ、エリカさんか！　そういえば旅をしているときは洋服でしたね。見慣れないものだからどうも」
タケシは思い出したかのように顔を上げた後、申し訳無さそうな声で言う。
「久々にそういう指摘を受けましたわね……。住み慣れた地方に帰ってきたという実感が湧いてきましたわ」
エリカはくすりと笑ってみせた。
「それはそうと、あのときは人知れずご活躍でしたわね。同じ隊に所属した身としては、心強い限りでしたわ」

「ははは。いやーエリカさんにそうまで言われるとうれしいなあ。徹夜して掘り進めたかいがあったよ」

タケシは頬を赤くして照れ笑いをしている。エリカも今回は社交辞令ではなく、本心から言っているようで、あの頃が如何に切迫していたかが垣間見える。

「タケシさんは確か初の選挙でしたわね。いかがですか？　何かわからないことなどは」

彼がジムリーダーになったのは２００９年のことなので、今回が一度目の選挙である。

「いやー分からないことだらけで……。普段はあまりリーグのことまで頭が回りませんから」

「それもやむを得ませんわね。私も含め自らのことで手一杯でしょうし」

エリカも同じリーダーだからか、あまり手厳しいことは言わない。

「そういえば、ここにくるまでの間で小耳に挟んだのですが、今回の対抗馬にあたるシロナさんのことでちょっと気になる噂が」

「どのようなことですか？」

「副理事長宛の荷物で、その……ポケモンの死体が入ったものが送りつけられたり、副理事長室の書庫の本棚を壊されたりとか色々といやがらせがあるみたいで」

「まあ……それはお気の毒に」
　彼女は右手をいささか大仰に、口の前へ遣ってみせた。
「シロナさんそんな恨み買うようなことしてたっけか」
　レッドは二人に尋ねた。
「レッドは知らないだろうけど、あの人は色々と敵を作っているという噂は聞くからね……。リーグ本部にまで乗り込むような人がいないとはいいきれないんじゃないだろうか」
「そうですわね。私達も旅の道すがらで類似の噂は耳に入りましたし。しかし、このような手に出るとは」
　彼女は顔を俯かせて言う。
「どうにも物騒ですね……」
　それから5分ほど立ち話をして、タケシとは別れた。
「どうにも心配だねシロナさん」
「荷物を置いたら、様子を見に参りましょうか。元々シロナさんには用事があることですし……」
　―午後4時40分　セキエイリーグ　7階―
　二人は荷物を4階の客室におき、そのままシロナへ会いに副理事長室に赴いた。

7階は副理事長室と理事長室が向かい合っており、その廊下の更に前、エレベーターから出てすぐのところに警備員が二人セキュリティの前に、２４時間立番をして出入管理を行っている。

流石にリーグの最上層部なだけあって2階の受付とあわせ、二重チェックという様相である。

その警備を通って二人は副理事長室の前に居た。

向かいの理事長室に比べれば簡素な作りではあったが、それでも荘重さを感じさせる樫で出来た大きな片開き扉と、やや灰がかった銀製の持ち手は、リーグのＮｏ．２が座す所の気位を十二分に示していた。

「しっかしここも凄いな……」

「貴方、リーグに着いてからずっと物珍しそうにしてますわね」

「こんな裏側に来たことないから」

「それもそうでしたわね。さて、シロナさんにお伺いしましょうか」

そういいながら、エリカはドアを何度かノックした。

すると、返答を待たずにドアはゆっくりと開かれる。

「エリカさんね。話は聞いてるわ。さ、入って入って」

奥の机にいたシロナは、薄く笑みを浮かべながら彼方へ手招きをしている。

「さ、遠慮せずにこちらへどうぞ」
シロナの秘書か、助手と思しき女性が、気さくな様子で机の前のソファへ勧めた。
二人は誘導に従って、中へ入っていく。それを認めると秘書はドアを静かに閉める。
副理事長室の中は、教室2つ分はありそうな広い空間で、内装は机の他には右側に専門書や実用書の詰まった木製の書棚が十架ほどあり、左側には秘書たちの机が5つと、業務用資料や報告書がファイリングされたスチール製の棚、給湯室やトイレなどがあった。
彼女と思しき机以外は整頓されており、どうやら今秘書として業務についてるのは彼女一人のようだ。
シロナの机の後ろにはセキエイ高原をみわたせる展望窓があり、この時間は暮れなずんだ空が映っていた。
二人はソファに着座し、秘書はお茶を入れに給湯室へ入っていく。
「ごめんなさいね。上から話しかける形になってしまって」
シロナはキーボードを叩きながら話す。その左右には大量の書類やファイルなどがあり、戦争にも似た殺伐とした雰囲気すらあった。
「いえ。お気になさらないでください。お忙しい中、押しかけてるわけですから」
「もう少しだけ待っててね。すぐそっちにいくから」

給湯室から、かぐわしい茶葉の香りが漂ってきた。選挙を翌日に控え、張り詰めていた空気が少しだけ緩んだ。

それから5分ほどして秘書がお茶を盆の上に乗せて持ってきた。

「どうぞ」

秘書はややぎこちない所作で、二人にお茶を配る。

「シロナさん、いよいよ総仕上げというところですわね」

エリカは世間話とばかりに秘書へ話しかけた。

「ええ！　それはもう三日三晩は寝ずに資料を作られていましたから」

「あら。シロナさんがここに来られたのは今日のことなのでは」

エリカはここの秘書だと思いこんでるのか、セキエイに来る前からの情報をまるで見知っているかのように話す彼女に違和感を覚えていたのだろう。

「ああいえ、私はいわば専属ですから」

彼女は少しだけ、得意げな口調である。

「その子はね、大学時代からついてきてもらってるのよ」

シロナはいつの間にか二人のソファの後ろに立っていた。仕事がようやく一段落ついたのだろう。

「せんぱ。いえあの、副理事長が大学に居た頃から色々とお世話になっていまして」

「私が三回生だったころに、例のカムイ・ヌイナについて研究しているといったら、もうそれはそれは鼻息を荒くして食いついてきてね。あたし一人じゃ回りきれない遺跡の調査とか分析をやってもらってたの」
「もう先輩ってばー。そんながっついてませんよ」
「ここで先輩と言うのはやめなさいって言ってるでしょ。全く、その不作法さは何年経ってもかわらないんだから」
　彼女は言葉とは裏腹に笑みを浮かべている。レッドも、またエリカもここまでシロナが表情を崩しているところを見たことはなかった。
「そうなのですね。しかしシンオウでシロナさんを、お見かけしたときにはそんな様子では」
「この子は秘書としてよりは研究の助手として買ってるのよ。あの頃はカントーの大学や資料館でタイムリープの史料集めと裏付けに行ってもらってたかしらね」
「なるほど」
　エリカは一度うなずいて、納得したようだ。
「カムイ・ヌイナについては一応の決着がついた今になっては、秘書としての力もつけてほしいところなんだけどね。本業はポケモンリーグの理事なんだから」
「先輩はリーグの理事長よりも、コトブキ大に戻って教授になったほうが向いてると思

いますよ？　今でもというかあの話で注目を受けてから、同大の文学部あたりから、教授の椅子用意するから来てくれーって毎日のように矢の催促なんですからね！」

彼女は言い訳めいた口調で、笑いながら言ってみせる。

「全くすぐこの調子なんだから。困ったものね」

腕を組みながらそう言うと、彼女はフッと笑った。

「さて、そろそろ本題に入ろうかしら。貴方はこの資料、明日の討論会に使うから見やすくまとめた後に人数分印刷しておいて。あとコーヒー」

シロナは秘書に、イッシュのリーグから届いたばかりの郵便と、様式についてのメモを手渡す。

秘書は間の抜けた返事をした後に、そそくさと自らのデスクに戻っていった。

シロナは二人と相対するようにソファへ着座する。

「シロナさん、私達はですね」

エリカが話しだしたのを、シロナはすぐに遮った。

「ゴヨウから聞いてるわ。シンオウの四天王を全員破ったそうね。大したものだわ」

「ありがとうございます」

エリカはとりあえず頭を下げるが、レッドはすぐに尋ねた。

「それで、勝負の方は」

「申し訳ないけど。選挙が終わるまでは無理ね。まあ骨休めだと思って3日くらい辛抱してよ」

そう言うと、シロナの前にコーヒーが出された。礼を言った後、さらに続ける。

「あなた達が正念場を控えてるのと同じように、あたしも大きなイベントをひかえているの。どうか分かって頂戴」

シロナはコーヒーを、落ち着いた所作で少しだけ口につけた。

「まあ3日くらい俺らは待てますけど」

「そう。悪いわね。ところで、用はそれだけかしら?」

シロナはまさかこんな日程を聞くためだけに、きたのではなかろうと、いいたげにこちらを見てくる。

「シロナさん。貴方は副理事長としてでも様々な改革を行ったはずです。それでは不服なのですか?」

エリカが口火をきる。

シロナはそれを受けて、分かってないとでもいいたげな風にため息をつく。

「足りないわ。副理事長では、理事長の方針の枠内だもの。動かせる予算も人員も限られているし、これ以上リーグを変えるには力が必要なの」

シロナは副理事長として人員整理や委員会（リーグ職員）の組織再編、不良債権の整

理など、大規模なリーグ内部の構造改革を行った。批判も少なからずあったものの、ダイゴの時代では赤字続きだった財務は黒字に転換し、毎年兆円単位の貯蓄を行っているほどである。

しかし、それはあくまでワタルが公約としていた緊縮財政をシロナが具現化しただけにすぎず、彼女には不満がつのっていた。

「しかし、リーグ法ではあと一期で、ワタルさんは立候補できなくなります。それを待つという選択もあったのではないですか」

「もちろん。今の理事長も職務は果たしているし、敢えて立候補しないことも考えてはいたわ。でも、4月から5月のエンジュ騒乱で考えが変わったのよ」

シロナはもう一度コーヒーを啜る、今度は先程よりは早く飲んでいた。

「あの騒乱は未然に防げるチャンスがいくらでもあったわ。この前のセンリさんの一件もそうだけれど、理事長の甘さも、あの事件の一因と言っても決して過言ではないのよ」

「そ、そんな。ワタルさんだって、それなりに頑張っていたじゃないですか」

ワタルと同じ、第一軍に配属されていただけに、レッドは彼が非難されるようなことをしているとは思えなかった。

「作戦指揮能力の高さは認めないでもないわ。彼のおかげで西側への侵攻や、他の街への侵入を防げたことは事実だから。でも逆に言えば、理事長として適格といえる能力は

そのくらいなのよ」
「そんな事言わなくなって……」
「彼は、止められたはずのエンジュの事件を止められなかった。それだけで長所を潰して余りある大失態よ。あたしが理事長になれば同じことを繰り返させはしない」
「具体的にどうなさるおつもりですの？」
エリカが顎に手を遣って尋ねる。彼女にとっても関心はあるようだ。
「今の査察部を発展させていく形で、防諜委員会を作り、もっと大規模に反ポケモン団体への監視や取締を行い、警察に頼らずとも完全に独立した存在として全国一帯に網を張るのよ。今の監視権の内実では理事長自身が動かないとならないわけで、非効率極まりないわ。実態を持ち、血の通った権利にしないことにはいつまで経っても、ロケット団やこの前のギンガ団のような事件が起き続けるのよ」
「なるほど。確かにそこまですれば効果は現れるかもしれません。しかし、政府への根回しはどうなさるのですか？　昨今では我々の存在を煙たがっており、権限縮小を訴える、政党や高官もにわかに力をもつと聞き及びますが」
「あのエンジュ騒乱を経ても、国民は私達の味方よ。少なくとも不信を買い続けている、国に比べればずっとね」
国民の大半はエンジュ騒乱における、リーグの手落ちを見ても信頼できる機関に上げ

続けており、その盤石ぶりは衰えることをしらない。日頃からのジムリーダーやジムトレーナーたちの地域貢献の賜物といえるだろう。

「大衆の承認はまだしも、頭の固い政府の方々を説き伏せるのは並大抵のことではないのでは？」

「その点は大丈夫よ。なんたって……リーグに入ると決めたときからの希望だもの。心配ないわ」

そういったシロナの表情はにこやかであり、雄々しき意志を感じさせるが、一抹の影ものぞかせた。

「ポケモンリーグは今年で創設から４５年。あと5年で半世紀よ。トレーナー間格差や、モラトリアム制度の再検討、リーグと政府のパワーバランス問題、まだまだ私達の解決しなければならない課題は山積みだというのに、古い体質のままではいずれリーグは信頼を失うことになるわ。だからこそ、私は負けるわけにはいかないのよ」

シロナの大演説を、エリカはそれはそれは興味深い様子で聞いていた。彼女自身、思わぬところはないわけではないということだろう。彼女はそれをいいきったのち、疲れたのかコーヒーを飲み干した。

エリカはお茶を一口すすった後、襟を正して言う。

「お話はよくわかりましたわ。私としても今のリーグの体制には不満がないわけではあ

りませんから。しかし……それならばなおさら、嫌がらせの件が気にかかりますわね」
　それを聞いた、シロナと秘書の雰囲気がやや神経質なものになる。
「そう……あなた達の耳にも入ってるのその話」
「ええまあ」
　レッドはやや気まずそうに返した。
「全く。気にすることないって言ってるのにいつの間に話広がっているんだから」
　シロナは哀愁を感じさせるかのように、深くため息をつく。
「何を言っているんですか。先輩の身が危ないかもしれないんですよ!?」
　秘書はその言葉と共に、やや粗雑に、コーヒーを置いた。
「言わせておけばいいのよ。子供のいたずらと同じ次元のことしか出来ない人に、構ってられるほど暇じゃないの」
　シロナは歯牙にもかけない様子で、切り捨てた。
「潔くてよろしいと思いますが、明日から選挙なわけですし、念の為警備を強めては如何ですか?」
「心配してくれるのは嬉しいけれど、ここで腰が引けた態度とるわけにもいかないわ。今だからこそ毅然とした態度をとらないとね」
　シロナはそういいながら、おかわりのコーヒーを口につける。

「なるほど……。それもそうですわね」

エリカはここで、波風を立てたところで詮無いことだと思ったのか、引き下がった。

「それだから私達が困るのですよ。もっと御身を大事にしてくれないと」

秘書は大いに弱った様子で言う。彼女をはじめとして付き従う秘書たちも、これまで振り回されているようだ。

「今は寸分の弱みも見せるわけにはいかないの。女だからと舐めてかかられたら、たまったものじゃないわ」

彼女のその言葉は強い意思を孕んでいた。シロナは終始その鉄の意思を曲げないことに、全ての神経を使っていることが見て取れる。

シロナとはそれからも10分ほど話して別れた。

―午後5時30分　同所―

レッドとエリカが去り、しばらくした後に秘書が口を開いた。

「きちんと通じたでしょうか」

「大丈夫。エリカさんは聡明よ」

「シロナさんは言ってましたよね。選挙の鍵はエリカさんにかかっているって」

エリカはシロナにとっては外部にあたる、カントーやジョウト地方のジムリーダーや四天王から大きな信愛と、好感を持たれているため選挙の票においてもただならぬ影響

力をもつと予測された。
　１９８９年の第一回選挙から理事長候補は支持が拮抗し続けているため、このようなことでも躍起にならざるをえないのである。
「今回の選挙は世間の注目度も、候補者の政策の違いもなにもかもが異色の選挙よ。エリカさんは当然押さえておかないと、保守の牙城ともいえる今の理事長には絶対に勝てないわ」
　選挙当月の１２月に入ってからも、リーグで変革を望む声は大きくなってるとはいえ反主流というポジションは変わらないため、シロナにとっては逆風が吹き続けていた。
　前回までの選挙は両候補者の政策や公約は想定の範囲内程度にしか違いがないため、拮抗していたともいえるが、今回はほぼ保守と革新の戦いなので、シロナはよくても惜敗か、歴史的な大敗を喫するのではないかという世間の噂もあった。
「明日からの討論会こそが正念場よ。気合いれるわよ」
「はい！」
　副理事長室は夜になってもキーボードやコピー機の音が鳴り止まなかった。

―午後７時３０分　セキエイリーグ　４階　客室　４０８号室―

　リーグ本部では選挙以外にも様々な会合や講演などで施設が使われることが有るた

め、4階から6階部分は出席者や賓客のための階層となっている。
二人は部屋に戻った後、エリカは一時間ほどナツキの部屋に行ってジムの打ち合わせや選挙に関する見通しや見解を話し、戻ってきた。レッドはそのあいだ手持ちの世話をしていた。
その後夕食を済ませて、現在は風呂をわかしている最中であった。
「ふう……久々にカントーに帰ってきたけど、やっぱ慌ただしいな」
レッドは今日一日振り回されっぱなしだった為か、どっと疲れている様子である。
ベッドに座って、ピカチュウとキャッチボールして、気を紛らわしていた。
「私も、まだ選挙はこれで2回目ですけれど、前回に比べるとかなり物々しいですわね」
エリカはベッドの向かいにある、背もたれつきの椅子に座っていた。
「そうなのか？」
「前回も前回でそれなりに騒がしい選挙戦でしたが、今回はエンジュ騒乱という大きな出来事が記憶に新しい上に、選挙の争点自体も、毛色が全く違うものですから大きく関心を集めているようです」
「そうなのか……。リーグ前にいた記者？　の人たちもかなり大勢いたしそうなんだろうな」
「もし、シロナさんが理事長ということになれば、トレーナー界隈は大きく変わることに

なるでしょうね。先程話してたこと以外にも、ジョウト地方にもポケモンリーグを作ったり、トレーナーパスポートを作って海外に行けたり、外国のトレーナーともより闘いやすくなったりとかいろいろな改革を秘めてるようですよ」

　そういってエリカは自分で淹れた緑茶を、一口飲んだ。

「戦う機会が多くなるのはいいことだけど、本当にできるんだろうかね」

「経済的には大丈夫でしょうけど、やはり問題は私をはじめとした、ジムリーダー以上の指揮する立場にいる人々の心構えですね。この3日間でどれだけ心を動かせるかが鍵だと思いますわ」

「3日間か……。随分と長いけどどういう風に進めるの？」

　レッドはエリカに尋ねる。

「1日目と3日目は討論会で、2日目の中休みが各地方リーグでの定例会ですわね。討論会は昼休みをはさみつつ10時から17時が定時になっておりますが、私が居たときは確か定時を30分ほどすぎていた記憶がありますわ」

「やっぱそれだけ話すことが多いんだな」

「議長が議論を止める権利があるにはあるのですが、やはり遠慮して使わないことが多いようです」

「なるほど」

「3日目の討論会が終わった後に、候補者同士でのポケモンバトルがあって、その後に投開票を行って理事長を選出して、選挙は終わり、という日程ですわね」
「ふーん。そうか」
レッドはピカチュウにボールを返しながら言う。
「エリカ今回選挙出ないんだっけ?」
「左様ですが」
「重要な選挙なのにいいのか?」
「正直な話、私のジムにとってはリーグの方針がどう変わってもさほど影響はありませんから」
エリカのジムであるタマムシジムは、リーグからの補助金は一切受け取っていない上に、同市に存在する唯一のジムである為、リーグの方針による影響は受けにくい。
「それに、今は私は貴方の妻として、行動を共にしているのです。リーダーとしての職務ならいつでもこなせるでしょう?」
彼女は微笑みんで言う。
「ははは。そうだな」
レッドは嬉しそうである。
それからレッドは一番風呂に入り、エリカは部屋を出た。

―午後8時　同所　４０３号室―

エリカは客室の前のドアに立ち、ノックした。

「エリカね。鍵、開いてるから入って」

エリカは部屋に入り、部屋に備え付けのテーブルに相対して着座した。

「お久しぶりですわね。ナツメさん」

それから、他愛もない雑談をして、やがて本題に入る。

「どうなの。レッドとは」

「何事もなくやらせてもらってますわ」

エリカはそう言って、出された緑茶を静かに飲む。

「ごまかさないで。あんただって気づいてないわけがないはずよ。レッドに対する気持ちが変化してることに」

「そんなことは」

エリカは、水面に映る自分の顔を見つめたまま黙ってしまった。

「力を使うまでもないわ。エリカはかなり自分の気持を押し殺してレッドに付き合い続けてるわよ」

ナツメはきつい声色でエリカに対して諭す。

「そんなはずありませんわ。私はレッドさんのことを心の底から……あ、愛しています

わ」

ナツメは哀れみを覚えたかのような感情を、目線にうかべながら、コーヒーに口をつける。

「もし本当にそうだと思うのなら……。一度レッドに本音を交えて話してみるといいわ。あんたがカントーにいる今が良い機会よ。別れるかどうかはともかくとしても、今のままではエリカの心がもたないわよ」

ナツメは先程よりは感情を和らげてはいるが、それでもやはり彼女が心配なようだ。

エリカはうつむいたまま、何も答えられなかった。

――

―午後11時35分　セキエイリーグ　7階　副理事長室―

シロナは明日に備えて30分ほど前に、部屋に備えつけの寝室へ入り、眠りについた。

今は秘書が一人、明日に討論会へ参加する理事や役員向けの資料の最終校正にとりかかっている。

副理事長室の明かりは既に落とされ、ノートパソコンのディスプレイと卓上のライトだけがわずかに部屋を照らしていた。

「ふう……。こんなもんかな……」

出来上がった原稿を見て、彼女は満足そうに頷いていた。

印刷ボタンを押した後、一息ついて自分で淹れた緑茶を飲んでいると、突如として展望窓がけたたましい音とともに割れる音が響いた。
眠気が覚めた秘書が、音のした方向に近づいていく。
ガラスを割った物体は、ちょうどシロナが普段着座している机に転がっていた。
「マ……マルマイン!?」
紅白の球体と、今にも爆発しそうなほど周りにプラズマを漂わせているのを確認した彼女は、急いで寝室の方向へ向かう。
それとほぼ同時に世界はわずかな時間だけ、白く染まった――耳を聾する轟音と共に。
―第三十二話　策謀　終―

第三十三話　伯仲

―12月14日　午後11時40分　セキエイリーグ　正面入口前―

セキエイリーグの前には記者団がつめかけており、翌日の選挙での観覧抽選を待って徹夜で正面入口付近で粘っていた。

この日の夜空はすっきりと晴れており、月や星々が落ちてきそうなほどに満天である。

そんなとき、突如として、山を二つに引き裂くかの如き、耳を聾する爆発音が高原中に響いた。

記者たちは音の方向に目をやると同時にあたりは騒然となり、中に入ろうとするマスコミと、落ち着いた対応を求める警備側とで揉み合いになった。

「何が起こったんですか」

「中に入って、話を伺いたいだけです！　通してください」

記者たちは、凄まじい熱気と、今にも切りかかりそうなほどに切迫した声色で、スクラムを組んで内部への侵入を防ごうとする警備員に詰め寄った。

「ですから、落ち着いてください！　リーグからの広報があるはずです」

警備員たちは理性を以て抑えようと努めるも、時間の経過と共に、じりじりとそれは削られていった。
リーグからは宵闇を増そうとばかりにもうもうと黒煙があがり、外部で怒号や衝突音などが入り交じる中、内部でも相応な混乱がおこっていた。
―同時刻　7階　副理事長室　仮眠室―
爆発音で飛び起きたシロナは衣服を整え、部屋の外にでようとした。
しかし、ドアノブを回して出ようとしても何かがひっかかっているのか、びくともしない。
ふんぬと声をあげて、力ずくでこじ開けようとしても全く意味はなかった。
中で何かが燻っているのか、煙が侵入しはじめており、このままでは生命の危険がある。
「ガブリアス。ドラゴンダイブ」
仕方ないとばかりにシロナはモンスターボールを取り出し、ガブリアスを繰り出した。
モンスターボールが出たガブリアスは目の前にある扉を見て、躊躇する。
「い、いいんですか？　マスター。ここ一応リーグの中でしょう」
「いいから、早く」

シロナは殺気立った様子で、ガブリアスに指示する。ガブリアスは問答は無意味と理解して、渾身の力で体当たりを仕掛けた。凄まじい破壊音と共に、彼女の前に道ができる。

シロナはガブリアスに礼を言って、副理事長室の執務室に戻った。

「な、なによこれ。どうなってるの」

そこには変わり果てた自らの机や、展望窓が割れ、風通しのよくなった部屋がある。あまり大きな爆弾ではなかったためか、入口付近から書架や秘書の机あたりまでは無事であった。

しかし、シロナはそれ以上に衝撃的な光景を目にする。

「え」

彼女はかつて自らの机があったところまで歩みをちかづける。

そしてそこには、人間の下半身と思しき部位があり――服装から察すると、それは自らに、ずっとついてきてくれた後輩の変わり果てた姿であることを認識せざるを得なかった。

シロナはあまりのことに叫び声を上げるまもなく、昏倒する。

「マスター！」

ガブリアスはのしのしと彼女のところまで歩み寄り、シロナを支える。

それとほぼ同時に、副理事長室のドアが開けられた。
「シロナ君！」
音を立てて入ってきたのは、向かいの部屋で同じく準備を進めていた理事長のワタルだった。
後に、ワタルの秘書たちや、警備員などがぞろぞろ入って、持参した消火器や、ヌオーやクラブなどといった水ポケモンを繰り出し、消火活動にあたった。幸いにも火はそれほど強くはなく、すぐに止められそうだった。
ワタルはガブリアスのところまでそそくさに歩いた。
「良かった。シロナ君は無事そうだね」
気を失ってはいるものの、シロナが無傷なのを確認して、ワタルはとりあえずは胸をなでおろす。
「で、ガブリアス。これは」
ガブリアスが事の概要を説明すると、彼はじっと眼をつぶった。
「そうか……。無理もないな。大事な部下を失ってしまったもの」
「理事長。どういたしましょうか」
秘書の一人がワタルに話しかけ、今後の指示を仰ぐ。
ワタルは３０秒ほど間を開けて考えた後、指示を出す。

「マモル君はすぐに3階に行って、リーグ委員に連絡をつけてくれ。ああそう、ボタン君とアヤネ君」

ワタルは散らばった資料を集めていた、女性の秘書二人をよびかける。

「君たちはシロナ君を、2階の医務室へ連れて行ってくれ。運んだら、そのまま、委員内の人事部に行き、職員名簿からシロナ君の秘書たちにも連絡をつけておいて」

二人は資料を抱えたまま、短く明瞭に肯定の返事をした。

「ヤスオ君、君は1階で騒いでいる間屋たちに起こったことをそのまま説明してくれ」

「しかし、ここでもそれとなく、分かるくらいには尋常じゃない騒ぎですよ、それでどうにかなりますかね」

7階からでも分かるほどに、マスコミと警備隊は一触即発であった。ヤスオは不安気に尋ねる。

「10分でいい。時間を稼げればあとは委員たちがおさめるから。それでも収まらなければ僕が出ていく」

「わ、分かりました。それで理事長は?」

「僕かい? 僕はね」

ワタルはモンスターボールを取り出す。

「この割れてしまった窓を塞ぐよ。資料が吹き飛ばされでもして、選挙に負けた言い訳

にされるのはごめんだからね」
　ワタルは快活に笑ってみせた後、モンスターボールからハクリューを数体出した。
―12月15日　午前0時55分　1階　第二会議室―
　爆発事件を受けて、今後の対応を協議するため、緊急で理事会議が開催された。
　理事として召集された四天王たちは皆眼をこすっていたが、起こったことの次第は伝わっているのか、緊張が走っている。
　挨拶と謝辞もそこそこに、本題に入る。
　議場の机は円卓になっており、各地方の四天王やチャンピオンが座っていた。
「それで。結局どこの仕業なんです」
　最初にワタルに対し声をあげたのは、同じセキエイリーグ四天王のイツキだった。
「それはまだ分からない。査察部と警察の捜査を待たなければならないが」
　ワタルは少し間を開け、言葉を選んで話す。
「シロナ君の机を中心に破壊があったから、恐らく犯人は飛行ポケモンを使って、展望窓の外から爆発物を投げ込んだだろう。爆発物の正体は周囲にマルマインと思しき破片が散らばっていたから、多分それだ」
「質問の答えになってないわよ。そんな見れば誰でもわかる程度の情報じゃ、何の対策も立てられないじゃない」

同じくセキエイリーグの四天王であるカリンが、そうワタルを詰った。
「だから分からないと言った。それで、とにかく現段階においては事態の収拾を優先しよう。夜が明ければもっと大勢のマスコミがくるだろうから、それについて協議したい」
「とにかく今は何も分からないのだし、黙ってた方がいいんじゃねーか？　余計なことをいうとあることないこと、書きかねねーぞあいつら」
サイユウリーグ四天王のカゲツが、頭を掻きながら言う。
「それはあまり宜しくないのではないでしょうか？　答えるべきことは誠実に言うのが、リーグとして有るべき姿だと思いますよ」
シンオウリーグ四天王のゴヨウが、メガネの真ん中をあげながらカゲツに反論した。
「だからその答えるべきことがわかんねーから、今は何も言わねーほうがいいって言ってんだよ。話聞いてないのかメガネ」
「落ち着きなさいなカゲツ。今はリーグの真価が問われているとき。あちらの言うことの方がもっともだと思いますわ」
2つ隣に座っていた、サイユウリーグ四天王のプリムが、諭すようにいってきかせた。
間に挟まっているフヨウは、話についていけないのか寝息をたてていた。
「だ。だけどよ。天下のポケモンリーグがどこの誰かも分からない奴に、本部を襲われ

て、委員一名を惨殺されましたなんて、それこそ恥だぜ。もう少し分かってから話したほうが」

「そもそも殺人事件は我々ではなく、警察の管轄です。管轄が違うものが分からないというのは至極当然というべきでしょう」

ゴヨウはつとめて冷静に意見を述べている。死体は既に近隣の病院の霊安室に運ばれているが、事件現場については不介入を盾に選挙期間中は警察といえども立ち入らせないことになっている。

「理事長の話きいてなかったのか。これは明らかにポケモンによる殺人だぞ」

「いや、ゴヨウ君の意見は尤もだよ」

ワタルが間に入って口を挟む。

「カゲツ君の言うように、確かにこれをそのまま言えばリーグの恥だ。だが、何も言わないのもプリムくんやゴヨウ君の言うようにリーグの信義を損なうことになる」

ならばどうするのだという、圧力が議場内に満ちた。

「発表はするが、マルマインによる自爆ということは伏せた上で言う」

議場内から反発の声があがりそうであったが、それに先んじてワタルは続ける。

「この目でみたとは言っても、所詮は僕の眼で勝手に判断したにすぎない。本当はマルマインに似せた模型かもしれないのだからな」

「理事長殿！　それはいわば」

セキエイ四天王であるキョウが口を開くが、それよりも先にワタルが遮る。

「とにかく、今はそういう事で話を進める。詳細はまた分かった後に随時発表すればいいだけのことだ。さて、次の議題だが今日の１０時に迫っている選挙をどうするかだ」

ワタルは声をあげさせぬ間に、次の議題へ移った。

「今日は無理でしょう。一度このリーグにいる人は任地に戻って、再度仕切り直すべきでは」

ゴヨウは順延を提案するが、ホウエンリーグチャンピオンのミクリが反論する。

「随分簡単に言ってくれるね。今このリーグにいる人たちは何年も前からこの３日間をあけてるんだ。逆に言えば役員や理事が全員揃うのはこの日しかないとも言い換えられる。私だって来週から海外でイリュージョンニューイヤーセレモニーでこの国にはいないわけでね」

「ミクリ君。そうは言うが、対立候補のシロナ君がいつ戻ってこれるかわからないんだ。選挙を行うにもこれではどうにも……」

そう言うと、議場の扉が開かれた。

「誰が。戻ってこられないのですか？　理事長」

そこには、シロナが何もなかったかのように立っていた。

「シロナ君！」

「皆様。お騒がせいたしました。私はこのとおり元気です。秘書が揃い次第、諸事を済ませたいので当初の時間は難しいですが、日取りは予定通り行いたく思います」

シロナは毅然なように見せているが、足がかすかに震えており、ショックは未だに癒えていないのは明らかだった。

「し、しかし今日は明らかに無理だろう。第一マスコミの対応だって」

「報道への対応なんて、この座についてから私の仕事だったでしょうが。うまくまとめておきますわ。今回の爆発事件は私の部屋しか被害に遭ってませんし、こんなことで選挙日程を伸ばすわけにはいきません。それでは」

そういってシロナはツカツカと、議場を去っていく。

理事会議もシロナがそこまで言うなら、と日延べはせずに、時間を遅らせて行う事で決議した。

―午前７時２０分　４階　４０８号室―

「おはようエリカ」

エリカは彼よりも３０分ほど早く起きて、朝食を作り終えていた。

「貴方、昨夜大きな音がしませんでしたか」

この部屋は理事長室側の方向にあり、音以外に事件について知る由はなかった。

エリカは二人分の緑茶を入れると、席につく。
「大きな音？　聞こえなかったな。気のせいじゃないか」
「左様でございますか。私の思いすごしですかね」
そう言うと二人とも、お茶に口をつける。
朝食を食べていると、室内の電話がコール音を鳴らした。
エリカは箸を箸置きにおいて、そそくさと電話をとった。
「はい。もしもし」
「タマムシシティジムリーダーのエリカ様でございますか？　こちら理事長選挙管理委員会です」
やけに改まった口調で電話口の声がする。エリカはやや当惑気味に肯定の返事をした。
「昨日の２３時３６分頃に、副理事長室において、爆発事件が発生しました」
「えっ」
「驚かれるのも無理はありませんが、落ち着いてお聞きください。副理事長は無事ですが、選挙の日程に少々変更が生じました。当初は午前１０時からの予定でしたが、本日未明に行われた理事会議の決定に従い、午後４時からの開催に変更となりました」
エリカはやや時間をかけて言われた内容を咀嚼し

「私にかけずとも、ナツキさんにのみお伝えすれば良いのでは？　私は選挙での投票権はナツキさんに委ねましたので」
「念の為、正規のリーダーにもお教えしたほうが良いと思いまして」
「まあ。分かりました。お手数をかけましたわ」
　この返事を確認すると、返礼をして電話は切られた。
　エリカは静かに受話器を置く。
「どこからだ？」
「貴方。どうやら気のせいではなかったようですわ」
「なに？」
「副理事長室で爆発が起きて、シロナさんは無事だったそうですが、その影響で選挙が本日の午前１０時から午後４時に順延となったようです」
「爆発って。いくら無事つっても、今日中で大丈夫なのか？」
「万全ではないでしょうね。しかし、それでもやるしかないでしょう。シロナさんからすれば」
　エリカは意味ありげなことをいいながら、席につき、緑茶を一口だけ口につけた。
「どういうこと？」
「この三日間しかないのですよ。シロナさんが、まともにワタルさんと戦えるのは」

「意味がわからん」
「今日の選挙を見れば、自ずとわかると思いますわ」
「え？」
エリカは、最後の一つかみのご飯を食べ終わると、すぐに食器を片付け、スーツケースを取り出して、一枚の和服を取り出した。
「エリカお前、選挙に参加するつもりなのか？」
彼女が和服を出したときは、ジムリーダーとして職務を執行する証である。
「昨日とはもう状況が違いますからね。それに、ナツキさんもお疲れ気味のようですから、選挙期間中は休暇をとらせます」
レッドは関心のなさそうに、相づちを返した。
「てことは俺は選挙やってるあいだ、何したらいいんだ？　外へ出てもいいのか」
「貴方は投票権はありませんけど、その身内ではありますからね。機密を守るためにも、期間中は外に出ることは控えていただきたいのですが」
「そうか。しかし退屈だなあ」
「リーグ内を探索する分には構わないでしょうから、探検でもなされたらいかがですか」
エリカはレッドに眼は合わさず、和服に触れて、チェックをしている。
「そうだな。そうするか」

レッドはそうこう言ってるうちに朝食を食べ終えた。
「さて、では早速ここから出ていただけますか。私はその、着替えをしなければいけないので」
エリカは少しだけ頬を赤らめて言う。
「あ、ごめん」
そう言いながらレッドは食器を台所にやって、出ていった。
ただそこにいても仕方がないので、しばらくのあいだリーグ内を見て回ることにした。
―午後2時４４分　3階　廊下―
2階及び3階部分はショップやトレーニングルームなどのレクリエーションや業務の為に必要な店があるスペースになっており、間仕切りを隔てて委員たち職員の仕事場がある。
職員スペースとレクリエーションやショップスペースは自由に行き来できるようになっており、簡素なガラス扉はあるものの、特に施錠はされていないようだ。
昼はエリカより、ナツキと諸事について打ち合わせするというので、別個で適当に済ませ、午後からもトレーニングを行ったが、気分転換にリーグを見て回った。
広い廊下を歩いていると、聞き覚えのある声が彼を呼びかけた。

「よう、レッドじゃないか」
「お、久しぶりだな」
相変わらずの、斜めに反り上がっている髪に、洒落たジャケットを羽織っているその人物は、グリーンであった。
「珍しいなお前が一人でいるの」
「さすがにここまでハニーたちは連れてこれないからねえ。ジムリーダーは辛いよ」
グリーンはそんなことを、闊達に笑いながら言う。
立ち話もなんだからと、二人は建物内にある喫茶店に入った。
―喫茶店―
「全くあの爺さんがとんでもないことしてくれたおかげで、こっちは定例会の度に冷たい何かを感じるよ」
陽気なグリーンには珍しく、彼は愚痴からはじまった。
ポケモン研究の第一人者の孫から、全国を恐怖の底に陥れた怪物の孫である。元々人の機微を感じ取ることに長けていた彼にとっては、その色の変わりようはひしひしと感じ取れていた。
「事が事だものな。同情するよ」
「ま、寛大な俺だからこんなでも耐えられるけど、お前じゃ三日でリーダーを降りるね」

「ははは。しかし、そんなに酷いのか？　こういうときくらいは励ましの言葉くらい」
「だから尚更くるんだよ。いっそのこと、全力で罵倒されたほうがスッキリするぜ」
グリーンはそういいながら、出されたストレートティーをがぶ飲みした。
「そんな状況なら、世間に博士の仕業だと公表されなくてよかったのかもな」
「まあな。さすがにそうなったら俺のメンタルも、どこまでもつことやらな」
グリーンはため息をついて、あさっての方向をみていた。
「全く爺さんも、そんなことするなら、俺にも一言くらいいってくれたっていいのにな」
「は？」
「なんでもねえよ。独り言だ」
彼の眼はオーキドへの怨嗟とともに、後悔をも孕んでいるようにみえる。
「それよりも、お前、エリカさんとはどうなんだ？　上手くやってるのか」
「まあそれなりにな。この前マフラー編んでくれたよ」
「ほー。順調で結構なことだな。どんな感じのだ？」
「このくらいの長さの、真っ赤で、右端に花の刺繍がしてあったよ」
レッドは手振りをしながら説明した。
「花か……」
グリーンはそれを聞くと、サンドイッチを一口放り込んだ。

「お前、気をつけたほうがいいぞ。他の女ならいざしらず、あの人なら何かしらの意味があるだろう」

「意味って。考えすぎだろうそんなの」

そうこう話していると、後ろの席で話し声がするのが聞こえた。

――あの件についてはどうしましょう？

――中止についてか？　選挙の議題にはしたくないと言ってたが……

――しかし、既に一方は内国の全てのバッジを集めたんですよ？　ここまで進んでいるものを止めてしまうのを黙っておくのは……

――余計な事を今言って選挙に勝てなくなったら意味がない。先生には勝ってもらわなければ……

その直後、電話が入って会話は中断された。

レッドは七割くらいしか聞き取れなかったが、それでも大筋は知れた。そしてそれの意味するところは政治に疎い、彼であっても推察は容易である。

提案したワタル自身がポケモンマスター計画中止を提言することは、考えにくいのでシロナの政策の一つであることもレッドにはすぐに分かった。

「ん？　どうしたレッド黙り込んで」

「悪い。ちょっと出るわ」

「そうか。ま、これまで散々旅をしてたんだ。この三日間くらい故郷にいるのもいいんじゃねえか。骨休めだと思って気楽にな」

そう言ってグリーンは代金を置いて、去っていった。

レッドは会計を済ませて、とりあえず廊下に出る。

彼はこれをどうしようか悩みながら、客室へ一旦帰っていった。

―午後3時57分　セキエイリーグ　1階　第一会議室―

第一会議室。

国会の本会議場をモチーフにした、この荘厳な場所が開かれるのは五年に一度の理事長選挙のときのみであり、１９８９年の第一回より２５年近くその慣習は破られていない。

そこは会議室というよりは議場と言ったほうが近く、１０００人ほどが収容できる二階の傍聴席にたいして、1階の席は１００に満たないというアンバランスな構成が特徴である。

議席は地方ごとに弓の形状で8人(ホウエンのみ9席)ずつ左右に配置され、ジムリーダーたちはそこに着座し、四天王やチャンピオンたちは議長と候補者の席の左右にまた、予備を含めて地方ごとに5人分ずつ配置されている。

議場の左奥には議長席と、その前に書記席、更に前に討論台がある。また、地下にポ

ケモンバトル用のフィールドが格納されており、三日目のバトルには1階にせりだすという仕組みになっている。

傍聴席は既にマスコミでごった返しており、１００台に迫ろうかという大型のテレビカメラが1階にそそがれていた。

ちなみに傍聴席の更に上の3階部分には貴賓席があり、政府の高官や、リーグのスポンサーである企業の重役や社長たちが３０人ほど観覧に来ていた。

立候補者や役員（ジムリーダー）以上の投票者は既に席につき、議長の入場をまつばかりであった。

――わぁぁぁ

1分ほどすると、大きな歓声があがった。

議長席の左側にある扉から、前理事長のダイゴがゆっくりと登場し、議長席に腰を降ろす。この一連の動作に、数多くのシャッター音が響く。

議長席上部の、リーグの紋章でもあるモンスターボールをあしらった、大型時計の長針が、１２を指したのとほぼ同時にダイゴは口を開いた。

「これより、第六回全国ポケモンリーグ理事長選挙を開会する」

その声はマイクを通じて議場中に響き渡り、先程までの歓声は静まり返って、厳粛な場となった。

―午後8時11分　同所―

それから、簡単な経歴と人物紹介の後に、数時間に亘る討論会がはじまる。

前回の選挙より今日に至るまでのリーグが直面した問題の討議や、政策の論議が主な内容で、この時間になるとシロナの目玉政策の一つである、トレーナー保険制度の創設が議題となっていた。

「このような、昨今のポケモントレーナーの経済事情を鑑みますと、現状の自己責任ですべて貫徹させるというのは、多大な負担を押し付けていることになっているのは明白です。トレーナーに対する包括的な保険制度を作ることは、急務であると考えます」

シロナはリーグに寄せられる、トレーナーの情報を基に緻密な分析を行った。そしてその結果を、討論席の間にあるスクリーンにわかりやすくグラフでまとめて表示し、主張の根拠とした。

「確かに、トレーナーの皆様方には、少なからぬ金銭的、精神的負荷を与えてしまっている事は、私自身も否定は致しません」

対するワタルは、シロナの主張を聞いた上で、つとめて冷静に言葉を返す。

「しかし、ポケモントレーナーとは元来、そのような苦しみをも受け入れて、困難に立ち向かっていくことこそ肝心、要であることを忘れてはならないのです」

「まだトレーナーが、一部の求道者たちだけのものであれば、その主張は頷けます。しか

し、今や数千万人もの人々がトレーナーカードを持ち、老若男女が関わっている今となっては、それは通じません」

シロナは、スクリーンのスライドを切り替えた。ある様々な事例が記載されている。

「トレーナー保険というものは、既に類似の商品が保険会社によって幾つか提供されていますが、どのサービスも一長一短です。たとえば一番上のA社では、掛け金は月に数千円程度と安い部類に入りますが、賞金負担額の基準が高く、あまり意味していなかったり、その下のB社では、賞金負担額の上限、下限は定められていないものの、掛け金は月に数万円と貧しいトレーナーにはとても手の届かないものとなってしまっています」

「話をそらさないで頂きたい。私は内容を吟味したいのではなく、保険制度そのものが」

ワタルが言い終わる前に、シロナが返した。

「ええ。ですから、このような保険商品に代わって、我々リーグが豊富な資金と余力を基に、安い掛け金で充実したものを作るべきなのです。そうすればトレーナーの皆さんに行き渡りますし、他の保険に惑わされたり、渋い保障に泣くことはなくなるのですから」

ワタルは見事にシロナの誘導にひっかかり、閉口するしかなかった。

このような調子で、ワタルは弁舌のたつシロナの前には、押される一方で、傍聴からもそれは明らかである。

―午後１０時１２分―

「そこまで！　これより、質疑応答に入ります。理事、役員でこれまでの討論、または政策について疑問のある者は遠慮なく挙手を以て質問し、候補者は誠実に答えること。こちらは指名以外は特になにもしませんが、リーグ法１２８条に記載されている、特段の事情を認めた場合には職権により中断を命じます」

議長が規定通りの言葉を連ねた後、しばしの間をおいて何人かが挙手する。

四天王の一人から二人それぞれに宛てて、今全国に１万人ほどいるとされている無所属のベテラントレーナーについてどうするつもりなのかという質問があった。

「勿論、ポケモンリーグとして優秀なトレーナーは、一人でも多くこちらで道を用意すべきだと考えてはいるが、簡単に解決できる問題ではないので、具体的な方策についてはここでは話せない」

ワタルは、当たり障りのない回答に終始した。

「このような事ではいけません。私はベテラントレーナーにつきましては、先程議題として取り上げました保険制度を用いて生活の負担を軽くするだけでなく、指導トレーナーの職を用意し、新人トレーナーの具体的な育成にあてることで、知識及び経験の継承をスムーズに行うだけでなく、より高度なバトル環境の整備に資することをお約束します」

その他にもシロナは数個ほど腹案を述べて、聴衆の関心を引く。
カントー地方のリーダー席にいたエリカは、じっとその内容に聞き入っていた。
やがて、質疑応答も終わり、定刻を２０分程過ぎて一日目の選挙日程が終了する。
―午後１１時４５分　４０８号室―
「どうされたのです貴方？　電気も消されたままで」
部屋に戻ったエリカは、玄関のスイッチを押しながらいう。
レッドは自室に戻ってから一人でずっと、喫茶店で聞いたあの言葉を反芻させていた。
「いや別に大したことじゃあ、ないよ」
「とてもそうは見えないのですが」
「そうか」
そういってレッドは、またも下のカーペットに視線を落とした。
「もう夜更けではありますが、何か召し上がりますか？」
エリカは気を使ってか、話題を変えた。
彼はそういえば夕食をとっていないことに気づく。
「そうだな……。なにか軽いものでも頼むよ」
エリカは備え付けのキッチンで、おにぎりを数個用意し、レッドに渡した。

それを食べながら、レッドはおもむろに有ることを切り出す。
「エリカあのさ」
自分の分をついでに作っていた彼女が、こちらを向く。
「昼に妙なこと聞いちゃったんだけど」
「どのようなことですか」
「俺たちが今している旅を、中止にしようという話があるみたいで」
レッドは喫茶店で聞いたことをそのまま、彼女に話した。
「ただの噂でしょう？」
「いやでも先生とかなんとか言ってたし、関係者しか入れないところで聞いたもんだから」
「そうですか」
そう言って彼女は、キッチンの方へ向き直った。
「これ多分シロナさんが、やろうとしていることだろ」
「そうでしょうね。ワタルさんがなさる理由はないでしょうし」
その点についてはエリカも同じようだ。
「しかし貴方。このことは私たちだけでどうにかなる事ではありませんわ。もう少し冷静に」

「お前……なんでそんな冷静なんだよ」
レッドは静かに怒りを覚えていた。
「はい？」
彼女は再び、レッドの方へ向く。
「俺たちのこれまでの旅が全てなくなるかもしれないのに、なんでそんなに冷静なんだってきいてんだよ！」
レッドは気がつけば、立ち上がり、吐息がわかりそうなほど、エリカのすぐ近くにまで迫っている。
勢いは憤然としていて、今にも殴り掛かりそうである。
「え、え？」
エリカにとってその反応は予想外だったのか、目を大きくして戸惑っている。
「答えろよ。なんでそんなに落ち着いていられるんだ？」
「で、ですから、慌てたところでどうにかなる話ではないのですから、ここは冷静に状況を」
そういうとレッドは思い切り、台所の壁を殴った。
拳はエリカの右頬を掠め、髪が数本抜けるほどにそれは凄まじい。
「そんなこと聞いてるんじゃない。お前にとって、この一年はその程度だったのかって

きいてんだよ！」
「え、えっと、その」
　理不尽。
　彼の言い分は理不尽ともとれるものである。
　しかし、普段ならばそのようなとき、次々と反論の言葉を繰り出してくる彼女だったが、このときはどうしてか、言葉を出せずに居た。
　怯えているわけでも、呆れているわけでもなく、どこか別の感情が彼女のロジカルな領域を制しているようだ。
「なあ。どうなんだよ」
　当惑していた彼女は、落ち着きを取り戻して答える。
「も、申し訳ありません貴方。そこまで思っていらっしゃったとは露知らず、心無いことを言ってしまいました」
　エリカはとっさに頭を下げた。
「お前らしくもないな。いつもならもっと」
　レッドが言葉を続ける前に、彼女が口を挟んだ。
「いえ。私にも貴方を怒らせるだけの、非はありますから」
「そうか」

そういうと、レッドはいささか落ち着きを取り戻し、拳を引っ込めた。
「このまま計画をなくされては、私も嫌です。なんとか私なりに手段を考えてはみましょう」
「手段って、どうする気なんだよ」
「やりようはありますわ。一応は私も役員ですから」
そう、エリカはレッドをなだめて、この場はおさまった。
―12月16日　午前8時40分　7階―
エリカは再び、リーグ最上階のセキュリティゲートの前にきていた。
シロナに訪問の旨を警備員に伝えると、
「本日は選挙準備の為、一切の来客をお断りするよう、仰せつかってます」
とつれなく返された。
なるほど、ガラス戸の向こうでは秘書が慌ただしくでたり入ったりしているのが伺える。
「わかりました。それでは、この手紙を秘書の方にお渡しいただけますか」
エリカは懐からおもむろに、白い手紙を警備員に手渡した。
「よろしくお願いいたします。それでは」
そう言ってエリカはそそくさと、エレベーターに戻った。

選挙二日目のこの日は、地方別のリーダー、四天王間の特別定例会で、前日の選挙の議題や討論の検討、投票者の見定めについてなどを話し合う日として設定されている。定例会は9時から、第二から第四会議室で行われ、1時間の昼休憩を挟んで、15時頃に終わるのが例年である。

―午後0時30分　3階　フレンドリィショップ―

レッドは、トレーニング施設でポケモンを鍛え上げた後、傷薬や諸道具の補充の為、ショップにいた。

ショップといっても2階と3階をあわせた大規模なもので、リーグ30キロ四方にまともな商店がない分、ここで食品から電子機器まですべて補えるほどの品揃えである。ちなみに、1階の挑戦に来たトレーナー向けのショップとはまた別個の施設であり、接続もされていない。

自らの買い物に加え、朝にエリカから頼まれた食材や雑貨などを一通りカゴに入れてなんとなく、トレーナー用品のコーナーを所在なくうろついていると、聞き覚えのある声がレッドの耳に入ってきた。

「レッドじゃない。久しぶりね！」

声の方向に顔を向けると、髪を下ろして、カジュアルなスーツに身を包んだ女性が居た。

「すみません、どちら様ですか？」
「やーね。気づかないの？　って無理もないか。ジムにいるときと全然格好違うものね」
　そう言って彼女は、懐から水滴を模したジムバッジを、彼の前に見せた。
「そのバッジは……。えっ!?　もしかして、カスミさん？」
「そうよ。思い出してくれた？　あんたのピカチュウに散々いじめられた、あのカスミさんよー」
　カスミは軽く冗談めかした口調で言う。レッドにとっては5年以上前にあたる、カントー序盤のジムで、エンジュ騒乱のときは別の部隊に所属していたため記憶の奥底にしまわれていた。
「な、なんでそんな格好を？」
「一応ジムリーダーだから。公私の分別はきちんとつけないとね！　それにこういう時くらいしかスーツ着る機会なんてないし」
「でもタケシさんとかは、普段着のまままきてましたけど」
「あいつは案外そういうところルーズだから……」
　そんなことを言っていると、カスミの背後から当人が歩いてきた。
「おいおい。随分言ってくれるじゃないか。なあ。カスミ」

「出たわね。全く、少しはＴＰＯってものを考えたらどうなの？」
「いいんだよ。これは俺のジムリーダーとしてのトレードマークなんだぞ。なあレッド、いつも同じような服着てる者同士、わかってくれるよな？」
　タケシは笑いかけながら、レッドの肩を叩いた。
「あはははは」
　セキエイに来る直前に、いつもの服に着替えていたが、シンオウにいるときはさすがに厚着していたとは言えないレッドであった。
「全くこれだから男は……。まあいいわ。それよりも、レッドにこの際、言いたいことがあるのよ」
　レッドはゆっくりとカスミに視線を向けた。
「選挙が終わったら、そのままイッシュ地方にいくつもりなの？」
「いや、シロナさんと戦いますけど」
「そうじゃなくて！　カントーのバッジを取り直す気はないのかって聞いてるの！」
「は？」
　レッドはカスミの言ってることの意図をはかりかねていた。
「つまりだな。カスミは悔しいんだよ。ピカチュウに手も足も出ずにボコボコにされたって聞いてるからな」

「あんただってフシギダネに完封負けされたでしょうが！」
　カスミはタケシを睨んで言い返した後、咳払いをして続ける。
「とにかくね。納得いかないのよ。他の地方は全力のジムリーダーの力を見てバッジを受けているのに、たまたま最初の地方となっただけのカントーでは全力の１０分の１あるかどうかも怪しい、モラトリアムだけでいいだなんて、そんなのおかしいわよ！　不公平だわ！」
「そうだな。カスミの肩を持つわけじゃないが、俺もこの約一年でどれだけレッドが強くなったか、気になるところではあるし」
　タケシはカスミの意見に同調してうなずく。
「いやでも、ワタルさんからは、カントーのバッジをもう一回とれなんていわれてないし」
「そんなのね。知ったことじゃないわよ！　あたしは納得いってないからね。すぐにでもそこのトレーニング場で白黒つけたいくらいよ」
　カスミは手を前に出して、モンスターボールを見せつける。
「おい落ち着けって。今はまだ選挙期間中だぞ。勝手なことすると何言われるか分からないぞ」
「そんなことタケシに言われなくたって分かってるわよ。とにかく、このままイッシュ

行きなんて、ぜーったいに、認めないからね！」
　そうとだけ言うと、彼女は午後の召集に間に合わなくなるかもと言って、そそくさと会計の場所へ去っていった。
「あいつの言ったことは気にしないでやってくれ」
「ははは……しかしまあ、気持ちはわからないでも」
「まあ俺自身も、フシギダネにやられっぱなしのまま、っていうのは悔しいからな。もしまたジムリーダーとして戦う機会があるなら、嬉しいけど」
　タケシとはその後も3分ほど話して、去っていった。
　レッドは彼らの話を内心、奢りを以て聞いている。
―午後3時5分　1階　第二会議室　出入り口付近―
　二日目の特別定例会がおわり、各地方のリーダーや四天王はそれぞれの会議室から出て、自室やショップ、飲食店など思い思いのところへ向かおうとしていた。
　第二会議室はカントーとジョウト地方の四天王とリーダーが会議をしていたところで、エリカもそこから帰ろうとしていた。
　そんなさなか、彼女はナツメに呼び止められた。案の定レッドのことであった。
「エリカは、結局昨日、話はしたの？」
「いえ、しようとしたのですが、夫がその前にお怒りになられまして」

「なによそれ？　まさか殴られでもしたの？」
「いいえ。そこまでは。ただ、そのときにどうしてか、いつものように反駁をする気が失せてしまいまして。それどころか……その」
エリカは突如言葉を濁した。
「あんたそれってもしかして……。いや、いいわ。もしかしたらきのせいかもしれないし。とにかく早いほうがいいわよ。ズルズルと続けるものじゃないわ」
「いいえ。もう少しだけ、レッドさんの本質を見極めさせてください。お話はそれからでも遅くはないと思いますわ」
エリカのあくまでもレッドを信じ続ける姿に、ナツメは少しずつ危機感を抱いているような、そんな表情をしていた。
―午後5時　2階　選挙管理委員会　議長室―
ポケモンリーグの職員スペースの一画に、選挙の年に設置される選挙管理委員会があり、その奥に議長室は存在した。
理事長選挙の議長は慣習として先代の理事長がつくことになっており、権限の恣意的運用を防ぐために、本来理事の持つすべての投票権を持たず、選挙期間中は定例会へ出席せず、選挙管理委員会の内部にとどまることとされていた。
ちなみに、議長室後方に階段が設置されており、そのまま第一会議室の議長席に繋

がっている。
　リーグ法の上では上級役職とされているのにも関わらず、他の理事以上のようにリーグ本体の費用で設置される秘書はいないほどに、議長というのは名誉だけの閑職であった。
　過去における理事長の権威というものは強く、選挙の公正さを妨げるものとされていたが、こと今回の選挙の議長であるダイゴはその影響力は理事長時代の失策や、七光りと軽侮されていたことなどの事情から限定的であった。
　そんなところに、先ほど、小包が届き、中身を開けたダイゴは不敵な笑みを浮かべていた。
「これでやっと、5年前のお返しができるよ。シロナ君」
　そういうと彼は自前のポケナビを開いて、あるところに電話をかけた。

―午後8時　４０８号室―

　定例会が終わって五時間経過したというのに、エリカは部屋に帰ってこなかった。
　二時間ほど部屋でピカチュウなどの、世話をしていたレッドは、心配になってポケッチに電話をかけようと思ったその矢先、玄関の扉が開かれた。
「申し訳ありません貴方。遅くなりまして」

そう言った彼女の声はいささか暗いものがあった。
「おいどうしたんだエリカ？　心配したんだぞ」
「いささか用事がありまして。けれどもう済みました。お夕食、支度しますわね」
そう言った彼女の目には、わずかながらも決意のようなものを、のぞかせていた。

―同時刻　7階　副理事長室―

副理事長室では、前日の早朝に出勤命令が出されて、総出で資料の整理や再構成などを行っていた4人の秘書、そしてシロナ自身が先程まで仕事に没頭し続けていた。
割れた窓には応急措置として、ワタルのハクリューが作り出した透明なリフレクターが全面に貼られている。かつて、シロナが鎮座していた机より後ろの部分には現場保存のために規制線がはられ、立ち入ることはできない。とはいえ、ポケモンは例外のため、ハクリューたちはすぐそばで壁を張り続けている。
この時間になると、ほとんど整理がつき、他の業務を行っている。そんな一息ついているムードのところ、シロナはこれまでにきた書類や手紙などを同じ階にある備蓄倉庫より引っ張り出した臨時の机の上で目を通していた。
「どうにか三日目の討論会にはこぎつけそうですね。副理事長」
秘書の一人がコーヒーを置きながら言う。

「無理を承知の上でがんばってくれた、貴方達のおかげよ。ありがとう」
　シロナは視線は書類に向けながらも、言葉には感謝の気持ちがこもっていた。
　書類を読み終わり、次のものに視線を向けたその時、彼女の声が変わる。
「ちょっと。これいつ届いたの？」
「今日の９時前だったと思いますけれど」
　その言葉を聞いて、すぐさま彼女は目を怒らし、
「どうして今頃もってきたの？」
　その言葉は冷静ではあったが、明確な非難の色を帯びていた。
「散逸した資料の整理などを行っていて、とてもすぐお読みになれる状況ではないと思料したもので」
「この人からの手紙、もしくは来訪のあったときはすぐにお通ししなさいと言っておいたはずでしょう？」
「申し訳ございません。あまりにも突然の事の上、ここしばらくはここの業務についていなかったもので失念しておりました」
　シロナは１２月に入ってから、特に信頼の置ける人物だけと、準備を進めるつもりだった。その為、例の後輩のみを残して、それまで今年中選挙準備やエンジュ騒乱の対応などで、ほぼ休みのなかった秘書たちに冬期休暇という形で、休日を与えていたのだ。

手紙の裏には、差出人の身分を証明する印章である、レインボーバッジを模した封蝋が押されていた。

それまで討論を優勢に進めていたシロナは、忍び寄る、嫌なものの気配を感じ始めていた。

リーグの次の五年を決定し、前の五年の審判が下る日は、すぐそこへ迫っていた――

―第三十三話　伯仲　終―

第三十四話　決選

―12月17日　午前7時　ポケモンリーグ　7階　理事長室―

セキエイ高原はこの季節には珍しく、激しい雨が降っていた。

防音、防風に優れた設計であるこのリーグ本部においても、窓を叩く雨や霙の音が響いている。

理事長室の展望窓からみえる、壮大な景色も、今日はねずみ色に染まっている。

「理事長。本当ですかそれは？」

ワタルから、あることを告げられた秘書は当惑しながら言う。

「確かな筋からの話だ。信じたくはないが、調査の余地はある。今日の討論会が終わるまでに、裏をとっておいてほしいんだ」

「分かりました」

秘書はそう言うと、そつのない動きで、その場を辞した。

「まさかこんなことくらいで、ボロを出すとも思えないけど」

ワタルは両手で組手を作り、ぽつりとそう呟いたが、雨の音にかき消されていった。

しかし、ワタルにはそれでもその噂を信じるだけの根拠を、その内心に秘めていたの

だ。

―午前10時　1階　第一会議室―

三日目の選挙は例年の定刻通りにはじまった。

三日目は前置きはなしで、そのまま一昨日からの議題を引き継いで討論が再開される。

討論は相変わらずワタルが防戦一方であったが、その水面下では凄まじい攻防が行われていた。

―午前11時5分　3階　廊下―

レッドはトレーニングをそこそこにすませて、再びリーグ内の探索にでていた。

すると、大柄な体をして、修験者風のなりをした、ライオンを模したかのようなたてがみを特徴とする、壮年の男性がつきあたりより歩いてきた。

その隣には黒いマントを羽織ったスーツの男性がおり、英語でなにやら会話している。

当然レッドには聞き取れなかったが、スーツの男性のほうが、メモを取っていたためおそらくビジネス関係の話をしているのだろうことは推察できた。

少しずつレッドに近づき、すれ違うところまできたが、この廊下は狭く、できるかどうかは怪しいところだった。

レッドがすべき行動を察して廊下の端によけると、スーツの男が先に礼を言い、少し遅れて大柄の男のほうが
「ありがとう」
と、精悍な笑顔を浮かべて、秘書との会話を再開した。
そこまで流暢に日本語が喋れるなら、英語で会話しなくても。とレッドは思ったが口には出さなかった。
彼らはもう少し歩いたところの、警備員が立番をしている出入り口のところまで会話を続け、そこにつくとスーツの男は「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」と礼を言って、急ぎ足で更に先の突き当りを曲がっていった。
大柄な男は、別れたあとそのまま部屋に入っていく。確かあそこの部屋は貴賓室と書かれていたとレッドは記憶している。
どこかのお偉いさんなんだろうと納得して、レッドもその場を去っていく。
―午後０時１３分　第一会議室―
午前中の討論会は１０分延長したものの、無事に終了した。
１階にいる投票者は全員議場の外へ出たが、２階の傍聴席につめている千人以上のマスコミはそのまま居続け、午前中の議事録をまとめたり、ノートパソコンなどで記事を作成したりしていた。

そんな最中、４０インチほどの大型ディスプレイが、傍聴席のよく見える要所に、次々と運び込まれ、電気機器の業者によって配線される。

「急にこんな大掛かりな設備をやって、どうするんですか」

詰めていた記者の一人が、何気なく、出入り口で設置を見届けていたマントを身に着けている、秘書と思しき、女性に尋ねる。

「直にわかりますよ」

秘書は手短にそう答えると、それ以上の関わりを拒否するかのように、議場の中に入って細かい指示を行った。

―午後０時５５分　１階　第一会議室　出入り口前―

レッドは、２階と３階はあらかた探索し尽くしたので、１階に来ていた。

どうやら、関係者側のスペースでは、２階の受付しか出入り口はないようで、１階は会議室の集まるところとなっている。

レッドが来たときには、まもなく最終討論のはじまる時刻となっており、エレベーターが７階から降りてきていた。

２つあるエレベーターのうち、左側から理事長のワタルを先頭に、秘書が３人ほどついてきていた。

「ワタルさん！　これはどうも」

ワタルは秘書の1人と何やら言い合いをしていたようで、助かったとばかりにこちらへ表情をむけた。
「やあレッドくん。どうしたんだいこんな所へ。ここには会議室くらいしかないよ」
「この3日間ずっと暇なもので、リーグを探索し尽くしてたので、行ってないところにいこうかなと」
「そうか。悪いね、君には関係がないのに無駄な時間過ごさせてしまって」
ワタルはすまなそうに頭を下げた。
「おかげで退屈せずにすみましたよ。ところで」
レッドは後ろにいる秘書たちの格好に目を向けた。全員が黒いマントを羽織っている。中はしっかりと、スーツを着ているだけに不気味である。
「ああこれかい？　やはりこのマントはドラゴン使いとしての証だからね！　僕の秘書になっている以上は、彼らにもその証を分けてあげようと思って」
ワタルは自信満々に語っているが、秘書たちは顔を紅潮させている。やはり恥ずかしいのだろう。
「かなり目立つと思いますけど……」
「なかなか一般への理解は浸透してくれないからね。まあ、仕方がないよ」
ワタルはそれもまたやむを得ないとでも言いたげなようである。

「さて、僕はそろそろ時間なんだ。レッド君、あともう少しだけだから辛抱してくれよ」
ワタルは微笑みかけて、議場に入ろうとする。
「あの、ワタルさん」
レッドはしばし悩んで、ワタルが踵を返して数歩ほど歩いたところで、呼び止めた。
「申し訳ありません。理事長は討論会が」
「いやいいよ、なんだいレッド君」
ワタルは、秘書の発言を制し、マントを翻して、レッドの前に歩み寄った。
「その。ポケモンマスター計画をシロナさんが中止に」
ワタルはその言葉を聞いて、少し間を開けて言う。
「そうか。やはり君が情報源だったのか」
「は?」
「いやこっちのことだから。大丈夫。例え僕がこの選挙に敗れたとしても、責任を持って君たちの旅は続けさせるよ」
「お願いします。俺は、この一年間で本当に様々な人や物に触れました。だから、イッシュにも行ってみたいし、もっと多くのポケモンと、トレーナーと戦いたいんです!」
レッドのその言葉は真に迫っていた。仮にも伝説のトレーナーと呼ばれるだけあって、説得力もあった。

「君の熱意は十分すぎるほど伝わったよ。必ず、その願いは叶えてみせるさ」
そう言うと、ワタルはレッドに背を向け、今度こそ議場に入っていく。
―第一会議室　討論台付近―
「マモル君。アレ、使ってくれ」
ワタルはそれを使うことに、最後まで食い下がっていた秘書に、語りかけた。
「理事長」
秘書はようやく決意してくれたかとばかりに、引き締まった表情で言う。
「彼のおかげで腹が決まったよ。礼をいわないとね」
そういうと彼は討論台へ登壇し、既に到着していたシロナに向かい合った。
それを確認した議長のダイゴは口を開く。
「これより最終討論をはじめる。定刻は１５時とする。両者とも言い残しのないように」
議長がそう言うと同時に、シロナから口火を切った。
「それでは、引き続き、日米間のトレーナー渡航問題について討議致したく存じます。よろしいですか？」
ワタルは黙してそれに従った。
シロナは手元のキーボードを操作して、スクリーンにスライドを表示する。

「世界の現状をみるにおいて、外来ポケモンの流入における生態系の破壊は目を覆うばかりで、絶滅を危惧されている種族も少なくないと聞き及びます。また、最近ではトレーナーであることを口実に密猟を行い、マーケットで売りさばく悪質な輩も多く……」

シロナはスライドに表示された、それに対応する数々の統計について説明した。

ワタルはそれについては特に反論せず、じっくりと聞いている。

「確かに、トレーナーにとってより多くの国籍や文化を持つと戦う機会を与える。それは大変に大事なことですし、理念には共感いたします。しかし、渡航禁止後に深刻化した問題とはいえ、我々が考えるべきはまずポケモンたちの種の安全です。理事長のおっしゃるような完全な自由化は時期尚早と考えます」

シロナは長きにわたる主張を、そう締めくくった。

「ワタル君」

議長の指名にワタルは少々間をおいて答える。

「そもそも生態系や種族の保護という問題は我々リーグの考慮すべき裁量を超えている。そのようなことは、また別の機関が考えれば良いことだと思料します」

「ポケモンリーグの影響力は最早、バトルやトレーナーについて所掌する機関という分を遥かに超えています。ポケモンにおける第一の中枢として位置づけられている現状

を鑑みれば、種族について考えることもまた一つの果たすべき役割ではないでしょうか」

「それについて考えることは否定しないが、だからといってトレーナーの利益を軽視してまで渡航自由化を阻もうとするのは行き過ぎだと言っている」

「種の保護がなされなかった結果、種が絶滅してしまうリスクを招来せしめるような、施策を進めるのが果たしてリーグの為すべきことでしょうか？」

「渡航自由化が即ち種の絶滅に繋がるという考え方はいささか飛躍している。我が国の中でも、様々な多様性をもったポケモンたちが全国に分布しているが、トレーナーの通行を制限していない現下において、貴女が示されたほどの危機が起きているのか。説明願いたい」

現状、国の施策によって保護区制度や里親制度はそれなりに整備されており、あからさまな乱獲や孵化、遺棄に対する法的な規制も進んでいる。

この国においては、生態系問題は育て屋の事実上の保健所化などといった問題もあるため皆無というわけではないが、その深刻さは大きく抑えられているだけでなく、また悪化させている因子もトレーナーというより、ブリーダーやレンジャーなどの他職種であることは公然たる事実であった。

そのため、シロナはワタルの主張を崩す証拠を持っていなかった。

「我が国と同水準の保護政策を行っている国は多いとは言えず、それはイッシュ地方においても例外とはいえません。かの国では州ごとで規制が画一化されておらず、自由化を認めることでそれを悪用され、ロンダリングがなされる可能性もあります」

そのためシロナは、国内における現状の説明を避け、当該国の法整備の疎漏を追及する。

「質問に答えていただきたい。私は海外の事例でなく、国内の現状と、その危機についての相関性を証明せよと訊いている」

「お断りします。国内の現状を疎明にしたところで、問題の解決には資さないからです」

「何度も言っている通り、そもそも生態系の配慮やポケモンの絶滅問題などは本来我々リーグの配慮すべき筋ではない。それでも、それを理由にトレーナーの利益を害するような反駁をするのであれば、そちらがまず問題提起の論拠を明らかにする責務があるのではないか？」

ワタルは明らかに2日前より弁論術が巧みになっている。シロナのペースにはのらず、あくまで相手の弱点を突き続けていた。

シロナが反論に詰まって窮している隙をついて、困惑しているあいだにワタルはさらに畳み掛けた。

「そもそも日米間の渡航自由化は、多くのトレーナーにとって利益でしかない。にも関

わらず、枝葉末節なところをつついて反駁するところをみると、そちらに何か別の思惑があるのでは？」

　シロナはその言葉に、それまで鉄面皮であった表情に、ひび割れを生じさせ始めた。

「それは一体どういうことでしょう？」

「周知のとおり、ポケモンリーグは１９９３年の総選挙における与党の大敗から、断続的に政府からの圧力を受け続け、国民の支持とは裏腹に、政局では我々リーグの権限縮小を求めるものたちが力を持つと聞く」

「話が見えません。そのようなことを今更言ってどうするというのです」

　シロナはあくまで平静を保ってワタルと相対している。

「つまりは、こういうことだ」

　ワタルがそう言うと同時に、ディスプレイが次々と点灯し、ある映像がうつしだされる。

――

―２０１３年　２月２２日　ヤマブキシティ某所―

「先生に、よろしくお願いしますよ」

　秘書が、ある女性に一つの封筒を渡しながら言った。

「分かりました」

うなずいた方の人物は、明らかに昨日、マルマインによって物言わぬ骸にされた秘書であった。

彼女の顔は一見して平静を装っていたが、その言葉は重々しかった。

それから。彼女に語りかけている方の人物は、おそらくこの場の大多数が見覚えがあるであろう、大物の政治家である。

「長年、彼女の研究者としての側面しか見てない君にとっては、意外だったかもしれないがね。こういうこともしなければ、リーグは今にも我々の胸先三寸なのだよ」

「分かっています。分かっていますけれど。でもこれは明らかに」

彼女が言いかけたところで秘書が遮る。

「我々はあくまで友誼を深めるために、リーグにとって好ましい人物を委員に推薦しているにすぎませんよ。国会の多くはリーグにとって好ましくないでしょうが、我々はあくまで味方ですからね。味方の手助けをするのは当然の道理というものです」

政治家についている秘書はさも道理があるかのように、すらすらと言い立てた。

まだ封筒には封をしていなかったため、秘書は再び中身を上半分だけだして、氏名と写真を見る。

そこには、目の前で泰然と着座している政治家と同じ名字で、そっくりな顔をした若い男が、克明にかかれていた。

映像のやりとりはそれからも数分続き、閉じられた。
シロナは少し間をあけてこたえる。
「一体これは、どういうことですか？」
「覚えがありませんか？」
ワタルは言葉こそ丁寧だが、明らかに声色には非難の色が含まれている。
「これを見せたところで、私をどうしたいのかという意図を測りかねていると申し上げているのです」
「ここに映っているのは、貴女の秘書ですよね。いや、正確には秘書だった人ですが」
ワタルは含みをもたせた言い方をする。
シロナは少しだけ、不愉快そうに眉を動かした。
「貴女は、このやり取りの数日後に中途採用という形で、まさに写真の人物を、リーグ本部の委員として雇い入れている。これは明らかに、不公正な斡旋の上に、貴女の掲げている主要な政策である不偏不党の理念に反する行いではないのかと尋ねているのです」
「確かに私はその人物を雇い入れました。ただ、それは決して外圧や高官の推薦だからではなく、採用基準に則り、公正に判断した結果です」
ワタルはその言質をとったとばかりに、語気を強めて反論する。

「たとえ貴女の主観がどうであれ、この映像を見た人たちはどうでありましょうね」
「全うな政策議論では歯が立たないからといって、このような汚い個人攻撃に走るような行為こそ、理事長としての鼎の軽重が問われますわね」
シロナはあくまでも毅然に振る舞っているが、あの映像で受けたダメージは深刻なようで、声色からは先程までの余裕に大きな陰りをみせていた。
「その判断は、この議場に居る投票人たちに委ねるべきことですよ」
その後、ワタルはこの話を切り上げて、議題は別に移っていった。
―午後3時12分　同所―
定刻と同時に討論会は終わり、議長が所定の定型句を言った後、質疑応答がはじまった。
二つほど質問があった後、エリカが挙手し、指名されて質問を始める。
「シロナ候補へ、単刀直入にお伺いします。現在進行中であります、ポケモンマスター計画を中止なさるという噂を耳にしました。まずお尋ねしたいのですが、これは事実ですか？」
シロナは少々返答を考えたのか、間をおいて答える。
「そもそもこの計画は時期尚早であると考えます。未だ日米間の政府では渡航再開の交渉すら持たれておらず、政府は関係悪化を懸念してこの計画の存在自体を苦々しく思っ

ている節があります」

　ワタルがこれに対し、反論する

「ポケモンリーグは政府の御用機関ではなく、独立した組織だ。どうして、そのように機嫌をとらなければならないのか」

「基本的にリーグは超然を保つべきではありますが、政府とリーグのこれ以上の対立は、トレーナーの利益をも傷つけかねないからです」

「国民から篤い信頼を受けている我々は、国もそうおいそれと手出しできない。それはもうわかりきっていることでしょう」

　ワタルは、シロナの真意を測りかねているようだ。

「我々は国民の信頼にあぐらをかいていてはなりません。リーグが益々の発展を遂げるためには、国家との協調も思案のうちにいれる必要があります」

　話が横道にそれだしたためか、エリカが軌道修正を試みる。

「シロナ候補。質問に応答願います。ポケモンマスター計画の中止は、事実なのですか？」

　エリカはやや声色を強めて、シロナに迫った。

　彼女はしばし考え込むような間をおいた後、威勢は崩さず、毅然とした様子で答える。

「事実です。これは私の政策における、より最適化された計画へのファクターですから」

「わかりました。ありがとうございます」

静かな様子で、そう一言述べたあと、事も無げといわんばかりの様子で席に復した。

議場は先程よりもいささか騒がしくなり、二階席の報道席からはけたたましくキーボードの音が鳴り響き、議場の外にいそいそと出ていく人も見受けられた。

討論席に鎮座するシロナの表情は一見、些かも乱れがないように見えて、額にはわずかばかりの汗がみえる。

その後も質疑応答は続けられたが、それからのシロナは精彩を欠くようになっていた。

ー午後3時26分ー

「そこまで。これより、候補者同士の対面による、ポケモンバトルを行う。ルールは、リーグ所定の規範に則ったシングルバトルによって行い、3体のポケモンを戦闘不能にした時点で、勝敗を決する。投票者は、勝敗ではなく、どちらの闘いぶりがより理事長として相応しいかを考慮すること」

質疑応答が終了すると、即座にフィールドが切り替わり、討論台は地中に格納され、かわりに中央にモンスターボールが描かれたバトルフィールドが議場にいる全員の前にさらされる。

二階の報道席は更に慌ただしくなって、実況リポーターや解説者の声が複数飛び交う

ようになる。普段は静粛を要求される議場ではあるが、このときだけは声をあげたりすることが黙認されている。

第一回の選挙からの伝統である、このポケモンバトルは、世界でもトップクラスのバトルの実力を持つ者同士の戦いというだけでなく、ポケモン界における最高権力者が実質決定される重要な場面として、非常に高い注目度を誇っている。

選挙戦については、討論会や質疑応答時間については中継しなくても、このバトルのときだけは、国内キー局のほぼ全てが首を揃えてその番組にするほどである。

テレビ離れが嘆かれて久しくはあったが、この時だけは昔日に戻っていた。

5分ほどの小休止をおいた後、二人はフィールドに相対する。

シロナとワタルは互いに見合って、様子をうかがっていたが、やがてワタルの方からポケモンを繰り出す。審判の試合開始の号令と共に、理事長選挙最大の山場がはじまった。

―午後4時3分―

戦況はシロナが一体倒されたら、ワタルが一体倒されるという一進一退の攻防で、観衆に固唾を飲ませ続けた。

ワタルはボーマンダとキングドラを失い、シロナはミカルゲとミロカロスを。そして、フィールドには2人にとって互いに最大の相棒ともいえる、カイリューとガブリア

スがいた。
この二匹のどちらかが倒れればこの戦闘の勝者が決まる。
「カイリュー。龍の舞だ！」
カイリューは大仰に舞ってみせ、きたるべき攻撃に備えた。
「ガブリアス。ドラゴンダイブ！」
ガブリアスは、カイリューの体に狙いをつけ、猛然と襲いかかる。
しかし、すんでのところでかわされてしまった。
「シロナ君。そろそろ、観念したほうがいいんじゃないかい？」
「まだまだ。この程度では屈しませんわよ」
カイリューは既に二段階攻撃と素早さが積まれている。対するガブリアスは傷一つおっていないが、ドラゴンダイブが三連続外れている上に、少々疲労がみえてきていた。
シロナは暫し黙考した後、指示を出す。
「ガブリアス！　地震！」
大きく地面が揺らぎ、カイリューにもその揺れが伝わろうとしていた。
しかし、本来、飛行タイプに地面技は無効であるのにも関わらず、どうして彼女がそんな技を指示したのかワタルは意図を測りかねている。
カイリューは揺れが伝わる直前に翼を羽ばたかせて上空に飛び上がった。

しかし、上空に上がりきったとほぼ同時に、カイリューの眼には青い鮫肌の腕が見えた。

「ガブリアス！　ドラゴンダイブ!!」

ガブリアスはカイリューが飛び上がる少し前に、フィールド上空にあがり、カイリューの頭上をとったのだ。

カイリューは回避行動を取ろうとしたが、間に合わず、ガブリアスの痛恨の一撃をまともに食らうことになった。

カイリューは議長席の方向に向かってその巨体をおとそうとしている。

ワタルはすかさずシロナとは反対方向に体を翻し、声を張り上げて指示する。

「カイリュー！　翼だ！　とにかく衝撃を和らげろ！」

ワタルの指示を聞くと、すぐに翼を全力で羽ばたかせて、壁への直撃を避けようと試みる。

議長席には強風がふきつけ、議長のダイゴは身をかがめて飛ばされないように卓の端をつかんでいた。

試みは成功して、議長席より１ｍほど上空で態勢を立て直し、フィールドに復した。

「……」

しかし、戻ったは良いものの、カイリューは立ってるのがやっとな程の満身創痍の有

様である。自慢の白い蛇腹には、痛々しくもガブリアスの腕の跡が赤々と残っている。

「く……」

ワタルは一瞬だけ自らの迂闊さを悔いたが、すぐにシロナに正視し、アイコンタクトを取る。

シロナもそれに気づき、同じサインを送った。

これは、次の1ターンで最後にしようという合図である。

「ガブリアス！　逆鱗！」

「カイリュー！　逆鱗だ！」

ガブリアスとカイリューは指示を受けると、同時に飛び上がって、ガブリアスは鮫肌の腕を、カイリューは鋭い爪を武器にして相手にくらいかかろうとした。

3分ほど、凄まじい応酬が繰り広げられた後、二匹は主人の敵の前に降り立つ。

――

それから更に30秒ほど、静寂がフィールドを、そして議場を支配する。

静寂の後、先に倒れたのはガブリアスの方であった。如何に不意打ちで体力を削ろうと、敵方の積まれた攻撃の前には無力である。

「ガブリアス、戦闘不能！　戦闘ポケモンの全滅により、勝者は、ワタル！」

審判がワタルの方に旗を差し向けると、それと同時に大きな歓声が湧き上がった。事

実上、これでワタルの選挙の勝利は決定したのである。これまで、このポケモンバトルの勝者が理事長になるというのが一種の慣例となっているからだ。

ワタル、シロナ共にポケモンをモンスターボールに戻し、フィールドへ歩み寄る。

「いい戦いでした。理事長」

「君こそ。こちらも何度もヒヤリとしたよ」

そう言った後、両者は握手をかわし、そして別れた。

フィールドは再度格納され、通常の議場へと戻る。

―午後４時３０分―

この戦闘を以て、選挙までのすべてのプログラムを終え、投票に入る。

投票は各リーダーや四天王の間に自動で衝立を設けた後、議席に備え付けのボタンで行い、役員は信任するかどうかを、理事はどちらを投票するかを選択する。棄権は認められておらず、これまでも例はなかった。

この時間になると票の集計が終了し、ダイゴの口から結果が告げられる。

「厳正な選考と討論の末、たった今を投票及び集計が終了した。投票結果は、シロナ君、信任票１３票、理事票７票、計２０票！　ワタル君、信任票１４票、理事票６票、計２０票！」

議場より困惑の声があがった。まさか、まさかの可否同数である。

立て続けに議長は続ける

「可否同数の為、リーグ法１４８条の規定に基づき、引き続きワタル君を第６代全国ポケモンリーグ理事長とする」

リーグ法１４８条は、可否同数の場合における評議の取り扱いであり、可否同数の場合は議長の権限として、可否を選ぶことができる。という趣旨の内容である。

しばしの静寂の後、議場では拍手喝采が鳴り響いた。これが一種の承認の儀式であり、ワタルはそれに応じて立ち上がって頭を下げる。

一方のシロナは平静を保ってはいるが、内心かなりの怒りに打ち震え、臍を噛んでいるような動静を示していた。

「これにて、第六回全国ポケモンリーグ理事長選挙を閉会する」

その言葉で拍手はより一層大きくなり、理事長選挙は毎度こうして閉幕を迎え、ポケモンリーグは新たなる５年を迎えることに成るのだ。

―午後４時４０分　第一会議室前―

「よう、エリカ。お疲れ様」

レッドは三日目午後は大人しく自室のテレビで選挙の様子を見守り、終わったのを見計らって、一階に降りてきていた。選挙を終え、ジムリーダーや四天王たちは次々と一階の廊下に出てきている。

「待っていてくださったのですね。ありがとうございます」
「まあ、暇だからな……。にしても良かったよ、ワタルさんが再選してくれて」
「そうですわね」
　言葉とは裏腹に、エリカはやや納得行っていない様子である。
「すまん。お前はシロナさんのほうがいいんだっけ？」
「いえ。そういうことではないんです。少々気にかかることがありまして」
「なんだそれ」
「これまでの選挙は一票差というのはよくあることでしたが、可否同数というのは今回がはじめてなのです」
「ああなんかそんなこと、ニュースの解説でも言ってたな」
　理事長選挙の中継はニュース番組の解説とセットで行われている。
「まあでも確かに変なところはあるよな……。俺も昨日、ってか午前中までリーグ内散策してたから、色々耳に挟んだけど、割りとジムリーダーや四天王は一日目の討論でシロナさんに傾いてたんだろ」
「ええ。昨日の定例会でもどちらかといえば、シロナさんが正しいという論調が多数でしたし……」
　一日目の討論会におけるワタルの後手に回り続けた弁舌ぶりは、保守派の心情を揺り

動かすには十分であった。
「それが今日になってワタルさんを支持するようになったと」
「どうにも腑に落ちませんわ……」
レッドはそうかと相槌を打った後、
「とりあえずシロナさんのところ行かないか？　選挙終わったんだし、戦う日程の約束くらいはつけないとな」
「そうですわね。まずはそこからですね」
―午後４時５７分　７階　副理事長室―
混雑が止むまで時間を潰し、２人は７階へあがり、セキュリティを経て副理事長室へ進んだ。
しかし、副理事長室は物々しい雰囲気で、机の上にはダンボールが積まれていた。
「こ、これは一体」
「副理事長からの指図です。シンオウリーグの方へすべての荷物をもっていくとのことで」
秘書の一人が簡潔に応えた。
「まさか」
エリカが感づいたかのような、頭をあげる仕草をする。

「あら、申し訳ないわね。慌ただしい所に」
　奥の方からシロナが靴の音をひびかせながらやってきた。
「シロナさん、この度は残念なことで」
　レッドがシロナに声をかける。
「実力の差よ。仕方がないわ」
　シロナは短く答えたが、その表情からはくすぶる不満がうかがえる。
「シロナさん、この荷支度はもしかして」
「シンオウに帰るわ。あれだけの事が露見した以上、もう副理事長ではいられないもの」
　シロナの意志は硬いようである。
「しかし、シロナさんは直接不正に手を染めたわけでなく、あくまで」
「立場を利用した斡旋な以上、その言い逃れは通じないわ。少なくとも、もう不偏不党の言い分はつうじないし」
「シロナさん以外に、理事長を支えられるとは思えませんわ」
「言葉は嬉しいけどね。何よりも理事長自身がもう私なんかを副官としては扱いたくないでしょう。あたしよりもずっと正直で、正義の心に篤い人だから」
　シロナはすっかり熱を失った眼で、書類の詰め込まれたダンボール箱を見る。
「そんな……」

「そう。仕方ない、仕方のないことなのよ」
そう言っているのとは裏腹に、事務机に置かれた手は拳となり、力が込められていく。
「二人は勝負の申込みでしょう？　申し訳ないけど、今日いっぱいは晩餐会の司会とかで忙しいから、明日にしてほしいな」
晩餐会とは毎年恒例の選挙後の大規模な会食である。選出された理事長のお披露目の意味もある行事だが、理事にのみ参加義務があり、ジムリーダー以下は参加自由となっている。
「明日ですね。わかりました」
「時間と場所は後で追って知らせてあげるから、今日はとりあえず部屋に戻ってて」
シロナは追い払うかのような冷たさを伺わせる声色で言う。
レッドが承諾の返事をしようとしたが、エリカが遮る。
「いえ。お待ち下さい。私には一つ、今回の選挙で腑に落ちないことがありますの」
シロナは返答はせず、エリカの目をじっと見つめた。
「シロナさん。私は昨日、貴女にお手紙を差し上げましたわよね？」
「ええ」
「どうして、あのとき、喫茶室に来ていただけなかったのですか？」
エリカは至極当然の疑問をぶつける。あの手紙の中身には、午後5時に喫茶店で個室

の予約をとってあるので、時間は取れないかということが書かれていた。
「あたしの目に触れた頃にはとっくにその時刻は過ぎてたのよ」
「そんな！　私は警備の方にきちんと取り次いでいただきましたよ？」
「警備？　あのエレベーター前のセキュリティのことよね？」
二十四時間体制で立番し、出入管理を行っている場所である。
「はい。定例会が開かれる直前に渡して……」
「ちょっと、ミノル君？」
手近にいた秘書にシロナは声をかけた。ミノルと呼ばれた秘書はダンボールを持ったまま応答する。
「昨日のほら、封蝋のついた手紙なんだけど、何時に受け取ったの？」
「えー、確か9時前に警備の方が受け取って、10時頃にミチカさんが受領されたと、記録には残ってたはずです」
シロナは即座に電子手帳を開いて、出入管理記録を閲覧する。秘書の発言と変わるところはない。
「昨日、貴方言ったわよね。私が忙しそうにしていたから、渡すタイミングをずらしたと」
「大変な浅慮であったと申し訳なく」

「いや。別に責めてるわけじゃないの。本当にそれだけ？　なにか他に思いたることはないの？」
「他に……ですか？」
　秘書はダンボールを一旦そばの机に置き、手帳をめくって調べている。
「ああそういえば、なんですけど、副理事長から出勤の命令がでて、1時間後に理事会名義で、受け取った手紙はすぐに、副理事長には回さず、外見をよく調べてから閲覧に供するようにという通達が、私達秘書のもとに届きました」
「シロナさんは、もともと命の危険がありましたからね。慎重になるのはうなずけますが……」
「理事会名義ね。あたしは最後まで昨日の理事会いたわけじゃないから分かんないけど、そんなこと決議してたの」
「それで、その手紙を含め、とどいた郵便物全てを厳密にチェックしようと思ってたんですが、なかなか時間が取れずあのようなことに」
　秘書は再び申し訳ないと頭を下げた。
「いいのよ。あんな事件のさなか、2日で資料再構成しようなんて無茶な仕事いいつけた私にも責任があるわ」
「もしかして、そこにからくりがあるのでは……」

「からくり？」
「前に話しましたが、ダイゴさんが、シロナさんに復讐を果たそうとしていて……」
　エリカの話に、シロナは顔に険相をつくった。
「そう。やはり貴女もそう思ったのね」
「私も、とは？」
「おそらく、貴女の言うとおりだと思うわ。全てはあの前理事長の仕掛けた策略よ」
　シロナはエリカに向き直って話を続ける。
「この手紙も、昼のＶＴＲも、全てはあたしに一泡吹かせるための仕業に違いないわ」
　シロナは目線を机に落として一言呟く。
「デボンの情報力を舐めてたわ。まさかあの人にまで手を回しているなんてね」
「あの人とは。もしかしてＶＴＲの」
「ええ。あの先生なら、大丈夫だと思ってたんだけどね」
　シロナは落胆のため息をつく。どうやら完全に計算外だったようだ。
「シロナさん、私にもやろうと思えばいくつかツテは、ありますわ。彼らの支持がそこまで必要だと仰せなのであれば、当家がいくらでも」
「いいのよ。もう。すべて終わったことなの」
　シロナの眼は最早、諦観めいており、エリカの言葉は響かないようだ。選挙初日に見

せた煥発ぶりは、すっかり影を潜めている。
とりあえず、勝負の約束は取り付けたので、一旦二人は廊下に出た。
ー廊下ー
「エリカ。もう選挙は終わったんだよ。切り替えないと」
レッドは励ましのつもりで、何度かエリカにそう声はかけたが、彼女の表情は晴れそうにない。
やがて、エレベーターが到着し、二人は乗り込んだ。
「貴方」
エリカは短くそう語りかけると、操作盤のうち真っ先に3を押した。
「なんだ。まだ買い足さないといけないもの、あるのか？」
短く彼女は否定の返事をしようとしたが、すぐに言い直した。
「そうなのですわ。ですから、先にお部屋に戻っていてくださいまし」
そう言うと、エリカは続けざまに4の数字を押下する。それとほぼ同時にエレベーターのドアが閉まった。
レッドは4階で降りて自室に向かい、エリカは3階に降りた。
しかし、向かった先はショップではなく、リーグ職員のワークスペースだった。
ー3階　議長室ー

ワークスペース内の、選挙管理委員会が陣取っている場所に彼女はとりあえず向かった。

選挙が終わったため、職員たちはあわただしく事後処理を終えようとしていた。この委員会は理事長選挙の年にしか設置されず、終わり次第解散されて、それぞれのもとの役職に戻っている。

彼女はそれを横目にしながら、まっすぐ議長室へ向かう。晩餐会には理事以上には出席義務があるため、ダイゴがまだリーグ内にいることは彼女は理解してるからだ。

議長室にたどり着いてノックをすると、ダイゴの声が返ってきたため、彼女はことわりを入れた後に室内に入った。

「やあ。選挙ではお疲れ様」

ダイゴはにこやかに出迎えるが、エリカの顔には愛想笑いが少し浮かぶのみだった。

「ダイゴさん。一つお尋ねしたいことがあります」

「おや。いきなり本題かい？　まあ落ち着きなよ、昨日とどいたオータムナルの紅茶が」

ダイゴは備え付けの給湯室に向かおうとする。

「いいえ。立ち話で結構ですので」

エリカはきっぱりと断り、話を続ける。

「そうか。ま、それもいいか」

ダイゴはなんともなしといった風で、エリカと来客用のテーブルを挟んで対話する。
「一体、あのＶＴＲはどこから入手したのですか？　見たところ、普通の人が入手できるような代物には思えませんが……」
「なに、大したところじゃないさ。それより、そんな事僕に聞いてどうするんだい」
入手経路を明かす気はないが、とりあえずＶＴＲの出どころがダイゴなのは暗に認めたため、エリカは話を続ける。
「もしかして、あれがダイゴさんの仰せになった復讐だと？」
「復讐なんて人聞きが悪いね。僕はただほんの少し仕返しをしただけさ」
ダイゴは全く悪びれずに返す。
「一体あれでシロナさんがどれだけ、内心に辛いものを抱えているのか、ダイゴさんは理解されているのですか？」
「君は知ってるはずだよ。僕はそんなものの比じゃないくらい、苦しみをうけたんだ」
エリカも、前回の選挙におけるシロナの告発で、ダイゴがどれだけの苦境に陥ったかは、ハイソサエティのコミュニティやリーグ経由で入る情報によって、耳にはしていた。
「しかし、だからといって私憤にかられてあのようなことをするのは」
「そうだよ。だから僕は彼に選択の権利を与えたよ。あれを渡して、どう使うかは君の自由だってね。秘書に渡しただけだから、理事長当人には会ってないけど、まあまさか

討論会の真っ只中に使うとはね」

　それについてはダイゴも、少しだけ予想外だったようだ。

「言い訳は結構です。理事会議の、シロナさんに対する決議も貴方の仕業ですね」

「おいおい。提議したのは確かに僕だけど、決議するまでのプロセスは全く民主的なものだよ？　それにどうこう言われても困るなあ」

　ダイゴはにこやかな相好を崩さないまま、困ったふうな声色をして返した。

「やはりそうなのですね」

「ポケモンマスター計画中止の噂は、既に実務に近い委員たちのあいだでは、直接的な証拠はなくとも噂にはなってたんでね。リーグを探索するであろうレッドくんの耳には、いずれ入るだろうとは思ってたのさ」

　ダイゴは全て計算づくで動いていたようである。

「しかし、それでも確実とはいえないから、念のためのつもりで講じた策なんだけど。まあまさか当たるとはね。レッドくんは案の定君の耳に入れ、君は副理事長に真偽を確かめようとしたわけでね」

　ダイゴは不敵な笑みをうかべてゆっくりと議長の机に座り直し、紅茶を飲み直す。

「先に言っておくけど、最初の爆弾事件は僕は関係ないからね。さすがにそこまで危ない橋は渡らないよ」

「それは分かっておりますわ。あの事件はあくまでリーグの外よりの事象だったと考えています」
「そうか。助かるよ」
ダイゴはもう一口紅茶に口をつけ、コーサーに置いた。
「他になにか聞きたいことはあるかい」
ダイゴは汗一つ無い涼やかな顔つきで、エリカに尋ねる。
「ダイゴさん。貴方の立場はどちらかといえば、彼ら側の方でしょう。シロナさんが理事長になられたほうが、なにかとやりやすいのではないですか」
「まあ企業家として見る分には、シロナ君の方がいいだろうね。ただ、僕はこれでもモラトリアムからの叩き上げのトレーナーだから、劇的な環境変化は好ましくないとも思ってる。それとね」
ダイゴは、紅茶に再び口をつけ、飲み干してから最後に付け加える。
「メンツを潰されたのに、黙ったままのほうが、デボンの後継として許されないことなんだよ」
―午後9時30分　7階　副理事長室―
晩餐会を終えるといよいよ、3日間にわたる選挙戦の全てが終わる。
あれだけいたマスコミの大群も、次々と帰り支度を済ませ、セキエイ高原には元の静

寂が戻ろうとしている。
　司会を終えて、副理事長室に戻ると、シロナは荷物整理の仕上げにかかっていた。
「あの、副理事長」
　秘書の一人が一枚の紙を持って、シロナに話しかけていた。
　シロナが短く返事をすると、秘書が続ける。
「その、遺留物の整理をしようと思って、あの机を整理していたんですけど、そのなかからこれが」
　あの机とは2日前に亡くなった秘書の机である。
　シロナが目を通すと、その内容に思わず、目線を手紙から外してしまった。
「全くあの子ってば、最後の最後に……」
「どうされたのですか？」
　秘書は宛名だけみてすぐシロナに渡したため、内容を確認していない。
「いえ。あなた達には関係ないことよ。皆、この時間までご苦労だったわね。あとは自分でやるから、順次あがっていいわよ」
　そう言われると、秘書たちはシロナに別れの言葉を言って惜しんだ後、次々と家路についた。
　あれから３０分ほど荷物や書類整理を行い、ようやく出立の準備が整った。一段落つ

いたシロナは仮の副理事長の椅子に腰をおろし、改めて渡された手紙を読み返す。
中身は三行ほどの簡素なもので、まだ先があるかのような記述が見られるため、恐らく書きかけであったものと思われる。クリスマスが近いため、プレゼントにつけるつもりだったのだろう。
「セキエイに来てから、そういうこと全くしなかったわね」
シロナはぽつりとつぶやく、シンオウにいたころはまだ時間に余裕があったが、5年前の選挙で副理事長となってからというもの、多忙に次ぐ多忙で全くプライベートなことをしている暇がなかった。思い返せば彼女にはあの秘書に色々と話しかけられてばかりで、自らは業務やその関連以外で話すことは、さほど多くはなかった。彼女を失った今、それを少しずつ後悔しはじめている。
「今更、こんなこと悔いてもしかたないのに」
シロナは手紙を畳んで、シュレッダー予定の箱に入れようとしたが、とりあえずファイリングして、自らのカバンに静かに入れた。
そうしていると、副理事長のドアが静かに二回ノックされる。秘書は既に帰している為、シロナ自らドアへ行き、開くと目の前には、改めて理事長に選ばれたワタルがいた。
「やあ。少し良いかい?」
そう言うとワタルはシロナの承諾を待って、副理事長室に入り、ずっと壁を張り続け

ているハクリューたちの後ろに立つ。
　ハクリューには時折食事を与えており、飢えてはいないが、疲労は相当である。
「業者には電話した？」
「ええ。しかし、やはり特注の大型ガラスなので、できるまでに時間がかかると」
「そうか。年の瀬も近いし、こりゃしばらくかかるだろうね」
　そう言いながら、ワタルはハクリューを一旦戻し、替えのハクリューたちを繰り出す。
同じく、リフレクターを指示し、前面に壁がはられた。
「お手数をかけて申し訳ありません」
「君が謝ることじゃない」
「いえ、何にしても私の為した事に起因する事です」
　シロナは務めて冷静にワタルに告げる。ワタルは窓の外を見たまま、振り返ろうとはしない。
「聞いたよ。シンオウに帰るつもりなんだって？」
「耳の早いことで」
「委員たちがざわめいていたからね。君は委員の事実上の総元締めみたいなもんだから」
「あれだけのことをしてしまった以上、それなりのけじめはつけなければなりません」

シロナはいつもどおりの事務的な声色でそう返した。
ワタルは不意にシロナに振り返った。
「この3日間、君と話し合ってよくわかったんだ。ポケモンリーグには多くの問題がつきまとっている、シロナ君は僕よりも何倍もよく理解しているし、委員への統制も確かだ。君を欠いてはリーグはおさまらないんだよ」
「私などをそこまで評価してくれるのは嬉しいですが、やったことはやったことです」
シロナは頑として首を縦に振らない。
「君のやったことを不問にする気はないよ。でも、副理事長として僕を支え続けてほしいんだ」
「理事長、我々がいまだ政府からの口出しに超然としていられるのは、国民からの支持あってこそです。私を処分してなお、その地位にとどめていれば失望につながりますよ」
「確かに、それは避けられないだろうね」
ワタルはそういうと、暫し間を開けて言う。
「でも、そんな程度のことで国民の信頼に大きな傷がつくほど、僕と君で歩んできた5年は軽いものじゃないよ。それは君も、十分にわかっているだろう?」
ワタルの声は自信に満ちており、確固たる裏付けがあることを伺わせた。シロナは当

然のこととして、言外でリーグ委員たちや役員たちの日頃からの活動や活躍も、信じているからこその、この泰然な居住まいである、

シロナはなにか反論をしようとしたが、ひっこめてしまった。ワタルの力の淵源はその誠実さと人徳にあることを彼女は改めて確認していた。

「それに、君が前から指摘していた通り、僕は甘いところがある。だからこそ、君にきちんと、粛正する役を担ってほしいんだ」

「理事長は飴で、私が鞭と……」

「そうだ。この両輪あってこその、ポケモンリーグなんだよ。だから、どうしても君には」

最後まで言おうとしたところで、シロナは遮った。

「全く。前の選挙でダイゴ理事長に対して、うじうじ悩んでいた、あの頼りない子が、よくここまで肝の据わった大人になれたものね」

ワタルは特に何も返さず、ただ、懐かしげに口元をわずかに動かすにとどめていた。

「分かりました。不肖ながら、引き続き次の5年の副理事長、務めさせていただきます」

シロナは、襟を正してワタルに正対し、深々と頭を下げた。こうして、シロナは引き続き副理事長に留任することとなった。

―12月18日　午前10時　セキエイ高原　屋外演習場―

レッドとエリカは、朝起きてしばらくするとセキエイ高原の屋外演習場と名付けられたフィールドに呼び出された。

リーグ本部の正面口とは反対に位置するこの演習場は、ジムリーダーの試験や、四天王挑戦前の調整をする場所として使われている。

一番大きな中央のスペースを使って、シロナと戦うことになった。

「レッドさん。勝負に入る前に一つ、お願いがあるの」

そのスペース入り口に差し掛かったとき、シロナに呼び止められた。

「何でしょうか」

「今回の試合。貴方のみで行ってほしいの」

「ど、どうしてですか?」

唐突なことにレッドは驚いて答える。

「シンオウのトウガンさんとか、クロツグさんとかからね。噂を耳にしたのよ」

シロナはレッドの目を見据えて言う。

「噂とは」

「あなたの実力が想定されていたほどではない……という話よ」

「なんですかそれは……」

「本来、今回の旅はあなた一人のために向けられたものなのに、エリカさんと戦ってるわ

よね」

　シロナからの確認に、レッドは頷いてこたえる。

「まあエリカさんは弱点の多い草タイプ使いだし、実力としては平均的なもので、あなたとは歴然とした力の差があるだろうから、理事長も、私も黙認していたのだけど」

「それが？」

「さっきあげた2人から、内々に話があったのよ。実力は認めるけど、ＰＷＴの相手方としては力不足ではないか……ってね」

「そんな馬鹿な。だって俺は2人を、倒したんですよ」

　倒したと言う前に一瞬の間があったが、レッドは大きく言い切った。

「クロツグさんはそうだったと言い切れるかしら？　トウガンさんだって、エリカさんのポケモンと過度に協力して倒していたと聞いているわよ」

「うぅ」

　レッドはそこを突っ込まれると黙るしかなかった。

「ま、その他からはそういう報告は聞いてないから、逆に言えばその2人くらいでないと気づけ無いほどってことでもあるけど……。ここは一度、失礼ながら実力を確かめたくなったの」

「そうですか……わかりました」

レッドは事情を飲み込んで、とりあえずは同意した。
「承知いたしましたわ。貴方、どうか、ご健闘を」
エリカは特に食い下がることもなく、短い言葉でレッドを送り出した。
シロナとレッドはフィールドで相対し、モンスターボールを構える。
「全国ポケモンリーグ副理事長として、そして、シンオウリーグのチャンピオンとして、レッドさん。君と戦います！　行って、ミカルゲ」
「行け、フシギバナ！」
それから、レッドは3体を失い、シロナは4体を失うという一進一退の攻防に終始。
フィールドにはトゲキッスとカビゴンが立っている。
「トゲキッス。エアスラッシュ！」
カビゴンは三連続でエアスラッシュを受け、怯んだため何も出来ずに倒れた。
レッドは黙ってカビゴンを戻し、モンスターボールを取り出す。
「いけ、ピカチュウ」
シロナは黙したまま、ピカチュウをじっと観察している。
「ピカチュウ！　かみなりだ！」
ピカチュウは瞬間的に最大限の電力を蓄え、トゲキッス目掛けて稲妻を下す。
しかし、トゲキッスは途端に右側に、回避行動をとり、すんでのところでかわした。

レッドは一瞬どうして外したのか理解できなかったが、雨ではないため当たり前だと腑に落とす。
「トゲキッス。波動弾」
波動弾はピカチュウに直撃し、大ダメージを受けるも、なんとか倒れずに踏ん張っている。
「ピカチュウ、ボルテッカーだ！」
ピカチュウは全身に、目の前が白く染まるほどにおびただしい量の電気を身にまとい、渾身の力で突撃を敢行する。
トゲキッスは目に見えぬほどのその一閃に対応することができず、もろにその一撃を体の中枢部に受けた。
勿論、この電気タイプ屈指の大技であるこの技の前にはトゲキッスも沈黙する他無かった。しかし、ピカチュウもその反動を受けて倒れ、相打ちとなる。
シロナは苦虫を噛み潰したかのような顔つきをして、トゲキッスを戻した。そして、それにはトゲキッスを失うとは別の何かがうかがえる。

レッドは五体を失うも、なんとかシロナを下し、勝利を得た。
ポケモンを戻して、2人は練習場から、その外にとりあえず場所を移して、エリカと

合流した。
「大したものね。これだけの実力は全国広しといえども、１０人はくだらないわね」
レッドはその言葉に気分を良くしたが、シロナはそれを見たからか、途端に表情を険しく変えた。
「ただ。所詮は十指なのよ。意味はわかるかしら？」
「はい？」
レッドは聞き慣れない言葉だったため、思わず聞き返したが、エリカが答える。
「１０本の指。すなわち夫は、頂上を決めるＰＷＴの相手方として不足と仰せになりたいのでしょうか」
「まあ。早い話がそういうことね。貴方の実力では、とてもではないけど、我が国のトップトレーナーとしてはその舞台にだせないわよ」
シロナは、ためらう様子もなく、はっきりといいきった。
「な、なんでそんなこと」
「あのね。貴方が相手だからはっきりいうけど、リーグチャンピオンなんて世界を見渡したら、あたしの言う十指に入るかどうかってレベルなのよ。その本来なら格下といっていい相手に5体もポケモンも失ってるのが一つ」
シロナは更に続ける。

「もう一つは、ポケモンの大技に頼りすぎで何も考えているように見えないこと、そして最後に、レッドさん、さっきピカチュウを出していた時、一瞬雷がなんで当たらないか不思議なふうな顔をしていたわね」
「え、いやそんなこと」
「雷が必中になるのは天候が雨なときなだけ、しかし貴方はそれに気づかずに雷を出した。すなわちそれは普段から天候技をエリカさんに頼りきりなことを示してるってわけ。クロツグさんと戦ったときも似たようなミスしてたと聞いてるしね」
　シロナは理路整然とレッドの欠点を指摘し続ける。レッドは我慢ならなかった為、反論する。
「ま、負けたシロナさんにそんなこと言われたくは」
「そう。たしかにあたしは貴方に負けたわ。でも、クロツグさんには勝てると言い切れるのかしら？」
「シロナさん、少々お言葉が過ぎるのでは」
　シロナの追及に対し、エリカは間に入って制止を求める。
「エリカさん。私は貴方をみくびっていたわ。色々道中での戦いを聞いていると、貴方のサポートなくしては負けてたケースが無視できないくらい多いのよ」
「そ、それが」

「これでは同じく旅をしているゴールドさんとの公正さとのバランスが取れないわ。だから、これから先はレッドさん一人で」

シロナが発言しているところで、間に男の声が入る。

「まあまあシロナ君。そんなに目くじらたてずに」

声の主はワタルであった。彼は右手をやってシロナへ止めるポーズをとった。

「理事長。しかしこれは」

「レッドくん。戦いぶりは見させてもらったよ。とりあえずはシンオウ地方制覇おめでとう！」

ワタルは心からの祝福の笑みをたたえて、レッドの肩を優しく叩いた。

「ありがとうございます」

「うん。これだけのスピードで、もう内国の全てのリーグを制覇したのはさすがとしかいいようがないよ。ところでね」

レッドとエリカはワタルに向き直る。

「イッシュ行きの件なんだけど、もう少し待ってくれないかな？」

「はい!?」

2人は聞く耳を疑った。シロナは何かを察したような表情をしている。

「正直当初想定していたよりもずっと早く、君たちがここを制覇したもんだから、出国の

諸手続きが間に合ってないんだよ。だから、本当に申し訳ないけど」
「しかし、リーグ側の手落ちではないですかそれは」
　エリカはすかさず追及するが、ワタルは温和な表情を変えずに続ける。
「だから本当に申し訳ない。そこでなんだけど、レッドくんはまだ、制限解除状態のカントーのジムリーダーと戦ってないんだよね？」
「制限解除？」
　聞き慣れない言葉にレッドは聞き返す。
「いわゆる手加減なしの本気で戦う状態のことですわ」
「そう。それで、もう一回カントー地方を回ってジムバッジを改めて取り直すっていうのはどうかな？」
「もしかして、カスミさんとかから何か言われたんですか」
　レッドは昨日のカスミの文句を思い出して、そう返した。
「ああうん。まあ、そういうことなんだよ。ジョウトのジムリーダーからも、ゴールド君と改めて戦いたいって声が昨日の定例会でもあがってたみたいでね。だからここは、公平性を期してそれぞれの最初の地方のジムバッジをとらせようって事になったんだ」
　ワタルの説明に、エリカはとりあえず腑に落ちたようだが、レッドはまだ納得していない。

「でもせっかくここまで来たのに」
「まあまあそんな事いわずに。懐かしい地方をめぐって初心に帰るとでも思って、肩の力抜いて旅をしてきてよ。君たちがまた、このセキエイ高原に来る頃には出国準備も整えておくからさ」
　ワタルの身振り手振りを交えた、真摯な説得に、２人は折れざるを得なかった。
「わかりました。骨休めだと思って、もう一度とってきますよ」
「そうか。受けてくれるかい。ありがとう」
　ワタルは深々とレッドに頭を下げて、感謝の意を示す。
「私もそろそろジムの様子が気になりますし、丁度いい機会ですわ」
「あーそれでね。エリカくんのこれ以後の旅でのバトル参加についてなんだけどね」
　ワタルは話を切り替える。
「まあ確かに戦いぶりを見た限りではシロナ君の言ったことは分からないではない。けれども、ジムリーダーくらいの戦いでは影響は出にくいだろうから、バッジをとりおわって、四天王やチャンピオンと戦う時だけ、レッドくんだけ戦うってことでいいんじゃないのかな?」
「え、ということはリーグにもまた挑戦しろってことですか?」
「まあ僕自身としても気にはなってるからね。ジムリーダーだけなんて不公平だろう」

ワタルは曇りのない笑顔でそう返した。こう言われては何も言い返せない。
「わかりました。とりあえず、カントーに戻ってもう一回旅します」
レッドとエリカはそれから数分ほど話して、ワタルとシロナから離れようとした。
「ああエリカ君、ちょっと」
エリカは肯定の返事をしてワタルに近づいた。シロナやレッドには聞こえない程度の声でワタルは話し始める。
「昨晩はありがとう。本当に助かった」
「私はただ情報を与えただけです。勝ちを手にできたのは、ワタルさんの力あってこそですわ」
エリカは心の底からそう言ってるように伺える。
「いやいや、情報だけじゃなく、君がシロナ君の論理の弱点とか、論理学的な話とかしてくれなければ、とてもおぼつかなかった。本当に感謝してるんだよ」
「フフ。お気持ちだけありがたく、うけとっておきますわ。それでは」
そう言うと、エリカは今度こそ離れて、レッドのもとへ行き、リーグ裏口へと進んでいった。
2人が出入り口に消えて、居なくなるのを確認すると、ワタルがシロナに話しかけた。
「いやあ、シロナ君。お疲れ様」

「いえ。それより理事長、さっきの件もしかして」
ワタルは暗い表情をする。
「アデクさんから許可がおりなかったんだよ」
「やはり先程の戦いをみて?」
ワタルは、少々間をおいて、苦しそうに首を縦に振った。
「今のままではＰＷＴの舞台にはあげられないってね。とりあえずは猶予期間を設けることで納得してもらったよ」
「どうしてその事をレッドさんに教えなかったのです?」
「レッド君を低くみてるようだけど、僕にはそうは思えないんだ。マイナスの事を言って傷つけるよりはポジティブめに言ったほうが彼には励みになるだろう?」
「相変わらず、理事長は甘いですね……。次の5年が早くも不安ですわ」
シロナはわざとらしく腕を優しく組みながら、首を横にふる。
「君、言ってただろ。僕は飴で、君は鞭なんだよ。次の五年も宜しくね、シロナ君」
ワタルが手を差し出し、シロナは黙ってそれに応じて手を握る。
リーグの次の五年が、始まる。
―第三十四話　決選　終―

カントー編（改訂後）
第三十五話　帰郷

―12月18日　午後4時　マサラタウン―

セキエイ高原を発ち、およそ一年ぶりに故郷へと帰ってきたレッド。
そして、その隣には、才女の誉れ高いエリカを連れている。既に周知の事実であったものの、やはり周囲の目を引いたのは想像に難くない。
二人は予め母と打ち合わせしていた、町の入口でリザードンから降り、大きく背伸びした。そして、日が沈みつつあった我が故郷を見、エリカに話しかける。
「うーん、やっぱりふるさとの空気はうまいなぁ！　エリカ、お前はどうだ？」
エリカはおもむろに首を動かし、ゆっくりとした口調で答える。
「なるほど、マサラの名にふさわしく、まるで純白なユリを思わせるところですわね。心が洗われる気がいたしますわ」
そう言うと彼女は深く息をつく。
「マサラは白って意味だもんな？」
レッドは脳の片隅にあった記憶を取り出し、エリカに尋ねた。

「その通りですわ。よくご存知で」
そう入り口に入りながら話していると、聞き慣れた声がレッドの耳に入る。
「レッド。お帰りなさい」
この前来た時とは、少しも変わっていない母親である。彼女はゲートの柱の前で待ち構えていたかのように、その場にいた。
相も変わらず自由そうな気風である。
「貴方、どちら様ですか?」
「母さんだけ」
レッドがそう言い掛けると、エリカは急に姿勢を正し、深々とお辞儀をした。
「これはこれはお義母様でしたか! お初にお目にかかります。タマムシで小さな華道教室で師範を勤めております、エリカと申します。以後お見知りおきを」
と、エリカは凛とした所作で話す。流れるようなお手本の礼儀を見た母親は、やや気圧されたような間を作った後
「これはこれはどうもご丁寧に。レッドの母でございます。息子がいつもお世話になって」
と、形式通りの挨拶を済ませると、母親はレッドを手招きして耳打ちしてきた。
「レッド。本当にあの子の彼氏なの?」

「そうだよ。そんなにおかしいか？」
「別にそうじゃないけど……。タマムシのエリカさんって言ったらあんたね。ジムリーダーってだけじゃなくて、この国で一、二を争うお花の流派の師範で、将来は家元になろうかって人なのよ？」
「だからなんだよ」
　レッドにとっては本来分不相応な相手なことは、自身も重々承知である。そのため、やや不機嫌そうに聞き返した。
「何か失礼になるような事、してないでしょうね？」
　母は少し間を空けてレッドに尋ねる。
「し、してねえよ！」
　レッドが少し大きな声で返すと、エリカが間に入った。
「あの。お義母様？」
「はい……。って、あれ。お義母様？」
「私にとってはもう、レッドさんの母御ということはお義母様も同然ですから。……、あの、もしご迷惑というのであれば」
　エリカが少しだけ悲しみを帯びた声で後半部分を告げようとすると、母親はすぐに
「いーえとんでもない！　うちの子を、そんな立派なところで貰っていただけるなら、こ

れ以上嬉しいことはないもの」
「それならば光栄ですわ。今後とも、宜しくお願い致しますわ」
エリカはにこやかな笑顔で母親に返した。もはや義理とは言え既に母子関係が形成されたようだ。
「いいからこんなところで喋ってないで、家帰ろうぜ。周りの人釘付けになってんぞ」
こうして、三人はとりあえずレッドの自宅へと向かった。
――家路――
マサラの町は、住宅街がその多くを占めており、さほど規模は大きくない。
レッドの家は街の入り口から南に15分ほど歩いたところにあり、中央通りからは少し外れているので、付近含めて閑静なところであった。
「へー。どうにもその月からだと上手く育たないと思っていたけど、そういう組み合わせの土壌で育てるって手もあるのねー」
「ええ。特にキーの実などは微妙な配合の違いで収量も食味もまるで違いますから、私もなかなか骨が折れますわね」
レッドから数歩遅れて、エリカと母親が和やかに会話している。レッドの母はガーデニングを趣味としているため、エリカとはその方面で話が合うようだ。10分ほどしか会話していないが、かなり打ち解けられたようである。

「レッド」
「ん？」
　レッドは母に呼びかけられ、背後を振り向く。
「今からエリカさんと、お夕飯の材料買いに行ってくるから、レッドは家に入る前に水やりしておいてね」
「はあ？　帰ったばっかなのにこき使うのかよ」
「なーにいってんの。普段無沙汰なんだから帰ってきたときくらい、親の手伝いちゃんとしなさいって」
　母親はケラケラと笑いながらそう口を叩いた。
「その通りです。親孝行は出来る時に、目一杯しておくものですわ」
　エリカも同調してそう返した。
　レッドは言い返そうとしたが、彼女の両親は既に他界していることを思い出した。
　帽子を目深に被り直し、彼は深い溜め息をつく。
「わーったよ」
　そう言ってレッドは家の方向に向き直し、ゆっくりとあるき始めた。

―自宅―

家に着くと、彼はとりあえず、木の実に水をやった。オボンやオレン、クラボにモモンなどいろいろな木の実をはじめ、様々な観賞用植物が栽培されている。

あまり植えてから時間がたっていないのか、芽しか出ていないものが多い。ベランダや庭、ビニールハウス。最低でも２０種類以上植えているので、それ全てにやるのは中々に難儀である。ピカチュウやカメックス等に手伝ってもらいながら進めていた。

３０分ほどかけてすべての木の実に水を遣った。ピカチュウはレッドと一緒に右半分に水を遣り、カメックスは水量を調節しつつ、左半分に水を遣る。

「マスター、全て終わりました」

のそのそと、カメックスがやって来た。水遣りが終わったらしい。

レッドは、左半分を一瞥する。

「うん、やり過ぎてはいないみたいだな。よくやった」

そういって、レッドは安堵した表情でカメックスの頭を撫でてやった。

「へへ、どうもー」

カメックスは照れながら答える。

「ピカー」

ピカチュウは、レッドのズボンの裾を引っ張る。どうやら同じことをしてほしいようだ。

「おお、ごめんよピカチュウ。お前もよくやった」
　レッドはそう言ってかがみ、ピカチュウの頭も撫でてあげた。ピカチュウは嬉しそうに頬を緩ませて満足げな様子だ。
「お帰りなさい。レッドくん」
　生け垣の外から俄かに声がする。幼い頃、グリーンと共に遊んでいたとき、後ろから見守り、時々は一緒に遊んでくれた、彼の姉、ナナミである。
「ナ、ナナミさん！　お久しぶりです」
「どうしたの？　そんなかしこまっちゃって。昔みたいにお姉さんって呼んでくれていいのに」
　彼女はにこやかに笑みをうかべながら返す。その柔和な性格は昔から変わっていないようだ。マサラから旅立ちをして以来、四年間ぶりに会ったせいもあるのか、彼の記憶に比してかなり大人びている。長い栗毛の髪が北風にたなびき、元の美しさを際立たせていた。
　レッドは、呼び方を直して
「お姉さん。お久しぶりです」
「本当に久しぶりね。でも、元気そうでよかった」
　彼女は本心からレッドの無事を喜んでいるようだ。

「おかげさまで。俺のことそんなに気遣ってたの？」
「弟に様子をきいても『知らねー』ってばかりでねぇ。去年、また旅に行くってきいて戻ってきたときはちょうど私はいなかったし、顔見るまでは気がかりだったの」
「あいつそんな雑に言ってたんだ……。まあ確かに連絡はしなかったけど」
「あの子。エリカさんとレッドくんが今回旅立つって聞いて、すっごく不貞腐れてたし、どうにも何か思うところあるみたいよ？」
「え!?　そうなんですか!?」
　レッドにとってそれは寝耳に水であった。電話口や、先日の選挙でリーグで会った時もそんな様子はなかったからである。
「この前の騒動から更に塞ぎ込むようになっちゃったし……。おじいちゃんもあれから見てないの。ねえ。なにか知らない？」
　エンジュ騒乱の首謀者はあくまでロケット団ということになっていた。オーキドの関与については明確な証拠がなく、グリーンの立場もあるので、みだりに外に触れてはならないというのが暗黙の了解になっていた。
「さあ。俺は何も聞いてないけど」
「レッドくんもそこにいたんでしょ？　何も知らないの？」
「俺はグリーンとは違う場所に配置されたから」

レッドは内心苦い思いをしながら、話せる限りのことを話した。
「そう……。レッドくんなら何か知ってるかなと思ったんだけど」
ナナミは残念そうな声で話す。弟の事がやはり気がかりなところがうかがえる。
「博士は、あれから帰っていないんですか」
やや間をあけてレッドは、既に答えを知っているはずのことを尋ねる。
「そうなの。大学に置き手紙を残してからずっと。研究所も閉鎖になって、今取り壊してるところ」
それを聞いたレッドは研究所の方向を見る。何台かの重機がうかがえ、本当であることを裏付けた。
「なんてことだ……」
レッド自身にとって思い出ある場所のため、さすがに動揺を隠せない。
「レッドくんにとっても、やっぱりショックだよね」
「どうにか……ならなかったのか」
「元々あそこは地主さんとの契約で、いつかは取り壊す予定になってたみたいでね。おじいちゃんがいないんじゃどうにもできないのよ」
ナナミにとっても。少なからぬ思い出があるのだろう。どこか寂しげな表情で話す。
「そうだったのか。しかしお姉さんも大変だね色々」

「まあねえ。おじいちゃんはいないし、弟は何考えてるんだかわかんないし……、ちょっと思うところはあるわ。私がコーディネーターじゃなくて、弟と同じトレーナーだったら、もしかしたらこうなる前になにかできたんじゃないかって」

「そうなんですか」

「ま、今そんなこと言ってもしょうがないんだけど。それじゃねレッドくん。弟を宜しくー」

そう言ってナナミは出会った時と同じく、柔和な表情を浮かべてグリーンの家の方向へ、踵を返した。

レッドはナナミに何も本当のことを伝えてやれない自分に、腹を立てながら黙って見送ることしかできなかった。

―自宅内―

やりきれない気持ちを抱えたまま、レッドはピカチュウとカメックスを戻し、自宅へ足を踏み入れる。

廊下を歩いてとりあえずリビングに行く。母一人で暮らしているためか、特に散らかっているわけでもなく、ただ読みさしのカタログ雑誌と椀に入れられている茶菓子に、ほどほどの生活感が出ていた。リモコンがラックにしまわれずテーブルの上に置きっぱなしなので家を出る直前までテレビを見ていたことが分かる。

レッドはやや温さの残るソファにどっかりと腰掛け、なんとなく母のカタログを読んでいると、玄関の扉が開く音がした。
出迎えてやるかとばかりに、読むのを中断し、レッドは玄関へ戻った。
「お帰りー」
レッドが次に続けようとすると、エリカはそれを遮るように、
「貴方、この袋持って頂けますか？　お義母様！　お台所は何処に？」
「台所なら、玄関からまっすぐに行けばあるわよー」
母親がそう答えるや否や、すぐにエリカは私物の入ったバッグを床に置き、靴を揃えて、そそくさと台所に向かっていった。
「張り切ってんなー、エリカ」
「そーねー、スーパーに行った時も、じっとお野菜とか、お肉見つめて、一番良さそうなのを取り揃えていたし。それにしてもあんた良い嫁さん捕まえたねぇ。レッドには勿体ないくらい」
「うるさいな」
「照れるな照れるなぁ～。褒めてるんだから」
「そ、それに俺はまだ嫁にするってハッキリ決めたわけじゃ」
レッドがそう答えようとすると、割烹着を着たエリカが戻ってきた。

「お義母様、本日の夕食は私が作らせていただきますわ。貴方、早くその袋を……」
「おお、悪いな」
そう言いながら、レッドは台所へと急いだ。
―リビング―
色々と落ち着いたのち、レッドはダイニングの椅子に座り、その奥のシステムキッチンに居る、母親がエリカの後ろについている所を、遠巻きに見ていた。
エリカの料理している姿は、旅をする中で何度も目にしている。しかし、こうして家庭で見てみると、その技量の高さを改めて実感させられた。野菜や魚等は素早い包丁の捌きで適当な大きさに切られ、しっかりと分量を見極めつつ手早く調味料を入れているなど、その所作には一切無駄が無かった。プロの料理人と同格かそれ以上だろうとレッドの素人目には感じられた。
そんなエリカを横目にしつつ、庭も使ってポケモンの世話をして時間を潰していると、調理開始から一時間後、座っていた椅子の上のテーブルに料理が出てくる。
いつものエリカらしい、季節の野菜中心の和食であった。
調理過程の技量もさることながら、味も実によく、レッド含め食卓を囲む者を満足させるに足る出来栄えだった。
母親は、感動したような、高い声を出し、

「ここまで美味しい料理なんて、いつ以来かしら。エリカさん。あなた、店出しなさいよ。きっと繁盛するわよ～」

と、冗談半分な風にエリカに言ってみせた。

「まあ。義母様にそこまで褒められると、作った甲斐がありますわ。しかしこれは、あくまで幼少の頃に手習いしたのをなぞっているだけに過ぎません、まだまだですわ」

エリカは自らを謙遜している。母親は、買い物前の園芸談義に加え、完全にエリカを気に入ったようだ。

―午後8時―

こうして、夕食を食べ終わり、後片付けをして、風呂を沸かしている最中。レッドとエリカはリビングに居る。

母親は、台所で木の実を取り出し、デザートを作っている。エリカは手伝おうとしたが、母親は「いいからいいから」と、適当に押しとどめて、一人で作っていた。

レッドとエリカは、先ほど夕食を食べていたダイニングで向かい合って着座している。曲がわりにテレビをつけっぱなしにしている。

「母さんね、有る時は、穫れた木の実を使ってデザートを作ってくれるんだ」

「へえ、そうなのですか……、料理お好きなのですね。先ごろもずっと、手元をうかがっておりましたし」

実際、エリカが料理を作っている時、母親は上から覗き込んで、ほうほうと感心していた。主婦なので元々あるとはいえ、レッドの母はより強い関心を持っていた。

「そーだよ。お前とは方向性は違うけど、母さんも料理上手いんだ」

エリカは、レッドの言外の意を察したのか、それ以上深くは聞いてこない。レッドはこれからの旅路に話題を切り替える。

「ジムに挑む順番は、ニビから順々にやっていくでいいよな?」

「左様ですわね。その方が貴方も、行き慣れた道をいくわけですから、やりやすいでしょう」

そう返すと彼女は、先程自分で淹れた茶を一口飲んだ。

レッドが卓上にあらかじめ広げていたカントー地方の全図を眺めて、ジムの順番を追っていると、あることに気づく。

「そういやタマムシ、本来はお前だよな? どうすんの?」

「さあ、どう致しましょうか」

エリカが不意に浮かべた笑みに、レッドは思わず反応する。

「おいおい、なんかたくらんでるな?」

「着いてからのお楽しみです。それにしても」

彼女は庭の窓の横壁に貼り付けられている月めくりのカレンダーを見た。上にはカ

ントーの名所の写真があり、下の日付部分はメモ欄が大きく取られていて、実用重視な仕様である。

　17日まで斜線が引かれており、他にはスーパーの特売日や、近所の奥様方とのお茶会の予定などが書き込まれている。一番下には母がよく行くホームセンターが書かれており、粗品で貰った事がうかがえる。

「もうすぐ冬至ですか……。トキワに着くまでに柚子でも買っておきましょうか」

　エリカはにわかに風流な事を言う。

「冬至って、夜が一番長いんだよな」

　レッドは自信満々に答える。

「その通りですわ。因みにお聞きしますが、冬至の次の節気は」

　危機を察知し、レッドはわざと素っ頓狂な声を上げてごまかす。

「ということは、もうすぐ旅に出て一年かぁ。色々あったよな」

「そうですわね」

　そう言って、彼女はもう一口、茶を飲んだ。

「私、貴方にはとても感謝しておりますわ。タマムシや、その延長線上の狭い世界しか知らなかった私に、色々な事を教えていただいて」

　エリカの口から告げられた感謝の言葉は、普段の社交辞令や、世辞などではなく、心

の底からのものであることがうかがえた。
「な、なんだよ照れ臭いな。それに、俺のほうがずっとお前から教わりっぱなしだよ」
「私の身につけてきたことなど、所詮は書物の上のことですわ。こうして旅に出て初めてわかることのほうが多いですし、身にもなります」
「そういうものかな」
レッドも、淹れられた茶を飲むと、テレビより二人にとっても関わりのあるニュースの音声が流れた。
『――14日未明に発生したセキエイ高原のポケモンリーグ本部で起きた爆発事件について、セキエイ警察は本日、事件のあった副理事長室において現場検証を行いました。』
ニュースはそれからも数分ほど、例の爆発事件について報道を続けていた。
「そういえば、あの事件、結局どこの仕業がわからずじまいだったな」
「シロナさんを狙ったにしてはあまりにもお粗末ですしね……。どうにも意図が見えませんでしたわね」
「そういえば、レッドたちもあの場に居合わせたのよね？」
母親が、デザートをのせた皿を二人に配り、次いで紅茶の入ったカップを置いた。
「ご存知でしたか」
「もちろんよ！　テレビはずっと選挙とあわせてこれ一色だし、嫌でも記憶に残るわ」

「そりゃまあ俺たちもいたけど、今画面に映ってるとうりだよ。シロナさんの部屋は大変だったみたいだけど、俺らはずっと下の部屋で寝てたし、なんともなかった」
　テレビ画面には事故直後の本部ビルよりもうもうと、黒煙を吐き続ける映像がうつしだされている、
「そう。まあ無事ならよかったけど」
　言っている間に母親は皿を並べ終えた。
　その後、三人はデザートに舌鼓をうって、和やかなムードで十分程時が経過すると、風呂が沸いたことを知らせる電子音が響いた。
「お風呂、沸いたみたいね。さてどうすんの？　二人で入っちゃう？」
　母親の冗談半分の言葉に対し、エリカはほんのりと頬を上気させた。
「ばっ……、母さん何いってんだよ！」
　エリカが答えるより先に、レッドが声を荒らげて反応した。
「どうせ旅先で、もう何回もそういう事してるんでしょ～？　そんなウブな反応見せなくたっていいのに」
　母親はニヤニヤと笑いながら、レッドの反応を楽しんでいる。
「してねぇっつうの!!」
　その声は、途方もない拒絶を表すかのように大きく、近くにいたエリカも反射的に身

構えてしまうほどだった。
「え……。あ、うん。ごめんね。じゃあ先入っていいから」
そう言って母親はダイニングのすぐ側にあるタンスからハンディタオルを取り出し、レッドに渡した。
レッドは黙って受け取り、浴室へ向かう為、リビングを後にする。
ドアの閉まる音がした後、母親はエリカに話しかけた。
「ねえ、エリカさん。もしかしてレッドとは」
「い、いえ！　そのような事をしていないわけではないのですが……」
エリカはそこまで言うと流石に言葉を濁してしまった。いくら将来の義母とはいえ、流石にそうおいそれと、今日会ったばかりの人に話せることではない。
「あぁ～……。うん。だいたい分かった。皆まで言わなくていい」
「申し訳ありません」
エリカは本当にすまなそうな声色で謝った。役目を果たせてない自責があるのだろう。
「あー、いいのよ。貴女が謝ることじゃないから」
そう言いながら母は空いた皿に手をやり、片付けようとする。
「私がやりますから」

「いいのよ。少なくとも今はまだお客さんなんだから。ゆっくりしてて」
「さ、左様にございますか」
エリカは暫し間をおいた後、言葉を続ける。
「お義母様、もしお時間が取れるのであれば、話をしておきたい事があるのですが」
―午後9時　同所―
皿洗いを終えた後、母親はエリカの話を聞くことにした。
エリカはバッグから薄めの書類を取り出し、母親の方に向けて見せた。
「今、屋敷内に建てる予定のレッドさんの館をどう設えようか悩んでおりまして……。これまでの旅でそれなりの好みは把握しているつもりですが、お義母様の意見も伺いたいなと」
それを聞いて母親は目を丸くせざるを得なかった。
「や、館ですって……？」
「まだ私の構想段階ではあるのですが、これまでの旅のペースや、終わる時期などを考えるとそろそろ着手しようかなと思っているところなのですわ」
「へ。へぇぇぇ……。さすが」
あまりにも住む世界が違うことを理解させられ、さしもの母親も圧倒されっぱなしである。

「今回の旅ではタマムシにも立ち寄る予定なのですが、その頃には流石に間に合わないにしても、レッドさん好みのゲストルームくらいはなんとか用意したくて」
「私よりも、レッド本人に聞いたほうが早いんじゃないかしら？」
「それも道理ではありますが、やはり屋敷に招いた際にびっくりさせたいのです」
彼女はいたずらっぽく笑ってみせた。その年相応な微笑ましいとも言える感情と、やろうとしていることのスケールのあまりの乖離に母親は理解が追いついてない。
「な、なるほど。そういうこと」
と、とりあえずは言ってみたが状況の認識に暫くかかりそうであった。
「なにか不安な事でも？」
「いやその、お金とかは大丈夫なのかなーって」
やはり一市民の主婦としては、そのことが最初の不安として出てきてしまうのだった。2ページ目にある間取り図の下に書いてあった、▪の後に続く9桁の数字に目をとられたのもある。恐らく建てようとしている館の見積額であった。
「何を仰せになるのですか。これから当家に迎え入れる予定の御方ですよ？　もちろん当家で都合させていただきますわ。もしお義母様もお望みならば」
「いえいえいえ。私はこのウチでじゅーぶんだから！」
「左様でございますか……。それで、レッドさんの好みの物について」

エリカは少し残念そうな表情を浮かべた後に、改めて母親に尋ねる。母親は少しは落ち着いたのか、幼少期の話も交えながら少しずつ話し始めた。

―午後９時４０分　同所―

「ふう……」

レッドが風呂よりあがってきた。

リビングに通じるドアが開けられると同時に、エリカはそそくさと出した書類とメモ用のノートをカバンにひっこめる。

「あれ？　どうした？　ずいぶん盛り上がってたみたいだけど」

「い、いえ。ちょっとお義母様と春にはお庭に、何を植えたらいいかのお話をしたら盛り上がってしまいまして」

ダイニングテーブルに近付いたレッドに対し、エリカは取り繕ったかのようにそう返した。

「そ、そうなのよ。エリカさんが外国からとても珍しくてキレイな花の苗を取り寄せてくれるーっていうからつい嬉しくなっちゃって。ねえ」

「はあ？　いくら相手が金持ちだからって、あんま無茶なこと言うなよな」

「いえいえ。これからのお義母様との縁を思えば、この程度の事はなんでもありませんわ」

エリカはにこやかに話す。事の真偽はともかくその思いは真正のようだ。
「あぁそう……。じゃあ母さん、俺は部屋戻ってるわ。旅の用具とか色々チェックしておきたいし」
「そう。分かったわ。それじゃあおやすみー」
「ん。そうだ、お前も風呂入ってこいよ」
レッドはバスタオルで頭を拭きながら言った。
「いえ、お義母様から先に」
「私ちょっとまだやること残ってるから、先入っちゃって」
エリカは遠慮がちな仕草をみせようとしたが、やがて元の様子に戻り、
「わかりました。お言葉に甘えさせていただきますわ」
といって、バッグからバスタオルや石鹸、着替えを用意してそそくさと浴室へ向かった。
廊下への扉が閉まると同時に、母親が思い出したかのように案じる。
「エリカさん。お風呂の使い方分かるかしら……。もしかしたら自分でお湯入れたりしたことないとか」
「ポケセンの客室は風呂つきなんだぞ？　最初はちょっと戸惑ってたけど今はもう平気さ」

「そう。ならいいんだけど……」
そう言って母親は飲みかけの紅茶を全て口に入れ、台所へ持っていく。
数分ほどすると、浴室からシャワーの音が少しだけ聞こえてきた。
「な？」
「そうね。ちょっと世間知らず度を大きく図りすぎてたみたい。こっちが失礼しちゃってたわね」
そう言って母親は、小さく舌を出して自分の言動を悔いた。
「母さんが思ってるより、少なくともあのお嬢様は浮世離れしてないよ」
レッドはやや含みのある言い方をして、母親をたしなめる。
彼はそのままリュックを背負って自室へ帰ろうとした。
しかし、その前に母親に背後から呼び止められた。
「ねえ、レッド」
「ん？」
「本当に、エリカさんと、一緒になるつもりあるの？」
その声色はそこまで真剣味のあるものではなく、純粋な疑問として尋ねている風だった。
「えっ……」

「まあそりゃあね。レッドくらいの歳でそういうこと考えるのは早すぎるし、ついていけないと思うのも仕方ないことよ」
「いや、俺はそんなつもりは」
「でも。これだけは分かって。エリカさんはすっごく、すごーく真剣よ。あまり私が口挟むことじゃないのは分かってるけど、レッドもいい加減に捉えたり、曖昧にせずに、少しの合間でもいいから真面目に考えてあげるくらいの事はしてもいいんじゃないの」
今度の母親の言葉には、どこか棘に近いものがあった。
レッドは何も答える気にはなれず、階段に足をかけたまま静止してしまっている。
「ま、私個人としてはエリカさんに婿入りでもしてくれれば、色々と楽できるんだけどねぇ～」
母親は冗談めかした風にそう締めくくって、紅茶のカップ洗いと、水回りの掃除に取り掛かっていった。もう話は終わったことを暗に示しているとレッドは察して、2階へと戻る。
―午後10時すぎ　2階　レッドの部屋―
レッドは久々に自室に戻るとリュックの中身を床にぶちまけた。
ピカチュウもついでに出して、一緒に荷物整理を行う。回復道具やわざマシンを含め、要るものと要らないものを選別し、要らないものは全てパソコンに預けるのだ。

「えーっとこれは何だったかな……」
そう言いながらレッドはケースを開け、ディスクラベルに書いてある文字をみる。
『秘伝０３』と書かれている。
「ああ波乗りか……。必要な奴は覚えちゃってるしなあ。おい」
レッドはケースの端でピカチュウの尻尾をつついた。
ピカチュウはキズぐすりでお手玉をして遊んでいたため、反応がやや遅れてレッドのほうを見る。
「お前これさあ」
「ピ」
ディスクを見たピカチュウは、反射的に首を横にふる。
「やっぱそうなんだよなあ。やっぱなみのりピカチュウなんてガセ情報か。覚えてくれれば地面に対応できて技範囲も広がるのに」
そう言いながらレッドはディスクをカバーに掛け直し、保留スペースにおいた。
「ピカ！」
ピカチュウはレッドの背中を叩く。
「なんだよ」
そう答えると同時に、ピカチュウはとりあえず広げてあるわざマシンのディスクのう

ち、一枚を指さした。開けてみると、そこには『わざマシン２５』と書かれていた。
「雷？　お前とっくに覚えてんだろ」
「ピカピ」
　ピカチュウは首を素早く横に振った。
「誰かに覚えさせたいのか？　でも雷なんてそもそもでんきタイプ自体お前とレアコイルくらいしかいないしな……。ギャラドスもありだけどでもあいつは物理向けだし」
　ピカチュウはまた首を横に振る。どうやらそうでもないらしい。
「じゃあなんだよ」
　ピカチュウは自分に指を差す。
「なんだまさかもう一回覚えたいのか？」
「ピカ！」
　ピカチュウはどこから持ってきたのか、二重丸のプラカードをレッドに見せた。当たりのようだ。
「そうだなあ。あまえるあたり忘れさせて、実質ＰＰ３０に……ってアホか。そういうことはできないの」
「ピカー……」
　ピカチュウはしょんぼりと落胆した顔を浮かべ、だしてある木の実の方へ歩いていっ

た。

　こうして時間を過ごしていると、レッドの背後でドアの開閉する音がする。

「あら、荷物整理くらい私も手伝いますのに」

「ん？　ああ、エリカか。部屋は他にもあいてるだろ？　何も俺の部屋で寝なくても」

「いえ、お義母様が、貴方の部屋しかあいてないって」

「いやそんなわけないだろ。二階はもう一部屋……、あ」

　そういってレッドは視線をあげて部屋を見渡す。奥にあるベッドが記憶よりも大きかった。

「おい、あのベッドまさか……」

「ダ、ダブルサイズですわね。前からこの大きさで寝ておられたのですか？」

　レッドは大きく首を横にふった。

「なわけないだろ！　母さん、この日のためにわざわざ買ったのか……」

　レッドにとっては半分ありがた迷惑であったが、どこか嬉しいような気持ちもあった。

「おい、どうするエリカ？　俺は別に床でもいいけど」

「いえ。このままで構いませんわ。今までは二段ベッドか、別々の寝床で寝ていましたものね……。ときには同じベッドで寝るのも良いものですわ」

エリカはやや頬を赤くするも、満更でもない様子だ。
「そ。そうか」
「それにしても」
エリカは広く部屋を見渡す。
「ここが、貴方のお部屋ですか」
「4年は使ってないけどな」
しかし、母親が定期的に掃除してくれているのか、ホコリ一つなく、レッドがマサラから旅立った時のままである。
勉強机に本棚、ベッドに液晶テレビと、一般的な子供部屋と同じ作りと広さである。
「ほう……なるほど」
エリカはまっさきに本棚へと近づいた。当然と言うか、なんというべきか、並んでいるのは使い古された漫画本か、それに比してやけに真新しい百科事典や参考書の類だった。その他にはポケモンバトルの大会などを収めたＤＶＤのアルバムが大量にあった。
「な、なんだよ」
「思っていたよりは。ご本の数が多いと思いまして」
「どうせエリカには勝てないさ。お前の部屋にある本なんてさぞかしすごいんだろうな」

「いえ。私の部屋の本棚はここまで多くはありませんわ」
「え？　そうなの」
　レッドは汗牛充棟とばかりに列せられているのを想像していたため、思わず聞き返した。
「我が家には書庫がありまして、読む分は予め申し付けて、寝る前にもってきていただいてますわ」
「あ……あぁ。そう」
　聞く相手が悪かったとレッドは大いに後悔した。
「しかし本読むにも事前に言わないといけないのか。面倒なんだな」
「申しつける時は数十冊単位ですから、一人ではなかなか難儀しますの」
「す、数十冊!?　それ一日でよんでるのか？」
「まさか。流石にそこまでは……」
　じゃあ何日で読んでるのか聞き返そうと思ったが、みじめになるだけなので思いとどまるレッドであった。
「あ、Ｗｉ－ｉだ！　母さん残しといてくれてたんだな」
　レッドは唐突に話を本棚の隣にあった、液晶テレビの下にあるゲーム機の方にうつした。

「あら？　ゲームキューブではないのですか……？」
「え!?　お前ゲーム機わかるの？」
　どうせ気にもかけないだろうと思っていた、エリカからの意外なリアクションにレッドは思わずやや大きな声を出した。
「まあ、バカにしないでくださいまし。これでも学生時代や、ジムにいるトレーナーなどから情報は仕入れているのですよ」
「にしては、情報が旧世代なんだなお前……。まあ俺も、ゲームからは離れて時間経ってるから人のこと言えないけど」
　既にこの頃には、Ｗｉｉより新型のゲームハードがでていることはレッドでも小耳に挟んでいた。
　レッドはテレビ台の下からＷｉｉとコントローラーを取り出して、しげしげと懐かしんでいる。
「これがコントローラーですか。それにしては変わった形ですわね」
「そうだねー。あ、そうだせっかくだしエリカもちょっとゲームしてみるか？」
　そう言って、レッドは2つあるｗｉｉリモコンの一方をエリカに向ける。
「宜しいのですか？　私、友人がやっていても後ろからみているばかりで、ほとんどやったことはないのですけれど」

「全然！　俺、初心者にゲーム教えるの好きだし」
　というわけで、レッドは何本か持っているソフトで、エリカと二人でテレビゲームをすることになった。
　しかし、ちょっとのつもりがいつの間にか夜更けになり、いつの間にか二人は寝入ってしまった。
――

―12月20日　午前10時　レッドの部屋―
　二人は母親に叩き起こされ、朝食を食べた後、昨日半端に終えてしまっていた荷物整理を再開していた。これを終えたらマサラをたつ予定である。
「まさか夜3時までやることになるなんてな……」
「ええ。ですけど分かりますわ。なかなか止め時というものがありませんもの。ハマってしまうのもうなずけます」
　二人とも荷物を選り分けながら昨夜のことをやや後悔していた。
「でもお前センスあるわやっぱ。最初はなかなか出来なかったあのハメ技、最後の頃にはできるようになってたもんな」
「傍から見てるととてもできる気がしなかったものですが、慣れてしまえばどうにかな

るものですね」
「こりゃあほんと時間さえあったら俺なんかあっという間に抜かれるかもなあ」
と言いながらも、内心ではエリカに優位を取れる事が増えて得意になっているレッドであった。
「うう……。次は絶対に負けませんから」
「ま。せいぜいがんばれ。あ、そういやこのへんの防寒具ってもう流石にいらないよな？」
こうしてあと小一時間、二人は荷物整理を行い、出立の準備を進めていった。
――
―午後2時　マサラタウン―
荷物整理を終え、寝足りない分を少し昼寝した後、二人はいよいよ故郷から出発する。
「久々に帰ってきたんだから、もっとゆっくりしていけばいいのに」
母親はやや名残惜しそうにそう言う。
「それもいいけど、長ければ長いほど、旅立ちが辛くなるからな。一日も休めば十分だよ」
「そう……。まあ、レッドがそういうならいいけど」
母親はそう言って、これ以上の逗留を求めることをやめた。

「お義母様、旅が終わりましたら色々とご迷惑をかけることもあるかもしれませんが、その際は何卒」
「いいのよエリカさん。前も言ったけど、本当に逆玉もいいところなんだから、大歓迎よ」
母親はエリカにニコニコと笑いかける。
そして、母親はレッドにしっかりと向き合って言葉をかけた。
「気をつけなさいね。レッド。エリカさんをきちんと引っ張っていきなさいよ……、まぁ、エリカさんの気性をみた感じ、アンタがひっぱられるのがオチだろうけど」
レッドは図星で、まったく言い返せなかった。
「お義母様、どうか御達者で」
「そちらこそ、怪我とかしないように……ね」
そう言って、二人は家から歩み始める。が、3歩ほど歩いたところでレッドは立ち止まって振り返った。
「母さん、次に来るときこそ、ポケモンマスターになって帰ってくるよ」
そのレッドの答えに対し、母親は
「無理せずに、頑張りなさいよ。あんたは、きっとやれるよ。だって母さんの子だものね！　それじゃ、行ってらっしゃい」

と、にこやかに返した。
こうして、二人は今度こそマサラタウンを去り、最初のジムのある街、ニビシティへと向かうのであった。
―12月某日　イッシュ地方某所　ロケット団臨時本部　5階―
ロケット団はまたもある場所で幹部を集めて、会合を行っていた。
中央の卓上モニターには、例の爆発事件の映像とニュースが映っている。
「リーグはようやく、警察に検証させる気になったようですね」
「今更何をしたところで遅いですけどね……。しかしラムダ、久々によくやってくれました。まさかあんな堂々と変装して、このファイルだけ盗んでくるとは。サカキ様も大変に激賞しておられましたよ」
アポロはそういってラムダを珍しく褒めてみせた。
「なあに、俺が本気出せばこんなもんよ。服用意すんのはちょっと手間だったがな」
アポロの前には一枚の紙とゼムクリップで写真がとめてあった。この紙一枚を奪うためにわざわざロケット団はあの騒動を引き起こしたのである。
「でも、こんな写真一枚に、しかも背景に目立たず写ってるくらいのあの爺さんの写真なんかでわざわざ騒ぎ起こす必要なんてあったの?」
紙はシロナがあの秘書に回していた資料の一枚で、写真はイッシュ地方のヒウンシ

ティの一角を撮影したものであった。被写体はなんのことはない大都会のヒウンに行き交う人々であったが、そのなかの一人にオーキドと思しき人影が写っており、本人もまさにエンジュからこの本部に移動してる間を撮られたものと認めたものであった。
「アテナ、前にも言った通り、あの国においてはオーキドは完全に逐電したことになっています。シロナが仮に気づいていなかったとしても、あの写真つき資料がマスコミやジムリーダーなどに知れ渡れば、オーキドなのでは？　という憶測を生んでしまいかねないのです。だから先手を打つ必要があった」
「いやそれは分かるんだけど、やっぱり、なんだか割に合ってないって感じがするのよねー」
　アテナはどこか不興顔である。
「なんだぁアテナ。俺が手柄たててそんなに悔しーんか？」
「調子に乗るんじゃないの！」
　アテナはそう言って、ムチを一発ラムダに食らわした。
「いってえな！　やりやがったな」
　そんな応酬を聞き流しながら、アポロは話を続ける。
「さて、それはそれとして、サカキ様は再び、ヤマブキのシルフカンパニーを再度――」
　―同本部　オーキドの部屋―

オーキドはいつもの通り、モニターを多数並べ、レッドとエリカの行動を逐次監視していた。

そしてふと、画面を見ながら彼は一言呟いた。

「あの家の主になるということがどういうことか。分かっておるのかのう。レッドくんは……」

そう言ってオーキドは好物のプリンを一口、口に入れた。

―第三十五話　帰郷　終―

第三十六話　膨張

―12月20日　午後2時　シンオウポケモンリーグ　チャンピオンの間―

「ヴァァ……ッ」

シロナの持つガブリアスは、ゴールドのマニューラが放った冷凍パンチによって、ついにとどめを刺され、その地に伏せた。

「やった……。よくやったマニューラ!!」

そう言って、ゴールドはマニューラの頭をつかんで思い切り撫で、喜びを伝えた。

「流石は、あのレッドさんにも比肩する実力を持つトレーナーね。その実力は全国広しといえど、片手にはあまりそうね」

シロナはガブリアスをボールに戻しながら薄っすらと微笑んで、その実力を讃えた。

「ありがとうございます!!」

「さて、君はこれから殿堂入りの手続きをすることになるのだけど……、その前に一つ伝えないといけないことがあるの」

「は、はい？　何でしょうか」

ひとしきり喜んだ後、ゴールドはマニューラを戻して尋ねる。

「本当なら、君はもう条件を達成してイッシュ地方に行けるはずだったんだけど、この前の選挙でね、レッドさんの最初に回った地方であるカントーのジムリーダーから、自分たちだけ本気で戦えないのはズルい!!　って文句が出て、それでもう一周カントー周って来るようにって事になったのよ」

「えっ……。それってもしかして」

　ゴールドはすぐに感づいた。

「ご明察。カントーはいいのに、ジョウトはダメってことはないだろう!　って、今度は君の所属してる地方のジムリーダーから文句が出て、つまりね」

「僕もジョウトのジムバッジもう一回取り直してこいってことですか?」

「うん。まあ、早い話がそういうことね。特にイブキさんあたりが凄い剣幕で再戦熱望してたらしくてねぇ。何かあったのかしら?」

「アハハハハ……。まあちょっと」

　ゴールドは龍の穴まで、わざわざ長老の試験に出向かされたことを想起して苦笑いをしていた。

「ああやっぱりそうなんだ。まあ、そういうことだから、ちょっと遠回りにはなるかもしれないけど、もう一回バッジを取って、ポケモンリーグに行って、理事ちょ、いや、ワタルさんから渡航許可証を貰えれば、今度こそイッシュに行ける手筈になるはずよ」

「もしかして、その口ぶりからすると」
　シロナは一度首を縦に振る。
「もちろん、セキエイリーグも四天王とチャンピオンを倒す必要があるわ」
「やっぱり……。でも僕は構いません！　やっぱりフェアじゃないですからね。そーいうのって」
「理解が早くて助かるわ。こちらの都合で申し訳ないけど、よろしくね。さ、ゴールドさん、ついてきて」
　そう言ってシロナはシンオウリーグ最奥部にある、殿堂入りの間へゴールドを導き、その手続を済ませた。
　―午後3時　シンオウリーグ　入り口―
　殿堂入りの手続きを済ませ、ゴールドは雪の降り積もる入り口に出た。やはり、冬に本格的に入っただけあり、相当に冷え込んでいる。
　とりあえずジョウトへ向かうため、ヨルノズクを出そうとモンスターボールに手をかけると、着信音が鳴り響いた。
　ゴールドはポケギアを取り出し、電話に出る。
「はい、ゴールドですけ」
「あっ！　ゴールド!?　久しぶりー元気してた?」

電話の相手は恋人のカスミであった。彼にしか聞かせない甘い声色で彼女は続ける。
「聞いたよー！　もうシンオウリーグの殿堂入り済ませたのよね？　さっすがマイダーリン」
「さすが、耳が早いね。ありがとう。でもまだまだこれからだよ」
ゴールドは感謝の意を伝えつつも、感情は抑えた声色でそう返した。
「そういえば、リーグからのお知らせが回ってきたんだけど、レッドはカントーもう一回回る事が決まったのね。それで、もしかしたらゴールドもって……」
「うん。僕もジョウト周ることになったよ」
「それじゃあ、すぐ近くに来れるのね！　うれしー！」
カスミは心底嬉しそうな声色だ。今にも通話口から飛び出して抱きつきかねない勢いである。
「今度はいつ会えるかな？　カスミの家、まだ2，3回しか行ってないしまた機会あれば……、あ、そうだクリスマスとかどうかな？　もうすぐだしさ」
ゴールドが尋ねる。やはり、ホウエンでの一件以来、会う頻度は大幅に減らしただけに、尚更カスミに会いたい気持ちはある。
「え!?　そ、そうね……」
急に具体的な日どりを指定すると、カスミはそれまでの調子から、一瞬言葉を濁した。

「あれ？　どうしたの？」
　カスミはそれからやや間をあけて返す。金属の擦れた音や、乾いたタップの音などが聞こえたため、予定を確認していたのだと推測される。
「ごめん！　ちょっとクリスマスはハナダのイベントとか、ジムの方で色々予定詰まってて、空けられそうにないの！」
　パン。と、勢いよく手を合わせる音がした為、彼女が電話越しで謝っているのがゴールドにも伝わった。おそらくハンズフリーモードなのだろう。
「えー!?　せっかくのクリスマスなのに……」
「ほんっと～～にごめんなさい！　そのかわりなんだけど、年末年始とか、ダメ？」
「うーーん。分かった。旅とか修行の事もあるからまだ確定はできないけど、なるだけ会えるようにはするよ」
　そういうわけで、ゴールドはカスミと会う予定の日時を大まかながらも詰め、それからする予定のことを話し合ってポケギアを閉じた。
　ゴールドは、会う日のことを想像するだけで胸が高鳴って、思わずニヤついてしまった。
「よう」
　気がつくと、目の前に赤毛の少年がいた。シルバーと名乗る、ゴールドを一方的に追

いかけ回している人物だった。
「あっ、シルバー！　ひさしぶ」
「随分と楽しそうだな」
「え？　聞いてたの？　参っちゃうなあ……」
ゴールドは照れ隠しに頬を掻いた。
その様子にシルバーは何が気に食わないのか、その形相を一気に強張らせる。
「フン。そうやって浮ついてりゃいいさ」
そう言って、シルバーはゴールドの横を通り過ぎ、リーグの入り口へ近づく。
「あ、あれ？」
いつものように勝負はしかけないのかと、尋ねる前に
「今のお前とやる気はない」
と捨て台詞を吐き、彼はリーグ内へと消えていった。
「なんだい。まだリーグ制覇すらできてないじゃんか……」
そうこぼしながら、ゴールドは今度こそヨルノズクを繰り出し、南の方向へ飛び去った。

――

マサラタウンを出発したレッドとエリカ。

二人が最初のジムリーダー・タケシの居るニビシティを目指している最中、1番道路を抜けた先にあるトキワシティを宿にすることにした。

―12月21日　午後4時　トキワシティ―

「ふう。ようやくついたな。しかし、どこか前とは変わった気がするな」

街の入り口に着くと、レッドは伸びをしながらそう言った。

「ええ、最近はトレーナーハウスという腕試しの場が出来たそうですわ」

「ほう」

レッドは少しだけ関心がありそうな素振りを見せた。

「私も詳しくは知らないのですが。トレーナーの社交場としての機能と、対戦施設として機能しているそうですわ。行ってみましょうか?」

レッドは少し立ち止まって考えた後、

「うーむ。どうもミナモの時のアレがな。いや、ありがたいんだけどさ」

と不服そうに答えた。レッドは、ミナモシティのファンクラブにおける軟禁にも等しい、質問責めを受けたことを思い出して、あまり乗り気じゃない姿勢である。

「左様ですか。では、ポケモンセンターに行き、夕餉に致しましょうか。本日は冬至ですわよ」

「おお、もうそんな日か。どうりで辺りが暗いなぁと思ったら。今日はカボチャの煮物

とかか？」

　レッドは心を踊らせながら、晩御飯について尋ねる。冬至を迎えていたため、もはや周りは茜色にそまり、夜闇を迎える準備すらはじめていた。

「そうですわね。しかし、南瓜だけですと寂しいですから、寒鰤や大根なども仕入れておきますわね」

　エリカは、冬至の寒さで手袋越しとはいえ悴む手に、白い息をふうと吹きかけながらそう答える。

「あーいやでも。悪い、その前にジム訪ねていいか？　挑戦はしないけど、せっかく来たんだしグリーンの顔ぐらい見ておきたい」

「え……」

　彼女は先程までの穏やかな表情から、にわかに相貌を歪ませる。

「どうした？」

「それは、私も同行しなければなりませんか？」

　エリカは難色を示している。レッドは彼女がグリーンのことを、生来の性格に加え、オーキドの孫ということで好ましく思っていないことを失念していた。

「あぁ……。ま、そうだな。じゃあ、お前は先にポケセンに行って飯作っててくれよ」

「承知いたしました」

そういう訳で、レッドはエリカと別れ、一人でトキワジムへ向かった。
―午後４時２０分　トキワジム前―
「おお……。君は確か４年ほど前にも会ったかの」
レッドが記憶をたどりながらようやくジムの前にたどりつくと、入り口の近くで徘徊していた一人の老人が懐かしげに目を細めながら話しかけてきた。
「え？　すみませんどちら様でしたっけ？」
レッドはとりあえず思い出そうとするも、失念してしまったため申し訳無さそうに返した。
「なんじゃ。覚えておらんのか……。まあよいわ。しかし残念だの。ここにリーダーはおらんよ」
「え？　本当ですか？」
「うむ」
老人ははゆっくりと頷いた。
「どうして居ないのか、事情とか聞いていませんか？」
「さあ。知らんのう。しかしどうしてトキワのジムリーダーは、落ち着くという事を知らぬのか……」
そう愚痴に等しい文句を連ねながら、老人は立ち去っていく。

玄関口のライトは点灯しており、出入り口にあたる自動ドアのセンサーは緑色を示している為、ジムそのものは営業しているようだ。

しかし、モラトリアム向けの臨時リーダーなどに用はないため、レッドはそのまま踵を返して、ポケモンセンターへ戻った。

―午後7時17分　ポケモンセンター―

「グリーンの奴、いなかったわ」

夕食を済ませ、洗い物をしているエリカにレッドは話しかけた。

「あら。左様でございましたか」

「全くどこに行ったんだかな。ま、あいつの事だからまた女の尻でもおっかけてるんだろうが」

言ったと同時に、エリカがくすりと笑っているのが聞こえた。

「なんだ？　なんかおかしいか？」

「いえ。貴方でも、そのような事を言うのだなと」

「え？　あ、まあな。あいつとはなんだかんだ古い付き合いだから」

レッドは腰掛けた椅子から立ち上がり、手持ちを何体かモンスターボールより出し、世話をはじめた。

「ポケッチでお電話はされたのですか？」

「いや。居るなら顔を合わせたかっただけだから、別にいいかって」
「しかしそれでは挑戦したい時にお困りになるのでは」
「どうせあいつは8番目だし、その時がくれば何かしらあるだろ」
と、レッドは特に根拠もなく言って見せる。
「そんな曖昧な……。あの、私からナツメさんにそれとなくお尋ねしてみましょうか？ジムリーダー同士ならばなにかしら」
食器を洗い終わり、続いてお茶を淹れながら尋ねる。
「いい。そこまでしてもらったら悪い」
「しかし」
「いいから。余計なことはするなよ」
レッドはやや強めの語気でそう言う。彼にとってはやや虫の好かないところもあるとはいえ、大切な友人であるため、いかにエリカとはいえそのあたりの領域を踏まれるのは快くは思わなかった。
「そうですか。貴方がそう仰せならば……」
彼女はそう言って、やや寂しげな視線を送りながら皿洗いを再開した。
―午後8時3分―
レッドが風呂に入ってる間、エリカのポケッチに電話がかかってきた。

相手はナツメで、選挙の定例会以来の会話であった。
「まあ。そうですか、シロナさんは戒告と30%の減給1年と……」
「理事長はそれで済ますみたいね。あれだけの事をして、それでも副理事長にとどめておくなんて随分と甘ちゃんだと思うんだけど」
「今やリーグにシロナさんは欠かせませんから、ギリギリの重い処分を出すしかなかったのでしょう」
「そう……。ま、私にはどうでもいいけどね」
そういってナツメはやや間をあける、何か飲み物を飲んだのだろう。
「それにしても選挙なんて、めんどくさいだけね。理事長なんて勝手に選んでおけばいいのに」
「しかし、ヤマブキジムはリーグからの支援金で運営しているのでしょう？　無関心ではいられないと思うのですが」
「いいのよ。もらえるものは貰ってるだけで、いざとなれば支援金なしでもエスパーはいくらでも稼ぎ口があるんだから」
ナツメは涼やかな声で軽く笑いながらそう言ってみせる。実際のところ、エスパー使いにはその超能力を用いたまともな雇用先や生計手段がそれなりに用意されているため、食うには困らないのは事実である。

「まあ。案外たくましいのですわね」
　エリカもまた友人の勇壮ぶりに口元を緩ませてにこやかに笑った。
「さて、そんな話はともかく、本当にレッドとこのまま旅を続けるつもりなの？」
「ナツメさんもいい加減しつこいですわ。まだ見定めると申し上げたはずですが」
　エリカはややうんざりしたような声色で返すが、ナツメはそれを遮って続ける。
「あの……レッドには言ってあるの？」
「え？」
「私とあんたが昔その……、恋仲だったこと」
　ナツメは、鉛でも含んでいるかのような口調で切り出した。
「あぁ……。いいえ、それが何か？」
「何かって、話さなくていいの？」
　ナツメの声が少しだけ張り上げられる。そこには本当にいいのかという念押しが混じっていた。
「ナツメさんとそういう仲にあった事は事実ですが、同性なのですし、別に話す必要はないと思いまして」
　エリカは少々沈思して間を置いたものの、事もなげに言う。
「で、でも、レッドにとってはやっぱり大事なことなんじゃないの？」

「そうでしょうか？　話したところで夫に余計な不安をさせるだけに思いますわ」
「私がレッドの立場だったら、やっぱりそういう遍歴は例え同性相手だとしても、話して欲しいわね。それが信頼ってものじゃないの？」
　ナツメはやや言い繕った風の様子でたどたどしく言葉を紡いだ。
「そういうものでしょうか」
「うん……」
「随分と小さいお声ですわね」
「え？　そう？」
　それから10秒ほどエリカはおとがいに手を当てて思考し、ふうと息をつき、
「分かりましたわ。折を見て、夫には話してみますわ」
　とナツメの提案をとりあえずは承諾した。
　それから3分ほど話して、通話は切れた。
　―ヤマブキシティ　ナツメ宅　リビング―
「これでいいのよ、これで……」
　ナツメは切れた通話音を鳴らし続けるポケギアを下げて、そう一人呟き、飲みさしの栄養ドリンクに口をつけた。
――

こうしてレッドとエリカは、冬至の日をトキワシティで過ごすのであった。
そしてその後も冒険を続け、トキワの森を越えてニビシティに到着する。
―12月24日　午後3時　ニビシティ―
12月24日は、周知のとおり、聖夜前日の日である。
クリスマスは、ナザレ村のイエスが聖母マリアから生まれたとされている日で、キリスト教徒にとっては大事な日である事も周知である。
しかし、キリスト教圏からは遠く離れたここカント―地方でも、いわゆるクリスマスツリーがベツレヘムの星を筆頭にして、ベルやモール等で飾り付けられており、街中が家族連れや恋人達で賑わう日となっていた。
無論、ニビシティも例外ではなく、町中はそういう人々で溢れており、街頭ではクリスマスケーキなどが盛んに売られていた。
レッドは内心、雀躍としていた。
なにしろ、今年は隣に女性を侍らせている。去年はシロガネ山でラジオの讃美歌をバックにして手持ち達と祝っていたが、今年は女性が隣にいるのだ。
彼にとっては望外の喜びであった。世の女性に恵まれない男たちからすれば羨望の的となるシチュエーションで、迎えることができたのである。
「やれやれ、町中は盛り上がってるな」

レッドは高ぶってる内心をみせまいと、平静を装ってエリカに話しかけた。
「そうですわね。なんだかこちらまでソワソワしてしまいますわ」
「俺も。ここまで気持ちが晴れやかなイブは何年ぶりだろう」
レッドはしみじみとした表情で過去を振り返りながらそう言った。
「晴れやか？　どうしてですか」
「そ、そりゃあお前が隣にいるからだよ」
「まあ、嬉しいこと言ってくださいますわね」
そう言いながら、エリカはレッドの左腕に寄り添った。体温が伝わり、血の通った肌を服越しにレッドは覚える。
「エ、エリカ？」
「私も、同じ気持ちですわ。もっとも私にとってはクリスマスを祝う習慣は薄く、それよりもお正月や年末の様々な準備に追われていてとてもこんなゆっくりしてられなかったからですが」
「そ……そうなんだ。でも、なんでだよ。別に普通に祝えばいいじゃないか」
「私からすれば、クリスマスよりもお正月がメインイベントですから」
エリカはやや得意げにそういった。
「正月なんて初詣行って、おせちと雑煮食べてゴロ寝するだけの日だろ」

お年玉なども貰っていたが、なんとなく彼は彼女の前でその話をするのは避ける。
「まあ。そんなことありませんわ。私の屋敷では希望したジムトレーナーも招いて三が日にかけて初詣はもちろん、連歌会や、カルタ大会や書き初め大会、すごろく大会に福笑い、羽つきなど様々な事をして新年を祝うのです」
「なんか後半遊んでばかりじゃないか？」
「遊びも交えて賑やかにやってこそ、新年を心から慶べるというものですわ」
エリカは自信たっぷりに胸を膨らませて言い切った。レッドはこれは何を言っても意味がないことを悟る。
「なるほどねぇ……、さてじゃあ、ニビジム行くか？」
エリカはそれに同意し、二人はポケモンセンターで回復させた後、ニビジムへ向かった。
―ニビジム―
「おお、よく来たなレッド。選挙以来だな」
入り口に入ると、リーダーのタケシは朗らかに出迎えてくれた。
「こちらこそ」
「ここは、落ち着いておりますわね……」
エリカは街の喧騒にややあてられていたのか、安堵したような声をしている。

「外は聖夜だなんだと、浮かれているけど、ジムリーダーたるもの仕事はきっちりやらんといけないからな！」

タケシは腰に手を当てて、威張ったような格好をする。

無理しやがってとレッドは心中で思った。

挨拶もそこそこに、バトルフィールドのあるジムの最奥部へタケシの先導で向かう。

ジムトレーナーがかかってどうにかなる相手ではないと重々承知しているようだ。

「さて、この数年で、レッドがどれだけ強くなったか、そして、約一年の旅でエリカさんはどのように成長していったか、この俺の相棒たる固い岩ポケモン達の前で証明してもらおうか！」

タケシはボールを構える。

「来るぞ」

「ええ、わかっていますわ」

――

レッドは1体失い、エリカも1体喪失したが勝利した。

「いやー。やっぱりかなわないなぁ。よし！　改めてこのグレーバッジを渡そう」

二人は危なげなく、カントー最初のバッジを手に入れた。

「いやー思い出すなぁ。初めてもらった時のあの感覚」

レッドはバッジを高く掲げて、ジムの照明に反射させた。
「今思うとあの時、ここまで強くなるとは思わなかったな」
タケシはそう当時を述懐する。
「あら、そうだったのですか？」
エリカはそれとなく尋ねていた。
「流石にその時点じゃね。でも、確かに強かった記憶はあるな。まぁ手持ちがフシギダネだった事もあるのかもしれないけど、レッドはあの時旅を始めてどのくらいだった？」
「確か、せいぜい二週間くらいだったような……」
「え。そんな早かったのか！」
タケシは細い目を揺らして大いに驚く。
「モラトリアムのトレーナーで、トレーナースクールに通っていても最初のバッジを手に入れるのには半年弱が平均で、1ヶ月で神童と呼ばれるほどですわよ？　本当にそれほどだったのですか？」
隣りにいたエリカも驚きを隠せず、目を大きく見開いてる。
「いやでも本当だって、ほら」
そう言いながらレッドはトレーナーカードを提示する。カードには初回取得日が刻

まれており、多くのトレーナーは旅立ちの日にこれを受け取るため、それが証明となるのだ。

「ちょっと待っててよ。今記録とつき合わせるから」

そう言ってタケシは小型の電子手帳を取り出し、トレーナーカードと見比べながら照合を行った。

「記録とつきあわせるって。そんな何年も前のこと載ってるのか？」

レッドはエリカに顔を向けてやや怪しんだ風に尋ねる。

「ジムリーダーには統計やリーグへの現況報告といった業務の関係上、挑戦者の記録の保管義務が最低10年はありますから、きっと載っていると思いますわよ」

作業はそんな会話をしているうちに終わり、タケシは深く息をつきながらレッドにカードを返す。

「いや参ったよ。確かに、その初回取得日から16日目に俺に勝ってる。すごいな……」

タケシはあまりのことに肝を冷やしているのか、やや引き気味に話した。

「ハハハ……」

「はあ。流石ですわね。ジムリーダーの間で貴方のことが噂になったのは3番目のマチスさんを破ったあたりからでしたから、そのことは初耳でしたわ」

「そういえばそうでしたよね。ここ二十年ほどには見ない早さでジムを破ってるトレー

ナーがいるって、定例会で結構な話題に」
　タケシは当時を懐かしそうに思い出しながら話した。
「初めて会ったとき、そんなこと言ってた気がするな。そうか、そんなにか」
　レッドは心の中の自尊心を更に大きくした。
「ああ。今はトキワのリーダーになってるグリーンとセットで、誰が言ったか紅翠の新星としてちょっとした話題になってたんだよ。ねえ、エリカさん」
「え、ええそうでしたわね。懐かしいですわ。それが今やこうして難なく全力のジムリーダーを破る強者になって、歳月は人を待ってはくれませんわね」
　エリカの口ぶりはこの話を切り上げんとした風の声色だった。グリーンの名前が出た時点でもうあまり続けたくはなかったのだろう。
「そうだな……。おっとそうだ、これから飾り付けしないとな」
　タケシは斜め上の方向をみて思い出したかのように言った。気がつけば、ジムトレーナーたちもそれに向けてか、忙しなく動いている。ジムは早めに店じまいのようだ。
「このジムでクリスマスパーティーでもやるんですか？」
　好奇心からレッドが尋ねる。
「そうだ。毎年街の子どもたちとか、ジムトレーナーを集めてワイワイやるのが恒例なのさ。あ、二人もよかったら」

「リーダー！　それは野暮ってもんですよ！」
　どこから聞きつけたのか、キャンプボーイ風の少年がタケシを遠くからたしなめた。
「おっと……。それもそうだったね」
「い、いえ俺たちはそんな」
「せっかくのイブなんだ。馬に蹴られるのはごめんだからな。さ、そろそろ手伝うとするか！」
　タケシのその声にはどことなく悲愴が混じっていた。彼は二人を掻き分けてわざとらしく飾り付けの準備へ向かった。二人は特にいる理由もなくなったため、タケシの後に続いて外に出る。
　イブをニビで過ごした二人は、次のジムがあるハナダシティを目指して東に進んだ。そして、3日をかけて、おつきみ山に到着した。
　―12月28日　午前11時20分　おつきみ山―
「コイキング売ってたおじさん……、まだいたんだなあ」
　レッドはおつきみ山の前にあった、ポケモンセンターでの出来事を思い起こしている。
「コイキング一匹に500円とはなかなかに強気な値段設定ですことね。生け簀を見た限りではさして優れた個体とは見受けられませんでしたし、本来ならば値がつけられな

いのではなくて？」
「ちゃんと育てればギャラドスになることを思えば、そんなに高いとは思えないけど」
　レッドはコイキングがさして珍しくなく、強いポケモンではないことを知っていたため、初めて会った時は購入しなかった。しかし幾多のバトルや育成を遂げた今思うと、さほどのことではないと考えていた。
「コイキングは自力ではほとんど戦えませんし、虚弱ですから普通のトレーナーだと扱いには手を焼くと聞き及びます。ギャラドスまで育成する手間暇を考えると、間尺に合わない感が禁じえませんわね」
「ま、確かにな。俺も正直そのへんを考えると、買うよりは自分でゲットしたかったからスルーしたってのもあるし……」
　そんなことを話していると、どこからか呼ぶ声がした。
「待てよ」
　ザッ。という音とともにその声の主は現れる。赤毛の少年は、炯々とした眼光を走らせながら、レッドに相対した。
「お前は確か」
　レッドも、その特徴ある外見からすぐに誰かを思い出せた。
「シルバーさん」

エリカにシルバーと言われたその男は、少し驚いたような表情を見せ、
「フン、覚えていたか」
と、言いながら襟のあたりを左の指で触り、相変わらずの人を寄せ付けない態度をとる。こちらと友好的に接する気はないらしい。
「何だまたやられに来たのか？」
レッドは帽子を目深に被り直し、相手の態度相応の言葉を返した。
一方、シルバーは蝿が止まったほどにも意に介さず、続ける。
「俺はあの時、レッドから逃げて以来、俺には何が足りないのか……、ポケモンと共に懸命に考えてきた」
「ほう」
レッドは少しだけ関心を払った風な声で返す。
「それで見つけ出した答え、お前にみしてやる……。俺は、お前を、倒す！　行け、クロバット！」
「めんどくさい奴……。まあでも勝負は受けて立とう！　行け、リザードン！」
リザードンとクロバットがそれぞれ向き合う。双方ともに様子をうかがい、主人の指示を静かに待っていた。
「リザードン。クロバットに火炎放射」

クロバットにリザードンの吐き出した火焔が凄まじい速度でクロバットに襲いかかる。

「クロバット、あやしいひかり」

クロバットは一撃目を持ち前の速さを生かして回避し、死角に回り込んで照射する体制をとった。

しかし、炎は追尾を続け、照射したタイミングとほぼ同時にその直撃を食らってしまう。

「よし、そのままブレイブバードだ！」

すんでのところでもちこたえたクロバットに対し、シルバーは表情を動かすことなく、ブレイブバードを指示。

「リザードン！　惑わされるな、そのまま続けろ」

レッドは混乱状態に陥ったリザードンにそのまま火炎放射を指示した。

リザードンは頭を左右に振り、二回目の火炎放射をクロバットに放つ。火だるまになったクロバットが相手の身体に直撃したはいいが、もはやダメージに堪えきれず、そのまま地に伏した。対するリザードンはそれなりのダメージは受けたものの、まだ余裕をもって戦えそうである。

レッドは内心胸をなでおろし、前の威勢を取り戻した。

「ふっ……。そのクロバットじゃ脆いな。シルバー」
シルバーはレッドの挑発には何も答えず、即座にクロバットを戻し、次にゲンガーを繰り出した。
「ゲンガー！　影分身だ！」
「リザードン！　もう一回火炎放射だ！」
リザードンは火炎放射を放つが、それはゲンガーの作り出した幻影にあたってしまった。
「何っ……」
「ゲンガー、シャドーボール」
ゲンガーは瞬時に姿を消し、リザードンの直上に現れた。
「リザードン！　反対方向に空を飛ぶんだ！」
リザードンはすぐさまゲンガーとは反対方向に飛び上がり、高度の優勢を取ろうとした。
「ゲンガー。そこだ！」
ゲンガーはまたすぐに姿を消し、今度はリザードンの腹の下に現れる。
ゲンガーはリザードン自身の影と同化し、ほとんど保護色状態になっていた為、レッドも、リザードン自身も認識できず、ゲンガーの生成したシャドーボールをまともに食

らうことになった。
　シャドーボールはそのままリザードンを洞窟の天井に否応なく追いやり、体ごとしたたかに打ち付けさせたところで消滅。リザードンはそのまま自重で地面に落下し、倒れ伏した。
「そ、そんなバカな」
「混乱したポケモンをそのまま何も考えずに場に出し続ける……バカなのは、お前だ。ゲンガー、もう一発」
「リ、リザードン！　シャドークローだ！」
　しかし、リザードンは起き上がらず、突っ伏したままだった。
「何やってんだよ！　お前まだ体力失ったわけじゃないだろ。早くゲンガーに」
　ゲンガーはまたすぐ側に姿を現し、至近距離からシャドーボールを見舞わせようとしていた。ゲンガーは高らかに笑い、今にもとどめをさしそうである。
　しかし、その次の瞬間、ゲンガーの悲鳴が当たり中に響いた。弾き飛ばされたのである。
「腹が、ガラ空き」
　リザードンはそう言いながら、ゲンガーの腹部をえぐったその闇に染まった爪をそのままの様子で誇示した。リザードンは倒れたフリをしながら隙を伺い、シャドークロー

でゲンガーを引き裂いたのである。倒れていたのも地面に衝突する直前で翼を動かし、衝撃を殺したようだ。

至近距離からの一撃はレベル差もあいまって、ゲンガーを沈黙させるには十分だった。

「ちっ」

シルバーは舌打ちをしながら、ゲンガーを戻した。

「俺のリザードンに舐めてかかったお前のミスだな」

レッドは先程の焦りからは落ち着きを取り戻し、シルバーを得意になって煽った。

――

「3体倒したか。俺に挑むだけの事はあったが、所詮はそんなものだな。シルバー」

シルバーはそんなレッドの軽侮するかのような発言を聞きながら、最後に繰り出したオーダイルを黙って戻した。

「何か俺に言うことがあるんじゃないのか」

「は？」

「俺にあんなイキがったこと言っといて、そんな態度でいいと思ってるのか。トレーナーがそんな身の程知らずじゃ、ご自慢のポケモンたちがかわいそうだ」

シルバーはそんなレッドを冷めきった眼で数瞬見た後、

「何があったんだ」
「何がとは？」
「竜の穴で戦ったときはまだ……」
「だから何の事だ」
　レッドの変わらない態度を見て、シルバーは嘆息をつく。
「もういい。じゃあな」
　そういってシルバーはその場から去ろうとした。
「あ、いや待てシルバー」
「なんだ？」
　レッドはどうしてもシルバーに一つ気にかけていたことがあった。
「なんでゴールドにそこまでこだわるんだ」
「話す義理はない」
「わざわざ地方をまたぐなんて、普通じゃないぞ」
「そうですわね。確かに、シルバーさんはゴールドさんと同じくらいの時間で16枚のバッジを手にしていますし、さる事情からそのこだわりのために、ゴールドさんほどではないとはいえ、相当な実力を早い時間で身につけたのは確かですわ」
　今まで口をとざしていたエリカが、興味深げな口調で話す。

「俺はあいつには負けてない。最近じゃ勝てるようになってる」
「え？」
「だけど、その時のあいつはらしくなかった。ゴールドは本当はもっとやる奴のはずだ……。浮かれているせいなのか知らないが、全国を廻るようになってからのあいつは、まるで別人だ！」
　シルバーは訴えかけるかのような口調でそう言い切った。
「もしかしてホウエン地方の頃の話ですか？　あの時とはまた変わったように思いますが」
「最近は少しはマシになったが、まだ足りない……。あんたには、そういうのはねーと思ってたんだがな」
　シルバーはレッドを睨めつけながら言う。相当な落胆がうかがえる。
「俺は、もう一度本気のゴールドと戦う。あんたじゃもう、最強のトレーナーを目指すという道の上じゃ用をなせねーからな」
「その用をなせない相手に普通に負けてる癖に何を言ってるんだ」
　レッドは半分怒りの感情を含んだ声で返した。
「フン、今にわかるさ」
　そう言ってシルバーは本当に去っていった。洞窟に吹くかすかな風になびく赤髪と、

その背中からは訣別の意思が強く伺える。
「なんなんだあいつは」
「きっとシルバーさんなりに思う所があったのでしょう。しかし、私一つ思ったことがあるのですが」
「なんだよ」
「もしかしたら、シルバーさんのあの強さは、ゴールドさんとの戦いで培われたものではないでしょうか。元々、その……、シルバーさんはあのサカキの子息ですし、一時はジムリーダーまで務めた人物の子というのを考えると相応の資質は元々あったのでしょうし」
「資質、か。なるほど」
　レッドはナナカマドより言われた天賦戦闘資質論の話を思い起こした。もしかすると幾多の戦いを経て伝染したのかもしれない。そう思ってレッドは腑に落とした。
「しかし貴方、このところ少々傲りが言動よりうかがえるように思うのですが」
「お前もそう言うか。そうか、傲りか……」
　そう言ってレッドは低く笑って、洞窟の奥深くへと進んでいく。エリカもその後に続く。
　こうして長きにわたった２０１３年は暮れていき、新たな年を二人は、迎えていく。

二人は洞窟を2日かけて進み、おつきみ山で大晦日を迎え、ハナダシティに到着する。

―第三十六話　膨張　終―

第三十七話　すれ違いの緒

―２０１４年　１月１日　午前０時　ハナダシティ　ポケモンセンター―

「鐘、これで６８回目でしょうか」

「お、ちょうど今。年を越えたな」

レッドはなんとなく流していたテレビの様子を見ながら、そう言った。

彼らは今、ハナダシティに居る。大晦日の１７時頃に到着し、年越しそばをソバ屋で食した後、こうしてポケモンセンターの一個室で除夜の鐘の鳴る中、新年を迎えたのである。

「明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします」

エリカは三つ指をついて、レッドに恭しく言う。

「そんなにかしこまらんでも……。まあいいか、こちらこそ宜しく。それにしても外。盛り上がっているなぁ」

外では神社に初詣に行く人、新年のセレモニーを見る人でごった返しており、二人のように屋内にいる人の方が少数派であった。

「私は例年ならばジムトレーナーを引き連れて初詣に行っているのですが……。今回は

旅行という事で、氏神様も許してくれましょう」
と、エリカは眉根を寄せ、微笑みながら言う。
「ハハハ……、寛容な事だ。それにしても、いよいよ新年かぁ。去年の今頃こうなるとは思いもしなかったよ」
レッドは少し嬉しそうに言う。
「私も同様ですわ。何しろ、貴方がシロガネ山で籠居しているという事を知ったこと自体が、2月のはじめぐらいでしたもの……」
エリカも思うところは同じようである。
「俺、あの頃は極力人里に降りないで生活してたからな。そういやジムの人たちとかは今年はどうしてるんだ?」
「ナツキさんに全ては任せてありますわ。まあ私抜きで例年どおりやるでしょう。月例報告でのお電話の際もそのようなこと仰せになってましたし」
「そうなのか。まあエリカの部下ならそつなくこなすだろうな」
そう言うとレッドは大きくあくびした。
「さて、明日もあるし、そろそろ寝るかぁ……、おやすみ」
レッドはそう言うと、座っていた椅子から立ち上がり、布団に潜る。
「おやすみなさいませ」

レッドに挨拶した後、エリカも日課である日記をつけて床についた。
―午前8時　ハナダジム前―
レッドは起きてすぐ、カスミに挑む為に、エリカが制止するのも無視してジムにたどり着く。
しかし、そこには出入り口の自動ドアにコート紙で作成された、『謹賀新年』と大きく墨書風に印字された貼り紙があり、そこには更に、3日まで休業する旨が書かれている。
「だから申し上げましたのに……、ジムリーダーだって休む時は休むのですよって。私のジムも4日までは休みにしていますし」
「分かってたんだけどさぁ……、どうも体が急いじゃって」
レッドはそう自らの軽はずみな行動を後悔する。
「もう、仕方ありませんわね。三が日くらいは休んでも宜しいのではないですか？」
「いやぁ。戦闘の勘はできるだけ鍛えないと衰えちまうし……、そうだ、ハナダの洞窟に行ってみるか」
レッドはそう思い立ち、ハナダの洞窟へと向かう。
―午前10時20分　ハナダの洞窟　入口―
「ここは、強いトレーナーのみが」
「はい」

レッドは、番人に対し、32枚のバッジが揃ったケース、それに加えチャンピオンを破った証となるリボンを見せる。
「も……申し訳ない。規則なもので。どうぞ」
そういう訳で二人は、洞窟の中に入る。
「いやー、あの番人の目を回した顔、なかなかに見ものだったな……」
レッドはエリカにそう話しかける。
「32枚のジムバッジを持っている人などそうは会わないでしょうからね。それにしても、ここは初めて来ましたわ。巷間では音に聞く強者の野生ポケモンの棲家とは聞き及んでおりますが……」
エリカは、興味津々な物言いである。
「まあ、俺は三年前、ここに来たんだけどな。実をいうと、一つここには心残りがあるんだ……」
「あら、何ですの？」
エリカは、身を近づけて、興味ありげに尋ねてくる。その様は可愛らしく、つい言ってしまいそうになったが、レッドはなんとか抑えつけて
「ついてくりゃ分かるさ。エリカ、離れるなよ。お前一人の力ではどうにもならんかもしれないからな」

と、エリカにあらかじめ忠告した。
「まあ。私とて一応ジムリーダーですのに」
「いいから。経験者の言葉だぞ」
そういうとエリカは僅かに微笑んで、
「承知いたしましたわ」
と返答した。
こうして二人は、手持ちを活用しつつ、ハナダの洞窟を探索し始めるのであった。
―午後3時　ハナダの洞窟　最奥部―
「あれ?」
レッドは最奥部のとある所で立ち止まり、左右を見る。
不思議に思ったエリカが尋ねると、
「いや、ここに確かここいらにミュウツーというポケモンがいて、あいつにはなかなか骨を折らされてさ」
「ミュウツーって、あの人間による遺伝子研究の被害ポケモンとして知られるあれでしょうか?」
エリカはそれとなく尋ねたが、レッドがそんな事を知るはずもなく、
「あぁそうそう……。そんな奴」

と知ったかをして続ける。
「で、今回こそはと思ってきたんだけど、どうしてたか居ないみたいだな。何があったんだろうか」
「興味深くはありますけれど。もしかしてゴールドさんが捕まえたというのは？」
エリカはそう尋ねたが、レッドはそそくさに
「それはない。ゴールドは確かにここまで来れるほどの実力はあるが、俺ですら一度は持て余した相手だ。俺に負けたあいつが捕まえられるハズがない」
と、あっさりその可能性を否定した。
「それもそうかもしれませんわね」
エリカは合点がいったのか、何も反論しない様子である。
「しかし、それにしても気になりますわね……。明日もう一度来てみましょうか？」
「いや、ここには居ない気がするし、結構大変だからいいよ」
こうして、二人は穴抜けの紐を使って、洞窟の外に出、モヤモヤした心持ちのまま、ハナダに戻った。
―午後３時３０分　ハナダシティ　入り口付近―
特に行くあてもないので、自転車屋の跡地を見て懐かしんだりしていると、思いがけない人物に出会った。

「あれ、もしかして、レッドさん？」
　話しかけてきた少年は、黄色と黒のツートンカラーの帽子を被っており、レッドやエリカにはすぐに知れた。
「おう、ゴールドか。明けましておめでとう」
「こちらこそ、おめでとうございます！　今年も宜しくお願いします。お二人もイッシュへの時間稼ぎですか？」
　ゴールドの尋ねにレッドが答える。
「そうだ。お前はジョウトに居るんじゃ無いのか？」
「ええ、そうです。それで、コガネまで行ったんですけど、正月休みの上に、アカネさんが休暇を取ってお休みしているそうなんで、産休明けの日までカスミさんとゆっくりしようかなーなんて思い、ちょっとカスミ当人には具体的な日時は内緒でここに来ました」
　と、喜々としながらゴールドは言葉を紡いだ。
「そうなのか。じゃあ、せっかくだし、俺と戦うよう渡りをつけてくれないか？」
「ええ。久しぶりにやっと会えるのに……」
　ゴールドはレッドの提案に難色を示す。
「不躾な頼みだとは思いますわ。ただ、やはりバッジを取るのに早いに越したことはあ

りませんし」
そう言って、エリカがゴールドに視線を送った。そこからは請願の意が取れた。
「うーん……。わかりました。そういうことなら、早い方が良いでしょう。ついてきてくれますか？　案内するので」
そういう訳で、二人はゴールドの導きに従い、カスミ宅まで向かう事となった。
―午後4時　カスミ宅―
「さてと、ここがカスミさんのお家です」
カスミの家は、街の北方に所在する、平屋建ての住宅だった。大きさや設えは一般的な家屋よりは小さく、こじんまりとした佇まいである。
「想像していたよりは、やや落ち着いたお家ですわね」
「ここはカスミさんが一人で住んでいて、あまり家には帰らないから寝床として用意しただけって言ってました。基本的に生活はジムに重きを置いてるみたいで。さて」
そう言ってゴールドは、財布を取り出し、その中から小さなカギを持ち出す。
「合鍵か？」
レッドはそう尋ねる。
「ええ、そういう仲なので」
そう答えながら、ゴールドは鍵穴にカギを差し込み、回そうとした。

しかしどうしたことか、カチッという解錠した音が聞こえない。
「あれ？」
ゴールドは何度も解錠を試みたが、特に手応えを感じることはなかった。
「もしかして、カギを換えられたとか」
エリカがそう推測を立てた。
「この様子だとそうかもしれないですね……。しかしどうしてだろう」
ゴールドは首を傾げたが、こうしていても始まらないと悟ったのか、インターホンを鳴らした。
「カスミさーん！　ゴールドだよー！」
大きめな声で、ゴールドはインターホンのマイクに話しかけた。
カチャ、という受話器と取ったと思われる音と共に、聞き覚えのある高い女の声がした。
「えっゴールド!?　なんで今……。すぐ出るからそこで待ってて」
そう言うとプツリと通信が絶たれる。マイクの向こうの声からは歓迎の色はあまり伺えず、動揺が現れていた。
「良かったぁ、家に居てくれてて……」
ゴールドは息をついて胸をなでおろし、安堵していた。

換気のためか、窓の音が聞こえた。その後にかすかだが草の踏まれる音も3人の耳に届く。

「なんだかバタバタしてるな」

「何も連絡せずに来てますから、そこはしょうがないですね」

そうこうしていると、すぐに。と言った割には5分ほど待たせて、カスミ当人がドアを開けて姿を現す。

「明けましておめでとう！　ゴールド……って、なんでレッドにエリカまで」

カスミは、驚きよりむしろ不快な顔をしていた。服装は水色のカーディガンにジーパンを穿いていたが、ほつれなどの乱れが見え、慌てて着合せている感がある。

「押しかけて申し訳ありません」

レッドはそう言うと一礼をした。

「あ！　もしかして挑戦しに来たの？」

カスミは、暫しの間を空けて思い出したかのように言う。

「そうですよ。言いだしっぺそっちですよね？　元日だから受けないとは言わせませんよ」

レッドは、やや語気を強くして言う。

「へー、あんたにしちゃ強気じゃない。いいわ、特別に受けてあげる。前回のようにはい

かないから覚悟しなさいね。ゴールド。折角来てくれたのにごめんね」
「いえいえ、大丈夫です」
　ゴールドは首を横に振って、そう言う。分かっていたこととはいえ、やはり残念そうな気配は隠せていない。
「あたしと二人が戦っている間、家でくつろいでなさいな。終わったらすぐそっちに向かうから。それじゃあジム開けて待ってるわ。準備整えてから来なさいよ」
　そう言ってカスミは立ち去っていく。
　ゴールドの激励も受け、二人はジムにへと向かった。
　―午後5時15分　ハナダジム―
　ジムトレーナーは正月休みのためか全員出ておらず、そのまま最奥部へ通された。カスミは水着に着替えている。
「自己紹介なんかする間でもないわね。あたしの水ポケモンが4年間でどれだけ変わったか、みせてあげるわ！　今年の初笑いは、あんたが負けた時見せる、しょぼくれたナマズンみたいな眼よ！」
　と、カスミはレッドを指さしながら言う。カスミの相貌からは一切の気負いが見られず、気力が充溢している。
「口だけじゃないことを祈るばかりですね」

レッドはそう言いながら、モンスターボールを構える。
「退屈はさせないわよ！　行って、スターミー！！　ゴルダック！」

――

こうして、レッドは一体を失い、エリカはポケモンは失わなかったものの、3体とも半分以上の体力を失うダメージを受けた。
「やるじゃない。レッド……そしてエリカの実力。本物だって認めるわ。本気出せば勝てるって思ってたけど、甘いわね。それ以上の格差があるって事思い知らされたわ。あたしに勝った証として、ブルーバッジ、改めて渡すわ！」
そういうと、カスミはブルーバッジを2つ、二人に差し出す。
「有難うございます」
エリカは、深々とお辞儀をした。
「エリカ、あんたは相変わらずいつもそうね。あーあ、それにしても、新年早々、初笑いどころかここまで力の差を自覚させられるだなんて……。きっと今年は厄年ね」
カスミは、わざとらしくどっかりとジムリーダーの椅子に座り、椅子の脚を浮かせている。
「まあ。これが実力ですから」
レッドはかしこまることなく、カスミを見下ろした。

「なにその態度、腹立つわね……。ま、いいわ。ゴールドの所にもどろっと」
　カスミはリーダー席から立ち上がり、立ち去ろうとした。
「カスミさん」
　しかし、その前にエリカが声を賭けた。急に呼び止められたので、カスミはややオーバーな所作を見せた後、振り向いた。
「ん？　まだ何か用？」
「今回の勝負、記憶の限りではまだ実力を出しきれてないように見受けられたのですが」
「何言ってるのよ。あれが出せる限りよ」
　カスミは言葉は平然としていたが、目がやや泳いでおり、核心をつかれた風な挙措をとっている。
「私には随分と急いているように見えたのです。それに、先程お宅に伺った際、気になることがあったのですが」
　カスミの相槌をはさんで、エリカはそのまま続ける。
「窓を開けた後、何かをお出しになりませんでしたか？」
「え？　いや、何も出してないけど」
　言葉の上では繕っているが、不意に聞かれたからか声が少し震えていた。
「左様でございますか。しかし確かに庭草を踏む音が聞こえたのですがね……」

「き、聞き間違いじゃないの？」
「いや。確かにちょっとだけど俺も聞こえたぞ」
レッドがエリカの擁護に入った。
「人んちの音がそんなに気になるの？」
「いえ。それが窓の音がして間を開けずにしたものですから、もし万一のことがあったらと思いますと。ハナダは以前にもロケット団の被害に遭った民家があると聞き及びますし」
カスミはそこから数瞬だけ間を空けて返答する。
「あ、ああ。そういえば年越しだしと思って部屋の模様替えをしてて、外にちょっと家具置いたの。それに、今のハナダはそんな物騒じゃないわよ」
明らかに取り繕った風の答え方だったが、エリカは特に表情を変えなかった。
「左様でございましたか。そういうことならば、良かったです」
「今後、家を新築する計画もあるから、そのあたりも含めて色々してたのよ」
「ゴールドさんとの新居ですか？　それはまあめでたい話ですわね」
言葉とは裏腹に、エリカはあくまで社交辞令の表面的な風を崩していない。
「そ。といってもあたしもゴールドも暇って訳じゃないから、まだまだ先の話なんだけど」

「そんな先の話なのに今家具の整理をしていたのですか？　気が早いのですね」
「やでもほら、それでもいらない家具っていうのはあるし」
　カスミは未だにしどろもどろに言葉を繋げていたが、ここでエリカは声色を強めた。
「カスミさん。もしかして何かやましいことをなさっているのではないでしょうね？」
「な、何よそれ。言いがかりをつけようっていうの？」
「そうではありません。家の鍵を変えられたことも気になりますわ。ゴールドさんの話を伺った限りでは今日でなくともいつかは来ることはわかっていたのでしょう？」
「そ、それはほら。やっぱ物騒だし、定期的に変えたほうがいいかと思って」
　カスミの目は泳いでおり、明らかにその場の思いつきの理由であることが察せられた。
「先程今のハナダはそこまで物騒ではないと仰せになってましたよね？　私には、何かゴールドさんに不意に家に入られたくないという感情から、そうしたようにしか思えないのですが」
「いい加減にしてよ！　なんの権利があってあんたがあたしにどうこう言うの？」
　カスミは遂に耐えられなくなったのか、声を張り上げて思い切り拒絶の意思を見せた。
「カスミさんからはかねてより奔放な噂を耳にいたしますから。もしかすれば不義をし

てるのではないか。もしもそうならば一言ご忠告申し上げたいと思いまして」
「そういうのをおじゃま虫っていうのよ。いいからもう帰って。バッジは渡したんだから、もう用はないでしょ」
そう言ってカスミは今度こそ、憤然として立ち上がり、二人とすれ違おうとした。しかし、その身体は震えており、動揺は隠せていない。
「カスミさん。本当に大概にしておかないと、身を滅ぼしますわよ」
今度はカスミは一切言葉を返さず、遠くへ離れていった。二人もその後に続いてジムを出た。
―午後6時18分　ジム出入り口―
「エリカ。いくらなんでもカスミさんに対して、あれは言い過ぎなんじゃないか？　何か確証でもがあったとか？」
「意地が悪いとは思ってますわ。しかし、ジムリーダーなのですから、あまりふしだらな真似を看過しておけないというだけです。ましてやゴールドさんはお若いのですから……」
等とエリカが言っていると、ジムから少し離れているところにカスミともうひとりの男が居た。
男は何やら手に持っている。キスマークのついたシャツ、それに加え、何枚かの写真

と思しき紙である。
「あれ、ゴールドじゃないか」
「帽子を被っていませんから一瞬、誰か分かりませんでしたが、そのようですわね」
何やら話している様子だが、距離のせいで聞こえなかった。
「どうする?」
レッドがエリカに尋ねる。
「ここは様子を見ましょう。なにかあればすぐに」
と、エリカが静観を提案したところで、ゴールドは突如声量をあげる。表情は目をいからせており、従前の好青年ぶりは形を潜め、舌端火を吐いているかのように捲し立てている。
遂にゴールドはすがり寄ったカスミをほんの拍子で、思い切り突き飛ばし、尻もちをつかせた。
「おいおい待てよ！　何があったんだ」
それを見たレッドは矢も盾もたまらず飛び出し、間に入った。
「レッドさんには関係のないことです。放っておいてください」
「こんな派手に突き飛ばしておいて、関係ないも何もあるかよ」
カスミに怪我はないようだが、あまりのことに腰を抜かしており、一直線にゴールド

を見据えていた。やがてエリカがカスミの方へ回り、声をかけていた。
「関係ないものは関係ないです」
レッドは埒が明かないと思いつつ、地面を見た。すると、先ごろまでゴールドが持っていた薄水色のシャツが目に入り、それを手に取った。
少し鼻を近づけて嗅いで見ると、わずかに香水の薫りがした。疎いレッドでもすぐに意味するところは理解する。
「これが原因か」
ゴールドはシャツを少し目に入れると、あからさまに視線を逸らした。
「お前いくら腹が立ったからって、手を上げるのはだめだろうよ」
「レッドさんにはわかりませんよね。きっと」
ゴールドはあくまでも説明を拒むつもりである。
「はあ。とりあえず話は終わってるのか?」
ゴールドは黙したままうなずく。
「じゃあお前はもう一旦帰っとけ。カスミさんはこっちでなんとかしておくから」
ゴールドはしばらくカスミのいる方角に目をやり、
「わかりました。よろしくお願いします」
とだけ言って、その場を後にする。何も語らなかったが、ゴールドの背中にはもはや

訣別の意しかなかった。
　エリカの方も話が終わったようで、カスミはつたない足取りでジムへ戻った。
「で、なんだって?」
「懸念したとおりでしたわ。やはり不義をしていたそうです」
「そうか。ま、ゴールドの気持ちも分からんじゃないが……。もっと別のやり方があるだろう」
「そちらはどうでしたの?」
　エリカがレッドに尋ねる。
「大したことは言ってなかったが、まあこのシャツで大体は察したよ」
　そう言ってエリカにシャツを手渡す。
「なるほど。おそらくこれと、そこに散らばっている写真が、全ての原因なのでしょうね」
　エリカはゴールドの立っていた場所に視線を遣る。なるほどそこには、ゴールドがもっていた写真が散乱している。
「全く、あれだけうつつ抜かしてたくせに、あっさり覚めてしまうもんなんだな」
「それだけ罪深いということです。男女間の不義というのは」
　エリカの言葉にはどこか含みがあったが、レッドがそれを感じ取ることはなかった。

「ゴールドのあの様子じゃ、もう終わりだろうな。あの二人」
「そうでしょうね。まあしかし、良い気味ですわ。これで少しはカスミさんも身を正していただければよいのですが」
その後、シャツと写真は適切に処理し、二人はポケモンセンターへ戻った。
―午後9時　ポケモンセンター　312号室―
夕食を食べ終わり、ふたりとも風呂を済ませるとエリカは話があると言って、丸椅子に相対してレッドを座らせた。
「で、なんだ話って」
「私の過去の話です。旅を……いえ、お付き合いを続ける上で話しておくべきかと思いまして」
レッドは相槌を打って、エリカに先をすすめる。
「私はかつて、お付き合いをしている人がいました」
「えっ？　いや冗談はよせよな」
「いえ。冗談ではありません。しかし、勘違いをなさらないでください。あくまで女性です。私はいわゆるバイセクシャルなのですわ」
レッドはその言葉に目を見開く。どうとらえたら良いのか測りかねてる顔である。
「幼少のころから基本的に女性ばかりの空間で育ちましたから、成長するにつれて同性

にそういう感情を抱くようになって、ジムトレーナーの方々などとその、交わるようになったのです」

　彼女は上気した表情で言う。その動静から、レッドにはその意味するところは理解できた。

「それで、貴方と旅をする少し前まではナツメさんと付き合っていまして、深い関係に至りました」

　レッドは黙ってエリカの話を聞いていた。一見すると平静に見える。

「しかし、その全ての関係はあなたと旅をする前までに全てを清算しましたわ。ですから、どうか」

　エリカが言い終わる前にレッドが口を挟んだ。

「どうして」

「はい」

「どうして今まで黙っていたんだ」

　レッドはつとめて平静に言葉を紡いだ。

「いえ。黙っていたのではありません、今まで言う必要がなかったと思っただけですわ。しかし、今回のカスミさんの不義を見るにつけ、そのあたりのことをハッキリさせたほうが良いと思いまして」

エリカの弁解に、レッドは握りこぶしを作って、思い切り机を叩く。バン！　と、ともすれば、机に亀裂が入りかねないほどの大音響が室内を揺らした。
「ふざけるなよ。今まで言うチャンスはいくらでもあっただろ」
「そこは、本当に申し訳ないと」
「申し訳ないじゃない。エリカ。お前にとって俺はその程度なのか？」
「私は貴方を傷つけたくはなかったのです」
エリカは激情に駆られているレッドを抑えんと、あくまで冷静な声色で返した。
レッドはしばし間をおいて返す。
「俺は、俺はなぁエリカ。前からそういう答えを知ってたかのような抜け目のなさというか。そういうのが気に食わないんだ」
「えっ」
「俺とエリカは夫婦になるんだろ？　なのに、そんな面でも被ってるようなやり方を俺にもするのか？」
レッドは常に抱えていた本音を吐露する。ジョウトの頃でも抱えていたエリカへの感情だったが、ここに来て再燃した。
「私は貴方のことは大切に思っていますわ。ですからこうしてここまで貴方と旅を続けているのです」

「そうじゃない、そうじゃないんだよエリカ。そんなに思ってるなら、話せるタイミングはいつでもあったろうと言ってる」
「ですからそれは」
レッドはエリカが言葉をつなげようとした所で立ち上がり、彼女の肩を強く掴む。
彼女の表情が少しだけ痛みに歪む。
「何度も言わせるな。俺はお前のむき出しの心が知りたいんだよ」
レッドは力を少し緩め手をそのまま、上腕へ滑らせる。そして少しだけ腰を低めてエリカに目線を合わせた。レッドの眼には炯々と怒りの炎が灯っている。
心なしかエリカの頬は上気しきっており、掴む手には高い体温が伝わる。レッドの鼻孔にも仄かな熱れと薫りが入っていった。
「ナ、ナツメさんにこの間言われたのです。貴方には、そういう事も話しておいたほうが良いと」
「ナツメさんから？」
「はい。それ故に、正直にお話ししたまでのことです」
「……」
レッドは黙したままエリカの肩を掴み続けた。彼女の眼や動静から嘘ではないことをようやくレッドは汲み取った。

「つ……ッ！」

エリカの表情がにわかに痛みに歪んだ。どうやら知らぬ間に力が入っていたようだ。

「悪い」

そう言ってレッドはようやく、ゆっくりと肩から手を離した。

「いえ。私に責がありますから」

「頭冷やしてくる。今日はそうだな……、野宿させてもらうわ。独りにさせてくれ」

そう言って、レッドはリュックを背負って部屋を出ていった。

「待っ……」

エリカが静止するのも聞かずに、レッドは玄関のドアを閉めた。

―午後11時12分　ハナダシティ郊外　森林―

飛び出したものの、レッドは薪を拾い上げながら、宛もなく野宿のための場所をさがしていた。そうしていると、やや開けた場所にさしかかり、焚き火が上がっているのを確認した。

「すみません、焚き木を持ってきたので、場所を借りてもいいですか」

「ああ、良いですよ。どうぞそのへんに」

と、その人物は快く場所を譲った。聞き覚えのある声だと思って、レッドは薪を差し入れるついでに当人の顔をうかがった。

「あれ。ゴールドじゃないか」
「レッドさんじゃないですか。どうしてここに……」
　レッドはゴールドへここに来たあらましをかいつまんで説明し始めた。ゴールドはレッドの焚き木を焚べながら静かに聞く。
「あいつはな。俺に黙って、ジムトレーナーと通じていたんだよ」
「え……？」
　ゴールドはそれを聞くと、焚べる手を止めた。その眼には自分に話してよかったのかという困惑が宿っていることをレッドは読み取る。
「いいんだよ。エリカもそれくらいのことは覚悟して話したはずだ」
「そ、そうですか」
　そう言って、ゴールドは再び焚き木を手に取った。
　全てを話し終えると、レッドは前もって差し出されていた緑茶をあおった。
「奇遇にも、レッドさんも同じようなことになっていたんですね……」
「お前は今浮気されたんだし、事情は違うと思うけど」
「でも、エリカさんのそういうところが許せないから飛び出したんでしょう？」
　そういうと、レッドは帽子を目深にかぶりなおした。
「僕も、レッドさんの気持ちは分かります。けれどやっぱり」

ゴールドは自分の分の飲み物が入った水筒から、緑茶を注ぐ。
「羨ましいですよ。僕はレッドさんが」
「え？」
「カス……、カスミさんは、僕に黙って関係を絶たず、ズルズルと何ヶ月も家に連れ込んでいたんですよ？　そんなのどう考えても不誠実だし、僕自身のことを軽く見てる証じゃないですか」
レッドは黙ってゴールドの言葉を聞く。
「僕が彼女のためにしてあげたこと、されたことはとても多かった。でも、彼女はその口で、同じことを他の男に」
「そのへんにしとけ」
明らかにゴールドがヒートアップしている様が見て取れたのでレッドは静止を求めた。また前のようにあんな様で口角泡を飛ばされでもしたら事である。
ゴールドは不興顔で緑茶を飲んだ。
「でも、レッドさん。あなたは違う。エリカさんは誠実だからこそ関係を全て精算したし、大事に思っているからこそレッドさんに全てを話したはずです。まだ……、まだやり直せるはずですよ」
「そうか」

レッドはそう言いながら、焚き火の火を見つめていた。
「僕たちは恐らくもうダメです。正直、彼女からまたどれほど迫られても、もう前のようにとは行ける気がしない。でも、レッドさんとエリカさんはずっとここまで連れ添ってきたわけじゃないですか。それをここで終わらせられるのは……嫌です」
「随分と庇うな」
「エリカさんには、テンガン山でも色々と助けていただきましたから……。後味悪いんですよ。これだとまるで僕らが背中を押したみたいで」
「俺にはないのかよ」
レッドは軽く笑いながら言う。
「え……ああいや、それはまあ」
「わかったよ。一晩よく寝て考えてみる。おやすみ」
そういってレッドはリュックから寝袋を取り出し、寝る準備をはじめた。
ゴールドも、レッドが寝入ったのを見て焚き火の後始末を行い、張ったテントに入っていく。
――1月2日　午前8時　ポケモンセンター――
レッドはゴールドと朝食を食べた後に、礼を言って立ち去り、宿としていた部屋に向かった。しかし、中は既にもぬけの殻となっており、続いてカウンターにエリカのこと

を尋ねた。
「ああ、お連れの方でしたら、ハナダの洞窟に行くのでもし来たら、そのように伝えてほしいと」
「え!?　ああ、そうですか……」
レッドは居ても経ってもいられず、ポケモンセンターを飛び出した。
―屋外―
「あのバカがっ。一人でいって無事で済むと思ってんのか!」
外に出ると、虚空に思わずそう毒づいて、リザードンを繰り出す。
そのまま、背中にのって低空からエリカの姿を探した。
昨日いった道筋をたどるとすぐに姿が見えたので、地上に降りてエリカに話しかける。
―午前8時33分　ハナダシティ郊外―
「エリカ!」
「あっ……」
エリカはレッドの声を聞くとすぐに振り返り、レッドを見る。その表情はやや思い詰めている感がある。
「お前、一人であの洞窟行くって」

「どうしても、ミュウツーの居所が気になりまして」
　エリカはすぐに返したが、どこか取ってつけた風な印象がある。
「だからって、お前だけでなんて。あの洞窟のポケモンの強さはわかってるだろ!?」
「し、しかし、貴方は昨日出て行ってしまわれましたし」
「バカだなぁ……。お前は本当に。俺がそんなことで見捨てると思ってたのかよ！」
　そう言って、レッドはエリカを強く抱きしめた。
「エリカは、俺が守るんだ。守ってやらないと俺自身が許せないんだよ」
「貴方……」
「悪かったよエリカ。昨日のことは俺の浅はかさだった」
　その言葉を聞くとエリカは得たりとばかりに破顔し、ゆっくりと微笑んだ。
「来て、くださると思っていましたわ」
「えっ」
　レッドは抱き寄せるのをやめて、エリカの顔を見る。
「実は昨日、あの後、アカネさんから電話がかかってまして、あちらの用を済ませた後、どうすれば良いか相談したところ、このようにすれば思いを確かめられると伺ったものですから」
「ア……、アカネさんがそんなことを」

「勿論、ハナダの洞窟に行くと行ったあたりは私の創作ですけれどね、きっと貴方ならば私の身を案じて駆けつけてきてくださると思ったのです」

レッドはそれを聞くと静かに笑った。

「全く、してやられたな……。結局俺は、未だエリカのことが、思いを捨てられないみたいだ」

「私は依然として貴方を想い続けております。昨日の事を踏まえたうえで、貴方が受け止めていただけるならば、この旅路を続けていきたいです」

エリカはしっかりとレッドの眼を見すえ、明瞭な声色でレッドに伝えた。それが純真なものであることはレッドでも推察できた。

「わかった。だが俺もそこまで単純じゃないからな。すぐに全てを……ってわけにはいかないが、お前と一緒に旅を続けていくよ。お前を守ってやると決めたばかりだしな」

そう言ってレッドはエリカに手を差し出し、エリカはそれをすかさず握り返す。これでひとまずは全てが落着した。

――

こうして、ハナダジムを制覇した二人は、カスミの不倫劇を受けた悶着を経た後、次のジムのある街、クチバシティへと向かう。

ハナダシティを出発したレッドとエリカは、人混みを嫌って地下通路経由でクチバシティに到着した。

―1月4日　午後1時　クチバシティ―

三が日を過ぎ、人々が日常の生活に戻りつつあった1月4日。

しかし、ここクチバシティは正月などあったものではなく、平常運航である。船は正月であろうと休むことなくクチバ港に錨を下ろし、荷の積み下ろしや、取り扱いを続けているからだ。

そんな最中、二人はクチバシティの入り口に立った。

「相変わらず、異国情緒漂う街ですわ。こういう街も良いものですわね」

とエリカが感傷に浸っている傍ら、レッドは南東の丘を見ている。

4年前にビルを建てようとしていたおじさんが居たことを思い出して、ああ、まだ地ならしを続けていると懐かしみに触れていた。

「貴方、何故、そちらを見ているのです?」

「いんや、少し思い出したことがあってだな……。それはそうとジムに行くか」

と、レッドは歩み始める。

「マチスさんですか……、あまり好ましからざる方ですが、仕方ありませんわね」

彼女はそうぽつりと呟くと、少し遅れてレッドの後を追う。

―同日　午後1時32分　クチバジム―

「うわ、相変わらずの電気仕掛け……」

レッドは、遠くにあった電気バリアの通る白いプラズマを見てげんなりとしている。

「あら、一時期故障したというお話も伺ったのですが……。仕方ありませんわね」

という訳で、トレーナーを一応倒しながら、ゴミ箱をあさってスイッチを探した。

汚れ仕事を嫌うエリカはやらず、すべてレッド自身で漁ったことは説明するまでもない。

―午後2時30分―

ジムの仕掛けをどうにか突破し、マチスの所にたどり着く。

マチスは迷彩の軍服を着ており、相も変わらずのハイテンションで話しかけてきた。

「ウェルカム！　よく来たネ！」

「お久しぶりです」

レッドはマチスに対しては、敵対心は無く、むしろ好意的な印象を持っていたので明瞭に応答する。

一方のエリカは、愛想笑いに徹していた。

「ミー、あれからハードプラクティスしたネ！　ユーにビクトリーするために！」

相変わらずの英語混じりの日本語を話すが、相手を選んでくれてるのか、レッドでも

理解できるレベルの英語をマチスは喋っている。
「そのリザルト！　ミーは」
「おい、エリカ、リザルトって何だ？」
しかし、時々わからない単語が出て来た時、エリカに耳打ちをしていた。
「Ｒｅｓｕｌｔ……、結果。ですわ」
「ヘイ、ミスターレッド。イングリッシュはノーグッド？」
ノーグッド……、グッドのノーなんだから良くないという意味だろうと、少し考えたレッドは、正直に
「イエス」
と答える。レッド自身、英語を聞くのはマチスやメリッサ等を除けば小学校以来である。
「Ｈｍｍ……、ミスエリカ。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　ｅｎｇｌｉｓｈ？」
マチスはわざと、クセのある喋り方で話す。どれくらい英語を話せるか試しているのだろう。
エリカはメリッサの時の失敗もあって、ややためらってはいたが、
「Ａ　ｌｉｔｔｌｅ．」
と、気だるそうではあるが、非常に明瞭な発音で返す。これにはマチスも十分納得し

て、
「Ｏｈ！　Ｔｈａｔ，ｓ　ｉｎｔｅｌｌｉｇｉｂｌｅ　ｐｒｏｎｕｎｃｉａｔｉｏｎ．Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！」
と、エリカを褒め称えている。ｌｉｔｔｌｅと控えめな表現だったが、やり取りから実力があることは、マチスも承知したようである。
「おい、なんて言ったんだマチスさんは」
「どうやらかなりお気に召したようですわ」
「ソレだけ出来ればＧｏｄだネ！　もし、ミスターレッドが、困っていたら、ｔｒａｎｓｌａｔｅしてあげてネ！」
エクセレントという言葉に、レッドが首をかしげていたのを見ていたマチスは、簡単な言葉に言い換えてくれたようだ。
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．Ｉ　ｗｉｌｌ　ｄｏ　ａｓ　ｍｕｃｈ　ａｓ　Ｉ　ｃａｎ　ｒｉｇｈｔ．」
そう言ってエリカは締めくくった。無論、愛想笑いである。マチスはさらに深くうなずいて続ける。
「ミーのポケモンはフォーイヤーズアゴーよりも、ベリーストロングになったネ！　ミーのエボルブしたポケモン、それにアーツドしてミーのエレクトリックなタクティッ

クスにオノノクがいいネ！　Ｇｏ！　マルマイン！、ジバコイル！」

こうして、レッドは二体を、エリカは一体失って勝利した。

「Ｏｈ！　ｙｏｕ　ｇｕｙｓの強さ、トルゥース！　Ｔｈａｔ，ｓ　ｕｎｄｏｕｂｔｅｄｌｙ　ｉｔ．ネ！　それを認めた証として、オレンジバッジ、ヤルヨ！」

マチスは、オレンジバッジを二枚渡す。

「Ａｐｐｒｅｃｉａｔｅ．」

エリカは英語バージョンで謝意を伝え、深々とお辞儀をする。

「フーッ、Ａｓ　ｙｏｕ　ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！　Ｙｏｕｒ　ｃｏｍｍａｎｄ　ｏｆ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ｉｓ　ｍａｒｖｅｌｏｕｓ！」

マチスがかなりベタ褒めをしていることは、その動静から明らかである。何を言っているか全くわからないレッドでも、すぐにそれは伺いしれた。

「Ｏｈ，ｓｏｒｒｙ．ミスターレッド。ユーのパワーはモアＧｏｏｄダネ！　ここまでトレーニングしたポケモンたちをオールキルするだなんてネ！　これからも、ガンバれヨー！　Ｄｏ　ｙｏｕｒ　ｂｅｓｔ！」

そう言って、マチスは満足したように二人を見送る。最後の言葉はレッドでも分かっていたので、少し嬉しくなっていた。

―ジムの外―

「はぁ……、相変わらずの暑苦しさでしたわ……」

エリカは、ジムの外から出ると、早速毒づいた。

「しかしたまげたなあ……、お前本当に、あそこまで英語喋れるなんて。つかお前嫌いと言っていた割には、割と後半は嬉しそうに話していなかったか……？」

レッドは感心して、エリカを褒めたと同時に疑問をぶつけた。

「これが出来なくてはタマムシ大に入れませんから。しかしあそこまで褒められるだなんて……。メリッサさんの時にはやや自信を失いましたが、ここでは通じたもので、それでついつい、自分でも認めたくないのですが……その、嬉しくなってしまいまして」

エリカは、嫌いな相手に褒められて、うれしくなっていた自分を少し悔いているようだ。

「まあほめられりゃ誰でもそうなるさ。さて、次はとうとうお前の所か」

「そうですわね。せっかくですから私の家にも来ていただきたいですし、先に申し入れておきますわね」

「そ、そうか。しかし遂にエリカの家か……。やっぱ身構えるな」

そう言っているのを傍らに、エリカはポケッチで家の人間に近日中に行くことを伝える。

その後、二人はヤマブキシティを経由して、タマムシへ向かった。

―1月6日　午前9時　タマムシシティ―

「ヤマブキもでかい街だったけど、やっぱここもすごいなあ」

タマムシシティはこの国の首都を構成する片割れの街であり、商業地兼住宅地として世界でも有数の繁栄を誇っている。これまでコガネやコトブキなど大きい街は何度か通ったものの、やはりタマムシとヤマブキは首都として別格の威厳と殷賑がある。

大通りには大量の車と人が行き交い、大型の量販店や百貨店などが軒を連ね、半ばやかましいと感じるほどに今日もタマムシはその威光を放っていた。

「そうでしょう。やはり都ですから。この喧騒を聞くとやはり帰ってきた実感が湧きますわね」

「そうか。まあ確かにな」

そう言っていると、大通りの此方の路側帯に、明らかに目立つ大型の高級車が停まっていた。そのすぐ近くには如何にも上質の外套に身を包み、整然とした身なりをした老年の男と、その他にも数人の似た身なりの男達が立っていた。

二人に気づくと、執事はおもむろに近づき、にこやかに出迎える。

「随分と早かったですわね。爺や」

「とんでもございません。久方ぶりのお嬢様のご帰還ともなれば、早すぎるということ

はありませんからな」
「また一段と歳を重ねたのではなくて？」
「お陰様で最近はすっかり、頭が冬のようになりましてな、年は取りたくないものですわい」
「フフフ……。しかし、相変わらずのようで安堵致しましたわ」
老人はだいぶ薄くなりながらも、整った銀髪の頭を擦りながら、余裕たっぷりにエリカに応対する。エリカがここまで親しげに他人に対して接することはなく、如何にも数十年来の旧知といった間柄である。
「そうかもしかして」
「これは失礼しました。私めはエリカお嬢様の執事長であり、家宰を仰せつかっている者でございます。どうぞお見知りおきを、若旦那様」
そういって執事は臣下の礼を取るかのように、レッドにひざまずき、頭を垂れた。
「えっ……？」
突然若旦那様付けで呼ばれながら、ひざまずかれた応対にどうすればよいかレッドは分からず、立ち尽くすのみであった。
―第三十七話　すれ違いの緒　終―

カントー編（2013．12－2014．1）
第三十七話　帰郷

―12月19日　午後5時　マサラタウン―

およそ一年ぶりに故郷へと帰ってきたレッド。

そして、その隣には、才女の誉れ高いエリカを連れている。周知の事実であったものの、やはり周囲の目を引いたのは想像に難くない。

彼はリザードンから降り、戻したのち、大きく背伸びした。そして、日が沈みつつあった我が故郷を見、エリカに話しかける。

「うーん、いつ来てもいい街だなぁ。エリカ、お前もそう思うだろ?」

エリカは据わった目線で一瞥し、優しめの声でこう言う。

「私は初めて来たのですが……、なるほど、マサラの名にふさわしい……まるで純白なタカサゴユリの如き光景ですわね。心が洗われる気がいたしますわ」

そう言うと彼女は深く息をつく。

「マサラは白って意味だっけ?」

レッドは脳の片隅にあった記憶を取り出し、エリカに尋ねた。

「その通りですわ。マサラタウンの出身トレーナーである以上、押さえてて当然の知識ではありますが……ね」

エリカはしたり顔でそう言った。そんな上から目線のエリカもなんと美しい事か。などとレッドが思っていると、聞き慣れた声がレッドの耳に入る。

「当然よ！　小学校の頃に散々教え込まれたもんねー」

この前来た時とは、少しも変わっていない母親である。相も変わらず自由人そうだ。

「……、貴方、この方は？」

エリカは当然の質問を投げかける。

「母さんだけ」

レッドがそう言い切るや否や、エリカは急に姿勢を正し、深々とお辞儀をして、

「これはこれは義母様でしたか！　レッドさんを産まれたにしては、中々に若々しく……」

と、エリカはペラペラと喋り立てる。流石の母親も当惑気味となり、

「こらこらエリカさん、まだ気が早いわよー。義母様だなんて……ねえ、レッド？」

と、レッドに目配せした。何がやりたいのかはすぐに察することができた。

「そ……そうだな。おい、エリカ。挨拶は家の中でやろう。な？　あそこのおじさん少し引いてるよ？」

レッドの諭しに対して、彼女は声調を正し、
「す、すみません。将来私の姑になられるお方に見えたので、どうも緊張してしまい……」
と、言いながらエリカは冷や汗をかいた襟を正している。
あー、可愛いなー。などとレッドが素直に思っていると、母親が話しかけてきた。
「さてと、二人は今日家に泊まるんでしょ?」
断定口調で言われたので、レッドは少し眉を動かせたが、答える前にエリカは威勢よく、
「はい、勿論ですわ！　ところで、夕餉の支度はお済みでしょうか?」
「これから作る所よ。今から買い物に行くんだけど、一緒に来る?」
「是非に。貴方はどうされます?」
と、エリカに尋ねられた。
「そうだなー、母さん、何か家にやり残した事とかあったりする?」
久々に帰ってきたんだし、孝行でもするか。と思い立ち、母親に尋ねる。
「木の実に水やりしてくれる?　あぁ、ジョウロとかは玄関先に置いてあるから」
「あー……、玄関先ね。分かった分かった」
レッドは家の構造を思い出し、納得した。

「お願いねー。じゃあエリカさん、買い物に行きましょうか」
「はい！　それでは貴方。また後ほど」
エリカはいつもよりも、語気を強めて言っていた。どうやら、かなり気が入っているようだ。
こうして、レッドは二人と別れ、久々に家に着いた。カギは、というと常にポケットに忍ばせているので問題はない。
―自宅―
家に着くと、彼はとりあえず、木の実に水をやった。オボンやオレン、クラボにモモンなどいろいろな木の実が栽培されている。
あまり植えてから時間がたっていないのか、芽しか出ていないものが多い。家の周りや庭、とにかく１００以上も植えているので、それ全てにやるのは骨が折れる。ピカチュウやカメックス等に手伝ってもらいながら進めていた。
それにしても母さんは園芸が得意だ。どれも全く枯れていないどころか、とても生き生きとしている。そのまま売りに出しても全く問題なく、流通しそうだ。エリカが見たらなんと褒めるであろうか……。
等と思いつつ、３０分ほどかけてすべての木の実に水を遣った。ピカチュウはレッドと一緒に右半分に水を遣り、カメックスは水量を調節しつつ、左半分に水を遣った。

ジョウロ要らずである。
「マスター、全て終わりましたー」
のそのそと、カメックスがやって来た。水遣りが終わったらしい。
レッドは、左半分を一瞥する。
「うん、やり過ぎてはいないみたいだな。よくやった、カメックス」
そういって、レッドは安堵した表情でカメックスの頭を撫でてやった。
「へへ、どうもー」
カメックスは照れながら答える。
「ピカー」
ピカチュウは、レッドのズボンの裾を引っ張った。なるほど、褒めてほしいみたいだ。
「おお、ごめんよピカチュウ。お前も一緒によくやってくれたな」
レッドはそう言ってかがみ、ピカチュウの頭も撫でてあげた。ピカチュウは嬉しそうに、そして頬を緩ませて、何とも愛しい表情をしている。
「ふふ、相変わらずね……レッド君」
後ろから俄かに声がする。聞き慣れた声……、幼い時、何度もグリーンと遊んだ時、遠くから見守ってくれた。そして時々は一緒に遊んでくれた、グリーンの姉、ナナミの声である。

「ナ、ナナミさん！　お久しぶりです」
「あら、随分畏まっているわね。いいのよ別に、昔みたいにお姉さんって呼んでくれても……」
　優しい性格は昔から全く変わっていないようだ。マサラから旅立ちをして以来、四年間全くあっていなかったせいか、かなり大人っぽくなっている。そして、グリーンの姉だからか、容貌も美しい。
　レッドは、呼び方を直し、
「ナナミお姉さん。……グリーンから何か聞いてはいないですか？」
「弟ねぇ……、エリカさんと君が一緒に旅に出るって言った時、かなり憤慨してたわね」
　それを聞いたとき、レッドは目を点にする。
「え……、もしかしてグリーン、エリカの事……」
「知らなかったの？　弟はね、よく女の人について語っていたけれど、それとは比べ物にならないぐらい素晴らしい女だって、それに加えて、エリカを娶るのは俺しかいねぇ！　……ともね」
　レッドは上から水がぶっかけられた感覚を覚えた。
「……、あいつ、俺の前では一言もそんな事言わなかったのになぁ」
「あの子、本当に思っている事はお姉さん以外には、打ち明けない性質なのよ……。いわ

ばあたしが母親代わりって事ね」
　ナナミは軽く笑いながら、そう言った。
「……、そんな大事なこと。俺に言って良かったんですか？」
「いいのよ。これに関しては、俺の口からは言いたくない。　いつかレッドに会ったら伝えてくれ……って言っていたしね。ほんと変な子よね。自分から言えばいいのに……」
　ナナミはそう言いながら、髪をいじっている。そして、話題を切り替えた。
「そうそう、あの子、トキワでジムリーダーやってるって事。知ってるわよね？」
「ええ勿論。最後に挑もうかと思ってます」
　そう答えると、ナナミは少し声のトーンを上げて、
「かなり気合入れているわよ。心してかかりなさいね。お姉さんの推測だけど……、レッド君が挑んだ時とは段違いに実力上がっているから……、チャラチャラしているように見えるけど、やる事はやっているよ」
　ナナミの発言を嘘とは思えなかったレッドは、身震いした。
「さ……賽ですか。だったらこっちも本気でいきますか……。ところで……、オーキド博士とは最近……」
　その尋ねに対し、ナナミはトーンを下げ、

「全く連絡取れないわ。おじいちゃん、あんな大きい事件起こして、示しもつけないまま死ぬだなんて……。でもなんだか弟はそれなりに把握しているっぽいけど……」

その発言に反応して、レッドはナナミに問うた。

「それって一体、どういう事です？」

しかしナナミの返答は、あまり芳しいものではなく、

「さあ……、お姉さんにはよく分からないわ……。個人的には本当に、おじいちゃんが死んでいるかどうかすら疑わしくもあるんだけどねぇ……。あ、もうすぐ晩ご飯の時間……。じゃあね、レッド君。弟にも宜しくー」

そう言って、ナナミは去っていくのであった……。

―自宅内―

レッドが大きな疑念を抱えたまま、家に入ると掃除していなさそうな場所があった。その為、掃除していると、インターホンが押された。

駆け足で玄関に走りドアノブを捻り、押す。すると、母親とエリカが大きな荷物を持ち下げて帰ってきていた。

「お帰りー」

レッドが次に続けようとすると、エリカはそれを遮るように、

「貴方、この袋持って頂けますか？　義母様！　台所は何処に？」

「台所なら、玄関からまっすぐに行った所にあるわよー」
　母親がそう答えるや否や、すぐにエリカは荷物を床に置いて、靴を脱いで揃え、そそくさと台所に向かっていく。
「張り切ってんなー、エリカ」
「そーねー、スーパーに行った時も、じっと生鮮食品とかを見つめて、一番良さそうなのを取り揃えていたし……。レッド、あんた良い嫁さん捕まえたねぇ。こんな出来た人、レッドには勿体ないくらいだけど……」
　などと母親が呑気に言っていると、割烹着を着終えたエリカが玄関まで戻り、
「義母様、本日の夕食は私がお作りいたします。貴方、早くその袋を……」
「おお、悪い悪い。あぁ母さん！　風呂場掃除しといたから」
　そう言って、レッドは母親の「ありがとねー」という言葉を耳に挟みつつ、台所に急いだ。
　―リビング―
　色々と落ち着いたのち、レッドはリビングの椅子に座り、その奥のシステムキッチンに居る、母親がエリカの後ろについている所を、観察している。
　エリカの料理している姿は何度も見ていたが、こうして家庭で見てみると、なるほど改めて凄さが分かる。野菜や魚等は素早い包丁の捌きで適宜に切られ、しっかりと分量

を見極めつつ手早く調味料を入れているなど、その所作には一切無駄が無く、プロですら裸足で逃げ出しかねないレベルであった。

そんな、早送りで調理番組を見ている気分になりながら、レッドは観察し続けていると、調理開始から一時間後、座っていた椅子の上のテーブルに、料理が出てくる。

見た限りだと、鍋焼きうどん、さつま汁、きんぴらごぼう、白飯等々と、エリカらしい野菜中心の和食の献立である。

見た目もさることながら、味はまさに一級。例えば野菜はそれぞれの特色を主張しつつも、きちんと一つに収まった整った味である。店に出したら３０００円ぐらい取られても文句は言えないレベルで、各々舌鼓を打つ。

母親は、感動したような、高い声を出し、

「ここまで美味しい料理なんて、いつ以来かしら……。エリカさん。貴方、店出しなさいよ。きっと繁盛するわよ～」

と、冗談半分にエリカに笑いかけた。

「そこまで褒められると、お尻がこそばゆいですわ……。しかしこれは、あくまで幼少の頃に手習いしたのをなぞっているだけです、まだまだですわ」

エリカは自らを謙遜している。母親は完全に魅入ったようだ。

―午後８時―

こうして、夕食を食べ終わり、後片付けをして、風呂を沸かしている最中。レッドとエリカはリビングに居る。

母親は、台所で木の実を取り出し、デザートを作っている。エリカは手伝おうとしたが、母親は「いいからいいから」と、適当に押しとどめて、一人で作るに至っている。

レッドとエリカは、先ほど夕食を食べていたテーブルで、向かい合って座り、談笑している。

「母さんね、夕食作った後は、取れた木の実を使って簡単なデザートを作ってくれるんだよ」

「へえ、そうなのですか……、料理お好きなのですわね。料理作っている際も、ずっと見ていらしゃいましたし」

実際、エリカが料理を作っている時、母親は上から覗き込んで、ほうほうと感心していた。

「そーだよ。母さんも料理上手いんだよー。お前とはまた違った意味でね」

エリカは、レッドの言った言葉の言外の意を察したのか、それ以上深くは聞いてこない。レッドは話題を切り替える。

「ジムに挑む順番はさー、普通にタケシから順々にやっていくでいいよね？」

「そうですわね。その方が貴方も、懐かしみが尚更湧いて宜しいでしょう」

エリカは、少し微笑みながら返す。
「……、あ、そういえばタマムシ、本来はお前だよな？　どうすんの？」
「さあ、どう致しましょうね……、フフフ……」
エリカの不敵な笑みに、レッドは敢えて突っ込んで見せる
「おいおい、まさか策でもあるのか？」
「着けば分かりますわ。それにしても、もうすぐ冬至ですか……、早いものですわね」
エリカは風流めいた事を言う。レッドは敢えてかじりつく。
「冬至って、夜が一番長いんだよね！」
レッドは自信満々に答える。
「……、その通りですわ。因みにお聞きしますが、二十四節気で冬至の次に」
危機を察知し、レッドはわざと素っ頓狂な声を上げて、
「もうすぐ旅に出て一年かぁ。なんだか実感湧きそうで、湧かないなぁ」
「あら、どうしてですの？」
エリカの尋ねに、レッドは
「さぁね。自分でもよく分からないや」
そうこうしていると、母親が二枚の盛られた平らな皿を持ってきて、
「お二人さん、今日のデザートは温まるマトマの実の砂糖和え、後はレッドの大好きな、

よく曲がったマゴの実のヨーグルト和えよー！」

そう言って、母親は皿を二人の前に置き、母親もまた座る。

マトマの方は、瑞々しく赤い切り身に加えて、白砂糖がついており、爪楊枝が刺されていた。マゴの実の方は、マトマの方よりは少し太い楊枝で、ヨーグルトの端々からピンクの切り身が垣間見える。

いただきますの挨拶をした後、レッドは、まずマトマの方を口に運んだ。

「うっ……辛い、でも甘い……、いい感じに味付けしたね、母さん」

「あまり辛くないように育てたからねー、砂糖も多めに使ったし……」

母親は快活に答えた。エリカも同じく、マトマを口に運び、

「これはなかなか新鮮な味……、クセになりそうな味ですわ」

と感想を言う。

次にマゴの実のヨーグルト和えを食べる。

「これは旨い！　やっぱ俺の大好物だわ……」

エリカもそれに反応したのか、口に運び、

「ヨーグルトの酸味と、マゴの実の甘さが丁度いい具合に絡み合ってて……好きな味ですわ」

こうしてその後、母親も一緒に食べて、１０分ほどで食べ終えた。

「ふう……流石は義母様……、ここまで美味しいデザートを日々食べてこられた貴方が羨ましいですわ。家庭的な味とはこの事をいうのですわね。様式的な味しか口にしたことがない私には新鮮で、感動も致しましたわ！」

「エリカさんに褒められると照れるわね。貴女には敵わないわよ」

と、母親は謙虚になって、エリカの言葉を軽く受け流す。

その時、ピピーッと電子音が鳴り響く。風呂が沸きあがったようだ。

「お風呂、沸いたみたいね。さてどうすんの？　二人で入っちゃう？」

母親の冗談半分の言葉に対し、エリカは一気に顔を赤くしている。

「お……義母様の家で、そのような事は……」

「なーに言ってんの！　この家で（ニャー）したからレッドが生まれたんでしょうに」

身も蓋もない事言うなよ母さん……、等とレッドが思っていると

「うーん……、じゃあ今日はレッドから入りなさいな。久々に帰ってきたんだし」

「そーだな。うし、じゃあ先入るわ」

そう言って、レッドは風呂に入るのであった……。

―午後11時　二階　レッドの部屋―

こうして、レッドとエリカは別々に風呂に入り、歯を磨き、母親におやすみの挨拶をした後、二人はレッドの部屋で寝る事になった。

「ここが、貴方のお部屋……、綺麗ですわね」
「いやだって、四年間も帰ってきていないし……、あ、Ｗｅｅだ！。母さん残してくれてたんだなぁ……」
　等とレッドは懐かしみに触れていると、エリカは
「さて、もう２３時ですし……、寝ましょうか」
「あれ、エリカらしくな」
　レッドが続きを言おうとしたが、エリカは赤くなりながら
「もうっ、寝ますわよ……って、ベット一つしかないですわね……」
「しょうがないなぁ。シングルで二人で寝るか……いやあれでかいぞ⁉」
　レッドがベットの方向に振り向くと、そのベッドは明らかにダブルベッドになっていた。
「余計なことしやがって」
　と、レッドは口では言ったものの、心中は羽化登仙の気分である。
　こうして二人はダブルベッドで眠りにつくのであった。
　―１２月２０日　午前８時　マサラタウン　レッド家の前―
　起きた二人は朝食を食べて、いよいよ故郷から三度目の出発をする。
「気をつけなさいね。レッド。エリカさんをきちんと引っ張っていきなさいよ……、

まぁアンタがひっぱれるのがオチなんだけどね」
レッドは図星で、まったく言い返せなかった。
「義母様、どうか御達者で」
「大丈夫よ。そちらこそ、怪我とかしないように……ね」
母親は二人の容態を気遣った。
「……、母さん、次に来るときこそ、ポケモンマスターになって帰ってくるよ」
そのレッドの答えに対し、母親は
「無理せずに、頑張りなさいよ。あんたは、きっとやれるよ。だって母さんの子だものね！　それじゃ、行ってらっしゃい」
こうして、二人はマサラタウンを去り、最初のジムのある街、ニビシティへと向かうのであった……。
―第三十七話　帰郷　終―

第三十八話　聖夜とにばみの町

マサラタウンを出発したレッドとエリカ。
二人が最初のジムリーダー・タケシの居るニビシティを目指している最中、トキワシティに寄り道することにした。
―12月21日　午後4時　トキワシティ―
「へぇ……、俺が来ないうちに変わったなぁ。なんか」
レッド最初の所感はそれであった。
「ええ、最近はトレーナーハウスという腕試しの場が出来たそうですわ」
「ほう」
レッドは少し興味を示す。
「私も詳しくは知らないのですが……、トレーナーの社交場としての機能と、対戦施設として機能しているそうですわ。行ってみますか？」
「うーむ……、どうもミナモの時のトラウマがなぁ……」
レッドは、ミナモシティのファンクラブにおける軟禁にも等しい、質問責めを受けたことを思い出し、態度を委縮させる。

「左様ですか……、さてポケモンセンターに参りましょうか。本日は冬至ですわよ」
「おお、もうそんな日か……。どうりで辺りが暗いなぁと思ったら。今日の晩御飯はカボチャの煮物とかか？」
　レッドは晩御飯について尋ねる。
「そうですわね。しかし、南瓜だけですと栄養が偏りましょう。寒鰤や大根なども仕入れておきましょうかね……」
　エリカは、寒さに悴む手に、白い息をふうと吹きかけながらそう答える。
「だけど、その前に一応ジム訪ねてみるか……、グリーンの顔ぐらい見ておきたい」
「あの、私も参らなくてはなりませんか？」
　エリカは表情を歪ませて尋ねた。相当に嫌そうである。
「あー……、じゃあお前はジムの前とかで待っててくれよ」
「承知いたしました」
　そういう訳で二人はトキワジムに向かった。
　―トキワジム前―
「おお……、君は確か三年前にも会ったの」
　ジム前に居たおじさんが話しかける。
「え？……、まさか俺が一番最初にトキワに来た時に居た……？」

レッドは記憶の糸を辿りながら言う。
「そうじゃ。しかし残念だの。ここにリーダーはおらんよ」
「え？　本当ですか？」
レッドは驚いた声で言った。
「うむ。残念だったの。しかしどうしてトキワのジムリーダーは安住という言葉を知らぬのかのう……」
そう言っておじさんは去っていった。
「うーん……じゃああいつ、何処にいるんだ？」
「ポケギアで、電話しては如何でしょう？」
エリカはそれとなく提案する。
「いや、あいつはおじさんの言う通り、安住という事をしないからなぁ……、きっと聞いたところで、俺らが行く頃にはどうせいないだろうさ。しゃあない、出直すか」
そう言って、レッドはグリーンの捜索を諦めた。
こうして二人は、冬至の日をトキワシティで過ごすのであった。
そしてその後も冒険を続け、トキワの森を越えてニビシティに到着する。
―12月24日　午前9時　ニビシティ―
12月24日は、周知のとおり、聖夜前日の日である。

クリスマスは、ナザレ村のイエスが聖母マリアから生まれた日とされている日で、キリスト教徒にとっては大事な日である事も周知である。しかし、キリスト教圏からは遠く離れたここカント―地方でも、モミの木、所謂クリスマスツリーがベツレヘムの星を筆頭にして、ベル等で飾り付けられており、街中が子どもや家族連れ、リアじ……恋人達で賑わう日となっていた。

無論、ニビシティも例外ではなかった。そんな中二人は到着したのである。

レッドは内心、雀躍としていた。

なにしろ、今年は隣に女性を侍らせているのだ。去年は、シロガネ山でラジオの讃美歌をバックにして手持ち達と祝っていたが、今年は女性が隣にいるのだ。レッドにとって嬉しくないハズがない。世の男たちにとって至高にして羨望の的となるシチュエーションで、迎えることができたのである。

さて、そんな最中、エリカはクリスマスで湧きあがる街中を見て、顔を顰めていた。

「どしたエリカ?」

「……、私、クリスマスって大嫌いなんですよね」

エリカは小さな声で言った。

「それまたどうして?」

「実体のない行事の典型ではないですか……、確かに日本は神道という多神教の宗教で、

ほかの土地の神様には寛容である事は承知です。しかし、最近の人たちはどうして宗教行事に参加しない上に無宗教ですのに、こういう行事だけはしっかり祝うのか……、私には理解いたしかねます」

　レッドは、エリカらしい意見だなぁと頷いている。

「あと、私にはどうも西洋行事……殊に斯様な商業色の強い行事は好めないのです。バレンタインも然り……ですわ」

「なるほどねぇ……、さてじゃあ、ニビジム行く?」

　レッドは話を切り替えた。

「そうですわね。あちらまでクリスマス一色になっていなければ宜しいのですが……」

と、いう事で二人はニビジムへ向かった。

―ニビジム―

「おお、よく来たなレッド。選挙以来だな」

　リーダーのタケシは朗らかに出迎えてくれた。

「こちらこそ」

「ここは、落ち着いておりますわね……、外が騒がしいだけに、なお宜しいですわ」

　エリカは安堵したような声をしている。

「外は聖夜だなんだと、浮かれているけど、ジムリーダーたるものそんなものに浮かれて

なんかいられないからな！」

タケシは腰に手を当てて、威張った格好をする。エリカに褒められて気をよくしてるのだろう。

無理しやがってとレッドは心中で思った。

「さて、三・四年で、レッドがどれだけ強くなったか、そして、約一年の旅でエリカさんはどのように成長していったか、この固い岩ポケモン達の前で証明してもらおうか！」

タケシはボールを構える。

「来るぞ」

「ええ、わかっていますわ」

こうして、カント―二巡目、初のジム戦が幕を開けた。

「行け、カブトプス！　オムスター！」

「我が名はカブトプス！　鎌で断ち切ってやろうぞ！」

「古代からやってきたーよ」

タケシに続いて、二人が手持ちを出す。

「行け！　フシギバナ！」

「おいでなさい！　ワタッコ」

「ワタッコ、日本晴れ！」

ワタッコは、日を照らす。
「フシギバナ！　ソーラービー」
「甘いぞ！　オムスター、雨乞い！　カブトプス！　ワタッコにシザークロス！」
オムスターが雨を降らし、カブトプスの特性・すいすいが発動し、二倍となった素早さでワタッコを切りつけにかかる。
「千切れろ」
カブトプスの上げた刃は、正確にワタッコの体に交差する。
「痛いっ！」
ワタッコは二分の一まで減った。所詮は等倍である。
「ちぃ……、一ターン無駄にする羽目になったか……」
「……！」
フシギバナは、少なくなった光を懸命に集めている。
「戻りなさい、ワタッコ。行きなさい、ユキノオー！」
あられが降り始める。
「好機！　オムスター、吹雪！」
「当たるけど、当たってちょ！」
辺りが俄かにふぶいたが、フシギバナはなんとか耐える……が、

「カブトプス！　フシギバナにアクアジェット！」
「突撃ぃ！」
その声と共に、自らの水流と共にフシギバナに突撃した。
「……、悪い、レッド……」
遂に耐え切れなくなり、フシギバナは倒れる。
「……！　少し見くびりすぎた……、行け、カメックス！」
カメックスは揚々と出てきた。
「ぬんっ！」
相当な張り切りようだ。
「エリカ……ユキノオー……悪いな。カメックス、地震！」
「地よ！　震えよ！」
大地が震え、三匹のポケモンはダメージを食らった。
カブトプス、オムスターは倒れた。
「……！　馬鹿な……！　強すぎる！」
タケシは、地震のあまりの威力に驚愕している。
「命の珠……、本当に強いな」
「……、そういう事か。仕方ないな……、行け、ゴローニャ！　ジーランス！」

「劣化ドサイドンと言われようと構わない！」
「……、眠いのう」
「ユキノオー！　ジーランスにウッドハンマーです！」
「おらが村の薪を喰らえ！」
　ユキノオーは大木の薪を、ジーランスに叩き付けた。
「痛いのう」
　ジーランスは倒れた。
「カメックス！　ゴローニャに波乗り！」
「ららららーららー（以下略」
　ゴローニャの眼前に津波が襲う。
「ゴローニャ、カメックスにストーンエッジ！」
　先制のツメが発動した。
「ゴツゴツでしねえ！」
　カメックスの体を、鋭い岩が下から打ち抜いてく。
「いでえええ！」
　カメックスは、半分減った。
……

こうして、レッドは1体失い、エリカは完勝で勝利した。
「うん、やはり強くなっているな！　改めてこのグレーバッジを渡そう」
「有難うございます！」
「いやー……、思い出すなぁ……、初めてもらった時のあの感覚」
レッドはバッジを高く掲げて、ジムの照明に反射させた。
「本当に嬉しそうだったよな……、思えばあの時、ここまで強くなるとは思わなかったなぁ」
タケシはそう当時を述懐する。
「あら、左様だったのですか……。タケシさん、最初戦ったときどのような感想を持ちました？」
エリカはそれとなく尋ねていた。
「そうだな……、確かに強かった記憶はあるな。まぁ手持ちがフシギダネだった事もあるのかもしれないけどな」
「へぇ……」
「そういえばこのジム、三年前からそんなに変わってないっすよね」
レッドは首をめぐらせて、そう言った。
「そうだな。まぁそんなに変えることもないか……って感じで過ごしてたし。それはそ

うと、ここから先のあと7つのジム……、アンズさんはともかくとして、一度お前が戦った人ばかりだろ?」
「はい」
　タケシは、レッドの目をしっかりと見て、続ける。
「決して、最初に挑んだときと同じ風に考えちゃダメだ。俺と戦った時もあやうかった時があったろ?」
「そ……そういえば、本来一撃で倒されそうなフシギバナを倒してましたし……」
　レッドは戦った時のことを思い出し、そう言った。
「そういう事だ……、決して油断しないように……な。まぁお前ならきっと行けるさ」
　タケシは頬を緩ませて、レッドを励ました。
「有難うございます」
　レッドが締めくくろうとした、その時
「ところでタケシさん。今日はどうされるのです?」
　エリカはタケシに、つかぬ事を尋ねている。
「そうだなぁ……、ジム内でパーティでもやろうかと思っている。野郎だけでな!」
　レッドはそれとなく勝ち誇った表情をしている。
「へぇ……それはそれは楽しそうですね」

と、レッドは言った。
「なんだレッド、参加したいのか？」
タケシは快活に笑いながら尋ねる。
「いや……、先を急いでいるので」
「フッ……そうか。レッド、彼女作れたぐらいで浮かれちゃあいけない。エリカさんは理想が高い……、それを崩す真似をすれば速攻で手を切られかねないぞ」
と、彼はレッドに忠告した。
「……、左様ですか。心に留めておきます」
レッドの内心は、悔しいんだろうな。という風にしか思っていない。
傍にいたエリカは、敢えて言わないのか、だんまりとしている。
こうして二人はニビジムを出た。
聖夜前日をニビで過ごした二人は、次のジムがあるハナダシティを目指し、３日かけて、おつきみ山に到着した。
―１２月２８日　午前１１時　おつきみ山―
「コイキング売ってたおじさん……、まだいたのか」
レッドはポケモンセンターでの出来事を思い起こしていた。
「あれ、明らかに高額ですよ……コイキングに５００円だなんて」

「まあいいじゃない。レベル２０まで育てれば、ギャラドスになるんだし」
そんなことを話していると、どこからか呼ぶ声がした。
「待てよ」
ザッ。という音とともにその声の主は現れる。その少年は赤毛が特徴の少年……、シルバーである。
「……！　お前は確か」
レッドは、その特徴ある外見からすぐに誰かを思い出せた。
「シルバーさん……」
エリカにシルバーと言われたその男は、少し驚いたような表情を見せ、
「フン、覚えていたか……」
と、相変わらずの高飛車な態度をとった。
「……、何だまたやられに来たのか？」
レッドは帽子を目深（まぶか）に被り、相手の態度相応の言動をする。
その一方、シルバーはそれ程気にせずに続ける。
「俺はあの時、レッドから逃げて以来、俺には何が足りないのか……、ポケモンと共に懸命に考えてきた」
「ほう」

レッドは少しだけ関心を払う。
「それで見つけ出した答え、お前にみしてやる……。そしてレッドを倒した後は、ゴールドを探し出して、下し、俺は最強のポケモントレーナーとして君臨する！　行け、ゲンガー！」
「……、難儀な奴。行け、リザードン！」
「ゲンガー、シャドーボール！」
「影玉ぁ！」
ゲンガーが黒く、影で出来た球を作り出し、素早くリザードンに叩き込む。
「リザードン！　エアスラッシュ！」
「空気の刃にて、死ね」
リザードンは空気で出来た、一つの刃をフッと吐き出す。
双方の攻撃は同時に当たり、リザードンは三分の一程減ったが、ゲンガーは早くも赤ゲージだ。
「やはりゲンガーは脆いね……」
「……」
レッドの言葉に、シルバーは何も答えなかった。
「ケリをつけよう……、リザードン、大文字！」

「問題、大内義隆が切腹した政変の名前は？」
リザードンは恒例の問題を出した。
「しらね」
ゲンガーはそう即答する。
「大文字の変だぁ！（正解は大寧寺の変）罰だ、これでも喰らえ！」
リザードンは一つの巨大な炎球を放つ、そしてそれはゲンガーと指呼の間との距離になると、「大」の文字に変化する。
そして、「大」の文字になり、シルバーの頬をも橙色に照らした瞬間、シルバーは静かに指示する。
「ゲンガー、道連れだ」
その直後、ゲンガーに大文字が直撃。そして、ゲンガーの亡霊がすぐさまリザードンに憑りつき、瀕死に至らしめた。
「……！」
リザードンは倒れた。
「……、ちったぁ考えるようになったんだな」
レッドはそうシルバーを、少しほめる。
「フン、こんなもので済むと思ってるのか？　戻れ、ゲンガー。行け、クロバット！」

「屈指の素早さというもの、見せて進ぜよう」
クロバットはそう息巻きながら出てくる。
「一匹倒したぐらいでいい気になりやがって……、行け、ピカチュウ！」
「ピカー！」
ピカチュウは勢いよく出てきた。
「クロバット、どくどく！」
「余の毒、喰らうと良い」
そうしてクロバットは、四つの羽から猛毒を繰り出した。
「かわせ！」
「ピカッ！」
ピカチュウは毒の洗礼を、自慢の小回りの利いた俊敏かつ、即応した動きでことごとく避けた。
「よし、ピカチュウ！　ボルテッカーだ！」
指示された瞬間、ピカチュウは厖大（ぼうだい）な電力を体に湛（たた）え、猪突猛進にクロバットの中心に突撃する。
「!?」
クロバットは、あまりの電塊の早さに応えることが出来ず、ただ受ける以外に出来る

ことはなく、そのまま洞窟の岩壁まで突っ込んだピカチュウの体諸共に叩き付けられる。
　ピカチュウは無論、反動でそれなりのダメージを受けたが、クロバットの体は完全な消し炭と化した。
「……、これが……噂に聞きし、ボルテッカーの威力……！」
　シルバーは少しだけ足を竦ませた。
「どうした、怖気づいたか……？」
「フン……、少し驚いただけさ。戻れ、クロバット。行け、レアコイル！」

「四体撃破……、成る程、言うだけのことはあるな。だが、所詮は俺に負けてるなぁ！散々息巻いたシルバー君よぉ！」
「負けは負けだ……、素直にそれは認めるよ」
　シルバーはそう項垂れつつも、しっかりと答える。
「……、まぁこの前みたいに負けても、すぐに逃げ出さない姿勢は評価する。……、お前、ポケモンの扱い、良くなったんだな」
「は？」
　シルバーは何を言われているのか分からない顔をした。

「ご存知無いのですか？　あのクロバットというポケモン……、懐いていなければ進化致しませんわ」

エリカはシルバーにそう説明する。

「そ……そうだったのか。いつの間にそんなに俺のこと……こいつらは……」

「そういう事だ。強くなったことの原因はそれもあるだろうな。まぁ今ならゴールドに挑んでもなかなかにいい勝負が出来ると思うぞ」

レッドはシルバーをそう評す。一方のシルバーは、俯き加減に

「……、例えゴールドを倒せたとしても……、今レッドに勝てなかった時点で、俺は最強のトレーナーではない」

「それで？」

レッドが次を促すと、シルバーは目をいからせてレッドを見、

「次に会った時こそ、お前を倒して……最強のトレーナーになる」

そういって、シルバーは立ち去ろうとした。しかし、

「シルバーさん」

エリカが呼び止める。シルバーは何も言わずに止まった。エリカもレッドの後ろに居る、その位置のまま続ける。

「ゴールドさん、恐らく現在は……、ジョウト地方のどこかにおりますわ。……、今の貴

方の強さ、是非とも見せて御上げなさい」
そうエリカが言い切ると、今度こそシルバーは立ち去って行くのであった。
こうして、おつきみ山で大晦日を迎え、ハナダシティに到着するのである。
―第三十八話　聖夜とにばみの町　終―

第三十九話　新年、元旦、そして洞窟

―２０１４年　１月１日　午前０時　ハナダシティ　ポケモンセンター―

「除夜の鐘……これで６８回目でしょうか」

「んな事よりも、今新年を迎えたぞ」

レッドは腕のポケッチでの時間を見て、そう言った。

彼らは今、ハナダシティに居る。大晦日の１７時頃に到着し、年越しそばをソバ屋で食した後、こうしてポケモンセンターの一個室で除夜の鐘の鳴る中、新年を迎えたのである。

「明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします」

エリカは三つ指をついて、レッドに恭しく言う。

「そんなに畏まらんでも……。まあいいか、こちらこそ宜しくな、それにしても外。盛り上がっているなぁ」

外では神社に初詣でに行く人、新年のセレモニーを見る人でごった返しており、二人のように屋内にいる人の方が少数派であった。

「私は神道の家系なので、本来ならばタマムシ神社に詣でなければならないのですが

……。今回は場合が場合という事で、氏神様も許してくれましょう」

と、エリカは微笑みながら言う。

「ハハハ……、寛容な事だ。それにしても、いよいよ新年かぁ。去年の今頃こうなるとは思いもしなかったよ」

レッドは少し嬉しそうに言う。

「私も同様ですわ。何しろ、貴方がシロガネ山に居るという事を知ったこと自体が、2月初頭ぐらいでしたもの……」

エリカも思うところは同じなようである。

「そうか……、さて、明日もあるし、そろそろ寝るかぁ……、おやすみー」

レッドはそう言うと、座っていたベットから立ち上がり、布団に潜った。

「あ……、もう、姫始めしてくださってもよかったのに……」

レッドはすぐに眠りについていたので、その発言は耳に入らなかった。

じきにエリカも寝、二人とも床に就いたのであった。

―午前9時　ハナダジム前―

レッドは起きてすぐ、カスミに挑む為に、エリカが制止するのも無視してジムにたどり着いた。

しかし、そこには自動ドアに少しいい紙で作成された、「謹賀新年」と大きく墨書風に

印字された貼り紙があり、そこには更に、3日まで休業する旨が書かれている。
レッドは頭を抱えた。
「だから申し上げましたのに……、ジムリーダーだって休む時は休むのですよ……って」
「分かってたんだけどさぁ……、どうも体が急いじゃって」
レッドはそう自らの軽はずみな行動を後悔する。
「仕方ありませんわね。三が日くらいは休んでも宜しいのではないですか？」
「いやぁ……、戦闘の勘は毎日鍛えなきゃ、衰えちまうし……、そうだ、ハナダの洞窟に行ってみるか」
レッドはそう思い立ち、ハナダの洞窟へと向かった。
―午前10時　ハナダの洞窟　入口―
「ここは、強いトレーナーのみが」
「ほい」
レッドは、番人に対し、32個のバッジが揃ったケース、それに加えチャンピオンを破った証となるリボンを見せた。
「も……申し訳ない。どうぞ」
そういう訳で二人は、洞窟の中に入った。
「いやー、あの番人の真っ青な顔、なかなかに見ものだったな……」

レッドはエリカにそう話しかける。
「私たちの事、ご存知無かったのでしょうか……、それはともかくとして、ここは初めて来ましたわ。音に聞く、強者（つわもの）な野生ポケモンの棲家と聞き及んでおりますが……」
エリカは、興味津々な物言いである。
「まあ、俺は三年前、ここに来たんだけどな。実をいうと、一つここには心残りがあるんだ……」
「あら、何ですの？」
エリカは、身を近づけて、興味ありげに尋ねてくる。その様は可愛らしく、つい言ってしまいそうになったが、レッドはすんでのところで堪え、
「ついてくりゃ分かるさ。エリカ、離れるなよ。お前程の力でも、ここの野生は油断できない」
と、エリカにあらかじめ忠告した。
「承知いたしましたわ」
こうして二人は、手持ちを活用しつつ、ハナダの洞窟を探索し始めるのであった。
―午後3時　ハナダの洞窟　最奥部―
「あれ？」
レッドは最奥部のとある所で立ち止まり、左右を見る。

不思議に思ったエリカが尋ねると、
「いや、ここに確かここいらにミュウツーというポケモンがいて……、他の三鳥は捕まえたんだが、あいつだけ捕まえられなくてさ……」
「ミュウツーって、あの遺伝子組み換えの被害ポケモンの筆頭としてあげられる……？」
エリカはそれとなく尋ねたが、レッドがそんな事を知るはずもなく、
「……、あぁそうそう……そんな奴」
と知ったかをして続ける。
「で、今回捕まえに来たんだけど……、どうしてたか居ないみたいだな……。何があったんだろうか」
「興味深くはありますが……、もしかしてゴールドさんが捕まえたというのは？」
エリカはそう尋ねたが、レッドはそそくさに、
「それはない。ゴールドは確かにここまで来れるほどの実力はあるが、俺ですら一度は持て余した相手だ。俺に負けたあいつが捕まえられるハズがない」
と、あっさり斬り捨てた。
「なるほど……」
エリカは合点がいったのか、何も反論しない様子である。
こうして、二人は穴抜けの紐を使って、洞窟の外に出、モヤモヤした心持ちのまま、ハ

ナダに戻った。
　―午後3時30分　ハナダシティ　入り口付近―
　特に行くあてもないので、自転車屋の跡地を見て懐かしんだりしていると、思いがけない人物に出会った。
「あれ、もしかして……、レッドさん?」
　話しかけてきた少年は、黄色と黒の織り交ざった帽子を被っている人物で、レッドやエリカにはすぐに分かったのも当然である。
「おう、ゴールドか。明けましておめでとう」
「こちらこそ、おめでとうございます！　今年も宜しくお願いしますね……と、およそ2週間ぶりぐらいでしょうか……、もしかしてお二人もイッシュへの時間稼ぎですか?」
　ゴールドの尋ねにレッドが答えた。
「そうだ。お前はジョウトに居るんじゃ無かったのか?」
「ええ、そうです。それで、コガネまで行ったんですけど、正月休みの上に、アカネさんが産休を取ってお休みしているそうなんで、産休明けの日までカスミさんとゆっくりしようかなーなんて思い、ちょっとカスミ当人には内緒でここに来ました」
　と、喜々としながらゴールドは語る。
「仲の宜しいことで……、そうですわ。カスミさんのお宅にお伺いするのでしたら、私た

ちの挑戦も受けてもらえるよう頼んでは頂けないでしょうか？」

エリカはそう、妙案を出す。

「……、エリカさんの頼みなら、止むを得ませんね。早い方が良いでしょう。ついてきてくれますか？　案内するので」

そういう訳で、二人はゴールドの導きに従い、カスミ宅まで向かう事となった。

―午後4時　カスミ宅―

「さてと、ここがカスミさんのお家です」

カスミの家は、ハナダ色の屋根で、平屋建ての簡素なものだった。広さは一般的な家屋と同等ぐらいか。

「あら、カスミさんにしては意外に侘びた家ですこと……」

エリカは、皮肉か本気か判別のつかない事を言った。

「さてと……」

そう言ってゴールドは、カギを持ち出した。

「合鍵？」

レッドはそう尋ねる。

「ええ、そうですよ。ここは、僕がトレーナーから一歩離れて、二人で暮らすようになった時の為に……って、僕とカスミさんが共同で買ったものなんですよー」

そう答えながら、ゴールドは鍵穴にカギを差し込み、回そうとした。
しかしどうしたことか、カチッという解錠した音が聞こえない。
「あれ、おかしいなぁ……」
ゴールドは何度も解錠を試みたが、甲斐なく終わることとなった。
「……、もしかして、カギを換えられたとか……」
エリカはそう推測する。
「この様子だとそうかもしれないですね……、しかしどうしてだろう」
ゴールドは首を傾げたが、こうしていても始まらないと悟ったのか、インターホンを鳴らした。
「カスミさーん！　ゴールドだよー！」
大きめな声で、ゴールドは送信機に話しかける。
カチャ、という受話器と取ったと思われる音と共に、聞き覚えのある高い女の声がした。恐らくカスミの声であろう。
「えっゴールド!?　何で急に……、すぐに出るからそこで待ってなさい」
そう言うとプツリと通信が絶たれる。
「良かったぁ、家に居てくれてて……」
ゴールドは息をついて胸をなでおろし、安堵していた。

窓の音が遠くから聞こえる。恐らく換気をしているのだろう。その後に草の踏まれる音もした気がしたが、風のいたずらであろう。とレッドは思った。

そうこうしていると、すぐに。と言った割には5分ほど待たせて、カスミ当人がドアを開けて姿を現す。

「明けましておめでとう！　ゴールド……って、なんでレッドにエリカまで」

カスミは、驚きより寧ろ不快な顔をしていた。服装は相変わらずだが、慌てて着合せている感がある。シャワーでも浴びていたのだろうか。

「押しかけて申し訳ありません」

レッドはそう言うと一礼をした。

「……、ああ、もしかして挑戦しに来たの？」

カスミは、思い出したかのように言っている。

「そうですよ。言いだしっぺ貴方ですよね？　受けないとは言わせませんよ」

レッドは、少し強めの口調で言う。

「へー、あんたにしちゃ強気ね。いいわ、特別に受けてあげる。前回のようにはいかないから覚悟しなさいね。ゴールド。折角来てくれたのに悪いわね」

「いえいえ、大丈夫です」

ゴールドは首を横に振って、そう言った。

「あたしと二人が戦っている間、家で寛いでなさいな。終わったらすぐそっちに向かうから……。それじゃあジムで待ってるわ。準備整えてから来なさいよ」

そう言ってカスミは立ち去っていく。

ゴールドの激励も受け、二人はジムにへと向かった。

―ハナダジム―

「自己紹介なんかするまでもないわね。あたしの水ポケモンが四年間でどれだけ変わったか、みせてあげるわ！　今年の初笑いは、あんたの負けた時の表情よ！」

と、カスミはレッドを指さしながら言った。

「その意地、どこまで張れることやら……」

レッドは、そう毒づく。

「うるさいわね！　とにかく行くわよー、行って、スターミー！　ランターン！」

カスミに続いて、二人が繰り出す。

「行け、フシギバナ」

「おいでなさい、ルンパッパ！」

「スターミー！　フシギバナに冷凍ビーム！」

「ヘアッ！　カチカチの氷光線を喰らえ！」

スターミーのコアから、氷の光線が繰り出される。

「うぐぐ……耐えろ……耐えるんだぁ……」
　フシギバナは3分の2程削れた。
「フシギバナ、スターミーに眠り粉」
「合点承知ぃ！　眠れぃ！」
　スターミーには、眠り粉が降りかかり、眠ってしまった。
「……、この程度の事は想定内よ！　ランターン！　雨乞い！」
「あーめあーめふーれふーれ」
　ランターンが童謡を歌うと、雨が降り出される。
「ルンパッパ、ランターンにヤドリギの種です」
「種付け、種付け～！」
　ルンパッパはランターンに種を植え付けた。
「スターミー……起きそうにないわね。ランターン！　ルンパッパに雷！」
「最大電力のこの雷で、しんじゃえぃ！」
　可愛い声で、恐ろしいことを言うのがランターンの特徴なのだろうか。
　天から太い稲妻が、ルンパッパに直撃する。
「ふぅ～、痺れる痺れる！」
　が、なんともないようだ。ＨＰは3分の1程減った。

「ルンパッパ！　スターミーからギガドレインです！」
「君の養分は、僕のもの！」
と、言いながら、ルンパッパはスターミーから体力を吸い取った。
急所に当たり、スターミーは倒れた。ルンパッパは更にやどりき、たべのこしでダメージ分をほとんど取り戻すことに成功する。
「これがルンパッパの耐久戦術ね……エリカ、あんたがそうくるなら、こっちは……、行って、ミロカロス！」
「耐久が高いミロカロスはさっさと倒すのが最良だ。　フシギバナ！　ハードプラント！」
「俺の根で死ぬがよい！」
フシギバナ自らが大樹となり、息をもつかせぬ程の素早さで相手の場まで根を引き伸ばし、根が巨大で鋭い、一種の刀と化し、ミロカロスを叩き続ける。
「いだいいだいいいいいいい！」
ミロカロスは、絶叫と共に瀕死した。
「うぅ……疲れた……」
フシギバナは、反動で動けなくなる。御三家のみに許されし技とはいえ、代償は大きいものである。

「……、まだまだ！　終わらないわ！　行って、フローゼル！　ランターン！　フシギバナに冷凍ビーム！」
「ふーっ！」
ランターンは息と共に、氷の光線を出す。当然のことながら、フシギバナは倒れた。
「……、行け、ピカチュウ！」
「ピカー！」
ピカチュウは、元気よく出てきた。
「ルンパッパ、ランターンからギガドレイン」
ランターンは、吸い取られ尽くされ、倒れた。
「……！、行って、ラプラス！」

こうして、レッドは一体を失い、エリカは完勝に終わった。
「……、やるじゃない。あんた……そしてエリカの実力。本物だって認めるわ。本気出せば勝てるって思ってたけど、甘いわね。それ以上の格差があるって事思い知らされたわ。あたしに勝った証として、ブルーバッジ、改めて渡すわ！」
そういうと、カスミはブルーバッジを2つ、二人に差し出す。
「有難うございます」

エリカは、深々とお辞儀をした。
「エリカ、あんたはいつも礼儀正しいねぇ。あーあ、それにしても、新年早々、初笑いどころかこんなにボロ負けするだなんて……。きっと今年は厄年ね」
カスミは、力なく笑いつつ、わざとらしく監督席の椅子を浮かせて、背中を預けている。
「そんな事無いですよ。たまたま今回運が悪かっただけです。腕はそれなりにあるのですから自信を持ってくださいよ！」
レッドはカスミを激励した。
「運だけで片付けられるものかなぁ……これ。まあ、そういう風に前向きに考えるのも大事よね。さてと、ゴールドの所にもどろっと」
カスミは監督席から立ち上がり、立ち去ろうとした。が、
「カスミさん」
急に呼び止められたので、カスミは少し驚きつつ、振り向いた。
「ん？　まだ何か用？」
「……、単刀直入にお伺いしますが、浮気していらっしゃいませんか？」
エリカは鋭い一言を放つ。
カスミは、急に矢を射られた鳥の如く、慌てた素振りを見せ

「ハァ?……な、何言ってるのよ。あたしはそんな」
「ならばどうして、そんなに狼狽しているのです? やましいところが無くば、もっと毅然と答えられても宜しいはずなのですがねぇ」
カスミは、それでも反論する。
「根拠もなく疑うだなんて、あんたらしくないわね。証拠はあるの?」
「証拠ですか……、特に御座いませんが、強いて申し上げるのであれば、貴女が応対した後、すぐに出られなかったこと、あと、私の目には見えたのですよ……、微かですが、黒い影が」
「ば……、馬鹿じゃないの!? すぐに出れなかったのはあたし、シャワー浴びてて、タオル1枚しか身に着けてなくて、急いで着たからだし……、それにそんな黒い人影なんて、一体何の」
最後の言葉を聞いた瞬間、エリカの目が鋭く光り、
「墓穴を掘りましたわね……」
「え?」
カスミは、何をしたかわかっていない様子である。
「私、確かに黒い影とは申し上げましたが……、何も人影とまでは申しておりません」
それを聞いた瞬間、カスミの目から光が消えた。

「そして、その上に、また微かなれど、私の耳には足音が聞こえましたわ。貴女が何かを飼っていたというお話は聞いた事ございませんので、動物はあり得ない……、だとしたら」

「ハッ……、馬鹿らしくてやってられないわ。あたしは浮気なんかしていないし、どうしてしなきゃいけないのよ！　エリカ、あんたは前々から思慮深い人とは思っていたけど、こんな疑心暗鬼な子だったなんてね……！　もういいわ！　あたし帰る！」

そう言って、カスミは足早に立ち去った。

その後、レッドとエリカも続いて外に出た。

―ジムの外―

「ありゃ明らかに、クロだな」

レッドはそう断言する。

「ええ。それも、ゴールドさんのように、純粋な少年を騙すような真似は許せませんわ。年端もいかない子に不倫の苦しみなど味あわせたくはない物……、近々ゴールドさんに分かれるように手紙でもお出し……」

等とエリカが言っていると、少し離れているところにゴールドとカスミが居た。

ゴールドは何やら手に持っている。赤色のつばに、白の下地にモンスターボールを青く簡略化したデザインが施されている帽子。それに加え、（ニャー）を彷彿とさせる、ピ

ンク色のツボツボがついた棒状のものも持っていた。
何やら口論しているが、聞こえなかった。しかし、敢えて近づこうとはせず、動静のみを伺う。
ゴールドが珍しく、目をいからせてて、舌端火を吐いているかのように捲し立てている。
終ぞ、彼はカスミを平手打ちにし、持っていたものを叩き落として、立ち去って行った……。
カスミは呆然と立ち尽くしている。
「……、もしかしてバレてたのか？　まぁ、叩かれて当然のことをしてたんだがな」
「そのようですわね。いい気味ですわ……、これを機会に反省して頂ければ良いのですが……」
こうして、ハナダジムを制覇した二人は、カスミの不倫劇を尻目にして、次のジムのある街、クチバシティへと向かうのであった。
―第三十九話　新年、元旦、そして洞窟　終―

第四十話　波止場と墓場

ハナダシティを出発したレッドとエリカは、人混みを嫌って地下通路経由でクチバシティに到着した。

―1月4日　午後1時　クチバシティ―

三が日を過ぎ、人々が日常の生活に戻りつつあった一月四日。

しかし、ここクチバシティは正月などあったものではなく、平常運航である。船は正月であろうと休むことなくクチバ港に錨(いかり)を下ろし、停泊をしているからだ。

そんな最中、二人はクチバシティの入り口に立った。

「相変わらず、異国情緒漂う街ですわ。こういう街も嫌いではありませんわ」

とエリカが感想を言っている傍ら、レッドは南東の丘を見ている。

四年前にビルを建てようとしていたおじさんが居たことを思い出して、ああ、まだ建っていないんだなと懐かしみに触れていた。

「貴方、何故、そちらを見ているのです?」

「いんや、少し思い出したことがあってだな……。それはそうとジムに行くか」

と、レッドは歩み始める。

「マチスさんですか……、お話したくはありませんが、仕方ありませんわね」
彼女はそうぽつりと呟くと、少し遅れてレッドの後を追った。
―同日　午後2時　クチバジム―
「うわ、相変わらずの電気仕掛け……」
レッドは、遠くにあった電気バリアの太き線を見てげんなりしている。
「あら、一時期故障したというお話も伺ったのですが……。仕方ありませんわね」
という訳で、トレーナーを一応倒しながら、ゴミ箱を漁りスイッチを探した。
汚れ仕事を嫌うエリカは全くやらず、すべてレッド自身で漁ったことは説明するまでもないだろう。
―午後2時30分―
ジムの仕掛けをどうにか突破し、マチスの所にたどり着く。
マチスは相も変わらずのハイテンションで話しかけてきた。
「ウェルカム！　よく来たネ！」
「お久しぶりです」
レッドはマチスに対しては、敵対心は無く、むしろ好意的な印象を持っていたので明瞭に応答する。
一方のエリカは、愛想笑いに徹していた。

「ミー、あれからハードプラクティスしたネ！　ユーにビクトリーするために！」
　相変わらずの英語混じりの日本語を話すが、相手を選んでくれてるのか、レッドでも理解できるレベルの英語をマチスは喋っている。
「そのリザルト！　ミーは」
「おい、エリカ、リザルトって何だ？」
　しかし、時々わからない単語が出て来た時、エリカに耳打ちをしていた。
「Ｒｅｓｕｌｔ……、結果。ですわ」
「ヘイ、ミスターレッド。イングリッシュはノットグッド？」
　ノットグッド……、グッドのノットなんだから良くないという意味だろうと、少し考えたレッドは、正直に
「イエス」
　と答える。レッド自身、英語を聞くのはマチスやメリッサ等を除けば小学校以来である。
「Ｈｍｍ……、ミセスエリカ。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　ｅｎｇｌｉｓｈ？」
　マチスはわざと、クセのある喋り方で話す。どれくらい英語を話せるか試しているのだろう。
「Ｙｅｓ，Ｉ　ｃａｎ　ｓｐｅａｋ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ　Ｅｎｇｌｉｓｈ．（はい、私は

少しだけ英語を話せます）」

と、気だるそうではあるが、非常に流暢（りゅうちょう）な英語を話した。これにはマチスも驚嘆して、

「Ｏｈ！　Ｔｈａｔ，ｓ　ｉｎｔｅｌｌｉｇｉｂｌｅ　ｐｒｏｎｕｎｃｉａｔｉｏｎ．（これは明瞭な発音だ！）　Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！（優秀だね！）」

と、エリカを褒め称えている。

「ソレだけ出来ればＧｏｏｄだネ！　もし、ミスターレッドが、困っていたら、ｔｒａｎｓｌａｔｅ（翻訳）してあげてネ！」

エクセレントという言葉に、レッドが首をかしげていたのを見ていたマチスは、簡単な言葉に言い換えてくれた。

「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．Ｉ　ｗｉｌｌ　ｄｏ　ａｓ　ｍｕｃｈ　ａｓ　Ｉ　ｃａｎ　ｒｉｇｈｔ．（私に出来る限りの事はします）」

そう言ってエリカは締めくくった。無論、愛想笑いである。

「Ａｓ　Ｉ　ｗａｓ　ｓａｙｉｎｇ（話を元に戻して……）、ミーのポケモンはフォーイヤーズアゴーよりも、ベリーストロングになったネ！　ミーのエボルブ（進化）したポケモン、それにアッド（加え）してミーのエレクトリックなタクティックス（電撃的な戦術）にオノノクがいいネ！　Ｇｏ！　マルマイン！、ジバコイル！」

マチスに続いて、レッドとエリカも繰り出す。
「おいでなさい、キノガッサ！」
「行け、カビゴン！」
「ジバコイル、バリアー！」
「壁張っとこ」
ジバコイルはバリアを形成しようとした。
「キノガッサ！　ジバコイルにスカイアッパーです！」
「砕け散れ」
キノガッサは、命令と共にジバコイルに突っ込み、素早く、そして力強く、ジバコイルに拳を見舞う。
急所に当たり、一撃で瀕死になった。
「ＨＡＨＡＨＡ！　ライチュウ！　カビゴンにワイルドボルト！」
「ハイスピードでアタックするぜ！」
その雄叫びと共に、マルマインはその巨大な球体を動かすとともに、莫大の電力を伴わせる。
そして、その状態のまま、カビゴンの腹に銃弾の如く怒濤に突っ込んだ。
「あじいいいいい!!」

カビゴンは、相当のダメージを喰らったようだ。ＨＰでいうなら3分の2ぐらい減った。

「カビゴン！　仕返しだ！　地震を喰らわせろ！」

「許さんぞー！　今日の晩御飯は柳川鍋だ！　地よ震えよ！」

カビゴンは、その巨体を用いて、フィールドを思いっきり揺らす。

「うがあああああ！　でも死なないぞ……！」

マルマインは気合のタスキでＨＰ１だけ残った。

「ＧＯ！　ランターン！　カビゴンにダイビング！」

「バイバーイ！」

そう言ってランターンは、海を作り、潜水した。

レッドの背筋に寒気が走る。非常に悪い予感がしたからだ。

「ＯＫ！　マルマイン！　Ｌａｒｇｅ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（大爆発）！」

指示された瞬間、マルマインの体が眩く光り、莫大なエネルギーと、鼓膜が破れかねない轟音と共に、爆発をした。

カビゴンは無論、倒される。キノガッサも吹き飛ばされた。しかし、アクロバティックにも、１回転をしてジムの壁を蹴れる態勢になった後、無事に蹴り返す。そして、半回転をして着地位置を微調整し、元居たところにまで着地した。何とか耐え切ったよう

である。
「フーッ！　ミセスのキノガッサ、クールだネ！」
「Ｂｅｃａｕｓｅ，Ｆｉｇｈｔ　ｔｙｐｅ．（そりゃ、格闘タイプ……ですからね）」
エリカは段々、自身の発音を聞いた時のマチスの反応が楽しくなってきたのか、また英語で話している。実際、マチスはかなり興奮している。出会った時よりもさらに野性的になっているようだ。
当のキノガッサは、頬を緩ませ、所謂ドヤ顔をしていた。
レッドはカビゴンを戻す。
「ちぃ……、カビゴンが……、仕方ないな。戻れ、カビゴン。行け、フシギバナ！」

こうして、レッドは二体を、エリカは一体失って勝利した。
「Ｏｈ！　ゼイの強さ、トルゥース！　Ｔｈａｔ，ｓ　ｕｎｄｏｕｂｔｅｄｌｙ　ｉｔ．（それは疑いようも無い）ネ！　それをリコギナイズ（（価値を）認める）した証として、オレンジバッジ、ヤルヨ！」
マチスは、オレンジバッジを二枚渡した。
「Ｉ　ａｐｐｒｅｃｉａｔｅ　ｉｔ．（感謝いたします）」
エリカは英語バージョンで謝意を伝え、深々とお辞儀をする。

「フーッ、Ａｓ　ｙｏｕ　ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！　Ｙｏｕｒ　ｃｏｍｍａｎｄ　ｏｆ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ｉｓ　ｍａｒｖｅｌｏｕｓ！（やはり素晴らしい！　君の英語の力は感激するぐらいだよ！）」

マチスがかなりベタ褒めをしていることは、その動静から明らかである。何を言っているか全くわからないレッドでも、すぐに分かったぐらいである。

「Ｏｈ，ｓｏｒｒｙ．ミスターレッド。ユーのパワーはモアＧｏｏｄダネ！　ここまでトレーニングしたポケモンたちをオールキルするだなんてネ！　これからも、ガンバれヨー！　Ｄｏ　ｙｏｕｒ　ｂｅｓｔ！（最善を尽くせ！）」

そう言って、マチスは満足したように二人を見送る。最後の言葉はレッドでも分かっていたので、少し嬉しくなっていた。

―ジムの外―

「はぁ……、相変わらずの暑苦しさでしたわ……」

エリカは、ジムの外から出ると早速毒づく。

「しかしたまげたなぁ……、お前が英語出来たなんて。つかお前嫌いと言っていた割には、割と後半は嬉しそうに話していなかったか……？」

レッドは感心して、エリカを褒めたと同時に疑問をぶつけた。

「英語……、正確にはイッシュ語ですがね。これが出来なくてはタマムシ大に入ること

はできませんので。しかしあそこまで褒められるだなんて……、英語なんて本当に久しぶりに話したものですからこちらが驚きましたわ。それでついつい、自分でも認めたくないのですが……その、嬉しくなってしまいまして」

エリカは、嫌いな相手に褒められて、うれしくなっていた自分を少し悔いているようだ。

「……、まあほめられりゃ誰でもそうなるさ。さて、次はとうとう……」

レッドが言い切ろうとしたところを、彼女は遮り、

「その前に、少し立ち寄りたい所が……」

「え？　どこ？」

レッドは、俄かに遮ったエリカの反応に少し驚いている。

「もしかして……、お忘れになられたのですか？　ナゾノクサのクロのお見舞いにシオンタウンに行きたいのです。去年のお盆には行けなかったので、せめて今行きたいと思ったのですが……」

無論、彼はすっかりそんな事を忘れていたが、安定のしったかをする。

「い……嫌だなぁ。忘れるはずがないじゃないか……。そうだな、行こう」

「目が泳がれていますわ……。それはともかくとして、参りましょう」

という訳で二人は空を飛ぶで、シオンタウンに向かった。

―同日　午後4時　シオンタウン―

シオンタウンは相変わらず、閑静な住宅街である。正月というめでたい月のせいか、あまり墓参の人は見受けられない。

「あ、あれ!?　ポケモンタワーは?」

彼は、四年前に来た時にあった荘重な塔が、大きなビルに変わっている事に対して大いに狼狽していた。

「ご存知無かったのですか?　ポケモンタワーは現在、ラジオ塔に取って代わられたのですよ?　ラジオで聞き及んでおられるかと思ったのですが……」

「いやー……、俺あんま記憶力良くないからさ……。そっかマジかぁ……」

レッドはしみじみとしながら、遠くにある大きなビルを見つめている。

「あれ、じゃあ今はどこにポケモンのお墓があるのさ?」

彼は当然の疑問をぶつけた。

「現在は魂の家という、ポケモンタワーの長を務められていた、フジ老人が営んでおられる所に移されていますわ。クロの墓も無論、そこにありますわ」

「そか。んじゃ、そこに行くか」

という訳で二人は、魂の家に歩みを進めるのである。

―魂の家―

到着すると、エリカは真っ先にフジ老人の所に赴いた。
フジ老人は誰かと話しているようだ。頭はツルぴか……、まさか。
「お話し中の所、申し訳ございません。フジさん！　ご無沙汰しております」
エリカは恭しく、フジ老人にお辞儀をする。
「おお、エリカ女史かい……。久しぶりだね」
「おお！　レッドではないか、グレン島以来じゃな！」
話していた相手は、カツラであった。
「カ……カツラさん。よくぞご無事で」
レッドはまず、そのことを口にした。グレン島噴火の知らせは、かなりの大ニュースであった為、レッドの脳裡にも深く焼き付いていたからだ。
「何、あんな噴火ぐらい乗り切れぬようじゃ、グレンのジムリーダーなど務まらぬわ」
と、カツラは自信たっぷりに言う。
「お二人はお知り合いなのですか？」
エリカは興味深げに尋ねる。
「いや何、大学以来の朋友だよ。フジはわしと同じく社会に出てからタマムシ大に入ったからの。じゃあのフジ……、例の件。頼んだぞ」
「無論じゃ。必ずやあの男の野望を阻まなくては……のぉ」

フジとカツラは決意を固めた視線を送り合う。
「じゃあの。レッド。6つ集めた暁には、ふたご島に来ることじゃ。間違ってもグレン島には無いから勘違いするでないぞ！　ハハハハ！　それではな二人とも、楽しみにしとるぞ」
レッドの肩を数回叩きつつ、カツラはいつも通りな調子で、快活に出て行った。
「全く、カツラはどうして場所を弁えないのか……、ここは墓だと言うのに」
と、フジは愚痴をこぼす。
「いや、あれでも抑えてる方だと思いますわ。なにしろ御年不相応なまでに矍鑠な方……ですからね、カツラさんは」
エリカはそう、カツラをフォローした。
「確かにそれは否定できないの。さて、墓参りに来たのじゃろう。こちらに来なさい。墓まで案内しよう」
と、フジ老人は右の壁にあったドアに向かって歩き始めた。
「え？　ここじゃないのですか？」
レッドは少し驚いている。
「女史には、ポケモンタワーから移る際に多額の寄付を頂戴した上に、代々、亡くなったポケモンをここに埋葬してもらっていたからそのお礼に別の部屋に埋葬しているの

じゃ。本来は私と持ち主しか入れることはできないのだが……、ま、配偶者という事で特別に入室を許可しよう」
　という訳で、二人は墓参りをした。

　墓参りを終えた二人はシオンタウンを散歩していた。
「そういえば、ここら辺で俺はエリカと会ったんだよな……」
　レッドは四年前、ポケモンタワーの前あたりの広場で会ったことを想起している。
「フフ……、今思うと、貴方かなり恍惚としておりましたわねぇ……。あの頃から思慕を抱いていらしたのですか？」
　エリカは、当時を想い起こし、思い出し笑いをしている。
「……、その通りだ。まさかあの時、一緒に旅するだなんて思ってもいなかったな……」
「私も同じです。ただ、一つ言える事とすれば……あの頃はまだ、貴方の事は凄い方とは思っていましたが……恋慕の情は抱いていませんでしたわ」
　エリカはきっぱりと言う。
「え、じゃあ、いつ俺の事」
　レッドが言い切ろうとすると、エリカは遮る。
「そんな事……、どうでもいいではありませんか……。今、貴方の事を……愛しているの

ならば」

エリカはそう言うと、レッドの肩に頭を預ける。

これ以上この話を続けると、いろいろなものが暴発してしまいそうになったので、レッドは話題を切り替えた。

「さて、今度こそタマムシか……」

「久々に帰郷致しますわ……。生憎、肉親はおりませんので貴方に合わせるお方もおりませんがね」

エリカは、14歳の頃に母親を失い、父親は10歳の頃に他界している。そして最後まで見守ってくれていた祖母（カルミア）も、エリカが大学を卒業したのを見届けたかのように16歳で鬼籍に入る……という事で兄弟姉妹もいない為、エリカに親戚や家族は居ないのだ。才媛・傾国の美女……いろいろな言葉で褒め称えられる彼女だが、家族が居ないという不幸な境遇である。

「……、そうか。そうだったな。さて、それじゃあ行くか！」

「ええ」

こうして二人はまたも地下通路経由で、タマムシシティへと向かった。

―1月6日　午後1時　タマムシシティ―

こうして、エリカは四年ぶりに、レッドは更に久しぶりにタマムシに到着した。

「うーん、相変わらず賑やか……」
　今日は月曜日という事もあって、少し落ち着いている感触こそあったが、やはり他の街とは比べ物にならないほどの繁栄があった。首都の威厳だろうか。
「内国一の、素晴らしい都市だと私は自認致しますわ。コガネやカイナ等とはまた違って、ここは緑を多く取り入れておりますし！」
　エリカは自信満々に、自らの街を称賛する。
「なるほど、自分の街だけあって、お前がいつもより更に生き生きとして見えるよ……。さて、ジムに行くか」
「ナツキさん……、ジムの木々……きちんと手入れしているかしら。もし一本でも枯らしていれば……」
　エリカがそんな事を呟いているのを耳に挟みつつ、ジムに向かう。
　―タマムシジム―
　ジムに入ると、近くに居たジムトレーナーが俄かに騒ぎ出す。
「あ！　リーダー！」
「本当だ！　お久しぶりです！」
　そばに居た全員が作業を止め、二人に対してきっちりとお辞儀をした。流石、エリカの治めるジムである。綱紀粛正がなされている。

「皆様、ご無沙汰しております……、ジムを空けてしまい、迷惑をかけてしまって申し訳ありませんわ。さて、ユキコさん。ナツキさんは何処におられます？」

臨時副リーダーのユキコは、質問されたと同時に、

「はい、現在は奥で胡蝶蘭の世話をされていると思います！」

と、丁寧に元気よく答える。

「どうも有り難う。行きますわよ、貴方」

レッドが周りの花に見とれていると、彼女の一声で現実に戻り、

「お、おう。そうだな」

こうして、二人はナツキの所に赴いた。

―同所　奥―

ナツキはユキコの言う通り、奥で胡蝶蘭の世話をしている。

「ナツキさーん」

エリカは、彼女を見つけると、笑いかけながら呼ぶ。

「リ、リーダー！！　お久しぶりです！」

と、ナツキは深々と頭を下げる。

「そこまで畏まらなくても宜しいですわ……、名目上は同じ役職なのですから。さて、それはそうと……、言いつけどおりしっかりと世話されてますわね。枯れている木や花

は、見たところ一つもなく、私の居た頃と遜色無いほど清潔に保たれてますわ」
　エリカはそう、ナツキのジムの内装管理を褒めた。
「あ、有難うございま……ゲホッ、ケホッ」
　ナツキは返事をしようとしたが、途中で咳をしてしまった。
「あら、お風邪ですか？」
「冬なもので……。あ、大丈夫ですよ。そこまで大事では……ゲホッ」
　ナツキは気丈に答えたが、深刻そうではある。
「無理をしないでください……。副リーダーのユキコさんも居るのですから、養生できるようにしっかりと分担しながらやってくださいよ？」
「肝に銘じます……」
　と、ナツキは鼻声交じりの声で答える。
「さて、ここに来たという事は挑戦ですね！　レッドさん貴方とは前々から」
　ナツキは、元気よくレッドに挑もうとしたが、エリカが口をふさぐ。
「ナツキさん……、分不相応な事をいうものではありませんわ。この方は貴女が到底……、勝つことなど不可能な力を持っております」
「え、では、不戦勝でバッジを渡せと!?」
　ナツキは、素っ頓狂な声で言う。

「そんなジムの名を下げる真似は致しませんわ……」
「おいおい、じゃあどうする気だ」
レッドは、帽子を目深に被り直し、エリカに尋ねる。
「……、簡単な事ですわ。貴方の……レッドさんのお相手は……私が務めさせていただきますわ」
彼女は、レッドの目に向かってしっかりと答えた。
「……え？」
―第四十話　波止場と墓場　終―

第四十一話　秘すれば花なり秘せずば花なるべからず

―1月6日　午後1時30分　タマムシジム―

「……、簡単な事ですわ。貴方の……レッドさんのお相手は……私が務めさせていただきますわ」

「え?」

レッドは当惑した。ずっと一緒に旅してきた相棒を戦うことになるからである。

「……、お前、それ、本気で言ってるのか?」

「先ほども申し上げたではありませんか、ナツキさんには分不相応……、ならばジムの真の長である私が相手せずして如何するのですか?」

エリカは当然のように、レッドに笑いかける。

「確かにお前のいう事はもっともだが……。長く連れ添った相棒……、それも嫁と戦うだなんて、前代未聞だぞ」

「あら、貴方、発言がなかなかこなれてまいりましたわね」

彼女は頬に手を当て、驚いたかのように言う。

「お前みたいに博識な奴が居りゃ、俺みたいなバカでも教化されるわ。てか話そらすな

よ」

「ごめんあそばせ。しかし、長く連れ添った相棒……、バトルに斯様な私情など不要ですわ。ならばどうして貴方は長年のお友達であられたグリーンさんと一戦を交えられたのです？」

彼女は鋭く、的を射た事を言った。これにはレッドも観念し。

「……、それもそうか。だが、如何にお前でも戦うのであれば容赦はしない……！」

「当然の事ですわ。さて、私は和服に着替えますので。しばしお待ちを」

という訳でエリカが和服に着替え、例の最奥部に移動した。

ジムトレーナーの耳目を集めた中での勝負……、しかも全員１０代後半～２０代中盤と女の盛りを迎えている人々である。むっつりスケベのレッドの心が躍らないハズが無かった。

しかし、夫としての威厳を崩さないように、言葉だけはしっかりとするよう努める。

「こうしてまた一戦を交えるとはな……」

その言葉を受けたのか、彼女は少しだけ物静かに出てくる。

その様はまるで聖女の如く清らかで、また歴史を揺るがした傾国の美女が如く妖艶でもあった……、そしてレッドにとって黄土色を基調とした和服を着た彼女は眼福そのものである。出てきて間もなく彼の聖女は口を開く。

「塞翁が馬、禍福は糾える縄のごとし……、人生何があるかなど誰にも予測できない事です。なればこそ、人の生というのは面白きものなのです。そして、また貴方と戦えること……、私としては幸悦の限りですわ。そして恐らくは再びと有り得ぬこの機会……、貴方にも失礼のないように、もてる限りの力を尽くさせていただきますわ」

外は枯れ木ばかりなれど、タマムシジムはツバキやベニチョウジ等の季節の花が咲き誇る。そして、そんな美しさをバックにして毅然として立つ彼女の姿は、言わずとも風格が漂う。

そんな彼女の風格に少しだけ気圧されながらも、レッドは悠然として答える。

「……、そうだな」

「では、参りますわ！　おいでなさい、ダーテング」

「行け、ラプラス！」

こうして、最強の夫婦同士の戦いが幕を開けた。

「ダーテング！　日本晴れです！」

ダーテングは、手に持っている葉を自在に動かし、晴れ状態を作る。

「ラプラス、冷凍ビーム」

「凍っちゃえー！」

ラプラスはその声と共に、ダーテングに向かって氷の光線を放つ。

「無念……！」
　ダーテングは倒れた。
「役目は果たしましたわね……、よく頑張りました。おいでなさい！　ロズレイド！　ソーラービームですわ！」
「私の光線を以て、焼死するがよい」
　ロズレイドはフィールドに降り立った瞬間、間、髪を入れずに眩い光の束を解き放つ。
「うわあああ!!　熱い！　熱いよおおお！」
　こうして、ラプラスは一撃で倒れた。
「……、行け、カメックス！」
「熱いけど、気張るぞ」
　カメックスは自らの巨体を誇示する。
「ロズレイド、もう一度ソーラービーム！」
「うわあああああ!!」
　無論、カメックスもやられた。
「行け、カビゴン！　……、うまく時間を稼げよ」
　レッドは小声で、カビゴンに呟く。カビゴンは小さく頷く。
「ロズレイド、ソーラー……」

エリカが言いかける前に、レッドは指示する。
「よし……、カビゴン、守るだ！」
「結界！」
カビゴンは自らの前に大きな結界を形成する。
ロズレイドのソーラービームは、当然跳ね返された。
「……、やりますわね」
「これぐらい予期できなくちゃ、チャンピオン失格さ。カビゴン、炎のパンチ！」
カビゴンは、炎を拳にまといはじめる。しかし、ロズレイドはその前に……
「まだ、日本晴れの効果は切れません……しかし布石は打っておきましょうか。ロズレイド、草笛ですわ！」
「私の美しき笛で、安穏（あんのん）と眠りにつけ」
ロズレイドは、美しき音色を奏でる。雰囲気もあってか、すぐに眠ってもおかしくはなかったが……
「天津丼……北京ダッグ……麻婆ドーフ……ホイコーロ……」
と、カビゴンは今日の晩御飯でも妄想しているのか、どこ吹く風だ。今日は中華か。
「所詮は、命中５５だな……、よし、カビゴン！　そのまま突っ込め！」
「うし！　今日は北京ダッグだ！　決まりぃぃぃ!!」

そう言いながら、炎を纏った彼の拳は、ロズレイドの腹を的確に抉る。
「熱い……！　だが、ジェントルポケモンたるもの……、この程度ではやられぬ……！」
ロズレイドの矜持は凄まじいものである。
そして、空の状態が元に戻る……ハズだった。
「あれ……、晴れが終わらない……！　どういう事だ」
「フフフ……、シンオウで手に入れた、熱い岩……、斯様にも使えるものでしたか」
彼女は、そう静かに笑う。
「な……！　あれは地下通路でしか手に入らないんじゃ……」
レッドは少し動揺しながら言う。
「探検セットを受け取るための試験……覚えていらっしゃいますか？　その時に幸運にも掘り当てたのですよ。何かの機会に使おうと、ダーテングにもたせていたのですわ」
エリカはそう言うと、にこやかにレッドに笑いかける。当のレッドは歯ぎしりしている。
「これで日本晴れは通常より3ターン程長くなりますわ。さあ、ロズレイド。決着をつけますわ。ソーラービームです」
「今度こそ、安らかに眠れ！」
その言葉と共に、ロズレイドは光線を放つ。それは、先ほどの光線よりもレッドには

眩く見えた。
　カビゴンには急所に当たり、倒れた。
「……、行け、ピカチュウ！」
「ピカッ！」
　ピカチュウはいつも通り、元気に飛び出る。
「例え、か弱きピカチュウであろうと……容赦は致しません、ロズレイド、ソーラービームですわ」
　ピカチュウは、ソーラービームの洗礼を喰らう。しかし、何とか半分くらいＨＰを残し、耐え切る。
「ピカチュウ……、アイアンテールだ」
「ピカッ！」
　ピカチュウはチャームポイントでもあり、武器の一つでもあるギザギザの尻尾を煌めかせ、鋼鉄と化したその尻尾を思い切りロズレイドの頬に叩き付けた。
「痛っ……、マスター、ここまでのようです……」
　そういうと、ロズレイドは倒れた。
「良く頑張りましたわ……。戻りなさい、ロズレイド。おいでなさい！　モジャンボ！」
　モジャンボはのっそりと出てくる。

「さて……、これで最後でしょうか。モジャンボ、ソーラービームですわ！」
モジャンボは、謎の黒き部位から、それとは裏腹の白く眩き光線を出す。
「チャァァァァァ!!」
ピカチュウはいよいよ耐え切れなくなり、倒れた。
「……、よくがんばった。行け、フシギ……」
「貴方」
次のポケモンを出そうとした瞬間、エリカに呼び止められた。
「……、どうした」
少しだけ冷や汗をかきつつも、毅然と答える。
「どうして……リザードンをお出しにならないのですか?」
エリカが強い口調で言う。
彼はやっぱり感づかれたかと、思った後口を開いた。
「偶然だよ」
無論、これが本意ではないが、さも本当に偶然だという口ぶりでレッドは言う。
「偶然なはずがありませんわ。貴方はまず、得意なタイプが出てきたらそのタイプに合わせてポケモンを出す傾向があります……。最近で言うならば、カスミさんの時、最初にフシギバナをだしていたではありませんか」

「……、あんまりお前のポケモンを蹂躙する真似をすれば……、これから先も旅をするわけだ。連携が悪くなっちまうとまずいだろう？」

レッドは咄嗟に思い付いた言い訳をいう。たどたどしい口調から本意でないことは明らかだったが、彼女は毅然と返す。

「私は貴方の……誰にでもひた向きに、本気で戦う。その姿勢に惚れたのです。最初に戦った際、貴方は勝ちが確定しているにも関わらず、最後の最後までポケモンに全力を出させていた……。レッドさん。どうか私を失望させないでください、どうか存分に、貴方の本気というものを私にみせつけてください……！」

いつものお嬢様口調じゃないことに、ただ事じゃないと悟ったレッドは慌てて、

「……、お前の覚悟。ハッキリ言って舐めてた……、こんなんじゃ夫失格だな。分かった……、行け、リザードン！」

レッドは、キッと目を彼女の目へ向けて言い、リザードンを繰り出した。

リザードンは大きな翼ではためきながら地に降りる。久々の外の空間が心地いいのだろうか。

「リザードン、大文字」

「問題、東条英機が東アジアに作ろうとした」

リザードンが問題を言い切る前に

「大東亜共栄圏」
と、モジャンボが即答する。流石エリカのポケモンだ。
「何で知ってんだコンチクショーーー!!」
そう叫びながら、リザードンは炎の塊を吐き出す。
大の字になった瞬間、エリカは静かに呟く。
「モジャンボ、まもる」
「ざまあないですわ」
そう言いながら、モジャンボは結界を張る。大文字はその結界を前にして、火花一つ残さず、消えた。
「ッ……！　出鼻くじいたな……！」
レッドは歯ぎしりしながらそういった。
「先ほどのお返しです。モジャンボ、原始の力ですわ！」
「リザードン。もう一度大文字」
「問だ」
リザードンが言い終わる前にレッドは遮り、
「早くしろ。切迫してるんだぞ……」
と、彼は物々しい口調でリザードンに言う。

「へい……」
リザードンのテンションが少し下がった。
炎の塊がまたもモジャンボに迫る。しかし、モジャンボは難なくよけ……。
「モジャンボ、今ですわ！」
エリカは、僅かに出来た勝機を見極め、ここぞとばかりに指示をする。そして、運悪くもリザードンに尖った岩が突き刺さる。
「いでえええ！」
リザードンは四倍の大ダメージを食らう。しかし、所詮は不一致である。何とか耐え切った。
「よく耐えたな。よし、今度こそ決めろ！　もう一度大文字だ！」
今度はモジャンボに直撃した。盛んに燃え盛ったが、どうしてだか倒れない。
「嘘だろ……。モジャンボは大した特防でもないのにどうして……まさか、襷か!?」
「フフ……、さすがは貴方。ご明察ですわ。モジャンボ、もう一度原始の力ですわ！」
モジャンボは、またも尖った岩石をリザードンにぶつける。
「うう……痛い、痛すぎる……。レッドさんよぉ、すまん」
こうして、リザードンは倒れた。
「あと一体……！」

まさかエリカ相手にこんな苦戦をするなんて。レッドは舐めてかかったことを深く後悔した。

「フフ、どうですか。貴方。私も成長したものでしょう?」

エリカは不敵な微笑みをレッドに向ける。

「ああ、俺と戦ったときとは比べようも……、しかし本気とはいえここまで強くなるとは。俺も予想外だよ。一体どうしてここまで」

「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず……。簡単にお話しするわけには参りませんわ。花は秘している所があればこそ美しきもの。バトルも同様に、分からないところにこそ本当の強さの秘訣があるというものです。さて、続けましょうか」

エリカがそう言うと、彼はすぐに答える。

「そーかい！　お前に負けたらシャレにならん……。絶体絶命の状況だが……この勝負、必ず勝ってみせる。行け、フシギバナ！　お前にすべてを託す！」

レッドは目をいからせながら言い、フシギバナを繰り出した。

「うう、緊張する」

フシギバナは身震いした。

「フシギバナ！　ヘドロ爆弾だっ！」

フシギバナは、紫色の球状の爆弾を、花の穴から噴射する。

効果は無論、抜群で、巨体が思い切り崩れ落ちた。
「モジャンボ……。よく健闘されましたわね。ここからが本当の戦いですわ！　おいでなさい、キレイハナ！」
「押し切られてたまるか……、フシギバナ、もう一度ヘドロ爆弾！」
フシギバナは再び、毒の塊を噴射する。
「ゲフッ……。こ、こんなもんじゃやられないもん！」
キレイハナは相当ダメージを喰らったが、精一杯強がりを見せている。
「キレイハナ、めざめるパワーですわ」
キレイハナは、波紋を作り、フシギバナに衝撃を与える。効果は抜群だ！
「な……、まさか……氷!?」
レッドは驚愕する。
「何故だかこの技を使うと皆さん、驚かれるのですが……、なるほど、めざめるパワーって氷タイプの」
エリカがすっかり納得しそうになったので、レッドは慌てて訂正しようとする。
「いやいやいやいや、それ大きすぎる誤解だよ!?　めざめるパワーってのは……、いいや、説明めんどくさいし……。フシギバナ！　もう一度、ヘドロ爆弾！」
フシギバナは、三回目のヘドロ爆弾を放った。

「ゲフッ……、マスター……、ごめんなさい……」
キレイハナは倒れた。
「……、キレイハナ。ゆっくりお休みになりなさい。さて、あっという間に追いつかれてしまいましたわね」
エリカは勿体なさげにそう言う。
「フシギバナは、俺がオーキド博士から貰った最初のポケモン……フシギダネだった頃からの付き合いだ。ヒトカゲとかは、まあ追々で貰った奴らなんだが……。だから、そうそう諦めはしない。何しろ、強い絆があるからな」
彼は、エリカにはっきりそう言った。
「私の最後のポケモンも……。似たようなものですわ。私が母上から頂いた唯一の……、マダツボミの頃から大事に育ててきたポケモン……。おいでなさい、ウツボット！」
「あー、やっと出番来たよ……」
ウツボットは嬉しそうに出てきた。
「相棒にしちゃ。随分出す回数少なくないか……？」
「中々出す機会が無かったもので……。しかし、今回は存分に活躍して頂きますわ。ウツボット、ヘドロ爆弾！」

ウツボットは、大きな口から毒球を噴射する。その様はさながら大砲である。
「フシギバナ、めざめるパワーだ！」
フシギバナは、大きな波紋を作り、相手に巨大なパワーをぶつけた。
「はちぇえっえええぇ!!」
「熱い……？　さっきは氷でしたのに」
彼女は深く考え込んでしまった。なかなかにその仕草も可愛いらしいが、勝負が進まなくなってしまうのでレッドは一言でまとめる。
「だー！　もう、ポケモンによって変わんだよ！」
乱暴な説明ではあるが、あながち間違いではない。
「腑に落ちませんが……。分かりました、そういう事なのですわね……、さて、ウツボット！　もう一度ヘドロ爆弾です！」
ウツボットの大砲はまたもヘドロ爆弾を発射する。そろそろ体力が危ない。
「……、フシギバナ。やれるか？　正直に言え」
レッドは、重い口調でそう尋ねる。
「正直言って……、キツいな。だが、やれる限りはやってやるよ！　同じく長年付き合ってきた相棒だというんだったら、俺の方が勝たなきゃ、レッドに申し訳が立たない！」
フシギバナは勇ましくそう言った。

「頼もしいな。流石は俺のポケモンだ。よし、フシギバナ！　ハードプラントだ！　一か八かだが……、これで打倒せ！」

レッドは、タイプ一致に加え、新緑の特性発動、素の絶大な威力に全てを賭けた。

「私のウツボットも……、先ほどのめざめるパワーが相当に堪えていますわね。しかし……ここさえきめてしまえば……勝利は私の手に！　ウツボット、止めを刺して御上げなさい。ヘドロ爆弾です！」

ウツボットの大砲、フシギバナの刃の如き蔓……、やがて互いの武器は交差し、相手に作用する。

双方が技を出している間の一秒一秒。レッドは自らの名誉。エリカはリーダーとしての威厳。それぞれにかかった一撃で、一ミリ秒たりとも、その軌跡を見逃しはしなかった。

それから数分は経ったであろうか。片方のポケモンがとうとう力尽き、倒れた。

「……、ウツボット……？　嘘……、嘘ですわよね？」

エリカは動揺を隠さず、少し安定性を失った口調でウツボットに語りかける。

「……」

最早、ウツボットには答える気力すらないようで、返答はなかった。

一方のフシギバナはというと。

「立ってる……立ってるぞ！」
「なんとか耐えきったぜ……、くそ、免疫大変だったんだぞ。感謝しろよな」
フシギバナは、そうレッドに毒づく。
「おう、よくやったぜフシギバナ！」
レッドはフシギバナに飛びついていた。
「……、全く、人が落ち込んでいるというのに、随分と楽しそうですわね。貴方」
「……、悪いな。エリカ。だがここまで追い詰められたの……、ヤナギさん以来だったもんだからさ。ついはしゃいじまった」
レッドはそう言って、彼女に謝った。
「……、そこまで追い詰めたのに勝てないとは……、私もツメが甘いという事ですわね。それにしても、あそこまで追い詰められても、最後は勝たれた……、その粘り強さは称賛に値しますわ！　レインボーバッジ。改めてお渡しいたします」
エリカは、レッドに虹色に輝くレインボーバッジを手渡す。
「……、なんだか。少し妙な気分だが……まあいいか！　よしじゃあ、このままセキチクに……」
と、レッドは旅を続けようとしたが、ナツキが遮る。
「ちょ、ちょっと待ってください！　リーダーに植物の仕入れや栽培など色々と尋ねた

いことがあるので……。レッドさん、申し訳無いですが、少しだけ待ってもらえませんか？」

「あら、随分とリーダーらしい事を仰るようになりましたわね……。仕方がないですわね。という訳で、貴方。これまでは前々から約束していた事なので。タマムシデパートの屋上で待っていただけますか？」

エリカはそうレッドに提言する。

「わ……分かった」

そう言ってレッドは去っていくのである。

――――――

―タマムシジム　執務室―

「リーダー、いつの間にレッドさんを圧倒するぐらいにまで強くなられていたんですか……」

ナツキは感心したかのようにエリカに尋ねる。

「伊達に旅路を共にしたわけではありませんわ。それに、今回はレッドさんが最初本気を出していなかったというマイナスがありますわ。一概に私がそこまでの実力を持てているとはいえません」

と、エリカは謙虚にもナツキの言葉を取り下げる。

「そういうところ……、本当に見習わないと……、あ、リーダーこれが居なかった時期のジムの決算書です」
「どうも有難う。……、ナツキさん。固定資産税が計上されていないのですがこれは……」
という感じで、二人はジムの経営を話し合うのであった……。

―同日　午後2時45分　タマムシデパート　屋上―
「……空が青いな」
レッドはそう一人呟いていた。旅に出てから一年近くが経過し、ゴールも見えてきた。
その為、達成後の自分について考えているのである。
本当にエリカと一生を過ごして良いのだろうか……。彼はそんな疑念を抱いていた。
ナギサで自らの為に自傷行為に及んでしまったエリカの友達であるはずのミカンに対する彼女の言動。そこで僅かなれどエリカに対する疑念が生じ始めていたのだ。
エリカの俺に対する執着……俺にとって大変嬉しくはあるがそれと同時に恐ろしい……いつか自分に矛が及ぶのでは……エリカは大変美しく、妻とするには申し分ない……俺にはとても勿体無いぐらいの嫁……しかしどうしても……あのナギサでの言動

が……。

と、レッドは珍しく葛藤していた。

この頃からレッドのみではあるが、夫婦の間に少しずつ隙が出来始めたのだ。

何か……非常に悪い予感がする……青天に雲がかかり大雨や雷が下るようにこの関係ももしかすると……

雲ひとつない冬空を見ながら彼は考え込んでいる。

そうこうしていると白衣を着た男性がやって来た。オーキドでもウツギでもない。奇抜な髪形をした青年の男である。

「もしかしてレッドさん?」

「!?、誰ですか貴方は?」

「急に話しかけて申し訳ありません。私の名前はアクロマ。ポケモンの力を最大限引き出すためにはどうしたら良いかを研究する為全国を飛び回っているものです」

アクロマと名乗ったその青年は、深々とお辞儀をした。

「全国……どこ出身なんです?」

「普段はイッシュ地方にいますね」

「へー……そんな人が俺に何の」

言い切る前に、アクロマは唐突な質問をしてきた。

「貴方にひとつお聞きしたい事があります」
「なんです？」
「ポケモンというのは如何様にすれば力を最大限に引き出せるんでしょうか？」
「……はい？」
　レッドは聞かれたことの意味が理解できず、思わず聞き返す。
「そのままの意味ですよ。どうなんです？」
「……知りません」
　当然だ。そんな事が端的に答えられるんだったら俺は失業しちまうよと。言いたげな顔をする。
「知らない……達磨禅師（だるまぜんし）の如き答えですね。」
　マジで何なんだよこいつ。急に訳のわからないことを尋ねてきたと思ったら、今度は知識自慢ですか。警察に突き出してやろうか。などと思いはじめると、洋服に着替えたエリカがいつの間にやってきていた。
「その昔、中国に達磨という禅の創始者が居ました。」
「うわ、エリカ！」
「皇帝は禅の真髄を知るためにその身で達磨のもとに赴き、真髄を聞いたところの答えが……」

アクロマは手を数回ほど叩いた。拍手をしているようだ。
「流石は内国一の最高峰、タマムシ大第一の才媛……説明が上手でいらっしゃる。」
「……ヒウン大主席の方に言われるのは恐縮ですわね。」
ヒウン大は現実で言うマサチューセッツ工科大学やハーバード大学に値するほどの難関大学である。当然のことながらレッドは仰天する。
「しかしどうしてイッシュ地方からこのように……」
「確か……ユナイテッドユニバーサルと呼ばれる大学で上位5%以内の方は自由に出入りできるのでしたわよね?」
彼女は記憶の糸から探り出したかのように言う。
「その通り……しかし無条件に与えられる訳でなくリーグの審査もありますけどね……」
さて、と言い彼は話を戻す。
「レッドさんあなたの答えも確かに一つではあるでしょう。しかし私はそのような曖昧模糊な答えではなく明確な答えを知りたいのです」
「はぁ……」
んなことどうでもいいよ。とレッドは思う。
「今私の仮説としてはそれを出来るのは人間ではないか? という事。しかしそこから

先の結論にはなかなか」
「人間……」
「私はそこから先の結論を得る為に最強のトレーナーたる貴方に話しかけたのですが……、どうやら貴方ですら、それが何か知らないと……貴方達二人にはまた会うことになるでしょう」
　そう言ってアクロマは去っていった。
「何だったんだ？」
　とにかく彼の第一声はそれであった。
「答えを求めて動く様はまさに求道者に近いものを感じさせますわね」
　彼女はそれなりに彼の行動を認めているようだ。頭いい人の考えることはよくわからぬ。と心中で毒づく。
「しかしなんだろうあのただならぬ雰囲気……」
「もしかするとその感覚……当たっているかもしれないですわね」
　こうして二人はタマムシデパートで買い物をした。
　―午後４時半　タマムシデパート外―
「さて、今度こそセキチクに……」
「待ってください。一つ私行きたい所があるのですが……」

エリカは少し申し訳なさげに言う。

「何処だよ」

彼はいかにもうんざりした表情で言った。

「タマムシ大学ですわ。恩師の方々の顔見に行きたいので……」

なんで俺も行かなきゃならんのだと思ったが、反論するだけ無駄だと悟り、ついていくことにした。

―午後４時４０分　タマムシ大学　講堂内大広場―

タマムシ大学は、内国一の最高学府として誉れ高い。

外装はその名に恥じず、赤レンガに赤門等などと、これ自体がこの国の文化なのではないかと思うほどだ。

そして二人は講堂の玄関に入る。

すると、ウツギに会った。もう一人、なんだかアラフォー世代に思える女性の博士と思われる人物もいた。

「やあ！　お二人とも久しぶりだね！」

ウツギは相も変わらず、快活に話しかけてきた。

「あ、ウツギ博士！　お久しぶりです！」

レッドに続き、気づいたエリカも深々と頭を下げる。

頭を上げると、まず彼女は、後ろに居た博士に気付いたようだ。
「あの、後ろに居るお方はもしかして、アララギ博士でしょうか……？」
エリカは自信なさ気にその女性に尋ねた。
「あら、知っているのね！　そうよ、イッシュ地方でポケモンの進化について研究しているアララギよ。エリカさん。貴方の事は散々ここで聞いたわ。相当優秀な学生だったそうね」
「そーそー。僕は、エリカさんが居た頃はまだ駆け出しの研究員だったから、良くは知らないけど……。最年少にして、歴代最優秀の成績で卒業。しかもヒウン大から授業料・入学金全額免除という破格の待遇で呼ばれていたみたいだね！　本当凄い子だよ……」
と、ウツギはエリカの事を褒め殺しにする。
「そこまで言われると面映ゆいですわね……。単に努力をしただけですわ」
「どうしてヒウン大に来なかったのよ……、もし来ていたら相当良い人脈が出来ていたハズなのに」
アララギは残念そうにそう言った。
「どうも当時の私は、遠いことが億劫で仕方なかったので……。しかし先ほどアクロマさんにお会いしましたが、ヒウン大にああいう面白いお方が居たんだと、少しだけ後悔いたしましたわね」

「ああ……、アクロマ君ね……。教えてたけど凄い子だったわ。何しろ私ですらタジタジだったもの。何を考えているのか分かりにくい子だったけどね。さて、イッシュ地方に来た際は二人とも宜しくね！　来た際にはイッシュ地方の3匹、あげるわ！　それではウツギ博士。私は急ぎの仕事が残っているので。またお会いしましょう」

そう言って、アララギは3人の元から去っていく。

「なんだか……、自由な人ですわね」

エリカは口調や話の内容から、そう察したようだ。

「あの人イッシュ地方の人だからね。内国とは気質が違う事を思い知らされるよ……。でも個人的には普通にいい人だと思うけどね」

と、ウツギはそうアララギをフォローする。

「ところで、お二人はどうしてここに？」

レッドはようやく口を開き、当然の質問をする。

「あー、今日は3日間かけてポケモンの分布と進化に関係する全国フォーラムをやってね。今日はその最終日だったんだ。で、全国だからアララギ博士も来てたわけさ」

と、ウツギは解説する。

「面白そうですわね。末席にでも加わりたかったですが……」

「君がもし、僕の研究所に居てくれてたら連れてきてあげてもよかったよ！　君にとっ

ては非常に興味深い話とかもしていたしね」
「あれ、研究所といったら、ツクシ君居ませんね。もしかしてアカネさんの……？」
レッドは、そうウツギに尋ねる。
「ご明察。ツクシ君、どうしてもアカネさんが心配だっていうから、年末年始の休暇に加えて2，3週間ぐらい休暇をあげてるんだ。ところで昨日、赤ちゃん産まれたらしいよ」
ウツギはさらりと重要な事を言った。
「本当ですか！　おめでたいですわー。今度出産祝いでもお送りしますとツクシさんに伝えておいてください」
エリカは突如、声を上げて祝福している。
「う、うん。分かった」
博士も若干たじろいでいる。少し圧されている感があった。
「名前はもう決まっているんですか？」
続いてレッドが尋ねる。
「まだ決まっていないんだってさ。ツクシ君、僕も反省してるんだけど、最近忙しくさせちゃったしなぁ……。これからじっくり考えるみたいだ。アカネさんは、産まれた子が女の子だから「トラコ」がいいとか言っているみたいだけど……」
ウツギはフッと笑いながら言う。

コガネ人らしいなぁ。とレッドは感慨深くなっている。
「それにしても数週間の休暇とは……、お仕事、滞りは致しませんこと？」
エリカは単純な疑問をぶつけた。
「いやなに、その分柏木君の仕事を……、ごめんなんでもないよ！」
言葉は優しいが、言外の意からしてこれ以上突っ込んではダメだと、レッドは悟った。少しだけブラック企業で働く人の気持ちがわかったというのは内緒だ。
「……、ところでオーキド博士無き、ポケモン研究会。大丈夫なのでしょうか？」
「いやなに大丈夫さ。僕はまだ若いし、ツクシ君だっている。オーキド博士のポジションはナナカマド博士が引き継いでいるようなものだから万全だよ。それにしてもオーキド博士どこに行ったんだろうな……。色々と聞きたいことあったのに」
その時、レッドはシロナの「オーキドが主犯だという事は世間に知らされていない」という発言を思い出し、そういう事なんだと自覚するのである。
「さて、二人はカントーのバッジ集めている訳か……。ゴールド君もジョウトのバッジ集めなおしているし。3人が頑張ってくれれば、ポケモンを研究している身としても励まされるばかりだね！　とにかく、応援しているから。期待を裏切らないよう、精進しなよ」
そう言って、レッドの肩を叩きウツギは「じゃあね、二人とも」と言って立ち去って

いくのであった。
　夕日で輝き、北風にはためく白衣の姿は少し格好良かった。
　こうして、エリカは恩師への挨拶を済まし、大学の外に居る。
　―午後５時１０分　タマムシ大学　赤門前―
「なんだか、イッシュに行く日近いんだなーって実感させられたな」
　レッドはそう吐露する。
「そうですわね。アクロマさんにアララギ博士……、イッシュ地方もなかなかに面白そうですわね！　しかしその前に……」
「目の前の課題を片付けなきゃな。よし、今日はタマムシで寝て、明日はセキチクだ！」
　こうして二人のカントー折り返しのジム戦がはじまるのだ……。
　第四十一話　秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず　終―

第四十二話　紫衣の鼬

―1月11日　午後4時　セキチクシティ―

鏡開きが終わり、いよいよ正月特有のまったりとした雰囲気は完全に一掃され、日常に戻りつつあったその日。レッドとエリカはセキチクシティに到着した。

「セキチク……相変わらず微妙な立ちい」

レッドが言い終わる前にエリカが遮る。

「何を仰せになるのですか。半蔵の再来と恐れられし現代の忍び・キョウさんのお膝元ですわよ！　もっとも、今のジムリーダーは、その娘さんのアンズさんという方ですけど」

彼は、彼女の発言からアンズという人物を頭の中で探してみた。

「……、あ、選挙の時うたた寝してて、お前に何回か起こされていた子ね……」

「何ですかそのイメージ……」

彼女は少しだけ、呆れたかのような表情を見せるが、すぐに思い出したかのように補足の説明をした。

「アンズさんは、キョウさんの娘と名乗るに相応しい程の力があるそうで……、彼女の二

つ名は『紫衣の鼬』。鼬は肉食獣としても有名ですわ。ですから、あんまり呆けていると、痛い目に遭うかもしれないですわね」

彼女がそう言ってくすりと笑う傍らで、レッドはお構いなしとばかりに先に進み、

「なーにがイタチだよ……、今日日忍者なんて流行るわけもない……、ジムに行くぞ」

「……、そうですか。分かりました、参りましょう」

こうして、エリカはレッドを追いかけるように従い、セキチクジムに向かった。

―セキチクジム―

「な、なんだこれ……」

目の前には、数多くの紫色の忍者服を着たジムトレーナーが居る。

「アンズさんが一杯いますわね……、顔すら巧妙に手を入れているとは……、これは一人ひとりしらみつぶしに」

とエリカが言っている傍らで、どこからともなく四つ菱の手裏剣が飛んできた。

その手裏剣は、矢よりも速いスピードで、レッドの頬をひゅうとかすめ壁に突き刺さった。

「!?」

あまりの一瞬の出来事に、レッドは目を白黒にする。

「貴方！　大丈夫ですか？　怪我されたところ等は……」

彼の頬から血が噴き出た訳でもないのに、彼女は大げさに心配する。愛い奴だ。とレッドは思うのである。

「なんとかな……、しかしなんなんだ今のは……」

壁に突き刺さったままの手裏剣を見つめていると、後ろから鋭くも若い女の声がした。

「その手裏剣は、一種の挑戦状よ！」

レッドが振り返ると、いつの間にか目の前に痩せぎすの少女が立っている。

「アンズさん……、お久しぶりですわ。しかし、あのような距離を一秒……いやそれよりも少ない時間で来るとは、流石は忍びと言ったところでしょうか」

「あのようなって？」

レッドは彼女に、距離について尋ねてみた。

「ジムの中心部から、目にも止まらない速さでここまで来たのですよ……、確か見えない壁があったはずですから、飛んできたんでしょうけどね」

ジムの中心部からここまではざっと数百メートルはある。

レッドは頬をしぼませて驚嘆する。恐ろしい、これが忍者というものか……と心から感じ入ったようだ。

「あはは！　どーもどーも。さて、あたいとあんた達とは初めて戦う訳だけど……、レッ

ドだっけ？　あんたの事は何回か父上から話聞いてるよ！　ジムリーダーをしてきたなかで一番強かったってね！」

レッドは右手を頭の後ろにやり、

「いやいや、キョウさんからそんな評価貰っていたなんて」

彼が言い終わる前に、アンズは更につづけ、

「だから、あたいを探させるなんて、まどろっこしい事はさせずに、来たらすぐに勝負しかける！　先手必勝が忍びの基礎だという父上の教え通り、まずは手裏剣で先手をとったわけよ！」

そう言って、アンズは腕組みをして得意げになった。

少し意味が違う気がしたが、敢えて突っ込むのはやめにした。

「という訳で、あんた達二人をくだして、あたいは父上に近づくわ！　父上譲りの忍びの戦い方、とくと見てちょーだい！　さて、ここじゃなんだから、中央部にいこ！　壁に気を付けてねー」

こうして、二人はアンズの先導で、アンズの居た中央の所にまで向かうのである。

―ジム中央―

「では、早速、行くよー、行け、クロバット！　ドグロッグ！」

「行け、カメックス！」

「おいでなさい、ラフレシア！」
こうして、お互いのポケモンが揃い、５つ目のジム戦が始まった。
「クロバット！　ラフレシアにブレイブバード！」
「了解！」
クロバットは、風と化したかのような速度でラフレシアに突撃する。
「ラフレシア！　避け……」
エリカの指示空しく、ラフレシアはクロバットの餌食になった、あっという間にラフレシアの体を貫き、適当なところで四つの羽を使って体を軽やかに翻し、元の位置に戻る。敵ながらその様はまさに、格好良しと言う他無い。
無論、ラフレシアは倒れた。
「カメックス、ラフレシアの仇を取れ！　吹雪だ！」
「ドグロッグ！　みがわり！」
ドグロッグはすいとんの術を使って、どこぞにへと消え、小さな人形が残った。
レッドは静かに舌打ちをした。そして、カメックスは、砲塔から大量の雪と風を噴射し、クロバットを凍えさせ、やがて倒す。
「これぐらいは想定内よ！　行け！　モルフォン！」
「おいでなさい、キノガッサ！」

キノガッサはアップをしている！
「好機ね……、モルフォン！　キノガッサにサイコキネシス！　ドグロッグ！　カメックスに気合パンチ！」
モルフォンは頻りに念波をキノガッサに送る。キノガッサはＨＰにして三分の二を失うほどの大ダメージを喰らった。
「オルァ!!」
ドグロッグの気合の籠った拳は、カメックスの堅い甲羅の腹に直撃し、やがて思い切り遠くに吹っ飛ばされた。しかし、ＨＰの四分の一だけ残してなんとか耐えきる。
「カメックス！　大丈夫か！」
「ういっす、何とか」
カメックスは気丈そうに振る舞うがフラフラである。レッドの頬を冷や汗がつたるが、回復道具は使えない、情を押し殺して、カメックスに指示する。
「カメックス！　ドグロッグにハイドロポン……」
指示を出し切る直前、隣に居たエリカが、声を出した。
「貴方！　それはダメです！　ドグロッグを見てください！　非常にカサカサしてそうな肌でしょう？」
レッドは、ドグロッグの肌を、遠目ながらも見てみる。なるほど大げさに表現すれば、

旱魃した大地のように、肌が乾燥している……。恐らくこのドグロッグは特性『かんそうはだ』……。と、彼は断じ、

「カメックス、悪い、ドグロッグに冷凍ビームだ！」

「キノガッサ、モルフォンにストーンエッジ！」

キノガッサの猛き岩投げによって、モルフォンは倒れた。

……。

こうして、レッドは1匹、エリカは2匹を失い、残ったポケモンもＨＰが半分という形で勝利した。

「うーん、やっぱり一度はあたいの父上を倒した男、そして妻ね！　負けを認め、そしてあたいに勝った証として、このピンクバッジ、持ってって！」

レッドとエリカは、５つ目のバッジを手に入れた。

「ありがとうございます！」

エリカは深々とお辞儀をする。

「よーく考えてみれば、あんた達って……、これまで何十人ものジムリーダーとかチャンピオン倒して、ここにきているんだよね……、あはは、負けて当然かぁ……」

と、少しだけアンズはいじけている。

「いえいえ、そんな事はありませんわ。貴女はキョウさんの娘と名乗るにふさわしい実

力を持っていらっしゃいます。忍びの修行の傍らで、ここまで強くなれるなんて、なかなか出来ない事ですわ」

　エリカはアンズを励ます。エリカの口調や目からして恐らく本当の事を言っているのだろう。

「いや！　文武両道を地で行く貴女にはまだまだ敵わない……、もっともっと修行して、いつか出藍の誉れを果たして見せるわ！」

　エリカは、何と頼もしい事を言うのでしょうと言いたげな、感慨深げな顔をしている。

「さてと、レッド！　もし次戦う事があったら絶対に負けないから……、そしてあたいの父上にも負けないようにね！　リーグでいつ来るか一日千秋の思いで待ってるみたいだから、ならべく早くいってあげなさいよ！　もし、あたいの父上をがっかりさせる真似をしたら……」

　アンズは、果てしない殺気をレッドに送っている。このまま逆らえば手裏剣で首と胴体がひきちぎれてしまう気がしたので、

「わ……分かった！　なるべく早く向かうさ、そしてキョウさんをも唸らせる実力で勝ってみせるよ！」

　彼が勇ましくそういうと、アンズは晴れやかな顔になって

「それなら、安心ね！　さてと、父上の晩御飯のお弁当手伝わなきゃ……」

「あら、届けてあげていらっしゃるのですか?」
エリカは、単純な質問をする。
「そー!　母上とあたいが作って、四六時中リーグにいる父上に届けてるの」
「つくづく、親思いな子ですわね。キョウさんもさぞかしいい娘を持ったとお思いになられている事でしょう」
彼女はうんうんと頷き、アンズを褒めている。
こうして、その後も少し話をして二人はセキチクジムを出た。
―ジムの外―
「全く、いまどき珍しいよな……ああいう、いわゆるファザコンっつうの……、なんだかハヤトを思い出すな」
レッドは、特に他意が無い様子でアンズをそう評す。
「そのお二人が言い争っているところ、タマムシデパートでお見かけしましたわ……」
エリカは思い出したかのように、そう言う。彼は少し興味を持ち、尋ねる。
「ほう、どんな様子だった?」
「少し遠い場所に居たのでよく内容は聞こえませんでしたが……、まさに一触即発といったところですわね。ゴールドさんが調停に入り、事なきを得ておりましたが」
彼女は淡々とした口調で話す。

「へぇ……その場にゴールドがねぇ……、さて、それはそうと次はナツメさんかぁ……気が進まない」
「あら、どうしてです？」
エリカは、明らかに表情を暗くしていた夫を気遣うかのような口調で尋ねる。
「なんか怖いんだよな、あの人……、ずば抜けた超能力者っていうから、何もかも見透かされてるのかと思うと身の毛もよだつわ」
と、レッドはナツメに対する感情を吐露した。
「あの方、かのヤマブキ大の首席卒業生だそうですわ」
彼女のその一言に彼は愕然とし、
「え!?　あの〝ある意味〟世界最難関大学として名高いヤマブキ大学!?」
ヤマブキ大学は、エスパーを育成する超能力専門大学。先天的な才能が無ければ入学すらままならない上に、入れたとしても世界中から鬼才の集う中でのしのぎ合いに巻き込まれるという。奇人変人揃い踏みで、一般人が入ったら一日で退学するだろうといわれている等奇怪な噂の絶えない大学だ。しかし、卒業出来た暁には、エスパーを名乗ることが許され、安定した収入が約束されるという。全国に散らばるサイキッカーはこの大学及び分校の学生である。
「……、ええそうですわ。あの大学の卒業生は8割がた精神病を患っているなどという

噂がありますが、それは横において……、とにかくその大学をナツメさんは出られておられます。しかし私は面白いお方だと思います。セキエイでも話した通り、唯一カント―で堅い話ができるジムリーダーの方ですし」

レッドはまたも、頭のよい人の考えることはよく分からぬと考え込むのであった。

「しかし、そうですか……、またナツメさんと会える……、少しだけ心躍りますわ」

エリカは、かなりの笑顔となっている。レッドはそんな彼女を見て引き笑いになりつつ、

「ええい、でも今日はもう夕方だ。セキチクで休んで、明日、ヤマブキに行こう」

そういう訳で、二人はセキチクにて一泊するのであった……。

―1月15日　午後2時　ヤマブキシティ―

タマムシが商業的な首都ならば、ヤマブキは政治的な首都。それも過言ではなく、ヤマブキシティには官庁街が立ち並び、議事堂もあるなど全国の政治の中枢を担っている場所だ。

レッドはゲートを抜けると、まずはヤマブキに林立する高層ビル群に圧巻される。

「う、うおぉ……、タマムシとはまた違う意味で大都会だな」

そう言うと、エリカはすかさず、

「ま、まぁヤマブキは、全国の政治を一手に担う場所にしてビジネス街ですもの……、し

かし繁栄度では決してヤマブキごときには引けを取りませんわ！」
　と、彼女は半ば必死にタマムシを取り繕っている。聞いても居ないのに、あんなに必死になるとは……などと彼がエリカを愛おしく思い、
「ハハ、大丈夫さ。誰でもそんな事は分かってるって……、あれ、なんか黒づくめの人影が見えたような」
　レッドは、その人影が目端に映ったところに目をやる。
「まさか、気のせいでございましょう、ロケット団及びオーキド団は貴方の手で壊滅したではありませんか……」
　と、エリカは儚げに言う。
　その口調から思い出したくないんだなぁという事を悟り、それ以上の追及を諦めた。
「そ……そうだな。よし、じゃあジムに行くか！」
　そういう訳で、二人の足はジムにへと向かうのであった。
　―ヤマブキジム―
　ワープにワープを重ね、リーダーのナツメの所にたどり着いた。すらっとスレンダーでエリカよりも高身長な、その躰を見て、相変わらず美人だなぁとレッドはふと思う。
「やっぱり……来たわね！　貴方たちの来る予感は三年前から……っていうのは冗談よ。よく来たわね、レッド……そして、エリカ」

やさしめの口調だが、目は笑っていない。やはりかなり怖い……。と、レッドは堅い表情になる。いつ念力で吹っ飛ばされるか知れたものではないからだ。

「ナツメさん、夫が引いておりますわ。もっと表情をほぐされては」

レッドの表情がおびえていたことに気付いていたのか、彼女はナツメに態度の軟化を、柔らかい口調で要請した。

「……、あんたの要求なら仕方ないわね。ごめんなさいね、レッド。さて、あんた達夫婦が……、一体どこまで、強くなってきたか、今一度見せてもらうわ」

こうして、カントー6つ目のジム戦が始まるのである。

―第四十二話　紫衣の鼬　終―

第四十三話　溺愛と狂気は紙一重

―1月15日　午後2時20分　ヤマブキジム―

まず、ナツメはエーフィとバリヤードを、レッドはカメックスを、エリカはユキノオーを繰り出した。

ユキノオーのゆきふらしによって、辺りにあられが降り始める。

「カメックス、吹雪！」

「ユキノオー、根を張りなさい」

ユキノオーは根を張り、カメックスは砲塔より、猛烈な雪と風を噴出する。

あられという天候も相俟ってか、いつもより強く吹いているようにも見える。

「バリヤード、カメックスに雷」

バリヤードは、天井付近に雲を作り、雷を下らせる。

しかし、いくら電気技でも屈指の威力を誇るとはいえ、所詮は不一致。カメックスはHPの半分を失いはしたがなんとか耐えきったようだ。

「エーフィ、瞑想」

エーフィは行儀よく座り、目をつむって精神を集中させている。

少し遅れて、カメックスの吹雪が二体に直撃する。バリヤード、エーフィーの形が分らなくなるほどの豪雪である。

「……、仕留めたか？」

「いや、この程度では無理でしょう……」

カメックスの思案通り、二体とも、三分の一、もしくは半分ぐらいしか減っていなさそうだ。

「ユキノオー、エーフィにウッドハンマーです！　はよう仕留めなくば……」

「バリヤード、リフレクター」

バリヤードの方が先制し、不思議な力で、見えない壁を形成する。

「オラの村の薪さ、ぐらえ！」

よって、ユキノオー渾身の一撃も、リフレクターによって減殺されてしまった。

「エーフィ、もう一度、瞑想……」

エーフィは、またも行儀よく、目をつむっている。なんだか可愛く思えてきてしまったが、レッドはその思いに負けることなく、情を排し、冷徹に指示する。

「カメックス、エーフィにハイドロポンプ！」

特防が二段階上がっているという、不利な状況。しかしレッドはハイドロポンプの威力に全てを賭けた。

しかし、カメックスの放った水流は惜しくもあたらず、最悪な状況となってしまった。
「……、好機ね……、エーフィ、フーディンにバトンタッチよ！」
エーフィはすぐにボールへ戻り、ナツメはフーディンを繰り出した。
「最悪だ……、途轍もない特攻に、堅牢な特防……、化け物を生み出しちまった……」
レッドは早めにエーフィを片付けなかった事を大いに後悔する。しかし、エリカは落ち込む彼をなんとかする為にこの状況を打開せんと、賭けに出た。
「……、どんなに特防が強くなろうと、フーディンの防御が脆弱であることは変わりませんわ！　ユキノオー、フーディンにウッドハンマーです！　一撃で仕留めなさい！」
運よく、二回目のウッドハンマーは急所に当たり、フーディンは倒れた。
「好事魔多し……、私の超能力通りに上手く事は運ばないものね。しかし……、一つ忘れてるわね。バリヤード、カメックスに雷」
バリヤードは、上空に雲を作り、再びカメックスに雷を下らせる。流石に二撃は耐え切れず、カメックスは倒れた。
「これぐらいはまだまだ……、行け、カビゴン！」
「行きなさい、エルレイド、カビゴンにインファイト！」
エルレイドは身を構え、
「御意」

とだけ言って、素早くカビゴンに突撃する。
流石に、タイプ一致の攻撃は耐え切れず、一撃でカビゴンは倒された。
「あと一匹か……」
「怖気づいたかしら？」
ナツメは悪戯っぽくフッと笑ってみせた。
「何を言います……、ここで一気に押し返すのがチャンピオンの意地ってもんだ！　行け、リザードン！」
「流石は貴方ですわ……、しかし、天敵は早う取り除かないと。ユキノオー、吹雪」
ユキノオーの猛烈な吹雪によって、バリヤードは凍えて倒れたが、エルレイドはなんとか耐えきる。
……
こうして、レッドは2体、エリカは2体失い、残ったポケモンの体力は黄色ゲージと辛勝に終わる。
「……、あと一歩及ばずね。しかし、本気状態の私に勝つとはやはり、伝説の夫婦の看板に偽りなし……、私の予測を上回る強さに感服したわ。そして私に勝った証として、このゴールドバッジ、貴方たちにあげるわ」
ナツメはゴールドバッジを二人に手渡した、

「有難うございます！」
　エリカのお辞儀の角度はまず狂いが無い。目視の限りで言えば大体３０度である。最敬礼は４５度らしいので、深すぎず浅すぎずと、見事に調整している様を見て、レッドはなんとなく感心していると、ナツメが口を開く
「貴方たちの強さを私は予測しきれなかった……、でもね、そんな不正確な超能力ながら言わせてもらうけど」
　何だろうと、二人はナツメの言動を注視する。すると、
「エリカ、レッドには十分注意しなさいよ。私からはそれだけ」
　彼女はその一言に納得できなかったのかすぐに反発する。
「い、意味が分かりませんわ。貴女が超能力者という事は違いない事実……、ですが、どうして貴女みたいな部外者に勧告されなければいけないのですか！」
「勧告……？　そんな大それたものじゃないわよ。私は単に私の元恋人のエリカを心配した……」
「え!?」
　レッドは突然目を見開く。そんな……、聞いてないぞと思うに至る。
「ナ……、ナツメさん。私たちがその……、そういう関係にあった事は内密にして頂きたいと何度も申し上げ……」

エリカは、ナツメの不意な告白に当惑しながら言う。
「それは、永久不変の愛を誓うと、あんたが約束したからこその契りよ……、ただそんな事は現実的に有り得ないとどこかしらで分かっていたから、自然消滅で恋が終わった時も……、責める真似はしなかったし、あんたがレッドと旅するという知らせが入った時も、堪えた……」
ナツメが言い終わると、エリカがすぐに次を促すような事を言う。
「ならば、どうして、唐突に斯様な事をされるのです？　確かに約束を破ってしまった責は私にありますが……」
エリカが言い切る前に、ナツメは小さくも、途切れ途切れながらも。ハッキリとした声で言う。
「……、この際だからハッキリ言うわ。未来が、見えてしまったのよ。勿論、エリカじゃなく、レッドが浮気してしまう未来を……ね」
「え……えええ!?」
一番に驚いたのはレッドである。
「ふ……ふざけたことを……！　どうして俺が最愛のエリカを差し置いて」
レッドは声を荒げて反論するが、ナツメは冷徹に切り返す。
「鍛えられて熱くなった鉄が、どんどん冷めていくように、エリカと私の恋が長く続かな

かったように、蜜月とは長く続かないものよ。殊に、貴方たちのように衝動的な恋の場合は……ね」

　ナツメはそう言うと、深く息をつく。

「どうしてそんな……」

　レッドが二の句を継げようとするが、エリカがレッドの胸を手で制し口を開く。

「ナツメさん……、ご忠告どうも有難うございました」

　そうとだけ言って、エリカはスタスタとジムを後にする。

「……」

　レッドは、心中激昂していたが、これ以上ここに居ても仕方ないと悟り、ワープ台に向かおうとする。

　ワープをする直前、ナツメはレッドに向かって、

「……、もしも、エリカを泣かす真似をしたら……、世界の誰もが貴方を許しても、私だけは決して許しはしないからね」

　と言い、レッドは即座に

「そんな真似……、する訳ないじゃ無いですか……」

「あの子は……、私に似て孤独な子よ。だからこそ、理想を高く持って、一生暮らせる伴侶を探している。レッドに対してどう思ってるかは、敢えて貴方には言わないけれど、

ただ一つレッドに対して確固たる理想が実現している事を信頼し続けて、レッドの事を恋し続けている。その事を忘れないで欲しいわね」

レッドは目から鱗の思いがした。

「確固たる理想……？」

とにかく口をついて出た言葉がそれだ。一体俺に対してどういう理想を抱いているのか気になって仕方が無いからだ。

「……それが何かを悟り、守り続けることがレッドの、エリカの伴侶としての使命よ。それが分らずば、破局は必定よ」

それだけを聞いて、レッドは伴侶の元へと戻った。

―ジムの外―

彼女はジムの外に居た。

「お、やあレッド君！　久しぶりだね」

誰かと話していると思いきや、例の選挙で議長を務めていたダイゴである。

「ダイゴさん……、こちらこそ、あのヤマブキには何用で来られたのです？」

レッドはそれとなく来た事情を尋ねてみた。

「何、シルフカンパニーに少し用があってね……。しかしどうした事か商談で来たと言ったのに、一階より上は通してくれないんだよね。どうも不審じゃないかい？」

確かに。等と彼が思っていると、エリカが続いて話す。
「そういえば先ほど、黒づくめの人が視界内に入ったのですが……」
「まさかロケット団が……、うーむ有り得ないと信じたいところだが……」
言い終わると、ダイゴはシルフカンパニーをどこか遠い目で見つめる。
「せっかくカントーに来たんだし、理事の権限で少し調査してみるか。もし何かあれば伝えようか?」
彼はそう提案する。
「確かに気になりますもんね……、じゃあ俺のポケッチに連絡してください」
レッドは快諾したが、エリカは気にかかったのか
「そんな……、お仕事大丈夫なのですか?」
「何、チャンピオンクビになって以来こっちも暇を持て余していてね。たまには理事らしい仕事でもしてみようと思っただけさ。それに取引先だし……」
エリカはその一言で大いに納得したようである。
「ああそうそう、これ内密にね。僕、一応ホウエンの人間だからさ。変に介入したことがバレると、いろいろ大変なんだ。そこのところ宜しくね」
「分かりました」
レッドは了承の返事をする。

その後も少し話をして、ダイゴと別れた。

―午後8時30分　ヤマブキシティ　ポケモンセンター　個室―

二人はその後ヤマブキシティを散策し、夜ポケモンセンターで宿泊する。

夕食を済まし、風呂に入った後、小さめのポケモンを出し、エリカは化粧台のイスに座り、レッドはベッドに座って談笑していた。

「お前、よくナツメさんからあんなこと言われて堪えられたな」

レッドは、ナツメの一件を思い出して、感心しながらそう言った。

「……、ナツメさん、時々超能力を使ったか疑わしい発言をするのです。本人曰く、超能力は私怨が入っていると外れる確率が大きくなると申しておりました。もしナツメさんが、貴方に私を取られて恨んでいらっしゃるとするならば、あれとて虚言の一種ですわ」

とエリカはバッサリと、ナツメの発言を否定する。

「お前、本当シビアだよな……、よく親友をそう易々と斬り捨てられるもんだよ」

レッドは皮肉半分に、エリカをそう評する。

「是々非々。良いところは良い。悪いところは悪い。親友だから故に盲目になってはなりません。むしろ、そういう所を言い合えてこそ刎頸の交わり。たとえ親友に首を刎ねられようと許せる仲になれると言うものです」

「そこまで行ったら行きすぎな気もするがな……、それはそうと、お前、あの予言信じてるのか……？」

レッドは、ずっと気になっていたことを、腹を決めて尋ねてみた。

エリカは間を置かずにこう答える。

「もし……、そんな事が有り得たのならば……、私は不倫相手を容赦なく切り捨てますわ。無論、ナギサでミカンさんに私がしたのと同様に……」

正直に言うと、この時のエリカの目は本気そのもの。そして実際に行動に移しているだけに説得力は言うまでもなく、ある。

「だって……、貴方は悪くありませんもの……、全てはレッドさんを誑かした、女のせい……、二度と貴方に近づく真似をしないよう徹底的に始末するのが、妻としての責務ではありませんか？」

流石のレッドもこれには身の毛をよだたせざるを得なかった。初めてエリカに愛してもらって嬉しいというよりも、恐怖が勝った瞬間が、今である。

「もっとも、私が貴方を擁護するのは接吻まで……、もし私以外の女性と……同衾（どうきん）しようものなら、貴方の事は決して許しませんわ。それだけは覚えておいてくださいね」

エリカはそういうと、スッキリしたのか爽やかに微笑んでみせる。レッドには同衾の意味など分かるはずもなかったが、聞ける雰囲気ではなかったので突っ込むのはやめに

した。
「さて、次はカツラさんですわね。ふたご島でしたわよね？」
エリカは話題を切り替え、彼もそれに同調する。
「そ……そうだな。さて、セキチク方面は噴火で行き止まりらしいし……、マサラ経由で行くか」
「それが良策ですわ。さて、マサラという事は義母様にご挨拶しないと……」
エリカは早くも、母親に会う事を案じているようである、
「おい、今度は泊まらないぞ。あくまであいさつ程度にしとけよ。着いたらすぐにグレン……じゃねえや、ふたご島に行くから」
彼がそう注釈すると、
「わ、分かってますわ。しかし、グレン島を通るのでしたら慰霊がてら寄りませんこと？私、噴火して以来一度もグレン島には赴いていないもので……」
なるほどと納得したレッドは、
「そーだな。つか、ふたご島までもかなり時間かかりそうだし……、いい中継ポイントだ。ポケモンセンターはあるんだよね？」
レッドは、ラジオで言っていたわずかな記憶を頼りに、エリカに尋ねる。
「ええ。さて、そうと決まれば早うに歯を磨いて寝ますか」

という訳で、二人はじきに床につく。同衾などは無論していない。
二人は起きた後、朝食を済まし、ヤマブキシティから空を飛ぶで、マサラタウンへと向かった。
―1月16日　午前11時　マサラタウン―
「うーん、やっぱここに来ると落ち着くわ……」
レッドは到着一番、リザードンを戻して深呼吸すると、そう言った。
「さてと、義母様にご挨拶を……」
「いや……、待て、やはり男として二度も三度も約束を破るわけにはいかん。母さんにはポケモンマスターになるまで会わないと、固く約束を交わしてるんだ。エリカ、悪いがご挨拶は俺の事が成就した後にしてくれ」
と、レッドは申し訳なさげに言ってみせる。
「……、分かりましたわ。貴方がそこまで仰せになるのであれば、私も自粛いたします」
という訳で、二人の足はレッドの家の方向ではなく、海の方向へと向ける。その道中、ある事に彼は気が付く。
「……、あ、あれ？　ポケモン研究所は？」
彼は、オーキドポケモン研究所があった場所に思わず、歩きだす。
そう、建物そのものがそっくり無くなってしまっているのだ。

レッドが落胆している傍らで、彼女は柵に画鋲で刺さっている張り紙に気が付く。
「あら、こんな場所に張り紙が……」
張り紙には要約すると、『当該建物は、賃貸借契約の更新を貸主が、別荘建設の正当事由で拒絶したところ、催告期間内に借主からの申し出が無かった為に当該建物を撤去いたしました』
と書かれている。
「つまり、この研究所は、博士がいなくなったから廃墟同然になっていた……という事か？」
とレッドはエリカに尋ねる。
「普通、借りた土地を返せと言われれば、代わりのない限り反発してもおかしくはありませんわ……、つまり、その可能性は非常に高いですわね」
「マジかよ……。グリーンやナナミさんとかは、反抗しても良かったんじゃないのか……」
レッドは若干苛立ちを見せつつ、そう言う。
「あのお二人は研究者になるという意思が無かった以上、この研究所は不要になった。もしくは、大罪を犯した祖父の研究所を見たくなかったという理由で敢えて放っておいたのかもしれませんわ」

と、エリカは推測する。

「にしても、俺の思い出の建物が……、こうも簡単に取り壊されてしまうとはな……。まぁ、止むを得まい。それも時代の流れ……ってやつだな」

そう言い、レッドは歯がゆい思いを残しつつも、躰を反転させて、また海にへと向かう。エリカもそれに続くのであった。

―1月17日　午前10時　グレン島―

二日がかりで二人はグレン島へとたどり着いた。が、そこは最早二人が最後に見た時のような、勢い盛んで、賑わっていたグレン島ではなく、火砕流や火山灰等で埋め尽くされた、土の塊である。

「……！」

ポケモンセンターのほかに建物はなく、目の前には大きな自然の壁が出来上がっている。変わり果てたグレン島を目の当たりにした二人は暫く絶句するほか無かった。

「……、ニュースで何度か目にはしましたが……、こうして実際に来てみると、やはり胸にくるものがありますわ」

そうエリカが言うと、レッドは同調して

「そうだな……、カツラさんよく、生き残れたもんだよ」

そう言うや否や、背後より聞き慣れた声がする。

「よぉ。レッド！　久しぶりだな」

振り返ると、そこには旧友であるグリーンが、いつもの快活な調子で、階段より上がった高台の上に立っていた。

「グリーン……」

レッドはそう一言呟き、エリカは引き笑いをしている。

―第四十三話　溺愛と狂気は紙一重　終―

第四十四話　矍鑠の老翁

―1月16日　午前10時　グレン島―

グリーンは、快活に挨拶すると、一段一段ゆっくりと階段を降りる。そして降りながら彼はレッドに話しかける。

「随分仲睦まじいな……、羨ましい限りだぜ」

「18股のお前には、遠く及ばないよ」

レッドは冷笑半分に、そう言う。

「……、そうかよ。……、バッジはいくつ揃ったんだ」

グリーンは降り切って、強めの声調で言う。

「ここに来てからは6つだ」

「……、そんなんじゃ俺とはまだ戦えねえな！」

グリーンは、頬を緩ませて嘲笑交じりな風でそう言った。

「大層息巻いてるけどいいさ……、お前とは最後に戦うと決めているからな」

レッドは毅然とグリーンに言い返してみせる。

「ほぉ……、今日のお前は随分挑戦的だな。エリカさんがいるから格好つけてんじゃあ、

ねーだろうな？」

割と図星なその意見に、レッドは帽子を目深に被りなおす。

「そんな事はないさ」

が、グリーンの前だけでは己を曲げたくなかったがゆえに、レッドは強情を張る。

「そうか……、話を戻すぞ。ふたご島でカツラ爺を倒してこい。それでバッジが７つ揃ったら、ここに来い。そして、お前との挑戦、受けてやるよ」

そうと言って、グリーンは踵を返して階段を登っていく。

「何処に行くつもりだ」

幼馴染に呼び止められ、グリーンは歩みを止め、振り返らずにレッドに返答する。

「女に囲まれた生活にも段々飽きてきてな……、少し黄昏（たそがれ）たくなったのさ」

昼日に照る彼の姿は、明るめの茶髪という色合いもあってか、少し映えて見える。

「……、お前、宗旨替えでもしたのか」

「いやなに、爺さんがあんな事になっちまってから、哲学者ぶりたくてさ……。じゃあな」

グリーンは、そう言い残すと、岩に隠れて見えなくなっていった。

―同日　午前１１時　グレンタウン　ポケモンセンター―

二人は、二日間野生のポケモンやトレーナーとの戦いで消耗しているポケモン達を休

ませる。その為に早めではあるが、泊まる事にした。
しかし、流石に部屋は空いていない為、ポケモンセンター内のソファで時間をつぶすことにした。
というより、センター内に居るのが二人と、ジョーイさん、数人の市民とかなり閑散している状況である。
「……、うーむ、ことごとく前とは違うな」
レッドは、首を廻らせてそう言った。
「私も一度、グレン島まで植栽を買い付けに行った際にここへ参りましたが……、あの時はこの数十倍の人はいましたわ」
「こんなに変わっちまうもんなんだな……、無常を感じるよ」
そう言うと、レッドは、あらかじめ持ってきていたセルフサービスのお茶を飲み干し、ため息をつく。
「無常……ですか。まだまだ貴方が悟るには早すぎる気が致しますがね……」
彼女は、くすりと微笑んだ。母親のつもりの一笑なのか、それとも単にバカにしているのかの嘲笑なのか見分けはつかなかったが、反射的に、
「ほっとけよ」
レッドは間、髪容れずに答える。

「フフ……、さて、これからどう致します？」
「どうするつってもなぁ……、グリーンとまた鉢合わせすんのもやだし」
エリカは大きく頷いている。
「私も同意見ですわ。しかし、このままずーっと部屋が空いてくれるまで、所在無くずーっとこうしているのも……」
「……。そうだ。エリカ、なんか話してくれないか？」
彼は唐突にそんな事を言う。普段はエリカの話など、知識の差があり過ぎて辟易しているのだが、今回は止むを得ない。暇で暇で仕方ないからだ。
「ええっ!?　そんな、急に振られましても……」
彼女は珍しく困惑の表情を浮かべている。しかし、すぐに考え込む。話のネタをさがしているのだろう。どんな話が出るのか期待しながら待っていると、
「そうですわね……、グレン島周辺の歴史についてでもお話しいたしましょうか？」
エリカの話題のネタといったら、大抵は歴史である。彼女の専門である理系の話は完全についていけないだろうと踏んで言っているのであろうが、レッドは大の社会科嫌い、いや正確に言えば勉強嫌いだ。しかし、自分から頼んでおいていやだ等とは言えるはずもなく
「あぁ……、分かった。話してくれ」

と、半ば観念してエリカの話を聞くことにした。
「まず、この辺りの島々の地域名として、ナナシマ。という語がありますわよね？」
「そうだな」
レッドは、一応は興味のある返事をする。
「これは歴史のある言葉でして、江戸時代の頃、このナナシマに人が住んでいたことを根拠にして作られた語なのです」
「ほう」
「その中のグレン島は、最大の島です。先ほど、植栽を調達しに来たと申しましたが、ここはツバキの名産地として高名で……」
と、このような調子で15時ぐらいまで話は続いた。
―午後3時10分―
「それで……、3の島には、関ヶ原の戦いで西軍についた宇喜多秀家が流罪になった事も」
と、エリカが淡々と話していると、ジョーイさんが二人の目の前までやって来て
「レッドさーん！　お部屋のご用意ができたので」
「分かりましたー」
と言ってレッドはそそくさと席を立つ。エリカは消化不良のようだったが、止むを得

ずレッドに続く。そして、二人は部屋に向かう。

―午後9時　同所　個室―

色々と諸事を済ませ、またも二人は談笑していた。

「さてと、次はカツラさんか……」

「あの御方、中々の努力人ですわ。オーキド博士をも超える知能を持っていると囁かれながら、御家の事情でグレン島に引き戻って両親の家業を手伝いして、一念発起してポケモントレーナーの道を志し、1年がかりでバッジを獲得して、タマムシ大に30代で入学して10年がかりで博士号を取得されました。それに加えて在学中にポケモンリーグをヤナギさんとの連名で設立するなど……、功績だけ見れば万人の尊敬に値しますわ」

と、エリカは含みのある言い方をする。

「功績〝だけ〟……、ああそうか、あの人かなり変わり者だもんな……」

レッドは納得した表情をした。

「特殊な性嗜好に、奇天烈な言動、万年躁状態……、等など。それが故に同じような経歴を持つヤナギさんほどの敬意は集まってませんがね……。しかし、私、そういう御仁も悪くはないと思いますわ。むしろ、そんな好奇な目線を打破する為にここまで努力されたと考えると、凄い人だとは思いませんか？」

「まあな。俺もカツラさん、そんな嫌いなわけじゃねえし……、ただ何回か（雪印）の心配はした事はあるけど」

エリカより目線をそらしながら、遠い目でそう言った。

「そういう意味でいえば私は安全な訳ですが……、さてそれはそうと、グリーンさんなんだかおかしくはありませんでした？」

彼女は、突拍子もない事を尋ねてくる。レッドは少しだけ狼狽したが、すぐに態勢を立て直し、

「確かに、哲学者ぶりたいとかあいつらしい発言じゃねえなあとは思ったが、俺はそこまで変には思わなかったけど」

彼女は、一息ついてこう言う。

「お爺様が、あんな事を起こして亡くなられたというのに、随分と沈着ではありませんでした？」

確かに、グリーンの直情的な性格を考えると憤慨、痛烈な罵倒をしてもおかしくはないな。等と思うと、彼女は更に

「それにお爺様について、あまり深く言及はしなかった……。触れられたくないといえばそれまでなのですが、どうも私には、グリーンさんが何か隠しているような気がしてならないんですよね……」

その発言に、ナナミの言葉―弟はなんだか知っているっぽいけど……―を重ねてみる。なるほど……、女の勘とは案外鋭いものなのかもしれないなぁ。などと思ったがここは親友として、と思い立ち

「お前の考えすぎだよ……。確かにあいつは18股とかしている時点で、色々な女騙しているとか、疑り深くもなるだろうが、そんな件でいちいち隠し事するようなタマじゃないさ」

と、レッドはグリーンをフォローした。

「そうですか……、私の杞憂で終われば宜しいのですが……ね」

そう言ってエリカは追及の手を止める。

こうして、二人は直に床につき、明日に備えるのであった。

―1月20日　ふたご島　入口―

二人は、その後3日かけてふたご島にへと移動した。

ふたご島付近は、岩などが点在する程度で、まさに絶海の孤島といっても差し支えないほどさびれた場所である。

「うーん、一度来たとはいえ、魔窟の雰囲気が漂うな……」

「あら、こんな所に張り紙が」

エリカが見つけた、入り口周辺にはっついていた張り紙には、―ジムは二階にあるよ

カツラ―と書かれている。
「な……、なんというか子どもっぽい、丸い字体ですわね」
と、エリカはいつも通りの書評（？）を下した。
「親切でいいじゃないの。よし、行こう！」
そういう訳で二人は二階にへと向かった。
―ふたご島　二階　グレンジム―
「おお……、ほんとにジムだ……！」
まず来た感想はそれだ。なんというか、洞窟の上にタイルを貼るなど、出来あいの感触がプンプンするが、味があるような気がしないでもない。
「なんといいますか、そ」
エリカが続いて感想を言おうとしたら、遠くから耳を聾しかねない、しゃがれた大声がする。
「うおおーーーーーーーーーーーーーす!!　よく来た！　おい、お前たち何をしている！　早く道を開けてやらんか！」
と、カツラは周りに居たジムトレーナー達を避けさせた。そして、二人は開けられた道に従ってカツラの前まで移動する。
「お久しぶり……と言うほどでもないですわね。こんにちは、カツラさん」

と、エリカは恭しくお辞儀をする。レッドもつられて礼をする。
「うむ、礼をするとは良い心がけだの」
「それにしても、洞窟内にジムを作るとはなかなか……」
と、レッドが言い終わる前に、カツラは
「グレン島の噴火は、ワシにとって一晩で築き上げたものがすっからかんになった大事件だった！　島民を救い出して、マサラまで避難した時はもう三日三晩泣き続けたわい！　だがの、泣いた後はけじめをつけて、グレン島に一回はジムを作ろうとしたんだよ」
と、カツラの発言がひと段落すると、エリカは思い出したかのように
「ナツメさんから又聞き致しましたわ。グレン島は、火口付近は入山規制がかかり、用地も傷病人保護や避難場所等としての使命があるポケモンセンターで精一杯だと……」
と言い、カツラに主導権が戻る。
「左様！　だから、泣く泣くこのふたご島にジムを作ったわけだ！　そして、どうだ見てみろ。このように洞窟の地面を剥し、タイルを貼りつけ、岩を置くなどして改良し、ジムリーダーとしての役目を果たしているのだ！」
レッドは素直に感心し
「流石、カツラさんだ……」
と、感情を吐露する。その言葉が更にカツラをヒートアップさせ、

「有難う！　もし二人が見ごとワシに勝てれば、最後より数えて二つ目のバッジ、即ち7つ目のバッジをくれてやろう！　うおおーーーーーーーーす！　では、やけど直しの準備は良いか！」

　こうして、セミファイナルのカントージム戦の幕が切って落とされた。

「行け、コータス！　バクーダ！」

「行け、ラプラス」

「おいでなさい、ルンパッパ！」

　陣容は揃った。あとは戦うのみである。

「ルンパッパ！　雨乞いですわ！」

　ルンパッパは、雨乞いのダンスをして、雨を降らす。

「甘いのう……、コータス！　日本晴れだ！」

　天候は、同時に放った場合、素早さの遅い方に合わせたものとなる。

「チィ……、晴れか……、でもやるっきゃない！　ラプラス、バクーダにハイドロポンプ！」

「最大出力でー、消・火！」

　ラプラスの放った、太く強い水流はバクーダを戦闘不能にするには十分すぎるくらいである。

無論、バクーダは倒れた。
「うお……、だが、これぐらいは想定内！　行け！　ギャロップ！」
ギャロップはけたたましい雄叫びを唸らせながら、フィールドに立つ。
「……、嫌な予感がしますわ……、ルンパッパ、ギャロップに波乗り……」
エリカが指示し終わる前に、カツラは突然声を上げ、
「勘が鋭いのう！　流石！　ギャロップ！　ルンパッパにメガホーン！」
ギャロップは、疾風（はやて）の如き素早さで、一気にルンパッパを鋭い角で突く。
「ぎゃあああ!!」
ルンパッパは絶叫しながら、石にへと叩き付けられた。しかし、やはり不一致だ。半分くらい削れて難なく、所定の位置にへと小躍りしながら戻ってくる。
「ほう、中々にタフだのう！　女史のルンパッパは！」
カツラは感心しているのか、高笑いしながらそう言う。
「全ては夫と旅してきた証ですわ」
と、エリカはにこやかに微笑む。しかし、カツラはほとんど動じずにいる。流石はバラの世界に興じる人だ。女性なぞ眼中の外なのだろう。
「睦まじいのう！　しかし、勝負は惚気（のろけ）だけで勝てるほど、そう甘くはないぞ！　コータス！　ラプラスにストーンエッジ！」

コータスは中に入っている、岩をラプラスに仕掛け、思い切り突き上げる。
「グレンで育った火山岩、とくと思い知れ！」
コータスはそう言って、高笑いをする。しかし、やはり所詮は不一致だ。
「大したこと無いよー！」
ラプラスはそれなりにダメージを喰らっているはずだが、割と飄々としている。
「よし、ラプラス！　コータスに冷水を被せろ！　もう一度ハイドロポンプ！」
ラプラスの放った水流は、防御が強くても、特防に脆いコータスの体を思い切り抉る。
コータスは倒れた。
尚、ルンパッパもギャロップに波乗りしたが、ギリギリ倒れなかった。日本晴れ強し。
「まだまだぁ！　行け、ヘルガー！」
……
こうして、レッドは完勝、エリカは全滅で勝利した。なかなかタイプの差が如実に表れている勝負だ。
「うむ！　見事！　ワシはもう燃え尽きた……！　このクリムゾンバッジ！　持って行けい！」
カツラは、クリムゾンバッジ二枚を、二人に手渡す。
「有難うございます！」

エリカは深々とお辞儀をした。やはり美しい。

「今回はワシの負け……、だが、グレン島を復興させ、ジムを作ったらまた来ると良い。その時は必ず勝つ！　まだまだ若い者には負けてられぬからな！」

と、カツラはハキハキと元気に話す。風貌除けば年齢不相応なまでに若々しくも見える。

「そのハングリー精神……、私たちも見習わなければ……。ところでどうして、このような島にジムをおつくりになられたのですか？　シオンやマサラ等、ジムのない町に作っても宜しかったのでは……？」

エリカは、カツラに率直な疑問をぶつけた。

「マサラに一時避難用のジムを作ろうと考えたのだがの、オーキドの奴が反対しおったから諦めたのだ」

「オーキド博士が？」

レッドは、その名前に関心を持った。

「左様。昔は仲良かったのだが……、どうもリーグを作って以来ギクシャクしてしまっての……」

カツラは、言葉を濁した体で言う。

「あら、どうしてそこから仲が悪くなってしまったのですか？」

エリカは顎に手をやりながら尋ねる。
「……、詳しい話はヤナギにでも聞くが良い。あいつの方が良く知っとる……、しかし女史にとっては辛い話になるやもしれぬが」
「え？」
彼女は目をパッチリと開いて疑問をあらわにする。
「……、ワシはあまり話しとうないのじゃ。そういえば、ヤナギから聞いたが、過去の話を聞いたとか？」
カツラは二人に尋ねてきた。
「え……ええ」
「あいつが話した内容を聞き出すと、それはまだまだワシら三人が仲良かった時期じゃ。しかしそこから先はお前さんたちに話してはいない……」
エリカが、その発言に対し
「それって……、ヤナギさんの口から話したくないという事では……？」
「……、そういう事かもしれぬな。分かった。時期が来たら話そう。その時が来たら君たちのぽけっちとやらに連絡を入れてやるわい」
カツラの提案に対し、レッドは頷いて
「有難うございます」

と言ったが、カツラは俯いて
「しかし……ワシが話す前に……、知れてしまう事かもしれぬがな」
と言った。
その後は、ポケッチの番号を教え、少し話をしてジムを後にした。
―ふたご島　一階―
「カツラさん……、あの事話しているとき元気なかったよな」
彼はまずそのことに気付いた。エリカも考えている事は同じなようで、
「ええ……、余程に深刻な話なのでしょう……。しかし、私に関わるお話でしたら、聞かない訳にはまいりませんわ」
エリカは眦(まなじり)を決しながらそう言う。その眼には意を決したようにしか見えなかった。
「それにしても、一体どんな話なんだろうな?」
「そういえば……、お祖母様はあまり私に前半生を語ってはくれませんでしたわ。もしかしたらその関連の話しかも……しれませんわ」
エリカは憶測混じりなのを自覚しているのか、自信なさげに言っている。
「そうだな……、丁度、世代同じぐらいだし」
レッドはその意見に同調した。
「……、さて、斯様な話はしまいに致しましょう。グレン島に戻らなくては……」

「そうだな」
　という訳で二人は洞窟をでて、グレン島へ空を飛ぶで戻った。
　―午後４時　グレン島―
　ポケモンセンターの前で降りる。そして、そこからそんの数歩程度の距離に居たグリーンは待ち構えていたかのように、二人に近づいてきた。
「……、お前のリザードン、随分立派になったもんだな」
　グリーンの第一声はそれである。
「そいつはどうも」
　レッドは悪戯半分に大きな声で、礼を言った。
「さて、バッジだが……」
「ほらよ！」
　レッドは、二人分のバッジケースをこれ見よがしにグリーンにみせつける。
「揃ったか……。よし、俺のジムに来い、場所は分かってるだろ？」
「トキワシティだろ！」
　レッドは強く言う。
「そうだ。レッド、てめえには絶対負けん……、俺の女を奪った罪はでかいぞ……！」
　そう言ってグリーンはピジョットに乗って、北の方向へと飛んでいく。その夕日に映

える姿に少しだけ威厳を感じた。
「俺の女……？　どういうこっちゃ」
「……、ささ、とりあえずポケモンを休ませましょう！　相当に傷ついてますわ」
エリカは、あまりこの話に触れたくないかのような反応を取る。少しだけ疑問を持ったが、敢えて突っ込む真似はせず。
「うん？　……ああ、そうだな」
こうして二人は、二回目のグレン島宿泊の後、カント―最後のジム戦にへと臨むのである。
―第四十四話　矍鑠（かくしゃく）の老翁（ろうおう）　終―

第四十五話　赤緑の天王山

―1月17日　午前11時　トキワシティ　ポケモンセンター前―

レッドとエリカは、カントー最後のジムリーダー、グリーンに挑む為、二度目のトキワシティにへと舞い降りた。

そのジムに向かう道中の事。

「いよいよカントー最後のジムか……、内国とかいうくくりでいうなら本当に最後になるわけだな」

「そうですわね……」

エリカは珍しい事に、到着してから……いや、グレン島より飛び立った時から言葉に覇気が無い。まるで抜け殻のような生返事を繰り返しているばかりである。

朝の時など、普段は朝一番で「貴方ー、朝ですよー！」と、愛らしく清らかな声で起こしてくれた。しかし、今日ばかりは何故か俺の方が早く起き、逆にエリカを起こす……。その前に少し性的ないたずらしたというのは内緒だが。

「おいおい、今日お前どうしたんだ？」

「……、お構いなく。少し、調子がすぐれないだけなので……」

と、エリカは額に手を垂直になるように当てながら、か細い声で答える。
「……、むう。そうか。無理はするなよ」
彼はエリカ以外の女性と付き合ったことが一回としてない。なので、女性がこのように不機嫌な時にどうすれば良いか最良の術を知らないのだ。その為、彼は放っておく以外に出来る事はないと思うに至る。
そんな気まずい雰囲気の中、二人はジムの前にたどり着くのであった。
―午前11時20分　トキワジム前―
さて、そんなこんなでジムにたどり着いたレッドとエリカ。
レッドが「よし！」と言って、勇み盛んにジムに入ろうとしたところ、エリカがレッドの袖を引っ張る。
「……、なんだよ。どうした？」
引っ張られたレッドが、後ろを振り向くと、そこには黒き頭があった。
「ごめんなさい！　私、どうしてもグリーンさんと戦うのは……」
エリカは間、髪を容れずに言ってきた上に、深々と頭を下げている。恐らく最敬礼の角度だろう。レッドは、少し驚きはしたが、すぐに言葉の意味を察した。
「……、そうか、そんなに嫌か……」
実をいうと、グレン島にエリカと共に上陸し、グリーンと出会った時。その頃からこ

うなる予感はしていた。エリカのグリーン嫌いは相当なものであることは、重々承知していたからだ。

「私の我がまま……、そんな事は分かっております。しかし、それ以上に、グリーンさんと戦うのは……」

やはり、自らを死姦するとまで言っていたオーキドの血を引くグリーンに会うのは、俺が思っている以上に辛い事なのだろう。と思ったレッドは、

「分かった。そんなに嫌なら、ジムの外で待ってろ。お前の気持ちは十分に察する……、でもお前、バッジはどうするんだ?」

「ジムリーダーは、所属地方の全バッジを持っているのと同等の実力を有する。とリーグ法32条に規定されているので、どうという事はありませんわ」

エリカは毅然と答えた。しかし、レッドにはじゃあお前何で今まで、一緒にバッジ取ってきたんだ? という疑問がわいたが、敢えて突っ込む真似はしなかった。

「そか……、いやでも外に一人にしておくと、変な虫が寄ってきかねないしな……。やっぱ中で待ってろ」

と言う訳で、レッドはエリカと共に中に入る。

―ジム内―

ジムの中は、フウランのジムを彷彿とさせる進行パネル方式のジムであった。

「貴方、どうかお気をつけて」
エリカはいつにも増して、レッドを気にかけているようだ。
「なに、グリーン如き、すぐに片付けるさ。じゃな。お前はこの入り口付近に居てくれ。じゃ、俺は行く……」
そう言うと、レッドはエリカに背を向け、いざ近くに居るエリートトレーナーに勝負を仕掛けんとした。
「貴方」
彼女は、行こうとするレッドに話しかける。
「ん？」
レッドが振り返ると、エリカは雪駄の踵を少し上げ、彼に口づけをする。
十秒ぐらいすると、彼女の方から唇を離し
「ご武運を！」
そう言って、彼女はいつもの爽やかな笑顔になる。
「……、おう！」
こうして、今度こそレッドは戦地にへと臨んだ。心が弾んだのは言うまでもない。
暫くして、レッドはグリーンの目の前にたどり着いた。
「……、俺の目の前でいちゃつくなんざ、いー度胸じゃないか、レッド君」

　グリーンの第一声は、いつもの通り、憎たらしいものであった。
「見てたのか」
「たかだか数百メートルしか離れてねぇのに、見えてないと思う方がどうかしてるさ。もしかしてこれは、俺にまざまざと、愛し合っている事を強調せんが為の、エリカさんの策略か？」
　グリーンはそう、笑いながら尋ねる。
「……、さあな！　本人に聞けよ」
　彼はそう、唾でも吐かんばかりの切り捨てぶりで言った。
「それは嫌味か？　俺がエリカさんから嫌われている事……、知らない訳じゃないだろう？」
「何でそんな事、お前が知っているんだ」
　レッドは、それが疑問だったので、尋ねてみる。
「フン、カントーのジムリーダー……、いや今やジョウトの連中ですら知っている事だ。悪事千里を走ると言ってな……。悪い噂話はすぐ耳に入っちまうもんだ。お前も気を付けろよ」
　グリーンは相変わらずの軽い調子で話す。こちらから見てると冗談か本気か見分けがつかないぐらいだ。

「お前、変わったな……。昔はそんな疑心暗鬼な奴じゃなかったろう……？」
「最早、〝親友〟にすら、変わったと言われたか……。こちとら、例の事件から評判だだ下がりでよ！　風の噂じゃ理事長が俺を解雇しようかとか企んでるらしいぜ。俺に負けたくせに何をほざいてやがんだあの、童貞野郎が……！」
　ワタルが童貞である事は最早、周知の事実であるらしい。
「おっと、辛気臭い話ばかりで悪かったな……、変わった変わったといくら言われようとなぁ……、１０歳の頃から何年もやってきたトレーナーとしての根性だけは変わってねえつもりだ」
「！」
　レッドはその言葉で、今一度姿勢を正させた。
「その証拠に、今、俺はお前と戦いたくて仕方ねえ……、リーグでも俺に勝てる奴は未だに一人としていない……。今一度、どっちがカントー……いや世界で一番強いのか、決めようじゃねえか！」
　レッドはその言葉に、四年前、グリーンと戦った時の事を思い出す。そう、セキエイリーグの最上階、チャンピオンの間での出来事を……。
「……ああ！」
　こうして、カントー最後のジム戦……いや、四年越しでの最強のライバル同士の戦い

が開幕する。
「行け、ピジョット！」
「行け、ピカチュウ！」
「単純な野郎だな！　ピジョット、影分身！」
　ピジョットはそそくさに、自らの分身を作る。
「ピカチュウ、十万ボルトだ！」
「ピーカー！」
　ピカチュウは、１０万ボルトの電流を、ピジョットに送電すると試みるも、失敗する。
「チッ……、所詮命中９５か……」
「だから、単純だと言ったんだよ！　ピジョット！　もう一度影分身！」
　ピジョットはまたも分身を作る。まるで忍者のようである。鳥のくせに。
「ピカチュウ！　もう一回１０万ボルト！」
　しかし、またも１０万ボルトは外れる。
「ははっ！　どうした！　ピカチュウという電気タイプを使いながら、一発で仕留められない伝説のトレーナーさんよ！　ピジョット！　そろそろ仕置きしてやれ！　恩返しだ！」
「慢心はいけないぜ……、ピカチュウ！　こっちも意味が違う気がするが、仕置きだ！

雷を食らせろ！」

ピカチュウは、最大出力での電力を、ピジョットは最大のご恩返しをする為に突撃するのである。

そして、ピカチュウも三分の二が削れる大ダメージを喰らったが、ピジョットは無論、即死である。

「先制は、まずお前か……、ま、花の一つや二つもたしてやらにゃ、格好つかねぇからな」

相変わらずの嫌味ぶりにレッドは辟易するが、いつもの事なのでそれほど食って掛かる気にはなれなかった。

「行け、ドサイドン！」

ドサイドンは、どっしりと恰幅のある格好で登場する。さすがはあのサイドンの進化形だ。貫禄と威厳が半端ではない。プロテクターが更に凶悪度を増させている気がしないでもない。

「ピカッ……」

ピカチュウは、その姿に怯える他なかった。

「……。こいつは無理だな……、戻れ、ピカチュウ！　行け、フシギバナ！」

フシギバナもドサイドンに勝るとも劣らない格好で登場する。

「フシギバナ！　ドサイドンにソーラービームだ！」

フシギバナは光を吸収している。
「バカな奴……、ドサイドン！　地震だ！」
地が、大きく震える。ドサイドンであるせいか、更に大きく揺れているような……、そんな事をレッドは思っている。
一方、フシギバナが喰らったダメージは並大抵のものではない。体力が三分の二失われてしまった。エリカによる日本晴れ援助のありがたみを、ひしひしと感じたのは言うまでもない。
しかし、レッドは俄かにニヤついた。
「フシギバナ！　ソーラービームだ！」
「太陽光線、とくと喰らえええ！」
フシギバナの放った光線は、確実にドサイドンを射抜いた。
「！」
グリーンは、事の重大さに気づいたようだ。ただでさえ四倍なのに、タイプ一致に加え、新緑の効果発動。いくらドサイドンといえど、耐え切れるものではなかった。
ドサイドンは、ゆっくりとその巨体を地につけ、またも地を揺らした。
「……、せっかくハードロックの特性を持つドサイドンを繰り出したっつーのによ……」
グリーンはそういうと、豊かな茶髪の頭をポリポリ掻いた。

「相性はそんな簡単に、乗り越えられるもんじゃないぜ……」
レッドは、帽子を目深に被りながら言った。
「……、それもそうだな。じゃー、てめえの言う事に従ってやるよ。行け、ウインディ！」
レッドはその発言でニヤリと微笑み、
「お前も同じぐらい単純な野郎だな！　戻れ、フシギバナ、行け、カメックス！」
「……、そうだな。だが、ちったぁ意味考えろよ」
グリーンのその発言に、レッドはキョトンとする。……、しかし、すぐに意味を察した。
「ウインディ！　カメックスに雷のキバだ！」
ウインディは猛烈な勢いで、電撃をまとったキバで、カメックスに噛みつく……いや、食らいつくの方が適当な表現かもしれない。
カメックスは、半分近くＨＰを失う。いかに不一致といえど、ウインディの物理は強力である。
「……、相性は簡単に乗り越えられない……っったろ？　カメックス、ウインディにハイドロポンプだ！」
カメックスの猛き水流は、見事にウインディを捉える。本来ならば、一撃で仕留められたところだったが……。

「な……、立っているだと!?」
　ウインディはふらふらながらも何とか立っている。
「気合のタスキ、だ。お前のやる事なんざハナからお見通しなんだよ！　ウインディ！　もういっちょ、雷のキバ！」
　今度の雷のキバは、運悪くも急所に当たってしまった。
「すみません……、ご主人……」
　カメックスは、ウインディの前に倒れるのであった。
「クソ……、だがまだ手はある！　行け、ラプラス！」
「ずっと、エサをぶらさげるとでも思ったか？　つくづく甘いな。戻れ、ウインディ、行け、ナッシー!!」
　ナッシーは相変わらずの三兄弟（？）である。悠々と立つ大木は、どこか意地らしい。
「甘い？　それはこっちのセリフだぞ！　ラプラス！　ナッシーに吹雪だ！」
　吹雪は見事に直撃し、ナッシーは敢え無く倒れた。
「……、行け、カイリキー」
　……
　こうして、リザードン、カビゴンの二体を残すも、体力は黄色ゲージとの辛勝でグリーンを下した。

「チッ……、嘘だろ……、四年間……こいつに勝つ為に死に物狂いで修行したのに……！」

グリーンは大いに項垂れる。

「ワタルさん相手に息巻くだけの事はあったよ……、でも負けは負けだろうが！　バッジを渡せ」

レッドは、珍しく声を荒げてバッジを要求した。

「……、ゴールドとかいうガキは、再戦の時ボコボコに出来たのに……。まぁ、確かにお前の言う通りだな。しょうがねえ、くれてやる。ほらよ、グリーンバッジだ！　さっさと受け取れよ」

そう言ってグリーンはポケットからグリーンバッジを二個取り出し、手渡す。

「何で二個なんだよ。エリカは戦ってねえぞ」

「うるせえ。俺の気持ちだとでも伝えてくれ……」

そう言うと、グリーンは恥ずかしくなったのか顔だけ後ろに反らした。

「お前らしくないな……、そんなに好きだったのか」

「恋人のてめえにあまり仔細は語りたくない。語り草にされるのがオチだしな。だが、これだけは言える。俺が今まで出会った中で……唯一本気で、心から惚れた相手……だとな」

それが一番の語り草なんだがなあと、レッドは思ったが口に出すと、バッジを持ってかれそうな気がしたので言うのは思い止める。
「それはそうと、なんでお前、研究所が売り払われることに抵抗しなかったんだ。お前にとっても思い出の場所だろうが」
レッドは、語調を強くして、グリーンに問い質す。
「思い出の場所……？　お前にとっちゃそうかもな。だがな、俺にとっては忌々しい場である他ねえんだよ。だから、研究員の人の為にも賃料は払い続けたが、貸主が返せっつうから、これ以上の義理は無い。そう思ったから放っておいただけさ」
グリーンは冷淡に言った。
「……、ナナミさんは何も言わなかったのか」
「姉ちゃんは、俺がチャンピオンになってからはあんまり口出ししてこなくなってな。俺の意に従ったよ」
グリーンはまたも冷淡に続けた。
「冷血だな」
「何と言われようが構わねえよ。もう慣れたしな。だがな、お前、俺の立場だったらどうすんだよ、残すのか？」
「……!!」

そう尋ねられると、レッドは黙るしか無い。

「……、感情だけで、他人の家に口出しするもんじゃねえよ。レッド、お前さ、シロガネ山で確かに強くなった事は認めるが、元来のコミュニケーション障害ぶりに拍車がかかったんじゃねえのか？」

その言葉は深く、レッドの胸に突き刺さった。

「前々から思っていたんだけどさ、お前って感情ありきで動くよな。そんなんじゃ、いつかエリカさんにも嫌われるぞ……。気をつけろよな。ああいう女は、熱中すれば盲目を疑うまでにのめり込むが、一旦捨てたら、棺桶に安置された死体の如くに、永久に冷めゆくのみだ」

その後も少しグリーンと話をして、別れた。

―ジムの外―

エリカに会い、二人はジムの外へ出る。

「どうされました？　お顔に元気がありませんが……」

エリカは、レッドの調子を気にかけているようだ。

「いやなに……、戦い疲れただけだよ。あぁ、あとほらジムバッジ。グリーンから俺の気持ちだとよ」

そう言って彼は、エリカの手のひらにグリーンバッジを乗せた。

しかし、エリカはすぐさま、バシッと地表に叩き付ける。
「要りませんわ！　そんな……、気持ちでバッジを渡すなんて、ジムリーダーとしてのプライドが欠片もない人……そんな気持ちなど受け取れるわけないではありませんか」
エリカはあっさりと切り捨てる。しかもすっきりとした笑顔で言うのだからまた恐ろしい。なるほど、棺桶に安置された死体の如く……とはこの事かとグリーンの言葉を腑に落とす。１８股している人間のいう事は蓋し、真をついているかもしれない。
そんな事を思っていると、レッドのポケッチが鳴り響く。
「誰だろう……、あ、ダイゴさん！」
「レッド君！　挨拶している場合じゃないんだ！　すぐにヤマブキのポケモンセンターに来てくれ！　話をしなければならないことがある」
それだけで、ダイゴの通話は切れる。
「一方的だなぁ……」
「非常に緊迫しておりましたわね……、行ってみた方が宜しいのでは？」
と、エリカはレッドに提言する。
「そうだな……、せっかく連絡くれたんだし、行ってみよう」
と言う訳で二人は急いでヤマブキシティへ、リザードンに乗って向かうのである。
―午後３時　ヤマブキシティ　ポケモンセンター―

ポケモンセンターにつくと、二人はダイゴの案内で、密室へと通された。
「よく来てくれた……」
ダイゴはまずその事で安心しているようであり、深く息をつく。
「調査して頂き、有難うございます。それで、一体……？」
レッドがまず切り出し、二人はダイゴの言葉に耳を傾ける。
「これから話すことは関係者以外には他言無用だ。いいかい……、落ち着いて聞いてほしい……、ロケット団が、復活した。それも、前よりも大規模な組織として」
二人はその言葉に、仰天する他無かった……。

―第四十五話　赤緑の天王山　終―

第四十六話　四度目の正直

―1月17日　午後3時　ヤマブキシティ　ポケモンセンター―

「これから話すことは関係者以外には他言無用だ。いいかい……、落ち着いて聞いてほしい。ロケット団が、復活した。それも、前よりも大規模な組織として」

その発言ののち、二人は暫く言葉を失う。サカキが行方をくらましたという事は分かってはいたが、あまりにも早すぎる。それも、カントーに押し寄せる程の力を蓄えているなどと、夢にも思っていなかった事だからだ。

「間違い……ないんですか?」

レッドは、念を押して言う。

「間違いではないさ。なにしろ、エアームドの空中偵察。それで得た情報が、黒づくめの服装に、Rの文字。これはロケット団だと確信する他無いよ……」

「……、シルフカンパニー……ですよね?」

エリカがそう、ダイゴに尋ねる。

「うん。そこだ。恐らく、彼らの狙いはマスターボール。最近量産体制が整ったって小耳に挟んでいるものでさ……。今あそこには数千個ものマスターボールが、試作品含め

てあるだろう。もしあれが彼らの手に落ちれば、大変な事になる」
ダイゴは、いつになく真剣な表情で、そして鋭い声で言う。ただの坊ちゃんではない。
「それでは、すぐさまシルフカンパニーに……」
レッドが向かおうとするも、ダイゴが呼び止めた。
「待って。カードキーは持ってるのかい？」
「四年前に一度潜入したので……」
レッドは以前の記憶を思い起こし、話すが
「それじゃダメだよ。去年設備が大幅に変わったからそのカードキーはもう使えないよ」
と、ダイゴに切り捨てられる。
「えっ？　じゃ、カードキーはどうすれば……？」
「僕のを貸すよ。あと、カードキーに加えて、社長室に入るには更に暗証番号が必要でね。その番号はこのメモに書いてある。ああ、読み上げないでね。どこに監視カメラがあるか分かったもんじゃないから」
と言ってダイゴはカードキーを机上に置く。
「よ……宜しいのですか？」
エリカは、申し訳なさげにダイゴに尋ねる。

「言ったろう？　僕はホウエンの人間だから、これ以上の介入は出来ない。本当はこの情報を教えた時点で守秘義務違反で、免職ものなんだけど……。ま、うまくやるよ」
　その言葉に、理事の威厳を少しだけ感じたのは、恐らく気のせいではないだろう。
「とにかく、君たちは、僕の代わりにシルフカンパニーに潜入して、再起不能なまでにロケット団を壊滅させて欲しい」
「報酬は？」
　レッドは、冗談半分に尋ねてみる。
「おっと、そういえば何も考えてなかったな……。何か資金で困った事があればいつでも頼ってくれよ。出来るだけの融通はする」
　と、ダイゴは爽やかに言ってみせる。デボンコーポレーションの跡継ぎという肩書が、今は輝いてすら見える。
「そ……そんな悪いですわ。金子にはあまり苦労して」
　彼女は、手のひらを前に出して断ろうとするが、ダイゴは、
「人間万事塞翁が馬……、何があるかなんて分かったもんじゃないよ。じゃ、頑張って！　僕に出来るだけの事はした。後は、君たちの実力如何にかかってるよ……！」
　そう言ってダイゴは立ち去っていく……。
　こうして二人はシルフカンパニーへと潜入する。門番の下っ端は例の如く寝ていた。

―午後3時30分　シルフカンパニー　1階―

「うーん、広いな……」

シルフカンパニーの一階は、大きな広間となっている。中央のオブジェの他には受付カウンターや観葉植物などが置いてある。

「まずは、どう致しますか？」

彼女はまずそれを尋ねてくる。当然ではあるが……。

「とにかくエレベーターを使って、まずは二階に上が……」

と言うと、ロケット団と思しき黒づくめの男が二人組で嘲笑ってきた。

「残念でしたー！　シルフカンパニーのエレベーターは現在故障中だ！」

「ええ!?」

無論、俺は驚愕した。ダイゴよ、どうして教えてくれなかったのだ……。

「では、どうやって上に上がられたのです？　故障しているのでしたら行けないハズでは……」

エリカは当然の疑問を、下っ端に吹っかける。

すると、もう一人の下っ端が高笑いしつつ、

「そいつは言えねえな！　よし、動転している間に侵入者を片付けて決着をつけるぞ！」

「おう！　この二人を倒せば、幹部昇進間違いなしだ！」

そう言って、下っ端二人はモンスターボールを構える。
「……、難儀な連中だ」

二人の大勝に終わる。ＨＰは減ってすらいない。
「チィ……、やはりチャンピオン様とジムリーダー様は格がちげえや……」
「だが、俺たちを倒そうと、上には上がれねえよ！　ざまあみやがれ！」
下っ端がそう吐き捨てて、何処ぞに退散しようとするとエリカの手持ちであるロトムが出てきた（第二十三話参照）。
「ロトム？」
「エレベーター、壊れてる……、僕の好物……」
と言いながら、ロトムはエレベーターの方向へ浮遊しながら向かう。足が無いから恐らく浮遊だろう。
そこで、エリカは何かに感付いたのか、ロトムの後へ静かに続く。俺も何だろうと思って、エリカを尾行する。下っ端たちはボケーッとしていた。
エレベーターの前にロトムが止まると、ロトムは手に持っている触媒を操作盤へ届かせようとする……、が、操作盤までの高さはｌｍぐらいなのに対し、ロトムの体長は３０センチ程だ。無論届かない。

「仕方ないですわねぇ……」

そう言ってエリカは感電防止の為かどこから持ってきたのか、厚手のゴム手袋をカバンから取り出し、ロトムを操作盤の所まで持ち上げてみせる。俺はロトムが少しだけ羨ましかった。

「有難う。よいしょ！」

ロトムは操作盤の方向ボタンに触媒をくっつけ、電流を送る。ジジジ……という音と共に火花が散る。

数十秒ほどすると、なんと、エレベーターのドアが開いた。下っ端は口を開け、愕然としていた。

「フフ……、では、貴方！　乗りましょう！」

エリカはクスリと笑って、レッドをエレベーターに誘う。レッドに続いてエリカが乗って、無事乗る事に成功する。ロトムはエレベーターに憑依したので消えた。

―エレベーターの中―

「おいおい、ロトムのエレベーターだろ？　悪戯するんじゃないのか？」

「ご心配なく。きちんと躾けてありますわ。ロトム！　黒づくめの人が乗った時は絶対に動かさないでくださいね！」

どこからか、「ワカッタ」と片言混じりの日本語が聞こえる。なるほど、機械に憑りつ

くと発話能力が下がるようだ。
と言う訳で、二人は取り敢えず二階に上がった。
―シルフカンパニー　2階―
2階にたどり着くと、事の次第がもう伝わっていたのか忽ち二人は下っ端に包囲された。人数は数十人程だろうか、こうしてみると黒山の人だかりという言葉も納得できる。
「どうします？　貴方」
「一人ひとり、倒していくしかないだろう……」
レッドが強く言うと、下っ端の一人が
「一人ひとりだぁ？　んな、正々堂々とはやらねぇよ！」
「何だ」
レッドが答える間もなく、一気に数十匹のゴルバットやラッタ等の定番のポケモンが出てくる。
「ほんと、難儀な奴ら……、行け、リザー……」
レッドがモンスターボールを取り出すや否や、どこからか聞き慣れた嗄れ声が響く。
「ウインディ！　ギャロップ！　大文字じゃ！」
その指示と共に、灼熱の炎が下っ端諸共、ポケモンに襲い掛かる。

「あの声は……、カツラさん!?」
　カツラは案外、耳が良い。８０メートル程離れているのにも関わらず、レッドの声が聞こえたようで、
「挨拶は良い！　はよう行かぬか！　幹部は社長室におるぞ！」
　と、いつも通りの快活な声で言った。
「やはり、敵は社長室にあり……か！　行くぞエリカ！」
「はい！」
　レッドはワープパネルの配置を四年前に散々試行錯誤を繰り返していたせいか、それなりに暗記していた。その為、社長室にたどり着くまでさほど時間はかからなかった。
―シルフカンパニー　最上階　社長室―
　一方その頃、社長室では……
「ヘイ！　シルフのＣＥＯ（最高経営責任者）サーン！　我々にマスターボールを、ギブしてくれるのならばこれ以上はノータッチにしといてやるヨ！」
「ふざけるでない。誰がロケット団に手など貸すものか……！」
　社長はあくまで毅然と振る舞っている。
「日本語ダイジョブデスカー!?　手をレントしろだなんて誰もセイしてナイヨ！」
　こんなやり取りをしている中、二人がドアを解錠する。

「オーッ!?　どうして、ココにインベイダー（侵入者）が!?」
　幹部は突然の邪魔者に、かなり大慌てしている様子だ。
「たく、マチスさんじゃないんだから……」
　レッドは、深くため息をついている。
「チィ……、訳わからないけど、インベイダーはハントするのみヨ！　ミーの名前はアレス！　幹部になれてから初のバトル……、ホワイトスターをあげてみせるネ！」

　戦果は、言うまでもないだろう。
「オーノォォォォ!!　これじゃ……これじゃサカキ様にスコウルドされてしまうネ……」
　アレスはしょげてしまった。
「おい、エリカ」
「ｓｃｏｌｄ……、叱るという意味です」
「察し良いなお前」
　そんな事を話していると、アレスは居直って
「ミーがルース（ｌｏｓｅ＝敗北）しようと、ロケット団が滅びないネ！　シーユーアゲイン！」

と言って、アレスが退散しようと二人の横を通り抜け、ドアを抜けると。
「今ッス！　捕えろッス！」
いつの間にか警察が張り込みをしていたようだ。アレスは抵抗しようとしたが、ヒゲの刑事のエルボーを喰らって怯み、その隙に逮捕された。
「おい、エリカ、お前いつの間に通報したのか？」
「いいえ、私は何も……」
「私が通報した。ただ、エレベーターが故障していたもので中々来れなかったそうだが……」
と、社長は平然とした顔で言う。流石は大企業のトップである、性格が豪胆だ。
「それにしても、本当に助かった！　もしマスターボールがあちらの手に渡ったら、悪用されたに違いない……。社員一同に代わって礼を言わせてもらうよ」
社長は深々と頭を下げる。
「いえいえ、お礼を言うなら私たちではなく、デボンコーポレーションに……」
エリカが言い終わる前に、社員の一人が
「社長ーーーー!!　一大事です！　研究室に居た研究員が悉くさらわれてしまってます！」
その報告に、社長の顔は真っ青になる。

「な……、なんだと……。あの者達が居なくてはわが社は生き残れぬ……！」

シルフカンパニーはボール製造を本業としているため、ボールを研究する人が居なくては立ちいかないのである。

「クソッ……、ロケット団め……、それが真の狙いであったか……！」

社長はそう言うと、悔しさのあまりか地団駄を踏んだ。

そんな状況の中、一人の刑事が中に入る。緑色のくたびれたコートを羽織り、その下には赤いネクタイを着け、Ｙシャツを着ており、容貌は恰幅の良い男性である。

「社長さん！　落ち込まないで下さいッス！　この糸鋸圭介！　全力を尽くしてさらわれた研究員も探し出してみせるッス！」

と、その刑事は社長を励ます。しかし、またも社長室に入ってきた人物の声でその希望は打ち砕かれる。

「無駄だ」

「カツラさん……」

「何スカあんたは……ってカツラジムリーダーがどうしてここに居るんッス!?」

刑事は大いに驚いているが、カツラは淡々と続ける。

「フジが調べてくれた。ロケット団はイッシュ地方へと本拠地を移している。だから、カントーの警察が如何に頑張ろうと、イッシュに連れ去られた研究員を救い出すことは

不可能と言う訳だの」

その言葉に一同は大いに驚く。

「そ、それで?」

レッドは、カツラに次の発言を促す。しかし、返答は芳しくなく

「残念だが、フジの情報網だとそれが限界だったらしい……。しかし、この件については既に知っておったから窓を焼き切って先に潜入して、連れ去られる前の捕えられていた研究員をある程度解放することが出来た」

「ほ……本当かね!?」

社長の目に生気が戻る。

「とはいえ、救えた研究員は恐らく三割ほどしかおらぬ……。他は恐らくイッシュに……。済まぬの社長殿。これが少しでもロケット団の野望の実現が遅れれば良いのだが……」

ロケット団の野望は、四年前のサカキが言っていた「ポケモンを人間のもとに絶対服従させる」事とおおよそ同じだろう。そう思ったレッドはそれに関して、突っ込むのをやめた。

「それでも良い……、研究員が多少でもおれば再起は可能だ」

その後も少し話し、刑事たちや社長と別れ、一階に着いたのちにロトムを憑依から解

放させる。その後二人はカツラと共にシルフカンパニーを出た。
　―午後7時　シルフの外―
「カツラさん。包囲の際助太刀して頂き、本当に有難うございました」
　エリカは深々とカツラに礼をする。
「何、大したことではない。しかしどうして、二人はここで事件が起こっている事を知っておったのだ?」
「いや……、たまたま近くを通りかかったので……」
　レッドはすぐ思いついた言い訳をする。
「そうか……。ところでお主等はバッジ全て揃ったかの?」
「はい!」
　と言って、レッドはカツラにカントーのバッジケースの中身をみせつける。
「こんなにも早くグリーンを下しおったか!　流石としか言い様がないのう!」
　カツラは良い笑顔をしている。まるで自分の孫が成果を上げたように喜んでいる。
「その調子ならば、リーグも易々と突破できるだろう!　気張れよ、二人とも!　同じ地方のトレーナーの活躍は一入(ひとしお)嬉しいものだ」
「はい、全力を尽くします!」
　レッドは、カツラに負けじとばかりに明瞭で大きな声で返事をした。

「うむ。さて、イッシュ地方に行った際はロケット団だけでなく、プラズマ団という組織もある。両組織がつながっておるかどうかは分からぬがの……。二人とも、せいぜい気を付けるが良い。それでは、また会おう！」

そう言ってカツラは、ギャロップに乗って帰るのであった。

「危なくないのかな……」

レッドはまずその事を心配したが、あまりに気にかけても仕方ない。

「乗馬で帰るとは中々粋ではありますが……、通行人の方がやけどしないか心配ですわ。さて、それはそうとリーグですか……」

「早いなぁ……、でも引き締めなきゃな。四天王変わってるんだっけ？」

レッドはエリカに確認する。

「ええ、一番目の方はカンナさんからイツキさんというエスパー使いに、二番目の方はシバさんから、ご存知の通りキョウさんに。三番目の方はキクコさんの引退に伴ってシバさんが繰り上がって、四番目には、カリンさんという悪タイプ使いが居ますわ」

「へぇー、結構変わってるんだな……」

改めて聞いてみると、本当にそうだ。四年の間に随分変わったんだなぁと実感する。

「皆さん、相当に手強そうですわ……。しかしイッシュへの最後の関門。心してかかりましょう」

「おう！　だが、もう夜だ。今日は早く寝て、明日は朝一番に行くぞ！」
こうして、ヤマブキで宿泊し、来たるべき決戦の日に備える。
―1月21日　ポケモンリーグ　広間―
それから二人は、朝一番でトキワシティに移動し、初心に帰るつもりで4日かけてチャンピオンロードを潜り抜ける。そして、いよいよリーグの前に立ち、勇みを盛んにして選挙以来のリーグへ入った。
ポケモンを回復させた後、精神を集中させながら一段一段、四天王の間へと進む。すると、後ろから俄かに聞き覚えの声がする。
「待てよ！」
振り返ると、赤毛の少年……、シルバーが立っていた。
「……、何だよ。またやられに」
最早、定番の切り替えしをするが、シルバーは強情に返す。
「ふざけんなよ。もうやられないぜ。俺は負けた後、もう一度強化されたジョウトのジムリーダーを倒したんだ！　前の俺とは段違いの……」
シルバーが言い終わるや否や、またも聞き覚えのある声がした。シルバーよりは若干高めである。
「レッドさーん！」

「あら、ゴールドさん……」
まず気づいたのは、エリカである。そして、シルバーが振り返り、苦い顔をした。
「あ！　シルバー！」
ゴールドは案外、シルバーに好印象を持っているのか、同年代の友達を呼ぶような快活な声で名前を呼んでいる。
「馴れ馴れしくすんな。俺とお前はライバルであっても、友達じゃねえんだ」
とはいっても、表情は案外満更でも無さそうだ。
「全く……、相変わらず強情だね……」
ゴールドは深くため息をつく。
「ゴールド。ハナダ以来だな。で、何しに来たんだ？」
レッドは不愛想な振る舞いでゴールドに接する。
「何しにって……。ジョウトのバッジ揃えなおしたから、四天王に挑戦しに来たまでです！　それで、レッドさんを見かけて……、そうだ！　折角だし久々に戦いませんか？　ハナダではゴタゴタがあって出来ませんでしたし……」
「ジョウトのバッジ揃え直した……？　てことはヤナギさんも倒したのか!?」
まず驚いたのはそれである。ここまで実力が高まっていたとは思いもしなかったからだ。

「ええ！　でも、やっぱり強くて……数回ほど挑戦してやっと勝てました」
「俺は、二回戦って勝った」
意外にも再戦回数が少ない……。それに面白みを感じたレッドは、
「これは……、戦い甲斐がありそうだ！　よし、タッグバトルだ。俺は無論エリカと組む」
と、いつになくテンションを高揚させながら言った。
「という事は、俺はゴールドとか……」
「宜しく！」
ゴールドは礼儀正しくも、シルバーにお辞儀をしている。
「フン……、一時休戦だ。ゴールド、一緒にこの夫婦倒すぞ！」
こうして、伝説の夫婦ｖｓジョウトの二強の戦いが始まるのだ……。
―第四十六話　四度目の正直　終―

第四十七話　出る杭は打たれる、出過ぎた柱は放置

―1月21日　午前11時　ポケモンリーグ　広場―

レッドはラプラスを、エリカはユキノオーを繰り出して、ゴールドはバクフーンを、シルバーはゲンガーを繰り出した。

天候は無論、あられ状態である。

「バクフーン！　ラプラスに雷パンチだ！」

バクフーンは命令が下ると、拳に電力を蓄えはじめる。

「ゲンガー、ユキノオーに催眠術」

ゲンガーは途端に、睡眠の念波を送る。

しかし、外したようである。ぴんぴんしているからだ。

「ユキノオー！　ゲンガーにウッドハンマーです！」

「オラの薪を喰らえ！」

ゲンガーは、ユキノオーに太い薪を喰らわす。会心の一撃をくらわせたようであるが、防御が強い性格なのか何とか耐え切っている。

そして、バクフーンは電気をまとった拳をラプラスに叩き込む。光り輝いた電光は俄

かにラプラスの水色の首を黄色く照らし、ラプラスを見事に痺れさせる。
　しかし、ラプラスは倒れることなく、首筋をシャンとさせ直し応戦の体制を整える。所詮は不一致だ。大したダメージは喰らっていない。
「……、よし！　ラプラス！　バクフーンにハイドロポンプ！」
　ラプラスは大量の水を口内に生じさせ、バクフーンにその太く、猛き水流を被せる。さっきの仕返し……いや倍返しという表現すら甘い。なにしろ、タイプ一致の効果抜群の技である。それに、威力はかみなりパンチの1．5倍以上ある。
　無論、それがバクフーンにとって致命傷になった事は説明するまでもない。バクフーンは消火され、倒れた。
「……、バクフーン……、でも、これぐらいでめげるもんか！　行け、エアームド！」
「お前……！　同じ世代で固めんじゃねえっつたろ……！」
　レッドは、最初に戦った時、自らが言った助言を思い出し、ゴールドに忠告する。
「ごめんなさい……、どうしても同じ世代だけの手持ちで勝ち続けるレッドさんに憧れて……！　でも、僕は、もうあの時と同じ失敗は繰り返しません……！　レッドさんと同じ手法で……同じ条件で、勝ってみせます！　それが、僕の流儀です」
　ゴールドは、帽子をキッとあげ、帽子の奥にある眼に闘志を燃やしているように見える。相当な決意が見て取れる。

それに触発されたレッドは、応えてやらんとばかりに帽子を俯かせる。
「そうか……、じゃあ俺の流儀を教えてやろう」
そして、眼をゴールドの方に向け、
「本気でかかってくる相手には……、本気で叩き返す！　それも俺流にな。それが、俺の流儀だ！」
そう言うと、レッドはその言葉通りに
「戻れ、ラプラス、行け、リザードン！」
「エアームド！　ユキノオーにブレイブバード！」
レッドは一瞬、俺じゃねえのかよ！　と当惑したが、すぐに平静を取り戻す。そして、
「リザードン！　エアームドに熱風！」
リザードンは、翼に熱を蓄え、そしてそのため熱をすかさず突風に形を変えさせる。摂氏１０００度とも言われるその熱風は、エアームドを倒すには十分過ぎるぐらいである。
しかし、エアームドはオッカの実を食べて、何とか耐え切る。そしてエアームドは翼を後ろへとたたみ、鋼の容姿も相俟ってか、さながら銃弾……いや砲弾の如く疾風迅雷の勢いでユキノオーに突撃する。
見事に彼の砲弾は、ユキノオーの巨体を撃ち抜いた。

「ぐ……グオーーーーッ！」

ユキノオーの最後は原因こそ呆気ないものではあるが、壮大である。まるで、大爆発を喰らって崩落していくビルのように、その身を崩すのであった。

「戻りなさい、ユキノオー。おいでなさい、ロトム！」

ロトムは意気揚揚に、触媒を上げながら出てきた。

ゴールドとシルバーは当惑気味の表情をしている。どうして草タイプのジムリーダーが、かけ離れてそうなタイプのポケモンを使うのだろうと疑問に思ったのだろうか。

「エリカさん、そのポケモンは一体……？」

直にゴールドが、レッドの予測通りの質問をした。

「旅の成り行きで手に入ったポケモンですわ。私の普段使うタイプとは相違があるので驚かれたかもしれませんが……」

エリカは、くすりと愛想笑いを浮かべつつそう答えた。

「そ……、そうですか」

ゴールドはどこか納得しきってなさげな表情を浮かべている。

「おい、ボケッとすんな！　ゲンガー！　ロトムにシャドーボール！」

「ロトム、エアームドに１０万ボルトですわ！」

ゲンガーの方が早く、ロトムに黒い球が直撃する。
「痛い……。でもこれぐらいじゃやられない！　もてる限りの電力を僕の手に！」
そう言って、ロトムは触媒を上に掲げ莫大な電力を集中させ、その触媒をエアームドの方向に向ける。そして、光り輝く電流をエアームドに被らせた。
エアームドは、あまりの電流に耐えかね、ガチャンという鈍い金属音と共に倒れた。
……
こうして、レッドは一体残し、エリカは一体を残す。残ったポケモンはレッドはカメックスで、黄色ゲージ。エリカはラフレシアで、体力は緑ゲージと勝利を収めた。
「チッ……、負けか」
シルバーは相変わらずの強気の態度を取り、
「ま……負けた。やっぱ伝説の夫婦は格が違う……」
と、ゴールドは膝を折って負けを認めた。二人の態度は対照的である。
「いやいや二人とも流石だと思うぞ。あのヤナギさんを打ち破っただけの事はあるよ」
レッドはそう、二人の戦果を評した。
「私も同感ですわ。二人とも本当にお強くなられました……。私のジムに挑戦に来られていた頃と比べてもその差は見て取れます」
エリカはにこやかに微笑みながら、二人を評す。恐らく心からの評価だろう。

「……、おいレッド」
　シルバーは、重い口調でレッドに話しかけてきた。
「何だよ」
　レッドもそれ相応に、つんけんな口調で答える。
「次に会った時こそ……、お前の最後だ」
　度重なる挑戦的な態度に、とうとう業を煮やしたレッドは、憤然とした声を上げる。
「お前なあ！　いつまでそんな慳貪な態度取るんだよ！　いい加減自分の無力を認めろよな！」
「フン。言ってろよ」
　そうとだけ言ってシルバーはツカツカと帰っていく。
「おい！　シルバー……ったく」
　レッドはシルバーの後を追おうとしたが、無駄だと悟ったので、元の場所に戻った。
「貴方、怒っては負けですわ……」
「うるさい！　俺はああいう諦めの悪い奴は虫が好かないんだよ」
　レッドは苦虫をつぶしたような顔をして、諭すエリカに反論する。
「同族嫌悪……」
　エリカはポツリと呟く。

「えっ？」
「何でもございませんわ。ゴールドさん、手持ちを早く回復された方が……私たちと同じくリーグに挑まれるのでしょう？」
　彼女は何でもなかったように、ゴールドに話しかける。
「いや、僕はもう少しチャンピオンロードで修行し直します」
「そうか、あのさ、シルバーとは……戦ったか？」
　レッドはゴールドに気にかかっていたことを尋ねた。
「何回かは……。あの人、僕が旅する先々で鼻息荒く突っかかってきて……」
　レッドはだろうなぁ。という表情を浮かべ、
「大変だな。ゴールド、お前さぞかし煙たがってるだろう？」
「まさか、毎回挑んでくるだけの強さはありますし、いい好敵手です。快勝なんか一度も出来ませんでした……、この前、エンジュシティで戦った時は惜敗を喫しましたし……」
　ゴールドは、嫌な事を思い出して少し暗い顔になっている。
「ほう……。お前に勝ったのか。やるなあいつ……。というかお前、好敵手と言う割にはどうしてあまり話さないんだ？　てっきり俺はあいつなんか問題にしてないと……」
　レッドは、ふと思ったことをゴールドに尋ねる。
「まさか。もし僕に、シルバーを易々と下せる力があるなら、そもそも組んだりしません

よ。足手まといは嫌なんでね」

　ゴールドは静かに笑いながら言う。可愛い顔をしておいて、冷たい事を言うのが特徴なのだろうか。

「恐らく、シルバーさんもチャンピオンロードに引き返したと思われますわ。もしかすると」

　エリカが言い終わる前に、ゴールドが続きを言う。

「挑んでくる可能性は大いにありますね……。よーし！　頑張ろ！　それじゃ、レッドさん、エリカさん。次はイッシュ地方でお会いしましょう」

　と言ってゴールドもチャンピオンロードへ引き返すのであった。

「そうか……、そういやあいつも全国の旅してるんだっけ」

「嫌だ、お忘れになられていたのですか？　しかし次に会うときはイッシュ地方ですか……、もう目前なんですね」

　エリカはどこか嬉しげな声で言った。

「まだまだイッシュに思いを馳せるのは早いぞ。大きな関門が待ち構えているんだから……。よしｙじゃあ、回復させて、行くか！」

「はい！」

　二人はポケモンセンターに行って手持ちを回復させて、昼食をとる。そして、いざ四

天王に挑むのであった……。

―午後1時　ポケモンリーグ　イツキの部屋―

イツキの部屋は、四角い立方体の物体が浮遊して溝から溝へと移動する仕様になっている。

なんとも不可思議なその部屋を興味深げに見ていると、イツキが話しかけてきた。

「不思議かい？　これはすべて僕のアイデアさ」

イツキの声の方向に二人は体を向ける。

「貴方が……、最初の四天王ですか」

レッドが発言した。

「そうだよ。ようこそポケモンリーグへ！　僕の名前はイツキ。ヤマブキ大学を出た後、世界を旅して、相棒と共にエスパーとしての更なる鍛錬に明け暮れた」

「あら、ヤマブキ大学という事はナツメさんとお知り合いですか？」

エリカはヤマブキ大という言葉に反応したのか、尋ねている。

「ああ、一年後輩だったけど、とんでもない化け物だったよ……。本当だったら三年後輩だったんだよあの子」

その一言で、二人は全てを察した。

「さ……左様ですか」

エリカは引き気味にそう言う。
「そういや、エリカさんって、ナツメ君と友達なんだっけ？」
イツキは、逆に質問をしてきた。
「は……はい。どうしてご存知なのですか？」
エリカは驚いたふうに、イツキに尋ねる。
「時々、難しい言葉とか、エピソードとか聞かせてくれた時の元ネタで君の名前が出てくることがあってね。『エリカから聞いた話よ』……みたいな感じで」
「ナツメさんったら……、案外お喋りな方ですのね」
エリカは、くすりと笑いながら答える。
「ナツメさんの話は後でもいいでしょう！　早く勝負しましょ？」
俺は痺れを切らして、少し強めな声でイツキさんに迫った。早いところケリをつけたかったからだ。
「そんなに急がなくても宜しいではないですか……。まだまだお昼ですよ？」
それもそうなんだが、実をいうと自分以外の異性と親しげに話すエリカに俺は少し焼き餅を焼いていたのだ。そんな事を思いつつ、彼は引き下がった。
「そうだねー、じゃ、彼女の話は後にしよう。それで、鍛錬に明け暮れた結果、ついにカントーの四天王にまで上り詰めた！　でも、僕はもっと強くなる。その為に、伝説のお

二人さん！　手を貸してもらうよ。行け、ドータクン、サーナイト！」

レッドはカビゴンを、エリカはルンパッパを繰り出した。

「カビゴン！　地震だ！」

ドータクンがどっしりと地べたについている事から、浮遊ではない事を見破ったレッドは地震の指示を出す。

「サーナイト、瞑想！　ドータクン、カビゴンにしっぺ返し！」

「ルンパッパ、雨乞いです！」

天候は俄かに雨空になった。そして、カビゴンはその巨体をフル活用して、思い切りフィールドを揺り動かす。

しかし、不一致である事に加え、ドータクンの堅牢な防御は一撃で仕留めるには足りなかったようだ。ＨＰにして三分の二ほど減るにとどまった。

ドータクンは、後攻でその力を倍加させるしっぺがえしをカビゴンに見舞わせる。しかしこれも所詮は不一致である。半分ほど減るにとどまった。

「サーナイト！　ルンパッパにチャージビーム！　ドータクン、もう一度カビゴンにしっぺ返し！」

サーナイトが攻勢に出る。細長い電流を、ルンパッパに喰らわせる。しかし、特攻が一段階上がった程度では威力不足はあまり拭えないようで、ルンパッパは存外ピンピン

してる。
「地味に能力を上げる手合いは……早いうちに始末するのが吉ですわ。ルンパッパ、サーナイトにハイドロポンプ！」
　ルンパッパの放つ高圧水流はサーナイトを見事に捕える。その上雨乞いも手伝ってか、一撃で始末に成功した。
「ナイスだエリカ！　一気に畳み掛けるぞ！　カビゴン、地震だ！」
　流石に二発目の地震は、かの銅鐸も耐え切れなかったようで、鈍い金属音と共に倒れる。倒れた姿はただの釣鐘にもみえてしまいそうだ……。
「流石は伝説の夫婦だね！　一筋縄じゃいかなそーだ！　だけどそれが面白いっ！　行け、ヤドラン、ブーピッグ！」
「ルンパッパ、ヤドランにエナジーボールです！」
　ヤドランはモンスターボールから出るや否や、エナジーボールの洗礼を喰らった。
「あー、何か当たったな……」
　しかし、ヤドランはどこ吹く風だ。相当なダメージを喰らっているはずだが、流石はヤドランと言うべきか。
「ヤドラン！　ど忘れ！　ブーピッグ！　ルンパッパにシグナルビームだ」
　……

こうして、レッドは2体、エリカは2体失い、残ったポケモンは黄色ゲージの辛勝に終わる。

「……、参ったよ。流石は生ける伝説だ。噂に相違はないね」

「いえいえ、それほどでも……」

レッドは手を後ろにやって照れている。

「僕が君たちに負けようと、やる事は変わらない。トレーナーの頂点に立つ為、ひたすら精進し続けるのみだ」

イツキは俯き加減にそう言った。どこか悔しそうではある。

「流石は四天王だ……。さっきとは一味も二味も違うや……」

「まだまだ序の口だよ。所詮僕は一番目。次はキョウさんという忍びだよ。二人……というかレッド君の事今か今かと待ち構えているから、四方八方に気を付けた方が良いかもね」

イツキは、冗談半分な風で笑いながら言った。

「あはは……、そうですか」

レッドはそれに対して空笑いをする。セキチクジムでの記憶が脳裡をよぎったからだ。

「それにしても、イツキさんって如何にもエスパーな形(なり)をしていますよね……。ナツメ

さんはそれ程でもないのに……」

　エリカは俄かにそんな事を言う。

「いや何、僕は昔からエスパーに憧れてたから、格好までなりきりたくてさ……。でも彼女は、超能力そのものは好きらしいけど、エスパーの姿形はあんまり好きじゃないようだったしね」

「なるほど……。あの、もう少し聞かせて頂けますか？　私、ナツメさんに近しい人の話が少し気になるもので……」

　イツキはエリカの要請に応えて、ナツメの話をする。

「近しいって程じゃないよ。ただ同じ大学に籍を置いていて、一回生違う後輩ってだけの仲さ」

　と、前置きしつつイツキは続ける。

「ナツメ君。何度も言うけど本当にすごい子だったよ……、でもね、そのせいでいらぬ嫉妬とかも呼んじゃって……、それに加えてあの子美人でしょ？　だから僕のような男にはよく分からないんだけど、一部女子との確執はもうすごいのなんのって……、一回殺し合いになりかけたからねぇうん」

　イツキはうんうんと頷きながら当時を追想している。

「こ……殺し合いとは、穏やかではありませんわね……」

「どこぞの学生と一夜を共にしただの、やれ教授をぶん殴っただの……根も葉もないうわさを吹っかけられて、とうとうナツメ君がぶち切れてね……。噂を流した元凶の子の前で刃物振りかざしたらしいよ……。怖い怖い」

「それでどうなったんですか？」

いつの間に聞き入っていたレッドが、次を促す。

「幸い、相手に怪我は無かったようだ。で、ナツメ君は賢いからね……。刃物振りかざしたのも傷つける為ではなく、自分に刃を向ければこうなるぞという事を知らしめんがためにやった……と僕は本人から聞いた。ナツメ君の計算通り、それ以来誰もちょっかいかけなくなったよ」

と言って、イツキは一息つく。

「そうなんですか……、ナツメさんってそんな事もされたいたのですね。ナツメさん曰く、大学ではあまり話し相手がいなかったらしいですが……」

「そうそう。たまに僕が興味半分で話しかけていくぐらいしか、話すことはなかったらしいよ。まー、ナツメ君鬼才奇才勢揃いのヤマブキ大の中でも、白眉って言うべきか、ぶっ飛んでたからね……。釣り合う人が居なかったってのが実の所だろう……」

そんなのと恋仲になるぐらい親しくなったエリカは一体何者なんだよ!?　とレッドは心の中で突っ込んだ。

「そんな子だから、エリカさん。大事にしてあげてよ。世界で指折りの超能力者と釣り合えるのは、それに対応しきれる程の知識と知性を持つ君以外には誰もいないから……」

イツキは、エリカの目をしっかり見ながら言った。

エリカは何も言わず、静かに頷くのみである。

「超能力に対応しきれるほどの知識……？　それってどういう意味です？」

俺は、その事だけが頭に引っかかったので素直にイツキに尋ねてみる。

「あの子の超能力の何が恐ろしいって……、相手の知識や経験等を読み取って、その相手と話している間だけともいえどその情報を操れる事だよ……。少なくとも僕ら凡人の知識量……、いや教授ですら同等になれてしまう」

レッドは顔をすぼめて驚嘆する。つまり、辞書何冊分にも相当しそうな相手の知識や記憶をナツメの眼前に立っただけで全て丸わかりにされてしまうという事だ。

「ただ、ナツメ君、言ってたよ……、〝追いつけない〟ってな」

「え？　それってつまり……」

「人間の脳みそにも容量の限界がある。『私の記憶容量を唯一越えた相手』……、それがエリカさん。君だという事さ」

エリカ当人も、信じられないと言いたげな表情をしている。

「全く……、規格外とはまさにこの事だねぇ……、そんな化け物……いやもう神とも言うべき人がカントーに二人もいるとは。驚嘆の限りだよ。本当……」

その後も少し話をして、二人はイツキの部屋を後にした。

―キョウの部屋―

部屋に入ったはいいが、中には誰も居ない。

「あれ、どうなってんだこれ……」

「貴方、不用意に前に出られると……」

エリカが注意するや否や、大量の手裏剣が天から降り落ちてきた。

「うわわわわわわわ!!　なんだこれ!　なんの悪戯だよ!」

持ち前の反射神経で全てよけきる。すると、後ろから高く大きく笑う声がする。

「ファファファ!　流石は拙者が見込んだ相手だ、これしきでは傷一つつかぬか……」

レッドが振り向くと、そこには痩せた男が立っている。流石は忍者だ。誰にも気づかれぬうちに何処ぞから移動してきたようだ。

「キョウさん!　お久しぶりです」

「うむ。選挙以来……、戦うのは四年ぶりだな。繰り言で悪いが自己紹介をさせて頂く。拙者は四天王のキョウ!　今に生きる忍びよ。ところで娘に勝ったようだな」

キョウは俄かにアンズの話を始める。

「はい。中々にファザこ……じゃなくて親思いの娘さんをお持ちのようで」
「娘も大した子だが……所詮は童。まだまだ熟し切ってはおらぬ。今ぞ本物の忍びの戦い、変幻自在かつ神出鬼没な攻撃の前に静かに倒れるが良い……！　行け、スカタンク！　ドグロッグ！」
こうして、四天王二人目の戦いが、幕を開けた……。

―第四十七話　出る杭は打たれる、出過ぎた柱は放置　終―

第四十八話　鹿島立ち

―1月21日　午後3時30分　ポケモンリーグ　キョウの部屋―

キョウはスカタンクとドグロッグ。レッドはカメックス。エリカはキノガッサを繰り出す。

「スカタンク、カメックスにどくどく」

スカタンクは、菊門から猛毒を放出する。しかしカメックスは掠める程度で済み、何とか毒の洗礼を受けずに済んだ。

「カメックス、スカタンクにハイドロポンプ！」

「キノガッサ！　ドグロッグにきのこの胞子です！」

当然のごとく、ドグロッグに、胞子の芳香が向かう。そして、ドグロッグはぱたりと眠りこいた。

そして、カメックスの放った水流はスカタンクに直撃する。そして、水流は直撃したまま壁にまで、轟音と共に当たる。それと共に、黒い巨体は無残にも一撃で倒れた。

「……ファファファ！　ここまで来るだけの事はあるでござるな。そうだ、拙者はその強さを求めてきた……」

手持ちが倒れたというのに、キョウは高笑いしている。
「どうして……手持ちがやられたのに笑っていられるんですか」
キョウは一度天を仰ぎ、
「忍びなぞ、常に死と隣り合わせでござる。いちいち手持ちの生死など構ってはおれん、それに……」
「それに？」
レッドは次を促した。
「四年も会わぬうちに、四天王のポケモンをものの数分で倒す程にまで腕を上げる……、拙者も色々なトレーナーを見てきたでござる。その中で……最強には及ばぬが、間違いなく五本の指には入る実力ぞ」
「その口ぶりですと、レッドさんが最強ではないと仰せになりたいのですか？」
エリカは、突如キョウに尋ねた。
「拙者はお主等よりも何年も、何十年も長く生きた故な。レッドよりも強いトレーナーは居る事にいるでござる」
レッドはそれを聞いて、すぐに誰か言うように尋ねてみたが……、
「拙者に勝てたら教えて進ぜよう。さあ続きをするでござる！　行け、ベトベトン！」
……

こうして、レッドは2体失い、エリカは全滅。残ったカメックスはHP黄色ゲージと、際どい勝利を収める。

「うむ、やりおったな……。もてる力全てをお主達に使ったつもりだが……、それで勝てぬというのなら鍛錬をさらに重ねるのみよ」

キョウが締めようとしたところで、レッドは勝者の権利として尋ねてみた。

「あの……、それで俺よりも強いトレーナー……って?」

キョウはよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情で、レッドに返す。

「少なくとも二人居るでござる。拙者がまだ幼い……一介の見習いだった時分の話よ。一人は流れ者で忍術の修行をして、僅か10年で並みいる上忍を押しのけてチョウジ屈指の忍びとなった方。もう一人はそのご友人だ」

エリカはその情報を聞き、何かに引っ掛かったようでキョウに尋ねる。

「それってもしかして……、ヤナギさんの事ですか?」

「おお、その通りだ。ヤナギ殿がまだ忍術の修行する前の話……、確かカントーとジョウト両方を旅している最中とか言ってたな……。それでたまたまご友人が同じ町に来てたというから勝負をしていた訳だ」

二人はキョウの話に聞き入っている。

「その強さは半端ではなかった……。バトルが終わったときには周りの木々はほぼへし

折られていたし、地面などめくれ上がっておったでござる。子どもながらあれはすごいと思うたな……」

　話が見えてこないので、しびれを切らしたレッドはキョウに詰め寄る。

「そ……それがどうして、俺より強いという結果に終わるのです？」

　レッドの尋ねに、キョウは現実に戻ったかのような口ぶりで、

「本物の達人というのは、自分が達人という事さえも忘れて没頭するものでござる。今思えば、二人とも、本気ではあったがどこかしらに童心が見え隠れしていた。純粋に勝負を楽しむ、路傍で戦う短パン小僧の如き心が……な」

　しかし、レッドは未だに分からぬ風だ。改めてキョウに尋ねる。

「だから、それのどこが」

「貴方、それはつまり……」

　エリカは分かっているようなので、夫に分からそうとする。しかし、

「良い女史。その答えは自分で見つけさせるもの……。レッドよ、お主の力は絶大。力のみでいえば、我らの頂点に立つチャンピオンをも圧する事が出来るやもしれぬ。負けた拙者が言うのが烏滸がましいことは分かっておる。しかし、お主にはまだ心構えが成りきっておらぬ。頂に上らんとする強き者としての心構えが足りぬでござる」

　その後も少し話して、キョウの次へと向かう。

レッドは、キョウから言われた後、反芻して考えはしたものの結局何のことか分からずじまいであった……。

―シバの部屋―

部屋の中は妙に熱かった。当然である。なぜなら、傍らでマグマらしきものが沸騰し続けているからだ。

「な……、何ですかこれ……」

エリカは、熱にやられているのか、いつもより声調が弱い。

か弱い彼女も可愛いなぁ等と思っていると、シバが話しかけてくる。

「ここは精神の修練の為に周囲にマグマを置いている！」

シバは相変わらずの上半身裸だ。容貌魁偉と形容すべきその鍛え抜かれた肉体は、まさに豪傑と呼ぶべきだろう。

「シバさん！」

「うむ、タンバ以来だな。レッド……そしてエリカさん」

シバはエリカの事をさんづけで呼んでいる。少しだけキョウとは年齢差を感じた。

「あの時は汚いものを見せつけてしまい申し訳なかった……」

レッドはそれで、タンバの時に見てしまった（くそみそテクニック）な現場を思い出す。吐いてしまいそうになったが、直前でなんとか押し戻す。

「いえいえ、ま、まあそういう世界もあ、あ、ありますからね！」
　レッドはしどろもどろに、冷や汗をかきながら答える。
「何ですの？　その、汚いも」
「何でもないよ！」
　そういえばエリカは、あの現場を見てなかったんだ……。思い出したレッドは必死にエリカの発言を制する。
「さ……左様ですか」
　レッドの大いに焦りながらの制し方に何かを察したのか、エリカは引き下がった。
「あ、あの、四年ぶりですね。戦うの」
　レッドは焦りながら話題を切り替えようとした。
「そうだな……、思えばあの頃俺はまだノン」
　またそっち系の話に戻そうとしたので、レッドは更に話を変えようと試みる。
「あ、あのっ、そろそろ勝負しません!?」
「そうだな。だがその前に自己紹介だ」
　知り合いの自己紹介なんかいらねえよ！　と突っ込もうと思ったが、話が進まなくなりそうなので、シバに任せることにした。
「俺は三人目の四天王。シバ！　俺は、シジマさんやトウキ等と共に互いを研鑽し合い、

俺、そして俺の手持ち達共に可能性を信じ、限界まで鍛え続けている」

その傍らであんなこともしてるのか……。てことは何、シジマさんはともかく、トウキさんはまさか……（ニャー）!?　などとレッドは思っている。

「そうして、鍛え抜かれたいわば名刀の如き強さを持った俺たちに勝てると思うか？」

シバの問いかけに対し、エリカが答える。

「貴方たちが名刀の強さを持つというのなら、私たちはアイギスの如き盾で対抗致しますわ！　そして」

シバがポカーンとしていたので、レッドがエリカに呆れ気味の視線を送りつつ、後ろ手で背中を叩いて、引いてるぞ。と合図する。まあレッド当人も分かっていないのだが……。

「し……失礼いたしました。では、白楯（しらたて）の如き……」

「そういう問題じゃねえんだよ。もう黙ってくれ……頼むから……」

切実な目でエリカに言い掛ける。承知したのか、エリカはそれ以上何かをいう事はなかった。

「……、ハハハっ！　相変わらずだな。エリカさん……。それにしても二人のその目に怯えは微塵も見当たらないな。それでこそ俺とやり合うに相応しい！　では、俺たちの力、とくと味わうがよい！　ウー！　ハーッ！」

シバはカポエラーとハリテヤマを。レッドはリザードン、エリカはワタッコを繰り出す。
「カポエラー！　ワタッコにインファイト！　ハリテヤマ！　ビルドアップ！」
「ワタッコ！　日本晴れです！」
フィールドが日照り状態になる。
「ここは先手必勝だ！　リザードン、ハリテヤマにエアスラッシュ！」
リザードンは、口内で生成した空気の刃をハリテヤマに喰らわす。タイプ一致の上に、効果は抜群だ！　無論、一撃で倒れた。
「まだまだぁ！　こんなものじゃ、俺たちのハイパーパワーは挫けぬよ！　行け、サワムラー！」
サワムラーは出てくると、自慢の長い脚をシュッシュと伸縮させる。威嚇しているようだ。
「同じこと……、リザードン！　サワムラーにもう一回エアスラッシュ！」
しかし、リザードンの攻撃は惜しくもサワムラーの右足を通り過ぎるに終わってしまう。
「好機！　サワムラー！　ワタッコにブレイズキック！」
サワムラーの炎を纏った脚は、ワタッコに命中。そして長い脚であるが故か、思いっ

きり壁まで叩きつけられた。
　これが普通ならば、所詮は威力不足の不一致で片づけられるが、運悪くも日照り状態。しかも急所にあたってしまう。最悪のコンボが重なり、ワタッコは先ほどのインファイトも重なり、倒れた。
「……、流石は四天王。あらゆるタイプに対抗できるよう準備を怠っておりませんのね……」
　エリカは少しだけ悔しそうに言う。
「この位で感心しては困るな！　まだ戦いは始まったばかりだ！　カポエラー、リザードンにインファイト」
……
　こうして、レッドは二匹失い、エリカも二匹失う。残ったポケモンの体力は赤ゲージと土壇場で何とか勝利を収める。
「どうしたことだ……！　俺の……俺たちの軍団が敗れるとは……。負けた俺に何も語る資格は無い！　先に進み、四天王最強の人物と戦うと良い！」
　そういうと、シバは後ろを向き、仁王立ちをする。その様はさしずめ呂布と言ったところか。先に進めと言われたので、いよいよ四天王最後の戦いに臨む。
―カリンの部屋―

先ほどの暑苦しかったシバの部屋とは一風変わって、今度は暗色系のインテリアをふんだんに使った落ち着いた……しかしどこか背筋がうすら寒くなる雰囲気の部屋である。

「ようこそ、四天王最後のお部屋へ！」

その大人びた、なんとも扇情的な服装の女性は、歓迎して二人を迎え入れる。

そして、そういう女性に人一倍敏感なお年頃のレッドは、その姿に目を奪われる。

「あ、ど、どうも！　こんばんは」

エリカは普段から清楚な服装を心掛けているため、スカートは常にロングスカート。上は二の腕の出ない袖つき、ノースリーブは以ての外……等などと露出度の低い形をしている。

それはそれでレッドは嬉しがったりするのだが……。

その為、このようなセクシーな服装には滅法弱いのがこの男だ。鼻の下が嫌でも伸びる。

「貴方ー、まだお昼ですよ～」

と、言いながらエリカは、気持ちが浮き始めているレッドを諫める。そういう意味も含んでいるのか、履いている雪駄で軽くレッドの足を踏みつける。

「いてっ……、こ、こんにちはー」

「フフ、いいご夫婦ね。こうして見ていると本当、ただの年頃のカップルにしか見えないわよ……」

吐息をしながらカリンは言う。恐らく、他意はなさげだ。

「いやいや、それほどでも」

レッドはまたも照れながら、手を後頭部に回す。

エリカは、愛想笑いをしているがその裏の意がそれとなく読み取れたので、あまり長いことやるのは止めにした。

「さてと、自己紹介しようかしら。あたくしは最後の四天王のカリン！　貴方たちが伝説の夫婦であるレッドにエリカね……。噂は散々聞いているけど、なかなか楽しませてくれそうな目をしてるじゃない……！　あたくしが愛してやまないのは悪タイプ！　ワイルドでタフな……、そんな任侠とも言うべきタイプ。素敵でしょ？」

素敵でしょ？　等と言われても悪タイプといったら、文字通り悪いイメージが強いので返答に窮していると、エリカが答える。

「素敵ですねー、しかし、任侠というのは少ないながらも良い部分があるが故の言葉です。本物の悪というのは任侠という言葉すら一笑に付すべき大悪人ですわ」

エリカはやはり、悪という存在を嫌っている。こんな事をエリカが言うと、カリンは高笑いをする。

「アハハハっ！　面白いわね。これは楽しい戦いになりそうだわ……。では、始めましょ！」

カリンはマニューラとドンカラス。レッドはカメックスを、エリカはキノガッサを繰り出す。

「マニューラ！　キノガッサに冷凍パンチよ」

マニューラはその尋常ならざる敏捷（びんしょう）さを活かした身のこなしで、鮮やかにキノガッサに冷凍パンチを喰らわす。

先手必勝の代名詞と言えるマニューラは、その言葉通りの効果を発揮する為か否か、高い攻撃力をも具有している。そして、まるで当然のように、キノガッサは一撃で倒れた。

「……、流石は最後の四天王。格が違いますわ」

「光栄ね。でも。これぐらいで怖気ついてたら詰まらないわ、もっと楽しませなさいよ！　ドンカラス！　カメックスにつじぎり！」

ドンカラスは、カメックスのもとに突撃する。そして、刀扇と化した翼で次々と切りつける。甲羅との摩擦音がフィールドに響く。

斬り終わると、ドンカラスは思い切りカメックスを突き放し、定位置に戻る。そして、カメックスはやはり壁に叩きつけられる。

効果が普通といえども、あのドンカラス。その上タイプ一致だ。威力不足とはいえHPの三分の一が削れた。

「カメックス！　ドンカラスに吹雪！」

吹雪はギリギリのところで、ドンカラスを逸らしてしまった。

「チッ……、やっこさん、こりゃかなりの猛者だ……！」

レッドは少しだけ冷や汗をかいている。

「あら、まさか戦意喪失でもした？」

カリンは微かに笑いながら尋ねる。

「まさか、むしろ燃え盛りますよ。攻め落とす城は……、堅固であればあるほど落とし甲斐があるってもんです！」

「いい度胸ね！　本当、いい坊やね！　マニューラ、カメックスにけたぐり！」

ここで、エリカが替えのポケモンを繰り出す。

「おいでなさい、ユキノオー！」

天候があられになる。

「ナイスだエリカ！　カメックス！　もう一回吹雪！」

……

こうして、レッドは2体失い、エリカは全滅。その上、残ったリザードンは赤ゲージ。

と、四天王最終戦らしい辛勝を収めた。
「強いポケモン、弱いポケモン。そんなの人の勝手。真に強いトレーナーであるなら、好きなポケモンで勝ち上がれるように頑張るべき」
　カリンの名言は、若干変わったはいたが改めて聞くと深いものがある。レッドにもラジオで耳に入っていた故に、それとなく感じ入っている。
「いいわね貴方達。大事なことが分かっているわ……。さて、チャンピオンの下へ行きなさい。貴方たちの事、首を長くして待ってるわよ。さっき様子見に行ったら、あの赤い髪セットしてて、あとマント着替えてたわね」
　うわあ、エリカ来るから格好つけようとしてんじゃん……とレッドは内心思ったが突っ込むのは止めた。
「相当に気合入ってますね」
　しかし何にも返さないのもあれなので、一応返すだけ返しておく。
「そーね。どうもワタルさん、貴方達が最後のバッジ取ったという知らせ入ってからずっとそわそわしてて……」
　もう確定だ。どうみても確定だ！　等とレッドは思う。
　その後、もう少し経ってワタルの下へと向かった。
　―ワタルの部屋―

流石にチャンピオンの部屋ともなると豪壮だ。
龍を象った内装に、数々の歯車が音を立てながら回る。
長い直進の道を通ると、いよいよチャンピオンであるワタルがおでましになる。
心なしかいつもより凛々しく見える。赤い髪はワックスを付けたのか光り輝いており、マントも完全におニューだ。埃ひとつついていない。
「よく戻ってきたね……、二人とも」
ワタルの方から話しかけてきた。
「何だか、すっごい遠回りした感じが……」
レッドは皮肉交じりのことを言う。
「まーまー、漸くイッシュへの渡航許可が取れたよ」
「本当ですか!?」
レッドより、むしろエリカのが嬉しそうだ。新しい世界に行くことが余程うれしいのだろう。箱入り娘だったらしいだけに尚更か……。
「僕、嘘はつかないさ。ただ、その前に勝負だ！　君たちがこの一か月、カントーで何を得たか、何を見てきたか！　それをこのカントーのチャンピオン……そしてフスベ最強のドラゴン使いとして。刮目して見させてもらおう」
こうして、内国最後の決戦の幕が切って落とされた。

ワタルはボーマンダとギャラドス、レッドはピカチュウ、エリカはルンパッパを繰り出す。
「ルンパッパ、雨乞いです！」
フィールドに雨が降り注ぐ。
「ピカチュウ、ギャラドスに雷」
4倍効果に加えてタイプ一致の雷が下る。無論、ギャラドスは一撃で倒れる。
「力押しだ！　ボーマンダ、ピカチュウにドラゴンクローだ！」
ボーマンダは、猛烈な勢いでピカチュウに襲いかかる。そして鋭利な爪で弾き飛ばされたピカチュウは宙を舞い、遥か遠くに吹っ飛ばされた。流石ボーマンダだ。
ピカチュウは一撃で倒れた。
「……、行け、カメックス！　ボーマンダに冷凍ビーム」
カメックスの放った氷の筋はボーマンダをしっかり捉える。不一致とはいえ、四倍のダメージ。致命傷とはならなかったが、三分の二程削れた。
「行け、チルタリス！　カメックスに龍の息吹だ！」
……
エリカは全滅、レッドはリザードン、ワタルもリザードンを残している。
「ここまで僕を追い詰めるとは、流石、4地方を巡ってきただけの事はあるね」

「褒めるのはまだ早いですよ、まだ決着はついちゃいないです」

レッドはにやりと微笑みながら言う。

「喋りもさまになってきたねぇ……。これからが本当の勝負だ！　どっちのリザードンが強いか、ここで証明しよう。リザードン！　エアスラッシュ！」

「リザードン！　龍の波動！」

対ワタル戦の為にエアスラッシュの代わりに先ほど覚えさせた龍の波動を、リザードンに用いる。

互いの攻撃は、痛烈な一撃とはなったが、流石に致命傷には成り得なかった。

「ここで終わりにしよう……、リザードン！　破壊光線！」

ワタルは、一か八かの賭けに出てきた。もしこの攻撃でリザードンが倒れない。そんなことが起これば、反動の影響で、自らの敗北は決定的になるからだろう。

「賭けに出ましたね……。ではこっちも賭けに出ましょうか……。リザードン、オーバーヒート！」

現在の天候は、少し前の散り際にやられたエリカのダーテングによる日本晴れ状態。それに加えてタイプ一致、サンパワーの特性による1．5倍。

レッドはこの莫大な威力が、いま一つの相性を覆す事を信じたのだ。

そして、互いのリザードンは指示が下るや否やすぐに技に即した行動をとる。

白い暁光の如き光線と、真紅の燃え盛る太い炎の束。互いの攻撃は交差し、それぞれのポケモンに直撃する。

煙があたりを包み、しばらくの間互いのポケモンが見えなくなる。一分ほど経過し、煙が晴れると満身創痍でありながら両体とも立っていた。

「ど……、どういう事だ……。あんな一撃を喰らってもまだ立ち続けている……？」

まず口を開いたのはワタルである。

「どうやら、互いのリザードンはまだ戦意が残っているようですね……」

「そのようだね……。ポケモンの意に出来るだけ応えることが僕らトレーナーの責務。でも、これ以上無理にやれば死にかねない。互いにこれを最後としよう……。異存はないね？」

「え、しかし反動は？」

破壊光線は、当然のごとく1ターンの反動がつく。

「それも含めての最後さ。もし、君のリザードンの攻撃を喰らっても倒れなければ、僕が止めを刺すよ」

最後の一言はどこか冷徹に聞こえた。

「異存は？」

ワタルは明瞭な声でレッドに問いかけをする。

「無い！」

レッドはそう強く言い放つ。

「リザードン！　エアスラッシュだ」

リザードンは、レッドの指示が下ると最後の力を振り絞る。そして、細長い槍の如き空気の刃を、反動で足場の定まらないワタルのリザードンに放つ。

空気の刃は投槍兵の放った槍の如く確実にリザードンを射抜いた。

射抜かれたリザードンは、一度仁王立ちをしたかと思うと、その巨体を地につける。リザードンは倒れた。

そして、レッドのリザードンもサンパワーの影響でワタルのリザードンが倒れてから数十秒後に自らの体を地べたに預けた。

「やれやれ……。僕もまだまだだね。おめでとう、レッド君、エリカ君。君たちが新たなるカントーのリーグチャンピオンだ！」

ワタルは、晴れやかな表情で新チャンピオン誕生を祝う。尤もリーグに残る気はさらさら当人たちにはないので、結局ワタルのままなのだが……。

「有難うございます！」

「さて、これから色々と話さなきゃいけないことがあるんだけど……。まずは殿堂入りの儀を済ませよう。話はそれからだ」

という訳で二人は殿堂入りの儀式を済ませて、ワタルの案内に従ってリーグ内の広場に戻った。

―同日　午後7時　ポケモンリーグ　広場―

三人は広場に戻り、適当なソファに座ってイッシュ地方に行く際の話することになった。

「という訳で、漸く昨日渡航許可を貰えたから、許可証を渡すよ」

と言ってワタルは二枚のパスポートに似た許可証を手渡す。ＩＤカード形式になっており、写真が貼付されている。

「有難うございます。それで、イッシュにはどのようにして行くのでしょう?」

エリカがワタルに尋ねる。

「ヒワマキシティにまで行ってもらう」

「ヒワマキ?!　ずいぶん遠くないですか?」

レッドはまずそのことに驚いた。

「仕方ないんだよ。人を乗っける旅客機が用意できるのも、滑走路があるのも内国にはヒワマキ以外にはないからね……。ああ、ちゃんとナギ君には話つけてあるから心配しないで」

「なるほど……、何か心に留めておいた方がいい事はありますか?」

エリカは更に尋ねる。
「そうだねぇ……、プラズマ団という組織があっちの地方にある。二年前にある少年が一回潰したらしいんだけど、今になってまた復活の兆しが見え始めているらしい。カツラさんからの報告だと、ロケット団もイッシュで復活したとかしないとか……。何もなければいいけどね」
ワタルは神妙な表情で話す。
「そうですか……、気を付けておきます」
「君たちほどの力があれば大丈夫だよ。何も案ずることはない。さてと、最後の地方頑張るのも結構だけど、楽しんできなよ！　健闘を祈っている」
そういってワタルはマントを翻しながら、何処ぞへと立ち去って行くのであった。
「そうか……、本当に最後なんだよな……」
レッドは今までの旅を思い起こしながらそんなことを言う。
「とはいえ、感傷に浸ってばかりはいられませんわ。最後であるからこそ、有終の美を飾るべく気張らなければ」
時々、エリカは自分より全然別のところで闘っているという気がする。とレッドは思った。
「そうだな。さてと、明日は移動だ……。今冬だから、ホウエンも丁度いい気温なんだろ

うな」

その後も少し談笑して、二人はリーグで宿泊。そして5日かけてヒワマキへと空を飛ぶで移動した。

―1月26日　午後2時　ヒワマキシティー

5日の移動を経て、二人はヒワマキシティに到着した。

「相変わらず空気の美味しいところです」

エリカは着いてすぐに深呼吸をし、そう言った。

「思った通り、丁度いい具合に涼しいな……。にしてもエリカの言うとおり、本当空気が美味しいね。マサラを思い出すよ」

「田舎というのは時に良いと思えるものです。さてと、ナギさんがポケモンセンターの前に居ると聞いたのですが……」

あの後ワタルから連絡が入り、ナギがヒワマキのポケモンセンターの前で待っているという事だったが……。

「あ、来た来た！　お久しぶりね。二人とも」

ナギが二人の横からコツコツと歩きながらやって来た。

相変わらずのスラッとした体。そして、エリカとは違って少し熟れている感じにレッドは目を奪われそうになったが、話だけはしっかりしようと試みる。

「どうもー、半年ぶりですね」
「早いものね。半年前私に勝って、今や内国から出て更なる新天地に行こうとしてる訳か……」
「いやいやそんな大層なものじゃ……」
レッドは少し照れ気味に対応する。
「今思うとあの時……船で貴方たちに対して酷いことを言った自分が小さく見えるわ……。重ね重ね、本当に申し訳ないことをしたわ。ごめんなさい」
ナギは未だに船での失言を悔いているのか、浅く頭を下げる。
「いえいえ、あれはあれで私に木に隠れているだけだという事に気付かせてくれたのです」
エリカはそうフォローした。
「ならば良いけど……。さて、滑走路のある航空大に行きましょうか」
こうして、二人は航空大へと向かった。
―同日　午後3時30分　ヒワマキ航空大学　待合室―
ヒワマキ航空大学は、全国で二つある航空大学の一つ。（もう一つは行き先のフキヨセ航空大学）
２０００m超えの滑走路が数本用意されており、学生は数百人を擁するホウエン屈指

の大学である。
　待合室の窓からは、第一滑走路を臨める。二人はあの滑走路を使ってイッシュへと旅立つ。
　航空機の整備が終わり、ナギが再び、待合室の椅子で待っていた二人の前に現れた。
「パイロットを紹介するわ。私と、フキヨセシティジムリーダーのフウロよ」
　ナギに紹介されると、フウロと紹介された人物は、こつこつと待合室に現れた。
「初めまして！　あたしが今回、パイロットを務めさせて頂くフウロです！　宜しくお願いします！」
　フウロは、爽やかに挨拶する。
　レッドはその豊満な肉体に加え、露出度の高い衣装を相まって釘づけになった。
「そんな敬語ばかり使わなくていいのよ……。一人は年下。もう一人は同業者なんだから……」
　ナギは、フウロの緊張をほぐそうとしたのか、そんなことを言う。
「いえ、最早全国を時めくお二人の前で粗相をしでかしては……」
　よく見ると彼女は冷や汗をかいている。余程に緊張しているのだろう。そんなけなげな姿にレッドは更に胸を締め付ける。
「ほんと、そういう生真面目なところ変わらないわね……、時には肩の力抜くのも大事よ

?」

「こ、これは、性分なもので……」

フウロは終始声が異様に高く、早口だ。ここからも緊張している事が見て取れる。

「さてと、これからいよいよ向かうんだけど……。トイレ大丈夫？　数日はかかる長旅になるわよ」

ナギが尋ねる。

「はい、もう行って参りました」

エリカはそう快活に答える。

「レッドさんは？」

フウロが尋ねる。

「……」

レッドは、フウロに合って以来呆然としている。

こんな健康的な色っぽさを持った子がいたのか……、なんか性格も良いし。と、完全にレッドはフウロに気を奪われている。

「レッドさん？」

フウロは、返答のないレッドに対し、困ったような表情をして更に尋ねる。

「！……は、はい大丈夫です」

レッドは漸く現実に戻って、そう返答した。
エリカはレッドの不審に気付いたのか、どこか怪訝な表情をしている。
「そ、じゃあ向かいますか！」
という訳で四人は飛行機に向かうのだ。
―道中―
四人は徒歩で飛行機まで向かう。
「思ったんですけど、この飛行機でどこに向かうんですか？」
レッドは前を歩いていたフウロに尋ねた。
「あたしとナギさんが交替交替で操縦しながら、フキヨセシティに向かうよ！」
フウロはまるでお姉さんのような口調で、レッドに話す。
「何で俺には敬語じゃな」
「あわ……、ごめんね。どうも、年下の子と敬語で話すのは慣れてなくて……」
フウロはレッドに謝る。
「いやいや大丈夫です」
むしろそっちのほうが妄想の余地が広がって……等とやはりレッドは思春期だ。
「気を遣ってもらったみたいで悪いね……」
フウロはどこかしおらしい口調になっている。

「そういえば……フキヨセシティって、フウロさんが……ジムリーダーを務めて……いる街でしだっけ？」

レッドはしどろもどろながらもフウロに尋ねる。

「そうだよー、着いたら是非真っ先に挑戦してよ！　貴方たちの力、知りたいし」

フウロは流れるような口調で話す。

そんな調子で話していると、二人より先行して歩いていたナギがレッドに喚起する。

「はいはいそこでイチャついているお二人さん！　特にレッドさん、貴方はエリカさん寂しがらしちゃいけないでしょ！」

「いいんですよ別に……」

エリカは確かに寂しそうな表情をしている。どこか儚げで美しい……。

「す、すみません……、ごめんなエリカ……」

そんなこんなで、二人は飛行機に搭乗した。

―機内―

「これが貴方達の乗る飛行機よ！」

ナギが自慢げに見せたその飛行機は、小さいながらもそれなりに立派な内装であった。赤絨毯の床に、ふかふかのリクライニングシートだ。

「これは、中々……」

レッドは感心しながら言う。その後すぐに最前列のエリカの隣に座った。
「来賓を迎える為にも拵えているものだからね」
「整備はあたしがしました！」
フウロは、自らの胸を叩いて自信に満ち溢れた表情で言った。
「この前みたいに、機関室のネジが緩んでて……みたいな事ないわよね？」
ナギは笑いながら言う。
「無いですよ！コックピットから尾翼まで、津々浦々しっかりと点検しました！」
フウロは少し意地っ張りに言う。
「そ、一応信用はしておくわ」
ナギは相変わらずの冷たさだ。
「どうして全幅の信頼を置いてくれないんですか！」
「私たちは、乗客の命を預かっているのよ？　一度の失敗も許されるものではないんだから……、これから２０００回失敗しないというなら信頼置いてあげてもいいわよ」
ナギにはＳの素質がありそうだ。そんな事をレッドは思った。
「ううう……」
フウロはしょんぼりとしてしまった。
「あ、そうそう！　わかってると思いますけど、シートベルトをちゃんとつけてください

ね！」

フウロは、気を紛らわす為か否か乗客に注意を喚起する。

「あのー、付け方が……」

この世界では、船や鉄道を使うことはあっても、飛行機や自動車などの乗り物にはまず乗ることがない。その為シートベルトの使い方を知らない人が多い。

「それはですね」

フウロはすぐに、レッドの座席に赴いてベルトの付け方を手取り足取り教えてあげた。

一方のエリカはどこかうらやましそうな視線をフウロに注いでいる。

「準備はいいわね！　それじゃあすぐに出発するわよ、フウロ！」

「はいっ！」

こうして、1月26日　午後4時22分　小型の機体は内国の地を飛び去った……。

―第四十八話　鹿島立ち　終―

イッシュ編（２０１４．１−２０１４．７）
第四十九話　予兆

―１月２６日　午後４時５０分　機内―

離陸がひと段落し、浮揚感がなくなり地上にいるときと同じような平坦な感覚に戻る。

副機長のフウロが顔だけ後ろに向け、声をかける。

「離陸は一応完了したので、ベルトとかは外しても結構ですよー」

「あの……、厠に」

エリカがトイレの場所を尋ねる。

「トイレなら、奥の方にあるわ」

と、ナギが返す。

礼を言ってエリカは後ろに駆けていく。案外我慢していたのだろうか。それともまさか女の子の日だったり……？　等とレッドは考えている。

窓を覗き込むと目下にはホウエン地方が広がる。えんとつ山の噴煙、深々とした緑色の陸地と大海原のコントラストは中々に絶景である。それに加え、夕日が海面に映えて

それが更に見る者の印象を深くする。
レッドがそんな風景にみとれていると、ナギが話しかけてきた。
「綺麗な風景でしょ」
「そうですね。あんまり空から地上をじっくり見下ろす事ってないもので……」
リザードンと空を飛ぶ時は、落ちないかどうかが常に気がかり。その上翼が邪魔なので地表を目にする事はあまりないのだ。
「あたしたちパイロットと、客だけの特権のようなものですよね……。直に大地を見下ろす事なんて」
フウロは少し切なげに言う。
「そーね。それに飛行機に乗る人なんて研究者とかお偉いさんの人とか除いたら、滅多に居ないし」
ナギは淡々とした口調で言った。
「なんだか勿体ないです。こんなに美しい景色を多くの人へ直に届けられないなんて……」
先ほどのフウロの口調が切なげだったのはそういう理由なのかと、レッドは腑に落とした。
「仕方ないわよ。大体の人たちは地方内で行動するから、飛行機使う機会そのものが無

いんだから……。よしんばビジネスマンとか観光客の人とかが地方跨いだとしても、せいぜい内国の範囲内だしね……。鉄道や船の出番こそあれ、私たちの出番はないわよ」

ナギは諦めの口調で話す。

「フ、フウロさんは、空が好きでこの職についたんですか？」

「そーそー。あたしの両親もパイロットだったし、故郷のフキヨセは自然が豊かで、空も空気も最高なんだ！　だから、そんな空を翔る仕事……、パイロットに就いたわけ！」

フウロは本当に楽しそうに話している。まるで無邪気に夢を語る子どものようだ。

「ほんと、そのまま鳥ポケモンにでもなりそうな勢いね……あんた」

「えへへー」

ナギの冗談めいた発言に、フウロは茶目っ気たっぷりに笑顔で返す。レッドはますますそんな愛嬌のあるフウロに思いを募らせる。

そんな風に話していると、ナギは話題を転換する。エリカとこれからどう過ごすつもりかを尋ねてきたのだ。

「そりゃ当然、イッシュも制覇するに決まってるじゃないですか！」

レッドは自信満々に返す。しかし当人の予測に反し、ナギの反応は面接官の如く冷淡だ。

「そう、それは結構なことね。でもね、私が聞きたいのはそういう事じゃないの」

レッドは鼻っ柱を折られた気分になりながら、じゃあどういう事を聞きたいのかとナギに返す。
「全部終わった後の話よ。全国周ったらどうするのか気になってね」
「何も考えてないです……。とりあえず目先の課題をどうするかで頭一杯なもので……」
とレッドは正直に話した。
「そ……、あと一地方で全て終わるんだし、そろそろ真剣に考え始めたほうがいいと思うわ。外野の私が言うべきことでもないかもしれないけど……」
ナギは当然ではあるがあくまで一歩引く姿勢のようだ。レッドはこの発言からそう察する。
「ただ、エリカの方はタマムシで暮らすとかなんとか言ってますがね」
「タマムシね……。あそこは首都に隣接してるだけあってかなりの大都会と聞くけど、実際どうなの？」
ナギはタマムシという街を気にしているようだ。それに応えるべくレッドは、
「俺はあくまで数回立ち寄ったに過ぎないので、あくまでその限りの印象ですが……。ナギさんの風聞通り、便利だけど過密な、大都市の典型な所です」
と答える。

ナギはふうんと流す。そして、フウロがこの話に関心を持ったのか、
「ヒウンみたいな街ですね」
と返す。
「あそこにはフキヨセから観光でフウロと一度だけ行ってみたけど、カイナとかカナズミとは比べ物にならないぐらい発展してるわよね……」
ナギは回想してるような口調で話す。
「そうですねー。雲をも突き抜けるビルが一杯建ってて、ヒウンという名称の意味を心で理解できますよ」
フウロがそう言い終わったかと思いきや、何かを思い出したのか更に続ける。
「そういえばナギさん、アーティさんのアトリエ行った後、理解出来ないとか言って文句付けてるとこたまたま本人に聞かれて、すっごい絞られてましたよね」
「絞られてたというか、何とも気が抜けた口調で力説されたわね……。あれだけ言われても私の心中は何も変わらないけどね」
ナギはから笑いをしている。思い出したくない事なのだろうか、少し肩が震えている。
「アーティ？」
「ごめんごめん、アーティさんは、あたし達……、つまりイッシュのジムリーダーの一人

だよ。虫と絵に命を懸けてる人で、こっちの地方じゃ結構名の知れた芸術家さんでもあるんだよ。君も近いうちに戦うことになるよー」

レッドは真剣に聞いている。何しろ自分と戦う相手だ。一瞬だけツクシと話が合いそうだなと思ったが、多分気のせいだろうとレッドは流した。

「あと、ナギさん、ヒウンアイス買いに行ったら自分の所で売り切れて泣きそうな顔してましたよね」

なるほど、ナギは意外と甘党なのかとレッドは思った。

「う、うるさいわね……。フウロも買えなかったじゃない」

珍しくナギの冷徹な態度が崩れたように見える。

「あたし、何回か食べているので別にどうとも無かったですよー」

フウロは恐らく他意のない調子で言ってるのであろう。表情に大きな変化がない。

「あらそう、私も別に甘いもの好きな訳じゃないし……」

一方のナギは明らかに動揺している。よく顔を見てみると冷や汗をかいている始末だ。

「去年の2月14日が丁度フライトの日程とダブってて、あたしだけに運航押し付けようとしたの誰でしたっけ？　大学の講義があるとか何とかで」

「し、仕方ないじゃない。別に学生たちからチョコ貰えるから休んだとかそういう訳

じゃ」
「別に誰もチョコ云々の話してないんですけど……」
　レッドが横やりを入れて指摘する。
「……。余計な事を」
　ナギは間を空けて小声で言った。どうやら計算外の事が起こると墓穴を掘りまくるタイプのようだ。
「ナギさん……、それってもう自分の敗北を宣言しているようなものですよ」
　レッドは更に追い打ちをかける。
「あはは……」
　フウロは力なく笑っている。
「はぁ……、もう。確かにチョコは好きよ。でもアイスは、アイスは別だからっ！」
　ナギは顔を赤くしながら抗弁する。ナギがこうなる事は珍しい。しかし珍しいだけに、ナギの言動がレッドの心を少しだけ締め付ける。
「はいはい分かりました、ナギ先輩！　今年も同じような事しなければ許してあげます！」
　完全にフウロは勝ち誇った笑みだ。普段、後輩という立場故に言い負かされていそうなだけに、爽快な気分なのだろう。呼称まで変えている。

当のナギは、片手だけ頭に挙げて飛行帽越しに頭を掻きながら、
「このまま墜落しちゃいたい気分ね……」
と言った。余程に恥ずかしかったのだろう。顔から火が出るとは斯くの事だ。
「ま、それは冗談として……。フ、フウロさ、あんた的にはヒウンみたいな大都会と、出身地のフキヨセのような自然が多い所どっちが好きなの？」
まだ少し動揺しているのか、ナギの声は普段の針のような鋭さが無い。
「やっぱりフキヨセですよ！　ヒウンも決して嫌いではないですけど、やっぱり鳥ポケモンが気持ちよさそうに自由に羽ばたける！　こういう場所があたしは大好きです」
フウロは先ほどまでのサディストモードが消え去っている。代わりに普段の可愛げのある調子に戻り、よく通る声で嬉しそうに語った。
「私も同感ねー。フキヨセとヒワマキってそういう点だと結構似た者同士なのかもね」
ナギも同調している。レッドは、フウロのさっきの発言で更に彼女に惚れ込んでしまっている。完全に上の空だ。
「……、ねえレッドさん」
何でしょうかと、レッドは返す。
「この際だから、単刀直入に聞くわ。エリカさんと死ぬまで添い遂げるつもり、ある？」
「……、も、勿論です！」

レッド当人は即答したつもりだった。しかし、端から見ると明らかに数秒ほど間が空いている。
「そう。だったらいいけど……」
ナギは弱めの口調で答える。その答えは何かを含んでいるようにも見えた。
そのような様子で過ごしていると、エリカが静かに戻ってくる。
「よう、長かったな」
「ふう……、何か話されていたようですが？」
エリカの尋ねに対し、ナギは
「ただの他愛もない世間話よ」
と、簡潔に答える。
こうして、一機の飛行機は紺碧の海原を腹に見せつつ空を翔るのだ。
―1月27日　午前10時　ヒオウギシティ上空―
そんなこんなで半日以上を機内で過ごしていると、フウロから合図がかかる。
「お二方ー。もうすぐフキヨセですよ！　準備を進めてください」
気が付くといつの間にか目下には陸が広がっている。内国とは一風変わった建物が立ち並ぶ……、そうイッシュ地方を今航空しているのだ。
フウロの呼びかけに二人が応じると、彼女は更に続ける。

「あと、フキヨセでアララギ博士がお二人を待っているそうです。一体何用でしょうね？」

「きっと、新地方に到着したときの儀式のようなものをやるつもりですわね」

と、エリカは推測する。

「ぎ、儀式ですか!?」

フウロは儀式という単語に過剰に反応している。

「知らないの？　バッジを16個以上集めたトレーナーには特典として御三家のいずれかを各地方の博士から、その地方に到着した際貰えるのよ。恐らくアララギ博士もそういう事で待ってるんでしょ」

と、ナギはフウロに解説する。フウロはホッと胸を撫で下ろしながら

「な、なーんだ……、エリカさんったら驚かさないで下さいよ」

エリカはごめんあそばせーと笑いながら応対する。エリカは時々意地悪になる傾向がある。

そんなやりとりにまたもレッドは恋焦がれるのだ……。

―フキヨセシティ

イッシュ地方空の玄関口。（海の玄関口はヒウンシティ）

イッシュ地方でも最大規模の滑走路があり、ヤマジタウン等の山間部に荷物を届けた

り、内国からのＶＩＰ（要人。間違ってもＶＩＰＰＥＲではない）を連れてきたりと様々な事に使われる。便利な位置にあるので何回も開発の話が持ち上がるがフウロは調和を掲げ、悉く阻止している。

―同日　正午　フキヨセカーゴサービス　フロントー

飛行機から降り、四人はフロント前まで移動する。

フロントを背にするレッドとエリカの前に、パイロット二人が立つ。

フロントに到着すると、まずナギが口を開いた。

「これで私の仕事は済んだわ。フウロ、整備が終わり次第あの飛行機使って帰るけど別に問題ないわよね？」

ナギが尋ねると、フウロはポケットよりメモ帳を取り出す。そしてペラペラめくって、少しページを見ると、

「はい、特に使用予定はありません。大丈夫ですよ」

二人の会話は機内の和やかな雰囲気とは異なり、真剣である。当然だが仕事の時はきちんと切り替えをしている。

「そう、それじゃ帰るわ。二人とも、期待してるわよ、頑張ってね！」

ナギは腕を組んでにこやかに微笑む。ここまで爽やかな表情をナギは滅多に見せない。

「は、はい！」

レッドは少しだけ見とれて返事をする。エリカも同じく丁寧に返事をすると、ナギはエリカの横を通ろうとした。

その通りかけざまにナギはエリカの肩を叩き、

「旦那さんの事、気を付けておきなさい」

と、エリカにしか聞こえなさそうな声でそっと耳打ちをする。

そして、それだけを言うとナギは雑踏に交じりながら搭乗口に向かっていく。

「ナギさん……」

エリカは最初、誰にやられたか分からない風だった。しかし、すぐに振り向いた時の飛行帽からのぞかせる紫色の彼女自身による歩きの風になびく長髪でナギだと気付いたようだ。

そんなエリカをよそに、フウロは博士を探そうとする。

「フウロー！」

しかし、探すまでもなかった。何故ならフウロの後ろに既にアララギは居たからだ。

「うわ、博士！　驚かさないで下さいよー」

フウロは参った調子でアララギに言う。

「ごめんねー。ハーイ、二人はタマムシ大で会って以来ね！　私の名前はアララギ。覚

えてます？」
　エリカは即答で
「まさか、全国屈指の高名なポケモン博士の名前を忘れるはずがありませんわ！　ね、貴方！」
　エリカがさも知ってるだろうという口ぶりでレッドに話す。
「う、うん。覚えてますよ、アララギ博士ですよね」
　実際うろ覚えだったが、ここはエリカに合わせることにした。
「そ……そう！　さてと、勿論二人には慣例通りにポケモン渡しに来たのだけれど、生憎ここにはタワーオブヘブンの調査に来たついでで来ただけ。だから、ポケモンは助手のベルに持たせているの」
　アララギの発言に、少しだけ二人はガクッとしている。
「そんなにしょげないでよ……。それで、ベルちゃんは別件の調査でヒオウギシティに居るからフウロちゃん、案内してくれないかしら？」
　フウロはそれに対し
「は、はい！　わかりました」
　少し呆けていたのか、僅かに驚いた体で返す。
「ごめんね、こんな事頼んじゃって……」

「いえいえ、保護区の管理費用を出して頂いている博士の頼みなら喜んで！　さてじゃあ、レッドさん、エリカさん。外に出ましょう」

二人はフウロの後に続いて外に出る。

―同日　０時２０分　フキヨセシティ　カーゴサービス前―

こうして二人は遂に、最後の舞台であるイッシュの土を踏み締めた。

「ここがイッシュ地方かぁ……」

「あまりカントーと気候は変わりませんが……にしても寒いですわ」

季節は真冬。強い北風が三人の肌を撫でるように過ぎ去っていく。

「ここはイッシュの中でも比較的北の方だから、寒くなるのは仕方ないんだ」

フウロはそう説明する。

「なるほど……」

レッドが納得していると、フウロは、

「それでは行きますよ！　行け、ケンホロウ！」

ケンホロウは、ドードリオが一本の首になって首と足がしっかりしたような体をしている。

「へえ！　これがイッシュのポケモンかぁ！」

レッドは初めて目にするポケモンに目を輝かせている。やはり童心は残っているよ

うだ。
「なかなか、そっちの地方じゃ見れないでしょ?」
　フウロは、見とれているレッドに得意になりながら話しかける。
「ええ、本当になんというか、俺の今まであってきたポケモンとはやはり毛色が違うや……」
　レッドは、ほぅと感心の溜息をついている。優しく胴の辺りを撫でてみる。抵抗しないことから、当然であるが人に馴れているようだ。
「エリカさんはイッシュのポケモンについては……?」
「図鑑で少し知っている程度ですわ。確かこのケンホロウはメスですね。飾りがありませんわ」
　どこが少しだよ!?　とレッドは突っ込もうとしたが今更野暮な気がしたので止めた。
「へぇ……、流石エリカさんだ……。では、どうしてオスには飾りがついているかご存知ですか?」
　フウロはエリカを試したくなったのか、質問をしている。
「威嚇ですわ。天敵に飾りを示威するんですよね?」
　エリカは流石に記憶が曖昧なのか確認口調だ。
「その通りです。いやはや、他地方の人でここまで言い当てられた人は中々居ませんよ」

「あの、そろそろ出発致しませんこと？」
「あっといけないいけない！　それじゃ、いざヒオウギシティへ！」
こうして三人は、ヒオウギシティへと飛び去っていく……。
―同じ頃　ヒウンシティ　某所―
新生ロケット団……もといオーキド団は、宿敵であるレッドとエリカの所在を常にチェックしていた。
そして、二人がヒオウギに飛び立ったころの事……。
「二人とも、イッシュに到着したようじゃの」
表向きは死亡。しかし、ここオーキド団ではサカキと並ぶ地位を持つ。オーキドがそう話していた。
「これで蜜月は終いだ……。レッドめ、四年来の屈辱。ここで必ずや晴らす」
サカキは低くもドスの聞いた声で言う。
「わしとて思いは同じよ……。しかし我らが動く準備は整いはしているが……、アレが足りぬな」
「そうだな」
サカキがそう答えると、オーキドはドアを開け、下に降りていく。
―地下室―

明かりこそついているが、自然な光は一切入ってこない。そして何もない殺風景な教室一つ分はある広めな部屋。

そう、真ん中にある一つの拘束具を除いては何もない。そんな部屋だ。

ドアが開く。開けたのはオーキドだ。

「まだ協力する気はないかの……、マツバ君」

「……、ふざけるな」

青年の一言は明確な憎悪を多分に含みつつ、一室に響き渡った。

そう、3月の集団催眠事件関連に巻き込まれて死亡したとされたマツバは生きていたのだ。

しかし、マツバはこれまで10か月もの間四肢の自由を奪われ、拘束台に固定されている。

それ以外は特に何もないが。これだけでもかなりの重圧だ。

何しろ、自由がない。そして食事や下の世話は全て人の手によってなされており、睡眠も、明かりが常についているためかろくに出来ない。

普通なら狂人になってしまうような状態……。しかし、マツバは精神安定剤等を常に服用させられ、正常な思考が出来るように保たれているのだ。

オーキドはある目的の為だけにマツバを生かしていた。

「何も難しいことは言うておらぬのだが……。ただマツバ君の持つ千里眼。それだけが欲しいのじゃ」

「何度も申し上げたはずです。千里眼は貴方のような悪人に渡しては絶対にならない。そして悪事に用いてはならない。これは……千里眼を持つ者全員が遵守すべき金科玉条であり、絶対的な法規であると！」

「そんな物は耳にオクタンじゃよ」

そして少しの間が空く。

「……、君に一つ朗報を進ぜよう」

「？」

マツバの目に少しだけ希望の光が宿る。

「レッド君とエリカ女史が遂にこのイッシュ地方に到着した」

「それは良かった……」

「マツバ君……、大切な人を傷つけられたくはないじゃろう？」

その言葉に、マツバは激しく反応する。拘束台が壊れそうな勢いで体を前に出そうとしながら、精いっぱいの声で。

「貴様……、まさか……！」

「じっくりと考えい。まだ……時間はくれてやる」

こうしてオーキドは立ち去って行く。
残されたマツバはひたすらに落胆するしかなかった……。
―某所―
「今回もダメだったそうだな。オーキド殿」
地下から戻ってきた、残念そうな表情のオーキドを見た彼はそう察する。
「うむ、じゃがエリカ女史をチラつかせた……。マツバ君もエリカ君を好いておるようじゃからの。陥落は近い」
オーキドは確信の表情で話す。
「しかしもういっその事、千里眼なぞ麻酔で眠らせてその隙に手術をして引き抜いた方が早い気がするがな」
「そうもいかぬ。あの千里眼はあくまで所有者の意思に従う。もし、千里眼そのものが元の所有者の許諾なく嵌め込んだことに気付けば、効果は無さぬし、毒素を吐き出して体を蝕むそうじゃ」
「なるほど……。しかしどうして千里眼を求める？　あれはせいぜい相手の思考を読み取るのが限界なのだろう？」
サカキはそう疑問を呈す。
「それが大事なのだ。最早ワシは大抵のトレーナーには負けぬ程の力を持っておる。し

かし、思考が読めれば更に安心な材料になるだろう？　石橋を叩いて渡るほどの臆病さが無ければ君らの理想は実現せぬぞ。サカキ殿」
「そうか……。それにしてもオーキド殿。私にはどうもあんたの考えが読めん……、エリカを奪うと言っておきながら、攫うことをも辞さない覚悟……。一体何がしたいというのだ」
「サカキ殿。言ったはずだ。ワシはあくまでロケット団の技術革新や計画に関わるのみで、ワシの真意を吐露する義理などない……とな」
「……、それもそうだ」
　そう言うと、サカキは立ち上がり、出口に向かう。
「どこへ行くのじゃ」
「あんたがそういうつもりなら……、私の方も私の心中を話す義理はないだろう？」
「それもそうじゃな」
「だが……、一つだけ教えておいてやろう。少し釣りがしたくなってな……」
「ほほう、釣りか。川釣りか？　海釣りか？」
「そうだな……、今日は海釣りの気分だ」
　そう言うと、サカキは部屋を後にしていった……。
―第四十九話　予兆　終―

第五十話　梟の目覚め

レッドとエリカは、最初の三匹を受け取る為、フウロの導きの下ヒオウギシティに向かう事にした、

―ヒオウギシティ

イッシュ地方南西部にある都市。

ポケモンセンターやジム、トレーナースクール等があるという一通りの施設が整っている街。

名所は南西部の道路を見渡せるヒオウギ見晴台である。

ジムリーダーのチェレンは今年よりシッポウシティのアロエに変わってジムリーダーとなった。

―1月27日　午後3時　ヒオウギシティ―

ヒオウギに着くと、フウロは大きく伸びをして、

「はいっ、ここがヒオウギシティです。最近開発された街と聞きましたが中々良い街ですね！」

都市化が進んでる割には、緑が多く、空気も澄んでいる。

「自然と文化が良い具合に融合してますわ。子どもが伸び伸びと過ごせそうです」
と、エリカは簡潔に評す。都市アドバイザーにも手を出すつもりだろうか。
レッドは用事を思い出し、ベルを探す。
そうこうしていると、少し離れている所で騒ぎが起こる事にレッドが気付く。
「あら、何の騒ぎでしょうか……？」
彼が、声の元に目をやるとそこには黒づくめの……、しかしロケット団とはまた違う格好の集団が街の入り口で狼藉を働こうとしていた。
「おうおうお前ら！　ポケモン引き渡せ！　渡さないなら痛い目見るぞ！」
その集団を見たフウロが、
「あ……あれはプラズマ団です！」
明らかに狼狽しながら答える。
フウロが驚いていると、すかさず横から眼鏡をかけた華奢（きゃしゃ）で賢そうな青年が出てくる。
「やれやれ、またメンドーな連中が……」
「あれ……チェレン君!?」
少年を見たフウロが、目を見開かせながら話しかけていた。
「フウロさん……、お久しぶりです」

チェレンと呼ばれた男は、フウロに一礼する。
「定例会で毎回顔は合わせていたけど……。本当、おっきくなったねー」
フウロは、よしよしと頭を撫でる。
チェレンは少し顔を赤くしながら、
「あの……、僕もう一応ジムリーダーなので」
フウロはそれに対し、闊達な調子で
「ごめんごめん。どうもトレーナーとして頑張っていた頃の貴方の印象が強くてね……」
どうにも掴めないので、レッドがフウロに一体この人は誰なのかを尋ねる。
すると、フウロは答える前に、青年の方が
「お初にお目にかかります。ヒオウギジムリーダーのチェレンです」
簡潔に自己紹介をすると、レッドとエリカに深々と一礼する。
それに付け加えてフウロが
「この子二年前までトレーナーでね……」
と続けようとするが、頭を上げたチェレンが
「フウロさん。あまり長く話している場合じゃないですよ！　街の入り口の方まで」
「そうだね。ここで鉢合わせしたのも何かの縁かもしれないし……。片付けにいきます

か。お二人はどうしますか？」
　フウロが尋ねてきたのでレッドは
「俺もついていきます。どういう組織か見てみたいので」
　エリカもそれに同調する。
　と言う訳で四人は、プラズマ団の所まで移動することとした。
　―入口付近―
　プラズマ団が蔓延（はびこ）っている場所まで行くと、プラズマ団はいよいよ町の中心部にまで突撃を敢行しようとしていた。
　しかし、チェレンがそれを止めるために喝破する。
「待て！」
「げっ！　ジムリーダーだ！」
　どうやら、プラズマ団の方にジムリーダーの情報は流れているようだ。
　リーダーの登場に、下っ端の団員たちは士気が減退し始めている様子だ、しかし、下っ端の中を割って二人の男が前に出る。
「全く、ざわついて何事かと思えば……」
　水色の髪をした青年が始めに喋り、
「雑魚が楯突いてきただけですか」

青緑の髪と、黒い帽子を被った青年が続く。
道を開けられている事を察すれば、二人とも幹部クラスなのだろう。
「プラズマ団ね……。復活しつつあるとは仄聞してたけど、まさかここまで来れるほど勢力を盛り返しているとはね……」
「それは褒めて頂いてると受け取って宜しいのでしょうかね？」
帽子の青年が皮肉気味に答える。
「さぁね。好きに受取りなよ」
チェレンも同じように嘲るようにして返す。
「ジムリーダーの評価など、我々にはどうでも良い事ですがね」
と、水色の髪の青年は答えた。
「それはご尤も。でもね、礼を守らずに僕の取り仕切る街に狼藉を働こうとする輩は……」
チェレンは、静かにモンスターボールを持った右手を構えて
「例え神仏であろうと許さない！　行け、ムーランド！」
「あたしも支援するよ！」
フウロがそう提案する。
「結構です！　この町で起こった事は僕だけでなんとかしないと……」

チェレンは冷たく突き放したが、
「全くー、そういう所全く変わってないね！　困ったときはお互い様だよ！」
フウロはその何倍も明るい様子で返す。
チェレンは少し困った表情をした後、吹っ切れた調子で
「はぁ……、勝手にしてくださいよ。じゃあ」
「勝手にするよー」
フウロはバトルの為に、チェレンの横まで移動する。そして、スワンナを繰り出す。
レッドとエリカが続いて支援の提案をするが
「いえいえ、これはイッシュの問題です。他地方の方の手を煩わせるわけには……」
「そうですか……」
まぁ。所詮、悪の組織の幹部クラスだし助太刀は要らないかとレッドは思い、それでこれ以上突っ込むのは止めにした。あくまで傍観に徹することにしたのだ。
「役者は揃いましたか……、早く雑魚を掃討しなければ。行け、ヘルガー！」
「行け、ゴルバッド！」

「う……、嘘!?」
「こ、こんなバカな!!」

レッドの予想に反し、二人は敗北を喫した。
序盤こそ押していたが、段々と力の差が露呈し始め最終的には総崩れとなってしまった。
「だから言ったではないですか……。〝雑魚〟が楯突いてきたぐらいでなにを騒いでいるのだと」
水色の髪の幹部が冷酷に言う。
「何も根拠なく言うとでも思ったのでしょうかねぇ……、つくづく愚かな人たちです」
帽子の幹部がそれに続く。
レッド当人も驚きを隠せなかった。まさか、一般トレーナーでは歯が立たないレベルの強さを持ったジムリーダーがトレーナーですらない幹部如きに負けるとは……。と思ったからだ。
「あれだけ散々法螺吹いておいてこの体たらくですか」
帽子の幹部が更に言う。
チェレンは、抵抗を試みんと彼らに反論する。
「だからと言って貴方がたのしている行動が正しいというわけでは」
しかし、水色の髪の幹部はチェレンに詰め寄り
「全く……」

と言った刹那、すぐさまチェレンを蹴り飛ばす。
華奢なチェレンにケリは相当に効いたのか、体は宙を少しだけ舞い、やがて遠くの路地を擦る。
「チェレン君!」
フウロがすぐに蹴り飛ばされたチェレンの所まで駆け寄る。
しかし、チェレンに反応はない。
「負けて、それで上っ面の綺麗事をのたまわれると虫唾が走るのでね……。どんなに高邁で崇高な思想があろうと、実力が無くば滅んでいくだけ。負け犬は負け犬らしく、勝者の道理に従えば良いのですよ」
と、水色の髪の幹部は冷笑しながら言った。
幹部のようだが、首領の貫録さえ滲み出ているのは恐らく気のせいではないだろう。
「こ……こんな事……、まともな人間の言うことじゃない……!!」
フウロは怒りに打ち震えているのか、声が震え、普段の調子とは違う様子だ。
「人間でない……ですか。上等です。我々、プラズマ団の計画は……いや、ここでいっても面白くありませんね」
等と水色の髪の幹部は続ける。
そうこうしていると、帽子の幹部が良い事を思いついたと言わんばかりに

「それにしても、この女……、中々に上玉ですね。サカキ様の蒐集に加えるのも一興ではないでしょうか」

と、フウロの方を見ながら言う。

「それは上策かもしれませんね……。おい、連れて行きなさい」

水色の髪の幹部は下っ端をあごで使うかのように指示する。

無論、下っ端たちは指示に従い、数人で囲んで連れ去ろうとする。

「大人しくしろ！」

「嫌っ、放して！」

こんな応酬が続いて、レッドは思わずリザードンを繰り出し、

「リザードン、火炎放射！」

と、指示する。

リザードンの炎は下っ端たちの制服に火をつけ、逃げ惑わす。

やがて他の下っ端に消火されたが、取り敢えずフウロの周りから追い払う事に成功する。

「レ……レッド……さん」

フウロは、背中を見せたレッドにそう言った。恐らく当惑しているのだろう。

「やはり貴方がたは我々を阻みますか……、レッド……そしてエリカ女史」

水色の髪の幹部は外道でありながら一応の礼は心得ているらしい。
そして、レッドは二人の幹部に対しチェレンに対する理不尽な暴力と、フウロを無理に連行しようとした事に対する強い怒りをも込めて
「当然。ポケモンマスターにならんとする者として、こんな悪行許すわけにはいかない！」
エリカもそれに同調して、
「私も同意見ですわ。この街が貴方たちの下賤な色に染まってしまうのは宜しくありません」
と返す。返答の質が異なるがレッドは気にしないことにした。
「ふう……なるべく貴方達との直接対決は避けたくはあったのですが……。止むを得ません、我々に抗うのであれば、排除するのみです。ランス！」
「ハッ！」
どうやらあの、帽子の幹部はランスと言うらしい。そして多分、もう一人の幹部の方が立場は上そうだ。ボスに次ぐナンバー2なのだろうか。等とレッドは思考を広げている。
「行け、ヘルガー！」
「行け、マタドガス！」

こうして、レッドは2体、エリカは1体を失いはしたが勝利を収めた。
「……、ジムリーダーには勝てても、最強の夫婦には勝てなんだか……」
水色の髪の青年はそう言って敗北を認めた様子である。
「まずい事になりましたよ……、ここは一度退いた方が」
「そうですね……、ここは戦略的撤退という事で。お前達！　撤退しますよ！」
水色の髪の幹部がそう下っ端に指示すると、すぐに街のあちこちに居た下っ端たちは撤収を開始した。まるで軍隊のようだ。
「待ってください！」
エリカが続いて引こうとした撤退を指示した幹部を呼び止める。
「何でしょうか」
幹部は引き始めた足を止め、エリカの方に向き直る。
「一つお伺いしてもいいでしょうか」
「……、勝者の権利として一つだけ答えてあげましょう。何ですか？」
「あの……、もしかして貴方たちはエンジュ戦乱の時に居たロケット団の方たちでしょうか」
エリカが尋ねると、アポロは鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情をした後、

「……、直に……分かる日が来ますよ」
と言って、アポロはランスと大勢の下っ端たちに混ざって撤退していく……。
こうしてプラズマ団はヒオウギから手を引いて、街に平和が戻る。

黒い集団が遥か彼方へと消え去り、綺麗になった街の出口を見てレッドは
「たく、漸く居なくなったか……。この地方も厄介な連中がいるな……」
「……」
レッドの後ろに居るエリカは無反応だ。何かを考え込んでいる様子である。
そんな事を言ってると、二人の間に居たフウロが、レッドの方を向いて
「あの……、レッドさん！　有難うございました！」
と言い、深々と頭を下げた。
「いやいや、咄嗟にやった事だし……。どうもああいう連中は昔から好かない性分でね」
と冷静にいっても実のところ、結構嬉しかったりするのがレッドの本音だ。
「それにしてもチェレン君、大丈夫かな」
フウロが案じていると、当人がフラフラではあるが
「つつ……、この通り、平気ですよ」
と気丈そうに返す。地面に触れたせいか服が少し汚れている。白いワイシャツが台

無しだ。
「だ……大丈夫ですの？」
　いつの間に我に返っていたエリカが、チェレンを心配した。
「こう見えても、一度はイッシュを回った経験があるのでね……、体は頑丈な自信があるんですよ。さてと、ポケモンセンターで回復させてジムに行きましょうか」
　と言ってチェレンが先陣を切ろうとすると、高い声が４人の辺りに響く。
「あっ、レッドさん！　エリカさん！」
　声の主は、鶯色の帽子を被り、赤ふちの眼鏡をかけた少女だった。その少女は二人を呼びかけ、駆け寄ってくる。
「あれ、ベル？」
「ベルちゃん？」
　チェレンとフウロがまず勘付いた。
「あ！　チェレンだー！　久しぶりだねぇ」
　ベルと呼ばれた少女はまずチェレンに飛びついた。旧知の仲なのだろうかとレッドは思う。
「いやお前、三日前も会っただろ。調査とか何とかでさ」
「あれー？　そうだったっけ……。フウロさんは久しぶりですよねぇ」

ベルは救いを求めるかのような目線を、フウロに向ける。
「うん。ベルちゃんは確か数か月くらい前にアララギ博士と一緒にフキヨセに来てたよね」
そうですよねーと相槌を打って、ベルは安堵の表情になる。
レッドはベルに対して、どこか抜けている印象を受けている。
「貴女がベルって人ですか?」
レッドは、ベル本人に尋ねる。
「そーです! アララギ博士の助手をしています。二人とも、ヒオウギに着いたっていうから待っていたんですけど、待てど暮らせど来ないものですから、こっちから来てみたら……」
「待てよ、お前、あの騒ぎ知らないのか?」
チェレンは驚いたかのような口調でベルに話す。
「あの騒ぎって何? ずっと見晴らし台に居たからわかんないよぉ」
「……、なるほどね。しょうがないメンドーだけど、かいつまんで話すぞ」
チェレンは、ベルに自分がぶっ飛ばされた事以外は全部、騒ぎについて話した。かいつまんだのは都合の悪い部分だったというのは突っ込まない事にしようとレッドは胸の奥にしまいこんだ。

「ふぇ、怖いねぇ」
「で、お前何しに来たの？」
　三日前にあった事すら忘れられていたことを少し根に持っているのか、チェレンはぶっきらぼうな口調でベルに尋ねている。
「そうだそうだ！　博士の依頼で、お二人にイッシュのポケモンをお渡しに参りました！」
「そ、そりゃどうも」
　レッドは、ベルの明るい口調に少し気圧されながらも毅然と答える。
「イッシュのポケモンは中々に貴重ですわ……。で、中身はなんですの？」
「はい！　えーっと少し待っててくださいね」
　ベルはバックから長い筒状のショーウィンドウらしきものを取り出す。そして、それを持ち上げて、自動で透明な上蓋がしまいこまれて、取り出せる状態にし、二人に見えるようにする。
　最近はハイテク化が進んでいるなとレッドはふと思った。
　中には最早恒例の、三つのモンスターボールが入っている。
「右から草ポケモンのツタージャ。真ん中は水ポケモンのミジュマル。左は炎ポケモンのポカブです！」

「この前は水だったしなぁ。ポカブで！」
「やはりここは草使いとして……、ツタージャでお願いいたします」
二人とも存外早く決定した。思考時間およそ1分だ。
ベルは先ほどの透明ケースをしまって、
「はい！　お二人とも決まりましたね」
「これでイッシュの準備も万端……っと！　まずは最初のジム。えっと、チェレンさんでしたっけ宜しくお願いします！」
チェレンは、あらら と言わんばかりの様子で、眼鏡を少し上げて、
「名前ぐらいしっかり覚えてくださいよ……。さて、そうですね！　でもまずはポケモンセンターに」
と言ってチェレンが準備を進めようとすると、フウロが
「待って！　あたしもその……加わってもいいかな？」
と提案する。
「はい？」
チェレンは何を言われたか分からなかったのか、聞き返している。
「だからー、タッグバトル！　あたしとチェレン君が組んで、一気にバッジ二つあげちゃおうよ！」

「いやあの、負け前提で話するの止めませんか？　立場ってものがあるんですけど」
　チェレンは焦り気味でフウロに注意する。
「だってさっきの戦い見てればどっちが勝つかは一目瞭然じゃない」
「フウロさん……。いやもう何でもないです」
　チェレンは最早何かをいう気力も無いようだ。フウロにベル。天然キャラ二人の相手は相当に精神を削らされるものなのだろうか……。などとレッドは考えている。
「ふぇぇ……、伝説の夫婦ｖｓ現役ジムリーダー×２！　そうそう見れない世紀の対決がぁ……」
　ベルは、何かを含んだような言い方をしている。
「別に中に入って観戦してもいいよー？」
「いやそれ決めるの僕なんですけ……全然聞く気ないや」
　チェレンは完全にフウロのペースにもってかれている。
「いえ、そういう問題で無く、私アララギ博士から呼び戻しが掛かってるんですよぉ……。待ちきれずにここまで下ったのもそのせいで……」
　ベルは残念そうな表情と口ぶりで話している。
「そっか。それじゃ仕方ないね……」
　と言ってフウロはため息をつく。どこか落胆して落ち込んでいる様子だ。

そんな憂いのある姿にレッドはさらに心奪われていくのだ……。
こうして、ベルと別れ、四人はポケモンセンターで回復させる。
そして、レッドとエリカはイッシュ初のジム戦に挑むのだ……。
―第五十話　梟の目覚め　終―

第五十一話　邪なる恋情

―1月27日　午後5時　ヒオウギシティ―

快復させた後、四人はチェレンのジムらしき建物に入った。

入ると、一人の少年が

「先生!」

とチェレンの方に向かって言っている。

「シンヤ君……、あれ皆も揃ってどうしたんだ?」

チェレンの言うとおり、シンヤと呼ばれた少年に続くかのようにぞろぞろと少年少女がいる。恐らく10歳前後の歳だろう。とレッドは推測する。

「どうしたもこうしたも無いですよ。先生、さっき悪い人に蹴られていたじゃないですか!」

どうやらこの少年達は先ほどの一部始終を逐一見ていたようだ。

「私たち、すっごく心配してたんですよ!」

「そうですよ……、先生だけじゃなくて一緒に戦ってたフウロさんも負けちゃってたし……」

と、一人の少女の発言を皮切りに口々にそれぞれの思いを言っている。
チェレンはそれらの発言に対し
「ハハ、大丈夫だよ。この通り、体調には問題なしさ」
と気丈そうに返す。倒れていたくせにである。
入ってからの子供たちの動静に疑問を持っていたレッドは、チェレンに聞いてみることにした。
「あの……先生って？」
「ここはジムであると共に。トレーナーズスクールでもあるんですよ。僕はここの……コホン、校長兼教師です」
チェレンは咳払いをして少しだけ偉そうに振る舞う。
レッドは更に疑問を持つ。
今は夕方だ。良い子は帰る時間なのにどうしてここに子ども達が居るのか少々不思議に思ったのである。
「それは分かりましたけど、どうしてこんな時間に子ども達が……」
「イッシュは学校の形態が様々で……、うちの場合は寮みたいな事もやってるんですよ。僕が旅していた頃の経験を生かしてボーイスカウト風に寮生活を楽しもうと。そういうコンセプトです。なので、こうして夜まで残っている子も居るわけです」

「なるほど……。しかし小学校はどうするのですか？　イッシュにも義務教育があったはずですが」
　エリカがそう口を挟む。
「それがウチですよ。ここのトレーナーズスクールは小学校に代わる教育機関として認定されている訳です」
　そうこう話していると、トレーナーの卵たちがいつの間にか一斉にレッド達に注目していた。
「あわわ！　レッドさんだー！」
「あのあの……、さっきすごく格好良かったです！」
　心配していたチェレンの事などどこ吹く風なのか、生徒の関心はゲストに移ってしまったようだ。
　レッドは内心悪い気はしておらず、適当に相槌を打ちながら笑っていた。
「エリカさんもいるー！」
「すっごい綺麗ー！　テレビで見た時よりも1億倍は綺麗！」
　こういう大げさな桁で形容するのもこういう年頃の子の特徴と言うべきか。
「ふふ……。恐縮ですわ。それにしても皆さん強そうですわねー……」
　エリカは子どもが嫌いではないのか、上手く世話している。

数分位しただろうか。そろそろ切り上げようとして、チェレンは手を叩き
「はいはい！　それくらいにして……。あれフウロさんは？」
チェレンがフウロの不在に気付くと、フウロは申し訳無さそうに扉を開きながら
「あはは……、ちょっと入りづらくて。ごめんねー」
と、頭を掻きながら小さく頭を下げる。
それに対するレッドの反応は……最早何も言うまい。
そしてフウロの登場に、少年トレーナーが色めきだったことも言うまでもないだろう。
「そうですか。それじゃあフィールドに向かいますよ」
向かおうとするチェレンに、一人の生徒が尋ねる。
「先生、戦うの？」
「うん。滅多に見られない戦いだし、しっかりと目に焼き付けておきなよ」
そう先生が言うと、生徒は「はいっ！」と元気よく返事した。
「随分と懐かれてますね」
「いやいや、単にはいはいって言っているだけですよ。心の中じゃ何を考えているか分からないんですから」
と、チェレンは冗談めいた笑いをしながら答える。本意ではなさそうなのは明らか

だ。

「あーっ、またそうやって小馬鹿にしてー」

「はいはい。君たちも観ていなさい。今日は観戦の授業だ、あんまり騒ぎ立てるとそうだね……その班は一か月トイレ掃除！」

えーっ？　という子ども達の声は、そこまで本気の拒絶しているものには聞こえなかった。むしろ楽しんでそうだ。本当に慕われているんだなとレッドはつくづく思った。

こうして、4人はビルの奥の外庭にあるというヒオウギジムにへと向かった。

―ヒオウギジム　入口付近―

「あ、レッドさんだ……、あの！　おいしいみず……」

ジムに居るガイドーはレッドにおいしい水を渡そうとした。しかし……

「いやーしかし、ビルの外にジムとは中々斬新なことをやりますね、チェレンさんは……」

「いやいや単に丸ごとジムを置ける用地が無かっただけですって……」

と、ジムリーダーとレッド当人は話し込んでいた。

「あ……行っちゃった……。！　あの、エリカさん、おいしい水っす！」

レッドが過ぎてしまったのでエリカだけでもと、おいしい水を渡そうとしたが……

「エリカさん凄い人気でしたねー。まあ当たり前か……本当に綺麗な方ですもんね」
「いえいえ。フウロさんだって同じくらいの賑わいでしたわよー……」
話し込んでおり、話しかける事かなわずだった。エリカはどこか刺々しい語調だったが……。
「……、本当、美人だなあ……トホホ……」
無視されても、女の魅力にはやっぱり弱いガイドーさんでしたとさ。

―ヒオウギジム　フィールド奥―
それぞれが所定の位置につくとチェレンは
「えーっと……、それぞれの使用ポケモンは三体、2×2のダブルバトルで宜しいですか？」
と、ルールの確認をしていた。
「あれ、トリプルバトルとかでもいいんじゃない？」
フウロがチェレンに横槍を入れたが
「いやいやトリプルだと2対2の場合だとどちらかの使用ポケモンが不公平になっちゃうから面倒なんですよ……」
「あ……そっか。そうだよね」

フウロは少し考えたのち、合点がいったようで、それ以上の口出しはしなかった。
「で……、いいですよね、お二人とも」
チェレンは改めてレッドとエリカに確認をとる。
「はい」
「それじゃ、行きますよー……」
チェレンはムーランドを、フウロはスワンナを繰り出し、レッドはピカチュウを、エリカはキノガッサを繰り出した。
「ピカチュウ、スワンナに10万ボルト！」
「キノガッサ、ムーランドにスカイアッパーです」
スワンナに、強力な電流が直撃し、あっという間に焼き鳥が出来上がってしまう。恐らくタイプは白鳥っぽいから水・飛行……だから、タイプ一致も加味すれば六倍のダメージだろうとレッドは推測する。
何か木の実を口にしてやり過ごそうともしてたが残念なことにピカチュウの電撃はそれ以上に強かったようだ。
「むむむぅ……一発で見破られちゃったかな。うう、これじゃあ木の実の意味ないよねぇ……アハハ」
フウロはそう力が抜けた笑いをしながら言うと、唇を噛んで少しだけ悔しそうな表情

をする。

　如何にもなポケモンを繰り出しといて何言ってんだとレッドは思ったが、嫌われたくないので突っ込むのは止めた。

「初っ端からやられないでくださいよ……、ムーランド！　キノガッサに氷のキバ！」

　エリカは、まさかの氷技に当惑気味の表情をしたが、すぐに平静を取り戻して、

「キノガッサ！　喰らう前に早く！」

　とエリカは急かすようにキノガッサに指示する。

「分かってやすよ……、オラァ！」

　ムーランドの凍りついたキバがキノガッサの傘にかかる直前。キノガッサは歯の奥に思いっきり一撃を見舞わせた。キャインという声をあげた気がするが多分気のせいだろうとレッドは流す。

　無論、体は宙を舞い、綺麗な半月状の軌跡を描いたのちバタリと砂のフィールドに落ちる。

「ムーランド！　倒れちゃダメだ！　やり返せ！」

　チェレンの呼びかけに反応し、ムーランドはダメージなんぞ喰らわなかったとばかりに果敢にキノガッサに襲い掛かる。

　氷のキバは確かにキノガッサを捉えたが、所詮は不一致。相当なダメージは喰らった

ようだが、致命傷に至らしめるには足りなかったようだ。
「次はもっと耐えてよ……、ふっとべ！　あたしのウォーグル！」
ウォーグルは勇猛そうに羽をはためかせながら出てくる。鋭いくちばしになびくたてがみ。そして鋭い爪……、猛禽類全ての特徴を形容したかのような鳥ポケモンだ。
それを見たときのレッドの第一印象は、か……かっけえええええ！　である。
「す……すげえ……イッシュにもこんなにカッコいい鳥ポケモンが……」
レッドの口からは図らずもそんな言葉が出る。
それを聞いたフウロは嬉しそうな表情を浮かべながら
「気に入った？」
と尋ねる。レッドは大きくうなずく。
「そっかそっか。じゃあ不戦敗になってもいいならあげちゃっても」
と、途中までフウロが言い掛けたところで
「フウロさん！」
チェレンが大声で冷や汗をかきながら注意する。
「嫌だなぁ。ジョークだよ、ジョーク！　もう、チェレン君って冗談通じないな」
フウロは少し不満そうな顔しながら応対する。チェレンはそれに対して呆れた表情で

「全く……、いって良い冗談と悪い冗談が……」
と言ってる途中で面倒くさそうな声でフウロは
「はいはい。ごめんなさい！　ウォーグル、岩なだれ！」
何とも無かったかのような鷹揚な調子で指示する。さっきのやりとりでレッドの心は更に締め付けられた事はもう分かり切ったことだ。
レッドは浮かれた心を鎮めるようにしてピカチュウに指示する。
「ピカチュウ！　ウォーグルにかみなり！」
あれだけ強そうなポケモンだ……一筋縄では行くまいと悟ったレッドは、１０万ボルトではなくより威力のある雷を選んだ。
しかし、ピカチュウの白い稲妻はすんでのところでウォーグルは避けてしまった。所詮は命中が不安定な雷である。
「チィ……」
レッドは静かに舌打ちをしていた。
「キノガッサ！　ムーランドにもう一度スカイアッパー！」
「……、ムーランド！　キノガッサにもう一度氷のキバを」
しかしその前にウォーグルによる岩雪崩の洗礼が始まった。
岩が天より降り注ぎ始め、ピカチュウは頭を押さえながら何とか凌ごうとする。

一方のキノガッサは俊敏且つ的確な体さばきで避けながらムーランドの元に突撃する。

やはり格闘ポケモンは格が違うなぁとレッドはつくづく思った。それでも数個はキノガッサに当たってしまっているが……。

そしてキノガッサは2発目のアッパーをムーランドに見舞って、倒すことに成功した。

……

こうして、レッドは2体、エリカは1体を失い、残ったポケモンのHPは少な目と少し危ない状況ではあったが何とか勝利を収める。

「参りました」

チェレンは負けを素直に認めて頭を下げる。

「なるほど……、うん、貴方達がイッシュまでこれた理由。体で体感した気がするよ！」

フウロは確信めいた表情をして、ニヤリと微笑みながら二人の実力を認めた。鷹揚な態度は崩さないようだ。

「いえいえ、イッシュのトレーナーも手強いと思いましたよ……」

レッドはそうフォローを入れる。

「とんでもありません、僕自身学んだことが沢山あるもので……。これ、ベーシックバッ

ジです！　どうぞ受け取ってください」
「あたしも2年ぶりに本気で勝負出来て本当に楽しくて、幸せだった……。その感謝の意も込めて、はい、フェザーバッジです！」
　こうして、レッドとエリカは一気に2つのジムバッジを手にする。
「初めてのチャレンジャーたちが貴方達で本当に良かった……。これなら、これからの挑戦者にも胸を張って戦えそうです」
「ええーっ!?　チェレン君、今回がリーダー初バトルなの!?」
　フウロは驚きを隠せない様子だ。当然、レッドやエリカも驚嘆している。
「負けた時に言い訳したくなかったから言いたく無かったんですけど……。これだけ多くの事をモノにできたのならバラしても悔いはないよ。というかそんなに驚くことですか？」
「いえ……、あまりにも手馴れていた様子でしたから、てっきりもう何度か戦っておられるのかと」
　エリカはそう口にする。余程驚いたのか、どこか口調がおどけた調子だ。
「バトルは元々手馴れているつもりですし、振る舞いは普通にしたつもりですけど……。まあいいです」
　そういってチェレンは口を閉じる。

「いやいや……俺としても意外でした……。俺も、初のイッシュでの相手が貴方達で良かったです」
「レッドさん……。そう言って頂けるなら光栄です」
　チェレンは少し頬を赤くしている。照れているのだろうか。少なくとも惚れている訳ではないとレッドは自己完結をした。
「へへ……、そう言って貰えるとあたしもあたしのポケモンも、すっごく嬉しいよ！」
　フウロも同じく顔を紅潮させている。こっちは惚れてるんじゃないかと邪推してしまうのが持たざる男の悲しい所だ。
　レッドは、一まず初のバッジを手にしたので大きく伸びをして
「さて、バッジも手にしたし、このまま、次のジムに行くか！」
「そうですね！」
　レッドの発言にエリカも同調するが、
「いや、もう夕方……というか夜ですよ」
　チェレンの一言でふと気づくと、辺りはすっかり暗くなっている。無我夢中とはまさにこの事だ、時間の変化にすら気づくことはないとレッドは言葉の意味を噛み締めた。
「あ……。そ……そうですよ貴方！　どうして気が付かないんですかー」
　エリカは冷や汗をかきながら、レッドからわざと目を逸らして対応する。

いやお前さっき「そうですね！」とか言ってただろうが。と突っ込もうと思ったが、慌ててるエリカも可愛いのでレッドは放っておくことにした。

「アハハ……」

フウロは引きつった顔で笑いながらその場を見ている。

「……、という訳でお二人はこれからどこに泊まられるのですか？」

チェレンは話題を切り替えた。中々空気の読める男だ。とレッドは思う。

「いつも通りポケモンセンターですかね」

レッドが言うと、フウロが

「ポケセンね。あぁそうそう！」

と。ポンと手を叩きながら何かを思い出したかのように続ける。

「イッシュのポケセンって、内国でいうフレンドリィショップとくっついてるんだよー！」

レッドは納得しながら

「へー、一々移動する手間が無くて良いですね。でもどうして内国がそうだと知ってるんです？」

とフウロに続けて尋ねる。

「でしょ？　あたし、ナギさんの案内の下でホウエンしか周ったことないけどフレンド

リィショップが別で凄く驚いたんだ。それが妙に印象強くってねー」
と、楽しそうに語っている。飛行機の中でナギさんがイッシュ周っていた事も言ってたし、二人はすごく仲良いんだなぁとレッドは思う。
「内国はフレンドリィショップを管理する機関とポケモンセンターの機関で利権の対立がありますので、まず出来ない事ですわ……。うらやましい限りです」
エリカはどんだけ内部事情に詳しいんだとレッドは思ったが、今更突っ込むのも面倒なので止めた。
「確かに、内国とこっちじゃポケモンリーグを初めとして色々な機関が別々ですが……なるほどそういう事情があるんですね」
博識そうなチェレンでも知らなかったようだ。
「ふむふむ……。さてと、あたしもポケセンかなぁ……。フキヨセ付近は荒天らしいし」
フウロはそう呟く。あまり残念そうでもなさそうだ。
「フキヨセの辺りってこの季節だとあられとかが降りまくりますもんね……。ああ、お二人も気を付けてくださいよ」
チェレンはそう、二人の身を案じている。
「ご心配は有難いのですが、俺たち、シンオウの寒さも経験してるので大丈夫ですよ」
レッドはそう言ってチェレンの心配を取り払おうとする。

「そういえばそうでしたね。ハハハ、釈迦に説法とはまさにこの事で……」

釈迦に説法!?　俺はお釈迦様じゃねえぞ等とレッドは思った。しかし、エリカは横から耳打ちをする。

「貴方……、釈迦に説法というのは物事をよく知っている人に、薄ら分かっている人が説法……つまり説教をすることですよ」

恐らく表情から分かっていないことを察したのだろう。エリカは丁寧にもレッドに意味を教えてくれた。

レッドは勘違いしていた自らが恥ずかしくなって、赤くなった顔を隠すために帽子を目深に被り直す。

「あのー……、チェレン君？　確かにレッドさんはお釈迦様みたいにすごい人だけど、別にお釈迦様じゃ」

フウロも意味を知らなかったようで、チェレンにバカ正直に尋ねている。

「は……はいぃ!?」

チェレンは信じられないかのような表情でフウロを見る。

「あ……あれ、何かあたし変な事言ったかな？」

「フ……フウロさん、失礼ですが、国語の成績は如何ほどですか？」

チェレンは恐る恐るフウロに尋ねる。

「あたし、体育と家庭科と……あと化学と物理の時間以外あんまり好きじゃなかったし……」

チェレンは溜息をつく。

どうやらフウロは理系のケがあるようだ。

「そ……そうですか。あのですねフウロさん」

チェレンが自分とフウロを後ろに向かせる。

全て聞き終るとフウロは真っ赤な顔になって……。

「そ、そーなんだ。嫌だなーあたし、言葉全然知らないやーアハハー」

言葉という事は、多分釈迦に説法の意味を解説していたんだろうか。笑ってごまかしてはいるが、フウロの心中は察するに余りある。

レッドは仲間が居たんだと、内心かなり嬉しくなっている。

「……、さて、そろそろおいとま致しましょうか」

ここに居る用事は無くなったなと思ったのか、エリカは去る事を提案する。

「そうだな」

レッドもそれに同調する。

「そうですか。あの……本当、お疲れ様でした、生徒たちにも貴重な経験となったでしょう」

そういってチェレンは深く頭を下げる。
レッドは謙虚な素振りを見せ
「いやいやそれ程でも」
と返す。
「さてと、という訳だ！　シンヤ君、マリコ君！　今日見たことの感想や分析について1週間以内にレポートにまとめるよう伝えてきてくれ！」
チェレンは大きな声で、フィールドの外に居た二人の生徒らしき男女に喚起する。戦いが終わった後は7割くらいの生徒は校舎に戻ったようだ。
「えぇ……面倒くさいなぁ」
「分かりました！　行こう、シンヤ君！」
マリコはシンヤという男を連れて校舎に戻っていく。
「ハハハ……レポートにまとめるなんてそんな大層なものじゃ」
とレッドはまたも謙遜している。
「これも立派な教育法の一つですよ。観戦して、分析をさせ、総評をさせる。こうする事で自分が実際に戦う際も理論立てて考えることができ、勝ちに繋げることも出来る。そういう事です」
そんな簡単に上手くいくなら苦労しねえんだよ！　とレッドはチェレンに主張をぶ

つけようとしたが、自信満々に語っているので言いそびれてしまうのであった……。
こうして、チェレンと別れ、レッドとエリカは同じくポケモンセンターに泊まるというフウロと共に宿に向かうのであった。

―同日　午後8時　ポケモンセンター―

という訳で、レッドは今回の宿が空いているかどうか聞いた訳だが。
「ええっ!?　一部屋しか空いてない?」
レッドはわざとらしく素っ頓狂な声をあげる。
言われたジョーイさんは申し訳なさそうに
「はい。現在、その一部屋を除いて満室となっておりまして……」
「ですってフウロさん。どうしますか?」
レッドは尋ねる。フウロは少し間を置いて、困った表情をしながら
「えと……それってレッドさんとエリカさんと同じ部屋に泊まるという事ですか?」
「俺は別に構わないけど……、エリカ、お前は?」
まさか野宿させる訳にもいくまい。おのずと選択は決まっているが、レッドはエリカに一応尋ねている。
「……、止むをえませんわ。私も構いません」

エリカは少し不服そうではあるがそう答える。
「い、いいんですか？　あたしが居るんじゃお邪魔では……？」
流石のフウロも敬語になっている。少し緊張しているのだろうか。とレッドは思った。
「いえいえ、このまま外にって訳にもいかないでしょう」
明らかに妻の前で言うべき事ではないが、レッドは構わず言い続ける。
「……、そ、そうですか。じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな……。エリカさんが居るなら安心だし……」
それってどういう意味だ！　とレッドは思ったが、願ってもないことが起こったのでレッドは気にしないことにした。
こうして、３人はポケセンの客室にチェックインしたのだ……。
空は、３人の行く末を案じているのか、いつもより心なしか黒い。
―第五十一話　邪(よこしま)なる恋情　終―

第五十二話　終わりの始まり

―1月27日　午後8時30分　ポケモンセンター　個室―

こうして、レッドエリカに加えてフウロが同じ部屋に泊まる事となった。
満室とはその通りなようで、かなりの盛況だ。廊下には多くの人が往来している。
プラズマ団を警戒して避難している人が多くいるようだ。
そんな中、三人は部屋に入った。
部屋の構造は、玄関を上がってすぐに台所、向かいにユニットバス。そしてその奥に二段ベットが二つ等などと本来は四人部屋の仕様のようだ。ごく普通の部屋である。
各々の荷物を片付け、換気をして……と諸事を済ませようとしていた。
「ふぅ……、これで荷物はほとんど片付いたかな」
レッドが最後のバッグを空いているベットに置くと、そう言って伸びをする。
「それでは、私ゆう……でなくてお夕食を用意いたしますので」
「ゆう？」
レッドはエリカが言い直す前に言ったことが気にかかったので聞いてみた。
「……、夕餉（ゆうげ）と言おうとしただけですわ。では」

エリカはあまり答えたくなかったのか、面倒くさそうに返す。そして食材を袋に詰めて台所へと向かった。

レッドは何となく言外の意を察したので、それ以上突っ込むことはしなかった。

「あたしも手伝いましょうか？　料理ならそれなりに自信ありますよ！」

フウロは腕まくりをし、胸を張って言うがレッドは即座に

「や、止めといた方がいいよ」

とレッドは少し頬を赤らめながらもフウロを諭す。エリカ当人には聞こえなかったようだ。

「え？　あたし本当に大抵のもの作れますよ！　肉じゃがでもカレーでもムニエルでも！　親の見よう見まねからですけど」

「だから、そういう問題じゃないんです。俺だって料理ぐらい作れるけど……」

フウロは当を得ない表情をしている。当然だ、この程度の説明で理解できたらエスパーを名乗ってもいいぐらいだ。とレッドは思う。

「まあ、あれだ。台所、後ろからそーっと覗いてみるといいですよ」

「？　分かった」

フウロはレッドの指示に従い、二段ベットの柱から覗き見するように台所でエリカの様子を伺っている。

数分ほどすると、フウロは納得した表情になって戻り、レッドの向かい側のベットに座る。
「どうでした？」
「なんというか……一人で何でもやっている感じで凄かったよ……。あれは確かに手伝えないね」
フウロはそう言って力なく笑った。
エリカは一糸乱れない芸術ともいえる調子で調理するので、他人の入る余地が無い。素早く、無駄なく、まずくなくが彼女の料理のモットーのようだ。自分の献立と、その中身の調子を一番理解しているのが自分……という事で他人にそれを任せるのは嫌なのだろう。とレッドは自己完結をしている。
「それでも、腕は確か。エリカの料理は店並みに旨いから、期待して待っててください」
「ホント？　楽しみだなー！」
フウロは遠足前日の子どものように素直な調子で喜ぶ。
「それじゃそれまでお話でもしよっか」
そう言ってフウロは足を交差させる。レッドは相変わらずフウロの所作と肢体に見とれていた。
ホットパンツと靴下の間の脚がなんとも艶めかしい……等とレッドは惚れこんでい

る。
「そ、そうですね。えっと次のジムってどこでしたっけ」
そういえばジムが何処か分かっていなかったことを思い出し、レッドは質問する。
「確かここの近くでジムのある街は……、タチワキシティだね。あそこも新人の人がリーダーをやってるよ！」
「へー。なんて人なんですか？」
「確か……ホミカ。そんな名前だったよ。あたしも定例会で数回しか顔見たことないからそこまで知ってるわけじゃないけど。毒タイプの使い手らしいよ」
「ホミカ……？　女の人ですか？」
ホミカという何とも珍妙な名前だが、何となくそんな雰囲気がしたのでそうレッドは訊く。
「そう！　真っ白な髪で縞々の服を着ていて……、あとギター……かな？　何か楽器を入れるケースを背中に背負ってた記憶があるよ」
フウロは定例会での印象を思い起こしながら喋っているのか、途切れ途切れに話している。
「ふむ……。もしかしてライブとかやってたりするんですかね」
「そんな事も言ってたよ。自己紹介の時に、理性を吹っ飛ばすーとかなんとか言ってた

覚えがあるから」
「いや、それだけだとただの危ない人になってしまうじゃないですか」
　レッドは冷静に突っ込みを入れる。
「そんな意味で言ったわけじゃないよ！　あたしはただ、それだけ音楽に情熱を持っている人なんだって事を伝えたかっただけ」
　フウロは慌て気味に答える。
「分かってますって」
「ならいいけど……。レッドさんって」
　レッドは先ほどから気にかかっていたことを無礼を承知で勇気を奮い言う事にした。
「あの……、レッドさんってやめてくれますか？　タメ口でそれだけ他人行儀ってなんだか……」
「それもそっか……。じゃあ呼び捨てでも良いかな？」
　実はレッドもそれが一番だと思ったが、エリカに誤解されかねないとレッドは思った為、
「いや、ここは間をとってレッド君で」
「分かったー。じゃあレッド君は……あたしの事フーちゃんって呼んでね！」
　一瞬だけエリカの鋭い殺気を感じたレッドは

「い……いや……遠慮しときます。恋人じゃないんですからハハハ……」

と、冷や汗をかきながら答える。

「こ……恋人……」

フウロはそう一言言ったかと思えば、黙ってしまった。膝の上で手を握り締め、俯いているようにみえる。

「フウロさん?」

レッドの問いかけにフウロはすぐに反応し、

「へ? あ、ごめんね。ところでレッド君てさ、どうしてここまで強くなれたの?」

「俺としては、皆と同じようにポケモンを使って、戦わせたらいつの間に強くなった……というのが率直な感想です」

レッドはそう建前の発言をする。

それを聞いたフウロは大いに驚いた体を見せて

「はぁ……て、天才の発言だ」

と珍しく意味深長な口調で感嘆の息を吐いてそう言った。

「天才って……そんな大層な人間じゃないですよ俺は」

と言って右手を後頭部にやり、照れた様子になる。照れると手を頭の後ろにやるのはレッドの性癖だ。勿論、レッドの本当の心中はこれ程謙虚ではなく、むしろ真っ黒けだ。

「謙虚だねえ……。エリカさんはそういう所に惚れたのかな？」
フウロは語尾を上げ、少しいたずらっぽく話している。
「……、それはそうと……」
と、レッドとフウロは他愛もない会話を続けた。
そして、料理が完成し、三人は夕食を食べましたとさ。
―午後９時３０分　同所―
三人は舌鼓を打ち、夕食を食べ終えた。
「ごちそうさまー」
三人は異口同音にそう言う。
因みに、普段食事の際、ピカチュウやカビゴン等雑食系のポケモンも食卓を共にしている。
カビゴンの食費が食費全体の８割を占めている事は何をか況や（言うまでもない）。
「はー、美味しかった」
レッドはいつも通りの感想を言った。今日の夕食は豪勢にすき焼である。
余談だが、ポケモンセンターの個室内にはある程度の食器や調理器具が用意されている。その為、食事関係のルームサービスは一切ない。
「フウロさんもご満足頂けたようで、光栄ですわ」

エリカはフウロの満ち足りた表情からそう読み取ったようだ。
「あわわ……、本当凄いです。一生の間でもここまでの料理は中々食べられない……」
フウロは舌鼓を打ったというよりかは、腕の方に度肝を抜かれているようだ。
「またそんな大仰な……。私の料理なんて所詮は形式に準えただけの淡白なものです」
とは言うが、エリカ当人はかなり嬉しそうだ。フウロが童の如く無邪気に喜んでいるのも効いてるのだろう。
「さてと、食器片付けるか」
「え、これ全部!?」
洗い物は鍋に加え銘々皿、ガスコンロ等などがある。
カビゴンは銘々皿が取れない為大き目の皿で料理を食すのだが、それを10枚ほどおかわりしてしまうのだ。見てくれに似合わず妙に潔癖症なので皿は毎回新しいのでないとふてくされてしまう。
戦力として十二分に役立っている上、何年も付き合っている相棒な為レッドは特に文句は言わない。エリカは当初戸惑っていたが……。
その為、必然的に皿の量が多くなるのだ。
「洗わなかったら汚れ着いたまんまですよ。借り物ですからきちんとしないと……」
「それは分かってるけど、にしても大変そうだねー……あたし手伝うよ!」

片付けは毎回レッド一人でやっているが、今回はフウロもいるので台所にて一緒にやる事となる。
「左様ですか。私、お風呂に湯を張ってまいります」
そういう訳で、エリカは風呂場に向かった。
―台所―
レッドとフウロは、食器洗いがてら談笑していた。
「ふう……、中々とれないねぇ」
フウロは鍋についた汚れに苦戦しているようだ。
「焦げた所は取るの面倒ですからね……、スチールウールいりますか？」
「うん、有難う」
……
「レッド君って、お家にいた頃こういうお手伝いとかしてた？」
「親は昔から口酸っぱく自立自立と言ってましたからね……。よくやらされたものです」
レッドは苦笑いしながら質問に答える。
「ふうん。いいお母さんだね！」
「フウロさんはどうだったんです？」

「あたしも似たようなものだよ。うちは三代続いてパイロットっていう家系だから、親もそれでうるさくて……。それで『自らを律さずして空を律させる事はできぬ』という家訓で生活は小っちゃい頃から自分でやりなさーいって感じだったよ」

フウロは淡々と鍋を洗いながら、快活にハキハキと答える。

「へーそうですか……」

と、このような調子で会話が続いていった。

―午後10時　同所―

レッド、エリカと風呂に入り、最後にフウロが入っている。

エリカはレッドと談笑していた。

「ふう……やはりお風呂というのは良きものですわ」

風呂から出るといつも通りの自然な色気のある容貌で、パジャマ姿のエリカがそう息をついて言う。

「う、うん。そうだな」

そしてレッドはいつもと変わらない色気に息を呑んでいる。いやむしろフウロと姿を重ねてより一層興奮している様子だ。

「それにしても、あのプラズマ団と名乗っていた組織は何だったのでしょうか……」

「何にしてもあれは結構厄介そうな組織だ……。団員とか他組織の非じゃねえぞなんだ

あれは……」

　レッドは昼にあった事件を思い起こしながら話す。

　ヒオウギ全体に散らばっていた団員はおよそ数百人程とされ、ポケモンのレベルも格段に違う。

　レッドはそんな化け物のような悪の組織に恐怖以上に、力に対する疑念を抱いている。

「どこかの組織と結託していたりするのかな」

「まさか、ロケット団と……？」

「いや、カツラさんとかも言ってたけどそれは無いって……。ヤマブキの時、俺が潰したってのに」

　レッドは笑いながら答えるが、エリカは未だに疑念が解消されないようだ。

「しかしエンジュでの戦乱の時もヤマブキでの事件でも、サカキは一度も姿を現しませんでした……。頭が残っている以上、復活の可能性は十分に考えられますわ」

「ま、なんにせよ警戒するにこしたことはねーだろ」

　と言ってレッドはプラズマ団の話を締めくくる。

「左様ですね。……、あ、貴方……」

　エリカは俄かに顔を朱色にする。レッドはその様に少しだけ情を動かす。

「何だ」
「その……今晩ですね……えっと……」
彼女は珍しく言葉を濁らせている。いつもの歯切れの良い語調ではなくしどろもどろだ。
今晩というワードからそれなりに推察はつくが、敢えてレッドはエリカの動静を伺う。
「ひ、久々にしませんか？」
「……は？」
レッドはてっきり今晩お茶しませんか？　とかその程度の事だろうと思っていただけに仰天している。エリカから誘ってくる事は稀にあるものの、今回は人がいる。
「お、おい、フウロさんが居るんだぞ。気持ちは嬉しいけど、次の街についたらいっぱいしてあげるから……」
「……」
と言って諦めさせようとしたが、エリカは納得できない表情をしている。
どうしたものか考えていると。フウロが風呂からでてきたようだ。
「はーさっぱりしたー……」
フウロは髪をとかし、水色のバスローブを着用している。太ももや腹のあたりは隠れ

たが、先ほどのときはしっかりとカバーされていた胸元が少しだけはだけている。
予想以上に綺麗なロングヘアと、少し見えたエリカよりも大きい谷間にレッドは（省略）
「や、やっぱり負けてた……じゃなくて、フウロさん！　もう少し露出を控えた方が」
エリカは一言二言何かを呟いて、フウロを注意した。
「へ……、あ！　ごめんなさい、これでも最大限抑えているつもりなんですけど……」
といいながらフウロはバストローブの襟を更に引き締め、帯も締め直す。
チラリズムというのはここまで情欲をかきたてるものなのかとレッドは再認識するに至った。
こうして、午後11時まで談笑を続けて三人は床についた。
―1月28日　午前1時　同所―
レッドは上のベット、エリカは同じ下のベット。フウロは隣の二段ベットの下の方。
こういう配置で三人は寝ている。
さて、夜もすっかり更けたこの時刻。レッドは下腹部に違和感を覚えた。
すき焼に何か入っていたのか……、とりあえずトイレに行こうと思って目を覚ます。
そうすると、ベッドに備え付けられていた読書灯が点灯する。
瞳孔が開いていたため、当初は眩しさに目をくらませたが段々と目がなれる。

そして少しなれた目で正面を見ると、ぼやけながらも人間が乗っているのが輪郭で分かった。
「貴方……起こしてしまって申し訳ありません」
声でようやく誰が乗っかっているのか判断がつく。
「……、え!?　エリカ？」
レッドは思わず上体を起こす。
「しっ、フウロさん起きてしまいますよ」
エリカは顔の前で人差し指を立ててそう言う。
「……、わ、分かった」
少しの時間、辺りに再び静寂が広がる。
「……、で、なんでお前俺に跨(またが)っているの？」
レッドは寝ぼけていて頭が回らないせいかあまり状況を把握できていない。
「貴方……。私、先ほど今日、しましょうって」
「何を」
レッドは間、髪を容れずに聞き返す。発言に他意は無く純粋に訊いている。
「……、女の子にはしたない事、言わせないでください」
エリカは顔を赤くさせながらそう言った。

「いや、こんな時間に男に跨ってる奴に言われたくな……あ」
　レッドは漸くこの行動の意味を理解する。そしてそれと同時に（ニャー）が突如暴れだす。
「ふふ、体は正直ですわね……。理解された事、すぐに分かってしまいましたよ」
「エ……エリカ、どうして急に……わ」
　レッドが言うや否やエリカは少々強引に唇を重ね、舌を入れた……。
〈暫くお待ちください〉
　本番をする直前にフウロが起きてしまい、トイレに行ったのでいつも通り中断せざるを得なくなってしまった。
　全裸になっていたレッドとエリカは電灯を素早く消し、布団にくるまって会話していた。
「……、あ、危なかった……」
「ううう……寒いですわ」
「……、風邪、ひくとまずいしフウロさんが戻ってきたら服を着て寝ろ」
「さ……左様ですわね」
　エリカはそう言って、これ以上の行為を断念するに至る。
「エリカ……、愛してる」

「……、その言葉、私だけにかけ続けると約束して頂けますか？」
エリカは熱っぽい目線でレッドに訴えかける。
「……、ああ」
レッドはフウロの事が一瞬脳裡をよぎるが、断ち切ってそう答える。
「フウロさんに……目移りしたりしませんよね？」
レッドはその一言に動揺した。エリカが勘付いているとは思わなかったからだ。
殺気の件も単にフウロとイチャついていたのを咎めただけだと考えたからだ。
「……気づいていたのか」
「はい。貴方、フウロさんと会ってからずっと見とれていましたし……。このままだとフウロさんに流れてしまうんじゃないかって……」
「それで俺に体で迫ったのか、いけない娘だな」
と笑いながらレッドは肩を回す。
すると、エリカは顔を紅潮させて、
「ち……茶化さないでください。例え他が良かったとしても私の体が至らない故に私の元から去ってしまったら、私……わたくし……」
エリカはだんだんと語調を弱めている。心底レッドに惚れきっているのが分かる。
「……。確かにさっきまでの俺はエリカの言う通りフウロさんに惑わされてはいたけど

……、大丈夫、お前は体含めて世界一の床上手だ。俺が保証する」
　レッドは心の底からの感想を言う。嘘や冗談ではなく、エリカの（ニャー）は凄い。
「で……でしたら」
「床上手であろうとなかろうと、俺はエリカを愛してる。他の誰にも流されたりはしないよ」
　レッドは優しい口調でエリカに語りかける。
「貴方……！」
　二人は布団の中できつく抱擁しあった。
　その後、トイレの流れる音がしたのでエリカはパジャマを着直し、急いで下のベッドに戻る。
　こうして、フウロは再び床につき部屋に日光が差すまで、また静寂が戻るのだった。
―同日　午前１０時　ポケモンセンター　受付―
　チェックアウトを済ませると、ジョーイさんから小包を受け取ったので三人はソファに座って中身を確認しようとした。
「宛先は、私と貴方になってますわね」
　エリカの言う通り、受取人欄にはレッドとエリカの名前が書かれている。
　依頼主欄にはアララギと、研究所の所在地らしきものが記入されている。

「開けてみましょうよ！」
　フウロは自分あてでもないのに中身が気になるのか、催促した。
「そうですね。エリカ、キングラー」
「持ってるわけないです……。それにキングラーのハサミでやってしまったら中身潰れてしまいますよ」
　エリカはそう冷静に突っ込みを入れた。
「ボケただけだよ。行け、リザー……」
　モンスターボールを座りながら構えていると、エリカは焦ったように持った手を抑え、
「待ってください、今度は燃やし尽くすつもりですか!?　真面目にやりましょうよ！」
　手を下にやらせ、エリカはレッドに目を合わせて真剣に叱りつける。怒っているエリカも可愛いなあとレッドは思う。
　フウロは行儀よく座りながら終始笑っている。
「実は、俺カッター持ってないんだよね……」
「持ってないならそう言ってくださいよ……仕方ありませんわね。カッターはございませんが、これでも代用にはなるかと」
　そう言うとエリカは懐から鍔の無い３０センチ弱ほどの短刀を鞘を抜いて、レッドに

手渡す。
「物騒なもの持ってるな……。護身用に持ってるのか？　ポケモンが居るってのに」
「それは匕首と言って、ポケモンを出すほどの余裕がないような切迫した状況下での護身用、あとはこのような場合に使う為に携帯してますわ」
　この世界の住人はまず武器を目にすることが無い。レッドは匕首を興味深げに眺めた後
「ふーん……、有難う。使わせてもらうよ」
　と答え、レッドは手際よく包装紙を破き、中の箱にも切り目があったのでザクザクときり、中身を取り出す。
　中には二つの腕時計のようなものと手紙が入っており、青とピンクの二色があった。
「何だこれ」
　レッドは中身を見てまずその言葉がついてでる。
「それ、ライブキャスターですよ！」
　フウロは驚いたかのような口調でレッドに話す。
「ライブキャスター？」
　レッドは初耳な単語に首をかしげる。
「イッシュ地方で今トレンドの最先端な通信器具ですよ！　相手を登録すれば内蔵され

ているカメラを介してテレビ通話ができる優れものです。しかもこれ最新版……いいなぁー……」

フウロは羨ましそうに見つめている。

「最新版ですと何が違うのですか？」

エリカは続いてフウロに尋ねる。

「最新版だと、メールも出来ちゃうんです！　先代のライブキャスターはテレビ機能つけるのが精一杯だったのかそれ以上出来なかったようですが」

「へぇ」

「お二人のつけているのってポケッチ……でしたよね？」

フウロは自信が無いのか確認口調である。

「そうですよ。よくご存知ですわね」

「内国に出入りしているとそういう情報に強くなるんです。確かポケッチの登録情報もそのままライブキャスターに移せるようなので試してみては如何でしょう。詳しいやり方は説明書に書いてあると思うので」

こうして、レッドとエリカはポケッチからライブキャスターにモデルチェンジした。イッシュの知己としてフウロを登録し、そして手紙の最終行にアララギとベルの番号があったのでそれらも登録する。

―同日　午前１０時半　ポケモンセンター前―

ポケモンセンターを出ると、三人はチェレンと偶然会った。

「チェレン君だ！」

「フウロさん……。それにお二人まで」

三人はそれぞれ挨拶を交わし、世間話をする。

「あれ、それってまさか……ライブキャスターですか？」

チェレンは確認口調で二人に尋ねる。

「はい」

レッドが質問に答えた。

「そうですか。じゃ、僕も持ってるので……宜しければ教えてもらえませんか？　機会があればもう一度お手合わせ願えると嬉しいので」

「勿論、いいですよ！」

レッドとエリカは新たにチェレンの番号を登録した。貰ったその日に四人新規登録である。

「さてと、お二人はこれから次のジムに行かれるんですよね」

チェレンは当然の質問をした。

「勿論です」

「ここからだと、まず北に出て、サンギタウンを通った先のタチワキシティが一番近いジムです」

と、チェレンは丁寧に次のジムの場所を教えてくれた。

「有難うございます」

「頑張ってねー。さてと、あたしはフキヨセに帰らなくちゃ……一日ジム空かせちゃったからその分取り戻しに行かないと」

フウロはそう言って、目に力をこめ、気合を入れ直している。

「フキヨセですか……。どうかお気をつけて」

「あはは、チェレン君に心配されちゃー死ぬわけにはいかないねー」

フウロは快活に笑いながらある意味誤解を招きかねない発言をする。

「ハァ……。お気をつけて！　それじゃ僕もスクールの用事があるので」

「じゃーね伝説の夫婦さん！　フキヨセに寄ったらまた宜しくね！　末永くお幸せにー」

フウロはそう言うと、夫婦に挨拶させる間もなくケンホロウに乗って青空に素早く消えていった……。

「全く、相変わらずだなあフウロさんは……。僕もお二人の成功と円満を願っています。それじゃ、またいつか！」

チェレンに別れの挨拶を告げた後、二人はゲートに入りヒオウギの出口に立った。
―午前11時　ヒオウギシティ　ゲート―
目の前には内国とはまた一風変わった草原が広がる。
19番道路。それが二人の初めて通るイッシュの道だ。
「イッシュに着いてから色々ドタバタあったけど、ここからが本当の始まり……だな」
レッドは草原を目前にしながら言う。
「ええ。艱難汝を玉にす……。如何な困難があろうとも、それは私たちを更に高めてくれる試練です。それも噛みしめてここからの道進んでいきましょう」
「なに、どんな困難も俺とお前にかかれば大したことじゃないさ。現にここまで来れたんだから……」
「そういう油断が思わぬ災難を引き起こすのです。昔は昔、今は今。きっちりとやっていきましょう」
エリカはあくまで現実主義だ。時々レッドはエリカに対して息苦しさを感じるが、大半はこのようなものだ。
「そうだな……じゃ、行くか！」
「はい！」
こうして、二人はヒオウギを抜けて、いよいよイッシュ地方に本格的に足を踏み入れ

た。

最後の舞台。そして最後の旅……。

色々な期待と不安を抱きながら、伝説の夫婦はまた新たなる軌跡を残すのだ……。

―第五十二話　終わりの始まり　終―

第五十三話　嘱託

―1月30日　午前11時　19番道路―

「そこのトレーナー!!」

旅をしていたら、どこからか枯れ気味の大声が聞こえる。

「何でしょうか?」

「声の元は崖の上……かな。随分と声張らせてるな」

そういう風に流して崖を通り過ぎようとすると

「またぬか!」

と言いながら二人の背後に声の主と思しき人物が舞い降りてきた。

その男は、赤と黄色のたてがみに首をモンスターボールをぶらさげ、全体的に風来坊を彷彿とさせる容貌をしていた。年齢は50代前半といったところか。

「全く……、人が呼びかけているのに応じぬとは礼を知らぬトレーナーよ」

「いや、俺たちに向かって言っているとは思わなかったので……ごめんなさい」

と言い、レッドとエリカは頭を下げる。

「謝れば良いのだ。さて、わしはアデク!」

その名前に何か思い当たることがあったのかエリカは
「アデク……どこかで聞いた名前ですわ」
「ほう、わしの名を知っておるか。で、わしはポケモンと共に歩む……その事が如何に素晴らしき事かを伝える物好きなトレーナーよ！」
容貌だけでなく、行動も変わっているようだ。
人に話しかけるや、このような宗教紛いの事を言うとは新手の勧誘か？　等とレッドが訝しげにアデクを見ていると
「これは失礼を！」
とエリカは深くまたも頭を下げている。
「おいエリカ、急にどうした」
「どうしたもこうしたも……この方はイッシュリーグの前チャンピオンですわ！　この方のお話を聞いていたらピンと来たのです」
エリカがレッドに説明していると、
「……、お前さんたちは？」
アデクはまさかと言いたげな目線を二人に送る。
「マサラタウンのレッドです。で、この女が」
「タマムシジムリーダーのエリカですわ。以後、お見知りおきを」

そう言うとアデクは驚いた表情をした後、
「ふむう。お前さんたちが近頃イッシュに来ると巷で噂になっておった伝説の夫婦か……」
最早二人は、地方に来ると言うだけで話題になってしまう程の有名人だ。
「お前さんたち、ちと時間はあるか？」
「それはもう、腐るほど」
レッドは即答した。エリカも特に何も言わなかった。
「ならばちと、お前さんたちとポケモンの力を貸してくれぬか？」
「えっ？　何を急に……」
レッドはアデクの唐突な提案に当惑している。
「なーに、そんな大層なものではない。ちとわしの家でやってもらいたい事があっての……」
仮にもチャンピオンをやっていた人間の依頼だし、そんな危険なものではないだろう。そう判断したレッドはとりあえずアデクの提案とやらを見に行くことにした。
―同日　午後1時　サンギタウン　練習場―
家の前にはフィールドがあり、家はごく普通の一軒家だった。
しかし中には机や座布団、そして奥には布でかけられた高い場所がある。

「あっ、アデクさん！　お帰りなさーい。その人たちも鍛えてあげるの？」
　一人の女の子が行儀よく腰を曲げて挨拶する。
「いやでもこの二人強そうだよ……」
　横に居た男の子がそう言って身震いした。
「それもそうだろう……。何しろこの二人はかの伝説の夫婦だからの！」
「ちょ……子ども相手に怖がらせるような紹介は……」
　レッドは気恥ずかしさもあって、アデクの発言を制しようとする。
　しかしアデクはレッドの発言を無視して続ける。
「なーに、失敗は成功の基というだろう。それで学ぶこともあるのだぞ！　という訳でレッドとエリカ！　この二人と戦ってくれい」
「あの、それはともかくここはどういう場所なのですか？　私、一向に把握できないのですが」
　エリカは展開が急すぎて頭がついていけないのか、疑問を投げかける。
「うむ、ここはわしがこの町の中で目ぼしいトレーナーの卵を見つけ、こうして練習をする所だ。とにかく、練習試合という事で仕合うてくれい！」
　という訳で、言われた通りにレッドが男の子と、エリカが女の子と戦った。
　アデクがいうには町でも抜きんでた少年少女トレーナらしいが、ワンサイドゲームに

終わった事は言うまでもないだろう。
　二人の勝負の感想を聞いてみれば、「草は炎に弱い」だの「水タイプが水技を使うと強くなる」等、初歩の初歩の話をしていた。レッドからするとなんとも懐かしい香りがして、微笑ましくはあったが、アデクの肚が良く読めなかった。
　アデクが戦った二人の子どもに少し講義をして、下がらせた後すかさずレッドは背を向けていたアデクに尋ねる。
「アデクさん、どうして俺たちに突然このような事を……」
　アデクが答える前にエリカが静かに口を開いた。
「初心忘れるべからず……ですね」
　レッドはその言葉に如何な意味があるのか注目することにした。
「……左様。わしは二人に……いや特にレッドに対し、一つの警鐘を鳴らせてやらねばならんと覆ったのだ」
「警……鐘？」
　レッドはそれに対して首をかしげた。
「ここのリーグを辞める直前、お前さんの戦いを見させてもらった。そう、あの選挙の直後、シロナと戦った時のな」
「そうだったのですか？　私は全く気づきませんでしたが……」

エリカと同様に、レッドも全く気配すら感じはしない。
「ワタルの隣におったからな。気づかぬのも無理はなかろう。話を戻そう。わしは、シロナと戦っていたお主を見て思ったことは二つある」
レッドはアデクの次の発言に耳を傾けようとする。
「一つは、その力はきっとわしをも簡単に超えているだろうという事。もう一つは……」
アデクは途端に口ごもったので、レッドは次の発言を促す。
「……、もう一つは、強さにかまけて己の修練を怠ってはおらぬかと思ったのじゃ」
「え？」
アデクは、レッドの疑問をよそに続ける。
「お前さんは、あれほどギリギリの状況で勝ったにも関わらず、それを気にする素振りをさほど見せはしなかった……。これは、お前さん自身が『勝てば、それで良い』と思っているからではないのか？」
「違いますよ！　それは単に、勝てた事があまりにも嬉しくて……」
レッドはそういって弁解しようとしたが、アデクは
「その気持ちは分かる。勝てば誰でも嬉しい物だ……。だが、舞い上がってはならぬだろう。これは勝てばそれで良いと思っているから左様な事が出来るのよ」
アデクの言葉はレッドの心中深くに突き刺さる。

「初心忘れるべからず……。お前さんもまだ駆け出しの頃、わしの弟子のようにポケモンと戦い、どうすれば勝てるのか試行錯誤した時期はあるだろう。その時期を思い出すのだ」
「はい……」
　レッドの心中は満身創痍だが、それでも何とか答えようと試む。
「イッシュ地方は、ポケモンをはじめお前さんたちが内国では見る事のなかったものが数多くあるだろう……それを楽しみ、満喫するのは旅の醍醐味の一つよ。それを満喫しつつ、初心に帰って己を見つめ直すのだ。それを基に成長できなければ、それ以上の向上は望めないぞ」
　アデクは先ほどまでの飄々とした口調とは打って変わり、重い口調で話している。
「はい……しっかりと肝に銘じます！」
　レッドはそう、悟りを得た僧侶の如く目を輝かせながら言う。
「いい目だの……。一か月の延長させた甲斐……少しはあったようだの……」
　アデクは後半、笑い混じりに言っている。
「え？」
「初心に帰らせようと思い、わしはその勝負を見た直後、ワタルに『レッドの入国許可はやはり特例でというわけにはいかん！』とだけ言って立ち去ったのだよ」

「それであの時のワタルさんはあんなに呆れていた目をしていたのですね……」
エリカはその時のワタルを思い出したのか、くすくすと思い出し笑いをしている。
「なるほど……そらワタルさんもいい迷惑と言う訳だ……」
レッドも力の抜けた笑いが図らずも漏れ出る。
やがて、練習場の中は笑いに包まれたが、弟子たちはびっくりして振り向いていた……。

……

―練習場の外―
その後、二人は練習場の外に出た。
「ふう……、なんかさっぱりした気分だよ」
レッドはアデクの諫言を聞き、辛くはあったがどこか草原に風が吹くかの如き爽やかさを感じていた。
「さっぱりしたとは……？」
「自分の欠けている所を沢山指摘されるっていうのはもっと悪い気分なんだろうけど……、言い換えれば俺にはそれだけ伸びる余地があるって事だよな！　よし、これから頑張……」
と、気合を入れ直して頑張ろうと背伸びしたその刹那。

眼鏡をかけた中年の男が二人に近寄ってきた。
「そこで頑張ろうとしている貴方！　突然ですが初めまして……」
……
長々と説明され、男が帰ると二人の手元には何やらケースが置かれていた。
「な……なんじゃありゃ。そしてなんじゃこれ」
「早口で聞き取りづらかったですが……、私たちのようなトレーナーの行動を逐一評価するお節介なイベント……メダルラリーと言うのがあるらしく、このケースがその証だそうですわ」
「お前良く聞き取れたな……。で、このケースにメダルが貯まっていくって事か？」
レッドは頭の中に残っている情報を集積させながら、エリカに確認する。
「だそうですね。しかし本当にお節介ですわ……、ストーカー紛いのこんなイベント早いところ……」
と言いながらエリカはケースを開く。
するとピンク色の一つのメダルが日に反射され、輝く。
「まあ……これは中々……」
エリカの目の色が変わった。恐らくメダルのせいだけではないだろう。
「ホントホント、気持ち悪いしさー……っておいエリカ？」

レッドはエリカの様子が変わった事に気づき、改めて尋ねる。
エリカはそそくさにケースを閉じ、レッドに向き直る。
「し、しかしですね、貴方、こういうのも悪くないのでは？」
「は？」
レッドは急に考えが変わったエリカに不審を抱いたが、まさかと思ってケースを開くと意味を理解し、そして観念した。
そう、エリカは美しいものに弱いのだ……。
その後二人はポケモンセンターに宿泊し、２０番道路を通ってタチワキシティに到着した。
どうでもいい事だが、レッドはサンギタウンでトレーナーの歩き方を見つけ即購入した……。
―タチワキシティ
雲と煙に覆われがちな街。
人々は活発だが、その方向はあまり宜しくない方向に向けられる事があるとかないとか。
最近有名になったロッカージムリーダー・ホミカの登場によって、ロックも絶頂を迎えつつあり、変な方向に暴走し始めている事は恐らく気のせいだ。

その一方で映画村のポケウッドがあり、日夜スタッフたちが高名な映画を作り上げている。

―2月3日　午後1時　タチワキシティ―

「なんだか、危険な匂いがする街ですわね」

ゲートをくぐり抜け、タチワキに到着した途端の第一声がこれである。

雲と煙という陰鬱な背景と灰色系の建物が林立するとこうも嫌な香りがするものかとレッドまで陰鬱な気持ちになっていた。

とりあえずジムを探そうという事で、二人は町中を探し回る。

―午後1時半　同所―

街の南東部に位置する、小さめの建物。そこには上に図案化されたモンスターボールと『タチワキシティ　ポケモンジム　リーダー　ホミカ　ポイズンライフ！　ポイズンライフ！』と何とも奇妙な看板があり、おそらくここだろうという事で入る事にした。

―タチワキジム　地下―

入ると、ドラムやベースの協奏曲……要するにロック風の音楽が漏れ聞こえる。

エリカはあからさまに嫌悪感を示し、レッドが心配するが

「こういう曲はあまり趣味ではありませんが……止むを得ませんわ」

と言って気丈に振る舞う。当然と言ってしまえばそれまでだがなんとも健気だ。

階段を下りきると、ドアが見える。
押して入ろうとすると、前に居たおっさんが話しかけてきた。
「何ですか！　今急いでいるんです！」
エリカは聞きたくもない曲を聞かされて苛々しているのか、声を荒げる。
「わっ……ごめんなさいっす……」
「いや、貴方が謝るような事じゃないですよ……。こいつ今結構苛立っているんで。それで何用ですか？」
レッドが男をフォローした。エリカも我に返って男に謝る。
男は悲しそうな顔をして……
「うう……やっぱり覚えてないですか……」
「やっぱり？」
「いえ、こちらの事っす。自分、トレーナーのジム挑戦に関するガイドをするガイドーと言います！　以後宜しくっす！」
と言ってガイドーは深々と頭を下げる。
「こちらこそ。えっと……ガイドーさん、ここは随分と……お騒がしいですが……想像はつきますけど……何をされて……おられるのですか？」
エリカはもう疲れているのか絶え絶えの声で話している。

「だ、大丈夫っすか？　え、ええとですね、ここはジムであると共にライブハウスになってるんすよ！　だからここで日夜練習に励んでいるわけっすねー」

ガイドーは最早慣れてしまっているのか、構わずすらすらと喋る。

レッドも段々となれない大音量に気が滅入られ始めている。

「という訳で、ジムリーダーをはじめとする人々は練習しちゃってますけどー、構わずガンガンチャレンジしちゃってください！　あ、ワンドリンク」

ガイドーがそう言ってワンドリンク、つまりおいしいみずを差し出すと、レッドはすかさず取ってやつれているエリカに飲ませる。

「あ……あのー。レッドさん？」

ポケモン用の水を飲ませるという予想外の行動に出たレッドをガイドーはそう言って呆然としながら見る。

「ごめんなさいガイドーさん。今もう早くも体力が黄色ゲージの人が居るんだ」

「そ。そっすね、一応水は１０本ぐらい常備しているんで、ツーモアドリンク差し上げるっす」

一本飲んでエリカは一応生き返ったので、二本はポケモン用にとレッドは有難く受け取っておいた。

―ジム内―

とりあえず、ポケモン勝負で横に居る二人を黙らせ、ホミカに近づく。
フウロから聞いた通り、小柄で大きなベースを弾いている。なんともそのギャップが可愛らしい。
それはともかくとして、レッドはホミカに話しかけた。
「いくよ！　あんたたちの理性、ぶっ飛ばすから！」
急に何を訳の分からない事をとレッドは思ったが、ホミカはドグロッグとモロバレルを繰り出した。
とにかく勝負をしなければ始まらないので、レッドはカメックスをエリカはラフレシアを繰り出す。
「ラフレシア、モロバレルにヘドロ爆弾です！」
エリカはジムが無音状態になって精神が安定したのか、いつもの明るい調子に戻った。
ラフレシアはモロバレルに毒をくらわせたが、案の定一撃では倒れない。
「カメックス！　雨乞い」
フィールドは雨模様になる。
特にドグロッグが嬉しそうな表情を見せない事からレッドはドグロッグの特性をきけんよちだと見抜く。

「モロバレル！　カメックスにキノコの胞子！　ドグロッグ！　剣の舞！」
ホミカの指示にすぐさまポケモンは反応する。
そして、モロバレルはカメックスを眠らせ、ドグロッグは体を華麗に舞わせ、攻撃力を上げたようだ。
「ラフレシア！　モロバレルにもう一度」
ラフレシアは同じく、ヘドロ爆弾をくらわせるが、流石に二撃では倒れなかった。
「眠ってしまったら仕方ない……行け！　ラプラス！」
「モロバレル！　ラプラスからギガドレイン！　ドグロッグ！　ラフレシアにどくづき！」
ラプラスは特防の高さがあってか一撃では倒れなかった。しかし、ラフレシアは攻撃上昇もあってか結構な深手を負う。
そしてモロバレルはギガドレインの吸収と折からのくろいヘドロで回復。ほぼダメージ分を取り返した。
「ラプラス！　吹雪！」
レッドは吹雪の威力に賭けた。
見事、吹雪は発動しモロバレルは一撃で倒れる。ドグロッグは体力を三分の二失った。

「やるじゃん！　次はもっと爆裂して！　ペンドラー！」

……

こうして、レッドは2体エリカは1体失い、残ったポケモンは緑ゲージの凡勝を収める。

「あーあ！　不意打ちすればもしかすればもしかするかもって思ったのにな！　ほんと負けてんなよなホミカ！」

なんつーやり方で勝とうとしたんだとレッドは突っ込もうとしたが、突っ込むとベースで頭ぶっ叩かれそうな気がしたので止めにした。

「てのはほんの冗談で……、いくらあんた達が相手だったのは言え負けたのはすっごく、くやしーけど……、一切手抜きなしのガチンコだったし！　スッキリしたし！　ありがとね。はいこれあたしに勝った印！」

こうしてレッドとエリカは三つ目のバッジ、トキシックバッジを手に入れた。

エリカがお辞儀をし、適当に引き上げようとするとジム内にホミカの仲間と思しきスキンヘッズの男が入ってきて……

「ホミカさん！　大変っす！　今港にプラズマ団を名乗る連中が……」

「適当な事を……って思ったけど、そういやチェレンとかいう隣町の同僚がウチが襲われたとか言ってたっけ……。すぐ行くよ！　あんた達もついてきて！」

という訳で二人はホミカについていくことにした。

―タチワキシティ　船着き場付近―

三人が船着き場に到着すると、ヒオウギの時と同じ制服を着た黒ずくめの集団が屯(たむろ)していた。

その様を見てホミカは

「あんたたち……ホントにプラズマ団？」

そう言うと一人の下っ端は

「そうとも！　俺たちはプラズマ団！　二年前に王として崇めた男に裏切られ、我々のイッシュ地方征服は露と消えた……。だが、俺たちは諦めはしない！　ネバーギブアップ！　既に新しい〝センセイ〟とか〝ボス〟達も加わって比べ物にならないくらいパワーアップした俺たちは、もう新たな計画を」

エリカはセンセイとボスという言葉に少し眉を動かせる。

「おいこのバカ！　喋り過ぎだっての」

と言って隣の下っ端が下っ端の頭を引っぱたいた。

「いてて……、あ……あれ。おい、リーダーの後ろの奴の顔、見たことないか？」

引っぱたかれた下っ端が頭を上げると、もう一人の下っ端にそう持ちかける。

「え？　……おい！　こいつらスペシャルインポータント注意人物じゃねえか！　レッ

ドにエリカ！　とりあえず引いて、ヒウンのセンセイが居る所に……」
「何をゴチャゴチャ抜かしてんだよ！」
　業を煮やしたホミカが思い切り地を踏んで威嚇する。
「ヒェッ……！　プラーズマー……」
　と言って、下っ端たちはどこぞへと逃散していった……。
「チッ……逃げたか……。それにしてもあんた達、思ってたよりよっぽど凄い人たちなんだねえ。顔見ただけで逃げていくなんて……」
　レッドはデジャヴに襲われたが、気のせいだろうと思う事にした。
「恐らく、ヒオウギでの一件があちらにも伝わってるせいかと……」
　エリカはそう推測する。
「それにしてもセンセイに新しいボス……？　一体何のことだ？」
　レッドは頭を抱えてひたすら思索するが、その脳みそで考えられることなどたかが知れているのですぐにやめた。
「さあね。あたしの知った事じゃないよ……。さてと、あんたたちこれから次のジムに行くんでしょ？」
　レッドが頷くと、
「次のジムはここから海を渡ったヒウンシティっていう馬鹿みたいにデカい街にあるか

ら、あと、リーダーはかなりの変わり者だけどあんま気にしないでね」
　レッドは遂に音に聞く、摩天楼の立ち並ぶ大都市中の大都市、ヒウンシティに足を踏み入れる事に少し胸を躍らせる。
「あたしはもうライブの練習あるし戻るけど、あんたたちはヒウンに行ってついでにでもいいからプラズマ団を追いかけて。何か……二年前よりももっと凄いことを企んでる。そんな気がしてならないんだ……」
「わ……分かりました」
　レッドは少しだけ後ずさりしながら答える。
　エリカは立ち去ろうとするホミカに対して
「お待ちください！　貴女はイッシュ地方全体の危機よりもライブの方が大事なのですか!?」
　エリカがそう言うと、ホミカは立ち止まって
「きっとあたし一人……ううん、きっとイッシュ全員のリーダーがかかっても止められない。今のプラズマ団は二年前の何倍も何十倍もヤバい組織になってる……。あの下っ端の言葉、冗談には聞こえなかったからさ。だからあたしは無駄な事にジョーネツ注いで、周りを悲しませるぐらいならあんた達のように強い人に託した方がずっと良く思える……。あたしの街は……地方はあんたらに託すよ」

そう言ってホミカはまたライブハウスの方へと歩む。大きなケースを背負う彼女の姿は年齢にそぐわない哀愁を感じた。

そして、レッドとエリカは、ヒウンに行っていた船が戻るのを待ち、様々な思惑が交錯する大都市ヒウンシティへと向かうのであった……。

―第五十三話　嘱託（しょくたく）　終―

第五十四話　藝と数寄

―２０１４年（平成２５年）某月某日　某所―

男ははたと気が付くと、灰色の地面が見えている事に気が付いた。
それに風を感じる。強い北風だ。いつの間にか外に居たようだ。
訳も分からないまま、屋敷に戻ろうと後ろを向いてみると、見たこともない高い建物が己が眼中に入る。
「こ……ここは天界か!?」
自らが、信長公の安土城に登城した時……いやそれ以上の衝撃をこの男は感じていた。
参陣した覚えも無いので本当に死んだわけでもない。何も把握出来ないので目を卵のように見開かせて首を上下左右に回していると、次から次へと初めて見るものが目に入る。
そして、首を右にやると漸く見覚えのある人影か見えた。
「宗匠……?」
そこには、禿頭に苦労の証がみてとれるホウレイ線の多い老顔。

何より〝宗匠〟の特徴といえる黒衣。
それで男はあれが宗匠こと千利休であると確信し、喜びのあまり声を上げながら駆け寄った。
「宗匠！　宗匠ではありませんか！」
「古織様…貴方もこの場におられたのですね」
利休も同じくこの状況に当惑しているようだ。
「おや、宗匠、襟に何か挟まっておりまするぞ」
織部はめざとくも、利休の服装に違和感を覚え、それを指摘した。
「これは豆です。童に豆を撒かれましてな……、どうやら今日は節分のようですな」
「豆をぶつけられたのですか!?　宗匠になんと不届きな……、その小童どもを叱りつけて」
織部はそう言いながら北の方向へ向かおうとするが、ふと織部は気付く。
「む!?　そもそもどうしてそんな路傍にいるような糞餓鬼が豆まきなぞ……」
「どうやら、ここの世界は我々とはちと慣習が異なるようです」
「そ……宗匠!?　一体それはどういう……」
世界という単語に引っかかった織部は思わず利休に尋ねる。
「少なくとも、我々の知らぬ存ぜぬ世界に居るという事は間違いないでしょうな」

あまりの断定口調だったので、それが心に突っかかった織部は利休に聞き返す。
「私は、古織様より少し前にこの世界に着き、色々見聞き致しました。すると、ふと〝かれんだあ〟なるものが目に付き、そこの年を見ると……２０１４年と書かれておりました」
織部はその一言に驚嘆せざるを得なかった。
「右近殿より聞いたことがありますぞ。確か、南蛮では我々とは違う暦を使っているとか……」
「恐らく私と古織様が今居る所はその、〝南蛮〟。そして我々の居た頃とは随分と後の時代に居るという事となります」
利休は、織部とは反対に淡々とした口調で喋る。
「何故（なにゆえ）、我々はこのような所に……」
「それは皆目検討もつきませんな……」
織部の心中は、元の時代へ戻るという事より今の状況に対しての疑問が強かった……。
―少し前　ヒウンシティ　プラズマフリゲード　甲板―
プラズマフリゲード。それは大時代の帆船と見せかけたプラズマ団のアジト。
大航海時代に活躍した私掠船（しりゃくせん）をも彷彿させる容貌だが、それと実態は大して変わらな

いのが何とも皮肉である。
さて、そんな甲板の右舷で一人釣りをしている黒服の男が居た。
その男に変わった格好をした、派手な装飾の眼帯をつけた男が数人の部下を連れ話しかける。
「釣果はどうですかな。サカキ殿」
サカキと呼ばれた男は苦々しい顔をしながら
「捗々(はかばか)しくないな。ゲーチス殿」
と釣り糸を上げながら答えた。
「そちらはどうだ」
と続けてサカキがもう一度釣ろうと釣り針にオキアミをつけながらゲーチスに尋ねる。
「アクロマが何やら面白いことを考えてますな」
「ほう、如何なる事だ」
サカキは、オキアミをつけた釣り糸をもう一度水中に沈め、興味深げに聞き返す。
「先人達の知恵を借りるとか」
「君主論でも読み返すのか」
「違う。ディアルガとデオキシス等の時の力を利用して、先人達をこの場に引き摺り出

すのだそう」
「酔狂なことを考えるな……」
　サカキは溜息をつく。アクロマに対しての物なのか、それとも本日ゼロ匹という散々な釣果に因るものかは定かでない。
「酔狂かどうかは見てから決めてやるつもりです。あの男の知識と技術力は神業と言うべきものですからな」
「オーキドも同じことを言っていたが……、二人で徒党でも組むつもりなのか」
「ワタクシは別に構いませんよ。あの二人中々に上手くやっていきそうですしな。天才二人が組んでくれれば我々の計画も更に盤石になるというものです」
　ゲーチスはそういうと静かに笑う。
「しかし……、徒党を組むならまだしも、もしも我々の敵に回れば手が付けられなくなるぞ」
　サカキは釣り糸を垂らし水に波紋を作るウキを見守りながら、そう二人を警戒する。
「アクロマとワタクシはそれ程仲良くありませんが、我々と組むロケット団に与しているオーキド殿が彼を引き留める限り、何も恐れる事はありますまい」
「ふむ、それもそうか……おっ、これは……」
　サカキが納得しかけたその時、釣り竿に力が掛けられる。立ち上がって思い切り竿を

引き上げようとするが、水面にバスラオの頭が見えたかと思いきや逃げられてしまったようだ。

「チィ……」

サカキは悔しげな目線を海に送り、イス代わりにしている空のクーラーボックスに座りなおした。

「ルアー付の竿、お貸ししますよ?」

ゲーチスはそう提案するが、サカキはすぐさま

「馬鹿をいえ、私はいつでも一本気だ。自分の腕で釣り上げにゃ、欲しいものは手に入らないと思ってるんでね」

啖呵を切って、ゲーチスの提案を却下した。

「悪の組織の長が一本気……」

「悪いか?」

「いえ。殊勝な心がけだ事で……。ロケット団は良き主をお持ちですね……」

そう言ってゲーチスは艦内へと戻っていく……。

「にしても……逃がした魚はでかいな……。1メートルは超えてたな」

サカキはぶつぶつ独り言を言いつつ、また釣り針にオキアミをつけるのであった。

―2月3日　午後3時　ヒウンシティ　プライムピア―

レッドとエリカはタチワキを出発して、ホミカの父と名乗る船長の船でおよそ三十分ほどでヒウンシティに到着した。

「うわあ……！」

船上からでもそことなく大きさは伝わったが、実際に目の前に現れると迫力は段違いである。

二人は街のあまりの大きさに圧倒されていた。

「う……噂に違わない大都市ですわ……」

「タマムシよりも大きいな！」

レッドは意地悪半分にわざと大きな声で言って見せる。

「そんな事……い、いえでも、タマムシと同じくらい大きな街って事は認めてあげてもいいですわ！」

エリカは上ずった声で言った。流石の彼女もこの摩天楼の前には自信を喪失してしまうようだ。

いつもより少し弱気だが、意地っ張りな彼女を見て満足したレッドは

「さてと……こんなに大きいんじゃジムも探せないよ」

「貴方、トレーナーの歩き方に書いてあるのでは」

「おっと、そうだな」
と言ってレッドはトレーナーの歩き方をリュックから取り出す。
取り出している間、エリカは周りの風景を見、ある事に気付く。
「まあ！　貴方！　見てくださいよ」
「えーと……あ、これだこれ。で、どうしたんだよ」
歩き方を見つけ、リュックを背負い、珍しくはしゃいでいるエリカに反応する。
「ほら」
エリカが指示した先には、大きな黒い帆船があった。
「い……今時帆船？　時代遅れじゃ」
「そんな事ありませんわ！　サスケハナ号にメイフラワー号……色々ありますけど風に任せながら様々な期待と不安を積みながら進む船……それが帆船というもののロマンですよ！」
「いや、多分だけど別にこれその船じゃねーだろ……ってか風に任せるって、サスケハナ号って蒸気船じゃ無かった？」
レッドは小学校の時に何故か覚えていた歴史の授業の一幕を思い出し、そう言う。
「あら、良くご存知ですわね。ですが、それは高度なボケですわよー」
とエリカはおどけたように言ってみせてさっさと先に進んでいく。

「ああ！　もう、待てよー」
　通路に上がると、一人のピエロが話しかけてきた。
「ようこそ！　ヒウンシティへ！」
　挨拶すると、ペラペラとヒウンラリーの説明を受け、自転車を受け取ったが……
「いや要らないっすよ。俺持ってるんで」
　エリカと旅して以来全く使ってないが、事実なのでそう言った。
「そーですか！　ではそちらのビューティフルなお嬢様は!?」
「え……あの、私は……」
　エリカは唐突に尋ねられたので、当惑している。
「そういやエリカは持ってないんだっけ?」
「え、ええ」
「じゃあ貰っときなよ。今度ツーリングしようぜ！」
　という訳でエリカ用に女子仕様の色の自転車を貰うのであった。
　ジムに向かうので、その旨を伝えてピエロと別れる。
「それにしてもラリーする為とはいえ自転車を気前よく、くれるとは……」
「あのー、貴方」
「ん？　今すぐにでも一緒に走りたいって?」

「それは是非とも出来るならばしたいですけど……、私、乗れませんよ？」
　エリカの口から衝撃の事実が発せられる。
「はぁ!?」
　レッドからは図らずもそんな言葉がついて出た。
「私の両親、自転車なぞ危ないからやめなさい！　という方針だったもので」
「うう……じゃあ、返しに行ってくるか」
　レッドは頭を抱えながらそう提案する。
「いえ。折角ですし持っておきますわ。折り畳みですからそこまでスペースとりませんし」
　と言ってエリカはバッグの中に自転車をしまい込む。
「そか……、にしても残念だなあ」
「はい？」
「エリカと一緒に道路を駆け抜けてみたかったなあって」
　エリカはその言葉を聞くと、申し訳無いような表情をする。
「……」
「ああ、そんな気に病むな。あくまで願望だから。じゃ、ジムに」
「あ……しかし、ホミカさんの依頼は？」

「ついでも良い。って言ってただろ。先にジムに行こう。プラズマ団はその後だ」
という訳で二人はまず、歩き方通りにジムにへと向かう。
―午後3時半　リバティピア北―
この先ポケモンジムという看板を見つけ、道なりに先へ先へと進んでいくと今度は結構派手に、そして分かりやすくモンスターボールの看板が見えた。
ポケモンジムだと目星をつけ、いざ行かんと入口へ向かうとガイドーが入口を阻んでいる。
「あのー、すみませんけど退いてくれませんか？」
レッドは少し不愛想な口調で、ガイドーに話しかける。
「あ、お二人さんじゃないすか！　いやー、ごめんなさいね。今ちょっとリーダーが」
ガイドーはかくかくしかじかとアーティが居ない理由について話してくれた。
どうやら、事件だ。などと言って風来坊の如くどこかに逐電してしまったらしい。
結局、リーダーが居ないのではどうしようもないな。仕方ないのでポケセンで時間を潰そうか等とレッドが考えていると、褐色の少女がガイドーに話しかける。
「あれあれ、またアーティどっか行っちゃったの？」
「おー、アイリスさんじゃないですか！　実はかくかくしかじかで……」
アイリスと呼ばれた少女は、ガイドーから事の次第を聞くと呆れた表情をしながら

「アーティっていつも何処かに消えてない？　創作に行き詰ったーとだけ言ってどこかに行っちゃったりさぁ……。あれ……あ！　これはこれはようこそイッシュへ、伝説のお二人さん！」

そう言うと、アイリスは深々と頭を下げる。

二人もつられたように頭を下げて、そしてエリカは何かに感付いたように

「もしかして貴女は……。若くしてワタルさんと鎬を削る程の全国でも指折りのドラゴン使い、アイリスさん……ですか？」

「お前はどこまで物を知ってるんだよ……」

今更の事だが、エリカの知識の多さは尊敬を通り越して呆れるぐらいである。等とレッドが思っているとアイリスは

「おー……。噂には聞いてたけどやっぱり凄い人なんだ。宜しくね、エリカさん」

「光栄ですわ。こちらこそ宜しくお願い致します」

エリカとアイリスはそう言って握手する。

「つーかなんでお前そんな事知ってるんだよ！」

「何か月か前にテレビか何かでやっていた記憶がありましたので……。〝蒼龍〟の異名を持ち、イッシュでも最強のドラゴン使いと名高いシャガさんの手解きを受けた……のですよね」

「そーそー。シャガおじーちゃんには本当お世話になってるよーうん。まだまだあたしより何倍も強いと思うし、厳しいけど、時々は優しいし！」

　レッドはシャガという言葉に反応する。

「シャガってあの……ヤナギさんと同じかそれ以上との噂もあるジムリーダー……ですか!?」

　それに対して、ガイドーが横やりを入れる。

「ええ。何でも、ここ何年かは本気で戦う相手すら居ないようで……。ヤナギ……さんとかいう人も相当の手練れという話はここまで届いてますけど、自分的にはそれよりも上な気がしますけどねー」

　レッドはヤナギの名前がここまで轟いている事に畏敬の念を強め、その上シャガへの恐ろしさが臓腑の汗となって滴り落ちる。

「あはは、そんなに怖がらなくても、シャガおじーちゃんのジムはまだまだ先だと思うよー。あーでも……」

「で、でも？」

　レッドは少し上ずった声になりながら尋ねる。

「おじーちゃん、貴方たちが来るって話が来てから相当に気合入れちゃって……。今日もずーっとソウリュウのどこかで修行しまくってるだろうなー」

「!!」

そのアイリスの発言でレッドの体には図らずとも電流が流れる。

「まーだから頑張ってよ。で、貴方たちはアーティを捜している」

「いえ、事件の匂いとか言っているのでしたら、恐らくプラズマ団も……」

「いやーでもプラズマ団は一昨年壊滅……いやでも関係ないか！　おにーちゃんおねーさん困ってるものね。助けてあげる！」

と言ってアイリスは少し考えたかと思いきや、「ついてきてー」とだけ言って二人の先を進む。

行っている最中に目端に侍が映った気もするがレッドは気にしないことにする。

―サムビア―

気が付くと、街の端から端へと移動していた。

サムビアと看板には書かれてあったが、確かに怪しい雰囲気はする。

さて、そこにたどり着くと、アイリスは

「ここの台から降りて、まっすぐ行くと入り口がみえるんだけど、そこから下水道に入れるんだ！　ね、なんか怖い雰囲気はするでしょ？」

「確かに、なんだかおどろおどろしい感じはしますわね……」

「おどろ……おどろ？」

アイリスはそう言って首をかしげる。
「あー、こいつ時々訳の分からない事言い出すから」
レッドが言い切る前にエリカは
「人を変質者みたいに言わないでください！　おどろおどろしいというのは、どこか気味の悪い感じがするときに」
「うーしじゃ行くか」
とレッドはエリカを無視して、台を降りていく。
「無視しないでくださいよ！　あなたぁ……」
エリカはレッドに見えない糸にでも引っ張られるように追従していく。
「うーん、これでも仲睦まじい……っていうのかな？」
アイリスはそう首をかしげながら二人の過ぎた階段の辺りを見つめるのであった……。
―ヒウン下水道―
中に入って、奥に行くと、やはりプラズマ団が潜伏していた。
とりあえずウォーミングアップ代わりにと3人ほど倒すと、下っ端たちは
「ちい、センセイに強くしてもらったポケモンでも歯が立たないとは……」
「くそっ、俺たちが想像してたよりも何倍も厄介そうな奴らだ……とりあえず俺たちは

撤収！」

プラーズマーと掛け声の如く言いながら出ていく。

「ふっ、他愛もない」

「それにしてもタチワキでも聞きましたがセンセイとは一体誰なんでしょうか？」

「んな事、大した事でもねーだろ。どうせヘタくそな先生が戦い方教えてるだけだってば。それよりも奥にもまだいるかもしれないし……行ってみるか？」

レッドが提案すると、エリカが頷きかけたところで奥から声がする。

「その必要ないよー」

どこか気の抜けたような声の主は、何とも形容しがたい髪をした中年と青年の間ぐらいの男だ。

「もしかしてジムリーダーの……アーティさんですか？」

歩き方で見た記憶で、レッドは尋ねる。

「アーティさんじゃないですか！　貴方の絵、拝見させて頂きましたが中々に良いインスピレーションを感じました！」

エリカはそれ以上に興奮しているのか、感激した風にアーティに話す。

「おー、嬉しいねー僕の絵のファンがこんな所にいるだなんて。さて。そーだよ僕がアーティ。で、奥も探したけど特に怪しい人影とかは無かったよー」

「探していただいたのですか。有難うございます」
レッドに続いてエリカも頭を下げる。
その後もアーティの話が続いて、通りすがりで来たとばかりに去って行った。
さて、アーティが去ってしばらくすると見覚えのある髪形をした男が出てくる。
「やはり貴方たちはすばらしい！　ポケモンの力を最大限に引き出した見事と言う他ない戦いぶりでしたね」
男は素っ頓狂な声で話しだしたので、レッドは肩を震わせて驚いてしまう。
対してエリカは旧知の友人に再開したとばかりに嬉しそうに話しかける。
「あら、アクロマさんではないですか」
「貴方たちとはタマムシで会って以来ですね」
アクロマは声調を整えて言った。
「え？　ああ、アクロマさんか……。帰ってきていたんですね」
アクロマの来歴を覚えていたレッドは、この人物がイッシュ出身だったことを思い出してそう言う。
「はい。少しここに用事があるもので」
「左様ですか……。どの位居られるのでしょうか」
「それは分かりかねますね。もしかしたらずっとここに居るかもしれませんし……。さ

て、貴方がたの戦い、とても良い！　そしてなるほどです」
と言って、アクロマはつかつかと下水道の出口へと向かっていく。
「何だったんだ」
「掴みどころが分からない御仁ですわ……。さて、ジムに向かいますか？　ここはどうもジメジメしてて危険な雰囲気ですし」
という訳で二人は地上に出て、ヒウンジムへと向かった。
―午後４時３０分　ヒウンジム―
ジムに入ると、何とも幻想的な白い繭と思われる城とも呼べる代物が目の前に迫る。
「うわ」
「へえ……これがアーティさんの世界ですか……」
エリカは何とも言えない恍惚とした表情になっている。
アーティの芸術を目の前にしていると、ガイドーが話しかけてくる。
「やあ二人とも。プラズマ団だったりジムリーダー探しでこの広いヒウン中をあっちらこっちら南船北馬のように駆け巡って大変だったでしょ！　という訳でワンドリンクどうぞっす」
ガイドーは二人においしい水を手渡す。
「南船北馬ですか……。この場合は東奔西走の方があっている気が致しますが」

エリカが注釈をつけようとしたので、レッドが無理やりおさえる。
「どもです！　ところでこのジムはどうやって行けばいいんです？」
「驚いたでしょう！　このジムはアーティさんが改装時に物凄い注文をつけまくって、大工泣かせの仕掛けという異名もついている所っす」
ガイドーは喜々としながら語るがレッドは
「いや、そういうのいいですから、行き方をですね」
「おっと。でですね、ここは目の前の繭が出ている方向に従って……」
という訳でジムの仕掛けを教わって、繭から出てくる人に驚いたりなんなりしているうちにアーティの所にたどりつく。
―ヒウンジム　繭の上―
そこは下とはかなり異なる、カラフルな塗料で床を覆っている不可思議な場所であった。
なんとも奇妙な雰囲気に呑まれながらも、レッドはアーティに話しかける。
「やーやー。下水道ではお疲れー」
「いえいえ、こちらこそ」
「ところで、さっきからなんか僕の虫ポケモンが騒いでいるんだよね。君たちと戦いたいって！　僕の虫ポケモンたちはいいよー。ちょいと紹介がてら自慢しちゃうよ」

自ら手の内を晒すという行動にレッドは内心苦笑しながらも聞き、いよいよ四つ目のバッジをかけての戦いが始まる。
アーティはビークインとイワパレスを、レッドはリザードンを、エリカはダーテングを繰り出す。
「ダーテング！　日本晴れ」
天候は晴れになり
「リザードン！　ビークインに大文字だっ！」
「問題、ザマの戦いでハンニバルを撃ち破ったローマの将軍の名前」
「ビークイン！　リザードンに攻撃指令！」
問題を出しているすきに、ビークインの僕が一斉にリザードンに飛びかかる。
「つれないなー！　返答ぐらいしろバカヤローー!!」
と言いながら、リザードンは僕ごとビークインを焼き払いましたとさ。
「やるじゃない。イワパレス！、リザードンにロックブラスト」
ロックブラストは運悪くも5回あたり、リザードンは岩の前に散った……。
……
こうして、レッドは完勝。エリカは2体失う勝利を収める。残ったポケモンは無論、体力は緑である。

「ううう……。分かりきったこととはいえ、やはり君たちは強いねえ。負けても特に異論は無いなぁ。そーだ！　このビードルバッジ。君たちに似合いそうだから、あげるよ」

レッドとエリカは、４つ目のバッジ、ビードルバッジを手に入れる。

「有難うございます！」

エリカはいつも通りのお辞儀をし、レッドもつられて会釈する。この流れはもう定番どころか無意識にやっているものと化しつつある。

「うんうん。やはりお似合いだね！　心なしかより輝いて見えるよ。ところで今二人はバッジいくつなの？」

「四つです」

レッドの返答に、アーティは緩んだ表情を変えずに

「半分か。やるねぇ。ここから一番近いジムはライモンで、あそこは手強いけど二人なら悠々と勝っちゃいそうだね」

その後は長々とアーティの芸術論を聞かされ、レッドは退屈そうに、エリカは徽宗（きそう）だの狩野なんたらだのドラクロワだのターナーだの美術関連らしき物をあげながら熱心に討論していた……。

レッドにとって何より意外だったのはアーティもまた美術史に明るい人物であった

事だ。気だるい口調ながらも的確に返答する姿は関心すると同時に中々に滑稽でもある。

という訳で1時間ほど討論し続けたのだった。

―午後5時30分　ヒウンシティ　ジム前―

繭に一階まで連れ戻され、二人はジムの前に戻る。

「ふう……中々に造詣が深い方でしたわ……。まさか印象派の表現手法をあそこまで語るとは」

「印象派って……落穂拾いとかああいうの？」

「そうです。よく御存知ですわね」

エリカは意外だとばかりに驚いている様子だ。

「ああ、教科書で見た記憶があるしな。さて、もう夕方……っつか夜みたいになってるしポケセン行こうぜ」

2月は冬至より1か月以上経過しているとはいえ、やはり秋と変わらず釣瓶落としな点は変わらない。

という訳で二人は南へ下り、リバティピア付近に出る。

するとエリカは、海を眺めている二人の男に気付く。

「……」

「どしたエリカ？」
　立ち尽くしているので変に思ったレッドは、エリカに尋ねる。
「いえ、何だか気になる御仁が……！」
　エリカは、何かに気付いたのかそう言うと俄に瞠目する。
「肩衣の背に丸と地紙紋の家紋……。これはもしかして……」
　エリカは二人に気取られないように忍び足で移動して右に左に横顔を見た。
「ま、間違いない……ご先祖様ですわ」
　エリカは小さな声で呟く。
「は!?」
　レッドはその発言にそう答えるしかなかった……。
「お静かに。私も信じがたいのですが……。あまりにも肖像画に酷似していますし、その上ご先祖様の隣の方……古田織部様は帯刀もしていらっしゃる。このご時世に帯刀なさっているという事はタイムスリップしたとしか思えません。周りにテレビカメラも御座いませんから、時代劇の撮影とは思えませんし」
「織部って誰だよ……。つーかさお前、自分が何言ってるのか分かってんのか？　タイムスリップなんていうのはＳＦとかそういう作り話の中の概念でだな」
　レッドが彼女を冷静にさせようと試みんと冷静な意見を言うが、エリカは潤んだ瞳と

胸の前に両手を組み、
「ハァ……、こんな所でご先祖様と会えるだなんて、感激ですわ！　私、話しかけて参ります！」
　エリカは最早恍惚とした表情となり、矢の如く二人の元に駆けよる。
「おい！　俺の話を……たくしょうのない奴だ」
　レッドは渋々、エリカの後を追う。
「あの！　千利休様と……古田……織部正（おりべのかみ）……重然（しげなり）様とお見受け……いたしします！」
　エリカは二人の所にたどりつくと、息を切らせながら二人に話しかけた。
「そうですが」
　利休はこう答え
「左様だが……」
　織部はこう答えた。二人とも、自らを知っている人物に出会って安心したのか表情が緩む。
「良かった……。私の見立て違いでしたらどうしようかと……。いえ、お二人はどうしてここに居られるのですか？」
「それがよく分からぬのだ……。何か存じておるか……ええと、ところでお主等は何奴だ。見慣れぬ形（なり）をしておるが」

お前に言われたくないわとレッドは思ったが、ここは堪えようとレッドは抑えて
「全国を旅しているレッドです。それでこいつは」
「供をしている妻のエリカです」
レッドとは対照的にエリカは声の調子がいつもより明るい。
「旅の者か。しかし日の本中を回るとはひょうげた事をするのう」
織部はそう言いながらフッと少しだけ笑う。
「貴方達の時代とは少し意味合いは異なりますが……。しかし、大変ではありますわね」
「話を元に戻しますが、旅の方よ、ここは一体何処で如何様な場所なのです？」
利休はやはり、商人という身分だからか武人の織部とは反対に敬語で話す。
「はい、貴方達の時代からはおよそ５００年程後の、平成という時代です。そしてここは貴方達のいう南蛮の……そうですわね、集大成といえるアメリカという国の一地方イッシュ地方の中心都市、ヒウンシティという場所ですわ」
「ほう、５００年後……その上異国でござるか。信じられぬ事ばかりだが、日の本はどうなっておるのだ」
織部は当然の質問をエリカに投げかける。
「貴方達武士階級の時代は終焉を迎えて、現在は我々市民による国家が作られる時代になっております。それは日の本だけではなく、明国（中国）も、朝鮮も、そして南蛮も

……大体の国は斯様な仕組みとなっております」

それを聞くと、織部は目を見開かせて2，3歩後ろに下がる。

「か……斯様な大事が起こっていくというのか！　信じられぬ、下々の者供が我々に成り代わって政（まつりごと）を動かすだと……！」

「千変万化とは申しますが、成る程、民が国を営む……。中々に面白そうな世ではありますな」

「しかし、結局日の本ですとお上に従う傾向が強い故、結局、朝廷や幕府等が政府に変わっただけ……いえ、そのお話は置いておきましょう。織部正様、帯刀はお止め下さい。廃刀令が出されており、腰に刀を差すのは禁じられております故」

エリカは織部にそう勧告するが、当然の如く織部は怒り

「何を申す！　刀は武人の魂なるぞ！　それを解けなどというのは」

「古織様。もし正しければこの世は最早武人の世ではないのです。この世が民の世だというのならば郷に入りては郷に従え……。その法に従った方が良き道かと」

師匠の説得に織部は渋々太刀を置く。脇差は発覚する前に懐に隠したが……。

エリカは太刀を取って

「貴方達が元の時代に戻る際、この刀はお返しいたしますのでご安心召されるよう」

と言うが、レッドはすかさず

「おいおい、そんなでかいものどこにしま」
と言うと、エリカはすかさず免状を見せる。
「私、幼少のころ武道は居合と弓道をやっておりましたのでイッシュ含む全国で使える免許証を持っているのです。これが有るとケースに入れておれば咎めは受けませんわ。まさか使う機会があるとは思いませんでしたが、これを機に使わせて頂きましょうか……」
とエリカは静かに頬を緩ませながら言う。
レッドはエリカの弓道している姿の妄想に耽るのだった……。
「刀を使うにも一々許可を取るとは……。関白様の刀狩より厳しうなっておりますな宗匠」
「本当に、武人の時代は終わりを告げておる訳ですな。信じ難くはありまするが」
という訳で、レッドとエリカは二人を元の時代に戻すために取りあえずアクロマを探すことにした。
東奔西走し続けたが見つかる事はなく、二時間たった19時半の頃にはモードストリートに居た。とはいえ、エリカと利休と織部の話が弾んで進まなかったのも要因と言えば要因である。
―モードストリート―

この時間の通りは帰宅する人々のピークが過ぎて、段々と人が少なくなっていく。
とはいえ人はそれなりに居る為静かという訳ではない。
「うーむ、疲れましたな。エリカ殿」
織部はエリカにさも疲れたという調子で話す。
「通りを上へ下へと行きましたものね。仕方がありませんわ」
「ところでエリカ殿は高山寺の烏滸絵を見たことはあられるか」
織部の質問に対し、エリカは少しだけ考えて
「烏滸絵と言いましたら色々種類はございますが……、高山寺でしたら鳥獣人物戯画の事でしょうか？」
「それにござる。それがしにはどうも筆の使い方が達者で、自慢が鼻について笑う事が出来ませぬで」
「そうですか？　私にはなかなか面白い発想だと思えて中々に興味深く、一笑をもたらしましたが。それにあれは無名の僧侶が書いたとのお話が……」
そんな会話をレッドは三人の後ろより見続けて溜息をつく。
自分には全くついていけない次元の話の上に、エリカは俺と話しているよりも楽しそうだ。とレッドはエリカに疑念を持ち始める。
もしかして、エリカは俺と話しているときは無理して明るくしているんじゃないか

……とも思い始める。

さて、そんな疑問をレッドが抱き始めたころ、エリカは行列が並んでいる出店を見つける。

エリカが行列の人に尋ねると、これはヒウン名物のヒウンアイスを求める列だと知り

「そういえばナギさんとかが申しておりましたわね……」

と独り言を呟く。

「エリカ殿、アイスとは如何なるものでござるか」

「アイスと言うのは、日の本にはイタリアという国から船来で伝わった牛の乳を主原料とした氷菓子の一種ですわ」

「い、〃いたりあ〃？」

エリカは織部の当惑した表情を見て、少し考えた後

「えっとですね……。南蛮の国の一つです。この国と同じく、貴方達の時代よりもかなり後に出来た国ですわ。お三方は如何でしょうか？」

と言ってなんとか織部達は納得出来た様なのでお茶を濁す。

「それにしても牛の乳ですか……。古の公家の方々は飲まれていたようですが、アイスなるものでそれに浸るのも良いでしょう。古織様は如何致しますか」

「それがしは気になりますな。そもそも牛の乳など飲んだことが無い上にそれを凍らせ

たもの……如何なる味がするか気になりますな」

レッドは一回だけ頷いて承諾の返事とした。考え込んでいたせいもある。

さて、エリカは並んでアイスを4つ買い、それぞれに渡して食す。

織部は早速と言わんばかりにコーンの上に載っているアイスを半分ほど食べる。

「ほう！　これはなんと申すか……冷たい上に甘うござるな。中々に美味……し、しかし頭が痛くなりますな……鋭い痛みが！　これはまさか……毒!?」

織部は謀ったなと言わんばかりの目線をエリカに向ける。

「そんなにがっついて食べるからですよ……。暫くすれば収まる故、ご安心ください」

とエリカは言って織部を安心させる。

利休は織部の先例を見たせいか、恐る恐る少しずつ食べる。

「い、如何ですか?」

エリカは利休に先祖の前であるせいか、少し畏まった体で尋ねる。

「古織様の言われた通り、確かに美味ではございますが……、ちと甘すぎにございますな、私はもう少し渋うすれば尚宜しいと思いました」

と、何とも茶人らしい感想を残す。

「そ、宗匠！　良いことを思いつき申した！　これを茶の中に入れればアイスに渋さが加わる上に、中々に良い味になるかと思われますが……」

「中々の妙案ではございますが……。点てている間に溶けてしまうのでは？　それに製法も分かりませぬし」

利休は織部の提案を現実的に返す。

「エリカ殿。我らの時代にこれは出来ておるか？」

織部は燃えるような目つきでエリカに尋ねる。

「これとは少し違いますが、シャーベットならば。もしかするとヴァリニャーノという宣教師がヴェネチアというイタリアの地域出身なので、もしかすればご存知かもしれませんわね……シャルバート若しくはソルベットと言えば通じるかと」

「良くわからぬが……。ともかくこれは良い……！　アイスを抹茶に溶かし込んだものを菓子として売り出せば、人気を博すに違いない……さすれば我が瀬戸屋も潤うに違いないのだ！　よし、やってみせるぞ！」

織部の大金時が爆発し、同時に金儲けに燃えている中、レッドは一人孤独感に包まれながらアイスを食す。心の中の感想は美味しいなぁ……だという。

アイスを食べている最中、レッドの疑念は段々と確信にへと変貌を遂げる。

何しろ、こんな時でもエリカは全くレッドに話しかけないのだ。やはりエリカは自分と話しているときよりも、こういう教養のあってユーモアのある人と話している方が楽しい……。

織部や利休は非現実的にしても、マツバのような人がもっとエリカの近くに居れば俺とは旅どころか相手にさえしなかっただろうな……とレッドは思う。

それと同時にもう一つの疑念が浮かび上がる。

はたして俺は、エリカの相手に相応しいのだろうか？　という疑念だ。家柄も財力も知力も全く敵わない。そんな奴を相手にして本当にエリカは楽しいのか。そして俺は本当にそれでいいのか……様々な思惑がレッドの脳内を駆け巡る。

そして、アイスを食べ終わったレッドはひたすらに溜息を吐き続けるのだ……。

さて、一行がアイスを食べ終わり、最早今日は絶望的かと思いながら最後の希望とばかりにセントラルエリアにたどり着く。ヒウンシティ最北の広場である。

―午後8時　セントラルエリア―

空はすっかり紺色となって、夜となる。そんな空を見て利休が一言。

「随分と空が明るいですな」

「左様にござるな。エリカ殿の言うとおり、電灯なるものの光が空に届いているからでしょうなぁ……」

そう言う二人の顔はどこか寂しげである。

さて、四人の姿を見たからか否か、一人の人物が近づく。

そう、お目当ての人物アクロマである。後ろには白衣を着た人が2人程いる。恐らく

彼の助手か友達だろう。とレッドは思った。
「アクロマさん！　探しましたよ……」
エリカはアクロマにそう話しかける。
「？　どうされたのです？」
エリカはかくかくしかじかとここまでの概略を話す。
「ほう、成る程……。この着物を着たお二方は過去から迷い込んでしまった……と。で、名前は千利休と古田織部……ふむ」
こういう感じでアクロマはエリカの話を熱心に聞き入っている。
一通りアクロマは聞き終ると
「失敗に終わりましたか……」
と誰にも聞こえないような声で言う。
「え？　何でしょうか？」
「いえ。なんでも。そういう事でしたら何とか致しましょう」
「ま……誠にござるか!?」
織部は歓喜に満ちた声でそうアクロマに叫ぶ。
「はい」
と言ってアクロマは後ろの助手らしき人物二人にアイコンタクトを取って指示する。

「色々とお世話になりました。見聞きせぬ物を多く知れて新鮮でした」
　利休に続いて織部が
「いやいや、本当に二人には感謝しておる！　これは礼だ。宗匠と俺からの贈り物と思って大事に使うと良いぞ」
　と言ってエリカに竹の筒と一緒に匙のような物を渡す。
「何すかこれ……、フワフワが無い耳かき？」
「違いますわよ！　それは」
　エリカが慌てて訂正しようとすると、織部は
「良い良い。それは茶杓と言うての。茶入れから抹茶を茶碗に入れるときに使う物よ。俺の手製だ」
「ええ!?　本当に宜しいのですか!?」
　エリカはかなり驚いた調子で織部に念を押したように尋ねる。
「茶杓など、竹があればいくらでも作れる。問題はあらぬ。さて、戻ったらなるべく早くアイス抹茶の茶会を開かねば……では、これにて御免！」
　こうして、安土桃山を代表する茶人、そして数寄者二人は去っていくのだった……。
「はぁ……今日はなんて素晴らしい日なのでしょう」
「ハハハ……」

レッドは苦笑していた。

「ところで、お二人さんっ！」

アクロマは急に少し大きな声でレッドとエリカに呼びかける。

呼ばれた二人は驚いたが、すぐにアクロマの方に向き直る。

「差支えなければお二人のポケモンを見せて頂けないでしょうか？」

その後、アクロマにポケモンを見せ、やたら褒められたのち、二人は翌日に北の道路で行う勝負を半ば一方的に約束されて帰って行った……。

なんだったろう等と二人は言葉を交わし、そして漸く今日の羽休めをすることが出来た。

―午後９時３０分　ヒウンシティ　ポケモンセンター―

エリカが風呂に入っているとき、レッドはまたも先ほどまでの事を考え込んでいる。

そこでレッドは一つの方策を思いつく。フウロにライブキャスターを介して電話することにしたのだ。

どのようにしたらエリカともっと親密になれるかなどを相談する目的である。

レッドの周りには斯様な事を相談できる程の親密な女子がいない為、一番親しいと思っているフウロに相談すれば何かが見えるのではないかと思ったからだ。

それにフウロは番号を教えてくれるとき『だいたい夜は暇しているから、いつでもか

けてね！』と言ってくれていたのだ。

エリカに誤解されないように、今のうちにという事でレッドはフウロに発信する。

「フウロさん？」

暫くするとフウロが画面上に現れる。画質が高いせいもあるのかフウロの顔が一層可愛く見える。

「わわ、本当にレッド君だー！　久しぶりー！」

フウロはレッドの電話に対して快活に、そして暖かく受けた……。

―第五十四話　藝（げい）と数寄（すき）　終―

第五十五話　輝く情熱、くすみだす情愛

―2月3日　午後9時30分頃　ヒウンシティ　ポケモンセンター　209号室―

レッドはフウロにエリカが居ない入浴中を見計らって相談の為にライブキャスターを介し、テレビ電話をした。

フウロは存外好意的に出てくれたので、レッドは取り敢えず一安心して胸をなで下ろす。

「こんばんは。あの……ご迷惑でしたか?」

そして、レッドは申し訳なさげにフウロに尋ねる。

フウロは、他意のない口ぶりで

「全然!　あたし大体寝るのが23時ぐらいだからこの時間は暇なんだー。それで、どうしたの?」レッドはフウロにエリカとのすれ違いについて話した。

最近エリカと自分の知識の差に更に戸惑っている事。

エリカは自分に対して無理して明るく振る舞っているのではないかという疑問。

何もかもが釣り合わない自分なんかと付き合ってエリカと自分は本当に良いのだろうかという事。

「へぇ……あんなに仲むつまじいのにそんな内情があったんだ……。見ただけじゃわからない事もあるもんだ」

フウロは腕を組んでどこか達観した目をしてそう言う。

「うう……それで、フウロさん的にはこの微妙な不和。どうやって直せばいいと思います？」

「うーん。そだねえ……」

フウロは少し考えたような表情をした後

「あたし、ぶっちゃけちゃうと付き合ったことないし、あまり干渉しちゃいけないと思うんだけど」

彼女がそう言って手を引こうとしたのでレッドは慌てて

「いいです！　女の人の気持ちとか俺よく分からないし……こういう事相談出来るほど仲の良い異性ってフウロさんぐらいしかいないかなー……なんて思ったもんですから」

レッドは顔を赤くしながらフウロに理由を説明する。

実際にこれは本音だが、何とまあ醜い所を晒しているなと、レッドは自覚する。

「……」

フウロは当惑気味の表情をして黙ったままだ。

こんな所を見てしまったので呆れてしまったのだろうか……レッドは破談も覚悟し

ながらフウロの次の言葉に注意した。
「あのさ、レッド君」
「はい！」
レッドはつい大声を発してしまった。余程に次の発言を気にしていたのだ。
「お母さんとかじゃダメなのかな？」
「いやいやいや、こんな相談出来ませんよ！」
「えー？　あたしの中じゃ自分のお母さんってそういうのに関しては一番のベテランだと思うけどな！」
「あの、まさかフウロさん、貴女の母上にはそういう相談をした事が……」
「あはは。そんな急にサムライ口調にならなくてもいいよ」
フウロはいつもの闊達な笑いと純真な姿勢でレッドに接する。
そんなフウロに心を動かせかけたが、レッドはエリカとの約束を思い出しここでは何とか踏み止まる。そして、冷静になって話を仕切り直す。
「で、相談をした事が」
「もー。話を戻さないなら乗ってあげないよ？」
フウロは頬を少し膨らませてそう言った。
「え？」

「だから、相談！　あたしが１８年の人生経験。その範囲内で良いのなら乗ってあげてもいいよ！」
「ほ、本当に？」
　まさか乗ってもらえるとは思っていなかっただけに、レッドは上ずった声をだしてしまう。
「うん。友達の悩みに答えてあげるのは当然の事だよ！」
　友達という単語に少しだけ落胆してしまったのは恐らく気のせいだとレッドは思う事にした。
「あ、有難う！　有難うございます！」
　レッドがそうベットに額づくになって言うと、エリカが風呂場のドアから顔だけひょっこりと出して
「貴方！　何事ですか、先ほどから騒々しいですよ」
　心配したのか、そう注意してきた。
「え！　いやあの、ピカチュウが高い高いしたら喜んじゃってさ、ごめんね」
「ピカ？」
　何となく世話と癒しの為に側に出していたピカチュウを咄嗟の言い訳の材料に使った。

ピカチュウは当を得ない表情で、首をかしげている。「ごめんよピカチュウ」とレッドは小さな声で謝った。

「へー……、にしては随分低い声でしたけど」

エリカは案外に耳聡い。

「そ、そんな事は無い！　ピ、ピカチュウ～。ほら、こんな声だろ！」

レッドは半ば無理やりにピカチュウの鳴き声をまねる。人生でここまで恥ずかしい思いをしたことがあっただろうか（反語）。満面に朱を注ぎながらエリカの動静を待つ。

「……。あ、ラフレシア！　風呂のお湯は啜るなとあれほど……」

レッドの視界からエリカの頭が消える。

ポケモンは浴槽に入りきる手持ちに限り、風呂場で洗っている。エリカはラフレシアやキレイハナなどを洗ってあげているらしい。

「ケホケホ……あづい……」

ラフレシアの声と同時に、浴場のドアは閉められた。

何とかやり過ごしたと思って、ライブキャスターを見直すと誰かが後ろを向いて肩を震わしていた。髪を梳かしていたせいでレッドは一瞬誰だか分からなかったが、何とかフウロだと思い出した。

「フウロさん？」

フウロは前を向き、口を押えたまま、驚きと笑いが混じった目でレッドに応対する。
「へ？　い、いや別に笑ってないよ！　笑ってないってば！」
何も聞いていないのに、そう返すところはやはり抜けている。動きかけた心を何とか鎮めながらレッドはその話には触れずに本題に戻す。
「で……、例えばどんな相談になら乗ってくれるんです？」
「それはレッド君の発言次第かな。答えられることはちゃんと答えるし、無理な時は無理って言うよ
。それでまずは何聞きたい？」
「そうですね……」
レッドは少し顎に手を当てて考える。
「取り敢えずさっきまでのエリカとの経緯聞いてどう思いました？」
「エリカさん、確かにすっごい物知りな人だしねー。その傍らだと自分がバカみたいに思えてくるのはよーく分かるよ」
フウロは先ほどとは違って笑みも交えながらではあるが、真剣に応対する。
「でもね。エリカさんは別にそんな理由でレッド君を嫌ったりはしないと思うな！」
「どうして？」
「だって、エリカさん。君と居る時安らいでいる表情しているもん。嬉しそうとかだっ

たら確かに無理している……ってあたしも思ったかもしれないけど、安らいだ表情はなかなか出来ないよ」
「安らいで……る？」
　レッドは自分でも気づかなかった視点に驚きを隠せずに居る。
「それって、君と居るとすごーく落ち着く。友達……ああ、あたしがまだパイロットになる前の話だけど。その子の情報だと、本当に好きな。愛している！　ってレベルの人の隣に居ると嬉しさと一緒に安らぎも感じるものなんだって」
「へー」
「だから、それって心底エリカさんがレッド君の事を愛しているって事だし、それ以前に好きじゃなかったらここまで一緒についてこないよ！」
「……」
　確かにその通りだが、レッドは不安の表情を浮かべる。
「でもエリカって能とか舞踊とかもやっていたらしいし……それすらも演技でごまかしきれるんじゃ」
「へぇ……。内国人だ」
　フウロは神妙な顔をしてエリカに感心しているようだ。
「まぁ……。本当の所はあたしはエリカさんじゃないし分かりきれないけど。一応、同

じ女の子として分かる範囲で言っちゃうと」
レッドは食い入るような表情でライブキャスターを見つめる。
フウロは途端に黙って、
「……、そんなウォーグルが獲物を狙うときのような目しないでよ。緊張しちゃうから」
と言う。
「わっ！　ごめん」
レッドは注意を受けると即座にモニタから目を離す。
「あはは。良いって良いって。それでー……」
しかし、間の悪い事にエリカがパジャマに着替えて風呂から出てきてしまった。
「わ。エリカが風呂から出てきちゃった……。ごめんフウロさん。また掛けた時に次聞かせてくださいそれじゃ！」
レッドはそう言うと一方的にライブキャスターの電源を切った。
―午後１０時　フキヨセシティ　フウロ宅　寝室―
「え!?　あ……もう。強引だなあ」
そう言うとフウロも携帯電話の電源を切る。
携帯電話とライブキャスターは連動しているのだ。当然テレビ電話にも対応している。

「はぁ……。二人、大丈夫かな」
「？」
フウロが番犬ならぬ番鳥がわりに寝室に置いているウォーグルが首をかしげる。
「あー……何でもないよ。お休み、ウォーグル」
ウォーグルは黙って頷く。
「いや……大丈夫だよ。きっと……むにゃむにゃ……」
そして、フウロはベッドに身を臥せて夫婦の事を案じながら、いつもより少しだけ早く眠りを深くしていくのだった……。
―所戻って　ヒウンシティ　ポケモンセンター　個室―
「ふう……貴方、誰とお話しされていたのですか？」
風呂から上がったエリカがバスタオルで髪を拭きながら尋ねる。ラフレシアはボールに戻したようで、今はキレイハナがエリカの傍らに居る。
「え？　母さんだよ母さん！　暫く顔会わせてないし、電話でくらいならいいかなって」
「……。何故、それほど焦っておられるのですか」
エリカはレッドの挙動に不審を抱いている様子だ。
「焦ってなんか居ないって。えーと、それじゃ歯磨くか。行くぞピカチュウ」
「ピカ！」

ピカチュウはとてとてレッドについて行った。
エリカは怪訝な目線をレッドに送るがそれ以上の追及はしない。
「ふう……困ったお方ですわね、キレイハナ」
キレイハナは当惑気味の表情だがご主人様に合わせようとこくこくと頷く。
こうして夜は更けていった。
―2月4日　午前11時　ヒウンシティ　北部ゲート―
「ひぇー……寒い寒い」
レッドはゲートに入って暖房の暖かさに包まれると救われたような声をあげながらそう言った。
「そういえば本日は立春でしたか……。暦の上と実際の季節が合わないのは暦が上代や中古の頃とは違う故に仕方ないのですが……」
「へ？　上代？　中古？」
レッドはまたいつもの唐突の知識披露かと思いながら尋ねる。
「上代というのは奈良時代。中古は平安時代。特に文学史的にはそう分けるんですよ。それでその頃と現在では使っている暦が違うので季節感が少し違うんですよねー。そうそう、季節感と言えば近世。つまり江戸時代の頃まで春夏秋冬はですね……」
「1～3月が春。4～6月が夏。7～9月が秋。10～12月が冬。ですね」

エリカの話に突如として、横槍が入る。
エリカの傍らより来た男は、昨日織部と利休を元の時代に返した男。アクロマである。
「せ、正解です。良くご存知ですわね。アクロマさん」
エリカは後ろを振り返り、少し驚いた声になりながらアクロマを褒める。
「いえいえ、旅しているうちに身に着いたもので。さて、いつまで経っても来ないからここまで来てしまいましたが」
レッドは分かってない表情をしたが、エリカが耳打ちをする。
「ほら、昨日、アクロマさんが……」
そこまで言われてレッドは合点が言った調子でアクロマの話を聞く。
織部と利休はここに来た記憶を消したうえで元の時代に還したという。
時間を決めていなかったので突っ込もうとしたが面倒なので止めた。
さて、勝負をすると言っておきながらアクロマはさっさと先に進んでいく。
―4番道路―
ゲートを出ると砂嵐が吹き荒れる。
帽子を被ったりして応急処置を取って、しばらく進むと何やら見覚えのある岩を目の前にしてアクロマは止まった。

「……、あら大きな岩が道を塞いでしまっていますわ」
「これは、岩ではなくイワパレスというポケモンですよ」
レッドはその発言でハッとした思いになる。そう、アーティがかのポケモンを使っていたのだ。
「え？　……確かに良く見ますと岩の下に何かありそうですわね」
「よく見ていてください。この、手製のポケモンを目覚めさせる道具で……」
アクロマは何やら機械のようなものをポケットより取り出し、イワパレス達にその機械を向け操作をする。
すると、イワパレス達は一斉に面をあげてアクロマの方向とは反対方向に走り出して彼方へと消えていった……。
「イワパレス達は一体……どこで力が尽き果てるのでしょうか」
イワパレスの方に体を向けていたアクロマはそう言うと、レッド達の方に向き直る。
「そのポケモン達に砂漠を走らせて、死ぬのを待つって……!?　気は確かですか？」
レッドは目を見開かせてアクロマに問い質す。
「かのプラズマ団は言いました。ポケモンの持つ可能性を認めてポケモンをトレーナーの束縛から解放し、可能性を拡散させよ。と。しかし私はそうは思いません。かの劉備が武功を上げる機会が無く、燻(くすぶ)ってしまい、太腿(ふともも)の肉が肥えてしまったと嘆いたよう

に、どんなに有用な才能があったところで使ってくれる物やチャンスがなくては決してその才能は真価を発揮できません……つまり！」

「ポケモンは真価を発揮する為にトレーナーが必要……。そう、言いたいわけですね」

エリカは納得したような真剣な表情でアクロマに返す。

「そうです！　人間は！　寧ろ自らのポケモンの力を引き出すべきなのです！　さて、レッドさんにエリカさん。貴方たちの力は最早誰もが知るところ……。そしてどのようにしてその力を、ポケモンの力を引き出しているのか私にみせてもらいましょうか。行きなさい、ギギギアル！　レアコイル！」

……

アクロマは予想外に手強く、レッドは1体、エリカは2体を失い残ったポケモンもそこそこのダメージを喰らうという辛勝を収めた。

アクロマはご満悦な様子で

「なるほどっ。これはなかなかに宜しい！」

と言った。

「むむう……ただの旅行者かと思いきや……これはとんだ藪蛇だよ」

「失敬な事言わないでください！　アクロマさん中々にお強いのですね……。どこで鍛えられたのですか？」

エリカは感心と同時に興味津々な様子で尋ねる。
「旅していれば自然と強くなっていくものです。ふむふむ……なるほど、エリカさんは本職の通りにポケモンを大事にすることでその強さを導きだすトレーナー。レッドさんはポケモンを鍛えに鍛えて、その力を最大限に活かすことで爆発的なパワーを生み出す……そういうトレーナーですね」
アクロマはたった一回のバトルで慧眼（けいがん）を駆使して正確な分析をはじき出した。
世界最高峰の頭脳を持つ人間の前にはすべてが見透かされてしまうのだろうか……そんな事をレッドは思った。
アクロマはお礼にと、かいふくのくすりとタウリンを渡す。
そして最後にと次の事を話した。
「悔しい！　ポケモンの力を引き出す……その為にポケモンと腹を割って話せればいいのですがね。私にそういう話術に長ける才を天は生憎賜ってくれなかったようです」
いや、それだけの頭を持ってりゃ充分だろ。贅沢言うなとレッドは思ったが、口には出さない。
「それでは、レッドさん、エリカさん。またお会い致しましょう」
こうしてアクロマは砂漠の中をスタスタと先に進んでいった。
「ほんと、訳の分からない人だな」

「疑問を持ち続けるその態度は、デカルトに通じる所がありますわね……」

こうして二人は砂嵐の弱まっている時や場所を見計いつつ北に進み、ライモンシティに到着した。

―ライモンシティ

スポーツと娯楽の街、ライモン。

ジムリーダー、カミツレの理念に基づいているのか否か町全体が煌びやかで大きな建物には大体電飾が使われているほどだ。

東部にはジェットコースターや観覧車などがある遊園地。北部にはミュージカルやバスケットコートなどあらかたの娯楽施設が立ち並び、イッシュ人休日の遊び場としての機能を果たす。

しかしその一方、街の中央には豪壮なバトルサブウェイなる施設が鎮座し、バトルの街という側面もある。

―2月8日　午後1時　ライモンシティ―

さて、着くとジムに行ったが、カミツレが居ないとガイドーが言った。

仕方が無いので、ガイドーの情報を頼りに旧ライモンジムだというジェットコースターに行き、まわりまくると、モデルの人からジムに戻ったと伝えられ、そして二人はジムに再び戻った。

―午後2時30分　ライモンジム―

中に入ると、そこはとても騒がしい場所だった。

場所が間違いだったかと思い、引き返そうとするとガイドーが話しかけてきた。

「わー！　待ってくださいよ！　ここはジムですって！」

「貴方が居るという事はそういう事なんでしょうね」

レッドはため息をついて答える。

「やっと分かってもらえましたか。さて、来たら騒がしくてびっくりしたでしょ？　ここは、なんと、ファッションショーを模した煌びやかなステージなんす！」

「はあ!?」

ファッションショーという事は観客も大勢だ。しかも近くに居る。

コミュニケーションに障害があるレッドはその言葉に卒倒しそうになるが、何とか持ち直す。

「ファ、ファッションショーですか」

エリカは少し興味ありげにガイドーを見る。

「そうっす。このステージを前へ進んでいくにつれて現れる、モデルのトレーナーを次々と倒し、一番奥にリーダーのカミツレさんが居るわけです。で、カミツレさんは電気の使い手ですよ！」

「面白そうではないですか！　貴方、行きましょうよ！」
　エリカはいつになくノリノリな調子でレッドの袖を掴み、行く事を勧めてきた。
「おいエリカ、お前こういうの……好きだっけ？」
「ちょっと恥ずかしいですけど……こういう斬新な趣向嫌いではありませんよ。それに二人でこの細長い道を歩むだなんて……その、け、結婚……式みたいで宜しい……では……ないですか……」
　エリカは最後の方が消え入るように言っていたのでレッドには良く聞こえなかったが、エリカは赤くなっている。勿論、レッドにはそんなのを気にする余裕は無く。
「ううん……。バッジ獲得のためには致し方なし……行くか！」
「緊張したら、水分をこまめに補給しましょう！　というわけでワンドリンクどうぞっす！」
　そしてレッドとエリカは、まるで結婚式のバージンロードを歩くか如くに進み、渡る人が人なだけに観客は熱狂に包まれて二人を称賛している。
　そんな嬉し恥ずかしの道を歩みながらトレーナーを倒し、リーダーらしき人物の前あたりにまで辿りつくと一気に辺りが明るくなり、ＢＧＭが変わりいよいよという雰囲気になる。
　バックスクリーンにはリーダーのカミツレと思しき顔が映るという演出まで煌びや

かなジムである。
そしてレッドとエリカが道を渡り終わって、広い舞台に足を踏み入れる。
すると、なんとも暑そうな格好をした女性が前に歩み出て、二人に話しかける。
「ようこそ。このステージへ。私の愛しいポケモンたちと、貴方たちのポケモン……どちらがより燦然と輝いているか。そして本物であるか！　この場で比べましょう」
そう言うと、カミツレは暑そうな上着を鮮やかに上に剥ぎ捨て、モデルがすかさず汚れないようにと受け取る。息はぴったりだ。
そして、存外美人だったのでレッドは少し時めいたが、エリカにけん制されたのですぐに目を覚ます。にしても不思議な髪形だなーとレッドは思う。
カミツレはゼブライカとデンリュウ。レッドはカビゴン、エリカはキノガッサを繰り出した。
「カビゴン！　地震だ！」
レッドは即時に決着をつけようと、カビゴンの攻撃に賭けて地震を指示した。
しかし、カビゴンはやはり鈍い。
「地面技で力押し？　そんな手では私の輝きをくすませられないわ！　ゼブライカ！　カビゴンにワイルドボルト！　デンリュウ！　コットンガード！」
「コットンガード？」

レッドは初めて聞くその技に首をかしげる。
すると、デンリュウの周りには羽毛が発生し、やがて凝縮されて一つの壁になったが如くになる。
「よく分からないが……防御を上げる系の技か。でもそんな簡単にカビゴンの攻撃は抜けな……っ」
レッドがそう余裕をかましていると、ゼブライカが騎兵の突撃の要領で壁を突き破るが如くに電気を湛えて、閃光と共にカビゴンを劈く。
その衝撃はカビゴンの巨体をも動かし、少し浮いたかと思うとすぐに地についた。
カビゴンにはかなり堪えたようで、体力が半分ほど削れる。
カビゴンはその後、地を思い切り揺るがした。ゼブライカは防御が弱いのか一撃で倒れたが、デンリュウは何の気ない表情で突っ立っている。
レッドの読み通り、コットンガードは防御力を著しく上げる技である。
エリカもそれを読み取ったのか、キノガッサを引っ込めてユキノオーを繰り出す。
天候は霰状態となる。
「中々、読みが鋭いわね……。次はどうかしら？　シビルドン！　スポットライトの中へ！」
すると、電磁浮遊で浮いているのか、何とも奇妙な電気ウナギが二人の目に映った。

「浮遊という事は地震は効かない……！　くそっ、地道に行くしかないな。カビゴン！　眠るだ！」

カビゴンはすやすやと眠りにつく。そしてすぐにラムの実を食べて全快になってすぐ起床する。

「ユキノオー！　吹雪です！」

……

こうしてレッドは2体。エリカは2体を失い、残ったポケモンは少しだけ余裕があるくらいの辛勝に終わる。

「ふう……。痺れたわ。貴方たち夫婦のクールな読みとホットな戦い方に。ホレボレしちゃうファイトスタイルにとっても感激したわ。ここまで来れたのもよーく分かる気がした。さて、これを……」

レッドとエリカは、5つ目のバッジボルトバッジを手にした。

エリカがお辞儀をし、レッドもつられて礼をした後

「貴方たちは太陽と月……ではなく、太陽と太陽！　周りを輝かせ続けるブリリアントスターね！　その調子で進めば、きっと輝ける軌跡を残せるわ！」

カミツレの大げさな賛辞に、レッドとエリカは赤面になる。

特にレッドは美人に褒められているだけに脂下(やにさ)がった顔だ。

「ああそうそう。レッド……だっけ？」
「はい」
カミツレに急に呼ばれた為、緩んだ笑顔を引き締めて答える。
「フウロから聞いてるわ。とても面白くて、カッコいい人だって！　あの子、とても君の事気に入ってるみたいだから、仲良くしてあげなさいよ」
フウロがそんな事を……。かわいいならとにかくカッコいい……。そんな評価にレッドは真っ赤になる。
エリカは聞いてないふりをしているのかどうかは分からないが、平静そうな表情をしている。
その後、カミツレとモデルたちと一緒にステージを下る。弥栄（いやさか）な歓声を後にして二人はジムを出る。
―ジムの外―
「いやー、本当に凄い勢いでしたわねー」
余韻に浸っているエリカにレッドは、どうしてフウロに褒められている事に対し嫉妬したような目線を向けなかったのか尋ねる。
「え？　どうしてって……約束してくれたではありませんか！　私以外の女の人に流れないって……。それを信じているから、私は別に気にしたりしないんですよー。ただ、

勝負の前に見とれているのはどうかと思いましたけどね」
エリカは上機嫌にそう答える。本心から言っているようだ。
レッドは、それに対して
「そうか」
とだけ答えそれ以上の話はしなかった……。
そして二人はライモンのポケモンセンターに入って泊まる事にした……。

―第五十五話　輝く情熱、くすみだす情愛―

第五十六話　二つの伏魔殿

―2月8日　午後8時　ライモンシティ　ポケモンセンター―

レッドはまたもエリカが居ないのを見計ってフウロにテレビ電話していた。

「あ、フウロさん?」

「こんばんはー。今日も寒かったねー……」

少し世間話をした後、レッドは本題を切り出す。

「それであの……、その後なんですけど」

「うんうん」

「どうも、未だにエリカとの距離が縮まらないっていうか……」

フウロは、距離が縮まらないという言葉に反応したのか否か

「あのさー。その事なんだけど」

「はい?」

まさか遮られるとは思ってなかったので、レッドは思わず聞き返す。

「別にエリカさんは、レッド君に対してそんな距離を感じていたり、嫌って思ったりしてないよ!」

フウロは真剣な表情でそうレッドに進言してきた。
「それはヒウンの時にも聞きました」
「うん。君はあたしがそう言うと、エリカさんは演技でごまかしているんじゃないかって言ってたよね？」
「は、はい」
レッドはつい5日前の事なのですぐに思い出して、次の発言に注目する。
「でも、それはレッド君の誤解だよ！　エリカさんは本っ当に君の事大好きだし、誰よりも愛してるよ！　あたし、君たちをヒワマキからフキヨセまで連れて行って、ヒオウギまで連れて行った時。たった数日間で何言ってるんだと思うかもしれないけど、本当に仲良いなーって。あたしも結婚するならこれぐらい仲の良い夫婦になりたいなって心から思ったもの！」
フウロは真剣に、だがハキハキとした口調で話す。あまりの気迫にレッドは言葉を挟む気すら起きなかった。
「でも……」
にも関わらずレッドは未だに不安を抱いている。具体例がないというのが一番の原因だ。
しかし、フウロはそんな煮え切らないレッドの態度にも腹を立てずに

「それでもレッド君がエリカさんの愛情を疑うのなら、レッド君自身がエリカさんに対して……」

そこまでいうとフウロは途端に言葉を濁す。

「対して？」

レッドは次を促す。

「……、これはエリカさんに悪いし……言いたくなかったんだけど……。冷め始めているっていう事なんじゃないかな？」

その言葉でレッドは雷に打たれるのと同じような感触を覚える。

そう、ここ数日でレッド自身が感じていたエリカに対する疑念の心は、エリカに対する愛情が冷め始めているという事なのだ。

彼自身の潜在意識では気づいてはいた。しかし、フウロの一言で潜在は顕在にへと変貌を遂げてしまったのだ……。

「で、でも、そう感じるという事は、あまりにもレッド君がエリカさんに対して消極的なんだよ！　おばーちゃんが言っていたけど、夫婦は飛行機と一緒で飛ばす人と物が息を合わせないと決して上手くいかないって！　だから、レッド君もエリカさんに対してもっと積極的に行動したりすれば……」

フウロは半ば必死に先ほど言った「冷めている」という発言のフォローをする。

レッドは一つ疑問に思ったことがあったのでフウロに尋ねる。
「あの、どうしてエリカが俺の事を心底愛しているって分かるんですか？」
「へ？　分かるんだって！　同じ……女の子だもん！」
フウロはそう言って終わらせようとする。
「そういう大ざっぱなものじゃなくて……何か具体的なエピソードとか……」
「そ……それは……」
レッドの突っ込んだ問いに、フウロは途端に口ごもらせる。
それに、心なしか頬が赤くなっている。
「？　どうして赤くなるんですか」
「っ……、ほ、ほら！　エリカさんの料理はとっても美味しいって！」
フウロは一分程沈黙したと思うと、途端にその場で思いついた話をする。
「……、確かにエリカの料理は店並みと言った記憶はありますけど」
「それは要するに、そう確信する程、多くの回数食べているって事だし、エリカさんが一生懸命レッド君に美味しいものを食べさせてあげようとずっと考えてもいるって事だよ？　愛してる証じゃない！」
フウロはそう言ってエピソードの問いに答えた。が、その表情は何かを隠そうとしている疑ってしまうほどに不審でもある。

しかし、これ以上突っ込んでも答えないだろうとレッドは踏んで
「そうですか……」
と言ってその話題を収める。その後、フウロはレッドを積極的にさせるための案を幾つか出していたがレッドには馬耳東風のようで全く耳に入らなかった。そんなレッドの反応を見て空気を変えようと案じたのか、フウロは話題を切り替える。
「……、あのさ、今どこにいるの?」
「え?　ライモンシティですけど」
レッドは急な話題転換に少し驚きながら答える。
「ライモンかあ……。観覧車とかジェットコースターとか行ってみた?」
「ジム挑戦を念頭に置いてたのであんまりそういう所には……。でもジェットコースターは成り行き上行きましたよ」
「そっかそっか。ジムといったらカミツレさんだよね!　あたしとは先輩後輩の仲だけれど……。派手な人だったでしょ?」
レッドはカミツレの前衛的な服装を思い出し思わず苦笑しながら言う。
「まあ……、何とも普通の人じゃ考えづらい服装はしてますね」
「それがカミツレさんなんだよ!　いつもいつも流行の最先端を行く凄いモデルさんなんだ!」

「モデルね……。なるほど、あのジムや演出にも納得がいきます」

レッドはそう言って腑に落とす。

「改装の落成式の時、あたしも呼ばれたから行ってみたけどあそこを進むのは中々勇気が要ると思うよ……。あたしのジムに来た人とかの話だと負けると容赦なくブーイングが来るとかこないとか」

勝ってよかったなあ……。レッドは心の底からそう思った。しかし観衆の関心は自分よりもエリカの方が高かった気がするのは恐らく気のせいだと思う事にした。

「ライモンの次はどこのジムが近いですかね？」

「ライモンの西にある大きな橋……ホドモエの跳ね橋っていうんだけど、そこを渡るとホドモエシティって街に着くよ！　で、そこにジムがあるんだけどそこのリーダーのヤーコンさんって人がまた凄くてね……」

こうして、フウロと世間話をし続けてその調子のまま通信を切る。

電話を切るとレッドはため息をつきながらベッドに倒れこみ

「……、俺、どうすればいいんだろうな……」

と天井を見つめながら寂しげに呟く。

レッドの隣に居たピカチュウがしっかりしろよとばかりにポンポンとレッドの額を叩く。

「ピカチュウ……、そうか励ましてくれてるのか。ありがとな」

と言ってピカチュウの頭を優しくなでる。すると、ピカチュウは可愛い鳴き声を上げて答える。

ご主人様の役に立てて嬉しいのだろうか……そう思いながらレッドは先ほどまでの事を思考し直す。

エリカへの気持ちが冷めているのは動かようの無い事実だが好きという気持ちは未だに変わらない。皆に羨まれるほどの美人だし、料理は上手いし、床上手だしの非の打ちどころのない妻だからだ。

しかし、実際知的レベルが離れすぎているエリカと話すのは頭を使えば気も遣うし、疲れる。それを今まで感じずに居られたのは愛という感情が強く疲れを感じさせなかったからだ。

だが、冷めているという指摘を受け、奇しくもレッドは愛という感情が冷め、このマイナス点が大きな重荷となって自らの双肩にのしかかっている事を自覚してしまった。

その点、フウロと話している時は気が楽だし、疲れない。

もしかしたら俺はフウロと過ごしていた方がいいのではないか……。冗談半分ではあるがそんな事もレッドは思いはじめる。

色々な事で頭を悩ましていると、エリカが風呂から上がり、他愛も無い話と色々な事

をして床につくのだった……。

さて、ライモンから離れると、ホドモエの跳ね橋。別名『リザードン橋』を渡り二人はホドモエシティに到着した。

―ホドモエシティ

イッシュの玄関口と言われるが、こちらはどちらかといえば貨物的な意味合いが強い。

イッシュ最大の貿易港があり、ホドモエはヒウンに次ぐ商業繁華の街だ。

ジムリーダーのヤーコンは『現代のセシル＝ローズ』と呼ばれるほどの鉱山王で、数々の会社と鉱山を持ちイッシュ第一の資産家・企業家として名を馳せる。地底人にかけて『地帝人』等という異名も持つほどだ。ホドモエ市民からは名士として敬愛されている。

南側はかつて冷凍コンテナだったがヤーコン主導の下再開発がなされ、ＰＷＴ（ポケモンワールドトーナメント）を旗頭とするバトル施設が建てられている。

―２月１３日　午後１時　ホドモエシティ―

二人がホドモエに到着して、街に入る橋を渡ろうとすると黒づくめのプラズマ団が、もう一人の白い頭巾を被った男に話しかけている。

レッドとエリカは気付かれないように遠巻きに動静を伺う。

「なあ！　昔みたいにポケモンを楽しく奪って、こき使おうや！」

黒いプラズマ団員がまずそう言っていた。
いかにもプラズマ団らしい。どうやら勧誘のようである。
「ダメだって。人の物を取ったら泥棒！　それが身に沁みて分かったんだ」
「はあ？　何今更マジメぶってんだよ！」
そう言ってプラズマ団員は、頭巾を被った男をドンと突き放す。
見てられないと思ったレッドが守ろうとして前に出ようとするが、エリカは手でレッドを制して
「お気持ちは分かりますが、ここは情報を聞き出してみましょう」
「ううん……。分かったよ」
と言ってレッドは湧き上がる気持ちを抑えながら、引き下がる。
「俺らの正義は理解されることなく、世界征服を目論んだワルモノだ！　というのが世間の現実だろ？　プラズマ団を辞めたお前にも、その事は理解出来ているはず！　だからいっその事……」
「プラズマ団に戻れ。だろ？　そんな事は出来ない……。N様が悲しまれる！」
プラズマ団員は、Nという名前に反応したのか途端に声量を上げ
「N！　あんなのただの裏切り者の最低の王だろうが！　困った俺たちを見捨て、どこぞへと消え去った！」

「違う！　N様は、自分のしている事を悔やんで……」
「ケッ、散々加担しておいて何が悔やんでだ！　まあそれはいい、俺たちは今すっげーデカい計画をやろうとしてんだよ、何しろあの……」
　何かを続けようとしたところで、プラズマ団員はふとレッドとエリカの居る方向に目を向ける。
　すると素っ頓狂な声をあげて、
「ゲゲ！　赤い男にやたら綺麗な女！」
「赤い男って何だよ！」
　レッドは反射的にそう反論する。
「チィ……、スペシャルインポータント要注意人物がお出ましか……。これは上に知らせないと！　あばよ！」
　捨て台詞を吐くと、途端にプラズマ団員は西の方角へと脱兎の如く消え去っていく……。
　去ると、詰め寄られていた男が二人に近づいて礼を言う。
「あの、大丈夫ですか？」
　エリカが男の容体を心配する。
「いえ大丈夫です！　あいつ昔はプラズマ団で友だちだったんです……。でも、二年前

にポケモンを救いたいと願うN様達のグループと世界征服を狙うゲーチス達の二手に分かれたんですけど……」

　男の話に、エリカは敏感に反応して

「そのお話、詳しくお聞かせ願えますか？　私も概要は何となく分かるのですがあまり詳しいところは何分、異国の生まれなので……」

　とエリカは恭しい口調で頼む。レッドも心情は一緒なので特に突っ込みはしない。

「はい！　高台に私たちの家があるので……」

　そして二人は頭巾の男の案内で高台にへと向かう。

―同日　午後1時20分　ホドモエシティ　元プラズマ団住処前―

　行ってみると家は立派なロッジ風の建物だった。

　男は門を叩いて人を呼ぶ。

　少しすると、黄土色の服を纏い、長い顎ひげをたくわえた老人が数人の部下と思しき人を連れて戸より出てきた。

　男は老人に会うと

「ロット様！　プラズマ団に興味があるという者を連れてきました」

「は？」

　レッドは、『連れてきた』という言葉が怪訝に思ってついそんな言葉が出る。

「赤き服装の男に、洋服を着た麗人……。間違いない、伝説の夫婦だな」
「あの……話が把握できないのですが」
エリカは当惑気味の表情で男に尋ねる。
「何言ってるんですか……。私たちはずっと貴方たちご夫婦の到着を待っていたのです」
「うむ。全国の強者を次々と倒し、その強さは天下無双と聞く……。主等ならば以前にもまして強大化したプラズマ団を倒せる。そう確信したのだ」
「確信……ですか」
レッドはその言葉を反芻する。
「だから、私たちからもお願いです！　どうか、私たちと共にプラズマ団の打倒に協力してください！　ヤーコンさんは土地は貸してくれたけど忙しいし……、N様は行方不明だしで、貴方がたしか頼れる人が居ないんです！」
男と同時にその場にいた全員が頭を下げる。
レッドとエリカは両方とも、これまでの経緯からプラズマ団の強大さはそれとなく感じていたので承諾した。
「本当か！　これは誠に有難い……。わしらからは情報を与えてやるぐらいしか出来ぬが宜しく頼む」

「それで、詳しくお話を……」
　エリカは本来の目的を思い出したかのように、ロットに言う。
「うむ。大したもてなしは出来ないが、家でわしの知っている限りの情報を話そう。ついて参られい」
　―元プラズマ団住処―
　部屋の中央でロットの前にレッドとエリカが居る形で対談は始まる。
　エリカがまず尋ねたことは
「貴方がたはどういう集団なのですか？　プラズマ団と何かしらの関わりがあった事はそれとなく読み取れますが」
「わしらは元プラズマ団だ。二年前、ある少年がプラズマ団を一度壊滅させた件をきっかけにして、せめてもの罪滅ぼしに持ち主と離れ離れになってしまったポケモンをここで世話している」
　確かに周りを見渡すと、ポケモン達が周りを走っていたり戯れている。
「左様ですか。それでプラズマ団が強くなったというのはそことなく分かりますが、一体どうしてです？　二年前に壊滅し、しかも分裂しているのならば普通は弱体化しているのでは？」
「それがまた厄介でな……。少なくとも我々から派遣した元団員のスパイの報告によれ

ば、ロケット団等というカントーの組織と結託しているという事。二人の天才的な科学者を迎え、技術力を向上させて、資金はゲーチスの財産とロケット団ボスのサカキの財産、そして二人の科学者が功績によって得た資金等などで賄っているそうだ」

ロケット団という単語に二人は異常なまでに反応する。

そして、ヒオウギでの騒乱で、エリカが疑問に思っていたことは間違いではなかった事が証明されたのだ。

「ロケット団……。まさか本当に復活を遂げていたとは……」

レッドは徹底的につぶせなかった自分に後悔の念を感じている。

「しかしそれ以上の事は分かっておらん。やはり下の者にはあまり情報を開かないようだの」

その後もロットと話をつづけ、ロットは機械に疎いため案内してくれた男と番号をレッドとのみ交換した。

ロットは去り際、二人に向けて最後にこう付け加える。

「最早、今のプラズマ団はジムリーダーの一人や二人が潰そうとしたところで無駄に終わるまでに膨張しておる。イッシュの……否、全国の命運は二人にかかっている。どうか、頼んだ」

二人はそれに対して自信たっぷりに承諾の返事で返す。

そして二人は、6つ目のバッジを獲得するためにジムにへと向かう。
―ホドモエジム―
入ると、受付嬢らしき人が声をかける。
「いらっしゃいませ！　ホドモエシティ　ポケモンジムへ。こちらのジムはリフトでのご移動をお願いいたします」
目の前にはなるほど、床の模様とは相いれない一つの金属板がある。
二人はリフトを使って地下に下る。
―地下―
リフトから降りると、ガイドーが話しかけてきた。
「どうもー！　ようこそ、ホドモエポケモンジムへ！　地帝人に挑みに来た貴方達にこれを差し上げるっす！」
おいしい水を受け取ると、レッドは周りを見渡す。辺り一面真っ暗だ。
「真っ暗ですね」
「このジムは地下にあるもんで、真っ暗なんす！　でも、リフトの先に着くたびにどんどんライトが付く仕組みで、先に進む手掛かりになるわけっすねー」
ガイドーの説明を聞き、レッドとエリカはガッチャンガッチャンと進んでいき、ヤーコンの所へとたどり着く。

ヤーコンは小太りな体だったが、威厳は随分とある。地帝人という異名もうなずけるなとレッドは思う。

「フン！　待たせやがって！　では、お手並み拝見といくか」

威張った調子で言ったと思うとヤーコンは勝負を始めていた。

ヤーコンはドリュウズとガマゲロゲを、レッドはカメックスをエリカはルンパッパを繰り出した。

「ルンパッパ！　雨乞いです！」

フィールドには、ルンパッパのダンスによって大量の雨が降り注ぐ。

「カメックス！　ドリュウズにハイドロポンプ！」

「アイアイサー！」

カメックスの砲塔より、大量の水が猛き一本の束となってドリュウズに直撃する。

タイプ一致、雨乞い、そして相性……、勝負は決したと思われた……。

しかし、レッドの予想に反し、ドリュウズは気息奄々（えんえん）ではあるが何とか立っている。

「!?」

「甘いな……気合のタスキを忘れてもらっちゃ困る！　ドリュウズ！　ドリルライナーだっ！　ぶち抜け！」

ドリュウズは命が下ると、手にある二本のドリルを使って猪突猛進の勢いでカメック

スに突撃する。
　カメックスは甲羅に籠ってやりすごそうとするが、ドリュウズは甲羅に当たった瞬間、一気にカメックスを地上に出さんばかりの勢いで突き上げる。
　急所に当たったため、カメックスは体力の半分を失った。
「くそっ……見立てが甘かった」
「まだまだいくぞ！　ワルビアル！　ルンパッパにストーンエッジ！」
　ルンパッパに鋭い岩が一斉に突き刺さる。しかし所詮は不一致なので、大した傷は負わずに済む。
「ルンパッパ！　ワルビアルよりギガドレインです！」
　ルンパッパはワルビアルより養分を一気に吸い上げる。一撃では倒れなかったが、体力の三分の二を減らさせて、ルンパッパは先ほどのダメージ分を回復する。
「カメックス、ドリュウズにもう一回！」
　カメックスはもう一度砲塔から高水圧の水流を浴びせる。流石にひとたまりもなく、ドリュウズは金属音を立てて倒れた。
「フン。そこそこはやるようだな！　仕事だ！　フライゴン！」
……
　こうしてレッドは2体、エリカは1体を失い、残ったポケモンはギリギリな状況とい

う辛勝を収める。
「全く。本当、大したもんだ！　噂は嘘じゃなかったようだな」
「いえいえそれ程でも」
レッドは手を後ろにやって照れて見せる。
それが癪に障ったのか否か、ヤーコンは息を強めて
「フンッ！　持ってけ」
こうして二人は6つ目のバッジとなるクエイクバッジを手に入れた。
レッドとエリカがお辞儀をすると。
「ほう。バッジが6つか」
「そういえば……早いもんだな」
イッシュについて二週間。いつの間にバッジは8分の6。7割が埋まった計算になる。いつの間にやら旅の終わりも近づいているんだなあとレッドはしみじみと思う。
「バッジケースを見る限りだと……次はキツいぞ。ま、お前らにとっちゃ造作もない事かもしれないがな」
そう、次はヤナギと並ぶかそれ以上とも言われるジムリーダー、シャガである。　遂にヤナギ以来の強敵と対決するのかと思うとレッドは自然と身震いする。
「貴方。次のジムは確かソウリュウシティ……ですわよね？」

エリカは疑問の目線をヤーコンに向ける。
彼は静かに頷く。
「でしたら、次のフキヨセ、セッカと二つの街と間がありますわ。その間で鍛えればきっと勝てますわ！」
エリカはいつの間にかタウンマップが頭の中に入っているのかすらすらと言って見せる。
「……、セッカは確か、ハチクというジムリーダーが務めていた街だ」
ヤーコンは思い出したかのように二人に話す。
二人はヤーコンの発言に注目する。
「確かあいつは今、ポケウッドで役者をしてるらしいが……。一週間に一回ぐらいはセッカに戻るらしい。その時もしかすれば戦って貰えるかもしれんな。一度たたかったがあいつもかなりの手練れだ。良い訓練になるかもな」
「本当ですか？」
「嘘を言ってどうするんだ……。まあ、特徴的な姿をしてるから見りゃすぐに分かるだろう。着いたら探してみるのも手かもしれないな」
「貴重な情報感謝します！」
レッドはそういってヤーコンに礼をする。ハチクの姿は歩き方で見ているので街中

を歩いていれば識別することは可能だ。
「……。そうだな。俺についてこい！」
ヤーコンはそう言ってリフトを上げ、ジムの外に出る。
道中、エリカがどこに行くのか尋ねるが、ヤーコンは良い所だとしか答えない。
疑問を抱いたまま、二人はヤーコンの後に続く。
―ホドモエシティ　ＰＷＴ―
ヤーコンはホドモエ南のゲートを抜けた場所。そこの、真ん中に位置する大きく目立つ建物の前で立ち止まった。
「わぁ……」
中々に立派な建物にレッドは思わず声を上げる。
「フフ、どうだ！　中々立派な建物だろ！　ＰＷＴ（ポケモンワールドトーナメント）の会場……そして」
「そして？」
エリカは次を促すが
「ま、それは後で教えよう。中に入れ」
中に入ると、チェレンが居た。
久々の再会に喜んでいるのも束の間、ヤーコンはＰＷＴのトーナメントの一つ、ホド

モエトーナメントについての説明をする。
ルールは特に制限はないが、レベルは25に抑えられるというなんともシンプルなものだ。
特に全員異論は無かったので全員受付を済ませ、トーナメントをした。
レッドにとって意外だったのは、トーナメントの参加者に何故かアクロマが居たことだ。
そして当然の如くレッドが優勝し（レッドとエリカは別々に受付をした）、三人は受付ゲートより出てくる。
すると、ヤーコンが話しかけてきた。
「お前ら！　いい勝負だったぞ！　これなら、各地の強豪たちが一気に集って更に盛り上がりを見せるだろう」
ヤーコンは嬉々とした顔で語る。
「だが、レッド！　お前さんにはもっとここを盛り上げる使命があるぞ！」
「え？　どうしてです？」
レッドが当惑気味の表情でヤーコンに尋ねると、彼は不敵な笑みを浮かべながら
「何を隠そう、ここはお前とあと一人……、ゴールドだったか？　その二人がバッジを全て集めて、リーグを制し、ポケモンマスターになる資格を得たとき！　ここが、その頂

点を決める会場になる！」
「ええっ!?」
「天に二日なく、地に二王無しだ。頂きは一人でないと格好がつかんだろ?」
「た……確かに」
「という訳だ。二方両方の状況が揃ったらお前らのリーグの方から通達が来るだろう。その日を楽しみに待っとけ」
そういうとヤーコンは上機嫌な調子で立ち去っていく。
レッドとエリカもそれから少ししてＰＷＴを出る。
―ＰＷＴの外―
丁度出るタイミングが一緒だったチェレンが二人に話しかける。
「お二人とも。もうバッジは6つほどですか」
「ええ」
レッドは当然と言わんばかりに悠々と答える。
「あと二つですけど、どうか気を抜かずに頑張ってください。そうそう、この前生徒たちにこの前の勝負の感想を……」
チェレンが話を続けようとすると、レッドエリカの背後を黒づくめの男が通り過ぎる。

何事か気になったのかレッドはすぐさま後を追おうとする。
すると、ＰＷＴよりアクロマが出てきて
「およしなさい！　火中の栗を拾うかの如き危険な事……、しなくてもよいではありませんか」
と三人に注意を喚起する。
「悪いんですけど、元同胞の方々に託されてしまったんでね！　それじゃ」
レッドはアクロマにことわって、プラズマ団の後を追う。
残った二人もレッドの後に続く。
「全く……。危険なことに首を突っ込む……人、それを蛮勇というのに」
と、アクロマは溜息をつくがすぐにフッとほくそ笑みながら
「しかし……貴方が仰せになられた以上に面白い方々ですよ。我が同志オーキドよ……。これはすぐに伝えなければ」
アクロマはすっと前世代の携帯を取り出し、オーキドに電話するのだった……。
―桟橋―
二人の目の前には、見覚えのある帆船が係留されている。
「まさか……、これがプラズマ団のアジト？」
「貴方！　この船は……ヒウンで見かけた帆船ですわ！」

エリカの発言でレッドはそのことを思い出す。
そう、サスケハナだのなんだのと叫んでいた帆船だ。
階段があったので、それに従って三人は駆け上がる。
―帆船内―
エリカは帆船の中に足を踏み入れると
「この帆船……。中はどうして金属の物ばかりなのです?」
と素朴な疑問を呈する。
「それに。古い船とかに擬装しようとしているけど……まさかそんな訳ないよね」
チェレンがそんなことを言うと、何十人ものプラズマ団がやってくる。
「どうでもいいだろ! 俺たちにボコられて、バスラオの餌食になるお前らには!」
一人の団員がそう叫ぶ。よく見るとカタカタ震えている。
「普段だったら逃げ帰る所だけど……。束になっていけばどうにかなる!」
そう言うと、団員は一斉にミルホッグやココロモリ等イッシュでの定番ポケモンを次々と出す。
勿論、ジムリーダーに伝説の夫婦二人だ。およそ10分で全て返り討ちにする。
「チィ……、何なんだこいつら」
「化けものよ……。化け物以外にどう言えっていうの!」

下っ端が負け犬の遠吠えに興じている中、レッドは
「フン、他愛もない……。さあボスを！　ゲーチスを出せ！　サカキを出せ！　決着をつけさせてもらう！」
「そうですね。僕は調べたいことがあるし」
下っ端たちの一部がたじろぎ始めると、紫色の服を着た男が前に出て言う。
「何事だ」
下っ端たちが道を空けた所を見ると、恐らく幹部クラスだろうとレッドは予測する。
「はあ……確か貴方は冷凍コンテナで寒さでカタカタ震えていた人ですね？　名前は……確かヴィオ！　勝者の権利で、この船で何をするつもりなのか洗いざらい教えてもらいましょうか！」
「……おのれぇ！　我々は今一度伝説のポケモンを覚醒させてイッシュ地方全土を従え、そして全国を手中にする！　伝説の夫婦だなんだと言うが、知ったことでは無い！　好き勝手させてなるものか！」
そういうと、ダークトリニティと呼ばれた白髪に黒い鉢巻を巻いた不気味な集団に全員船外へと連れ出される。
―桟橋―
気が付くと、三人はまた元の桟橋に居た。

帆船は、どこぞへと消え去っている。
「ダークトリニティ……忍者等を彷彿とさせる奇妙な方々ですわね」
「ダークトリニティは超人的な能力を持った、エリカさんの言うとおり忍者のような人たちです。それにしても伝説のポケモンを覚醒させるとか従えるとか……。イッシュにはもうそういうポケモンは居ないはずなのに」
「くっそ取り逃がしちまったか……。面倒な事になりそうだ」
三人はそれぞれの思惑を持ちながら桟橋に留まっているのだった……。
―ヒウンシティ　某ビル　地下室―
殺風景な広めの地下室。
そこに今日もまた一人の老人が入る。そう、オーキドである。
オーキドは黄色い髪の拘束された青年に話しかける。
「マツバ君。今日こそ、その千里眼を譲り渡してもらおうかの」
「何度言えば分かるんですか……。絶対に譲りません！　いや譲ってはならないんです！」
マツバはあれから毎日、オーキドに千里眼を求められるが毎回断り続けている。
オーキドはそれに対し、色々説得を試みては帰る日を繰り返してはいたが、今日のオーキドは違う。

「マツバ君……。覚えているか、あまり強情に拒み続けるなら大切な人……、つまりエリカ君を傷つけてしまうかもしれんぞ。と」
「……。そんなこと出来るはずがない。レッド君がついている限り、攫う事すら敵わないというのに」
　マツバは確信している表情で、そうオーキドに返す。
「ほう、ならばレッド君が離れれば如何かの？」
「そんな状況、有り得るはずが」
「有り得るんじゃよ。それが」
「……、はい？」
「今、タマムシジムで代理でリーダーをしているナツキ君がおるじゃろう？」
　ナツキ……。マツバは定例会で代理として何回か顔を合わせた程度だが、頷く。
「ナツキ君は長く風邪をひいておってのう……。それでも無理しながらリーダーをやっておるのよ」
「……」
「だが、もしナツキ君に原因不明の病が襲い、執務不能になればエリカ君は戻らざるを得まい」
「！」

マツバはキッと面をあげる。
「タマムシジムは女人禁制……。レッド君とて挑戦では無いから入れない。だからイッシュに留まるじゃろう。その上、あの夫婦は今、ホドモエ……航空場のあるフキヨセに近い街におる。すぐに飛んでいく事が可能じゃのう」
マツバはそれを聞くと、拘束台が壊れるのではないかと思うぐらいの勢いでオーキドに詰め寄る。
「貴様！　一体……！　どこまで」
「目的を達成するのに手段を選ばぬだけじゃ。マツバ君が千里眼を譲る為なら、ワシは修羅にでもなんにでもなるわい」
「……!!」
「よーく考えい。エリカ君は君の考え次第で救う事も……堕ちさせる事もできるのじゃから……」
そういってオーキドはマツバの元を去っていく……。
―ビル最上階―
「今回もダメだったそうだな」
サカキは、オーキドの表情を見ながらそう尋ねる。
「フ……じゃが砦は陥落寸前よ。今のマツバ君はわしにそんな事は出来ないと思っとる

じゃろう……。だが、脅しではないことを証すれば、熟柿は落ちる」
　オーキドはそう言うと静かに笑う。
「もう、あの夫婦はプラズマフリケードの正体に気付いたようだ……。事は早く進ませないと」
「うむ……」
　オーキドはワイドガラスから目下のヒウン市街を眺めながらそう答えるのだった……。

　レッドエリカはあれからチェレンと別れ、ホドモエのポケモンセンターに泊まる。
　レッドはまたフウロとテレビ電話をし、フキヨセに行く旨を伝え喜ぶフウロの様子を見て電話を切った。
　そして、雹と戦いながら5日かけてフキヨセシティに到着する。
　その道中、二人は電気石の洞窟に通りがかっていた。
　―2月16日　午後2時　電気石の洞窟―
　名前の通り、この洞窟には磁力によって浮遊している岩が数多くある。
　理系のエリカにとってはなかなかたまらない光景のようで逐次観察していたが洞窟の中盤ぐらいで十分に堪能したのか、漸く止めた。

「中々神秘的な場所ですわね……。あら？」
「どうした？」
エリカは上にポケモンがいる事に気付いたようだ。
そのポケモンは鋼の皮膚を身に包み、緑の棘を護身用の為だろうか、何本もつけている。
「何でしょうか……、貴方、図鑑を」
「へいへい」
レッドのポケモン図鑑はイッシュのポケモンにも対応している。
ポケモン図鑑を開き、ポケモンに向けて、情報を確認する。
どうやらテッシードというポケモンらしい。
「ふむふむ……。それにしても中々可愛いですわ！　捕まえましょう」
「え？　確かに可愛いっちゃ可愛いけど……お前ああいうゴツいの好きだっけ？」
レッドは首をかしげて尋ねる。
「見た所鋼の雰囲気が致しますし……。これで対抗できるタイプが増えるというものです！　では」
なるほど、やっぱりちゃんと考えてるのはジムリーダーらしいなあ……と感心する

レッドであった。
　その後エリカは、捕獲用に持っているナゾノクサとパラスを使って見事一回で捕まえたのだ。
　そして2日後、およそ1か月弱ぶりにフキヨセに到着した。
　―2月18日　フキヨセシティ―
「漸く、戻ってこれたな」
「うーん、改めて来ると本当、空気が澄んでて宜しいですわね……、あらお電話が」
　エリカはライブキャスターのバイブに反応し、液晶を見る。
「ナツキさんから……？　今日は報告日でもないのにどうして」
　疑問に思いながらエリカは電話に出る。
　―十分後―
　エリカは冷や汗をかきながら電話を切る。
「おいエリカ、どうした？」
「ナツキさんが……肺炎にかかってしまったそうです……！　急いでジムに戻らなければ！」
「え？」
　―第五十六話　二つの伏魔殿　終―

第五十七話　歴史は動く〈上〉

―2月18日　午後2時　フキヨセシティ―

エリカは報告日でもない日に電話がかかってきたので、少し意外な表情をして電話を受ける。

個人的な事の為か、レッドから少し離れてエリカは応対する。

相手の携帯は古い機種のようで、音声しか再生されない。

「もしもし!?　リーダーですか?」

少女と思しき非常に焦っているような声がエリカの耳に入る。

「その声は……ユキコさん?　どうしてナツキさんの携帯から」

臨時副リーダーのユキコが電話をしてきたようだ。

「それはその……、ライブキャスターの方に登録されている番号にあたしの番号が入っていないようなので」

「……、あまり煩雑なのは好きではないもので。それで、どうされたのですか?　ナツキさんでないという時点でそれなりに危険な臭いがするのは伺えますけど……」

エリカは危険な雰囲気を察知している故か、いつにも増して真剣な様子である。

「そのですね……、ナツキさんが過労で倒れてしまったんです!!」
「……、予感的中ですわね。それで?」
「あとあと……、その上肺炎とかもあったようで。今私、ナツキさんの付添いで病院に……」
「病院で電話はマナー違反ですわよ」
　エリカは礼節に厳しい。
「だ、大丈夫です!　ちゃんと通話可能エリアで話していますから。それで、診断して貰いましたら……3週間の入院が宣告されました」
「!　……、これは少し洒落になりませんわね……。分かりました至急戻りますので、詳しい事情は到着したら聞かせてください!　それまではユキコさん。貴女がナツキさんの代わりにリーダーを務めてください……ジムはお休みにして頂いても結構です」
　エリカはそう勧めたが、ユキコは気丈そうに
「いえ、ジムはいつも通りの運営をするつもりです。ナツキさん、結構無茶してもジムやってたし、あたしでもやれるってところ、見せていきますよ!」
「フフ……左様ですか。しかし、今後の事も鑑みる上でも私はいったんジムに戻りますから」
「ううん……たった数日じゃ……」

ユキコはナツキとの差をあまり見せる機会が無い為に少ししょげている様子である。
「何か仰りましたか？」
「いえ！　数日でもナツキさんの代わりを務められるように鋭意努力致します！　って言おうとしたんです！」
ユキコは少し慌てた様子で、エリカに心配をかけまいとばかりに一気に明るく振る舞った。
「フフ……期待してますわ。では」
と言ってエリカは電話を切る。
「どうした？」
戻ってきたエリカにレッドは尋ねる。
「ナツキさんが……ジムで代理を務めて頂いた方が急病で執務不能となってしまったようです。急いでジムに戻らなくては！」
「は!?」
レッドは突然の事に呆気にとられる。
「いやお前、旅は？」
「少し遅れてしまいますが……元々それほど急ぎの旅ではありませんでしょう？」
「いや、そりゃそうだけど……」

「私とて貴方と離れるのは寂しいです……。しかし代理が止むを得ない事情で執務不能になった場合は可及的速やかにリーダーは戻り必要な対策を講じる……とリーグ法21条に規定されておりますので、法規に背くわけには……」

まるで条文を諳んじているかのような勢いである。

レッドは相変わらずの常人離れした記憶力に脳内で驚嘆しながらも、彼は仕方ないかとばかりに納得する。

こうして二人はまず空港に向かう。

―フキヨセカーゴサービス―

カーゴサービスに到着すると、そこにはフウロが居た。

出口に向かっていたのか、二人が入ったころにはすぐ近くに居たのでフウロの方から話しかける。

「あ！　いらっしゃい……じゃなくてお帰りなさいかな？　レッド君、エリカさん！」

フウロは相変わらずの突き抜けた笑顔で応対する。

エリカはきちんと返礼した後、大いに切羽詰った表情で

「あ、あの！　今すぐに飛行機手配して頂けないですか!?」

「は、はい？」

フウロは突然の事に戸惑っている様子だ。目が皿のようだ。

「すみません、事情をお聞かせ願えますか？」
しかしすぐに威儀を正して、仕事を受ける調子で真剣に返す。流石はプロだ。
「す、すみません。実は私のジムで代理のリーダーが病気に罹ってしまいまして……」
「そ……そうですか。お気の毒ですね」
「それで……、出来る限り早くカントーの方に戻ってその後の事を話し合わなければいけないので」
「……、しかし」
フウロが口ごもっていると、横から颯爽と紫の髪をなびかせた女性がやってくる。
同業者のナギだ。
「何々？　どうしたの？」
「あっ、ナギさん！　あの……かくかくしかじかで」
フウロは先ほどエリカの言っていたことを簡潔に説明する。
ナギは理解した表情で一回頷いたのち
「分かったわ。エリカさん、ついてきて。乗せていってあげるわ」
ナギは意外にもエリカの依頼を快諾した。
「ええ!?　しかしナギさん、確か昨日の夕方にポケモンの研究者さん達を連れてきてここに居て……、今日はその帰りですよね？」

「こんな時間までゆっくりしていられるんだから、急いでホウエンに帰る事はないの。ヒワマキはこの時期、寒いせいかあまり人は来ないし時たま挑戦者が来ても私が出張る事はないしで……。それに、なんだか毎回一人で帰るのもつまんないかなーって思い始めてきたし」

「し、しかし……」

「それにフウロ、あんたは明後日、ヤマジに定期便届けなきゃいけないんだからそれで忙しいんでしょ？　エリカさんはあたしが送っていくから、フウロはじっくり送っていくものでも見定めていなさいよ」

ナギは純粋な気持ちで言っているのだろう。特に発言に他意は見つからない。

「……そう。そうですね。それじゃセンパイのお言葉に甘えて……。宜しくお願いします」

フウロはナギに深く礼をする。

「いいのいいの……。そうそう、エリカさんは……確かタマムシシティに行くのよね？」

「はい」

「飛行ポケモン。大丈夫なの？　着くのはホウエンのヒワマキ……、歩いて船で行けない事も無いけれど大変だし、急いでいるんだったら絶対必要よ？　私のポケモンはタマムシどころかカントーすら行ったことないからお役には立てないけれど」

「あ……左様ですわね。貴方！」

エリカがレッドを呼ぶ。フウロに見とれていた彼は不意に呼ばれたので素っ頓狂な声で答える。

「リザードン、お貸し頂けますか？」

「え？　何で？」

聞いてなかったレッドに呆れてか、ナギはうんざりした口調でレッドに話す。

「だから！　エリカさんは飛行ポケモンもってないから足として空を飛ぶを使えるポケモンを必要としてるの！」

「あーはいはい……。ピジョットでも良くないか？」

レッドは頭をかきながら面倒くさそうにそう答える。

「え……」

エリカは一瞬、当惑気味な目をしたが、贅沢を言わない方がいいと思ったのかすぐに

「はい！　それをお願いします！」

レッドはエリカにピジョットの入ったモンスターボールを手渡す。

そしてエリカは毎晩電話する旨を伝えて、ナギと共にゲートへと消えていく……。

こうしてフウロとレッドは残された。

「さてと！　二人は行ったし、あたしも仕事仕事！　あ、レッド君はフキヨセでゆっくり

してね！」
　そう言ってフウロは話を終わらせようとするがレッドは呼び止める。
「あの……、どこか鍛えられる場所ありますか？」
「おぉー、この状況でも鍛えますか……。さっすがー！」
「茶化さないでくださいよ」
「あはは。ごめんごめん。鍛える場所かぁ……タワーオブヘブンというのが北にあるけれど」
　フウロは笑顔のままレッドに応対する。
　レッドは聞き覚えのある場所だと思い、どういう場所かを更に尋ねる。
「まーぶっちゃけて言えばポケモンのお墓だねー。それで、あそこの頂上に魂を鎮めると伝わる鐘があるんだ！」
「ふむふむ」
　レッドは熱心にフウロの話に聞き入る。
「そこの頂上に行くまでにはたくさんのトレーナーが居るんだ。強さは……まぁ行ってからのお楽しみって事で！　鍛えたいのなら……なんだかよく分からないけどヒトモシってポケモンを倒すと特攻が強くなる言い伝えがあるみたいで、君で言うならカメックス辺りを使ってみるといいかもね！」

その後も少し話をして、フウロは立ち去る。
とりあえずポケモンタワーのような雰囲気に気にはなったのでレッドはすぐにタワーオブヘブンにへと向かう。

―午後4時　7番道路―
レッドは独りでさくさくと道を進んでいくとある事に気付く。
自分の隣がとても静かだ。
普段はエリカが居て、自然のあれこれに反応しては観察し、建物を見ては薀蓄か推論を語りだし……等と静まる事は無かった。
あれに慣れてしまうと、今の状態が寂しく思えてしまう。そう思ったレッドは何か連れ歩こうかとポケットから8個ほどのモンスターボールを掌に広げる。
迷惑はかけられないし、一体の方がいいな……とまずは考え、大きさや体重など色々熟慮した結果。ピカチュウを連れ歩くことに決めた。
レッドはピカチュウをボールから出す。
「ピカ！」
ボールから出してもらえて嬉しいのか、すぐにレッドの胸にすいつく。
「よしよし。それでなピカチュウ、俺はお前を連れ歩くことにした」

「チャー！」
ピカチュウはレッドの胸板に鳴き声をあげながら頬をスリスリする。
「おいおいそんなはしゃぐなって……。基本的には外の環境に適合してもらう為にも歩いてついていってほしいけど……。ま、疲れたら俺の肩にでも飛び乗れ」
ピカチュウはこくこくと頷く。というか今にも乗りたそうだ。
そんなこんなでレッドはピカチュウを連れ歩きながら旅を進める事にした。

―午後7時　タワーオブヘブン　3F―
「はい、しゅーりょー」
レッドはピカチュウ一体で何の支障も無く上へ上へと上がっていった。
「うう、やっぱり強ぇぇ……。ほら、賞金」
サイキッカーから賞金の１１２０円を受け取ると、お辞儀をして先に進んでいく。
あまりに他愛もない戦いが続くので退屈になりながらも奥へと歩む。
そうしていると、墓が続いている奥でロウソク……というよりキャンドルを模したようなポケモンが、他の同じポケモンや古拙美のする顔にＹ字とその他の線の模様が入ったポケモンにいじめられているのを目撃する。
目撃するとレッドは図鑑をかざす。

どうやら線のポケモンはリグレー。キャンドルのような体のポケモンはヒトモシというらしい。

傍観するかどうか決めあぐねていると、足元に居たピカチュウがズボンの裾を引っ張る。

レッドは先に行ってほしいのかと思って、通路に従って進もうとしたがピカチュウは首をフルフル横に振った。

「ピカ！　ピカ、ピカピーカ……」

言葉は全くわからないがジェスチャーを交えている。

ピカチュウはいじめ現場に向かって指さしているのでレッドは大体を察する。

「いじめを助けたいのか……。分かった、いっといで」

レッドが指示すると、ピカチュウは凛々しい顔で頷いて一目散に現場に駆け寄る。

彼は遠巻きにピカチュウが何をするか見ていた。

ピカチュウは別に電撃を喰らわすわけでも何でもなく、いじめっ子のポケモンに向かって調停を促している様子だ。ポケモン同士の言葉は一緒なのか、通じている様子で、いじめっ子のポケモンは渋々四散していく。

その後ピカチュウはいじめられていたヒトモシを励まして、レッドの方向にヒトモシもつれてやってきた。

「ピカ！」
　ピカチュウはちょっとだけ偉そうにして、ヒトモシをレッドの下へ行くよう促す。
「偉いぞピカチュウ！　さてと……」
　レッドはヒトモシを診てみる。どうやらかなり怪我をしている様子で、本来は真っ白い体が汚れてしまっている。
「こいつは酷いな……、やっぱあいつらにやられたのか？」
　ヒトモシはこくこく頷く。
「そかそか……気、弱そうだしなあ」
　と、言いながらレッドはいいきずぐすりをヒトモシに使う。
　するとヒトモシは立ちどころに元気になる。
　もう少しだけ側にいて、レッドとピカチュウは先に行く。
「お前、もういじめられないよう、もっと強くなりなよ。それこそお前を救ってやったピカチュウみたいにな」
　ピカチュウは少し耳を下げて小さな手を後ろにやって照れる。レッドの癖がうつっているようだ。
　その後、ピカチュウは大きな声でヒトモシに別れを告げてご主人様にてくてくと、ついていく。

そして単調な戦いを続けてレッドとピカチュウは4階に上がる。

―午後8時　同所　4F―

「にしてもお前、よくいじめを助ける気になれたな」

「ピカ」

「少しエリカの大胆さとかがうつったのかな……」

レッドはそんな事を呟きながらタワー内を歩く。

4階も中盤に差し掛かったところでピカチュウはまたも裾を引っ張る。

どうしたんだろうとレッドは思い、ピカチュウの方を見ると、ひたすら右の方向に指をさす。

しかしピカチュウが指さしたところは、墓とスタンバイしているトレーナー以外には特に異常は見当たらない。

「お前なあ。誰も居ないだろ?」

レッドは呆れた声でピカチュウに言う。

「ピカ!　ピカピカピーカ!」

ピカチュウはレッドに何かを伝えようと必死である。

しかしレッドには何の事か皆目見当もつかず

「たく……、幽霊でも見えたのか？　まー確かに今は夜だし……。早く行こうぜ」
というとレッドはさっさと先に進む。
「ピカー……」
ピカチュウは違うのにとでも言いたげな表情をしてレッドの背中を見つめる。耳もたたませて困った表情をする。
そして、後ろ髪にでもひかれたかのようにピカチュウはレッドの後をついていく。

―午後9時　同所　5F―
相変わらずのワンサイドゲームでいい加減うんざりもしてきたが、歩き方によれば次で屋上だ。
ここまで来たら最後までやるか。と、レッドは自らを奮起させる。
そんな事をしていると、どうした事かピカチュウが傍らに居ない事に気付く。
「あれ？　おーい！　ピカチュウ！」
周りを見るが、ピカチュウの姿は見当たらない。
こうなったら飛行ポケモンの出番だと、リザードンを繰り出そうとするがふと横に眼を遣る。
すると、レッドから見て前に5つ目の墓の後ろにピカチュウのギザギザの尻尾が見え

る。

「ピカチュウ！」

レッドはすぐに駆け寄る。まさかとは思うが憑りつかれてしまったのかもしれない。

そんな恐怖も抱きながらピカチュウの所へ行く。

しかし、当のピカチュウは別に憑りつかれたわけでも、墓石につまづいて転んだわけでもない。

ピカチュウの横には、あのいじめられたヒトモシが居たのだ。

そして、ピカチュウのジェスチャーの説明も含めてレッドが察した限りだとヒトモシは救われた時からずっと、レッドとピカチュウが気になってついてきたようだ。

レッドは少し考えて

「ふむ……。俺の勝手な予測だが……、こういうポケモンはヨーギラスとかミニリュウとかのように大化けするかもしれない！　よし、ヒトモシ、俺らについてくるか？」

ヒトモシは明るい表情になって、鳴き声をあげて承諾する。心なしか上の炎の勢いが激しくなっている。

こうして一匹では物足りない気もした上に、ピカチュウとも仲がいいのでヒトモシとピカチュウの二体を連れ歩いて行くことにしたのだった。どうでもいいがこのヒトモシはメスである。

ポケモンは飼い主に似るとはこの事だ。
その後、レッドは屋上の鐘を鳴らし、ポケモン達の安らかな眠りを祈るのであった。

―2月20日　午後5時　フキヨセシティ　ポケモンセンター―
タワーからくだり、フキヨセに戻り、チェックインしようとする。
すると、ジョーイさんがチェックインの手続きを済ませた後、
「レッドさん宛てに贈り物が届いてますよ！」
「あ、そうですか」
適当にサインして受け取る。依頼主にはツクシとアカネの両名。
熨斗（のし）の左には「出産内祝」と書かれている。
下にはトラコの文字。恐らく子供の名前だろう、アカネに押し切られたかとレッドは少し笑う。
確かに、12月にタマムシデパートでエリカが出産祝い選んでいたなーとレッドは思いだす。
そしてレッドは部屋に向かう。
―部屋―
風呂に入り、ピカチュウとヒトモシがじゃれあっている傍らでレッドは内祝いの包み

を剥す。

中にはきちんと時間がかかる事を考慮してくれたのかタオルや石鹸などが入っていた。

その上には手紙が置かれていた。

レッドは封を切り、手紙を取り出す。

中にはこう書かれていた。

『拝啓　レッド様　エリカ様　寒さも一層強くなってまいりました折、如何お過ごしでしょうか。先日は妻、アカネの出産に際し祝詞に加えてお祝いの品までお送りいただき、大変うれしく思います。名前は、アカネ曰く『虎のように強く、母性を併せ持った女性になってほしい（んや）』という事で、トラコと命名致しました。トラコはアカネの血を強く引き継いだのか、とても気性が強く、ほとほと手を焼いております。しかし、赤子とは本当に可愛く、毎日妻は写真を送ってくれる為それで研究の疲れをいやす日々で、家に帰る日を楽しみにしております。御二人の旅が終わり次第、トラコと共にいつの日か家族一同でご挨拶に上がりたいと思いますので、都合のいい日が判明しましたらアカネ宛てにその旨をお伝えください。時節柄、御身体ご自愛ください。　敬具　ツクシ　アカネ』

ツクシはよくこんな手紙かけるなぁと内心尊敬しながら、手紙のほかに写真が十枚ほ

どあったので見てみる。
　ツクシが赤ちゃんをベビーバスにつからせている写真、赤ちゃんがぐっすりと睡眠をとっている写真。アカネが赤ちゃんのオムツを替えていたり、あやしてあげている写真。そして、多分ツクシの親か誰かが撮ったのだろう、ツクシとアカネが赤ちゃんの左右で子の方を向きながら寝ている写真……。
　どれもこれも、本当に仲が良く、仲睦まじいとはこの夫婦の為にある言葉ではないのかと思うほどだ。
　かえって、レッド自身は自らを考える。
　確かに仲は悪いとは言えないが、やはりエリカの一方的な行為で終わる事が多い。
　この夫婦のように片方が片方を助けて、支え合うような夫婦とはレッド自身の中ではあまり思えなかった。
　この二人に比べて俺は……俺はなんとつまらない生活を送ってるんだ。レッドはそう思い、写真と手紙を中に戻しすぐに寝る。エリカの電話は取らなかった。

―同じころ　ヒウンシティ　某ビル　地下室―

　殺風景な広い部屋に、今日もまた老人は拘束されている青年に話しかける。
「決心はついたかのう？　マツバ君」

「……、千里眼は……渡さない！」

マツバは強い声でオーキドの問いに答える。

「……、エリカ君がタマムシに向かいおったぞ」

「……!!」

マツバは大きく目を見開く。因みにこの部屋の中では千里眼の能力は制限されている。

「くく、千里眼などのうても、流石に気付いたか……。そうじゃ、策を実行したのよ」

オーキドはそう言ってマツバに微笑む。ダビンチの「モナ・リザ」とは真逆の、狂人の微笑みである。

「貴様……!!」

「待てい。まだこれは前段階よ。この後、ゲーチスを嗾けてダークトリニティを動かし、エリカ君を攫い、このビルまで連行する。エリカ君は居合いで免許皆伝なそうじゃがの……、あの者達を前には手も足も出ぬじゃろうて……ククククク」

オーキドは更にその狂人の微笑みを強める。まさかこの人物が、マサラのトレーナー達にポケモンを与え続けたとは誰も信じまい。

「そして連行したのちにはクロロフォルムでもかがせて寝かせ、脳を改造しワシ直属の忠実な奴隷と化させる……！　これでわしの妻となる訳よ！　此度は仮初の夫婦では

なく、本当の仲睦まじき夫婦にの！　エリカ君の体も心も全てワシの手中じゃのお！　ハーッハッハッ!!」

　オーキドが、悪魔ですら物怖じしそうな大笑をすると、マツバは遂に堪忍袋の緒が切れる……いや千切れるという表現の方が適切か。ともかく、怒り心頭に発し、力を振り絞って体を前に遣って拘束台を破壊する。手枷、足枷全てを外すまでに。

「!?」

　オーキドは一瞬、信じられないとでも言いたげな目をする。

　しかし、すぐに先ほどの狂人の目に戻り、

「フッ……一念……いや情念石をも穿つ。じゃな。まったく恋心とは恐ろしきものよ。華奢な青年をここまでの怪力男とまでに化かせ……!?」

　オーキドが途中まで言ったところでマツバは無言でオーキドの胸ぐらを掴み、一気に上げる。

　しかし、それでもオーキドは平然とした表情を崩さない。

「おやおや、良いのか？　ここでワシを殴ればすぐさまトリニティを動かすぞ……、アクロマに通報が入って、アクロマがワシの代わりに動き出すじゃろう」

「殴る……か。そんな生易しいもので済ませるとでも？」

　マツバは意外にも優しい表情で言う。

「ほう、ならば？」
「決まってるでしょう、貴方を扼殺するんですよ」
「ククク……、エンジュの貴公子がそんな事を言うとはのう……、全く、恋というのは恐ろしい物じゃ。それに、ここでワシを殺さば、今度こそマツバ君の命は無いぞ」
「仮にも僕は一回死んだことになってるんでね……二度死のうと大した違いではないですよ。少なくとも、今誰よりも、どんな物よりも輝いて生きている人を、卑怯な手段で半ば死人にさせるよりはね！」
そう言うとマツバはオーキドを放し、両手をオーキドの首元に近づける。
オーキドの首まで残り２０センチ程になったところでオーキドは言う。
「今、ワシを殺せば、それこそエリカ君を危険に晒すぞ」
その言葉でマツバは手を止める。
「どういう事です」
「考えい、今、ロケット団とプラズマ団は一緒になって動いている。しかし、今はワシとアクロマの調停が入っておるからあまり派手な行動はしない。最近ならヒオウギに探りに行ったぐらいじゃ。じゃが、今、ワシを殺すという事はその調整を失う……、いつ暴走してイッシュ地方全土を危機に晒す事になるか分からぬのだぞ」
「……」

マツバはそれを聞くと押し黙ってしまう。
「今すぐならばよいが、プラズマ団の計画は時間がかかる。そんな都合の良い事にはならぬ。奴らの計画の第一段階はイッシュ地方を氷漬けにすること、まず最初の街はソウリュウ。下手をすればあの二人がそこを通りがかるときにでも起こりかねん……ならばエリカ君の命の保証は……無い」
「大丈夫です……レッド君が守ってくれますよ。エリカさんなら」
「レッド君もエリカ君に対する気持ちが揺らぎ始めておる……、それに守ると言うが……」
その後、オーキドはマツバに全てを話す。
「……！　そんな……」
マツバは全てを聞かされると、床に突っ伏す。
「左様。じゃから、エリカ君に命の保証は無いと言うたのじゃ」
「……」
マツバは絶望の表情で床を見る。部屋は暫しの沈黙が支配する。
数分しただろうか、オーキドは口を開いた。
「最早、君に選択の手段は無いのじゃよ。君が千里眼を渡せば、エリカ君は当面は無事。しかし渡さなければ……先ほどの通りになるのみ。殺せばまた然り」

「……」

マツバは絶望の表情ののち、苦悶の表情を浮かべる。

「さあ、渡すのか渡さないのか、答えてもらおう……答えはもう自ずと決まっておるがの」

「……、申し訳ありません、父上……母上……!!」

その後、マツバはすぐに手術にかけられた。

5時間ほどで手術が終わり、マツバの意識が戻ったころには日付が変わっていた。

―2月21日　地下室―

地下室は拘束台が撤去され、代わりに一床のベッドが置かれていた。

扉には何重もの南京錠が仕掛けられている。

「やあマツバ君。調子はどうじゃ」

オーキドはニコニコとマツバに語りかける。

「……」

「ふむ……。まだ術後間もないからのう……、まあ良い、これがマツバ君の今の顔じゃ。よく見い」

オーキドはそう言うと、マツバにベッドに手鏡を置く。

マツバは右目を失い、右目があった所には黒い眼帯がつけられている。

「……」

マツバは自分の顔を見ると、数秒後に鏡を元の位置に戻す。

オーキドはその後二言三言かけると、地下室の外に出る。

―廊下―

廊下に出ると、オーキドは壁に寄り掛かる。

「チィ……！　どうして目を摘出しても……あんなに、いや寧ろ……男が上がっておるのだ……」

そう言うとオーキドは力なく階段を上がっていく。

その後、マツバは監禁が解かれ、軟禁状態、つまり外出禁止の状態に緩和された。

―同日　午前11時　フキヨセシティ　カーゴサービス横―

さて、一方レッドの方はどうしていたか。

レッドは、特に宛てもなくポケセンを出た後はフラフラと散歩している。

そうこうしていると、カーゴサービスの辺りにたどりつく。

すると、フウロが電話していた。

フウロは、何やら困った表情で問答をしている。そして、しょげた表情で携帯を閉じポケットにしまう。そして、フェンスに放心状態な風で寄り掛かる。

「どうしたんですか?」
急に話しかけられ、フウロは大いに驚き
「わっ！　……、あぁレッド君か。どうしたの?」
フウロの声はいつもと少し違い、元気が無い。
「どうしたのって、こっちが聞きたいですよ。なんか悲しそうな表情で電話をしまうって……フウロさんらしくもない」
「見てたんだ……。あのね、ヤマジタウンって知ってる?」
ナギが言っていた記憶があるので、無い事は無い。そう思ったレッドは
「名前ぐらいは」
と答える。するとフウロは
「そっか。フキヨセとヤマジって、いつもフキヨセから物運んだりしているから交流が活発なんだ。それで、今ヤマジの代表者みたいな人から電話があってね」
「はいはい」
レッドは真剣に聞いている。
「そこの人から、ストレンジャーハウスと言われている屋敷を調べて欲しいって言われてね……もーユーウツ」
「別にいいじゃないですか、お家調べるくらい……わざわざジムリーダーに頼むものか

とは思いますけど」
「良くないよ！　ストレンジャーだよストレンジャー！　もう名前からしておかしいってば！　よく分からない物の怪とかがいっぱいいる場所……そんな所にいけだなんて……」
　フウロは更に落ち込んでしまっている。
「……、あの、ついていっていいですか？　それ」
　レッドは勇気を振り絞って言う。
「へ？」
　フウロは、パッと顔を上げる。
「いや、だからその調査」
「調査っていうのは名目で、本当は除霊しろとかそんな感じの事だと思うけど……。本当!?　確かにあっちの人、一人ぐらいだったら付添い居てもいいよって言ってたし……、貴方みたいに強い人がついていってくれるならほんっと助かる！　お願いしちゃってもいい？」
　フウロは、仏でも降りてきたかとばかりに救われたような表情をしてレッドに話す。
　そして、いつもの突き抜けた笑顔が戻る。
「ええ、俺で良ければ喜んで……」

「それじゃ、早速行こうか！」
「えっ!?　今日ですか？」
「勿論。こういう事は早く済ませるに越したことはないしねー。じゃ、ちょっと飛行機整備してくるから待ってて！」
そう言うとフウロは飛行機の方へと走り去っていくのだった……。
「フウロさんって……あんまり異性とか意識しない人だよな……」
連れ歩いているピカチュウやヒトモシは同じように頷く。
そして、二人と二匹はヤマジタウンに向けて出発する。
―正午　飛行機内―
機内は、二人用の貨物機だった。
流石にホウエンからイッシュに来た時ほどの飛行機の質ではないが、それでも十分な物である。
ヒトモシとピカチュウは風景に見入ってる上に、談笑しているためそうそうの事では反応しない。
フキヨセからヤマジまではおよそ３０分。そんな短い時間だ。
「ねえレッド君」
「はい？」

「今バッジ幾つだっけ？」
　フウロは純粋な疑問を呈している。視線は空に向けたままである。
「今は……確か６つですね。次はシャガ……っていう凄く強い人らしいので緊張します」
「６つかあ……凄いね。本気のジムリーダーをここまで破るなんてなかなか出来る事じゃないよ！　尊敬しちゃうなあ……」
　フウロは感激のせいか目がどこか潤んでいる。
「いえいえ」
「でも次はシャガさんでしょ？　あの人は本当……なんていうか歴戦の名将って感じで貫録も言動も半端じゃないよ。内国トレーナーの鑑がヤナギさんっていうのなら、イッシュトレーナーの鑑はシャガさんって言っても過言じゃないね！」
　フウロはポケモンの強さと言うよりも、人間に着目した評価を下している。
　レッドはそんなシャガの恐ろしさに触れつつ、フウロとの談笑を続ける。
　―出発から１５分後―
　レッドはフウロと話している最中、ついに一大決心を下す。
「あの……フウロさん？」
「何ー？」

「そ……そのですね、俺フウロさんの事……」
レッドはそう言うと少し黙る。鈍っている訳ではなく、緊張しているからだ。
「？　何でもないなら」
「す……好きです！」
「……え？」
フウロはレッドの告白に対し、ただ呆然とするほかなかった……。
―第五十七話　歴史は動く〈上〉　終―

第五十八話　歴史は動く〈下〉

―2月21日　午後0時10分頃　飛行機内―

「俺……フウロさんの事、好きです！」

「えっ……？」

フウロは突然の告白に目を丸くする。

しかし、すぐに元のすっきりとした顔に戻り

「うん、あたしもだよ！」

「えっ!?」

レッドはまさかの返答に、驚きを隠せなかった。

ピカチュウとヒトモシは後ろで起こっている事には気づかず、空を眺めて談笑し続けている、

「……えっ、友達としてだよね？　だったら普通にレッド君の事、好きだよ。話してて飽きないし、そういう反応とか見てて面白いし」

「ぐっ……」

レッドは反論するよりも先に、フウロの虚を突いた発言に頭が真っ白になっていたの

でその場で更に何か言おうという気にはなれずに終わる。
そして、搭乗から４０分弱で、レッドとフウロはヤマジタウンに着く。
その後は色々と接待のような物を受け、午後3時ごろからヤマジを出発する。
町もそうだったが、砂嵐が常に吹き荒れている地域だ。ピカチュウはともかく、ヒトモシは辛そうだったのですぐに戻す。
そして、そんな天候と格闘しながら二人はストレンジャーハウスに入る。

―午後3時３５分　ストレンジャーハウス　玄関―
中に入ると、如何にもホラー映画に出てきそうな屋敷である。
目の前には大きな階段があり、その他にもいろいろな装飾がある。
ハクタイの洋館を彷彿とはさせるが、雰囲気が異なるのは恐らくレッドの気のせいではないだろう。
「うわ……」
レッドがまず一言漏らす。
フウロが何か言うかと思ったが、フウロ当人は何も喋らない。
不思議に思ったレッドがフウロに話しかける。
「あのー」

「ワッ……な、何……かな？」
　フウロはひきつった笑顔でレッドに応える。
　よく見ると顔は青ざめ、冷や汗をかき全身が震えている。
「いや……あの、大丈夫ですか？」
「そ、そんな事ないって！　武者震いだよ武者震い！」
「もしかしてお化け怖いとか……」
「違うってば！　あたしはお化けが怖いから震えてるんじゃなくて、なんだか不気味な雰囲気がしておっそろしーなー……なんて」
　フウロは何とか言いつくろったかのような表情をするが
「いや、それ単に怖いって言葉を不気味に置き換え」
「さ、さーてと！　行くよレッド君！　早く除霊でもなんでもしてこんな屋敷でて……」
　フウロは勇み足とばかりに前へ進む。
　すると、植木鉢と思しき物がカタカタと震えているかのように動く。
「キャーッ！　動いたー！！」
　フウロは絹を裂くような大声を発する。
　埒があかなそうなので、レッドはヒトモシを出す。
「ヒトモシ」

そう言うとヒトモシはくるっとレッドの方向に目を向ける。
「ここは、なんだかお化けとか幽霊とかが多くいるみたいでな……、ピカチュウと一緒に調べてくれないか？」
レッドはゴースト同士ならば勝手が早そうだと案じて、ヒトモシを頼る事にしたのだ。
ヒトモシは快諾したとばかりにピカチュウの所へ歩き、引っ張り出すかのように左の方向へと消え去る。
「はーっ……、あ、あれ？　レッド君、ピカチュウは？」
「調査しろって、ヒトモシに行って一緒に行かせました」
「そっか。じゃ、あたしたちは違う所を調査しましょ！」
「いやでもフウロさん」
「しましょ！」
フウロはこういう時になると強情になる傾向があるようだ。
片意地張るフウロに、レッドは心動かしつつ、その片意地に付き合う事にした。
―3時間後―
屋敷を駆けずり回っていると、真っ黒な夢……等と呟く幽体の少女に出会う。
フウロはあまりの事に失神しかけたが、レッドがなんとか気を持ち直させる。

その少女の導きに従うかのように、階段を上がったり下がったりしていると、入った時はふさがっていた記憶のある、奥の部屋が通れるようになっていた。
その後、中に入ると三日月で虹色に輝く羽を拾うと、またその少女は現れその羽根についての話をすると、ふっと消えていくのだった……。
最後に橋の上でと言っていたので、恐らくもうあの女の子は出てこないだろう。そう思ったレッドはほうと胸をなで下ろす。
「ううう……」
フウロは未だに怖いのか全身が震えている。
「フウロさん、大丈夫ですよあの幽体の女の子はもう出てきませんから」
「別にそういうのじゃ……ないもん」
とフウロは未だに片意地を張って言いながらも、いつもの覇気が無い。
これ以上この話をしても仕方ないと思い、レッドは別の話をする。
「にしてもあいつら何処に行ったんだ」
レッドはそう言うとふうと息をつき、探そうとドアを開ける。
すると、偶然にもヒトモシとピカチュウがやってきていた。
「ピッカ！」
ピカチュウはレッドを見ると片手を上げて意気揚揚に挨拶をしてくる。

「ピッカ！　じゃない！　どこ行ってたんだよ」
「ピカピー」
ピカチュウはそう言うと、後ろに持っていた何個かの道具を前にコロコロと出す。
レッドはなんでもなおしとのろいのお札はすぐに分かったが、もう一つの紫色に光る石がよく分からない。
「物拾っていたのか……、なんだこれ」
レッドはその石を手に取る。
「それ、闇の石だよ」
フウロはいつの間にかレッドの背後を取り、レッドの耳元にそう囁く。
「ワッ！　びっくりしたー……」
レッドはビクッと肩を震わせて、石を落としそうになるがなんとか留める。
「えへへ、何か突然気が緩んでね。それでちょっと背後が無防備だったから驚かしちゃった！　ごめんね」
フウロは愛嬌ある様子で謝る。そんな風に謝られて拒否する男は居ないだろうとレッドはつくづく思った。
「ハハハ……いいんですよ。にしても闇の石……？　雷の石とかと似たようなものですか」

「おー、鋭いね！　そうだよ、闇の石だからゴーストとか悪タイプ系統に使えるよ。ナギさんが大分前にヤミカラスに使っていた記憶があるからさ。君のポケモンだったら……」

　フウロはヒトモシに目を向ける。ヒトモシは突然視線を向けられて驚いたのか、おどおどしている。

「ヒトモシ……。そうそう！　四天王にシキミさんっていうちょっとオカルティックな子が居るんだけど、その人によればヒトモシの進化形のランプラーってポケモンに使うとシャンデラっていう凄く強いポケモンになるらしいよ！」

　フウロは途端に明るい口調で話し始める。

「俺の見立ては間違いでは無かったか……」

　レッドは静かな声で呟く。

「え？」

「いえいえ何でも。そうですか。じゃあ検討しておきます」

　こうしてレッドはピカチュウより三つの道具を貰い受けた。

　気付けば外はすっかり暗くなっている。

「もう夜だ……」

「今日はここに泊まるしかないですね……。ここはお化けとか幽霊は来なさそうです

し」
「えー……」
フウロは不満な顔を見せる。やはり、怪しい雰囲気がするのが嫌なのだろうかとレッドは思う。
「いや、大丈夫ですって、この部屋の中だったら多分何も来ないでしょうし、来たとしても俺のポケモンでどうにかします」
「そーじゃなくて……、あたし、男の子と二人っきりで泊まるの初めて……なんだけど」
フウロはそう言うと、頬を赤くする。これまでも何度か赤くなってはいたが、今度のは少し違う気がしたのはレッドの気のせいではないだろう。
頬を赤らめながら俯き、内股になり、左手を右手で掴み、かなり恥ずかしそうだ。
「ブッ……、だ、大丈夫ですよ、べ、別に変な事したりはしませんから」
と言いながら、レッドはフウロの肢体をちらちらと見る。
湧き上がる情欲を押さえながら、レッドはフウロの出方を伺う。
「ふう……、そうだよね。レッド君、エリカさんがいるもんね。まさかあたしにそんな事……する訳ないか」
フウロは半ば無理をしているかのように笑顔を作る。
まだ寝るには早いので、レッドとフウロは談笑したり等などとして、夜を過ごすの

だった。

―午後１０時―

レッドはフウロと話しているうちに段々とその妖艶な肢体に見とれていく。

前話していた時はエリカも居たし、それなりに自制が働いていたが、今度は二人きりだ、自然と発情が進む。

そういう訳でレッドはある行動に出る。

「ピカチュウ、ヒトモシ……、ちょっと廊下に出て遊んで来い」

二匹は不思議そうな目をするが、従った方がいいだろうという事でさっさと出て行く。

「？　どうして下がらせたの？」

「いや……、ヒトモシは暗い空間の方が好きそうだし、ピカチュウはそのお目付けってことで」

「ふーん……」

と言うと、フウロはポケットから携帯を取り出し時間を見る。

「もうこんな時間かあ……、じゃ、あたし歯磨いてくる」

この部屋の奥には洗面台がある。

フウロは立ち上がると、後ろを向き、歯ブラシを取り出すためにカバンに向かう。
レッドはカバンに向かっている時、フウロの背後から精いっぱい抱きつく。
その時、レッド自身にフウロの腰あたりの柔らかい感覚が来る。
その感触に彼は更に気分を高揚させる。
「ひゃあ！」
フウロは当たり前だが、突如抱きつかれて狼狽している様子だ。前かがみになっているところを狙われレッドに掬い上げられたので、丁度フウロの体は弓のような形になる。
「ちょ……レッド君……な、何……？」
「……」
レッドはしばらくの間、沈黙を守ったまま柔肌の体温を感じ続ける。
「やめてよ……、あたしたち別にそういう関係じゃな」
フウロがそういって、腕の束縛から逃れようとすると、途端にレッドは
「好きだ」
と、フウロの耳元に囁く。
「！」
フウロはその言葉を聞くと、目を見開かせる。

「好きなんだ……俺、フウロさんの事」
　レッドは続いて同じことを言う。
「何言ってるの……、レッド君には、エリカさんが」
　フウロの反論に、レッドは反射のように答える。
「エリカよりも……ずっと好きなんです！」
「っ……！」
「フウロさんは、俺の事」
「嘘だよ……」
　フウロは、床に悲しげな目を向けながらそういう。
「え？」
「だって、レッド君はエリカさんの事、好きなんだもん……」
「別にエリカの事が嫌いになったわけじゃない……、でも、俺、気付いたんです。フウロさん事、エリカよりもっと……もっと好きなんだって！」
「だからそれが嘘なんだってば!!」
　フウロはいつになく大きな声でそれを否定する。
「……、どうしてそう思うんですか」
「……」

フウロはレッドに質問に対して口ごもる。
「ヒウンの時も、ライモンの時も、どうしてそんなに俺がエリカが好きだというのか分かるのか訊いたとき、貴女はいつもそれっぽい事言ってごまかしていたけど……、どうしてそこまで俺の気持ちを否定するんですか」
「だって……だって……」
フウロはどうしようもなさげに、レッドの言葉を否定し続ける。
「フウロさん！」
レッドは束縛を解き、今度はフウロを立たせて肩をしっかり掴んで詰問する。
フウロはそうなると、観念したかのようにぽつりと話しはじめる。
「『俺は……、エリカを愛している』」
レッドはフウロが話し始めると、肩にかけていた手を放し、フウロの話を聞く。
「『他の誰にも流されたりはしない』……、そう、あの真夜中のポケモンセンターで言っていた……」
レッドは一瞬何のことか分からなかったが、すぐにヒオウギのポケモンセンターで言った事だと思いだした。
そう、エリカに跨られて、閨を過ごしていたあの日である……。
「見てたんですか」

「……。だから、エリカさんとレッド君は強く結びついてるんだなあってあたしは心の底から思ったの」
「……」
「今、レッド君はちょっとエリカさんとすれ違って冷めちゃっているだけ……。それで相談に乗って話しているうちにあたしの事が好きになってしまったんだとしても……、それは嘘、嘘の恋心だよ」
「違う！　嘘じゃないんだ！　俺は本当に……」
「……、あたしは最初から最後まで貴方達の恋仲をサポートする……、それ以上でもそれ以下でもないの……。分かったら二度とあたしの事が好きだとか……そんな事言わないで」
　フウロは、そう言うと寂しげに後ろを向いてバックの中身を探る。
「……、あ。あったあった。それじゃーレッド君、あたし先に磨いてるから」
　フウロは無理に明るくし、レッドに正面を向けながら話す。
「じゃあ……」
「っ」
「どうすれば信じてくれるんですか」
　レッドは半ば必死な目でフウロに訴えかける。

「……、どうしたって……あたしはべ、別に……レッド君の事好きってわけじ」
「……エリカと別れる」
レッドの提案にフウロは目を丸くする。
「……え？」
「エリカと付き合い続けているから……、フウロさんは嘘を嘘と思い続けている……。だったらその嘘の基を取り払えばいい」
「ちょっと待ってよ！　……本気なの？　旅は、旅はどうするの!?」
「そんなの……どうだっていい！　フウロさんとつき合えるなら……！」
「……」
フウロは頬を紅潮させながら、答えに窮する。
「フウロさんは、俺の事嫌いなの？」
「……。嫌いじゃないけど……」
「嫌いじゃない……？　そんな曖昧な返答嫌だよ！」
「……」
「じゃあ、好きか嫌いかで言ったら」
「……」
「なんで……なんで答えてくれないんだよっ！　フウロさんはエリカに遠慮してるの？

俺は今エリカと別れるって言った……。これは俺が自分の気持ちに素直になったからこの決断を下したんだよ？　なのにどうしてフウロさんは素直になってくれないんですか？」

レッドの詰問に対し、フウロは俯きを止めて、キッと正面を向いて言う。

「好き……」

「えっ？」

レッドはフウロの返答に対し、思わず聞き返す。

「好きだよ……っ！　ヒオウギで救ってくれた時から……ずっと気になっていて……、でもあたしエリカさんに遠慮していたから……、あくまで友達として付き合っていこうって……、だからレッド君がエリカさんについて尋ねてきたときは相談に乗ってあげた。……でも、レッド君が自分の気持ちに素直になってくれるのならあたしも素直になるよ。レッド君……君の事が、好き」

フウロはそういうと、恥ずかしさの余り顔から火炎放射でも出そうな勢いな表情になる。

「フウロさん……」

レッドはそういうとフウロを抱擁し、その体勢のまま床に倒れこんだ。

「ちょ……レッド君!?」

「俺……フウロさんとしたいんだ……いいだろ？」
「したいって……ダメだよ！　あたしたちまだそういう事しちゃいけな……」
フウロはそういってレッドを押しのけようとするが
「フウロさん……言っていたよね……、結婚したらこれぐらい仲の良い夫婦になりたいなーって……」
レッドは、ライモンで言っていたフウロの発言を持ち出して言い返す。
「そ……それは夫婦だからっていう話で……、あたしたち結婚してるわけじゃないし、それ以前に結婚する前にこういう事しちゃいけないって……」
「甘いよ……、エリカとは何回もこういう事してるんだ……。だからこれぐらい……って言うのなら1回や2回しなくちゃダメなんだよ……」
そういうと、レッドはフウロに反論させる隙も与えずにフウロに口づけをした……。

―その頃　廊下―
追い出されたピカチュウやヒトモシは屋敷に居たポケモンたちと仲良くなって一緒に遊んでいる。
ラッタやゴルバット等とだるまさんがころんだや、かくれんぼ等をして一通り疲れた後、話をし続けている。

しかし、大分時間がたったのでピカチュウは
『ごめん、ちょっとレッドの様子見てくるよ』
とヒトモシに言いひょこひょことレッドの居る部屋に向かう。
『行ってらっしゃーい』
ヒトモシはちっちゃい手をあげてピカチュウを送り出す。
―部屋の前―
ピカチュウはドアを開けようと飛び上がって、ドアノブを下げて少しだけ開ける。
そして入ろうとすると、そこでは衝撃の事が行われていた。
レッドがフウロの上に覆い被さってキスしていたのだ。
『……え?』
ピカチュウはその光景を見てただただ絶句するほか無かった。
その後は入るのに気まずさを感じ、数十分、一時間と時間が過ぎていく。
―午後11時　同所―
二人はベッドに戦場を移し、まぐおうている。
「ハァ……ハァ……フウロさん、俺もう我慢できないよ……」
「っ……したいんだったら……ゴム……つけて」
フウロは熱っぽい吐息を漏らしながらそう言う。

「えっ？」
「あたし……処女だけど……、レッド君にだったら……いいよ、あげても」
「ほ……本当に？」
「嫌だったら……最初から拒んでるって……。……早くして」
レッドは気分を大いに高揚させながら、リュックの中を探す。
そうだ、旅立ちする直前に母さんから貰ったんだ。そう思ったレッドはリュックの奥底を探し、漸く見つけ出す……。
―ドアの外―
『はわわ……凄いや……』
ピカチュウはひたすらに初めてみる人間の（ニャー）をじっと見つめる。
そんな風に見入っていると、背後から声がした。
『何が？』
『わっ、ヒトモシ！』
ピカチュウは突如登場したヒトモシに狼狽する。
あたふたとしていると。怪訝に思ったのかすぐにヒトモシは部屋の光の元を見る。
『ほうほう……』
ヒトモシは興味深げに中を見た後

『戻ってこないから何をしてるのかと思いきや……御伽のご観閲ですか』
彼女は呆れた目線をピカチュウに送る。
『うう……』
ピカチュウはみっともない所を見られてしょぼくれている。
『ねえ、これ僕たち行った方がいいかな?』
『ダメだって』
『え?』
ピカチュウはヒトモシのまさかの反応に目をパチクリさせる。
『考えてもみてよ。もしここで私たちが入ってギャーピー言ったところで言葉の通じないマスターには心労を負わせるだけ……ここは終わるまで静観した方が良い』
『……、そうだね』
ピカチュウは個人的な興味もあってか、二人の夜伽を見守る事にした……。
―午前2時　同所　部屋―
その後、レッドとフウロは何度も体を重ね、レッドはめでたく（ニャー）卒業を果たす。
二人は布団を被って、まるでどこぞの映画のワンシーンのようにピロートークをしていた。

「フウロ……凄かったよ」
レッドはいつの間にやら彼女気取りになってフウロの事を呼び捨てにしていた。
「うう……、そんな事言わないでよ……」
フウロはそういうと、赤かった頬を更に赤くする。
「フウロさんは……どう？」
「どうなんて言われても……知らないっ」
そういってフウロはシーツを引っ張りレッドとは反対方向に仰向けになる。
「フッ……そう」
「……、途中、エリカさんから電話来てたみたいだけど」
「いいんだよ……、俺はそれよりもフウロとこうしてた方が……幸せだから」
「レッド君……」
「フウロ……大好きだ」
「あたしも……」
そういって二人はもう一度キスをして、眠りにつく。
―部屋の外―
『終わった……みたいだね』
『そうね……』

ヒトモシとピカチュウはそういうと暫く黙ったのち、ピカチュウが切り出す。
『どうしよう……』
『どうするも……、エリカさんに言ったほうがいい』
『え!?』
ピカチュウはヒトモシの提案に驚いている。
『だってマスターに言えと言ったところで正直に話すとは思えないし……そもそも通じないだろうから』
『で、でもレッドはエリカさんにちゃんと言うって』
『お子様……。そんな単純な思考だから進化させてもらえないの』
ヒトモシは嘲ったようにピカチュウに言う。
『な……、違うもん！　レッドは可愛いと思っているから進化させてくれない』
ピカチュウの反論に対して、ヒトモシは冷たくあしらって
『分かった分かった……。とにかく、エリカ……って人がどんな人かは分からないけど……、マスターはこの件を隠し通すつもりかもしれない』
『……』
『でも、知らせないままだとエリカって人が可哀想……、だから言うだけ言った方が良い』

『でも……、僕らじゃ言葉が通じない』
『大丈夫、私の言うとおりにして』
『ヒトモシの……言うとおり？』
ピカチュウはそういうと、ヒトモシはこくりと頷く。

―4月11日　午後1時　フキヨセシティ　カーゴサービス―
それから一か月半後、エリカが用事を済ませたので戻ってくるという報せが入り、レッドはカーゴサービスに居る。
フウロはこの日、ヤマジに用事があると言うのでアララギやベルと一緒に行ってしまった。
あれからフウロとはどうなったかといえば、あれ以来は会うのがきまづくなり週に一回程度会っては軽く話す程度で終わってしまう。
レッドは何度もエリカが帰ってきたらちゃんと話すとフウロに言っている。
さて、いよいよ一か月半ぶりにエリカがレッドの元に戻るので、レッドは奥の出入り口を気にし続ける。
そして、午後1時、いよいよエリカがゲートを過ぎレッドの目の前に姿を現す。
一か月半ぶりとはいえ、やはりその姿は解語の花というべき美しさである。

エリカはレッドを見かけるや否や、荷物を放って走ってレッドの胸に飛び込む。
「貴方ぁーーー！」
「エリカ……、っておい！　キツいってば！」
エリカは非常に強い力でレッドを抱きしめたため、いくら強靭なレッドと言えど少し耐え難かった。
「ハッ……、申し訳ございません」
そう言うとエリカは途端に引き下がって平に謝る。
「ハァ……、全くお前は相変わらずだな」
「貴方も特にお変わり……」
エリカが言いながら、レッドの顔を見ると途中まで言ったところで黙って見つめる。
「……」
「な、何だよ。なんか俺の顔についてるか？」
「いえ、どうしてか前よりもお顔がテカテカされてるなーと思いましたので」
レッドはその言葉がグサリと胸に突き刺さる。肯綮（こうけい）に中（あた）るとはこの事だ。
「ハァ……、全く、公衆の面前で妬かせるわね……お二人さん」
エリカの後ろからナギがやって来た。
「あれ、レッドさん、フウロは？」

「ああ、フウロ……じゃなくてフウロさんならアララギ博士とベルっていう助手と一緒にヤマジにまで行きましたよ」
　ナギは一瞬眉を顰めたが、すぐに平然とした表情に戻り
「そう。じゃあ、私はヒワマキに戻るわ。じゃね二人とも」
　と言ってナギは搭乗口の方へと戻っていく。
　その後二人はポケモンセンターへと向かう。
　―午後3時　フキヨセシティ　ポケモンセンター―
　二人はチェックインの時間を待ち、漸く中に入る。
　色々と諸事を済ませた後、レッドはエリカを呼ぶ。
「なあエリカ」
「はい？」
「どうしてこんなに遅くなったんだ？　お前電話でナツキさんの入院は三週間とか言ってたし……」
　レッドはまずそれが気になっていたので尋ねる。
　エリカは少し間を置くと、小さな声で話し始める。
「……、練習、してたんです」
「練習？」

「ええ、貴方、私と一緒にツーリングしたいって……仰られていましたから」
　確かに手をよく見ると肉刺ができている。
「……え!?」
「私……、貴方の望む事は出来るだけ叶えてあげたい……。そう思って、下問を恥じない心持でサイクリングロードでジムの方々等に教わりながら、何とか乗れるように努力致しましたわ」
　エリカは頬を紅潮させながら言う。
　レッドはその言葉で心に銃弾を撃ち込まれた心情になる。
「あと一つは……これです」
　エリカはレッドの目の前に一枚の紙を見せる。
　上には茶色のような帯のマーク、そしてその下には……
「こ……これって」
「婚姻届。ですわ」
「俺、まだ16なんだけど……」
　レッドは言い返そうとするが、エリカはすぐに
「ええ、分かってますわ。ですから、今貴方に書いていただいて……18歳の誕生日に入籍するのです!」

エリカは気分を高揚させているのか、いつもより声の調子が明るい。
そして下を見るともう妻の欄にはエリカについての情報が書き込まれている。
「エリカ……」
なんとも健気なエリカを見て、レッドは再びエリカに気持ちを戻す。そう、フウロの事などまるで忘却の彼方に捨て去ったかのように。
「私、今から心の中でだけでも貴方と本当の夫婦になりたいと思っておりますから……。貴方、書いて」
エリカが言い終わる前にレッドはエリカを抱きしめる。
「エリカ……好きだっ！」
「は……はい」
「世界の誰よりも……好きなんだ!!」
そういうと、エリカを強く抱きしめる。
当惑気味にエリカはなったが、すぐにレッドの気持ちを受け止め。
「はい、私も……愛しておりますわ。レッドさん……」
その後、（ニャー）をしたがいつも通り途中で邪魔が入るのだった……。
どうしてエリカとの時だけ邪魔が入るんだろう……レッドはそんな事を思い始めている。

そして、エリカが風呂に入っている時、気分が高鳴っていたレッドはライブキャスターを起動し、フウロ相手にメールを打ち込む。
何かを忘れているかと思いきや、フウロの事を忘れていたのだ。
そしてレッドは自身の事も書かれた婚姻届を写真にとり、それを添付して『ごめん』とだけ打ち込んで、送信ボタンを押した……。
―午後9時　ヤマジタウン　飛行場宿舎　221号室―
宿舎内に居たフウロは、メールが来たのを知るや否やすぐに携帯の液晶を見る。
そして、見ると
「嘘……っ……レッドくぅん……」
その後三日間、フウロは宿舎の中で泣き続けたという……。
―第五十七話　歴史は動く〈下〉　終―

第五十九話　冷たい予感

―４月３０日　午前１１時　ポケモンリーグ　チャンピオンの間―

イッシュのポケモンリーグも、内国と同様一月に一回は定例会を行っている。

この日も同じく、イッシュの８人のジムリーダーが一堂に会して集まっていた。

チャンピオンのアイリスが無論議長を務めるが、詰まったときにはシャガがアイコンタクトなりジェスチャーなりをとって補佐してあげている。

さて、事務的な事柄が終わるとあとは情報交換と称した雑談である。

先月、先々月に続きレッドの話題で持ちきりだ。

「あの二人ほんっと強いよねー」

まず、ホミカがそれを切り出す。

続いてチェレンが

「まさか僕のムーランドを数撃で倒すとはね……、本当恐れ入るよ」

等などのレッドの武勇伝らしきものを聞き、シャガは荘重な口調で言う。

「フフフ……。そうか、この蒼龍のシャガ。漸く本気を出す時が来たか」

「大抵のトレーナーだったら止めますけど……、レッドさん相手だったら本気を出して

も……いやあの夫婦を前にしたらいくらシャガさんでも本気をださなくては危ないです」

　チェレンは忠告半分にシャガに言う。

「チェレン程のトレーナーが言うのならば、恐らく本当の事だろうな。よし、行くぞアイリス。今日も修行だ」

「はーいおじいちゃん！　あ、皆ー今日は帰っていいよーお疲れ様ー」

　そう言ってアイリスはシャガに連れられるかのように出て行った。

「ふう……、アイリスちゃん、チャンピオンになってもあんまり変わってないわね」

　カミツレは呆れたかのように言う。

「そうかな……、段々とチャンピオンの顔つきにはなってきてると思いますけど」

　フウロがそうカミツレに言い返す。しかしその声にはいつもほどの元気がない。

　それに感づいたのか、カミツレは

「ねえ……、フウロ。今日、午後空いてる？」

「確か今日はジムは任せて行ったから……。一応空いてますけど」

　フウロとカミツレは先輩後輩の仲である。

　カミツレは5年前にフウロがジムリーダーになった時から教育係として接してきたが、いつの間にナギ以上の友達となっていた。

「そう。じゃあさ、久々にライモンに来ない？」
「うーん……ちょっと気分がのらなくて」
フウロはそう言って断ろうとするが、カミツレは強引そうに
「気分がのらなくても行くの！　ほら、あたし普段仕事ばっかりであんまりミュージカルとかフットボールとか見る機会無くて、一人で行くのもなんだかなーって思ってさ。こういう貴重なオフの日は羽伸ばしたいじゃない？」
「そういう事なら行きますけど……」
という訳でフウロはカミツレに引っ張られるようにしてライモンシティへと向かい、カミツレと一緒に各施設を回った。
カミツレはお忍びというのもあって服装をかなり地味な方面に変えて、髪もストレートなロングに直したりとしている。フウロも外出向けにリーグの更衣室で着替えている。
しかし、カミツレに関してはやはり有名人なので各地でパパラッチの追っかけがあったりしたが上手く追い払ったりしてなんとかやり過ごしながら時をすごした。
そして、フットボール観戦の帰り、最後にカミツレは行きつけの喫茶店で個室を借りる。
―午後6時　ライモンシティ　喫茶店―

個室の中はアンティーク調の木机。
机の左右には焦げ茶色の3人掛けソファが2つある。
ラウンジと同様に、中にも静かなクラシックの曲がかかり落ち着いた雰囲気である。
カミツレは紅茶を、フウロはウーロン茶を頼んで向かい合って席に着く。
「へえ……、カミツレさんってこういう所好みなんですか……」
「ここ最近出来たところでね。時々、ファッションショーの設計とか落ち着いて考えたい時はここに来るのよ。集中したいときに使いたいからこういう雰囲気じゃないとね」
「なるほど……」
その後、フウロの会話が途切れる。
1分ほどの沈黙の後、カミツレが踏み切った。
「……、それで何があったの?」
「へ……、何がってなんですか?」
フウロは本当に分かっていない様子である。
カミツレは気にかかっていたことを尋ねる。
「だから、どうしてそんなに元気がないの?」
「げ、元気ですよ!　さっきだって精いっぱい応援してましたよ?」
フウロは少し動揺した風だが、そう言い返した。

「まあ確かにスポーツ観戦の時とかは元気だったけど……。何年アンタを見てきてると思ってるの？」

「ううう……」

「もしかして、私にもいえないようなふしだらな秘密が……」

カミツレは冗談半分な口調でフウロに話す。が、フウロはそれを聞いた途端に真っ赤になる。

「……、まさか。本当なの？」

「……、あの、誰も他に聞いてる人居ませんよね」

フウロは念を押すかのようにカミツレに尋ねる。その目は潤んでいた。

「大丈夫。ここは私の馴染みの店。パパラッチとかはまず来ないし、ここは会員制で、しかも紹介制だから簡単には入れないわ。それにここは個室で、防音もされているから余程の事が無ければ周りには聞こえないし」

そう言ってカミツレはフウロを安心させようとした。

「そうですか……。じゃあ」

フウロはカミツレに全てを話した。

レッドが自分に対して浮気をしてきた事から何から何まで全てだ。

カミツレは最初は慎重に聞いていたが、段々と青筋が見え始め、全て聞き終ると流石

の彼女も激昂して
「ふざけた話だわ！　自分からフウロに言い寄っておいて、いざ心変わりしたら直接話もせずにフウロを捨てたって事でしょ!?」
　カミツレは机を叩き、乗り出すように席を立つ。
　紅茶が少しだけこぼれたので、フウロは拭きながら宥める。
「ちょ、カミツレさん落ち着いて……」
「落ち着いてられるわけないわ！　フウロ、レッドは今何処に居るの？　一言ガツンと言ってこなくちゃ……あとエリカさんにも事の次第を」
「だから、落ち着いてください！」
　フウロはカミツレの発言を突き放すかのように声を出す。
「……。フウロ、あんたはどうなのよ」
　フウロの宥めで少し気分を落ち着かせたのか、カミツレは先ほどより冷静さを取り戻した声で尋ねる。
「あたしは……その」
　カミツレの問いに、フウロは表情を曇らせ、口ごもる。
「ヤリ捨てされて、あんたは黙っていられるの？　体だけ貰ったらすぐにポイだなんて……まともな人、ましてやポケモンマスターを目指すような人がしていい事じゃないで

しょ」

　カミツレは更に追い打ちをかける。

「確かに……レッド君がした事はやっちゃいけない事……それぐらいはあたしも分かってます」

「だったら！」

「でも……、あたし、レッド君とエリカさんの仲を取り持つ……って約束しちゃったから……」

「約束？　そんなのどうだっていいじゃない！　最低の形で反故にされて、それでもまだ後生大事にもってるだなんて……」

　カミツレはまたヒートアップし始めている。

「相手が破ったからって、こっちも破っていいなんて法は無いですよ……。寧ろ、最終的にはレッド君とエリカさんの仲が元に戻って良かったかな。って思い始めたんです」

「そんなの偽りよ！　……それにエリカさんが一番可哀想じゃない。この件を知らずにずっとレッドと一緒に旅するだなんて……」

「……、たとえこの偽りをエリカさんの前で暴いたところで誰が得するのですか」

　フウロの言葉に、カミツレはハッとした表情になる。

「レッド君は醜態を暴かれてショックを受けるし、何よりエリカさんが悲しんで……最

悪の場合は別れてしまうかもしれない……。あれだけ仲の良い……例えエリカさんが一方的にだとしても、心底惚れている人の悪行を話すだなんて……あたしには出来ないです」

「……」

「それに、あたし……最初はすっごく悲しかったんですけど……、後々分かってきたんですよ。……あたしなんかエリカさんに勝てるわけがないって」

「そんな事ないと思うけど」

カミツレは即座にフォローを入れる。

「ううん。あたしよりもずっと綺麗だし、可愛いし……頭もいいし、料理だって凄く得意だし、家事は完璧にこなすしで……、何一つあたしが勝てる事なんて無い。そんな人に取って代わる事なんて出来る訳ないよねー……って」

「勝てるところが一つも……ねぇ」

カミツレはフウロの胸元に注目するが、口には出さないことにしたようである。

「そこからあたしが無理やり奪ったところでレッド君が嫌って思うだろうし……ここはもう忘れて、いつも通り過ごした方がお互いにとって最良の策なのかなって思う事にしたんです」

フウロの言葉を最後まで聞くと、カミツレは一つ大きなため息をつき

「全く……、とんだお人好しね……。でも、そうね、フウロがそう思うんだったらあたしが何かしても仕方ないわ」

カミツレがそういうと、フウロはこくりと一回だけ頷く。

「ここで話したことは誰にも言わないでください」

「……、分かった」

そういうと、カミツレがフウロの方に小指を突き出す。

「？」

「何で首をかしげるのよ……指きりよ指切り！　内国だと結構流行っている約束をする時の風習でね、ちょっと子どもっぽいけどこういうのも良いでしょ？」

フウロはそう言われるとクスリと笑って

「……、そうですね」

と、フウロの方も小指を出してカミツレの指と絡める。

そして、カミツレが指切りをする時の詞を言う。

「Ｉ　ｐｒｏｍｉｓｅ　ｃｒｏｓｓ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ　ａｎｄ　ｈｏｐｅ　ｔｏ　ｄｉｅ.」

一応、イッシュ人は全員イッシュ語（現実で言うアメリカ英語）を母国語として習得しているため、フウロは理解した。しかし、母国語とはいっても内国の言葉がかなり流

入しているため、イッシュ語と内国語（現実で言う日本語）の使用比率は6：4ぐらいだという。
　１０秒ほど小指を絡めたのち、二人は指を離す。
「うん。これで良し！」
「……、何だか全部話したらスッキリしました！　明日からはなんとか元気出していけそうです」
　フウロはいつも通りの口調でそう言った。
　カミツレは頬を緩ませ、安心した表情になって
「うんうん。やっぱり落ち込んでいるフウロはらしくないよ。私も、他のジムリーダーも、フキヨセの人もみーんなあんたのふっ飛んでるくらいの笑顔が好きなんだから」
「それって……チェレン君もかな」
　フウロは思案深げな表情を、カミツレに向ける。
「はあ？　どうしてそこでチェレン……ってあんた、まさか」
「べ、別にそういうんじゃないですから！」
　フウロは頬を紅潮させて否定する。
「ははー……、全くレッドの次はチェレン……あんたひょっとして年下好き？」
「だーかーらー、違いますー！」

こうして、女二人のガールズトークは夜更けまで続くのであった……。

―4月11日　午後10時　フキヨセシティ　ポケモンセンター―

さて、所と時戻る事数週間前。

レッドがエリカに気持ちを戻して、レッドが風呂に入っている時の事。

エリカは自分のベッドに腰掛けて『荘子』の写本を読んでいた。

そんなエリカと向かい合ったところに居るのがヒトモシとピカチュウで、いよいよストレンジャーハウスで見たことをエリカに話す事にしたのだ。

『よし、行こう』

ヒトモシがまず、ピカチュウに言う。

しかしピカチュウは不安そうに

『うう……、本当に大丈夫なの?』

『私の言うとおりにすれば問題ない……はず』

『はずってなんだよ!』

ピカチュウはヒトモシにそう突っ込みを入れる。

『……、ええい、とにかく行かなきゃ始まらない!』

といってヒトモシはベッドから飛び降り、エリカの足元に近づく。

『あ……ちょ、待ってってば！』
ピカチュウはヒトモシに糸を引かれているかのようについていった。
『エリカさん！』
ヒトモシの鳴き声に、エリカは気付き、写本を傍らに置く。
「あら、どうされたのです？」
『え……えっとですね。レッドがそのフウロさんと粗相を……』
ピカチュウはしどろもどろに言う。
『バカ』
『え？』
ピカチュウが横を向くまでもなく、ヒトモシはシャドーパンチを脳天に喰らわす。
ピカチュウは倒れかけた後、すぐに体勢を立て直し
『痛いなあ！　何すんだよ！』
と怒りを露わにするが
『言葉じゃ何言っても通じないって言ったでしょ。ジェスチャージェスチャー』
ヒトモシは冷ややかな視線をピカチュウに向ける。
『あ、そうか』
という訳で、ピカチュウが自作のレッドのお面を被る。ハッキリ言って出来は幼稚園

児の工作並みだが二匹なりの本気である。
そして、ヒトモシはフウロのお面を被る。
「あら、お遊戯ですか?」
エリカは興味を示した。が、ここで事件が起こる。
お面は紙で出来ているので、ヒトモシの炎に反応してすぐに燃えてしまったのだ。
出火した現場を見たエリカは保母のように接する。
「まあ大変!　ハスボー、水鉄砲です」
流石にルンパッパは波乗り等しか覚えていないので、まずいと判断したのかホウエンで捕まえたハスボーをエリカは繰り出し、水鉄砲でなんとかした。
抜群のタイプである水技を喰らって、ヒトモシはぐったりする。
『うう……』
『おい何やってるんだよ!』
ピカチュウはヒトモシを助け起こす。ゴーストなのにどうして捕まえられるのかは置いておこう。
『しょうが……ない、ピカチュウ、奥の手』
ヒトモシはピカチュウに息も絶え絶えの声でそう指示する。
『奥の手って……いいの?』

エリカは叱る以前に不思議そうな目線で2匹を見る。

『ここまでやってしまった以上……、何もしないまま終わる訳にはいかない……、伝わるかどうかはともかく……、やって』

ヒトモシはそう言うと少し赤くなる。

『わ……分かった』

ピカチュウはヒトモシに口づけをする。

それも30秒くらいの長いキスだ。

「まあ……」

エリカは感嘆の声をあげる。

キタか？　とピカチュウは思ったが、エリカは

「白雪姫のワンシーンですね！　ヒトモシがカタリーナ姫で、ピカチュウが王子様……、そしてリンゴをハスボーの水鉄砲にみせかけて……、王子が仮死状態の姫をキスで生き返らせる……中々考えましたわね」

エリカは非常に感心しているが、ピカチュウは必死に首を振って違うという事を訴えるが、彼女は最早目のうちに収める事すらしない。完全にメルヘンに時めく乙女である。

「なるほど……、ポケモンの可能性は確かに無限大ですわ。アクロマさんの言う事もよく理解できる気がいたします」

ピカチュウとヒトモシはダメだこれは……と諦めて、一まずは退散することにする。

その後、2匹はエリカから色々とグリムやアンデルセン童話等を聞かされたという事は想像に難くない。

―4月14日　午後8時　ネジ山―

フキヨセからセッカに向かう道中。レッドとエリカはここで休憩を取った。全ての手持ちをきちんと範囲を決めて息抜きをさせている。

一方的ないじめを避けるために、エリカのポケモンとレッドのポケモンは食事以外の時は一緒にならない。

さて、晩御飯を済ませるとそれぞれのポケモンが遊びだす。ピカチュウはある決断をして、レッドのポケモンの首領格であるカメックスに話しかける。

『ねえ、カメックス』

『おう、どうした』

カメックスは野太い声で応じる。

『皆を集めてくれないかな?』

『別に構わないが……、何があったんだ急に』
カメックスは不思議そうな表情を向ける。
『皆に伝えておきたいことがあるんだ……レッドについて』
『マスターの事でか……。分かった、そういう事なら』
という訳でレッドからは少し離れた位置で総勢５０匹程の手持ちが輪っかになったように集まる。
カメックスが上方の中央に鎮座し、その左右にリザードンとフシギバナという最古参。ピカチュウはフシギバナの隣に居る。
そこからは適当に並ぶ。ヒトモシは新入りという事でカメックスの向かいに居る。
並び終わると、カメックスが第一声を発する。
『お前らよく集まってくれた。今日はピカチュウから何か話したいことがあるらしいぞ』
という訳で、全部のポケモンの視線がピカチュウに集まる。
ピカチュウは少し緊張しながら話し出す。
『皆、よく聞いて。エリカさんとレッドが交際していることはもうみんな分かっている事だと思うけど……』
『前置きはいいから早くしろよー』

『そーだそーだ、おにごっこの続きやりてーんだよ』

ラッタやコイルなどのまず使われない連中から文句が出る。

カメックスはそれを睨みつけて黙らせる。

『……、それで……、落ち着いて聞いてほしいんだけどさ、その、レッドがフウロさんっていう女のジムリーダーの人と……えっちしてた』

ピカチュウは真っ赤になりながらもすべてを言い切る。

その言葉で一気にポケモンたちは紛糾する。

あまりの大声で、エリカに膝枕してもらって寝ていたレッドは目を覚ます。

「おい、何だなんだ」

レッドはそう言って上体を起こす。

「きっと、おやつの取り合いかなにかでしょう。微笑ましいですわね」

「……、そうか」

そう言ってレッドはまたエリカの膝の上で眠りにつく。レッドはピカチュウにあらかじめ来ないように（ジェスチャーで）言われている。

『ちょっと！　どういう事!?　エリカさんを裏切ったって事?』

ピジョットはメスなので尚更そういう事に敏感である。

『うちらのマスターがそんなふしだらな人だったなんて！　もうついていけない……』

ニドクインがそう言ってがっかりする。
とまあ、喧々諤々の状況が続くが、カメックスはドスの効いた大声で
『黙りやがれ!!』
と大喝一声で周りのポケモンは沈黙する。
『ピカチュウが嘘をつく理由も無いだろうから……。それは信じるとして、お前らはなんなんだ、レッドが浮気をしたと知れたらすぐに辞めるのか』
フシギバナが漸く口を開く。
『そうですぞ。先生よりもフウロという御方を取ったのは信じ難いが……』
リザードンはそれに続く。先生と言うのはエリカを指し、リザードンの問題の出所はほとんどエリカから出ているので、リザードンはそう慕っているのだ。
『で、でも……』
やはりラッタやゴーリキー辺りがしどろもどろの反発をする。
『お前らは、マスターから受けた恩を忘れたのか!』
カメックスはそう言って僅かな反論をも封じる。フシギバナに次ぐ古参の意見はやはり強しだ。
『僕は、マスターにトキワの森で拾われる前はうじうじとしてみっともないポケモンだったけど……マスターについていってそれなりに強いポケモンになれた』

『そう、ピカチュウと同じように俺も、マスターに出会う前は弱いゼニガメだったが、今となっちゃマスターの功績に泥を塗らない程度の活躍は出来るポケモンになれた』

第一線で活躍しているポケモンなのにこの謙遜振りである。他のポケモンたちは皆押し黙ってしまう。

『それはお前らも同じだろう。そして、マスターだって人間だ。過ちを犯すことだってある……、だがそんな事があろうと、今までと同じようにマスターの指示を聞いたり、尽くしたりするのが……俺たち手持ちの出来る事じゃないのか！』

『だが、カメックスよ。この事は先生に言った方が……』

リザードンの提案に対し、カメックスは

『姐(ねえ)さんには言わんでいい』

『し……しかし』

カメックスの発言にリザードンは抗おうとするが、フシギバナが言う。

『そうだぞ。そもそもこの事をエリカさんに言ったところで信じる訳がない。ピカチュウの伝聞でしか証拠が無いというのに……』

フシギバナがそういうと、リザードンは渋々引き下がった。

『うむ。それに下手に言って姐さんを傷つけたくないしな……。良いな皆！』

カメックスの言葉に、全ての手持ちは黙ってうなずく。

こうして、手持ち同士の会議は終わる。
翌朝、レッドが手持ちを戻すとやけに皆親しげに接するので、レッドは怪訝に思ったが気にしない事にした。
―4月18日　午後1時　セッカシティ―
セッカシティに着き、ハチクが居ないかどうか町の人に尋ねると今日は偶然にも居る日という事ですぐに旧ジムに向かう。

―旧セッカジム―
つるつるっと氷の床を越えて、ハチクの前にたどり着く。
「……、む、来たか……」
ハチクは物々しい口調で喋る。
「貴方がハチクさんですか……。うーん写真の通りなかなかの着こなしですわね」「それはそうと、俺たち、戦いに来たんです！」
しかし、ハチクはそれに対し難色そうな表情を見せ、
「……、私に挑みに来たというのか。残念だがそれはお断りさせてもらおう」
ときっぱりと断られた。
「ええ!?　どうしてですか？」

エリカは大いに驚いた表情で言う。
「私はもうリーダーを引退した身……。ここには様子見と精神統一で来てるに過ぎないのだ……。それにだ」
レッドとエリカはハチクの次の発言に注目する。
「君たちとは、戦ってはならない。そのような予感がするのだ」
「何ですかそれ！」
レッドは即座に突っ込む。
「……、説明できるものではない。役者の演技がどれほど素晴らしいと口には出来てもそれを完全に体現する事は不可能なように……、この感覚はそう易々と表現できるものではないのだ」
ハチクはそう言ってひたすらに固辞する姿勢である。
「で……でも、俺たちは貴方と戦うためにここまで」
「ご足労かけたのは悪いと思っている。だが、私の勘が戦ってはならないと警鐘を鳴らしているのだ……。本能に逆らって戦ったところで、良い戦果は得られぬ」
「……」
そこまで言われると反論が出来なくなったので、二人は納得しなさげに帰る事にした。

　すると、ハチクが呼び止める。
「待たれよ」
「？」
　二人が振り返ると、ハチクは言う。
「二人は鍛えるために来たのだろう。ならばこの街の北にリュウラセンの塔という場所がある……、私の代わりと言ってはアレだが、行ってみなさい」
「有難うございます」
　エリカだけが頭を下げて、二人はジムを出る。
　―ジムの外―
「なんなんだよ、戦っちゃいけない予感がする……って」
　レッドはそう不満を垂れる。
「いくら不満を露わにしたところでハチクさんは戦ってくれませんわ。ここはハチクさんの言うとおり、リュウラセンの塔に向かいましょう」
　という訳で二人はリュウラセンの塔でポケモンを鍛え、巨魁の待つ街、ソウリュウシティにへと向かうのだった。
　―第五十九話　冷たい予感　終―

第六十話　老いと義理

さて、リュウラセンの塔、道路を越えて二人はソウリュウシティに到着した。
その塔で、エリカはテッシードをナットレイに進化させることに成功する。
当人は最初驚いてはいたが、やはり馴染みなので捨てる真似はしなかった。
―ソウリュウシティ
古来からの歴史と伝統を守る由緒正しき町。
過去と未来が絡む町として高名だが、未来に関する事物はどうやら別世界にあるようだ。
内国のドラゴン使いが集まる街がフスベならば、ソウリュウはそのイッシュ版に相当するといえよう。ここは、イッシュにおけるドラゴン使いの地位を確立させたシャガの住まう街である。
さて、そのジムリーダーのシャガはこの街の名士で、且つ市長だ。市政に携わる一方で世界で一二を争う実力を持つとも巷で囁かれるジムリーダーでもある。
―５月２日　午前１１時　ソウリュウシティ―
ゲートをくぐり、ソウリュウの街並みが目の前に広がるとエリカはほうと感嘆の息を

吐く。
「まあなんと宜しい街なのでしょう……。エンジュとはまた違う枯淡の美を彷彿とさせる所ですわねぇ」
　レッドにとってはあまりにも高尚に過ぎる世界なので、彼は適当に流しながら言う。
「あー確かに落ち着くところだな……。さてと、いよいよか」
「ええ、本当の正念場……。心して行きましょう」
　という訳で二人はポケモンセンターで回復させた後、いよいよジムに向かう。
　―ソウリュウジム―
　中はとても荘重な雰囲気が漂う内装なジムだ。
　恐らく、天井まではもの凄く高いんだろうなあ……等とレッドが思っているとガイドーが話しかけてくる。
「やーやーお二人さん！　ようこそ、ソウリュウシティジムへ！　イッシュ最強とも目されるお方に挑戦に来たお二人に、おいしい水っす！」
　ガイドーはさも当然のようにおいしいみずを二人に手渡す。
「随分何というか……、力入ってそうなジムですね」
　レッドが感想を漏らす。
「そっすね。ここはシャガさんが、自らがドラゴン使いである事を誇示せんが為か否か

……、この大きな龍の石像に乗って挑戦者はどんどん上に行くんっす！」

「え!?」

相変わらず無茶苦茶なシステムだな……とレッドは思った。

「驚くなんて今更っすよー。それで、この石像で上に上がっていき、トレーナーを破り続けて、最後にシャガさんが相手するという仕組みというわけっすねー」

絶対死人出るだろ等とレッドは思ったが、そんな事言っていても始まらない為二人は振り落とされる危機に恐れながら上がる。そして、シャガと対峙するのだった。

―最上階―

到着すると、シャガは老人とは思えない程のがっしりとした恰幅の良い男性で、レッドはまずそれに驚く。

ヤナギはそれこそ柳のようにほっそりとした体形だっただけに尚更である。

さて、そうこうしていると、シャガが重々しい声調で出迎える。

「よくぞ参られた。私がソウリュウポケモンジム、ジムリーダーのシャガである」

その一言で、レッドは他とは違う何かを感じ取った。

それはヤナギと対峙した時と似てはいるが、どこか丁寧さ等が残っている、そのような感触である。

「市長として、街の為に尽力し、トレーナーとしてただ強さを追い求めるうちに、いつの

間にやら蒼龍、龍帝……、色々なあだ名がついてしまったが、心だけはさほど変わっておらぬつもりだ」

シャガはヤナギとは違ってそこまで畏怖や力強さなどは感じない。しかし、その代りに純粋であるが故の正当な恐怖をレッドは感じていた。

なるほど、ヤナギと並ぶのも分かる気がするなどとレッドは思う。

「さて、君たちがイッシュに来ると聞いて以来、いつも以上に修行に明け暮れたが……、それに値するほどのトレーナーかどうか試させて頂こう。アイリスや二年前のかのトレーナーの如く、篤い心を持ったトレーナーであってくれ……！」

するとシャガはクリムガンとチルタリスを繰り出した。それに対しレッドはカメックス、エリカはユキノオーを繰り出す。

当然、フィールドには霰が降り注ぐ。

「カメックス！　吹雪！」

指示が下るとカメックスは砲塔より大量の雪を噴出させる。

チルタリスは一撃で倒れる。が、クリムガンは何とか耐えきった。

「クリムガン。ユキノオーにドラゴンテール」

シャガがそう静かに指示する。すると、ユキノオーはクリムガンの太い尻尾によって弾き飛ばされ、ボールに戻る。

「も、戻ってしまいました……。止むをえませんわ、おいでなさい、ダーテング！」
「行け、サザンドラ」
シャガは三つ首の怪獣の如きポケモンを出す。
サザンドラは出ると、雄たけびをあげて周囲を威嚇する。
「強そう……、でもだからといって怖気づいたりはしない！　カメックス！　吹雪だ」
「サザンドラ、ダーテングに大文字」
サザンドラの放った大文字はダーテングに直撃し、真っ赤な火だるまとなって一撃で倒れる。
そして、二回目の吹雪が二匹に襲いかかり、クリムガンは倒れ、サザンドラはなんとか生き残る。
「……、やはり、一筋縄ではいきそうにないな」
「ええ、左様な様子で……」
二人は確信めいた視線をシャガに向ける。
「聞いた通りな実力はありそうだ……。確かに、この二人の前では本腰入れねば……危うい」
シャガのその口調はどこかまだ余裕が残っている風である。
「宜しい、ならばこれを御覧に入れよう。行け、オノノクス」

シャガはそう言うと、背が高く、如何にも龍である事を物語っているポケモンを出した。オノノクスも同じく雄たけびを上げ、強さを誇示する。

「御覧に入れる……？　どういう事でしょう」

エリカが疑問に思っていると、シャガは次にこの一言を放つ。

「オノノクス、サザンドラ。双龍の誓いだ」

指示が下ると、二匹の龍は地鳴らさんがばかりの咆哮を上げ、サザンドラからは青色の、オノノクスからは赤色の波導が発生する。そして、二つの波動は磁石が引き合うかのように互いに近づき、やがて衝突し結合する。

それが終わると、波動は消滅する。

「双龍の誓い……？」

「……、ドラゴン使いとして永年の経験を積み、研鑽しきった者のみが習得出来る技だ。さて、二人はこれに耐えきれるだろうか……、サザンドラ！　カメックスに龍の波導だ」

サザンドラは三つの口から灰色の波動を放出する。

灰色の波導はあっという間にカメックスを貫通して通り過ぎる。

本来、龍の波導は等倍のはずだが……、カメックスはひとたまりもないとばかりに一撃で倒れてしまった。

その後、オノノクスの逆鱗等によって二人のポケモンは蹂躙され、シャガのポケモン

に多少の打撃は与えはしたものの敗北を喫する事となった。
こうしてレッドは、ヤナギ戦以来の雪辱を蒙る事となる。
最後のポケモン、カビゴンが成す術も無く倒れると、レッドは目の前の現実が信じられず俯いてしまう。
エリカは心配そうな目線を向けている中、シャガはポケモンを戻すと二人に語りかけ始める。
「……、つまらぬ」
シャガの第一声に二人は顔をシャガの方に向ける。
「私が何か月も修行してきたのはこんな二人と戦うために来たのではない」
「それって……、どういう事です?」
レッドはシャガに尋ねる。
「二人とも本気を出しきっておらぬだろう」
「え?」
「あれが本気だと言うのであるならば、内国のトレーナーと言うのはそれほどに程度が低いという事になるぞ」
シャガが言うと、エリカは即座に返す。
「何を仰せになるのですか。内国が起源だという事を忘れて……」

エリカが言い切る前にシャガは続ける。
「青は藍より出でて藍より青しというであろう。イッシュが内国のレベルを追い越す事は考えられない訳ではない。しかし、内国のトップトレーナーがこの程度の実力な筈がない！」
「……、だったら」
シャガの発言にレッドは静かなる反発をする。
「次こそは本物の実力を……、内国のトップトレーナーというのが如何ほどのものか御覧に入れますよ」
レッドは決心に燃える目つきでシャガを見ながら言う。
「うむ、その意気よ。次回こそはこのシャガが満足する戦いを頼んだぞ」
その後も少し話をして、二人は地に降り立つ。
ジムを出ようとするとガイドーが話しかけてきた。
「いやー、まさかお二人が負けるだなんて……」
ガイドーは口を開けて大いに驚いているようである。
「捲土重来はきっと果たして見せますわ！　ね、貴方」
「お、おう！　そうだな」
レッドは捲土重来の意味を知るはずもなかったが、話筋から大意はそれなりに伝わっ

た。その為、流されるかのように同調したのだ。
「ところで……、あの技凄かっすよね」
「双龍の誓いですか……。最早相性の壁をも破壊しかねない技ですわね」
エリカが同調する。そしてレッドも、波動が現れ直後にカメックスが倒れた事を想起しながら同じことを思ってうんうんと頷く。
「もしかして蒼龍のあだ名って……」
そしてレッドはそのことに感付く。勘が冴えているようだ。
「ご賢察。実は蒼龍のあだ名って、まだシャガさんがあの技を覚えたての頃に見境なく使いまくっていた時にそれを目の当たりにしたトレーナーは悉く顔面〝蒼〟白となって散っていく……、故に蒼龍という異名がついた訳っす」
「なるほど……」
レッドと同じようにエリカも頷く。何とも微笑ましくも恐ろしい所以（ゆえん）であると共に、その時のトレーナーが不憫で仕方ないとレッドはつくづく思った。
その後二人はガイドーと別れ、ジムを出る。
出て暫くすると一人の紺色の髪をした少女がレッドの腹部に突っ込んできた。
痛みを覚えながら彼は下を見ると、見覚えのある少女がそこに居た。
「いたた……、あー　ヒウンの時の……」

少女はレッドの腹部より離れると顔を見て言った。
レッドも思い出しかけたが、エリカがすぐに思い出したようで
「貴方、アイリスさんですよ。ヒウンの時道案内をして頂いた……」
その誘導で漸く彼はアイリスの事を思い出し
「あぁ……、君か」
と静かに返す。
「君か……って。なんかえらそー！　まあいっか、お久しぶりーエリカお姉ちゃんにレッドお兄ちゃん！」
アイリスはかわいらしい笑顔を浮かべながらそう言う。確かに覚えていたようである。
エリカが返礼したのち、アイリスが話し始める。
「おにーちゃん達がこの街に居るってことは、シャガおじーちゃんと戦ってきたってことだよね？」
「……、ああ、そうだ」
レッドは無愛想な口ぶりでそう返す。
「で、そんな調子だと負けちゃったのかな？」
アイリスは二やけ気味の表情で二人に尋ねる。

こんな子どもに見透かされるのは癪だと思ったレッドは
「ち……違う」
と答える。が、アイリスでは無くエリカが
「貴方……、すぐに発覚する嘘をつくのはお止めになられたら如何です？」
と耳打ちしてきた。
エリカの予測が当たったか否か、アイリスはすぐに
「わぁ！　凄い！　じゃあおじーちゃんに勝った証のレジェントバッジを……」
「俺が悪かった。そうだよ、負けたんだよ」
レッドはエリカの言葉の意味をすぐに察して、アイリスに平に謝る。
「おにーちゃん嘘ついちゃダメだってばー！　あたしも本気のおじーちゃんには一度も勝ったことないから気持ちは分かるけどさ」
アイリスは爽やかな笑顔で全てを許してくれたようだ。
「……。アイリスさんは何度もあの技を見たことがあられるのですか？」
エリカはアイリスに疑問の視線を向けながら尋ねる。
「あの技って……、双龍の誓いの事かな？」
エリカは黙って頷く。
「そりゃあもう何度あの技に泣かされたかわかんない位にね！　だってあの技の何が凄

いって……」

アイリスはその後双龍の誓いの効果について教えてくれた。

双龍の誓いは基本的にサザンドラとオノノクスの能力を大幅に上げる能力である事。

基本的に残り偶数匹でないと効果は無く、残り六匹だとオノノクスが攻撃一段階、サザンドラが特攻一段階上昇。四匹だとオノノクスが攻撃二段階、サザンドラが特攻二段階上昇。

残り二匹はアイリス自身見たことないから知らないらしい。

そして、この技でターンを消費する事はなく、体力を代償としている。

発動ターンのみではあるが、一致技の掛け率が二倍（つまり1．5×2＝3）になるという。オノノクスの逆鱗等と言うのは、道具の効果もあって威力が１０００を超える事もあるそうだ。

……という事をアイリス本人から教わった。

「なるほど……、勉強になりました。有難う」

レッドはアイリスに謝意を示して深く礼をする。

「いいっていいって。ヒウンのプラズマ団潰してくれたし！　それに、二段階でのあの技を発動しているって事は相当二人の事見込んでるんだよ！」

「そうなんですか？」

エリカの尋ねにアイリスはまた笑顔で首を縦に振って言う。
「うん！　そもそもこの技自体、最初の頃使いすぎた反省もあって本気を出すと決めた相手にしか見せないし……、それの一個踏み込んだ段階の者も見せてくれるってことは本気でたたかわなくっちゃ！　ってシャガおじーちゃんを奮い立たせたという事なんだよ！」
「なるほど……」
「だ・か・ら、この技の事を教えたんだから修行して帰ってきた時は絶対おじーちゃんに勝ってね！　アイリスとのお約束！」
その後、アイリスが小指を出したのでレッドとエリカは順番に指切りげんまんをした。エリカがしている時は児童と保母のような感じでどこか微笑ましいとレッドは思う。
「さて修行と言ってもどこに行けば……」
「確か、ここから東の方向に道なりに行くとサザナミっていう街に着くんだけど、そこからマリンチューブっていう海底トンネルを通っていくとセイガイハシティっていう街に着いて、そこにもジムがあるから、そこ行ってみてよ！」
「海底トンネルですか……」
エリカはその言葉に関心を持ったようだ。

「そうそう！　一週間前に開業したばかりなんだけど、もうすっごいの！　水族館みたいな感じでトンネルの外側には多くの水ポケモンが泳いでるところが見れるんだ！　すっごく綺麗だったなー」

アイリスはそういうと、恍惚の表情を浮かべる。

「それは中々面白そうな場所ですわね」

エリカはその風聞が気に入った様子である。

「うん。きっと二人とも気に入るよ絶対！　さて、それじゃあたしはシャガおじーちゃんの所に……」

アイリスがそういうと、アイリスの背後より荘重な声がする。

「アイリス！」

声の主はシャガであった。シャガはアイリスを見るとすぐにアイリスの所に向かう。

「あ、おじーちゃん！」

「全く時間になっても来ぬから何しているのかと思えば……、うん？　ああ、君たちか」

シャガはレッドとエリカに気付くと、その方向に向き直る。

「アイリスの面倒を見てくれていたのか……。感謝する」

少し違うなとレッドは思ったが、面倒なのでシャガに同調する。

「おじーちゃん、あたしねーこのおにーちゃんおねーちゃんとお話ししてたんだ！」

「そのくらい見れば分かる。さて修行に行くぞ、アイリス」
シャガの言葉に疑問を持ったレッドはすぐに尋ねる。
「待ってください。修行って……俺に勝つための修行だったら俺に勝ったんならもう必要ないのでは？」
「……、何を言う。君たちが修行し終えた後、それでも負けぬように鍛錬を重ねるために修行をするのだ。アイリスもチャンピオンとして戦うとき、君たちに負けぬ程の力をつけるために一緒にやらせているという寸法だ」
その言葉にレッドの心中には感心と同時に恐怖が襲い掛かる。
「そうですか」
「期待しておるぞ……、レッド、エリカよ。次こそは奥義を見せられると良いな」
そう言うとシャガはアイリスと共に立ち去るのだった。
もう双龍の誓いという技を見せているのに奥義とは一体何なのか。等と言う疑問を持ちながら、二人は更に旅を続ける。
カゴメタウンや数本の道路を通り過ぎ、二人はサザナミタウンに着く。
因みにカゴメタウンでアララギ博士とベルに会い、ジャイアントホールの話をされ、二人はそれとなく聞くのだった。
どうやら、プラズマ団がその関連で臭い動きをしているらしく、博士たちやチェレン

は目を光らせている様子である。
プラズマ団にも警戒しながら、二人はサザナミに到着する。

―5月24日　午前10時　サザナミタウン―

海の濤声が美しき町、サザナミ。
まだまだシーズンオフなので、それ程賑わっていない為か砂浜は静寂に包まれている。
そんな海に何かを感じたのか、この町に着くと二人はすぐに海に向かう。
「はぁ……、中々に趣深い所ですわね。貴方」
「ああ……、お前の言ってた枯淡の美ってまさか……、こういう事か？」
レッドはエリカにそう尋ねる。
「当たらずとも遠からずですが……、中々に情趣の感が分かってまいりましたわね貴方。嬉しい限りですわ」
そういうと、エリカは本当にうれしそうに微笑む。なんと美しい笑顔なんだとレッドは心底思いながらレッドは呟き始める。
「にしてもやはり泳げないのが辛いなー。どうもマサラで育っちまったから海見るとジャバジャバ入りたくなるし」

「なるほど……、マサラは太平洋に面していますものね」
エリカはうんうんと納得している。
「そういやエリカ泳げたっけ？」
「あら嫌だ……、ムロで泳げないと申し上げたではありませんか」
そんな半年以上も前の事などレッドは覚えているはずもなく
「ありゃそうだったっけ……。にしても残念だなー……」
「何がです？」
「エリカの水……じゃなくて一緒に泳げないのがさ」
レッドはうっかり本音を言いそうになったが、慌てて取り繕う。
「貴方、嘘つくのが下手でございますわね……。そんな事を言われましてもこればかりは天性なので」
「つっても自転車は克服出来たんだろ？」
レッドはからかい半分にエリカに言う。
言われるとエリカは頬を赤く染めながら、
「そ……それはそれです！　水泳ばかりは大の苦手でして……」
「ふうん……、勉強、武道、料理、掃除……なんでも出来るお前がねえ」
レッドは軽く笑いながらそうエリカを冗談半分にからかい続ける。

「貴方だって、勉強は出来ませんでしょう？　それと同じですわ。天は二物を与えてくれないもの……」

エリカが言い掛けると後ろより聞き覚えのある声が横槍に入る。

「天から百物ぐらい貰っているような人が良く言うわね」

その声に二人は後ろを向く。そして呆れた様な声を出した主は金髪のロングヘアに黒い服を着た女性……、そうポケモンリーグ副理事長兼シンオウリーグチャンピオンのシロナであった。

「シロナさん……」

レッドは心の中で拍手を送りながら彼女の名前を言う。

「シロナさん！　これはこれはお久しぶりです」

エリカは会釈程度に頭を下げる。

「うん。選挙以来ね」

「それにしてもシロナさん。貴女はどうしてここに？」

レッドは疑問を抱きながら彼女にそう尋ねる。

「一つは趣味ね。イッシュにも海底遺跡だとか古代の城とか色々と面白そうな遺跡があるし」

「一つは……という事はもう一つあるのですか？」

エリカの尋ねにシロナは、深く頷きながら
「ご明察。実は理事長から一か月くらいイッシュで悪の組織の生態を調べてこい！　とか言われて出張を申しつけられたのね。ま、本当は3週間なんだけど……」
もう一週間はごねたのか……等とレッドは思いつつシロナの話を続けて聞く。
「それで何か成果はございましたか？」
エリカは期待の表情を浮かべながらシロナに尋ねる。
「ホドモエの旧プラズマ団の人たちにあたしじゃちょっとまずいから、他の人を遣いに出して話を伺わせにいったり、あたし自身も色々と調べ回ったりしたんだけど……」
「あ、ホドモエの旧プラズマ団なら俺たちも会いましたよ！」
レッドはシロナに明るい口調でそう言った。
「そう。だったら話は早いわ。それで、二人の天才科学者が大きく関わっているという話なんだけど……、おぼろげながら正体が浮かび始めてきたのね」
「え!?」
二人は驚きの表情を隠せない様子である。
「ただ、やはり団員たちの証言とかをつぎはぎして集成したデータに基づくから信憑性にはやや欠けるけれど……、どうもアクロマっていう科学者が怪しいのよね」
「アクロマさんが!?」

エリカが目を見開かせてシロナに問う。
「あら、知ってるの……。それで、あたしもそのアクロマって人をずっと探していたんだけどね。どうも見つからなくて……。だから本当かどうかは分かりかねるのよ」
シロナはそう付け加えた。疲れ気味の表情からも相当に探したんだろうという事は読み取れる。
「さ……左様ですか」
「もう一人の科学者に関しては全く分からずじまいよ。もしかしたらサカキとかゲーチス以上の黒幕かもしれないわね……その相棒さんは」
「黒幕……」
レッドは固唾を飲みながらその見えない黒幕に畏怖する。
「ま、あたしももう少しは残るし、詳細が分かったらじきに二人にも知らせるわ。だからライブキャスターの番号、教えてくれる？」
こうして二人はシロナの携帯番号を登録する。
その後も少し話をして、二人はシロナと別れた。
そして、レッドとエリカはマリンチューブの長い通り道を抜けてセイガイハに到着する。
―セイガイハシティ

海。とにかく海が多い町。
温暖な気候で、人々は皆活発に過ごしている。
家などは海の上に木で作られた土台の上に建てられていることが多く、人々はそこで暮らしている。
尚、海、開放的、温暖等などの好条件でリア……恋人たちの格好のデートスポットにもなっている。
ジムリーダーのシズイ等と言うのは生粋のセイガイハ人で、海と一体化してるのではないかと囁かれるほどの海好きである。
信じられない事に最後のジムリーダーだが、事実上形骸化しており、シャガに挑むための前哨戦として使われることが関の山だったりする。勿論、本人は全く気にしないというかどうでもいい。
―5月27日　午後1時　セイガイハジム―
海に飛び込んでいったシズイを探しだし、なんやかんやあって二人はシズイの前にたどりつく。
このジムはハスの葉のような物に乗っかってそれに従って動くという仕様のジムで、レッドはなんと安全なんだと胸を撫で下ろす。
「おお！　さっそく来たかい！　おはんら、強そうやね！　ほな、始めましょか」

何とも気の抜けた口調でシズイはバトルを始める。
シズイはブルンゲルとママンボウを、レッドはピカチュウを、エリカはナットレイを繰り出す。
「ナットレイ、ブルンゲルにパワーウィップです！」
「ブルンゲル！　溶けぃ！」
ブルンゲルは水に溶けて防御力を大きく上げる。
そのため、ナットレイが放った大きな刀の如き蔓を以てしても半分ほどしか減少しない。
「ピカチュウ！　フォローに回れ。ブルンゲルに１０万ボルトだ！」
ピカチュウは大きい電力を湛えて、その電撃をブルンゲルに発射する。
電撃は見事直撃してブルンゲルはまるで空中の城が落ちるかのように倒れる。
「ほう、おはんら、おいの見立て通り強いの！　ではこれならどうたい！　行け！　アバゴーラ！」
アバゴーラは出てくると、手をはたかせながら鳴き声を上げる。
「フフ……、四倍と思しきポケモンを出すとは……飛んで火に入る夏の虫とは斯くの事！　ナットレイ、アバゴーラにパワーウィップですわ」
しかし、アバゴーラの防御は存外高く、ギリギリ耐えきる。

「いかんのう……、アバゴーラ！　地震たい！　ママンボウ、願い事をせい！」
　アバゴーラの地震は、たとえ不一致といえどピカチュウを戦闘不能にするには十分だった。地震の衝撃に耐えきれず、ピカチュウは倒れる。
「ちい……。行け、フシギバナ！」
……
　こうしてレッドは一体、エリカも一体を失い、残ったポケモンの体力は黄色と凡勝を収める。
「これはぶったまげた！　おはんつよそーではなく、めっさ強いんじゃな！」
　先ほどからシズイの言動が不思議に感じていたのかエリカは思い切ったような事を尋ねる。
「あの……、もしかして私たちの事ご存知で無いのですか？」
「おいは海男じゃからな！　あまり外の事はよー分からんのじゃ！　やからおはんらの事は全く知らんたい」
　シズイはキッパリとした口調で言う。
「な、なるほど……」
　エリカは納得と当惑の表情で引き下がる。
「さて、あんまりぶったまげとったから忘れてたが、バッジを渡さなダメじゃな！　ほ

れ、ウェーブバッジ、持っていけい！」
　こうしてレッドとエリカは7つ目のバッジを手に入れる。
　その後、色々と励まされてシズイは海にへと還って行った……。
　―ジム入り口付近―
「よー分からん人たい……」
　レッドはあまりにもあっという間の事だったのでついそう呟いてしまう。
「中々自由なお方でしたわね……」
　そう話し合っているとガイドーが話しかけてくる。
「やあやあお二人さん！　勝ったみたいっすけど……、そっすねお二人はこれからですもんね！」
「ええ！」
「うむ」
　ガイドーの言葉に二人は自信を以て答える。
「ところで……、シャガさんに比べてシズイさんの強さ、如何でした？」
　ガイドーに聞かれるとレッドは
「確かに強いですけど……確かにシャガさんと比べると弱いかもですね。あれで8番目というのは肩身が狭いでしょうねぇ」

と答える。

「それ、実は最初から懸念されていたことで……、あのですね、昨年ぐらいからソウリュウの北がリーグだったんですけど、そこの道がふさがれてしまったんですね」

「ほう」

レッドとエリカはガイドーの話を聞く。

「それで、イッシュリーグの慣例としてはリーグに一番近い場所を8番目のジムとするというのがあってですね……。それでこの街に白羽の矢が立ったんです」

「白羽の矢ですか」

「それで、セイガイハの誰がリーダーをやるかって話になってその時のチャンピオンだったアデクさんが旅している時に目星をつけていたのがシズイさんだったんですよ」

「へえ……」

二人は相槌をうちながら更に聞き続ける。

「アデクさんは、シズイさんに頼み込んで、セイガイハジムの設立を要請したんす。シズイさん最初はうんと言わなかったんですけど、『チャンピオンさんが何度もおいなんかに頼んどる。なら、やるしかないけん』と言って承諾した訳です」

「ふうん……、中々お優しい方なのですね」

「それで、やはり自分がさっき言ったような事をほかの人に言われた時、シズイさんは

『そんなの関係ない。おいは、おいの信念に従うてやっとるのみよ。おい以外にやれる奴はおらんし、チャンピオンがすげ変わろうと、おいはやるなと言われるまで約束を破る気は無いけん』と答えたそうです」

そこまで聞くと二人は感嘆の息を吐いて

「義と信条にお篤いお方だった訳ですか……」

「ただの海男かと思いきや……恐るべし」

とシズイを見直した様子である。

「その話を聞いた後、同じことを聞く人は居なくなったようっす。お二人もこれからの参考にされては如何でしょう?」

「結婚生活においても、信念というものは大事ですものね」

「ああ、そうだな」

レッドは遠い目をしながら答える。

その後、二人は捲土重来を果たさんが為に、ソウリュウシティにへと向かうのだった……。

―第六十話　老いと義理　終―

第六十一話　超越者

シズイを下した二人は修行のために空を飛ぶを使わず、歩いて戻る。
エリカはナットレイを鍛え上げてシャガ戦でも使い物になるレベルに上げ（レベル９０台）、レッドはパーティの底上げを狙う。
そうこうしていると月は変わって６月となる。
―６月２５日　午後１時　ソウリュウシティ―
約一か月弱の修行を経てレッドとエリカはソウリュウの土を踏んだ。
「いよいよ巻き返しの時がやってまいりましたわね」
エリカは明るい口調で言う。その瞳には自信で溢れている。
「おう。ここで負けちゃ伝説の金看板がかち割れらぁ！　連敗はしないぞ！」
レッドの血気盛んなさまに、エリカはニコリと微笑みながら
「なんと勇ましい事でしょう……。それでこそ貴方ですわ！」
彼に向き直って手を組んで感心している。なんとも可愛らしい姿と声にレッドは元気を貰う。
そして二人はジムにへと向かうのだった。

―ソウリュウジム―

いつも通り頂上まで上がるとシャガが待ちかまえていたとばかりに腕を組みながら迎える。

「……、よくまた参られた」

「俺たちはもうシズイさんを破りました。あとはシャガさん、貴方だけです」

レッドはシャガにバッジケースを見せつけながら言う。

「……、期間を鑑みればそんなものだろう。しかし、最後だからと気を緩めてはいかん！画竜点睛を欠かさぬよう奮闘して私を見事破ってみよ」

こうして最後のバッジを巡っての勝負が始まった。

シャガはフライゴンとクリムガンを、レッドはカメックスをエリカはナットレイを繰り出す。

「カメックス、フライゴンに冷凍ビーム」

カメックスは砲塔より水色の光線を発射する。

その氷山の如く冷たい光線はフライゴンに命中し、一撃で倒れる。

「クリムガン、カメックスにヘビにらみだ」

カメックスはクリムガンの鋭くも魔力がある眼光をまともに受け、麻痺する。

「ナットレイ、クリムガンに寄生木（やどりぎ）の種です！」

ナットレイは数個ほど種をクリムガンに投げつけ、やがて植えつかせる。

とまあこのような戦いを繰り広げ、互角の戦況のまま推移していく。

エリカのナットレイがよく持ちこたえたのも一つあるが、何よりシャガが奥の手を使ってこないのが大きい。

漸くクリムガンを下し、シャガのポケモンが残り三匹となると彼は途端に俯く。

因みにレッドエリカも残り三匹である。フィールドにはナットレイとフシギバナ、敵側にはチルタリスがいる。

真っ白い頭を地に向けている姿は中々に威厳がある。

「……、やるな。およそ二月、ただ遊んでいた訳ではないようだ」

そんな言葉にレッドはすぐさま

「当然ですよ！」

と強く返す。対してシャガは

「うむ。ここまでやれるのならば我が奥義。見せてやっても悔いは無し……」

「奥義？」

エリカは疑問を持った目線を向ける。

「気になるのであればこいつを倒すがよい！　行け、ボーマンダ！」

ボーマンダは勇みよく出て周囲を威嚇する。
特性なので、両方とも攻撃が一段階下がる。
「フシギバナ！　ボーマンダにどくどく！」
「愚かな……、ボーマンダ！　大文字だ」
ボーマンダが大文字の用意すると、エリカは自らの危険を察したのか
「戻りなさい、ナットレイ。おいでなさい！　ルンパッパ！」
とすぐさま交代をする。ルンパッパはまさに躍り出てきた。
ボーマンダの大文字はギリギリ外れ、フシギバナのどくどくが命中する。
「ふむ……。察しが良いな。チルタリス、コットンガード。ボーマンダ、奥義の準備だ、追い風をせい」
チルタリスは羽毛を凝結させて一気に防御力を高め、ボーマンダは翼を強くはためかせて味方の素早さを上げる。
「ルンパッパ！　雨乞いですわ」
ルンパッパはフィールドに雨を降らせる。
「こうなったらゴリ押ししかねえ……、フシギバナ、ボーマンダにヘドロ爆弾！」
フシギバナのヘドロ爆弾は運よく急所に当たり、半分ほど減少させる。
「ボーマンダ、フシギバナに流星群。チルタリス、同じくルンパッパに流星群だ」

どこからともなく、彼方より多数の岩石が降り注ぐ。
無論両匹共に洗礼を受けたが双方とも半分ほど減った程度で耐えきる。
「ルンパッパ！　今です、吹雪を！」
エリカは二匹が大技を出して疲れだした隙を狙って吹雪を喰らわす。
勿論、二匹にとっては一たまりもなかったのであっという間に一掃される。
さて、シャガは残り二匹と少し不利な状況に陥る。が、その表情に焦りは微塵も見当たらない。
「フフ……、思った通りだ。君たちならきっとここまで来ると思うたよ」
「それって……、まさか」
レッドはしっかりとした目線をシャガに送る。
「うむ。今ぞ見せて進ぜよう。行け、オノノクス！　サザンドラ！」
二匹は同時に出ると大きな咆哮を上げる。心なしか前よりも大きい。
「刮目してみよ……、これはアイリスにも見せたことのない、ドラゴン使いの最終奥義、双龍の契りだ！」
シャガの指示が下ると、二匹は更に大きな雄たけびを上げる。そして前と同じ波導を出すが、その後に結界のようなものが形成され、それと同時に二匹の背後に龍の紋様が浮かび上がる。

「双龍の契り……？」
　エリカはそう疑問を呈する。
「誓いは……、追い詰められたときには結束を更に固めて、契りにへと変貌する。後は見れば分かる」
　シャガはそれだけ言って黙る。
「ええい、よく分からんが、フシギバナ！　サザンドラにどくどくだ！」
「蹴散らしてくれる。サザンドラ、フシギバナに大文字だ」
　サザンドラは大文字をフシギバナに放つ。
　不一致だし、しかも雨天。レベル差も若干ながらもあるし一撃ではやられないだろう……しかしレッドの予測は無残にも崩れ去る。
　そう、フシギバナは一撃でやられてしまったのだ。そして死に際に放ったどくどくもサザンドラに届く大分前で消滅した。
「!?」
「良く知りもせずに闇夜に鉄砲とばかりに突っ込むとは……愚策なり。契りは誓いの効果の上に更なる能力上昇と一ターンのみだが守りの結界が出来、特防も二段階あがる」
　それを聞くとエリカは
「もしかしてアイリスさんが私たちに言っていた事……」

「全く、我が弟子ながら多弁なものよ……。だがおかげで」
シャガはうつむきながら言っていたが、そこまで言うと二人の方に向き直り
「手間が省けた。オノノクス！　逆鱗だ」
オノノクスはジュエルを飲み込んで凄まじい力で狂乱したかの如くルンパッパに突撃し、その猛威を奮う。ルンパッパは一たまりも無く倒れる。
「……、予想以上の強さですわね。おいでなさい！　ナットレイ」
「こうなったら相性で封じ込めるしかない……！　行け、ラプラス！　お前に全てを託す！」
レッドは最後の一匹に全てを委ねた。
「サザンドラ、ナットレイに大文字。オノノクス、続けろ」
オノノクスがサザンドラに先んじてナットレイに攻撃する。ナットレイは不一致技にも関わらず体力が減っていたこともあり一撃で倒れる。サザンドラは仕方ないとばかりにラプラスに大文字を喰らわすがラプラスは平然とした表情である。
「いいぞラプラス！　そのまま吹雪を喰らわせろ！」
ラプラスは吹雪を出すが、運悪くも外れてしまう。
「最後のポケモンですが……、これでもやられたら悔いはございません！　おいでなさい、ユキノオー！」

あられが降り始める。
そして、敵方の追い風がやみ、素早さの数値が元に戻る。
「フ……、例え追い風が止もうと敵方がこれならば恐れるに足らず。サザンドラ！　ユキノオーに大文字！　オノノクス続け……」
シャガがオノノクスを見ると、オノノクスはふらふらと千鳥足になっている。
どうやら逆鱗の代償である混乱が回ってきてしまったらしい。
「……、止むを得まい。続けろ」
シャガは指示を撤回せずに続けることを決めたようである。
そしてサザンドラが大文字を発射するが、ユキノオーは間一髪で避ける。
オノノクスは混乱の影響で自分で自分を殴ってしまう。痛そうだ。
「貴方！」
漸くめぐってきた天運にエリカは思わずレッドに呼びかける。
「ああ、ここを突かなきゃ勝機は無い！　ラプラス！」
「ユキノオー！」
「吹雪！」
二人はほぼ同時に吹雪を指示した。
ユキノオーの雪降らしによって必中となった吹雪から二匹の龍が逃れる術はなく、豪

雪は容赦なく二匹に襲い掛かる。

ましてや二匹同時、一致技である。二匹の巨体はあっという間に雪に埋まり……、その雪山から二匹は這い出る事はないだろうとレッドは思う。

「……、やりおうたな」

シャガが敗北を認めようとしたその時、雪山は音を立てて崩落する。

なんと、雪に埋まったと思われた二匹が出てきたのだ。

しかし、オノノクスが直立し、サザンドラが首をしっかりと上げた途端……、二匹は力尽きたのか音を立てて倒れる。

「……。やった」

レッドは目の前で起こった事に心の底から勝利を確信し、喜びが湧き上がる。

手は自然と拳を作ったが、情が高ぶり過ぎて震えてしまっている。

「やりましたわよ貴方！　勝った、勝ったんですよ私たち！」

エリカは舞い上がってしまっているのか、レッドに近づいて燥いでいるかのように勝利を報告する。

「……、見事。それ以外に私の言うべきことはないの。全く私も老いたか……、老体に鞭を打とうと若造に敗北を喫するとはな……」

シャガは倒れた二匹を見つめながらそう言う。その表情はどこか笑っている風にも

取れた。
　そして、シャガはポケモンを戻してやがて気を入れ直したかのように二人に近づいて正面を向ける。
「いやはや、後生畏るべしとはよく言ったもの……、夫婦の栄光に冠しこれを授ける」
　シャガはドラゴン使いの威厳をも感じる黒いバッジを二人に手渡す。
　そう、アイリスの言っていたレジェンドバッジである。
「有難うございます！」
　エリカは深々とお辞儀をする。何回、何十回も見てきたバッジを貰うときのお辞儀もこれが最後になるのかとレッドはしみじみと思う。
「そうか、もうこれで最後のバッジなんだ……」
「左様だな。どれ、私に今まで勝ち取ってきたバッジ、見せてみよ」
　二人はそれぞれ5地方のバッジケースを取り出す。するとシャガは
「それだと今のような場合に大変であろう。これを使うと良い」
　そう言ってシャガは広めの板一枚分くらいの広めなアタッシュケースを二人に手渡す。光沢のある銀色の模様の中心にはモンスターボールが描かれている。
「これは……」
「見ての通り、五地方全てのバッジを収容できるバッジケースだ。リーグ……というよ

りアデクという前チャンピオンが二人に渡すようにと退任前に置いて行ったのだ。わざわざ特注で作ったらしい。大事に使いなさい」

「へえ……、アデクさんがねえ……」

レッドはそう感想を漏らしながらニビジムのグレーバッジから丁寧にはめこんでいく。

色々な事を思い起こしつつ、埋めていきおよそ五分ほどで全てを埋めた。

どうでもいいが、エリカは最初にレインボーバッジをはめこんでいた。

レッドが改めて感慨深げに４０個のバッジを眺めていると

「それが、君たちが今までに築き上げた業績だ。ここまでの事を成し遂げたトレーナーは未だかつて一人もいない……。しかしこれに気を緩めることなくリーグに行き、君たちの実力が如何なるものかイッシュの天下に大きく誇示すると良い」

「はい！」

二人は元気よく、ほぼ同時に答える。

「うむ。良い返事だ。ところでレッドはチャンピオン戦の後、その……ぴーだぶりゅーてぃーなる所でゴールドという少年と戦うのだろう？」

シャガはカタカナ語に馴れていないのかたどたどしい口調である。

「はい、そうですけど……」

レッドはそう答える。
「アイリスと共に観戦させて貰うぞ。君の晴れ舞台だ。見に行かぬわけにはならないからな」
「ええ、是非とも来てくださいよ。ゴールドには俺絶対負けませんから！」
レッドは強い口調で言い切った。
「勇ましい事だ。では、その前のポケモンリーグ、気張っていきなさい。アイリスに負ければ私の立場が無いぞ。だから、へこたれるな」
その後も少し話をしてシャガと別れる。

―ジムの外―
「はぁ……、もうバッジ全部揃っちゃったのか……。なんだか旅ももうすぐ終わりだと思うと寂しいな」
レッドは切なげな表情で言う。
「あら、私はそんなこと御座いませんわ」
「どうして？」
「だって、その後は私と貴方の同棲が始まる訳ですよ！　心が躍りますわ！」
エリカは恍惚とした表情で言う。エリカと旅して何度思ったか知らないが、有頂天に

なっているエリカほど可愛いものは無いとレッドは思う。
「どうかな。またふらっとどこか行くかもよ？」
レッドはいたずら半分に言う。
「だったらまたこうしてお供させて頂きますわ～」
と言いながらエリカはレッドの腕に擦りつく。
「ハハハ、そうかそうか」
レッドはつくづく自分が幸せな立場にいる事を実感するのだ……。
こうして、二人はポケモンセンターに宿泊し、セイガイハシティに戻り、そこからリーグにへと向かう。
道中、アクロマと出会い、アクロママシーンなるものを貰いライブキャスターの番号を交換する。
そうこうしているうちに二人はポケモンリーグにたどりつく。
―7月8日　午後1時　ポケモンリーグ―
二人はリーグにたどり着くと、今までとは違う洞窟のような雰囲気の内装に驚く。建物が無い事が何よりの意外な事だった。
さて、兵士に励まされて先に進むと目の前には大きな像がある。
「自由に挑戦できるとは伺いましたが……、どういう風に行けば宜しいのでしょう」

「うーむ……、あれ、像の下になんかプレートがあるぞ」
二人はプレートを読む。
どうやら目の前にある四つの穴が四天王への入り口になっているようだ。
「どういう順番で参りますか？」
「うーん……、反時計まわりに行くか」
という訳で二人はまず一番右の入り口から入っていく事にした。
―レンブの部屋―
上がっていくと、そこにはリング風のフィールドがあった。
少し進んでいくと、なんと上から筋骨隆々の男が降ってくるように参上する。
「お前らが噂の夫婦か……。なるほど、全国を周ってきたとだけあって発している強さは尋常では無い！　挑戦者よ、私の名前はレンブ。わが師であるアデクの第一の高弟である」
自分で言うかとレッドは思ったが、敢えて突っ込まないことにした。
「格闘を極めるべく日々修練に励んでいる。そしてお前たちもトレーナーを極めんと日々歩んでいるもの……。全国の強者を倒してきたその実力、是非とも見せてもらいたい……！」
こうして四天王一人目の戦いが始まった。

レンブはナゲキとダゲキを、レッドはカメックス、エリカはルンパッパを繰り出す。
「カメックス、ナゲキにハイドロポンプ！」
「ルンパッパ、雨乞いで援護しなさい」
フィールドは雨模様になり、カメックスのハイドロポンプはナゲキに直撃する。
一致技と天候が災いして一撃で倒れる。
「お前たちの強さ！　伝わったぞ。だが、こっちも反撃だ！　ダゲキ、カメックスにインファイト」
カメックスはダゲキの突撃をまともにくらってボコボコにされかけたが、持ち前の防御で何とかこらえきる。
「行け、ルカリオ」
「ルンパッパ、ルカリオに寄生木の種です」
ルンパッパはルカリオに種を植え付ける。
「カメックス、ダゲキにカウンターだ！　倍返ししてやれ」
カメックスはダゲキにカウンターを見舞する。一撃では倒れなかったが相当のダメージを喰らわせることに成功した。
「ダゲキ、カメックスにかたき討ちだ！」
ダゲキは拳や足を駆使してカメックスに最大限のダメージを与える。

急所に当たった上に不一致とはいえ威力１４０は相当に堪えたようで、カメックスは倒れる。ダゲキは文字通り、かたき討ちに成功したので少しスッキリした表情だ。

……

こうして、エリカは1体、レッドは2体を失って勝利する。残ったポケモンの体力は黄色である。

「流石。噂に違わぬ強さだな。だが、まだまだ四天王は残っている。その者らとも一戦を交え、更なる高みを目指すと良い」

二人はレンブの元を去った。

次は右上の入り口に入る。

―カトレアの部屋―

階段が無いと思いきや、フッと出てきて、二人はそれに従って上がる。

上に着くと一輪の大きな花があり、やがて花開いて寝間着姿の女性が現れた。

「花開き、現れたのはあたくし……」

「あれ……、貴女もしかして……、カトレアさんですか?」

エリカはその女性を見てすぐさま反応を見せる。

「エリカ、知り合いか?」

「幼少の頃、両親の繋がりで晩餐会か何かでお会いした記憶が……」

エリカの反応を見てカトレアは
「そうね、２００１年４月２１日にエリカさんのお母様とあたくしのお父様が資金提供の名目で会合致した時に会った記憶がある」
「日付まで覚えてんのか……」
レッドはその記憶力に驚嘆する。
「カトレアさんは、ナツメさんほどの力はありませんが高い実力を持つ超能力者として名を連ねておりますわ。あまりにも強大な力過ぎてバトルを禁じられたとか……、しかし今こうして一人でおられるという事は……」
「漸く、自分自身で力を御せるようになったから……。四天王としてポケモンバトルに接する事が許されるようになったの」
カトレアは静かな口調で言う。エリカとは違うタイプの西洋型のお嬢様のようだ。
「それは中々手ごたえがありそうだ」
「さて、このカトレアが求めるのは極上の強さ……。相当に強いトレーナーだという事は聞いているから、あたくしの期待を裏切らないようせいぜい頑張る事ね……！」
カトレアはムシャーナとフーディンを、レッドはリザードン、エリカはナットレイを繰り出す。
「リザードン、ムシャーナに大文字」

「問題！　戦時の日本においてただ一つの政と」
とまで言ったところでムシャーナが
「大政翼賛会」
と答える。流石はエスパーポケモンである。
「何で知ってんだよおおおお!!」
リザードンは悔しさに塗れた大文字を放つ。
ムシャーナに直撃はしたが一撃では倒れなかった。
「ナットレイ、フーディンにパワーウィップです！」
フーディンは刃の如き蔓の直撃を受ける。
脆さが災いして一撃で倒れた。
……
こうしてレッドは一体、エリカは二体失って勝利する。残ったポケモンの体力は赤である。
「エレガントでファンタスティック……そしてエクセレントなポケモンとトレーナーね。貴方達。そんな輝ける人々と戦う事で、あたくし自身も研磨されてさらに強くなれる気がします。さあ、先に進みなさいな。あと二人……輝きをくすませずに行きなさい」

こうして、四天王の前半戦が終了し、二人は左上の入り口に入るのだった……。

―第六十一話　超越者　終―

第六十二話　東西相克す

―7月8日　午後3時　ポケモンリーグ　ギーマの部屋―

右上の入り口に入ると、赤い爪によって組まれた爪が開かれ、階段を上ると爪は閉じられる。刺されば間違いなく死ぬだろうなとレッドは思う。

さて、奥のソファにゆったりと腰掛けていた黒いスーツに奇妙な翼の如くはねた髪の男が格好をつけたように地を蹴って立ち、前に出る。

「ここで決めるのは、どちらが相手の栄光を奪い自らをより燦然と光り輝くか……。では誰がその判定を下すのか……それはこの四天王、ギーマだ。さあ、始めよう、勝った者には栄光と賛辞がとめどなく与えられ、敗けた者には何も残らない……、それこそが本当の勝負、生きていることを実感する勝負だ」

うわあなんだこいつとレッドは内心思ったが、口には出さない。

ギーマはドンカラスとヘルガー。レッドはラプラス、エリカはルンパッパを繰り出す。

「ルンパッパ、ドンカラスに寄生木の種です」

ルンパッパはドンカラスに種を植え付けた。

「ドンカラス。ルンパッパに燕返し！　ヘルガー、カメックスに雷のキバ」

ドンカラスはルンパッパを燕の如くに斬りつけて、元の位置に帰る。

致命傷を喰らったが、威力不足で倒れるには至らない。

ヘルガーは電気を湛えたキバをカメックスに噛みつけたが、それほどの威力にはならなかった。

「カメックス！　ヘルガーにハイドロポンプ！」

カメックスのロケット砲筒から噴射された水流は、ヘルガーに直撃する。

一撃で倒れる。

……

こうしてレッドは一体。エリカは二体失い、残ったポケモンの体力は緑という凡勝を収める。

「ベストを尽くそうと、それまでにどれほどの努力を尽くしていようと……、敗けは負け。それほどの差があってこそ、勝利と言う物は輝かしい価値を持つし、誰もが渇望する……。そう、今の君たち、凄く煌めいているよ。その輝きや力、どこまで通じるか試してみるといいよ」

気障な人物であるとレッドは思うのだった。

その後、最後の四天王に挑むため、左の入り口にへと向かう。

―シキミの部屋―

階段が無いので前に出てみると、一斉に燐火が現れ、階段が出る。

それに従って階段を上がり切ると、電灯がかたかたと動く。そして、散乱していた本が積み重ねられて道が空ける。

目の前にはどこかあどけなさが残る眼鏡をかけたショートヘアの女性が居た。

『夜着の襟の天鵞絨の際立って汚れているのに顔を押附けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂いを嗅いだ。性慾と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲った。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鵞絨の襟に顔を埋めて泣いた』

エリカは当初、突然話し出したのでレッドと同じく戸惑っていた。しかし、彼女がそこまで言うと、

”蒲団”ですわね！」

と元気よく答える。無論、レッドには何のことか皆目見当がつかない。

彼女はエリカの返答を聞くと感じ入ったような表情をしながら本を閉じる。

「流石ですね。これはあたしの書いている小説の参考にしようかと思っている本なんですけど……」

「小説をかいていらっしゃるのですか」

エリカは興味深げに尋ねている。

「はい。まだどうしようかは固まり切っては居ないんですけど……。って、私情を話してもしょうがないです！　さて、伝説のお二方。イッシュ四天王、ゴースト使いのシキミ。お相手いたします！」

シキミはデスカーンとゲンガーを繰り出す。レッドはリザードン、エリカはナットレイを出した。

「リザードン、ゲンガーにエアスラッシュ」

リザードンは空気の刃をゲンガーに当てるが、一撃では倒れない。

が、相当なダメージを喰らったようで体力は黄色である。

「ナットレイ、デスカーンにアイアンヘッドです」

ナットレイはデスカーンに自慢の鋼鉄頭を使った一撃を見舞う。

金棺の金属音があたりに響いたが、あまり効いていない。

「ゲンガー！　リザードンにシャドーボール！　デスカーン、ナットレイに鬼火！」

リザードンに一致技のシャドーボールは中々に効いた様子だが、三分の一程しかＨＰは減らない。デスカーンの放ったいくつもの浮遊せし火の玉はナットレイに悉く当たり、やけど状態になる。

「リザードン！　ゲンガーに盛大に止めを刺すんだ！　大文字！」

「問題！　内大臣の下、中納言の上の官職なーんだ？」

ゲンガーは少し考えたが
「中の上なんだから大納言に決まってんだろうが！」
と悪態をつきながら答える。
「ピンポンピンポーン！　大正解！　じゃあそんな君にはご褒美にこれをあげよう！」
といいながら、ゲンガーに大文字を喰らわすのだった。
レッドは最近これを心の中で『問大文字』と呼んでいる。
「うぅ……、ナットレイはどうやらあまり活躍できそうにありませんわ。戻りなさい、ナットレイ、おいでなさい！　ラフレシア！」
……
こうしてレッドは2匹、エリカも2匹失い、残ったポケモンのＨＰは黄色と辛勝を収める。
「言葉を失う……というのがありますが、本当に感動するとこうなってしまうんですね。貴方達、とってもグレートです！」
「いやー、それはどうも……」
レッドの鼻下長(びかちょう)ぶりは相変わらずである。
エリカはどうとも思ってなさげである。やはりヒオウギの約束を信じ続けているのだろうか。

「貴方達を題材にして小説を書いてみるのも面白いかもしれませんね……」

とシキミはふと呟く。

「私で良ければお手伝いいたしますよ?」

エリカは乗り気のようである。

「エリカさんのお力が頂ければ百人力ですね。もし機会があれば頑張って書いてみます!」

シキミは万年筆を握りしめている。大きく意気込んでいるようだ。

「フフ……。楽しみにしておりますわ」

「とと……。本題に戻さなきゃ。ポケモンリーグは四天王全員に勝てば、チャンピオンに挑む事が出来ます。貴方達は今その資格を得ました! 真ん中にある像に触れてみてくださいね」

「何が起こるのですか?」

エリカはシキミに尋ねる。

「それは触ってからのお楽しみです」

彼女は含み笑いをして答える。

二人は、四天王全てを撃破した為、広場に戻る。

中央の像に触れてみると、像は反応して、けたたましく荘重な音を立てながら二人を

地下へ誘うかのように引き込んでいく。
地下に着くと、前には階段がある。
その階段はとんでもない段数で、上っていくのに結構な労を要した。
登りきると、列柱廊が二人の目の前に迫る。
そしてそのギリシアの神殿を彷彿とさせる建物に入る。
―チャンピオンの間―
建物に入ると、石で作られた床の荘厳な雰囲気がする場が出迎える。
奥には宇宙を描いたスクリーンがある。
そして、床の真ん中にはヒウンの時ともソウリュウの時とも違う和服を洋風にアレンジしたかのような束帯を着たアイリスが居た。
「ようこそ！　挑戦者たち！」
そう言うと前に出てくる。
「ねね！　エリカおねーちゃん、あたしの和服どーかな？」
「織姫を思い出させますが……、当世にはあらざる御召し物ですこと……」
エリカは愛想笑いのような表情を浮かべながら答える。
レッドは少女性愛ではないので特に変な感情は持たない。
「褒められてるのかどうか分かんないけど……。まあいっか！　ここに来たという事は

シャガおじーちゃんを打ち破ったという事……。尚更あたしにとってはやり甲斐のある相手！　ちょっと不安だけど、精いっぱい頑張る！　じゃあ行くよ！　イッシュリーグチャンピオン　アイリス！　貴方達に勝ちます！」

こうして、本当に最後のチャンピオン戦が幕を開ける。

アイリスはサザンドラとボスゴドラを繰り出し、レッドはカメックス、エリカはユキノオーを出した。

ユキノオーの雪降らしであたりはあられ状態になる。

「サザンドラ！　ユキノオーに大文字！」

サザンドラの放った火の玉は見事、ユキノオーに命中する。

タイプが違うとはいえ、あのサザンドラでしかも4倍である。耐えきれるはずもなく火だるまになりながら倒れてしまう。

「流石はサザンドラ……。中々の名うてですわ。しかし、ユキノオーは十分に役目を果たしましたわ！　貴方」

エリカはレッドを横目にして合図を取る。

「分かってる。カメックス！　吹雪だ！　ユキノオーの仇を取れ！」

カメックスは砲塔から大量の雪を出す。

必中となった吹雪に二匹は逃れられる筈もなく、まともに喰らう。

持たせていた命の球の甲斐あってか、サザンドラは一撃で地に堕ちた。
ボスゴドラは平然としている。
「ボスゴドラ！　カメックスに諸刃の頭突き！」
ボスゴドラは猪突猛進といわんばかりにカメックスに突っ込む。
一致技の大技はカメックスに相当堪え、一気にカメックスは弾き飛ばされたが、何とか体力を三分の一残して耐えきる。
「少し参りましたが……このポケモンでこの窮地を潜り抜けてみせますわ！　おいでなさい、ナットレイ！」
エリカに続いてアイリスは
「こっちも負けてはいられない！　行って、アーケオス！」
アーケオスは雄たけびを上げながら華麗に一度宙返りして参上する。
「アーケオス！　ナットレイにアクロバット！」
アーケオスはジュエルを飲み込んだ後、ナットレイにアクロバティックな攻撃を決めようとする。
「させるか！　カメックス、波乗りだ！　一網打尽にしてやれ！」
カメックスは大きな波を作り出して、二匹に襲い掛かる。
ナットレイは、アクロバティックの餌食になるがなんとか耐えきった。

そして、カメックスの波乗りは激流の効果もあって絶大な威力を発揮し、二匹を一気に片づけた。

「ふむ……。相手が居なくなってしまいましたわ。ナットレイ、鉄壁です。守りを固めなさい」

ナットレイは自らの体内にある原子の結束を強め、硬度をさらに高める。

「マダよ！　マダマダ！　あたしのポケモンたちはもっと頑張れるし、戦えるもん！　行って、オノノクス！　ボーマンダ！」

……

こうしてエリカは全滅。レッドは一体を残し、残ったラプラスのＨＰは赤とチャンピオン戦に相応しい辛勝を収める。

「ふわぁあ……。こんなに一生懸命戦ったのに……。負けっちゃったんだあたし達……。やっぱりシャガおじーちゃんを……、ううん、全国を渡り歩いてきたトレーナって凄い！　勝てなくて悔しいけど、ここまで凄いトレーナーと戦って分かり合えたんだからすっごく嬉しいよ！」

アイリスはさっぱりとした表情でそう語る。

「お褒めに預かり光栄ですわ」

「いやー。ワタルさんと互角というのも頷けるわ……その実力は」

レッドは頷きながらアイリスの力を褒めている。
「うん！　じゃあ行きましょ！」
こうして二人はイッシュの殿堂入りの儀を終え、アイリスおよび四天王全員に祝福されてポケモンリーグのポケセンにへと戻る。
―午後9時　ポケモンリーグ　ポケモンセンター　１０７号室―
レッドとエリカは今日の疲れをいやす為ポケモンリーグに居る。
晩御飯を食べ、お互いに風呂も入って、二人は談笑していた。
「はーあ……」
レッドは深く溜息をつく。
エリカは心配そうな声で
「貴方、どうされたのですか？」
「いや。本当になんか全部終わっちまったんだな……って。だってバッジも全部手に入れて、リーグも制覇して……。よくよく考えたらすげえ事してるよな、俺たち」
「偉業を成し遂げたという一点においては首肯せざるを得ませんが……。しかし、まだ全てを終えてはおりませんよ？」
エリカがそういうと、見計らったかのようにレッドのライブキャスターが鳴り響く。
レッドはすぐさま出る。

「はい、もしもし」
「やーやーレッド君！　このたびは本当におめでとう！」
　この明るい声でレッドは相手がワタルだと分かった。
「ワタルさん……。そうです、俺たち本当に全国を制覇したんです！」
　レッドは嬉しそうに答える。
「うん。まさか本当にやってくれるとはね……。感嘆の限りだよ。で、確かそっちのリーダーのヤーコンさんから聞いていると思うんだけど……」
　レッドは特に思い当たらないので思わず聞き返す。
「え？」
「あれ、もしかして忘れちゃったかな？　ほら、ゴールド君がイッシュリーグ突破したらＰＷＴとかいう施設で戦うって」
　ワタルの説明で彼は漸く思いだして
「あーはいはい！　ポケモンマスターを決める戦いとかなんとかって奴ですね」
「そうだよ。大事なんだから忘れられちゃ困るなー」
　ワタルは呆れた様な声を出す。が、その雰囲気はどこか明るい。
「すみません」
「宜しい。で、そのゴールド君の状況なんだけど……」

「はいはい」
　レッドは慎重に耳を傾ける。
「今、イッシュのジム全部制覇して、チャンピオンロード抜けている最中らしいよ」
「は……早い」
「ねー。僕も驚いたよ。ああ、驚いたと言えばエリカさん自転車乗れるようになったんだって?」
「はい?　え、まあそうですけど、何で知ってるんですか?」
　レッドは思わず聞き返す。
「いやー。エリカ君がカントーに戻ってきてどうしたのかと思って、4月の定例会でエリカ君本人から聞いたんだけどね……。にしても乗る練習僕も手伝いたかったなー……」
　ワタルは終盤になると小さな声になっている。
「理事長が何言ってるんですか」
　レッドはすかさず突っ込む。
「うわっ!　聞こえてた?」
　ワタルは狼狽している様子である。
「ええ、ばっちりと。あのもしかしてワタルさん、エリカの事……」

「！　そ、そんな訳ないだろ。つき合ってる人にそんな感情抱くわけ」
　ワタルの口調はまるで大根役者の如く棒読みである。
「恋愛に、状況なんか関係ないですよ」
　レッドは達観して、知ったふうな事を言う。
「……。レッド君もしかして旅して少し達者になったかい？」
「はは、そうですかねぇ？」
　レッドは照れ笑いしながら言う。
「ハァ……。まーそれはともかく、頑張りなよ！　僕的には同じ地方のレッド君の方を応援しているんだから！」
「そいつはどうも。そういえばワタルさんはＰＷＴに来られるんですか？」
　レッドが尋ねると彼はすぐさま
「僕は無理だよ」
「ええっ!?　マスター決める戦いにリーグのトップが出席しないって……」
「行きたいのは山々なんだけどね……。シロナ君の報告とかもあってロケット団がどうも怪しくてさ。それどころじゃないんだ」
　ワタルは真剣な声で言っている。
「プラズマ団とロケット団が結びついているのは知ってますけど……。それ以上の情報

があったんですか？」
「……、混乱を招くから誰にも……まあエリカ君ぐらいならいいけど、言わないでよ。近々、本格的に動き出す可能性がある」
「ええ!?」
「あくまで可能性の話だよ！　シロナ君がソウリュウシティの上空で妙な帆船を見て……、それでそこのジムリーダーのシャガって人の話を聞いた上での話。だから、もしもの事を考えていつでも号令できるように僕とシロナ君は内国に留まるのさ」
「なるほど……」
「まあ、君たちはそういう事はあまり考えずに……。精いっぱい夫婦生活を満喫して、ゴールド君に勝てるよう精進に勤しむことだね」
その後も少し話をしてワタルとの通信を切る。
エリカにも話をして、その日は寝るのだった。

―7月17日　午後3時　ホドモエシティ　PWT　受付前―
その後、ワタルの予測が当たったのか否か、一週間後にゴールドがイッシュリーグを制覇し、ワタルの指示を受けて二人はPWTに向かう。
PWT内部は世紀の一戦を一目見んと何千人もの人でごった返し、会場では埋まり切

らず、外のモニターまでも見れるかどうか危ういぐらいの人だかりができる。
黒山の人だかりとはこの事である。
さて、そんな状況なので受付前から普通の観客が入る事は出来ない。外の入り口から観客席に入るという寸法となっている。
レッドとエリカは同時に戦わず、エリカはジムリーダーの立場を守りたいという理由で権利を放棄した。その為、レッドのみが戦う事になる。
「いよいよか……」
レッドは受付ゲートを目の前にして固唾を飲みこむ。
「左様ですわね。皇国の興廃この一戦にアリ……ではないですが、貴方の突破すべき最後の関門。私は観客席から精いっぱい応援するぐらいしか出来ませんが……。ご武運をお祈りいたしますわ！」
エリカは輝かしい笑顔をレッドに向ける。
「エリカ……」
あまりに愛おしいので、レッドは抱きしめようと手を伸ばすが……
「レッドさあああん！」
ゴールドが後ろから駆け寄ってきた。レッドはデジャヴに襲われたが気のせいだろうと思う事にする。

「……。よう、ゴールド」
「へへ……。セキエイリーグ以来ですね！　お久しぶりですレッドさん！　エリカさん！」
　ゴールドは礼儀正しく二人に最敬礼する。
　エリカが軽く会釈し返すと、ゴールドは頭を上げて
「僕も自分で言うのもアレですけど……。強くなったんです！　絶対にレッドさんに引けは取りませんから！」
　早速宣戦布告である。
「そうか。だからといって俺も負けるわけにはいかねえ。お前よりも三年長くトレーナーやってんだ。お前如きに引けは取らねえよ」
　とレッドは軽くゴールドをたしなめる。
「フフ……、そう言っていられるのも今のうちですよ！　僕は秘策を」
　ゴールドがレッドに挑発をしかけようとしていると後ろからハリセンが飛んできた。
　ハリセンは見事、ゴールドの頭に直撃する。
「痛っ！　もう、いいところなのに……」
　ゴールドが後ろを振り向くとそこには……
「何回も呼んでるのに答えへんアンタが悪いんやっての！」

レッドの耳には流暢なコガネ弁が耳に入る。
「アカネさん!?」
ゴールドとエリカはほぼ同時に発声した。
レッドもそれに少し遅れて続く。レッドもエリカもゴールドの話に集中していたのだ。
「まーまー、アカネさ……」
「ツクシもいい加減その他人行儀な呼び方やめんかい！」
アカネは夫であるはずのツクシにもハリセンを叩きこむ。
が、その力はどこかゴールドよりは弱かった。バチンではなくパチンという程度だ。
「痛い……」
ツクシが頭を撫でていると、アカネはハリセンを下に向ける。
「ふう……。という訳で久しぶりやなー。皆！」
「お二人はどうしてここまで……」
エリカが尋ねると、後ろから更に
「おいおい、僕を忘れては困るなあ」
と、年齢の割に毛の量がアレな白衣の男がやってくる。
「ウツギ博士……！」

ゴールドは驚きを隠せない様子だ。
ウツギは三人の目の前で止まる。
「僕たちは、ゴールド君を応援しにイッシュの調査がてら研究所皆で応援しに来たんだ！　ツクシ君は研究員だし、アカネさんはその妻だって事で」
「なるほど……」
レッドとエリカは深く納得している。他の研究員等はどうやら一般観客の扱いのようである。
「は……博士。そんな悪いですよ、僕なんかの為に仕事を止めるなんて」
ゴールドは少し声調を下げて言う。
「何言ってるんだ！　ゴールド君にポケモンをあげたのは他ならない僕だ。そのポケモンとトレーナーが成長を積み重ねて、その成果が発揮される場所を見たがるなんて、研究者として当然の欲求じゃないか！　ねえ、ツクシ君？」
「え？　あ、そうですね。でも博士、出るときに柏木先輩に仕事全部押しつ」
「しーっ！」
ウツギは半ば必死にツクシに口止めを要求した。
「……、ところでアカネさんお子さんはどちらに？」
エリカはアカネに興味深げに尋ねる。

「トラコに見せたいのも山々なんやけどなー。ちとこういう戦いとか見させて泣き叫んだりして周りの客に迷惑かけたらたまらんわ。やから、ＰＷＴ内部の託児所に預けとるんや」

「ＰＷＴにそんな場所があるんですか……。意外ですわ」

エリカがそんな事を言っていると、後ろから

「ポケモンバトルは主婦だろうとサラリーマンだろうと誰でも見るからな！　こういう場所も作らないといかんのだ」

「あ、ヤーコンさん！」

レッドがヤーコンに気付く。

「ヤーコン？　このオッサンの事？」

「アカネさん。失礼ですわよ」

「……。見慣れない連中が居ると思ったら、ゴールド繋がりの連中か？」

ヤーコンはゴールドに目線を向ける。

「はい！　みんな、ジョウトの人たちです」

ゴールドは元気よく答える。

「そうか。ワシの名前はヤーコン！　この街のジムリーダーでこの大会の主催者だ。お前らは？」

「ワカバタウンのウツギです。ポケモン博士を職業としております」
　ウツギは恭しく言う。
「同じく、博士の研究所の助手であるツクシです。元ジムリーダーでアカネの妻です」
　アカネは初めて呼び捨てで呼んで貰えたのか少し嬉しそうになりながら
「コガネシティのアカネというもんです！　ジムリーダーをやっとりますー」
　と、言いなれたかのような敬語を話す。意外にも人生経験を積んでいるのかもしれないとレッドはふと思った。
「そうか。ジョウトの連中とはあまり縁が無いが……。ま、販路拡大にはいいかもしれんな。特にコガネという街は商業繁華の街と聞くが」
　ヤーコンはアカネに視線を向ける。
「さいです！　コガネという街はそれこそ15世紀後半の頃より、その原型の堺いう街が栄えとりましてな！　それはそれは要塞かー思うほどにあきんど達が堀をつくうたりして都市を形成しとりましたわ。信長さんが堺を埋め立てるまではまるで一つの都市国家みたいにやっとりましたんで……」
　その後、アカネは自らの知識を活かして10分ほどコガネの成り立ちを説明していた。講談風の口調でヤーコンは興味深く聞いていた。
「ほう！　コガネという街は中々に商売のし甲斐がありそうだな。今度機会があれば取

引させてもらおうじゃないか」
「ほんまですか！　ほならまずコガネ百貨店いう所を当たうてみて下さい。ごっつええものが手に入るで！」
「そうかそうか……。アカネといったか。中々に面白そうだ、気に入ったぞ。コガネに行った際は是非とも仲介役に頼んだ」
　ヤーコンは笑いながら言う。
「おおきに！　そちらさんからもよい手土産、期待してまんねんよ！」
「ハハハ、分かった分かった。じゃあなお前ら！　ワシは一足早く会場に行ってくる！」
　二人とも気張れよ！」
　ヤーコンは上機嫌に立ち去って行った。
　ほかに居た人は、アカネの饒舌ぶりに呆気にとられていた。
「ふう！　これでコガネもまた繁盛するでー！　嬉しいこっちゃ！」
　アカネもまた上機嫌な様子である。大きな取引が成立したかのように気持ち良さげに背伸びをしている。
「あの、アカネさん？」
　エリカが尋ねる。
「何や？」

「もしかして商家に勤めた経験でもおありですか？」
「まー、まだ小っちゃいころにな。ちと奉公してただけや！」
ちょっと奉公しただけでここまでの商談が出来るのか……コガネ人畏るべしとレッドはアカネを見直すのであった。
その後、レッドはジョウト勢とエリカと別れ、ゴールドと共に受付に入る。
―ＰＷＴ　受付前―
ツクシとアカネ、ウツギが観客席（挑戦者・リーグ関係者専用席）に入った後、受付前には新たなる客人が来ていた。
エリカは観客席に入る前にトイレをすましていた。
トイレの後、観客席に向かおうと受付を横切ろうとすると、エリカはナツメに出くわす。
「あらエリカ。久しぶりね」
「ナツメさん!?　どうしてここに？」
エリカは驚きながらナツメを見る。
「い、いや、ポケウッドで映画を見た後なんだか面白そうなのやるとか言ってたから、ちょっと見に行こうかしらって思ってね」
ナツメは少し焦り気味の様子である。

「どうして焦っていらっしゃるのか分かりませんが……。奇遇ですわね！　一緒に観戦しましょう！　夫の雄姿を共に見届けましょう！」

エリカは本当にうれしそうな様子だ。

「レッドね……。そうね、じゃ、行きましょうか」

ナツメは意味深長そうにレッドの名を呟くとエリカの先導を切って行くのだった……。

―午後4時　ＰＷＴ　バトルフィールド―

挑戦者の紹介、進行が終わり、ゴールドとレッドは相対する。

熱狂的な雰囲気の中、ゴールドが言い始める。

「凄い歓声ですね……。これだけ多くの人に見られているなか、戦うのは少し緊張するけど、レッドさん！　貴方に僕の本気、受けてもらって……世界最強の称号、貰い受けます……！」

その後、少し間を置いて、レッドは帽子を目深に被りながら言う。

「望むところだ……。かかってこいゴールド！　お前の本気を俺にぶつけるなら……、その気を何倍にも返して圧勝してやるよ！　いざ！」

「尋常に！」

「勝負!!」

二人の声は観衆の声に負けることなく、大きく、そして強く、ＰＷＴの会場に響き渡るのだった……。

こうして、レッド、ゴールド、互いの名誉を沽券をかけた大勝負が始まる。

―第六十二話　東西相克す　終―

結末編（２０１４．７―２０２５．６）

第六十三話　頂きの行方

―７月１７日　午後４時　ホドモエシティ　ＰＷＴ　観客席―

周囲が熱気に包まれている中、ツクシやアカネ等のジョウト勢とは少し離れた席でナツメとエリカは互いに隣に座って観戦している。

この時点ではまだフィールドに二人が立っているだけである。

「いよいよですわね……。ナツメさんはどちらを応援されているのですか？」

エリカは純粋な疑問の体で尋ねる。

「私は単にじかで見に行きたいと思ったから来ただけよ」

「……、というかナツメさん。貴女結末分かっているのでは？」

「大丈夫。超能力は使っていると体力消耗するから使うとき以外はなるべく差し控えてるのよ」

「なるほど……。ナツメさんはあくまで中立……と」

エリカは納得した表情になる。

『いざ、尋常に勝負！』という声がＰＷＴの会場に響き渡ると互いにポケモンを出して

勝負を開始した。
「始まったわね」
「……、貴方、どうかその天稟（てんりん）の才をこの場にて存分に示して下さい……！」
祈るような目でレッドの健闘を願うエリカを、ナツメはどこか遠い目で見ているのであった。
―フィールド―
レッドはカメックス、ゴールドはバクフーンを繰り出す。
「初手からバカな真似しやがって……。カメックス！　ハイドロポンプだ！　すぐに楽にしてやれ！」
レッドがそう言うと、ゴールドはフッと笑い
「バカな真似……ですか。相性だけじゃ勝負のすべては決しませんよ！　バクフーン！　雷パンチ！」
バクフーンの方が先制し、電気を湛えた拳をカメックスに容赦なく叩き込む。
カメックスは吹っ飛ばされたが、やはり甲羅の防御力は強くなんとか耐える。
体力は半分ほど減り、その上運悪く麻痺してしまい、ハイドロポンプを出し損ねる。
「！　どうしてこんなに減るんだ……？　不一致の上に防御も高いというのに」
レッドは大いに戸惑っている様子で、ゴールドを見る。

「フフ……、こだわりハチマキ。やはり強いですね。バクフーンにはうってつけですよ！　バクフーン！　もう一回！」

レッドはその発言で納得する、よくバクフーンの頭を見てみると確かにハチマキが巻かれている。一本取られたとでも言いたげな表情をしつつ

「ちょっとは頭が回るようになったようだな！　カメックス！　へこたれるな！　ハイドロポンプで逆転しろっ！」

レッドの指示にカメックスは従い、カメックスはもう一度砲塔に水を装填する。

「バクフーン！　止めをさすんだ！」

バクフーンの雷パンチはやはりカメックスの腹に直撃する。

あろうことか、カメックスが空に舞ってしまうぐらい猛烈な力を出したそうだ。

レッドは呆然としたが、カメックスはそうではなかった。

「隙あり」

カメックスがそう言った頃には、もうバクフーンのすぐ後ろをとっていた。

そう、ただ為されるがままに舞っていた訳では無く、背後を取ろうとカメックスは計算していたのだ。

バクフーンが気付いたころには時すでに遅し、カメックスはバクフーンの背後の炎に照準を当てたが如くに、猛烈な水流を放つ。

バクフーンは大きく押し出される。背後と言う虚を突いた攻撃。その上、至近距離という状況、激流と一致技による威力の増加。一撃でやられたのは無理も無かった。

そして、カメックスも逆さまになりながら技を放つという無茶をしたのが祟ったのか、バクフーンに致命傷を与えた後、仕事は果たしたとばかりに倒れる。

そう、初戦は相打ちと言う結果に終わったのだ。

観客は、この両者一歩も譲らない戦況に大いに湧きたつ。

―観客席―

「どっちも倒れるとはね……思った通り、面白そうじゃないの」

ナツメはくすりと微笑んでいる。

「ゴールドさんも苦手タイプ相手にここまで善戦するとは……中々に成長されましたわね。しかしやはり相性という壁はそうそうには崩れないものです……」

「草使いのアンタが言うと説得力が増すわね……」

「いえいえ、だからその壁を如何にして越えていくか考えるのも楽しいものですわ」

エリカは思案深げな笑いをする。

二人がそんな会話をしているうちに互いは二匹目のポケモンを出そうとモンスターボールを構える。

「次が始まりそうね」

「まだまだ戦いは始まったばかりです。貴方、どうか気を落とさないように……」
レッドがどこか落ち込んでいる表情をしているのをモニタで見たエリカはそういって聞こえる事のない励ましをする。
―フィールド―
「やるじゃないかゴールド。苦手タイプにもしっかり抵抗するとは……」
レッドはゴールドを上から目線で褒める。
そんなレッドの言葉にゴールドは表情を歪ませることなく
「やるじゃないか……余裕がありますね。その余裕、1時間もしたら焦りに変えて見せますよ！　行けっ、ポリゴン2！」
ポリゴン2は、出てくると浮かびながら平然とした表情でか細く鳴く。
「お前……、俺にならって同じ世代でまとめるなって」
「レッドさん！　セキエイでも言った通り、僕は自分の流儀で戦わないと気が済まないんです。自分と同じ地方のポケモンか。そこからの進化したポケモンじゃないと気が済まない性質ですから……。僕は僕の流儀で貴方を下してみせます！　だからどうか、僕のわがまま、お許しください」
ゴールドが強く言うと、レッドは眉をひそめながら
「花を持たせて勝たせたぐらいでナマ言いやがって……！　お前がそうくるなら、俺も

俺の流儀でお前を倒し、ポケモンマスターの称号を獲得する！　行け、リザードン！」
リザードンは、その巨体を誇示せんとばかりに雄たけびをあげる。
観客はその猛々しき威容に歓声をあげる。
「リザードン！　大文字だっ！」
「問題っ！　来日していたロシアのニコライ皇太子を巡査である津田三蔵が斬りつけた事件を……」
リザードンがそこまで言うと、ポリゴン2は反応して
「ポリーポリっ！（大津事件）」
と嬉しそうに答える。
「正解！　ご褒美に大文字をあげようっ！」
リザードンはポリゴン2に大文字を喰らわせる。
一致炎の大技だ、ポリゴン2は文字通り大やけどをくらったろうとレッドは思ったが、体力は四分の一程しか減ってない。
「……！　嘘だろ!?　それ程効いてないだと?」
レッドは信じられないとでも言いたげな表情をする。
「嘘じゃないですよ。この通り、ちゃんと耐えているじゃないですか」
「……、お前まさか何か細工をしたとか……」

「細工とは人聞きの悪い……敢えていうなら進化のきせきという道具を持たせたぐらいでしょうか」
「……、何だそれは」
聞いたこともない道具の名前だったのですぐにレッドは聞き返す。
「知らないんですか？　進化前のポケモンの防御・特防を1．5倍上昇させてくれる道具……。まあ、最終進化ばかりに拘るレッドさんには分からないでしょうけどね」
ゴールドはここでレッドを明確に貶し始める。
「……、ポリゴンZじゃない理由はそれか」
「そうです。今のポリゴン2の特防は、例え貴方のリザードンが大文字を出そうと4発は耐えられる。まあもっとも晴れではない今の状況でPPが切れるかこいつが倒れるのがどっちが先かは目に見えてますがね！　ポリゴン2！　リザードンに10万ボルト！」
ポリゴン2はダウンロードで一段階上昇した特攻で、10万ボルトを喰らわせる。
体力はおよそ8割ほど削れる。
「進化のきせきがなんだ！　俺はそれ以上の威力で潰してやるよ！　リザードン！　ブラストバーンだっ！」
リザードンは口を精いっぱいに開いて、爆炎をポリゴン2に衝突させる。

爆炎の光は瞬く間に会場を埋め尽くし、閃光となって人目に突き刺さる。
そして、爆炎は止み、光がおさまったフィールドをレッドは見る。
ポリゴン2はかなりのダメージを喰らったものの、倒れてはいない。間一髪で耐えきったようである。
「……。固すぎだろ……。でもこれなら」
リザードンが倒れた後すぐに挽回できる。とレッドは確信する。
「ポリゴン2、自己再生」
ポリゴン2は目を光らせて自らを修復させる。
レッドは目の前で計算が大いに狂う様を見て愕然とする。
リザードンはもちろん、反動で動けない。
「よし……これならいけるっ！　ポリゴン2！　とどめだ、もう一回10万ボルト！」
ポリゴン2は電気を作り出して、見事リザードンに命中させる。
リザードンは倒れた。
会場は一進一退の状況を固唾を飲んで見守っている。
―観客席―
「貴方……」
劣勢となった夫を見て、エリカは心配になりだしている様子である。

「見事ね。きちんと色々な場合を想定して着実に勝ちに進めているわ」
　ナツメは冷静な分析でゴールドの戦いを評す。
「確かにゴールドさんはセキエイでお手合わせした時と比べましても大いに成長しておりますが……。だからといってレッドさんに勝てるとは」
「エリカ。あんたらしくないわね、根拠もなく信じ続けるなんて……」
「……」
　エリカはナツメの言葉に何も言い返せる気が起きなかった。
「エリカは、レッドの事を強く、たくましい人間であると思ってレッドと交際を始め、ここまで旅を続けている……ヤマブキに来たときに超能力で見た限りでも、戦争のあとエンジュで話した時もそういう事だと私は思っていたけれど……」
「そ……、それがどうしたというのです?」
「……、あんたの言うレッドのイメージ。今でも守り続けているのかしらね、あの男は」
　ナツメは凍てつくような目線をフィールドに向ける。
「守り続けてますわ！　そうでなければシャガさんやアイリスさん等と言う強敵に勝てるはず……」
「確かにそうでなければレッドはあそこのフィールドで戦えないわね。でもそれって」
「それって……?」

エリカはナツメに視線を向ける。
「もしかして、レッドの力よりも。あんたの力の方が大きいんじゃないかなー……なんてふと思ったのよ」
「え？」
エリカが聞き返すと、レッドは最後のポケモンを出すためにボールを構える。
「始まりそうね」
「……。貴方……」
エリカのフィールドを見つめるその眼差し。そこには段々と期待と愛情以外の物が溢れだし始めていた。
―フィールド―
「リザードンまで倒すとは……、お前、本当に頑張って来たんだな」
レッドはこの戦いで使える最後のモンスターボールを手に持ちながらゴールドに言う。
「褒めて頂いて恐縮ですけど……、もうそんな言葉を吐かせなくしてみせますよ」
「フ……、ちょっと花を持たせすぎたか……、ここから一気に挽回してみせる！　行け、カビゴン！」
カビゴンは出るや否や寝そべる。元々寝そべっているというのは禁句だ。

「カビゴンですか……。ポリゴン2、気合玉だっ！」
ポリゴンは気合玉を放出するが、運悪く外れてしまう。
「よし……！　カビゴン！　腹太鼓！」
カビゴンはむくりと起き上がると、途端にポンポコポンポコ自らの腹を叩き始める。
「……！　早く仕留めないと、ポリゴン2！　もう一回気合玉！」
ポリゴン2の気合玉は、見事カビゴンに命中。しかし、カビゴンの脂肪のせいか否か、体力をわずかに残して耐えきる。
「今だっ！　カビゴン！　ばかぢからだ！」
カビゴンは覚醒したとでも錯覚してしまうぐらいに猛烈な勢いでポリゴン2に襲いかかる。そして、ポリゴン2はコテンパンにされてボロボロになり、倒れる。
まさに起死回生でポリゴン2を下したレッドとカビゴンに大きな歓声があがる。
―観客席―
「ほら！　勝ちましたよナツメさん！」
エリカは夫の勝利に大いに喜び、はしゃいでいる様子だ。
そんな可愛げのある様子にナツメは時めいたかのような反応をみせるがすぐに
「た……確かに勝ったけれど……綱渡りもいいところね。下手をすればあの気合玉で倒れていてもおかしくないというのに」

「それでも勝利は勝利ですわ！　はぁ……流石貴方です！　ここまでハラハラさせる戦いが出来るのは貴方以外に誰が居ましょう……」
エリカは恍惚とした表情でモニタに映るレッドを見る。
「最早、聞く耳持たないわね……ま、こういうエリカが一番可愛いのだけれど……」
ナツメはそう言うと腕を組みながら色々な感情の籠った溜息をつくのだった。

―フィールド―
「これで互角だな」
レッドはゴールドに安心した視線を投げかけながら言う。
「……。はい、そうですね」
そう返したゴールドの表情にはまだ余裕のある様子も見受けられる。
「来いよ。お前の最後のあがき、全力で受け止めてやる」
「泣いても笑ってもこれが最後……！　行け、ムウマージ！」
レッドはムウマージの登場にうっかり頬を緩ませそうになる。
「最後がそれか。まあいい、カビゴン！　眠るだ！」
「眠れるかどうかはこれ次第！　ムウマージ！　カビゴンに怪しい光！」
怪しい光はカビゴンに当たったが、カビゴンは元々眠かったのかどうかは定かではな

いがすぐに寝てしまう。
「よし！　カビゴン！　実を食べ……」
それを指示しようとした瞬間、レッドは重大な事を思い出す。
この時のカビゴンの技構成は、ばかぢから、はらだいこ、ねむる、のしかかり。
そう、ゴーストに対抗できる技が無いのだ。
レッドは頭を抱えざるを得なかった。因みにカビゴンはとっととラムのみを食べて目を覚ましている。
その様子を見たゴールドは
「？　レッドさん？　どうしました？」
「……。情けないけど、これしかない……、カビゴン！　わるあがきだ……！」
レッドは羞恥にかられながら悪あがきを指示した。
その瞬間、会場全体が凍りつく。
……
その後、カビゴンは、ムウマージからのサイコキネシス2回、悪あがき2回分の反動を喰らって気息奄々となっている。上昇効果で削れると思いきや、ムウマージはオボンのみでしぶとく生き残る。
そしてサイコキネシスをもう一度喰らって、カビゴンはもう一度悪あがきをしようも

のなら確実に瀕死に至る状況に陥ってしまう。
「レッドさん！　貴方の最後のあがき。見せてください」
ゴールドは他意なく、純粋な様子で言っている。
「……ああ！　見せてやるよ。カビゴン、悪あがき……！」
カビゴンは息も絶え絶えの様子でのそりのそりとムウマージに向かう。
レッドはその様を見て、あまりに自らが惨めにもなり、逃避をはじめ
「……やめろ。やめろぉぉ！」
と叫ぶ。あれほど盛り上がっていた会場は最早冷め切ってしまっている。

―観客席―

レッドがカビゴンで勝ち上がった時はあれほどはしゃいでいたエリカも、今やうつむいてしまっている。
「……、ねえ、エリカ」
ナツメはエリカに訊く。
「……」
「こんな無様な姿をさらしているレッドが……、あんたの望んでいるレッドなの……？」
「……」

エリカは手を握り締めたまま沈黙を守っている。色々な思いが交錯していることが見て取れる。

「後輩相手に、こんな惨めな姿を晒し……やめろなどと覚悟が決めきれないような発言を平気でする……。それでもエリカはレッドを信じ続けるの……？」

ナツメは真剣な声でエリカに尋ね続ける。

「……私は……」

エリカが口を開いた刹那。突如観客席に声が響く。

「こちら、ポケモンリーグの者です!!　一大事が起こりました！　ソウリュウシティにプラズマ団と名乗る組織が出現し、氷漬けにしたとのこと！　それと同時にイッシュ地方並びに内国のポケモンリーグに対し宣戦布告を致しました！　ジムリーダーは各々の……」

リーグ委員と思しき男は声を荒げながら言った。

シャガはアイリスを連れてその後すぐに出ていく。

それから少し遅れてアナウンスが入って、観客は突如パニックに陥る。

「……、私、行きます！」

「エリカ！」

「私はレッドさんの……妻ですから！」

そう言ってエリカは出口に脇目も振らずに向かい、出て行った。
「……、バカ」
ナツメはエリカが消えた出口に向かって、喧騒の中小さく呟く。

―フィールド―
「……、休戦だな」
レッドは騒然となっている観客席を見ながらそう言った。
「納得いきませんけど……、それどころじゃないですもんね」
ゴールドは苦虫をつぶしたような表情をしながら言う。
「……、ケリは必ずつけるさ」
そう言ってレッドは挑戦者用の出口に向かった。
「きっとですよ」
ゴールドも、反対側の出口から出ていくのだった……。
―第六十三話　頂きの行方　終―

第六十四話　虎鳥の咆哮

―7月17日　午後5時頃　プラズマフリゲード　船首―

プラズマ団はシャガがソウリュウシティを留守にしている時を見計らったかのように襲撃し、首尾よく遺伝子の鎖を奪う。

そして、今現在、ジャイアントホールに向かって船を進めていた。

ゲーチスは船の先端で北東の山地を見下ろす。その後ろには幹部数名と50人程の下っ端が控えていた。

「ククク……これでワタクシの計画は成就する！　邪魔な連中もロケット団の力を借りれば一瞬にして雑兵と化し、離散していくだろう。アポロよ！　ソウリュウでの指揮、見事でした、成功の暁には……」

しかし、アポロは一言も答えない。

怪訝に思ったのか、ゲーチスは目線を大地からアポロの方に移す。

「どうした？　喜ばないのですか？」

ゲーチスの問いかけに跪いていたアポロは黙って立ち上がる。

そして、アポロが黙って右手を上げると、控えていた下っ端が一斉にプラズマ団の制

服を脱ぐ。そして脱いで現れたのは大きなRの赤マーク。
「!?　……、如何なること」
ゲーチスが当惑していると、すかさずロケット団ボスのサカキが現れた。
「ご苦労だったな、ゲーチス殿。用は済んだ」
「……?　用ですと?」
ゲーチスが焦りを見せ始めていると、アポロが言う。
「まだ分からないのですか。貴方は踊らされていたんですよ」
「ワタクシが……?　そんなバカな事有り得るはずが」
ゲーチスが反発すると、サカキが
「有り得たんだよ。この状況を見てみろ」
そういうとゲーチスは漸く状況を理解したようで、冷や汗が見え始める。
「っ……!　この船内にはこれ以外にも数百人の団員が居ますぞ。本拠のヒウンでもないところでこんな事を起こせばあなた方など一たまりも……」
「残念だが、この船も、あんたの腹心のアクロマも我々の手の内だ」
サカキは冷徹な声で言う。
「……!　バカな……」
ゲーチスは信じられないとでも言いたげな目を船床に向ける。

「全くいい火付け役でしたよ、我々が動くよりもあなた方が動いて、そしてこのように行動を起こしてくれた……。貴方のおかげで我々は非常に動きやすかったですよ」

アポロは皮肉交じりにゲーチスに話す。

「そんな……どうしてワタクシの僕がワタクシの世界を征服をするという崇高な理想に共鳴するのではなく、貴方がたのようなポケモンを利益の道具にするという邪で野蛮な連中につき従うのです！」

ゲーチスの本音が出てくる。

サカキはそれに対し

「野蛮で邪……。ゲーチス殿のポケモンを解放するなどという気宇壮大で滅茶苦茶な計画よりも、人というのは『利』を取るものだ。我々ロケット団は世界を伝説のポケモンではなく、強大化させたポケモンを用いて世界中の人間を力で以て支配する。〝センセイ〟が手下にその強大化させたポケモンを使わせているからな。現実味を持たせて私の方になびくのは時間の問題だったわけだ」

「違う！　下っ端どもはそんなまやかしなぞ通用……」

ゲーチスが言い終わる前に、サカキは言う。

「言っただろう？　私はいつでも一本気だと。誰かを利用する事はあれど靡く事はないのだ。ゲーチス殿。あんたは私の掌の上でワンワン吠える走狗（そうく）に過ぎなかったって事

だ。用が済んだらもう餌をやる義理はねえ。餌が恋しいんならこちらについて下っ端からやっていく。そうでないならここから飛び降りて肉塊にでもなると良い」

そこまで言い終わると、ゲーチスは笑い始めて

「ククク……。笑止！　このワタクシが裏切り者に与するものか！　ワタクシに盾をつくのであれば、力で捻じ伏せるのみ!!　行きなさい！　サザンドラ！」

「……、痴れ者め。アポロ、やれ」

サカキはそう指示すると、ゲーチスに背を向け船内にへと戻る。

「ハッ！　行け、ヘルガー！」

……

「そんな……。またしてもワタクシの目論見が崩れる……!!　いいやあり得ぬ！　そんなことは断じて」

ゲーチスが敗れ、そんな事を言っているとアポロは冷徹に

「現実を直視できない愚か者……。おい！　牢に押し込めておきなさい！　ヴィオという者の隣にでも！」

ゲーチスは両腕を掴まれ、船内に引きずり込まれようとしてもゲーチスはまだ叫び続ける。

「アポロめっ！　一度は私に従う素振りを見せておきながらこのような所業を起こすと

は」

「忠臣は二君に仕えず……それに、潜入の口実も分からないような愚かな人に仕えるなんて、あり得ませんよ。私の主は今も昔も……サカキ様ただ一人です」

アポロが切り捨てると、ゲーチスは最後とばかりに

「絶対に許さぬ！　ワタクシは何度でも蘇り、必ずやプラズマ団の再興を……」

とまで言うと、ゲーチスは船内に隠れ、やがて聞こえなくなる。

アポロの横にいた同じ幹部のラムダは尋ねる。

「……、殺さなくて良かったのかい？」

「あの男は殺すより、一生狂態を晒して笑われ者になった方が絵になりますよ」

「ケケッ、顔に似合わず、酷い事を言うじゃねえか」

ラムダは下卑た笑いをしながら言う。

「もしかすると……、あの男の性質が少々うつってしまったかもしれませんね」

そう言うとアポロはくすりと笑って、船内に戻っていくのだった。

―同日　同時刻　ホドモエシティ　ＰＷＴ裏口―

事件発生後、レッドとエリカはなんとか合流して、ＰＷＴの裏口に来ていた。

因みに避難勧告が出ており、住民は全員屋内にいる。

「……、一大事になりましたわね」
「ああ。取りあえずおおもとのプラズマ団をどうにかしないと……」
「にしても何処に参れば」
そんな事を話しているとレッドのライブキャスターが鳴り響く。
「はい……、あれ、アクロマさん？」
「聞きましたよ。そちらは大変そうですね」
「……、何の用事ですか？」
レッドは少し不機嫌そうに尋ねる。
「プラズマ団が何処にいるか、気になりませんか？」
レッドはその発言に驚いて
「!?　……、アクロマさん貴方もしかして」
「セイガイハ南方にある海の洞窟を、東側に抜けた先にいってごらんなさい」
そうとだけ言われると、アクロマは途端に通信を切る。
その後、すぐにライブキャスターが鳴る。
「はい……ああワタルさん」
「聞いたよ。プラズマ団が行動を起こしたんでしょ？」
「流石、お耳が早い事で」

「まーね。こちらもシロナ君と連携を取りながらジムリーダーと四天王とか……とにかくかき集めてリーグの総力を挙げてそちらに向かうけどそれには時間がかかる！　レッド君にエリカ君。君たち二人はプラズマフリゲードの在り処を調べてなるべく時間を稼いでくれ！」

とワタルからの指令が下る。

「はい！　……、あれもしかしてプラズマフリゲードの場所把握していないんですか？」

「出来る訳ないだろう！　あれは飛行する要塞だ。何処を飛んでいるかの情報が無いと……」

「あの……、これは不確かなんですけど、セイガイハシティの南に海の洞窟と言うのがあるんですが……そこの東に抜けた海の所にあるそうです」

その発言にワタルは大いに反応し

「おお！　不確かと言えどその情報は助かるよ！　で、どこからその情報を？」

「アクロマさんから電話がかかってきて……」

「何ぃ！　君たちアクロマという人物と接触していたのか……。いやいや有難う！　恩にきる！　それじゃ、健闘を祈っているよ！」

その後、すぐにワタルとの交信は切られる。

「ワタルさんも忙しそうだな……。まあ当たり前だけど」

レッドはライブキャスターをしまってそんな事を呟く。
「貴方、何をお話に……」
レッドはエリカにアクロマとワタルの話を簡潔に話した。
「なるほど……、しかしアクロマさんがその情報を把握されているという事はやはりシロナさんの推測通り……」
「クロ……、なんだろうな。よし、とにかく行こう！」
レッドとエリカはセイガイハシティに飛んで行った。
―同じ頃　ＰＷＴ受付付近―
ツクシやアカネ、ナツメ等のカントージョウト陣営はとりあえず受付まで戻る事にした。
「はぁ……、クソみたいな試合見せられ、挙句の果てに戦争!?　全く散々やわ……」
アカネはうんざりして落ち込んでいるようだ。
「でもゴールドさん頑張ってて、アカネさん滅茶苦茶嬉しそうだったじゃないですか」
「そら、同じ地方の奴が頑張ってくれたら嬉しいに決まっとるわ！　せやけどそれ以上にレッドのカスっぷりがあかんわ。あんなんどう見ても……」
ナツメが傍らで頷いていると、途端にナツメのポケベルが鳴り響く。
「はい、もしもし……」

「あ、ナツメ君かい？　戦争が起こった事は知っているだろう？　すぐにリーグの方まで……」

　ワタルから電話がきていた。

「私、今そのイッシュ地方に居るんですけど……」

「観戦していたのか……。うん？　待てよ他にそこに誰が居る？」

　ワタルは何か案でも思いついたかのような声調で言う。

「アカネさんとツクシ君とウツギ博士……ですね」

「ゴールド君繋がりだろうな……、よし！　それだけ人材がいるなら大丈夫だ！　ナツメ君、君に一つ頼みたいことがある」

「敵の本陣に乗り込め……と仰りたいのですか？」

「おお流石……。その通りだよ。君たちには一足早く、ヒウンシティに行ってロケット団の本拠を突き止めて、制圧してほしいんだ！」

　ワタルは堰を切ったかのような口調でペラペラと話す。

「ウツギ博士は如何致しましょう？」

「あの人も連れて行きなさい。ツクシ君も一緒ならさらに何か分かるかもしれないからね」

「やはり……了解しました」

「うん！　ジムリーダーが元も含めて三人も居るのなら出来ない仕事じゃないよ！　それじゃ、頼んだよ！」

そう言うとワタルはすぐさま電話を切る。大慌てな事はおおよそ感じ取れる。

「？　ナツメー、どないした？」

いつの間に遠くにいたナツメを不思議に思ったのか、アカネは呼びかけるようにして話しかけた。因みに、アカネとは観戦時に一回あいさつを交わしている。

ナツメはアカネ達の方に振り返って冷静な声で話し始める。

「皆。よく聞いて、理事長からヒウンシティのロケット団本部に乗り込むように大命が下ったわ」

「ロ、ロケット団!?　あの真っ黒な連中、性懲りもなく復活しおったんか！」

アカネは大いに驚いている。ラジオ塔が占拠された苦々しい記憶もあるのだろうか。

「これはただの事件じゃなさそうですね……」

ツクシもいつになく真剣な表情になる。

「そうね。それで、元ジムリーダーのツクシ君にも出動要請が掛かってるんだけど……、いいわよね？」

「ええ！　こんな一大事に肩書きなんか気にしていられません。僕で良ければ是非ともお力になります」

ツクシは爽やかに真面目な雰囲気を混ぜた笑いをしながら承諾する。
「うんうん立派だねえツクシ君……。さてと、僕はお邪魔なようだから……」
といってウツギが後ろを向こうとすると、ナツメは
「いえ、ウツギ博士！　貴方にも出動要請がかかっています。アジト本部の内部にある資料や機械の分析・解析の役目を頼みたいとの事で……」
「そうか……分かった。ツクシ君、僕はポケモンあまり強くないから……危険な目に遭ったら、頼んだよ」
「はい！　博士に襲い掛かる酷い人たちが居たら僕のハッサムで、ハサミギロチンの刑にしてやりますよ！」
ツクシは胸を叩いて大いに意気込んでいる様子だ。
が、叩きすぎたのかケホケホと咳き込んでしまう。
「ハハハ、それだけやる気があるなら安心して身を委ねられるよ」
「全くツクシは博士の事になるとこうなんやから……妬いてまうわ！」
アカネは冗談交じりにそんな事を言う。
「妬かなくていいですよ、僕はアカネさんの事が一番ですから！」
「！　……、ま、さんづけやけど今回はゆ、許したるわ！　ほな行く……」
アカネは少し頬を赤くしながら、ＰＷＴの出口に向かう。

が、その背後でバトル会場から出てきたヤーコンがドスの効いた声を上げて呼び止める。
「おい！　道も分からねぇのにどうやっていく気だ！」
「あ……せやった……」
アカネはそういうと自らの額をパチンと叩く。
「いやー、すんませんわーヤーコンはん！　ウチとした事が……」
「全く……、レッドにショーを台無しにされて気が立っていけねえ……。ま、それはともかくだ、お前らヒウンの場所わか……」
「今、解析したのでケーシィにテレパシーを送れば、テレポートで全員連れて行けます」
ナツメはヤーコンが言い終わる前に解析を済ませたようだ。全く化け物である。
「おおう！　なんだこの恐ろしい御嬢さんは……」
ヤーコンはナツメの人外ともいえる超能力に畏怖している様子だ。当たり前ではあるが。
「この子、ナツメと言うてとんでもない超能力者なんですー、そらもうあのヤマブキ大を首席で出た化けもんですわ、化けもん！」
「アカネさん……、本人の前で化けもんは無いですよ……」
ツクシが小さく忠告する。

「ほほう……超能力か。イッシュではカトレアというのが似たような者と聞いているが……。まあそれはいい、テレポートでヒウンまで行けるならワシからする話は無い、ＰＷＴの客の色々な収拾を図んなきゃならんしな……あっちのリーダーのアーティには連絡は済ませてある。町中を探し回らないと見つからないかもしれんが……それじゃ、任せたぞ」

と言ってヤーコンはのしのしと去っていく。

「全くレッドのせいでヤーコンはんも難儀な事やな……全くロクな男やない。コガネで見たときから胡散臭いやつやとは思うとったが……」

「……、さてと！　そろそろ向かいますか。ナツメさん……」

ツクシは少し暗い表情をした後、顔を上げて引き締まったような顔で言う。

その後、４人はケーシィのテレポートでヒウンシティにへと向かった。因みにウツギは他の研究員に関しては避難を続けるようポケギアで指示した。

―午後５時３０分　ヒウンシティ　ポケモンセンター前―

「ふうん……これがヒウンシティなのね。ま、ヤマブキには勝てないわね」

と、ナツメはヒウンの摩天楼を前にしても全く動じない。

「ケッ、ヤマブキがなんぼのもんや！　ええか、コガネはな、それはもう……」

「ちょっと二人とも！　都市争いしてる場合じゃないでしょう！」

ツクシが調停に入るが、やはりアカネは喧嘩っ早い調子で答える。
「いいや！　これはジョウトとカントーの沽券をかけた戦いや！　森林の町は黙っとき！」
「！　ヒワダをバカにしないでくださいよ！　あそこはガンテツさんというそれはそれは素晴らしいお方が……」
ミイラ取りがミイラになるとはこの事だ。
さて、そんな都市争いをどうしたものかとばかりに見ていたウツギは、横から寄ってくる一人の緑色の服を着たフワフワした髪の男に気付く。
「あれ……あの人もしかして……」
メガネをかけ直すと、男は声をあげる。
「やーやー、御嬢さんがた……、あれもしかして、そこの虫取り姿の君は……」
ツクシがフワフワ髪の男の方に振り向くと
「そういう貴方は……もしかして、アーティさん!?」
ツクシはそういうと、ぱっとアーティの手を取って
「光栄です！　貴方の作成された虫の標本とスケッチ集は僕のバイブルです！　握手してください！」
「いやもうしてるんだけど……、まあいっか。こちらこそ君の書いた虫に関する研究と

か興味深く読ませてもらってるよー、中々面白い考え方をするけど僕的にはねー」
虫オタク同士の論戦が始まろうとするのを危惧したアカネは大喝一声で
「ツクシぃ！　今そないな事しとる場合ちゃうやろが！」
と、ハリセンでパチンと突っ込む。
「いてて……アカネさんだってナツメさんと地域論争」
「それはそれや！　それにさんづけやめろ言うたろ！　またシバかれたいんか？」
アカネはハリセンを頭上にスタンバイさせながら言う。
「……！　アカネ！　暴力ばっかり奮うのは……やめてほしいです」
呼び捨てにしたはいいが、やはりため口には抵抗あるのか最後は消え入るように敬語で言う。
「っ……、呼び捨てされるとどうしてこんなに胸がうずくんやろなあ……。ごめんな。もうせぇへんから、堪忍したってな」
アカネはツクシの頭を撫でながらあやしているかのように謝る。
ツクシは口を一文字に結びながら真っ赤になっている。
その後ろでウツギは微笑み、ナツメは飽き飽きしている表情をしていた。
「うーん。仲睦まじいねぇ。さてと、ちょっと皆僕についてきてー」
という訳で4人はアーティの後についていく。

―プライムピア―

「こっちこっち！」

アーティが立ち止まった場所はジム付近にある大きな灰色のビルだった。

「まさかこれが……」

ツクシが言いかけると

「そう！　ロケット団のアジトだよー。感付かれるとまずいからずっと誰にも内緒で張っていたんだけど……。どうも宣戦布告の数時間前にババーッて人が出てね。不思議なんだよねー。でも一人で入ると何が起こるか分からないしで」

「とにかく入らな話は始まらん！　強行突破や！　いっくでー！」

アカネが突っ込もうとすると、扉は意外にも簡単に抵抗を許し、開いてくれた。

「うわわわっ」

アカネは反動で倒れそうになったが持ち前の運動能力でなんとか乗り切る。

「……、ナツメさん、何か感じますか？」

ツクシが尋ねるが

「……、ダメね。全く何も受け取れないわ。相当な妨害電波が飛んでるみたい」

「ナツメさんほどの超能力でも妨害する……？　一体どんな人が作っているんだ？」

ウツギはそれに興味を持った様子である。
ナツメとウツギは資料の収集、他は探索と班を分ける。
―午後7時　最上階―
「なんやねんこれ……。最上階だけなんか別世界や」
アカネがそう言った風景は、革張りのソファが二つ、光沢に輝く木の机、赤いペルシャ絨毯にボルドー産赤ワイン……、どこぞの映画の世界が広がっていた。
「はわわ……。なんというか、ロケット団ってすごーくお金持ちなんですね」
ツクシは純粋な感想を漏らす。
「そらそうやろ……。ポケモンを乱暴で非合法な手段でこきつかいまくってこの財力や……。許せへんわ」
アカネは義憤に燃えている様子である。
「にしても……、あの大量のテレビは何なんでしょうか？　あれだけなんだか浮いてますよね」
ツクシが目を向けた先には9台のブラウン管のテレビが横三列、縦三列で並べられていた。
「確かに不思議やなあれは……、もしかして監視とかか？」
「うーん……」

アカネとツクシがそんな調子で話していると、アーティが駆け上がってくる。
「おーい！　地下に人が監禁されているぞーーー！」
「ええっ!?」
二人は大いに驚いて、一番下の階まで降りる。

―地下室―
「今日は随分と騒がしいな……」
マツバは目を摘出されて以来虚無的に過ごし続けていた。
衣食住は保証され、室内では自由に動ける。そんな環境下におかれている。
が、その中にいるマツバの表情が晴れる事は無い。
因みに目を摘出してからはオーキドの足取りは少なくなっていく一方だ。用済みになっていたからだろう。
さて、マツバがそんな事を言っていたら、目の前の扉がシザークロスで4つに切り裂かれた。
「!?」
マツバは突然の事に当惑する。そして4枚の鉄扉が切れ落ちた先の顔ぶれに更に目を見開かせる。

「……!!　ツクシ君に……アカネちゃん……？」
「……マツバ？　う、嘘やろ？　死んだはずやなかったんか？」
「マツバ先輩!?」
　三人は数分ほどの間、身を硬直とさせるが、
「この馬鹿チンがーーー!!」
　と、マツバの頭をアカネが思い切りハリセンでぶっ叩いた。
「何処行ってたんや……、何をしとったんや……!!　ウチ……いや、それだけやない！　ジョウトの皆、心配しとったんやぞ！　……、マツバぁ！」
　アカネは紅涙を絞りながらマツバにその事を言った。言い終わるとアカネは興奮のあまり、マツバに抱きついてしまう。そしてその胸の中で泣き続けた。
　アカネとマツバは、自然公園の再開発関連で知り合って以来、非常に仲が良い。　その仲はジムリーダーの間では真っ先にくっつくのではないかと噂されていた程だった。
　ツクシもエンジュ大受験の際に定例会が終わった後等で勉強の世話を見てもらったりしてそれなりに親交が深かった。
「ごめんな……アカネちゃん」
　マツバは表情を赤くすることはなく、まるで安心して涙を流す妹でも労うが如くに優しくアカネの背を撫でる。

「……、マツバ先輩、その目、どうしたんですか？　……ちょっとかっこいいんですけど」
ツクシはマツバの左目が眼帯に覆われていることに気付き、尋ねた。
そして、最後の言葉で涙を残しているアカネが素早く反応して、マツバから離れツクシを牽制した事は言うまでもない。
「ああ、この目はね。オーキド博士が」
「オーキド!?　オーキドならレッドが仕留めとったで！　ウチ割と近くで見たし……」
アカネはまずそれを言ったが
「信じられないだろうけど、あれはクローンなんだ。それでね、僕は例の集団催眠事件の後、ひょんな事で巻き込まれてオーキド博士に監禁されたんだ。狙いは僕の千里眼……、何回かは断ったけど、死ぬのが怖くなっちゃってね……、だから、渡しちゃったんだ……」
マツバは力なく言った。アカネはそれに対して
「何を言うてんの!?　あの千里眼はナツメの超能力の能力が少し削れたぐらいの力持っとる言うてたやん！　そんなもん渡したら……」
「しょうがないだろ！　僕はまだ死にたくなかったんだ……！」
マツバはアカネの発言を強い語調で突き放す。
アカネはマツバの普段見せない行動におどろいたのか何も言い返さない。

「マツバさん……」

ツクシはマツバに切なげな目線を送る。

その後、マツバにどうしてここに来たのか聞いてきたので二人がそれにこたえていると、ウツギが地下室に青い顔をしてすっ飛んできた。

「おい二人とも!!　大変な物が……ってマツバ君!?　どうしてここに……」

ウツギは居るはずのない人物がいた事に、目を丸くしている。

「ウツギ准教授……あ、今は教授でしたか……お久しぶりです。話せば長くなるので……」

「……、マツバ君も来てくれ。研究室からとんでもないものが……」

こうして四人は上にへとのぼる。

―某階　研究室―

ウツギから資料をすべて見せられた後、その場にいた全員は絶句し、やがて口々に色々な事を言い出す。

「なんちゅうことや……」

アカネはそう言って頭を抱え、

「そ……それってつまり……あの夫婦の今までやって来たことは……」

ツクシは青ざめ、か細い声でそう呟く。

その後、ウツギは資料をまとめるため取り急ぎジョウトに戻り、マツバは病院へ、それ以外の人物は取り急ぎワタルの軍勢と合流する為フキヨセシティへ向かう。

―7月19日　午前10時　プラズマフリゲード―

レッドとエリカはセイガイハシティからプラズマフリゲードに向かった。

しかし海の洞窟付近は既にプラズマ団の手に及んでおり、ポケモンたちによって監視されていたので、アクロママシーンを使ったりそれらのポケモンを撃破しつつ2日かけてフリゲードにたどりつく。

シズイの用意してくれた階段を上り、下っ端を下し、いよいよ船内に侵入する。

船内に侵入したのちは、ホワイトプラズマ団の内偵から情報を貰って下っ端を薙ぎ払いつつパズルを解いていく。

そして、暗証番号を入れた後、最後のパイプ迷路の奥にあるバリアが解除されると、二人の背後より甲高い大人の女の声がした。

「そこまでよ！」

「快進撃はそこまでですよ、お二人さん」

一人は赤髪に妙な形をした髪型をした女と、もう一人はヒオウギにいたランスという幹部だった。

「貴方は……確かヒオウギに居た……」
エリカは早速思い出した様子である。
「流石はエリカ女史……。よく覚えていらっしゃいますね。貴方がたをこれ以上通すわけにはいきません。しかし、すぐに立ち去るのであれば……」
「ふざけたこと言ってんじゃねえ！　ここまで来させといて今更帰るなんて無様な真似……」
レッドが強情に食い下がると、
「生意気な坊やね！　チョウジとかラジオ塔にいたあの子どもをおもいだ……」
女幹部がそんな事を言っていると、幹部の背後より声がした。
「レッドさーーん!!」
その声がすると、女幹部は振り返って
「あーー！　噂をすれば……」
「全く、われわれはどうやら同じ壁を突破しなければ、先に進めないようですね」
ランスがそんな事をいいながら目深に帽子を被り直す。
「ゴールド！　それに……」
「シルバーさん？　どうして斯様な所にまで……」
エリカは当惑している様子である。

「話は後だ！　おいロケット団！　てめえら性懲りもなく、またグルになって悪事を働いてるのか！」
　シルバーは幹部二人に向かって喝破する。
「貴方は確かサカキ様の……。いやたとえ誰であろうと、我々に楯突く者を許すわけにはいきません。アテナ、まずはこの二人を倒しましょう」
「私も同意見ね！　一年前の恨み、何千倍にもして返してやるわ！」
　アテナは相当に意気込んでいる様子である。
「レッドさん、エリカさん！　ここは僕らに任せて先に行ってください！」
「……、恩にきる。ゴールド、生きて帰れよ……、次、互いに無事で会えたら」
「ええ、もう一度バトルしましょう！」
　そう言うと、エリカも一礼して、二人は先に進む。
「さて、どっちから仕留めてやろうか……」
　シルバーが息巻いていると、二人の背後より
「君たちがするには及ばないよ」
　と、男の声がした。
「……、貴方は……」
　―プラズマフリゲード　左ワープパネル前―

二人は右側からいってみようという事で、ワープパネルまであと数メートルといったところにまでたどり着く。

が、そこで、ヒオウギにいたもう一人の幹部、アポロが現れる。

「おやおや、やはりここまで来ましたか」

「確か……、アポロと仰せになられておりましたわね」

エリカはすぐさま思い出したようである。

「覚えておりましたか……。聡明なお方だ。そして、噂通り優秀なトレーナーでいらっしゃる……」

「……」

エリカは特に返答しない。

「我々は漸くサカキ様を取り戻し、新たな体制のもとで動き出そうとしています。サカキ様は自らの信念に基づいて志を遂げんと奮励しておられる……、それを阻もうとする者は伝説のトレーナーであろうと、容赦はしませんよ。お前たちを捕え、エリカ女史を〝センセイ〟とやらに差し出すのが私たちに課せられた主命……。私はそれを忠実に遂行するのみです！　行きなさい、ヘルガー、マタドガス！」

……

レッドは1体、エリカは2体失い、残ったポケモンは黄色という辛勝を収める。

「……、やはり、私では無理なようです……。サカキ様、お許しください」
「さあ！　通してもらおうか！」
　レッドはアポロに強く迫った。
「クッ……」
　アポロが窮していると、もう一人ワープパネルに人が現れる。
　白衣に奇妙な髪型をした男……。そう、アクロマである。その姿にレッドとエリカは驚きを隠せなかった。
「どきなさい。雑魚に用はありません」
「……！　ハッ」
　そう言ってアポロは渋々、引き下がる。
「アポロが容易に従った……？　……、なるほど合点がいきましたわ」
「本当の敵は……、案外身近にいたって事か……アクロマさん！」
　アクロマはレッドの言葉に対し、深く頷きながら
「当たらずとも遠からず……。評価で言うなら『可』といったところでしょうか。それはさておき！　先ほどの戦い、こちらのワープパネルの先の部屋より拝見させて頂きましたが、やはりとても優秀……、そして私の本気を出すのに相応しい相手という事を確信させて頂きました！　我が同志の願いをかなえる為……。そして私の中で去来し続け

るこの衝動と疑問を晴らす為！　さあ、私の望む答えが如何なるものか教えなさいっ！

回復する時間は与えます。全力でなければ興が削がれますからね」

レッドは内心感謝しながら、すべてのポケモンを回復させる。

「準備は宜しいようですね！　では参ります」

アクロマはギギギアルとジバコイル。レッドはリザードン、エリカはキノガッサを繰り出す。

「リザードン！　ジバコイルに大文字！」

「問題！　徳川光圀が編纂を開始した、歴史書の名前は？」

「ダイニホンシ（大日本史）」

ジバコイルは即答した。流石は世界トップクラスの頭脳を有するトレーナーのポケモンなだけある。

「正解！　ご褒美に大文字ぃ！」

と言って、リザードンはジバコイルに灼熱の炎を浴びせる。

レッドは当然やられただろうと思ったが、その予測は見事に外れ、頑丈の特性で体力が1残る。

「！　リザードンが危険ですわ……。キノガッサ！　ジバコイルにスカイアッパーですわ！」

キノガッサはジバコイルの隙間に潜り込み、思い切り突き上げ、止めをさす。
「よく読まれていらっしゃいますね！　しかし何も電気技は電気タイプだけのものではありませんよ！　ギギギアル！　リザードンにワイルドボルト！」
ギギギアルはギアをフル稼働させる。そして電気を起こして自らの体を輝かし、その体を回転させながら全力でリザードンに突っ込む。
リザードンは何とか耐えきる。体力は三分の二ほど減少した。
……
こうして、レッドは二体、エリカも二体失い残ったポケモンは黄色の体力と辛勝を収めた。
「なるほど！　ポケモンとトレーナーが通じ合うとはかくのことですか！　貴方方のような強いトレーナーと戦うとよく分かります。私の至上命題はポケモンの力を如何にして強くするか。トレーナーはそれをどうやって引き出してやるかを考える事です！　それを考え、追究するうえで手段を問いません！　心は無くとも科学的な手法のみで行う事だって出来ます。しかし貴方がたは私にそれ以外の可能性をここにて示してくれた！　ポケモンリーグと貴方達が勝つのか、それともロケット団が勝つのか……」
エリカは今の言葉に疑問を覚えたのか、口を挟むかのように尋ねる。
「ちょっと待ってください！　今、ロケット団とだけしか仰っておりませんでしたわよ

ね？」

「ご賢察！　実をいうとプラズマ団は先ほどサカキの裏切りと簒奪によって崩壊し、今現在はロケット団のみがこの船を支配しているのですっ！」

「いつの間にそんな事が……」

レッドはハッとした気持ちでアクロマの言葉を聞いている。

「話を戻して、そのどちらかが勝つのか、それは私にとってポケモンと人はどう相対するべきなのか、一つの結論を下してくれる大きな事なのです。ではその結論はどこで下すのか！　それは貴方達がいる反対方向のワープパネルに乗れば分かります！　では、ご健闘を！」

という訳で、二人は反対側のワープパネルに一目散に向かい、乗る。

―元ゲーチスの部屋―

二人がその先にたどりつくと、真っ黒なスーツを着た男が立っている。

そしてどうやらもう一人いるようで、その人物と話しているようだ。

レッドとエリカは取りあえず動静を伺う事にした。

「く……、まさかこの私が敗れるとは……」

「サカキ殿。今まで大儀であったな……。しかし、所詮、サカキ殿もロケット団も……全てワシの手駒に過ぎぬのよ……ハッハッハッ!!」

その聞き覚えのある声に二人は大きく身震いする。
「敗れたからには仕方ない……。抗わず退散するとしよう。……、だが、オーキド殿にこの天下を手中にし、安定して治める力など……あるとは私には思えぬがな。恐怖だけでは人は支配できまいに……」
と言ってサカキはゆっくりとレッドの方に向かい、やがて過ぎていく。
レッドはサカキと話す事を試みたが、それ以上に黒い体が消えた先の者に驚きを隠せなかった。
「さて……、漸くきおったか……。レッド君、エリカ君！　待っておったぞ」
「オーキド……博士？」
全てが決す、最後の審判の時はすぐそこにまで迫っていた……。
―第六十四話　虎鳥の咆哮　終―

第六十五話　胡蝶の夢

―7月19日　午後3時　プラズマフリゲード　元ゲーチスの部屋―

「ホッホッホ……」

オーキドは黒い部屋とは対照的な白衣を着こなしながら、静かに嗤っている。

彼の背後にはワイド状のモニタが何枚も敷き詰められている。

「どうして……。確かに俺が仕留めたのに……」

レッドは目の前で笑っている博士の姿が信じられない様子である。

エンジュ騒乱の際、エリカとの取引に応じたと見せかけて拳銃とやらを奪って、三発撃ち込んだハズだとレッドは記憶を呼び起こしている。

「愚鈍じゃのうレッド君……。このワシがまともな防具やポケモンも持たないまま戦地に行くような、バカな真似をするとでも思うたのか？」

「……」

レッドはただひたすらに黙る。

「あれはいわばワシの仮の姿、クローンだった訳じ……」

オーキドが言い切る前にレッドは口を挟む。

「……。あの時の博士がクローンであろうと無かろうと……」
「うん？」
「一度でも俺の女に酷い事をすると平然と言ってのけた男を許すわけにはいかない……、何度でも実力で仕留めて見せる」
　オーキドはレッドの息まきに対し、戯言でもうけとったかのように
「……実力かい……。良かろう、この際固いルールは抜きじゃ。君の手持ち、全てワシにぶつけてみると良い！」
　彼は軽く受け流したと思いきや、それ以上に大きな挑戦を吹っかけてきた。
「全部の手持ち……？　正気ですかアンタ!?」
　レッドは予想外の提案に目を見開かせて驚く。
「そして、ワシはこれ一体で戦う。いでよ！　ミュウツー！」
　オーキドはミュウツーを繰り出した。
「！　まさかハナダの洞窟からミュウツーが雲隠れした要因は……」
　エリカはひらめいた視線をオーキドに送る。
「他ならぬワシじゃ。捕まえるのはそれなりに苦労したがの」
　オーキドはホホホとまたも嗤う。
「……、いいさ、伝説のポケモンだろうとなんだろうと、俺は……」

レッドはポケモンが入っているモンスターボールを手に目いっぱい広げ、即座に繰り出した。
「全力で貴方を叩き潰し、くだらない争いを終わらせ、笑ってカントーに帰ってやる！」
「ホッホッホ！　……、良いのぅ。良い意気込みじゃ。気に入った、君から指示を下すと良い……」
オーキドの先ほどのからの言動に何かを感じたのかエリカは
「貴方！　挑発に乗ってはなりませんわ！　全部出すことを許すなど明らかに敵の罠……」
エリカは身振り手振り出来るだけ使って、必死に再考を求める。しかし、彼女が全て言い終わる前に、レッドは
「止めるなエリカ。俺は全力であいつを潰して……、エリカと本当に結ばれるんだ」
「！」
「俺、思うんだ。博士を倒さなきゃ……、俺たちの関係に平穏は訪れないってな！　だから俺はあらんかぎりの力を持って……下すんだよ！」
レッドが十二分に決意を籠らせた声で言うと、エリカは
「……、そこまでの闘志があるのでしたら私がとやかく言う義理はございませんわ。ご武運をお祈りいたします」

と言い、エリカは引き下がる。
「ククク……、のろ気とるのお」
「うるせえ。博士、あんたの暗躍はここまでだ！　俺がふんづかまえて、審判の場に引きずり出してやるよ！　お前ら！　ミュウツーに向かって一斉に暴れやがれ!!!」
レッドの大喝ともとれる指示で、ポケモンたちは一斉に動き始める。
ピカチュウがミュウツーのもとまで残り数十センチとなったところでオーキドは静かに指示する。
「ミュウツー、白死だ」
オーキドのその一言で視界は真っ白になる。
あまりにも眩い光線でレッドとエリカは目を覆い隠す。
数十秒ほどたって、光は収まり、レッドは静かに目を開く。
開くと、先ほどまであれほど猛々しく襲い掛かろうとしていたすべてのポケモンが、嘘のように倒れていた。
「お……、お前ら……嘘だろ?」
レッドはその光景に膝を折って落胆とする。
「あれほど息巻いても……、所詮はこの程度か……がっかりじゃのう」
「てめえ、汚い手を使いやがって！」

レッドは大事なポケモンをこのような手法で全滅させられたので大いに憤慨している。呼び方まで変えるほどだ。

「汚い……？　白死はサイコブーストと言うデオキシスしか覚えぬ技をミュウツーに適合し、ＰＰは一回の代償にちょいと威力を強めただけのワシ特製の技じゃ。新技の範疇じゃよ」

オーキドはレッドの反発を冷たく切り返す。

「だからそれが汚いと……」

「レッド君。お主は新しい地方で見つかった技にもそのようにケチをつけるのかね？　そのような狭量な器ではいつまで経ってもワシ抜きの力では強敵に勝つことは出来ぬぞ」

レッドは最後の言葉に反応し、

「……、どういう事だ。あんた抜きの力って……」

「今までおかしくは思わなかったのか？　最後のターン等の都合のいい時だけ当たる大文字、都合よく相手の技をかわすポケモンたち、都合よく急所にあたったり追加効果の出るポケモンたち……、一回として疑問を抱かなかったのか？」

「……！」

レッドは今までの戦いを想起する。

確かに命中が低い技なのにここぞというときは当たっていたという印象があった。その他にも色々と考えているうちにオーキドは言う。

「強敵に関してだけいえば、全てワシが君の図鑑に仕込んでいるカメラを通じて遠隔で催眠などをかけて相手ポケモンの思考や行動をうまい具合に制御し、場合によってはレッド君のポケモンを操作し……、ワシが尋ねるまで疑いを持たぬようになるだけギリギリの状況で勝たせたのじゃよ！」

レッドはその発言に愕然とせざるを得なかった。エリカは落ち込むというよりも、ひたすらに思案を巡らせている様子だ。

そして次の言葉が出る。

「一体、誰の時に……」

「ワタル、シロナ等のチャンピオンはもちろん、我が孫のグリーン、ホウエンのナギやフウとラン、シンオウのトウガン、そしてお主がかなり苦戦したヤナギやシャガ、最後にセキエイで戦った時のゴールドじゃ！」

「……！」

レッドはさらにうちひしがれる。

「……、一つお聞きしてもよろしいですか？」

エリカはオーキドに尋ねる。

「なんじゃね、エリカ君」
「どうして、ＰＷＴで戦ったとき、その催眠などの方法で夫を勝たせなかったのでしょうか？」
「もう用が済んだからじゃ。手に入れたい情報は全て入手できたからの」
「……、いったい何のためにです？」
　エリカは更に追及する。
「それは直に分かるわい。さてレッド君……」
「証拠は……」
「うん？」
　オーキドはやらしい声調で答える。
「証拠はあるのかよっ!!」
　レッドは直立してオーキドに詰め寄る。
「証拠……？　笑止な事を言うのう……、ＰＷＴでゴールド君と戦った時の君の戦術。それが全てじゃよ」
「んだと……！」
「君の戦いぶりは、全て力押しで何の面白味もあったものではない。レッド君がヤナギに敗れたとき、あいつの言っていることはまさに的を射ておったのう……、あいつの慧

眼ぶりには昔から驚かされたものじゃ。それはさておき、そんな戦術で、君は本気で全国を制覇しきれると思ったのか？」

「グ……ッ！」

レッドは思い当たる節があり過ぎるので黙ってしまう。

「答えは君自身が一番わかっておるというのに……愚かな限りよ。それにしてもゴールド君は素晴らしいのう。カスミとやらを振ったのちは修行に身を入れ始め、シルバーというライバルに敗北を喫したのちはさぞかし頑張っただろう……。じゃからセキエイでの戦いを画面越しで見た際、これは負けるじゃろう……とワシは思い、調整した訳よ！」

「……」

レッドはひたすらに黙る。

「そうそう、ゴールド君、ＰＷＴで戦ったときポリゴン2がおったのう」

「それがどうした……」

「あれはワシの送り込んだ君に対する刺客じゃ」

「！」

レッドはオーキドの言葉に目を見開かせる。

「ゴールド君含め、エンジュにいなかった連中はワシの所業を知らぬからのう……、イッ

シュに到着したゴールド君に会って渡すのは訳もない話じゃった。しかしまあ……あそこまで強力にするとはのう。奇貨居くべしという先人の言はバカに出来ぬ物じゃな、レッド君よ！」

「……おい、エリカ、どういう意味だ」

レッドはエリカに耳打ちする。

「奇貨とは潜在的な価値を秘めているものの例え。居くべしというのは手元に置いておくという事で、機会を逃さずに上手く利用するという意味の故事成語ですわ」

と、エリカはいつもよりは元気のない声で答える。

「全くこれしきの言葉も知らずにエリカ君と結婚するつもりだったのか……、全く笑止だのう！　笑止と言えば、もう一つあるのう。レッド君、君はフウロと言うフキヨセのジムリーダーと夜を共にしとったじゃろ？」

オーキドの発言に対し、レッドは反射で

「ち……違う！　あれはフウロに誘惑されて……！」

「ほほう、あったということは認めるのじゃな？」

「……、い。いや無い!!」

レッドは大いに慌てている。

エリカはレッドの浮気の件について聞かされ大いに動揺している。手は震え、わずか

に冷や汗をかいている。
「まあ良い、すべてはこの中に入っておる」
そう言いながらオーキドは、懐よりＩＣレコーダーを出す。
「……！」
「君の図鑑の中には小さな監視カメラが仕込まれておる。一部始終バッチリ記録させてもらったわい！」
と言って、オーキドは下卑た影のある笑顔をしながらポチリと再生ボタンを押す。
『……、エリカとは別れる！』
――
およそ数十分。フウロとの同衾が始まる寸前まで聞かされてレッドは途端に叫ぶ。
「ふざけるな！　これはあれだ……、俺を陥れるためのアフレコだろう！」
「ほう、よくぞその言い訳を思いついたのう……」
そしてオーキドはすかさずリモコンを取り出し、続いてその先の映像を、背後のモニターに映し出す。
同衾から先の映像だ。
「！」
「別に透視機能を使って最初から映しても良かったのじゃが……、レッド君行為に夢中

になり過ぎて図鑑をベッドの上に落とし、落としたのも気付かずにフウロの体に溺れておったようじゃ……。好都合じゃからそこから映しておる」

「グッ……」

フウロの嬌声とレッドの低い声が室内に響いた……。

――

およそ10分後、映像は途切れる。

が、レッドは往生際の悪さをみせつけたいのか否か、またも反発する。

「ど……どうせこれも合成だろ！　でたらめばかりやりやがって!!」

「ほう……、証人はおるぞ？」

「ハァ!?　証人？」

レッドは冷や汗をかきながらそう答える。

「人ではないがな……、君たちの行為を見ていたものがおるのじゃよ！　それは……」

オーキドは一番最初のシーンを映し、カメラを90度右に傾ける。

そして少し開いているドアの隙間を拡大し、解像度を上げる。

するとそこには

「ピ……ピカチュウ!?」

レッドは倒れているピカチュウに目をむける。

「お前……、見ていたのか？」
「……」
　ピカチュウは倒れたままの状態で目を開けたが、うんともすんとも答えない。
「レッド君、君は積年信頼しているパートナーが見たことを疑うというのかね？」
「……」
「そうじゃろう。この事は紛れもない事実なのじゃ。君はエリカ君という人が居ながら、その愛を一身に受けておきながら!!　刹那的な享楽を欲するが為にその愛を裏切ったのじゃ!!」
　オーキドは先ほどまでの穏やかな調子とは打って変わって、大いに怒りの感情がこもった声で接する。
「……」
「最早返す言葉もなしか……。ところで今わしが弾劾したこと……、ツクシやアカネ等と言った連中はもう知っておるぞ」
「は……はい？」
　レッドは更に訳が分からなくなり、そう返さざるを得なかった。
「どうやらワタルがアジトを突き止め、別働隊を送り込んだらしいのう……」
　と、言いながらオーキドは9番目のモニタに録画済みの映像を全部のモニタに拡大し

て映す。
「……っ！」
『なんやねんこれ！　うちらはこれまで……全て泡影を見ていたに過ぎんかったのか!?』
『信じられない……あのレッドさんがこんなことをしていただなんて……』
『……最っ低』
『……、軽蔑するよ、レッド君』
『……』
色々な感情の籠った声が直接ではないものの、レッドに向けられる。
数日前まで自らに微笑みかけてくれたりしていた人が、今や憎悪と軽蔑の目線を向けているのである。
レッドは自省よりも先に、一刻も早くこんな所から逃げ出したいという気持ちでいっぱいになっていた。
「……」
レッドが絶望に打ちひしがれている表情になると、オーキドは更に話し始める。
「にしてもレッド君……、わし自身もフウロにエリカ君を捨ててまで入れこむとは思ってはおらんかったよ……。この件に関してわしは一切関与しておらんぞ」

「嘘だ……っ！　博士が俺の心を動かして……！」

レッドは苦し紛れの言い訳をする。最早、エリカの目には光はおぼろげにしか宿っていない。

「たわ言はもう沢山じゃ！　レッド君、君はフウロと閨を共にしてしまった時点で、歴史を動かしてしまったのだよ……！　エリカ君と結婚するはずだった歴史を……の」

「……」

「もう、何も抗う気は無さそうじゃな。さあ、今度こそエリカ君を渡してもらおう。君にエリカ君を任せる権利など微塵もありは……」

オーキドが言い終わる前に、レッドは最後の〝わるあがき〟をみせる。

「どうして……そこまでしてあんたは俺を追い詰め！　エリカを欲しがるんだよっ!!」

オーキドはレッドの問いに対し

「君を追い詰めるのは、ワシからエリカ君を奪った代償として、その絶望と憔悴に満ちた顔を見る。その事を心の底から渇望していたからじゃよ……！」

と、満面の笑みで答える。その顔は、普段の博士と何も変わりはないとレッドは思ってしまう。

「そして、エリカ君を欲するのはワシの生き別れの妻の生き写しであるという事……、そして何より！　エリカ君はワシの……」

最後まで言い終わろうとしたところで、右側より大きな爆発音にも似た轟音が響く。
「……？　何事じゃ」
オーキドはすぐさまミュウツーを戻し、ワープパネルに乗って、その場所にへと向かう。
レッドはすぐに全てのポケモンをボールに戻してオーキドについていき、エリカもそれに少し遅れて付き従う。
―午後４時３０分　プラズマフリゲート　中央広場―
レッドとエリカは、オーキドの姿の見えるところまで行く。
そして、オーキドの姿が見え、止まっている場所に到着する。
止まっている場所は、例のパイプ迷路の奥の広い場所だった。
そしてレッドはオーキドが視線を向けている方向に目を向けると、そこには一部を除いた全国のジムリーダーが一堂に会していた。
何人かはレッドに軽蔑の視線を向けているが、大体は真剣な表情で、ポケモンを出して待機している。
「皆……」
レッドは小さく呟く。
「ほほう……、みな御揃いで何の用かね？　パーティーでもするのかの？」

オーキドがそんな様子ですっとぼけていると、一人の老人が前に出る。
白い頭にマフラー、青色のコート……、そう雪柳斎の異名を持つジムリーダー・ヤナギである。
「こんな状況にまで追い詰められても大層なたわ言を吐くのう……オーキドよ。その豪胆さは相変わらずよの」
「……、ヤナギか。こんな大所帯引き入れて何の用事かね」
「決まっておろう。貴様を倒しに来たのだ。オーキド……！」
ヤナギは強い口調で、何者をも凍てつかせる眼光を走らせてそう言う。
「ホッホ！　やはりパーティーの準備しに来たのか！」
「何がおかしいのだ」
「決まっておろう……、君ら全員、血祭りにあげて頭蓋を薄濃にし、肉を膾にしてワシの酒宴を開く……。その食材として来たのだなという事じゃよ！」
その言葉であまり耐性の無いジムリーダーは足を竦ませたり、中には涙目になってしまう者もいた。あまりにもオーキドの目が血走っており、本気だったという事もあるだろう。
「落ち着けい！　狂人の戯言ぞ！　本気で受け取るな！」
ヤナギは首を後ろに向け、そう言い、ジムリーダーたちを叱咤する。

「ほう……、果たして戯言で済むかのう……？」

オーキドは影のある笑いをしながら言って見せた。

「オーキドがワシの首を取るか、ワシがオーキドの首を刎ねるか……、五十年来の決着、今ぞつけようではないか！　行け、マンムー！　トドゼルガ！」

「2対1か……ま、それぐらいのハンデはくれてやろうぞ。行け、ミュウツー」

ヤナギは伝説のポケモンが出てこようと、狼狽える様子は見せず

「短期決戦で済ませるぞ！　マンムー！　トドゼルガ！　ブリザードだ！」

マンムーとトドゼルガは力を合わせて、力の限りの吹雪を噴出する。

やがて吹雪は強風を味方につけ、暴風雪に形を変えて、ブリザードとなる。

ブリザードといえど、光に照る雪のきらめきは見る者を魅了させるには難くない。感嘆の声があちこちから漏れだす。

「フン、ブリザードか……。ミュウツー、衝撃波じゃ！　弾き返せ！」

「クッ、愚かな！　そんな力では我がブリザードは……」

ミュウツーは自らに雪が数粒ついたところで、指先から衝撃波を出す。

衝撃波は大量の雪をモーセの海開きならぬ雪開きの現象を見せ、やがて出した二体に衝撃波の洗礼がやってくる。二匹はなんとか生き残るが相当なダメージを喰らう。

ヤナギはその瞬間、信じられないとでも言いたげな表情をし

「う……嘘であろう？　あのブリザードがたった一撃で呆気なく崩壊するだと……!?」
「終わりかの？　ならばこっちの番じゃ！　ミュウツー！　マンムーにサイコキネシスじゃ！」
　ミュウツーは大いに念じ、途轍もない破壊力の念波をマンムーに送ったその瞬間。カイリューが止めに入った。
「!?」
　ヤナギはわが目を疑う。因みにこのカイリューはマルチスケイルのようでそれほどの痛手ではなさそうだ。
　そしてすかさずヤナギの目の前にマントが見える。
「ヤナギさん！　ここまでお疲れ様でした！」
「ワタル……殿？　どうしてここに？」
　ヤナギが突然のワタルの登場に戸惑っていると、ガブリアスがミュウツーにドラゴンダイブを仕掛けている。そして、今度は黒い服の女性がヤナギの眼前に現れ
「船内を探っていたらロケット団の幹部や下っ端どもに足止めを喰らってしまい、遅れてしまいましたが……。ここから先は私たちが戦います！　ヤナギさんは無理をなさらず後方にお控えください！」
「何を言う。私の獲物であるぞ」

「ヤナギさん……いや、理事長！　オーキドは貴方の敵と言うだけではなくリーグの敵です。リーグの敵の親玉は……、親玉も仕留めに入らなければ格好がつかないでしょう？」

　ワタルはにこりと笑いながらヤナギに語りかける。

「クッ……、理事長か……何年振りかのう。そう呼ばれたのは」

「ここから先は私たちの世代です……！　ヤナギさんが内国で最強のトレーナーである事は十分に認識していますが……組織は常に新しい風が吹かなければパサパサになってしまいますわ！　ですから……私たちでもやれるという所！　見ていてくださいっ！」

　シロナが強い口調で言うと、ヤナギはククと含み笑いをしながら

「私も老いたのう……。こんな若造どもの言葉に心動かされるとは……。なるほど組織は常に新しきを渇望せねばならぬか……。しかしのうシロナ女史、組織と言うのは皆で成り立っているものではないのか？」

「それは……つまり？」

　シロナはヤナギに尋ね返す。

　しかしワタルはすぐにヤナギの言っている意を解したのか

「なるほど……、組織は皆で成り立っている……、ならばリーグの敵は構成員皆で立ち向

かうべきだと……、そう仰せになりたいのですね？」
　そう言うと、ヤナギは黙って頷き
「左様。流石は皆を背負って立つ理事長よ。これならワシの後もしかと任せられそうだの……。最初はワシ一人で行こうと思うたが、この化け物は……どうやら私一人の手では手に負えぬようだわい」
　と更に笑って見せる。
「了解しました！　先人の言に逆らう訳にはいきません！　皆！　一斉にミュウツーに攻撃を仕掛けろ！　総攻撃を命ず！」
　ワタルの一声で、ジムリーダーのポケモンたちは一気に動き出す。
　その様子を見たオーキドは
「ホッホッホッホッホ!!!　笑止笑止笑止!!　レッド君よりも何倍もポケモンが居るからと同じ手を使っても無駄じゃよ！　何故ならば君らの戦闘データは全て解析済みじゃからのう!!」
　オーキドのその言葉にワタルは振り返り
「何だと？　そんなバカな……」
「ワシが何も考えずにレッド君の戦いを見たと思うたのか！　戦ったジムリーダー、四天王、チャンピオン、すべての戦闘データを記録し、分析、解析を済ませ、このミュウ

ツーやほかの伝説手持ちポケモンに対応させた！　何千何万というパターンを叩きこませたこのポケモンの前には全ての攻撃は塵と同じきものよ！　シャガやヤナギで一回敗けさせたのは必殺技のデータを取るための他ならぬわ！　そしてこの千里眼で思考は全て丸見えよ！」

「バカね！　私たちがそんな一パターンの技しか用意してないと本気で思っているのかしら？　ミカルゲ！　ミュウツーに悪の波動！」

シロナはそう言ってオーキドの論を崩そうとしたが、ミュウツーはひょいと避ける。

シロナは予想外の事態に目を見開かせた。

「バカなのはそちらじゃ！　そのポケモンを使っている限り、ミュウツーのパターン回路の範疇よ！　ミュウツー！　ミカルゲに……」

オーキドがそう言ってミカルゲを倒そうとすると、

「ウルガモス！　ミュウツーにむしのさざめき！」

ミュウツーは突如自らに襲った騒音に耳を苛ませ、身をうずくまらせる。

「!?」

何が起こったのかと、オーキドは攻撃のきた右側に目をやる。

そしてそこには……

「ほほう……、ならば、パターン外の攻撃を喰らえば……如何かね？」

ライオンを彷彿とさせるたてがみ、モンスターボールを何個も首にぶら下げた風来坊な男がやってきていた。
「ア……アデクさん？」
たまたまアデクの近くにいたフウロが驚きながらアデクに言う。
「おおフウロか。久しぶりだのう。それはともかく、イッシュの危機と聞いて、飛んでやって来たわけよ」
アデクが言っていると、更に後ろから
「予感は的中したな……、このような悪辣非道な者……、許さぬぞ！　人間の屑め！　このハチクが成敗してくれるわ！」
ハチクの叫びと共にツンベアーが咆哮をあげる。
「あたしも忘れちゃ困るよ！」
「僕たちだって!!」
三兄弟やアロエも来ていた。
「いくぞ者ども！　オーキドを倒し、イッシュにもう一度平安をもたらすのだ！」
こうして引退したジムリーダー達のポケモンも一斉にミュウツーの元へと襲い掛かる。
ミュウツーはパターン外の攻撃を多く仕掛けられた為、脳が混乱しまともな攻撃が出

来なくなってたちまちボコボコにされるのだった……。
「チぃ……、こうなれば一か八かじゃ！　行け、カイオーガ！　デオキシス……」
　その一方、盛り上がっている戦場から少し離れた場所で、すっかり冷え切った二人が居た。
「……、うわ……凄いな……」
「ええ……」
　エリカは力なく答える。
「な、なあエリ」
　レッドが言い終わる前にエリカはレッドの前に出て、バックをレッドの方に放り投げる。
「……」
「おい、エリカ……これは一体何の」
「貴方……。私、オーキドの話がどこまで本当かはまだ頭の整理が仕切れていないので分かりかねますが……ただ、これだけは言えます」
　レッドはエリカの次の発言に注目する。
　そしてエリカは光を失った眼をレッドに向け、うっすらと白雪のような笑みを浮かべ

ながら
「貴方と過ごしてきたこの一年と半年は全て……、オーキドという蝶が見せた夢……胡蝶の夢だったのですわね」
「……、おい。それって」
　レッドの反発すら聞く気がなくなったのか、エリカは懐にしまってあった婚姻届をすっと取り出して
「〝貴方〟……そうお呼びするのも……此度が最後です」
　といいながら、エリカは婚姻届を丁寧に1回、2回、3回……最後には散り散りにして虚空にへと送る。
「さようなら」
　と言って、エリカはレッドの元をスタスタと立ち去る。向こう側にいるジムリーダーの方に向かうようである。
「おい！　待てよエリカ！　エリカァァァ!!」
　たとえ声が嗄れるほど言おうと彼女は一度も振り向くことは無かった……。
　レッドは放心状態になりながらバッグを開け、中を検分する。
　その中には、花柄のハンカチ等といった小物や、一度も使われる事は無かった折り畳み自転車等があったが、レッドは一枚の写真を取り出す。

これは、ジョウトにいたころ、氷の抜け道のカメラおやじに撮ってもらった写真である。

レッドの肩にはピカチュウが乗り、エリカは少し恥ずかしそうに手を前に組み周りにはそれぞれの手持ちが思い思いのポーズをとっていた。

『まあ！　よく撮れてますわね！』

『そら、プロのフォトグラファーだからな……』

『貴方のお顔、とても可愛いです！　これは家宝にしなくては……』

そういえばあいつ、あの時、写真に夢中で転んじゃってたんだっけ……。あの時のエリカも本当に……可愛かったなあ。等とレッドはその頃の会話と様子を思い出し、その思い出に浸りながら一人涙するのだった。

―第六十五話　胡蝶の夢　終―

第六十六話　赤い帽子

―7月20日　午前10時　セイガイハシティ　ポケモンセンター―

その後、ポケモンリーグは総力を挙げてオーキド率いる伝説軍団と対決し、およそ5時間に及ぶ死闘を繰り広げた。

何回もオーキドの粘り強い化学戦術に追いつめられたが、やはりパターン外の攻撃が効いたのか、勝勢を覆すには至らず。優勢に事を進める事が出来た。

その戦いは激しく、どれほどかといえばプラズマフリゲードが粉砕されてしまうぐらいだ。最後の辺りになるとジムリーダー達も足場が悪くなって飛行ポケモンを持たないリーダーは借りて、そのポケモンの上から指示するという有様である。

と、色々な事があってリーグは満身創痍になりながらも勝利し、オーキド及びロケット団、プラズマ団はアクロマを除き全員捕縛。リーグは何とかメンツを守り通した。

翌日、ワタルはイッシュのトップであるアイリスも横に居させ、総括をする。

ワタルとアイリスの前には40人のジムリーダーや16人の四天王等が一堂に会している。

「……という事を政府や報道各所で説明するが異論は？」

ワタルが全員にお伺いを立てる。特に誰も反論はしない。
「イッシュの理事長殿は……？」
内国とイッシュ地方のリーグは対等な関係にあるため慣例上聞くことになっている。
「えっと……」
アイリスはシャガにアイコンタクトを取る。
シャガは静かに頷く。
「特に異存はありません」
「了解致した。ではこれを以て緊急命令を解くものとする」
ワタルに続いてアイリスが言う。
「皆さんはそれぞれの仕事場に戻ってください」
という訳で、漸く本当の意味で戦争は終結した。
各々のジムリーダーは三々五々それぞれの場所にへと戻っていく。
そんな中、シャガとヤナギがすれ違おうとしていた。
「……、これはこれは、貴方が噂に聞く……雪柳斎殿でございますか」
シャガがまずヤナギに話しかける。
「名をご存じでございましたか。こちらも貴殿の噂は存じておりますぞ、蒼龍、ことシャガ殿」

ヤナギは恭しく、シャガにお辞儀をする。
「相当な強い技を習得なさっているようで……。ブリザードという名でござったか……、それほどの強さを持ちかつ、リーグの初代理事長とはいやはや内国は良きリーダーをお持ちですな」
シャガが社交辞令半分にヤナギを褒めると、ヤナギはフッと笑いながら
「いやいや。小生は為すべきことを為しているまでの事……。そちらこそイッシュのドラゴン使いを養成し、そこからイッシュ第一のトレーナーになったとか……」
その後も二言三言会話を続け、ヤナギは
「いつか、お手合わせ願いたいものですな」
と言い、シャガはすぐさま
「私も興味が湧いてまいりましたな……。またいつか……、いやその前に互いに生きておればの話ですがな」
二人はそう言うとハハハと笑い合ってすれ違っていくのだった。
内国、イッシュを裏から支える実力者同士の対談は、見る者に何かを迫るものがある。
その一方、レッドに別れを告げたエリカは一人で早くタマムシに帰ろうとしていた。
しかし、その前にナツメに呼び止められる。
「エリカ」

「ナツメ……さん」
エリカは呼び止められると、ゆっくりとナツメの方に体を向ける。
昨日は戦いに気を取られており、あまりエリカは人と話していない。

「見ていたわよ……、レッドを、振ったのね」
「……、そういえば、ナツメさんは見ておられたのでしたか。あの場面を」
「ええ。エリカも見たの？」
ナツメはすぐに答え、エリカに尋ねる。
「はい、オーキドに見させられて……おかげで今回の事が分かった訳なのですが」
「そう……」
エリカはさらに続ける。
「私……、レッドさんに……他の女性と同衾するような事はしないで下さい……って言ったのに……」
エリカはなよき手を握り締めながら言う。
「……、それで約束を破ったから……レッドと別れてきた……と」
「約束を破ったというのもありますけれど……、何よりも、私という人がいながら……、それよりも、他の女性とそれ以上の事をなさったのが……私には悔しくて、悔しくて

……！」

エリカは切実に話す。エリカはそこまで言うとハンカチを目に遣って、紅涙を拭う。

「それ以上……？　てことはあんたまさかレッドとはまだ……」

ナツメが続きを言おうとすると、アカネがエリカの方にやって来た。

「エリカーー!!」

「アカネさん……」

アカネは走って来たので少し息が切れている。ツクシは少し遅れてやって来た。

「あ……あれ？　エリカさん？　レッドさんはどうされ」

アカネはすぐさまツクシにハリセンを叩きこんだ。今回は本気である。

「いでで！」

「表情で察さんかい！　このナマクラ！」

「うう……、ごめんなさい……」

ツクシが頭を撫でていると、アカネが話し出す。

「エリカ！　多分この状況を察するに例の件は全部オーキドから聞かされたんやろうけど……、気、落とさんといてよ！　女は幾多の失恋を乗り越えてこそ……」

エリカはそれを聞くとクスリと笑いながら

「……、かつてアカネさんの恋の手助けをしてあげた私が、今度は逆にアカネさんに励ま

されるだなんて……現実は小説よりも奇なりというかのバイロンの格言は本当の事なのですわね……」

エリカは哀愁に浸っている様子である。

「世界史かい……。全く、何かにつけて勉強の事話し出すエリカによくレッドはついていけたもんやね」

アカネがそう言ってから笑いしていると、ツクシが尋ねる。

「あの、アカネさんバイロンさんってだ」

ツクシが尋ねるとアカネはすぐさま

「イギリスの詩人や。それ以上は自分で調べてなー。でな、エリカ。一緒に帰らへん？　どうせ内国に帰る事には違いないんやし……ナツメも一緒に！」

「え……私も？」

ナツメは少し驚いた様子でアカネに尋ねる。

「そや！　一緒にヒウンに潜入した仲やろ？　仲良くしたいねん！　なーツクシ」「わー！　これがイッシュのイトマルかぁ……、なんだかジョウトのより少し大きい……」

ツクシは近くの植栽にイトマルがついていたのを目ざとく見つけ、やはり観察していた。

「空気を読まへんかい！」

と言ってアカネはパチンとツクシにハリセンを叩きこんだ。
ツクシはすぐに観察を止めてエリカやナツメの方に体を向ける。
「痛い……。そうですね。僕ら二人だけで帰るっていうのも、盛り上がりに欠ける気がしますし」
「そやねー。ツクシどうせ帰ったらすぐ研究所やろ？　なるべく喋らせてエネルギー消耗させて……」
「わわ、怖い事言わないでくださいよー……」
ツクシは真に受けたのか、しゅんとしている。
「冗談やて」
と言ってアカネは闊達に笑う。
「にしても……。どこに行ったんでしょうねレッドさん……」
ツクシはレッドの消息を心配している様子である。
「まー、案外、うちらと同じタイミングで行ってエリカに付きまとおうとしてるんちゃうん？」
エリカは苦笑いをしている。
「……、それ、洒落にならない」
ナツメは静かに言う。

「え……、ホンマなん？」

アカネは真面目な顔になって、ナツメに尋ねる。

「超能力関係なしに、レッドの性格を見た上の話よ。だから少なくともタマムシにつくまでは私がつく寸法。それに二人が加われば、もう盤石ね。レッドが付け入るすきは無いわ」

「抜け目あらへんな……。流石はエスパーやね」

さて、そんな会話を二つ後ろのソファより見ている人物がいた。

他ならぬレッドである。青色のウインドブレーカーを着てごまかしている。

レッドはエリカに別れを告げられた後、いち早く船から抜け出してポケモンを回復させて野宿した。

その後、集会しているのを見計らってエリカの姿を見ようと席について見張っていたのだ。

アカネやエリカ等はセイガイハからフキヨセにへと向かう。

―同日　午後2時　フキヨセシティ　フキヨセカーゴサービス　受付前―

四人はすぐに帰ろうとしたが、他のジムリーダーや四天王が急いでいた為、数便遅れて乗る事になった。

ナギは四人の元に駆けより

「ふう、待たせて悪いわね！　さあ搭乗予約済ませて早く乗ってね！」
　ナギはいつになく急かしている様子である。
「あー。ナギ言うたっけ？」
　ナギは年下相手に呼び捨てされたのが癪に障ったのか一瞬だけ眉が動いたが、曲がりなりにも同業者なので、声にはださず
「何か所用でも？」
「うん。ちと、耳貸してくれへん？」
　アカネは、レッドが尾行している可能性があるのでレッドと思しき人物が来たら同じ便には搭乗させないように依頼した。
　一応どうしてかナギは尋ねたので、アカネは手短に見たことを話す。
　アカネが話し終ると、ナギは納得した表情になり、
「分かったわ……。フウロ！　ちょっと」
「はーい、何でしょう？」
　フロア内にいたフウロをナギは呼び出した。
　ナギはフウロの耳を自らに少し近づけさせて、小さな声で
「１４時４５分のヒワマキ行の便。あんたが運航担当してくれない？」
「えっ!?　でもナギさん今日はジムリーダーや四天王の接客や便の手配などで忙しいか

ら、責任者のあたしたちは片時もここを離れるなって……」
「状況が変わったの。細かい事はいつか話すから、とりあえず今は指示に従って。ここは私と数人でなんとか回すから」
「は……はい」
フウロは先輩の命なので、納得しなさげではあるが承諾した。
そして彼女は運航準備の為、忙しなく外に出ていく。
「？　何してたんや」
「追加の根回しよ。フウロもフライトの名目で同じ便に乗せたの」
ナギはウインクしながら、小さな声でアカネに話す。
「気が利くなぁ。おおきに！　恩にきるわ、ナギはん！」
「これからも敬称つけなさいよ……、多分だけど私の方が年上なんだから」
ナギはそういうとくすりと笑う。
「覚えとくわ！　そんじゃ、さいならー！」
と言って、アカネはエリカたちの元に戻る。

さて一方のレッドは、アカネに聞き耳を立てたが周りの騒音に加え、当人たちも小さな声で話していた。その為、全く聞き取れずに終わる。

フウロを見れたことにまた時めくが、そうしているのも一瞬に終わる。そうこうしているうちに次の便の搭乗手続きが始まり、次から次へと客が入りその中にエリカも入った。

レッドはそれから少し遅れて、満席でも戦ったよしみとかで何とかしてくれるだろうという甘い期待を抱きながらカウンターの前に居たナギに話しかける。

「あ……、あの、ナギさん」

「あらレッドさんじゃない。久々ね」

と、いつも通りの口調でナギは接したのでこれはいけるとレッドは思い、

「あの、次の便乗りたいんですけど……」

「あー、ごめんね。次の便はもう満席なの。悪いけど次に乗ってもらえるかしら?」

ナギは素っ気なく返す。次の便と言ったらおよそ3時間後である。

「そ……そこを何とか!」

レッドは必死の思いで頼み込む。

「無理よ。急いでいるのは皆一緒なんだから……貴方だけ特別扱いはできないの。ごめんなさいね」

と言って、ナギは颯爽と立ち去る。レッドには見せなかったが、ナギはしてやったりといった表情だ。

次の便にはミカンが乗っていたが、ミカンからは話しかけられることすら無く距離を置かれた。ほかのジムリーダーはトウキやスモモ、スズナ等が乗っていたが全くかかわる事は無くレッドは孤独な時間を過ごす。

そして、カントーに帰ってくると、彼はリーグに呼び出された。

―７月２３日　午前１０時　ポケモンリーグ　理事長執務室―

呼び出された場所は理事長の執務室である。

選挙の時、レッドが見た副理事長室よりも一回り大きな光沢のある荘厳な木製の扉。

レッドは目の前にあるドラゴンの頭を模した装飾のドアノブにかかっている鉄の輪をバンバンと二回前に出して叩く。

「どうぞー」

中からはワタルと思しき声がしたので、レッドは中に入る。

内装もまた豪勢で、１０ｍはある天井に、荘重な木机の前には赤い絨毯の上にある大理石の机に、革製のソファ。真っ白な正方形タイルの床。

そして何よりも目を引くのは机の後ろにある壁一面をふんだんに使った大きなワイドガラスである。

ポケモンリーグの最上階にあるので、セキエイ高原が一望千頃（けい）とばかりに見渡せる。

ガラスの上にはブラインドと思しきものがある。ワタルの真後ろには2メートルぐらい幅のあるフローリングされた明るめの木調色の板があり、ワタルの4メートルほど上にはポケモンリーグの紋章であるモンスターボールが描かれている。

レッドが中に入ると、ワタルは机の前に来るようにすすめた。

そしてレッドはワタルの前にまで進む。ワタルは苦い顔をしている。

「今日は一体何の用事ですか?」

レッドが尋ねると、

「単刀直入に言う。君の持つカントーチャンピオンの称号。今日をもって剥奪させてもらう」

ワタルはこの前のような明るい口調ではなく、威厳の籠った真面目な雰囲気が漂う声でそう言った。

「……、どうしてですか?」

「まずは、皆一所懸命にオーキドと戦っていたのに、君だけどこかに行ってしまったという敵前逃亡の責。そしてもう一つは心に決めた人が居ながら、他の女性に浮気していたという不義行為。この二つは罷免事項にぴったりと該当するので、君の称号を奪う事にしたんだよ」

ワタルは感情をなるだけ抑えている様子である。

「浮気だったらグリーンもしているし、風の噂だと参加すらしなかったそうじゃないですか！　別に俺が称号持ってかれる事に異存はありませんが……」

レッドの言葉に、ワタルはすぐさま

「確かに。グリーン君は病気だとか言って休んでいたし、女を囲っているらしいというのは聞いているさ。でもね、彼はカントーで一番最後という砦の役目を果たしている。その砦の役目を他に任せる事が出来ないからクビにする事は難しいんだ。まあ勿論、無罪放免という訳にはいかないから減俸ぐらいにはするつもりだけど……」

そんなの痛くもかゆくもねーだろとレッドは思い

「どうして俺だけこんな目に遭わなきゃいけないんですか！」

と、レッドはまたもあがいてみせる。

「素行に問題のあるマチス君は、なんだかんだ言ってもクチバの治安維持に一役買っている。彼が元締めだからね。カスミ君も浮気したとか色々な噂を聞くけど、ハナダであの子に勝てるトレーナーは居ないし、代々リーダーやっている家柄、その上男女のジムリーダー間のいい橋渡しの役目も果たしてくれているんだ……。エリカ君は平等には接してくれないし、ナツメ君は正直話しづらいし、アンズ君はまだまだ幼いしで」

「何が言いたいんですか」

ワタルの勿体ぶった物言いに、レッドはしびれを切らせそうになりながら尋ねる。

「まだ分からないの？　素行に問題があってもそれを覆うぐらいの働きをすれば僕は別に何も言わないよ。やる事はやってるんだからね。でも君はどうだい？　確かに全国を周った事の功績は素晴らしいけど、所詮周れたのはオーキドの力じゃないか。それにエリカ君が居なければ果たして出来たかどうか……」

「え!?」

　エリカが居なければ無理だったかのようなワタルの口ぶりに、レッドは思わず驚いてしまい、そう返した。

「おっとこれは失言だったかな……。まあこれはナツメ君の推測でもあったんだけど……。君の功績は代替が効くんだよ、一緒に旅したエリカ君は勿論の事、君を下したゴールド君と二人もね」

「ぐっ……！」

「君の今の地位を保障する義理や理由は無い……、そう思ったから今回の決断に至った。そういう事だから、もう帰っていいよ」

　ワタルはそう言うと、もう関わりたくないとでも言いたげなばかりに革のソファをレッドの目に映させた。

「……、分かりました。失礼します」

　そう言って、レッドはそそくさと出て行った。

そしてその身のまま、レッドはある所に向かう。

―7月30日　午後3時　タマムシシティ　ジム前―

レッドはこのよに及んでもエリカとの復縁を望んでいたのだ。

レッドの脳内でエリカの『胡蝶の夢』とは、エリカはつぼみで、俺は蝶で、俺が受粉しなければエリカは花を咲かす事は出来ない。だから、潜在では俺をまだ必要としているんだという理解で人が聞いたら噴飯もののこじつけ。

それを本気で信じてレッドはエリカの元に向かうのだ。

「よし！」

そう言ってレッドはタマムシジムの中にずかずかと入っていく。

―タマムシジム　入口―

いつも通りの百花繚乱ぶりのこのジムだ。

しかしレッドはそんなのも気にせず先に進もうとする。

「あ！　挑戦で……」

駆け寄ってきたジムトレーナーはレッドの姿を見て言葉を失った。

「エリカに会いに来た！　通してくれ」

「おーい！　どうしたの……あ」

元、臨時ジムリーダーを務めていたナツキが続いて来て、彼女もまた言葉を失う。

「……、どうしたんです？」
　レッドは戸惑っている二人にそう尋ねる。
　そうしていると、ナツキは意を決した表情になり
「あの……。大変申し訳ありませんが、エリカさんから通さないように言われて……」
「全く、照れ屋な奴だ……。構わん」
　と言って、またずかずかと進んでいく。
　ナツキは静止を求めたがレッドは一向に取り合おうとしない。
　そうこうしているうちに、レッドは最奥部にたどりつき久々にエリカの美しい姿を拝んだ。
　ジムなので、やはり彼女は和服を着ている。黄土色の下地に紅葉が描かれている彼女の着物姿は美しく、似合っているなあとレッドは思う。
「あら、レッドさん……、どうされたのですか？」
　通さないといっていた割には親しげな口調である。
　二人称に疑問を持ちこそしたが、レッドは構わず
「エリカ！　お前の気持ちを裏切ってしまったことは、本当に悪いと思っているし、本当に反省している。でも、やっぱり俺にはエリカしか……」
　レッドが復縁を求める言葉を言い終わる前にエリカはクスリと笑いながら

「嫌ですわね……。すべては胡蝶の夢と申し上げたではないですか」
「本当か!?　だったら」
　夢だったら全てを流してくれるだろう。そう思ったレッドは続けようとするがすぐにエリカは返す。
「今までの事は夢ですから……。現実のレッドさんには何にも惹かれませんし、心が動いたりも致しませんわ。ですから、お付き合いする事はできません」
　と、エリカは一刀両断とばかりにレッドを切り捨てた。
「そんな！　俺はエリカの事……」
「もう、恋の夢はさめたのです。私も、周りの皆様も起き現在の状況となっているのですわ。レッドさんもいい加減、お目覚めになられて、現実と向き合ったら如何ですか?」
　エリカはにっこりと爽やかな笑顔で言う。
「夢じゃない！　現実なんだ！　だって今でも俺はエリカの事……」
「例え貴方がどれほど私に恋焦がれていようと……、私が今一度夢に向かう事はありません。レッドさんが開くことを望んでいる逢坂（おうさか）の関は二度と開かれることはございませんわ」
　と言ってエリカは、用事を思い出したのかレッドの元から去ろうとする。
　進退窮まったレッドは、後は野となれ山となれとばかりにエリカに背後から抱き着こ

うとする。
　が、抱きつこうとする行動を見せたのをエリカは察したのか、すぐに振り向き、護身用の匕首をレッドに抜き身で差し向ける。
「それ以上近づきましたら……、私も容赦いたしませんわよ」
　エリカは先ほどの緩やかな目線では無く、凍てつくような視線を注ぎながら言う。そこまで言われると、レッドはまだ死にたくないので諦めた。
　レッドが諦めた行動を見せると、エリカは汚いものでも見るかのような目つきで
「下郎が……。ナツキさん。そこに居らっしゃるのでしょう？　はやくこの男をモンジャラのツルでも何でも使って追い出してください」
「は、はい！」
　ナツキはモンジャラを繰り出し、モンジャラに指令してツルをレッドに差し向ける。そしてレッドは訳も分からないまま放り出されるのだった。
　その後、レッドはまた行けば殺されそうなので、行くのを止め、タマムシ市街に出る事にした。出て噴水の辺りまで行くと、グリーンに出くわした。
　―午後4時　タマムシ市街　噴水の前―
「よう」
「げ、グリーン……」

レッドは嫌そうな視線を注ぐ。
「あれ、愛しのエリカさんはどうしたんだい？　レッド君？」
グリーンは下卑た笑いを浮かべながらレッドに尋ねた。
「ぐっ……」
「……、聞いたぞ。別れたんだってな」
「分かってんなら聞くなよな……。てかなんでお前こんな所にいるんだ」
レッドはグリーンにそうこぼした後、尋ねる。
「彼女のプレゼント選びさ。たく16時待ち合わせっつってたのにひでーもんだよな、まだ来ないんだぜ？」
「……。贅沢なお話だ事で」
今や、レッドにとっては遠い世界の話になってしまったので、グリーンにはそう返すしかなかった。
「ケッ……。まあお前がここにいる理由は大方予想つく。どうせエリカさんに『また付き合おう』とかなんとか言って、で、案の定振られたと」
まさにその通りなので、レッドは押し黙る。
「だから言ったろうがよ。ああいう女は夢中になっているうちはベタベタくっついてくれるけれど、冷めたら棺桶の死体みたいに関わんなくなる……ってな」

「グッ……！」
「ポケモンマスターの称号も事実上ゴールドの物になるとかなんとかって話だし。全くつい数か月前は伝説のトレーナーだ、なんだとちやほやされてた癖に落ちれば早いねえレッド君！」
　グリーンはせせら笑いながら言う。あまりに辛いのでレッドは声を上げて
「っせーよ!!」
　と言った。周りにいた待ち合わせの人などは皆、一瞬だけ黙ってしまう。
「……、だが全部はてめーが招いた災いだ。もう二度とやらねーよう気を付けるんだな。ま、俺も何回か泣かされたり泣いたり色々してるから人の事あまりとやかく言えるもんじゃねーけどな」
「……」
「……、そうやって黙って、自ら顧みもせずに人のせいばかりにしてるんじゃ、いつまで経っても、お前は死体のままだがな……。おっと彼女が来たみたいだ。バイビー、死に体レッド君！」
　グリーンは嬉しそうに彼女の元へ向かい、立ち去っていく。
「……う……うわあああああああああああああああああああああ!!」
　レッドの心中に去来する色々な鬱憤、憤怒、懊悩、煩悶、嫉妬……様々な感情が集積

し、遂に発狂してサイクリングロードの方向へと消えていくのだった……。

あれから一年余り。

オーキドはフレア団なる組織の手によって脱獄を果たし、サカキの公判が始まり、アカネとツクシは入籍して挙式し……等と様々な事が起こった。

そして、エリカは相変わらずジムリーダーをやっていた訳だが、そんなある日、カネの塔が遂に落成したという報せがエリカの元に届く。

エリカはすぐさま落成式に出向こうと、お忍びでエンジュシティにへと向かった。

―２０１５年　１１月２２日　午後４時　エンジュシティ―

エリカは落成式のスピーチを聞き、カネの塔の中を巡ったりして一人、堪能する。寺の住職などからも話を聞いて手記にまとめたりもした。

着いたのは正午ごろだったので周った後になると、あたりはもう茜色に染まっていた。

秋の紅葉が舞う頃のエンジュ、しかも夕刻の時ほど憂いを誘う風景はそうない。

エリカがエンジュ市街を眺めて旅愁に浸っていると、横から一人の青年が話しかけてきた。

「エリカさん！」

「わっ……、あら？　確か貴方様は……」
　エリカは思い出そうとするが、すぐに青年が
「ミナキです！　マツバの親友の！　いやー本当お久しぶりですね」
「確か……、一昨年以来でしょうか。お変わりないようで喜ばしい限りですわ。ところで何用でございましょう？」
「いやー、用と言うかなんというか……。マツバの事ですよ」
「ああ……、マツバさんの……。どうかなされたのですか？」
　エリカは既にマツバが千里眼を失った話は聞いている。本当の理由は知らされていない。
「なかなかエリカさんと話す機会なんて無いものだから、ずっと機会を伺っていたんですが……、千里眼の一件、エリカさんはマツバ当人とかから何と聞かされた？」
「ええ、何でもオーキドに脅されて死にたくなかったから……と。何とも気の毒なお話ですわ」
　エリカは途端に暗い顔になる。
　しかしミナキはやっぱりかとでも言いたげな顔をして
「あぁー……あのバカ野郎……」
「はい？」

「いえいえ、エリカさんのことでは無くて……。オーキドに脅されたことは確かにその通りです。ただ、その先が違うんですよ……」

エリカはミナキの発言に目を点にして

「え？　如何な相違があるのですか？」

「マツバは……、ある大切な人を守る為に自らの千里眼を譲ったのです」

「……？　大切な人……ですか」

「オーキドは、千里眼を譲らなければ、その大切な人の隙があるうちにかっさらって、脳を改造して自分好みの女性にして……その人物と結婚すると言ったそうです」

「何と……」

エリカは呆気にとられたいたが、結婚するという言葉がひっかかったのか

「ちょっと待ってください……オーキドが……結婚すると言った？」

とミナキに確認する。

「そう、それがマツバの言う大切な人……という事です」

「それって……もしかして」

「流石はエリカさんだ……。そう、それは他ならぬエリカさん。貴女の事です」

エリカはまたも目を点にする。

「まあ……。しかし、どうして大して話したことのない私などを大切な人だなんて」

エリカの疑問に、ミナキは含み笑いをしながら
「決まってるじゃないですか。マツバは貴女の事を……大いに愛しているからですよ」
「マツバさんが……？」
「最初あった時から一目ぼれだったみたいでね……」
エリカは途端に頬を赤くする。
「し……しかし、どうしてその事を私に内緒に……」
「これはマツバ自身に問いただして聞いたんですが……、エリカさんに、迷惑とかそんな下心で救ったとか思われたくないから……らしいです」
エリカはその言葉で更に赤くなる。
「……、しかし、ミナキさん、そこまで内緒にしたかった事……私にお話ししてよろしかったのですか？」
「……、いくら内緒にしろとか言われても……、これじゃマツバが不憫すぎる。千里眼を失って……、自分の体をボロボロにされて……。これじゃマツバがあんまりです。マツバは今気丈に振る舞ってはいるが、心身ともに耗弱の一途をたどっていることは明らか……だからエリカさん」
ミナキはエリカの目をしっかりと見つめ
「……、マツバの事、宜しく頼みます」

と深々と礼をした。
エリカは少しの時間考えた後、
「……、ミナキさん。マツバさんはどこにおられるのです？」
「あいつは日曜のこの時間、ジムを閉めて、スズねの小道でたそがれて……」
「有難うございますっ！」
と言って、エリカは一目散にスズの塔の関所に向かうのであった。
「ふう……。これで私のやるべきことはやった……。マツバ、幸せにな」
そう言ってミナキはまたスイクン探しの旅に出るのである……。

―午後4時50分　スズねの小道―
「はあっ、はあっ……」
エリカは和服のまま、長い道を走り抜けた。慣れない事をしたためか息は絶え絶えで、秋にも関わらず汗も大いにかいている。
それでも彼女は、紅葉を踏みながらマツバを探す。
10歩ほど歩き、漸くスズの塔を眺めているマツバを見つけ、呼びかける。
「マ、マツバさーん!!」
マツバは突然の声がしたので驚いて振り向く。

「うん？　ってあれ……エリカさん!?　どうしてこんな場所まで……」
　マツバは小走りでエリカのもとに向かう。
「はぁっ……、カネの塔が出来たとお聞きしましたので……」
　エリカは膝を手で押さえながら言う。
「あぁなるほど……、それで比較でスズの塔にも……。エリカさんらしいね。あれ……それじゃあどうして僕を？」
「ち……違いますわ！　マツバさん……全てお聞きしましたわ」
　エリカはようやく息を整えて、直立してマツバの目をしっかりと見る。
「全てって……何の全て？　もしかして平家物語の作者が……」
「ですから違います！　……千里眼の事ですわ」
　そう言うと、エリカは顔の汗をハンカチで拭う。
「……、はあ。全くあれほど口止めしたのに……馬鹿が……」
　マツバはミナキをけなしたが、その表情はそこまで困ってなさげである。
「申し訳ありません……。私のせいで、大事な片目を……」
「いや、実をいうと千里眼はある程度の修行を積んだ者には、失っても1回限りもう一度ハメこむ事はできるんだけれど……、まあ見えない世界と言うのも面白いと思ってね、断ったよ」

「見えない世界も面白い……ですか。マツバさんにしか言えない言葉ですわね」
エリカはクスリと微笑む。
「それに……失ったから今、僕凄く心臓がドキドキしてるんだ……」
そう言われると、エリカは途端に顔を赤くし
「……、貴方の思いの丈、私にぶつけてください……」
「……、エリカさん。初めて会った時から……ずっと好きでした。付き合って……くれるかな?」
マツバは照れながらも最後まで言い切る。そしてエリカはすっきりとした笑顔で、漸く本当の思い人に会えたとばかりに目端に涙をつけながら
「はい!」
と答えた。
「ふう……、これで漸く……安心して眠れる……。エリカさん、大事にするよ」
その後、エリカの方から抱きついて、二人は熱い抱擁を交わす。
秋風が吹き、紅葉が舞う。冬の足音も少しずつ聞こえてきそうな日であった。しかし、この空間だけはただ暖かく、そしてどこか甘酸っぱいものがあった。

そしてそこから１０年。
マツバとエリカは２年間の清廉な交際を経て婚姻に至り、３児をもうける。理事長は交代し、シロナが念願の座に着き、カツラが病に倒れたりと１０年の間にも色々な事が起こった。
―２０２５年　４月２０日　午後２時　コガネシティ　コガネ百貨店　百文堂書店―
ツクシは長年の功績が認められて、２８歳にしてウツギに次ぐ副所長に就任する。
この日は休みだったので本でも買おうかと書店に立ち寄っていた。
普段は研究書や論文などを読みに行くのだが、この日は気分を変えて紀行文を探していた。
ジョウト一周、ホウエン温泉巡り……色々な本があったが、その中で一つ緑の簡素な背表紙な本がある事にツクシは気付く。
題名は『赤い帽子』。何か見覚えがあると思ってその本を手に取って読んでみる。どうやら筆者が全国を周った時に綴った本のようである。
興味を抱いたので、ツクシはその本をカゴに入れる。他にも数冊別ジャンルの本を買って、その日は自宅に帰った。
その後、ツクシは数週間かけて読了する。

―5月13日　午後9時　同市　アカネ宅―

「ふう……やっと読み終わった」

ツクシは卓上で漸く本を読み終える。

子どもたちは、繋がっている前の方の居間でテレビを見ている。

「何よんでたん?」

アカネはぬうと肩の右側から耳元で囁く

「わっ……お前か。驚かさないでよ……」

流石に結婚10周年ともなれば、初々しさは消えて、気安く呼び合っている。

「へへー。ごめんな。で、何よんでたん?」

「前も言っただろう。赤い帽子っていう全国周った人の紀行文だよ」

「あー、そないなこと言うてたなぁ。ごめんごめん」

アカネは茶目っ気たっぷりに謝る。

「はぁ……。でもこの本、不思議なんだよなあ」

「何が?」

「ほら、確か丁度10年前にさ、レッドさんとエリカさんが旅出てたの覚えてるか?」

ツクシはアカネに尋ねる。

「覚えとるよー。だってうちらが結ばれたのって、そん時旅してたエリカのおかげやん

？」

　アカネは顔をほんのり赤くしながら言う。

「はいはい……。で、それも含めてこの赤い帽子っていう本に書いてあるんだよ……。ペンネームは『誰某何某（だれそれなにがし）』とか明らかに本名じゃないし。これってもしかして」

　ツクシはアカネに確信めいた視線を注ぐ。

「レッドはこんなん書けるほど頭良くないしなー。もしかしたらエリカが書いたかもしれへんね」

　アカネは笑いながら言う。

「うーん……気になるな」

「手紙出してみたらどや？」

　アカネは唐突にそんな提案をする。

「手紙？　いいよ面倒くさい……、エリカさんに二回旅している最中に手紙書いたけど、帰ってきた後真っ赤になった添削済みの紙になって帰って来たし……」

「ハハハ……でも、うちから聞くのはなんか嫌なんやよね……。なんだか直接水を差すみたいな感じになるのもあれやし」

「あの二人、本当に幸せそうだもんね……」

　ツクシは遠い目をしながら言う。

「いーやうちらのが仲ええって絶対！」
　アカネは頬を膨らませて反論する。
「くだらない事で闘争心燃やさないでよ……。でも、そうかアカネが嫌だったら、僕から聞くしかないか……」
「とことん突き詰めんなー……。研究者やなホンマ」
「そんなに褒めないでよ。それじゃ書くか……」
　という訳でツクシはエリカに手紙を出すのだった。
　そして書いた机のわきには大量の紙屑がありましたとさ。
　―6月7日　午後6時　エンジュシティ　マツバ邸―
　マツバとエリカはジムを任せ交代交代で週末互いの家に行っている。
　子供の世話はエリカが請け負っており、マツバはエリカの家に行くとき子どもに会うという寸法である。
　さて、この週はエリカがマツバの家に居て夕食を作っている時の事。
「ただいまー」
「貴方、お帰りなさいませ」
　エリカは火を止めて、玄関まで出てきて、マツバを三つ指ついて出迎えた。
「あー段々暑くなってきたな……。そうそう、エリカ、お前宛に手紙来てたぞ。ツクシ君

からだ」
「私に……？　暑中見舞いの時期でもないのにどうして……」
「さあね。ところでエリカ、今日の夕餉は？」
―午後８時　同所―
夕食を食べ終わり、片付けが終わった後、エリカは居間の椅子に座り封を切って、ツクシの手紙を読む。
読み終わると、エリカはクスリと笑って
「ツクシさん……相変わらずの文体ですわね。さてとお返事を書かなくては……」
という訳でエリカは書をしたためるのであった。

―６月１８日　午後４時　ワカバタウン　ウツギ研究所―
「郵便でーす！」
「はいはい、ご苦労様……」
助手の柏木が郵便を受け取る。
中にはツクシ宛の手紙があったのですぐに柏木はツクシに手紙を届ける。
「副所長ー。手紙来てますよ」
「有難う！　すぐに読むからこちらに渡して」

という訳でツクシはカイロスの解剖データの集積作業をいったん止め、封を切って手紙を読む。

「こ……これは……」

読み終わるとツクシの手には汗が握られていた……。

―２０１４年　８月３日　午後２時　シロガネ山　山頂―

シロガネ山。

ポケモントレーナーの極みに達した者にのみ入山が許されるジョウトとカントーを分かつ大山。

最早、全ての物を失い彼の居所はここにしか残っていなかった。

記憶を呼び起こしながら歩みを進んでいたらいつの間にか頂上についていた。

到着すると、彼はカバンからあるものを取り出す。

彼女のしょっていたバッグである。

彼は彼女の所持品を眺めて、友人の言葉、上司の言葉、友人の友人の言葉……色々な警告の言葉を改めて反芻させる。

そして漸く、彼は全て、自分が悪かったんだと猛省し、自分の愚かさを責める。

山頂にかかる烈日は彼などおかまいなしに背を照らし続け、風は無視するかのように

彼の背を吹き抜ける。
やるせない思いにかられながら、山頂で一人たたずんでいると、彼の目には影が映り、人の気配がする。
彼がそれに感づいて立ち上がり、振り返るとそこには――――

―第六十六話　赤い帽子　終―
―伝説のトレーナーと才色兼備のジムリーダーが行く全国周遊譚　完―

設定・ＩＦルート集・過去編など

【ネタバレ注意】設定集（登場人物編）

【主人公・ヒロイン】

レッド
年齢：１５
身長：１７５㎝
趣味：ポケモン育成
特技：スポーツ全般
紹介
本作の（一応）主人公。
マサラタウン出身で、２００９年にマサラトレーナーズスクールを出た後すぐさまカントー一周の旅に出る。その後、幼馴染にして、チャンピオンに上りつめたグリーンを下してカントーの頂点に輝く。現在のパーティはその頃に確定した。

その道中のシオンタウンでロケット団を倒した後、タマムシジムリーダーのエリカに出会って、彼はその清楚な性格と妖艶な容姿に一目ぼれをする。

チャンピオンになった後は、エリカに告白して、自らの更なる鍛錬のためにシロガネ山で三年間修業を積む。

三年後、レッドはエリカからの告白の返事を受け、事実上の夫婦に。

そしてそれとほぼ同時に、ワタルから全国を旅するように命が下り、エリカと共に色々な事を経て順調にジムを突破しながら進んでいく。

戦争の時には、エリカをオーキドの魔の手から体を張って守るという男気ある行動も。

しかしイッシュ地方に旅立つ際、フウロにいわゆる一目ぼれをしてしまい、エリカへの愛情が一時的に冷め、フウロへの恋情が強くなり、遂には一夜を共にしてしまう程に。しかし同衾したのちにはすぐに捨ててしまうという最悪の行動をとる。　つまり、彼は所詮、体しか見ていなかったという訳である。

この行動は、オーキドに逐一監視されており、そうでなくてもピカチュウとヒトモシに行為の現場を覗き見されていた。

そのせいでばれそうになるが、ピカチュウやカメックス等の古参がレッドに味方したため、エリカには言われずに終わる。

結末編ではゴールドに無様な敗北を喫し、その上オーキドに全てをエリカの前でばらされ、エリカからは縁を切られ、オーキドが意図的にヒウンの本拠に残した証拠によってアカネやナツメからは更に嫌われ、エリカに恋心を抱いていた男にまで嫌われ、レッドは孤立の憂き目に。

このよに及んでもエリカに復縁を求めたりと失態を重ね、遂にはワタルよりカントーチャンピオンの称号剥奪を宣告されてレッドは名誉と愛を失い、そこに至って漸く自省した。

尚、本来そこまでクズな男ではない事はジョウト編を見れば分かる事。しかし、やはりその頃から潜在的に美しい女性を見ると情欲が湧き出る等の不埒な思考があった。そして、その遠因には全国に旅立つ前、よく一緒に遊んでいたグリーンのせいだという話も……？

何はともあれ、シロガネ山に再び入山した後の彼の消息は分からずじまいである。

レッドと言うのも便宜的な名前で本名は違うという説も。

所有ポケモン

スタメンのパーティ（最終話時点）カッコ内は捕獲時の形態。

ピカチュウ　♂　レベル９８　トキワの森で捕獲。

フシギバナ　♂　レベル９５　一番最初に選んだ相棒。（フシギダネ）

カメックス　♂　レベル９５　図鑑５０匹捕獲のご褒美。（ゼニガメ）
リザードン　♂　レベル９５　図鑑１００匹捕獲のご褒美。（ヒトカゲ）
カビゴン　♂　レベル９３　タマムシシティをふさいでいた時に捕獲。
ラプラス　♀　レベル９３　シルフカンパニー占拠時に社員から譲渡。
準スタメン
カイリキー　♂　レベル８８　道路で捕獲。（ワンリキー）
レアコイル　？　レベル８８　無人発電所で捕獲。（コイル）
ピジョット　♀　レベル８５　１番道路で捕獲。（ポッポ）
バクフーン　♂　レベル８８　ウツギ博士より譲渡。（ヒノアラシ）
ラグラージ　♂　レベル８５　オダマキ博士より譲渡。（ミズゴロウ）
エンペルト　♀　レベル８２　ナナカマド博士より譲渡。（ポッチャマ）
エンブオー　♀　レベル８２　アララギ博士より譲渡。（ポカブ）

その他
イーブイ　♀　レベル４４　ヨスガシティでミズキより譲渡。
ラッタ　♂　レベル５４　１番道路で捕獲。かつてのスタメン。（コラッタ）
ガーディ　♂　レベル３３　つながりの洞窟で捕獲。

ロコン　♀　レベル３３　同上
ヒトモシ　♀　レベル３８　タワーオブヘブンで捕獲。
等など……

エリカ
年齢：２０
身長：１５５㎝
趣味：無数（中心は読書と華道）
特技：たいていの質問には、すぐに詳細な回答を以て応答できる。料理・洗濯・生花・茶の湯（以下略
紹介
本作のヒロイン。タマムシシティ六代目ジムリーダー。
千利休の傍系の子孫として生まれる。そんな出自のせいか、幼いころから徹底的な英才教育を受け、教養・礼節を身につける。
父親はタマムシ大学の教授、母もまたジムリーダーで、先祖の遺産もあって裕福な暮らしをして幼少期を過ごす。
勉学には天性の利発さを発揮して、僅か１２歳でタマムシ大学生物学部植物学科に入

学し、１６歳で歴代最優秀の成績で卒業するという神業というべき伝説を残す。それを聞きつけた世界最高峰の大学、ヒウン大学より入学金・授業料無償での留学を許されるという破格の待遇で呼ばれていたが「遠いのは嫌い」という理由で一蹴した。

英才教育の影響か、はたまた天の賜物か。美しい容貌とその上品さで世の男たちを虜にした。理事長のワタルを始め、タケシやマチス等エリカを好いている人間は決して少なくない。

１４歳の頃、母親の急逝によって急きょタマムシジムリーダーに。最初の二年間は祖母のカルミアの手ほどきを受けて何とか切り盛りをする。

彼女は１０歳の頃に父親も失っている。幼少のころから病弱な母親に代わりエリカを監督してきた祖母のカルミア（彼女によって、今のエリカがいるといっても決して過言ではない）も大学の卒業式の翌日に亡くなり、うら若き時に天涯孤独という哀しい身の上でもある。

そんな身の上な故に彼女は自らの伴侶を「強く、私を護ってくれる人」と渇望した。それに丁度合致していたのが、猛烈な勢いで各地のジムを突破し、チャンピオンにまで登りつめたレッドだったのだろう。

一度告白を受けたときは修行の邪魔をしてはいけないと思ったのか敢えて何の返事もしなかった。しかし三年後、ワタルより『ポケモンマスター計画』の存在を告げられ、

その嚆矢としてレッドとゴールドが上げられることを知らされると、エリカはレッドに知らせる役を自ら買って出て、遂にレッドの告白を三年越しで受ける事にしたのだ。

その後、エリカはレッドと共に全国を旅する。ジョウト地方での戦争時のレッドの行動にエリカは更に惚れ込んだりして、レッドに夢中になっていた。しかし、イッシュ地方でオーキドによってすべてをばらされると、エリカはレッドを大いに軽蔑し、縁を切る。

それから、彼女は自らの片目と引き換えにエリカを護ったマツバに惚れ、告白を受け入れて2年間の清廉なる交際を経て結婚し、三児をもうけて幸せに暮らす。

全国を旅したのちは、その経験を活かしてジムリーダーとしても名声を高め、遂に全国十傑の一人に入るほどの強さになる。

彼女の副業は華道の師範とフリーライターであり、ライターに関しては(旅した後)専門誌に加えて新聞の論説や経済誌の記事を手掛けたりと幅広い分野に手を出して的を射た論評で名声を博す。本業とも言うべき華道の師範としても池坊と小原といった既存のやり方をうまく融合させた玉虫という新たな流派を作りあげ、華道に名を残した。

尚、『赤い帽子』という全国旅行記の作者ではないかと疑われているが真偽は不明である。

武道に関しては免許皆伝等と言うが、やっていたのはもう七、八年も前の話の為、全

国に旅した時点では素人に毛が生えたレベルまで落ちている。その為、エリカの身体能力は大したことは無い。ただ、体を動かすことは嫌いではなかった為体力はある方である。

貴族的な気質で、自分の興味のない人物や無教養な人間、粗暴な人間は最低限にしか接しない。その上、心の中では大いに見下している。勿論、レッドは例外である。何故ならば恋は盲目だからである。

最終話の「逢坂の関が開かれることは決してありません」は清少納言の「夜をこめて鳥にそらねは　はかるとも　よに逢坂の　関は許さじ（朝になって帰ってきた貴方が、鳥の鳴きまねをして、函谷関の故事［鶏鳴狗盗の故事］を真似てごまかそうとしても、私［逢坂の関］が騙されることは決してありませんよ）」という古歌を引用したもの。最後の最後まで彼女はレッドに対しても教養人である。

読書家であり、最近（２０２５年）の愛読書は『三国志』（陳寿）『史記』（司馬遷）『ニコマコス倫理学』（アリストテレス）『李陵』（中島敦）の写本だという。（要するに原典のままの言語）タマムシ大からは何度も教授のお誘いが来ているがジムに専念したいという理由で全て断っている。

本編内での彼女はその時点でも確かに優秀で、教養や立ち居振る舞いだけならば世界でも屈指なものがあっただろう。しかし、この時の彼女は２０歳という若さと裕福な身

の上な故に下賤なものや俗なものに対する経験が足りていなかった。だからこそ彼女はレッドに表面だけを見て惚れ、「痘痕も笑窪」の理論で欠点を大きく見ようとせず決定的な破綻に至るまで引きずることになった。今回の旅を通じてそのような未熟な部分が補われ、彼女自身の成長に寄与していることは追記しておかなければならないだろう。エリカ当人はといえば、葬り去りたい記憶なのか破局後よりレッド当人に会った時以外は一切語ろうとしなかった為、本心は謎であるが……。

また、彼女はバイである。元々女だらけの世界で育ったことも大いに影響しており、ジムトレーナーと関係をもったことは少なくない（初めては15歳の頃に先輩トレーナーから仕組まれたらしい）。最たる例はナツメとの関係であり、17歳から19歳にかけての二年間交際していた。しかし、レッドに興味を持ってからは段々と同衾する回数が減り、旅立つ頃には恋人としての関係はほぼ解消されている。とはいえ男性に免疫がないという訳ではない。中学校から大学にかけて何度も告白を受けているのが大きいが……。

また、彼女は初代ジムリーダーであり、五世祖父のドウダンの設立した会社（種苗・園芸を主とする会社。世界のおよそ四分の一ほどのシェアを占めている）の株式を半分保有（二代前から実体の経営権は社員に任せている）しておりその配当と先祖代々の金融資産の運用益だけで年間30～40億円ほどの所得があるとみられている。そして、彼

女の総資産は千億近くと推測されており、かつて政府の公表していた長者番付には常に載っていた。内国のリーグ内ではデボンコーポレーションの御曹司にあたるダイゴに次ぐ金持ち（ダイゴの一族はこの数十倍程度の財産があると見られている）。

２０８５年。彼女は９２歳という大往生を遂げて亡くなる。彼女自身は葬儀を望まず直葬に付され、財産はこの時点までに多くを子孫に生前贈与していた為全て寄付した。後に行われたお別れ会では各界から１０００人を超える人々が参列し、一人の巨星の死を悼んだ。

所持ポケモン

ウツボット　♀　レベル８７
ラフレシア　♀　レベル８７
キレイハナ　♀　レベル８７
モジャンボ　♀　レベル８５
ユキノオー　♀　レベル８５
キノガッサ　♀　レベル８５
ルンパッパ　♀　レベル８５
ナットレイ　♀　レベル８０

ロトム　？　レベル７５
グレイシア　♀　レベル７５
等など

【ライバル】

グリーン
年齢：１５
趣味：女を落とす事
特技：ハーレムを作り上げる事
紹介
本作のレッド第一のライバル。
レッドと同じ時期に旅に出て、常に先行するが最終的にはレッドに敗れる。
そのため、一時的に荒れて放蕩な生活を送るが、レッドがシロガネ山に籠ったのを見たグリーンは何かを感じて再び修行に打ち込む。
そして、修行の成果が認められて、２０１１年（１４歳）にトキワジムリーダーに就

任する。レッドが落日した今、カントーで彼に勝てるトレーナーはまずいない。
その為、ワタルもグリーンの処遇に毎度毎度手を焼いている模様である。
明朗快活で、口が達者なので、異性に異常なまでに人気がある。本人いわく１８股しているらしいが、それ以上と言う噂も……。それに加え、知識や教養は欠けるが、オーキドの孫なので頭もかなりキレる。
しかし、そこまで女を侍らせているのはエリカが自らの物にならなかったあてつけでやっているのだ。「エリカは俺のあった中で最高の女」という発言からもそれは読み取れる。
その為、エリカとくっついた悪友のレッドを恋敵として憎み、レッドがトキワにやってくるまで死ぬ気で修行したが、結局タイマンで戦って二度目の敗北を喫する。
イッシュ騒乱の際、仮病を使って休み、嘘だと発覚して減俸処分を受ける。巷ではオーキドに協力しているから敢えていかなかったという風説も流れているが、グリーンはどこ吹く風で受け流している。
その後、レッドが無様な状態でタマムシに居るところを彼は容赦なく攻撃し、止めを刺すことに成功。グリーンはこの時大いに憂さが晴れたという。

ゴールド

年齢：１２
趣味：ポケモンを育てる事
特技：ポケモンバトル
紹介
本作の準主人公（？）。つーか明らかにレッドよりこいつの方が主人公向いて（ｒｙ
それは置いておいて、レッドに憧れてポケモントレーナーを志す。
２０１２年の４月ごろから旅を始めておよそ９か月でシロガネ山まで行くという類稀なる才能を見せる。その上再起を試みるロケット団を一度ならず二度潰すという功績をも残している。
旅している最中でカスミに出会い、恋仲になるが浮気の発覚により破局。
ここから身を入れ直して修行を始めるが、チョウジタウンでストー……ライバルのシルバーに敗れる。そこから更に精進を重ねていつの間にやら本気のヤナギを倒すほどのトレーナーに。
イッシュに行ってからも快進撃は続き、夫婦でも一度は敗れたシャガに一回で勝利する。しかし、やはりこの時点まではどうしてもゴールドはレッドの後塵を拝しているに過ぎないとの評価が多勢を占めていた。
その評価もＰＷＴでレッドを叩きのめして、一気に様変わりする。

ゴールドは公式にはポケモンマスターには認定されなかった（レッドが居ない扱いになった上に、ワタルがそもそもポケモンマスター計画を断念したから）が、全国最強の名を冠するようになった。とはいえやはり格ではヤナギとシャガに劣る。
２０１５年１月からワタルの命でオーキド討伐の名目でカロスに派遣されたらしい。

シルバー
年齢：１２
趣味：そんなものはない
特技：同上
紹介
ゴールドの（自称）ライバル。
ロケット団ボスのサカキの息子とされる。
ロケット団一度目の解散後、シルバーは幼年ながらあちこちを放浪する生活を送る。
１１歳の頃にワカバタウンのウツギ研究所からワニノコを強奪する。その身でゴールドと戦うが敗れ、それからゴールドをライバルと見なして戦うように。
ゴールドには負け続けたが、チョウジタウンの一戦で漸く勝てるようになり、その後修行したゴールドと何回も戦い、五分五分の戦績を残す。

ゴールドの影に隠れてはいるが、彼もまた全国最強のトレーナーといえるかもしれない。

レッドとは龍の穴で初めて会い、その時はコテンパンにやられて逃散する。

お月見山で戦ったときは善戦したが敗れ、セキエイ高原ではゴールドとタッグを組んだが敗れる。

その為、ゴールドよりもレッドを仮想敵と見なして研鑽し、シロガネ山（第六十六話の終末とは無関係）で決戦を行って勝利する。

現在（２０１５年）はゴールドに飽くことなく追尾しているらしい……。

【悪役】

オーキド

年齢：８０

趣味：（色々な）実験

特技：「森羅万象は我が手によって作り出す事が出来る」

紹介

オーキドポケモン研究所元所長。ロケット団顧問役。別名「老獪な梟雄」

世界で最も高名なポケモン博士として名声を誇るが、エンジュ騒乱の首謀者だったり、ロケット団をサカキと共に裏から操る人物だったりと本作最大の悪役。

自分以外の人間は全て手駒だと考えており、欲望の達成のためにはどんな悪事を犯そうと厭う素振りすらみせない。マツバの例や集団催眠事件のくだりをみればそれは明らかである。

レッドの恩師でもあるが、あのころはあくまで善人を演じる事によって資金をため、雌伏の時を過ごしていたに過ぎなかったという訳である。

そして、ジョウト編ではクローンを出して、レッドに殺させることによって『オーキドは死んだ』という話を作り上げ、世界中の人を欺かせることに成功。

その上、ポケモン図鑑（全国版）に極小の監視カメラを仕込んで、レッドとエリカの行動を監視、それによってエリカの純潔を守る事や、ジムリーダーや四天王、チャンピオンのポケモンデータの解析に成功と流石はタマムシ大第一の成績を誇っただけの頭脳はある。

さて、オーキドがここまで狂ってしまった原因は６０年ほど前にある。

エリカの祖母である当時のタマムシジムリーダーのカルミアに、オーキドとヤナギは片思いしていた。カルミアはヤナギを選び、数日間一緒にいた。しかし、この当時のヤナギはただの無職で、身分の差を考えよと（カルミアの）父親によってヤナギとカルミ

アは生木を裂くような別れを遂げる。

その後、タマムシ大内の研究所に残って名声を高めつつあったオーキドに目をつけたカルミアの父親は半ば政略結婚のようにカルミアと結婚させる。それからまもなくカルミアは妊娠し、第一子を出産する。これがエリカの母親だが、父親はオーキドなのかヤナギなのかは定かでない。

その後だが、ヤナギはポケモンリーグをカツラの両名で創設。それで名声を大いに高めてしまったため、ヤナギの事が忘れられないカルミアは思いを募らせる。

オーキドはカルミアの事を大層大事にはしていたが、仮面夫婦状態であったことは否めない。

そんな最中、カルミアとオーキドはスリバチ山に旅行したが、カルミアが山から滑り落ちて一命は取り留めたが頭を強打したため、植物状態に。

一緒にいたオーキドに、直接の責めは無かったが、カルミアの両親や親戚とは不和になる。居づらくなったオーキドはカルミアと離婚して、タマムシ大も休職して数年間身を隠す。

オーキドは様々な思いを募らせ、身を隠したころから段々と狂気じみていく事になり、現在にへと至るのだ。

オーキドの凶行の理由は、カルミアの心を奪ったヤナギとその手下であるポケモン

リーグへの怨嗟。その孫（と思い込んでいる）のエリカをも奪ったレッドへの嫉妬。それと、カルミアが事故になったさい誰も自らを守ってくれなかった世間への逆恨みである。

サカキ
年齢：３９
趣味：釣り・金儲けｅｔｃ……
特技：人を統率する事
紹介
ロケット団ボス。シルバーの父親。
母親が創設したロケット団を受け継ぎ、天性の統率力を用いて、組織の最盛期を現出した。
しかし、２０１０年にタマムシを本拠にしてポケモンの奴隷化を狙うがレッドによって失敗。
シルフカンパニーも狙うが、やはり失敗する。
その後三年間、シロガネ山やトージョウの滝等の洞窟に身を隠し、隠遁生活を送る。
アポロの呼びかけにも応じようとしたがセレビィの時渡りでやって来たゴールドに阻

止される。その直後の２０１２年の秋ごろにオーキドの復活後のポスト確保との交換条件で支援の提案を受けたため、それを受諾し、陰ながらの復活を果たす。

その後はかつての団員や幹部を呼び戻したりして着々と力をつけ、オーキドの助力もあってエンジュ大学を一時の本拠とする事に成功。

宣戦布告の数か月前に万一の事を考えて、外国であるイッシュ地方のヒウンシティにも本拠を置くようになる。

集団催眠事件で得たポケモンを使って、またも裏社会に君臨して巨額の資金を手にする。エンジュでの蜂起が失敗に終わった後、その資金とオーキドやアクロマの財産を用いてイッシュ地方の悪の組織・プラズマ団とも共謀する。

オーキドとアクロマが両組織の緩衝材的な役割を果たし、連携を強めていく。

その後は自らの人心掌握術を発揮して、プラズマ団員の寝返り工作を画策。その交渉材料としてオーキドの強大化されたポケモンを用いたり、時には賄賂をも用いる。ゲーチスの事は思想等全て含んで手駒（走狗）以外の何物ともおもっていなかった。

こうしてみると冷酷な男にも見えるが、完全に自らの手の内に入った人物に関しては大事に扱い、アポロ等の有能な者はきちんと取り立てている。

『何事も一本気にならなければ、欲しいものは手に入らない』という事を信条に一生を駆け抜けてきたため、その魅力に惹かれて入団する人物は後を絶たなかったという。因

みに趣味は釣りだが、大して上手ではない。
が、一本気に生きてきた男の末路は無残なものであった。
プラズマ団を裏切り、ロケット団の復活を宣言した二日後にレッドとゴールド、ポケモンリーグの介入が入る。その対応に追われているうちに背後よりオーキドが裏切って、勝負を仕掛けられ、惨敗を喫する。
その後、サカキ含め全団員は一網打尽に逮捕。戦後初めて内乱罪が適用され、首謀者と看做されたサカキは一審で死刑判決が下る。上告（内乱罪は二審制であり、高裁からはじまるため）はしなかった為、２０１７年５月１１日、４３年の命を終えた。最期の言葉は『悔いは無し。憂いも無し。時も無し』。何とも爽やかそうな心持で処刑に臨んでいたという。

アポロ
年齢：２８
趣味：ポケモンを酷使する事。
特技：サカキを崇拝する事。
紹介
ロケット団最高幹部。

ロケット団の頭脳といって差し支えない程の利発さを持ち、サカキの為ならどんな非道も厭わない手強い人物である。

裕福な家庭に生まれ育ち、エリートとしての教育を受けてきたが、エンジュ大学一回生の頃に入った某サークルの影響でアブノーマルな方向に走ってしまう。その為、大学を中退し、非行に走ってロケット団に入団する。

ロケット団の中では新参の部類に入る男だったが、サカキに能吏としての才能を買われて幹部にまでのし上がる。

エリートとして、マニュアル的なものしか教わってこなかった彼にとって、一本気を貫きほしいままにカントーを暴れ回るサカキは魅力的な人物であった。その為、サカキを誰よりも崇拝する男と自認しており、一日一回はサカキが居ると思われる部屋や場所に向かって三回最敬礼したという。

ロケット団がレッドによって壊滅された後は、三年間雌伏の時を過ごし、残党をまとめ上げて再興を試みるがゴールドの前に散る。

希望を絶たれて幹部共々と逃避行を続けている最中、サカキがオーキドの支援を受けてロケット団を秘密裏に復活させたとの噂を聞いてすぐに残った団員と共にエンジュへと向かい、サカキの下で再び仕える。

宣戦布告の後には西部戦線の総司令官を担当し、他が敗北する中自らの率いたポケモ

ンの軍勢は勝利を収める。３８番、３９番道路を制圧して、アサギに迫る勢いであった。しかし東部戦線が崩壊寸前であった事を見たアポロは自ら交渉役となってワタルと折衝を図った。人質の解放を行いつつ時間稼ぎを行って、マツバを殺害してエンジュに誘い込むという作戦を打ち立てて見事成功した。そして、総攻撃ではアサギ侵攻を敢行したが、途中でサカキが劣勢であるとの報告を聞いて、引き際を悟ったアポロは軍勢を引いてサカキと行動を共にする。

イッシュでは、プラズマ団のスパイという裏の目的を持ちつつ、サカキの命によって幹部として潜入する。サカキの寝返り工作の手伝いもしたが、この男はそれよりも立場を利用してプラズマフリゲード内の構造や仕組みを探り、逐次それをサカキに報告した。因みにゲーチスはアポロを信頼しきっており、疑う事すらしなかった。（というよりも、自らの野望の達成のためにそこまで気が回らなかったといったほうが適当か）

プラズマ団が行動を起こしたのち、ゲーチスからの最後の命となった遺伝子の鎖を奪ったのち、サカキの命に従い、ゲーチスを裏切りプラズマ団の乗っ取りに成功する。

が、乗り込んできたレッドとエリカに敗れ、名目上の上司であるアクロマより引くように命ぜられて引いた。

その後、サカキやほかの幹部たちと一緒に逮捕され、謀議参与者として最高刑である無期禁錮の刑が下る。（その他三人の幹部も全て同一の刑に処せられた）

サカキ処刑の報せを聞き、生きる希望を失った彼は自ら息を止めて、３２年の命を絶った。（因みに幹部連中で自殺したのはアポロのみである。他の幹部は獄死した）

ランス

年齢：２３

趣味：不明

特技：不明

紹介

ロケット団幹部。

カントー地方に生まれる。小中学校の頃は神童と謳われるほど頭が良かったものの高校に入ってから成績が伸び悩む。そして、タマムシ大学に落ちた事をきっかけに非行に走りはじめ、ロケット団に２００９年に入った。

２００９年といえばレッドによって一度目の壊滅をさせられる直前であるが、主にシルフカンパニー関連の作戦で功を上げ成功寸前にまで持ち込んだ功労者である。その後、二度目の復活の際ヤドンのしっぽ作戦で責任者を任せられた際に幹部に任ぜられた。

アポロと似たようなタイプに見えるがその実は冷酷で歯に衣を着せぬ物言いが特徴である。その言動から男子団員たちや幹部からはあまり好かれていないが、サカキやア

ポロといった最上層部からの贔屓や自らの能力で表だって反論するものをなくしている。

サカキについては四幹部の中で一番冷めた見方をしており、あくまでロケット団そのものを自らのねぐらとしか見ておらず忠誠は最も薄い。しかし、自らの任務には絶対の責任を持っており何があっても遂行しようとする真面目さは持っている。幹部の中では一番の若手の上に顔が良い為女子団員からの人気はかなりある。

本編においてはエンジュ騒乱で南方攻略軍司令官を務め、一時はマチスを相手に敗北寸前にまで追いつめられるが粘り強さと作戦によって押し返しエンジュを守り切ってみせた。イッシュ地方に移ってからは夫婦がイッシュに移る辺りまでは内国における情報収集や様々な工作の総責任者をしていたが、その後はアポロと同様プラズマ団の幹部として潜入し内部情報の収集に努めた。この通り幹部の中でも諜報を主務としている。

イッシュ騒乱後は先述の通り逮捕され、内乱の謀議参与者として無期禁錮の刑に処せられた。２０４３年に５３歳で獄死する。

ラムダ

年齢：４６

趣味：変装

特技：変装

紹介

ロケット団幹部。

カントー地方に生まれる。小学校の頃から相当な悪ガキであり、高校卒業後に得意の変装を用いた集団強盗事件を起こして家を勘当される。

しかし、その才能を買ったサカキの母親によって釈放後の２３歳（１９９０年）の頃にロケット団に入った。それからは天性の変装技術を用いて様々な作戦を成功させた。その功績によって１９９８年にサカキがボスに就いたと同時に幹部に昇進する。

アポロやランスなどの硬派な幹部が多いロケット団の中で唯一人当たりのよい人物であった為団員たちの人望は幹部の中では一番高い。

ロケット団一度目の壊滅後はアポロなどと同じく逃避行を続け、二度目の復活の際にはアポロに従って作戦に従事した。アポロほどではないにしろラムダもサカキを深く慕っており、サカキの生き様には心酔しきっていた。

しかしそれだけに三度目の復活の際におけるサカキの変わり様は彼にとって大きなショックであった。しかしそれでもロケット団の幹部として活動し、最後まで居続けた。

本編においてはエンジュ騒乱の際に東方攻略軍の司令官を務めるがヤナギやワタル

の策略にハマってしまい惨敗を喫する。その責任でラムダは拷問を受けるがやはり古参の為かサカキはそれ以上の処分は下さなかった。因みにオーキドの事はサカキを変えてしまった張本人と見做している為嫌っている。
イッシュ騒乱後は逮捕され、謀議参与者として無期禁錮に処せられる。２０３４年に６７歳で獄死。

アクロマ
年齢：??（３０代と予測されている）
趣味：考える事
特技：円周率を１００万ケタ暗誦する事が出来る（……らしい）
紹介
プラズマ団ボス、ロケット団顧問。
研究者の家庭に生まれ育つ。幼少の頃より、ひたすら何かを考える癖があり、両親は質問責めにされて日々参っていたという。
前代未聞の成績を収め、何かを発表すれば必ず最高の賞を受賞し、『アインシュタインの再来か』『現代のガウス』などと学会では囁かれた。
ヒウン大学では当然のように最優秀の成績を修める。アララギ等、彼を担当した教授

は彼の玄人はだしな知識量と、思考力の前には完全にお手上げだったという。

彼は常々、「ポケモンはどうやったら最大限の力を引き出せるのか」という疑問を持ち続け、その答えを求めて大学卒業後は全国を飛び回った。

そして全国を周っている最中に２０１３年、オーキドと出会いやっと自らと釣り合う程の教授に出会えたと大喜びし、彼の計画にも賛同した。旅行のスケジュールの都合があったため、エンジュ騒乱の際はそれほど関われなかったが、集団催眠機の設計図を描いたのは他ならぬ彼である。

その後、レッドとエリカにも出会ったが、エリカ程の知識人を前にしてもアクロマは出来る凡人程度にしか思っていなかったらしい。レッドに関しては言わずもがな。ただポケモンの実力は大いに認めていた（ポケモン図鑑の監視カメラについては直接接触する可能性があるとし、知らされていなかった）。

イッシュ地方に戻った後は、本格的にオーキドの計画に介入しその為に（ゲーチスを欺く目的で）ゲーチスにも取り入れられて表向きのボスを務める。プラズマ団の計画にも一応の協力はした。しかし、マツバの千里眼やナツメの超能力を阻害する装置を作ったり、白死の技を作る際にも協力したりと、オーキドに対する恭順の方が明らかに高かった。

彼はオーキドの事を「唯一無二の同志」として慕い、たまに一昼夜通して論争する事

もあったという。
ロケット団が裏切った後には、レッドエリカと対峙し、敗北を喫する。
その後、身の危険を感じた彼は他の幹部が捕まっていく中、一人逃げ延びて、現在はイッシュ地方の何処かで隔世の生活を送っている。

【リーグ関係者】
ワタル
年齢：２６
趣味：ドラゴンポケモンの育成
特技：組織の統括、指揮
紹介
全国ポケモンリーグ理事長兼セキエイリーグチャンピオン。
内国のトレーナーたちの（立場的には）頂点に立つ人物である。２１歳という異例の若さで理事長となり、トレーナーとしてもシャガに次ぐ若きドラゴン使いとして高名。しかしここ数年はシャガの愛弟子であるアイリスが飛ぶ鳥を落とす勢いの成長を見せている為立場が危うくなり始めている模様。立場的にも同じ理事長になっている為、名実ともにライバルといえる存在となった。

ドラゴン使いの聖地と呼ばれるフスベシティにやはりドラゴン使いの息子として生まれる。物心がついた頃から当時のフスベジムリーダーだったゲンジの師事の下ドラゴン使いとしての教育を受け、9歳の頃に一ヶ月でレベル1のミニリュウをカイリューに進化させるなどの才能を発揮した。中学校を卒業し義務教育を終えた翌年のこと。同輩にして最大のライバルであったイブキと共にゲンジより呼び出され自身の故郷であるホウエンリーグより四天王にならないかとの打診を受けた為、リーダーの職を優秀である二人のどちらかに譲るという話を受けた。

それから1週間後、フスベシティの広場にて衆人の見守る中イブキとリーダーの座をめぐってポケモンバトルをし、大いに苦戦した後イブキを制した。こうしてワタルは16歳でフスベシティジムリーダーの座を勝ち取った。同期に犬猿の仲であるマチスがいる。この頃ジムリーダーで2014年ごろまでカントー、ジョウトの中で残っているものとしてはキョウ、カツラ、ヤナギ、シジマがいる。

その後、カントー、ジョウトのジムリーダーとしてはヤナギに次ぐ実力を誇っていた為わずか二年でセキエイの四天王に上り詰め、その翌年にチャンピオンになる。御年19歳。当時にしては最年少のチャンピオンであった。

二年後には理事長選挙に立候補し、対立候補のダイゴを破って晴れて理事長となった。このようにエリート街道まっしぐらのワタルであったが、理事長になってから二年

後にグリーンとレッドに敗れる。

一時的とはいえ理事長が四天王になるという異常事態が発生したが、レッドがチャンピオンになるのを放棄してそのままシロガネ山に行ったためワタルは事なきを得た。

それから三年後、ポケモンリーグ累年の課題であったイッシュリーグ、引いてはイッシュ地方との関係向上のためにゴールドとレッドを全国に旅させるポケモンマスター計画を発案。計画そのものは雲散霧消したものの、ジムリーダー間では少なからずパイプが出来た為、それなりの成果を得ることに成功した。

ポケモンマスター計画実行中に理事長選挙でシロナと争ったが一票差でどうにかシロナを制し、もう五年理事長を続けることが出来た。

理事長は11年以上連続して同一人物が就くことがリーグ法上では許されていない為、2018年にワタルは理事長職を引退。その後はリーグチャンピオンとして責務を全うすることになった。間接的とはいえ、自らの計画が二度の騒乱を起こす遠因となってしまった事に関し責任を感じており、二度と理事長に立候補するつもりはない様子である。

本編では上でも述べたとおり、火付け役として登場。エンジュ騒乱に置いては総司令官を務め、持ち前の豪胆さや粘り強さを発揮して人質の解放や作戦成功に向けて大いに尽力した。何よりもリーグの事を第一に考え、その為なら自分の身も投げ出さんという

ばかりの覚悟もみせた。

選挙編では、シロナと対峙し、自分なりの正しさを力説した上で勝利を収めた。

レッドとはカントー地方での一番最後の敵として刃を交わし、互いに一体になるまで死闘を続け惜敗した。エリカを好いておりそれとなくアピールはしているが彼女当人にはお得意の社交辞令で済まされている。今どきの青年にしては珍しく結婚するまで貞操は守り抜く所信なのか、未だに童貞である。

性格は基本的には温和で、優しいところもあるが、悪に対して毅然たる態度で臨むだけの胆力はある。二度の騒乱の際も総動員令をだした後はキビキビと指示を出しており、作戦は一定の成果を収めている。人の上に立つだけの素質は良くも悪くも兼ね備えているようである。

１５年後は民間人の女性と結婚したが、尻にしかれている模様。リーグチャンピオンの座からは降りず、世界屈指のトレーナーとして、または最強のドラゴン使いとして君臨しつづけている。（シャガは２０１９年に８６歳で、ゲンジは２０１７年に９１歳で逝去）

シロナ

年齢：３３

趣味：遺跡探索、読書
特技：経理、事務的作業
紹介
全国ポケモンリーグ副理事長兼シンオウリーグチャンピオン。
カンナギタウンに生まれ、考古学を志望していた為コトブキ大学に進学した。フィールドワークで遺跡探索している最中にフカマルと出会い、育てているうちにポケモンバトルの楽しさに目覚めてポケモントレーナーとしてはやや遅めの出発をすることになった。
シンオウ地方のジムを制覇しながら大学の単位を取り、8つ集めた時点で首席で卒業。その異常なまでの要領の良さを当時のシンオウリーグのチャンピオンに見込まれて四天王に登用される。それから五年後にそのチャンピオンが引退したのに伴ってシロナがチャンピオンになった。
ダイゴ時代の財源の無駄遣いや会計の不透明さをリーグ上層部の中では唯一見抜いて選挙戦直前の最中に堂々と数々の証拠を取り揃えてマスメディアの前で堂々と公開し糾弾した。結果ダイゴは一部のリーダーや四天王の怒りを買って落選を憂き目を見た。
選挙で対立候補のワタルが理事長に選ばれると、事務処理能力の高さや学識の深さを

買われて副理事長に任命された。エンジュ騒乱の際は裏方で万一の場合に備えて総動員令の対象外となっていたシンオウ、ホウエンの両リーグに臨戦態勢を整えるように司令。ワタルとも密接に連絡をとり、いつでも動けるように準備を進めていた。

ポケモンリーグ上層部の中では数少ない旧帝大出身者であり、政治家や官僚などとの人脈もある。昨今のポケモンリーグ国有化への動きを止めることが出来ているのはシロナの根回しや工作があるからだという噂もある。

本編ではハクタイシティにて初登場。選挙の後レッド・エリカと戦い惜敗する。その後、視察で来ていたサザナミタウンにて再開しプラズマ団復活を示唆する発言を二人にしている。

リーグ改革を念頭に置いており、内側におさまっていたリーグの組織を外向的にし、地方ごとにばらばらになっているリーグやジムの管轄を一元化するなど組織の合理化。そして国際リーグをも視野にいれ、急進派の筆頭を務めた。

しかし、選挙編では可否同数になるほどの支持を獲得したが、ダイゴの陰謀により、合法的に敗北する。

十五年後は宿願であった理事長に就任し、ジムやリーグの会計監査の徹底化や内国総合リーグの設立など新たなるポケモンリーグ設立にむけて尽力している。しかし、保守派のジムリーダーや四天王などからは不満の声も出ているのが実情である。任期終了

直前の２０２７年に国際リーグ連合を設立し、ポケモンバトルの国際化に尽力。後世からは『リーグの母』と呼ばれた。ちなみに結婚はしておらずキャリアウーマンとして一生を生きていく覚悟を固めた様子である。

ダイゴ

年齢：３４

趣味：石集め

特技：石の識別

紹介

前ポケモンリーグ理事長。デボンコーポレーション御曹司。

内国のポケモンリーグの中ではエリカをも凌ぐ一番の大金持ちであり、将来を約束されている人物である。一介のポケモントレーナーからモラトリアム期間を経て理事長にまで駆け上がったリーグドリームの先駆け的存在であり、２００３年に理事長に就任した際は大きな話題となった。

理事長としてはバックにある莫大な資金を活用してリーグ本部の大改築を行い、他にはジムの世代交代に当たる時期の為エリカやワタル、マツバなどのリーダー継承に関わる。

しかし全体的に見てこの時期のリーグはデボンの資金を差し引いても無駄な出費が

相次いでおり財政が窮乏。この点を選挙戦直前に当時のシンオウリーグチャンピオンであったシロナに糾弾されその点が一部のリーダーや四天王の不興を買い一期でワタルに敗れ退陣を余儀なくされた。

この汚職とも見られかねない会計事件（念のため注釈するがダイゴは無駄遣いが酷かっただけで着服や粉飾決算などの汚職は一切していない）でダイゴは一気に評判を落とし、巷ではその後のミクリによるサイユウリーグからの追い落としなども相俟って親の七光りなどと揶揄される。ダイゴ自身はなるべく気にしないように努めているがやはり心に刺さるものはあるようだ。

趣味の石集めの方向ではそれなりに名を残しており後にカナズミ大学の地学博士号も取得している。

本編では二人がホウエン行きの船に乗ったときに登場。ムロの洞窟で二人と戦うが惜敗する。フエン騒動の際には職権を用いて直前で推薦状提出を押しとどめるという活躍を見せる。あれからリーグに呼び出されて職権濫用であるとの注意を受けたが本人は大して気に留めていない。カントー編では商談で立ち寄っていた途中でシルフカンパニーの不審に感づき二人に情報を提供した。

１５年後は２０２３年に父親が亡くなったことを契機にリーグから籍を外し、社長として経営に専念。業績は理事長時代の反省を活かした堅実な経営方針によって好調で

あり、七光りなどの汚名を返上した。

【ジョウト勢】

ウツギ
年齢：３３
趣味：ポケモンの研究・ポケモンを……する事。
特技：遺伝子の配列を諳んじて言える。メスポケモンを見分ける事。
紹介
ウツギポケモン研究所所長。
ワカバタウンに生まれ、ワカバ小を出た後、ポケモントレーナーを志すが四つ目まで集めたところで研究者への転向を志願。
地道に学業を修めて、２４歳で順当にエンジュ大学を卒業。
その後はオーキド博士の師事を受け、才覚を認められて３０歳でポケモン研究所を開く。因みにこの時、最初からウツギについてった中の一人が柏木である。
そして研究所開設の翌年にポケモンの卵について発表し、大きな功績と認められて、

ノーベル生物学賞を授与される。

ゴールドをポケモントレーナーにしたのはウツギで、エンジュ大学に落ちてしまったツクシを拾い上げて研究者にしたのもウツギと、人を見る目には長けている。

しかし温和な性格とは対照的に本性は重度のケモナーで、時々気に入った実験用のポケモンを……してしまう事もある。どれほどかといえば、人間の女性には全く興味を抱かず、子どもは体外受精等と言う徹底ぶりである。結婚は体面の保持の為、一応している。要するにウツギは童貞という事だ。初体験はホーホー。

助手にはばれていないと確信しているが、ツクシ以外の研究員には全員ばれている。因みに発覚したら本気でブチ切れる。レッド曰く『ロケット団でも裸足で逃げ出す』レベルで。

２０２５年には、ツクシを副所長に昇進させて自分は更に趣味にしけこむ。２９番道路のポケモンたちの一部はウツギの存在に怯えているという。オタチ可哀想……。

夢はサーナイトと結婚する事らしいが、絶対に無理である。

尚、ツクシを非常に気に入っており、その前に気に入っていた柏木は今は煙たがられている。

ハヤト

年齢：１９
趣味：鳥をめでる事。
特技：鳥を扱う事。
紹介
キキョウシティジムリーダー。
ポケモントレーナーとして、鳥使いとして高名な父親を誰よりも尊敬しており、自身もそれに近づこうと努力する人物。
しかし、レッドとエリカがキキョウに来た際は挑発したレッドに完敗を喫するという、ジムリーダーとしてあるまじき失態を犯す。レッドや、自らが好いているエリカからもバカにされ、マダツボミの塔に逃げ込むが父親に一喝されて漸く目が覚めてやり直した。
戦争編に置いてはマチスの電撃戦の主役を担った。鳥ポケモンたちにビリリダマの入った爆弾をぶらさげさせて、瞬く間に焦土と化させたのだ。
２０２５年は、しっかりとジョウトの中でもそれなりの強さをもつジムリーダーとなり、鳥使いとしても更に名をはせるなど、家の名を汚さない程の人物になった。

ツクシ

年齢：17
趣味：虫を捕ったり、標本にしたり色々する事。
特技：虫捕り（網を持たせると人が変わるらしい）
紹介
ウツギポケモン研究所研究員。前ヒワダタウンジムリーダー。
男の割には背は低く、声は高めで華奢な体つきと明らかに優男である。
12歳の頃に父親を亡くし、母親は先祖代々受け継いできた茶摘み農家で周りの人たちの支えも受けながら暮らしていた。ツクシ自身も家業を手伝おうとしたが、向いてないと見なされた母親からは手伝わなくていいと言われ、ならばと彼が目を付けたのが虫だった訳である。その為、6歳の頃からヒワダの森や親にせがんで自然公園に出かけては虫を捕ったり観察したりする日々を送って行った。
町の名士であるガンテツよりツクシの観察眼や虫に対する情熱が眼鏡にかなったのか、父親代わりとばかりに大いに可愛がられ、虫の標本や図鑑、ファーブルの全集等々を彼に求めに応じて与え続け、14歳の頃には跡を継がせてジムリーダーにした。
小学校、中学校と順調に学を修めていき、彼は他の教科こそ平凡だったものの、理科の成績、特に生物に関しては目を見張るものがあった。しかし単純な記憶は苦手なのか社会科は奮わなかったようである。

教科推薦を使って彼はジョウト随一の進学校であるコガネ高校に進学し、一学年飛び級してアカネと同級に。彼女とはウマが合ったので（合わせられたので）たちまち親友になって行った。因みにジムはこの頃は休日と祝日のみ開いていた。

その後も彼の虫に対する知的好奇心が覚める事は無く、遂にはエンジュ大学を志願。同じ地方のジムリーダーで同大学の首席であったマツバや、親友にして同僚であるアカネ（彼女はコガネ高校でもトップクラスの成績を修めている）から指導してもらったが残念ながら落ちてしまう。

しかし、前々からツクシを注目していたウツギより研究員にならないかという誘いが来たのでそれを受け、彼はリーダーを辞めてワカバへと居を移すことになった。

そしてそれとほぼ同時期にアカネから告白を受けるが、ツクシは信条に従って一度は彼女を振る。が、終戦の翌日にアカネが家に泊まりに来てなんやかんやあって、ツクシはアカネと同棲生活を送りつつ研究者としての道をたどる事になった訳である。イッシュ騒擾事件の際に従軍し、ヒウンシティでハッサムを使ってドアを破壊し、マツバ発見に一役買った。

その後は研究者としてウツギを支え続け、２０２５年には副所長に任命される。

それから一か月ほどしたのち、『赤い帽子』を読んだ際、ひっかかった点があったので、エリカにそれを手紙で尋ねる事にしたが、その後の事はよく分かっていない。

性格は真っ白。それに尽きる。嘘をつくことができない性質で、良くも悪くも正直者なのが彼の長所でもあり短所でもある。無論、アカネはそこに惚れたわけだが……。性知識に至っては、アカネと突き合うようになるまでは全く知らなかったも同然なレベルであった。だが、虫の交尾の知識はそれなりにあったようである。

アカネ
年齢：１８
趣味：貯金（預金額は億を下らないという噂）
特技：あり過ぎて困るらしい……
紹介
コガネシティジムリーダー。コガネシティマスコットキャラクターｅｔｃ……
まだまだ乳飲み子であった頃、アカネが生まれた年に起こった大震災で何もかもを失い育てきれないと悟った両親から捨てられ同然に親戚の商家（雑貨屋）に預けられる。両親の行方は２０２５年現在も分かっていない。
物心ついたときから雑貨屋の手伝いをし始め、算術や商売の心得、人心の掌握の仕方などを人から見ながら学ぶ。
「将来はとにかく偉い人になったるんや！」そう志した彼女は、まず勉強ができないと

だめだと思い立って、寸暇を惜しんで勉学に励む。その片手間で更に自分を磨いていき、遂には奨学生として入学金・授業料無償でコガネ高校に入学する。

特に何かが秀でている訳では無かったため、飛び級こそ無かったが成績は常にベスト5に入るほどの実力を保ち続けた。11歳の頃にその美貌と快活さを見込まれて芸能事務所にスカウトされる。その後、自然公園での広報（マツバとエンジュつながりで親しくなるのもこの頃）等を経て今やコガネの看板になった。その為、14歳の頃にコガネジムリーダーに就任した。彼女はポケモンも強かったわけである。

申し分ない成績だったため、エンジュ大学には早々に推薦で合格。その一方、同業者にして同級生でもあったツクシにアカネは惹かれていった。

彼女がツクシに惚れた理由は、何事もひたむきに接する真面目さと天真爛漫でどこか抜けているという可愛げのある性格であった。

アカネはツクシに告白したが一度目はまさかの撃沈。ツクシが研究員になった事に伴ってもう会える機会はないと諦めかけていたが、戦争で同じ軍に配属されたことで一気に距離を縮める。エリカに助言を頼みつつ終戦翌日にツクシに迫った。

エリカからの「最後は愛嬌ですわよ！」というアドバイスを勘違いしたのか否か、アカネは体でツクシに迫ってなし崩し的に告白をｏｋさせたのだった。

当初、ツクシは大いに戸惑っていたが、同棲して数か月もすると馴染んで行って何と

かうまくやっていけている様子である。
イッシュ騒乱の際にはツクシやナツメと共にヒウンに潜入した。ヤーコンに会った際はコガネの街の事を立て板に水の如く理路整然と喋り、周囲の人々を驚かせた。その後、彼女はホドモエとコガネの結びつきを一層強固にすることに成功したのだった。恐ろしい子……。
２０２５年の頃には四児の母となり、良妻賢母としてジムリーダーと芸能の傍ら立派に家を切り盛りしている。
社交力が非常に高く、誰とでもすぐに友達になれる。その為、友人は非常に多くいるが親密な仲なのはマツバ等ごく一部に限られている。本人は壁を作っているつもりは無いらしいが。
基本的に頭は良いが、エリカやオーキドなどには遠く及ばない。しかし、目だった欠点が無く、同時に幾つもの仕事をこなせるまさにスーパーウーマン。ＳＳ内で真にコスパが良いのはこの娘かもしれない……。

マツバ
年齢：２４
趣味：オカルト

特技：歴代天皇・年号を全て暗誦できる事
紹介
エンジュシティジムリーダー。
修験者の長男として生まれ、5歳の頃に千里眼を与えられる。
幼少の頃よりオカルティックな物を好み、『ムー』は発刊当時のものから持っている程のオタクである。
その為、身近にある焼けた塔に関心を示し一週間に一回は必ず隅々まで見て回るほどだったという。再建が決まった際はかなりおちこんだらしい。
修験道や占術等のあやかしにも大いにはまり、学生時代は本人の明晰ぶりと重ねて『魑魅魍魎』というあだ名までつけられたほど。
一方で学業にも大いに専念し、成績は常に上位。エンジュ大学に入った後は更に精進して遂には首席で卒業した。
17歳の頃にエンジュジムリーダーの職を推挙され、受諾する。
選んだタイプもゴーストと更にオカルト的要素が増していく中、最初の定例会でエリカに一目ぼれをする。その後、自然公園の再建計画にも参画。その過程でアカネと知り合い、どこか似通う物があって親友となった。エンジュ騒乱の前に集団催眠事件の存在に感付き、エンジュ大学に潜入してポケモンを奪還しようとするがオーキドの前に敗

北。この時点では何とか無事に済み、エンジュシティ中をかけずりまわってロケット団およびオーキドについて調査を行い意見書をリーグに提出する。

ロケット団がエンジュシティに攻撃を行うとマツバは先陣を切って防衛に努め、市民の救出を行った。しかし、最終的には衆寡敵せず圧倒的な大軍の前に屈する事となった。

マツバの活躍はエンジュ市民たちによって大いに喧伝され、マスコミもこれに同調して一躍英雄扱いとなった。そして、ロケット団によって殺害されると自衛隊出動を願う世論が出始めるほどの大騒ぎとなった。

が、その実態は死よりもある意味過酷なものであった。一年近くもの間四肢を拘束され、オーキドより千里眼を譲れと脅迫され続け、譲らないのならばエリカを性奴隷のロボットにすると言われたのでエリカを守る為に千里眼を渡してしまう。

その後、マツバは軟禁状態となり抜け殻のように過ごす。エンジュ騒擾事件でツクシとアカネによって救い出されるが、マツバの表情は晴れやかなものでは無かった。それから一年後、事実を知ったエリカから告白されてそれを受け、漸くマツバは生気を取り戻す。

それ以降はジムリーダーを続けつつエンジュ大学の講師として活動。

２０２５年の頃には三児を設けてエリカと共に幸せに過ごすのだった。

趣味はアレだが、温和な性格でしかも顔も良いので人々から大いに好かれ、アカネとはツクシよりも慕われているんじゃないか囁かれるぐらいの仲である。
ミナキとは幼いころからの付き合いで、互いに互いを認め合う親友である。
オカルトつながりからか歴史や文学も好み、その知識はエリカと同じかそれ以上ではないかと噂される。

ヤナギ
年齢：８０
趣味：散歩
特技：遠泳、ウィンタースポーツ
紹介
チョウジタウンジムリーダー。ポケモンリーグ初代理事長。
老いてもなお、世界で一二の実力を持つと噂されているポケモントレーナー。単にトレーナーとしてだけではなく、ポケモンバトルやトレーナーの価値を爆発的に高めた功労者でもある為、業績を知る者は最大限の敬意を払う。老いていることは自覚しているため一ジムリーダーに留まり本心ではそれ以上の介入は望んでいない。豊富な経験と知識に裏打ちされた冷静沈着かつしなやかな戦略や戦術より「雪柳斎」、「ヤナギに雪折

れ無し」などという異名をつけられるほどの実力者である。

彼は最初チョウジタウンの貧民に生まれ、冷遇された少年時代を過ごす。

だが、利発な子ではあったそうで、カントーの進学校であるセキチク高校から推薦を貰って進学。オーキドやカツラとはそこで知り合い親友となった。

まだ理系と文系の学問が別個のものであるという意識が強かった当時、彼は得意分野であった物理を専攻し、タマムシ大学物理学科に進む。

そこでの成績も優秀だったようで、オーキドには及ばなかったものの、優秀生として表彰された。

その後、優秀生表彰の特典として学長よりポケモンを貰って、オーキドと共に修行に励む。それから大学に近いタマムシジムを一番最初に挑み、カルミアよりバッジを貰った後はオーキドとは別れて別々にカントー、ジョウトのバッジ（リーグ設立前なので、どちらかといえば記念品）を集める。

集めた直後、オーキドとヤナギはカルミアをタマムシデパートの喫茶店に呼び寄せて報告する。その場でオーキドが告白したが、カルミアには適当に流されて終わる。

そんなオーキドをしり目に告白しようか迷ったが、カルミアが出て行こうとしたのでヤナギは勘定も払わずに追いかける。（ちなみにツケは全てオーキドが払った）

オーキドが追いつかないと悟ったのか、彼女はタマムシデパートの入り口で立ち止ま

り、ヤナギを噴水へと誘う。
　そこで待っていたのはカルミアからの告白であった。どうやらカルミアはヤナギの思慮深く、クールな内面と強さに惚れた様である。
　カルミアは正直に父親に話したが、まだまだ身分の意識が強いこの当時、上流階級なら尚更である。カルミアも例のごとく実質無職のヤナギと結婚する事の反対を受け、ヤナギとカルミアは生木を裂くような別れを遂げた。
　その後、カルミアがまた変な気を起こさないように彼女の父親はオーキドとの婚儀を画策し、成就へと導くのだった。
　恋破れた後のヤナギは、故郷のチョウジへと戻り忍術の修行を積んで、わずか十年で上忍となった。キョウの師匠というのだから尚更恐ろしい。因みにこの時に里の慣習でホウエン地方出身のチョウジ市民と結婚する。（異郷の者は忍術を強めるとの言い伝えがあったのだ）そしてその時、ナギの母親が生まれた。
　上忍になった後は、修行の名目で旅に出てグレン島にてカツラと出会う。カツラとヤナギは久々の再会を喜び合って三日三晩語り明かし、旅の話をしている時、『ジムの上位互換となる組織を作ろう』という事が発案された。
　ヤナギは私財をはたいて全国を周ってリーグの構成員を求めた。この当時（１９６０年代）、戦後の成長期で新進気鋭の機運に溢れていた内国で、カツラやヤナギと同じこと

を考える人々は決して少なくは無かった。その為、ジムを持つ人々は次々と賛同してリーグの構成員となり、１９６８年１０月、セキエイ高原にて第一回の総会が行われた。（総会は年に一回、内国中のジムリーダーが集まる式典だったが、煩雑さや必要性の薄さから１９８９年に廃止された）因みにカツラはリーグ本部の設営や規則の作成を行っている。

彼はおよそ２１年間理事長を務め、リーグの根本を形作った。カツラはその間副理事長で、ヤナギが辞めた後は同じく身を引く。

理事長を辞めた後はチョウジに戻り、ジムリーダーを務める。定例会が終わった後などで、時々ダイゴやワタル等といった理事長より相談を持ちかけられたりはするので事実上の顧問役となっている。

ＳＳ本編では、レッド最大の強敵としてあらわれ、完膚なしまでの敗北を味わわせた。その後負けはしたものの、あれが本当に彼の本気だったかどうかは未だに分からない。シャガと相並ぶ二強としても知られ、彼の強さを一目見んとジムの門をたたくトレーナーは後をたたないがことごとく敗れ去ってしまう。

２０２５年（９２歳）の頃はチョウジに戻った頃より続けている一日一万歩の散歩。それに加え日々の遠泳は欠かさず、食事は一汁一菜をこころがけるという何とも健康的な生活を送っている。世界最高齢となるのが彼の今の夢らしい。

この時の理事長であるシロナは『不偏不党、独立不羈』をスローガンとしているため、本格的にヤナギはリーグに関わらなくなって、過去の人物となりつつある。しかし、本人は寧ろそれを喜ばしいと思っているようだ。

ミカン
年齢：15
趣味：ポケモンの世話、旅行
特技：鋼タイプの魅力を延々と語れる。（性格上、まずする事は無い）
紹介
アサギシティジムリーダー。アサギの灯台所長。
ポケモンブリーダーの家系に生まれ、幼いころから岩タイプのポケモンを大いに好んだ。
小学校で体が小さい事等を理由に苛められ、中学の時には遂に引き籠ってしまう。しかし、ふとテレビで見た若き俊英、レッドという特集でレッドの活躍を知る。
同じくらいの歳の人が頑張っている事に奮起したミカンは一念発起して、リーダーになる為の修行を開始する。伝を頼ってヤナギやシジマの教えを乞うて、元々の才能もあったのか瞬く間にアサギ一のトレーナーになった。才覚を認めたヤナギは、丁度前任

者が急逝して空席となっていたアサギシティのジムリーダーにするようリーグにミカンを推挙。試験を経て最年少の１３歳でジムリーダーとなった。

アサギの灯台でも修行していた為、リーダー就任と同時にアサギの灯台の所長になる。とはいえ、所長の仕事はあまり無く、灯台の光源となっているデンリュウ（あかりちゃん）を世話する事ぐらいだった。とはいえ、ミカンは仕事としてではなく、本当に友達のようにデンリュウと接している。理由は『あかりちゃんはいつも一人ぼっちで寂しそうで、それに自分自身も親近感を覚えたから』というらしい。アクア号の船員によればミカンが所長になってからより遠くから明かりがみえるようになったという話だ。

そんな性格なので、今やミカンはアサギ中の人々から好かれる人気者。いじめられっことという汚名を見事に返上したのである。

ＳＳ本編ではレッドに片思いしている。戦争でのレッドの漢気ある行動を遠目から一部始終見ていた為、憧れから恋に感情が変わったのだ。それでミカンは自分の好きなレッドを独り占め出来るエリカに対抗心を燃やしたのか、何を血迷ったかレッドがジョウトを去る寸前にレッドを連れ出してこっそりと接吻したのだ。

それからレッドとエリカがシンオウ地方に来るとズイタウンにおいて再会。カンナギタウンにおいてはレッドから優しい言葉をかけられて思いが再燃。しかしエリカのかわりになることは出来ないと承知していたためせめてもの区切りとしてレッドとも

う一度二人きりになることを望んでいた。
その後ナギサシティにおいて二人に再会するもののレッドから提案を拒否された上にエリカの非難によって精神的に追い詰られ。自傷行為に及ぼうとした。しかし直前で思いとどまる。エリカとはその後関係を修復するもその思慮の浅さを裏ではたしなめられていた。
イッシュ騒乱後、ワタルの口からレッドの本性が暴露され、ミカンはエリカと同じく幻滅。その為飛行機に居合わせても一切話しかけなかった。
２０２５年の頃は、ミカンも立派な大人に成長し、既に婚約者が居る。無論、レッドでは無い。

シジマ
年齢：５０
趣味：格闘技
特技：格闘技
紹介
タンバシティジムリーダー。タンバ体育大学学長。
幼少の頃より喧嘩が滅法強く、小学校の頃より空手と柔道をやり始める。

国体では当然のように優勝を果たし、次々と的確に繰り出す技は『雷の化身』の異名を持ち、オリンピックにも出場するほどの名うての格闘家である。

しかし31歳の時に酒好きが祟って肝硬変を発症、一か月もの間生死を彷徨うほどの重篤になる。

その後、一年で退院。酒はキッパリと止める。それと同時にシジマは自らの死期を悟って『自分の生きてきた証を残す』として試合出場は控えるようになる。その後すぐにジムを開いて、公認のジムリーダーになる。

そして、巨額のファイトマネーとタンバ市民からの支援も受けて1997年、カントージョウト初の体育大学、タンバ大学を開校する。当時の内国は格闘技と言ったらポケモンの存在が大きく、人間のアスリートは例外を除きそこまでの注目を受けていなかったが、シジマが開いた大学という事で入学志願者が殺到。そして、数々の巨星を輩出し、人間アスリートの価値を爆発的に高めたシジマは一躍格闘界もとい体育の巨魁と目されるようになった。

豪放磊落な性格で、何でもかんでもどんぶり勘定という一見無計画な男だが、本当に大事な物は熟慮して決めるという慎重な一面も持つ。タンバ大学創設の際のシジマは人が違ったかのように冷静だったという。

愛妻家でもあり、週の半分以上は絶対に18時をまたがずに家に帰ると決めている。

その一方、男色でもあり、シバやトウキ等の学生に手をだし、最終的には籠絡に成功している。恐ろしい……。

ＳＳ本編では、シバと行為に及んでいる最中にレッドに見つかるという何ともショッキングな所から始まる。ジム戦後に弟の暴行を受けているかもしれないと姪のスモモの様子を見てくるようにレッドとエリカに頼む。

エンジュ騒乱に置いては第三軍の総司令官を務める。アポロの策略にハマって一時はあわや全滅と言う窮地に陥ったがアポロの軍勢が救援の為層が薄くなった隙をついて一か八かの大脱出を敢行。奇跡的に誰も欠けることなくアサギに帰還し、『シジマの退き口』と呼ばれる伝説を作り上げた。

シンオウ編においてはレッドとエリカから虐待の実態をきいて居ても立ってもいられずトバリにまで赴いたが、その夜にルカリオによって気を静めた。翌日になって談判を行った際には冷静につとめたがあまりのクマオの増長ぶりに堪忍袋の緒が切れて鉄拳制裁を行い、強制的に事をおさめた。その後は自らの責務としてクマオの入院費や時折の見舞いを欠かさず行い贖罪につとめた。

２０３６年に肝硬変が再発して今度は耐えきれずに逝去。享年７３。葬儀にはリーグの人員の他に格闘界のみならずスポーツ界全体から弔問客がきてマスコミが大勢おしかけたという。シジマのスポーツ普及や発展の精神は姪のスモモに受け継がれるこ

とになった。

イブキ

年齢：２６

趣味：ドラゴンの育成

特技：不明

紹介

フスベシティジムリーダー。龍の穴の守護者。

全国有数の実力を持つドラゴン使い。女流としてはピカ一の実力を誇っていたが、最近はアイリスの台頭により地位が脅かされている。露出度の高い衣装を身にまとっている為フスベの外で誰かと会うたびに目のやり場に困られるという。エリカにその独特なファッションセンスを窘められたことがある。

ワタルとは同郷にして同い年の幼馴染であり永遠のライバルでもある。幼少のころより彼とは切磋琢磨し合っていた。ゲンジの跡を継ぐジムリーダーが決まるまでは二人の実力は拮抗しており、フスベで一番強いドラゴン使いといえば？という問いに対してフスベの住民の意見は真っ二つに分かれていたという。

さて、ゲンジの引退に伴い、ワタルと彼女が雌雄を決する一戦を行ったのはワタルの

項で述べたとおりである。彼に敗れた彼女は暫く塞ぎ込み、荒れる時期もあったが時の経過と共に立ち直っていき二年後にワタルの四天王への昇進に伴い、かわってジムリーダーになったときには元気を取り戻した。

彼女のトレーナーとしての実力は確かに高く、ジムリーダーとしては何ら申し分ないが名目上はあのヤナギの次。チャンピオンにワタルという上位互換がいる為その不幸な境遇からトレーナーの中では実力以上に低く見られてしまうことがしばしばある。しかし本人はさして気にしておらず自分の故郷でリーダーができることに何より誇りを持っている次第である。

ワタルとは反対に苛烈な一面をもち、人に厳しく当たってしまうことが多々ある。その気性の荒さから長老たちからは認められずイブキにとって大きな悩みの種となっている。しかし現行ではイブキ以上に強くて若いドラゴン使いが（フスベ内では）居ない為ドラゴン使いの聖地である龍の穴の守護者を務めている。

２０２５年の頃はドラゴン使いの後進の育成に当たり、百人ほど輩出している。また年齢の経過と共に性格が丸くなり、実力も高まった為漸く長老たちからも認められた。近々（シャガやゲンジといった巨星の逝去により）ドラゴン使い頂点の座を巡ってワタルとの再戦の話もあがっているとの噂も……。

【カントー勢】

マチス

年齢：４９

趣味：銃の蒐集。

特技：軍の指揮。電撃戦

紹介

イッシュ地方出身。クチバシティジムリーダー。元アメリカ合衆国陸軍少佐。米国生まれ米国育ちのまごう事なき外国人。先祖代々軍人を務めている家庭に生を受け、ウェストポイントで士官としての教育を受けて２０歳で少尉からスタート。指揮官としての戦功は非常に目覚ましく、ナチスに憧れてか電撃戦を好み、『雷帝』の異名がつけられるほどの名将として名を馳せる。

しかし、気性が荒く、親分肌の為部下には慕われても上司には中々気に入れられず戦功の割には軍人としての栄達はなかなかならなかった。３６歳の頃に突如軍人を引退し、少年期の頃トレーナーになろうとしていた経験をいかしてクチバに渡ってジムを開く。この当時ジムは二つあり壮絶な争いの末マチスが制し、奇しくも犬猿の仲であるワタルと同時期にジムリーダーとなった。ワタルとは理事長になってから対立が顕在化し、年下に指図されるのが気に食わないのか度々反抗的な態度を取り続けている。

本編に置いては第二軍の司令官として活躍し、電撃戦を用いて大勝をおさめ、一時はエンジュシティの中心部へ迫るほどの進撃を果たす。しかし、この作戦はあまりにも非道であると根強い批判もあった。レッドとエリカには三番目の敵として戦い、敗北。エリカの英語を激賞していた。

１５年後は残念ながら２０２３年に５９歳で酒好きや無理が祟って肝硬変や心筋梗塞を併発して亡くなった。墓はイッシュ地方に建てられた。

ナツメ

年齢：２１

趣味：超能力

特技：超能力

紹介

ヤマブキシティジムリーダー。

空前絶後のエスパー少女として高名。２歳の頃から超能力に目覚め、死に物狂いの特訓の末に１０歳頃には世界でも比類なきと目される超能力を手にした。

小学校中学校高校と学を修め、超能力養成学校であるヤマブキ大学へ入学。化け物揃いのヤマブキ大学の中でも嚢中の錐と目されるほどの力を持っており、誰もかれも彼女

には全く勝てず当然のように2年早く２０歳で主席のまま卒業する。

一方でこの絶大な力は首都たるヤマブキを守るに相応しいと目され空手大王との決闘を経、１５歳で政府及びリーダー推薦でジムリーダーとなった。エスパー使いとしての実力も相当な物であり、十傑には入らないものの常にジムリーダーの中でも上位の強さを保っている。

彼女の力で何が一番目されているのかと言えば『人間スキミング』と綽名されるほどの分析、読心能力である。彼女はその人の前に立っただけで人の思考や記憶を読み取り、経験までそのままコピーしてしまうほどの力だ。他にも地方間を跨げるだけの瞬間移動や超高層ビルをも持ち上げるほどの念力など他のエスパーとは雲泥の差といえるほどの抜きんでた力をもっている。

エリカの方から誘われて２０１０年から二年間かけて彼女と関係を持った。しかし、この事は誰にも知られておらず、極秘の関係である。

本編においてはエリカの元恋人であり、一番の親友として登場。二人の先々を案じたり、エリカの相談相手になったりなど話の色々な箇所で何かと気にかけ、重要な役割を果たしている。レッドに対しては終始懐疑的であり諸手を挙げて歓迎するようなことはなかった。

１５年後は残念ながら２０２４年に３２歳で急死。死因は強大過ぎた超能力を維持

する脳が限界を迎え、脳出血を起こしたことが原因とされている。ちなみに処女のまま生を終えた。

ちなみに彼女が超能力を使うのは仕事のときと気まぐれのどちらかである。当人曰く超能力を使うのは面白くないし疲れるからあまり積極的にはつかわないそうだ。

カツラ

年齢：８０

趣味：男色

特技：研究・改造

紹介

グレン島（ふたご島）ジムリーダー。ポケモンリーグ初代副理事長。

万年躁状態と噂されるほどの矍鑠な老人である。同じ高校であり友人であるヤナギと同じく、苦学生として若年期を過ごす。

セキチク高校を卒業後、ポケモントレーナーを志してカントー中のジムを撃破してバッジ（記念品）を集める。全て集めた後、ポケモンの化学的性質に関する論文を書き上げ、その功績を用いてタマムシ大学理学部に入学。同期のフジと共にグレン島に研究所を立ち上げる。

その後、ヤナギに再会して、酒場の与太話からポケモンリーグの創立へと発展。リー

グ成立後はヤナギが理事長を退くまで副理事長を務め、リーグ法の制定や内部統制に尽力した。

本編においてはカントー編において7番目のジムリーダーとして登場。敢闘はしたが敗北する。シルフカンパニーでロケット団が忍び込んだ時も大文字で一掃するなど活躍した。

15年後はヤナギと長寿を競うほどだったが、突如脳梗塞を起こして倒れる。数年後、一度も起き上がる事がかなわないまま98歳で亡くなった。

【ホウエン勢】

アスナ

年齢：22

趣味：温泉

特技：育成

紹介

フエンタウンジムリーダー。

父の逝去に伴い、6月よりジムリーダーになった本作の中では一番の新人ジムリーダー。幼少の頃より父から才覚を見込まれてリーダーとして育てられ、相応の実力を身

につけた。しかし、数年前の決闘で落着していたはずの兄、ダイモンとの後継争いが８月になって再燃。

流れ者のベテラントレーナーサキヒサや伝統を破ってリーダーの座に就いたアスナに反発する町の古老たちが結託し、アスナをリーダーの座から降ろそうとした。アスナ側は苦戦を強いられ、一進一退の攻防が続いていた。

本編ではその騒動に際し、街にやってきたレッドとエリカがアスナ側についた。それ以後はレッドによる不正の証拠とエリカの追及によってダイモン側は潔く身を引く。ダイモンはトレーナー資格を剥奪された為事態は本当の終焉をみた。アスナとダイモンは上記のいきさつから幼少期よりいざこざが続いていたが、今回の騒動で和解し仲を取り戻しつつある。

性格は情熱家タイプだが、真面目すぎるせいかやや気負いすぎるきらいがある。当初の頃は挑戦者に対し父同様厳しくあたっていたが、騒動収束後は自然体でいくことにしたという。

２０１８年の頃に結婚。五児を儲ける。兄弟仲は依然良好で、兄も結婚したため家族ぐるみの付き合いをしているという。

ナギ

年齢：２５
趣味：グライダー。鳥ポケモンと共に大空を舞うなど空に居ること
特技：分析。飛行ポケモンや飛行機などの操縦
紹介
ヒワマキシティジムリーダー。ヒワマキ航空大学准教授（機械工学専攻）。五大難関（各地方に一人はいるとされる強者ジムリーダー）の一角を担う強豪の一人にして、この世界では非常に珍しい飛行機の操縦士である。
世界最強とも目されるヤナギの孫娘。性格は確実に受け継がれており、明晰な頭脳を持ち、勝負事には特に冷血な態度である。
８歳の頃に両親を事故で亡くし、祖父のヤナギのもとで育てられた。１８歳の頃にリニアなどの開通で需要が少なくなり廃校となっていた航空大再建を志してチョウジからヒワマキへ飛び立つ。ナギ自身の尽力やヤナギやヒワマキ住民の支援もあって二年後の２００８年に再建が実現し、同時に功績が認められてジムリーダーに。当初は資金繰りに苦しんでおり、酷い時には自身のポケットマネーを使って赤字を補てんするほどだった。しかし２０１０年９月頃から二国間民間渡航の話が出始めるとイッシュ地方ヒワマキ―フキヨセ間での航路開通に動きだし、ほかにも多数の候補があったが単独での獲得に成功。これにより漸く収入が安定し現在に至った。同じ操縦士であるフウロ

とはこの頃に知り合い、現在では良き友達となっている。また男運に乏しく何人もの男性と付き合っているがなかなか結婚に至らず年齢的に少しずつ焦りを見せている。

性格は基本的にはヤナギ譲りで冷静で落ち着いている。時には冷たい時もあり、レッドやエリカもその冷たさに直面したことがしばしば。しかし、それは自らの計算通りに事が運んでいる時に限り少しでも算段がずれればたちまち焦りをみせてしまう一面も。

本編ではホウエン地方では最も苦戦したジムリーダーとして登場。また、レッドにゴーゴーゴーグルを渡してバンギラス戦におけるレッドの活躍を手助けすることになり、レッドがホウエン地方行きを決めた理由の一つになる。航空大創立記念のパーティに二人を誘い酔うと説教臭くなる一面をみせた。

イッシュ編においては二人をイッシュ地方へ連れて行ったパイロットの一人であり、早々からレッドとフウロに対して懸念を抱いている。レッドとエリカが破局した後は一緒の飛行機には載せないなど内助の功もみせている。

ヤナギからオーキドとカルミアに関する一件は聞かされており、エリカがもしかしたら腹違いの従妹かもしれないという事で少しだけ気にかけてはいる様子。ヤナギに対する尊敬は非常に篤く、祖父のようなトレーナーになることを目標にして生きている。

２０２５年の頃は経験を積んだという事でヒワマキ航空大の学長になっている。強さも相変わらずで四天王着任の声もかかっているが、まだ離れる時期ではないとして丁

重に断っている。結婚願望はあるにはあるが最早婚期を逃している（３７歳）為半ば諦めている様子。処女ではないらしい。

センリ
年齢：４８
趣味：筋トレ
特技：不明
紹介
トウカシティジムリーダー。元教師。

アサギシティに生まれポケモントレーナーを志していたが、まだ当時はモラトリアムがなかったことと、両親の反対を受け挫折。カナズミ大学を出て高校の国語教師となったがトレーナーの夢を捨てきれず５年目にして教師を辞職。かねてよりこっそりと育てていたポケモンたちと共にトレーナーとしての道を歩み始めた。現在の妻は教師になって二年目の頃に見合いで結婚したが教師を辞め、旅に出てからも共にセンリの側に寄り添い続けた。わずか２年という早さでジョウト地方のバッジとカントー地方のバッジを６枚ほど手にする。１４枚集めた頃に将来的な禅譲を内定した上で先代のアサギジムリーダーにジムトレーナーとして雇われた。

そして２年後、実力と資質を認められて見事アサギジムリーダーの地位を手に入れ

た。その後はおおよそ中堅クラスの実力を持つリーダーとして活躍し続けたが２００６年にコガネジムのリーダーが隠居した為後継として彼の地に移ることになった。しかしコガネ人の気質と折り合いがなかなかつかず心労をつのらせていった。そして２００９年には偶然にもオーキドのロケット団との密通を知ってしまう。センリは直談判の上、告発することを通告したがオーキドが家族をダシに脅迫。結果、折れてしまった。

その後オーキドはセンリを警戒して遠ざけることを画策。当時人気絶頂のアイドルであり、コガネ側もやぶさかではなかったアカネをリーダーとして擁立し、センリをコガネから追い出す事に成功した（勿論この事はアカネ及び芸能事務所などはあずかり知らないところである）。そしてまた偶然にもトウカシティのリーダーが空きが出たため元の任地であるアサギではなくトウカのリーダーとなった。傍からみれば左遷も同然であった。

本編ではレッドとエリカのホウエン五番目のジムリーダーとして登場。ベテラントレーナーとしての実力を遺憾なく発揮するも惜敗する。恩返しをしたいというエリカの懇願を受けて四年前の事件について告白。その後リーグに出頭して停職一年というリーグ内でも稀な厳しい処罰を受けた。期間終了後はリーダーに復帰し、世論はセンリに同情するものが多数だったためすんなりリーダーの職務にもどることができた。

リーダーとしては他に教師という遍歴からか新人リーダーの教育係を務め、エリカの他にもワタルやマツバ、ナツメ、カスミなどの指導を行った。その為、若手からの人望は非常に厚い。

２０３０年にリーダーの職を引退し、ユウキに世襲。ストレスから解放され穏やかな老後を送っている。

ゲンジ

年齢：８７

趣味：ドラゴンポケモンとの戯れ

特技：不明

紹介

元フスベシティジムリーダー。サイユウリーグ四天王。

イブキとワタルの師匠にあたり、その他にも多くの優秀なドラゴン使いを輩出した功労者。ホウエン地方に生まれ、ドラゴンポケモンに興味を持ち修行を行うが太平洋戦争が起こるとお国の為にと適齢期になった１９４２年に自ら兵に志願した。海軍に所属し砲手として任務を全うした。彼は訓練後すぐに完成間もない大和の乗組員として配属される。その為。レイテ沖海戦や坊ノ岬沖海戦などの激戦で多少の戦傷は負いはしたがどうにか生きて終戦を迎えられた。まさに壮絶な経験の持ち主である。因みに暇

を見つけてはドラゴンポケモンを育成しており、その力を見た上官の要請で数回ほど偵察に用いられたこともあったそうだ。

終戦後は傷を癒してホウエン地方に戻り、えんとつ山やりゅうせいの滝などで修行を続けた。そして１９４８年、戦災でジムリーダーを失い跡目を巡って何年も争い続けているフスベシティの噂を聞き、単身で殴り込みをかけた。彼は圧倒的な力を持って候補者たちを破り、フスベシティジムリーダーの座を獲得したのだった。

その後は五十年以上に亘ってリーダーの座に君臨し続け、ドラゴン使いの育成を図った。何度か四天王推挙の打診はあったが「後進の育成に専念したい」という理由で断り続けていた。しかし、イブキとワタルの実力を見たゲンジはリーダーの座から引くことを決意し、２００４年にホウエン地方へと戻ってサイユウリーグの四天王の座におさまったのだった。

ジムリーダーとしての実力は非常に高く、本来弱点のタイプのヤナギでさえも何度か本気で負けを覚悟したほどの力であったそうだ。しかし四天王になってからは故意なのかそれとも老いたのかややその力は陰りを見せ、平均的な力におさまりつつある。その為、老年で実績もありながらレッドの世代ではシャガやヤナギほどのトレーナーとしての名声はなくなっていた。

本編においてはホウエン最後の四天王としてレッドエリカと戦うも惜敗する。彼は

この後「彼らがいればポケモンの未来は明るいだろう」と日記にのこしていた。

先述の通り、２０１７年で９１歳で亡くなった。ワタルがドラゴン使い代表として別れの言葉を述べ、「師がいなければ今の自分はいなかった」と何度も漏らし、言い終わった後席に戻ると下を向き、霊柩車で送り出す時にはついに泣き崩れたという。一方のイブキは性格のせいかワタルほど感情をあらわにしなかったが告別式の際何度も拳を握り締めこらえていた。

【シンオウ勢】

ナナカマド
年齢：８５
趣味：甘味処めぐり
特技：特になし

紹介
ナナカマドポケモン研究所所長。ポケモン研究会会長。
博物学の教師を勤めている家の子どもにうまれ、研究員を志してコトブキ帝國大學か

ら当時は携帯獣学の泰斗とみなされていたニシノモリ博士直々の推薦を受けた。そして、同教授のタマムシ大学附属生物学研究機関の研究員として抜擢され、大学院生となりそこから研究者としてのキャリアを積んでいった。尚、（旧制）中学から高校時代にかけて戦争の時代を経験したが彼自身は幸いにも兵隊には取られずに済んだものの勤労動員にはかりだされていたという。

戦前より既にみえはじめていたジムリーダーになれるものとそうでないものの差に関する追究を生涯の研究テーマとしており二シノモリの手伝いの傍ら彼自身もそれに熱中し続けた。弟弟子にあたるオーキドとは彼がニシノモリのゼミに居た頃からの付き合いであり、様々な世話を焼いて親交を深めていた。

４０歳となった１９６８年の頃にタマムシ大学の教授となっていよいよ本格的に自らの主題の研究に本腰を入れ始め、自らのゼミ生や親しい研究員の力も借りつつ大規模なトレーナーやポケモンの調査とそれに基づいた統計学や遺伝子学、生理学など様々な学問の見地に基づいた分析と論文作成に身を捧げて遂に１９８３年に学会へ発表できるほどの質に到達した。

しかし、そこで論文発表に待ったをかけたのは最大の貢献者といって過言ではないオーキドである。この頃の彼は完全に正常な感覚や良心を著しく失っており、ポケモンリーグはあくまで自らの手で潰すことをこだわり続けていた。そのため彼はナナカマ

ドの論文をあらゆる手を用いて葬り去らせることに注力した。結果、ナナカマドは自らの生活の糧を失うことが耐えられなかった為忸怩たる思いで論文発表を断念。彼の『天賦戦闘資質論（天戦論）』の理論は日の目をみることはなかった。

失意のナナカマドはふさぎ込むようになり、１９８６年にタマムシ大学を辞去して故郷のマサゴタウンに研究所を構え、コトブキ大学の客員教授の職を得てシンオウ地方の博士として居続けることになった。これ以後彼は天戦論の研究ではなくその過程で得た知見を用いて進化の研究にテーマをかえて進めることにした。

以後彼は携帯獣進化学の権威として名声をほこるようになり、この国の研究会ではオーキドに次ぐ地位を持つ研究者として地盤を固めることになった。

その結果、エンジュ騒乱でオーキドが蒸発した後ポケモン研究会会長に就任することとなった。

本編ではレッドとエリカに御三家のポケモンを渡す役目だけでなくギンガ爆弾の事件のときにいあわせ、そして天賦戦闘資質論という残酷な、しかし歴然とした真実をレッドとゴールドに告げた張本人。後にＰＷＴとイッシュ騒乱の顛末を聞いた際レッドには落胆しつつもゴールドはきちんとその意味を理解し素晴らしい敢闘をみせたのですこしだけ報われたかのような表情をしたという。

２０２１年。９３歳で逝去。葬儀には研究機関やリーグなどから多くの参列者が訪

れ、その長老の死を悼んだ。会長の後釜にはウツギが座った。

スモモ

年齢：17

趣味：食べ歩き

特技：大食い

紹介

トバリシティジムリーダー。

タンバジムリーダーであり格闘家であったシジマの姪にあたり、その影響からかシジマ及びその高弟であるヨシオの師事を受けて2歳の頃にシジマからリオルを譲り受けてそれを最大のパートナーとしながら修行を重ねる。

スモモの父親であるクマオは真面目で温和な会社員であったが兄のシジマがたどった道の苦難さをそれなりに見てきたためスモモが格闘家になることには難色をしめしていた。しかしその才能をみたシジマとスモモ自身の強い熱意におされ、10歳の頃にはじめて格闘家としての正念場の試合にでることを契機にお守りとともに事実上スモモの格闘界入りを認めた。

その後彼女は順調に実績を積み14歳の頃には日本屈指の実力をもつ有望な女子中学生ファイターとして注目されていた。

しかし、この頃に母親のサクラによるヨシオコーチとの不貞行為発覚によってスモモの両親は離婚。この出来事はスモモの人生を大きく狂わせた。

父親は段々と精神が壊れて酒に溺れ、パチスロに興じるという放蕩の日々を送ることになりスモモは父親から最初は言葉、次第に暴力による虐待を受けることになった。しかしスモモはめげることなく精進を続け中学を卒業した後はプロとしての道を歩み始めて２０１２年のロンドン五輪では銀メダリストに名を連ねるほどの域に達した。そしてスモモはその功績を讃えられて丁度前任者が引退して空席となっていたトバリシティのジムリーダーとなった。ポケモンと共に修行を重ねていたためジムリーダーの水準に届くまでトレーナーとしての力をつけるのにさほどの時間はかからなかった。

しかしこのスモモの想定外なまでの出世は却って父による虐待を助長する羽目になった。一番最初に親孝行の証としてファイトマネーの全額を渡したのを皮切りに最初は丁重に、最終的にはジムに怒鳴り込むようになるまで事態は悪化していた。２０１３年８月頃には非公式ではあるがトレーナーからの苦情を受けて副理事長のシロナ直々に改善するよう叱責を食らうほどになっていて仕事にも支障が出始めていた。

両親が離婚して三年が経過し、彼女の精神はリオルの頃から相棒として付き添い続けてきたルカリオのおかげでなんとか保っていたがそれもそろそろ限界と思われるほどに自体は切迫していた。

本編ではシンオウ地方三番目のジムリーダーとして登場。挑戦すると同時にレッドとエリカはシジマに依頼されていた虐待の仔細を聞こうとするもその前に怒鳴り込んできたため自明であった。その後伯父のシジマと二人が臨席のもと会議を行い、シジマの鉄拳制裁によって全ての事は落着した。父親は入院し、スモモ自身も精神を病んでいたため通院することとなった。

その後は半年ほどの通院を経て精神は健全を取り戻し、リーダーとしてもスポーツ選手としても活躍を続けて伯父のシジマにも負けず劣らずの実績を残した。２０２５年頃には第一線から退くことを考え始めておりシジマと同じく養成所を作ることを考えているようだ。因みに結婚はしておらず噂ではパートナーのルカリオと添い遂げようとしてるとかしてないとか……。

クロツグ
年齢：不明
趣味：放浪
特技：アウトドア
紹介
バトルフロンティアバトルタワータイクーン。前シンオウリーグチャンピオン。
一見全国を放浪する風来坊に見えて、実はリーグチャンピオンをも凌ぐポケモンバト

ルの実力者で、現在ポケモンバトルでの頂点に立つとされるヤナギとシャガに最も近い力をもつとされている。

肩書はバトルタワーのタイクーンであるが、強いトレーナーを求めて全国を放浪していてあまりタワーに帰ることはない。元々は特定のジムに所属せずベテラントレーナーとして旅を続けていたが先々代のリーグチャンピオンに見込まれて四天王となり、そこから1996年にシンオウリーグのチャンピオンにまで上り詰めた。実力はあったものの権力にはさらさら興味がなく理事長選挙には出馬どころか面倒臭がって欠席をするというフリーダムぶりで歴代の理事長はほとほと手を焼いていたという。ジュンは身を固めさせようとしたヤナギが裏で見合いの場を整えさせて結婚させた後に生まれた子どもでフタバタウンに居を構えたが落ち着こうとはせず放浪癖はおさまらなかった。

リーグのしがらみに飽きてきたためか2000年代に入ってからチャンピオンの後継者を求めて渡り歩いている最中に大学在学中に首席でありながらシンオウ中のバッジを揃えたというシロナの噂を聞きつけて直々に勝負を挑んだ。勝ちはしたもののその類稀なる才能を見込んで四天王に誘い、そこから4年後の2006年にチャンピオンの座を譲ってリーグを辞去した。そこから更に実力を蓄えて2009年にはバトルフロンティアの全施設を制覇して事実上の長であるタイクーンから禅譲され、タワータイ

クーンの座についた。
　エンジュ騒乱の際はシロナから秘密裏に協力を要請されてフロンティアに所属する全トレーナーを自ら陣頭にたって各軍に送り込もうとするも出発の三日前に騒動が収まった為フロンティア出動はないまま終わった。
　本編ではノモセでマキシを破った後にレッドの前に突如現れた強敵として登場。レッドに対して優勢に戦いを進めるも子どもじみた言い訳を繰り返す彼に嫌気をさして負けを認めて立ち去った。後にジュンと会った際にはレッドを目標とせずゴールドに定めるよう勧めた。
　２０２４年に長年の不摂生や無理がたたって不慮の事故にあい死亡する。

【イッシュ勢】
フウロ
年齢：１８
趣味：大空を飛び回る事

特技：不明

紹介

フキヨセシティジムリーダー。飛行機操縦士。

ナギと同じく飛行機の操縦資格を持つ。イッシュでカミツレと二分するほどの器量を持ち突き抜けるような明るさと鷹揚な性格で人々からは大いに好かれている。

パイロットの家庭に生まれ育ち、小学校、中学校、高校と学を修める。学校では成績は中の上といったところで化学や物理に強い興味を持っていた。学校生活においては天使と呼ばれるほどの優しさを持ち、男子からは大きな人気があった。分け隔てなく明るく接していた為女子生徒からいじめられることもなく充実した生活を送っていた。その為、異性にはあまり抵抗がない。

ポケモントレーナーとしては7歳頃から地道に訓練を重ね、11歳の頃に覚醒してフキヨセで彼女に勝てるトレーナーは一人としていなくなった。その為、13歳でフキヨセのジムリーダーに任命された。

本編においてはレッドの浮気相手として登場。ナギと共に二人をフキヨセまで送った後、アララギの頼みでヒオウギまでフウロが連れて行った。ヒオウギでプラズマ団に敗れて連行されそうになったところでレッドが救出し、それを期にレッドを気にし始め

る。その後、エリカへの恋情が冷めつつあったレッドとの相談に乗っているうちに思いは募っていった。しかし、エリカに遠慮して直接的な行動に出なかった。ところが事もあろうにエリカがタマムシまで緊急で戻った隙にレッドがフウロに告白。レッドはフウロを襲って処女を奪い、自身も童貞を卒業した。

レッドはこうなった以上エリカと別れるつもりで居た。しかし、エリカが帰ってくると途端に約束を反故にしてエリカの元に戻ってしまった。これが先輩にして友達であるカミツレに露見すると彼女は激怒し、全てをエリカに話すよう勧めるがそれでは誰も得をしないと言ってこれを退けた。

かくして、フウロとレッドの関係はひとまず露見されなかったがオーキドによって全てが白日の下にさらされてしまった。フウロはしばらく理解のない人々に白い目で見られていたが事の次第がだんだんと明らかになるとどうにか名誉を回復した。

十五年後は紆余曲折あって同業者のチェレンと結婚しており、幸せに暮らしている。

シャガ

年齢：８０

趣味：ドラゴンポケモンの育成

特技：ポケモンとのスパーリング

紹介

ソウリュウシティジムリーダー。ソウリュウシティ市長。ヤナギと並び称される最強と謳われているポケモントレーナー。ワタルでも勝てるかどうか分からないと自身がコメントしているほどである。

いわゆる地元の名士であり、寡黙な人物でありながら発する言葉は鉛の如き重さがあり、鋭い物があるため多くの市民から慕われている。ドラゴン使いとして幼少期の頃から育ってきたが、ヒウン大学を卒業したエリートである。

１９７７年に行われたイッシュリーグ創設の際に創設者のアデクに大幅な援助を行い、草創期において方々で尽力。最大の功労者と謳われたが、高い地位に就くことを望まず一ジムリーダーの座からは動かなかった。しかし、アデクがプラズマ団に敗北した責任を取って辞任した際にアイリスをチャンピオンとして推薦を受けるがシャガは幼すぎるとして猛反対。結局シャガが後見人を務める形で丸く収まったが、リーグの運営に関して関心の薄いアイリスなので事実上シャガがリーグを動かしているような物である。

本編ではヤナギと並ぶ夫婦に立ちはだかる最後の壁として登場。一度は双竜の誓いなる必殺技で完膚無きまでにの敗北を味わわせたが二度目では僅差で敗北を喫した。

上述した通りシャガは２０１９年に病死している。この頃にはアイリスは立派に成長していた為、最後の数年は半ば隠居のような生活だったという。葬儀には多くの人々

が参列し、一人の巨魁の死を悼んだ。

【オリキャラたち】

ナツキ

年齢：２３

趣味：花を愛でること

特技：不明

由来：原作のタマムシジムにいたジムトレーナーから紹介

タマムシジム副リーダー。元臨時ジムリーダー。

タマムシ大学院植物学修士課程。

エリカの母親の代からトレーナーを務めてきた古株の一人。年下ながらエリカの事は深く尊敬しており、敬語で接している。

大学院に所属しながら副リーダー（一時は臨時ジムリーダー）も務めるという多忙ぶりだが、担当教授からは課外活動扱いで許されているらしい。

幼少のころから植物、特に花を好んだ為地元にあったタマムシジムというのは彼女にとって大きな憧れであった。小学校を卒業し条件を満たした後ジムトレーナーに志願。

トップクラスの成績で合格。エリカの母親が急逝した際は新米のジムリーダーであったエリカの補佐もしつつジムトレーナーとしての仕事を粛々と行っていた。

尚、彼女は三年間トレーナーを務めたのちにタマムシ高校に入学し、放課後の時間を使ってジムに通いつつ、タマムシ大学へ入学するというまさにエリカリスペクトの極みといえる業績を残している。（但し飛び級ではない）エリカの祖母にあたるカルミアが亡くなった直後に長年の功績をエリカより認められてユキコと共に副リーダーにまで昇格する。

性格は温和であるが、締めるときはしっかりと締めるメリハリの良さを持っている。そして、基本的に自分ひとりで抱え込む性質の為、代理ジムリーダーを務めている最中に過労で倒れてしまった。（オーキドの策略でもあったが、彼女の頑張りすぎが最大の原因である）

１５年後は３０歳を以て寿退職。官僚職に就いている男性と結婚し、幸せに暮らしている。副業で花のネット販売を行っている。

ユキコ
年齢：１８
趣味：ポケモンと戯れる事
特技：マネジメント

由来：原作のタマムシジムにいたジムトレーナーから紹介

タマムシジム副リーダー。

タマムシ高校三年生（→タマムシ大学生物学部植物学科へ進学）。

こちらはエリカ着任とほぼ同時期に入った新参者の部類に入るトレーナーだが、頭が良く統率力を持っていたためエリカから重宝された。ナツキの欠点である牽引力の低さを上手くカバーし、エリカ不在時は主にジム全体の会計や渉外に力を発揮した。「とても高校生とは思えない」というのが彼女と接した外部の人間の感想である。

しかし、彼女は野心家であった為あくまで代理リーダーを希望した。しかし、エリカは人に対して辛く当たりすぎるところや少々がさつな所があるのを看破していた為ナツキ入院中もあくまで副リーダーの地位にとどまらせた。

彼女もまたナツキと同じくマルチタスクが出来る人間だったため副リーダーとしての仕事と勉強を見事に両立出来ていた。

性格は明朗で快活。しかし、先ほども書いた通り、人に対するあたりが強いことが散見されるのが欠点である。彼女はナツキほどリーダーたるエリカを尊敬していないが、ジムの事は大事に思っている。

タダヒコ

年齢：故人（享年７４）
趣味：バードウォッチング
特技：不明
由来：軍医の名前より一字ずつ拝借
紹介
タマムシ大学病院院長。エリカの曽祖父。
軍医として育てられ、医者として一生を駆け抜けてきた。タマムシ帝國大學醫學部を卒業後陸軍付の軍医となり、日本各地を転々とした。腕は良く数々の患者を救ってきた。
２５歳の頃にアセビと結婚するが、満州事変に端を発する中国情勢の悪化によって彼も軍医としてかの国へといく事になってしまった。その為カルミアの出生にすら立ちあう事も出来ず彼は忙殺された。
その後は日中戦争や太平洋戦争などで彼は南方の島々からシベリア近くまで各地を転々とし、軍医としての務めを果たした。しかし、救える患者がいた一方、当時の医療技術ではどうにもならない傷や病気などにも多く直面し彼は医者として、一人の男として数々の苦難に直面した。
戦争が終わり彼が導いた結論は「決して我が一族だけはこのような悲惨な目にあわし

てなるものか」ということであった。彼は元々開明的な考え方であったが戦争を経て寧ろ典型的な保守派へと変貌したのである。彼は終戦後より一層仕事に打ち込み、４８歳の頃にはタマムシ大学病院院長の座を手にしたのだ。

これはカルミアの結婚に際して大きな影響が出た事は言うまでもないだろう。身分が保障されていないポケモントレーナーに甘んじているヤナギをカルミアの交際相手とは認めず、自らが認めているオーキドとの結婚を勧めたのだ。勿論彼は娘の意に反することに際して何も感じていなかったわけではなかった。しかし、やがてそれは時が解決するだろうと思っていた。

しかし、１９７８年5月のカルミアの事故後、ふと彼女の日記を読み彼は間違っていた事を強く認識させられることになった。彼は娘に深々と陳謝し、せめてもの罪滅ぼしにとオーキドとの離縁に動き出した。オーキド側も世論の影響や事故を防げなかったことの責などによってカルミア一家との離婚はやぶさかではなかった。こうして１９７８年6月にオーキドとカルミアは離婚することとなったのだ。

その後彼は娘に対する罪悪感を背負ったまま失意のうちに１９８１年にこの世を去った。享年７４。

カルミア

年齢：故人（享年７６）

趣味：花を生ける事
特技：不明
由来：植物のエリカ属と同じツツジ科の下にあるカルミア属から紹介
タマムシジム四代目ジムリーダー。エリカの祖母。
父親は陸軍軍医からタマムシ大学病院院長にまで上り詰めたエリートの医者であり、母親はジムリーダーであった。
先代より受け継いだ焼け野原から形だけの復興を果たしたジムを現在のように百花繚乱華やかなジムにへと変貌させた中興の祖。彼女なくしては現在のタマムシジムはなかっただろうという説もでている。
タマムシ高校在学中であった17歳のころに流行病で亡くなった母のあとを受け継いだ。しかし、当時のタマムシジムは戦災からやっと復興したばかりでひどい有様であった。そこで彼女は私財をはたいて世界中から植栽や種苗を買い漁り厳選したものをジムに飾り付け、もしくは植えつけた。すくすくと成長した木々がジムを彩る十年や数十年先を見据えたこのプランは大成功を収め、タマムシジムは百花繚乱の咲き誇るジムとなったのだ。そして、この功績が認められてタマムシジムはリーグ公認の座を与えられ、2025年現在でも残り続けている。

ヤナギ、オーキド、カツラが初挑戦を持ちかけてきたのはちょうどそのプランの初期段階のころでこのころは小奇麗ではあったがまだ現在には遠く及ばなかったそうだ。尚、オーキドとヤナギの件に関しては両者の項で述べている為割愛する。

滑落事件があったのは作戦が成功を収めつつあった１９７８年の事であった。それから１８年に亘って彼女は植物状態から目覚めることはなかった。その間は娘（エリカの母親）がジムリーダーを務めた。しかしこの頃はポケモンリーグの成長期であり、ポケモンジムも年を追うごとに挑戦者が増えていったため彼女は忙殺。それでもどうにかこうにか元同級生のタマムシ大の教授と結婚までたどりついた。その直後の１９９３年にエリカが誕生するが、多忙の為育児が疎かになってしまう。しかし、エリカ３歳の時にカルミアが意識を取り戻す。１年のリハビリを受けて、エリカが４歳になった時から現在の彼女の基本を形作った徹底的な英才教育を開始。勉学に天賦の才があったエリカはあっという間に小学校中学校高校を飛び級で卒業していき、１２歳でタマムシ大学に入学するという神がかりな偉業を成し遂げたのだ。自らと同じ轍は踏ませまいと貞操に関しては特に強く意識させた。

エリカが１４歳のころに彼女の母親が亡くなると、一時は再び自らがリーダーとなることも考えはしたがこの頃はもう１０代のリーダーが登場していた（ワタルなど）為エリカにリーダーを務めさせることにし、みずからは後見人として監督にあたることとし

た。１４歳の頃のエリカはまさに典型的な箱入り娘。つまり、世間知らずであった為これではまずいと庶民感覚をどうにか身に着けさせようと会計処理や買い付けなどをトレーナーや自らに頼ることを許さず全て彼女自身に行わせた。幸い彼女は数学が出来たためすぐに慣れて１年程度でだいぶ庶民と同等の金銭感覚に近づけた。（おそらく彼女でなければ不可能だっただろう）一年半経過するとユキコに任せ、自らが最終的にチェックする形とした。その他もいろいろなことをエリカに教え、エリカがタマムシ大学の学位授与式を終えた直後に自室付近で倒れてしまった。この頃のエリカはほぼ現在と変わらないしっかりとしたリーダーとなっていた為、カルミアの心残りはエリカの将来、特に交際や結婚相手についてであった。

病床のカルミアはエリカに対して自らが相応と思った男にのみ体を許すようにとだけ遺し、その数日後に息を引き取った。

エリカはレッドという大失敗はあったものの、カルミアのように貞操は失わずに済んだことが不幸中の幸いだったのかもしれない……。

柏木

年齢：２８

趣味：ペットのポケモンと戯れる事

特技：大車輪が出来る
由来：源氏物語に登場する柏木から（というのは後付けで本当は適当です）

紹介

ウツギポケモン研究所研究員。元副所長。
エンジュ大学生物学部携帯獣学科卒業後、ウツギの研究室に入って一番のお気に入り学生として可愛がられた。研究所を立ち上げた際にも資金集めなどで活躍し、副所長に任命される。
研究員としての腕は決して悪くはなく、彼の作り上げた論文はそれなりに評価されており、たまに学術誌に載ったりする。しかし、そんな自分が逆立ちしても勝てないレベルの新人、ツクシが入ったことによって状況は一変。副所長の座を奪われ、ウツギからは圧力とパシリに使われツクシからは非常に気を使われるという情けない状態になってしまった。
１５年後はなんとか研究所に残っているが、真剣に再就職先を探している模様。彼は最早極限状態に陥っているのだ。
未確認情報だが実は宗教を開いているという噂も……？

サキヒサ

年齢：故人（享年２８）

趣味：日曜大工
特技：弁舌
由来：〝サキ〟シマサカキと〝ヒサ〟カキから
紹介
バッジ12枚所有のベテラントレーナー。
トウカシティの家具屋の長男に生まれる。小学校に入るか入らないかの頃、当時一世を風靡していたダイゴに憧れてポケモントレーナーを志すが、初めてサファリで手に入れたサイホーンの世話をしている最中に腕を大怪我した。両親からはこれのせいで反対されるが、それでも彼はめげずに鍛錬を続けた。
しかし、この年のバブル崩壊による未曾有の不景気により、家具屋が廃業。父親は10歳の頃に自殺してしまう。これを見たサキヒサは残った母親だけでも幸せにしようとモラトリアム期間を利用して一時は専門職につこうとした。モラトリアム期間中には4つのバッジを獲得し、トウカの中堅高校に入学、卒業したがなかなか希望する職種には就けずやはりトレーナー、それもジムリーダーしかないと思い直して再びトレーナーとして鍛錬を重ねた。
結果、12枚のジムバッジを獲得し有数のベテラントレーナーとなった。バトルフロンティアなどからトレーナーにならないかという誘いもあったが、やはり彼はジムリー

ダーとして成功することにこだわり続け、１２枚取った後はとりあえずジムで雇って貰うためにホウエン各地のジムで道場破りまがいの事を続けた（結果はナギ、センリ、フウランを除き全勝である）。しかし、逆にそれでリーダーたちはジムの統制に影響を及ぼすなどの理由から萎縮してしまいどこも雇わなかった。

そんな最中、トウカジムで門前払いにされた直後ロケット団より「ジムリーダーになる方法を知りたくないか？」と誘いを受ける。サキヒサは当然良心の呵責を感じたが、藁をもつかむ思いだったので協力することにしてしまった。そして、フエンタウンのいざこざを知って、ロケット団が潜入させた仲居を通じてダイモン側に介入。ダイモンをトレーナーにするため訓練する傍ら、町の有力者にも取り入って対立の深刻化に成功。そして、８月８日、フエンジムでアスナとの決闘に持ち込んだのだ。決闘後、アスナは勝ちはしたものの完勝とはいえなかったため有力者たちはダイモン側についた。その為第二ジムの設立を宣言し、ゆくゆくはアスナの地位を乗っ取ろうと画策したのである。その為、三度目の決闘を有力者縦覧のもとに行い、ダイモンにもトレーナーの才がある事を公然と示すことを最終目的とした。もちろん、ダイモンにトレーナーとしての才は乏しいため、ポケモンはサキヒサのものを貸し、ダイモンのものとみせかけた。

しかし、計画の途上でレッドとエリカが介入。エリカの才知を風の便りやロケット団などからの諜報で知っていたサキヒサはそれを恐れて推薦状提出を早め、アスナを理事

会議にかけることで時間稼ぎをすることを画策。もしも何かしらの処分が下ればそれはそれでダイモン側にとっては有利だ。これは当然向こうを慌てさせたが、元々フエンを気にかけていたダイゴが推薦状の本部への送信を阻止。かねてよりの三度目のダイモンとアスナの決闘は通常通り行われる事となった。

二人の決闘はアスナの胸中を聞いたダイモンが棄権。その上エリカによるダイモン側の不正糾弾によってサキヒサは追いつめられた。自暴自棄になった彼は第二ジムに戻り、レッドとエリカ及びアスナを倒して自らがリーダーになることを企んだ。しかし、その目論見は失敗し、サキヒサは夫婦を前に惜敗した。

観念したサキヒサは事の全容を打ち明けようとしたが、発覚を恐れたロケット団員が吹き矢により暗殺。犯人はすぐさま逃走したため事件は迷宮入りした。（イッシュ騒乱後に逮捕される）

その後、残された母親やサキヒサのポケモンを哀れに思ったダイゴが罪滅ぼしとばかりに最大限の資金援助を約束。サキヒサの宿願は自らの死を以て叶うこととなった。

２０２５年に至るまで、母親とポケモンたちは幸せに暮らしている。

メインパーティ

ドサイドン　♂　レベル８５

ライボルト　♂　レベル７７

ロズレイト　♂　レベル７７
フーディン　♂　レベル７５
ブラッキー　♂　レベル７５
サメハダー　♂　レベル７５
その他
エーフィ　♀　レベル７３
レアコイル　？　レベル５９
ダイモン
年齢：２６
趣味：ポケモンと戯れること
特技：経営
由来：アスナロの花言葉『不滅』から同じ意味の石言葉をもつ〝ダイ〟ヤ〟モン〟ドから
紹介
マツノキ家（アスナとダイモンの家）のもう一つの家業である旅館『松ノ木』の旦那であり、支配人。１１代目当主。
旅館『松ノ木』は元和元年（１６１５年）創業の伝統ある旅館であり、元々二人の先

祖は旅館業を営んでいた。ジムリーダーはあくまで後からのもう一つの家業というわけである。しかし、初代のジムリーダーが長兄であったため、伝統として家長である長兄が代々継いでいき、旅館は長女もしくは次男以降が受け継ぐしきたりになっていた。（父の代は祖父が一人しか子どもが産まれなかったため、結婚前は大叔父が、結婚後は数年の期間を経て母親が取り仕切っていた。大学卒業後から数年母のもとで修行し、２０１３年正月に母から認められ、旦那となった）

しかし、ダイモンはトレーナーとしての才には恵まれなかった。それを見切った父が代わってそれに恵まれたアスナをリーダーとして育てることを決意したのである。ダイモンは渋々ながらも経営者としての道を選び、大学まで経営学部を選択して進学し、卒業した。そして、形式的に２０１０年にアスナと決闘し、アスナがリーダーを継承することが認められた。だが、親戚や故郷の周りの人々には嘲笑われるし、ダイモン自身はどうしてもそれに納得できなかった。その為、サキヒサの登場は彼にとっては地獄に仏のようなものだったのだろう。

先述の通り、計画は失敗し、ダイモンはトレーナー資格を喪失。アスナが改めてリーダーになることが確認されたが、完全に決着がついたことで彼は未練をなくし、旅館経営に専念することにしたのだった。町の人たちも騒動の反省から笑うことはせず、マツノキ家の新たな形として認めることにしたのである。

４年後、３０歳の時に結婚し3児を儲ける。こちらは運良く長兄がきちんとトレーナーとしての才覚を備えていたため、アスナのときのような争いは起きないと見られている。旅館経営も順調でフエン屈指の名物旅館として名を馳せていた。

トシアキ
年齢：４９？（推定では１０８０歳とされているが肉体年齢で表記）
趣味：不明
特技：不明
由来：新政府に反乱をおこした土方歳三と榎本武揚からそれぞれ一字を借用
紹介
カンナギ歴史資料館学芸員。
高い学識を買われて歴史資料館に雇われ、学芸員として働きはじめる。シロナとは卒業論文の手伝いで親交を深め現在でもメールや手紙で時折遺跡についての情報交換をする程度の仲ではあった。
勤務態度は真面目で、その社交性の高さから人気ガイドの一人としてそこそこの名声を得ていた。
というのは表の顔。実は１０００年以上の遥か昔に東国で乱をおこした平将門の御

家人の子どもで真名は藤屋小太郎利明。追討を逃れて北へ行くうちにシンオウ地方に到達。家族は北国の寒さに耐えきれずに次々と凍死または衰弱死をして、１２歳の頃にみなしごとなってしまった。

その後彼は同じく本州の政権や人間に対して恨みをもつ人間で構成される祈祷師の集落に引き取られて自らも復讐を果たす為に日々を修行に捧げた。

それから２０年ほど経った後、彼は祈祷師の中では高位に属する准師長になっておりそして遂にテンガン山でディアルガとパルキアを召喚することに成功するも怒りを買って集落ごと全世界の様々な時代に吹き飛ばされた。

結果トシアキは２０００年代のシンオウ地方に飛ばされて途方に暮れる中、新世界の創造を目論むギンガ団のボスであるアカギに拾われる。その後はアカギに協力しつつカンナギの資料館に潜入して法具や祈祷法のさらなる研究に身を投じて雌伏の時を過ごした。

本編ではハクタイシティにおいてシロナの親しい知人として登場。カンナギタウンにおいてギンガ団に襲われていたがあれはあくまでレッドとエリカにトシアキとギンガ団は敵同士であることを印象づけるための猿芝居だった。そしてギンガ爆弾の事件の後一気に事を為そうとしたが、謎の光によって成就寸前に計画は失敗し、トシアキはアカギやその他主だった幹部と共に一網打尽に逮捕された。マスコミからは千年前か

らの旅人として世間を騒がせたが警察が政府からの要請により一切情報を公開しなかったため次第に忘れ去られることになる。またこれはシロナのカムイヌイナ学説の実証にマスコミの関心が移ったことも一因だった。

その後、トシアキがどうなったかは藪の中で誰も知ることはなかった。

【ネタバレ注意】設定集（世界観編）

【基本データ】※これはポケモンの小説の為小説内に舞台として登場した地方以外についてはデータに含めません。予めご了承ください。

（内国）

国名　日本国

該当地方　カントー　ジョウト　シンオウ　ホウエン

首都　ヤマブキ及びタマムシシティ

人口　約７０００万人

公認ジム数　３２

（外国）

国名　アメリカ合衆国

該当地方　イッシュ（オーレ）

首都　※該当地方外のため記載しません

人口　約４０００万人

公認ジム数　８

1．この世界の偉い人ランキング

内閣総理大臣≧全国ポケモンリーグ理事長＝最高裁判所長官〉国務大臣〉各省事務次官

2．ポケモンリーグと政府の関連性

三権分立は基本的には変わらないが、ポケモンリーグがポケモンを取り仕切っているようなもののため事実上の第四の権力機関とも呼ばれ始めている。

その為、政府はポケモンリーグを警戒しているし、目の上のたんこぶとも思っている。民間に置いておくとどうも不安なのか、何回も国有化法案が提出されるが悉くリーグ側から拒否されている。地方リーグの第3セクター化（地方自治体とリーグの共同出資）も提案されたがそれも拒絶。

リーグが拒否する理由は『ポケモンリーグは清廉潔白でありたい』というのが一番。天下り先にされたりするのを大いに嫌がっている事が伺える。

草創期の頃、リーグと政府は相互不干渉の関係であり、それはリーグ法21条（後述）にも現れている。しかし、1976年に一地方8ジムの原則が確立しリーグの権威や地位が確立すると共に政治家たちは急速にリーグへと擦り寄ってきた。設立当初から国民の人気が高く高潔なイメージのあったリーグと仲良くすることによって自らの人気

を得ようとしたわけである。

結果翌年の変則衆参同時選挙によってリーグを支持する派閥が大勝をおさめた。すると当時の理事長であったヤナギはこれを利用してポケモントレーナーたちの地位を高めるように画策。恩義を感じていた政治家たちは緊密な関係を続けるためにヤナギの指示には出来る限り従った。その結果が１９８０年の教育基本法大改正であり、トレーナー・モラトリアムやトレーナー推薦などの現在に至るまでの優遇であった。そして6月には参議院のもう半数が改選し、当時の国会の実に8割がリーグを支持するものになった。その翌年の4月にポケモンリーグに監視権（事実上の限定的警察権）が付与され事実上のポケモンに関わることの全てをリーグが所管することとなった。

が、この蜜月関係も１９９３年の与党大敗によって崩壊（尚、献金の申し出があるにはあったがヤナギは全て断っている）。以後はポケモンリーグの権限縮小や国営化などを訴える派閥が国会の多くを占めるようになった（これはリーグへの不信があらわれたのではなく、あくまで与党に対する政治不信であった）。この頃にはヤナギは理事長から降りており、当時の理事長も政界をコントロールしようとはしなかった為にワタルの時代まで政府とリーグは対立関係にある。尚、１９９３年の大敗で議員たちはリーグ効果を信じなくなり関係は急速に冷却した。

２０１８年から政治にも造詣が深いシロナが理事長になったため蟠りの解消が期待

されたが２０２５年になっても大して変わっていない。やはり『不偏不党・独立不羈』のスローガンはそういう意味もあったという事である。

尚リーグ法２１条には『携帯獣（ポケモン）に関する一切の諸事はリーグが所掌し、国家機関はこれを基本的に関知しない』と定められており、リーグの独立性が保障されている。これは伝統的にポケモンジムが自治によって成り立っていたことが大きく、その上位機関であるリーグが国に縛られるのはおかしいというヤナギや当時の政府の見解によって決められたものである。しかし、上記の通り政府は茲許においてリーグに対ししきりに国営化とまではいかなくても政府の支援や指示も受けるように要請を受けている。理由としては昨今の不景気や情勢不安によってリーグが機能不全に陥った時に政府がある程度コントロールできないと社会に甚大な混乱をもたらすというものである。しかし、実のところはポケモンリーグが所有するポケモンの利権を狙った建前にすぎないというのがリーグ側の主張である。

ちなみにＳＳ内の法律は、基本的に現実の日本国の法規に則られている。しかし銃刀法に関しては野生のポケモンに襲われることを考慮して、護身用という事と免許さえ持っていれば匕首程度の携帯は認められている。銃の所持は乱獲の未然防止の為、猟師などの例外を除いて認められていない。

3．内国とイッシュの関連性

当初、イッシュのポケモンリーグは内国ポケモンリーグの傘下になる事が企図されていた。しかし、シャガの反対によってあくまで別個の機関として扱われることとなっている。

尚、イッシュ地方から内国へのポケモンの流入はワシントン条約の延長で厳しく制限されている。但し、レッドのヒトモシやエリカのナットレイのように一定の功績をあげているものは例外扱いとなる事が慣習化されている。

イッシュ地方はアメリカという国の一地方であり、他にはオーレ地方というのもあるが、オーレ地方と内国のかかわりはリーグが無いためというのと、人口が少ないため、ほとんどない。（現実で言うならセネガルやレソト【いずれもアフリカ】といった国は一般的に我々にとって馴染み深いでしょうか？　つまりはそういう事です）

ただし、貿易は盛んに行われており、国交も開かれている。政府や企業レベルでは仲の良い地方という事である。

但し、民間レベルでの交流は活発ではない。先ほども書いたポケモンの流入やポケモンバトルが広がったことによる内国からの移民の増加（トレーナーとその家族など）の為、自国国民の雇用や社会秩序の保護と生態系の護持の為、アメリカ（イッシュ）側が入国を１９９０年代から大幅に制限しているためである。

２０２５年に至るまで、イッシュと内国間を交通できるのはビジネスマンやリーグ関係者等の一部に限られている。
ポケモンリーグは長い間これを『バトル発展の阻害』と糾弾して、交通再開をうったえているが叶わずに終わっている。

4．選挙について

まず、理事長の任期が一年を切った時、各地方（カントーとジョウトは同一）のリーグで誰が理事長に立候補するか審議をする。この審議は四天王とリーダー全員が集まった上で行われる。立候補する権利（被選挙権）があるのは理事（実質的に四天王）以上。
四地方合計して三人以上が立候補した場合は、立候補者の所属地方に従い、カントージョウトとシンオウホウエンで選抜選挙を行って、二人まで絞る。（但し、これは１９９７年の選挙以来実例は無い）
その後、各々がたで準備を行い、慣例通りなら１２月の中旬頃、セキエイリーグの第一会議室にて三日間選挙を行う。
一日目……紹介（１時間）→公開討論（２時間討論→１時間休憩→２時間討論→３０分休憩→１時間討論）
二日目……選挙の内容を受けての定例会（各地方でまちまち）

三日目……公開討論（２時間）↓休憩（１時間半）↓バトル↓投票↓選出↓就任式↓晩餐会（出席義務は無し）

５年に一回の儀式の為、大半のジムリーダーは真面目に受けるが、やはり真剣に受けないものもいる。

だが、ヤナギがこの方式を決めて以来一度も予定が狂ったことは無いのだから驚きである。

投票の方式は、立候補者の所属地方以外のジムリーダー票（信任票）＋理事票、総計２９票のうち、多かった方が理事長となる。なお、２０１８年の選挙も含めれば六回連続で一票差の選出となっている。ちなみに２０１８年選挙はシロナとダイゴが争った。

５．ＳＳ内での学制

義務教育は小学校及び中学校の九年。（留年有）

但し、小学校（又はそれに類する初等教育機関）を卒業し、ポケモントレーナーになった場合は最大三年間の猶予が認められる。尚この猶予期間はあくまで猶予であり、飛び入学もしくは一定の功績（殿堂入りやジムリーダー以上になった場合）をあげた場合を除いて免除はされない。つまり、三年間いっぱい使った後は五年間中学校で修学する必要がある。その為実際９割以上のトレーナー志望者はバッジを一定数集めて高校への飛び入学を狙っている。しかし飛び入学は当然かなりの鬼門であるため半分以上は失

敗して中学への入学を余儀なくされる。

トレーナースクール出身者、もしくはリーグ所定の試験に合格した者は小学校卒業後ポケモントレーナーになる資格を授かる。その証としてトレーナーカードが手渡され、任意のジムリーダー又は博士からポケモンも渡される。質はまちまちのようだ。半分ほどは自らの故郷でポケモンを受け取るが一番多いのは御三家が貰えるポケモン博士がいる街の希望であった。その為毎年抽選を行っているほどだ。

そしてその後数年間はトレーナー・モラトリアムとしてその地方を旅する権利が与えられ、獲得したバッジの数によっては中学を飛び越して受験資格または優遇が獲得出来る。高校によってはバッジ5個以上で推薦の場合は面接点を自動的に満点、一般入学の場合は特定の教科を満点にするなどの破格の優遇をすることもある。

トレーナーの道をたどらない場合は5年間中学、3年間高校に通う事になる。半分以上の人は中学で止まり、就職の道をたどる。高校まで行く人は大学まで行くエリートコース、もしくは資格で必要な場合（パイロット等）である。

大学は、体育大学等の単科大学を除けば、内国には（偏差値順に）タマムシ大学（理系寄り）、エンジュ大学（文系寄り）、コトブキ大学、カナズミ大学、ミオ大学、コガネ大学の六大学しかない。

いずれの大学を出てもそれなりの将来が保障されるが、特に先に上げた三大学を出た

人物は官僚や法曹三者（裁判官・検察官・弁護士）、医師などエリートとしての活躍が約束されているようなものである。

但し、難易度ははっきりいって現実で言う東大など問題にならないレベルの難易度である。なにしろ先ほどの三大学で勉強期間が4―5年、他大学でも3年は必要とされている程である。（日本最難関の東大理Ⅲ＝コトブキ大レベル）

ここまで難しいとされている事の最大の証左は、参考書が無いということである。エリカ曰くこれらの大学に受かる王道の勉強法は『辞書を理解し、過去問を解いて先生方や合格者に添削してもらう事』という事である。過去問は傾向を把握するものではなく、論述の練習をするもの。何故なら、出題者は毎年変わるからである。（10年サイクルで元に戻るとか）

しかし、それ以外の大学はそれほど学科試験は難しくないが、実技の比重が重くなる。当たり前だが。

それより上を行くのがイッシュの大学である。イッシュの大学ではこれに加え人格検査があり、一定以上の精神異常が認められれば入学が拒否される。そして、課外活動も重視され、ボランティア活動や地域活動への態度が見られる。

イッシュのヒウン大を筆頭とする名門大学はユナイテッドユニバーサルの連合を組み、連合内での学生交流を開放して自由に行わせている。

ユナイテッドユニバーサルで上位5パーセントの成績を収めたものは、内国への扉が開かれる。（但し、形式上ではあるがリーグ主催の審査がある）

さて、総合大学以外で特筆にあげるべきは、超能力者育成を謳うヤマブキ大学である。この大学に入り、卒業できたものにはもれなく何らかの精神疾患がもらえるという揶揄がされるほど奇怪な噂の絶えない大学である。しかし卒業できたものにはエスパーという人心やポケモンの心を読み取る仕事をする資格が与えられ、一生食って行けるらしい。

6．リーグの組織（内国）上から順番に並べている。

理事長……リーグの長。緊急の場合はジムリーダーや四天王に対し、総動員令を布くことができ、反ポケモン団体の監視権を持つなど強力な権限が与えられる。ポストは1人。

副理事長……理事長より任命される次長クラスの人。理事長の補佐を行う。理事長不在時に緊急事態が起こった際には一時的に理事長の権限が移る。リーグ法では2人まで置くことが出来るが慣例により現在は1人。

理事……地方理事長（その地方のチャンピオン）より任命される。内国のジムリーダー等が法規を犯した場合やリーグ法の小規模改正などは理事会議が理事長より召集

され、その際に投票権を持つ。四天王や元チャンピオンのみが対象。イッシュ含めて18人。理事長選挙の被選挙権を持つのはここより上。

役員……ジムリーダー。地方理事長より任命される。ポケモンリーグの運営に本格的に参与出来るのはこれより上の階級。イッシュ含めて41人（フウランを二人としてカウント）。

特別委員……ポケモンリーグ査察部に属する者に該当する役職。リーグ所属の人間に関する処分を行う際には警察の協力も得つつ、ポケモンリーグの査察部によって徹底的に調べ上げられる。査察部は委員内の推薦と理事長の承認を得て人員が選定される。それが作り上げた資料こそが理事会議での材料となるため大きな権限を握っている。数々の判例から限定的ながら特別委員は警察と同等の捜査権を認められている。（ジムリーダーならジムリーダー個人と親戚に対する捜査権しか認められていない）

委員……リーグの職員。理事長の命令の伝達や会計処理、事業の執行等、実務的な作業を行う。内国のみだと総計で1000人ほどがついている。委員内部でもまた役職の差があるが割愛する。ジムがある街には必ずリーグの支部があり、理事長の命令を受け取ってリーダーに告知したり、リーグからの情報を公開したりするがこの実行も委員たちが行っている。尚、ワタルの時代までは委員に一切の選挙権が与えられなかったが、シロナの代になってリーグ選挙法（2019年にリーグ法から分離させた）の改正

が行われ代表委員に理事長選挙に関してのみ三票の投票権を与えることとした。これは委員の規模が大きいにも関わらず委員会の意志が選挙で直接考慮されない事に対する対案である。

会員……全国に散らばるポケモントレーナーたち。トレーナーカードがその会員証となり、ポケモンセンター等といった宿泊施設の利用料が半額～無料になるなどの特典がつく。もちろん、有効期限がついており、切れた場合は特典が無効になる。更新は五年に一回。とはいっても大半のトレーナーは、五年以内に挫折したり、満足したりで街に戻る為採算が取れない訳では無いのだ。

7．ポケモンリーグの財源

役員以上が得ている副業の収入の１０パーセントほどを徴収している。（例えばエリカならライターとしての原稿料や華道の師範として受け取っている授業料、マツバなら教授の給料、アカネなら芸能プロダクションからのギャラ、ｅｔｃ……）それに加え、各地からの寄付金やトレーナーカードの更新料などもあり、年次ごとにきっちりと公表している。シロナが副理事長に就いてからは積極的な節税や経営の合理化を大幅に行った為毎年１兆円以上の黒字を生み出している。

因みにポケモンリーグそのものでは汚職事件は設立以来一回も発生していない。

8．ポケモンリーグとポケモン研究会の関連

ポケモン研究会とは、研究所を置いている博士や研究員、提携大学を対象とした組織である。会長はエンジュ騒乱前まではオーキドだったが、現在はナナカマド博士である。加入人数は数百名ほど。

そしてそことポケモンリーグの関係は、ポケモンリーグが集めたポケモンのデータ（トレーナーの使用ポケモンの統計等）を研究会に提出し、研究会からは情報料を貰うという間柄である。また研究会側からは分布情報や生態の研究データを受け取って、リーグのポケモン育成論の形成やトレーナーたちへの情報公開を行っている。関係は良好でたまに合同会合を開くこともある。

9．ポケモンマスター計画

２０１３年2月、定例会でワタルによって明らかにされた、ポケモンバトルの更なる普及と、イッシュとの関係改善を目指して立案された計画。

レッドとゴールドを全国を旅させて、最後にＰＷＴで戦わせ、イッシュへの関心を大いに高める事を目的としたものだ。しかし、肝心の試合が散々なものだったせいと、オーキドに全て利用されていた事でワタルは続行を断念。イッシュ騒乱から3カ月後の２０１４年１１月に廃止を宣言した。

しかしイッシュ騒乱が起こったおかげで、内国とイッシュが初めて連携を取れたため、結果的に若干の関係改善が見られた。骨折り損のくたびれもうけというほどでは無

かったという事である。

１０．ポケモンセンターやフレンドリィショップとリーグの関連

ポケモンセンターに関しては、国営企業で厚生省の傘下におかれていた。しかし、昨今の政府の縮小化の煽りを受けて１９９５年より第３セクターとなった。宿泊施設のサービスを開始したのは、その頃からである。対してフレンドリィショップは大企業が共同出資し、「販促協会」として全国各地におかれたという経緯を持つ。百貨店はまた別の経緯なので割愛。

ポケモンセンターは、西洋で啓蒙思想とほぼ同時に起こった「ポケモン博愛運動」の波が広がったことによって、欧米諸国に近づこうと努力した明治期におかれた。対して、販促協会は１９５３年の成立と、両方ともそれなりの歴史をもっている。

エリカも言及していた通り、内国のフレンドリィショップとポケモンセンターの仲は官民の対立のせいかあまり宜しくは無い。

ポケモンリーグはその間に立ち、双方とも関係は良好である。

ダイゴ以降の理事長はイッシュを見習って、統合を図ろうとするもことごとく失敗に終わっている。シロナの代になると、独立不羈を謳うようになってしまった為、癒着を防ぐという理由で一切かかわらなくなるようになってしまった。

その為、２０２５年では三者ともに微妙な状態が続いている。

11．この世界の歴史

先史時代～太古→人類が登場する以前はポケモンたちが世界を支配しており、種族間での争いが堪えなかった。人類も原人の時代まではポケモンたちに蹂躙され細々と生きていくしかなかったが旧人の時代になると拙いながらも言葉を話せたり、火を武器にするなどポケモンたちから自身の生命を守る術を身に着けた。新人の時代になると火以外にも鋭利な武器を製作するようになり最終氷河期をすぎると人類は文明を創り始めたのである。

古代～中世→遺伝子に刻み込まれた恐怖からかポケモンは得体のしれない化け物として人間たちによって徹底的に隔離され、人は基本的に一般の生物を利用した。ローマ帝国やモンゴル帝国など一部の帝国はポケモンを有効活用したがこれは金と人を大量に割ける大国だからこそ出来た業であった為ほとんどの国ではやはり忌み嫌われる存在に過ぎなかった。

15世紀→火薬や火砲の出現・普及により人はポケモンに優越するほどの大きな武器を手に入れた。ここから少しずつではあるが現代まで連なるポケモンとの関わりが始まる。

１８世紀後半→産業革命や科学革命の進展によってポケモンに対する研究が一気に進んでいった。それと共に博愛運動の進展によってポケモンとの共生を図る思想が普及。人類とポケモンとのかかわりが本格的に始まった。しかしバトルをするというところまではいかず農耕や雑用に使うというのが主流である。

１９世紀～２０世紀前半→１９０３年にモンスターボールが発明されポケモンの安全性が立証。ポケモンのペット化や家畜化が進んでいく。その上、少しずつポケモンバトルが日本を中心に方々で行われる。これは資源が乏しかったかの国がポケモンを以前より有効に使っていたことが大きい。

内国におけるポケモンジムの出現は関所が廃止され、旅行が自由になった明治時代以降から。最古はヤマブキで次にタマムシ。

２０世紀後半→日本でポケモンリーグが設立されたことを契機に各国で次々とリーグが設立されジムの組織化が進んでいく。しかし各国においては政府とリーグのパワーバランスが大きな問題となり、国によってはリーグが即座に潰されてしまう事例も出てくる。

２１世紀→シロナが理事長について『ＩＬＦ（国際リーグ連盟）』の設立が提唱され、任期ギリギリの２０２７年に成立。ポケモンバトルがいよいよ国際化され、ポケモントレーナーはパスポートのみで加盟国を行き来できるようになった。そのかわりトレー

ナーの認定要件は厳格化される。（これにより日米間の通行問題も解決された）

12．タマムシジムの歴史

初代　ドウダン（在任1870―1906）（1828―1906）　黎明期

創設者。ジム唯一の男性ジムリーダー。

明治維新に伴い、一家が御用絵師や茶道、華道指南役などを廃業に追い込まれる。しかし彼はそこで諦めなかった。明治二年（1869年）に太政官布告によって関所が廃止され江戸時代より流行していたポケモンバトルの更なる隆盛を見んだ。そして隣接のヤマブキシティでポケモンジムが設立されたことを受けて1870年に設立された。

これは世襲ジムとしては最古、ポケモンジム全体から見ても二番目の歴史を持つ結果となった。

華道や茶道などで培った芸術センスを基に植物や芸術品を飾り付け、バトルをする場所というよりは上流階級の社交場として独自の地位を築き上げる。

また彼は当時西洋から入ってきた美しい花々の種苗を買い、自らの屋敷で育て、それを売ることによってジム以外の収入を得ていた。やがてその事業は大きくなり、20世紀に入るころには世界有数の種苗会社となっていた。エリカに至るまでその会社は続いており、一族の主要な収入源となっている。

結婚はしたが女性しか産まれず、以後のリーダーは全員女性となった、

二代　アゼリア（在任１９０６―１９４５）（１８８１―１９４５）発展期↓破壊

タマムシ帝國大學理學士（植物学専攻）。これ以後は女性。

就任後しばらくは唐突の任命だった為右も左も分からない様子であったという背景があり、先代の様式を踏襲。

しかし、カントー大震災（１９２３年９月１日）によってジムが全壊。再建時に彼女はこれまでの総合芸術クラブのような様式を改め、華道がこの家の本分であった上に父の建てた種苗会社を更に発展させる為、植物中心の装飾に大幅転換させた。これが以後の様式のテンプレートとなる。

反対も決して少なくはなく、一時は分裂に追い込まれたが彼女は負けずに自らの様式をやり通した。

大事に育ててきた邸宅の植栽の大半をジムに植え替え、大幅に新しい木や花を植えることによって以前にもまして壮麗なジムへ変貌し、いつしか米国のＴＩＭＥ誌に『東洋の植物園』と絶賛されるほどとなった。因みに男子禁制のルールが作られたのはこの頃であり大正デモクラシーに伴う女性の地位向上の思潮が現れている。

１９３０年代以降は国そのものが戦争の道へと突き進んでいった。壮麗すぎたタマムシジムは「贅沢だ」と国粋主義者を中心にタマムシジムに対する非難が殺到し、遂に

タマムシジムは１９３８年１０月に閉所へ追い込まれた。

しかし彼女やトレーナーたちはそれでも植栽の管理を怠らず誰も挑戦に来ないジムに毎日水やりや肥料などの世話を欠かさなかったという。

やがて日本本土への空襲が激しくなるとタマムシジムは度々戦火に見舞われ、１９４５年５月２４日―２５日のタマムシ及びヤマブキへの大空襲でジムは焼失。アゼリアはジムの植栽を守る為に消火活動に勤しんだが建材の下敷きになって亡くなった。

三代　アセビ（在任１９４５―１９５０）（１９０７―１９５０）再建

タマムシ帝國大學理學博士（植物学専攻）。

先代の焼死に伴い５月に就任したが終戦まではそれどころではなかった。

終戦直後からジムの再建を始めるが物資不足が目立つ中で、ジムの再建は非常に厳しくいくら財産があってもなかなかこぎつけることは困難だった。それ以前の問題に金満家であったこの家は戦災孤児への支援や戦災による被害に遭った人への支援などを行っておりジム再建はその先の課題だったのだ。

１９４９年に漸く再建を果たしたが、空襲の被害は非常に深刻であり、植栽はほとんど燃え尽きてしまっていた。その為ジムの再建は果たせても戦前のような壮麗さからは程遠い殺風景な有様であった。

過去の栄光を取り戻そうと本格的な復興に向けて努力するが翌年に過労と流行病に

よって亡くなった。ジムの復興は次代のカルミアに引き継がれた。

四代　カルミア（在任１９５０―１９７８）（１９３３―２００９）発展期

タマムシ大学生物学部植物学科卒。（タマムシ大学は１９４７年に大幅な改革がなされた）

アセビによって再建されたジムを戦前と同様かそれ以上なほどに復興を果たして見せた中興の祖。

オーキドとの仮面夫婦生活への鬱憤をはらさんとばかりに趣向が凝らされたジムは各界からの称賛を受け、タマムシジムはリーグ公認の座を手に入れたのだ。（その他詳細は登場人物編へ説明を譲る）

尚、カルミアの代でポケモンリーグが創設されジムの業務が増加。その為本業ともいえる会社の経営に手が回らなくなっていた為株を半分売却（投資者を増やして経営を監視させる為）の上経営権を社員に譲渡した。

五代　スズノメ（在任１９７８―２００７）（１９５７―２００７）停滞期

タマムシ大学生物学部植物学科卒。

カルミア滑落事件に伴ってリーダーに就任。しかしこれまでのリーダーに比べるとやや凡庸であり病弱であった。

その上、リーグの成長、ジムの統廃合が進んでいった時期であった為増える挑戦者へ

の対応、それに伴って増えていく重圧に堪えるのに精いっぱいでありノイローゼ気味になることもしばしばだったという。その為、この時期のタマムシジムはリーダーよりもジムトレーナーが奮起して地位の保全やジム内の統制に尽力した。

タマムシジムの停滞期にあたり、先代までの発展に比べれば目立った業績は無い。その上、カントージムリーダーの中では最弱の烙印を押され『タマムシジムは休息の地』などという不名誉な評判がたってしまった。

六代　エリカ（在任２００７―２０１３，２０１４―２０７７）（１９９３―２０８５）

最盛期

タマムシ大学生物学部植物学科卒。

秀才、天才が多かったこの家系の中でも特に抜きんでた才と容貌をもったジムリーダー。そして唯一全国を旅したタマムシシティのジムリーダーであった。タマムシジムのまさに最盛期を築き上げた人物といって過言ではないだろう。

ここまでは確かにリーダーとしての能力は優れていたが、ポケモントレーナーとしての実力はタイプの都合で平均かそれ以下であった。しかし、彼女は全国を旅した経験を活かして高度な戦術を編み出し、全国屈指の頭脳を存分に発揮した戦い方でタイプ差をものともせず数々の強者を下した。

この意味においてエリカは異色であり、先代の汚名を見事に返上し、全国のジムリー

ダーの中でも決して引けをとらない実力を見せた。（その他詳細は登場人物編へ説明を譲る）

１３．リーグ法について

リーグ法とは初代副理事長のカツラ主導で作成されたリーグ全体を取り締まる法規である。全部で百五十一ヶ条設定されており、リーグの設立趣旨や組織、賞罰などが事細かに規定されている。

設立からしばらくは選挙に関する記載がなかったが、１９８０年代後半になって制定された。これに関してのみヤナギが舵を切って作成した。

これまで綴ってきた世界観のうちリーグに関するものはリーグ法を根拠としている。

これを破った事が発覚した場合は理事長か当事者の請求により即座にリーグの査察部による調査を受け（刑事事件に該当する場合は警察も）早ければ２４時間以内、遅くとも半年以内に所属地方の理事による会議（理事以上の事案、下記に記載する停職以上の処分となる可能性があるものは全国の理事を召集する）にかけられ評決によって処分が決まる。以下に処分の詳細を載せる。（対象は役員以上。委員や会員はこれの簡略版）

処分なし……そのまま。無実の場合や極めて軽微な場合、被害や損害が発生してないなどの罰するほどのことでもないと判断されたケースのみ適用される。

訓告……一番軽い処分。その名の通り理事長もしくは副理事長直々に厳しく叱責を受ける。それ以外の処分はなし。

戒告……訓告の次に軽い処分。訓告と同じだが3か月～5年の減給処分が併科される。減給期間及び金額は情状により上下する。（第三話でワタルの受けた処分がこれ）

停職……1か月～5年にわたりジムリーダーもしくは四天王・チャンピオンとしての活動を禁止する。大抵は同じ期間の謹慎処分も併科。当該期間は査察部の監視下におかれる。但し臨時リーダーという形でジムトレーナーをリーダーにすることは認められる。

有期剥奪……1か月～10年にわたりジムリーダーもしくは四天王・チャンピオンの資格を剥奪する。停職との違いはこの場合代理をたてようとジムそのものが営業停止になり、四天王やチャンピオンの場合は理事会議と理事長選挙への投票権を喪失する。尚これより上の処分を受けた場合は永久に理事長選挙への被選挙権を失う。

永久剥奪……永久に役員（ジムリーダー）以上になる資格を喪失する。ジムは即座に公認資格を剥奪される。レッドがこの処分を受けている。彼の場合事実そのものは大したことはなかったが、影響が非常に大きなものだった為計画を丸つぶれにされた責任をとらせての処分である。一応復権の規定はあるものの、実例は無い。

懲戒永久剥奪……一番重い処分。永久に会員以上になる資格を喪失し絶対に復権は

されない。いわゆる永久追放処分。会員以上になることが出来ない為ポケモンバトルで対価を得る行為やジムの挑戦などが出来なくなる。委員以上でリーグから給与をもらっている場合退職金を受け取ることはできない。（永久剥奪以下はもらえる）尚、２０２５年に至るまで役員以上で設立以来この処分を受けた者はいない。

処分の基準は明らかにされていないが、罰金刑以上の判決が出た場合は有期剥奪、実刑（執行猶予なしの懲役（禁錮）刑）以上の判決は永久剥奪以上に相当するというのがこれまでの慣例である。処分の七割は戒告以下でジムトレーナーにまで影響する有期剥奪以上の適用は極めて慎重に行う傾向にある。

尚、理事会議で処分が決まっても刑事裁判に依拠している場合は即座に執行されず、予想されていた刑よりも著しく変わっていれば再度会議が行われる。（たとえば罰金刑と予測されていたのに実刑がくだった場合など）刑が確定するまではリーグの処分は執行してはならないとリーグ法には定められている。

リーグの権威がまだ安定しておらず公認ジム争いが熾烈であった１９８０年代前半までは重大な事犯が頻発していた為有期剥奪以上の処分もたびたび下っていたが、２１世紀に入ってからはだいぶ落ち着いてきており剥奪処分が役員以上にくだることはなかった。だからこそレッドが永久剥奪処分を受けたことはかなり異例の事態なのだ。

ただこれも役員以上つまりリーダー格以上の話であり、母数の多い役員や会員クラス

では度々重い処罰がくだる。しかし、これは理事会議で取り扱うことではなく、委員内の処遇・人事部で決める事の為割愛する。（レッドはチャンピオンの称号を持っていた為みなし役員扱い）

リーグ法の改正に関しては重大なものに関しては役員以上全員の会議のもとの議決を要するがそうでないもの（細則の変更など）に関しては理事会議のもとで評決をする。改正案を提出できるのは役員以上。しかし、保守的な理事長が続いたためワタルの代までは大規模な変更が行われなかったが、シロナの代になって法典の整備と大幅改正が行われるようになった。（リーグ法を本法［リーグの在り方についての法規］、事業法［組織に関する法規］、選挙法［選挙の運営・手法に関する法規］、手続法［賞罰、人事関連に関する法規］、財政法［リーグ全体の会計に関する法規］の五法に分割。委員の人数調整や役員以上に関しても認定要件の厳格化などを行っている）

１４．トレーナーの現況と格について

学制の項目で触れたとおりポケモントレーナーは法律上特別な優遇を受ける。

この世界においてモラトリアムを利用する小学生は４割を占め、全国で毎年４０万人ほどが新たなトレーナーとして旅立っている。しかし、その中の実に半分がバッジ一つを獲得する前にリタイアし、中学へと入学する。

この理由としては最初のバッジを獲得するまでの厚い〝壁〟が大きな理由としてあ

げられるだろう。ポケモンを懐かせ、技を覚えさせ、バトルで有用なものにする。そこまでの過程が非常に大きな課題なのである。旅立つまでにポケモンの扱いに慣れていたとしてもポケモンバトルともなれば話は全く別な為、それに向くように育成するまでに初心者トレーナーは大変な苦労を強いられるのだ。

この壁を乗り越えられずに多くのトレーナーの卵たちがそれを孵らせることなく辞していく。期間も問題で、最初のバッジを獲得するまでには普通はおよそ半年かかる。これを苦にして辞めていくものも少なくない。リーグの集めた統計によれば挫折するものは非トレーナーズスクール出身者が多い。が、これはバッジ5つまでの傾向であり、6つ以上は才能と実力の世界になるからかスクール出身者であるかどうかはそこまで差異がない。最も差が開いているのはバッジ一つ未満で2，5倍もの開きがある。

また2つ目以降のバッジを獲得するのも同じく壁がある。リーダーが強くなるにつれてトレーナーに要求される練習量や戦闘の場数も指数関数的に増加。それだけでなく技の構成や育成方法など考えなければならないことは多くなりまた複雑化していく。これでまた耐えられずに辞めていく者が多く、4つ以上のバッジを獲得できるのはさらに半分になってしまう。4人に3人はバッジ2つ以下時点で辞めていくのだ。

このような事情があるため、高校及びトレーナー界ではトレーナーの格や優遇をバッジの数で決めている。以下にそれを示す。カッコ内はモラトリアム期間（三年）内での

達成率の平均値。平均期間はトレーナーとして鍛錬していた期間であり就学期間は含めない。

1枚↓トレーナーの大きな壁を乗り越えたとして、宿泊施設での優遇がある事も。最低限の素養を押さえたトレーナーとして認められる。ジムトレーナーの雇用条件としてもリーグ法で定められている。（49．7％）平均期間半年

3枚↓一人前のトレーナーとして認められる。宿泊施設での割引が強化。一回限りで無料になることも。現行の教育基本法では高校の受験資格を与えられるのは一律でここからとなっている。中堅高校の受験資格は三枚以上が多い。3枚を一年でとって残りの二年を受験勉強などにあてる事が普通レベルのトレーナーたちの目標である。その為ここでリタイアするトレーナーも数多くいる。（24．6％）平均期間一年

5枚↓エリートトレーナーと認められるのはここから。ほとんどの高校で受験資格を得ることができる。モラトリアム期間内では普通のトレーナーでは死に物狂いで努力しても5枚が限界というのが定説。中堅・中堅上位の高校では優遇措置をとられる事が多い。（11．2％）平均期間五年

7枚↓エリートトレーナーの中でも上位に。トレーナー内でも有望なトレーナーとして見られるようになる。事実上モラトリアム期間内での頂点に位置するトレーナーであるため難関校や名門校でも優遇措置をとってくれることがほとんど。一部の企業

では推薦入社の声がかかることも。（０．８％）　平均期間八年

８枚↓別格扱い。８人目にあたったジムリーダーは本気に近い状態でバトルに臨む為突破することが非常に難しいとされている。１年に１人～５人程度。０人の年もままある。リーダーが弱いとされているジムであってもジムトレーナーが阻む為事情はほぼ変わらない。周知の通り８枚揃えばポケモンリーグへの挑戦権が認められる。また、他地方への冒険が認められるのもここから。８枚ともなると進学よりもトレーナーとして上を目指すものが多いのと数が少ないため８枚専用の高校の優遇措置は無い。因みに各地方のジムリーダーは最低でもバッジ８枚相当の実力があるとリーグ法ではみなされている。（０．０５％）　平均期間十年

９枚以上↓ベテラントレーナーと認められるのはここから。８枚以上獲得したトレーナーに対してリーグは通常のポケモンバトルと同様に戦うことが認められている為本気で臨む。これまでのジム戦とは全く難易度がかけ離れる為モラトリアム期間内での達成者はゴールドやシルバーなど極々少数。（ほぼ０％）　平均期間十五年以上

ベテラントレーナーやエリートトレーナーの大半はモラトリアム期間を超過して条件を満たした者である。事情は様々であるが猶予期間を過ぎたら免除された場合を除いて義務教育を修了しなければならない。飛び入学を認められた場合でも高校を卒業する義務がある。その為、中学若しくは高校を終えてから再びトレーナーへの道に戻

る。エリートトレーナーは9割近くが、ベテラントレーナーに至っては9割9分9厘が達成時点でトレーナー歴4年目以上の人間である。

ポケモントレーナーの就職先や職業はポケモンレンジャーやブリーダー、ジムトレーナー、ポケモンコーディネーターなど数多く用意されている上に、バッジを多く持っていれば賞金などを稼ぐことも容易いのでモラトリアムを超過してトレーナーを続けていても多くは食いっぱぐれない。しかし、食いっぱぐれないというだけで一部を除くと多くがポケモンの維持費、賞金の支払い、自身の生活費、税金などなどで困窮している。本編内で出てきたサキヒサでさえもまだ恵まれている方である。特に問題なのはいわゆるベテラントレーナーと呼ばれるものの就職である。ジムでは実力がありすぎるが故に殆どの場合は雇ってもらえず、バトルフロンティアなどで就職したとしても多くは非常勤や期間雇用の為安定しているとはいえない本来ポケモントレーナーは強さを追い求めるべきものというのに、寧ろ八枚以下のトレーナーの方が就職先に恵まれるというジレンマはリーグの抱えるもう一つの大きな問題である。

モラトリアム期間の延長も叫ばれているが、義務教育の修了年齢（18歳）をこれ以上引き伸ばすことはできないとして政府は頑として受け入れていない。

またポケモントレーナーは別に小学生でなければなれないということはなくモラトリアム期間外なら義務教育を修了さえすればいつでもなることは出来る。21世紀に

入ってからは中高年が脱サラしてポケモントレーナーとして一花咲かせようとする事例も多くある。

15．ジムリーダーについて

ジムリーダーは街の看板であると共に当該地域のポケモン関係における中枢として社会的責任を持っている。その為強さと共に社交性や精神的な強さが多分に求められる職業である。

以下にカントージョウト＋αのリーダーたちを例になるまでの経緯について分類をあげる。

A　世襲（親族からリーダーの職を譲られる）……エリカ、アンズ、カスミ、ハヤト、アスナ

B　禅譲（親族以外のジムリーダーから資質を認められて譲られる）……ワタル、ツクシ、イブキ、センリ

C　推薦（他ジムリーダーなど役員以上又は地域からの推薦）……ミカン、シジマ、ヤナギ、カツラ、ナツメ、マツバ、アカネ、シャガ、フウロ、ゲンジ、ナギ、タケシ

D　認可（ジムを新規に設立もしくは申請してリーグから認められる）……マチス、グリーン

当然だが以上の分類のいずれに関してもリーグの審査を通らないとリーダーになる

ことは出来ない。一番に問われるのはリーダーのトレーナーとしての実力である。リーグ法では『役員（ジムリーダー）は、バッジ8枚以上。理事（四天王）はバッジ10枚以上の実力を常に保持しなければならない』と規定されているため、リーグの審査の際には三人以上の手加減なしのいリーダーと戦い最低でも全ての戦闘で3体以上のポケモンを倒す必要がある。ただ、当然戦うリーダーに関してはきちんと調整されており理事（四天王）以上の経験者、もしくは打診された者とあたることはない。つまりヤナギやグリーンにあたることはないという意味だ。人物面に関しては前科が無いことは勿論。その上で三週間、リーグ所定の素行調査にひっかからなければいいとしている。噂では興信所を使っているらしい……。

　上記の審査をパスしてめでたくリーダーになるとジムに補助金が支給されるようになる。この補助金がまた巨額で、新規設立の場合は最大五十億円（既存のジムを改装する場合は十億円が限度）。維持費の名目で毎月５０００万～三億円が支給される（額は施設やジムトレーナーの数などによって上下する）。リーダーたちはこの資金から自身やジムトレーナーたちへの給料。設備費用、水道光熱費、租税公課などを捻出している。因みにこの補助金だけでリーグの支出は７００億以上にのぼっているがリーグの収入は毎年三兆程度あるため大した負担ではない。またエリカだけでなく世襲ジムリーダーは代々続く地元の名士でもあるため補助金なしでも十分に経営出来る故に一切受

け取っていない。これだけ高額にしているのは公認のリーダーたるものみすぼらしいなりや振る舞いをされては困るという初代理事長のヤナギの矜持もあり、その他にはリーダーという地域の模範たる人間が経済絡みで事件を起こされるのは困るというのもある。その為役員以上にはパチスロは当然の事、カジノも含めた一切の賭博行為を禁止している。（但しＦＸや株などの投資については投資額や財政状況を申告するならば許可している。あまりにも損失が大きかったりギャンブル同然の運用をしているならば是正勧告が出され守られなければリーグによる処分が下ることもある）

年収はミカンのような小規模ジムでも一億円以上。最高額は言うまでもなくエリカの約三十億だがジムリーダーとしての収入ならばヤナギの十億円。平均は三億五千万円程度という。

また、社会的地位が非常に高いため未成年で就任しても民法上でも成年として扱われるようになりクレジットカードの申し込みやローンの申し込みなどができるようになる。因みに八割（残りは単にカードを使わないというだけ）がプラチナカード以上の保有者であり、ワタルやシロナに至ってはブラックカードホルダーらしい。アカネやエリカも持っていそうだが前者は典型的な成り上がりであるためもう少し時間が必要であり、後者はあと数年待てば自動的にブラックカードの最高峰に当たるセンチュリオンカードが持てる為とかなんとか。ブラックセンチュリオンカードはリーグ全体を見渡

してもダイゴ以外は誰も持っていない。

過去編　玉虫色の一族（前編）

話は今から５０年以上遡る。

卒業記念で貰ったポケモンを片手に修行をし、タマムシシティジムを破ったオーキド、ヤナギ、カツラの三人はジムを制覇する為にカントー、そしてジョウトを渡り歩く。

そして、二人は制覇したことを一番最初に戦ったリーダーであるカルミアへ報告するためにタマムシシティにいた。カツラも破ってはいたが、私事で忙しいという理由で断られた。

―１９５７年　２月１０日　午後２時　タマムシシティ―

タマムシシティで二人が別れてから三年近くが経過した。

オーキドは研究の資料とするために数多くのポケモンを捕獲して観察を行い、研究者としての経験を積み、バトルに勤しんで動態に関する調査も行った。しかし、彼は万能であった為についでであるはずのバトルでもかなりの実力を誇っていた。（ジムはカントージョウト＋α程度）

一方のヤナギはポケモンバトルに重きを置き、強いポケモンを求めて内国中を渡り歩

き、既存のジムを全て撃破した唯一のトレーナーであった。（現在非公認となっている地方のジムも突破しているため唯一なのだ）

今現在ヤナギの主力となっている氷ポケモンはこの時期に捕まえたものであるが、その他のタイプも数多く取り揃え、内国中で彼に勝てるトレーナーは居ないのではないかとトレーナー界隈では囁かれている。梅檀は双葉より芳しの言葉通りヤナギは頭角を現しつつあったのだ。

カルミアはオーキドから連絡を受けて男子禁制のジムではなく喫茶店で受ける事としたのだった。

この当時、オーキドとヤナギ、カルミア三者共に２４歳であった。

―同時刻　タマムシシティ　噴水前―

「おーいヤナギー！　こっちだ！」

オーキドは爪先立ちして手を大きく振りながら自分のいる場所をヤナギに示した。

さすがに休日であるだけに人通りが多い。ヤナギは群衆をかきわけてオーキドのもとへと向かった。

「ふう……。全く久々にタマムシに来たと思ったら相変わらずの賑わいだもの。参っちゃうよ……」

ヤナギはため息をつきながら言う。

「まぁそういうな。これもタマムシの風物詩だ。なかなかここまでの賑わいを見ることは出来ないぞ」

　オーキドはタバコをふかしながら言う。１９５０年代。それは東京、もといヤマブキおよびタマムシへの集中がはじまった頃である。特にタマムシは住宅地としての需要が高くよりその傾向は顕著であった。

「まぁそれもそうだけどさ……。さてと久しぶりだね。オーキド君」

　ヤナギは一礼して言う。

「かれこれチョウジ以来だったか……。ヤナギは相変わらずのようで何よりだ」

　彼らは旅している最中、ヤナギの故郷であるチョウジにてばったりと会いそのついでにバトルをしていたのだ。オーキドは言い終わると吸殻入れにタバコを投げ入れ、もう一本の煙草に火をつけた。

「そっちもね。さてとこれからどうする？」

「一つ寄りたい所があるんだ」

　オーキドは煙を吐きながら言う。

「ん？　どこ？」

「喫茶店だ」

「喫茶店……？　どうしてまた」

ヤナギは神妙な顔して尋ねる。
「嫌か？」
「嫌っていうか……君普段行くところと言ったら映画館とかシガーバーとかジャズバーとかそういうとこじゃん。急に趣向を変えたら誰でも気になるよ」
当時のオーキドはタマムシ大で二番目か三番目程度に忙しいといわれる携帯獣研究課程に入っていたためそのストレスを紛らわすためかテスト終わりに有り余る仕送りの金をそういったところで発散していた。ちなみに喫煙をはじめたのもその為である。
オーキドはとても気前が良かったため十人程度連れ添っては全部支払うという事を何度も繰り返していた。だから苦学生であるヤナギもおこぼれに預かれたわけだが。
「ふ……ま、それもそうだな。実はな。カルミアさんと待ち合わせているんだ」
オーキドは決然とした表情で言った。
「カ、カルミアさんってあの？」
ヤナギは初めて挑んだ時のことを思い出しながら言う。少し瞳孔が開いていた。
「そうだ。せっかく戻ってきたんだし報告の一つでもしようと思ってな……」
「そうなんだ……。でもいいの？　僕が行って」
「いいんだよ。今日会うことは分かってたし、ヤナギも来ることは伝えてあるから」
「なるほど。そういう事か……。分かった。僕も行くよ。久しぶりに会ってみたいし

「……」
「うむ。じゃあ行くか」
　オーキドは二本目の煙草を投げ入れて前に歩み出る。
「ねえ、オーキド君」
　オーキドはヤナギの方に振り返る。
「どうしてそんなに緊張してるの？」
「は……はぁ？　何言ってんだおめ」
　オーキドはやや動揺したふうに返す。
「だってなんかしゃべり方がいつもと違ってなんか堅い気がするしさぁ……。それに君、普段はもっとタバコ長くのにやたら短いもの」
「うるせえな。そんなのお前の主観だろ。俺は緊張なんかしてねぇ！　行くぞ」
　そう言いながらオーキドは足を鳴らしながら喫茶店の方向へ向かう。あまりの威迫による群衆の表情もやや怯えているように見える。
　ヤナギはため息をつきながら
「はぁ……ほんと。相変わらずだ」
　と言いながらゆっくり後に続いた。しかしその表情はかわらぬ友人を見てどこか安堵した表情であった。

―午後2時30分　喫茶店―

10分ほど歩いたところに喫茶店はあった。

個人経営の店なのかこじんまりとしていたが、アンティークな机や椅子、カウンターなどが置かれており、店主が老齢なせいか明治や大正の気風もうかがわせるノスタルジックな雰囲気の店である。

オーキドは窓側の席をとる。

「まだ来てないみたいだね」

「約束は15時と決めているからな……。ま、早いに越したことはないだろ。じゃあ俺はちょっとトイレに。注文来たらエスプレッソのホットで頼む」

そういってオーキドはそそくさにトイレへと向かった。迷わず行ったところを見るとどうやら何度か来たことはあるみたいだ。

ヤナギはエスプレッソとホットティーを頼んだのち、落ち着かない様子で周囲を見ている。

オーキドはトイレといったきり戻ってこない。あまりに暇なのでそっとヤナギが覗いてみるとかなり入念にうがいと歯磨きをしていた。そんなに気にするなら最初から喫まなきゃいいのにと内心思いながら席に戻った。

そうこうしているうちにカルミアが和装姿でやってきた。

約三年ぶりとはいってもやはり彼女は美しい。彼女に見とれているとカルミアの方から話しかけてきた。
「あら……。もしかして、ヤナギさん……ですか？」
「は、はい。そうです」
ヤナギは思わず立って言う。
「あらやっぱり！　大分以前お見かけした時より精悍になられましたわね」
彼女はにこやかに言った。
「い、いやあ。そんなことないですって」
「三年近く経っていろいろなことを経験されたのですね……。よろしい限りですわ。ところで……オーキドさんは？」
彼女が言ったところでオーキドはあわてたようにやってきた。
「やーやーカルミアさん！　お久しぶりですね！」
オーキドの口からは爽やかな香りがした。タバコのにおいなど一切消え去っている。
「ど……どうも。こちらこそお久しゅうございますわ。オーキドさん」
オーキドの勢いにやや気圧されたふうにカルミアは返した。
三人は席につく。
―午後3時頃　喫茶店―

世間話もそこそこにオーキドが本題を切り出す。
「今日こうしてカルミアさんに時間を割いてここにお呼びしたのはですね……」
「お二人とも、カントーとジョウトの全てのジムを突破したそうですわね」
彼女は食って話すかのように言う。
「え!?　どうしてそれを……」
二人が二地方のジムを制覇したのはつい数日ほど前の話である。（ヤナギは道なりにジムを破っていった為地方ごとではなく、いびつなルートをたどっていた）
ヤナギもオーキドも今日タマムシに着いたのだ。
現代ほど通信が発達していたわけではない（無線はあったが基本は電話か郵便）為どうして彼女が知っているのか彼らには不思議でたまらなかった。
「これでもジムリーダー間の連絡は綿密に取られていましてね……。特に貴方がたのように目立つ功績をあげていましたら嫌でも情報は伝わってくるのです」
二人は目を丸くした。
確かにジムは街の顔であり、町民たちの社交場としての一面もあった為他の街の話がそれなりに伝わってくることは二人でもわかっていた。しかし、ここまで綿密なネットワークが形成されているとは夢にも思わなかった。（しかし、このネットワークがリーグ設立への大きな原動力となった。十年ほど後にヤナギはこのネットワークを発展、昇

華させた形でリーグを作り上げたのだ）

「ま……まさかそんなに早く伝わっているとは夢にも思いませんでした……」

何よりも驚いていたのはヤナギだった。そしてこのことは深く彼の脳に刻まれた。

「あら。左様ですか……。なにはともあれ、ジム制覇本当におめでとうございます。中々できることではありませんわ。きっとこの事は永くトレーナーの記録に残るでしょう」

カルミアは恭しく頭を垂れながら言う。

「いやぁ……どうも」

オーキドはにやにやとだらしない顔をしながら答える。

「さて……もしかして用件というのはそれだけですか？」

彼女はやや冷たい表情で言う。分かり切っていることだけを伝えて終わりでは彼女もあまり来た甲斐がないのだろうか。

「え、えーっと」

ヤナギが何か適当な用件を思い付こうとしたが、それよりも先にオーキドが切り出す。

「いえ、あります!!」

オーキドは喫茶店全体に響くような大きな声で言う。

「お……おい。急にどうしたんだよ」
ヤナギは冷や汗をかきながら耳打ちする。しかしオーキド当人はカルミアの方しか見ていない。
「いえ、別にそれだけならそれだけでも本当に構わなかったのですが……。なかなかジムを制覇した方というのはお目にかかれませんし」
彼女は本心から言っている様子だ。
「いいえ！　それでも俺には用があるんです」
「そ……そうですか。ではどうぞ」
カルミアはオーキドに気圧された様子であった。
「俺、初めてジムで出会った時からカルミアさんのことずっと好きです！　結婚を前提にお付き合いしてください！」
オーキドはどこから持ってきたのか花束を用意し、起立して手を差し出した。
喫茶店。しかも客がそれなりにいる白昼堂々の告白である。
一瞬の静寂と共に客の注目はカルミアたちのテーブルにむけられる。
「あぁ……なんとなく、初めてお会いした時からそんな予感はしていましたわ」
彼女も最初は驚いていた様子だったが、やはり告白され慣れているのだろうかすぐに平静を取り戻した。

「おい……オーキド……君。本気なのかい？」

ヤナギは少なからず動揺している。

元々豪放で大胆な所がある人だとは思っていたがここまでの勇気があるとは夢にも思っていなかったのだ。

そして、ヤナギ自身淡いながらもカルミアに対する恋情はある。先を越されて悔しい気持ちも大いにあった。

「そうさ……。ヤナギ、お前を呼んだのは俺の告白、そして成就を親友であるお前に見届けてほしくて……そして」

オーキドは婚姻届と思しき用紙を机上に出す。

「この婚姻の証人欄の一つにお前の名前を書いてほしくて……呼んだんだ」

証人の欄は二つあり、これは法律上成人であれば誰でも良い事になっているが、新郎新婦の親友や恩師、両親などの名前を書くことが慣習となっている。

普段だったら、というよりヤナギにとって恋愛感情のない女性に対してだったら非常識だとか考えすぎだとかの罵倒の一つや二つを言えただろう。

しかし、今回の相手はカルミアである。あらゆる懸念よりもオーキドがそこまで真剣にカルミアの事を想っている事が信じられなかったのだ。ヤナギは何も言えなかった。

そして、これまで築き上げてきた友情が音を立てて崩れ去るような。そんな予感が身

を過った。
　当のカルミアは暫し考えた後
「少し……考えさせてください」
　と言ってすぐさま店を出ていく。
　ヤナギはこうしてはいられない。これを逃したら二度とカルミアへ思いを告げる機会はなくなってしまうかもしれない。という一心で喫茶店から出たカルミアを追いかけた。
「そうですか……って、おいヤナギ！　待てよ！」
　オーキドもすぐさま追いかけようとしたが店主に首根っこ掴まれる。
「オーキドさぁん。彼女さん追いかけたい気持ちは分かりますがね。お代払ってくださいよ」
　オーキドはこれまでに何度も来ており店主とはそれなりの仲であった。
「え、ああ、分かったよ……いくらだ？」
「６８０（現在の価値にして約３０６０円）円です」
　いつの間にかレジにいた従業員がそう答える。
「はぁ……相変わらずぼってんなあ……ほらよ」
　と言いながら丁度の代金を財布から出して追いかけようとする。

が、またも店主に首根っこをつかまれる。
「あぁもうなんだよ！　金は払っただろが！」
「なぁに言ってるんです。これまでのツケもこの際払ってもらいますよ！　しめて５５００円！」
「そんな持ってないっての！　ほら財布見てよ！　まだ帰ってきたばかりで銀行にも行ってないんだ！」
オーキドは黒革の長財布の中身を見せた。５００円札が8枚と当時発行されたばかりの１００円玉が2枚あとは雑多な小銭ばかりであった。
「あぁそう。じゃ、あと残り１０００円分ここで働いてきなさい」
「嫌だっ！　今すぐ銀行行くから離し」
「今日、銀行は日曜日でお休みよん。それとも貴方この事を大学に告げ口してもいいの？　おたくの学生さんがうちで無銭飲食はたらいて挙句踏み倒しかけましたって……。嫌ならほら、来い」
店主は年齢には到底につかわしくない甘い声を出した。
「ぎゃあああああ!!」
オーキドの断末魔と言うべき悲鳴は店中にこだました。これはオーキド一生モノのトラウマとなった。

この年代のアルバイトの時給はせいぜい2、３００円くらいなので１０００円とはいってもかなりのものである。

―午後4時　噴水前―

ヤナギは彼女を追いかけ、ようやく噴水前で止まったので話しかけた。

この時間帯になると少しだけ人ごみは落ち着き、それなりにスペースが確保されている。

「あら、ヤナギさんではありませんか。どうされました?」

ヤナギは考えをまとめ、言葉を返す。

「カルミアさん……僕からも言う事があるんです」

オーキドに負けてなるものかという奮起で、ヤナギは一気呵成に告白を行う。

「僕も……カルミアさんの事、好きなんです！　僕はオーキド君みたいにそんなに頭良くないし、物理専攻だから貴方ほど教養や植物に明るい訳でもない……。でも、今まで女の人にあってきて貴女ほど清楚で美しい人にあった事はない……。生まれて初めて男として大事に護っていきたいと……」

そこまで言うとカルミアはヤナギの口前に人差し指を立ててみせる。

「ここでは人目につきます……。もう少し静かなところでお返事を聞かせてさしあげますわ」

「え？　でもオーキドには」
「良いのです。さぁ」
そういって彼女は南東にある森の近くまで移動した。近くには彼女のジムがある。
―午後４時１５分―
「ふぅ……ここまで来ればいいでしょう。ここは本当に落ち着きますわ」
「そうですね……」
木々は基本的に葉を落としているが、針葉樹は葉っぱをつけている。耳を澄ませば冬眠している生物の声が聞こえてきそうな気もする。
「ヤナギさん……。貴方は私にとってそういう存在です」
「え？」
ヤナギは当惑する。
「ジムリーダーの職も決して楽ではないのです、特に私のジムは先代から受け継いだ木々を守るという使命がありますしね」
「そうですよね……」
「私は長らく、伴侶とするならばそういう忙しなく激動の毎日を共に乗り越えていけるような……そういう方を求めていました」
「それが、僕……ということですか？」

ヤナギは余程信じられないのか、ずっと目が点になっている。
「はい。ヤナギさんは普段は沈着でいらしているのに、此度のようなしっかりと思いや考えを伝えなければいけない場面では熱も交えながら語れる。そういう切り替えがしっかりとできる人というのはなかなかいるものではありません」
「そ……そうですか」
「殊に……タマムシ大学を出た人となると」
「え？」
「別に全員というわけではないのですけれど、タマムシ大学を出た方というのはエリート意識が凄まじく、常に強気に出られる方が多くみられるのです。人というものは悲しくも権威に弱く、この国においてタマムシ大卒というのはその大学を出てない人に向けては莫大な効力を発揮します。それに驕ってしまう人のなんと多い事か……」
カルミアはそう嘆く。
「残念ながらオーキドさんはその典型です。まぁそれ以前の問題にあのお方は非常識な部分が目立ちますし、人前、特に非喫煙者と会う時にタバコを喫（のむ）だなんて問題外ですわ」
「あれ……気づいてたんですか」
「ああいうふうにやたらと消臭剤の香りを漂わせるのは却ってボロをだしているようなものです」

「な、なるほど……」

それからは少しの間沈黙が続いた。

太陽は西へ沈もうとしており、夕焼けの情景が二人を包んでいた。高層建築がまだあまり行われてない時代であり、自然の美しい表情は容易に見ることが出来たのだ。

雰囲気は自然とロマンチックになっていった。

「綺麗な色ですね……」

「ええ、私はジムの近くから毎日のように見れるこの光景がたまらなく好きなのです」

「へぇ……それはどうしてです?」

ヤナギ自身綺麗だと言ったにも拘らずそう言ったのは視界を遮る森林が夕焼けをやや邪魔しているように見えたからである。

「私は幼い頃より何度となくこの情景を見ています」

「それはそうでしょうね……」

「その頃からもここの情景は好きでしたが……、先の大戦でタマムシとヤマブキが焼け野原になったことを覚えておいでですか?」

忘れるはずもない。ヤナギの生まれ故郷であるチョウジタウンも空襲に晒されたが、首都の惨状に比べればまだマシなほうであった。（ちなみにヤナギもオーキドも大戦当時は8～12歳だった為兵役は免れている）

ヤナギはこくりと頷く。

「あの空襲でジムは完全に破壊され……、明治の創設以来大事に育て、管理をしていた植物群は燃え尽き、リーダーであった御祖母様まで植物を守りながら亡くなられました。その後、終戦の詔勅（玉音放送）を聞き私含め多くの人々が悲しみに暮れる中、夕方にこの夕焼けを見たのです。そしてジムを継いだ母は、『国は敗れても、私たちは負けてはなりません。この美しい情景に負けない新しいジムを、自然を作り上げるのです』と仰せになりました。私もそれを聞いて母の手伝いをし、ジムを継ぎどうにかここまで乗り切れた……。この情景はそれを見守りつづけてくれた自然の深い慈愛を示しているように思えるのです」

当時、強力なポケモンを持っていたジムリーダーやジムトレーナーたちは徴兵を免れる代わりに国策でジムの街から離れることが許されなかった。１９４４年7月にサイパン島が陥落し、絶対国防圏が崩壊。いよいよ追い詰められていた軍部は禁忌とされているポケモンの軍事利用を本土防衛として実行する為に行おうとしていた。その為、カルミア一族も疎開が許されず終戦までタマムシシティ近辺に居た。（しかし、禁忌とされている以外にも高度な知性を持つポケモンたちを軍務に隷従させる事が困難な事や強力なポケモンを使う事による危険性を解消できないまま終戦を迎えた為計画段階で終了した）

「なるほど……」
「とはいえ、まだまだ今のジムは戦前ほどの美しさには程遠いのです。私や母が植えた植物はまだまだ育ちきってはおりませんし、数も不足していますわ。志半ばで流行り病で亡くなってしまった母の遺志を継ぎ、私の代できっと往時以上のジムに育て上げ次代へと伝えてみせますわ！」
　彼女は目を輝かせ、天に誓うかの如く力強い声で言ってみせる。
　ヤナギはただただ感心する他なかった。
「へぇ……大したものですね。尊敬しますよ」
「当然の事を申し上げているまで……。あ、すみません。急にこんな話してしまいまして……」
　彼女は少しだけ頬を紅潮させて恥じる。
「いえいえ、貧乏人の子だくさんの家庭から生まれた僕からすると、親から受け継いで護っていくものがあるって凄く憧れる話ですもん」
　ヤナギは8男4女家族の四男坊であった。
「まぁ。そうなのですか。そのようなご家庭ですと親御さんも色々と大変でしたでしょうね……」
「ええ、まあ……。カルミアさんにはご姉妹は……？」

「おりませんわ。父が軍医で方々を飛び回っておりましたから中々難しかったのでしょう……」

「へぇ軍医ですか。そいつは凄いですね……。今はどうされているのですか？」

「現在はタマムシ大学病院に勤めていますわ」

それからも何気ない世間話は続いて行った。

そうこうしているうちに日は沈みかかり、森から半分だけ顔をだしているほどになっていた。

―同所　17時すぎ―

40分もすると会話は少なくなり、沈黙のムードが再び二人を包んだ。

話しているうちにヤナギの方も少しずつ恋情が深まり、接しているうちに彼女に劣情を覚えつつあった。

「あの……カルミアさん。手を、握ってもいいですか？」

しかし、羞恥とためらいからか、彼は遠慮がちにそう言う。

「フフ……。やはりヤナギさんは晩生ですわね。もう少し、先に進まれても私は構わないのですよ？」

彼女はヤナギに身を前に寄せながら迫るように言う。

「えっ!?　ということは……」

―付近の森林―

オーキドはあれから、ゴミを燃やす為に用いる薪を伐採するために従業員数名と共に森林に繰り出されていた。

慣れない力仕事に汗をしたたらせながら付近を歩き回っていると人など殆ど居ないはずの森林の近くに人らしき姿を見つけた。気になった彼は従業員の目を盗んでその場所に近寄ってみる。

するとそこにはカルミアに唇を奪われているヤナギが目には入った。オーキドは愕然としていたが、その場に留まった。

―二人の場所―

「んっ……ふう。ヤナギさん。如何でしたか?」

カルミアは数十秒ほどヤナギにキスをしていた。

しかし、ヤナギから返答はない。目は虚ろで、カルミアが話しかけているのかどうか知覚しているのかも分からない。

カルミアが不思議に思い始めるとヤナギはばったりと倒れ込んでしまった。

「え……ヤナギさん！　ヤナギさん！　どうされたのですか！」

カルミアはヤナギを横たわらせて何度か肩を揺さぶるが返答はない。

そうしていると、オーキドがカルミアの反対側へ入った。オーキドはヤナギの呼吸の

有無を確認し、瞼を開いて瞳孔を確認した。
「気絶しているだけです。大事ないですよ。そのうち目を覚ますでしょう」
「あぁそうですか……。良かったです。それにしてもどうしてあれだけの行動で……」
「こいつ、高校時代はずっと勉強に明け暮れてて、大学入ったらたまに一緒に飲んだとき以外は殆ど遊ばないしで女に縁がなかったんですよ。だからたったキスしたくらいでもこいつにとっては充分なショックに成り得るんです。……相手が貴女というなら尚更」
オーキドは頭を掻きながらそう答えた。
「覗いていらしたのですね」
「まぁ……近くを通りがかったんでね。そうですか。貴女はヤナギを選ぶんですか」
「ええ。オーキドさんには悪いのですが。伴侶としてはこの方の方が相応しいと考えましたから」
カルミアからその言葉を聞くとオーキドは軽く笑いながら
「あなたにそう言われちゃ適いませんね……」
と言って後ろを向く。
「正直、こいつに取られるのは惜しいし、くやしいけれど、貴女を真に愛するからこそ、俺はカルミアさんの意思を尊重しなくちゃならん。潔く俺は身を引きます。それじゃ」

とだけ言い残してオーキドはスタスタとその場を去った。そして、その言葉には自分への戒めも多くあっただろう。
カルミアはせめてもの敬意かオーキドの背中に向けて深々と頭を下げた。

こうして、ヤナギとカルミアは交際を開始した。しかし、運命は二人を平坦な道へ誘うことをしなかった。
話はすこしだけ時間を遡る。
―2月9日　午後7時30分　タマムシシティ　カルミア邸宅―
この日の昼、カルミアはオーキドからのあいたいという旨の手紙に承諾の返事を送った。
それから、仕事を終えてジムを閉め邸宅へ戻ると執事から父親が久々に家に帰っているとの知らせを聞いて久々に会おうと荷物や着物などをそこそこに食堂へ向かった。
そこで夕食を済ますと話があると言われた為カルミアは応接間へと向かった。
カルミアの邸宅は古くは武家屋敷であり、日本建築の建物であったが、明治維新に伴う欧風化の流れに乗って場所を移し大幅に改装がなされ和洋折衷の建築となっている。都心近くにあったジムとは違い、比較的郊外に建てられた（五十キロ圏内）この邸宅は

戦火の影響はさほど受けず幾度かの修繕工事を経て現代まで残っている。
広さは千二百五十坪。時価は現代の価値に直して２７億８千万円程度。
―応接間―
応接間へつくと、高級な木材から作られた大きな机に向かい、父親と相対する。
部屋にはカルミアと父親。父親の専属メイドとカルミアつきの執事の四名がいた。
何カ月ぶりかに会った父の顔はほうれい線が増え、疲れが大いにうかがえる。年齢は５１歳。
「カルミア。お前は今年で何歳になる」
「２４ですよ？　娘の年齢を忘れるだなんてお父様ったら……」
カルミアは冗談めかしたふうに笑ったが、父は表情一つ動かさずに話を進める。
「そう。２４だ。そろそろお前は当家の血筋を継ぐ子どもを授からねばならない。そこで父さまはな、我が家の血筋を汚さぬ上に旗頭になって働いてくれるであろう素晴らしい男を見つけてきた」
と、言いながら執事に見合い写真の入った二つ折りの冊子を持ってこさせ、カルミアへ渡す。
カルミアが興味なさそうな表情で冊子を開くと目を見開かせる。そう、何を隠そうオーキドの写真だったのだ。

「お、お父様。この方って……」
「なんだ、知ってるのか？」
「一度ジムにこられましたし、何度か構内で見かけましたから……」
　カルミアとオーキドは学科は違えど同じ生物学部であり、カルミアは一学年飛び級だったのであまり同じ講義やゼミなどで一緒にならなかった物の顔くらいは知っていた。
「それなら話ははやい。どうだ近々オーキド君と見合いをしてみないか？　私の総合生物学研究サークルに入っていた子なんだが最近じゃ珍しいくらい意欲的で頭のいい子でね……。今度の旅を通じて発表したポケモンたちの生態研究の功績が認められて来年度から最年少で国立生物研究所の研究員になることが決まっている。家柄も代々国を支えてきたアカデミーの研究員と全く申し分が無い。どうだい？　この子ならばお前の伴侶としても申し分ないと思うが」
　カルミアは表情を曇らせる。
「あの、この事はオーキドさんは承知しておられるのですか？」
　カルミアが受け取った手紙には一切そんなことは記されていなかったのだ。
「近々生まれ故郷のマサラに帰ってくるとは聞いているから向こうの親御さんに当人が帰り次第伝えるようにお願いをしてある。先方もかなり乗り気で二つ返事で承諾して

くれたよ。あとはお前たちさえ良ければ来月にも式を行うつもりだ」
父親は自信を多分に感じさせる声でそういった。
「そ、そうですか……」
カルミアはさらに表情を曇らせて答える。
「どうした？　元気ないぞ」
「少し、お時間を頂けますか……何分突然のことでして……」
「ん……そうか。まぁそれもそうだ。考えるのは結構だがあまり時間が無い。17日には見合いをする予定だからそのつもりでな」
そう言って父親はおやすみと言い、メイドを従えて応接間を後にした。
残されたカルミアは机に伏してしまった。
「お嬢様。そろそろお部屋に戻らねば翌日のジムに……」
「わ、分かってますわ」
カルミアは体を起こして応接間を後にしようとする。
「全くお父様ったらなんて勝手なのかしら……」
彼女はそう言って不機嫌な様子で廊下を歩いて行く。
執事が道すがらカルミアに尋ねる。
「お嬢様はあのお方はお気に召さぬので……？」

「一度だけジムに挑戦に来たとき、あのお方とは生理的にあわないと直感で感じ取ったのですわ。確かにお父様の言われる通りの面はありますが、オーキドさんと私は水と油の如く決してかみ合う事はないでしょう。たとえ結ばれても私……ひいては当家の将来にとって良い結果になるとは思えませんわ」

「しかしそうも行きませんぞ。お嬢様は十分承知おきだと思いますが当家は千利休様より続く名家でございます。やはり相応の相手と結ばれねば家の権威というものが」

「爺や。それは古い考えですわ。これからの結婚というものは家と家を結ぶものというよりも、個人と個人の自由意志に基づいて為されて然るべきものです。私は私のやり方で伴侶を見つけてみせますっ！」

そう言って彼女は自分の部屋に着いたので、部屋に入った後やや強めに引き戸をしめた。

「お、お嬢様！　はぁ……やれやれ参りましたなこれは……」

執事は頭を抱えながら部屋を通り過ぎた。

―2月11日　午後5時　同所　玄関前―

こうして、カルミアはヤナギと交際する事となった翌日、父親を説得させる為にヤナギと連れ立って自宅に居た。ヤナギは着慣れない上に入学式の時やっとの思いで買ったスーツ姿である。

長らく貧乏暮らしだったヤナギにとってカルミアの豪壮な邸宅は非常にインパクトのあるものであり、やや気後れこそしたが覚悟を固めた以上死地に臨む思いで玄関に立った。

「よしっ」

ヤナギは自らの頬を叩いて玄関の扉を開けて見せ、中へ入った。

入ると執事の案内で応接間へ通され、お茶を出されてしばらくするとカルミアの父親が苦虫を潰したかのような表情で入り、二人と相対して着座した。

父親は海老茶色の和服を着ており、やや大きめの身長であり壮年ながらしっかりとした骨格や筋肉をうちにあることを悟らせる恰幅の良い男であった。

入ったと同時に二人は起立し、父親が座って一呼吸置いた後にヤナギが話し始めた。執事やメイドは出払わせ、三人のみとなっている。

「お、お初にお目にかかります。私、ご息女であるカルミアさんと結婚を前提としたおつきあいをさせて頂いております ヤナギと申します」

「そうか……。まぁ座りなさい」

父は二人に座る事を勧め、それに従って二人は席に着く。

それからヤナギは交友関係や自身の生い立ちなどを説明し、カルミアに対する強い想いと結婚の意志を伝えた。父は特に返すことなく、時折頷いたりして相槌をとる。

「……こういう訳でカルミアさんとは交際をさせて頂いております」
ヤナギは十分程話したのちそうしめくくった。
「なるほど……」
父親は三本目の葉巻に火をつける。
父親は終始落ち着いた表情であり、目は据わっている。
深く煙を吐いた後、話し始める。
「君がうちの娘をそれほどまで想っていることはよく分かった」
「は、はい」
ヤナギはやや父親の威迫に押されたように答える。
「だが。悪いが君に娘をやることは出来ん。帰りなさい」
父親の返答は簡潔で、そして冷酷な物であった。無論、ヤナギは納得できるはずもなく食ってかかった。
「そんな！　私はこれほどまでにカルミアさんを想っており、そして、カルミアさんも私の事を好いているのですよ！　ですからどうか！　お願い致します！」
ヤナギは席を立って土下座して願い出た。
「お父様。私からも一生のお願いです。どうか私たちのことを認めてください！」
カルミアも同様にヤナギと並んで土下座をして頼み込む。

しかし、父親の返答は変わらなかった。
「駄目だ」
この一言であり、非情さを示すかの如く葉巻の火も消された。
「どうしてですか。私が気に食わないのですか！」
「そういう訳ではない。まぁ座って聞いてくれ」
父親の勧めに従って二人は椅子に座る。
「娘にはな。今縁談の話が来ているんだ」
カルミアは眉をややひそめる。
「ぞ……存じておりますよそれは」
「ほう。知った上で交際していると？」
「はい。先刻、話は全て彼女から伺いました」
そう言うと、父親は先ほどまでの比較的穏やかな声から物々しい声で話す。
「ならば聡い君には分かるだろう。当家は君のような定職にもつかず太陽族のようにふらふらと喧嘩を売る事を生業としているポケモントレーナーなどより、研究者として名を立て、次代を担う人間にこそ婿に来てもらいたいのだ」
「ど、どうしてご存じなのです？」
ヤナギは自分の事が知られていて驚いた表情で答える。この時代、まだ専業のポケモ

ントレーナーは将来への保障があまりされていない上に、むやみやたらに所構わず勝負をしかける為、特にハイソサエティ（上流社会）に属する人々からは忌避される存在だったのだ。因みに太陽族とは当時流行していた映画に流行された人々を指す言葉で不良とほぼ同義である。

「君の事は若い子からよく噂に聞いたからな……。その上、これからこの国はどうなるか分からない。また先の大戦のような塗炭の苦しみを味あわねばならぬこともあるかもしれない。そうなった時も兵士にとられずしっかりと家を守れるのは政治家か理系の技術者や科学者だけだ。私は軍医として様々な戦地を見、大黒柱を失った人を多く見てきた。我が家、そしてカルミアにそんな思いはさせたくはないのだ。だからどうか悪いが帰ってくれ」

そう言うと、父親は言いたいことは全て言ったとばかりに立ち去ろうとする。しかし、堪えきれないとばかりにヤナギは大声で呼び止めようとした。

当時の国際情勢は東西冷戦の真っただ中であり、前年のスターリン批判による〝雪解け〟で戦争の危険は幾分か和らいだものの、西側陣営であり米国の喉元にあたるキューバが革命の成否次第で西側陣営から脱落する可能性が危惧されていた。（史実では革命は成功し、キューバ危機の遠因となる）仮に戦争となれば防共の防波堤と目されているこの国が参戦せざるを得なくなるのは自明な為、父親の懸念も当然といえるだろう。

「待ってくださいよ！　確かに貴方は僕らのように銃後に居た人間と違って戦地を直に見てきた分そう思うのは私にだって十分理解できます。しかし、現時点で私と別れて……彼女が好きでもないオーキドと結婚させたらそれこそ悲しい想いをするとお考えにはならないのですか！」

それを聞き、背中を見せていた父親は背中を震わせて答える。

「君に言われるまでもなくそんな事は何度も考えた……。だが、今ならば、現時点で別れればその傷は浅く済むのだ。それに、カルミアは庶人の子ではない、この国有数の資産家である当家の娘であり、数百年のれっきとした伝統がある家の娘なのだ。ヤナギ君、君の過ごしてきた市井の色恋と一緒に考えないでもらいたい。この国が如何に平等を唱えようと見えない身分は厳然として存在するのだ。それを忘れて貰っては困る」

そう言って、カルミアの父親は今度こそ出て行った。

二人きりになった室内で、ヤナギは突っ伏してしまう。

「くそっ……。時代錯誤のアナクロがぁ！」

ヤナギは感極まって珍しくそう毒づいた。

「ヤナギさん……落ち着いてください」

「しかし。このままでは僕たちは……」

「とにかく、場所を変えて考えましょう」

二人は応接間を後にする。

―午後6時　カルミアの部屋―

その部屋は一室とはいっても教室一つ分はありそうな広い場所であった。和室である。

カルミアはドアに鍵をかける。そして煎茶を二人分用意し、机に相対して座る。

彼女の淹れた茶を飲むと、ヤナギも漸く落ち着いた様子である。

「ふぅ……美味しい。さて、それにしてもどうしましょうか……」

落ち着くと、現実がよりよく見えてしまったのか彼は一層落ち込んでいる様子の表情だ。

「ヤナギさん……。はっきり申し上げますと、お父様を説得するのはもう不可能のように思えます」

「そっ……そんなことないですって！　もっとちゃんと思いを伝えれば必ず……」

「私……お父様があそこまでしっかり考えておられたとは予想外だったのですわ。病院や任地にかかりきりで家庭にはあまり帰らず、仕事一筋な人でしたから……」

「そ……そうですか」

ヤナギは落胆している。

「じゃあ、僕らはもうどうにもならないって事なんですか？」

「時間さえあればまだ手は打てましたが、事の次第が全て伝わっている今お父様は必死に婚儀の準備を進めるはずです。そう遠くないうちに私は……オーキドさん……の所へ」

彼女も感極まって泣いている。ヤナギ同様現実をより深刻に受け止めているのだろう。

「どうして……どうしてっ……」

彼も連鎖するかのように机を叩く。茶が少しだけ零れた。

数分程しただろうか、ヤナギは顔を上げて話す。

「カルミアさん……こうなったらもう駆け落ちしましょう！　僕らが結ばれるにはもうこうするしか……」

「ヤナギ……さん」

カルミアは紅涙を拭い、ヤナギを目を点にしながら見る。

数十秒ほどの沈黙の後、

「いえ……申し出は大変嬉しいのですが……。私には先祖代々受け継いできたジムがあり、リーダーたる私にはそれを守っていく責務があります……。それに、私一人ならばともかくここで逃げてしまうと何十人もの私についてきてくださっているトレーナーたちに多大な迷惑をかけてしまいます。私にそこまでることは……とてもできませ

ん」

　彼女は絞り出すような声でそう言った。断腸の思いで言っている事がひしひしとヤナギに伝わる。

　それを聞いて彼は

「そうですか……そうですよね。僕と貴女とでは持っている物が違いすぎる……。ごめんなさい」

　と陳謝した。

　彼女は膝を強く握りしめて、頬を赤らめて言う。

「あの……ヤナギさん」

「はい」

「私を……その、だ、抱いていただけませんか？」

「え……!?」

　ヤナギは一瞬何を言われているのか理解できなかったようだ。

　何度か脳内に言葉を反芻させ、意味を咀嚼して答える。

「ず、随分と唐突ですね……本気なのですか？」

「私は……貴方を好いて、そして結ばれたくてこうしてお父様に直談判を申し入れました……。しかし、どうやらそれは叶わない夢のようです……。駆け落ちてすべてを擲つ

事も出来ず、説得してしっかりした形でヤナギさんと結ばれることも叶わないのならば……せめて、体だけであっても貴方に捧げたいのです」

彼女は相当思いつめた様子で言っている。目からするに本気で言っているようだ。

「えっ……しかし、結婚もしていないのに……」

ヤナギは酷く狼狽している様子だ。

「私も……婚前の男女が契りを交わすことはふしだらだという事は承知しております。しかし、それが叶わない以上、こうするしかないではありませんか……」

彼女は立ち、ヤナギに縋るように身を寄せる。白檀の良い香りが彼の鼻をつく。

そして、ヤナギを押し倒したかのような格好になって続ける。

「それに……私、オーキドさんに……純潔をささげたくはないのです。全てが破綻してしまった今、私が出来るのはもうこれしか残されていないのですわ。私の最後のわがまま聞き入れてはいただけないでしょうか……？」

彼女は潤んだ瞳でヤナギに訴えかける。

「わ……分かりましたよ。僕だってカルミアさんの初めてを……いくら親友とはいってもあいつなんかにとられたくはないです！」

彼は決然とした表情で返す。どうやら覚悟が固まった様子だ。

「フフ……良かったですわ。本当に……。でしたら、今、褥を共にしている最中だけでい

いですから私の事を……カルミア……と呼んでくださいまし。私もその……〝貴方〟とお呼びしますから」

彼女は満面に朱を注いだ様子で言う。

「うん……分かったよ。カルミア」

そして二人は唇を合わせ、夜通し激しく肌を重ねた。執事は気付いていた様子だったが、察してカルミアの部屋のまわりに関して人払いを行う。

―2月12日　午前6時　カルミア邸　裏口―

カルミアは女中姿に変装してヤナギを見送ろうとしていた。

「それじゃあ……、カルミアさん。僕はこれで。オーキドと……末永くお幸せに。僕の事は忘れてください」

「えぇ、はい……。ヤナギさんも。どうかお気をつけて……」

これが二人の交わした最後の言葉である。彼が後にリーグ理事長となってからもカルミアには配慮して言葉をかわさず、またカルミアからも言葉をかけなかったのだった。

それから約二週間近く後の2月23日、オーキドとカルミアはまるでとり急いだかのように祝言を行った。

あれからカルミアの耳にヤナギに関する消息は入っていない。彼が言った通り忘れようと、彼は死んだのだとばかりにカルミアは自らに言い聞かせていた。

ヤナギは居なかったのだと思う事によって、彼女は新たな生活に気持ちを切り替え、結婚生活を過ごしていこうと心に決めたのだ。

運命に抗おうと懸命にもがき続けた一輪の花はかくして折られる結果に終わった。

しかし、この一連のなんということは無いただの色恋沙汰が後の歴史に重大な影響を及ぼそうとは誰も知り得なかっただろう――

―過去編　玉虫色の一族（前編）　終―

過去編　玉虫色の一族（後編）

―１９５７年　２月２３日　午後９時　カルミア邸　寝室―

式を終えて、諸事を済ませるとオーキドとカルミアの二人は寝室に居た。

この日、二人は初夜を迎えるのだ。

式を終えてから二人は最低限の会話を除き殆ど会話をしていない。緊張もあったのだろうが互いにとってヤナギの存在があまりにも大きすぎたのだ。

気まずい雰囲気のまま二人は寝室を共にする事となった。五分ほどたっただろうか。オーキドの方から話し掛けた。二人は布団の上でそれぞれ正座している。

「カルミア……さん」

「っ……」

カルミアは電撃にでも打たれたかのように少しだけ身を震わせる。

「あの……」

カルミアは一呼吸置いて答える。

「も、もう。オーキドさ……貴方ったら。私たちはもう夫婦なのですよ？　そんな他人行儀な呼び方はよしてくださいまし」

カルミアはそう笑って答えた。が、その実はあまり芳しくはなさそうだ。照れではなく、根底では嫌悪感を持っているかのように接している。

「やっぱり……まだ忘れられないんですか。ヤナギのことが」

カルミアはそれを尋ねられると脊髄反射のように答える。

「い、いいえ！　とんでもありませんわ。あの方とのことはもう過去の物として忘れ去りましたわ」

「そうですか……。いえ、だったらいいんです。仮にそうでなかったとしても……俺がヤナギのことなんか忘れさせるくらい幸せにすればいいだけのことです」

彼女はそれを聞いて

「ですから、私はヤナギさんとのことはもう……」

「分かってます。でも、そうとでも自分に言い聞かせないと……あいつへの申し訳なさというか、劣等感というか……そういうのに押し潰されそうになるんです。現に俺はヤナギから奪い取るような形で……」

途中でカルミアが断ち切るような大声で言う。

「やめてくださいっ！　私は本当にヤナギさんとのことは忘れました。今では貴方の為に尽くすと決めたのです」

「その言葉に嘘はない……ですよね」

「ええ」
　カルミアは震えを止めてしっかりと答える。
「そうですか……じゃあ」
　オーキドは詰め寄ってカルミアの手を取る。
「カルミ……カルミア。行くぞ」
　オーキドはつい敬称をつけて言いそうになってしまった為かすぐに言い直した。
「はい……」
　こうして二人は布団へ倒れ込んだ
　―午前1時　同所―
　二人は褥を共にし、一通りの行為を終えた後一緒の布団で横になっていた。
　二言三言かわしたのちオーキドが切り出す。
「お前……処女じゃなかったのか」
「えっ……」
「破瓜の血が……出てなかったぞ」
　カルミアはやはりきかれたかとばかりに一瞬瞳孔を収縮させる。
「やっぱりヤナギと」
「ち、違いますわ！　あの……女性によっては血が出ないということもありますし……」

「……」

その程度のことで納得するはずかない。オーキドは学生時代金回りの良さや人当たりの良さなどで異性からの人気も高く、中には手を出す事もあった。

その中には勿論処女もおり、彼はその特徴について熟知とまではいかずともそれなりの知見があった。

「ほ、本当ですわ！　それに私は小中高時代多くの習い事やお手伝いなどをしていましたし、激しい運動で破れてしまった可能性もありますわ」

カルミアがこれほど必死に説明しているのは、高家特有の慣習である覗き見があるからである。

親戚一同にもしも処女でないことが知れ渡れば傷物の嫁に婿をやれるかと破談の可能性が出て来てしまう。一度婚儀をあげた以上それをなかったことにしてしまうのは家名に泥を塗ることにもなりかねない。

「そうか。分かった。俺はカルミアを信じる。変なこと聞いて悪かったな」

オーキドは真実を知るのが怖いのか、彼女を気の毒に思ったのかそれ以上の追及をしなかった。

こうして、二人の初夜は終わった。

それから１０か月後、１２月に第一子が生まれた。
これがスズノメでありエリカの母親であるが、本当の父親が誰であるかは不明である。
ＤＮＡ鑑定が発達していない時代である為父親が特定するのは難しいというのもあるが、何よりも真実を知るのを恐れたオーキドにそれを行うことは不可能であった。
外から見れば終始円満な夫婦に見えたかもしれないが、家庭内では冷え切っていた。事務的な会話以上の事をすることは少なく、性交もオーキドが誘ったときだけである。
しかし、オーキドはそれでもカルミアの事を精一杯愛した。時折旅行に連れて行ったりプレゼントをあげたり、感謝の言葉を忘れなかったりと彼の考えられる限りの事をした。カルミアも我が子のためにもそれに心から応えようとヤナギのことを忘れようと、この結婚は自分から進んで受けたんだと思うように努めていた。
しかし――――
―１９６７年　７月１３日　午後３時　グレン島―
カルミアと生木を裂くような別れを遂げてから十年が経過した。
あれからヤナギは故郷のチョウジタウンに戻って人身をさらに鍛えるために忍術の修行に取り組んだ。ヤナギの精神の根本である忍従や冷徹な精神はここで培われた。
そして十年ほどの修行を経てヤナギは上忍の資格を得た。その間の１９６２年にヤ

ナギはホウエン地方出身の女性と結婚。カルミアと別れて以来漸く生気が戻ったのだ。因みにこれがナギの祖母にあたる。この夫婦は3人ほど子どもを産んでいるがそのうちの長女がナギの母親である。

そして1967年、ふとまた旅に出たくなる衝動に駆られてヤナギはまたも家を出た。ジョウトを巡ってカントーへ渡るといつの間にやらグレン島にいた。この時ヤナギは34歳になっている。

特に当てもなく町をふらついているとどこからか懐かしい声が聞こえてきた。

「おおおい!!　ヤナギ!　ヤナギじゃないか!!」

背後から大きな声がしたので彼は振り返った。するとそこには大分顔つきが変わったものの面影はしっかりと残っている青年が居た。

「カツラ……カツラ君か!　久しぶりだな!」

「あぁやっぱりヤナギか!　いやぁ大分変わってたから不安だったんだが……良かった良かった!」

カツラは笑いながら三度くらい大きくヤナギの肩を叩く。相変わらず元気が有り余っている男だと彼は思った。

それから二人は意気投合して昼間だというのに飲み屋へと繰り出した。

カツラはあれから地方を回って得た知見を地質学や科学的視点からアプローチした

論文をタマムシ大学へ提出し、高い評価を貰って学費免除での入学を許可された。
そこで知り合った同期のフジと共にグレン島の火山についてや古代ポケモンの復元を研究することなどを主目的とした研究所を設立して現在にいたるという。因みに結婚はしておらず男色のままらしい。
ヤナギはそんな彼の事跡に感心しつつ、タマムシで別れて以後の自らの境遇を話した。カルミアとの事も含めてである。
「むぐぐ……許せんなその親父とかいうのは！　何が身分だ！　二人が好きだというのなら思いの通りにさせてやればいいじゃないか!!」
カツラは酒が入っているせいもあるのか大いに憤慨していた。情を重んじる彼からすればこのような大人のしがらみで事が潰されるというのは許しがたいことなのだろう。
「まぁ仕方がないよ。彼女は僕らみたいな一般市民とは訳が違うんだから」
「何が違う物か！　だいたいな、ヤナギ、お前も良くないぞ。そんなに彼女のことを思うのならば引き下がっちゃダメだろう！　いっそのこと駆け落ちをしてでも抗議するとか方法はあったはずだ!!」
「僕もそれを考えたさ……でも、彼女はそれを拒んだんだ。ジムの人々に迷惑がかかるからってね……」

「そうか……。それならば仕方がないな」

カツラは一呼吸置いてそう答え、置いてあった七杯目のジョッキビールを一気飲みした。

「くそう……。それでも納得がいかんぞ俺ぁ……。なんでそんなくだらんことで恋人が別れねばならんのだ……」

カツラは目を据わらせて話す。真っ赤な表情から出来上がってしまっていることは確かである。これ以上この話を続けると暴れそうな危険性もあったのでヤナギは話を切り替える。

「そういえば、お前は何処のジムリーダーが一番辛かった？」

「あぁ？　そうだな……フスベのゲンジとかいうドラゴン使いがアホみたいに強かったな。若いからって甘く見すぎたぜ」

ゲンジはイブキから数えて二代前のジムリーダーであった。そして、２２歳の頃にホウエンから自分の腕を試すためにフスベへいき、戦災によって亡くなったジムリーダーの跡継ぎ争いに介入。圧倒的な実力を以て他候補者を破りそれ以来２００４年にホウエンの四天王となるまで五十年以上にわたってリーダーの座に君臨し続けたのだ。

「あぁあの人かぁ……。うん、確かに強かった。特にホウエン地方に生息しているあのボーマンダとかいうポケモンには手を焼いたよねぇ……」

　それから二人はジム巡りをしたときやポケモンを捕まえたときの話に花を咲かせた。
三時間くらい経っただろうか、ヤナギがふと呟いた。
「はぁ。こういう経験がもっと社会にいかせりゃいいのになぁ……」
　それを聞いてカツラはこう返す。
「そうだな……お！　いいこと思いついたぞ!!」
「何だよ」
「ジムをまとめてリーグ形式にしてしまえばいいんだ！　そうすればトレーナーそれぞれがどのジムを破ったかわかりやすくなるだろう？」
「ふん……なるほど。でも、それを誰が決めるんだ？」
「俺たちだよ！」
　カツラは輝いた目でそう言った。
「ハアッ!?　何言ってんだよ」
「地方ごとにジムをひとまとめにして、公認を与えるんだ！」
「さしずめ、〝ポケモンリーグ〟と言ったところか……」
「そうだ！　ジムの上にポケモンリーグを置いて、その地方の全部のジムを破ったトレーナーにはお前と戦ってもらって一定以上の戦果をあげたものにはその地方の優秀トレーナーとして認めることにしよう！」

「なるほどなぁ……旨いこと考えついたもんだ。分かった僕も協力するよ」
「いや、これはヤナギ、お前が主体になって欲しい」
「どうしてだ」
「どうしてもこうしても、トレーナーとしての名前はお前の方が売れているからな」
「ハハハ……まぁそうかもしれんな。しかしカツラ君、これはとんでもないことになるぞ……。これでポケモントレーナーの株が一気に上がるかもしれない」
こうして、酒場の思いつきからポケモンリーグは始動したのだ。
ヤナギとカツラは一年がかりでジムリーダーに依頼してリーグの構成員になることを求めた。内国ほぼすべてのジムを破ったヤナギの頼みであること、高度経済成長期真っただ中で新進気鋭の気風に満ち溢れていた事などで賛同するものは多くスムーズに話は進んだ。
そして、１９６８年１０月。ポケモンリーグはカントージョウト３５ジムの体制で発足した。（一つの町に複数のジムがあることは珍しくなかった）
これはポケモンの世界にとって、そして日本国全体にとって革命的な出来事であった。これによってポケモンジムやトレーナーなどの価値が爆発的に上がり、教育界もこれにあわせて学制を大幅に変えることとなる。（６・３・３・４制→４・５・３・４制）
そして、ヤナギが理事長から引退する１９８０年代末にポケモンリーグはこの国にお

いて確固たる地位を確立することとなった。（バッジ制、四天王や一地方８ジム体制はヤナギ時代に確立された）

―１９７８年　４月３０日　スリバチ山―

ヤナギがポケモンリーグで成功した事は仮面夫婦状態にあった二人にとって深刻な影響を与えた。

ヤナギはどこかで細々と生きているか野垂れ死んでいることをある種の前提として生きてきた二人にとって最早夫婦関係を存続させる理由がなくなってしまったのだ。

しかし、ヤナギは既婚者だということ。それ以上に家名に泥を塗らない為に離婚する訳にもいかず冷え切った関係が１０年近くものあいだ続いていたのだ。

これは外部の人間には全くと言っていいほど漏れておらず屋敷の人間の中でも徹底した緘口令が布かれるほどである。一方でこれは二人の仕事にとってはその反動か良い結果を生んだ。オーキドは史上最速と囁かれるほどのスピードで教授職に登り詰めた。カルミアはタマムシジムを見事に戦前と同等かそれ以上なほどに復興を果たして見せ、リーグ公認の座を勝ち取った。

オーキドはこれより2カ月ほど前にカルミアの日記を見つけ、欲望に負けて中身を見てしまった。

中身はオーキドに対する感謝は多少は書いてあったものの、大半はヤナギに対する思

いや後悔の念が綴られている。ヤナギに対する後ろめたさや勝手に日記を見た事に対する責めなどでこの事はカルミアには告げなかったもののオーキドにとってはショックの他なかった。

しかし、それでもオーキドはカルミアを愛し続けていた。かつてあれだけ憧れていた女性がどんな思惑を抱いていようと自分の側に居て夫婦で居てくれているという事実だけでも彼にとっては大きな幸せだったのだ。

そして、ゴールデンウィークを迎え、家族旅行の一環でスリバチ山へと行っていた。

―午後2時　山頂―

中腹にある休憩所で昼食を食べ、オーキド、カルミア、娘のスズノメはロープウェーを使って山頂にたどりついた。

一家のいる方向は西側であり、目下には緑が、遠方にはエンジュ市街が見え非常に風光明媚な所であった。そんな景色に見惚れていると、カルミアが足場を崩した。

「あ」

これが、オーキドの聞いた妻としての最後の言葉だった。

それからすぐに凄まじい土砂の音と共に彼女は３００ｍほど落下する。

「お母様……お母様ぁぁぁぁ!!」

スズノメは状況を把握し母親をしきりに呼び続けた。

無意識に足場の崩れた場所に彼女が行こうとしたのでオーキドは肩を押さえて必死に止めた。

「スズノメ。母様は大丈夫だから落ち着きなさい。だがすぐに救急車を呼ばなくては……」

オーキドは近くにあった公衆電話から救急車とレスキュー隊を要請する。

あたりは騒然となり、しきりに母を呼ぶ娘の慟哭が渓谷にこだました。

―5月7日　タマムシ大学病院　723号室―

彼女は昨日集中治療室から出てきた。どうにかこうにか医師たちの尽力で死は免れたものの、植物状態に近い状態であることが宣告された。いつ戻るかは予測できないという。

オーキドはしばらく教授としての仕事を休み、あれからつきっきりに彼女についていた。スズノメはただでさえ病弱なのに母親の事故を受けて部屋で寝込んでしまった。

そうしているとヤナギが見舞いの品を持ってやって来た。

見舞いの品を置くと、話があると言うのでオーキドはそれに従う。

―7階　待合室―

二人はソファーに座る。

「とんだことになったな……。カルミアの容体はどうなんだ」

ヤナギがオーキドに尋ねる。
「ああ……一命は取り留めたが、医師が見せてくれたレントゲンを見る限りだと脳幹は無事だが他が芳しくない。特に頭を強く打ったせいで大脳の損傷が著しい。典型的な植物状態に近い状態であることは確かだ。いつ意識が戻るのかさっぱり見当がつかん」
「そうか……。生きているだけ本当にもうけものだぞ。あの高さから落ちて助かるなんてそうそうない」
「確かにそうだな……。ところで話ってなんだ」
ヤナギは顔をしかめて神妙な表情で切り出す。
「タマムシジムの事なんだが」
「うむ」
「カルミア女史があんなことになってしまった以上、代わりのリーダーを立てる必要がある。このジムの場合、慣習から娘であるスズノメ女史に継いでもらうのが筋なのだが……、今は確か」
「ああ……相当なお母さんっ子だからな……。あの事件以来ずっと寝込んでしまってる」
「やっぱりそうか……。ジムに聞いてみても要領を得ない返答しか返ってこないから何事かと思いきや」

ヤナギはそう言って天を仰いだ。
「それで？」
「このままだとトレーナーがバッジ集める際に支障が出てくる。だから、三週間以内にどうにかズズノメ女史を説得してリーダーを継ぐようにしてほしい。さもなくばリーグ法に基づきタマムシジムの公認を外さなければならなくなる」
「分かった。私からも言っておこう。ただ恥ずかしい話娘はあまり私の事を好いてはいないみたいでな……。良い返事をやれるかどうかはわからないぞ」
「それでもいい。私やジムトレーナーからもどうにか復帰してもらうよう頼んでみるつもりだ」
「そうか……」
「私としてもポケモンジムの中で長い歴史をもつタマムシジムを公認から外したくはない。早々に立ち直ってリーダーを継いでくれると助かるのだが……」
ヤナギはそう呟く。
「それにしても、お前も随分と偉くなったもんだな……」
オーキドが恨み半分な調子で言う。
「お前こそ。ポケモン博士として大分名をはせているそうじゃないか」
「ま……ぼちぼちだけどな」

「やっぱり女史の父の言うとおりだったな……カルミア女史はオーキドと結ばれるべきだったんだ」
「へぇ」
「家庭を持ち、守るべきものができた今だからこそあの人の言っていたことの意味がしっかりと分かる。そりゃ、お婿さんにはちゃんと稼いでいて社会的な地位がある人に来てもらいたい……って」
「……」
「オーキドはどうだ？　女史と暮らして幸せだったか？」
「あ……そら、もちろんだ」
「そうか……。女史もきっと同じ事を思っているだろう。おっと、そろそろ行かないと。じゃあなオーキド」
そう言ってヤナギは立ち去っていった。
オーキドは深い悔悟の念に包まれた。ヤナギはかつて結婚を反対したカルミアの父親を許すほど精神的に成長、成熟しているのに自らは二十年前で立ち止まったまま何も成長していないのである。
オーキドはそんな重い気持ちに押し潰されそうになりながら、スズノメを説得するため屋敷へと戻っていった。

滑落事故はオーキドにとって受難であるほかなかった。

確かに救急隊を呼んだり付きっきりでついたりとオーキドの事後の対応は夫として何ら申し分はないが、事故はオーキドがもっとカルミアに注意していれば防げたのではないかという論調が世間の多くを占めていた。

事後の対応はほとんど知らされることなくマスコミはおもしろおかしく事故に関する検証や特集を多く組みオーキドの見落としを厳しく糾弾した。

カルミアの親戚とは不仲になり、滑落事故から一月半後に離婚。これはオーキドにとってこれまでの仮面夫婦生活に今回の事故がのしかかってきた為それが引き金となったのである。

精神を病んだオーキドはそのままタマムシ大学を休職。これは数年に及びどこぞで隠遁生活を送っていたという。

そしてこの隠遁生活のあいだにオーキドの心中は大きく変わった。ヤナギに対する後ろめたさは激しい憎悪へとかわりカルミアやその娘以下に対しては倒錯した愛情へ、そしてこの状況下に誰も助けてはくれなかった世間に対しては大きな復讐の念を抱くのだ。この大願が全て叶うまでタバコは吸わないと決めたのもこの頃である。

あれから二十年以上の月日が経過した。

ヤナギとカツラはリーグから身を引いてジムリーダーとなり、昭和が終わりを告げ、ミレニアムや金融ビッグバンなどの言葉が市中を賑わせていた。

そして、カルミアの家にも大きな動きがあった。１９９３年にスズノメが漸く結婚し、同年の暮れにエリカが生まれた。カルミアは１９９６年に奇跡的に意識を回復する。

カルミアは1年のリハビリで事故前と同様にまで回復した。その後、育児にさほど熱心でなく多忙であったスズノメにかわってエリカの教育や監督をする事とした。そして、才気煥発な彼女に目をつけて徹底的な英才教育を施した。

エリカは極めて優秀な子どもであった。まず1歳の頃に児童文学を読め始めて基本的な文字を覚え、5歳の頃には普通の大人でも遠ざけてしまうような専門書を読んでいた。そして小学一年生の現在では高校レベルまでの学習分野は全て押さえてしまったという。

しかし、進みすぎてしまった彼女はとっくの昔に覚えてしまった分野をまともに勉強する気が起きなかった。その為授業中は退屈のあまり寝てしまったり、起きていても花の絵を描いていたり古典を読んだりと好き放題であった。テストでは算数は計算問題

一つに長々と証明を書いたり、国語ではわざと旧字体で書き取りを回答して見せたり読解問題では出題者が求めていることを大幅に超えた解答をしてみせたりと先生方をほとほと困らせた。

　このようなある意味で問題児であったエリカに匙を投げかけていた教師は家族にどうにかちゃんと授業やテストを受けるように指導するように要請した。

―２０００年　７月４日　午後０時３０分　智院小学校　校庭―

　エリカのクラスは給食を終えて、校庭に遊びに出ていた。エリカたちのグループはうんていやブランコなどの遊具で遊んだり、ゴムとびなどをして談笑していた。

「そういえばさ、昨日昼寝してたらいつの間にかうちのしゅん（コラッタのニックネーム）がさー腕にだきついちゃってて、離そうとしても離れてくれなくてさー困った困った」

　と、一人の少年が笑いながら話してる。どうみても迷惑そうではない。

「あらあたしのニドちゃんだってこの前弟の持ってるニドくんと一緒にボール遊びさせたらボールが刺さらないようにちゃんとお鼻の先や頭で渡しあってたの！　お利口だしとってもかわいかったわー！」

　その後も口々にポケモンを持っている子が自慢合戦をはじめた。

　この時ポケモンをもってないエリカやその他数名は肩身の狭い思いをしていた。

「どうだエリカ！　羨ましいだろ！」
男子の一人が堂々とエリカに言って見せる。普段勉強で勝てない分こういう所で自慢しようというのである。
「べ……別に羨ましくなんかないですわ」
エリカは精一杯強がってそう返した。
「またまたそんなこといってー。エリカちゃんとこってジムリーダーのお家でしょ？余ったポケモンとか貰えそうなのに」
確かにそうであるが、カルミアがポケモンを渡そうとしないのである。
「だ、だからそんなポケモンなんて見飽きているから、わざわざ自分で持つほどではないかなと思っただけですわ！　全くポケモンの一匹や二匹如きでほんとお子様ですわねー」
エリカは平然とした顔でそう言って見せたが内心は全くの逆である。
こうして昼休みは過ぎ去って行った。
―同日　午後9時　カルミア邸　居室―
カルミアは小学校にあがって与えたばかりのエリカの部屋に入って連絡帳を見せた。
エリカは正座させられている。
「エリカさん。これはどういう事ですか？」

カルミアは正しい言葉づかいを覚えさせる一環として孫といえど敬語で接している。
「御祖母様、しかしですね授業が退屈で退屈で仕方ありませんもの……。掛け算や割り算なんて2歳の頃には完全に覚えてしまいましたし」
エリカの通っている小学校は日本全国でも随一の名門校である為普通の小学校よりも進み具合が段違いに早い。
「学問というものは基礎を疎かにしてはならないのですよ。例え馬鹿らしいと思ってもしっかりと熟していく事こそが肝要なのです」
「私はもうその基礎を固めたんです！　飛び級を許してくれるのならすぐにでも高校や大学へ行きたいのですけれど……」
この国の教育制度は義務教育、特に初等教育を色々な側面から非常に重視しているためどんなに優秀であっても小学校段階では飛び級が許されていない。（中学、高校は最高でそれぞれ一年ずつの在学が可。つまり二年間である）
「エリカさん。良いですか。学校というものは勉強だけを学びに行く場所ではないのです。学友と学識を高め合ったり知見を広めたり、また一緒に何かを成し遂げたりといろいろなことを学ぶために行く場所なのです。貴女のいる小学校という場所はその初期段階であり、非常に大事な局め……」
「お祖母様。小言は結構です。とにかく、私にとって学校は退屈である他ないのですわ。

図書館やジム、博物館に居た方がよっぽど時間を有効活用しているというものです！」
カルミアは言い訳を繰り返す彼女を見て深くため息をついた。
そこでふと、棚の上にあるナゾノクサやマダツボミなどのぬいぐるみが目に入った。
カルミアはクスリと笑って巾着袋から一つのモンスターボールを出して見せる。
「あ……お祖母様！　それって……」
モンスターボールを見るとエリカは目をらんらんと輝かせた。
「そう。モンスターボールですね。中にはナゾノクサが入っています」
カルミアは雑用用にたまたまナゾノクサを連れていたのだ。
そして、カルミアはモンスターボールからナゾノクサを出す。
「ナゾ……」
ナゾノクサは少し眠たいのかうつらうつらとしている。
「か、かわいい！」
エリカは反射的に抱きついて頬ずりをしてみせた。
彼女自身、周囲のポケモンを見せびらかしている同級生を見て内心とてもうらやましく思っていたのだ。
「エリカさん。そのポケモンは貴女に差し上げます」
「え……し、しかし良いのですか？」

「ナゾノクサくらい、屋敷の裏庭に行けばいくらでも捕まえられますしね……。但し、条件があります。これからのテストで一番を取り続ける」
「なんですか……そのくらいでしたら余裕ですわ」
　エリカはナゾノクサを脇に据え、得意満面になって返す。
「話は最後まで聞きなさい！　……、それで、もう一つの条件は連絡帳にこのような事を書かれないこと、つまりちゃんと授業を受け、先生のおっしゃる事を聞く事です！　わかりましたね？」
「は……はい」
　自信がないのか、エリカは下をむいてしまった。
「これらをきちんと守れましたら……。学年があがるごとにポケモンをご褒美に差し上げます。但し、一度でも守れなかったらそのナゾノクサも含め全て没収しますからね。分かりました？」
「は、はい！」
　エリカは引き締まった表情で答える。
「宜しい。ではもうそろそろ寝なさい。明日も学校はありますからね」
「分かりました。おやすみなさいませ。お祖母様」
　エリカは恭しく頭を垂れた。

カルミアはドアを閉めて立ち去って行った。
それからエリカは興奮冷めやらぬ様子でナゾノクサを四方八方から眺めたり、スケッチをとったりした。
そうこうしていると限界を迎えたのかナゾノクサはその場に倒れて寝てしまう。
「ナゾノクサ……あ」
彼女は同級生がニックネームをつけていたことを思い出した。
せっかくなので自分もニックネームをつけてやろうと思ったのか数分程考える。
「クロ……そうだわ！　ナゾノクサ、貴方は今日からクロ！　嬉しい？」
彼女はナゾノクサを高い高いの要領であげながら尋ねる。クロとはナゾノクサの体が黒かった事から思いついた単純な名前である。
上に生えている葉っぱが前に垂れる。これを承諾の返事だと思い込んだのか
「まぁ！　私も嬉しいわ！　……、ともうこんな時間ですか。クロ、一緒におねんねしましょうねー」
エリカは先に布団を敷いてクロを寝かせ、翌日の授業の教科書をランドセルに入れた後一緒に床へついた。
翌日、渡し忘れていたとカルミアからクロの入っていたモンスターボールを受け取る。

以後、エリカは見違えたかのようにしっかりと授業を受けテストも当然のように満点を取り続けたという。

クロとの関係も良好であり、まるで妹でも出来たかのように大事に育てていたという。エリカが水を与えれば美しい深緑の葉っぱを揺らして答え、彼女はそれを見て微笑んでいた。

二年生に上がった時、エリカは新たにマダツボミを手に入れた。

こうして彼女の小学校生活はより実りあるものとなっていく。しかし、二年生の梅雨。事件が起こった。

―２００１年　６月８日　午後４時１５分　タマムシシティ　中央公園―

この日、エリカはいつものようにクラスメイトと公園に居た。クラスメイトの手持ちたちも混じってわいわいと楽しくボール遊びや鬼ごっこ、かくれんぼなどをして遊んでいた。

しかし、日が傾き始めたこの時刻に突如ベトベトンが襲来。あたりは騒然となり、クラスメイトたちは早々にポケモンをモンスターボールに入れて退散した。だが、ベトベトンに一番近いところに居たエリカは腰を抜かしてしまい、動くこともままならなかった。

ベトベトンは僅かなスピードではあるがエリカに近づき、のみこもうとしている。
そこで立ちはだかったのがマダツボミとクロである。（エリカはマダツボミのことをネッチと呼んでいる。根をみせていることからつけたらしい）
我に返った彼女は二匹を戻そうとした。
「っ……！　ネッチ、クロ！　戻りなさい。貴方たちの手に負えるような相手ではないはずですっ……！」
彼女は精一杯声を絞り出していう。ベトベトンはベトベターの進化系であり、非常にしぶといポケモンである。進化前の二匹ではとても勝てないだろう。
しかし二匹はエリカの方を見て首を振る。
「そんな……無茶な……強がりを言わずに、言う事を聞いて」
と言いながら彼女はモンスターボールに手をのばし、かざそうとする。が、マダツボミの蔓で弾き飛ばされる。
「ネッチ……。どうして」
「ツボツボッ」
マダツボミは身振り手振りでどうにか自分の意思を伝えようと試み、蔓を差し出す。
エリカには伝わったが
「ここで自分たちを戻しても私が捕まる……？　ばっバカにしないでください！　この

程度の事で動じるような……」

エリカはどうにか立ちあがって、大丈夫な風に見せようとした。しかし、さっきよりも大きく見えたベトベトンの巨体を見てやはり腰を抜かしてしまう。

彼女は机上で全てのポケモンについて知ってはいたが実際に見ることは慣れていない。自分の身が危険だとなれば尚更である。

「つっ……」

彼女は尻餅をついて顔を歪ませた。

「ナゾ！　ナゾナッゾ！」

「……ツボ」

ナゾノクサが強く主張した風な素振りを見せると、マダツボミは仕方がないとばかりに頷く。マダツボミはすばやく後方にさがった。

「クロ……？」

エリカはクロを見つめる。

「ナゾ……」

クロはエリカの顔を見た後

「ナゾ！」

精一杯の笑顔を見せた。そして、すぐさまベトベトンの懐中へ突撃を敢行する。今ま

で彼女が見た事もない速さで、クロは敵の懐へ飛び込んだ。
マダツボミはクロの支援の為、最大限の蔓を出し、ベトベトンの動きを封じ込める。
ベトベトンはもがきながら蔓の桎梏から逃れんとした。
こうして、一つの巨体の前に二匹の小さな勇者が戦いをはじめた。
―午後４時２０分　タマムシジム　事務室―
この日はカルミアとスズノメが合同で予算のチェックを行っていた。しかし、その場に公園での大事を見たジムトレーナーが息を切らして駆け込んできた。
このトレーナーの名前はナツキ。後の臨時ジムリーダーであるが、当時はまだ駆け出しの新人であった。
「リーダー！！　大リーダー（カルミアを指す）！　た、大変です！　中央公園でエリカお嬢様がベトベトンに襲われています！」
「なんですって……！　分かりました。すぐに行きます！」
「はいっ。今にも飲み込まれそうな勢いですから急いでくださいっ！」
「そう……ご苦労様です。下がっていいわ」
そう言うとナツキは深々と頭を下げて事務室から出て行った。
「あの子は？」
カルミアがスズノメに尋ねる

「最近入ったナツキという子です。年は若いですがなかなか見込みがあると思いますが……あの子が何か」
「礼儀正しい子だと思うたらそういうことじゃったのか……。や、何でもない」
「そうですか。それにしても、あの子ったら……。すぐに助けに」
スズノメが反応したが、カルミアが押さえる。
「いやスズノメ。あんたは引き続き仕事をするのじゃ」
カルミアは当時68歳である。その為エリカが居ないところでは基本的に婆言葉になっている。
「そ……そんな殺生な！　お母様、私はエリカの母親ですよ？　娘が大変な目に遭っていると言うのに仕事も何も」
「確かにあんたはエリちゃんの母親……。しかし同時にリーダーでもあるのじゃ。リーダーたるもの本来の職務を放棄する事は私が許さんぞ。それに、言ったはずじゃぞ。エリちゃんの事は私に任せ、あんたはリーダーとしての職務に専念せよとの」
「た……確かにそう仰りましたけれど、けれども……」
「その上、私には一つ気がかりな事があるのじゃ」
「き、気がかり？」
「エリちゃんが襲われているということはあの子の持っとる子たちが……」

―午後４時２５分　中央公園―

クロは懐に突っ込むかと思いきや大きく飛び上がって黄色い痺れ粉を噴霧した。

まずは動きを封じてエリカを飲みこませないようにしようという算段である。

目論見は当たった。ベトベトンは麻痺し、動きが更に鈍る。それに乗じてマダツボミがさらに締め付けを強くし、苦しめる。

「ナゾー」

ベトベトンは仕返しだとばかりにクロを捕まえようとするが小さい上に小回りがよく効く。蔓の助力もあってすばしっこく魔の手を避け続けた。

エリカはその様をじっと見守る他なにもできなかった。

クロは１０分程走った後、とどめだとばかりに眠り粉を撒こうとする。しかし、走り過ぎて疲労が溜まったのか、ベトベトンの痺れ状態が早く切れたのか噴射準備を整えて葉を蕾型にまとめた頃、遂に捕まってしまう。

「ナゾッ!?」

あまりにも不意打ちだったのかクロは当惑気味である。

ベトベトンは遂に好機を得たと、クロを思い切り締め付ける。

「クロ！」

エリカは捕まったクロを見て思わずそう叫んだ。

軋む音が聞こえてきそうなほどにベトベトンは強く握りしめていく。クロは必死に逃れようとするが力の差はどうにもならない様子だ。マダツボミの方はどうにか蔓をクロの方へ向けようとするがすぐに弾かれてしまう。

前にも増してベトベトンが強くなっている所を見るとクロから養分を吸い取っているようだ。

クロからは段々と生気がぬけていく。葉はしおれていき目にも光がなくなっていく。

「そんな……クロ！　しっかりして！　貴女は私の大事な大事なお友達でしょう！　こんなところで力尽きてはなりませんわ！」

クロはエリカの言葉を聞いて最後の抵抗を試みようと精一杯足で握る手を蹴ろうとした。しかし、それすら自由にできない程ベトベトンは強く握りしめている。

「クルシメ……クルシメ……」

ベトベトンからは時折そのような声が聞こえてくる。

そして

「コレガ……トドメダ」

とクロを握る力を最大限なまでに強める。するとたちまち生気を失って色あせている葉っぱが紫へと変色した。

エリカはこれを見て瞠目する。

「そ……そんな……こんなことって」

それもそのはず。この色はポケモンが毒に冒された時に発色するものである。

しかし、クロ（ナゾノクサ）は草と毒タイプである。本来ならば無効化するタイプが効いてしまっているのだ。

「クロ……クロォォォォォ!!」

しかし、今度はクロからの返答はない。

その直後、厖大な量の葉っぱが刃となってベトベトンに襲い掛かった。

エリカが背後を見ると放ったのはそれぞれカルミアとスズノメのモジャンボとウツボットのようであった。カルミアは結局スズノメに根負けしたようである。この一撃を堪えられなかったのかベトベトンはクロを放し、そそくさに近くの池へ戻って行く。

どうやら、二匹にとっては強大であってもそれなりの強さを持つポケモンからすれば大したことは無いレベルだったようだ。

エリカはすぐさまクロの所へ駆け寄る。

「クロ！　しっかりしてよ、クロ！」

エリカは抱き寄せて呼びかける。しかし、クロは目を閉じたまま動かない。葉っぱも紫に萎れたままである。

「クロ……クロックロッ！　クロォォォォ!!」

エリカの慟哭は公園中に響き渡った。
「そんな……草と毒のタイプを持つポケモンが毒タイプのポケモンに毒で殺されるなんて今まで聞いたことが……」
スズノメが言う。
「確かに普通に考えれば有りえないことよの。しかし、耐えられる閾値を越す毒を持つポケモンが毒を与えれば……このような状況が起こりえるということかもしれんの」
そのことを遊具の陰で一人聞いている男がいた。
男は一度舌打ちをすると何処ぞへと消えていくのだった。
―8月13日　午後3時　シオンタウン　ポケモンタワー―
クロの死から二か月が経過し、初盆がやってきた。
エリカは暫くの間クロを失った悲しみから立ち直れなかった。クロが亡くなった直後のテストで二番手に降格したほどである。さすがにこの時はカルミアは大目に見た。四十九日の法要を終えてクロをポケモンタワーに埋葬するようになって漸くクロの死と向き合う。
線香をあげ、祈念を済ませた後エリカはぽつりと言った。初盆とはいえポケモンに対するものなので付き添いはクロをエリカに与えたカルミアのみである。
「どうして……クロとマダツボミは私を守る為にわざわざあのような事をしたのでしょ

う」

エリカはあれ以来、クロのような悲劇が起こった時愛着を持ちすぎたが故に本分が手につかなくなるということを防ぐ為にニックネームをつけることをやめた。ネッチと名付けていたマダツボミにもあだ名で呼ぶことはなくなったのである。

しかし、クロだけは今更変える気が起きなかったのかそのままである。

「エリカさん。貴女には一つ言っていないことがあります」

「はい」

「実は、マダツボミに関しては事前に私がいざという時に貴女を身命を賭して守るようにきつく言いつけていたのです」

「えっ……」

「クロに対しても貴女が居ない隙に同様のことを言い渡しました。その上もしエリカさんの身に危険が及んだら最悪の場合は当人の指示を無視してでも排除に向かうように……と」

「では、あの行動は全て……」

「はい。私の言いつけを守った結果です」

「そんな……では、クロが亡くなったのはそのせいなのですか!?」

彼女は今までにないほど祖母をきつく責め立てる。

「私は確かに身命を賭して守るよう言いつけました。しかし、同時にあまりにも実力差がある相手ならば貴女を連れて逃げるようとも申しつけました」

エリカはすぐにあの時マダツボミが蔓を差し出したことを思い出した。あれは、決してエリカを馬鹿にしているのではなくこれに捕まって逃げることを頼んでいたのだ。

「そんな……」

「私自身あのようなポケモンが市中に現れることを充分に想定していなかったという咎があります。そして私が行き遅れたからクロはあのような姿に……。その点は本当に申しわけなく思っています」

カルミアはエリカに白髪の多く交じった頭を下げる。

「……」

エリカは幼い頭中で一生懸命考えた。つまり、クロがベトベトンに向かっていったのはカルミアの指示によるものではなく完全な自らの意思に基づいて行動したのである。飲み込まれてしまいそうな主を救うためにその小さな躰をあの巨体に向けたのである。

そう考えると、エリカには悲しみの感情よりも感謝の念がこみあげてきた。

「クロ……ありがとう……」

彼女はクロの小さな墓石に近づき、抱き寄せる格好で墓石に頬をつけた。

初めてクロと出会ったあの時と同じように――

それ以来、あの条件を満たした後はカルミアがモンスターボールを与えて屋敷内でエリカに捕まえさせる形とした。カルミアは反省としてエリカのポケモンに口出しを一切しなくなった。

あれからまた月日は流れる。

エリカは小学校を卒業すると飛び級を利用して二年間で中学高校をパスし、１２歳という前代未聞の速さでタマムシ大学へ入学した。

しかし、エリカが１４歳の時にエリカの母親であるスズノメが急逝。残された先代ジムリーダーであるカルミアは告別式の翌日エリカを呼び寄せた。

―２００７年　３月２７日　カルミア邸　応接間―

カルミアとエリカは向かい合って座っている。

「お祖母様。折りいった話とは？」

エリカは表情をキリリと引き締めて尋ねた。

「単刀直入に申しあげます。エリカさん、貴女にはスズノメの後を継いでタマムシジムを引き継いでもらいたいのです」

次の瞬間、彼女は目を見開かせた。

「そ……そんな！　私には荷が重すぎますわ。お祖母さまだって昔はリーダーを務めて

いたのですから復帰する形でついたほうがいいのでは。そのお手伝いでしたら私はいくらでも致しますし」

　エリカは本心からいっている様子である。実際にエリカ当人がジムに行ったことは何度もあるが、目的は植物の観察やトレーナーの顔を知っておく程度のことであった。この時点ではジムトレーナーとの親交はほぼなかった。というより、ジムの大御所にあたるカルミアの孫でありリーダーの娘に下手に接触して面倒が起こることを嫌っていたのだ。エリカ自身が凄まじい才智の持ち主であることがそれを増幅させていたことも否定できない。

「私ももう長くはありません。頭を打ってここまで生きてこれたのが不思議なくらいなのですから。もってあと十年もつかわからない命だったら貴女にリーダーになってもらった方がなにかと宜しいと考えたのです」

「し、しかし……私のような若輩がリーダーなんて」

「今、セキエイで四天王をされているワタルさんは16歳で、エンジュシティのマツバさんは17歳でリーダーになったそうです。それに私自身17歳でリーダーになりましたしね。貴女くらい若くても充分につとまる職です」

「そ、そうなのでしょうか……」

「それに、貴女を厳しく育ててきたのは全ては明治以来の由緒ある歴史を持つこのジム

の立派なリーダーとなってもらいたいからです。そう考えるならばこれを機会にリーダーになるのが自然という物」

エリカはそこまで言われて、数分ほど黙した後

「承知いたしました。僭越でありますが、その話お受けしますわ」

「左様ですか！　嬉しい限りです。では私は貴女にリーダーとしてやるべき事や心構えなどを伝授します。貴女が立派なリーダーとなるようできる限りのことは致します。これは私が最後に貴女に教える事です。心して臨んでください」

こうして、この瞬間からエリカのジムリーダーとしての人生が始まったのである。

―3月28日　午前8時　タマムシジム　最奥部―

翌日、カルミアはスズノメの逝去後初めてジムを開いた。

総勢53名のジムトレーナーたちが集まり、そわそわとしている。

トレーナーたちの目に晒されながらカルミアが口をひらく。エリカはカルミアの右隣にいる。

彼女は内心非常に緊張していたが、カルミアからリーダーたるもの堂々とありなさいと言われているため泰然自若としている。

「3月22日、先代ジムリーダーを務めていたスズノメが亡くなったことはすでに耳にしておいでだと思います。通夜や告別式のお手伝いに来ていただいた方には大変感謝

しております。スズノメも黄泉の世界でさぞや喜んでいることでしょう。さて、今回は次代のジムリーダーについてお話をさせて頂きたいと思います」

　カルミアは一呼吸おいて続ける。

「ご存じの方もいると思いますが私は今から三十年ほど前の滑落事故で重体となる前まではここのリーダーをしておりました。あの事故を契機にスズノメに交代したのです。そのいきさつを考えれば私が継ぐのが筋なのでありましょうが、私ももう先は長くありません。その為、若輩ではありますがスズノメの娘であるエリカにジムリーダーを継いでもらおうと考えるに至りました。ただ、リーダーとしての教育はまだこれからの為数年は私が監督し、それに加えて特定のトレーナーに補佐していただこうと考えております。では、エリカさんご挨拶を」

　カルミアはエリカにマイクを渡す。因みに滑落事件の本当の詳細を知っているのはこの中ではカルミアのみである。当時勤めていたジムトレーナーは既に引退しており（タマムシジムのトレーナーは三十歳前後を目途に寿退社もしくは企業に就職などするのが慣例となっている）、エリカ含め知ってるジムトレーナーは一人で旅行に行ってたカルミアが足を滑らせただけという話になっている。無論これはオーキドのことを記憶から葬り去りたがっているカルミアやスズノメ自身の要請による物であり、緘口令は確実に守られているのだ。

「皆さん初めまして。ジムリーダーを引き継がせていただくことになりましたエリカです。維新以来、激動の歴史と時の試練を乗り越え、格式のあるジムを私のような未熟者にどこまでリーダーとしての職務が全うできるか不安ではありますが皆様と一緒に伝統を守りより良いジムを作って行こうではありませんか！」

エリカは堂々と立て板に水の如く話した。

ジムトレーナーたちは驚きと共に盛大な拍手を送った。

「はい、どうもありがとうございました。では、先ほど言った通りトレーナーに補佐して頂きたく思いますが……、ナツキさん。貴女はいかがですか？」

「えっ……私ですか!?」

ナツキは突然の指名に当惑している。

「貴女は年はまだ17と若いですが、なかなかに優秀な見識や洞察力があると見込んでいます。年も近いですし貴女ならばきっとエリカの片腕としてやっていけると思うのですが……」

「そ……そんなに私のことを……。分かりましたやらせていただきます」

こうして、エリカとナツキのリーダーと補佐としての関係は始まったのである。

その後二人は事務室へ通され、ナツキの口からジムの現況がエリカに話される。

スズノメ時代は本人が病弱であり精神的に弱いと言うことがあってカルミア時代ま

での輝かしい成長は陰りを見せた。
　それでもカルミアの病状が悪化する２００５年頃まではどうにかこうにかジムの仕事は回せていた。しかし、本人が病気がちであったことからなかなかポケモンの訓練にさく時間が取れずポケモンジムとしての強さはみるみるうちに下がっていき、トレーナーの歩き方をはじめとするハウツー本やトレーナー雑誌には「休息の地」などと揶揄される事態に陥った。
　２００６年になるとスズノメはいよいよ命旦夕に迫るほど病状は悪化。カルミアはこれに対してリーダーまでたどり着けないようにトレーナーのポケモンを増強したり、通路を複雑にしたりと様々な対策を打った。リーダーにまで辿りつくとなんとかたっていることはできるのでできる限りのことを行わせた。
　２００６年末にとうとうスズノメは倒れ、翌年正月より三ヶ月は代行という形でカルミアがリーダーを務めた。そして、3月２２日。スズノメは息を引き取った。
　何度もかいているとおりスズノメ期でタマムシジムのポケモンジムとしての権威は失墜し、リーグでは公認から外すことも何度か真剣に議論されたほどである。しかし、明治以来の歴史があること、初代理事長であるヤナギの意向などで外されることはなかった。
　しかし、トレーナーの間ではタマムシジムは最弱の判定を下されるほどである。タマ

ムシジムはこの時まさに停滞期に陥っていたのだ。新人リーダーのエリカの双肩にはジムの地位向上と言う課題が大きくのしかかっていた。

あれから二年。

エリカはカルミアの監督やナツキの補助によってリーダーとしての心構えや知識知能を身につけ今やカルミア無しで立派に切り盛りできるようになっていた。

エリカはこの当時カルミアと同等程度のポケモントレーナーとしての強さはあったので最弱の汚名はどうにかすすげた。しかし、スズノメ時代の悪評を拭いきるには至らずまだまだ課題は残っている。

カルミアはといえば２００９年の元日以降はエリカは完全に自立したと判断し、やっと訪れた平穏を残り少ない命の中で享受していた。

そんなある日のこと

―２００９年　８月１３日　午後９時　カルミア邸　居室―

この時のエリカはタマムシ大学の卒業が確定し、秋期卒業生として式を来月に控えている。エリカは戦後では最年少かつ首席で卒業するため各界の著名人が集まる中、学位授与式で総代として答辞を述べることとなっていた。

そんな中、エリカはこの日クロの見舞いに行き、レッドと初めて会ったのだった。

エリカは週に一回程度カルミアの部屋に来ては本を借りに来たり返すついでに話すことが習慣となっている。
「エリちゃん。答辞の進み具合はどうなのじゃ」
カルミアは元日以降エリカに敬語を使うのをやめ、かつてスズノメに対して使っていた口調と同じような語り口で接している。
「なかなか難儀してはいますが……。少しずつ進んでいます」
「折角このような名誉ある大役を仰せつかったのじゃ。しっかりとがんばりやにゃあの」
「はい。勿論です」
彼女はしっかりとした表情で答える。
「それと、ヒウン大学からの招待留学。これはどうするつもりじゃ？」
エリカの類稀なる頭脳の噂は遠くイッシュ地方の名門大学であるヒウン大にまで届いており、彼女は入学金及び授業料など免除の上大学院編入を打診されていた。
「お断りするつもりです。確かにイッシュ地方は興味深いところですが、私は今の所この街、この国から離れて暮らしたくはないのです。それに、ジムもありますし……」
「フム……そうかの」
カルミアはそうとだけ答えた。

数秒ほどの間の後エリカが話しかける。
「あの、お祖母様」
「なんだい、エリちゃん」
「私、今日一人興味深いお方に会いましたの」
「へぇ……あんたがねえ。珍しいの」
カルミアは興味津々な様子で受ける。
「トレーナーなのですが……。マサラ小をでた後に3か月ほどで三人のジムリーダーを倒し、ロケット団をも鎧袖一触で倒す力を持った強い御方です」
「それはかなり有望じゃの……ここ数年ではそこまで強い力をもったトレーナーというのは聞いたことがない」
一般的なトレーナーからしてジムリーダーの壁は非常に高く、特に一人目に関しては半年か一年掛かりで倒すのが通常である。
しかしそれを数か月で数人倒すと言うのは驚異的なスピードである。
「名前はなんというのじゃ」
「確か……レッドという名前です。性格はごく普通の少年といったところですね。しかしそれとなく大成していきそうな雰囲気は感じ取れました」
「そうかの……。もしかすれば、エリちゃんのよき伴侶となるかもしれんの」

「もうお祖母様ったら……。まだ私はそれを考える段階にありませんわ。それに私とは住む世界が違うのですし」

彼女はにこやかに笑いながらそう返した。

「ほう……。ならば、住む世界が同じならば付き合うのかの？」

「フフフ……。それは、どうなのでしょうね。分かりません」

この後も夜が更けるまでカルミアとエリカは雑談を続けた。

この時の彼女は公私ともに順風満帆でありいつまでもこの時が続くことを望んでいた。

しかし、何事にも終わりは訪れる物なのだ。

―２００９年　９月２５日　午後２時　タマムシ大学　構内―

エリカは学位授与式において見事総代の役目を果たし、栄えあるタマムシ大学の首席卒業生として名を刻んだ。

その後エリカは友人と共に卒業パーティーに出ようとしていたが突如屋敷の人間がある事を伝えに来た。

「お嬢様！　一大事でございます」

「あら……。どうされたのですか？　そんなに息を切らせて」

使いは呼吸を整えて

「落ち着いて聞いてください。大奥様が……屋敷に戻られてすぐ倒られました」
「えっ……!?」
彼女は一瞬何を言われたか把握できなかった様子である。
カルミアは学位授与式の後屋敷に戻ったが、部屋に戻る直前に倒れてしまった。
すぐに当直の医者が呼ばれカルミアを診察した。どうやら滑落事故での脳挫傷で負った病が再発したようである。
エリカはパーティーの出席を取りやめて自宅に戻り、カルミアの看病を付きっ切りで行った。屋敷で亡くなる事を願っていた本人の希望があり、カルミアは病院に運ばれず当直の医者及びタマムシ大学病院からの医者が治療を行っていた。
―9月28日　午前11時　カルミア邸　居室―
倒れてから数日、カルミアは一時的に病状が安定し、意識が回復。会話が出来る程度にはなっていた。
死期を悟ったカルミアは幼少の頃から自らに仕えている執事を呼びつけている。
「これを」
と言ってカルミアは執事に一枚の封書を手渡した。
表面には宛名が書かれている。
執事は受け取ると

「かしこまりました」
と言って立ち去っていった。
―午後2時　チョウジタウン　ポケモンジム　事務室―
ヤナギは毎日散歩を終えると事務室でリーダーとしての職務を行っている。
挑戦に来る者もいるが1週目トレーナーの手加減状態で戦うときを除けば十分ほどでおわるのでほとんど事務仕事である。
そんな最中、トレーナーの一人が来客を知らせてきた為事務室へ直通の勝手口に通すよう頼んだ。やがて、ドアがノックされた
ドアを開けると男は深く頭を下げてカルミアの執事であることを名乗った後
「これは大奥様からの書簡であります。では」
とだけ言って立ち去る。
ヤナギはドアを閉めて手紙を開封する。一読した後東の方角に目をやった。
―午後7時　タマムシシティ　カルミア邸　居室―
エリカは三日ぶりにジムを開いた後、すぐさまカルミアのもとに向かい看病をした。
そんな最中カルミアはエリカに遺訓の如く話す。
「エリちゃん……。あんたは小さいころからよく私の言いつけを守り、勉学に励んでここまで立派に成長した……。ばあさまはそれだけで十分に幸せなのじゃ……」

エリカはそれを聞いて、カルミアの手を取り目に涙を溜めて言う。
「そんな……そのようなこと仰せにならないでくださいまし！　私はまだまだお祖母様と一緒にいたいのです！　それに……お祖母様が万一亡くなってしまうと私……」
エリカの肉親は他界しており、兄弟もいない。カルミアが亡くなればいよいよエリカには明白な親戚や家族がいなくなるのである。
「大丈夫じゃ。エリちゃんは強い子。一人でもしっかりとやっていけるしその為の術は教えてきたつもりじゃ。しかしの」
「しかし？」
「エリちゃん……あんたの花嫁姿を見る事無く旅立たなければならないことが口惜しゅうての……。エリちゃん、何度も言ったが貞操は大事に、伴侶は時間をかけて選ぶのじゃぞ。流れに任せてしまうのが一番宜しゅうない。自分にとって心の底からそして、相応と思った殿方とのみ結ばれるのじゃ。さもなければ……暗い影を落とすことになるやもしれぬ」
カルミアにとっての気がかりはとにかくその一点のみであった。自らと同じ轍を踏ませてはならぬと異性との交流や貞操観念については口を酸っぱくして教育していたのだ。
エリカとはその後も二言三言ほど話し、下がらせた。

―午後１１時　同所―

カルミアは執事を呼び出した。

「久々に……外の空気をすいたいのじゃ。離れの庭で良いから出させてはくれぬかの」

「大奥様。気持ちはよくわかります。されど、夜風は病の身体には特にこたえますぞ」

執事はこう言ってカルミアの要望を退けたが、カルミアは懇願した。

根負けした執事は最後の願いを聞き届けたとばかりに車椅子を持ち出し、カルミアを離れにある東屋まで連れて行った。

―東屋付近―

カルミアは最早自分の意思では歩行することもままならないほど病状は深刻であった。東屋につくと、カルミアは執事に言う。

「はぁ……やはりここは心が落ち着くのう……」

「左様でございますな」

ここにある庭はカルミアが特に大事に育ててきた植栽が植えてある。あたりには花の良い香りが漂い、時折ポケモンたちの動く音がきこえる。

「すまないが、一人にさせてくれぬかの」

「ハッ。かしこまりました」

カルミアは懐からおもむろに鈴を出す。

「気が済んだらこの鈴を鳴らす。それまでこの周囲には誰も近づけるでないぞ」
執事は黙礼して去って行った。
十分ほどしただろうか。カルミアはなんとか動く両手で一度手拍子を打つ。
すると、カルミアの目の前に一人の老人が姿を現す。
「来て、頂いたのですね」
カルミアはにっこりと笑ってその老人を見る。
「病床にある貴方から急に手紙が来れば私でなくてもそうするだろう。久しぶりだの、カルミア女史よ」
老人はヤナギであった。彼は彼女にお辞儀をする。
「あら。もう理事長とリーダーの間柄ではないのですから、前のように接していただいてもいいのですよ?」
カルミアはくすりと笑って言う。
「もうこの喋り方が板についてしまったのでな……。全く年は取りたくはないものよ」
「ふふふ。左様ですか……。それにしてもよくここまでたどり着けましたわね」
「貴方と別れた後少しばかり忍びの技を仕込んだのでな」
「なるほど……。そうでしたか」
それから少しばかりの沈黙が続く。

「それで。今日は一体何用だ」
「私の命は最早風前の灯火にあります」
「倒れたと聞いた時は驚いたがの……それでも今の貴方を見る限りだと元気そうに見えるが」
「端から見るとそうなのかもしれません。しかし、自分の躰のことは自分がよく知っています。それに、四肢はあまり言うことを聞いてくれませんしね……」
　ヤナギは黙して聞いている。
「ですから、ヤナギさんには……いえ、ヤナギさんだからこそ伝えておきたいことがあるのです」
「分かった。聞こう」
「ありがとうございます。それで、私には気掛かりなことがあるのです」
「というと？」
「私の元夫、オーキドさんのことです」
　ヤナギは暫く間を置いて答える。
「うむ」
「今から八年ほど前にこの街でベトベトンが出たことはご存知ですか？」
「かなり話題になったからのう。知っておる」

「あの池にはたしかにベトベターとベトベトンが生息しています。しかし、危害を加えたりしなければ外には出てこないはずなのですわ。それなのに少し離れた噴水近くの公園まで襲いかかってくる。これはなんだか妙ではありませんか？」
「確かにそうだの」
「そこで私は一つの推論を建てました。オーキドさんがあれを仕組んだのではないかと」
　それを聞いてヤナギは目を見開かせて驚く。
「ま、まさか。そのような」
「ポケモンの性格を変えてしまうほどの生物学の知識及びポケモンの生態に通じている方はそうそういるものではありません。その上オーキドさんは私に対してたいそう親切にしていただけましたが、心の奥底ではヤナギさんへの劣等感に満ちていることが私にはひしひしと感じ取れました。私自身もともとあの方を好いてない為尚更そう思うのかもしれませんけれど……」
「なるほど……。あの事故で貴女を失い、力尽くでも奪い取る為にその手駒として貴女の孫娘であるエリカ女史を襲わせたと」
「だとするなら憤懣やるかたないですが……。何分証拠がありません。しかし、オーキドさんが私、そしてこの一族、もしかすればヤナギさんの建てたポケモンリーグにまで

恨んでいるやもしれません。確信はありませんし、妄想の類かもしれませんがヤナギさんにはお伝えします」
「あいわかった。十分に注意しておこう」
「それと……この事は私が亡くなった後も内密にお願い致します。向こうに気取られでもすれば何が起こるかわかりませんし……」
「うむ」
　カルミアは言い終わると、空を見上げた。
　郊外に建つこの屋敷から見える星空は非常に美しいものである。
「今日は……綺麗な星空ですね」
「空気が澄んでいるせいか、チョウジよりもよく見えるような気がするの……」
「ええ。……このような美しい情景と……最期に貴方が立ち会い、話を聞いていただけた。それだけで今日が旅立ちだとしても笑って黄泉の国に行けそうですわ。何よりも私の最後の使命であったあの子を……エリカを一角の女性に育てることが出来たのですから」
　ヤナギは口をつぐんで引き締まった表情でカルミアを見る。
「本当……よかったですわ」
　そう言うとカルミアは目を閉じる。その表情はとても安らかな表情であった。

ヤナギは煙玉をだして屋敷の人間に知らせすぐさまその場を立ち去った。
―こうして、戦後の混乱を切り抜けてタマムシジムを本格的に復興させ、次代へと繋げていった一人の女傑がこの世を去った。享年７６。
カルミアは安らかに世を去ったが、これからが本当の始まりなのであった。
―過去編　玉虫色の一族（後編）　完―

番外編　不動の歴史（イッシュ編ＩＦルート）

―２０１４年　２月２１日　午後１０時　ストレンジャーハウス―

レッドはフウロと話しているうちに段々とその妖艶な肢体に見とれていく。

前話していた時はエリカも居たし、それなりに自制が働いていたが、今度は二人きりだ、自然と発情が進む。

そういう訳でレッドはある行動に出る。

「ピカチュウ、ヒトモシ……、ちょっと廊下に出て遊んで来い」

二匹は不思議そうな目をするが、従った方がいいだろうという事でさっさと出て行く。

「？　どうして下がらせたの？」

「いや……、ヒトモシは暗い空間の方が好きそうだし、ピカチュウはそのお目付けってことで」

「ふーん……」

と言うと、フウロはポケットから携帯を取り出し時間を見る。

「もうこんな時間かあ……、じゃ、あたし歯磨いてくる」

この部屋の奥には洗面台がある。
フウロは立ち上がると、後ろを向き、歯ブラシを取り出すためにカバンに向かう。
レッドはカバンに向かっている時、フウロの背後から精いっぱい抱きつく。
その時、レッド自身にフウロの腰あたりの柔らかい感覚が来る。
その感触に彼は更に気分を高揚させる。
「ひゃあ！」
フウロは当たり前だが、突如抱きつかれて狼狽している様子だ。前かがみになっているところを狙われレッドに掬い上げられたので、丁度フウロの体は弓のような形になる。
「ちょ……レッド君……な、何……？」
「……」
レッドはしばらくの間、沈黙を守ったまま柔肌の体温を感じ続ける。
「やめてよ……、あたしたち別にそういう関係じゃないよ！」
フウロのその言葉に、彼は踏みどどまった。
自分はまだ、フウロに好きだと思われていないんだな……そう思ったレッドは
「ごめんなさい……フウロさん」

そう言って、レッドはフウロの体の束縛を解く。
「……、どうして？　どうして急にこんな事をしたの？」
フウロは責めるというよりも、純粋な疑問の体で尋ねる。
「……、魔が差したんです。本当にごめんなさい……!!」
そう言って何もかも振り切るようにして、レッドは部屋から出ていく。
「あっ……レッド君……」
フウロは一人部屋に残されるのだった。
―廊下―
部屋から出ると、外ではピカチュウたちが下の階で遊んでいた。
どうやら鬼ごっこをしているようで、ラッタやズバッドが鬼になったピカチュウに追いかけられている。本気で行けばレベル差もあってすぐに捕まえられるというのに、手加減していることは見てとれる。
そんな微笑ましい光景をレッドは横目にしながら
「……、俺、何やってんだろうな……」
とから笑いしながら自分の中途半端さを責める。
しばらく壁に背をつけて寄りかかり呆然としていると、ライブキャスターが鳴り響く。

いつものエリカからの電話だろう。そう思ったレッドはすぐに電話を取る。
「エリカ……」
通話のボタンを押した瞬間、彼女の美しい顔が液晶に現れる。
「こんばんわ！　……、あら、貴方今何処に居らっしゃるのですか？　なんだかおどろおどろしい背景が……」
エリカは人差し指をあごにつけて尋ねている。
「ああ……ストレンジャーハウスっていう」
「確かタウンマップにそんな場所の記載がありましたわね……、ヤマジタウンの東側に位置していた記憶がありますわ」
やはりエリカの記憶は超人的である。
「よく覚えてんな……そうだよ。その通りだ」
「どうして斯様な場所に？　修行の為ですか？」
「あ……ああ、まあな」
レッドは本当のことを言うと後々怖いので、嘘をついた。
「修練を怠りませんわね……。流石ですわ！　ところで、私、今日何をしていたと思われますか？」
エリカの質問に対しレッドは

「はあ？　……、生け花とかじゃないの？」
「それは勿論ですけれど……」
彼女は身をゆすらせる。違う答えを求めているのだろう。
しかし鈍感なレッドにそんな事が分かるはずもなく
「んだよじれったいな……」
と、口では言いながらもそんなエリカも可愛いなとレッドは思う。
「分からないならそれはそれで良いですわ！　どうせ、そちらに着けばすぐに分かる事ですからー」
と言って、エリカは目を逸らす。
「なんじゃそら！　いいから教えろって」
「貴方にとっても悪くない話ですわ……フフ」
と、彼女は微笑む。
「？　見当もつかないな……」
そんなレッドを見て、彼女はまた笑って
「楽しみにしていくださいね！　あと、それから今日はきちんとお食べになられましたか？　この時期は乾燥している故にインフルエンザなどの病気が……」
「大丈夫。生まれてこの方、体だけは自信あるんだ」

と、レッドは胸を張って言う。本当の事だから仕方がない。

「まあ。頼もしいですわ！　しかし、から元気は早死にのもとです。休みたいときは休んでください……、もし貴方に万一の事があれば、私……」

エリカは途端に暗い顔になる。レッドはもし近くに居れば頭でも撫でてやりたい衝動に駆られ、液晶がここまで憎らしいと持ったことは恐らくないだろうと思った。

「……、あら、貴方？　お顔が強張ってますが如何なさいました？」

いつの間にやら衝動が顔に出てしまったらしい。そう思ったレッドは

「なんでもない」

と適当に流した。

「私がそちらに戻るまではまだまだ時間がございますが……。どうか変な気を起こさないでくださいね？」

エリカは祈るような目になって言う。

「変な気？」

「例えば……、浮気等でございましょうか。誓いを立ててくださった貴方に限って左様な事は無いと信じておりますけれど……」

「……、大丈夫。信じろって」

レッドは目を輝かせながら言う。先ほどフウロに抱きついていた時のような淀みは

消え失せている。が、内心はやはり申し訳ないという気持ちがある。
「……、はい、私も信じておりますわ。夫婦は比翼の如く、それぞれの翼を並べていかなければ立ちいきませんわ。ですから貴方が信じろと仰せになるのであれば……、私も固く信じていきます」
そう言うと、エリカは確信の志が宿った眼をする。
「……、おっともうこんな時間か。じゃあな、お休みエリカ」
「はい、お休みなさい、貴方……」
レッドはライブキャスターの通信を切る。
「夫婦は比翼の如くか……、エリカさんらしい例えだね」
突如背後より声がしたので、レッドは驚いて後ろを見る。
「うわっ……フウロさんか。よく知ってますね」
「まあねー。おばーちゃんが言っていたし。家ってパイロットの家系だからというのもあるけど、鳥系のことわざはよく聞かされてたんだ。ま、あれはことわざというよりもエリカさんなりのアレンジだろうけど」
フウロはそう言うと深く息をつく。その表情にはとくに責めている様子は見られない。
「……、フウロさん、さっきは本当に……」

レッドは改めてフウロに陳謝する。
「いいよ。知らない人じゃあるまいし、抱きつかれたくらいでキャーキャー言っても仕方ないもんね。それに、分かったでしょ？　エリカさんは、レッド君の事……」
「本当に大好きなんだって……、そう言いたいわけですね？」
フウロが言い終わる前に、レッドはそう返した。
彼女はニコリと微笑んで
「そう！　……、それが分かっているんだったらあたしの役目はおしまい。色々あるだろうけれど、二人ならきっと何でも乗り越えていけるよ！」
「いやに言い切りますね……」
レッドは少し気圧された風になりながら、そう返す。
「だって、分かるんだもん！　そうじゃなきゃここまで来れないし。あと、レッド君、嘘ついたよね？」
「グッ……」
それに言及されると、レッドは痛い腹をさぐられたとばかりに苦い顔をする。
「あたしは言わないよ。誤解されちゃうし……、レッド君自身から直接、帰ってきたときにでも言えばいいと思う」
「どうして直接なんです？」

「ライブキャスターはテレビ通話とはいってもやっぱり直接会話するには及ばないよ。誠意をもって伝えるには直接言うのが一番！　間を隔てているかいないかって結構大きいよー」

　レッドはその意見に納得する。

「なるほど……。了解しました、エリカには直接言いますね。フウロさん、今まで本当にありがとう……何かお礼でも」

　レッドはそう提言したが、フウロはすぐに

「いいっていいって！　こんな誰にでも言える意見で貴方の何かになったのなら、あたしはそれだけで十分嬉しいから！　それじゃレッド君、歯磨かないと……」

　彼はそういえばと思い立つ。そして彼はもう一つの事を思い出す。

「あ……、今日どうやって寝よう……」

「……。そうだったね」

　フウロも今の今までさほど考えていなかった様子だ。

「俺が外で寝ますよ。なるべくドアの近くに居ますから」

「ドアの近くって……どういう意味？」

「いやその、幽霊が出てきてもすぐ対処できるよう」

「馬鹿にしないで！　あたし幽霊なんか全然怖くな……」

フウロは未だに強がっているが
「中で散々叫んで、ここのポケモンたちに怖がられてたんですけど」
と返すと、フウロはしゅんと落ち込んで
「ううう……。でももうお化けいないから平気だもん。で、レッド君が居なかったら調査なんかどだい無理だったんだし、ここは協力に感謝してレッド君がベッドで」
「いいんです！　俺はどこでも寝られる性質なんでそんなに気にしないでください」
「アハハ。そっか、そうだよね。じゃあ、あたしはお言葉に甘えちゃおうかな」
そして、レッドは歯を磨いたのちドアに近い廊下で、フウロはベッドのある室内で寝袋を使って寝ることにした。

―午前1時　廊下―
この時間になってフウロは寝静まる。
ピカチュウやヒトモシも遊び疲れて居る様子なので、モンスターボールに戻す。
レッドは野生のポケモンの雄たけびが時々聞こえてくる中、一人壁に寄りかかって黄昏ていた。
「はぁ……。ほんと廃墟だな……」
レッドは砂嵐の中でも天窓から時々見える月を見ながらそう呟く。

そして彼は、ふとドアの中を覗く。
中では奥のベッドで髪をとかしたフウロが寝息を静かに立てている。
そしてそんな彼女を見てレッドは欲情する。
「フウロさん……、可愛いな……」
しかし、夜這いをする度胸などレッドにはあるハズもなかった。
それ故、彼は抱きついた彼女の感触を思い出しながら夜陰の中で一人、エリカに心中で詫びながら勤しむのだ。

あれから一か月半の時が経過した。
フウロとはその後、それなりに仲良く過ごす。友達からの一線を越える事無く、平穏な仲を保った。
そして、エリカが用事を済ませたので戻ってくるというエリカからの報せが入り、レッドはカーゴサービスに居る。
フウロはこの日、ヤマジに用事があると言うのでアララギやベルと一緒に行ってしまった。
その後、エリカとの再会を果たし、ポケモンセンターへ向かう。
どうしてこんなに遅れたのかレッドが尋ねる。すると彼女からは二つ理由があると

言われ、一つは自らとのツーリングをする為に自転車を練習した為。そしてもう一つは

―4月11日　午後3時10分　フキヨセシティ　ポケモンセンター―

「あと一つは……これです」

エリカはレッドの目の前に一枚の紙を見せる。

上には茶色のような帯のマーク、そしてその下には……

「こ……これって」

「婚姻届。ですわ」

「俺、まだ16なんだけど……」

レッドは言い返そうとするが、エリカはすぐに

「ええ、分かってますわ。ですから、今貴方に書いていただいて……18歳の誕生日に入籍するのです！」

エリカは気分を高揚させているのか、いつもより声の調子が明るい。

そして下を見るともう妻の欄にはエリカについての情報が書き込まれている。

しかしレッドは暗い顔をする。

「……？　貴方、嬉しくないのですか？」

エリカは不安げな表情をする。
レッドは意を決したように、声調を強くして言う。
「悪いけど……、それは受け取れない！」
エリカにとって予想外の返答だった故か、彼女は目を丸くする。
「な……何故ですか？　私はこれほど貴方を愛しているというのに……」
エリカはさらに表情を曇らせる。今にも雨が降りそうなほどに。
「……。俺は、エリカに嘘をついちまったからだ……！」
その後、レッドは正直に話した。
ストレンジャーハウスに行ったのは修行の為では無く、フウロの仕事の手伝いだという事。
しかし、彼は忘れていたのかわざとだったのかは定かでないが、抱きついた件については言及しない。
「……、左様ですか」
エリカはレッドから話を聞いた後、暗い顔をする。
「俺は……エリカの期待を裏切っちまった……。だから、結婚を受け入れる資格なんか無い！　でも、これだけは信じてくれ！　一時期はフラフラしちまったけれど……、今は自信をもって言える！　エリカの事が世界一好きなんだって！」

そう言うと、レッドはこの通りとでもいわんばかりにエリカの前に土下座する。
レッドの心中は、エリカとは絶対に別れたくないという事である。しかし、これを言ったことでエリカから別れを告げられようと一切抗弁する気は無かった。
数分ほどの時の後、エリカは静かに言う。
「……、貴方、面をお上げ下さい」
エリカの言うとおり、レッドは顔をあげた。
レッドの眼前にはしゃがんでいるエリカが居る。
「……。確かに貴方がそのような行動をとってしまったことは私自身、非常に残念ですけれど……ただ、貴方のお言葉、信じますわ！」
エリカは、そう言うとにっこりと笑う。
「……、ど、どうして？　俺はエリカをうらぎ……」
「嫌ですわね……。私は他の女性と枕を共にした場合においてのみ、許さないと申し上げたまで。貴方の場合は疚しい事はしておりませんでしょう？　そして何より……」
「何より？」
「貴方はこうして、私のもとに戻り……、正直にお話しなさいました。そこまで正直に申してくださるのであれば、私は許して差し上げます。それに」
エリカはすいと胸元にレッドの頭を押し付ける。

「わっ」
「聞こえますか……？　私の心音……」
「うん……。すごく早い……」
そう言うと、エリカはレッドを胸元から優しく、少し離して、顔との距離を近くさせる。
「私がこれほど胸を時めかせているお人を……、簡単に見放すはずがありませんでしょう？」
と、彼女は聖母の如き笑顔を浮かべる。
「……エリカ」
「……、抱いて……ください。一か月半も貴方とお会いしていなければ……、斯様な事をしていないのです……体が切なくて仕方ありま」
エリカが顔を赤くしながら言うと、レッドは最後まで聞くこと無く快楽の世界へと赴くのだ……。
そして、その後やはり邪魔が入って中断するのであった。

あれから数か月。

レッドとエリカはシャガに勝って全てのバッジをそろえ、ポケモンリーグを突破する。その後、ゴールドとＰＷＴで戦い、レッドは惜しくも敗北を喫するが、ラプラスとムウマージの一騎打ちで負けたのだから、観客は皆両方に賞賛の声を浴びせた。

そしてその直後、プラズマ団が行動を起こし、二人はプラズマフリゲードに乗り込んで、アポロ、アクロマを下す。

最後の相手は予想だにしなかったオーキドだった。そしてレッドは白死をくらって全滅し、オーキドからこれまでの事は全てオーキドの掌の上で行われた事だと告げられる。その次に述べたことは――――

―7月19日　午後3時40分　プラズマフリゲード　元ゲーチスの部屋―

「笑止といえばもう一つあるのう……。レッド君、君はエリカ君に内緒でフウロとストレンジャーハウスなる場所で密会をしおったじゃろう?」

「……、それが何だっていうんだ!」

レッドはエリカにも話してある事実なので、大して焦らずに応対する。

「ふむ……、やはりこの程度では動じぬか。ならばこれはどうかね」

と言いながらオーキドはおもむろに、ゆっくりと一枚の写真を出す。

そこに映っていたものは、レッドがフウロに後ろから抱きついている写真である。

「……、撮られていただと……」

エリカは多少動揺している様子だ。組んでいる手が小刻みに震えている。

「笊耳（ざるみみ）だのう。言うたでは無いか、君たちの行動は監視しておったと！　これはエリカ君に対する重大な背信行為以外の何物でもない！　それに加え、君はヒウンでの織部と利休の会話の後、勝手にレッド君はフウロとエリカ君に秘密でライブキャスターなるものを介して通信した！」

「確かにフウロさんと話したことは事実だけれど……、あれは全部エリカの為で」

レッドの反論に対し、オーキドは

「宜しい。最初はエリカ君の為だったとしよう。じゃがの、話していくうちに君はフウロと親しくなって……、果てにはフウロの仕事に首を突っ込んだ！　レッド君は、心の底からあの時の自分に疚しい気持ちがなかったと……言い切れるのかね？」

そう言われるとレッドは押し黙る。

「……、やはり君のエリカ君に対する愛情とはそんなもの」

オーキドが全て言い終わる前に、レッドは静かなる声で話し始める。

「確かに……、あの時の俺はフウロに疚しい気持ちがあった」

「ほう」

オーキドは嬉しそうに返答する。

「でも、それはあの時の、ふらふらしていた時の俺で……、今の俺は違う！」
「滑稽だのう！　ならばどうして今、疚しい気持ちがあったなどとエリカ君の前で悲しむようなことを……」
　オーキドが口を挟んだが、レッドは更に続ける。
「俺は……決めたんだ。エリカに嘘を決してつかない事に」
　その言葉に、エリカの表情が晴れ始める。
　レッドは続ける。
「あの時、エリカがこんな俺を許してくれた時……、エリカが優しい母さんのような包容力でこんな俺を受け止めてくれた時……。俺もこんなエリカの夫として恥じない男になる！　そう固く決意したんだ！　だから、その為に俺はエリカの前では嘘をつかず、正々堂々と本気で勝負をするって決めた。だから、ＰＷＴでもエリカの戦い方を参考にしたり、ジムリーダーとの戦いを思い出したりして、一生懸命戦……」
　そこまで言ったところで、オーキドは高笑いをする。恐らく嘲笑だろうなとレッドは思う。
「ホッホッホ！　戯言を申すのう。ナギも言っておったではないか、どのトレーナーも多かれ少なかれ全力を尽くしているとな！　一生懸命やった。必死に頑張った。死に物狂いでやった？　そんなので許されるのはせいぜい小学生までじゃよ、レッド君……

！　世の中は全て結果。ワシにも、ゴールド君にも負けた君が言うてもすべては戯言じゃよ！」

　オーキドの言葉に対し、レッドは強く反発する。

「結果がものを言おうと……。それは俺の誓いには関係ない。俺は前まで力押しでやってきたけれど、今はさっきも言った通り色々考えながら戦っているつもりだ。それが例え、勝利に結びつかなかったとしても、努力は決して裏切らない！　親も親戚も居ないエリカが、今こうして立派にジムリーダーをやっている事からでも分かる事だ」

　レッドの答えに対し、オーキドは息を鳴らしながら

「フン……。君の言いたいことは分かった。しかしのう、君の言うたとおり、エリカ君は天涯孤独の身の上じゃよ。じゃから強い伴侶を求めておる。君の戦績がワシの一助によって齎された事が分かった上に、その力なくしては後輩のゴールド君にすら勝てない事を全国に知らしめてしまった……、そんなレッド君をエリカ君は……」

　オーキドが言い終わる前に、エリカはぽつりと話す。

「愛し続けます」

「！」

　レッドは振り返る。正直な話、レッド自身これで振られても仕方ないという心境も出始めていたからだ。

「……、何じゃと？」

オーキドはわが目を疑っている様子である。

「オーキドの言ったことが全て事実だとしても、私はレッドさんを……夫を信じ続けますわ」

「何故じゃ……。どうしてエリカ君は、そこまでレッド君を信じ続けるのじゃ！」

オーキドは段々と調子を失い始めている。

「約束を破っているわけではありませんし……。それに、自らの決意を貫き、例え負けても挫けない……そんな男性を、強いと言わずに何というのですか？」

エリカはオーキドに、澄んだ目つきで話す。

「馬鹿な……認めぬぞ！　我が一族の娘が感情にほだされ……」

その途中で、右側より大きな爆発音にも似た轟音が響く。

「……？　何事じゃ」

オーキドはすぐさまミュウツーを戻し、ワープパネルに乗って、その場所にへと向かう。

レッドはすぐに全てのポケモンをボールに戻してオーキドについていき、エリカもそれに少し遅れて付き従う。

その後、ポケモンリーグとオーキドの間で一大決戦が行われることとなった。
そんな戦況を、レッドとエリカは静かに見守っている。
―午後５時　プラズマフリゲート　中央広場　左上―
「凄いな……」
レッドはそう呟いた。
「ええ……」
エリカも感嘆しているのか、答えた後吐息を漏らす。
「エリカ……、ごめんな。嘘ついちまって」
レッドはエリカに深く頭を下げて陳謝する。
「宜しいのです。先ほども申し上げた通り……、約束は守って頂けたのですから」
エリカはそう言うと、くすりと笑って見せる。
「有難うな……。こんなダメな俺を捨てないでくれて……」
「私は、オーキドの申し上げた通り、強い伴侶を求めているのです。それは実績だけでなく、精神的にもお強い方……。そして何よりも私をここまで強く愛して頂いている……そして私自身も未だに恋焦がれております。そんなお方を……捨てる真似などする訳ないではありませんか」
と、エリカは清く明るい笑顔をレッドに向ける。

「……。エリカ、大好きだ」
「はい……。さて！　惚気ている場合ではありません！　貴方の手持ちを回復させたらすぐに加勢いたしましょう！」
「おう！」
その後、レッドの手持ちは全快になり、レッドとエリカも加勢する事となったのだ。

それから一年四カ月。
戦争は終結し、前のＰＷＴは判定直前に終了したため無効試合とされ再び、２０１４年の８月に戦ったが、レッドが勝利する。
そしてレッドがポケモンマスターとして認定された。しかし、やはり彼は旅をしていないと落ち着かない性質なので、リーグに縛られることなくまたどこかを旅する。
レッドとエリカは入籍し、すぐさま式を神式で行った。流石にこの時には戻ったが初夜の翌日にまた旅に出た。今度はカロス地方を回るのだそうだ。
エリカもついていきたいと願ったが、流石にリーグからの反発が大きく断念する。
そして、カネの塔の落成式に出向き、ミナキと会ってマツバの千里眼を失った本当の

理由を聞かされるが――――

―２０１５年　１１月２２日　午後４時２０分　エンジュシティ―

「決まってるじゃないですか。マツバは貴女の事を……大好きだからですよ」

「マツバさんが……？」

「最初あった時から一目ぼれだったみたいでね……」

ミナキの話に対し、エリカは

「左様でしたか……。私の為に」

エリカは自責の念に駆られているのか、苦い顔をする。

「しかし、どうして私に内緒に？」

エリカは純粋な疑問でミナキに尋ねる。

「これはマツバ自身に問いただして聞いたんですが……、エリカさんに、迷惑とかそんな下心で救ったとか思われたくないから……らしいです」

「まあ……なんと……」

エリカは口を手で覆い隠して、その心意気に感嘆の意を示している。

「……、しかし、ミナキさん、そこまで内緒にしたかった事……私にお話ししてよろしかったのですか？」

「……、いくら内緒にしろとか言われても……、これじゃマツバが不憫すぎる。千里眼を失って……、自分の体をボロボロにされて……。これじゃマツバがあんまりです。マツバは今気丈に振る舞ってはいるが、心身ともに耗弱の一途をたどっていることは明らか……だからエリカさん」

ミナキはエリカの目をしっかりと見つめ

「……、マツバの事、宜しく頼みます」

と深々と礼をした。

エリカは少しの時間考えた後、

「……、ミナキさん。マツバさんはどこにおられるのです？」

「あいつは日曜のこの時間、ジムを閉めて、スズねの小道でたそがれて……」

「有難うございます」

と言って、エリカはカネの塔へと小走りで向かうのだった。

「私のやれるべきことはやった……。マツバ、後はお前次第だ」

そう言って、ミナキはスイクン探しを始めるのだった。

―午後5時10分　スズねの小道―

エリカは少し汗ばみながらスズねの小道にたどり着く。

彼女は紅葉を踏みながら、マツバを探す。
そして、小道をまがった道に、その姿はあった。
「マツバさーん！」
スズの塔を眺めていたマツバは少し驚いて後ろを振り向く。
「うん？　ってあれ……エリカさん!?　どうしてこんな場所まで……」
マツバは小走りでエリカのもとに向かう。
「カネの塔が出来たとお聞きしましたので……」
エリカは膝を手で押さえながら言う。
「あぁなるほど……、それで比較でスズの塔にも……。エリカさんらしいね。あれ……それじゃあどうして僕を？」
「ち……違いますわ！　マツバさん……全てお聞きしましたわ」
エリカは澄みきった目になって、マツバの目をしっかりと見る。
「全てって……何の全て？　もしかして平家物語の作者が……」
「ですから違います！　……千里眼の事ですわ」
そう言うと、エリカは顔の汗をハンカチで拭う。
「……、はあ。全くあれほど口止めしたのに……馬鹿野郎……」
マツバはミナキをけなしたが、その表情はそこまで困ってなさげである。

「申し訳ありません……。私のせいで、大事な片目を……」
エリカは深々と頭を下げる。
「いや、実をいうと千里眼はある程度の修行を積んだ者には、失っても1回限りもう一度ハメこむ事はできるんだけれど……、まあ見えない世界と言うのも面白いと思ってね、断ったよ」
「見えない世界も面白い……ですか。マツバさんにしか言えない言葉ですわね」
エリカはクスリと微笑む。
「ふう……。晩秋のこの時期……。全くここは本当に憂いを誘うよね。エリカさんは灯火親しむべきのこの季節に、何か今読んでるかい?」
マツバの問いかけに対しエリカはすぐさま
「今は漢籍に親しんでおりまして……『荘子』や『孔子家語』の写本を読んでおりますわ」
「写本か……。全く理系でそこまでの領分に達するのはエリカさんぐらいのもんだろうね。僕は今『日本霊異記』とかの説話を読んでるんだけどさ……」
その後、マツバとエリカはなんとも教養高き話をして、マツバ宅に移り夜遅くまで『伊勢物語の男は本当に在原業平なのか?』『源氏物語の作者は本当に紫式部なのか?』『大和物語の姥捨て山の真偽』といった古典に関する議論をするのだった。
それから、マツバとエリカはアカネとマツバ以上に親しくなった。共同で論文を出し

て名声を得たほどである。
　疚しい界隈では浮気しているのではないかと言われるほどだが、あくまで親友としての付き合いを深め、不埒な事は一切しなかったという。
　レッドとエリカはその後末永く、つかず離れずの間柄を保ち、死ぬまで別れる事は無かったという。

―番外編　不動の歴史（フウロ編ＩＦルート）終―

番外編2―1　落ちる花（イッシュ編ＩＦルートその2）

―２０１４年　２月１８日　ヒウンシティ某所　地下―

マツバは度重なるオーキドの卑劣な口撃にとうとう堪忍袋の緒が千切れ、枷を自力で打ち破るにいたった。

捕まってからのおよそ九ヶ月間、何度も壊そうと試みたおかげで金属が疲労した結果といえる。

「ほほう。恋情は華奢な青年をここまでの怪力男とまでに化かせた……!?」

オーキドが途中まで言ったところでマツバは無言でオーキドの胸ぐらを掴み、一気に上げる。

しかし、それでもオーキドは平然とした表情を崩さない。

「おやおや、良いのか？　ここでワシを殴ればすぐさまトリニティを動かすぞ……」

「殴る……か。そんな生易しいもので済ませるとでも?」

マツバは意外にも優しい表情で言う。

「ほう、ならば?」

「決まってるでしょう、貴方をこの手で締め殺すんですよ」

「ククク……、エンジュの貴公子がそんな事を言うとはのう……、全く、恋というのは恐ろしい物じゃ。それに、ここでワシを殺さば、今度こそマツバ君の命は無いぞ」
「仮にも僕は一回死んだことになってるんでね……二度死のうと大した違いではないですよ。少なくとも、今誰よりも、どんな物よりも輝かしく生きている人を、卑怯な手段で半ば死人にさせるよりはね！」
そう言うとマツバはオーキドの胸倉から手を放し、そのまま両手をオーキドの首元に近づける。
オーキドの首まで残り２０センチ程になったところで彼は言う。
「全く。聞き分けの悪いこと……。止むを得んの」
オーキドはすかさず白衣のポケットの中にあるスイッチを押し、ダークトリニティを呼び寄せた。
どこに潜んでいたのか、すかさずマツバは引き剥がされる。
「ここまでやっても聞き入れぬならば、もう説得の余地はないの……。もうよいわ」
オーキドはマツバに背を向ける。
「くっ……！」
マツバはどうにかトリニティの束縛から逃れようとしたが、先ほどの無理のせいで腕に力が入らぬ様子で汗が滴るばかりであった。

「サカキ殿に伝えよ。何人かをカントーのタマムシに飛ばせ、この写真の人物であるエリカ君をワシのもとに連れてくるようにと。実行の暁の報酬はいくらでも渡す。手段は殺さなければあとは好きにしてよい。とな」

と言いながら、写真を手渡す。すると、黙したまま彼方へと消え去った。

「オーキド……教授。貴方は……エリカさんを……どうする」

「フン。君の知ったことではない。賽は投げられたのじゃ」

「グッ……」

〝賽は投げられた〟との一言に全てを察したマツバは黙って膝をつく。

床には小さな水たまりが出来つつあった。

―2月20日　午前10時　タマムシシティ　タマムシジム―

「お帰りなさいませリーダー！　遠路はるばるご足労をかけてしまい申し訳ありません」

代理でリーダーを務めていたユキコはエリカに深々と頭を下げる。

「とんでもありませんわ。こういう時にこそ私が居なくてジムは成り立ちませんし」

「リーグへの取次、関係各所への連絡は既に済ませてあります」

「用意が早くて助かりますわ。それで、ナツキさんはどのような様子でしたか？」

エリカはとても気がかりな様子で尋ねる。

「はい。とても辛そうで……。ジムや挑戦者の方々に対して申し訳ないと言っておりました。そしてなにより……」

　ユキコは言葉を詰まらせた。エリカが発言を促すと

「リーダーは旅に出かけているのに、自分の不養生のせいで足を引っ張ってしまった。こんな自分が情けない。と自責の念に駆られているようで」

　それを聞いたエリカは悪いことをしたという思いを募らせた表情で

「左様ですか……。出来るだけ早くお見舞いに行かなくてはなりませんね。ナツキさんが退院されて、落ち着くまでは原則通り私がリーダーを務めます」

「そんな！　リーダーには全国を旅する使命があるじゃないですか！　ナツキさんの代わりならあたしで十分に務まります！」

　ユキコは自信ありげな様子でエリカに言う。

「私、カントーに来たのはほかの用事もあるので……。それに、右隅に植えたポプラに虫がよりついておりますわ」

　エリカはユキコに鋭い視線を突き付けながら言った。

「うっ。あれはその……」

　ユキコは冷や汗をかきながら目を逸らす。

「ここの樹木やお花は私やお母様、更にはお祖母様が世界中の種苗を取り寄せて試行錯

誤を重ねて植えた言わば大事な宝物ですわ。その管理は母の代よりトレーナーを務めており、植物の知識が豊富でいらしたナツキさんだからこそ任せられた事なのです。ユキコさんも仕事熱心でリーダーシップの取れる方だとは思っておりますが、長い間リーダーを任せるには申し訳ありませんが力不足です」

「うう……」

ユキコはすっかりしょげてしまった。ジム内のライバルであったナツキとの差を身に沁みて感じたからであろうか。

「ユキコさんには引き続き副リーダーをお任せします。ナツキさん、貴女には助けられたと手紙でも言っておりましたから期待していますわ」

「は、はい！　ご期待に添えるよう頑張ります」

ユキコは少しだけ元気を取り戻した風であった。

―午後6時　同所　事務室―

この日のタマムシシティは昼になってから雪が降り出していた。

この時間帯になると視界がやや悪くなるほど勢いを増した。そんな中、エリカはジムを早々に閉めてナツキの見舞いに行くことに。

ジムは閉めてもリーダー格の仕事は残っており、急いで仕事を終わらせようとしたが面会時間の終わりが迫ってきている為エリカは止む無く切り上げて見舞いの準備をし

ていた。
「リーダー。ナツキさんのお見舞いでしたらあたしも付き添いますが」
「いいえ。今日、ナツキさんとは一対一でお話ししたいですし……。あとの残務は戻った後私がやりますから、ユキコさんは帰宅して頂いて結構です」
「そんな。まだここに戻ったばかりなんですからリーダーに無理させる訳にはいきません！　ここはあたしがやりますから」
　ユキコはリーダーたるエリカに無理をさせないように一生懸命である。
　エリカは小さく息をつきながら
「ユキコさん。貴女ここ数日間まともに寝ていないでしょう……。目に隈ができていますわ」
「こ、これは元から」
　ユキコは意地を張ったがエリカは遮るように続けた。
「仕事に注力することは良いことですが、体を壊してしまったら元も子もありませんわよ。今日はゆっくりと休んでくださいね」
「そんな。リーダーだって相当無理しているじゃないですか。今日だってあたしも手伝うと言ったのにジムの植栽すべてご自分でチェックしていましたし……」
「貴女だって、先ほど書類の整理していた時うつらうつらしている時がありましたわ。

これ以上、今の貴女に仕事をさせることはオーバーワークもいいところです」
「そ、そんなことないですって！　あたしはリーダーの手足となって働くんです！　このくらい苦じゃありません」
　ユキコは決然とした表情で言う。本心から言っているようだ。
「ユキコさん。もういいのですわ。私がいない時、本当に一所懸命にやってくれたことは私にも分かっています。ナツキさんが倒れた後の最初の電話だってそうです」
「え？」
　ユキコはキョトンとし、仕事の手を止めた。
「私がその電話を受け取ったのは午後2時です。しかし、時差を考えれば確かここはその翌日の午前3時ですわ。そんな遅くまで仕事をし、そして倒れたナツキさんを看てくれていたということですもの。真摯に頑張っていたことは私にも伝わりました」
「リーダー……」
　ユキコはちゃんと分かってくれていたのだとばかりに感激している。
　エリカはユキコに近寄り、頭上に手を置いて優しく撫でる。
「ナツキさんが倒れてからもよく頑張られましたわね。貴女がいなければこのジムはどうなっていたことか。何事もなかったように機能しているのは貴女の尽力があってこそです。貴女にはナツキさんには無い力があります。私がまた旅に出た後はナツキさ

んと力を合わせてジムを切り盛りしてくださいね」
「は……はい！」
　ユキコは嬉しそうに返事をした。
「さてと、表に車を待たせているのでお暇致します。貴女は、今処理している仕事が終わり次第上がっていただいて構いませんからね」
　ナツキが入院しているタマムシ大学附属病院はジムより２０キロほど離れた場所にある。雪も降ってきたためエリカは運転手を呼び、車で病院に向かうことにしたのだった。
「はい。どうか、お気をつけて」
　ユキコは幸せそうな表情で彼女を見送る。エリカは目礼した後、一枚羽織を重ね着していそいそと部屋から出て行った。ユキコはエリカが撫でてくれた頭上に手を遣り、頬を緩ませながら最後の仕事を仕上げていった。
　―午後６時３０分　タマムシ大学附属病院　第一病棟　五階廊下―
　エリカは病院に到着すると、ナツキの病室へと向かっていく。
　この時間帯になると見舞いの人も疎らになり、五階にたどりつくとエリカ一人になっていた。
　彼女は静かに歩みを進めていった。十数歩歩いたであろうか、彼女は突如止まる。

「ばれていないとでも、思っているのですか？　何者かは存じませんが、用があるのならば私の前に姿を現しなさい」

エリカは静かであるが、物々しい雰囲気を多分に漂わせた口調で言った。

すると彼女の後ろの柱からぬうと一つ、人が出る。こつこつと前に出ていった。

「あ……あなた!?」

エリカは目の前に姿を現した赤い帽子に赤を基調とした服装をした男に数歩引くほどに大いに驚く。

そう、姿はまさにレッドそのものなのだ。

「ど、どうしてここにおられるのですか!?　フキヨセに残られた筈では……」

「……」

男は沈黙を保つ。

彼女はうつむき気味に信じられないとでも言いたげな表情で更に続ける。

「あ、あのこのような事お尋ねするのははしたないと承知してはいるのですが……もしかして、私に会いたくてこっそりと……？」

男はこくりと頷く。肩は少々震えているように見える。

「ま、まあ！　えっとその……私、とても嬉しいのですが修行の方は大丈夫なので」

「プッ……ぶわっはっはっはっは!!　あーっはっは!!」

男はそこまで聞くと無理やり遮ったかのように野太い声で大笑いしてみせた。
「あ、貴方？」
「あ、貴方ってまだ気づかねえのか？　あんたの旦那さんにはこんな顎ヒゲついてんのかよ？」
男は笑いながら帽子やカツラを脱いだ。
エリカはこれまた驚いた表情になったが、すぐに憎悪の情をあらわにした顔になる。
「よ……よくも騙しましたわね！」
「はっはっは……。全くベタ惚れと聞いて試してみたらこれかい。こんな可愛らしい嫁さんもってレッドとかいうのはとんだ幸せもんだな」
「くっ……。こんな人の心を弄ぶ卑劣な真似をして一体、何の用です？」
激情冷めやらぬ様子でエリカは尋ねる。
「おお怖い怖い。そうさな……、運試しならぬ恋試しってのを」
「はぁ……。私、先を急ぎますので。ごきげんよう」
そういって彼女は呆れた様子で男のもとを去ろうとする。
「おっと待った！　……、あんたマツバって男の所在知りたくないか？」
「マ……マツバさん？　エンジュのですか？」
「そうだ。気になるだろう？」

「亡くなった方の所在などどうやって知るというのです。いい加減なことばかり言うのであれば警さ……」

「そのマツバさんは死んでなどいない……と言ったら？」

その言葉にエリカは目を丸くする。

「な、何を仰せになるのですか！　私はご遺体をこの目で見ましたし……」

「遺体なんかちょっとした小細工をすればすぐに作れんだ。現にあんたは騙されている」

「出鱈目な事を申されますわね……。あら、そういえばそのお顔どこで見た記憶が……」

彼女は男に向き直って改めて顔を見ると、どこかで見た顔だとばかりに思索をはじめる。

「気のせいだ。それより、マツバの安否確かめてみたくは」

「しつこい方ですわねぇ……。そもそもどうしてマツバさんに関する情報を貴方が……。もしかして」

エリカはようやく感づいた様子である。

「ケッ、漸く気づいたか。賢い女とは聞いていたが、ちいと遅かったな」

その言葉と同時に、いつの間にか私服に身を包んだ三人のロケット団員がじりじりと彼女の周りを固める。ポケモンを出せるほどの間合いは無い上にここは病院である。

近くにナツキが居るかもしれないためみっともなく叫ぶ真似もできない。
「薄々嫌な予感はしていましたが……止むを得ませんわね」
彼女は懐から棒状の物を出す。光沢のある白木の柄には彼女の家紋である千家独楽（せんけごま）が刻印されている。
「おいおい。そんな棒切れで何をする気だ？」
「蒙昧（もうまい）な御方ですこと……」
彼女は徐（おもむろ）に切れ目から持ち手を右に抜いた。刃紋は悠然たる稜線の如く美しく、短いながらもしっかりと研がれた刃先は名のある刀匠によるものだと如実に語っていた。そして切先を男に向ける。
男の顔が少し青ざめた。まさか彼女が武器をもっているとは想定していなかった様子である。
「物騒な真似しやがって」
「私とてこのような事は本意ではありませんわ。武器を人様に向けるなど……。しかし、安心してください。殺しはしませんから」
そういうと彼女は一旦見せた刃を鞘にしまい、素早い動きで男の懐に向かう。そして鳩尾に両手を使って全力で束を叩き込む。下っ端たちは押さえ込もうとしたがエリカの動きに全くついてこれていない。やはり腐っても彼女は有段者である。

「いてっ！」

男はうずくまり、前方へ倒れこむ。彼女は体をずらし下っ端たちのいない方向へぬける。

「ラムダ様！」

「人の心配してる暇があるならあの女を追え！　くそっ、可愛い顔して案外手練れじゃねえか……」

彼女はナツキの見舞いどころではなくなったことを悟り、通話可能エリアに逃げ込んで外にいる運転手に事の次第を伝えるためライブキャスターを取り出した。

しかし、電話をかけても全く通じない。電波状態を見るとアンテナは一本も立っていないのだ。

彼女はいよいよ焦り始める。即座に助けを求める手段がいまのところないのである。彼らに出会う前までは数人の病院関係者や一般人が通っていたのに、今は閉院したのかのように誰もいない。

とにかくこの場から離れようと、彼女は行きに使ったエレベーターを目指そうとエリアを抜けようとしたが、通路にまた一人男が立っていた。

「全く。どうして人っ子一人捕まえるまでここまで手こずっているのでしょうね……。お久しぶりです。エリカさん」

先ほどの男とは対照的に礼儀正しい様子で、軽く会釈をした。
「あ、貴方は……」
今度こそ彼女にとって見覚え、いや憎悪を持つ人物が現れた。
目の前に立つ黒づくめ男はヒオウギシティで狼藉を働かんとしていたプラズマ団の幹部、ランスであった。
ランスの後ろにもまた数人ほどの下っ端がついている。一人は電波ジャマーと思われる機械を所持していた。あれで電波を妨害していたのだろう。エリカを追いかけていた下っ端たちも追いつき、彼女を挟み撃ちにした。
「もう一ヶ月も前のことでしたか。あの時はずいぶんとお世話になりましたねぇ」
「いったい私になんの用事ですか？　通してください！」
「残念ですがそれは叶いませんね。私は崇高なる主より命を受けてここに来ているのです」
「そんなこと知ったことですか！　通さないのならばあそこの廊下で伸びている男のようにしますわよ！」
彼女は先ほどのヒ首を取り出し、出せる限りの力をランスにぶつけようとする。
「甘い」
ランスは先手をとって彼女の手首をとり、反対方向に捻り上げる。

彼女は堪らず武器を落とし、体勢を崩す。そしてそれを見計らったかのようにランスは後方に回り、もう片方の手を組み合わせ、エリカの背中に締め上げた。その後下っ端によって猿轡を噛ませ、意識を失わせて布袋の中に放り投げた。

「おうし退散だぁ！　布きれ一つ残すんじゃねえぞ！」

いつの間にか体調が戻ったラムダは腹を押さえながら撤収を指示。いつの間に主導権が変わっていることにはあまり気にしていないのか涼しい顔でランスや下っ端たちもそれに続いていった。

―2月21日　午前7時　タマムシシティ　ポケモンジム　事務室―

副ジムリーダーのユキコは朝早くジムに出勤した。

「おはようございまーす！　……あれ、リーダーがいない」

エリカは普段誰よりも早くジムに来て、ジム内の清掃をしたり仕入れてきた花々を飾り付けたりと仕事をしていた。しかし、今日は何も聞いていないのにジムの庭や事務室にエリカの姿はない。

そして、本来なら昨日仕上げているはずだった書類がまだ山積している。いつもの彼女なら仕事を放置するはずかなく、万一そのようなことがあってもユキコには一報を入れてくる。

ユキコが不思議な顔をして机の上を眺めながら支度をしているとドアが幾度となく

ノックされた。かなり焦っている様子である。ユキコがドアを開けると、一人の老練そうななりをし、しっかりと仕立ててある茶色の着物を召した男が立っていた。
　用事を尋ねると男は名刺を差しだしてエリカの執事であると名乗り血相を変えた様子で言う。
「一大事でございます。エリカお嬢様が……行方不明となりました」
　ユキコはそれを聞くと、目を点にして腰を抜かしかけた。
「そ、そんな！　何かの間違いでは？」
「お嬢様をナツキ様の見舞いのために病院でお送りした運転手の者が申しておりました。あの者はもう数十年も当家に執事しているのです。嘘を言うはずも理由もありません」
　ユキコは顔面蒼白となり、続いて尋ねる。
「け、警察に捜索願は？　リーダーは、エリカさんは見つかりそうなんですか!?」
　ユキコは執事の肩を揺さぶりながら訊ねる。執事は流されず冷静に答えた。
「すでに出しております。屋敷の者が未明より総出で捜索に当たっていますが有力な手がかりは残念ながら……」
「さ、然様ですか……。分かりました。リーグなどの各所には私が伝えておきます。ジムとして出来る限りの協力はさせてください」

「はっ。感謝いたします。此度の事は偏に私どもの責にございます。誠に申し訳ありませんでした」

執事は深々と頭を下げたのち、別の場所へ謝罪に行くと言ってジムを去った。

ユキコはその後、リーグなどに電話した後、次々とやってきたトレーナーにエリカ行方不明の一件を伝えた。

―同日　午後1時　リバースマウンテン―

この頃、レッドはストレンジャーハウスに幽霊が出るとの噂の検証と対処の為にフウロと共にその場所に向かっていた。

レッドはフウロに対する熱情が高まっており、かわってエリカがどうでもよくなりつつあった。

砂嵐の中を歩いているとレッドのライブキャスターが鳴り響く。

「あれ？　レッド君、鳴っているけど」

気付いたフウロがレッドに話しかける。

レッドは面倒臭そうにライブキャスターを見た。知らない番号である。

本心を言えば出たくはなかったが、大事な用だとまずいので一応出ることにした。

「はいもしもし……」

「レッドさんですか？　突然お電話をかけてしまい申し訳ありません。私、エリカさん

のジムの補佐をしております ユキコと申します」
　そういえばエリカからそのような名を聞いた覚えがあると思うと適当に相槌を打って次を進めた。
「あの、驚かないで聞いてください。エリカさんが……エリカさんが昨日の夜から消息が分かっていないんです！」
「何ですかそれ……」
　レッドの心中は信じられないと言う気持ちと、面倒な案件持ってきやがってという気持ちが交錯している。
「本当の事です。今、私たちだけでなく警察やエリカさんの屋敷の方が全力で捜索しておりますが、全く手がかりがつかめていない状態でして……」
「あぁそう。要らない手間をかけさせてしまいなんとお詫びをすれば宜しいか……」
　レッドは適当な文句を言って切り上げようとする。一刻も早くフウロと二人きりの時間に戻りたくて仕方がない様子だ。エリカ失踪の件もあんなしっかり者の彼女が行方をくらますなどあり得るのかと半信半疑である。
「レッドさんに謝られるようなことではありません。とにかく、こちらとしてもできる限りの手を尽くしてエリカさんを見つけますのでどうか気を落とさずに……」
「はい分かりました。では……」

そう言ってレッドは半ば一方的にライブキャスターの電源を切った。
「ちょっと……いいの？」
「何がです」
「エリカさんが居なくなったっていうのに全然心配そうな顔してない」
フウロにはレッドの心境が読まれている様子である。
「はぁ。あのエリカが誰にも言わずどこかに消えるなんて思い難いですよ。きっと何かの思い違いでしょう。それにこんな遠くに離れた俺が何かできるわけじゃないですし」
レッドはそう言って早々に切り上げて先に進んだ。フウロは釈然としなさそうな顔をしながら後に続く。
―同日　午後3時　セキエイリーグ　第二会議室―
ワタルはエリカ逐電の報を聞くと、緊急会合と称してカントー・ジョウト中のジムリーダーを呼び寄せた。
「今日は忙しい中、集まってもらい申し訳ない。今回集まってもらったのは、この中の何人かは既に耳にしているかもしれないがタマムシのジムリーダーエリカ君が昨晩突然行方をくらました件についてだ」
その言葉で議場は一気にざわついた。あのエリカがというのもあるが、ジムリーダーが突然行方不明になる事など前代未聞の事態だからである。

「エ、エリカさんが!?　そんな、無事なんでしょうね?」
　タケシが真っ先にワタルに問いただす。
「落ち着きなさいよ。容体が分かっている行方不明なんて聞いたことないわ」
　ナツメがタケシをたしなめる。ナツメは存外落ち着いている様子である。
「そりゃそうですが……。そうだ、ナツメさん、貴女には何か分かるのでは」
「テレパシーやクレヤボヤンス（透視・千里眼）なんてもうとっくに試しているわよ。でもダメ。全く手がかりが掴めないわ。あまり言いたくないし、考えたくもないけど……最悪の場合誰かにさらわれているかもしれない」
　彼女のその一言に議場全体が凍りつく。
「そんなまさか……。あの子確か柔道だか剣道だかやっているとかって話じゃなかった？　少なくともそういう護身術は心得ているはずなのに」
　カスミがそう疑問を返す。
「本人曰くあれは嫌々やらされたものって言ってたし、ここ七年くらいはやってないとも言ってた。それに仮に覚えていたとしても、大の男に十人くらい囲まれたらいくらエリカとはいえ……」
「エリカんとこ確かこの国でも有数の金持ちやろ？　そないなとこならＳＰとかつけてるんとちゃう?」

続いてアカネがナツメに尋ねる。
「あの子、そういうのは積極的につけない子だし……。たまたま居ないときを狙われたら」
憶測が飛び交う中、ワタルが大きく咳払いする。
「とにかく。我がリーグとしては一員であるエリカ君を捜さなければならない。とはいえ、諸君らにはそれぞれリーダーとしての仕事がある以上限界があるだろう。だから、何かてがかりとなりそうなものがあれば些細なものでもリーグ、もしくは現在臨時でリーダーを務めているユキコ君にまで伝えていただきたい」
ユキコは立って、「どうかよろしくお願いいたします」という言葉と共にリーダーのいる全方向に頭を下げた。
「そういえばレッドはどうなっているんです？　数日ほど前まで一緒に旅していたのであれば何か手がかりになりそうなヒントとか持っているのでは」
タケシがワタルに尋ねる。
「それがどうもユキコ君の話だと生返事で恋人を失ったとは思えないくらい冷静というか落ち着いた態度らしくてね……。明日の朝にでも僕から彼に持ちかけるつもりだ」
「どういう事よあのスカポラチンキ！　あんなにベタ惚れだったくせにいなくなったらそれとかあんまりだわ！」

　カスミは激情に駆られて感情を議場にぶつける。しかし浮気性の彼女が言えた事ではない。
「まあまあ。レッドさんの事ですからもしかしたらあまりにもショックで気が抜けてしまっているだけかもしれないじゃないですか」
　ミカンがそうカスミを宥め、レッドをフォローした。
「ミカン。あんた何言うとんの！　レッドは胡散臭い男やで、きっと今頃別の女とランデブーしとるんや！　だからそんなに平然としてられるんや！」
「そうよ。そうに違いないわ。アカネちゃんよく分かってるぅ！」
　段々と議場全体がただのレッドの総叩き会場となりそうな様相を示してきた為、ワタルはまたも喉を鳴らし咳払いをする。
「真偽も定かでないのにレッド君を責めるのはやめなさい！　……、とにかく今晩レッド君に何か手がかりがないか聞くことにする。諸君らも何か分かり次第連絡を頼む。今日はこれにて解散！　あとユキコ君には話があるので理事長室に来るよう」
　こうして、緊急会合は終わりエリカの失踪はジムリーダーにも知れることとなった。
―２月２１日　午後１０時　ストレンジャーハウス―
　ストレンジャーハウスへの依頼を無事終えたレッドとフウロ。この日は砂嵐が酷かったため翌日までここに寝泊まることにした。

二人はこの時間まで談笑していたが、レッドは外に出していたピカチュウとヒトモシを部屋の外へ遣り部屋に二人きりになるという状況を作る。
「？　どうして下がらせたの？」
「いや……、ヒトモシは暗い空間の方が好きそうだし、ピカチュウはそのお目付けってことで」
「ふーん……」
と言うと、フウロはポケットから携帯を取り出し時間を見る。
「もうこんな時間かあ……、じゃ、あたし歯磨いてくる」
この部屋の奥には洗面台がある。
フウロは立ち上がると、後ろを向き、歯ブラシを取り出すためにカバンに向かう。
レッドはカバンに向かっている時、フウロの背後から精いっぱい抱きつく。
その時、レッド自身にフウロの腰あたりの柔らかい感覚を味わわせた。
その感触に彼は更に彼女に対する性的欲求を高める。
「ひゃあ！」
フウロは当たり前だが、突如抱きつかれて狼狽している様子だ。前かがみになっているところを狙われレッドに掬い上げられたので、丁度フウロの体は弓のような形になる。

「ちょ……レッド君……な、何……？」
「……」
レッドはしばらくの間、沈黙を守ったまま柔肌の体温を感じ続ける。
「やめてよ……、あたしたち別にそういう関係じゃな」
フウロがそういって、腕の束縛から逃れようとすると、途端にレッドは
「好きだ」
と、フウロの耳元に囁く。
「！」
フウロはその言葉を聞くと、目を見開かせる。
「好きなんだ……俺、フウロさんの事」
レッドは続いて同じことを言う。
「何言ってるの……、レッド君には、エリカさんが」
フウロの反論に、レッドは反射のように答える。
「エリカよりも……ずっと好きなんです！」
「っ……！」
「フウロさんは、俺の事」
言いかけた瞬間、ライブキャスターの電子音が鳴り響く。鬱陶しいと思った彼はバッ

テリーを抜き、床へ投げ捨てた。
「いいの……？　電話にでなくて」
話をそらす口実ができたとばかりにフウロは尋ねる。
「いいんです。それよりも、フウロさんは俺の事……」
「嫌い……」
「えっ？」
「その電話……もしかしたらエリカさんを捜すのにレッド君の助けが必要でかけてきたものかもしれないのに……それを断ち切るように投げ捨てるなんて……そんな酷い事を平然と出来る人なんか好きになれるわけないじゃない！」
そう言って、フウロはレッドを押しのけ、部屋をでていこうとする。
「フウロさん！」
彼女は数秒の沈黙の後
「あたし、今日隣の部屋で寝るから」
そう言って、部屋から廊下を跨ぐ。
「待ってください！　あの、その電話には出ますから話を」
「そう言う問題じゃないって事……どうしてわからないの？　まさか、あたしを口説く為に仕方ないから電話にでて……そうすることでレッド君にとってあたしがいい返事

をするって本気で思っているの？　だとしたらレッド君は男として……ううん、人間として最低だよ！」

　フウロは怒りにまかせて大きな声でレッドを窘めた。

「くっ……！」

　レッドはそこまで言われて漸く押しとどまった。フウロにここまで叱責されるとは思っていなかったため項垂れて大いに落ち込んでいる。

「……、ごめんね。ちょっと言い過ぎたけど……とにかくそういう事だから！」

　そう言って彼女は今度こそ部屋を出て行く。レッドは十分ほど放心状態になった後、バッテリーを入れ直し、電話をかけなおす。

「もしもし」

「ああレッド君かい？　ワタルだけど、エリカ君が居なくなった話はもうユキコ君から聞いているよね？」

「ああ……はい」

　レッドは生気を失ったかのような声で答える。

「元気ないね……。どうかしたのかい」

「いえ……気のせいではないですか」

「そう？　最後に会った時の君はもっと元気そうにしてたと思うけどなあ。まあそれは

いいや。単刀直入に聞きたいんだけど……レッド君ってエリカ君の事好きなのかい？」

レッドの中で長く放置されていたエリカに対する感情を尋ねる質問に彼は困苦する。

「それは……えっと」

「全く……そんな調子だから女性陣に袋叩きされるんだよ……」

「え？」

「いや。こっちの話だ。それで、何かあったのかい？　喧嘩でもしたとか」

レッドはもう叶わなくなったことだし、この際全てワタルにあらいざらい話してしまおうという気持ちになった。

エリカはあまりにも完璧すぎて自らには不釣り合いではないかと思ったこと。

エリカには自分よりもふさわしい相手がいて、自分は遊ばれているんじゃないかとも思ったこと。

そんな風に悩みを抱えていき、エリカと同じ女性で自分に親しくしてくれるフウロに相談をもちかけて、最初は淡い恋心だったのが段々とエリカを凌ぐほどの恋情となったこと。

そして今日、フウロに思いの丈をぶつけようとしたが逆に嫌われてしまい、現在に至ると。

「なるほどそういう事だったのか……」

「一体俺はどうすればいいんでしょうね……ワタルさん」
　レッドはすべてを話し終えると、切なげな声でそう言った。
「恥ずかしながら僕はそういう経験したことないし、偉そうなことは言えないけれど……。少なくともフウロ君の言った通りエリカさんは君の事を見下していたり、遊んでなどいない。むしろ見てるこちらが恥ずかしくなるくらいのベタ惚れだよ」
「またそんな事……。フウロさんも言ってましたけどどうしてそうと言い切れるんですか」
　レッドはワタルに対し投げやりな口調でそう答えた。
「はぁ……。エリカ君に悪いから言いたくなかったんだけど……。ユキコ君がナツキ君の私物を整理している時、彼女の机の引き出しから大量の手紙が見つかったんだ、どうやら定期報告以外にも手紙のやりとりもしていたみたいでね」
　旅をしている時手紙の管理などは一切合切エリカが行っていたのでレッドにとってその話は寝耳に水である。食い入るようにレッドはワタルの話を聴いた。
「で、何かてがかりがあるかもしれないから……とユキコ君から僕にその手紙の山が贈られたのさ。まあナツキ君側からの内容は電話じゃ伝えきれない予算の報告とか仕入れの状況とかそんなのが主だったしそれはいい。で、エリカ君の返答もそれに対して意見したり、花の種類はこちらのほうがいいですよとかそんな感じの普通の内容。最後に

三行だけ追伸としてエリカ君自身の近況が書いてあるんだけど……」
「も……もしかして」
「そう。レッド君の事が書いてあるんだよ。どの時期の手紙を見てもね。もう、読んでみたら顔から火が出るくらい惚気ている内容でねぇ……心底君が羨ましくなったさ」
「ぐ……具体的に何が？」
レッドは興味津々な様子でワタルに尋ねる。
「おいおい僕にそれを読ませる気かい!?」
「気になるじゃないですか！　ここまで焚きつけといて読まないとは言わせませんよ？」
「うう……分かった。読むよ」
その後ワタルは三通ほどエリカの手紙の追伸を読みあげた。
内容は確かに惚気ており、ある日レッドにいつもより更によりをかけて食事を作ったらいつも以上に喜んでくれたこと。何番道路で何々と名乗るトレーナーと戦ったときの戦術が素晴らしく惚れ惚れしたこと。そして極めつけは性活に関する記述まであったことである。
読み終わった頃にはワタルの顔は髪色よりもさらに赤くなっていた。
「はぁ……これでいいかい？」

「は、はい有難うございます」
「全く今日は来客がなくて助かったよ……。誰かに見られたら絶対変な目でみられるところだ……。で、これで分かったよねエリカ君が本当に君の事を愛していると」
　ワタルはまだ興奮しているのか、少々息の上がった声で言う。
「はい。実によく」
「良かった。これで恥を晒した甲斐があるってもんだ。じゃあ本題に入るよ？　レッド君、君の思い当たる中でエリカ君に危害を加えそうな人って誰だと思う？」
　レッドは質問に対し、深々と考えてみる。彼女はまず人に恨まれるようなことはしないし、妬みや嫉みを持つ者はいるかもしれないが彼女に直接に危害を加えることはしないだろう。何故ならそれ以上に仕返しを恐れる筈だからである。
「うーん……」
「やっぱり居ないか……」
　ワタルが諦めかけたその時、レッドの頭中に一人だけ思い浮かんだ。
「いえ！　一人だけ思い当たりますが……」
「本当に？　誰だい？」
「いやでもそんな……まさか」
「渋ってないで、言ってごらんよ」

ワタルの勧めに対し、レッドは口を開く。
「オーキド博士……です」
「オーキド……ってあの4月にエンジュで大騒ぎを起こした？　記憶が正しければレッド君が片づけてくれた筈じゃ……」
「いやしかし、それ以外に考えられないんです。ワタルさんは知らないかもしれませんが博士のエリカに対する執着心は異常ですし、何より彼女の報復を恐れなくてもいい……。何故なら博士はエリカと同じかそれ以上に頭がいいですし……財力も相当にあるはずです。エリカに嫉妬やいやらしい感情を抱く人は少なくないでしょうけど、直接危害を与えうるのは……博士以外に思い当たらないです」
レッドの推論にワタルはうんと深くうなずき
「なるほど……。実をいうとカツラさんやダイゴ君の報告を受けて、今シロナ君にイッシュ地方でプラズマ団の現状を調べさせているんだ。その調査で希薄ではあるけれどロケット団が結び付いている可能性が浮上してきた。僕自身どうして未だにロケット団が活動できるのか不思議だったんだけど……オーキドが生きている仮説が成り立てば辻褄は合うね」
「だったら今エリカはオーキドの命によってプラズマ団に捕らわれている……」
「断定はできないけどね。シロナ君にその件について話してみるよ。ありがとう。頭の

もやが晴れたよレッド君！　感謝する」
　レッドはワタルに尋ねる。
「そんな大したことでは……。ところで旅はどうしましょうか」
「エリカ君をいつまでも待っていても時間は無為に過ぎるばかりだよ。不本意だろうけど本来は君一人に向けての計画なんだ。捜索はこちらに任せてどうか続けてほしい。確かあと二つだろう？」
　レッドは一分ほど黙したのち
「そうですね……。出来ればエリカとこれからもしたかったのですが、止むを得ないです」
「心配だろうけど、頑張って欲しい。エリカ君だってそれを望んでいると思うよ。それで、もしもそっちでも手がかりが見つかったら遠慮なく僕に伝えてくれ」
「勿論です。ワタルさん、ありがとうございます」
「なに。レッド君のリーグへの貢献を考えたら軽いものさ。あと、手紙の件は内密にじゃあね」
　こうして、ワタルとの通信は切れた。
　―隣室―
　フウロは隣の部屋でレッドの話を盗み聞きしていた。

「これで……良かったんだよ……頑張れ、レッド君」

彼女は満足げな表情をし、レッドが床についた後、書置きを残してエアームドで砂嵐の中を飛んで行った。

―番外編2―1　落ちる花　完―

番外編２―２　歴史の分かれ目

―２月２０日　午後１０時３０分　１２番道路―

エリカの拉致に成功したロケット団の一味はここの桟橋から太平洋へ出て、イッシュ地方のアジトへと向かおうとしていた。

この時間帯は通行量が少なく目立たずに事を運ぶことができた。

「ラムダさん。おなかの痛みはどうですか？」

ヘリコプターに乗り込む団員たちを横目にしながらランスは話しかけた。

「まだ叩かれた感触は残ってるぜ……。全く無駄な抵抗しやがって」

「そうですか……。まあ、大事になさってください。これからもっと忙しくなるのですから」

「そりゃ。ご親切にどうも」

ラムダはいけすかないような表情をしながら言う。

「それにしても……その女、どうするってんだ」

「さあ。私には分かりませんね。なんでも例の科学者の言いつけなそうで」

「ケッ……。全くサカキ様はこんな女をさらえとか何を考えているのだか。あいつを迎

え入れて以来、サカキ様と言う人が俺には分からねえよ」

「……」

ランスが聞き流していると、団員が声をかける。

「ラムダ様！　ランス様！　全員が乗り終えました」

「ん。そうか。じゃ、行くか」

彼はそう言ってヘリの入り口に向かおうとする。

「いえ。ラムダさん。私はまだここで仕事がありますので」

「あぁ……そうだったな。ま、無茶はするなよ」

「少なくとも敵前で失禁するような真似はしませんよ」

ランスは冷たい視線を送る。

「チッ。まだ言ってんのか」

「ラムダ様！」

下っ端につられるようにしてラムダはヘリの中へと入って行った。エリカを載せたそれは遠い異国の地へと向かうのである。

見送るとすぐにランスのポケギアに電話がかかった。

「もしもし……。はい、分かりました。明日ですね……」

―２月２１日　午後４時　セキエイリーグ　理事長室―

緊急会合終了後、ワタルはユキコを呼び出す。

ユキコは初めて訪れる理事長室の内装に少々驚きつつ、ワタルの前に出た。

「今回起きたことは大変に遺憾であるし、ユキコ君自身も辛い思いをしているだろう。心から同情するよ……」

ワタルがそうユキコを気遣っているとユキコがワタルの目を見ながら

「世間話は結構です。単刀直入に用件をお願いします」

と返した。

「う……うん。そうだね……」

ワタルはそう言いながら、椅子に座り直し、机の上に組んだ手を置いて慎重に話しだす。

「もし……。もし、エリカ君がこのまま見つからない場合、我々はタマムシジムの公認を外す」

「え……？」

彼女は何を言われたのか一瞬理解できなかった。

「ジムリーダーがこのまま見つからないとジムバッジが渡せなくなる。バッジが渡せないということはトレーナーたちは勝ってもポケモンリーグに挑めなくなってしまう。

だから、リーダー不在の状態が長く続く……具体的には三週間以上続いた場合は本当に心苦しいが公認を外し別のジムに委譲する決まりになっているんだ」

「そ……そんな！　じゃあつまりジムがつぶれてしまうということですか？」

ユキコは鬼気迫った表情で言う。

「まぁ……公認がなくなるだけだからジムそのものは続けてもいい。だけど、あくまで普通のジムとしてやっていかなければならなくなるね」

「そ……そんな……」

タマムシジムは世襲ジム、即ち同一のジムとしては最古の歴史を誇っている。それ故に百五十年近くに渡る伝統に公認剥奪という不名誉な傷をつけてしまうのはジムトレーナーたちにとっても耐え難い屈辱であった。

「僕としても一日でも早くエリカ君が見つかってそんなことが起こらない事を切に願いたい……。タマムシのジムは特に人気が高いからね。それがなくなるとあっては悲しむ人が大勢いる」

「あの……ナツキさんが本当のリーダーになる形で継続はできないのですか？」

「申し訳ないがそれは無理だ。ジムリーダーとなるには少なくともその地方の平均的なジムリーダーが全力で戦った場合と同等の力を持っている必要がある。カントーでいうならグリーン君とまではいかないまでもタケシ君やカスミ君レベルの力がないと

リーダーの資格は与えられない」
「そんな……」
　代理リーダーは選任が自由な為実力は関係ないが、本物のリーダーとなれば話は全く変わってくるのだ。
　ユキコもナツキもジムを管理する力はあっても、トレーナーとしての実力はせいぜいバッジを5個6個持ったエリートトレーナーと同レベルなのだ。全力のジムリーダーなどに勝てるはずがない。
「だから……君含め、タマムシジムのトレーナーたちに万一の事を考えるよう言っておいてほしいんだ」
　万一とは言うまでもなく再就職の事である。ジムトレーナーたちは多かれ少なかれ給料を貰っている。特にタマムシジムはエリカの財力もあってカントージムで一番の高給どりと噂されている為より再就職の心配をしなければならないのだ。
「分かりました」
　彼女はいろいろな感情を押し殺してそう答えた。ここでいくら反抗しても意味が無いことを分かっているからだ。今はとにかくエリカの発見を待つしか無い。
　ユキコが立ち去った後、ワタルに電話がかかってきた。
「はい。……、分かった。すぐに通してくれ」

―午後４時４０分　同所―

ワタルは査察部に入る人間の目通しをしていた。

査察部とはリーグ内にある委員によって構成される部門である。リーグの権威が不安定の上公認ジム争いでジムリーダーたちの不正や不法行為が横行していた時代にヤナギが捜査能力の強化と負担軽減の為に設置した。ジムリーダーなどリーグの役員以上にあたる人物の監察と調査を任務としている。１９７３年の創設以来、警察とのつながりも強く、査察部の人間自身にも判例で限定的ながら捜査権が与えられている。

具体的な業務は役員がリーグ法に抵触する行為をした際に行われる理事会議に伴う資料作成と常日頃の役員以上の素行調査である。

査察部の人員は委員の推薦と理事長の承認によって配属が決定する。ここは基本的にリーグ内の委員と外部からの引き抜きの半々で構成されており、今度入るポラリスは興信所からのヘッドハンティングという形で推薦されている。

「君が今度査察部に入るというポラリス君か……」

「は。左様でございます」

ポラリスと呼ばれたその男は深々と頭を下げる。整った青色の髪に、紺のスーツを着用し、眼鏡をつけ如何にも爽やかな新入社員といった風貌であった。

まるで入るのが確定しているような物言いなのは委員の推薦があった時点でほぼ決

まっているようなもので、これまでに承認がおりなかったことはないからだ。
「査察部はリーグの信頼と公正さを守るのが仕事の部署だ。探偵としての経験を活かしつつそれを忘れないようしっかりと勤めてくれよ」
その後も二言三言続けてワタルはポラリスを帰した。
―２月２２日　午後３時　ヒウンシティ　某所―
エリカは強力な睡眠薬をかがされていたため、この時間まで目が覚めていなかった。連行された後はずっとベッドソファに寝かされていた。
そして、彼女が目を覚ますと目の前には多数のモニターがあった。
しかし、何よりも目の前の人物に釘付けになる。
「目を……覚ましたようじゃな」
「オ……オーキド……っ！　どうして貴方が……」
彼女の表情からは驚きの感情と憎悪の感情が交錯している様が読み取れた。
「こ、ここは何処ですの!?　一体、私をどうしようと」
「わしが死んでおると本気で思っておったのか……それにしても、錯乱するのは君らしくないのう……。まあ、茶でも飲んで落ち着くのじゃ」
オーキドは不気味なほど丁寧な様子で彼女に見えるように茶を淹れている。
彼女は拘束をされていない。その為とにかく逃げようとドアに行こうとするが

「無駄じゃよ。外には多数の団員がおる。その前に、どうやって外に出るのか分かっておるのか?」

部屋は密室である為外へ通じる窓がない。廊下に団員がいるということはここから脱出することはまず不可能である。

状況を把握した彼女は観念した風にベッドソファに戻った。

「どういうつもりですの」

エリカは敵意を宿した声で言う。

「そう焦らずゆっくり話そうではないかの」

それとは対照的にオーキドは湯呑に淹れた茶をエリカの前に置き、同じ急須で自分の分も淹れる。

「私はここで漫然と時を過ごしている場合ではないのですわ! 私がジムに戻らなければ……」

「潰れる。のじゃろ?」

「存じているのであればすぐさま私を解放しなさいまし! さもなければ然るべき手段に」

「残念だのうエリカ君。ここは日本ではない。そうでなくてもここは公の力の及ぶところではない事くらい賢い君ならばわかっとるはずじゃぞ」

「うっ……」
　彼女はそういわれると黙する他なかった。
「長く水分を口にしていなくて喉がかわいとるじゃろう。遠慮することはないその茶を飲むといい」
　と言いながらオーキドは毒が入っていないことを誇示するかのように一口で飲み干して見せる。
　それを見た彼女は仕方のない風に茶に口をつけた。
「ふう。やはり寒い日には温かい緑茶が一番だの。どうだね。エリカ君や」
　彼女はほんの一口飲んで机に置く。
「なってませんわね……。湯加減に濃さ、分量など何もかもが滅茶苦茶ですわ。せっかくの上質な茶葉もこれでは仏作って魂入れずというものです」
　エリカはそうオーキドの茶を酷評する。
「ホッホ。やはりかの千家の一員よ。茶ではかなわぬの」
「それで、私をどうするというのですか。そろそろ答えてくださっても宜しいのではありませんこと?」
　彼女は落ち着いてきたのか先ほどよりは切羽詰まったような様子がなくなっている。
「エリカ君。君はさらわれる直前にあの男……ラムダに何と言われた?」

「確かマツバさんがどうとか……」
彼女は記憶をたどりながら話す。
「君自身、マツバ君とはどういう関係なのかね？」
「どうもこうも……同じジムリーダーの一人ですわ。夫と旅している道中で少し親しくなりましたがその矢先にあの事件でしたし……」
彼女は簡潔に答える。
「ふむ。ではマツバ君のことはどう思っているのかね？」
「噂に違わぬ頭の良さを持っており、また先のエンジュ騒乱での行動や悪に立ち向かう豪胆かつ毅然とした姿勢は私含め見習わなければならないと思いますわ。尊敬に値する御仁だと思います」
エリカはオーキド並びにロケット団に対するあてつけかのように悪意がこもった声で話した。
「ほうほうそうか……。マツバ君が死んだことに関してはどう思っておるのかの？」
「許されないことであると考えてますわ。リーグの解散などという無理難題と人命を天秤にかけるなど言語道断の所業です。私個人としても、せっかく出来た高い学識を持ったお友達を失って残念な限りですわ」
オーキドはそれを聞いてかすかに笑みを浮かべる。そして机上のラックに入ってい

たリモコンを取出し、４と書かれたモニタの電源をつけた。
そしてそこに映された光景を見て彼女は眼を見開く。
「マ……マツバさん？」
そこには四肢を拘束され、目隠しもされたマツバが映されている。
「不思議な顔をしておるのう」
「と、当然ですわ！　亡くなっているはずの方がどうして……。本当にマツバさん当人なのですか？」
「確かめたければ、当人の口から聞いてみると良い。おい」
オーキドの一声でドアが開かれる。そこには三人の団員と一人の幹部格の男がいた。
エリカを立たせ、ふと彼女は幹部の顔を見た。
「貴方は……アポロですか」
「お久しぶりですね。エリカさん。では我々についてきてもらいましょうか……」
挨拶もそこそこに四人の男とエリカはぞろぞろと部屋から退出する。オーキドは同行せずにエリカの座っていたソファに腰を下ろし４番モニターに注視する。当然のようにエリカの飲みさしを旨そうにあおっていた。
―午後４時　同所　地下室―
一行はエレベーターで一階まで降り、そこからは張り紙でカモフラージュされた隠し

扉から階段で下りて行った。

永遠に思えるほど延々と下りると地下室のフロアの出入り口にさしかかった。そこで思い出したかのようにアポロはエリカにあるものを手渡した。

「これは……尿瓶ですか？　一体どうして」

妙な表情をしたエリカにアポロは冷厳に一言で返す。

「直に、分かりますよ」

彼女は怪訝な表情をして尿瓶を懐に入れる。そして、2分ほどしばらく歩くと左に堅牢そうな鉄扉が現れた。どうやらここがマツバが監禁されている部屋のようだ。

アポロは指紋と声紋、虹彩、最後に暗証番号といったセキュリティを解除して鉄扉のロックが外された。

エリカはこれから目にする光景への覚悟からか固唾を呑んでいる。

重々しく鉄扉が一人の団員の手で開けられる。

すると、突き放すようにアポロはエリカを中に押し込む。彼女はバランスを崩して倒れこんだ。

「な、何を無礼な」

「我々が案内するのはここまでです。あとは言わなくても賢い貴女ならばすぐにお分かりになることでしょう。それでは」

アポロは頭を下げると、振り返らずに廊下へと出ていく。そして鉄扉がゆっくりと閉まった。

彼女はこの時いよいよ閉じ込められたことを察するのだった。

「エリカ……さん？」

背後から声がした。今にも消え入りそうなか細い声。

彼女は振り返る。マツバは地面より３０㎝ほど高い場所に気を付けの姿勢で拘束されていた。服は黒の長袖長ズボンである。

部屋はひどく殺風景であり、拘束台以外には個室のトイレ付ユニットバスと洗面器、布団とシーツ、自動調節のエアコンくらいしかなかった。壁および床はコンクリートが剥き出しになっており、よりいっそう陰鬱な雰囲気を醸し出している。

「マ、マツバさんですか!?　まあ……なんとおいたわしいお姿に……」

マツバは以前、エンジュシティで見かけたときとは全く違う姿になっていた。髪には艶がなく脂ぎっており、肌は乾燥しきってボロボロになっている上に毛もやや深くなっている。

不潔なだけでなく栄養失調になりかかっている状態であった。

「ああこの声……エリカさんだね。あの男、本当に……やりやがったのか」

マツバの声には明白な憎悪が含まれている。
「どういう事ですの……？」
「僕が千里眼を渡さないって……わがままを言ったばかりに……オーキドはエリカさんをさらったんだ。全部僕のせいなんだ。本当にごめんなさい……ごめんよ」
目隠しから涙が流れている。嗚咽している声もあわさって心の底から陳謝しているようだ。
「そ、そんな馬鹿げた要求に応じる必要なんてありませんわ！　マツバさんにとってその眼は命と等しいほどに大事な授かり物だという事は私にも分かっています。ですから私に謝る必要なんてこれっぽっちもありませんことでしてよ」
エリカは懸命にマツバをフォローする。
「いや……だけど……くっ」
「マツバさん？　どうされたのですか」
マツバは太ももどうしを擦らせている。
「い……いやなんでもないよなんでも」
「とても苦しそうなお顔をされてますけど……」
エリカの言うとおりマツバは苦悶の表情をしている。体は震えており、唇を噛んでいる。

「も……もしかして御小水ですか？」
「ぐっ……な、何を言ってるんだいエリカさんそんな訳。はぐっ……！」
震えがまた一段階上がる。体がまさに自由を欲している。そんな状態であった。声ではしきりに否定してもそれをしたがっていることはだれの目にも明らかである。
エリカはここで尿瓶を懐より取り出した。アポロの言っていた事がどういう事であったかを察したようである。
「マ……マツバさん。失礼致します」
羞恥よりも部屋が汚れることを嫌ったのだろうか。エリカはすかさずズボンのファスナーを下げ、尿瓶に陰茎をつなげる。しっかりと繋げ、出ている最中は目を背けていた。
「エ、エリカさん……」
マツバの方は放尿の快感からかエリカへの羞恥心からか顎を上にやっている。
「……」
放尿が終わると彼女は黙したまま個室へ行き、尿を風呂場のトイレに流し洗面器の水と備え付きのブラシで丹念に洗浄した。
終わると彼女は尿瓶を蛇口の近くに置き、マツバの近くへと戻った。
しばらくの間気まずい沈黙が続く。

数分ほどしてエリカが顔をあげて話し始めた。
「き……気にすることはありませんわ！　御小水をすることは生物にとって必要な行為ですものね。自分で出来なければできる人が手伝うしかありませんし……」
「……」
マツバは黙ったままである。よりにもよってエリカに下の世話をさせてしまったことがあまりにも彼にとって精神的打撃が大きかったのだろう。
エリカはその後も励まし続けたがマツバの反応は変わらなかった。
―同じころ　オーキドの部屋―
「ククク……だから言うたじゃろう。年寄りの言う事は聞くものじゃよマツバ君や。尤も今となっては後の祭りだがの。ホッホッホッ！」
オーキドは好物のプリンを食べながらご満悦の様子だった。
「このワシに逆らった罰はこの程度では済まぬぞ。さてこれからどうしようかのう……」
オーキドは笑みを浮かべながら今後のことに思考をめぐらすのである。
―2月22日　午前7時　ストレンジャーハウス―
ワタルとの通話を終えたレッドはそのままベッドに倒れ込み　、睡眠を取った。
朝を迎えると彼は起き、伸びをした後ふと床を見た。

ヒトモシとピカチュウが寄り添って眠っている。遊び疲れて帰ってきたのだろう。
その後彼は机に目をやる。三つ折りになった紙の表面にはレッド君へという文字が書いてあった。どうやらフウロの残した書き置きのようだ。
レッドは紙を広げる。中身にはこう書かれていた。

――

拝啓　レッド君へ
昨晩はあのような事を言ってごめんなさい。
しかしこれはレッド君自身の目を覚まさせる事にはどうしても必要な行為だと思ったのです。
レッド君はエリカさんに対して冷めていると言っていましたけれど、本当にそうならそうとやっぱり本人に直接話して別れる別れないの話をするのが私は筋だと思います。順序を守らずに私に迫ったことはいけないことだと思いますし、何よりエリカさんに失礼だと思います。
レッド君、貴方にも色々と思うことがあってこのような行動を取ったということは私にも分かります。しかし、私には貴方の期待に応えることは出来ません。
最後に、エリカさんは本当にレッド君を愛しています。さらわれてしまったことは大変腹立たしいことですが、レッド君はその事はひとまず横に置いて今すべきことにまっ

すぐ取り組んでください。エリカさんもきっとそれを望んでいると思います。私はお互いの為にもレッド君から身を引きます。前のように直接話して相談にのってあげることは出来ないけれど、陰ながら上手くいくことを願っています。

敬具

フキヨセシティ

ジムリーダー　フウロより―

レッドは手紙を読み終えると三つ折りに戻して本に挟み、リュックにしまいこんだ。

レッドは持参してきた缶詰をポケモンたちと食した後、ストレンジャーハウスを抜けて比較的砂嵐のおさまっているヤマジタウンまで移動。

そしてそのまま彼はフキヨセまでリザードンに乗って戻っていった。

―同日　午前9時30分　フキヨセカーゴサービス―

レッドはなんとなくカーゴサービスへと向かった。もしかすると昨日まで聞いたことは何かの間違いで本当は帰ってくるのではないかなどと考えている。

彼にとってエリカを失ったことはそれだけショックな事のようである。昨晩のワタルの電話で彼女の愛の深さを知ってから彼は特にエリカをいとおしく思うのであった。

それから数時間以上に亘ってレッドはカーゴサービスの待合室に座り続けた。ピカ

チュウとヒトモシは何度も目を合わせてレッドの顔を見て心配そうな表情をしている。何度か気をかけて鳴いていたがいずれもレッドは「心配するな」の一言と頭を撫でてやって終わりである。

そうこうしていると、カーゴサービスのゲートから一人の人物が出て来た。ゲートの開く音が聞こえるとレッドは立ち上がってそこを見た。

しかし、当然そこに立っていたのはエリカではない。先ほど届いた内国からの荷物を台車に載せて運んでいる従業員であった。

それを見るとレッドは何だとでも言いたげに座席に力なく座る。

三十分ほど前に飛行機がついてから何度かナギがフロントとバックヤードを行き来していた。ナギは三度目くらいに従業員通用口から昼食のパンを持ってレッドの隣に座りこんだ。

―同所　午後０時３０分―

「久しぶり……と言うほどでもないわね。どうしたの？　こんなところでしょげ込んで貴方らしくもない」

「……」

レッドは黙ったままである。

彼女は一回溜め息をついた後に話す。

「エリカさんの話は聞いたわ。ホウエンでもそれなりに大きなニュースになってたし……。うちのリーグでも何か情報を得次第伝えるように指令があったの」
「そう、ですか……」
レッドは弱弱しく答えた。
「エリカの事で迷惑をかけてしまって申し訳ない限りです」
「貴方が謝ることはないでしょ」
「何であっても将来の……妻となる人がしでかした不始末です。俺に責任がないとはいえません」
それを聞くとナギは息をついて
「そう……。思ったより真面目なのね」
「俺……。どうも乗り気になれないんですよ。ワタルさんもフウロさんも……先に進むことをエリカさんも望んでいるだろうって言うんですが俺はそんな事よりもエリカを救い出すことに専念したいんです」
レッドはようやく話す気になったのか少しずつ話し始めた。
「レッドさん。それは貴方のすべきことではないわ。リーグと警察がすることよ。彼氏である貴方がエリカさんのことで居てもたってもいられないのは分かるけれども、貴方はあくまでトレーナー。ましてやただのトレーナーではなく使命を帯びているのよ。

今はとにかく目の前の事にひたすら向かっていくべきじゃないかしら」
　しかしレッドは黙ったままである。
「じゃあ、こう考えたらどう？　今一生懸命にバッジをそろえてポケモンマスターになることが、エリカさんを救う筋道になるって」
「どういうことですか？」
「ジムリーダーをあんなあっさりと拉致できる組織なんてそうそうあるものじゃないわ。おそらく敵は相当に手強い。だからこそ貴方はそれを倒す為にも力をつける。そういう事よ」
　現在の所ロケット団、ひいてはオーキドが関わっているということはレッド自身、そしてワタルやシロナなどのごく一部の憶測にすぎない。その為レッドはそれについて言及せず
「確かに考えようによってはそうかもしれませんが、それだともし手遅れになった場合の事を考えると……」
「急がば回れ、よ。手遅れと言うけれど貴方が今の力で攻め込んで負けたらどうするつもりなの？　その時になって力及ばずだったと後悔して済めばいいけれど、もしそれで貴方が捕まったら誰がエリカさんを救い出すのよ！」
　レッドはその言葉を聞いて返す言葉が無かった。

それと同時に心に熱く滾るものがではじめる。

「今、全国のトレーナーの中でエリカさんを救い出せる可能性が限りなく高いのは夫であり、全国屈指のトレーナーである貴方ということ。これは事実よ。しかし、それに驕ってはダメ。今貴方が出来うる限りの力をつけて、最後に敵に臨むことこそがあなたが今やるべきことなのよ」

彼はこれを聞き考えを切り替えた。ナギの言うとおり、残りのリーダー、特にヤナギ以来の大敵となるであろうシャガを打ち破り全国を制覇し、ポケモンマスターとなる事が妻を救う一番の近道であると自覚したのだ。

「分かりました。ナギさん。俺目が覚めました。ここでいじけていたってはじまらない。必ず強くなってエリカを助けてみせますっ！」

そう言ってレッドは立ち上がる。彼はナギに深く頭を下げた後、カーゴサービスを飛び出していった。ピカチュウとヒトモシは慌ててそれに続いた。

ナギは駆けていくレッドを見守りつつ昼食のパンの袋を開けてかじる。

彼女が昼食をとっていると側の柱の影からそっと一人の少女が出てきた。

フウロである。フウロは書置きの手前レッドの前には姿を現さず事情を話したうえでナギにレッドを励ますよう頼んでいたのだ。

「先輩」

「ん？」
「本当にありがとうございました！」
　フウロは深々とナギに頭を下げた。その顔には感謝の念がいっぱいに詰まっている。
　ナギは少し間を置いた後
「あのまま居座られたんじゃ、こっちだって気が滅入るしね……。当然の事よ」
「またそんな事……。でも、これでレッド君は本当に立ち直ってくれたと」
「フウロ」
　ナギはパンを半分食べたところで尋ねる。
「は、はい？」
「涙、出てるわよ」
「えっ？」
　フウロは自らが気づかないうちに涙を流していたようだ。
「ねぇ。一つ教えてほしいんだけどさ」
「な、なんでしょうか」
　フウロは慌ててポケットからハンカチを出して涙を拭いている。
「私の勘違いなのかもしれないけど……もしかして、フウロってあの子の事」
　フウロは涙を拭き切って

「い、嫌だなあ！　そんな訳ないじゃないですか！　ほら、そろそろ午後のお仕事の時間ですよ行きましょ！」

と、いつもと変わらない笑顔で従業員口へと駆けて行った。

「ま、そう言うならそういうことにしておきましょうかね」

ナギは残りのパンも食べた後、身に着けていた水筒のお茶を飲んでフウロに続いた。

こうして、フウロとレッドの仲は閉ざされることとなったのである。

―2月23日　午前8時　ヒウンシティ　某ビル　地下室―

あれからエリカは夕食をとった後、布団を敷いてすぐに眠りについた。

そして翌日、彼女はある一声で叩き起こされる。

「起きなさい！」

彼女は女の声で起こされた。

「だ、誰ですか貴女は」

エリカは眠い目をこすりながら尋ねた。相手の女はほかに数人の女の下っ端をつれている。

「あたくしの名前はアテナ。ロケット団の幹部でサカキ様からあなたの監視役を命ぜられたの」

「幹部、幹部と……私やマツバさんの為とはいえロケット団はそんなに人手が足りない

のですか？」
「うるさいわね！　サカキ様からしたらあんたやそこの坊やは人質なのよ。そのお目付けなら相応の人に任せるのが筋ってものでしょうが」
　アテナは澄ました顔をしてそう返して見せる。
「そんなに丁重に扱う心積もりがあるのならばもう少し良い待遇にしていただいても宜しいのではありませんこと？　あのような使い古しのお布団では寝た感じがしませんわ。やはり、お布団は羽毛百パーセントでエンジュの職人たちが丹精込めて作った物でないと」
「分かったわ。今度からはそうするように仕入れ係に言っておくわ」
　エリカはわざと怒らせようとしたつもりでいった様子である。しかし、アテナは存外あっさりと言い分を通した為エリカは当惑気味の表情をしている。
「あら……左様でございますか……」
「随分と意表を突かれたような顔をするわね。あんたはセンセイとかいう科学者のお気に入りだから当たり前よ」
　エリカはそれを聞いて複雑な表情になった。
「そ、それで私に何のご用なのですか？」
「確かにあんたはセンセイのお気に入り。でもね」

下っ端たちは示し合わせたかのように衣服とバケツ、掃除道具を差し出す。
「同時にセンセイはあんたのあくせくと働く姿もご所望のようでね！　ここのビルの掃除、全部きっちりやってもらうよ！」
しかし、エリカは平然と道具を受け取りにっこりとした笑顔で
「私、お掃除は大好きですわ。毎日ジムの掃除は欠かしたことがありませんもの。ここの掃除もきっちりとやらせてもらいますわ！」
と悠然と答えてみせる。
思い通りの反応を見せないのが気に食わないのかアテナは段々と顔に青筋を浮かべる。
「いいから、さっさと着替えてやりなさいよ！　一つでも埃を見つけたらおしおきしちゃうんだから！　ほら、あんたたち何をしてるの早く着替えさせなさい！」
「は、はは…っ！」
エリカの体に触れようと下っ端が動くがエリカは袴から扇子を取り出して閉めたまま手を弾いた。下っ端たちは手を腫らして痛がっている。
「私一人で出来ますわ。着替えましたらすぐに出ますから出て行ってくださいます？」
「こ、このー！！　さっきから舐めた真似しくさってからに……!!」
先ほどからの言動にとうとう怒り心頭に発したのかアテナはエリカを平手打ちにし

ようとする。
　しかし、下っ端たちは腫れてない方の手で必死に押さえた。
「アテナ様！　おちついてください！」
「そうですよ！　余裕かましてられるのも今のうちですってば！　今に従順になりますって！」
　下っ端の説得にアテナは怒りを抑え込ませる。
「そ、それもそうね……。いい？　着替えたら必ずすぐに出て来なさいよ！」
　そう言って掃除用具と服を残してドアを閉めた。
　エリカは掃除用の服装を抱えて更衣室がわりとばかりに風呂場へと向かう。
「エリカさん……」
「何用ですか」
　エリカは少々いらだちを残した声で言う。
「貴女はやはり変わってないな。そういう気丈なところが……」
　マツバはふっと口元を緩ませながら言う。
「しかし、やっぱり凄いよ。連れ込まれた翌日であんなに威勢良く向かっていけるなんて」
「私がここで弱みをみせたら向こうの思うつぼですわ。ここは、気を強く持っていかな

ければ」

「やっぱり、強い人だよ。エリカさんは……」

マツバは1年近く閉じ込められた上にエリカが拉致されるという最悪の結果を経てから精神がかなり削れてしまっている。諦念も漂っているように見える。

「マツバさん。気を強く持ってくださいまし。このままで絶対におわらせはしませんことよ。今は雌伏の時ですわ」

そう言って彼女は風呂場のドアを閉めた。

「気を強く持て……か。ハハ。時の試練とは残酷だな」

マツバはそう力なく笑った。

――

あれから彼女はアテナの監視下のもとビル全体の雑用をそつなく完璧にこなしてみせる。わざと廊下を汚されたり、汚物の回収などの汚れ仕事をやらせるなど団員からの嫌がらせやアテナのいびりは執拗にあった。しかし、そんな中でも彼女は挫ける素振りすら見せずむしろ堂々と振る舞って見せた。因みに他にも雑務担当の人間はいるようだが一回も話したことや一緒に作業をしたことはない。

そんなある日のこと。

―3月5日　午後1時　同所　3階　団員食堂―

この時彼女は食堂を掃除していた。
団員たちの食事マナーは決して良いとは言えず、食べかすや果物の皮などがそこら中に落ちており彼女は掃除に苦慮していた。
そんな最中、アテナが下っ端数人を引き連れてやってきた。
「そこ！　もっと力入れて掃除なさい！」
アテナは指をさしてエリカを注意した。
「これを見てください」
「何よ」
アテナが床に目をやると今日の定食のデザートであったバナナの皮が十枚ほど落ちている。
「バナナの皮が沢山落ちているのですわ。力を入れると果肉で逆に床が汚れてしまいますが……」
と彼女は言い返す。
「口答えするんじゃないの！　床が汚れるならまたそこを掃除すればいい話じゃない！　だいたいあんたはいつもそう反抗して」
アテナはそう詰め寄ったがバナナの皮に足を取られてそのまま転んでしまった。
「いっつ……。もう、何なのよ！　さっさとあんたが掃除しないから転んじゃったじゃ

ないの！」

　アテナは後頭部を押さえながらエリカをまくしたてる。

「ちょうどやろうとしたところに貴女が先を塞いだのでしょう？　言いがかりはよしてくださいまし」

「むきー！　どうやら、お仕置きが必要なようね！　そこに直りなさい。その尖った牙へし折っちゃうから！」

　アテナはどこからともなく、ムチを取り出し、床に先鞭を叩きつける。

　しかし、そこである人物が仲裁に入る。

「そのくらいにしておいたほうがいいぜ」

　それは偶然、団員と昼食を共にしていたラムダであった。

「何よラムダ！　邪魔する気なの？」

「アテナよぉ。お前、サカキ様からのお達し忘れたのか？　この女には一切の暴行を加えるな……って言われただろ？」

「クッ……。で、でも！」

「もっとも、サカキ様からのお仕置きを受けたいってなら止めはしねぇがな」

　ラムダは残忍に笑いながら言う。そうまで言われてはさすがにアテナも溜飲を下すしかなかった。

「行くわよ」
「し、しかしアテナ様。このままで宜しい」
「興が醒めただけよ。全くなんてタイミングの悪い時に来るのかしら！　いーい？　しっかり掃除しておくのよ」
「言われなくてもそう致しますわ」
　そう言い残してアテナは答をぐるぐる巻きにしてまとめ、下っ端を連れて注文をしに奥へと去っていった。
　エリカは掃除を再開し、ラムダも下っ端を連れて食堂を去ろうとする。そして去り際にエリカに声をかける。
「じゃぁな。エリカさんよ」
「これで、罪が消えたとでもお思いですか？」
　エリカはそうラムダに訪ねる。
「まさか。俺ぁそんなつもりであのじゃじゃ馬に声をかけたんじゃねぇ。ただ単に激情のまま振る舞って仲間が傷つくところをみても目覚めが悪いって思っただけだ」
　そう言ってラムダたちは去って行く。
　その後、エリカは掃除をすませ、その他諸々の雑用も終えて夕食の時間を迎えた。
―同日　午後６時　地下室―

夕食の時間になると、ドアが開けられ食事が手渡される。
エリカとマツバの二人分な訳であるが同一のレパートリーではなく、エリカの方が断然まともな食事でマツバのは必要最低限＋αといったところである。酷い時はカロリーメイト一箱と牛乳だけという日もあった。
これは初日の夕飯の時点でエリカは抗議したが処遇上の理由で止むを得ないと返されてしまう。
さて、食事はいつも下っ端の団員から手渡されるのだが今日は様子が違った。
お盆を二つ手渡された後、下っ端と思しき男はパッと顔を上げてみせた。
「話がある。午後10時くらいに迎えに来る。分かったな」
そうとだけ言うと返事も聞かずに下っ端は部屋を出て行った。
―地下室内―
エリカは食事は必ず先に拘束されているマツバにご飯を食べさせ（食事中も決して拘束を外してはならないと厳命が下っている）、エリカはこっそりと自分の分のおかずもマツバに分けている。その後、自分の分を食べている。
食事後は毎日マツバの体をウェットティッシュで丁寧に拭き、風呂のかわりにしている。これは決してロケット団側からの指示ではなくエリカ自身の善意である。
そして夕食を食べた後は皿洗いを自ら行って、翌日の朝食で食器を取りに来るまで置

いておく。いずれも最初の頃はかなり戸惑い、躊躇している事もあったが今ではすっかり慣れてしまっている。

その後、彼女は風呂に入るのだが、その用意をしている最中マツバにぽつりと打ち明けた。

「そういえば、夕食を運んできた下っ端が私に話があると持ちかけてきたのですが……。マツバさんはなんだと思われます？」

「見当もつかないよ……。今更エリカさんをどうするというのだか……」

「確かにそれは言えてますわね……。しかし応じなければ応じないで後々面倒でしょうし一応は行ってきますわ」

「何もないことを祈っているよ」

それから、彼女は風呂に入り、午後１０時を待つ。

―午後１０時１０分　同所　８階―

時間ピッタリに下っ端はやってきた。二人のようである。

エリカは先導に従って地下室を出て、階段を登り、地上へ出る。そこからエレベーターを使って８階まで昇った。因みにこのビルは１０階建てであり、ロケット団が一棟全て所有している。

地下室に放り込まれて以降、彼女がここまで上がるのは初めてである。着いてしばら

くすると、幹部室と書かれた部屋に入らされた。

―幹部室―

彼女は普段の関係からアテナに呼び出されたのかと思ったが、奥の机に座って居たのはラムダであった。

「よし、よく連れてきた。まぁ、そう硬くならずに座りなさいな」

ラムダはそう彼女の目の前にある椅子に着席を促す。彼女はそれに従い着座した。

その後下っ端たちはドアの前に立つ。

「一体私に何の御用ですの?」

彼女は警戒心を持ちながらも不思議そうに尋ねる。

「まず、俺の話を聞いてくれ」

「は、はぁ」

「単刀直入に言おう。俺は今のロケット団……いや、サカキ様のやり方にやうんざりしている」

「そのような事、幹部ともあろう方が言って宜しいのですか?」

「そう思っているのは俺だけじゃねぇ。〃前〃のサカキ様に憧れて入ってきた連中は皆そう思っているぜ」

その言葉に後ろの下っ端たちはうつむく。

「お前らだってそうだろ？」
　ラムダは下っ端に尋ねる。
「ラムダ様の仰せのとおりです！　俺は、かつてのサカキ様のまるでニドキングのように暴れ回り、カントーを駆け回っているサカキ様に憧れてここに入ってきた！　レッドやゴールドとかいう生意気なガキに潰されてもサカキ様は必ずや帰ってくると信じていた」
　もう一人の下っ端が続くかのように答える。
「だから、サカキ様が戻られて復活しようとしていると聞いた時俺は、本当に心の底から嬉しかった。だけど、戻ったらサカキ様は前とは随分変わられてしまった……」
「変わった……？　どういうことです？」
　エリカがラムダに尋ねる。
「御嬢さんも勘付いてはいるはずだぜ。オーキドだよ。あの胡散臭ぇ科学者だかポケモン博士に関わってからサカキ様は変わってしまった。前のように暴れ回る力や牙を失い、まるで操り人形のようにあいつに従っちまってる。あげくの果てにエンジュを占領し、掠奪、破壊。そして今度はイッシュを獲ろうときた……。だが、サカキ様は本心ではそんなことを望んじゃいねぇはずなんだ！」
「どうして……そう思うのですか？」

「もともと俺たちロケット団は裏社会というかあくまで闇としての組織であることを存在の理由にしている。俺はサカキ様の先代、サカキ様の母様の時代から仕えてきているが天国の母様もこんなことは望んじゃいないし、サカキ様も本心から表立って世界を分捕ろうなんて考えちゃいない！　俺たちはあくまで影の部分で暗躍するからこそこの黒の制服を身にまとっているんだ！　だからこそ今のサカキ様には目を醒ましてもらいたい！　真の意味でのロケット団の復活を夢見ているのだ」

後ろの下っ端二人は拍手している。

「それで……それを私に伝えてどうしろというのですか？」

「お前を自由の身にする。マツバの坊ちゃんはともかくとして、あんたは完全にあの科学者の私利私欲によって連れ出された可哀想な被害者だ。サカキ様もあいつの命令さえなければ連れ去ろうなんて真似はしなかった筈だ。それに、お前さんみたいに強かで厄介な女、ここに置いてたらこっちの気が危うくなりそうだしな」

エリカはあまりのことに目を瞬かせながら尋ねる。

「そ……それって本当なのですか？　私を……ここから解放してくれると？」

「嘘だったらこんなに長々と本音を話したりはしねぇよ。サカキ様には本当に目を醒ましてもらいたい。そして、前のような真っ当な悪の組織に戻って欲しいんだ。これが俺たちの心からの願いだ。そもそも俺にゃ地方や国、世界を分捕るなんて無茶な仕事だし

な」

　ラムダは笑いながら言う。

「で、どうする気だ？　お嬢ちゃんがここから出たくないと望むなら無理強いはしねぇ。別の方法を考えるが……」

　彼女は数分程黙した。

　つい数週間前に自らをさらった男を簡単に信用できないが、これは千載一遇のチャンスである。その上、今脱出に成功すればジムをも守る事ができるのだ。

「分かりました。そちらの提案に乗る事にしますわ」

「よしきた！　そうと決まれば計画の詳細……といきたいところだが。もうすぐお嬢ちゃんの就寝時間だ。まあここからの話は追って知らせよう」

「はい。ここからは共闘……ですわね」

「そうだな。おっと、勿論これは極秘だ。誰にも言うんじゃねえぞ。もしこれがアポロなんかに知れたら俺は一発でクビだ」

　こうしてこの瞬間からエリカとラムダの極秘の関係が始まったのだ。

―３月１４日　午前１０時　セキエイリーグ　理事長室―

　エリカの失踪発覚から三週間が経過した。

　ナツキはこの間に退院した為ユキコに代わってナツキがリーグにへと赴き、理事長た

るワタルから直々に剥奪を言い渡される。
「ナツキ君……。エリカ君がいなくなって今日で三週間だ」
「はい」
ナツキは弱弱しい声で答える。
ワタルが剥奪の旨を記した紙を出す。
「こちらとしても本当に不本意であるが、規則は規則。リーグ法第三四条に則り――」
「待ってください！」
「何だ」
「もう少し、もう少しだけ待ってはいただけないでしょうか！」
ナツキは頭を下げて頼み込んだ。
「ナツキ君。僕としても気持ちは痛いほどわかる。だけれど、これ以上流れを止めるのはトレーナー全体にとって良くない事だ。だから……」
「まぁ、良いではないか。ワタル殿」
急に割って入ってきたのはヤナギであった。
ワタルは突然の来訪に驚きつつも、すぐさま冷静に対応する。
「し、しかし。規則ですよ？　バッジの受け渡しはリーダー自身が受け渡しをしなければ……」

「ならばその子を仮のリーダーではなく本物のリーダーにすれば良い話だ。エリカ女史が発見されたらすぐに交代すれば良い事」
「そ、そんな！　無理です、私にそんな他のジムリーダーと対等に戦えるだけの力なんてとてもとても……」
　ナツキは両手を大きく振って否定する。
「エリカ女史は必ず戻ってくると私は信じている。そう簡単に苦境に屈するような弱い女ではない。それに、いまの女史にはあの男がいる。あの男がいる限り決して彼女は折れたりはせぬよ。それまでの間本物のリーダーらしく振る舞えば良い」
「し、しかし！　三週間以内にリーダーの所在が掴めない場合他に移譲すると言う決まりを作ったのは他ならぬ貴方なんですよ!?」
「法というものはもっと柔軟に用いねばならん。エリカ女史の遺体が見つかったわけでもなし、ここで公認を取り上げるのは早計というものだ。それにまだタマムシジムの後釜はまだ見つかっておらんのだろう？」
　それを尋ねられるとワタルは黙るしかなかった。原則として公認ジムの代わりとなるジムは同じ街になければならない。しかし、リーグができる遙か前からあのジムがあるため、気後れのためかジムリーダーとなりうる力を持ったトレーナーはタマムシではなくヤマブキなど他の街へと散ってしまっている。

「は、はい」
「ならば今剥奪しても状況は変わるまい。代わりが見つかるまでの間でも暫定的にリーダーに任せれば良い」
「わ、分かりました。ヤナギさんがそこまで言うなら仕方ありませんね……」
そういうわけで、ヤナギの鶴の一声によってナツキが暫定的にジムリーダーとなることでこの件は解決した。如何に理事長のワタルといえど、創設者であり、初代理事長の意向には逆らえないようである。
「では、私はここでお暇するかの」
「あ、あのヤナギさん！　ありがとうございました」
ナツキは出て行こうとするヤナギに深々と礼をする。
「なに、ほんの気まぐれよ。カッカッカッ」
ヤナギは高笑いをして理事長室を後にした。
―4月1日　午後1時　セキエイリーグ　第三会議室前―
ポケモンリーグでは月の初めに定例会が行われている。その地方のジムリーダーたちが集まり、自らのジムについて挑戦者の数やジムバッジを獲得した者の数などを報告やチャンピオン直々にリーグからの連絡。その後は近況を報告しあい、時にはバトルをして親睦を深めている。

当然、その中にはナツメもおり、エリカ失踪から意気消沈気味の彼女に対しカスミやアンズなどの同業者は励ましていた。

定例会が終わると三々五々ジムリーダーたちは帰っていく。ナツメもテレポートを使ってヤマブキジムへ帰ろうとしていた。そんな時、彼女はある人物に話し掛けられた。

「もし、ヤマブキジムのナツメさんでしょうか？」

ナツメが振り返ると男はスーツを羽織っていて、襟には白と黒のモンスターボールを模したバッジがつけられている。

「査察部の方が一体何の御用かしら？」

査察部の人間がリーダーに話しかけることはあまりない。ナツメは平静を装いながらも身構えている。

「私は査察部のポラリスと申す者です。貴女に少しお伝えことがあるので、訊問室までご同行願えますでしょうか？」

男は彼女に名刺を手渡す。彼女はそれを恭しく受け取り、ポケットにしまった。

「ええ。分かりましたわ」

彼女はやましいことは何もしていない。堂々とした様子で男の指示に従った。

―午後１時１０分　同所　訊問室―

訊問室は一つの窓に机とパイプ椅子がワンセットという殺風景な部屋であった。
席について開口一番にナツメはポラリスに尋ねる。
「それで私にお伝えしたいこととは?」
「現在行方をくらませているタマムシシティジムリーダーのエリカさんについてのことです」
ナツメはその名前を聞いて食いつくかのように表情を変えた。
「エ、エリカについて何か分かったのですか?」
「ナツメさん。確か貴女……超能力者ですよね? 空前の力を持つ貴女でも居所は掴めないのですか?」
ポラリスは少々煽ったかのような口調で言う。
「分かってたらとっくの昔に救い出してるわよ!」
彼女は苛立ってるかのような口ぶりで言う。
「そう……、そうですよね。あなたならきっとそうするはずだ……」
彼は先程までの落ち着いた口調から変化している。
「何よその意味ありげな態度……」
「貴女の言うとおり、知っていますよ私……いや、我々は」
「我々……?」

　不思議に思った彼女は超能力を使ってポラリスを念視する。数秒後、彼女は驚愕の表情を見せた。
「どうやら、おわかりになったようですね。流石は空前の力を持つエスパー少女だ」
「ロ……ロケット団!?　どうして、こんな所に！」
「そんなことは今はいいでしょう。正体が分かったところで本題に入ります。ナツメさん、我々と取引をしませんか？」
「取引ですって？」
　ナツメは怪訝な表情を見せる。
「そう。貴女が私の要求に従うのならば我々は決して今預かっているエリカさんを殺しはしませんし、丁重に扱います。しかし、もし？まないのであれば即座に惨たらしい方法で苦しめた末に殺害し、野ざらしにします」
「ふ……ふざけないで！　誰がそんな滅茶苦茶な要求を……あんた、このことを査察部の部長にでも伝えたらどうなるか分かっているんでしょうね？」
「浅はかですねぇ……。我々がそんな根回しの甘いことをするとでもお思いで？」
「嘘……」
　彼女はまたも超能力を用いて委員会全体の情報について集めた。
「腐ってるわ……。まさかポケモンリーグの一機関であるここがこんなに腐敗してたな

んて……」

彼女は大きく落胆した表情で俯いた。

「そう。査察部は全て我々ロケット団の手中です。さあ、貴女どうしますか?」

「条件って……何よ」

渋々ナツメは話を聞く気になったようである。

「簡単な話です。貴女のもつそのお力を我々のために使っていただければいい。リーグの情報をこちらに流して欲しいのですよ」

「要するにスパイをしろってことね……」

「そういうことです」

「……」

彼女は黙して考えている。

「言っておきますが、貴女の力で彼女を救い出すなんてことは無駄ですよ。我々はある科学者によって貴女の力のみならず超能力の持つ特殊能力を完全に封じ込める装置を至る所に配置しているのです。私もエリカさんをさらったところまでは同行していますが、どこに居るかは知りませんしね」

「くっ……!」

抜け目のない対応にナツメは唇を噛むしかなかった。

「従わないというのなら我々は先ほども言ったとおりエリカさんに対し非道かつ残酷な処置をせねばなりません。聞くと貴女とエリカさんは無二の親友であるとのこと。貴女のその正義感で大事なお友だちをなく」

「やめてっ！　……、分かったわよ。エリカを失ったら私、とても……耐えられないもの」

彼女は涙をにじませながら承諾した。

「賢明な判断です。話は以上。私は査察部です。私の一声で場合によってはいつでも貴女をジムリーダーの座から引きずり下ろし、大事なお友だちをも失わせることが出来ることをゆめゆめ、忘れないよう……」

ポラリス、ことランスはそう言い残した後自らのポケギアの番号を記した紙を置いて去って行く。

残されたナツメは自らの無力さにむせび泣くしかなかった。

―4月17日　午後3時30分　ソウリュウシティ　ポケモンジム―

エリカの拉致事件から2カ月近くが経過しようとしていた。

レッドはナギの激励を受けてから見違えるように修行に打ち込み、ポケモンたちを徹底的に鍛え上げた。

そして、満を持してシャガに挑み、リザードン、ピカチュウ、カビゴンを失うも残り三体。対するシャガは残り二体にまで追いつめられた。因みにシャガからの要請でダブルバトルで戦っている。

しかし、シャガは焦るどころかむしろ笑っていた。

「戻れ、ボーマンダ」

ラプラスの冷凍ビームの直撃を受け倒れたボーマンダをシャガは戻す。これでシャガの持つ手持ちは残り二体である。

「フッ……。私もここまで待っていた甲斐があった物よ。私をここまでやりこむとはのぅ……」

しかし、シャガの表情には余裕が伺える。

「いえいえ、貴方こそ。2カ月もの間必死で鍛えたポケモンをここまで破るなんて流石はヤナギさんと並ぶトレーナーですよ」

シャガは数秒ほど間を開けた後

「レッドよ。随分と余裕だな」

「はい？」

「まぁ良い。そろそろ私も奥義を見せる時が来たかの……。行け、オノノクス！　サザ

ンドラ！」
　シャガが繰り出したポケモンはイッシュ地方でも指折りのドラゴンポケモンである。
そしてシャガはすぐに
「刮目して見よ、これがドラゴン使いの最大にして最強の奥義、双竜の契りだ！」
　指示が下ると、二匹の龍は地鳴らさんがばかりの咆哮を上げ、サザンドラからは青色の、オノノクスからは赤色の波導が発生する。そして、二つの波動は磁石が引き合うかのように互いに近づき、やがて衝突し結合する。そして波動と共に一つの結界のような壁が形成されると、その壁ごと波動が消え失せた。
　双龍の契りとはシャガの生み出した奥義であり、二匹の能力を著しく上げる技である。
「オノノクス！　カメックスに逆鱗！　サザンドラ！　ラプラスに龍の波導！」
　レッドはこの技の発動には少しだけ動揺したが、結界があるということは下手に動かない方が最善であると考え
「カメックス！　まもる！　ラプラス！　眠れ！」
と、自らの身を固めることに専念した。
　カメックスはオノノクスのジュエル込みの攻撃を弾き致命傷を免れたが、ラプラスは龍の波導の直撃を受ける。

体力は8割ほど残っていたのでまさか死にはしないだろうと思っていたが、予想は外れ一撃で倒れてしまった。

「う……嘘だろ……」

「言ったであろう。これがドラゴン使いの最強の奥義であるとな」

レッドは帽子を目深に被りなおしてラプラスを戻した。

そしてレッドは最後のモンスターボールを取り出す。

「さすが、やはりシャガさんは他のリーダーよりずっと強い……。だけど、こっちもこのままやられるわけにはいかない！　いけっ、シャンデラ！」

レッドはシャンデラを繰り出した。2か月の修行でヒトモシからシャンデラにまで見事に育て上げ、レベル80代にまでもってきたのだ。

「シャンデラ！　オノノクスに鬼火！」

シャンデラは火の玉をいくつか放ち、見事に命中させる。オノノクスはやけど状態になり逆鱗の威力が若干下がる事になった。

「シャンデラか……。サザンドラ、シャンデラに悪の波導！」

サザンドラは禍々しい波導を放ち、シャンデラに直撃させる。かなりの痛手であったが、気合の襷を持たせていた為ギリギリのところで耐えきる。

「オノノクス！　カメックスに逆鱗」

シャガはとにかく弱点となり得るカメックスを潰したいのか執拗に攻撃する。カメックスは甲羅の中に篭って猛攻を耐え続けた。

レッドはいまだとばかりに指示を下す。

「カメックス！　吹雪だ！」

カメックスは一転して攻勢に出る。

オノノクスの攻撃の隙をついて砲塔を出現させ、そこから大量の吹雪をお見舞いする。

吹雪は二体同時に攻撃出来る為サザンドラにも大きなダメージが降りかかる。が、やはり双龍の契りの効果か一撃では倒れなかった。オノノクスの体力は半分近く、サザンドラも同様といったところである。

「シャンデラ！　オノノクスに祟り目だっ！」

シャンデラはオノノクスに対し畳み掛けるように攻撃をかける。運よく急所に当たり、吹雪の影響もあってオノノクスは遂に倒れた。

「よしっ！　これで残り一体……」

「甘いっ！　サザンドラ！」

シャンデラはサザンドラに隙を突かれ、先ほどと同様に悪の波導の直撃を受ける。当然ながら耐えきれるはずがなくシャンデラは地に落ちた。

「よくやった……。シャンデラ、戻れ」
レッドはシャンデラを戻す。これで一対一。カメックスとサザンドラの一本勝負である。
体力はほぼ同じ。しかし、両体の攻撃力から考えてこれが最後の勝負となることは明白だった。
「レッドよ……。これで終いにしよう。サザンドラ！　カメックスに流星群だ！」
「こっちこそ！　カメックス！　もう一回吹雪だ！」
サザンドラは大量の星を、カメックスは吹雪を降らせ、同時にそれらは衝突した。
一分ほど衝突は続き、シャガもレッドも動静を固唾を飲みながら見守っている。
そして、星は冷え固まって地に落ち、吹雪はそのままサザンドラに襲い掛かる。サザンドラは咆哮をあげながら倒れた。
「やった……。勝った！　勝ったぞ！　やったぜカメックス！」
レッドはカメックスと抱き合いながら勝利を噛みしめた。
シャガはサザンドラを戻す。
「フッ……。私も耄碌したかの……。まさかこんな青年一人にやられるとはな。よくやったレッドよ、その努力に冠し、これを授ける」
シャガはレッドにレジェンドバッジを差し出す。

「はい。ありがとうございます」
　レッドはエリカの分もとばかりに深々と頭を下げた後、バッジを受け取った。
「確か……。バッジはあと一つだったかの」
「はい」
「そうか。ここより北の街にシズイがリーダーを務めるセイガイハジムがある。そこに行って最後のバッジを受け取ると良い」
「ええ。分かってますとも！　必ずそっちでも勝ってバッジをコンプリートして、リーグで、ＰＷＴで勝って……」
「うむ。志を高く持つことは良い事だ。ぴぃーだぶりゅーでぃーでの活躍も期待しとるぞ」
　レッドは途中で遮られたが、シャガの激励に対してスッキリとした顔で応え、ソウリュウジムを後にした。
　こうしてシャガを倒し、残りのバッジは一つとなったレッド。
　しかしレッドにはそれ以上にエリカを救い出すという思いが強く宿っていたのであった。最早彼は完全に生まれ変わり、エリカの真の伴侶として思いを胸に新たに歩んでいるのである――

―番外編２―２　歴史の分かれ目　終―

番外編2―3―1　零度の仮面

―4月28日　午後2時　ポケモンリーグ―

24日にセイガイハシティのシズイを破り、すべてのバッジを揃えたレッドは前日の夜遅くにイッシュのポケモンリーグに到着した。エリカを一日でも早く救う為にチャンピオンロードを三日三晩不眠不休で進み続けていたのだ。

その為長く寝てしまい、この時間になっていた。

そしてこの瞬間、レッドはライブキャスターのけたたましい電子音に起こされる。

「たく誰だよこんな疲れてる時に……」

レッドは気怠そうに寝癖を掻きながら腕のライブキャスターを見ると同時に発信者を見て目を丸くした。なんと、エリカと表示されているではないか。

考えるよりも先に通話ボタンを押していた。

「エリカ!!」

画面に表示された人物はまさしく自らがずっと恋い焦がれ、旅を共にしてきた伴侶であった。

どんな言葉よりも先に彼女の名前が口をついて出た。

「貴方……！」

彼女はレッドの顔を見て歓喜に満ちた表情であったが、すぐに表情を引き締めて尋ねる。

「今どこにいらっしゃるのですか!?」

突然の質問にレッドは寝起きで頭が回っていないせいもあり

「え、お、俺？」

と答えてしまう。

「当たり前ですっ！」

彼女の今まで聞いたことのないほど切羽詰まっている声に面食らったレッドは急かされたように答える。

「ポ、ポケモンリーグで、今から挑戦しようと思ってるけど……」

「ポケモンリーグですか！　流石は貴方ですわ。きっと貴方ならそこまでたどり着けるとずっと信じておりましたもの！」

彼女は感激した様子で話している。心の底から言っている事は見て取れた。

「エリカ……」

レッドは久々に聞く彼女の声に涙腺が刺激された。

「私がいなくてもここまで勝ち上がれたのですもの。きっとリーグも制覇できますわ！

頑張ってくださいま」
そうまで言ったところで弾かれるような音がした後、通信が切れてしまった。
「エリカ!?　おいエリカ!!」
レッドは何度も掛け直すが無駄に終わってしまう。
激情にかられたが、数分間気を落ち着かせた。そして彼は彼女の言葉を胸にポケモンリーグへと向かった―

―3月6日　午後10時　ヒウンシティ　某ビル　8階　幹部室―
ラムダの提案に乗ったエリカは翌日もラムダに呼び出された。
下っ端二人の監視のもとエリカは席に着いた。
「よし来たな」
「あの……どうしてこの時間帯なのですか？　私この時間は明日の準備など色々やることがあるのですが……」
「しょうがないだろ。オーキドの爺さんが晩飯やら風呂やらでいなくなるのはこの時間しかねえんだ。長時間いなくても不自然に思われないのは監視が居ないここしかない」
「さ……左様でございますか。しかしどうしてそんなことを？」

「あいつの身の回りを世話する下っ端から給料三ヶ月分と引き換えに聞き出したんだ」
エリカが納得したところでラムダは本題に入った。
「さて、これからあんたをここから出す作戦を話す。当たり前だがたとえマツバだろうと俺以外に話すんじゃねえぞ」
その後、ラムダは作戦について話した。
まず、一ヶ月にわたって金や物、特権などを用いてあらゆる手段で団員の懐柔を行い、他の幹部やその取り巻きや支持者を除く全員を味方につける。既に後ろの下っ端二人をはじめとするラムダと同じ志を持つ団員がビルにいる人間全員に関してリサーチを済ませている。あとは上手く説得してこちら側に引き込むだけだという。
その後、最高幹部であり計画最大の障害となるであろうアポロがビルに不在の時を狙って計画を実行する。前日か当日朝までにエリカの持っていたポケモンは全て回収する予定。エリカのポケモンまで戻すのは確実に逃げられるようにするため。
まず、火付けとして団員数名がビルに乱入し騒ぎを起こす。その騒ぎで反ラムダ派が対処に追われている隙を突いてエリカを地下室から救出し、表玄関ではなく裏口から逃がす。エリカはマツバも救うことを要求したが捕まるまでの経緯の他に長期間の拘束で身体がいうことをきかないと考えられる為作戦に支障が出ることを理由に却下される。

「これで作戦はすべてだ。時間はかかるがアポロさえ上手く欺ければ必ずこれは上手くいく。俺たちが出来るのはあんたをこのビルから出すところまで。逃げきれるかどうかはお嬢さん次第だ」

「は……はい」

エリカは両手を握りしめて答える。

「まぁ、いくら改造ポケモンとはいえそこらの下っ端じゃあんたのポケモンにはまず勝てない。要らん心配かもな……。だが、用心はしておけよ」

「分かりました。あの、一つお尋ねしたいのですが」

「なんだ」

「本当にあのアポロと言う人……彼を欺く事など出来るのですか？」

彼女はエンジュ騒乱の実質的な作戦指導者であり、恐らくロケット団の中で一番頭が切れるであろう彼を危険視している。

「今、あいつはプラズマ団の幹部としての活動でかなり時間を取られている。なんでもゲーチスの野郎が本気で動き出したとかで……。だから奴の目がこちらに向いてない今をおいて計画を実行する時などない」

それを聞いて彼女は本当に大丈夫なのかとでも言いたげな表情を浮かべる。アポロ、引いてはオーキドの気まぐれ次第でこの作戦は吹き飛んでしまうのである。

「俺にも不安なのは分かる。だが、最早俺には……俺たちにはこの方法しか残ってねえんだ。分かってくれ」
　ラムダの必死さがうかがえる物言いでエリカは黙した。彼女にも自由を得るにはこれしかないのだ。
　その後エリカとラムダは更に作戦について話し合い、地下室へと戻る。
　戻りがけに彼女は思い出したかのように尋ねた。
「あの、便箋を一綴りと封筒を一ついただけないでしょうか？」
「便箋？　なんでそんなものがいるんだ」
　ラムダが訝しげに尋ねる。
「ええ、その調度品について細かく指定したいものがありまして……」
「そんな事アテナに直接言えばいいだろ。俺は知らねえ」
「いえ。少々特殊なものなので一字一句正確に伝えないと全く違う物になってしまうんです」
　エリカが言うならそうなのだろうとでも思ったのかラムダは暫し黙した後に
「分かった。ちょっと待ってろ」
　そう言うとラムダは机の引き出しを数分程探った後、使いかけの便箋と無地の封筒を手に持った。

「ほら、これでいいだろ」
「ありがとうございます！　それでは」
そう言って恭しく頭を下げると、彼女は今度こそ下っ端たちに連れられて出て行く。
―4月19日　午後10時　同所―
それから一か月半後、エリカは計画の最終調整だといわれて呼び出された。
「決行日は4月28日。この日はプラズマ団に改造ポケモンを譲り渡す日だからアポロは居ないしその他ポケモンたちも半分以上がプラズマフリゲートに行っている。この日を措いて実行に適した日は無い」
「考えられる限りで一番手薄な時ということですわね」
「そういう事だ。アテナもこの日はこのアジトへの来客への対応で忙しいはず。とにもかくにも絶好の日だ」
ラムダは笑いながら言う。
「しかし、なんだかよく出来すぎではないですか？　何かの罠かもしれませんよ？」
「お嬢ちゃん。罠かもしれないだろうとなんだろうと躊躇してる余裕はねえ。作戦はもう最終段階にまで進んでるんだ。今ここでやめるわけにはいかない」
ラムダの切羽詰まった声を前にして彼女は何も言い返す事が出来なかった。
賽は投げられたのだ。最早これを渡るしかない。

―４月２８日　午前８時　ビル一階―

その日の朝は轟音と共にはじまった。

「どけどけぇ！　俺たちはサカキ様に言上つかまつりたいことがあってここに来た！　通さない奴は仲間だからって容赦しねえぞ！」

ドアを蹴破った一人の男の声によって反乱は開始された。

後に続くように数十名の団員がポケモンを次々と出して一階を突破しようと試みるが、一階を守る団員たちが何とか押しとどめようと応戦する。

あっという間に一階は血で血を洗う阿鼻叫喚の場となった。指揮をとっているのは当然出入口前の道路に陣取っているラムダである。

―同日　午前８時３０分　同所　地下室―

その頃マツバとエリカは漸く朝食を済ませた直後であった。

「なんだか上が騒がしいね」

「ええ。左様ですわね」

エリカはラムダとの約束通りマツバには一切の事情を教えてはいない。

そして、地下室の扉が開かれた。

「エリカさん！　今裏口には誰も居ません！　逃げるなら今ですよ！」

団員は大きな声でそう言った。

「逃げる……？　どういうことだいエリカさん……」
「マツバさん……。申し訳ありませんわ。一足先に行かせて頂くことを許してくださいまし」
「そ、そんな……」
　マツバはまた孤独になることを恐れているのか絶望に満ちた声で言う。
「しかし。安心してください。このままには絶対にしませんわ。必ず、貴方をここから救い出してみせますわ」
「エリカさん！　はやく！」
　マツバは一度頷いた後に
「分かった。分かったから、行きなよ」
　と俯きながら言う。
「エリカさん！」
　団員の三度目の呼び掛けに彼女は漸く応じた。彼女は深々と礼をして地下室を団員と共に後にする。

　それから彼女は団員たちの監視のもとトイレの中で動きやすい服装に着替えた後、ポ

ケモンと攫われたときの荷物を受け取って地上へ向かった。
―午前９時１５分　ビル裏口―
裏口の扉から出たところで下っ端は告げた。
「我々が付き添えるのはここまでです。後は自力で抜け出してください」
「本当にありがとうございます」
彼女は深く見送りの二人の団員に頭を下げた。
中では相変わらずの戦闘が続いている。
「いえ……。ではどうか、ご無事で」
そう言うと団員は早急にドアを閉めた。応援に戻ったのであろう。
彼女もどうにか街に戻ろうとした。ここがヒウンシティの郊外であることはラムダの話や幹部室の窓から見えた景色で分かっていた。
その為今は団員の目につく道路ではなく、裏口に広がる森を抜けようと考える。
まっすぐに３００メートルほど走った後彼女はモンスターボールを手に取った。
およそ2カ月ぶりに触るそれに少しだけ高揚感を覚えつつ繰り出した。
「おいでなさい！　ピジョット！」
レッドからタマムシへ戻る際にカントーへ戻る足として借りたポケモンである。
タウンマップで見ても要領を得ない場所だった為、とにかく街に出る方角はどこかを

示すように頼んだ。

一分ほどで結果は分かり、彼女は目立たないようにピジョットを戻してその方角通りにとにかく走り続けた。

ピジョットに運んで貰っても良かったのだろうが、ロケット団に捕捉される可能性があるため完全に安全な場所に出るまでエリカは走ることにしたのだ。

しかし、ピジョットを戻して十分程した後その男はやってきた。

どこから先回りしたのか五、六人の下っ端をしたがえてエリカの前に立ち塞がった。

「おや、エリカさん。そんなに急いでどこにおいでですか?」

恐ろしいほど紳士的な口調で語りかけてくる男。それはまさにアポロであった。

「ア……アポロ……!」

「そんなに怖い顔をしていては、貴女の美しいお顔が台無しですよ?」

アポロは笑いながらそう言ってみせる。

「どうして、貴方が……」

「分かりませんか? 全ては撒き餌ですよ。私がフリゲートに行くことから」

「して……やられたわけですわね」

「部下の叛意くらい読み取れなければとても最高幹部なんてやってられませんよ。さて、戻っていただきましょうか?」

アポロは険しい顔つきになってそう勧告した。
「それは無理な相談ですわね」
「私も手荒な真似はしたくはないのですかね」
「私は仮にもジムリーダーですわ」
「ほう」
彼女はモンスターボールをいくつか手に取る。
「ポケモンリーグに籍を置くものとして……不当な迫害に黙って屈するわけにはいきませんでしてよ。私をさらいたくば全て私の持つポケモンを倒してからになさいまし」
彼女は静かに怒りをたたえた声で言う。そして同時に数カ月ぶりにピジョットを除く全てのポケモンを繰り出した。
「酔狂にもほどがありますよ。我々は1年近く前に貴方方リーグと互角以上に戦って見せたのです。貴女もその場にいたでしょう」
「ええ。その通りですわね。しかし、お忘れですか？　私はあのレッドさんと共に地方を渡り歩いたのですよ?」
アポロは表情を変えずにエリカの言葉を聞く。
「私はレッドさんと……夫と、ポケモンたちと数々の死線を共にし潜り抜けてきたのです。貴方がた如きにひけは取りませんわ！」

「そこまで言うなら試してみましょうか……。行け！　ヘルガー！　クロバット！」

こうして、団員たちとエリカの間で戦いが始まった。

しかし、草使いである彼女からすれば毒や飛行などが主体となる敵は不利である。その上、倒しても倒しても雲霞の如く押し寄せる援軍を全て返り討ちにすることなど不可能であった。

―午後2時10分　同所―

戦闘開始から4時間。倒したポケモンの数は2000を数えたがエリカの手持ちも限界を迎えつつあった。その為形勢不利と見て脱出を諦めた彼女はレッドと連絡を取るが、ゴルバットの放ったエアカッターがライブキャスターの腕輪を切断。そして落下の衝撃で途絶えた。それだけ敵の最前線はエリカに迫っていたのだ。

「最早……。刀折れ、矢尽きるといったところでしょうか」

彼女はふとそんな事を呟きながら、最後のモンスターボールを手に取った。

「おいでなさい。ピジョット」

エリカは敵に気づかれないように小さな声で出した。

「ピジョット。貴方には大切な使命があります」

と言いながら懐から一通の封筒を取り出す。例の手紙である。

「これを、貴女の主であるレッドさんの所にまで届けてもらいたいのです。夫はポケモ

ンリーグにいます」
と言ってピジョットに横長の封筒を渡す。そして、タウンマップをカバンから出してリーグの場所を教え、落とさないように首に裁縫用の糸を丁寧にくくりつけた。
「ここで……終わって堪るものですか。ピジョット、必ず夫にこれを伝えるのですよ」
ピジョットは深く頷いてすぐには飛び立たず森の中に入っていった。すぐに飛ぶと捕捉される可能性があるからである。
それから間もなくエリカのポケモンたちは壊滅。エリカはアジトに引き戻される事になったがマツバとは分厚い仕切りを隔てられ、閉じ込められた。
エリカは敗れたが総計でおよそ２５００体の改造ポケモンを倒し、ロケット団に痛手を負わすことには成功した。
―午後７時３０分　ポケモンリーグ　入口―
エリカからの電話を受けた後レッドはそのままポケモンリーグへ赴き、見事にチャンピオンのアイリスまで撃破した。
殿堂入りの儀式を終えて彼はポケモンリーグの入口に居た。
そのままポケモンセンターに向かおうとしたが遠くの空から見覚えのある影を見つけた。それを見ていると影は大きくなり、やがてその姿を現した。
「ピジョット……？」

レッドは思わず歩み寄った。
やがてピジョットは地に舞い降りる。かなり疲れているようでフラフラとしていた。
地面につくと今にも倒れそうな様子である。
「お、おい！　大丈夫か!?　何があったんだ」
「す、すみません。急報な為途中で休まず来たので……」
ピジョットは謝しながら頭を上げて首にかかっている封筒を見せた。
「これは?」
「姐さんからのお手紙です」
そう聞いてレッドは急いで手紙を取った。
「そうか……。分かった。ありがとう。ゆっくり休んでくれ」
そう言ってレッドはピジョットをモンスターボールに戻した。
―午後7時40分　ポケモンセンター―
レッドは急いでポケモンセンターに戻り、封書を開けた。
中には一枚だけ三つ折りになった便箋があり、エリカ直筆のものと思われる端正な文字で文書が綴られていた。
レッドが読むことをきちんと想定しているのか平易な文体で書かれていた。手紙はやや湿ったような感触があり、湿度の高い場所で書いていたことが想像できる。

概要は自分がオーキドの陰謀でロケット団にとらわれている事。アジトのだいたいの位置、マツバがこのアジトで長期間拘束されていて危険な状態にあること、彼女が知っている限りでのロケット団及びプラズマ団の情報が記述されている。

レッドは手紙を読んで雷に打たれたような感覚を覚えた。

エリカは文末にこれをワタルやナツキをはじめとする関係各者に即時伝えるよう添えていた為それに従ってまずワタルに電話をかけようとしたがタイミングよく当人から電話が来た。

「やあレッド君！　リーグ制覇おめでとう」

ワタルにはもうイッシュリーグを制覇した知らせが届いたようで、本当に嬉しそうにレッドへ祝福の言葉を述べた。因みにカントーとの時差は１３時間の為向こうは翌日の午前９時である。

「はい。どうにかここまでたどりつきました」

レッドはとりあえず用事は置いておき、その賛辞を受け入れた。

「これで君は要件を果たした。ただゴールド君がまだバッジをとってる最中だからそれまではしばらく待機しててくれ。修行に勤しむもよし、行ってない街に行くもよし君の好きにするといいよ」

「ゴールドは今どこなんですか」

「今は確かライモンあたりとか言ってたかな。バッジは取ったそうだから次はホドモエだと思うよ」
「そうですか」
「とにかく本当におめでとう。エリカ君もきっと喜ぶと思うよ」
レッドはエリカという単語が出てきた為用件を切り出した。
「あの……そのエリカの件でワタルさんに報告しなきゃならないことがあるんです」
「え？　どうかしたのかい？」
ワタルは先程までの明るい声から転じて真剣な声色になった。
「その……エリカ当人から手紙が来ました」
「な、なんだって!?　それは本当か？」
余程驚いたのか彼の声は一瞬裏返っている。
「はい。俺自身も信じられないくらいですが……。でも、本当です。エリカがカントーへ戻る時に俺が渡したピジョットが運んでくれた手紙です。字も彼女が書いたものに間違いないと思います」
「そうか……。どんなことが書いてあったんだい？」
ワタルは興味津々な様子で尋ねた。
レッドは彼女の手紙を読み上げてそれを伝える。

「やっぱり……ロケット団の仕業か」
　ワタルは電話越しからでも分かるくらいに怒りをあらわにしているようだ。
「それにしてもどうしてエリカ君はロケット団に軟禁されてるのにも関わらず手紙を送れたのだろうか……」
「手紙にはそれについては触れられていませんでした。恐らくそれだけのスペースがなかったんでしょう。そんな事よりもワタルさん！　俺、今日にでもアジトに乗り込もうと思います！　場所が少しでも分かった以上放っておく訳には……」
「いや、待て！　君一人だけでは危険すぎる。いくら君が強いとはいっても彼らの力は計り知れないんだぞ」
「で……でも！」
「君の気持ちは痛いほどよく分かる！　けれど、実力あるジムリーダー二人に加え君まで失ったら僕らリーグからしても非常に困る。いいから、今は大人しくしていてくれ。こちらにも考えがあるんだ」
「考え……？」
「そう。だからとにかく待ってくれ」
　その後ワタルは手紙をファックスでリーグまで送るよう要請し、電話を切った。
　レッドはその後夕食を食べた後、眠りについた。

―4月29日　午後8時　セキエイ高原　ポケモンリーグ　1階広場―

ワタルは手紙を受け取った直後、内容を伏せた上で記者会見を開くことを通知しリーグの1階を指定した。

マスコミの間では辞意の表明や不正発覚かなど憶測が広がっていたがとにかく指定時刻までにカントー中の記者がリーグにごった返した。そして、緊急記者会見と題して多くの放送局が番組を変更してそれを報ずることにしたのだ。

そして、理事長のワタルが直々に伝えたその内容は予想を超える衝撃を与えた。

「本年2月に行方不明となった我がカントー地方のジムリーダーのエリカ君についてですが本日彼女より手紙が届きました。これによると、彼女はあのオーキド博士の命によってロケット団に囚われておりヒウンシティ郊外のビルに前年処刑されたはずのマツバ君と共に閉じ込められているようです」

この瞬間、記者会見場は僅かな静寂の後に騒然となった。

ワタルは手紙の全文を公開。そして、このような行為に及んだロケット団とプラズマ団に対し高らかに宣戦布告を行い対決する姿勢を明らかにした。

「最後に、我々はエリカ君の助けに全身全霊を以て応える所存です。ポケモンリーグは断じてあなた方を許しません。我々は総力を以て同胞のエリカ君とマツバ君を救うまで戦い、そして貴方がたの万死に値する非道に対し我々が必ず容赦なき鉄槌を下しま

す」

　ワタルは二十分程の報告を終えた後テレビカメラの向こうに語りかけるようにそう締めくくった。その後の記者たちの質疑応答は三時間に及びワタルは一つ一つの質問に真摯に答えて見せる。その甲斐あってかリーグには対応の遅さやエンジュ騒乱における不徹底さを責めるよりもワタルの誠実さや正義感、そしてリーグに対する称賛が世論の多勢をしめたのである。翌日早朝にワタルは総動員準備令を全国に発した。すぐに本令を出さなかったのは敵方に決行日時を悟らせない為の副理事長シロナによる献策であった。

　この会見の狙いは強行的な権限である総動員令を1年も経たずに外国に、しかもエンジュ騒乱のように街への実害が発生してないのにも関わらず発令することによる世論の批判をかわすためだという。

―4月29日　午前9時12分　ヒウンシティ　某ビル　9階　会議室―

　反乱から一夜が経過した。

　あれからはエリカを捕まえた直後にアポロが本格的に介入し、夕方までに鎮圧される。そしてリーグ内部に潜入しているランスが戻るのを待ったため幹部を集めての会議は翌朝になった。

　議題は勿論、反乱の首謀及びエリカの逃亡を幇助したラムダへの査問及び処分の決定

と今後のエリカ及びマツバに対する処遇である。
　出席者はボスのサカキを初めとするアポロ、アテナ、ランス、その他の幹部クラスと総勢２０名である。この会議はオーキドには極秘で行われている。
　会議は8時から始まり、ラムダへの査問が終わりいよいよ処分について決定しようとしていた。
「今回については反乱とはいえ、利己心からではなくサカキ様を思って起こされたいわば義憤にかられた結果起こされたものです。反乱については不問に処し、逃亡幇助についてのみ処分の対象とし、規則に則り3年間の雑役及び幹部特権の剥奪が妥当ではないかと考えます」
　ランスが淡々とした口調で発言するが、アポロが目をいからせて猛然と反論する。
「幹部の分際でサカキ様の御心を変えようなど不届き千万。ここは二度とこんな馬鹿げた真似を起こさないよう全団員への見せしめとして処刑が妥当です」
「アポロさん。見せしめとは言いますがあまりに苛烈な処分を行えば団員たちに恐怖と緊張を過剰に植え付け、円滑な運営に支障を来し脱会者を出す恐れがあります」
　発言していたのは主に厳罰を主張するアポロと均衡の観点からそれに真っ向から反対するランスである。出席者の趨勢としてはややランスの方が優勢であり、議論も煮詰まって来た為あとはサカキの裁断を仰ぐところまできていた。

しかし、突然議場のドアが開かれた。
「し、失礼します！　一大事です！」
「何事だ騒々しい」
出席した幹部の一人が咎める口調で言った。
「えっとその……とにかくテレビを見てください！」
「どういうことです」
アポロが続いて尋ねる。
「大変な事が起こっているんです。早く見てください」
団員に急かされるような格好で幹部たちはぞろぞろと大きなテレビのある同じ階の休憩室まで移動した。
―午前９時１８分　同所　休憩室―
テレビではＣＮＮが同時通訳で会見の模様を報じていた。
彼らは会見の内容を見て愕然とした。エリカによって暴露されていたのだ。
彼女がそんな手紙を書いていたという事自体誰も把握していない事だった。アポロですらも動揺を隠せない様子である。
幹部や団員たちは食い入るように画面を見ていた。サカキは泰然自若とした様子で見ている。

「あのアマ……！　やってくれたな」
「くそ……！　くそっ！　なんで気づけなかったんだ」
団員たちは口ぐちにそう漏らした。
ワタルが報告を終え、質疑応答に入った瞬間にサカキがよく響く声で言った。
「戻るぞ」
そして幹部たちは質疑応答について報告書を作るよう団員に命令した後会議室へ戻った。
―午前9時30分　同所　会議室―
「とにかく、ここまで情報が漏洩した以上引責の意味合いで、ラムダへの処罰はより重くせざるを得ないと考えます」
アポロは戻って早々にそう言った。動揺はまだ残っているようでやや声が上ずっていた。
「処刑よりも重い刑とはどういうことでしょうか？」
ランスが尋ねる。
「あたくしも気になるわ。説明して」
アテナも興味を示したようである。
「処刑は処刑ですが、団規によればその方法は絞首刑と斬首刑に限られています。しか

し、ここまでの失態を犯した以上これでは足りません」
「ですから、どういう事です？」
「凌遅刑。すなわち、肉を削ぎ落しながら苦しませて処刑すべきだと考えます。これを団員たちの前で公開処刑を行い、全団員に示しをつけるべきだと」
「聞くだけでも気分が悪くなるわね……。後悔したわ」
アテナがそっぽを向きながら言う。が、ランスは何の気無しの表情で返す。
「なるほど……。それは確かに示威行為としては最上級かもしれません。とはいえ、処刑にそこまでの時間をかける必要はないと思いますが」
議論はすっかり処刑へと傾いた。午前中は処刑方法について議論が行われ、午前11時57分、アポロがサカキに対し裁断を求めた。
「ラムダのしでかしてくれた事は我が団に対する重大な背信行為だ。心苦しいが、団員たちへの見せしめの為にも処刑については私も異は唱えん」
サカキはそう言った後に給された麦茶をあおった。
「だが、奴は私がこの座に就く前から忠実に仕えてくれた。今回の事も私心からではなく私を思ってやった事だ。それだけに……、惨い方法で殺すことは私の望むところではない。団規に則り絞首刑で楽に死なせてやれ」
「慈悲深き裁断にございます……」

惨殺を主張してたアポロも裁断が下った事で矛を収めた様子である。幹部たちはサカキに向かって礼をした。

――

ラムダの処刑が決定した後、反乱に加わった団員たちは概ね寛容な処分に済まされた。

エリカとマツバの処遇というのは表向きの理由であり、オーキドとの関係についての再検討が本題であった。

非常にデリケートな問題の為アポロ、ランス、アテナ以外の幹部は全員追い出した。

そして、予定を変更して会議室ではなく昼食の後に10階のサカキの部屋で行う事とした。

―午後1時20分　同所10階　サカキ居室―

会議は円卓を囲むように行われる。

四人の前にはワタルの会見の報告書が置かれ、それを踏まえた上での会議となった。

「反乱を起こしたことは断じて許される行為ではありません。しかし、この問題の本質はオーキドに対する反感が我々の予想以上に団員たちに広まっているという事です」

アポロは冷静な口調でそう言った。オーキドはただでさえ他の団員に対しては強権的な態度で見下しており誰一人として良い印象は持たれていなかった。しかし逆らえ

ばどんな目に遭うか分からないという不気味さや威迫、サカキの共闘相手という事情。これらが重なり合って誰も表立っては反発できなかったのだ。

「我々はエンジュでの集団催眠事件以後着実に力をつけてきました。改造ポケモンの数も彼に頼らずとも十分な数にまで保持していると考えます。サカキ様。最早オーキドは用済みの存在ではありませんか？」

続いてランスがそう提言した。

しかし、アテナがそこに慎重論を差し挟む。

「けれど、オーキドは確か改造ポケモンの半分を支配下に置いているのでしょう？　しかもより強いポケモンをまるで私兵の如く持っているとかいう噂も……」

「ええ。そういう話がある事も私は承知しています」

アポロは机に組んだ手を置き、頷いて答えた。

「しかし、用済みになった今、オーキドにはそれ以上の利用価値は無くそれどころか害を為す存在であることは明白。これ以上だらだらと関係を続けたところで何の意味もありません。ここは潔く切り捨て、五年前に立ちかえるべきではないでしょうか」

「ラムダも言ってたわね……。強いロケット団に、強いサカキ様に戻ってほしいって……」

それからも夜まで議論は続けられ、午後6時、サカキに裁断を迫った。

「私は前々からオーキド殿との関係を考え直すべきだとは思っていた。中々踏ん切りがつかずに居たが、今回の事でハッキリした。我々とオーキド殿との関係を白日の下に晒された以上、最早継続する必要はなかろう。ラムダの死を無駄にしない為にもここはオーキド殿との関係を絶ち我々はカントーに戻り5年前までのような真っ当な悪の組織に戻るとしよう」

サカキの決断に、幹部三人は唾を呑んだ。

「御決断……なさるのですね」

「うむ。だがアテナの言ったこともある為、今すぐという訳にはいかん。我々も戦力を更に増強した後私がオーキド殿に膝詰めで談判し、刃を交えるというなら戦ってでも関係を絶ち切るつもりだ」

こうしてこの瞬間、ロケット団はオーキドとの別離を決定したのである。

しかし即座に行う訳ではない為とりあえずはエリカとマツバの生命はひとまずは守られた。

―4月30日　午後7時　セキエイ高原　ポケモンリーグ　理事長室―

会見から一夜が経過した。

ワタルは副理事長のシロナを呼び寄せ、秘密裡にロケット団及びプラズマ団壊滅計画についてまとめていた。

ワタルとシロナは机を挟んで対談している。
「ではつまり、総動員令は発令せずにイッシュへ向かうという事ですか？」
シロナは面食らった様子でワタルに尋ねた。
「そうだ。会見ではああ言ったが、総動員令を敷くとは一言も明言してはいない」
「し、しかしマスコミは既に総動員準備令が出たという事で本令発令が前提であるかのように動いていますわ。私は確かに敵方に気取られないように本令を発令しないようには言いましたが、リーグ全体の指針としては総動員令を出すという心積もりで申し上げたつもりなのですが……」
シロナ当人は唖然とした様子で言う。
ワタルはハハハと笑いながら言葉を返した。
「予想がつくような行動をしたらいけないんだよ。僕は一度エンジュ騒乱で敵方に完全に手玉をとられ、挙句にエンジュを焦土に化し、偽者と判明したとはいえマツバ君を見殺しにする結果となってしまった。だからこそ今回は敵の予想の裏を衝く。我々は少数精鋭で以て敵方に侵入する。そして相手の警戒が油断しているうちに首領のサカキとオーキドはか……オーキドを捕縛し敵の戦意を喪失させる」
「そういう事ですか……。しかしそれで本当に上手くいくのですか？」
「君を欺けたんだ。上手くいく……いや上手くいかせるんだ」

ワタルは眦を決し、強い決意で以てシロナに話した。
シロナは顎に手をやって暫し黙考した後に続ける。
「分かりました。それで、イッシュリーグの協力は要請するのですか？」
「こちらが要らないといっても向こうは協力を申し出るよ。なんたって自分の地方で起こっていることだしね。それにもうその旨の連絡はきている」
「左様ですか。それでどうするおつもりですか？」
ワタルはイッシュ地方の地図をポケットから出し、机に広げて説明を始めた。
「イッシュリーグは現役のジムリーダー、四天王チャンピオンに加え元現役のリーダーチャンピオン6人総勢19人を戦力として申し出てくれた」
「全面協力という訳ね」
「そう。それで、何でもプラズマフリゲートというもう一つの敵の拠点がヒウンシティで確認された後、各所の海岸に停泊を確認されている。海に面した街のリーダーには既に警戒態勢をとっているらしいし、こちらが動けば発見次第突入するとのこと。だからそちらはイッシュリーグに任せ我々はヒウンの拠点を攻撃する。幸いにも向こうのジムリーダーが目星はつけてくれているようだからね」
「なるほど……」
シロナは出されたブラックコーヒーに一口つけた後、ふうと息をついた。

「あの、話を切って恐縮です。これは私の知人から聞いた話ですが、一昨日ヒウンシティ郊外において一騒動あったようなのです」
「一騒動？　なんだいそれは」
　ワタルが身を乗り出して尋ねる。
「なんでも朝から夕方にかけてポケモンの争う声や音などが絶えなかったとかで……。それでなんでも昼頃にあの地方ではあまり見かけないピジョットをみたという話もありました。なんだか妙ではありませんか？」
　それを聞いた瞬間ワタルが目を見開く。
「ピジョット……！　シロナ君！　それはレッド君のポケモンに違いないよ。彼が手紙の第一報をくれた時に言ってたんだ！」
「えっ!?　という事はあれはエリカさんが放ったものということな訳ね……」
「そういう事になるね」
「理事長。分かりませんか？」
「ん？」
「その騒ぎとエリカさんの手紙は繋がっているんです！　つまり、ロケット団の内部で騒ぎがあったからこそ、エリカさんは一時的に脱出に成功し予め書いた手紙をレッド君に送れたんです。つまりロケット団は何かしらの理由で抗争があったのでは無いで

しょうか……」

シロナの推理にワタルは深く頷き

「なるほど……。それが事実ならロケット団も一枚岩ではないと言う事だね。どういう経緯なのかは分からないが。今ロケット団は何か問題を抱えている可能性があるという事になるわけだ」

「ええ。しかしそれが何かは……」

彼女がそう言ったところで電話が鳴り響いた。ワタルは彼女に断りを入れて受話器をとった。

「はい。こちら理事長室……。え？　来客？」

「ええ。なんでも理事長へ直々に伝えたいことがあるとのことです」

電話は一階の関係者用受付からであった。

「ううん……。今はちょっとね。少し待ってもらって」

「それがどうしても今じゃないと困ると……」

受付の係員が困ったような声色で話す。

「今そこに居るの？」

「はい」

「分かった。その人に代わって」

「かしこまりました」
　暫しの間を置いて、当人に変わった。するとそれはワタルにとって聞き覚えのある声であった。
「もしもし理事長さんでございますか？」
　声の主はわざと声を高くしている様子だった。しかしワタルにはすぐに主がわかったようである。
「ん？　君もしかして……ナツメ君かい？」
「ど、どうして分かったのですか？」
　ナツメは慌てている様子である。
「ダメだねえ。声を変えるならもう少し工夫しないと……。それよりどうしたんだい。君はリーダーなんだからわざわざ受付を通さなくたって入れるはずだけど」
「私だと分かるとまずいんですよ。とにかく入れてください」
「分かった。今シロナ君もいるけど同席していても大丈夫かな？」
「ええ。むしろ理事長、副理事長両方に揃って聞いて頂きたい話なんです」
　ナツメは真剣な様子の声で話した。
「そ、そうなのかい？　分かったよ。ああ受付の人にかわって」
　不思議に思いながらワタルはナツメを通すよう係員に伝え、受話器を置いた。

「ナツメさん？」
「そう。何だかいつにも増して深刻そうな様子なんだけど……。どうしたんだろう」
やがて数分後に理事長室の扉が叩かれ、ワタルは中に入れた。
ナツメは春物のコートに身を包み、帽子とサングラスを身に着け長い髪はシニヨンにしてまとめている。
「ナ、ナツメ君だよね？」
ナツメは帽子とサングラスを外して答えた。
「ええ。そうです」
「ああ、やっぱりナツメ君か。そんな変装してどうしたって言うんだ」
「言いましたでしょう？　私と分かるとまずいって」
「気になるわね。どういう事よ？」
シロナは立ち上がって尋ねた。
「私、謝らなければならないことがあるのです」
ナツメはそれからランスがエリカの命と引き換えに超能力を用いて情報を流すように脅迫され、実行にうつそうとしていたことを話した。そして、査察部全体が腐敗し、ランス自身がそこに潜入していることも告発した。
「な……何だと！」

全てを聞いた後ワタルは怒りのあまり顔を真っ赤にしている。
「今お伝えしたことは全て事実です。私も友人の命がかかっているとはいえ敵に内通したことは罪として、罰を受け入れる覚悟はできております。本当に申し訳ないことをしました」
ナツメはワタルとシロナに対し深々と頭を下げ、陳謝した。
「ナツメさん。頭をあげて」
シロナはナツメの前に出る。
「貴女のした事はリーグの信用と大義を大きく損なうものだわ。しかし、一方でこれのおかげで分かった真実もある……。どうでしょう理事長」
ワタルは考え事をしていたのかハッとした様子で答える。
「あ、ああ。ナツメ君の処分は後々理事会議を開いて決定するが、これが事実なら君は未遂だし、君ばかりを責めて終わる問題ではない。シロナ君の言った事情もあるし僕個人としては穏便に済ませようと思っている。だがそれにしてもどうして打ち明けるつもりに？」
ナツメはそれを訪ねられると黙してしまった。事情を察したのかシロナが口を開く。
「オーキドによって拐されているのならばその関係が続く限りエリカさんの身は無事だと思った……そうじゃないかしら？」

「は……はい。その通りです。ロケット団ではなく、そのオーキド博士の命だと言うなら、ロケット団の好きにどうこうできるものじゃないと踏んだんです」
「なるほどね……」
シロナは事情を聞いて頬を緩める。そして、彼女にこう告げた。
「ねぇ。もう少しその関係、続けてくれる？」
―5月2日　午前9時　ヒウンシティ　某ビル　地下2階　刑場―
エリカたちが閉じ込められている地下室よりも更に下。このビルの最下層に位置する場所に刑場はあった。
刑は丈夫な縄にかけた首を団員たちが手回しの滑車で締め上げるいう形で行われる。電動ではなく敢えて手動にしているのは団員自らの手で殺すことで他の団員たちへの見せしめとするためである。
刑場に入る前にラムダは団員から罪状と処分理由を読み上げられた後、遺言を話す機会を与えられた。ラムダは勿論幹部の制服ではなく罪人が着せられる簡素な麻で出来た白地の貫頭衣を着ていた。
「俺ぁこうなった以上首をくくる覚悟は出来てるつもりだ。ただ一つだけ言っておきたい。自分が常に勝ち続けるなんて幻想は抱かないでおくことだ」
この台詞を言った後、ラムダは自らを手にかけようとしている団員に労いの言葉をか

けた。彼はラムダの側近であり、作戦においても大いに関与していた。罰を軽くする代わりに処刑の執行人になることをアポロから迫られたのだ。

暫くしてその団員は首に縄をかけるのを躊躇し、肩をふるわせていたがやがてラムダから

「早くしろ。これが最後だ」

と小さく言われ、漸く首にかけた。それから彼を含めた3人で首を締め上げる手押し式のギアを回した。三人とも同じく側近だったことは言うまでもない。

三十分後に絶命が確認された後、死体を処理する為にマントルまで直行の穴に彼の死体を遺留品と共に突き落とした。これで処刑は完了である。

この模様は中継を通じて団員に伝えられるがその映像もすぐに破却される。

―同日　午後2時　ヒウンシティ　ビル　7階　事務室―

「いよいよか……」

ワタルは潜伏拠点から標的となるビルを見つめながら言った。

「心してかからねばの」

あれからリーグは選抜メンバーとして8人を選定し、イッシュまで移動をさせた。

メンバーとして選ばれたのは理事長のワタルをトップとして最強格のヤナギ、シロナ。強者もしくは縁があるナギ、グリーン、ナツメ、アカネ、ツクシである。

この作戦において火つけ役となるのはレッドである。レッドが最初に切り込んだ直後に選抜部隊が突入。ナギは空から突入して上にいる幹部や首領クラスを急襲・捕縛。他は地上から攻め上がるという構図である。

しかし、未だ突入は控えていた。ナツメの情報でプラズマフリゲートにサカキやオーキド、そして捕まっている二人が移動してる可能性が出て来たからだ。

「確かに聞こえたのよね?」

「はい。切れかかりに背後の無線か何かから『例のオオバコの件について……』とありました」

オオバコを大箱と解釈し、シロナは大規模移動の動きのおそれがあると考えた。それからナツメとロケット団は5回連絡を取っているが3回ほど類似の無線が聞こえたという。

真贋を見極める為に昨日からビルを見張り、大きな動きが無いかどうかを見ていた。もしもそのような動きがあれば即座に止めにかかりそのまま鎮圧にかかれると考えたのだ。

そして、午後2時8分ビルの裏口方面から荷物を持って飛び立つ大量の鳥ポケモンを視認した。

対向のビルで監視してたナギは即座に出動し、先回りし、強風を起こして進行を妨害

する。
　それと同時にレッドが突入を敢行した。
「レッド君が行ったぞ！　後に続けぇ！」
　ワタルの指令によって、潜伏したビルから七人が出撃。警察も人とヘリでビルを取り囲んで逮捕の準備をした。
　―地下室―
　レッドは猛烈な勢いで雑魚を蹴散らし、あっという間に地下室前の扉にたどり着いた。
　扉の横にはセキュリティがあり、ここにエリカとマツバが閉じ込められてるに違いないと確信した。
「リザードン！　火炎放射だ！　この扉を溶かせ！」
　しかし、火炎放射を当てても扉はびくとも反応しない。
　その後も色々な技で開けようと試みるがやはり何ともない。相当に強力な金属で出来ているようだ。
「レッド！　あんた何しとんの！」
「これは……堅そうな扉ですね」
　アカネとツクシも二人の身を案じてか下に降りてきたようだ。

「あぁ、アカネさんにツクシ君……。久しぶりだね」
　レッドは突入直前まで別行動を取っていた為潜伏を共にしてない。
「え、あぁこっちも……て、再会喜んどる場合ちゃうやろ！　で、何をしとるんかきいとるんよ」
「これ、横にロックを解除する機械みたいなのあるし、多分マツバさんとエリカが閉じ込められてる場所に違いないと思う！　でもどうやっても開かなくて」
　アカネはそれを聞いて深く溜息をついた。
「相変わらずちっこい脳みそやなぁ。そんな力ずくでどーにかなるような扉に人質閉じ込めるわけないやろが！」
「そらそうですけど……。じゃあ鍵の開け方知ってるんですか？」
「知らん」
　隣に居た二人がズッコケた。
「し、知らないんかい！」
「コガネ弁使ってええのはコガネ人だけやゆーたろが！　まぁええわ、ええか？　どうやっても開かへんなら開け方を白状させればええねん！　いくでツクシ！」
「え、あ、はい！」
　ツクシはドアをまじまじと眺めていたせいかやや遅れてアカネに続いた。

しばらくしてアカネが適当に捕まえてきたと思われる団員をドアの前に引きずり出す。
「勘弁してくれよぉ。俺は知らねえんだよぉ」
「嘘つくんやないで！　さっきパクッた奴があんたが世話役やぁ言うとったんやぞ！　素直に吐かんかい！」
アカネは団員の背中を思い切り壁に叩きつけ、脅しでもしているかのように怒鳴りつけてる。
「これじゃあどっちが悪者か分からんな……」
「なんでも最近、ドラマで女刑事の役演じたらしいですよ」
ツクシはさらっとした口調で言う。
「いやだからってあんな脅しつけるように言う事ないだろ」
アカネは団員の胸倉を掴み、耳元に近づいて話す。役者特有の強い眼力で男は青ざめていた。
「おい。正直に吐かんとな、奥歯ガタガタいわすぞ。それでもええんか!?」
アカネのあまりにも迫真に満ちた凄みに恐れを為したのか観念したかのように話し始めた。
「わ、分かった。あのな、確かに少し前までは俺らもあのロックを外せた！　だが、あの

手紙事件があってからロックが更に厳しくなって幹部以外は開けられなくなったんだ！」

「ホンマやろな？」

「ほ、ホントホント！　だって」

団員はアカネの手から逃れて必死に操作盤を叩き、ロックを解除しようとした。しかし、団員の言うとおり鍵は外れなかった。

「よーし」

そう言ってアカネは二人の方に振り返った。

「こいつの言うてる事がホンマならその幹部引きずり出してとかせりゃええんやな？」

「そういう事になるでしょうね」

ツクシが答えた。

「よし、ほなら三手に分かれてこの地下を探るで！　幹部ならもう他の連中が向かってるやろしな！」

「その前に本部にこの話を伝えるべきじゃ」

レッドがアカネに言う。

「んな事レッドに言われんでも分かるわ！」

アカネは気が立ってるのか興奮しているのか苛立っている口調で言う。彼女はその

ままポケギアを出してワタルに地下室の件に伝える。
そして三人はそれぞれ地下一階を探索した。それほど広くは無く、残党処理のみで十五分程で終了した。
―午後２時３０分　同所―
「あとは、あっちか……」
レッドは地下二階へと繋がる階段に目を遣る。
「不用意に行って大丈夫なんですか？　何があるか分かりませんし、増援を頼んだ方が」
「そらあかんて。今、上は上で手一杯のはずやろし……。それにこっちには伝説のトレーナーがおるんやぞ。大丈夫やろ」
アカネはレッドに信頼の眼差しを向けている。なんだかんだレッドの実力は認めているようだ。
「それもそうですね。レッドさんがついてますもん！」
ツクシも同じような眼差しである。レッドは少しだけ重荷を感じた。
レッドは少し黙した後に
「じゃ……。俺が先頭に行くから。ついてきて」
レッドは風を切るようにして前へ進んだ。地下一階に進むよりも更に長い階段で、地獄の底まで続いていそうな雰囲気である。

「はぁ……。どんだけ降りるんや。昇ることも考えんのかね？　膝おかしなるで」
「僕も最近デスクワークが続いてるせいかこれだけ長い階段を登ると思えばしんどいですね……」
「狭いから俺の持つポケモンで上に行くことは難しそうだな……」
　階段の広さは人一人半と行ったところである。リザードンやピジョットなど使おうものなら翼がひっかかってしまう。
「はぁ!?　嘘やろ……。なぁツクシ、帰りおぶってくれへん？」
　アカネは甘えた声でツクシに言う。
「何言ってんですか。アカネさん重いから嫌ですよ」
　と、冷たく突き放した。
「そないなこと言いながら……」
　アカネはツクシの背後につき
「これ押し付けられんの好きな癖になー」
　豊かな乳房を押しあげながらにやけて言う。
「その手には乗りませんって。自分で上がってください」
　かれこれ一年近く同棲しているだけにアカネの色気を使った攻撃には慣れてしまったのだろうか。素っ気ない調子でツクシは返す。

「全く暑苦しいな……」
レッドはそんな夫婦を尻目に下へと降りて行った。
―午後２時４５分　地下二階―
そうこうしているうちに三人は地下二階へ着いた。
入ると廊下になっており、その先には簡単な鉄扉がある。
「何だろうあれ……」
「とにかく行ってみるで」
レッドがドアノブに手をかけ、開く。
―刑場―
「ヒェッ……」
刑場には禍々しくも簡素な絞首台があった。
さすがのアカネも人を殺める道具を見て気が引けてしまったのだろう。やや怯えている。
「こりゃあどういう事だ……。映画でしか見た事ないぞこんなもん」
「え、なんなんですかこれ？」
ツクシは本当に何の道具なのか分かってない様子である。
「見て分からへんのか！　絞首台や！　縄で人の首を吊るす道具や！」

「へぇ首をつ……そんなことをしたら死んじゃうじゃないですか！」

ツクシはやや遅れて事の重大さを理解したようである。アカネはやれやれとばかりに軽くため息をついている。

「あれも十分ヤバいけど……この跡はなんだ？」

レッドは人二人分くらいのやや盛り上がっている土を見つけた。

「なんやろ……。何か掘り返したあ……」

「これ、ポケモンが土を掘った跡ですよ！　間違いない！」

ツクシは土を見るや否や、大きな声で言った。

「うわっ。なんや唐突に……」

「こういう小さく盛った掘り方をするポケモンはツチニンとかナックラーのような地中で生活するポケモンに多く見られるんですよ。ただそれにしては範囲が大きいですから……大量に動員したか、それとも別のポケモンを使ったか。とにかく人の手では無理です」

ツクシは研究員らしく滔々と説明する。

「なるほどね……。まあとにかく報告しよう。ここは多分深すぎて圏外だろうし上に戻ろう」

三人は地下一階にまで戻った。ツクシは結局アカネに根負けして途中から背負って

いた。
　―午後3時１０分　地下一階　地下室前―
　三人が地下室前にたどりつくと、ワタルをはじめとする上層階へ向かっていたチームが丁度やってきていた。
「ああ、ワタルさん。来ていましたか」
「うん。こっちはもう上の階まで制圧した。今幹部の一人を捕まえて鍵を開けさせてるところだ」
　そう言ったと同時に解除音が鳴った。
「開いたわ」
　アテナがそう言うや否やレッドが押しのけて扉を開けた。
　しかし、中には誰もいなかった。既に連れ去られた後のようである。
「え……おい！　これはどういうことだよ!!」
　レッドはアテナに舌端火を吹く様子で問い詰めた。
「フッ……おバカね。全部フェイクよ」
「してやられた訳ね……。それで、本物はどこにいるの？」
　シロナが冷静な様子で尋ねる。
「さあ。自分で探せばいいんじゃありません？　おばさん」

アテナは思い切り毒づく。
「お、おばさんですって……」
シロナが青筋を立て始めている。彼女にこの手の言葉は禁句である。しかし、出来る限り感情は抑えて続ける。
「貴女、自分の立場が分かっているのかしら？　事ここに至った以上、貴女には私たちに素直に協力することでしか……」
「もしかして」
ツクシが突如地下二階へ向けて走り始めた。残った人々も後に続く。
―地下二階　刑場―
「こ……これは」
ワタルは盛り上がった土を見て絶句した。
「これ、やっぱりポケモンの掘った土ですよね？」
ツクシの尋ねに答えるよりも先にアテナが答える。
「なんだ。もう見つけちゃってたの。そこの坊やの言う通りよ。そこが抜け穴。ここは裏切り者を粛清する場所であると共にいざという時の非常口なの。だからもう今頃あんたたちの大事なお仲間も含めてみーんなあっちにいってる最中。ほんとポケモンリーグってお間抜けよねぇ」

アテナはそう言うと高笑いをする。
「ふ、ふざけるなっ！」
レッドは激情のあまりアテナに殴り掛かりそうになるが、ワタルが制する。
「落ち着くんだレッド君！　ここで赤くなったところでどうにもならない。とにかく早くイッシュリーグ側にフリゲートの特定を要請するんだ！」
同時に土を掘り返して坑道のようなものがないか探したが、寸断されており不可能だった。
ワタルの要請にイッシュ側は即座に反応し、水ポケモンを総動員して特定に尽力。３０分ほどでセイガイハシティ近辺、海辺の洞穴浜辺に停泊してることが確認された。これにはナツメが得ていたロケット団内部の情報も加味されて早期の特定につながっている。
確認後、イッシュリーグ理事長アイリスの名の下、秘密裏に地方総動員令が出され四時間ほどでリーグ所属のリーダーや四天王などが搬入中のロケット団を急襲。イッシュ側の軍勢が海辺の洞穴の外れで戦っている隙にワタル達は右舷に回り込んで船本体へ攻め込んだ。
―午後７時３０分　プラズマフリゲート　船内会議室―
イッシュリーグとワタル達の来襲に対しプラズマ団及びロケット団の内部は混乱を

来していた。
　ロケット団はプラズマ団及びオーキドを出しぬいて会議を行っていた。
「事こうなった以上我々は一刻も早く戦線から離脱し、態勢を立て直してカントーへと戻る道筋をたどるべきであると私は考えます」
　ラムダは処刑。囮となったアテナは逮捕され、主だった幹部はアポロとランスのみになった。ランスは手紙事件の後ロケット団の身を固める為に査察部へは戻らなかった。
「私もアポロさんの意見に賛成します。オーキドとの訣別は先の会議で決まっていますし、躊躇する必要はないかと」
「しかし、例の二人はどうするつもりだ。身柄は一応まだ我々が預かっているのだぞ」
　サカキがそう言った。
「我々にとって生かすメリットは何一つありません。オーキドへこれまでの我々に対する専横への報復として、そして何より我々の決意と覚悟の固さを向こうへ思い知らせるべきであります。それ故、殺してしまうのが妥当であると存じます」
　アポロは感情のこもった声で意見する。
「私も同意見です。元をただせばエリカもマツバも我々からすれば団に唾かけた叛逆者に他なりません。ここはラムダへの制裁と同じく我らが手にかけるのが相当であると考えます」

結果、エリカとマツバを殺害した後速やかに船を離れることを決議。決議の後、荷物をまとめた後にアポロはマツバを、ランスはエリカを殺害することとした。

―午後７時４７分　同所　船室―

マツバとエリカは拘束の上それぞれ別の船室に閉じ込められている。

「マツバさん。お久しぶりですね」

船室内に入ったアポロはマツバに語りかける。

「その声は確か……アポロとか言ったっけ……。今更僕に何の用だい？」

マツバは衰弱しているのか声調は弱いが、気概の強さはそれでもはっきりと感じ取れる。

「単刀直入に申しあげます。我々はさる事情からオーキドと訣別し、それ故この船からも去ることにしました」

「さる事情……ね。おおかたレッド君とか……リーグが本格的に動いてここが危うくなったんだろう……？」

「ほう。やけに鋭いですね。前のビルと同じくここにも超能力妨害装置はあるはずですが……」

「そんな事くらい。僕じゃなくたって……いや子どもにだってわかるさ」

マツバは精一杯毒づいた。

「で、君たちがこの船を去るから……どうしたって？　また連れ出すのか？」
「いいえ」
「へぇ。じゃあまさか解放」
「貴方を、殺害します」
「えっ……!?」
　マツバはその瞬間色を失う。
「えじゃないでしょう。そもそもあの男さえいなければ貴方はとっくの昔に殺されているんです。一年間も生きながらえただけ感謝されてもいいくらいだ」
「そうか……あれからもう一年か……」
「感傷に浸るのは黄泉の世界に行ってからにしてもらいましょうか」
　そう言うと、アポロは従者の下っ端に執行を準備する事を顎で命じる。
「安心してください。器具と後処理の都合で斬首ではなく絞首刑ですよ。数分だけ苦しめば貴方は意識を失い、気が付けばもう亡くなっています」
　それと同時にマツバの首に縄がかけられる。
「くっ……。ふざけるな」
「なんとでも言いなさいな。おっと、これだけは一応聞いておきましょうか、最後に言い残したいことは？」

「こんな所で……諦めてたまるもんか……！　エリカさんはもっと苦しいのに頑張ったんだ……!!」

マツバは縄の戒めを外そうと必死にもがく。しかし、衰弱した体では上手くいかない。

「ふっ……それが最期の言葉ですか。じゃあ。さようなら、マツバさん」

アポロは振り上げた手を下ろし、刑の執行を合図する。その顔は非常に残忍で、冷酷で、そして残酷なうっすらとした笑みさえ浮かべていた。

抵抗が弱まり、だんだんと顔から生気が抜けていく。

「コラァァァァァ！　マツバに何してくれとんじゃこんのボケェェェェ！」

その瞬間、アポロの背後に強烈な飛び蹴りが飛んできた。

あまりにも不意を衝いた事だった為、アポロはまともに一撃を食らい倒れこんだ。

それとほぼ同時にハッサムのシザークロスが丁度縄だけを切り裂く。

「マツバさん！」

倒れこんできたマツバをツクシはアポロを無意識に踏み越え、瞬時に抱き止めた。

「マツバさん！　大丈夫ですか！　しっかりしてくださいよホラ！」

ツクシはマツバが付けさせられていた目隠しを外す。

「あ、あれツクシ君!?　それにアカネちゃんまで……。そうか、僕本当に死んじゃ」

現実を死後の世界と錯覚したマツバに対し、アカネは得意の大喝を放つ。
「何をアホな事抜かしとるん！　ここは現世や！　マツバ、アンタは生きとるで！」
「あ、あれ……ほんとだ。頭がぐらぐらする」
「良かったぁ。ホンマによか」
「感動の再会はお済になりましたか？」
アポロは制服についた汚れを掃いながら平然とした表情で尋ねた。
「ケツ。ラジオ塔だけじゃ飽きたらず……。ウチの大事な友だちをこないな目に遭わせおって……。生かしては帰さへん！　コガネ人を本気で怒らせたらどうなるか骨一本に至るまで叩きこんだるで！」
「僕も……。貴方がたのした行為は一人の人間として絶対に許せません。痛い目、見て貰いますからっ！」
二人の言葉を聞いた後アポロはふっと笑って
「どうやら、理由などを聞くよりも先に戦わなければならないようですね。宜しい。受けましょう。逃げたところで貴方がたは執拗に追いかけて来そうですし……ね」
―19時44分　同所　別の船室―
マツバが閉じ込められている所よりも大分離れたある船室にはエリカが閉じ込められていた。

ランスによってドアが開かれるとエリカが口を開く。
「私をこんな目に遭わせるなんて……一体どういうつもりですの?」
彼女はビルに居た時と違い、手と足に縄の戒めを受け、椅子に拘束されている。
ランスは彼女に執行用の縄を見せつけ、言う。
「エリカさん。貴女を、処刑します」
「な、なんですって!」
流石の彼女も突然の死刑宣告には動揺しているようだ。
「貴女は我々に軟禁とはいえ拘束されていながら、旧幹部のラムダと結託し、逃亡を謀った。うちの団では逃亡と叛乱は死刑です」
「勝手に連れ去っておきながら何を世迷言を……!　貴方がたが勝手に決めた事に私が服する理由などありませんわ!」
エリカは強硬に反発するがランスは慣れた調子で従者の下っ端に縄を渡して言った。
「お忘れですか?　我々はロケット団です。貴女がどんなに喚こうと、粛々とサカキ様の命に従うのが我々の定め……」
ランスが言ってる最中、彼の背後に人が立つ。
気配を感じ取ったランスは振り向くが、その姿を見て絶句した。
「ホッホッホッ……。誰の許しがあってエリカ君にこんな真似をしとるのかね?」

ワタル達が突入を開始して二時間が経過した。
プラズマ団の主だった面々はさっさと逃げおおせたアクロマを除いて全員が逮捕された。しかし、ロケット団の勢力は未だ健在であり、船内の各所で頑強に抵抗を続けている。
レッドはそんな中を切り抜け、いよいよボスの部屋と思しき所にまでたどり着いた。
―20時37分　同所　元ゲーチスの部屋―
「ホッホッ。漸く来たかの」
オーキドは革張りの椅子をレッドの方に向けた。その上には抱っこの要領でエリカが居る。
そしておもむろに立ち、レッドより五歩ほど開けた位置まで歩み寄った。彼女は横に立っている。
「貴方！」
「オーキド博士……。エリカを、返してください。もう状況は明白です。貴方の負けですよ。無駄な抵抗をすることはないはずです」
「レッド君よ。ワシがこの程度のことで引き下がるとでも思うのかね？」
「どういうことですか」

　オーキドは口の端をあげて言う。
「このくらいのことでやめる気は毛頭ないということよ。それよりもレッド君」
「はい」
「どうしてもエリカ君を返してほしいかね？」
　レッドは深く頷く。
「宜しい。ならばワシと勝負をせぬか？　いやなに、君の得意なポケモンバトルじゃよ」
「博士とポケモンバトルですか……？」
「そうじゃ。見事ワシに勝てばエリカ君は返してやる。負ければ返さぬ。それだけの事じゃよ」
　オーキドは闊達な様子で話している。話し方を見るに嘘をついているようには見えないもののレッドは躊躇した。
「何をためらう事があるんじゃ。君にとって決して悪くない条件で返そうと言うとるんじゃぞ」
　そう言われて少々間を開けた後
「分かりました。約束ですよ」
　と、帽子を目深に被り直して言う。
「ホッホッ。そうこなくてはの……。ルールは６ｖｓ６のいたってシンプルなシングル

バトルで行くぞ！　では、行け！　ミュウツー！」

――

レッドは苦戦こそしたが、二体を残してどうにか勝てた。

オーキドは最初はミュウツーを出してきたが後のポケモンは伝説には入らないポケモンで、ガブリアスやメタグロスなどといったチャンピオンクラスが持つポケモンが多勢を占めていた。

「か、勝った！　ほら博士約束ですよ！　早くエリカをかえしてください！」

レッドは鬼気迫った様子で博士に要求した。

「わかったわかった。そうせっつかんでも返してやるわい。ホイ」

オーキドはエリカの腕を放す。すると、彼女はひとりでにレッドの所に抱きつく。

「貴方！　貴方ぁ……！」

彼女は数ヶ月ぶりに触れたレッドの体に安心した様子である。同時にオーキドはエリカの所持品も返してやった。

「エリカ……」

レッドはそれに対して安堵した表情でそっと頭を撫でた。とにかくこの時間が長く続いてくれればいいのにと心の片隅で彼は思う。

「しかし、良いのかのう？」

　オーキドは雰囲気を壊すかの如くわざと大きな声で言った。彼女はオーキドの声を聞き、彼の胸から離れ横に立つ。
「なにがです？」
「レッド君や。君は心の底からエリカ君の横にいる権利があると思っておるのかね？」
「ええ、勿論です」
　レッドは毅然とした態度で言う。
「ほう。随分と強気だのう……。じゃがこれを聞いても同じ事が言えるかの？」
　オーキドはボイスレコーダーを取り出し、再生ボタンを押す。
―「好きだ」―
―「好きなんだ……俺、フウロさんの事」―
　レッドはそれを聞かされて頭の中が真っ白になった。
「ど……どうしてそれを」
　オーキドはホッホと笑った後
「図鑑じゃよ」
「は？」
「図鑑のカメラに一つ仕込んだのじゃよ。小型のカメラをの！」
「そ……そんなバカな！」

「ならばこの映像をどう説明するのかね」
オーキドは後ろのモニターに映す。
そこにはフウロに抱きつき、ライブキャスターを投げ捨てて彼女に拒絶されるところの一部始終が映し出されていた。
「くっ……」
レッドは茫然自失となり、下を向いてしまった。
オーキドはそれを見てここぞとばかりにまくし立て始める。
「レッド君はのう。2月の初めから長きに亘ってフウロと連絡を取り、彼女に告白をしたのじゃ！　エリカ君というものがありながらそんな不埒な行動に出たのじゃぞ！」
オーキドは怒りに打ち震えている。そこにはレッドを糾弾したいという事の他にも何か存念があるようにも見えた。
エリカの方はただ黙って互いの動きを見ている。
「確かに」
「何だね？」
レッドは考えをまとめ、オーキドに決然とした表情を見せる。
「確かに俺は一時期、フウロさんに心移りしてた。それは認める」
「ほれ見よ！　この浮気者めが。貴様のような奴にエリカ君との交際など……」

「しかし！　それはほんの一時のことです。今はエリカのみを愛しています！　これは神に誓ってもいい」
　レッドは毅然とした態度でいうが、オーキドはそれに対し鼻で笑って返す。
「例えそれが真実じゃとしても、理由は明白よ。フウロに体を許して貰えなかったから。じゃから仕方なくエリカ君に戻った！」
「違う！　違う違う違う！」
「何が違うのじゃ！　この映像を見れば誰でもそう思うわ！　貴様は結局エリカ君の事を体でしか考えておらんのだ!!」
　オーキドは狂ったように怒り続けている。
「どうだねエリカ君よ。これでも君はレッド君を伴侶として定めるのかね。まるで花魁か何かのように勘違いしてる彼をの？」
　エリカは思い詰めた表情で黙している。
　そこで、レッドは一つの打開策を思いつく。
「博士。俺のポケモン図鑑には俺の動きをしっかり記録するカメラがついてる……そう言ってましたよね」
「そうじゃ。それがなんじゃ」
「だったら、俺のエリカに対する本当の思いについて収めた場面もある筈です！　それ

も見せなければ不公平というものでしょう」
「ホッホッ……。何を言うと思ったらそんなことかの。自惚れも大概にせい！　そんな場面はないのじゃ！」
　オーキドはあっさりと両断したが、レッドは引かずに答える。
「いいえ。あります」
「ホッ……どこかね？」
「あの日……。フキヨセカーゴサービスでナギさんに激励された時の事です」
「それがどうしたというのじゃ」
「それを俺の口から言わせるのですか！　とにかくみせてください！　真実は全て明らかにされるべきですよ！」
　レッドは声を張り上げて強く迫った。
「残念じゃが断る。そんなものを見せる義理も道理も無いからの！」
「いえ」
　それまで沈黙を守っていたエリカが口を開いた。
「何じゃ」
「レッドさんが仰せになってる通りですわ。悪いところだけ見せられて判断しろと言われても困ります」

彼女はしっかりとした口調で言う。
「ホ……。それもそうじゃの。エリカ君の頼みじゃし、言い訳を残してはいかんからのう」
オーキドは渋々後ろのモニタに映す。
映像はノーカットで数十分ほど流れた。
「……」
彼女は見終わってから暫く口をつぐんだままであった。
「さあ。エリカ君よ。君はワシの言うことレッド君の言うことどっちを信じるのかね？　君の求めに応じてここまでやったのだ。答えを聞かせてもらえるかの？」
レッドはエリカに視線を送った。
「私は、レッドさんを信じますわ」
「ほほう」
オーキドは余裕有げに笑う。
「確かに私がこんな事になっていたというのに関係を持とうとしたことは許しがたいことですが……。夫の悩みに気付けなかった私にも落ち度があることですわ。それに……」
エリカは少々口ごもった。

「なんじゃ。言うてみよ」
「レッドさんはレッドさんなりに思い悩んだ末、最終的には私に戻ってきました。だからこそこうして救いに来てくださったのですわ。私は何よりもその努力と成果がとても尊いと考えます」
「エリカ……」
レッドは感激のあまり目に涙が堪った。
「ほう。ならばエリカ君はどうしてもこの男を選ぶというのかね?」
「ええ。私が初めて心の底からお慕いしている殿方ですもの。そう滅多なことでは契りを断つことなどありえませんわ!」
彼女は澄み切った目でオーキドを見る。
「ホッホッ……。大したものじゃのう……」
「何がおかしい! 博士、貴方には分からないんですか」
「何がだねレッド君?」
「俺とエリカは固い絆で結ばれているんだ。博士、あんたがどんなに悪知恵を働かせようとこれを切ることなど……」
「ホッホッホッホッ! 固い絆のう……。青い、青いわ。だからレッド君は青二才なのじゃよ」

オーキドは狂人の如く笑ったかと思うと、即座にレッドを嘲った。
「な、何だと……」
「お二人さんや……。君たちは、これを見ても同じことが言えるのかね？」
オーキドはエリカとレッドに一枚の紙を手渡した。
上部中央には『ＤＮＡ鑑定報告書』と記載されている。レッドには何のことだかさっぱりわからなかったが、エリカはその内容を見た途端青ざめた。
「私との対立遺伝子が……一致……!?　そ、そんな事あるわけが！」
彼女は酷く狼狽している。
「残念じゃが事実じゃよ。ワシだけでなくアクロマにも同じ方法で鑑定したが結果は同じじゃった。ほれ、これがもう一枚の鑑定書じゃ。しっかりとアクロマのサインがされておるじゃろ」
オーキドは二人の前にもう一枚の鑑定書を見せた。確かにアクロマ直筆のものと思われるサインが最後に記入されている。
「あ、あの一体どういう……」
レッドは全く話がつかめなかったのでオーキドに尋ねた。
「おっとすまんの。レッド君にはちいと難しすぎたか。つまりの……ワシとエリカ君が祖父と孫の関係にあるという事じゃよ！　ホッホッホッ!!」

オーキドは勝ち誇ったかのように高笑いをする。
「な、そ、そんなことあるわけねえだろ！　ふざけんな！」
この時ばかりはレッドも激昂した。
「そ、そうですわ！　そもそもサンプルはどうしたのです？　この鑑定は私だけでなくお祖母様とお母様のＤＮＡがなくては正確さに欠けます！　接点がなくてはそもそも用意できるはずが……」
彼女は一歩歩み出てオーキドを問い詰めるが、彼は残忍に笑って返す。
「ホッホッ……。出来たのじゃよ。それが」
「な……何ですって」
「何と言っても、ワシとカルミア女史はもともとは夫婦じゃったのだからな！　サンプルなどいくらでもあったわい」
その瞬間、エリカは激しく動揺した。
「お、お祖母様からは聞いたことありませんわそんなお話など……」
「カルミアとは辛い別れ方をしたからの。思い出したくも、話したくもなかったのじゃろう」
「お祖母様を呼び捨てにしないでくださいまし！」
彼女の声からは激しい怒気が篭っていた。

「どんなにエリカ君が否定してものう。証拠はこの通りじゃ」
　オーキドは更に一枚の紙を二人の前に示す。戸籍謄本である。カルミアとオーキドについて１９５７年２月２４日に入籍し、１９７８年６月１３日に離婚したことが克明に記載され、タマムシ市役所が発行した証である市章が背景に大きくあった。
　紛れもなくオーキドとカルミアが結婚していた証だ。
「う、嘘……」
　彼女は余程信じたくない事実だったのか、膝をついてしまった。
「お、おい！　エリカ大丈夫か！」
「ＤＮＡにこの戸籍謄本！　エリカ君はワシの大事な大事な孫娘に違いないのじゃよ！　ホッーホッホッホッ！」
「くっ……！」
　レッドはオーキドを睨みつける。
「さあ。レッド君や。これでもエリカ君と付き合い続けるかね？」
「考えるまでもねえ。勿論だ」
「ほほう。何故だ」
「エリカが誰の孫だろうが俺には関係のないことだからだ！　俺も、エリカも互いを好きになっている。それさえあれば十分だからだ！」

レッドは強く言い放った。本人も気づかない間に憎しみのあまりか博士への敬語がなくなっていた。
「ホッホッホッ……。あっぱれじゃのうレッド君」
「博士……。一つ聞かせてほしい」
「なんじゃの？」
「博士は要するに……。自分の孫を手に入れようとしたわけだ。どうしてそこまで彼女にこだわるんだ……」
「言ったじゃろう。死んだ妻そっくりじゃったからだ」
「いいや。俺にはそれだけのような気がしない……。たったそれだけのことで博士がこんな真似をするとはどうしても俺には思えない」
レッドが言い終わると博士は後ろを向き一分ばかり間を開けて答えた。
「ふむぅ……。そろそろ、君たちには本当の事を話した方が良いのかもしれんの。よかろう。聞きなさい、今からもう六十年近く前の話じゃ……」
オーキドが前を向く。そして話を切り出すと、エリカはきちんと聞こうとするためかゆっくり立ち上がった。
オーキドは自らの視点で、１９５７年及び１９７８年に起こったことを中心に話し始めた。カルミアを好いていたがヤナギによって妨害され諦めかけたが見合いによって

どうにか夫婦になれたこと。その実は仮面夫婦も同然の生活であったが自らはカルミアをそれでも好いていたこと。のたれ死んだと思っていたヤナギがポケモンリーグを創設してそれが成功するのを見るたびに夫婦の溝はさらに深まったこと。そして、１９７８年にカルミアの滑落事故で自らは世間で多大なバッシングを受けてその末に離婚したこと。これら全てが年月と共に覆しがたい憎悪となって今に至るということ。

話し終わった頃にはレッドもエリカもあまりのことに呆然とするほかなかった。

「レッド君よ」

「はい」

「言うておったな。なぜここまでの事をする必要があったのかと」

レッドは一度頷く。

「これらは全て五十余年の時を超えての復讐よ。カルミアを誑かして心を奪ったヤナギと、其奴の作ったリーグ、そして滑落事故の際にだれもかれも守るどころかワシを指弾する愚鈍で蒙昧な大衆……。そして、カルミアの生き写しであったエリカ君の心まで奪った貴様。全て……全てがこの上なく憎くて堪らぬのだ!!　全ては復讐じゃ！　このワシをせせら笑い、プライドを踏みにじった愚か者共に目にものを見せるのじゃ！」

オーキドはこれまで見たことがないほどの憎悪に満ちた表情を見せた。

「ふざけるなよ」

「なにぃ？」
「確かに博士もそれなりに辛い目に遭ったのかもしれない。だけど！　だけれども、こんな事をするのは間違ってる！」
「レッド君よ何度言わせるのじゃ！　そのような善悪などくだらん事じゃわ！」
「博士、俺には信じられない。初めて俺にポケモンをくれたときそんなことを考えてるなんて夢にも思わなかった。図鑑のポケモン集めで困ってるときや育て方が分からなくて苦労してるとき、博士はいつだって相談に乗ってくれた。そんな時もこんな事を考えてるなんてちっとも……」
「何が言いたいのじゃ」
　オーキドは冷ややかな目でレッドを見る。
「今まで博士について色々と酷いことを言いはした。だけど、どうしてもあの時の博士と今のそれとが同じとは思えないし、偽者にしか見えな」
「レッド君よ」
　レッドが言い終わる前にオーキドは口を挟んだ。
「人というのは目的のためならどのような仮面も被れるのじゃ。どんなに分厚く、本物と見紛う仮面でも……の。それをよく覚えておいた方がよいな」
　そういうとオーキドはエリカに向き直って言う。

「さて、エリカ君よ。君は間違いなくワシの孫……そして伴侶となるべき者だ」
「なっ……何を戯けたことを！」
　エリカは猛然と向かった。時間が経ったせいかレッドのおかげか普段の調子にもどっているようだ。
「残念ながら法ではワシとエリカ君が結ばれることは叶わぬ。だがの、そんなものはただの形式よ。身二つさえあれば結ぶことは可能じゃ」
「冗談ではありませんわ！　誰が貴方のような下郎と……！　私にはレッドさんという夫がおります！」
「エリカ君よ。二言目にはレッド君とのことを引き合いにだすがの、本当にそれで良いのか？」
　オーキドは不気味に笑いながら言う。
「どういう事ですか」
「ワシの血はのう。非凡な才能を授かる代わりに災いを起こすのじゃ。ワシはこのようになり、我がもう一人の孫のグリーンは女を侍らせて少なからずいざこざを起こしておるし、娘のスズノメは病弱故に自らの持つジムを廃絶の危機に瀕させた」
　母親の名前を出されて、彼女は目を怒らせて鋭く切り返す。
「お待ちなさい！　母上がジムを危うくしたのは母上のせいではありません！　ジム全

体の責任ですわ」

「どう言おうと勝手じゃが、その時期のタマムシジムは公認授与以来最大の危機にあったことは否定できんじゃろ……。ともかく、エリカ君、君自身にもその血が流れておるのだ。大事なレッド君にその災禍を味あわせても良いのかのう……？」

エリカは少しの間を置いた後答える。

「たとえ貴方のおっしゃることが全て真実だとしても……私はレッドさんと共にいますわ」

「なんじゃと？」

「災禍を起こすのではありません。私はあなたのようにそうやって諦めて血に従うような生き方は致しませんわ！　私は血に抗ってそのような負の血を屈服しますわ。遺伝だからなどと言って諦めるのは人間たるを捨てることと等しいことです！」

彼女はこれまでにないほど強く毅然とした様子で言い放つ。

「ホッ……。勇ましいことよの。やはりカルミアの孫じゃ……。その強かさはまさに彼女そのものよ」

オーキドは笑っているように見えるが目は全く笑っていない。

「レッド君よ。君はそれでも良いのかね？　エリカ君と共におればどのような災厄が降りかかるか分からぬのじゃぞ」

「……」

レッド自身完全に否定はできなかった。彼女の非凡なる力はこれまで嫌というほど見てきたのは事実だからである。

しかし、彼はオーキドに今一度向き直って言う。

「良いです。例えどんなに辛い目に遭おうと共に乗り越える覚悟はできてます。でなければこんな所にまで救いに来たりはしませんよ！」

オーキドはそれを聞いて後ろを向いた。

そして天を仰ぎ、ホッホッホッと三十秒ほど高笑いしたと思うとすばやく振り返り

「この、青二才がああああああああああ！　エリカ君は、エリカ君はワシのものじゃあああああああああ！」

などと言いながら素早く拳銃を取り出し、レッドの心臓に狙いを定める。

「貴方！」

エリカが飛び出すと同時に銃声があたりに響き渡った。

――

数十秒ほどしただろうか、レッドはゆっくりと目をあけた。

すると、凍りついた博士と銃口から数センチだけ離れた銃弾と地に落ちようとして止まった薬莢が目の前にある。

レッドがどういうことかはかりかねていると背後より声がした。
「ふう……。間一髪だった」
後ろにいたのはヤナギとトドゼルガである。
「ヤ、ヤナギさん!?　どういうことです?」
「なに。雑魚を蹴散らして漸くここにたどり着いたら二人が危なかったからの。こいつを使って凍らせたまでよ」
ヤナギはトドゼルガの背中を二回叩いた。
「ヤ、ヤナギさんですか!　ありがとうございます!」
エリカはいそいそとヤナギの前に出て深く礼をした。
「当然のことをしたまでよ。礼を言われるほどのことでもないわい」
「それにしても……」
レッドは凍らされた博士の前まであるき、じっくり一瞥する。
「これ、溶けるんですか?」
「いずれは溶けるじゃろうが、一瞬で凍らされたから即死じゃろう」
ヤナギはさらりと言ったが、レッドは衝撃を受けた。
「そうですか……博士は死んでしまった訳ですか」
レッドは今にも動き出しそうな様子の博士と死という現実のギャップのせいかあま

り驚いていない。
　何よりも自らを一度ならず二度までも殺そうとした人間である。如何に恩師とは言えあまり悲しいという感情は湧いては来なかった。
　エリカの方はただ氷の前で手を合わせていた。そのうちレッドも同じく手を合わせる。どんな人間も死ねば同じなのだ。
「ほれ、こんなところにおらず前の場所に戻ろう。皆が二人を待っておるぞ」
「は、はい！」
　そう言うと二人は先にワープパネルに乗り、場所を移した。
　ヤナギは一人残り、氷の前まで歩き呟いた。
「馬鹿な奴め……」
　そう言うとポケットから数珠を取り出し、合掌した。

――

　二人が戻ると、フリゲート内は歓声に満ちた。
　エリカは無事に救出され、マツバも同じく救い出されたのだ。作戦は大成功に終わったわけである。ヤナギの犯した殺人の罪については正当防衛の範疇とされて不起訴処分となった。
　あれからレッドはゴールドの制覇を待ってＰＷＴに挑み、ゴールドには辛勝して見事

ポケモンマスターの栄冠を手に入れたのである。前人未到の功績に日本中は欣喜雀躍し、レッドを讃えた。

ロケット団の方は先述の通り一網打尽に逮捕。逃げたアクロマも三ヶ月後に見つかってやはり逮捕された。彼らには法の鉄槌が下ることに成るだろう。オーキドの所業についても不正確かつデリケートなオーキドとエリカとの関係を除いて全てを暴露されオーキドには１９７８年の滑落事故など比にならないくらいの猛烈な非難があびせられた。孫のグリーンはこれを受けて一年間ジムリーダーを休んだほどである。

レッドとエリカは生ける伝説の夫婦としてトレーナー界には永久にその名が刻まれた。

―――――――――

―６月１７日　午前７時　いかりの湖―

ＰＷＴでゴールドを破って帰国した三日後、マサラタウンからそのままレッドはエリカを連れてこの場所に来ていた。

ポケモンマスターの称号を得たら、ジムリーダーとしてではなくポケモントレーナーとしてのヤナギに勝負を挑むという約束をしていたのだ。レッドにとっては真の実力でのヤナギに勝たなければ真のポケモンマスターとは言えないと思っていた。

「ヤナギさん」

仲間と釣りをしていたヤナギを見つけて彼は話しかけた。
「む……。レッドとエリカ女史か。少し待っておれ」
ヤナギは釣り仲間に断った後、道具を持って離れた場所で話す。
「まずはポケモンマスター取得おめでとう。私は心から祝福する」
「ありがとうございます」
それからは他愛もない世間話をし、レッドはふとあることを切り出した。
「それにしても博士の言ってたことは本当なんでしょうかね……。博士とエリカが孫と祖父の関係にあるだなんて……。ＤＮＡ鑑定だとはいっても俺にはどうにも納得できないです」
その件については当然ヤナギの耳にも入っていた。彼は眉間にシワを寄せて答える。
「少なくとも言えることはそれは断定できんと言うことだ」
「え、それって……どういうことです？」
エリカが思わずそう尋ねた。
「まだ二人には伝わっていなかったかの。あのＤＮＡ鑑定書は過程が杜撰すぎて信頼に足らんのじゃよ。アクロマからの証言もただ同じ方法でやらされただけだと言うことでの」
「あぁ……そうでしたか。私は結果についてのみしか見てなかったもので……」

彼女はあの時大慌てした自分をやや恥じている様子だ。
「しかし、あの戸籍謄本は本物ですよね？」
「ああ本物じゃとも」
「だったらエリカのお祖母さんが博士と結婚していたというのは事実……なわけですよね」
レッドは小声でヤナギに言う。
「うむ」
「だったらやっぱり……」
「もう！　貴方は一体どちらの肩を持つのですか！」
彼女は頬を少し膨らませている。
「そういうんじゃなくてやっぱりこういうことははっきりさせておかないと……」
ヤナギは下をうつむいている。
「あ、あれヤナギさんどうしたんです？」
「やはり、言わねばならぬかの……。あの時のことを」
「え？　あの時の事って……」
「私はのう……たったの一度だけだが……。カルミア女史と情交したのだ」
「え、えええええええええええ!?」

それからヤナギはオーキドとカルミアの結婚の裏側について洗いざらい話した。自分がカルミアから告白された事から父親から結婚を反対されてその腹いせとばかりにカルミアから誘ってきて情交に及んだことまで全てである。

「あの頃は若かったとはいえ大変にすまないことをしたと思っている。本当に申し訳ない」

ヤナギはエリカに深々と頭を下げた。

「い、いえいえ。頭を上げてくださいヤナギさん！　そう……そうだったんですか。つまり、私は」

「博士かヤナギさん。どっちかの孫ということになるな」

レッドはそう簡潔にまとめた。ヤナギは頭を上げる。

「真相は分からぬがの……。オーキドはもう茶毘に付され、カルミア女史もスズノメ女史も既に他界しておる」

「あ、あの……」

彼女は恐る恐るといった調子で言う。

「何だね」

「私とヤナギさんのＤＮＡを調べれば孫かどうかはっきりすると思うのですがいかがでしょう」

ヤナギは少し間を置いて
「ふむぅ……そうよの。近いうちに鑑定機関に依頼してみるのも手だな」
「ええ！　もし……ヤナギさんと私が祖父と孫と分かればヤナギさんはお祖父様になるわけですか……。私はその方が凄く嬉しいですわ。あとナギさんとも腹違いの従姉妹と……」
「うむ。私としてもそうならば本当に良いのだがのう。とにもかくにも行ってみようかの」
そうこう二人が話している間にレッドが入った。
「あの、ヤナギさん」
「ん？　おっと肝心な事を忘れてしもうたな……すまんのう。約束を果たしてくれた事だし、トレーナーとして戦おう！　準備は、宜しいかの？」
「勿論ですっ」
レッドはモンスターボールを前にかざす。
「宜しい。では、参る！」
こうして、いよいよ真の世界最強のトレーナーが決まる大きな戦いがここで始まろうとしていた。
レッドのその目には溢れんばかりの闘志が、見守るエリカの目には母性にも似た優し

いものが宿っている。最早、夫婦には何も怖いものなどなかった。

―番外編２―３―１　零度の仮面　終―

番外編2―3―2（前）　明かされた秘密

―3月6日　午後10時20分　ヒウンシティ　ロケット団アジト　9階　アポロの部屋―

ここはロケット団の最高幹部、アポロが執務する部屋である。

広さは他の幹部と同程度だが、フローリングではなく絨毯であるなど内装が少しだけ豪華だ。

部屋の真正面にはサカキの写真が立派な額に入れて飾っておりまるで御真影の如く荘厳な雰囲気すら漂わせている。他にはサカキの著作した本やグッズなどが至る所に飾られておりほとんど病気である。

アポロはこの部屋で書類の決裁をしている。

そんな部屋に一人の団員が扉をノックした。

「どうぞ」

団員はドアを開けて中に入り、一礼したのち閉めた。

この団員は今日一日の報告をしにこの部屋に来ていた。ひとしきり報告を終えた後団員は付け加える。

「アポロ様に一つ申しあげたいことがあるのですが……」
　アポロは作業の手を止めて団員に目を合わせた。
「何ですか」
「ラムダ様が少々不審な動きをしております」
「不審な動き？　例えばどのようなものです？」
　アポロはやや眉間に皺をよせる。
「はい。他の団員とやたら広く接触を試みていたり、やたらとポケモンや資金をラムダ様のもとに集中させようとしていたり……」
「ふむ」
　アポロは表情一つ変えずに耳を傾けている。
「それと私見てしまったんです。ついさっきの事ですがラムダ様の部屋に例の女が入っていったんです」
　これを聞いてアポロは眉をひそめた。例の女とはエリカの事である。
「それは本当の事ですか？」
「はい。この目ではっきりと見ました」
「彼女への無用な接触はサカキ様より直々に厳しく禁じられてる筈ですよ？」
　アポロは険しい表情で言う。

「ええ。ラムダ様も承知の筈です。だから何やら嫌な予感がしてアポロ様のお耳に入れた方が良いかと……」
「了解しました。よく知らせてくれましたね」
「それで、どうなさるのですか？　何を話しているか探りに……」
　アポロはそれに対し首を横に振る。
「いえ。性急に動いて向こうに感づかれてはなりません」
「では、如何なさるつもりで」
「ともかくラムダが何を考えているのかを突き止めねばなりませんね。まぁ、おおよそ検討はつきますが……」
「な、なにか心当たりでも？」
　団員はアポロに少々驚いている。
「彼に叛意らしきものの虞れありと、報告がありましたからね……。考えたくはありませんが、万一の事も」
「し、しかしまさかラムダ様が……」
「彼はあの博士と組んでからというもの、沸々と不満のようなものが感じ取れました。それがいつしか叛意となったのかもしれません。ま、如何なる存念があれど、サカキ様の御心を乱す鼠輩は誰であろうとこの私が決して許しはしませんがね」

とにかくその場は様子見ということでおさまった。
―3月16日　午後2時　同所　地下室―
エリカが雑用でこの部屋を去った時、オーキドはこの部屋にやってくる。
「マツバ君、決心は固まったかね？　うぅん？」
オーキドはマツバの拘束台の周りをゆっくりと周っている。
エリカをさらってからも毎日のようにマツバへ千里眼を要求しているのだ。
「何度来られようと無駄です。同じ答えしかできませんよ」
エリカ拉致が現実となった今マツバは更に意固地になって千里眼の譲渡を拒み続けている。
「全く君も分からん人じゃのう。このままじゃと本当に前に言ったとおりの事をせざるを得なくなるのじゃぞ」
「エリカさんが貴方のような人に従うとお思いですか？」
「従うかどうかではない。従わせるのじゃよ」
オーキドは笑みを浮かべながら言う。
「そんな事出来ると本気で思っているのですか」
「ワシを誰だと思っておる」
そう言うとマツバは口を噤んだ。

「フン……。明日また来る。良いか。じっくりと考えるのじゃぞ」

そう言うとオーキドは部屋を出ていった。

―同日　午後8時　オーキドの部屋―

オーキドの居室は二十畳ほどの広さで机の反対側の本棚には古今東西の学術書や著作、ポケモンのみならず一般の生物や人間についての生態について書かれた本などが汗牛充棟とばかりにひしめいている。すぐ隣の保存庫も含めれば一万冊程度あるとされておりこれらの部屋の床だけ特別に補強されているほどの重さだという。三種の脚立が用意されており高さによって使い分けている。

机にはパソコンと四枚ほどのディスプレイがありオーキドは常にニュースや監視カメラなどに目を光らせている。全てのカメラの映像がこのパソコンにまで転送される。オーキドは老年ながら機械の扱いには長けている。両隣には実験用の器具や様々な薬品、生物の試料などが鍵つきで厳重に保管されており、彼は暇さえあれば実験と観察に明け暮れて一応の共闘相手であるロケット団と自身のために技術開発には余念がない。因みに地下室前のセキュリティは全て彼の設計である。

他にはトイレや風呂場、ベッド、実験室、給湯室がそれぞれ小部屋としてあり食事はオーキドの求めに応じて団員が作るなり買ってくる為ここで生活は完結している。事実オーキドはイッシュに移ってからの九割はこの部屋で過ごしており先ほど以外には

たまにサカキと対談したり運動で室内ジムに行くのを除けばここから外には出ない。巷ではオーキドの悪事は発覚してないもののある日突然逐電していることになっているため下手に外で姿を見られるのは都合が悪いのである。

そんな部屋に今一人の来客が来ていた。アクロマである。今の彼にとっては唯一心を許せる相手とも言える。

アクロマとオーキドは昨年からの付き合いであり、オーキドは自身の設計を具現化する技術者として彼を信頼していた。

オーキドは老年のため緻密な視力を要求される開発そのものには大分前から手を引いていたのだ。

「マツバさんはまだ落ちないようですね」

アクロマは残念そうな口ぶりで話す。ポケモンの力を最大限に発揮させる方法を追究してる彼にとっては万物を見通せる千里眼は非常に興味深いものなのである。

「うむ。エリカ君の気丈さにでもあてられたのかのう……。頑固なものじゃ」

「早いところ彼の千里眼を解析して様々なデータを取りたいのですがね」

「何を言う。千里眼はワシのものじゃ」

「いえいえ。勿論千里眼は最終的にドクターのものです。しかし、その前に私の方で預かり解析してみたいのですよ」

「君の好奇心は分かるがの……。いくら特殊なものとはいえ眼には変わりない。そうそう長い期間放置するわけにはいかんよ」

オーキドはそう言うと煎茶をすすった。

「そういえばドクター肝煎りの例の薬の開発は進んでいるのですか？」

「む……。ああ、最大の障害じゃった交感神経の操作が解決してあともう少しじゃ。最悪の場合はこれを使うしかないがの……」

オーキドは言葉とは裏腹に残忍な笑みを浮かべている。

「ほう！　そうですか……。やはり博士は類稀なる才智の持ち主ですね」

「ホッ……。ワシを誰じゃと思っておるのだ……」

彼は全く意に介さずまた茶をすすった。

二人の話し合いは夜更けまで続いた。

―4月5日　午後2時　ポケモンリーグ　6F　査察部　訊問室―

「心の整理はつきましたか？　ナツメさん」

ランスは机に相対する女性にそう語りかける。

「……」

彼女は視線を机の脚の方に遣り沈黙を守ったままだ。

「我々が求める事は貴女の持つ類稀なるその力を使って我々に利する情報を流す事。た

だこれだけですよ」
「前にも聞いたわ」
　彼女は間を置いて重い声色で話す。
「はい。そうすれば我々は決して貴女の大切なご友人には一切の手出しを致しません」
「ちゃんと……それについては守ってくれるのでしょうね？」
「破って我々に何の得があるというのです？　大丈夫ですよ。我々も人質をそう簡単に殺すような愚かな真似はしません」
「……。じゃあ、証を見せてよ」
　ナツメは俯くのをやめ、ランスに目をしっかりと向けて言う。
「証？」
　彼女は頷く。
「毎日一分……いいえ、三十秒でもいいからエリカの声と姿が写ってる動画を私に送って」
「……」
　ランスは黙ったままナツメの話を聞いている。
「彼女が確かに生きているという証を私に見せなさい」
「疑り深い御方だ……。ご自分の立場が分かっているのですか？」

「分かっているからこの条件を出してるのよ」
彼女は決然とした表情で一歩も引くまいという姿勢を見せる。
ランスは一分程黙考すると、ふうと溜息をついた。
「分かりました。そこまで言うのであれば応じましょう。ただし動画としてデータをお渡しする事は認めません。万一証拠にでも使われると厄介ですからね」
そう言うとランスはメモ帳をカバンから出し、サラサラと何やら書いてその紙をナツメに渡した。
「これは?」
「我々が出資している動画配信サイトのＵＲＬです。このサイトに貴女だけの限定公開でエリカさんの居る場所のカメラ映像を配信します」
ドメインを見てみるとネットをそれほど使わない彼女でも知っているサイトであった。
「ここのアカウントは持っておいでですか?」
「いえ」
「ならば後で私に教えてください。設定が終わり次第その映像のＵＲＬをお教えします」
「いやあのちょっと待って!」

彼女は声を張り上げて言う。
「何か？」
「大丈夫なんでしょうね？　サイキッカー崩れとかそういう輩のハッキングが横行してるのよ？」
「ふっ……そのあたりは貴女が一番よくわかってるはずですよ？　セキュリティに抜かりはありません」
「くっ……」
彼女はそこをつかれると黙るしかなかった。ナツメは今に至るまで何度もロケット団の本拠地を突き止めようとしたが全く上手く行っていない。彼女にとってこのような事は正式にリーダーになって以来初めてであった為強く印象に残っている。世界最強クラスの超能力を持つ彼女で不可能ならば何者にもハッキングは不可能だろう。
ランスは彼女の右肩を掴み、語りかけるように言った。
「今一度申し伝えます。私は査察部の一員として常に貴方を監視する権限があります。余計なことはしないほうが貴方のためですよ」
そう釘を刺した後、肩を突き放してランスは去っていった。ナツメは目下の机をじっと見ることしかできなかった。
―同日　午後１０時　ヤマブキシティ　ナツメ宅　自室―

ジムを閉めた後、彼女は自宅に帰ってパソコンを開き指定の動画サイトのアカウントを作成した。

作成した後彼女はランスの番号に情報を載せたＳＭＳを送信した。

もうセッティングは終わっていたのか５分ほどでＵＲＬが返ってくる。すぐにＵＲＬをブラウザにコピーペーストしてリンク先に飛んだ。

映像は高精細カメラで鮮明に記録されていた。カメラは部屋全体が見えるようになっており、前には大きな板のような物があった。

カメラは四隅に設置されているようだが切り替えはできない。現状では誰も映っていない。

「……」

ナツメは黙ったまま映像を凝視する。わかってはいたが透視は不可能のようだ。

やがてカメラの視界内に一人入ってきた。

「エリカ……？」

彼女は身を乗り出してモニタに近づく。

間違いない。服装こそ変わっているものの烏の濡羽色の如き美しく短い黒髪、端正で気品のある顔立ち、チャームポイントのヘアバンド。どれを見ても紛れもなく彼女であることを示すトレードマークだ。

生きていることに深く安堵し、ナツメはどっかりと椅子に座り直す。しかし、それと同時にあの男が言うことが真実であった事に憤りと恐怖を覚えた。
数分ほどして彼女のポケギアがけたたましく鳴り響いた。ナツメは三コール鳴った後に取った。相手はやはりランスである。
「映像。見て頂けましたか?」
「ええ」
「協力、して頂けますね?」
男は念押しするように尋ねた。
「分かった……わかったわよ。言うとおりにすればいいんでしょ」
彼女は渋々とした口調で言う。
「宜しい。貴女が具体的に何をすべきかは後々詳しく伝えましょう」
彼女はモニターを見る。エリカは何かを話してるようだが聞こえない。音量調整には問題ない。
「ねえ。何も聞こえないのだけれど……」
「音声は入れてませんよ。会話の内容から類推されるのも厄介ですから」
「私は協力してやると言ってるのよ?」
「はぁ」

「そんな態度でいいのかしら？　必要なのでしょ？　私の力が」
こうなったら自分の力を最大限利用してやると思い立ちナツメは脅しに出た。
しかしランスは声色一つ変えずに返す。
「やっぱり……」
「何よ」
「貴女はご自分の立場を分かっていらっしゃらない」
「はい？」
「私は今や貴女の生殺与奪を握っているのです」
彼女は顔を歪ませる。どうやら地雷を踏んでしまったようだ。
「いいですか？　たった今の貴女の協力するの一言だけで私は貴女を理事会議にかける権限があるのですよ？」
「それが？　調査機関に過ぎない貴方には会議への提訴権はないはずよ」
リーグ法では委員の権力濫用や恐喝、脅迫を防ぐ為に委員自身からの提訴は認めていない。
「分かっていませんね。提訴さえ出来れば問題ないのです」
「……」
「確かに我々は貴方を直接訴える権利を持ってない。ですが訴えるように働きかけるこ

とは何人にも許された権利です」
「何が言いたいのよ……」
「理事長なりに貴女が行ったことのリークをし、下命が下れば我々は徹底的に調べ上げます。我々のような組織への内通は事例によると最低でも停職以上のようですね。そうなれば貴女の名誉にも大きな傷がつくことでしょう」
「くっ……」
「貴方がたの理事長は大変正義感が強く誠実なお方だ。だが、所詮は成り上がりの低学歴。我々の言ったことは疑われる事なくそのまま処分に反映されることでしょう」
「……」
「もしここで理事相手に戦ってくれるような方でもいれば変わるかもしれませんが皆、貴女の絶大な力を怖がって深く入ろうとはしない。唯一親友といえるのはエリカさんだけだがこの通りの状態……」
「やめてっ！」
　ナツメは居た堪れなくなって思わず大声を出した。
「わかりましたか？　今や貴女の名誉と地位を守れるのは我々だけです。もう貴女はこちら側で活動するしか道は無いんですよ。我々に偉そうなことを言う前に成果を出したらいかがですか？」

ナツメを肩を震わせて一筋の涙を流す。ここまで虚仮にされた彼女の心中は憤懣やる方なかったが感情を爆発させても詮無い事だと思い

「悪かったわね……。少し調子に乗りすぎたわ」

と平静を装った声で返した。

「いいえ。お分かりならばそれで良いのです。成果次第で音声についても考えましょう」

その後も数分ほどはなしてランスは通話を切った。

「もう後戻りはできない……か」

ナツメはポケギアを畳んでモニタのエリカを見続けるのであった。

―同時刻　トキワシティ　某マンション　３０４号室―

ランスはポケモンリーグへの通勤のためここに潜伏している。

ナツメの調略を終え、ランスはすぐにアポロへ連絡した。アポロは四コール後に電話に出た。挨拶を交わした後に本題へ入る。

「ナツメが落ちました」

「ご苦労。よくやってくれました。これでサカキ様の大望もまた近づいたというものです」

アポロは嬉しそうな声色で言う。ランスはいつものことなので適当に流してつづけ

る。
「はい。そうですね。それで、傍らで他のジムリーダーや四天王などについても調べてみましたが他に我々へなびきそうな人間はいなさそうです」
「前、私に言っていたマチスはどうなったのです？　彼は理事長を嫌っているため引き込めるかもしれないと言ってましたよね？」
「一度だけ打診はしましたが合衆国軍人としてのプライドが許さないとか何とか言われてけんもほろろに断られました」
　アポロはそれを聞いて少し語気を強めて尋ねる。
「まさか、それでリーグ側に走るなんてことは……」
「大丈夫です。やはり彼はワタルを嫌ってますから転ぶことはないでしょう。それどころか全力の我々と刃を交わすことを心待ちにしてましたよ」
「訳がわかりませんね……。まぁいいです。当初から我々の計画ではナツメさえ手中に入れば良いのですから。昨晩の電話で私に監視カメラの開示方法について相談されましたがきちんと手筈通りにしましたか？」
「はい。映像のみということで承服させました」
「宜しい。彼女にとってエリカは生きる希望のようなものです。これを使わない手はありませんよ」

アポロは上機嫌そうな声で言う。
「それにしてもよくそこまで掴んでますね……。我々の持つ調査書にすらそんな事は書いてないですよ」
「エリカの所持していたポケギアの発信履歴から見れば誰でもピンときますよ。それに彼女の力の強さとそれ故の孤独は私の耳にも入ってましたしね」
「なるほど……」
「それはともかく、今貴方がすべきはナツメの監視と管理です。我々に完全に心服するまで仕立て上げるのです」
ランスはそれに対して疑問で答えた。
「余計な労力ではないですか？　リーグの情報を流すだけならば取りあえずは逆らわないようにしておけば十分と心得ますが」
「実を言えばサカキ様より厳命が下っているのです。ナツメをこちらのアジトにまで引き込むように……と」
「サカキ様が？　何故です？」
「どうやら例の科学者のご所望のようです」
「また？　危険なことを言いますね全く……」
ランスはやや辟易とした声を出す。

「サカキ様の言葉は神託です。反論は許しませんよ」
　アポロは厳しい口調で返した。
「し、しかし今回ばかりは本当に無茶では？　リーグの内通者として彼女を使うのにその要求は我々にとって不利な状況を作り出しかねないと思うのですが」
「何もずっと留め置くと言ってるのではないです。一度でいいから連れてくることを要求しているのだそうで」
「何を企んでいるのやら……」
「だから、このアジトまで連れてきても大丈夫な程に彼女を精神的に教育することを私は望むのです」
「はぁ……」
　ランスは深いため息をつく。
「不服ですか？」
「いえ」
　この男に楯突けば何されるか分かったものではないとランスは理解している為渋々と承諾した。
「まぁ……いいでしょう。ランス。それでは頼みましたよ」
　そう言ってアポロは電話を切った。

「勝手なことばかり言ってくれるよ……」

切れた後ランスは天井を仰ぎながらそう呟いた。

―4月13日　午後8時30分　ヒウンシティ　某ビル　地下室―

普段エリカは午後6時頃まで仕事に使われ、7時に夕食を食べている。マツバの分をあげてから自分の分を食べているので一時間程度は平気でかかってしまう。

そして今はマツバの拭身、すなわち風呂の代わりで体を拭いている。当初は戸惑っていたが今では大分慣れた。

「いつも悪いね……エリカさん」

マツバは毎日どこかしらでそう言う。

「お体は常に清潔でなければなりませんわ。お風呂に入れない以上仕方のない事です。マツバさんが気にかけることはありません」

これも当初は双方羞恥のあまり何も言えなかったが最近では慣れてきたのかこのくらいの軽い会話はかわせるようになった。

今日の仕事のことなどを話しながらエリカは丁寧に体をウェットティッシュで拭く。上半身を拭き終わると次は下半身に行く、身体を拭くときはパンツ一枚は身につけているが性器や尻も拭かなければならない。その時だけはパンツも下ろして丁寧に拭く。流石に彼女も抵抗があって最初の数日は遠慮していたがやはりやらなければならない

と思ったのか今ではきちんと拭いている。最初はやはり赤面ものだったが最近は排泄で慣れてしまったのか平常心でやれている。

「……」

「……」

先程までの会話も下半身、特に性器を拭いている時はかなり乏しくなってしまう。そしてやはり男の悲しき性なのだが勃ってしまっている。そこについているカスも取らなければならない為見ようによってはまるで手でしてしまっているような格好にもなる。

この時が彼女にとって最大の屈辱である。独身ならばともかく結ばれる人がいるというのに他の異性へこのような事をしなければならないと言うのは得も言われぬ感情で満たされるだろう。貞操観念が高い彼女ならば尚更である。今では表情に出なくなったが当初はやはり時折歪んだ表情を見せることもあった。

「エリカさん……ごめん、ごめんなさい……」

マツバもそんなエリカの心中を察してかそう常に懺悔の念を垂れる。

「いいのです。いいのですよ……」

彼女もレッドへの申し訳無さからかそれ以上の言葉が出てこなかった。

しかしそれもせいぜい五分から十分程度である。股間と尻を拭き終わった後はパン

ツを着せ直し、足部を拭いて終わりだ。彼女は丁寧にやるためだいたい三十分程度かかる。

拭身が終わったあとは服を着せ、ひげ剃りもついでにして終わりである。因みに頭はシャンプーハットをかぶせた上で洗っている。二十センチ程度の身長差がある為適当な箱を台にして洗う。

「はい、綺麗になりましたわよ！」

彼女は終わるといつも達成感に満ちた声でそう言う。視界が塞がれているためこうして終了を告げるのだ。

「うんなんだか清々しいよ。やっぱりエリカさんは上手いね」

「フフ、そう言って頂けるとこちらもやり甲斐がありますわ。さてとお片付けをしたらお風呂に入って来ますわね」

そう言うと彼女は使ったウェットティッシュをまとめてゴミ袋に入れる。

「そう。ゆっくり入って来なよ。ま、言わなくてもエリカさんはお風呂長めだけど……」

「女性は色々とお風呂でしなければならない事があるのですわ」

彼女は軽い口調でそう返した。

「そっか。エリカさんはきちんとそういうことに時間かけそうだものね」

その後も会話しつつ三分ほどで後片付けを済ませると着替えを持って風呂場へ入っ

た。

―風呂場―

バスルームは彼女の為なのかやや広めに作られており足を思い切り伸ばせるほどの広さの浴槽がある。それに加えて洗面所と仕切りを隔てて洋式トイレがある。勿論彼女はここで風呂に入り体を洗い一日の汗を流すのだがそれが終わるとある事をする。

着替え終わった彼女は洋式トイレに入って胸ポケットに差してるペンと着替えの服の中に仕込んであった便箋を取り出し、サラサラと文書を綴り始めた。

そう、彼女はここで手紙を書いているのだ。なんの手紙かと言えば脱出に一時でも成功した際、それでも追手に捕まりそうになったらピジョットに託す手紙だ。ここなら監視カメラもない上に個室なので集中して手紙を書ける。しかし時間は監視してる人間に怪しまれないようせいぜい三十分である。自分のバスタイムを短縮してまで彼女は日々手紙に書く文書を案じている。

しかし中々案がまとまらない。書きたいことが多すぎるというのもあるが何しろ相手はレッドである。彼に正確に伝わるような文章を心がけねばならない。下書きに色々と熟語を書いてはバツ印をつけたり、書きかけの手紙を破棄したりと彼女は悪戦苦闘しながら書いている。

「分かりやすい平易な手紙というのは思ったよりも難しいですわね……」

彼女はふとこう呟く。考えてみれば彼女が手紙を送る相手と言えばほとんどが大卒や高卒などこの世界では比較的学歴の高い人物である（半分以上が中卒）。手紙でなくても彼女が普段接する人物は似たようなものだ。ジムの募集要項は女性であることは勿論、それなりに高い学識や意欲を持った人物を条件としている為ジムトレーナーは全員タマムシ高校や京筑高校など偏差値７０以上の学校の在籍経験がある人物だ。勿論リーダーである以上いわゆる低学歴の人間とも関わらねばならないが大抵は適当にあしらっている。ミカンやレッドは少ない例外といえよう。

それ故に彼女はレッドに手紙を書くことに苦労している。レッドの尊厳を傷つけずかといって難しくないように書かねばならない。だが、今日は書き始めて三日目である。ようやく案がまとまり半分程度書いたらいい時間になっていた為トイレから出た。書き損じた手紙はビリビリに破いてウェットティッシュと一緒に捨てた。

―４月１２日　午後３時　同所　廊下―

彼女は休憩時間を使ってトイレに行き、用を済ませた後廊下を歩いていた。するとある人物にぶつかった。

「すみません」

彼女はぶつかった拍子に頭を下げそう言った。

「いえ……。おや？」

男は彼女から落ちた一つの封筒を手に取った。
彼女はそのまま行こうとした為拾って飛び止める。
「もし、落とし物ですよ」
「あら、どうも……」
エリカは振り返ってその人物の顔を見る。
彼女は少し間を置いて続けた。
「アポロ……」
と言いながら封筒を受け取ろうとする。
「……」
アポロはわずかに違和感を覚えたのか封筒を引き下げる。
「申し訳ありませんが中を検めさせていただけませんか？」
アポロはエリカの様子をうかがう。
「いいですよ」
彼女は平然とした様子で答える。
アポロは封を開け中に入っていた三つ折りになっている紙を取り出し、読む。
紙は用品の願箋のテンプレに則って物品名と数量の欄に『濡れ富士　２箱』とだけ書かれている。

「失礼しました」
紙を封筒に戻してエリカに返す。彼女は軽く頭を下げてそそくさと立ち去った。アポロはどこか腑に落ちない表情をしていた。

―同日　午後8時　アポロの部屋―
アポロはエリカの監視役であるアテナを呼び出していた。
「で、あたくしに何の用？」
「エリカの事ですがね……」
「あぁ、あの生意気な小娘ね……。それが？」
アテナはよほどエリカの事を腹に据えかねてるのか憎さ満載に言う。
「今日彼女とぶつかって手紙が落ちたのです」
「へぇ」
「私は何かひっかかるものがあってその手紙を拾った後に中を検めたのですが、彼女は手紙を返すまでずっと冷静でした」
「それで？」
「彼女は聡明で隙のない人だ。しかし、それだけに私が手紙を見つけた瞬間に見せたあの間が気になって仕方がない。なにかまずいものでもみられたかのような……。そこ

です。明日、あの地下室から出るゴミを調査してください」
　アテナは少しだけ瞼を動かす。
「ゴミを？」
「はい。手紙に原因があるとしたらきっとそのゴミの中に答えがある筈です。紙をそのまま捨てるなんて雑な真似はしないでしょうから紙屑一つ逃さず拾い、セロテープなり接着剤で上手く復元しなさい」
「分かったわ。命じておく」
「頼みましたよ」
　―４月２８日　午前１０時　ビル裏口付近―
　この日、ラムダは反乱を起こしその隙をついてエリカはラムダ側の団員に連れられて脱出した。
　数百メートル程を走って一応の安全を確保した上で彼女はピジョットの入ったモンスターボールを手にする。しかしまるで見計らったかのようにロケット団に取り囲まれる。
「おや、エリカさん。そのモンスターボールで何をなさるおつもりですか？」
　恐ろしいほど紳士的な口調で語りかけてくる男。それはまさにアポロであった。
「ア……アポロ……！」

「そんなに怖い顔をしていては、貴女の美しいお顔が台無しですよ？」
アポロは笑いながらそう言ってみせる。
「どうして……」
「どうして？　何を言うんですか。貴女が教えてくれたんじゃないですか」
「はい？」
エリカは瞠目して彼を見た。
「危うく見落とすところでしたよ」
アポロは懐からセロハンテープでくっつけられたボロボロの便箋を取り出す。
便箋には彼女が書きかけで処分した手紙の文面が綴られていた。
「嘘……」
彼女から全身の力が抜けた。
―番外編2―3―2（前）　明かされた秘密　終―